

# 星河スバル（偽）の戦 闘録

星屑

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

——目が覚めたら、小学五年生の引きこもりに憑依していた件について。

# 目次

第一話『牡牛座』

第二話『白鳥座』

|     |     |    |    |    |    |    |    |    |   |
|-----|-----|----|----|----|----|----|----|----|---|
| 10  | 9   | 8  | 7  | 6  | 5  | 4  | 3  | 2  | 1 |
| 118 | 103 | 91 | 77 | 65 | 53 | 40 | 29 | 18 | 1 |

第三話『琴座』

第四話『天秤座』

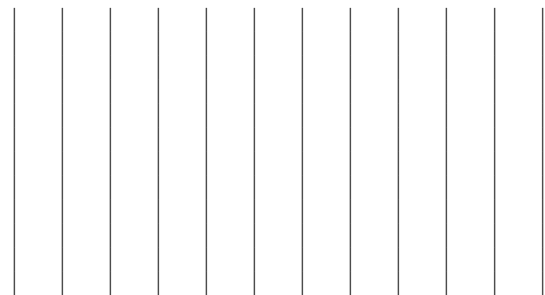
|     |     |     |     |     |     |     |     |     |     |     |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 21  | 20  | 19  | 18  | 17  | 16  | 15  | 14  | 13  | 12  | 11  |
| 282 | 265 | 252 | 236 | 220 | 200 | 187 | 174 | 158 | 143 | 127 |

|        |        |               |        |        |        |        |        |        |        |        |        |        |
|--------|--------|---------------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|
| 3<br>3 | 3<br>2 | 第五話<br>『蛇遣い座』 | 3<br>1 | 3<br>0 | 2<br>9 | 2<br>8 | 2<br>7 | 2<br>6 | 2<br>5 | 2<br>4 | 2<br>3 | 2<br>2 |
| 460    | 440    |               | 426    | 410    | 393    | 379    | 360    | 349    | 338    | 325    | 310    | 298    |

|        |        |        |        |        |        |        |        |        |              |        |        |        |
|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------------|--------|--------|--------|
| 4<br>5 | 4<br>4 | 4<br>3 | 4<br>2 | 4<br>1 | 4<br>0 | 3<br>9 | 3<br>8 | 3<br>7 | 第六話<br>『双子座』 | 3<br>6 | 3<br>5 | 3<br>4 |
| 652    | 641    | 626    | 611    | 597    | 579    | 568    | 553    | 538    |              | 511    | 493    | 471    |

第七話 『アンドロメダ座』

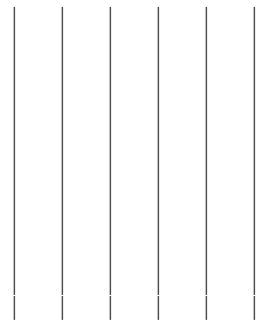
5 5 5 5 5 5 5 5 4 4 4 4  
7 6 5 4 3 2 1 0 9 8 7 6



838 820 808 793 779 763 745 729 714 697 683 666

第八話 『乙女座でもない星河スバルのセ  
ンチメンタリズムな日常』

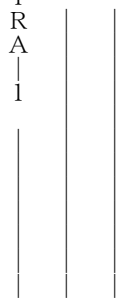
6 5 4 3 2 1



993 976 958 937 921 904

真ベルセルク編・第一話 『ファントム・ク  
ライシス』

EXTRA | 1  
5 9 5 8



890 876 857



第五話『コンドル・アポストル』

40  
39  
38  
37  
36  
35  
34  
33

15411526151114961482146614501437

第四話『ライアー・ウエーブ』

32  
31  
30

142314101391

53  
52  
51  
50  
49  
48  
47  
46  
45  
44  
43  
42  
41

1745172917151701168816671653163516201605158915741559

6  
4

6  
3

6  
2

6  
1

6  
0

5  
9

5  
8

5  
7

5  
6

デイスコード・ラビリンス

第六話『マキシمام・リジエクション』

5  
5

5  
4

189418781862184718351824181017961782

17691755

7  
1

7  
0

6  
9

6  
8

6  
7

6  
6

プル

第七話『ザ・クリエイター／ロスト・ピ

6  
5

200619911973195819411924

1908



# 第一話 『牡牛座』

1

目が覚めたら、星河スバルになっていた件について。

突然の事態ではあるが、状況を理解するよりも先にこの体の持ち主である引きこもり小学五年生の記憶が流れ込んでくる。

しかしスバル少年の記憶から流れてくる社会的な情報と大きな差異のある知識が俺の中に存在している。その知識の中に『流星のロックマン』というゲームソフトの情報があり、それによってこの体の持ち主が星河スバル少年であることが理解できた。

どうやら『ロックマン』はシリーズ物であるらしく、『ロックマンエグゼ』など世界観を共有した作品もあるようだが、そちらに関する知識はそんなゲームがある程度の認識と、ネットで拾ったと思わしき断片的な情報だけだった。

『流星のロックマン』シリーズのストーリーに関しては、大筋は頭の中に入っているが、細かい部分に関してはとても完全とは言えない。

油断はできないだろう。なにせデリート＝死なのだから。

世界観とスバル少年の身边を簡単に説明すると、『流星のロックマン』では地球上全ての電子機器が電波で繋がれており、そんな電波社会を舞台として作中では3年前に、地球外生命体の反応をキャッチすることに成功する。

ニホン科学宇宙局 『NAXA』は反応にあった地球外生命体と友好関係を結ぶため、宇宙ステーション 『絆』を打ち上げることにしたのだ。

しかし、『絆』は原因不明の事故により行方不明、数カ月後、ニホン海に『絆』の破片と思われる残骸が落下したことで捜索は打ち切られ、宇宙飛行士として『絆』に乗っていた父の生存は絶望的となったわけだ。

さて、そんなこんなで絶賛不登校中のスバル少年だが、数少ない趣味があったらしい。それは機械いじりや、天体観測（個人）だ。前者は好奇心からくるものだが、後者は宇宙飛行士だった父を望遠鏡で見つけられないか、という殆ど無謀な試みである。

しかし本人の精神安定剤程度には役立っていたようだ。

そんなインドア系不登校ボーイが、趣味の天体観測中に宇宙人であるウォーロックと偶然の邂逅を果たし、ウォーロックと星河スバルの融合体、「ロックマン」になって電波

世界でウイルスを駆逐したり、世界を救ったりしながら仲間や絆の大切さを学んで成長するのが、流星のロックマンにおける大筋のストーリーだ。

むしろ大筋のストーリーと主要キャラ程度しか頭に知識としては入っていない。

そんな俺の携帯端末『トランサー』には件のウォーロックがいる気配もないし、スバル少年の記憶にもウォーロックなる宇宙人と出会った体験はない。そもそもウォーロックは普通の人間には見えない電波生命体であるため、可視化するためのビジライザーが必要なのだがそれも持っていない。

そういえば先程から来客が訪れているようだが、恐らくその来客がビジライザーを渡しに来た父の後輩、天地マモルさんなのだろう。あまり詳しく覚えてはいないが、天地さんが来るのは小学五年生になった当日であったはずだし。

つまりこれから俺はウォーロックと出会うわけなのだが、上手くやれるだろうか。

リビングに降りると母である星河あかねが来客に対応していた。

あのキャップの配色、間違いなく天地さんだろう。挨拶をするべきとも思ったが、このスバル少年は人と関わることを極端に恐れていた。

母のあかねさんもそれは承知なので、いきなり元氣よく挨拶なんてしたら不審に思われるかもしれない。

……ここはスルーするフリをして、あかねさんに声を掛けられるのを待つて挨拶するべきだろう。

「スバル、ちょっとここちに来てご挨拶なさい」

（一人称もボクにしないと……）

「……うん」

「こちらはお父さんの後輩で、NAXAに務めていた天地さん」

「初めまして、天地です」

「……初めまして。星河ダイゴの息子、スバルです」

「NAXAじゃあ、キミのお父さんにはホントにお世話になったよ。キミのお父さんは優秀で、何より勇敢な人だった……」

「ありがとうございます。父も天地さんのようなしつかりした人が自分の後輩で誇りに思っていたはずですよ」

「あはは……ありがとうございます。よろしくな、スバル君。あ、そうだ、僕は今、NAXAをやめて町外れに自分の研究所を構えて、宇宙学を研究しているんだ……よかつたら遊びにきてくれよ……?」

「時間があれば、お邪魔するかもしれません」

「そんな堅苦しくしなくてもいいよ……つと、今日はお土産を持ってきたんだ」

遂に来たか。そういえばここで断ると、ウォーロックとも意志疎通が不可能になりロックマンになれない可能性が出てきたので、割と世界の命運を左右する分岐点だったのか。

「ビジライザーっていう特殊なメガネで、キミのお父さんが仕事に使っていたらしいんだけど、詳しい機能はわからないんだ」

三年もあつて解析出来なかったのかよNAXAエ……でも3では普通に量産化に成功してたよな、警察関係者限定の装備としてだったけど。

「NAXAを辞めるときに出てきたんだけど、キミに渡しておこうと思ってね」

「これが父さんの……ありがとうございます」

手渡されながら思ったが、趣味が悪いんじゃないかなろうか、このメガネのデザインは。だが、遂に手に入れたぞ。コレさえあれば、まあ何とかなるだろう。

スバル は ビジライザー を ゲットした!!

「スバル、いつもの所に行くの?」

母のあかねさんが確認のため、行き先を聞いてくる。

ホント良くてきた母親だよな。こんな良い人にこれから隠し事しながら生きていかないといけないなんて、世界滅亡案件よりキツイかも。なんてね。

………今は日常の星河スバルを演じないと。

「うん、今日は晴れてるから星がよく見えそうなんだ」

「あら、トランサーの電源が入って………いるようね、よかったわ。」

「ブラザーがないから、誰もボクのパーソナルページを見る人なんていないけどね」

「………何言ってるの、トランサーがないと身分証明も出来ないんだから………」

…今のは元のスバル少年っぽかったかな？

「……………うん、わかってるって。それじゃあ母さん、行ってきます」

あんまり長く話しているとボロが出そうだ。……………あかねさんは良くできた母だから、もう何かに気づいて訝しんでいるかも……………

——スバル退出後の星河家——

「……………行ったわね。今日のスバルはいつもより社交的だったわ。この調子でダイゴさんの事故とも向き合えるようになってくれるといいのだけど……………」

「ところでスバル君はどこに？」

「学校の裏山にある展望台で毎日夕暮れ時に行って空を眺めているみたい……………父さんが見えるかもしれないって……………私もあの子も時間が止まったまま……………早く向き合っていかなきゃって、わかってるんだけど……………ううう……………」

「……………」

——コダマタウン——

外に出ると、未だ沈んでいない太陽が自分はまだ輝ける！とばかりに燦々と光を放っている。

4月なのでこれから日が長くなるとはいえ、今年の春は例年に比べて少し暑い。

観察するのは夜なので、薄着し過ぎて風邪を引くのも馬鹿らしいと、そこそこの防寒着をもって向かうことにした。

……ピロン！

なにやら少々気の抜ける音がしたと思ったらメールのようだ。

中身を確認するとスバル少年が所属するコダマ小学校からきた学習メールであることがわかった。

ゲームのようにセレクトだの、Lボタンで話しかけたりだのメタい内容ではなかったが、スバル少年のトランサーが『サテライト』ペガサス』に属していることがわかったのは大きな収穫だった。

学校に行っていない間はティーチャーマンというナビに教育を受けることになっていそうだから、サテライトについて今度教えてもらおうと、方針が決まったのは朗報ではあるのだろうか。

……では、展望台へ向かおう。

展望台への道のりはスバル少年の記憶から理解出来たが、ゲームのコダマタウンと実



際に、と表現するのも何だか可笑しいがこうして歩いてみるとそこそこ広い町であることがわかる。

スバル少年にとっては慣れた道のりだが、俺に、いや、ボクにとっては新鮮な道を、ゆつくりと堪能しながら展望台に向かう。

展望台に続く階段に到着して、スバル少年のもやしつぷりを体感していると不意に、可愛らしいけれど少々の真剣さを含んだ声が聞こえた。

「そのアナター・ちよつと、待ちなさい！」

コダマ小学校の校門あたりから、こちらに向かってくる三人組をボクは知っている。

『流星のロックマン』シリーズを通して登場し、ロックマンの正体を知ることになる数少ない友人、白金ルナ、牛島ゴン太、最小院キザマロだ。

因みに、『3』では最初に電波変換したときにサテラポリスに正体を知られてしまったため、警察内部では当たり前に知られている。

「……アナタね？ウチのクラスの不登校児ってのは？ワタシは白金ルナ！コダマ小学校五年A組……つまりアナタのクラスの委員長よ！後ろのでっかいのが牛島ゴン太で……」

いきなり自己紹介し始めた委員長さんをコミユ力高いなーと思いつつながら、若干の畏怖

を感じていると、無視されていると感じたのか委員長さん以外の二人が話しかけてくる。

「オイ、このヤロウ！だまっていないで何か言ったらどうなんだ!？」

「委員長が直々にお話されているんですよ！」

委員長さんにカリスマがCランク程度で備わっているのは知っているが、三人とも同じ小学生なのに上下関係はつきりし過ぎじゃないかなあ？

「……ボクに何か用事かな？」

「用事も何も、ワタシがクラス委員長を務めるクラスになった以上、毎日ちゃんと学校に来てもらおうわよ！」

…不登校児にはキツイテンションだけど、ここまでしてくれる奴なんて向こうの世界では滅多にいないレベルなんだよなあ……うう、皆の優しさがツライです……。

スバル少年の記憶でも今さら学校に行きづらいつてのはあつたみたいだしなあ……

「……………（反応しづらいなあ）」

「ワタシは何事もパーフェクトじゃないと気がすまないの。クラスに全員揃ってないことが許せないのよ！」

うわつ、委員長さん聖人過ぎる……

「悪いけど、（今日は）あんまりボクに関わらないで……」

「なんだと!?!だまってきいてりやこのモヤシヤロウが……!」

「いいですか!?!委員長がわざわざ学校に誘ってくれてるんですよ!ボクよりちよつと背が高いからつていい気にならないでください!」

キザマロ………やっぱ気にしてたんだ……「最小」院だもんな……

「ゴン太!キザマロ!落ち着きなさい!」

あれほど興奮してたのに、（表面的には）ぴたりと落ちついたぞ………やっぱカリスマあるんだよな……

「というコトで、スバル君。明日からちゃんと学校に来なさいよね」

「ゴメン、（今日は展望台に行かなくちやいけないから）もう行くね」

……言葉が少し足りなかったかな?でもスバル君つて初期は大体こんな感じだったし……とにかく展望台に行かなくては!

「星河スバル……一筋縄では学校に出てこなさそうね……さて、どうやって心を開かせようかしら……」

「いいんちよう！あんなやつほうつておいたほうがいいぜ！」

「そうですよ委員長！委員長の誘いを断るなんて！」

「二人とも黙らっしやい！そうだわ……今日のブラザーバンドの授業……アレが使えそうね……アナタたち、行くわよ！」

——展望台——

さっきの三人には悪いけど、今日は本当に急がなくちやいけないんだよ！

……ピロン！

「メール？」

あ、さっきの委員長さんからだ。

登校を催促しつつブラザーバンドについての宿題をプログラムで終わらせろ、ということらしい。

このプログラム、面倒くさいけど中々奥深い。特にフェイバリットカードで気づいたがやはりエアスプレッド等にロックマンは映っていない。プラズマガンのように武器だけが表示されている。

委員長さんの宿題プログラムが終わったところでちょうど辺りが暗くなってきたよ  
うだ。

面白くて熱中してしまっただが、周りが見えなくなることは今後の課題にするとして……ウオーロックは、まだか……？すでにビジライザー待機はすんでいるぞ！

…チュイン！チュイン！チュイン！チュイン！

「何この変なシグナル……ってこれは父さんのシグナル！」

わかる、わかるぞ！スバル少年の記憶の中のシグナルと一致する！そしてシグナルの感覚がどんどん短くなっていく……来るか!?って

「うわあああああつ!!」

すごい衝撃なんですけど……じゃなくて！つまり遂にウオーロックが来た……!?

「……ここが、地球か……」

お前そんな知的なキャラじゃないだろ……?」

「う、うーん……って、うわあつ!」

演技っぽくなかったかな？

「……オレが見えるのか？おかしいな、この星の人間にオレの持つ電波のカラダは見えないはず……」

「…………キミは……?って空に道が！天の川じゃ……ないよな!?!コレは、一体……!?!」

そしてビジライザーを外してみる。やっぱり見えないか。ソロさんマジ尊敬します。

「そのメガネで電波体であるオレの姿を見れるのか……」

…もう演技でいいからやり通すしかないっ！

「さつきまで何も見えなかったのに……どうして……まさかさつきの衝突のショックで……？」

「だろうな、さつきのショックで眠っていた機能が目を覚ましたんだらうよ」

「うん、わかった。ボクの名前は星河スバル、君の名は……？」

「さほど驚いていないのが気になるが胆力のある奴は嫌いじゃねえ……オレの名はウォーロック。ロックと呼んでくれ。FMプラネットからやって来た、オマエたちで言うところの宇宙人ってヤツだ」

「う、宇宙人……？ 本当に……！」

「オレから言わせればオマエらも宇宙人だがな」

おお、宇宙人。なんと素晴らしい響きだ！

向こうの世界では迷信かUFOの映像が精々だったというのに本物に会えるとは！  
何だか感動してきたよ。

「一応言っておくと、オレのカラダは電波で出来ていてオマエの持つてる変なメガネみたいなブツでもない限りオマエたち人間の目には見えないはずだ。オマエが今見えている空の道は電波世界の道、ウェーブロード……理解出来たか？ 星河スバル」

「それは理解したけど……何だか地球の人間のことを知っているみたいなお振りだね」

「宇宙で出会った地球人に聞いたんだよ」

やはり、ダイゴさんのことを知っている。このウォーロックは宇宙飛行士の父さんがFMプラネットの住人とのコンタクトの時に出会ったFMプラネット育ちのAM星人だ。死刑囚と世話係として、だったけど。

しかしウォーロックが知っていても、ボクがウォーロックのことを知っている理由はない。驚いたフリをしておこう。

「それは本当?……もしかして、父さんに会ったの!?!」

機関車が蒸気を吐き出すような音が聞こえる。つてことは、既に来ているつてこと!?!  
「チッ!もう来たようだな……」

はやっ!

「来たつて!?!何が来たつて言うの……?」

「オレを探しにやつて来た厄介なヤツらさ……」

もう機関車が動いてる……全速前進しそうな雰囲気を感じるな。

「あの機関車は動かないはずなのに……!」

「FMプラネットのウィルスの仕業だな……ヤツら、あの機関車を町にブチ込むつもりだぜ」

「ええっ!?!あれが町に突っ込んだら大変なことになるよ!……ウチには母さんがいるん

だ！」

わかってるけど、スバル君って結構マザコン入ってる気がする。ポケットにはあかねさんの写真が入ってるし。

アレって洗濯する前に毎回取り出して、外出するたびに入れ直しているんだろうか？……考えないでおこう。

「あの機関車を止めるためには方法の一つ、機関車に入り込んだ電波ウイルスをデリートすることだ！」

「ウイルスをデリート……？そんな、どうやるってのさ!？」

「ここうするのさ!！」

って、トランサーに入った！

「まずは確認だ！オマエたち地球人ってのはカードフォースってのを持ってるんだよな!？」

カードフォースってのはバトルカードやナビカードをトランサーに読み込ませることで発揮するチカラのことだ。チカラといっても超常的なモノじゃない、あくまで操作や解放といった機能を使う程度の範囲に留まる。

「う、うん、持ってるよ」

半透明のカードを目前に出す。



「じゃあ、いいか、よく聞けよ？まずはカラのカードをだすんだ……出したな、行くぞ」  
「うわっ……なんかビリビリしてる……」

「気にするな！次は空間が歪んでウズ状になっている場所、ウエーブホールを探せ！」  
「わかったよ！」

ええつと……あつた！展望デッキ側の地面！

「ウエーブホールのある場所でカードを読み込め！そのときは変なメガネ、ビジライザーを掛けている必要はねえぞ。そしてこう叫べ！電波変換！星河スバル、オン・エア！ってな。わかったか!？」

わかつてるよ！どうせウエーブロードに飛ばされるんだ。ジャンプして空中で電波変換してやる！行くぞ！

「わかった、行くよ！電波変換！星河スバル！オン・エア！」

ガシャツ！つといい感じの音を出してカードを読み込ませると、さっきまでトランサーの中に入っていたウォーロックがボクに覆い被さるように融合？していく……いざ、初陣だ……

ーウエーブロードー

「ハ、ハハハは……？」

面倒くさいが、暫くは何も知らないフリをしないと勘『は』鋭いウオーロックに気づかれるかもしれないので驚いたようなアクションを取っておく。

「ここが、さつき話したウエーブロード。下を見てみろよ。……さつきまでいた展望台が見えるだろ？」

「……！  
やっぱり凄く興奮する！電波化して左手がイヌみたいになったが。ささいなことだ

「オマエはオレと融合して電波化したんだ」

「おっと、気を抜いている場合じゃない。……これから本当の戦闘をするっていうんだから。」

「融合って、ボクと君が合体しちゃったってこと？それに電波化だって!?どうなってるんだー！」

「ガタガタ騒ぐな！逃げようとしなはぬことは評価してやる……が、今は電波ウィルスで倒すためにオマエの力が必要なんだよ！」

お、FM星の戦士的に逃げないのは高評価なのか。

「ねえ、ロック、ボクでも戦えるかな……？」

「大丈夫だ！いいか、よく聞けよ……癪な話だが、どうやらオレはこの星ではFMプラネットにいた時ほどの力が出せない。この星でオレがチカラを発揮するには、この星のモノと融合する必要があるんだよ」

やっぱりFM星人単体では大きな力は持てないってことか。他の人に任せるのも、不確定要素が大きすぎて出来ないし。

「こうやってオレたちが融合して電波化することを『ウェーブイン』そして電波世界から元の現象世界に戻ることを『ウェーブアウト』と呼ぶ」

この辺りの単語は口が滑った時に怪しまれる可能性があるからしつかり聞いておかないといけない。

……っていかウオーロック、いやロックって教えるの上手いな……

「大体わかったよロック。それで、ウィルスに向かうにはどうしたらいいの？」

「ハナシが早くて助かるぜ！……まずはこのウェーブロードを伝って機関車の電脳世界に行き、電波ウィルスを見つめる、そして倒す！簡単だろ？」

「電脳世界ってのは?」

「オマエらの作った電子機器が電波を発信したり受信したりするのをコントロールする場所……電波化すると実際にその電脳世界に入って行動することが出来るんだよ……つと、時間がねえ! 準備はいいな!」

「いいよ。行くこう」

「フン! やる気があつていいことだ! 戦い方はオレが教えてやるが、動くのはオマエだからな……氣イ引き締めろよ!」

「うん、まずは機関車の電脳に入ろう……つて電脳にはどうやって入るの?」

ゲームじゃあ近づいてからタッチして入れたけど、現実でも同じとは限らないよね……

「ウエーブロードを進みながら説明する! まずは機関車に近づくんだ……」

幸いあまり遠くはない、急がなくちゃ……

「……………着いたな、行くぞ! カラダに流れる電波の向きを意識しろ……! 受信する電脳世界があればそこに飛ぶことができる! 飛ぶって言っても一瞬だがな」

電波の向きを意識……おお……なんか流れてる感じがする……………いけるぞ!

「あとは機関車の煙突の上に小さなウエーブホールが見えるだろ……? あれがチカチカ光ったら外部から電波を受け付けている証拠だ……」

「なるほど行くよ……つてウワアっ！」

なんか、早い！そしてもう電腦世界が広がる入り口が見えてきた……！

——機関車の電腦世界——

「ここが……機関車の電腦世界……？」

…割と広いな。

50メートル×50メートルの正方形のパネルに、いくつかのウエーブロードが繋がってるつてところか……とところで、他の電腦世界に繋がってるわけでもないのに、なんでこんなにウエーブロードが伸びているんだらう……？

「おう、そうだぜ。簡単に言えば機関車のコンピュータの中つてトコロか……このエリアのどこかにウイルスが居やがる……探しだしてぶつ倒すぞ！」

…かなり乱暴な口調だけど、今はこの積極性があるがたい！

そして、電腦世界の入り口から中央の正方形のパネルまでは一本道……ウイルスも、そこにいる……！

「居たよ……ロック」

「おう、ぶつ倒すぞ！デリートだ！戦い方はオレが教えてやるから、安心しな！」

「う、うん……頼むよロック」

「何いってんだ、メインで戦うのはオマエなんだぞ……それにここで戦わなきゃ町が

メチャクチャになっちゃうかもしれないぜ」

「……………わかったよ、やるさー！」

「フン、オマエの親父ほどじゃねえが肝は据わってんじゃねえか……………」

「父さんのことを……………!?!この戦いが終わったら宇宙で会った父さんのことを教えてよね……………交換条件だよ、ロツク?」

「……………へっ!考えておいてはやるぜ」

ふう……………んじゃ、殺るか……………

「おいおい、足が震えてるぜ」

「黙ってて!これは武者震いだよ、ロツク……………」

そう、これは武者震いなんだ……………ワクワクが止まらない!今ならなんでもやれる気がするんだ!

「よーしよし、いいぜいいぜ!いいか、オレの言う通りに戦うんだぞ?いくぜ!」

「……………うおおおおお!」

…ファーストバトル、ライドオン!相手はメットリオなので流石にすぐ終わってしま  
うだろうが……………結構メットリオって可愛い……………

「さあ、電波の世界での戦い、ウェーブバトルを教えてやる」

ゲームでは下画面にバトルカードが映っていたけど実際にはどこで選択していたんだろう………つてカードが見える!?

手をかざしても触れない……?もしかして網膜投影つてやつかな?……うわっ、攻撃してきた……!

「縦2×横3でカードが見えるだろ?こいつはオマエにしか見えないから安心しな……今見えてるカードはオマエが持つてるバトルカード30枚の中から6枚がでているんだ」

……本当だ、展望台で暇潰しに確認していたお粗末な初期デッキのカードと一致してる……ちよつと弱すぎやしませんかねえ………

メットリオのシヨックウェーブはとでも遅く、250mもあるフィールドなら悠々避けることができる。

「この中から使いたいカードを選べばいい訳だ……が、選ぶにもルールがある……簡単言えば縦に選んだ2枚、または同じカードは場所を選ばず選択できる。そして白いカードは選んだカードに関係なく選べるぜ」

「バトルカードなんて持つているけど使うのは初めてなんだ。どんな効果かは、絵柄から推測するしかないんだけど……」

…そして最も大切なことは、どうやって選択するかということだ……!

「それに、バトルカードはどうやって選択するの?この6枚のカードは見えるけど触れないよ」

「それはすまなかつたな……ちよつと待て……」

大丈夫だよな?初戦からロックバスターだけとかないよね!?

「……よし、わかつたぞ、スバル……右手を右の耳当てに当ててみる」

…何だ……?スイッチのような押せる箇所が耳当ての縁に7ヶ所あるぞ……?

「スイッチを見つけたか、スバル?一番前面に近いスイッチを押してみろ」

…おお……左上に移るカード消えた……これが選択するってことなのかな……?

「今消えたカードが選択中ってことになる……この状態で選べるのは左下のエアスプレッドーか左上と同じカードのキャノンってことになるな」

なるほどなるほど、カチカチやると結構楽しいな……右の耳当てだから左手のロックの顔に干渉しないし楽しい。

……おっと、攻撃だ。シールドでガードしなくっちゃ……

「キャノン2枚でいいかな……選んだよ、ロック。次は何をすればいい?」

ロックバスターは弾速が高いけど、やっぱり威力は低いみたい。HPが中々減らない

……



「ああ、選り終わったなら後頭部に一番近いスイッチを押して選り完了だぜ……………どうやら、かなり余裕があるみたいだな、スバル。…………地球人は、電脳世界での戦闘に慣れていないはずなんだが…………」

「…………そうかな？小学生位の男の子なら、カッコよく戦う自分の妄想の1つや2つ、すると思うよ…………？」

自分でも少々強引だと感じるが、ここはこの妄想する小学生理論で押し通す…………

「それと、選り完了したら視界に3つ見慣れない表示があるだろ？左上にある数字と、さっきからオマエが撃ってるロックバスターがウィルスに当たる度に減っているのがヒットポイント、HPでこれが0になったらオレもオマエもオダブツだから気を着けろよ。右上にあるのがカスタムゲージ、これが貯まると新しくカードを選べるようになるから、しっかりと把握しておけ…………最後に視界下部にあるバトルカードと数値、これは次に使うカードが表示されている…………つと、理解したら早速使ってみろ」

「…………うん…………バトルカード、キャノン！」

左手が割と大きな大砲に変化し、自分の意思に沿ったタイミングでデータの砲弾が発射される。

初めてにしては中々堂に入った構えで撃った砲弾はメットリオ一体に着弾し瞬時にヒットポイントが0へ変動し電脳世界に飛び散るように消えていった…………

「あと、7体！」

続けて、もう一枚のキャノンをメットリオ一体に当て、使用できるカードが尽きたところで、カスタムゲージが満タンになったことを確認し、新たに補充されたソードを含めたソード↓エアスプレッド↓アタック+10の順で選択、素早く完了させる。

「おっと、スバル。そのソードは高い攻撃力を持っているが射程が短い。そんなときに役立つウォーロックアタックについて解説してやろう」

自分の名前付けちゃうんだ……

「……ウォーロックアタックってのは？」

「ウォーロックアタックってのはこのオレの突進パワーでオマエのバトルをサポートしてやる機能でな……ロックオンカーソルを出して、カーソルが合ったらその敵の目の前まで突進することでオマエの攻撃のサポートをしてやれる。……突進って言ってもウォーロックアタックはオレ固有の力だから、電脳世界に入ったときみたいな超スピードで敵の不意を突くこともできるぜ」

おお………ウォーロックが凄く有能だ……

「うん、じゃあ行くよ……ロックオン」

「ウォリャアアア!!」

凄いスピードだ……よし、ソード発動！

「あと5体……」

エアスプレッドにアタック+10を付与して発動！周りにいたメットリオ3体の体が崩壊していく……

「あと2体！」

既に貯まっていたカスタムゲージを確認し、新しいバトルカードを選択……ウオーロックアタック！ワイドソード！並んでいた2体を同時に切り裂き、素早く後退する。

「やっと終わりか……？」

……さつきからウオーロックが喋らない。どうしたんだ……？

「思ったよりかなり動けるじゃないか……！よし、気に入ったぜ、オマエ」

……望んでやったとは言え、やっぱりこうなるのか……

「気に入った？」

「ああ、だから暫くオマエの世話になるぜ！」

「父さんのことは？教えてくれるんだよね？」

「へっ……まあ、追々な」

まあ、いいか。ウエーブバトル、楽しかったし……またさせてくれるなら……

「……わかったよ、どうぞ。トランサーの中に入るんだよね？」

「よし、交渉成立だ！取り敢えずオマエのウチに帰ろうぜ」

…この後、暴走した機関車はもとの場所に戻っていった。

自動で場所を調整するプログラムが入っていたみたいで、登録した場所から移動すると、元の場所に戻るようにプログラムミソグされていたようだ。

(ロツクには、いつか母さんよりも先にこの体やボクの意識について話さなきゃならぬいんだらうなあ……)

——こうして、ボクの長い1日がようやく終わった

## 3

次の日、早朝に起床し不登校児童用のナビ『ティーチャーマン』を起動し、歴史以外の学習をサイレントモードにして速攻で終わらせ、静かにここ数百年の歴史について学んだ。

どうやら、この世界の歴史は向こうの世界とは全く異なるようで、勉強をサボっていったらしいスバル君のツケを払わされる羽目になってしまったのだ。

昨日から起きていたウオーロックが内容を覗いてくるが、無視だ、無視。

「おいスバル。何をやっているんだ……？」

「静かに。母さんが起きちゃうじゃないか……母さんは今日もパートがあるから、あまり苦勞をかけさせたくないんだ」

「そうじゃなくて、このオーパーツってのは……？」

それと、余った時間でウオーロックにボクのことを伝えながら、いくつかの調べものをしてはいけない……キーワードは、古代、オーパーツ、展示つと……どれどれ………

――二時間後――

朝5時から勉強を始めて、今現在は午前8時。

母、あかねさんは既に起きて朝食でも作っている頃だろうか。

先ほどからこんがりと焼いたベーコンの香ばしい香りが漂ってくる。

……お腹減ったな……スバル君の記憶では、朝食はあかねさんがパートに行ったあとに一人で食べているらしいので、出来立てを食べれないことが菌痒いが、あかねさんの料理は絶品が多いらしいので、多少冷めていても美味しく頂けそうだ。

それに現在では、食品の生産技術や、加工技術も向上している為、食材の味自体も良くなっている。

ああ、しかし三時間も頭を使った後なんだ、お腹が減ってしようがない。

……多少怪しまれるかもしれないが今日の朝食と一緒に摂ることにしよう……  
ウオーロックは部屋で待っていてもらうか……

ーリーリビンググー

星河家のリビンググは、キッチンやテーブル、じゅうたん等、一通りの家具が揃った共有スペースになっている。

比較的広いため、二人で暮らしていると少々寂しく感じるのはこの体の記憶に精神が引つ張られているからだろうか……？

キッチンではあかねさんがベーコンを焼いている。調理中の音に紛れて、ボクが降り

てきたことには気づいていないようだ。

「母さん、おはよう」

「っーあら……スバル。珍しいわね、こんな時間に起きてくるなんて。久しぶりに一緒に食べない？もうすぐ出来上がるわよ……？」

嫌みに聞こえなくもないが、スバル君の生活習慣をしっかりと把握している場合、全く嫌みではない。

しかしあかねさん優し過ぎる……普通三年も学校サボってたら愛想だって悪くなるだろうに……しかも自宅学習だってサボり気味だ。

「ちよつと早く目が覚めちゃったんだ。ティーチャーマンをサイレントモードにして勉強していたら、お腹空いちちゃって……我慢出来なさそうだから食べるに来たんだ」

……これはスバル君っぽくないかも……

「あら、そう。偉いわね……じゃあ一緒に食べましょう？」

「……わかったよ」

ー朝食後ー

「……ご馳走さま、美味しかったよ」

「ありがとう。……毎日この時間に起きてくれば出来立てを食べられるわよ？」

「……うん、考えておくよ……」

…今のはスバル君っぽくなかったが、つい口をついて出てしまった。あかねさんの料理、とても美味しかった……

こんなに美味しい出来立てを毎日食べ損なっていたなんて……スバル君め……勿体ないことを……

「スバル、母さんはパートにいつてくるわね」

「……うん、行つてらっしゃい、気を付けてね」

「ええ……」

何か迷つてる？そんな表情をあかねさんはしている……

「どうしたの……？母さん」

「ええと、スバル……アナタ、また学校に行つてみない？アナタには友達が必要だと思うのよ……無理には言わないわ。どうかしら………？」

…反応しづらいなあ、この話題……

「……昨日、新しいクラスの人が学校に誘いに来たんだ……多分、良い人たちなんだろうと思う」

「なら、スバル、学校に……」

「でも、まだ怖いんだ、周りの人が居なくなっちゃうことが……」

すまないが暫くは勉強はティーチャーマン任せで自由時間を確保したいので学校は



NGだ。

あかねさんに嘘をつくのは心苦しいんだけど……

「そう……そうよね。ごめんなさい、余計なお節介だったわ……」

「うん、じゃあ部屋に戻るよ……行ってらっしゃい、母さん」

「ええ、行ってきます」

——自室——

部屋に戻るとさつき出たときと変わらない、でも昨日までの朝とは決定的に違う要素がこの部屋にはある。それは………

「おう、スバル。メシは食ったのか？」

「うん、食べたよ」

当初ウオーロックは星河家の朝食に着いていこうとしたが、ジロジロと見られながら食べる趣味はない。なので、町の案内と電波変換してコダマタウンの散策、ついでにウィルス退治で暴れさせることを条件に部屋でおとなしくしてもらった。

「よし、それじゃあ行こうぜ！」

「ちよつと待ってよ、まだ食べたばかり……」

「いいじゃねーか、案内位できるだろ？」

「お腹痛くなりそう……」

食べてすぐ運動したら吐いちゃうって！

「わかったよ、ゆつくり案内するからね」

「へっ！別にすぐ終わらせてウイルス退治でもいいんだぜ？」

「……はい、ハア……準備するから少し待っててね」

「早くしろよー！」

もうちよつと落ち着きを持って行動してくれよ……が、しかし耐えるんだ星河スバル……早く案内を終わらせてしまおう。

………ウイルス退治が楽しみなのはロックだけじゃないんだから。

ーコダマタウンー

現在は午前8時30分。既に多くの学校ではホームルームが始まっている頃だろう。

小学生である以上、通学で行動がかなり制限されてしまうのが低年齢主人公のネットワークだと思っていたが、考えてみるとスバル君が引き込みりだったのは製作陣に都合が良かったからなのかもしれない……

小学生が引きこもりである為に、三度も救われてしまう世界って……

「おい、スバル。適当に誰かと話してみろよ」

……お前は引きこもりのコミュ力にいったい何を期待しているのか……！

「………わかったよ。でもトランサーの中で暴れたりしないでよ？周りの人に変な目で見

られちゃうから……」

「別に、オマエはオマエだろ……誰かに変な目で見られたからって変わっちゃまうわけじゃないんだろ？」

「……そりやそうだけど。ボクが悪目立ちすると母さんに迷惑を掛けちゃうから……」

「フーン……地球人つてのはよくわからねえな」

「みんな誰かを尊重して生きているんだよ、ロック」

——30分後——

「一通り話してきたけど……」

流石にこの時間に町を歩いているのは老人か親子連れ位なんだよね……

「ねえ、もういいだろ……っっていうか、父さんの話もしてくれよ」

「わかったわかった……だがもう少し付き合ってもらうぜ」

「……次は何処に行くんだい？」

「あいつらのトランサーの中さ」

「トランサーの中？なんでさ……」

「トランサーの中といてもオレが見たいのは地球人たちのパーソナルページだ。普段、他人には見せないパーソナルページを見ればその人間がどんなヤツなのか、何を考

えているかが大体わかるのさ、それに……………」

「それに？」

「いや、何でもねーぜ！」

「…………けど、他人のパーソナルページを覗くなんて、あんまり気が進まないよ」  
「オマエが嫌がっても、オレは行くぜ…………オマエのトランサーを引っ張ってな」

ちよつ、やめ、ヤメロオー！

「わかつたから！けど、どうやって…………」

「昨日と同じ手順で、電脳世界を経由してトランサーに入れればいいのさ」

…はいはい、周りの人に見られないように電波変換しなきゃね…………

「…………電波変換。星河スバル、オン・エア」

ウオーロックの力を宿したカードをトランサーに読み込ませ、融合を開始する。

…………ああ、やっぱり電波体はいい。

…………何者にも縛られない、真の自由を感じるよ…………

——30分後——

ウエーブロードを伝ってトランサーを持った人に近づき、トランサーの中を覗きながらエンカウントするウィルスを退治してきたけど…………

「これで一通り入ったかな…………まだやるの、ロック？」

メットリオがピツケルを突き立て、発生させたグラウンドウェーブを左に跳躍しながら回避し、キャノンを発動。ウェーブロードからピツケルを引き抜いているメットリオに狙いを定めて発射……最後のメットリオのHPが0になり戦闘が終了する。

……キャノンを解除し両足で着地、新手が来ないか確認するも、出現の気配はない。この辺りにはメットリオとキャノンベースしか出ないから物足りなくなってきた。……そろそろ遠くまで出かけてみようかな……

「フム……やはりパーソナルページってのは直接喋った時とは違う情報が手に入るな」

戦闘自体には慣れてきたけど、やっぱり興奮する。こりやあサテラポリスが人工電波生命体をつくろうとするのも頷けるなあ……

「そんなの当たり前じゃないか、ブラザーバンドを結んだ人同士にしか見せないページだからね……誰にでも全く同じ態度で接する人なんて……ボクは逆に信用できないよ」  
「しかし、妙だな……」

……あつ、もう次のFM星人が来たのか……確か、オックスだっけ？

ゲームではスーパーアーマー持ちだったからな……勝てるか？今のボクで……つて  
いうか、仮にもFM星人の戦士ならもう少し危機感もつてよ……

「妙って？」

「ああ、今朝からFM星人の気配を感じたもんだからよ、オレみたいに誰かのトランサー

に隠れているヤツがいるんじゃないかと思っただが……少なくとも今出歩いているこの町の住人のトランサーの中に隠れているFM星人はいないようだな」

「……そういうことは先に言つてよ……もし誰かのトランサーの中でFM星人と鉢合わせしてたら……」

「間違いなく襲いかかってくるな」

「そんな他人事みたいに言わないでよ……!」

「……………シツ! 静かにしろ」

「(なんだよ! いきなり!?)」

「オレが今朝感じたFM星人の気配がする」

「(でもトランサーの中にはいなかったよ?)」

「FM星人が入り込むのはトランサーの中だけじゃねえ」

「ああ……機関車がそうだったね。……と、いうことは……」

「電脳世界だ。近くの電脳世界のどこかにFM星人に関係のあるヤツがいるはずだ!」

「そのFM星人は敵対してるんだよね……じゃあ戦うのかい?」

「おう! 先手必勝、こつちから撃つて出てやろうぜ! この辺りの電脳世界を探して回るぞ、スバル!」

「わかったよ、また機関車みたいになったら大変だもんね……」

——5分後——

「ウエーブロードにいたデンパたちの話によると、この自動車に怪しい人影が入っていったらしいよ、ロック」

初の電波変換体との戦闘……気を引き締めなくっちゃ………さあ、行くか！

「おう！行くぞスバル、突入だぜ！」

いざ、自動車の電脳世界へ……

——自動車の電脳——

自動車の電脳は、以前訪れた機関車の電脳に似た構造で、中央に正方形のパネルとそこから伸びるいくつかのウェーブロードで出来ている。

ただし、伸びたウェーブロードの1つが自動車のコントロールシステムに繋がっており、敵のFM星人も、恐らくはそのコントロールシステム付近にいるだろう……

「……ここが、自動車の電脳世界。機関車の電脳世界に似ているね」

「ああ、まだ機関車の電脳以外の電脳世界に入ったことがないから何とも言えないが……構成されている電波が似通っているからなのかもしれないな」

…ロツクの真面目な考察が聞けるとは思わなかったが、腐つても戦士ということか。

……凄いと違和感だったけれども。

「この電脳の何処かにFM星人が……」

「昨日の雑魚よりは確実に強いつてことは伝わってくるぜ……!」

不安はあるけど興奮のほうが大きいって自覚はある。オックスって、FM星人の中じゃあ普通にエリートだからな……今までのようにはいかなそうだ。



「うん、わかってる。行こう、ロック」

あまり大きくない電腦世界だから、すぐに見つかると思うけど……っ！来た、ウィルスだ……！

中央のパネルにいるのはメットリオと……しっぽに火の着いたトカゲ？新ウィルスか！キタコレエ！

「スバル、フォルダにバトルカード、『プラズマガン』があるから、なんとなくわかっていただろうが、ウィルスには属性をもつヤツがいる。わかりやすいのが今戦っている火トカゲだ。こいつらは見てわかるように、炎属性をもっている。そういうヤツらには水属性のバトルカードがよく効くぜ……水属性のバトルカードを手に入れたら、ここに来て試し撃ちしてみるってのもアリだな」

…それは流石に火トカゲ、もといメラマンさんに悪いんじゃないですかねえ……いや、ウィルスだから駆逐するけれども。

「そういえば、まだ攻撃を食らったことがないからわからないんだけど、このメラマンみたいなウィルスの火炎攻撃を食らったら火傷しちゃうのかい？」

「いや、電腦世界の戦い、ウェーブバトルでは火傷することはない。衝撃で吹っ飛んだりはするが、切り裂かれて真っ二つになったり、火傷したりすることもないぜ……痛みも

軽減されるため、ダメージを負っても全く動けなくなる、なんてことは起こりづらいがHPはオレたちの体を構成するシステムを守っているから、これが0になると体を維持出来なくなつてオダブツつてわけだ」

「HPが0になつたらすぐに死んじゃうの？」

「いや、体の崩壊が終わる前にリカバリー系のバトルカードやエネルギー系の回復手段をとれば復活は可能だ」

なるほど……ゲームではHPが尽きてもデリートする場合とイタタタ……で済ませる場合があつたけど、現実的には手加減抜きならこんなものか。

つまり、だいじょうぶだ、リカバリー300で生き返れるつてことね……いや、カカロットじゃないけれども。

…メットリオのグランドウェーブをシールドでガードし、カウンターとばかりにパワーボムを放り投げ、メットリオに着弾、デリートする。

このパワーボムは、トランサーの中を探っている最中に出てきたウイルス、キャノベースをデリートした際のリザルトで手に入れたバトルカードだ。

手投げボムと聞くと起爆が遅いと先入観を抱いてしまうのは、向こうの世界のゲーム脳過ぎるだろうか。

しかし、そんなパワーボム、実はかなり使い勝手が良いことがわかった。

…まず威力が高いので、普通に当てればここまで戦つてきたメットリオ、キャノベース、メラマンダは一撃で倒すことが出来る。

キャノベース、メットリオに関しては動きが鈍いため、適当になげても命中するがメラマンダはチョロチョロ動いために、なかなか当たらない。しかし動きを誘導出来るため、避けた先にウオーロックアタックで突っ込み、ソード系のバトルカードで倒せるのはとても助かるのだ。

あとはある程度だが、カードの発動から起爆までのタイミングを選べるので、目前まで近づいてきた敵にパワーボムを放り、直ぐ様ガードするという戦法をとることもできる。

「(やっぱり楽しい)」

「おいおいスバル、絶対調じやねえか！このまま頼むぜ！」

パワーボムの爆発から逃れたメラマンダにロックオンカーソルを合わせ、加速っ！目前まで突っ込んでワイドソードで切り捨てる……

リザルトデータが半透明で視界に表示され、テイルバーナーのデータがバトルカードとしてトランサーに収納される。……戦闘が終了したようで、増援の気配もない。

ー自動車の電脳・コントロールシステムー

「……着いたよ、ロック」

「ああ、やつと件のFM星人とご対面、だぜ」

ウエーブロードの先、コントロールシステム用の大きめの正方形パネルの上に立っているのは、草色の装甲で身を包むまきにしたつば怪人といった風貌の電波体だった。

…あれえ？ オックスじゃなかったつけ？

「FM星人がくつついているのかと思つたが、ザコか……」

「FM星人じゃないの？」

「……だが、気を抜くなよ、スバル」

したつば怪人がこちらに気づいた……！

「なんだ？ お前も車泥棒か？……悪いがこの車はオレの獲物だ」

…何？ 車泥棒？ ロック関係ないじゃないか……！

「邪魔するつてんなら痛い目にあつてもらうぜ……ウキョキョキョキョーッ!!」

…鳴き声キモツ……つとこつちに向かつてくる。

強そうだから言つとくか……

「行くよロック！ ウエーブバトル、ライドオン！」

「おう！」

「ウキョキョキョキョーッ!!」

奇声を発しながら左腕を四連装のマシンガンに変化させ乱射してくる。あまり威力が高そうに見えないのはロックバスターと同じで、恐らくは牽制目的の装備だろう。

多分シールドでガードできるはず。それよりも……

「こいつ、ウイルスの癖に機動力が高い……!」

まずは足止めをしないと……。やはり人型は強敵というテンプレは正しかったよ……その内ロックのコピーでも現れて同型機同士の決戦でも起こりそうっていうか3でデーターがロックのコピーつくってるんだよな……

なんで完全に同じなのに、電波変換機能付けなかったんだろう? FM星人は地球上では単体で十分な力を発揮できないのに。

組織にはその電波人間が二人もいるのに。

「ウキョキョ! 遅えなあ、青いの! このオレに勝とうなんて百年は早いんじゃないかあ!」

……なんて、確かにこいつ自体は普通のウイルスより早いけど人の形をしているなら動きはウイルスよりもよっぽど読みやすい。それに……

「うおおおっ!」

ウオーロックアタック+ソード!

「ウヒャアッ! あ、危ねえ……この、調子に乗るんじゃないやねえ、よっ!」

ソードによる斬撃をおっかなびつくり避け、崩れた体制を無理やり整えながらマシンガンを乱射してくるしたつば怪人。うーん……やっぱ弱いなあ……

「そつちは余裕がなくなってきたんじゃない？ボクは昨日電波体になれるようになった新参だよ？……いきなり押されるなんてマズいんじゃないかなあ？セ・ン・パ・イ？」  
 ……フハハ！ここぞとばかりに煽つてやる！まあこんな雑な煽りでキレてくれるわけではないんですね。（フラグ）

「調子に乗りやがってえ……！絶対絶命ボコボコにしてデリートしてやるからなあ！」  
 マジで乗ってくるとは……だけど、都合合ッ！選択するバトルカードは……

「行くよロック！ウオーロックアタックだ！」

「おうよ！だがそのバトルカードは……」

ロックちよつと黙つてて！ロックオンカーソルをしたつば怪人（仮称）に合わせ、一気に接近するつ……！

「うおおお！」

「ウヒョオつ!!」

シールドを展開しながら突進、シールドバツシユで弾き飛ばし、体制が崩れたところにパワーボムを投擲、シールドを張り直して爆発の衝撃をやり過ごす……これで！

「ウキヨキヨキヨキョー……ッ?!?!」

したつば怪人（仮称）の上部に表示されている数字が0を刻み、電波体が崩壊していく……つとこれはウエーブアウトのエフェクト。

……まさか自力で脱出を!?

「ウイルスに取り憑かれた人間か……」

……そういえばボクもスバル君に取り憑いたウイルスみたいなもんだよな。……ロックの言葉が心に響くよ……

「この町にもずいぶんFMプラネットの手が延びてきているようだな……」

「今の、人間、だったの……?」

「ああ、オマエが電波化しているのと同じ原理だな。ただし、ヤツの場合は低級なウイルスに取り憑かれていたようだが……所謂『ジャミング』ってヤツだ」

「どうしよう……普通に爆撃しちゃったよ」

「多分、大丈夫だろう。命まではとっちゃいない……よし、一旦オマエの家に帰るぞ」  
「わかったよ……」

その後は少し休憩をとって約束通り電波化し、コダマタウンでウイルスバスティングを行った。

……今日1日でかなり戦闘に慣れた気がする……そういえば、さつき家で小休止中にロックが何か言おうとしていたけど、あれはなんだったんだろう……

「もう夕方か……」

まさかぶつ通しでウイルスバスティングをやる羽目になるとは。

……これ明日筋肉痛になったりしないといいなあ……

ウエーブホールが公園にあるから電波変換するのも、ウエーブアウトするのも一苦労だよ……やつと家に着きそうだ。

……まずはシャワーを浴びて少し眠「お待ちなさいっ！」

……なんだっ!?

こ、この声は……まさか……やつぱりあの3人組だ……うわあ、委員長さんめっちゃ怒ってる……怒りを表すように金髪のドリルヘアーが高速回転しているように見えるのは錯覚なのか、委員長さんの怒りオーラがついに可視化したのか……?どっちなんだ……

「アナタ……昨日も来なかったわねえ……! 一体いつになったら学校に来るのよ?」

うわあ、怖い……美人だからより一層怖い……っ

「ゴン太!」

ゴン太って確か将来的に電波変換体『オックス・ファイア』として共闘することになった……はず。あんまり悪印象は良くないかな?



「オイ、オレたちがわざわざ来てやってるっていうのに、だまつてないでなんかしゃべりやがれ！」

「……………」

…どう反応すればいいんだ？ボクが学校に行つてないのは大切な人を失うのが怖いからつてことになってるけど、別にボクはスバル君ではないからそんなの一人気にしてはいない。だけどあかねさんは、その理由でボクが人と関わりたくないと思つてるだろうし……やつぱり、まずは家での態度から変えていこうかな？

「うるせえヤツだな、コイツ……こんなヤツに好き放題言わせておいていいのかよ？」  
業を煮やしたロックがボクにだけ聞こえる程度の音量で話しかけてくる。

流石にボクは空中と会話する人認定はされたくないよ、ロック……

「(いいんだ、言わせておけば……学校に行くことになつたらウイルスバスターも中々出来なくなるし、宇宙的に面白いモノもないよ)」

「(なんだよ、学校つてつまんねえトコなのか)」

「(つまらないとも言い切れないけど、ボクたちは動き辛くなるし、FM星人に追われてる今、あまり得策じゃあないね)」

「デメエ、さつきから聞いてるのか!？」

「……………何？ああ、ごめんね」

ロックと静かにしゃべっていたのが無視されているように感じたのか……ヤベツ、凄  
い嫌なヤツじゃん……

「このっ……テメエ！」

ボクの対応に激情したゴン太君が興奮し、拳を振り上げる。ゴン太君の手綱を普段  
しっかり握ってる委員長さんはやっぱりカリスマもってるよな……って本当に殴るつ  
もりなのかつ?! ヤバい、今までの戦闘で着いた癖がっ……

「うわあっ！」

殴りかかってくる右手に手を添え、右方向に体ごとながす。

勢いを持ったままぶつかると対象を失った腕の慣性に引つ張られ、足元の覚束なくなっ  
たゴン太君の右足が地を離れた瞬間に体を支えている左足を刈る……

すると支えを失った体は重力に引かれ、吸い込まれるように地面に顔面をぶつけて伸  
びてしまった……

「ゴン太！」

「ゴン太君！」

……やってしまった……

「や、やっちゃった……ゴメン！ 誘いに来てくれたのに……」

「(スゲー鮮やかだったけど、ちよつとやりすぎじゃねえか……?)」

ヤバい、ヤバいぞ……元がどんな展開だったか覚えていないが、明らかに悪化している」と断言できる……！

「ホントゴメン！今日はもう家に帰るから！今度ゴン太君にちゃんと謝るから！」  
焦って逃げるように家に入り、溜め息をつく。やってしまった……

——30分後・展望台ベンチ付近——

白金ルナ、最小院キザマロ、牛島ゴン太は星河スバルの不登校を解消する勧誘に失敗し、反省会を開いていた。

「ゴン太！アナタのその体は見かけ倒しなの！？あんなコに一発でやられちゃうなんてだらしないわ！」

「め、めんぼくない……でもさっきのは結構マジだったんだ。あのモヤシ、何か格闘技でもやってるんじゃないかな……？」

「ふん、黙りなさい！アナタなんてワタシとのブラザーバンドがなかったらただの力自慢のバカなのよ！次あんな醜態をさらしたら、アナタとのブラザーバンドを切るかもしれないわ！」

「そ、そんな……」

「そこで頭を冷やしなさい……行くわよ、キザマロ！」

「ハ、ハイ！」

3人組のリーダーである白金ルナは牛島ゴン太をおいて行ってしまふ。残されたゴン太は……

「ケンカだけしかとりえないオレが、あんなモヤシヤロウにやられちまうなんて……このまま委員長にひつようとされなくなってしまうたら……みんなに嫌われて一人ぼっちだったあの頃にもどっちまう……あんなコドクなおもいは……もうイヤだ……」

…ブルルツ！感じるぜ…孤独の周波数…

——展望台——

「ヒッ・バ、バケモノ……!!」

夕暮れに一人、展望台では白金ルナに反省を促され、孤独に恐怖する少年がいた。

少年——牛島ゴン太は、乱暴で嫌われものだった自分に手を差しのべてくれた白金ルナに大きな恩を感じている。

そんな少年が、いくら興奮して、本気で言ったわけではないとはいえ、恩人との繋がりが断たれるかもしれないという現実、何よりも恐れていることだったと、少年自身がよく理解していた。

「もしかして幽霊か何かか……うわあっ！こっちに来るなッ！」

「オレ様は幽霊じゃねえ！……とにかく、落ち着いてオレ様の話を聞け、牛島ゴン太……」

「オレの名前を……？」

「ブルルルツ!! オレ様はオックス……FMプラネットから来たFM星人だ。お前の孤独の周波数に引き付けられて、やって来た……」

「ゴドクのしゅうはすう……?」

この少年、孤独に関しては理解があるが、基本的に残念な頭なので周波数についての知識はなかった。

「……ゴン太、お前には素質がある……。お前の心のスキマにオレ様を受け入れれば力を与えてやる……。委員長とやらに力を示してやれば、お前も居場所を無くすことはなくなるはずだ」

「力を示す……。? それにFMせいじん……。星人!? 宇宙人なのか!」

「そんなことはどうでもいい、どうなんだ? 力を受け入れるのか? あの委員長にチカラを示すことが出来るぞ……。?」

「力を示すつたつて、そんなこと、どうすれば……」

「ブルルルツ!! 心配するな、お前はオレ様に全てを委ねればいい……。さあ、オレ様を受け入れろ!! それともまた孤独な生活に戻るか!」

少年は自分が頭の悪い人間だと理解している。

かつての自分がケンカだけを取り柄としていたとしても、それを活用する機会さえ見誤らなければ、少なくとも荒事を任せられる……。という立ち位置は確保できていたであろう。

もちろん、無闇に暴力は奮わないという前提はあるが。

これは委員長の受け売りであったため、少年は自分の頭の悪さに、より一層辟易することになったが解決策を見出だしてくれた委員長には感謝している。

そんな少年が大恩ある白金ルナとのブラザーバンドを切られるということは、過去の再来を意味していて……………

「……………コドクは、イヤだ」

——とある事件を引き起こすことになる。

——星河家——

「やっちゃった……………わざわざ誘いに来てくれた人にボクはケガをさせたかもしれないんだ……………」

「ちとやり過ぎだったかもしれないが、究極的には降りかかる火の粉を払っただけだろ？ オマエも迷惑していたんじゃないのか……………」

「いや、でもあれはちよつと……………足が滑ったじやすまないよ……………」

「そうだな、あのでっかいヤツの足が滑って転けてやがったぜ！」

ガハハハ、と笑うウォーロックに眉をひそめつつ、ボクは改めて後悔していた……………。

「やめてよホントに……………」

「自分の身は自分で守らなくちゃ、誰も守ってはくれない。……オレの育ったFMプラネットではそう習ったぜ？」

ああ、だからFM星人って自我が強いヤツが多いんだね……まあロックはFMプラネットにいたころからケンカっぱやかっただけ。

よくロックをボコボコにしてたっていうコーヴァスとヴァルゴはもう地球に来てるのかな……？

彼らも追われる身だから、わざわざロックを追ってきたりはしないはずだけど……

「ああ……うん、もういいよロック。あの子には今度謝らなくちゃ……」

なんかもう、今日はドツと疲れたよ……シャワー浴びて早く寝よう……

——次の日——

何か忘れているような気がする……何だっけ？

……まあ、いいか。さて、二日後の夕方まで時間はある。

その前にオックスを倒してもきつとゴン太自身の件は解決しないだろうし……

「おはよう、ロック」

「おう、ところで今日はどうするんだ？」

「うん、今日は夜からとある倉庫に忍び込もうと思うんだ」

「……………何かワリいことでもするのか？目立つなら止めるぞ……………」



いや、うん。わかるよ、ボクだつていきなり相棒に犯罪の片棒を担げつて言われたら疑うし……

「うーん、僕たちつてまだ電波体になれるようになって3日目なんだけどさ……パワーアップつて興味ない？ ロック」

「何、パワーアップだと？」

おお、興味持ったかな？ まあ、（狂）戦士だからねえ……

「そうだよ、FMプラネットから来たFM星人つて凄く強いんだろ？ なら手札を増やしておいて損はないと思うんだけど……FMプラネットにいた頃のロックの力は知られているだろうし、向こうも対策してくる可能性はあると思うよ」

そういうえば、何でゲームでは追つてきたFM星人はロック対策をしなかったんだろう……？ 舐めてたのかな？ ソロなんて、クソうざい電波障壁（笑）

「……当てはあるのか？ 電波体であるオレをこの地球の技術で弄つたりできるとは思わないがな」

「そうだね……現在では出回つてないモノだから、ボクたちの強化に使用しても問題ないはずさ……それに、どうなるかは見てみないとわからない」

何せ古代の技術で製作されたオーパーツなんだから。

「フン……場所はわかっているのか？」

「うん、M県S市の発掘品用の倉庫に眠ってるってことまではわかってる」

「移動手段は？」

「今の時代、移動用のバスにだって電子機器は使われている。だからM県S市行きの長距離バスの電腦に入って、現地入りしたあとは、ウェーブロードを伝って倉庫に忍び込もう」

「この時期のサテラポリスには電波体が不正にアクセスしてきても、その姿を映像で出すことは出来ないはず……！」

「ただ、準備が必要なんだけど……ロック、電波変換時に体全体を覆うフード付きのロボは用意できるかい？」

「ああ、ある程度なら融合体の意向に沿ったカタチに変身できるからな……ローブ程度なら可能だと思うぜ」

「……よし、これで万が一見つかったってもウェーブアウトするまで正体を隠すことができる。」

「なら大丈夫……しつかりごはん食べてからいくよ……長丁場になるかもしれないからね」

1120:0011

『それでは、M県行きの当長距離バスは発車いたしまゝす』

電波技術の進歩の賜物か、いやにリアルな人工音声が車内に響く。それはバスの電腦に忍び込んだボクたちにもはつきり聞こえている……

「ところで、スバル。勝手にバスの電腦に忍び込んで大丈夫なのか」

ロックから慎重な発言を聞くことになるとは思ってなかったよ……

「大丈夫だよ、ロック。昨日の自動車の電腦にいたデンパを見たでしょ？あのデンパは何か良くないものが電腦に入ってきたことを認識していたけど、その形状なんかはわかっている様子だった。つまり、ボクたちがしつかり隠れていれば見つかりっこないし、逆にこの電腦内でボクたちを見つけたウイルスをこっそり倒していれば、リザルトデータからこの電腦のウイルス退治するために依頼されたって言い訳が立つしね」

…あとはアドリブでなんとかなるでしょ……！

「そこまで考えているならオレから文句はないぜ」

113時間後

『目的地に到着しました、お気をつけてお降りください』

やっとなつた……帰りはウェーブアウト一発で帰れるとはいえ、中々退屈な時間だったね……

「倉庫の場所は調べてあるから……つと、こっちだね」

「なんか今日のスバルは頼りになるぜ！まだ出会って3日目だがな！」

「はいはい、この先一キロだから、もう少しだよ」

「……！(この気配は……イヤ予感がするぜ)」

——M県S市とある倉庫周辺のウエーブロード——

「……着いたよ、ここがその倉庫だ」

「……(やはりこの気配は……)」

……さつきからロックが喋らない……どうかしたのかな？

「それじゃあ内部のウエーブロードへ……ロック、準備はいい？」

「ああ、だが気を付けろよ……何がいるかわかったもんじゃねえからな」

それじゃ、GO！とつとと終わらせようか……

——倉庫内部のウエーブロード——

……なんか、いるんですけどオ……!?!?

「(ロック！何かデツカイ狼みたいなヤツがいるんだけど!?!)」

……あれってもしかして……？植木職人じゃなかったの!?!何でココにあの電波体がいるんだよ……!?!

「……ああ、アレは多分、FM星人に取り憑かれた人間だ、しかしアイツはそんなことするヤツだったか……?）」

……うわっ、こつちに気づいた!

「怪しいヤツめ……!今日は満月、俺の血が騒いでしょうがねえと思ってたところに、いい獲物が来たじゃねえか……コイツはぶつ倒してもいいヤツだよなあ、ウルフ?」

「そうだな、だがこの周波数……コイツも電波人間だ。今までのウイルスとは格が違うからな……本気でやれよ、尾上」

「ソコんところは気にしなくていいぜえ……ヒヤハアツ!」

うわあつこつち来る!?ま、まずはシールドを……

ーガキン!

……凄いや威力だツ!クソつ、こんなはずじゃあ……ローブを被っているからあまり激しくは動けない。今回は撤退すべきか……?」

「おい、やめろウルフ!」

……ロック?ああ、ウルフとは知り合いだったっけ……

「オレだ、ロック……ウオーロックだよ!」

「何……やはりこの気配、ウオーロックだったか」

「なんだウルフ、知り合いか……?チツ!やっとオレの攻撃に反応出来たヤツに会えた

「思ったのによお……」

「本当か……?」

「オイ、スバル!ローブを外せ!」

…渋々ローブを外す……いや、デカイ狼が怖かったからじゃないよ? 本当だよ?

「……なるほど、オマエも電波人間となっていたのか……だが、どういうことだ? ここは全面アクセス禁止エリアだぞ?」

「目的はオレのパワーアップらしいが……詳しいことはスバルに聞けよ。俺は今回付いてきただけなんだ」

丸投げ?! いや、確かにその通りだけどさあ……

「えっと、話してもいいんですけど、アナタは何故このエリアにいるんですか?」

この人も普通にアウトな場所にいたんだよなあ……

「アア? 俺は本職は植木職人だが、自作のバトルナビを持つてることにしてるからな。今回は仕事で倉庫内部のウィルス退治をしてたんだよ」

…ああ、なるほど。そういうやり方もあるのか。

「そうですか、疑ってすみません……実を言うと、ボクたちはこの倉庫に安置されているオーパーツを見に来たんですけど……その、バレないと思って。すいません」

「まあ、仕事だからな……で、そのオーパーツを盗もうつてか?」

「いえ、違います！電波体の姿で触れるだけでいいんですけど……」

「何か盗っていくつてわけじゃないんだな？……ならいいぜ。俺が案内してやるよ……  
ウルフのダチらしいからな……信用できる」

「尾上……」

ウルフの感動が伝わってくるようだ……

「それじゃあ、お願いし「だが待ちな」ます。つてええ……」

「ウルフのダチのウオーロックつつったか？ソイツは信用できるがな、オマエはまだわからねえ」

「……どうすればいいんですか？」

……この流れは、マズイ気がする……

「簡単だアツ！俺とバトルしてもらおうぜ！」

戦闘民族かよおつ！満月に反応するし……

「ちなみに断つたら……」

「そりゃあ、お縄を頂戴させてもらうしかねえな」

うわあ……ボクが悪いのはわかるけどダチが悪いよ……

「……わかりました。お受けします。……ここでやるんですか？」

今ボクたちは倉庫のウェーブロード上、電腦世界にあつた50メートル×50メートル

ルと同じ程度の正方形のパネルの上にいる。

「ちつと狭い気もするが、まあ十分だろうよ」

「うう……では、いきますよ……！」

「おうよ！ 思いつきり戦おうぜえっ！ すっかり高ぶっちゃまったからな……俺の血を静めてくれえっ!!」

「勝つよロック！ ウェーブバトル、ライドオン！」

まさか最初に敵対するFM星人憑きの電波人間がウルフ・フォレストだとは思わなかったよ……



ー倉庫内部のウエーブローダー

……っ！突進し、切り裂くことに長けているであろう巨爪を降り下ろしてくるウルフ・フォレストに対し、体を捻って斜に構え、右に受け流すようにシールドを展開する。ウルフ・フォレストのクローは貫通力が高いようには見えないのでやり過ぎせるはず……クソっ！流しているはずなのに一撃が重い！

「オイオイ、ウォーロックと融合してるとのにパワーが足りてねえんじやねえのかあ!?」

…電波人間の特性は融合している電波体の影響を色濃く受けるけど、構成した体の強度に関してはその限りじゃない!……はずなのに何でこんなにデカイんだ……!? パワーがダンチだよっ!

「そんなことっ……ロックマンの特性はパワーなんかじゃない、汎用性だ!」

…そう、汎用性なんだ……あとは適応力。どんなヤバい力でも暴走しないとか、適応力高すぎるよね……ホント。

「ケッ!だがそんなんじやあ、足りないぜ……オレの気を静めるにはなアツ!!」

辛くも受け流しに成功し、そのままシールドを展開したまま体ごと右に回転する。爪を振り切った姿勢で慣性に従い、右に流れていった巨狼はそのまま無防備な背中を晒すことになる……ガラ空きなんだよッ！シールドを展開するため、右胸の上で構えていた左腕にロングソードを展開し、袈裟に斬り掛かる……上半身の装甲が思ったより厚い、なら腰を狙えば！

「チイツ!! ッラァー！」

嘘だろ?! いやがんで接触点をずらしただつて?! しかもそのまま跳躍して空中で爪を振ってくる……マズイ、遠距離攻撃だ！ロングソードを解除してシールドを張らなきゃ……ダメだ！間に合わない！なら……！

「っ！うおおおおおっ！」

スイングした爪の軌道から発生した3つの斬撃を、振り切った左腕に展開しているロングソードを返す刀の要領で振るい、斬り捨てる！なんとか間に合った……

「いいねえいいねえ！いいじゃねえかよオ!!」

「死ぬかと思いましたがよ！」

「ケケツ！感謝しろよオ!!? ちゃあんとHPは残してやるつてんだからなア……！」

いい大人が感情の制御も出来ずに暴れるなんてっ！

「そんなに大きな力を持つてるのに、制御出来てないじゃないですかッ！暴れるだけの

力に屈するなんて……認められるかあつ！」

「デメエの許可がいるのかよオツ!!」

「デカイ上に早い。……しかもパワーもある……装甲だって分厚いんだ。間接部や腰にヒットさせないと、怯みすらしない……！」

「うおおッ！」

左右に跳躍しながら近づいてくるウルフ・フォレストに向かってキャノンを連発するが、当たらない!

ちようど視界のカスタムゲージが貯まったことを確認して素早くカードを選択する……マズイ、もうこんな距離まで……ッ!?

「ハハハアツ!!オラアツ！」

牽制のためのキャノンを選択したと予測し、展開から発砲までにタイムラグのあるキャノンに先んじようと再び爪を振り上げ切り裂きにかかってくる……

「クツ……これなら！」

パワーボムを発動し右手で正面に放り投げると同時に左手でシールドを展開しながらバックステップで跳躍する……!

ウルフ・フォレストには及ばないが、ロックマンだって、人間に比べれば基礎スペックは十分に高い!

更にパワーボムの爆風も利用し、距離を稼ぐ……これで仕切り直しには持つてこれた！さあ、ここからだよ！ロック！

「グルアアツ!!小細工をしやがって……切り裂かせるオツ!!」

こちらを牽制に遠距離に届く爪の斬撃を振るうため、腕を振りかぶる……今だ!

「ロック!」

「おうよツ!!いつくぜええええツ!!」

即座にロックオンカーソルを合わせ、ウオーロックアタックを発動!ウルフ・フォレストの目前に躍り出る……!

「バカか、テメエはアツ!?こつちのほうが早いってのに突っ込んで来やがってエツ!!」

「ロック!もう一度だ!」

「ああ、わかってる!いくぜオラアツ!!」

目前に迫ったウルフ・フォレストの爪に向かって一瞬だけ突進する……!この突進でわずかだけ推進力を得たボクが展開するのは……

「ツ!!ヒートアツパーアツ!!」

そうさ!この倉庫に来るために乗ってきたバスにいたウイルスから、リザルトで手に入れたバトルカードだツ!

振り切る前の腕にヒートアツパーをヒットさせ弾き飛ばす……!バランスの取れな

くなつた身体は腕に引つ張られて倒れる……ボクは、ヒートアツパーをヒットさせたために殺された勢いのままウエーブロードに着地、素早くロングソードを選択して短く跳躍し、倒れたウルフ・フォレストの胸の装甲を片足で抑え、首の横にロングソードを展開する……

「まだ、やります?」

「グルア……もういい、結構だ。大分落ち着いてきたからな……」

「……ふう」

……危なかつたアー! 尾上さん普通に強いんですけど!

「オイ、スバル! 今の凄かつたぜ! まさか連続でウオーロックアタックをやるとはなあ!」

ガツハツハと笑うウオーロックに君のおかげだよ……なんて言う気力もない位疲れた……今日はもう帰ろうかなあ……

「よオつし! 約束だからな、オマエを認めてやる! ついてきな!」

「は、はい!」

やっぱり落ち着いてないんじゃないの……?」

——倉庫内部のウエーブロード・最深处——

「ここが……オーパーツが安置してある場所……」

「ロック、これは……」

「ああ、ピリピリするような電波が漂ってくるぜ……こんなのは初めてだ……!」

ウェーブロード上を歩きながらロックと確認するが、やっぱりこの感じは錯覚ではないらしい。つと、見えてきた。アレが、オーパーツ……

「なんか……剣みたいなカタチだぜ」

「そうだね……それじゃあ、行くよ、ロック」

「おう!任せときな!どんなヤツが出てきてもブツ倒してやるぜ!」

まあ、ある意味出てくるんですけどね……精神世界に……

「段取りは決まったようだな。それじゃあオレたちはここで見てるから好きにしろ……」

さて、行きますか……鬼が出るか、蛇が出るか……それとも幸運の女神とくるか……いざ、大勝負!

「触るよ……うっ!」

身体中がオーパーツの発している電波のオーラに包まれる……これは、頭の中に何か流れこんでくる……!?

「おい、スバル!どうした!」

大丈夫、すぐ戻ってくるさ……

ー スバルの精神世界ー

「ここが、精神世界……一面真っ白な世界のなかでボクだけが立っている……電波人間の姿で来れたのはラツキーかな？」

「オイ、スバル！ここは……何だ」

「ここは多分、ボクの精神世界……何も無いのは多分これから大勢現れるからさ……」

「……何かが噴出する音と同時に、人のカタチをした金色のオーラが多数現れた。多分これが、ベルセルクの意志……彼らが滅んでから、気の遠くなるような年月が経っているはずなのにそのオーラには微塵の弱々しさもない……これが、ベルセルク……」

「キサマ、ワレラ                    ガ                    チカラ                    ノ                    ショウチヨウ                    ニ                    サワツタナ？」

「ええ、あなたたちにチカラを貸して頂きたくて、来ました」

「スバル！そんなまどろっこしいことしないで、ブツ倒そうぜ！そうすりや解決だろ！」  
ウオーロツクも戦闘民族だった件について……

「(ちよつと黙っててよロツク！)」

「キサマラ                    ハ                    チカラ                    ヲ                    ホツシテ                    ココ                    ニ                    キタノカ……」

「はい、どうかあなたたちのチカラを貸して頂くことは出来ませんか？」

「ダメダ」

「どうしてなのか、教えてもらってもいいですか？」

「カンタン　ダ。キサマ　ノ　カラダ　ヲ　ウバツテ　ワレラ

ノ　フツコウ　ヲ　トゲル　カラ　ダ」

「やっぱりこうきたか……！でもそれに対する反論は用意出来る！」

「種族の復興があなたたちの望みですか？」

「アア　ソウダ」

「しかし、今この地球には大きな危機が訪れています。ボクと融合しているウォーロツクの故郷、FMプラネットの魔の手が迫ってきているんです」

「オイ、スバル。それは……」

「本当のコトだろ？」

「彼らは地球の外でも活動が可能であり、地球に危害を為そうとしています……最悪、この星を破壊しに来るかもしれません」

「ホウ、ドウヤラ　ウソ　ヲ　ツイテイル　ワケデハ　ナサソウ

ダナ」

「はい、なので地球への危害を防ぐために、そのチカラを貸して欲しいんです……あなたたちだって、自分以外の生物に好き勝手されるのは嫌でしょう？」



「(ス、スバルが黒いぜ……!)」

「ソウイウ　　コトナラ　　テヲ　　カシテヤル」

よしっ!

「ありがとうございます!」

「フン! FMプラネット　　トヤラ　　ヲ　　オイカエスマデ　　ダ……テヲ

ダスガイイ」

「はい、では……チカラが流れてくる……」

これは凄いぞ!

「キサマ　　ノ　　トランサー　　トヤラ　　ニ　　アル　　カラ

ノ　　カード　　ニ　　チカラ　　ヲ　　ヤドシタ。コレ

デ　　イイダロウ?」

よし、ベルセルクのカゲツトだ……最悪乗っ取られることも覚悟してたからなあ……

この体で追返してやる! ってね……ならなくてよかったけど。

「はい、ありがとうございます!」

「キニスル　　コトハ　　ナイ。　　サラバダ……」

――倉庫内部のウェーブロード・最深部――

「……………ハアツ、フウ……」

「ここは……ウエーブロード……？ああ、さつきまで精神世界にいたんだっけ……」

「オイ、スバル！ウオーロック！大丈夫か!？」

ウルフ・フォレスト、もとい尾上さんが声をかけてくる。結構心配させてしまったみたいだ。

「すいません、もう大丈夫です」

「ああ、そうか。流石に今日あつたばかりのヤツが死んじまったら寝覚めが悪いもんな……ところで、どうだったんだ？」

「ええ、成功です……ホラ、これがベルセルクのカード。これを読み込ませると……」

目を閉じ、体が一瞬稲妻に包まれるのを自覚しながら古の戦士のチカラを纏うイメージをする……ゆつくり目を開けるが、瞬き程度の一瞬で変身できることは既に実感として理解できていた……

「コレが、オーパーツのチカラ……すげエな……」

「うん、成功だ……どう？ロック。何か体に不調は？」

「いや、全くねエぜ。……チカラがカラダから溢れてくるのがわかる……とんでもねえシロモノだったな、オーパーツってのは……!」

こんなのがずっと昔にあったっていうんだから、この世界の地球ってわからないよね……

「さあ、帰ろうロック。……ウルフさんと、えっと……」

「尾上だ。尾上十郎、本業は植木職人だからな……いつか出会うかもしれねえぜ」

「アハハ、そうですね……」

「これはフラグですねえ……」

「では、尾上さん。今日はありがとうございました！」

「おう、あんまり悪さするんじゃないぞーぞー！」

「もう懲りましたよ……」

「じゃあな、ロック！次は負けねえぜ！」

「へっ！また負かしてやるぜ、ウルフ！」

「では、さようなら！」

ウエーブアウト！……凄いい勢いでコダマタウンに向かって飛んでいくを感じる……

「今日は疲れたね、ロック。帰ったらすぐ寝ちやおうか」

「ああ、だがこういう疲れは大歓迎だぜ……地球で言うなら……勝利の美酒ってやつか

な？」

「アハハ！違うくない！」

ボクたちはまっすぐコダマタウンに戻れたんだけど……

「スバル！こんな時間までどうしたの!?!いつもの天体観測かと思ったら、いつまでも

帰って来ないし……母さん心配したのよ！」

ゲツ……ウエーブホールが近くの公園にあったの忘れてた………！

「ご、ごめんなさい！」

「ホントに心配したんだからね！」

「は、はぁーい」

「(今回はスバルが悪いぜ)」

「(うう……わかってるよ……)」

母さんの怒りはこの星河スバル、唯一の誤算であつた！南無三！

三日後の夕方……

『次のニュースです。今日未明、コダマタウンのポストが破壊されているのが発見されました。このところ、コダマタウン周辺では、真つ赤な自動車、バラが植えられた花壇、レンガでつくられた倉庫など、無差別に破壊事件が起こっており、サテラポリスは今回のポストが壊された事件と、他の事件との関連を調べています』

「無差別破壊事件、ね」

倉庫と自動車以外は電波人間が暴れているには被害小さくない？赤ばっかりつて、完全に牛じゃないか……

「何か気になることがあるのか、スバル？」

「いや、完全に牛じゃないか！」

「ああ、だから少し気になるぜ……」

やっときたのか……おせーよオックス。

だが不登校児に3日も時間を与えたのは失敗だったな。こちらの戦闘準備は万端だ……！

ーコダマタウン・夜ー

「それじゃあ、母さん。行つてきます」

「いつてらつしやい。……遅くまで星を見てるなら、風邪引かない格好していきなさいね」

今回は、事前に帰ってくるのが遅くなると伝えてある。同じ失敗は繰り返さない、それもあかねさんを安心させるためなら尚更だ。

「さて、ロック、外に出たわけだけど……」

「ああ、今日はどこに忍び込むんだ？」

ロックからの（犯罪者としての）信頼が厚くて辛い……

「違つて！夕方のニュース、見たでしょ？」

「ああ、無差別破壊事件だろ？」

「ボクはロックがFM星人の仕業だつて気づいたんだと思つてただけど……」

「ああ、確かに怪しいとは思つていたが……」

「FMプラネットの住人に思い当たりはないの？」

「あるにはあるが、そこまで赤に執着するやつじゃなかったぞ」

「ふーん、そうなんだ」

「そうなんだって……オマエな……」

「まずは展望台に行こうよ……何が起こりそうだ」

実際、間違いじゃないからね。しようがないね。

ーココダマタウン・展望台ー

「オマエの物騒な発言に早くも慣れてきたオレがいるぜ」

アレ？ゲームと立場逆じゃない？

…ま、まあ、ボクはボクだ。気にしてもしようがない。但し母さんの前以外ではね！

「あら、こんな時間に一人でブツブツ言っつて、何してるのかしら？」

あ、この声は……

「……………こんな時間に天体観測なんて、風邪引いても文句言えないわよ？」

委員長さんにキザマロ……………！4月の夜風は堪えるのか、二人とも寒さに少し顔をしかめている。

「……………何よ。何か言いたげね？」

「いや、委員長さんのほうが風邪引きそうな格好してるじゃないか。……………大丈夫か  
なっつて」

心配する姿勢を見せることで警戒心を薄められればいいんだけど。それにゴン太がいなくてことはもう……

「(おい、あのデカイやつがいねえぞ)」

「(わかってるよ)」

「よ、余計なお世話よ！アナタこそ、こんな時間に一人でココソコして……もしかして、器物損壊事件の犯人なんじゃないの？」

……そんなわけねーじゃん。

「……それは」

「ホラ、なんとか言いなさい！」

「ボクはやってないよ」

「まあ、そうよね……アナタみたいなコがあんな事件を起こせるわけなさそうだし」

「ボクは、この事件がまだ解決していないことのほうが不思議なんだけどね」

「どういうことよ？」

「いや、だっていくらコダマタウンに普段から監視カメラの類いが設置されていないとはいえ、連続事件として認知されているんだ。小規模でも警察が解決のためのチームを動かしているはず……なのに全く解決の手がかりが見つかからないってことは……」

実際どうなっていたんだろう？三日前からとはいえ、倉庫や自動車まで破壊されてい



たら、普通に動きそうなんだけどな……………

「見つからないってことは……………？」

ゴクリ、と委員長さんとキザマロが唾を飲み込み、聞き入る音が聞こえた気がした。

……………こういう時のノリの良さは嫌いじゃないよ。

「きつと何が起こっているのか解ってないんだ」

「そんなの当たり前じゃない！そうニユースでやっていたんだから！」

「そうじゃなくて、何が起きたのか、観測する手段がないってことだよ」

まあ、電波体ありきの仮説だけだね。

「ああ、そう……………なるほどね」

「(委員長が感心するとは、星河スバル……………やりますね……………！)」

「聞こえているわよ……………キザマロ！」

「ハ、ハイイツ！」

「ああ、そうだ。前に足払いしてしまったゴン太君は大丈夫だった？謝りたかったんだけど……………」

「ゴン太ならどうってことないわよ？……………今は見回りに使うクルマを調達しにいつてるわ」

小学生が見回りにクルマを使う時代だったとは……………

そういえば、2でマテリアルウェーブのクルマ運転してたっけ。……この世界技術進歩早すぎじゃね？

「そっか、なら良かった。……でも謝っておきたいから……ところで見回りって？」

「さつきも言ったけど、この町で起こってる器物損壊事件の犯人を探しているのよ。……ワタシが住む町は、ワタシが守るのよ！完全に人任せには、出来ないわ」

「流石委員長……素晴らしい正義感の持ち主です！必ず僕たちで犯人を見つけましょう！」

「どうしてもっていうなら、アナタも混ぜてあげてもいいわよ？」

「せっかくだけど、まだボクは勇気を持ってないんだ……今は遠慮させてもらおうよ……」

断り方は凄く悩んだけど結局事情を知らない人には何を言ってるのかわからない断り文句だよね……

「ああ、そう！あんまり遅くまでウロチョロしてて事件に巻き込まれても知らないわよ！」

ぶつきらばうだけどちゃんと心配してくれているのが伝わってくる。……うーん惚れそう……

「それといい加減学校に来なさいよね！……行くわよキザマロ！」

「ハイッ！」

学校への催促をして委員長さんたちは行ってしまった……あれ？追ったほうがいいんだっけ？

「オイ、何も起きなかったぞ」

「まあまあ、これからさ……少し散歩でもしにいこう」

「もう既に散歩みたいなこととしてねえか？」

いいじゃないか。気分だよ、気分。

——コダマタウン・夜——

「アン？何か道路に止まってるぜ」

「これは……トラックだね。運転手は……つて、あ」

あれ？ゴン太が乗ってる……？

「あら、また会ったわね。……どう？中々立派なトラックでしょ？……どうしてもつていうなら、乗せてあげてもいいわよ？」

何かテンションが高い。深夜テンションかな？（自虐）

「遠慮しとくよ。それにもう座る場所ないじゃないか。……つと、それより」

三人並んでいる中のゴン太君の前に立ち、はつきりと目をあわせる。

「この間はゴメン！ケガとかしなかった……？」

「平気って言ってるのに……ワタシの誘いをまたもや断るなんて、いい度胸してるじゃ

ない……あのコが手強いのはわかったわ。でも、覚えておきなさい！そのうち学校に引つ張り出してやるからね」

「委員長、そろそろ時間です」

「ええ、わかってるわ。それじゃあ、スバル君。あんまりウロチヨロしないで帰るのよ！」

「わざわざ心配してくれてありがとう！じゃあボクは帰るから……おやすみなさい」

「し、心配なんてしてないから……早く帰っちゃいなさい！」

うがーっ！つと興奮する委員長さんに手をふつて別れる。なぜかもつと憤慨したように見えたけど、何でだろ？

「（そりゃ、この状況で手を振りながら笑ってたら、煽ってるようにしか見えないからな……）」

「（どうしたの？そんな神妙そうな顔をして……）」

まあ、いいか。家に帰ったっていうポーズはとったわけだし。

ーコダメタウン・トラック前ー

「どうしたゴン太……あのときの恨みを晴らす時じゃないのか？オマエに恥をかかせたヤツを、痛い目にあわせて委員長に、オマエのチカラを見せつけてやるんだ……！」

「オ、オレのチカラを……見せる……」

「そうだ……お前の望みを解放しろ……」

「ードクン！」

「ウ、ウグウ……」

「ちよつとゴン太、何してるのよ……早く運転しなさい！」

「ウ、ウゴウ……」

「もつと、もつとだ！もつと気持ちを高ぶらせろ!!」

「ウ、ウガアアアツ!!!」

「ちよつと、ゴン太?………つて、え?………キヤーツ!!」

「ブルルルオオオオツ!!」

「か、か、怪物!」

電波変換し、電波体となったオックス・ファイアは、委員長とキザマロの乗っているトラックの電腦にウエーブインし、二人の前から姿を消した。

「き、きえた………?」

「な、何?!何が起こってるの!?!」

ここで白金ルナは、自分の同世代と比べて優れていると自覚している頭脳で何が起こっているかを考えてみる………

「赤い怪物……私たちの前から消えたあの現象……それにさつきスバル君が言っていた

観測できていないんじゃないかという言葉……………」

このとき、白金ルナの頭に稲妻にも似た閃きが走り、1つの真実にたどり着く……………それは、

「ま、まさか…………。ゴン太が…………器物損壊事件の、犯人…………？」

間違っていて欲しいと必死に思い込むが、次々にゴン太が犯人であるという証拠が頭の中をよぎっていく…………

「ワタシたちが犯人や、犯行を目撃出来なかったのは、犯人であるゴン太がワタシたちと一緒に行動していたから…………人前であんな目立つ変身は出来ないし、途中で抜け出して事件が起きたら、ワタシたちに怪しまれるわ…………つまりゴン太はワタシたちの捜索が終わってから悠々と犯行に及ぶことが出来ていた。…………捜索する側の人間であることで、対外的にも疑惑の目は向きづらくなる。…………そう、そういうことだったのね……………」

そこまで思い至ったところで、乗っているクルマのエンジンが一人でにかかっていることに気づく…………

「(マズイわ!) キザマロ、運転用のカード、勝手にいれてないわね!」

「ハ、ハ、ハ、ハイイ!」

「やっぱり…………これはマズイことになりそうね……………」

——コダマタウン・夜——

「結局、何も起こらなかったな……どうやらオマエの勘は頼りにならないらしいぜ」  
「まだわからないさ、ロック……それにちゃんとゴン太君には謝れたんだ。……十分だよ」

「ケツ！アイツから仕掛けてきたクセによ……！」

「はいはい、落ち着いてロック……っ！」

「ツ！何だ……？」

「………何か聞こえない？」

「アン？確かに……さっきのトラックか？随分荒い運転をしているようだがな」

「へえ、ロックって自動車の運転に一家言あるんだ……FMプラネットに自動車なんてあるの？」

「いや、オマエの親父から聞かされたんだよ。……近いな。早く帰ろうぜ」

「父さんから？そういえば父さんのことについて教えるって約束してたじゃないか。……このところ忙しくてすっかり忘れてたよ……」

「ああ、しようがねえな……ってさっきよりもトラックの音が近い……ッ！避けろスバル！」

「うわあっ！危ない…………！」

目の前に迫るさっきのトラックを歩道に逃げ込む形で回避する。……話に夢中で気づかなかった……!

「誘いを断ったからってここまでする!？」

あまり加速はしていないトラックの荷台にむかって叫ぶ!ゲームでは道路で逃げていたけど、流石に無謀すぎるからね……。

通りすぎたトラックの運転席辺りから委員長さんの声が聞こえてくる。

「あーあー、聞こえる!?!別にわざとやっているわけじゃないわ!ゴン太が突然牛みたいな怪物に変身して、アナタを追いかけ始めたの!……キザマロ!」

「ダメです!こっちの操作は全く受け付けません!」

「ロック!これは!?!」

「ああ……あのゴン太ってやつ、FM星人と融合して、電波体になったようだな」

「つまり今あのトラックを動かしているのは……!?!」

「FM星人にいいようにされてる、そのゴン太ってヤツだろうな」

さっきのトラックが無理やり反転してこっちに向かってくる!このまま家に帰ったら星河家が大惨事になっちやうじゃないか!

「ロック、こういう時は……」

「ああ!!察しがいいな……トラックの電腦にあのゴン太ってヤロウをぶちのめしに行こ



うぜー！」

「発言が物騒だよロック!?……………つて、うわあつ！また来た！」

建築物に当てたら、乗っている委員長さんやキザマロに危害が……………クソツ、逃げるしかないのか……………

「オイオイ、真っ直ぐ逃げたら追い付かれちゃうぜー！」

「大丈夫！まだ操作を始めてそんなに時間が経ってない……………スピードが遅いのはまだ電脳側からの操作が不慣れだから、だと思っ！」

「ああ、だがこのままじゃ……………早くウエーブホールを探せスバル！ビジライザーを掛けろー！」

「わかってる……………あつた！公園の芝生の上！行くよロック……………電波変換！星河スバル、オン・エア！」

ーコダマタウンのウエーブロード・夜ー

ふう、何とか逃れたか……………

「何とか逃げて来られたけど、どうやってトラックにウエーブインするの?……………もう早すぎてトラック自体にはウエーブイン出来ないよ……………」

「ああ、ならトラックのスピードを落とす方法を……………そういえばこの辺りに、路上駐車されたクルマが1台あつたよな……………よし、それを使ってあのトラックを足止めしてやる

ぞ」

「委員長さんたちは……!?!」

「知らん……が、最近の安全装置は優秀らしいぜ……多分大丈夫だろ」

「うう、今はそれしかないか……」

「決まりだな!行くぞ、自動車の電脳へ!」

ボクたちの夜は、まだ長くなりそうだ……

——自動車の電脳——

相変わらずな構造のエリア……エリアの足場とか構成って自分で弄れるものなのかな？今度試してみようかなあ……

「おい、スバル……急げよ！」

「わかってるから……ええっと、あった、コントロールパネルだ……ここを、こうして……」

うわあ、めんどくさい……意外と複雑になってる。……でもしよがないのかな？子供でもカード一つで操作できるらしい……安全を守るために複雑な構造になっっているのかも……つと、あった。アクセルプログラムとブレーキプログラム……これをちよいちよいとイジって……

「いくよ……アクセルプログラム、始動！」

クルマが動いたことで自動車の電脳にもその振動は微弱ながら伝わってくる……浅くアクセルプログラムをかけたからかな？

「……そして、ブレーキ！」

クルマが車道をふさいだことを、駐車位置訂正プログラムから読み取り、ブレーキをかける。

……これでは、あの暴走皆勤賞だけだ……！ウエーブアウト！

ーコダマタウンのウエーブロード・夜ー

「よし、ちゃんと道は塞いでる……後で持ち主から苦情とかこないよね？」

「ヘンなところで気にするヤツだな、オマエ」

いや……だって、かあさ、あかねさんに迷惑がかかるかもしれないじゃないか！もし、息子が自動車事故を起こした何て知ったらどんな顔するか……

「……母さんに迷惑はかけたくないんだ」

「オマエはそういうのあんまり気にしないヤツだと思っていたが……」

あかねさんは、この世界で唯一心から信頼できる人間なんだぞ！少なくとも、この体に宿ってる魂が、スバル君本来のモノであると思ってくれている内は……

「……来たね、覚悟は出来てる？……尾上さんの時とは違って、負けたらデリート……死んじやうかもしれないんだよ？」

「へっ！今のオレたちに負ける要素はねえよ……そのための二日間だろ！？さあ、いくぜ！」

「安全装置がちゃんとはたらくといいいんだけど……」

………来たッ！トラックだ……！ボクたちが動かしたクルマに真っ直ぐ突っ込んでくるぞっ！……無事で居てくれよ、二人とも……！！顔見知りか死ぬってのは、とつても後味が悪いんだ……ッ！

ーバキイツツツ!!……ガガガガッ！

トラックがクルマに衝突し、その馬力を活かしてクルマの車体を擦るように方向転換していく……今だ！

ーートトラックの電脳ーー

「この気配……やっぱりアイツだな……気を付けろよスバル。奥にはFM星人がいるぜ……しかも雑魚じゃねえ、れっきとしたFMプラネットの戦士だ」

「闘わないで、逃げてほしいの？」

まあ、違うだろうけどね。

「へっ！……体力を温存しておけよってことだよ！」

なんだか嬉しそうなのは気のせい……？どうしたんだろ。武者震いつてヤツかな？

「安心していいよ……何ならロックは寝ているかい？奥に着いたら起こしてあげるよ？」

……まあ快適とは言えないかもしれないけどね」

「冗談だろ？こんなシチュエーション、逃す手はないぜ！」

「そうだね……でも急ごう。いつ暴走して車道を外れるかわかったモンじゃない！」

「当然だー！」

……さて、と……さっさとこの先に進まなくちゃ……

……クソツッ！揺れるな……

「何だア？このウエーブロード、ロックがかかってやがる！」

「ふむ、レッドキーと、ブルーキー……あ、あのデンパが何か知ってるかも……ねえ君、そのセキユリティを突破するための『レッドキー』と『ブルーキー』の有りかを知らない？ボクたちはこのトラックを止めに来ただけ……」

「ビビビッ！コノサキニ、ボウソウシテイル      コントロールシステムヲ      ソウ

サスル      パネルノヒトツガ      アルノデスガ、ソコニ      タドリツクニハ

ソコニアル      ウシプログラムニ      ノツテイカナイト      イケマセン……」

聞き取りづらい！

「わかった！あのウシプログラムに乗ればいいんだね？」

「オイオイ、牛に乗ったことなんてあるのか？」

「ないけど、こういうときは思いっきりさ！取り敢えず乗って、あとは流れで乗りこなす

よ」

「スバル……」

ええ……なんでちよつと引いてるの……？

「ビビビツ！オキヲツケテ……イマハ システムノ イジヨウデ トンデ

モナク キョウボウニ ナツテマス……フリオトサレナイヨウニ、チュウイシ

テクダサイ」

だから聞き取りづらいって！

「よし、いくよ……よつ、と……」

どれどれ……見せてもらおうか……暴走した牛の乗り心地とやらを！……つて、うわあっ！暴れだしたっ！

「ブルルッ！」

「あわわわわっ……慣れてきたね」

「はえーよスバル」

ロツクの対応が塩だ……つて、あんまり長い距離じゃないのね……

「……よつ、と。さて、このウエーブロードの奥にあるのかな？……見えたよ、コントロールパネルだ。……自動車のコントロールパネルを簡略化した感じだね」

「よし、あとはコイツを操作すりゃあ……」

「そうだね……よし、いいよ」

暴走しているシステムをコントロールパネルを操作して正常に直す……あ、レッド

キーが出てきた。

「コレだね」

「ああ、つてことは……まだコレやらなきやならんのか……!」

「確かに、コレ操作してる間は、ウイルスも怖がつて近づいてこないもんねえ」

……実はまだ、この電腦ではウイルスに遭遇していないのだ、残念。周りの景色からして炎系のウイルスだと思っただけ……入り口に近いからかな? まあ、いいや……さっきのセキュリティに戻ろう。

『セキュリティ作動中……レッドキーを提示してください……レッドキーを確認しました……セキュリティを解除します』

開いたぞ……ぶっちゃけコレを繰り返すのはダルいなあ……ていうかセキュリティのほうがデンパくんよりカタコトじゃなかったんだけど、なんでだろう?

「さあ、次だ……ドンドン行こう」

「ウイルスが、来ねえーッ!」

『セキュリティ作動中……ブルーキーを提示してください……ブルーキーを確認しました……セキュリティを解除します』

よし、進めるぞ……つてまた牛イ? 今度はイエローキーかよ……もうヤケクソだ……

!



『セキユリテイ作動中……イエローキーを（以下略）』

今度こそ終わりだ……やつと次のエリアへ……

ーートラックの電腦2ー

ふう、もう少し……

「キヤーーーッ!!」

「この声は……委員長さん？ 電腦世界まで聞こえてくるなんて、凄い音量だね……」

「おいおい、アレを見ろ、スバル！ あいつら、電腦世界に入っちゃまってるぞ!!」

遠すぎてぼんやりとしか見えないな……

「ええ……大丈夫なの？」

ーートラックの電腦2・最深部ー

「ど、どこよココは……!? ……アナタ、ゴン太ね!? こんなトコロにワタシたちを連れ込ん

で、何をするつもりよ!？」

「ブルッ……ブルルルッ……あのスバルのヤローをぶっ飛ばすんだ！ オレの強さが見せかけじゃないってことをいいんちように見せてやるんだ……アイツ、どこに行きやがった!？」

「ち、ちよつと聞いているの!? 返事くらいしなさい!」

ーーブオンッ!

突如として、白金ルナと最小院キザマロの前に炎が噴出する。

現実感のない光景が目の前に広がっているが、吹き荒れる炎の熱さははっきりと感じられるため、この光景を信じざるを得ないだろうか……………

「ヒイツー！」

キザマロが悲鳴をあげるのも無理はない。今まさにその吹き荒れる炎が牛の前足までをかたどったような姿をした異形の怪物に変わったからだ。心なしか、今のゴン太に似ているような……………？

「ブルルツ!!いくら話しかけても無駄だぜ、そいつは今完全に入っちゃまってるからな！」  
「……………ツ！……………アナタ、誰よ!?アナタがゴン太をそんな姿にしたのね……………!?ゴン太を元に戻しなさい！ワタシのブラザーに、手を出すことは許さないわ！」

「ブルルツ！勘違いしてもらっては困るぜ……………確かにオレ様はコイツにチカラを与えたが、コイツがこうなったのも……………委員長、オマエのせいなんだぜ？」

「そ、そんなこと……………まさかあのとき、ブラザーを切るなんて言ったから……………」

「ブルルル……………まあ、何にせよあんまりキーキー騒がれちゃ堪らんからな……………暫く眠ってな！ブルルルツ！」

「キャアアアアッ！」

「ヒョエエエエッ！」

異形の怪物は気絶した二人を確認し、背後のゴン太を振り返る……

「ゴン太……とても焦っているように見えるが、その元々の原因がここに倒れてるつてのにスバルってヤツを優先するなんてな……よっぽど腹に据えかねていたんだらうぜ」

異形の怪物『オックス』はそう言いながらついでにウオーロツクの野郎が誘き寄せられれば良いのによ……つと期待をするが、流石にそれは虫が良すぎるだろう。……取り憑いた相手が起こした事件を、わざわざ解決しに来るような殊勝なヤツではないことをFMプラネット時代の言動から察していた。牛の本能である。

戦士といえども、その在り方はそれぞれで、オックスはあまり考えることが得意ではなかった。だからこそ、戦闘中に攻撃を食らっても怯まずにいられる精神力を手に入れることが出来たわけだが。

——トトラツクの電脳2——

「向こうで何かが起こったみたいだね」

「ああ、急ごうぜ……FM星人には人間を電波化する力がある。あの二人はFM星人に近い場所に居すぎたために巻き込まれたんだらう」

ロツクが真面目に考察してるよ……

「しかし、厄介なヤツが来たモンだぜ……ヤツの名はオックス……牡牛のような突進力を持った凶暴なヤツだ」

「ボクらで勝てるかな？」

「フン、ヤツの突進に巻き込まれなければ大丈夫だろう……ヤツは力が強いかわりに動きは直線的で単調だ……ウルフの時よりはやり易い相手だぜ！アイツらの命を助けるんだろ！ビビんなよ！」

「誰に言ってるのさ……二人は必ず助け出す……ッ！急ぐよ、ロック！」

……そうだ、今回はボクだけじゃない、委員長さんとキザマロの命も、かかっているんだ……新パワーのお試し感覚でいるべきじゃない……！

「行くぜ！」

「うん！」

『セキュリティ作動中……四つのテトラキーを（以下略）』

……アアアアアアッ!!

「おい、スバル！ウィルスが……」

モエリンググが一匹、テイルバーナーが二匹……良いところに来たね☆……憂さ晴らしに付き合ってもらうよオツ！

……二分後……

『セキュリティ作動中……四つのテトラキーを提示してください……四つのテトラキーを確認しました……セキュリティを解除します』

「ふう、なんとか集められたね」

いやー疲れた疲れた！でも、次はオックス・ファイア戦だ、気を引き締めていこう！

「……………」

何故かロツクが喋らない……………もうバテたのかな？

「ロツク、バテるのはまだ早いよ……………これからだつてのに！」

「ああ、そうだな……………(さっきのスバル……………オーバーツを触ったときに見た、ベルセルクの闘いよりベルセルクしてなかったか?)」

忌々しいセキュリティを突破して、残るは長い一本道のみ！

以外と横幅が広いな……………ウイルスとも戦闘できそうだ……………つて、思ってるそばから来たよ……………

変だな、さっきまではメラマンダとモエローダーを別の名前で読んでいた気がする……………頭が痛くなってきた。

「メラマンダが一体、モエローダーが二体か……………」

モーターを吹かして突っ込んでくるモエローダーを右にステップすることで回避し、装甲が薄く、反応しにくい側面にロングソードを突き刺す……………チリチリのデータとなったモエローダーを一瞥し、メラマンダが吐いてきたプレスをシールドでガードする……………アツイッ！プレスをシールドで防ぎきったことを確認し、バックステップ。

直後に、今までシールドでガードしていた位置をモエローダーが通りすぎる。心なしか、悔しそうだ……

ボクは選択済みのグラウンドウエーブを発動。モエローダーにヒットしたグラウンドウエーブは、地を這いながらその進行方向をメラマンダに変更し、追っていく……

誘導系は便利だなあ………Double delete!

「これで完了！………ロック！増援の気配はある……？」

「……いや、ないぜ」

「ロック、どうしたの？」

「ああ………大分堂に入ってきたなと思ってな」

「そういう水臭いことは無しだよ！さあ、もうすぐ最深部だ………何せ敵が待ち構えているからね………用心するに越したことはないよ」

「ああ、このトラックを暴走させているヤロウをとつとぶっ飛ばしてやろうぜ！」

「その意気だよ、ロック………！」

さあ、最深部はもう目と鼻の先だ！

——トトラックの電腦2・最深部——

「ここが、トラックの電腦……最深部」

「ああ、見ろよ……ウシヤロウのオテムカエってヤツだぜ！」

トラックの電腦、その最深部に待ち受けるオックス・ファイアは既にこちらに気づいているが、装甲の配置の関係で首をほとんど動かすことが出来ないため、首を傾げるという動作を体を揺らすことで表現している。

困惑しているためか、いつもは肘から吹き出る炎も不規則に漏れ出ている。そりゃあ、もやしを探していたら突然青い装甲に身を包んだ少年が突入してきたんだから、誰だつてそうなるよね……。

「このニオイは……？」

ヤバイ、気づかれたか……？

「ブルルツ!!何者だ、オマエは!」

「けっこうデカイね……装甲も厚い。攻撃が通るといいんだけど……」

「ブルルルツ!……んんん?オマエ、何処かで会ったコトがある気がするんだな……?」

「…久しぶりだな、オックス！」

「ブルルッ!? キサマ、ウオーロックか!？」

「地球に来ているFM星人は、オマエだけか?」

「(ロック、敵から情報を抜き出すならもつと遠回しにだね……)」

「(黙ってな!……問題は無い、いいから黙って聞いている……!)」

いくらオックスが脳筋だからって……

「そうだ、オレ様が一番のりだ。……だが、もうしばらくすれば第2、第3のFM星人がやってくるだろうよ!」

何……だと……?」

「そこまで言っちゃいます……? いや、ラッキーなんだけども。FM王はどう考えても人選を間違っているよね……」

「ブルルッ! まあ、そんなことはどうでもいい。……それにしても、えらく貧弱なヤツに取り憑いたものだな!! 取り憑くならパワーのありそうなヤツにしておけば良いものぞ!」

「うるせえ! 誰に取り憑こうがオレの勝手だろうが!……それにコイツは中々やるからな……オマエの宿主もどつかのもやしヤロウにしてやられてたんじゃねえのか?」

「ちよつと、ロック……ボクに取り憑いてたの……? もうちよつと、こう、言い方ってモ



ンがさあ……」

「ブルルルツ!! ならばオックス・ファイアのボディが見かけ倒しでないことを教えてやる!!」

「うわあ……」

「ガツハツハ! ビビってるのか?」

「オイ、スバル、ビビってんじゃねえよ!」

「うん、わかってるけど……」

「反応しきれるか……? オックスの突進を……! いきなりベルセルクのカードは切りたくはない、けど……」

「取り憑く相手はしっかり選ばねえとな、ウオーロック! キサマを倒して『アンドロメダのカギ』は返してもらおうぜ!」

「チツ、やはりこの星を攻撃するつもりか……!」

「王のメイレイは絶対だ! 地球攻撃作戦のノロシとして、ゴン太の体を使い、この町を破壊してやるのさ!……ゴン太……いや、オックス・ファイア! そいつを倒せ! そいつを倒せば委員長もオマエを認めてくれるぞ!!」

「ブルルルツ!! オレは強いんだ! オレの強さを見せつけければ、委員長はオレを必要としてくれるんだ……! ブルオオオツ!!」

「来るぞ、迎え撃つぜ！」

「ああ、二人の命がかかっている……ここは引けない！……行くよロック！ウエーブバトル、ライドオン！」

「ブルルルオオオツツ!!」

不意についての突進?! いや、無我夢中なんだ！単純だけど、速い！……技を越えた純粋なパワー、それが力だ！なんて言いそうなスタイル、まさしくNOUKIN！

だが対策は既に用意してあるぞ！……今はまだ来てないけどね！

頭のポジションを下げた前傾姿勢のまま脇目も振らず突っ込んできたオックス・ファイア。既に回避出来るタイミングじゃない！

……先ほどデリートした、モエローダーからリザルトで手に入れたモエリングを発射する。ダメだ！炎を扱うだけあって耐火性能も高い……！

クソツ！こうなったら、アレをやるしかない！

「うおおおおおつ!!」

オックス・ファイアに向かって走りだし、接触する直前にスライディング……！オックス・ファイアはその巨体故に、前傾姿勢でも股下に空間が出来る……そう、人間大のもやし一本分程度のね！

「ハアツ！ハアツ！ハアツ！」

「オイ、大丈夫か、スバル!？」

「ハアツ……うん……さっきのはちよつとヤバかったよ」

ボクだつてやりたくなかつたさ!

「パワーでは圧倒的に不利なんだ……今回は回避主体でいくよ、ロック!」

「おう!」

さて、なんとかやり過ぎたファーストコンタクト、次も上手くいくとは限らない……行動の前兆を見極めなくっちゃ……

恐らくゴン太が変身しているオックス・ファイアはまだウエーブバトルに慣れてない、はず。意表を突ければ、装甲の薄い場所に当てることも出来る、と思う。

……ウルフ・フォレストと、違ってシールドでガード出来ないのがキツ過ぎるぞ……

!

「ブルルルオオオツツ!!」

「オイオイ、さっきの芸当で相当お冠になったようだぜ!」

またさっきの前傾姿勢で突進してくる……今度は肘の炎が噴出して!?!……まさかスラスター代わりにしただつて!?!ゲームでは常に噴出してたから、使い方なんて考えもしなかつた……!ボクの油断か……!

「ロック!」

「おうよー！いくぜええつつ!!」

バトルカードをセレクトし、ウオーロックアタックを発動。ロックの超スピードによる突進で、オックス・ファイアの左方に移動し、展開したロングソードで右足を切り裂く……！

「ブルルルッ!!」

右足を切られたことに気づいたオックス・ファイアだが、HPプログラムによる再構成で瞬時に戦闘体が修復される。……ボクたち電波体に共通する、HPが切れない限り大きな傷は再構成する能力だ。これによってソードで切り裂いても、ソードは相手の体を貫通し通り抜け、HPが削られる……やはり浅い！

「ブルルルオッ！」

攻撃に気付いたオックス・ファイアが突進を無理やり中止し、拳を振り上げボクをミソチにしようと振り下ろしてくる……！ここだっ！

「ロック！」

「わかってる！」

ウオーロックアタックで一瞬だけ加速、振り上げた拳にヒートアッパーをお見舞いする……！ウルフ・フォレストとの戦いが役に立つとは……！って倒れない!!

「ブ、ブルルッ！」

踏みとどまりやがった！

「クッ！」

仕切り直しか……このままじゃあ……！

……カスタムゲージが満タンだ、あのバトルカードが来てくれれば……！

「来たか……再度攻撃を仕掛けるよ、ロックー！」

ウオーロックアタックで今度は真正面に躍り出る！

……コイツを食らわせれば終わりだッ！右腕に展開し、フックの構えをとる……！

「ブルルルオオオツツ!!!」

何だっ!?……つてまた肘のスラスター!?手を組んで正面に向けてきた……!?まさか

!

「ぐあっ!熱いつ!」

……あの牛野郎、正面に全開で爆炎を噴出させやがった!これがファーストダメージ

……!痛い、痛いじゃないかアツ!!しかも炎の噴出で若干だが後方に飛んでいる……!

まだ、射程圏内!

「うおおお!!」

右腕に展開したバトルカード「ダブルフック2」を発動!フックは空振りだが、腕の振りによって発生した泡がオックス・ファイアを包み込む……やつと、捕まえたアツ!

……バブルに閉じ込めたオックス・ファイアの背後に回り込み、ベルセルクのカードフオースを発動。

「行くよロック、全開だ！」

「おう！トドメだぜ！」

「サンダアツボルトツブレイドオツ！」

身動きの取れないオックス・ファイアを左右から素早く二度切り裂き、正面から剣の振り下ろしとともに特大の雷をぶち落とす！HPが0を刻み、デリートに成功したことを知らせてくれる。

「ロ、ロック……!!オレ様を……倒したからといっていい気になるんじゃ……必ずや

……ア……ドロ……ダの……グオオツ！」

そこまで喋って限界だったのか、オックス・ファイアの電波変換は解け、オックスは消えてしまった……ゴン太のリカバリーを急がないと！

「リカバリー30！」

オックスと融合していた名残なのか、ギリギリで通じたようだ……ああ……もう疲れた……ベルセルクを解除する。

「勝ったね、ロック」

「へっ！宿主勝負はオレに軍配が上がったようだな……スバル、オレたちのチカラはど

うだった？今までで一番苦戦しただろ？だが、勝てた。あんな巨体を相手にしてだぜ？やっぱ最高だよ、オマエ！」

それコーヴァスの考え方じゃない!?

「よし、全部解決したし、そろそろずらからうぜ！こいつらはオックスが連れ込んだヤツらだからな……その本人がいなくなつた以上、直に現実世界に戻るだろうよ」

「そつか、よかつたよ……あーあ、安心したらなんだかお腹すいてきちやつた！母さんに夜食頼んだら作ってくれるかな……？」

「オイオイ、今からメシの心配かよ……」

つて、ああ、そうだ。アンドロメダのカギについて聞いて聞いておかないと……。

「ねえ、ロツク。ところでオックスが言つてた『アンドロメダのカギ』ってなんのコト？」

「……………へっ、ヤツらの大事なモノさ……」

「ふーん、それを持つてるから、FM星人が襲つてくるつてこと？」

「だろうな……だがオレがカギを手放したらもつと大変なことになるぜ……」

「そつか……」

「またFM星人が襲つてきたらさつきみたいに闘つて倒せばいいじゃねえか。……オレたちなら出来るぜ。ベルセルクのチカラもあるしな……」

うーん、確かにベルセルクはチート過ぎるんだよな……使つててわかるけどスペック

が違い過ぎる……試さなかったけど、オックス・ファイアの突進も正面から止められるんじゃないかなあ……

「うん……いいよ、手伝ってあげる。その代わり、ボクと友達になってくれる？」

「…へっ！オマエは相棒にわざわざ友達になろう、なんて誘うのかよ？」

「ふふっ、そうだね……ボクが変だったよ」

「どうした？いつものスバルらしくないぜ？……なら、ここは景気づけに新しいウイルスでも狩りにいくか！」

「ちよつと待つて、もうクタクタだよ……」

少しは鍛えないと。……この体は体力がちよつと低いのが難点だね……さあ、帰ろう……

「う、うーん……ゴン太は……」

委員長さんが起きた……!? ヤバい、今正体を知られていいんだっけ!!

「……彼なら大丈夫、元にもどったよ」

「ア、アナタが、助けて……くれたの……？アナタは……誰……？」

大分意識が朦朧としている……これなら大丈夫かな？

「ボクは……ロックマン！じゃあね。……最後まで面倒見れなくてゴメン！」

バイザーで鼻辺りから上は見えないが、精一杯笑顔と謝意のある声をだし、ボクは



ウエーブアウトした。

「……ロツクマン」

——コダマタウン・夜——

「二人とも、起きなさい……起きなさいってば！」

「う、うーん」

「ア、アレ……？」

「やっと目が覚めたみたいね……ワタシを守るはずのアナタたちがいつまでも伸びてどうするのよ！」

ここで、白金ルナは直立不動となった牛島ゴン太に目を合わせる。言わなくてはならないことがあったからだ。

「ゴン太!!」

「い、いいんちよう……アレ……？オレ、なんでこんなトコロに？」

「アナタ、ゴン太よね？なんか夢の中で大きな怪物になってた気がしたけど……」

おそらく夢ではないと当たりをつけながら、ゴン太に問う。

「いいんちよう、オ、オレ……いいんちようにかくしてることがあつて……じつはさいきん起こったいろんなモノがこわされたじけん。……たぶん、はんにんはオレなんだ……この間いいんちようにおこられた後、おかしなマボロシを見て……牛みたいな怪物がオレ

にチカラを貸してくれるっていうんだ……いいんちようにブラザーを切られたくなかったらチカラを見せつけるって……そうすればいいんちようもみとめてくれるって……!」

「そう……そうだったの……」

「その日から、夜になるとなんかウズウズして……外をうろついていたんだけど、そのときに赤いモノ見るとアタマがまつしろになって……気がついたら家のふとんで目が覚めるんだ……ずっと夢だと思ってたけど……部屋にこわれたクルマのパーツとか、レングアのかけらが落ちてて……ご、ごめんさい……ウグツ、ウグツ……オ、オレ……みんなにあやまるから……ブラザーは……切らないで……」

「フン!」

「い、委員長……」

「ゴン太! キザマロ! 明日は6時30分に迎えに来てちようだい!……ゴン太が壊したモノを修理して回るわよ!……遅れたら、承知しないから! ったく、手間のかかるブラザーを持つと大変だわ。……それとゴン太、アナタのチカラはもつとワタシの役に立つように使いなさいよね!」

「い、いいんちよう……」

「うう、ううう……ゴン太君、よかったです……!」

「いいんちよう……オレ、一生ついていくぜ！」

「僕もお供させてくださいいね！」

「コラ、アナタたち、落ち着きなさい！暑苦しいわね！」

——少し離れた木陰——

「うん、一応起きるまで見ておいたけど、特に何か起こらなくて良かった」

「スバルがそんなこと言うなんてな……明日は槍が降るぜ」

「ちよつと！酷いよロック！」

「フン！いつものコトじゃないか……それより、あのゴン太ってヤツ……チカラを誇示することですか、自分の存在価値を表現することができなかつたんだな……そしてオマエに足を払われて、自分の居場所を失いかけた……」

「どうしたんだい、ロック？」

「いいから聞け……自分の居場所を失いたくないと、必死だったところをF M星人に利用されたんだろうよ……F M星人はココロに孤独を抱える人間に取り憑く。孤独を抱えた人間は自分のココロに空いたスキマを何かで埋めたいのさ。……そして

オレたちFM星人はそのスキマに入り込むわけだ。1人じゃ自分のスキマを埋めることすら出来ないんだ。人間ってヤツは弱い生き物だぜ……とはいえオレたちも地球人と融合しないと、本来のチカラが出せねえ……自分の居場所ってヤツが必要なのは、地球人もFM星人も同じなのかもしれないな……」

「自分の居場所、ねえ……」

……ボクも本来この世界にいるべきココロじゃないんだ。一体どれだけのスキマが空いてるんだろうか……

「人と交わるから、守らなきゃいけないモノが増えるんだ。だけどボクはまだそれらを守れる強さを持っていない……」

何か求道者みたいな感じになってるけど、これでいいのかな？

「……………」

ロック黙っちゃったじゃないか！あー、もう！

「ほら、ロック！早くウチに帰ろう……ボクもうお腹空いちやったよ」

——星河家——

「ただいま、母さん」

「お帰りなさい、スバル」

うん、やっぱり帰りを待ってくれてる人がいるってのは良いことだ。

……スバル君のお父さんもそう思ってたのかな？

——トトラック事件の前日——

「ねえ、ロック。さっきから妙にソワソワしてるけど、どうしたの？」

「オイオイ、どうしたの？は、ねえだろう!?せつかくスゲエチカラが手に入ったんだぜ、早く試してみたくならないのかよ！」

ああ、そういうこと。ボクはゲームのベルセルクを知っているから、何が出来るかわかるけど、ロックはそうじゃないだよね……ゲームではオーパーツを飲み込んでいたから、ベルセルクの意識に説明を受けていたんだっけ。

「うん、そういえばそうだね……そうだ。今日の行き先が決まったよ、ロック」

「おう、どこに行くんだ？」

ええつと、水属性のバトルカードを落とすウィルスが出現し、且つ一般人が簡単に行けるトコロ……ドリームアイランドしかないね。

………しかもバトルカード『ダブルフック』なら単体で敵の行動を封じることが出来る。これから闘うオックス・ファイアに対しては、かなり有効なハズ、だ。

「さっき調べただけど、ドリームアイランドはどうかな?……ベルセルクは雷を操る

能力を持っているから、海岸沿いに出現する水属性のウィルスに相性がいいんじゃない？」

「へえ……いいな、そのドリームアイランドつてところは……ベルセルクのお試しにはぴったりの場所だぜ！」

「うんうん、ロックが気に入ってくれて嬉しいよ」

さて、出発する準備をしないと……

「ええつと、ドリームアイランド行きのバスは10時出発だね……」

「あと一時間か……」

昨日はホント疲れたからねえ……誰が倉庫に忍びこんだら人狼に襲われると思うんだよ。

……それにこのベルセルクのチカラ。体感では、ロックマンの基本スペックと比べて200%位の出力があつたのを感じたけれど、急激に上がった身体能力に感覚が着いていかなかったら意味がない。まずはベルセルクのパワーや感知能力に慣れないと……。

――30分後――

「さあ、展望台に行くよ、ロック」

「ハア？バス停じゃねえのか？」

「あのね、ロック。ボクは不登校児なんだ。向こうで補導なんてされたら堪ったモン

「じゃないよ」

「なるほどな……だが、今の話と展望台がどう繋がるんだ……う？」

鈍いなあ、昨日のやり口をもう忘れたのか……

「人目、ウエーブホール、バスの電脳、フード付きのローブ……もうわかった？」

「……まさか、また忍び込むつもりかあ!？」

「今回はバスの電脳だけだよ」

「オイオイ……じゃあ展望台つてのは……人目につかない場所にあるウエーブホールから電波変換するためかよ……」

「そう、展望デッキの下なら人目に付きにくいし、ウエーブアウトで帰って来たときになんか安心してた。あそこには滅多に人が来ないことを、この3年間で学んだからね」

……ぶっちゃけ、ウエーブホールの場所つて割と死活問題なんだよね。

電波変換するときは、人目がないことを確認すれば本体がバレることはないんだけど、ウエーブアウトして帰ってくるときは確認出来ないからね……

「それじゃあ、ドリームアイランド行きのバスへ、レッツゴー!」

「やけにテンション高いな、スバル」

それはさつきまでのロックでしょ!



ードリームアイランドー

「やつと着いたか……」

「これでも、昨日よりはかなり短いはずだよ」

なにせM県S市まで長距離バスで強行軍だったんだ、これくらいはどうってことないはずだけど……？」

「わかつてはいるがよ、同じ景色をずっと見てるつてのは飽きるんだ」

ああ、バスの電脳内部の景色つていえば確かに動く壁紙みたいなモンだから、ロックには飽きちやうかな……」

「そっか……じゃあ今度は、土曜日か日曜日にバスに乗って景色をゆつたり見ながら来ようか？」

「そりゃあ、いいぜ！ダルい長旅も楽しめるつてモンだ！」

うんうん、相棒が元気そうでよかったよ。

……今日は力二狩りじゃあ！

……駆逐してやる！一匹残らずだ！

「狩り尽くすと資源がどうたら、テレビでやってたぜ？」

わかつてない、わかつてないよロック！というか心の中を読まないで！

「ロック……これからボクたちがするのは、ウイルスバスターンクなんだよ？…誰に咎められるって言うのさ！」

「それもそうだ！スバルは冴えてるぜ！」

ガツガツハツハツと笑うロック。

そんなことで誉められても困るんだけど……

「よし、じゃあ行こうか……あ、メットリオ3だ」

そういえばドリムアイランドってかなりストーリー後半にならないと行けない場所だっけ……

「オイオイ、ここのウイルスのヤツら結構手強いぞ!？」

「それはこの近くにゴミ集積所があるからだね……いろんなところからゴミが集まってくるから、当然ウイルス入りのヤツも混ざってるってことさ……ッ！」

おっと、危ない！

…メットリオも3ともなると、シヨックウェーブもかなり早くなっている！幸いにしてまだ一体だ。仲間を周りをうろついているだろうウイルスどもに気づかれないよう、静かに倒す……！

「(シッ!)」

軽く前傾姿勢になりながら、足音が響かないように注意してメットリオ3に走り寄る。

…迫るショックウェーブをシールドで方向をズラすことを念頭に置き、優しく包み込むように受け、流す。メットリオと共通なのか、ウェーブロードに突き刺したピッケルを抜こうとしているメットリオ3に、すれ違い様、左腕に展開したワイドソードで切りつける。

ワイドソードを振り切ったまま、細かくステップし体制を整える。ウェーブロードからピッケルを引き抜いたメットリオ3の、輪郭と目玉しかない顔が心なしか動揺しているのを感じとりながら追撃のロングソードで斬り裂く……。

「フウ……。一撃じゃ削り切れないな……」

デリートに成功して、飛散したメットリオ3からグランドウェーブ3のバトルカードのデータを入力したことを確認し、静かに走り去る。

「オイ、スバル。目当てのウイルスはどんなヤツなんだ? まだ余裕そうだが、今のバトルカード群じゃこのウイルスにはパワーが足りないぜ……。そのうちジリ貧になっちゃうー!」

「……目当てのウイルスは、カワニガーっていう黄色いカニ型の形をしていて、横歩きを

しながらバブルを放って攻撃してくる厄介なウイルス……バブルに当たると泡に包まれて身動きが取れなくなるってティーチャーマンが教えてくれたんだ」

困った時のティーチャーマン……なんかごめんよ……

「そうか……なら、ベルセルクで暴れてみるか？」

「ダメだよ、ロック。あれは負担が大きいな……少しづつ慣らしていかなきゃ体を壊しちゃおうよ」

「だが、それならどうする？」

「カンタンさ……まともに闘わなければいいんだよ」

——10分後——

「オイ、スバル！いつまでこんなところに隠れてるつもりだ！」

ボクたちは今、ドリームアイランド内を巡回しながら掃除しているロボットの電腦の中にいる。さきほどからロボットのカメラの映像を通してウエーブロード上のウイルスの動きを探っているが、早くもロックが痺れを切らしたらしい。

……とても合理的な作戦なのに……

「まあ、まっつてよ、そろそろ来る気がするんだ………つ！ホラー！」

ウエーブロード上を悠々と横歩きで闊歩する、あの黄色い体色、なぜか少し細められ、眠そう、人によっては嫌らしいと感じてしまうようなあの瞳……まさしく、カワニガー

だッ!

「目標のウイルスが現れた……行くよロック!」

「オイ、いきなりベルセルクかよ!」

そう、ベルセルクのカードを読み込ませ、変身を完了。

… 電腦世界からウェーブロードに飛び出し、背中に装備されたベルセルク専用の大剣でカワニガーに斬りかかる!

リザルトでバブルフック2を手に入れたボクは、早速発動し周りのカワニガーもバブルに包み込んでいく……

……自分の攻撃で身動きが取れないなんて……

……ねえ、今どんな気持ち? ねえ!?

「ハアアアアッ!!」

カワニガーたちを包んでいるバブルが割れ、自由を取り戻す前に斬り裂いていく……  
まとめて、オダブツツ! (焼け野原ひろし感)

その後も、ボクたちは電腦世界に入っては奇襲し、入っては奇襲を繰り返して目的のバトルカードが手に入ったところで意気揚々と家に帰ったんだ。

……ロックが少し拗ねちゃったんだけど……

デリートされないためとは言え、FMプラネットの戦士としては結構辛いらしい。そこで今度からはちゃんと戦闘することを約束して、ボクたちはそこそこに忙しい今日を終わらせたんだ。

……ところで、ロックが変な子を見かけたらしいんだけど……異質な孤独の周波数を放っていた子供らしい。まるで発生源が、二つあるようだ、とはロックの弁。

……それってもしかして……？

## 第二話 『白鳥座』

11

——三日後——

「どうだ、スバル。ベルセルクには大分慣れてきたんじゃないか？」

「……ロック。ボクはこの数日間ではつきり実感したことが1つあるよ。今まで目を逸らしていたけど、しょうがない、しょうがないコトなんだ……」

……ボクには、体力がないツ！

つい10日ほど前までは、展望台に行くのが関の山のただのもやしだったんだ。仕方がないとは言え、いくら敵の動きを目で追いきれても、体力が尽きていたんじゃない意味がない。

「決めたよ、ロック。ボクは……走る……！」

「おう、いきなりどうしたんだよ」

「体力が無いのを実感したからね……それに体力が付けば長くウィルスバスティングを続けられるよ」

「そういうことなら早く言えって！ さあ、オレについてこい！」

そう言つてロックは玄関から飛び出してしまった。

……あかねさんはパートで居ないから、戸締まりをしなくちゃならないのに……ッ！  
「待つてよロック！」

「オラオラ、どんどんペース上げて行くぜ！」

浮遊して移動出来るからつて楽しやがつて！

……ハープに絡まれたとき、助けてやらないからな……この屈辱は……絶対に  
……………

——更に三日後——

「昨日は凄かったぜ、スバル。……まさかランニング中にいきなり立ち止まったかと思いきや、電波変換してメットリオをバスターとバトルカード無しの肉弾戦でデリートしちまうとは……流石に予想出来なかつたぜ」

「昨日のコトは言わないでよロック……」

あれは黒歴史だったんだ……もう限界だつてのに、ロックが3日前からずつとあの調子だったから、ついメットリオに当たってしまった……おお、ごめんよメットリオ……でもキミがウィルスなのが悪いんだ……

「まあ、ちよつと追い込み過ぎたかもな……走り込みが終わつたらテレビでやつてたビリーとかいう男のなんとらキャンプつてやつをさせようと思つてたが、またの機会にす



るか」

アウトオツ！それはボクが死ぬ！

ブートキャンプは小学生用には出来てないよ！

「・・・つと、これくらいにして今日は展望台に行ってみない？」

「またどつかのバスに忍び込むのか？」

なんで不法アクセス⇨展望台みたいになってるんですかねえ……………

「違うって……………たまには裏山の新鮮な空気を吸いにいこうよってこと」

「本当か？……………スバルがそういう無駄っぽいことをするときには、大抵何か起きるからな

……………」

中々鋭くなったね、ロック……………

——展望台——

「フウ、気分の切り替えにはなったぜ……………」

最近はずつとバトル漬けか走り込みだったからね……………

「うん、やっぱり自然はいいよ……………」

「別にオレは構わないがよ……………そんなに入り浸る程か？」

「ボクは空を見ながらポーツとすることも、結構好きなんだよ」

……………ポーツとするのも、考えなくていいから楽なだけだね。

「それに、いつか父さんが見えるかも知れないし……FM星人は人間を電波体に出るんだろ？ならFM星人に会って電波体になった父さんがボクのトランサーや、父さんのビジライザーに気づいてくれるかも知れない。……ロツクが来たときだって、トランサーに父さんのシグナルが出たんだから」

「……………」

まあ、いいや……星河ダイゴは探す。あかねさんが完全に立ち直るには、ダイゴさんが必要だ。……既にメテオサーバーにアクセスしてるんだっけ？

「オイ、スバル！向こうの空を見ろ……何か、いるぞ！」

「……………ん？あれは……………」

なんか、飛んでる……じゃなくて、あれはキグナス・ウイングに変身する科学者の宇田海……何だっけ？

名字が印象的すぎるんだよ……確か開発した飛行用の羽型装置で実験をしていたはず……

「アワワワツツ!!」

……なんて、言ってるそばから、落ちそうだ！

ドサツ！

……うわっ……いたそう（オルガ感）

「今のは……」

「気を付けろよ、スバル。……オレの知っているFM星人にあんな感じで羽の生えたヤツがいたんだ。もしかすると……」

「……とにかく行ってみよう」

「……イテテテ、ダメだ。やっぱり空中で安定しない……」

仰向けにノビている不健康そうな男——宇田海に声をかける。

「大丈夫ですか？」

「ああ、仰向けに墜落したからね……翼がクッションになってくれたらしい。……よいしょっと」

「羽の接続元はランドセルタイプなのか……」

「……ゲツ！み、見てましたんですか？」

「え、ええ。……偶々ですけど」

「本当に……？」

「本当に……」

ボクの返答を聞いた宇田海さんは、頭を抱えてしまった……そりゃあ、こんな時間に子供がいるとは考えないもんね……

「う、迂闊だった……」

「迂闊？」

「…いい、いえ、この展望台、夜以外なら人がほとんど居ないと思っていたんですが……」  
……不登校児的には、何も言えねーです……

「と、とにかく、お騒がせしました……」

「何かしていたんですか？……その羽は……？」

「ちよ、ちよつと実験に失敗しちゃったもので……」

「(ランドセルにスラスターを搭載すれば完成なんじゃないですかね)」

……ちよつとガンダム脳過ぎたかな？

「(ああ、しかしどうやらFM星人とは無関係みたいだな)」

これから無関係じゃなくなるもんね。今は仕方ないね。

「(そんなコトより、あの装置、面白そうだな……ちよつと見て見ようぜー)」

「(わかったよ……) そうなんですか、ケガとかはないですか？」

「え、ええ、大丈夫です」

「そうですか、アハハ……ところで、その羽みたいなのは何か教えてもらっても……？」

「……………!!え、こ、これですか？これは、そ、その……あ、あのこれはつまり……フラ  
イングジャケットって言いまして……」

「……フライングジャケット」

……やっぱり、翼を改良するより、何か推進力の補助があつた方がいいんじゃないかな……

「えつと、あんまりジロジロ見ないで欲しい、です。い、イヤなんです。……人に自分の発明を見せるのって……」

「そうですね……（見られたくないってき、諦めようよ、ロック）」

「（……変なヤツだな、コイツ）」

「（なんかここにいるのもこの人の迷惑そうだし、そろそろ帰ろうか?）」

「（まだ少し気になるが……）」

「じゃ、じゃあ、お邪魔みたいなので、この辺で……」

「あ、ああ……気を付けて」

ーコダマタウンー

ピコーン、ピコーン

……これは……

「あ、ヘルプシグナルだ」

「なんだ?そのヘルプなんたらとか言うのは?」

「ヘルプシグナルっていうのは、簡単に言うとSOS信号で……この近くに助けを求め

てる人がいるってことなんだ」

「地球人は赤の他人に助けを求めるとか。……全く理解に苦しむぜ……」

ちよつと知つただけの異星人に助けを求めるとクックに言われたくはないなあ……

「そんなコト言わないで、助けにいくよ」

「ああ、オレもそのシグナルを発しているヤツに興味がある……行つてみようぜ」

ーヘルプシグナルの発信元ー

「困つたな……」

子供が二人、街路樹の側で困っている様子だ。

……どうやら街路樹の上にサッカーボールが引つ掛かつてしまつたらしい。

「あつ……ヘルプシグナルをキャッチしてくれたの？……実はボールで遊んでいたら、ボールが木にひっかかっちゃつて……ボクラじゃあんなにたかいトコロ、とどかないよ……」

やっぱり、ボールのコトか……

「ホントだ、引つ掛かつてる……高いトコロか」

「もしかして、あのボールをとる方法があるの!? 取つてくれたらしつかりお礼するから、お願いー!」

「うん、わかつた。……お兄さんに任せといて……それじゃあ、ちよつと待つててね」

……さて、どうしようか……

「(どうする、ロック? ウェーブロード上からキャノンでも当てちゃう?)」

「(もう少し穏便な方法にしろよ……つたく、お、何か飛んでるぞ……アレを何とか使えないか?)」

ロックに注意されただと……!?

——五分後——

「……この辺りだね」

「ああ、あのラジコンだな……よし、借りてこいよ」

簡単に言うなあ、もう……

「ん? 何か用かい……?」

「あの、そのヘリコプターのラジコン、少しだけ貸してもらえませんか……?」

「何か理由があるのかい?……ラジコンを使ってボールを取りたいって?」

「ダメですか……?」

「そうだねえ……実はこのラジコンとは別の、新しいヤツを買ったばかりなんだよ。だからお古のコイツは譲ってあげてもいいんだ」

「本当ですか……!」

やった! 上手く行きそうだぞ……!

「ああ、1000000ゼニーで……」

高いよ!?

ゼニーというのはこの世界のお金で、トランサーにもこのゼニーの貯蔵機能が組み込まれている。ウィルスのリザルトでも手に入るから、ボクはそれなりに金持ちだと言えるけど……

「ええッ!」

「ふふ、ウソウソ。……かなりお古だからジュース一本と交換でいいよ。気前いいでしょ?」

………驚かせないでよ………ラジコンにウエーブインからの強奪まで考えちゃつたじゃないか………!

「アレ………?ジュースが出てこない………」

「ウィルスにでも犯されているんじゃないのか?」

「はいはい、ウエーブインウエーブイン」

面倒臭くなってきたな……

——自動販売機の電脳——

やっぱりウィルスか! キャノベースが一体、そのGタイプが二体……砲撃戦か!

「いくよロック!」



「おう！気を抜くなよ、スバル！」

キャノベースたちが砲弾を発射する体制に入った……今からキャノン撃つても回避できない！

シールドを展開し、砲撃に備え、腰を落とす……

来るッ！……ぐうっ！流石に爆破はキツイ！

「うおおおっ！ロック！」

「行くぜオラアッ！」

ウォーロックアタックで一気に接近、『バブルフック』で泡の中に閉じ込める……つて、キャノベースはデリート？流石はストーリー後半のバトルカード……

「ハアアッ！」

残ったGタイプのキャノベースを、ワイドソードで斬り裂きデリートする。

……あつけないなあ……

「よし、終わったよ……もう一度ジュースを買いに行かなきゃ……」

ーコダマタウンー

……あ、ジュースが出てる！……急いでさっきの人のトコロに戻らないと！

……3では保冷ボックスなしでスピカモールからWAXA本部まで三分でアイスをお届けするという鬼畜ミッションがあるんだけど、あれはどうやっても不可能なんじゃない

いかなあ…

「…あの！持ってきました！」

「お、ジューズ買ってきてくれたね…じゃ、このラジコンをあげる…。あと、このラジコンはカードで動かすタイプだから、気をつけてね」

「ありがとうございます！」

よし、ラジコンが手に入ったぞ！…それにこのラジコン、結構使えるんじゃないか？

ラジコンにウエーブインすればカード要らずだし、充電用のチャージャーを持っていけば、長時間の運用もできる…

「レッドホット・チリペッパー」みたいに移動用として使えるかも？

ーヘルプシグナルの発信元ー

「あ、さっきのお兄さん！」

ちやんと覚えててくれたのか…

「待たせたね…さあ、いくよ…『プロペラカード』、セットイン！」

…トランサーの指示に従い、ヘリコプター型のラジコンのメインローターと呼ばれる回転翼が揚力を生み出し、宙に浮く…

「オイ、スバル…ビジライザーをかけてあのラジコンを見てみる…」

何？ラジコンもウイルスに感染してたの……？

って、あ、ラジコンの後ろに何かいる？

「あのデンパは？」

「どうやらあのデンパがトランサーの指示に従って、動かしてるらしいな」

ええ……手動かよ………ロマンがないなあ……

「……とにかく、動かしてみよう」

幸い天辺のあたりにボールが引つかかっていたため、ラジコンが木の枝に絡まらず落とすことが出来た。

「ありがとう！これはお礼だよ！」

「これは、HPメモリ……ありがとう！」

これは素直に嬉しい！

「かかった手間の割には、なかなか良い見返りじゃないか？……良かったな、スバル」

「うん……ね？ロック、人助けもなかなか悪くないでしょ？」

「フン！……まあ、悪くはないぜ」

「よし、じゃあ今日はそろそろ帰ろうか……」

……あれ？天地さんがいる……何やってんだろう？……それにあれは、この前の暴走したトラック？

「……なるほど、なるほど。実に興味深い……。それにしても、宇田海くんはどこに行ったんだ？ トイレにしちや、やけに長いな……」

あの人トイレに行くって言って実験してたのかよ……

「おや？……スバル君じゃないか……元氣だったかい？」

「こんにちは、天地さん」

「おや？……以前会った時より少し明るくなつたかな？……今日はちよつと仕事の用事でさ、先日起きた事件、キミも知っているだろ？……赤いモノばかりが壊されたアレだよ……どうも気になつてね、事件に使われていたトラックを見せてもらつていたところなんだ……つて、あれ？」

すいません……。あの事件の原因はボクなんです……。お手数おかけしてすいません……。……あれ？向こうからくるのは……

「お、遅くなりました」

「やけに長かつたな……。トイレ混んでたのかい？」

「え、ええ、まあ……」

「あ、さつきの……」

「何だい、顔見知りか？」

「え、ええ……。実は……」

「ここで宇田海さんは天地さんに事情を話す…。別にごまかすなら手伝ってあげてもいいんだけどね。」

「えっ!…。一人で実験をしてただって!？」

「そ、その子とはそのときに…。」

「ふむ、なるほどね…。水臭いじゃないか、一人で実験だなんて…。そういやキミ、実験するときはずっと一人だな…。言ってくれば、手伝うぞ」

「そ、そんなことより、早くこのトラックを調べましょう」

「スバル君には紹介しておこう…。彼は僕の助手の宇田海君だ。元NAXAの職員だったんだよ…。ま、僕と同じさ」

「元、ですか」

「ん? まあ、ちよつと問題がおきてね…。それより、スバル君、学校のほうはどうだい? いけるようにはなつたのかな?」

「い、いえ…。」

「暫く行くつもりはありません!」

「そうか…。よし!…。なあ、明日にでもウチの研究所に遊びに来ないかい?…。いい気分転換になると思うんだよ…。ね、どうだい?」

「そうですね…。」

「な？明日は休日だし、ちようどいいだろ…。？じゃあ、決まりだ！」

「面白そうじゃねえか！…こいつらがどれだけ宇宙のことを知ってるのか見せてもらおうぜ）」

「(ボクも結構、興味あるんだよね…。それに今まで見たことのないウイルスがいるかもしないし)」

バトル脳？何を今さら…

ーコダマタウン・キザマロー

「ムフフ…聞いちゃいましたよ…。早速委員長に報告しなくては…」

ーコダマタウン

「……………さて、それじゃスバル君、僕らはまだトラックの調査をするけど、見ていくかい？」

「いえ、今日は帰ろうと思います」

「そうか、じゃあ明日待ってるからね…。気をつけて帰るんだよ」

「はい、じゃあ…」

さて、今日はもう帰って寝るか…

## 12

——その日の夜——

「ふう……や、やっと完成が見えてきました……」

連日の残業で、不健康そうな顔が板についてきた男——宇田海は誰に畏まるでもなく、一人ごちていた。

「今日も残業か？」

「天地さん……え、ええ……」

「……熱心だね、結構結構。……ところで、キミが開発に取り組んでいるソレ、名前が正式に決まったみたいだな……えつと、何と叫びたかな？」

……この天地という人間は、いつもハキハキとしていて親しみのある、人気者だ。

彼は特別に外見に秀でているといふわけではなかったが、元NAXA職員という実績と、頼りがいのある雰囲気があるが彼を職場の中心人物に押し上げていた。……自分が勤めている天地研究所の所長ということも手伝っているかもしれないが。

陰気で内気な自分にもすっかりと相手をしてくれるのに、何か下心があるようには感じられない、不思議な男だった。

…発明品の名前位なら教えてもいいだろうか……

「……………こ、この名前はフライングジャケットです」

「今日一人で実験してたつてのも、コレのことなんだろう？ ……どうだ、開発は順調かい？」

この男になら……と、思わなくもないが、自分に限らず科学者が未公表の発明品について、他人にペラペラと喋ったりはしない。

「…ど、どうでしょう」

「そうか…まあ、無理はしないようにな。 ……さて、ボクはそろそろ上がらせてもらおうよ」

「お、お疲れ様です」

「…そうだ。なあ、突然だけど…僕とブラザーバンドを結ばないか？」  
……………

「ブ、ブラザーバンド……ですか。 ……どうしたんです？ 突然……」

「まあまあ、そんなに驚かないでくれよ。ただ、ふと思っただ……知り合いになって随分長いけど、仕事以外でのキミとの交流があんまりないなあ……つてね」

「…そ、それは」

確かに、天地の言う通り自分はこの頼りがいのある男を含め、職場の同僚とも、事務



的な交流しかしていなかったことを思い出す。

しかし、あの件から自分は他人を信用しきることが出来ず、名字の通り疑い深くなつてしまった。

それが悪い変化であることは、以前から人の言動に敏感だった自分にとつて理解出来ていた。…誰だつて、自分を疑う人間と進んで交流したいとは思わないだろう。…しかし……

「それは、業務命令ですか？」

今の自分に他人を心の底から信頼することは……出来ない。

「め、命令？……ハッハッハッハ！……いやいや、勘違いしないでくれ。いい友人になればと……ただそう思っただけさ」

「……いい、友人……」

いい友人とは、何だろうか。

あんなことを経験してしまつた以上、自分にそれを理解することは出来ないだろう。だが……

「正直なことを言うのだね……僕は仕事で成果を上げるよりも、より良い人間関係を作るほうが大事だと思つてるんだ」

「……」

天地 守は良い、人だ。本当にいい人なんだろう。

…再び自分が人を信じるきつかけには、なるだろうか……

「ハハハ、今のセリフはちよつと臭かったかな？」

「（…この人なら、この人なら、きつと……裏切らない……）……か、かまいませんよ……ブラザーバンド」

「おお！本当かい!?じゃ、早速結ぼうじゃないか……言つとくが、僕が教えるヒミツは強烈だぞ……果たして平常心でいられるかな……！」

……今度こそ。今度こそは……！

自分を変えるため、勇気を出して天地の申し出を受けた宇田海を、映像として見知らぬ観客が見ていたなら、多くの人間が賛辞の言葉とともに、彼に拍手するだろう。

しかし……そんな彼の大きな決意は、ある勘違いから崩れ落ち、やがて一つの事件を引き起こすきつかけとなることを、彼……宇田海は、知らない。

……数時間後……

「大丈夫……あ、天地さんは、きつと信用できます……で、でも……やっぱり不安が……」

……もし、万が一、裏切られたら……

「（あの時みたい……）」

『フフフ……苦しんでいるようだね……』

「!?だ、誰ですか!？」

……くっ!

部屋が一瞬、閃光に包まれたと思うと、目の前には、水色の揺らめきに白鳥の頭といくらかの装甲を身につけた、科学的にいつて、荒唐無稽な存在がこちらに笑いかけていた。笑いかけてきたというのは、宇田海の妄想で、鳥の口は笑顔をつくることなど出来ないのだが、その全身から発するオーラが、何よりもこの不可思議な白鳥擬きの感情を告げていた。

……この表情は、あまり信用できない……

「……初めまして」

「わ、わわわ!!」

……鳥が、喋った!?

「慌てないで……ボクはキミの理解者だよ……フフフ……」

この白鳥擬きと、これ以上会話を続けるのは、マズイ!

「だ、誰かー!!」

声を上げるも、誰かが反応する様子はない。残業が仇になったか……!!

「だから落ち着きな……ボクにはわかるんだよ。キミは心から他人を信用すること

が出来ない……そのせいで、今とても胸を痛めている」

「……」

「その原因は、過去に起きた事件……違うかい？」

な、なぜ、それを……

「そ。その通りです。……私は昔、酷い目に遭った……他人を信用したせいで……でも、どうしてそれを？」

「言ったよね？ボクはキミの理解者だって……さあ、話してごらん。キミの過去に何が あったのかを……」

「あ、あれは……まだ私がNAXAで働いていたころの話です……と、当時、私は若手でナンバー1のエンジニアと呼ばれていました……実際、たった数年で大きなプロジェクトを何度も成功させるほどでした……」

何故こんな話をしているのだろう……？

なんか、この白鳥擬きと話していると、話さなくてもいいことまで話しちやいそうな気がする……

「仕事は楽しかった？」

「え、ええ、まあ……ただ……」

「ただ？」

「わ、私は小さい頃から勉強に明け暮れていましたし、……お、大人になってからは研究に人生の全てを捧げてきたので……その、何と言いますか……」

「他人との付き合い方が上手くなかった……そうだね？」

「え、ええ、その通りです……この職場にも友人と呼べる存在は一人も居ませんでした」  
「孤独だったんだ」

「で、でも、そんな私に声をかけてくれる人がいました。……当時の私の上司です。彼は言ってくれました『私たちはいい友人になれる』と……それだけじゃありません、私とブラザーバンドを結ぼうと言ってくれたのです」

「キミはとても喜んだ……そうだね？」

「ええ！もちろん！……わ、私にとつて、生まれて初めてのブラザーバンドでしたから……で、でも、それは全て、私の思い込みでした……」

……そうだ、あのブラザーバンドを結んで……

「……私たちがブラザーバンドを結んでから、数日後……ある発明が発表され、世の中を賑わせました……お、おどろいたことに、それは……私が以前から考えていたものにソックリでした」

「もしかして、アイデアを、盗まれたの？」

「……ええ。そ、その発明を発表したのは他でもない……」

「…………そう、ブラザーバンドを結んだ私の上司でした……………ブラザーバンドは、あらゆる秘密をお互いに共有することになるので、やろうと思えば研究のアイデアを盗むことも…………」

「彼はきつとキミのアイデアが目的で近づいたんだね……………キミは若手でナンバー1と知られていた……………だから狙われたんだ」

「わ、私は、ショックを受け、NAXAを辞めました……………発明は出来るだけ一人でやって、以前よりもっと他人と距離を取るようになりました……………二度とあんな思いをしたくないから……………」

「フフフ……………興味深い話を聞かせて貰ったよ……………キミの過去は、今の世の、真の姿を実に見事に表現している」

「…………」

「裏切りがこの世の本質なんだよ。だから何も信じちゃいけない……………全てに疑いの目を……………それが賢いやり方さ」

「裏切りが……………世界の本質」

…………でも、それでも、今度こそは…………

——次の朝——

「うっうーん……………いい朝だね、ロック」

昨日はあんまり眠れなかったよ……恥ずかしいから言わないけどね！

「おう、準備しようぜ！」

「そうだね……トランサーと……」

トランサーと、何を持っていけばいいんだろう……？

…カメラとか？

ー出発時刻ー

「よし、そろそろ時間だね」

「おう、さっきからソワソワしてるもんな、スバル」

止めてったらー！

「確か天地さんの研究所は、バスで行くんだっけ……」

「おう、展望台だな？」

違うって！

「あのねえ、ロック。今回は正式にお呼ばれされてるんだ……こっそり忍び込む訳じゃないんだよ」

「なんだ、つまんねえな」

バトル脳過ぎイ！

…あ、メール来てる。タイトルは……NO—TITLE？

…ああ、オックスね。残留電波だっけ？……ゴン太居ないから知能下がってるんだよなあ……まあ、気が向いたらってことで……

ーバス停ー

「なんかまたワクワクしてきた」

「オマエも案外ガキっぽいトコロ、あるじゃねえか」

…心外なんですけど……

「それはちよつと酷くない？」

「いや、そのくらいがいいぜ……つと、バスが来たようだな」

プップーー!!

何だか古式めいた音が耳に入り、バスが近づいてくることに気づく。

「ほうーこれがバスの中身か……意外と狭苦しいんだな」

…ああ、ロックつてば、今まではバスの電腦に忍び込むことしかしてなかったから、内装をすっかり見たことがなかったのか。

でもまあ、流石に電腦のほうが広く感じるよね、隠れながらつてのを差し引いてもさ

……

「さあ、乗るよロック」

ーコダマタウン・バス発車後ー



「……」

「……」

「……」

「……天地研究所（以後、アマケン）……」

「……ここが天地研究所か……」

「……あつ、門の前に天地さんがいる。」

「やあ、よく来たね！」

先に挨拶しようと思つてたのに……

「……こんにちは、天地さん」

「……ここが僕の研究所、『天地研究所』……通称『アマケン』だ。……自慢じゃないが、割といい設備が調つていゝんだ。一般の人も見学出来るように解放して、結構評判がいいんだよ、これが」

「へえ……確かにまだ結構新しい……」

「よし、じゃあ早速案内……」

プツプツ……！

「……もう次のバスが来たのか……さっきの人気があるつて話も嘘じゃなさそうだ。」

「また、バスだ……」

「今日は休日だからね。……来客がいつもより多いから何本もバスが通ってるんだ。……フフフ、今や人気スポットなんだよこの研究所……!」

……あ、委員長さんたちも来るんだっけ?

忘れてたよ……もうホントに大筋のストーリー位しか覚えていないな……スバル君になつたときは、もうすでに天地さんが来ていたから、ノートに書き写すヒマなんてなかったし……ロツクは四六時中側にいるからそんな隙は無かつたんだよなあ……

「アラ、奇遇ね。アナタも研究所の見学に?」

「どうして、ここににいるのかな……(つて、人気スポットなんだっけ、ココ……)」

「それはオマエのあとをつけて……」

「ゴ、ゴホン!」

委員長さんが誤魔化すように咳払いをしたつてことは、やっぱりそうなのか……

「と、とにかく……この研究所は一般公開されているはずでしょ?……ワタシたちが来たつて変じやないはずだわ!」

「……」

……苦しい、苦し過ぎるよ委員長さん……

でも、普段強気な委員長さんが慌てるのは何か新鮮だなあ……

「(今日こそアナタを説得してみせるんだから!)」

まあ、いつか。ボクの目的は新ウィルスとキグナス・ウイングだし……あとは展示！  
忘れてないよ！本当だよ！

「こちらは……スバル君の友達かい？」

「うーん……登校を誘ってくれる人たちって言うなら、友達かな？」

「……っ！……ええ、クラスメートでもありますわ、おじさま」

「なんだなんだ！ちゃんと友達がいるんじゃないか！……安心したよ。僕は天地マモル。……この研究所の所長だよ……ちよūdい、キミたちも一緒に案内してあげよう。賑やかなほうが、楽しいしね」

「えっと、お願いします」

何でお願いしてるんだ？ボクは……

「所長自ら案内ですか！」

「ありがとうございますわ、おじさま！」

「じゃ、早速案内しよう」

……早く自由行動したいな……

つて、委員長さん？

「(アラ、どうやら学校に来る気になったようね?)」

……ああ、さっきのね。

「違うよ……あれは天地さんがよく心配してくれるから、安心させるために……それと、委員長さんたちが完全に友達ですよオーラ出してるのに、否定したら変な空気になっちゃうじゃないか」

天地さんの後ろ姿を追いながら、並んで歩き、小声で話す。どうやら勘違いさせてしまったらしい。

「(っ!!フフフ……どうやらワタシを怒らせたいようね……)」

「(怒るも何も、キミたちが勝手につけて来たんじゃないか……っ!イテッ!)」

……この女、蹴りを入れやがった!

「(イタツ!ああ、痛い痛い……これじゃあ痛みが気になつて見学どころじゃないよ)」

「(ツツ!!……それならワタシが診てあげましょうか!?……医療の知識がないので対応を間違えてしまうかもしれないけどっ!)」

あ、すごい怒ってる……しかもこれは患部をさするとかいつて痛めつけてくるパターンだ……

「(そ、それじゃあお願いしようかな?優しくさすつてくれないとダメだよ……?)」

……なんて、作り笑顔で言ってみる。

「(っ!……止めておくわ!ツバでもつけてなさいッ!)」

……おおう、これは対応をマズったか……委員長さんが怒りでヒートアップしてる……

なんでチラチラ見てくるのかは、わからないけど。

「さあ、ここがアマケンの玄関口……一般の人が主に使う出入口だね……職員の人もよく使うけど、裏口もあるから全ての人が使うってわけでもないかな」

「あ、天地さんの説明が始まった。中々楽しかったよ、委員長さん」

「(アナタ……覚えておきなさいよね!）」

…委員長さんのツンがキツイ……あれ? 委員長さんって流星シリーズのヒロインじゃなかったっけ? なんか凄い険悪な感じなんですけど……。

## 13

——アマケン玄関——

「……ここが研究棟の玄関だよ。……そつちは科学館……一般解放を目的とした展示スペースだ。……あつちの方は、職員専用のスペースに繋がっているんだ。……おや？」

入って右側のゲートを通ると科学館、左側を通ると職員スペース……ということらしい。職員スペースの入口付近に昨日の宇田海さんの姿が見える。

……ロックの反応がないってことは、まだ取り憑かれていないのかな？

「ねえ、ロック。……良い設備が揃ってるってことは、見たことないウイルスとか、いるんじゃないかなあ……」

「（おお……それは思い付かなかった。だが、最新のファイアウォールでも搭載されていたら、内部の電波だけで撃破できるような雑魚か、最悪ウイルスゼロって線もあるぜ？ リスクに見合ってるかってなると……微妙な線だな）」

……最近のロックが理でボクを制してくる……

……こんな知的キャラじゃなかったはずなのに……

「（そっか、じゃあ諦めるよ。……頼りになるね、ロックは）」

「もつと誉めてもらっても構わないぜ！」

「(はいはい、凄いなロック)」

「(おざなりっ!?)」

「ああ、彼は僕の助手なんだ。……スバル君は昨日会ったね……おーい！宇田海くん、こつちに来てくれないか……？」

天地さんの呼び掛けに従って、宇田海さんが此方に向かってくる。天地さんの隣に並び、少し窮屈そうに見えるのは、二人の性格比からかな？

「改めて紹介しよう。彼は僕の助手である宇田海君だ。……って、宇田海君……なんか顔色悪いけど大丈夫か？」

「……え、ええ、まあ……」

今に始まったことじゃないような気がするけど……

「昨日は夜遅くまで、残業してたみたいだけど、カラダには気をつけてくれよ」  
「し、心配には及びません……」

「そうか？……ならいいけど。じゃ、話を進めよう……今日は特別だ。キミたちには、この科学館へ無料で招待しよう」

……  
「おお、気前いい……というか入場料があるとか聞いてなかったんですけど、天地さん

「イエーイ！」

無料と聞いてゴン太も大喜びだ。彼は牛丼に小遣いを捧げているようなモノだからなあ……

「ラッキーですね！」

「感激ですわ！」

「いろいろ見ていくといい。きつと楽しめると思うよ……あ、そうそう。後で研究室にも案内しよう。……まだ誰にも見せていない、僕の最新の研究を見せてあげるから……」

ところで、さつきから宇田海さんが喋ってないことが気になる……。

「……（さ、最新の研究を見せるって……？ 私のフライングジャケットは今も研究室に置いたままです……まさか）」

「……さあ、これが入場パスだ。その読み取り機（リーダー）でパスをかざせばOKだから、慌てないでね」

「はい、ありがとうございます」

「いいんだ、スバル君は僕が呼んだつてもあるしね。……その友達に便宜を計るのは当然だよ……。スバル君も楽しんでいってね……！」

各々天地さんに感謝を述べて、科学館に入っていく。



『入場パスヲ、カクニンシマシタ……ドウゾ　　オトオリクダサイ』

ガチャン！、と改札型の読み取り機が入場パスを確認し、通行が可能になる。ボクが最後だったな……

——科学館——

「へえ、結構色々あるんだね」

「……おーアレ見ろよ、スバル！隕石なんか飾つてあるぜー」

……えええ、そんな貴重っぽいものがなんで一般公開されてるんですかねえ……

……惑星探査機も改良されてるらしいし、隕石の入手は難しくなくなったのかな？

「（それより、こっちのブラックホール発生装置とか、凄いやー！）」

「（ブラックホールか……宇宙にはブラックホールの内部にあるサーバーも存在していると聞けど、地球人は既にブラックホールの人工発生に成功していたのか……）」

……ブラックホールサーバーのことかな？

多分又聞きで、正確なソースがあるわけじゃないんだらうけど……

あ、ウェーブホール発見！……微妙な位置だな……

すぐ側で展示されているロケットの影に隠れられれば、何とか見つからないかな？

……なるべく外にあるウェーブホールで電波変換して入ったほうが良さそうだ……

「（さて、大体見終わつたし、天地さんのトコロに行く？）」

「(そうだな……入口近くの展示ロケットにさっきの女がいるから、声でもかけてきたらどうだ?)」

「(?……何で?)」

「(さっきのオマエ、結構楽しそうだったぞ?……相棒のコンディションはバトルに影響するからな……余計なお節介だったか?)」

いや、まあ、楽しかったけどさ……あ、委員長さんの方を見てたら目が合ってしまった。

「……………」

う、うーむ……気まずいぞ、これは……

「え、えっと、委員長さん。……さっきから結構熱心に見てるけど、何か気になるモノでもあった?」

「……………そ、そうね……ココ、中々の施設だわ。……社会見学に良いかもしれないわね……今度先生たちに提案してみようかしら」

…予想以上にしっかりとっているね……

「そ、そっか……アハハ……そうだ、ボクはそろそろ天地さんに、研究室を案内してもらいたいと思ってるんだけど、そっちは、どう?合わせるよ」

「アラ、以外と我が強いわけじゃないのね……もっと自分勝手かと思ってたわ」

……この、女、は……!!

「……そんなことないさ。……団体行動位できるよ。……それで、どうなんだい？」

「そうね……ゴン太！キザマロ！展示は見終わったわね!!そろそろ天地さんに研究室を案内して貰いに行くわよ！」

「ウヒイツ!?了解だぜ、いいんちよう」「ハ、ハイ！」

「……別にボクの言う通りにしなくてもいいのに」

「アラ、勘違いしているようね……ワタシはおじさまをあまり長く待たせたくなかっただけよ？」

「それなら今は、天地さんに気を使うんじやなくて、館内の人に気を使うべきだったね……さっきの大声で、皆こつちを見てるよ」

さつきから無言の視線が痛い……

「……え？あ………ツ！スバル君!」

「それじゃあ、先に天地さんのトコロに行つて待つてるから……」

……ふふっ。

「(オイ、スバル。やっぱり楽しんでんじやねえか?)」

「(………黙秘で)」

——アマケン玄関——

あ、天地さんだ。さっきの宇田海さんは……どこかに行ったのかな？

確かもう既に研究室の物陰にスタンバってるんだっけ？

「…おつ、もう科学館の見学は終わったのかい？じゃ、次はボクの最新の研究を見せてあげよう……場所は研究室だ、スバル君のクラスメートたちが来たら、案内しよう。……来たようだね、どうだった、科学館は？中々楽しめただろ？」

「はい！今度先生方に社会見学の実施地として提案してみようと思いますわ！」

「それは良かった……！いつでも大歓迎だよ……さ、では案内しよう……と、これが『職員パス』だよ。これを入口でかざせば入れるから、僕の後ろについてきてね」

『職員パスヲ、カクニン シマシタ。ドウゾオトオリクダサイ』

……ガチャン！

「さあ、この先のエレベーターに乗って上に上がるよ……みんな入ったね……？」

——アマケン玄関・二階——

「ここが職員の休憩スペース……まあ、憩いの場ってヤツさ。……そしてあそこのエレベーターから、僕の研究室に行けるんだ」

——研究室——

「ここが研究室、僕の仕事場だ。……自由に見学して行ってくれ……中々見えるモンじゃないぞ。まだ発表前の発明もあるからね」

「わ、私のフライングジャケットも発表前です」

「この壁に掛かっているのは何ですか？」

「おつ、良いものに目をつけたね……キザマロ君っていったかな？……それはまだ発表前だから大きな声では言えないけど……」

・・・ドクン　ドクン　ドクン

「……………ケットだよ。僕が開発してるんだ」

「ツー（い、今なんて!?もしかして『ジャケット』って言ったんじゃないや……そ、そんな……」

……宇田海は『……………ケット』という言葉をも自分のフライングジャケットのことだと  
思い込み、研究室にある、別の勝手口から屋上へ出て行ってしまった。勘違いとも知ら  
ずに……………

「なるほど……………これが最新の『ケット』の設計図ですか……………ん？……………これは、何ですか  
？……………このケットの設計図の隣に掛けてあるヤツです」

「それは、さっきの助手が開発してるやつだよ。『フライングジャケット』って言ってね、  
結構完成度が高そうなんだ……………うかうかしてると、僕も追い越されてしまうな、ハッ  
ハッハッハ……………さて、そろそろ疑似宇宙ツアーの時間だ」

「ぎじうちゅうツアー？」

「ふふふ、まあ、見てからのお楽しみさ……………科学館の展示スペースの一番奥が入れなかつ

ただろ?……そこで見せてあげるよ、さあ、行こうか」

——科学館・疑似宇宙空間・入口——

「さあ、受け付けは済んだかな?ここから先は宇宙空間を再現した場所になってるから、当然酸素もない、重力もない……と生身の人間では活動できないからね。さつき受付でもらった『宇宙服』を着ていくよ。……さあ、疑似宇宙ツアーのスタートだ……!」

——同時刻・アマケン屋上——

「同じです……同じですよ……あの時と……ま、またあんな思いを繰り返すなんて……ううう……」

宇田海は悲しかった。やっと、今度こそは……!と思つて信じた相手がまたしても裏切っていたからだ……

『だから言つただろう?フフフ……』

「裏切りこそ、この世の本質なんだつて」

「お前は、さつきの……わ、私はどうすれば……」

「簡単なことだよ。……君を裏切つたヤツには罰を与えてやるんだ……そうすればキミの気分も一気に晴れるはずさ」

「天地さんに、罰を……私が……?」

「フフフ……心配は要らないよ。……ボクがチカラを貸してあげるから……さあ、ココ

口の闇を解放するんだ！」

この、白鳥擬きを、受け入れて、天地さんに罰を、与える……

そうだ、あの人が悪いんだ……！私を裏切って……

…当然の報いを与えてやる！

——疑似宇宙——

…おお、浮いてる！

「凄いな、コレは……」

「疑似宇宙へようこそ！参加者はお客様で最後のようですね……それではトビラを閉めさせて頂きます」

スタッフか……まあ、宇宙空間の再現だもんね、監視をつけるのは当たり前か……

「ツアーは間もなく始まりますので、それまで暫くお待ちください……」

やった、自由に動けるぞ！

…お、木星のレプリカの側に光るモノが……

お、HPメモリ。やったね！でも宇宙服じゃトランサーに読み込めない……後でまた

取りにこよう……

お、スタッフの人が集合をかけているぞ。

…そろそろスタートかな？

「皆さん、疑似宇宙へようこそ！……って天地所長も参加するですか？」

「ああ、今日はこの子たちの付き添いでね……まあ、僕のごことは気にせず、いつも通りやってくれ」

「わかりました。では、改めまして……皆さんこんにちは。私はこのツアーの案内人です……どうですか、疑似宇宙は？本当に宇宙に來たみたいでしょう？……驚きはまだまだありますからね。それじゃ皆さん、私の後に着いてきて下さい」

さっきのスタッフ、もとい案内人の女性の指示に従って、まずは入口だった地球のレプリカを見に行く……サイズ比を見るに、現実のサイズ比をもとに製作したようだ。

……凝ってるなあ……

「これは、地球を立体再現したものです。『地球は青かった』これは大昔の人が残した言葉ですが、確かに目を奪われるほど青く、美しい……それが私たちの星、地球です」

「これは土星です。土星は地球の周りを回っていることで有名ですが、このリングのようなモノはなんででしょう？」

「ハイハイ！大きなドーナツツ！」

ゴン太エ……

「中々ユニークな答えですね！でも、残念……えっと、じゃあキミー！」

周りを見渡すが、案内の人が指す先にはボク以外誰もいない。



「この、わっかは何で出来ているでしょうか？」

……ええっと。この体に憑依？したときに流れて来たスバル君の記憶に確かあったよ  
うな……

「……土星のわっかは、小さなチリや氷などが集まって、わっかみたいに見えています  
……だったかな」

「お見事！大正解です！」

……フウ、ていうかテンション高いなこの人……

「やるじゃないの！」

委員長さんが話しかけてくる。どうやら引きこもりが土星に詳しいとは思っていないな  
かったらしい。まあ、当たり前だよね……

「ちよつとは見直した？」

「……アナタねえッ！」

……このツアー、以外と楽しいな

「……」

天地さん？

「お次はこちらです……流星群ですよ、ロマンチックでしょう？」

「うわあ、ステキ！」

「委員長さんにも素直な部分があったんだね」

「……………ツ!!」

あ、またキレてる……

…だって委員長さん、いじりやすいんだもん……

可愛いし。

「でも、確かに凄いな……」

「フフフ、どうだい？ スバル君……中々いい笑顔しているよ」

「え、そうですか……？」

「やっぱりキミは先輩の息子だよ……宇宙のこととなると目の色が変わるもの」

「（それは、いつか宇宙にダイゴさんを連れ帰りに行くから、かな……あかねさんを立ち直らせるために……！） そうですか……？」

「次にお見せするのは……」

『白鳥の舞です』

「そう、白鳥の舞です……ってそんなのではないわよ……！ 誰、今の声は……？」

ブフツ！ 思わず笑つちやつたよ……このスタッフさん、ノリ良すぎない……？」

『こつちですよ』

「う、宇田海くん？」

って、ええっ!?

「バ、バカな!宇宙服も着ずに……」

「宇宙服なんて必要ありませんよ……私は新しく生まれ変わったんですから……」  
……え、それ理由になってるの?

あ、変身した……

「キヤーッ!」

「か、怪物ですッ!」

「あれは……」

「(ああ、おいでなすったな!)」

「う、宇田海君!一体どうしたんだ!」

「どうした、ですって?……よくもそんなコトが平気で言えますね……人のコトを裏切っておいて……ッ!……私は、天地さん、あなたに罰を与えに来たんですよ。……」

さあ、見るといいです!」

「やばい!スバル、ヤツから目を離せ!」

「もうやってるよっ!」

「ハッ!」

……多分後ろの疑似宇宙装置の上で踊ってるんだろうな……

「な、なんだ？」

「あれは、白鳥の舞？……ア、アラ？変だわ……」

「カラダが……」

「勝手に……」

「うわあああ！」

皆さんのコンベネーションに脱帽。そしてゴン太エ……

「かかりましたね……」

「さあ、チカラ尽きるまで踊り続けるがいい！」

「どうしたって言うんだ、宇田海君！こんなコトしてどうする!？」

「………わかったんです。裏切りこそこの世の本質だ………ホント、今更ですよ………直にその宇宙服の酸素は切れるでしょう。………それまでこの宇宙をさまよって下さい、踊り狂いながら………私が受けた苦しみに比べたら、まだ楽に決まってる」

「う、裏切り？苦しみ？一体なんのコトだ！説明してくれ！」

「そうやって、そうやって心配するフリしてまた私を裏切るんです………もう騙されない！」

疑似宇宙装置の電脳に入った……

「ここから、ゆっくり見学させてもらいます………死の踊りを……ね」

そうやって宇田海、いや、キグナス・ウイングはスクリーンに映りこんだ。やつぱり生物的で気持ち悪い……

「クソッ！……アイツはキグナスのやつに取り憑かれたのか……！」

「キグナス……白鳥？」

「ああ、白鳥座のFM星人だ……ヤツの踊りを一目でも見るとつられて踊りだしちゃうんだ。……踊りを解くにはヤツを倒す以外に方法はない」

「そっか……キグナスは？FM星人としては強いのか？」

「以前のオツクスや、ウルフのようにパワーに優れているわけではないが、ヤツには羽がある。……機動力は高いはずだぜ。……正直、アイツらより遣りにくいはずだ」

「……やるよ、やらなきやみんな死ぬ。……それに偶々今回は行き先に現れたけど、アイツもロツクの『アンドロメダのカギ』を狙って追ってくるんでしょ？なら、電波変換に馴染んでいない、今が一番だ……それに軽口を叩ける相手が死ぬのは困るしね」

「フーン！よく言った！……オレたちのチカラをあの鳥野郎に見せてやろうぜ！」

「うん、ベルセルクの雷撃で焼き鳥にしてやろう！」

さて、ウエーブホールを探さないと……

## 14

——疑似宇宙——

…ビジュライザーを宇宙服の上からなんとかズラして装着することに成功したボクは、疑似宇宙装置へ続くウエーブロードを見ていた。

「やっぱり宇宙空間にも、ウエーブロードはあるんだね」

「当然だ、宇宙空間にも電波は存在するからな……しかし……」

「この疑似宇宙空間にはウエーブホールがない……というか、あつてもロックのデータカードをトランサーにセット出来ないね」

…まずはこの疑似宇宙空間から脱出しないと……

…出入口は……地球だ。ドアの開け閉めをしたのは……

「やっぱり閉まつてる……あのスタッフの人を探して、ドアのロックを解除しよう」

「おう！ スタッフの女は……居たぞ……金星のレプリカの側でダンス中だ！」

おお、ロック有能！

「め、めがまわるわ、もうダメかも……」

呂律がもうまわってない……というか、回転中に喋ると舌噛むぞ！

「スイマセン！外に助けを呼んでくるので開閉用のカードか何かを下さい！……ちよつとポケット失礼します！」

…スタツフの人に聞こえるように大音声で叫び、スタツフの人のポケットを探る。

…宇宙空間で人間がダンスを踊っても、回転速度には限度がある……！その際に……あつたぞ、トビラカードだ！

「よし、急いで脱出しよう、ロック！」

トビラカードを地球のレプリカに空いている隙間に差し込む。ゲエツ……暗号式!?

『オープーン！暗証番号を入力するのだ。……ヒントは太陽系の惑星の数』

ええと、水、金、地、火、木、土、天、海……8だ！

『暗証番号を確認した。……オープーン！』

「よし、外に出たよ！」

入り口に誰がいる！さつき受付してもらった人だ！

「あの、疑似宇宙のなかで集団催眠事件です！全員が白鳥の舞を踊っているんです！助けを呼んで下さい！」

「しかし、予備の宇宙服が全て破壊されているんだ……助けに行くには宇宙服が足りない……」

「なら、これをー」

「ああ、助かった……って、この宇宙服、小さな穴が空いているぞ！何か尖ったものでも触らなかつたか!？」

「まさか、取り損ねたHPメモリ!?あれは長方形で四隅が尖っていたハズ……何てモノを置いているんだ!」

「これ以上穴が広がったら、宇宙空間での活動は不可能になる!クソツ!助けに行きたいのは山々だが……この施設は頑丈に出来ているから破壊して救出することは出来ないし、この近辺に宇宙服を扱っている場所はない!このままでは……」

「……やっぱりキグナスを倒すしかないのか!」

科学館内のウエーブホールに近づき、ロケットの影に隠れるようにロックのチカラが宿ったカードをトランサーに読み込ませる……

「(ロック!行くよ!)」

「(おう!とつととキグナスのヤロウをデリートしちまうぞ!)」

電波変換! 星河スバル、オン・エア!

ー科学館のウエーブロードー

「フウ、やつとウエーブイン出来たね」

「オイ、あつち見てみる、スバル……ラッキーだ。こことさっきの宇宙はウエーブロー



ドで繋がっている……あの先はおそらくさっきの疑似宇宙だぜ」

「うん、早く助けに行こう！」

「へっ！あのオンナを助けに行くんだろ？」

「違うから！皆一緒だよ！」

……茶化さないですよ……それに途中でウエーブロードが途切れている……

「あれは……ブラックホール発生装置……アレで電波の流れを変えれば……」

「だが、確か壊れて修理中だったな。……ウイルスによるシステムダウンなら、そいつら  
をぶっ倒しやあ解決だぜ！」

「OK……まずはブラックホール発生装置だね」

——ブラックホール発生装置の電脳——

「やっぱりウイルスに侵されていやがったか！」

「急いでいるんだ……悪いけど遊んでる暇はないよ」

……ビリーエースが2体とそのGタイプ！

ビリーエースは空中に浮遊しながら雷球を発射してくるウイルス。

その雷球は、着弾するとカラダを痺れさせ、一時的とはいえ行動不能に追い込むこと  
のできる危険な攻撃のため、決して油断は出来ないだろう。

しかし、本体の動きは緩慢で狙ってくださーいと言わんばかりだ。……つまり何が言いた

いかとうと……

「ウオーロックアタックの、カモなんだよオッ！」

「ウオオオオッ！」

ロックの雄叫びと共に、瞬時にノーマルタイプのビリーエース一体に接近、ヒートアップで殴り飛ばし、デリートする様を見ることがなく次のビリーエースへ。

メットリオなんかは目玉と輪郭しかないのに、多くの感情を察することができたけど、このビリーエースは敵がすぐ側に迫ってるっていうのに、さっきまでと全く反応が変わらない。……ロングソードで斬り捨て、最後のGタイプに接近する。

ノーマルのビリーエースよりも、大きな雷球を発射してくるが、追尾性能があってもこんなノロマに捉えられるほどヤワじゃない。ここまででチャージしていたロックバスターを放ち、命中を確認してからパワーボム先生を投げる。……きたねえ花火だ。

よし、終わった……！急いでオンに切り替えないと！

ーブウーン！

「作動したみたいだな……これでウエーブロードに変化が起きてるハズだぜ」

ー科学館のウエーブロードー

「よし、道が繋がってる！先を急ぐよ、ロック……！」

「オマエがそんなに焦ってるなんて……」

…いいから、黙ってて！

「知り合いの命が掛かってるんだ……！それに被害者全員死亡……ただ一名を除いて……とかになったら後ろ指を指されることになる……まともに出歩けなくなるよ！」

母さんにだって負担を掛けることになってしまう。

…それだけは！

「マジか……」

マジなんだよ、最近の電波社会は……！

——疑似宇宙のウェーブロード——

「やっとなつた……ほら、あそこだ！ウェーブインするよ……！」

あと、何分だ……それとも何時間かは持つのか……？

もし、ボクみたいに宇宙服に小さな穴が空いている人がいたら……!?クソツ！何もわ

からない！

——疑似宇宙の電脳——

「この奥だな……キグナスのヤツがいるのは……ヤツのことだ。今頃ニヤけた顔してアイツらが弱っていく様を見物してるに決まってる……よし、行くぞ！」

わかってる！RTAだ！容赦しないからな、キグナス！

「このウェーブロード……」

何時ものカタチじゃない?…アトラクションに付き合ってる暇は……!

『クエーーツ!』

「何処だ!？」

「スバル、上だ!」

え?うわああああ!…なんだ、オウガテイルかと思った…つてそうじゃない!この喋りそうなアヒルは……

『そのオマエ!何者だ?』

「うわっ!ホントに喋った!」

『クエーーツ!オレたちはシタツパー!キグナス様の忠実な僕だ!』

「…すごいや聞いたことあるな。キグナスの手下には妙なアヒルどもがいると……」

『…アヒル?今アヒルと言ったのか?クエーーツ!赦さん!…オレたちはれっきとした白鳥だ!』

「全然白っぽくないじゃないか!…これならブラックスワンならぬ、イエローズワンのほうがまだマシだ!」

『き、気にすることをよくも……食らえ!星のダンス!』

隊列を組んで踊り始めた……?ツ!星が落ちてくる!

「避ける！スバル！」

ボクはポケモンじゃない！クソツ、後で丸焦げにしてやるからな！……絶対にだ！

『クエツへへへ!!どうだ見たか!?!』

「中々やるな……あのアヒル」

ロツクが認めた、だど?!いや、煽ったのか……

『ま、また言いやがった！クエー！もう許さねえ！』

アヒルの恐ろしさを思い知らせてやる！』

「あつ、今自分でアヒルって……！」

「自覚はあるってことか」

『……クエー！』

また星を落としてきた……もうムチャクチャだ！

『クエー！絶対にオマエを星屑にしてやる……みんな配置に付け!』

……どこかに飛んで行った……？

「オイ、スバル……向こうを見ろ……あそこにあるロケットを使ってあの鳥どもを撃ち落としてやれ……そうすればさつき見た道をふさいでいる星が退けてさきに進めるよ  
うになるはずだ」

「わかった……パワーボム投げて撃ち落とせないかなあ？」

「無理だ！……射程が足りなすぎる！」

「わかった！……フウ……よし、行くよ！……撃ち落としたシタツパーどもは焼き鳥にして、キグナスに返上してやろう！」

ちよつと、落ち着いた！シタツパーどもめ……どうしてくれようか……

「そ、そこまでしなくてもいいと思うぜ？」

チツ、しょうがない……ロックの協力を得られなくなったら本末転倒だしな……

「んじや行くよ！」

「おう！」

……着いた！このロケットを操作して………今だ！

『く、クエー………これじゃ焼き鳥だぜ………キグナス様ア！』

よし、倒したぞ………次だ！

ー五分後ー

これで、最後！

『く、クエー………』

「へっ、ざまあみろだ」

まったくその通りだよ！

…あ、通路を塞いでいた星が取り除かれた……  
やっぱりこのアヒルたちの仕業だったのか！

「よし、先に進めるようになった……！」

——疑似宇宙の電腦2——

まだ続けるのか……

『クエー——！待ってたぜ！ここはオレの持ち場だ……オマエを星屑にしてやるぜ——！』  
……そこオツ！

『く、クエー——！覚えてろ——！』

セリフが三下過ぎる……

——五分後——

狙い打つ！

『クエー——ツ！？キグナス様——！』

終わりだ！早く先に進まないと、委員長さんが、皆が……！

——疑似宇宙の電腦3——

「うおおおお！」

『クエー——ツ！』

「これで四匹目……」

「オイ、スバル……先に進めるようになったぜ……おそらくキグナスはすぐそこだ……気を引き締めろよ」

「へん！誰に言ってるのさ……！」

「その調子だ……」

——疑似宇宙の電腦・最深部——

「……見つけたぞ！」

その羽引きちぎってくれるわ！

「……ん？こんなトコロに、人間？誰ですか？アナタは……」

「オイ、キグナス……オマエだろ？」

……やっぱりロックの知り合いだったのか、キグナスって……

「……まさか、ウォーロックかい？フッフ、驚いたな、こんなトコロで会うなんて……それにしても何だい、その格好は？キミともあるうものがそんな小さな子供に取り憑くとはね」

「それはお互い様だろうが！オマエもそんな青瓢箪を利用してるじゃないか。……合体する前のそいつ、1人でこんな大事起こせるようなタマには見えなかつたぜ？オマエ、何を吹き込んだ？」

「フッフ……別にボクは何も……これは彼の意思さ……ね、そうだろ？」



「…裏切られたんです。フライングジャケットはワタシが開発したのに！天地さんは、それを……」

——疑似宇宙・現実世界——

「ハアハア……あ、あそこに映っているのは……まさか……ロックマン……？アレは夢じゃなかったの？」

白金ルナは驚愕と安堵をその表情に浮かべ、次に何故か気恥ずかしくなり、そして腹が立つてくるのを感じた。

…ワタシは一度しか会っていないハズなのに…？

『…裏切られたんです。フライングジャケットはワタシが開発したのに！天地さんは、それを……自分の手柄にしようと……』

「そ、それは誤解だ！僕はそんなことしない！誓ってもいい!!」

『おや、聞こえていたんですか？天地さん……今さら言い訳は見苦しいですよ』

「本当だ！断じてそんなコトはしていない……人の発明を横取りなんて！」

『天地さん、ワタシはアナタに感謝しているんですよ……だってアナタのお陰で気づいたんですから。裏切りこそ、この世の本質だとね』

——疑似宇宙の電脳・最深部——

「…ダメだ、コイツ、全く耳を貸さないな……」

「なら、話を聞かざるを得ない状況をつくるだけだ！委員長さんたちが、今この時も、酷い目に遭っているんだから！話はその後……キグナスはデリートしていいんだよね、ロック？」

「おう！話を聞かないヤツにはチカラづくだ！……でないと、こつちがやられるしな！」  
「その小さいの、中々言うじゃないか……ウォーロック、『アンドロメダのカギ』はちやんと持つてるんだろかね？……今ここで返してもらおうよ、フフフ……さあ、いくよ」

「もう、裏切られるのはゴメンです……裏切られる位なら……裏切られて傷つく位なら……こつちから傷つけてやるんだ！」

「来るぞ！容赦するなよ！」

当たり前！

「行くよ、ロック！ウェーブバトル、ライドオン！」

——疑似宇宙の電脳・最深部——

「ウエーブバトル、ライドオン！」

バトルスタートとともに、キグナス・ウイングは、その代名詞とも言える背中の翼、『キグナス・ウイング』を大きく羽ばたかせ、空中に滞空した。ウオーロックアタックで届く距離でもないし、ロックバスターでは、いつまでかかるかわからない！

…ゲームのように行かないか……！

「ワタシの行為を邪魔すると言うのなら……アナタにも痛い目に遭ってもらいましょうか……！」

…そう言つて背中の翼に生えている羽を発射してくる。

…あまり高精度ではないけど、誘導攻撃のようでこちらを追つて来るのがわかる。

……しかし、これは思つていた以上にヤバイ！こちらの攻撃は届かないのに、相手の攻撃は通るなんて……

……ここまで、この電脳で手に入れたバトルカードは四枚、『ワイドウエーブ』、『サンダーボール』、『ジェットアタック』、『ゴーストパルス』……今までのバトルカードでは、

上空で滞空しているキグナスに当てることが出来ない。

……………この中で何か使えるカードは……………

「オイ、スバル！ベルセルクを使え！」

「ダメだ！ベルセルクなんて使ったらアイツに警戒されてしまう……………最悪、今よりもっと高度を上げられて、手が付けられなくなるかもしれない！」

向こうがギリギリこちらの攻撃が届くかもしれない位置にいるのは、あの羽の射程があの辺りまでだからなんだろう。でなかったから、もつと離れているはずなんだ。宇田海は疑り深い性格……………つまりは慎重だ。そんなヤツが、倒すべき邪魔者に対し、まずは安全圏を確保することは、簡単に予想できる。

……………誰だってダメージなんて受けたくないんだから。それが戦闘初心者なら当然だ！

「だからこそ……………！」

そう、だからこそ……………向こうがこちらの排除を断念し、より高く飛翔される前に、倒す！

……………この組み合わせなら！

「フフ……………ウオーロック、そちらの攻撃は届いていないようだけど……………？この豆鉄砲みたいな攻撃をチマチマ続けてボクを倒すつもりかい？」

「うるせえ！スバルは勝てる……………！何故ならオレの相棒ってヤツだから……………信じてん

ぜー！」

……ふつつ、ロックの信頼が厚くて困っちゃうよ。ホントにさあ……

なら、見せてやるとしようか！ロックマンの真骨頂、多彩なバトルカードによる極められた汎用性を！

「まずは、コレだ！ロックー！」

まずはワイドウエーブを発射し、キグナスに回避運動を強制させ、誘導する。

「ウオオッー！」

次に、ウオーロックアタックでキグナスのいる方向に突進パワーで跳躍する！だけど、キグナスの滞空高度にはまだ足りない……それ、今だ！

「ジェットアタックー！」

ジェットアタックはその名の通り、左腕にジェット……まあ、ロケットのような円錐形に似た推進機関を展開し、左腕に引つ張られる形で高速突進を行うバトルカード。このとき、バトルカードの使用者は発動中のみ僅かに滞空し、重力の影響を受けなくなる！

……そうじゃないと、左腕に推進機関とか、怖くて使えないしね。

「何ッーこの、高度まで……ッー！」

今さら慌てても、もう遅い！既に追撃のバトルカードはセレクトしている！

「ハアッ！」

あまり、正確に狙いをつけられないので疑似範囲攻撃のバブルフックを展開、キグナスに向かって腕を振るう。

「……ッ!？」

泡に閉じ込められたキグナスが、バトル開始時に居た、疑似宇宙コントロールシステムのあるウエーブロードのひらけた場所に墜落する。

…手間取らせやがって……!

「ハアッ!ハアッ!何だったんだ……アレは、バブル……!クソッ!動きを封じてワタシを引きずり落とすために……」

「考察してるとこ悪いけど、斬らせて貰うよ……天地さんとの話は、それからだ」  
グラビティプラスがないので、再び飛翔する前に片付けなくては……!

…ベルセルクツ!!

「うおおっ!」

サンダースラッシュ!

「グハッ!ウイングフェザーで攻撃を……」

サンダースラッシュ!

「グハアッ!!ダ、ダンシングスワンを……」

サンダーズラッシュユ!

「グウツ……し、シタツパードもを盾にして脱出する……!」

サンダーズラッシュユ!

「く、クツ……!」

よし、今だ! ヤツはサンダーズラッシュユのマヒ付与で動けない……ト

メ　だ!

「これでえツ! 消えろオツ!」

ライトニンググウツ! エクスタアミネエトオオツ!!

「グハツ……や、やるね、ウォーロック……!」

「う、うう……!」

まだデリートされない……?!

……こつちはリカバリー待機入ってるのに!

『……聞こえるかい? 宇田海君……もうやめよう。……僕の話聞いてくれ』

天地さん……説得フェイズ!?

『宇田海くん、キミは何か勘違いしてるよ……!』

「……あ、天地さん……そうですか、躍りは解けてしまいましたか……!」

こつち側から確認できる……皆ダンスをやめてるぞ!

『僕は人の発明を横取りなんてしない』

「ウ、ウソをつかないでください……ワタシは聞いたんですよ……アナタが子供たちに  
フライングジャケットを自慢しているのを……」

『それは違うわ!』

委員長さん!

『フライングジャケットは助手が作ったモノだ……天地さんはそう言っていました』

『よくできてるって、ほめてたぜ』

ゴン太! キザマロ!

「ウ、ウソだ……! そ、そうか……キミたちもグルになってワタシを騙そうとしているん  
です……!」

『どうしたら……どうしたら、信じてくれる? 僕の言葉を……』

「信じられるモノか……人の言葉なんて……そ、そうだ、こうしましょう……天地さん、  
これからワタシが証明してみせますよ、人なんて信じたらどんな目に遭うか……を!」

『どうするんだ?』

「……ヘルメット、脱いでください、今そこで」

「何だって!?!」

『ヘルメットを脱ぐって……ここには酸素が無いのよ!』



スタッフの人が非難するけど、当たり前なんだよなあ……気圧とかあるし……

『今さっき、ワタシが酸素を充満させた』もしそう言ったら、信じてもらえますか？ワタシの言葉を……！』

『……』

『酸素を充満ですつて？この疑似宇宙にはそんな機能、付いてないわ！』

『……昨日のうちに装置を取り付けたと言っただら？』

『ウソよ……』

「ほら、やっぱり。信じられないでしょう？信じられるわけありませんよ……ワタシがウソをついているかもしれないと……そう疑ってるんですよ……そうですよ！そういうものなんですよ……この世に信じていいものなんて何一つ、存在しない！ましてや、他人なんて……!!」

『ヘルメットを取るのか？』

「そうです、それだけのコトです。……でも出来ないでしょう？できっこないんですよ……」

『信じるよ、宇田海君……』

『ちよ、所長!?……ウソでしょ……?』

「(無理に決まってる!)」

『キヤーーッ!! って、あら?』

『!!!』

『……フリー、確かに酸素だ。……でもちよつと薄いぞ……まだまだ改良の余地はありそうだな、その装置』

『ウソ……ホントに酸素が……』

「バ、バカナ……も、もし……もしウソだったらどうするつもりだったんですか?」

『そのときは、その時だよ。……でも、これだけは言えるぞ……僕はキミを信用してる』

「し、信用って……! たったそれだけのことでアナタは命をかけるというんですか!」

『僕の知ってる宇田海君は、発明で人を死なすようなコトを絶対にしない』

「そ、そんな……」

『何度でも言う。僕はキミを信用してる。……だからキミもボクを信用してくれ!』

……って、このセリフ、ちよつと臭いか? フッフ……』

「……ウウ」

「あんなの、信じちやダメだよ……」

「コイツ、まだくたばってなかったのか!」

「(ダメだよ! ロック、ここは宇田海さんと天地さんに任せよう……ダメーヅを与えすぎると、宇田海さんをホントに殺しちゃうよ!)」

「チツ！」

「…ああやって、またキミを騙す気さ」

『宇田海君、一つ聞くが、なんでこの世にブラザーバンドがあるか…キミは知ってるか？』

「な、何を急に…そんなの便利だからに決まってるじゃないですか…！」

『…違うよ。…ブラザーバンドが必要とされる理由、それは…繋がりこそ人の本質だからだ』

「…！」

『キミの過去は知ってる。だから、キミが世の中に失望してしまうのもわかる。…でもそれが、この世界の全てだと思わないで欲しい』

「耳を貸すな！裏切りこそが全てだ！」

『もつとよく、目をこらすんだ…そうすれば、見えてくるはずなんだ！…裏切りとは違う、この世界の明るい部分が…!!』

『この世界は、そんな悪いもんじゃない!!』

『キミも、きつとそう思える…僕の言葉を信じるんだ、宇田海君！』

「ううううつつつ!!」

変身が解けていく…っ！リカバリー30！…間に合ったか…

「な、何で!!ギャー……っ!!」

「元に、戻った……」

「心に巢食っていたキグナスを、自分の意思で葬ったんだらうよ……これが、人の意思が持つチカラか……中々侮れねえな」

「ロツク……」

『宇田海君!大丈夫か!?宇田海君?!』

『宇田海くん!』

「おい、騒ぎが大きくなる前に……ここからずらかろうぜ……コイツなら大丈夫だ。……い  
ずれ目を覚ますさ」

「ああ!」

――数時間後――

宇田海さんが目を覚ましたが、記憶は曖昧で、少し混乱してるらしい。

……でも、天地さんが言った、あの言葉ははつきりと覚えてるみたい。

『繋がりこそこの世の本質』って。

いい言葉だと思う。

……ボクはこの世界の人間と、本質的に繋がっているのだろうか……?

――アマケン外観――

「今日はすまなかつたね、……危険な目に遭わせちゃって」

「そんなコトないですよ」

「まんぞく、まんぞく！」

「また、遊びに来てくれよ！」

「ええ、是非！それでは……」

号令らしきものを掛けた委員長さんたちの後ろを歩いていこうとすると、天地さんに話しかけられた。

「お母さんによろしくな！」

「……っ！ハイ！」

「あ、そうだ……『繋がりこそこの世の本質』というセリフ、実はある人から教わった言葉なんだ。……NAXA時代の僕の先輩……つまりキミのお父さんだよ」

「父さんが……」

「どうだろう？キミの心にも届くといいけど……あの子たちがいるなら、余計なお世話だったかな？」

「アハハ……ありがとうございました、では、ボクも帰ります」

「ああ、気を付けるんだぞ！」

「オーイ！」

…ゴン太の声がする……

「置いてくわよ！」

「あ、ちよつと待つてよ！……置いていったのかと思つたよ」

「ふふん！委員長がクラスメートを蔑ろにするはずないでしょう？」

「いいんちよう、ないがしろつてなんだ？」

「自分で調べなさい！」

「アハハッ！……やつぱり面白いね」

「アナタねえ……ところで、アナタ……さつきまでどこに居たの？……見当たらなかつたよな……」

「ゲエッ！勘がするぞい！」

「…偶々あのダンスを見ずに済んだから、外に助けを呼びに行つてたんだ」

「嘘はいつてない、嘘は……」

「そう、でも青いヒーローが現れて全部解決していったわよ？……結構ステキな感じだつたわね……」

…照れ臭いなあ。今までは誰かに戦つた結果誉められたことなんてないし……

「そうなの？……実は着ていた宇宙服が破れちゃつてさあ……」

こんな日常も、ありかもしれない。

「あ、ところで委員長さんたちは大丈夫なの？無重力とはいえ、ずっとダンスし続けたんでしょ？」

「ええ、もうクタクタだわ……」

「委員長さんの白鳥の舞は綺麗だったからねえ……何かやってたの？」

「……いえ、もう疲れたわ。帰って休みましょう……」

「そっか……あ、バスが来たよ」

……帰りのバスで、何故か委員長さんと隣の席になって、睡魔に負けた委員長さんの頭が肩にもたれ掛かってきたのはナイショだ……

いいニオイでした、まる。

## 第三話 『琴座』

## 16

——翌日——

「昨日はとんだ目に遭ったぜ……なあ、スバル？」

「そうだね……飛行している相手がこんな厄介だったなんて、思ってもいなかったよ」  
そう、昨日のキグナスとの戦闘で感じたのがそれだ。

今まで接近戦ばかり行ってきたから、近距離で攻撃を当てにくい、キグナスのような遠距離型に対抗する術を持たなくてはいけない。

…考えはあるんだけど、中々苦労しそうなんだよなあ……

まあそっちは時間もかかりそうだし、ゆっくり進めていけばいいや……確か次のFM  
星人は……誰だっけ？

「よし、んじゃロック……行こうか」

「アアン？行くってどこだよ」

「？展望台に決まってるじゃないか」



「オレにもオマエの行動原理がわかってきた……つまりアレだな？HPメモリだな？」

「おお！わかってるじゃないか……でもそれだけじゃないんだよなあ……」

「残念、半分正解だけどそれだけじゃない……ほら、昨日はかなり急いで擬似宇宙の電脳を攻略したでしょ？」

「攻略つて……まあいい。……それで？」

「ミステリーウエーブとか、取り損ねたヤツが結構あるんだよ」

「ホント、HPメモリ0を笑うヤツはHP10に泣くんだよなあ……」

「ミステリーウエーブう？ああ、正八面体のふわふわ浮いてるヤツか」

「そうそう。ああいうのをマメに取っておくことがだね……」

「ふーん、興味ないね」

「ちよつ……その反応は酷くない？」

「酷いよロック！……中にはHPメモリとかの強化アイテムだってあるかもしれないじゃないか！」

「そもそも、スバルつて被弾しないだろ？……アンダーシャツでも着てればいいんじゃないの？」

「ロックの信頼が厚いのはわかるから、なんとも言いづらい……いやいや、電波変換体を倒した時に使うから！リカバリーとかは要るんだよ……」

……ピロン！

「あ、メールだよ。……何々……」

ーBIGWAVE近日オープン！

レアなバトルカードも用意してるカンジだから、こぞって来てね！

BIGWAVE店長

南国ケン

「…だって、楽しみだね！」

「BIGWAVEだあ？……バトルカード専門の店なんてあるのか」

そりゃ、仕方ないよ。

…電子機器でこの世界は成り立ってるんだ、その電子機器を狂わせるウイルスを倒せるツールとなれば、立派に商売は成り立つんだよ。

「まあ、電波社会ならでは…ってヤツだね」

この世界には、こんな感じで電波社会ならではって商売が意外と多い。特に、ウイルスバスターの得意なバトルナビは貴重で、バトルナビを自作出来るならそれだけで生計を立てていけるほど、というのはスバル君の受け売りだ。

「そういうヤツなら興味あるぜ！早速展望台へ行くぞ！………忍び込むんだろ？」

ロックからの扱いが既に犯罪者の相棒な件について……

「いや、違うって！最近では散々バトル漬けだったじゃないか……だからウィルスバスディングで、お金……ゼニーもかなり貯まってるんだ。わざわざ盗みまでする必要性はないよ」

まあ、カードリーダーの電腦にアクセスして排出されるカードの確率をイジったりするくらいは……

「とにかく！今日はアマケンに行つてアイテムの収集！ついでにバトルしてゼニーを稼ぐよ！」

この世は金だ！

「OKだ、楽しくなってきたぜ、なあスバル？」

「ふふ……そうだね。どんなバトルカードが売ってるのかなあ……」

……ブレイクカウントボムはデカ過ぎて投げられないのが最大のネックなんだよなあ

……

取り敢えずスイゲツザン買つとくか……

ーバスの電腦ー

「つーかよう、スバル。……何で今回は電波体で行くんのだ？」

「それは簡単だよ、ロック。昨日アマケンに行つて見たでしょ？アマケンは内外にあるウェーブホールの位置が、比較的人の目に映りやすいんだ。正体バレしなくなったら

電波体で行くほうが都合がいいんだよ」

むしろ意図的なまでの秘匿性の低さだよ……策士天地さんだった……？  
「なるほど……」

さあ、アマケンへGO！

……ボクを殺しかけたHPメモリを今度こそ回収してやる……！  
ーアマケンー

「着いたな……まずはどこに行くんだ？」

「そうだねえ……」

まずは、科学館に行つて、アイテム回収からの擬似宇宙かな？あとはバトルカードの確保！カードトレーダーを回すために必要だからね。

「じゃあまずは、科学館に行こう……流石に研究室は警備が厳しそうだから、また今度になるかもしれないね」

……実際天地さんが組んだ攻撃プログラムとか、結構エグそうなんだよね……

「そうか……おつ！早速ミステリーウェアブだけ、スバル！」

「幸先がいいね……と、これは装備データ？『ヒキサクツメ』……」

……ロツク用の装備だっけ？カイザーナツクル欲しいなあ……

「コイツは、オレ用の装備データ！ラツキーだぜ！」

……早速装備するロック。装備っていうより、データの塊がロックの中に入ってた……？

「おおお！ロックバスターの威力が上がったようだぜ！」

「ホントかい？……これで貧弱なロックバスターにも頼れるってわけだね」

「そ、そこまでは……わからないぜ」

……まあ、ヒキサクツメって総合的な数値は初期装備と変わらないからね……

状況に応じて使い分けるってことで。

「よし、なら次は擬似宇宙の電脳に行こうか……帰りにHPメモリを取っておかないとね」

——擬似宇宙の電脳——

疑似宇宙の電脳は、ウエーブロード以外が宇宙と星空になっていて、視覚的にもリラックス効果がありそうだ。シタツパーがいらないだけで、こんなにも素敵な電脳だったなんて……製作者の匠の技ってヤツだね！

「見てみなよ、ロック。空に星座が映ってる。キレイだね……」

「へっ、オレはその星座に似たヤツをたくさん見てきたからな……今さらってヤツだぜ」  
「そういえば、ロックのFMプラネット時代の話を聞いたことがなかったね。……どんな感じだったの？」

「そうだな……FMプラネットの戦士として鍛えながら、その辺のヤツに喧嘩を売ってたな……へっ！コーヴァスの野郎、今度会ったら決着をつけてやるぜ……」

……ロツクエ……

そのコーヴァスにあと半年以内に会うんですけど、カミングアウトしちゃっていいのかなあ……

ーアアメケン・タ方ー

「さ、そろそろ帰ろうか」

そろそろ切り上げるべきなんじゃないかな。

……この辺のウィルスは粗方狩りつくしたハズだし。

いやあ、良いことをすると気分が晴れるね。

「中々いい場所だったな……バトルカードの試し撃ちにちょうどいいノロイウィルスばっかりだったぜ」

…確かに。でもここからインフレし出すんだよなあ……

普通に店売りでギガクラスカード売ってるし……

……いや、ウィングブレードやグレイブメテオレーザーがサテラポリスの最終兵器扱いだから、売ってない可能性のほうが高そうだ。

そういえば、メガクラスカードってどうなってるんだろう。ゲームじゃ対応した電波

体が出現してたけど、この世界はどうなっているのかな？

「何ボーツとしてるんだ、スバル。オマエらしくないぜ」

えええ……

「……ロックには、いつもボクが何をしているように見えるの？」

「そうだな……バトルしてるか、その戦術を考えてるように見えるぜ……後、時々強敵と戦いたがつてるフシもあるな」

ガチ勢のバトル脳じゃないか！

「酷いなロックは……取り敢えず、ウエーブアウトして帰ろうよ」

流石にもうクタクタだよ……しかし結構稼げたぞ。

ロックがウィザード扱いになったら、バトルウィザードとしてウイルス駆除の依頼でも受けてみようかな？

……バトルオペレーションしてみたいし。

「おうー！」

ウエーブアウト！コダマタウンへ……

「取り敢えず、あと数日はこんな感じでアイテム収集と、資金作りね」

コダマタウンへの道すがら、ロックと今後の話し合いをする。今必要なのは金だッ！

「まあ、しょうがねえな」

「じゃあ、今日は帰ってすぐ休むよ……あ、コダマタウンが見えてきた」

「やっぱり自宅が一番だね！」

「――数日後・アマケン研究室――」

天地さんのアドバイスに従い、大型化させた翼をフライングジャケットの基部に接続する。

慎重に、慎重に……接続した位置のズレで、左右のバランスが崩れたら大変だ。そーつと接続し、ズレがないことを確認する。

「……や、やつと完成です！」

「やったな！」

「や、やっぱり天地さんの言う通り、翼を大きくしたら空中でバランスが取れるようになりました……！」

「今日は完成記念に、パーつと飲みに行くか！」

「い、いいですけど……天地さん、また太りますよ」

ブラザーになったことで知った天地さんの秘密は、最近食べ過ぎで体重が増えていることだった。

天地さんらしいなと笑いを忍びつつ、まあいいか、と今日は飲みに行くことを決める。……思えば以前と比べて相当変わったな。記憶は曖昧だが、やはりあの青い少年が何か



してくれたのだろうか。

「な、なぜそれを……」

「な、なぜって……私は……私は天地さんのブラザーですし」

「ふふふ、そうだな……よし、行こう。……言つとくけど、僕は飲むからなー！」

——星河家——

『…スバル、スバルよ』

「う、うーん……」

『お前の進む先に大いなる災いが訪れるであろう……お前に与えられた未来は2つ……災いを打ち破るチカラを手に入れられず、災いの渦に飲み込まれる破滅の未来……そしてもう1つは自らの心を開き、災いを打ち破るチカラを手に入れ闇に挑む戦いの未来……どちらの未来を選ぶかはお前次第だ……いつも見ているぞ……』

「ううう……遂にボクはこんな幻聴を……う、うーん」

……バサツ！つと、布団から体を起こす。

一度やってみたかったんだよね。

悪夢にうなされて飛び起きるってやつ。

「ふう、夢か……」

…あれ？ロックがいない。ああ、展望台だっけ？

「ふああ……よく寝た……あ、メール来てる、BIGWAVEからだ」

…ピンポーン！

おっと、誰か来たようだ。今日はあかねさん、パートで居ないんだっけ……出るか……

ピンポーン！ピンポーン！

うるさいなあ……誰か来てたっけ？この時期に……もうかなり断片的にしか思い出せなくなってる気がする……

ロックは……ええつと、どこだろう……？

「はい、どちら様ですか？」

この家、インターフォンがあるのに玄関にモニターもないぞ……しかし、チェーンはある。念のため掛けておくか……

…こんな朝っぱらから来るなんて、まあ、しょうがないよね。

ガチャツ！ガタン！

「ウワアツ！」

何だよ！足入れてきたぞ!?

「ムウ、ゼット波の数値が異常に高い……もう少しジツクリと調査する必要アリ……」

うわっ！……チエーンかけてるのに入ろうとしてくる！

「ちよつと！何やってるんですか！」

出るところ出ますよ！という定型文を飲み込み侵入者をじっくり観察する。

「この町に一体何が起きているというのか……必ず本官の手で解決してみせる!!」

「……………」

「……………」

そこまで言つて一人言モードに入つていた刑事らしき人物がボクの目線に気づいて黙りこむ。へ、変な空気になってきたぞ……

「……すまない！またやってしまった！……すまん、ボウヤ！本官は職務に没頭すると、周りが見えなくなつてしまうのだ！……いきなり入つて悪かつた！」

「い、いきなり何やってるんですか……」

「本官は、五陽田ヘイジ。ある理由があつて、この町を調査している」

「本官……貴方は警察の方なんですか？……困りますよ、国家機関が無断で住居侵入なんて……」

実際出るところ出れば勝てる。そんな状況だ。

「い、いや、それは……」

「それにウチは父さんが行方不明になつて、母さんはまだその事を気にやんでいる。

……見知らぬ男が勝手に家に入ってきて……母さんにトラウマでも出来たらどうするつもりだったんですか!？」

「そ、そうだったのか……知らなかった、では済まされんな。悪いことをした、謝罪を受け取ってほしい」

……ちよつと言い過ぎたような気がしなくもないけど……

「いえ、偶々母は家を空けていましたので……謝罪は受け取ります。ところで、貴方は何をそんなに真剣に調べていたんですか?」

「……本官は、最近この辺りで起きたトラック暴走事件と、先日天地研究所で発生した、擬似宇宙を投影する装置が暴走した事件を調べていてね……」

「でも、その事件ってもう解決したんですよ?」

「ウム、その通り。2つの事件は解決済みだ……しかし、この2つの事件には共通点があった。……2つの現場からは、ゼット波と呼ばれる特殊な電磁波が検知されている。この電磁波が何を引き起こすものかはわからないが、このゼット波の発生源を突き止めるのが本官の仕事なのだよ」

……もしかしなくても、ロックたちの放つ電磁波のことか。……この警察官一人に何か出来るとは思わないが、数の力は侮ることができない。

それが組織ってヤツだからね……

「発生源を見つけたらどうするんですか？」

「人間に悪影響を及ぼすかもしれない電磁波なのだよ？もちろん発生源を破壊するに決まってるじゃないか。……BAN！ってね」

電波体に、どうやって？

「……」

「本官がこの家に訪れたのは、この家から強いゼット波を感知したからなのだが……何か覚えはないか？」

「そうですね……どちらの現場にもいたと思います」

あえて情報を出してタダの被害者だと思わせられるか……？

「そうだったな……ゼット波に関係しそうな人物はトランサーに全て記録してあるからね、スバル君」

「ボクの名前も……」

「まあ、当然ということだ……で、天地事件において、君は大量のゼット波を浴びてしまった……そのせいで君のカラダからゼット波が感知されたのだろう」

「なるほど……」

「最近どこかカラダに異常はないかね？」

そういえば、あれだけロックと一緒に居るのにボクの体が電波化する様子はない。ど

ういうことなんだろう。

「特には、ないですね」

「そうか、それじゃあ怪物を見たことは？」

「怪物……？」

「……なるほど。では、今日はこの辺で失礼するよ。……先程はすまなかつたね」

「いえ、気にしてませんので」

「……そうか。では」

そう言つて五陽田さんは出ていった。

……早めに警察に正体バラして、情報ツールとして使うのも……いや、面倒の方が多そうだ。……警察に頼るのは、最後の手段で。

……さて、ロックを探しに行くか……ロックは何処に……高いトコロかな？……展望台とか。BIG WAVEに忍び込んでる可能性もあるな……

ーコーダマタワー

BIG WAVEには居ないな……一々ビズライザーを掛けなくちや見えないってのもあるからなあ……

まあ、いつか。人も少ないし、ゆっくり探そう。

「♪〜♪〜」

何だか気分がいい。

…最近はずっとロックと一緒にだったからかな？

一人も悪くない。

——展望台——

「♪~~~~♪」

ここに居ないとなると、何処にいるのやら……まずは探そう。

…これは、ギター？確かに人は少ないけれど……

この後に起きるのは……ダメだ、思い出せない。

「♪~~~~♪と、誰かいるのかな？」

何かを弾く音がする。展望台の階段に近づいてから聞こえ始めたから、きつと今弾き始めたんだろう。

ハミングをしながら、展望台の階段を登る。

「♪~~~~♪……あつ」

……あれは……

「この場所に、用事？……すぐに終わるから、こつちに来て待つてなよ」

「……………」

音楽に関しては素人だと自負するボクだが、この曲が素晴らしく心に響くことはわか

る。

「……フーツ！終わり！……どうだった？」

何か、というか曲を弾ききった解放感からか、偉く眩しい笑顔で聞いてくる。答えはもちろん……

「……聞いたことはないけど、とても良い曲だったよ」

「そう？よかった……新しくつくった曲なんだけど、この曲だったらママも喜んでくれるかな……」

「今の曲は、お母さんに……？」

「うん、ワタシが歌を作るのはママのため、ママ、ワタシが新しい曲を聞かせてあげるたびに喜んでくれるんだ……ママ、聞いてくれた？とっても良い曲が出来たよ……」

やっぱりお母さんは、もう……

……大切な何かを失うのは、とても辛いことだ。ボクは今でも、あの世界のことを覚えている……もう、取り戻せないけど……

「待たせちゃって、ごめんね？……実はもう帰るトコロだったんだけど……君のハミングが聞こえてき……つい、ね」

……貴方の曲なんですけどね……

「それじゃ、ワタシ行くから……じゃあね」



……………。本人の曲をハミングしてるトコロを聞かれたあつ！恥ずか死ぬ……い、いや、あの曲はまだ作曲していなかったはず……お、落ち着け、素数を数えるんだ……

「2、3、5、7、11、13、17、19……」

『クツクツク……あのスバルが動揺してるとはなあ……一目惚れつてヤツか?』

ギャアアアアアアアアアア!!!

「うわあつ！ちよつとロツク、いきなり何言ってるのさ！」

「そうかあ？顔が赤いぜえ？」

それはハミングの件だ！

「……ふう。……とところで、ロツクは何処で何してたんだよ……お陰で黒歴史が一つ増え

そうになったじゃないか！」

「ああ……気になる音楽が聞こえたから、様子を見に来たんだ……あのオンナの奏でる

メロディから、オレたちFM星人を引き付ける孤独の波長を感じたんでな」

「孤独の波長……ね」

それでオックスなり、キグナスなりを引き寄せたんだっけ？

「ああ、心に孤独を抱えるものが持つ、独特の周波数だ」

「じゃあ、FM星人がこの近くに……?」

「いや、この辺りにFM星人は来ちゃいねえよ」

……何だ、そうか……

「あ、ところでロック、ゼット波って知ってる？」

「この辺は聞いて置かないとな……」

「ああ、そりゃオレたちFM星人から発生する電磁波のことだろ？」

「やつぱり、そうだったのか……今日いきなり五陽田っていう警察の人が来たんだけど

……ゼット波の発生源を見つけて破壊するって言ってたんだ」

「嬉しいねえ！それでオレを心配して探しに来てくれたのか？」

「違うって……朝起きたらBIGWAVEからメールが入ってたんだ。……今日開店  
だつてさ。一緒に行こうと思って探しに来たんだ」

「おお！いいぜ、後で行くとするか……そういや、あのオンナはオマエの知り合いか？」

「いや？今日初めて会ったよ」

「？何でそんなことを気にするんだ……？」

「そうか、ならいいが……」

「どうかしたの？」

「何でもねえよ、さ、ウチに帰ろうぜ」

「今日はどうする？体力トレーニングか、ウィルスバスターリングか……」

「たまには休もうぜ……何だかくたびれちまった」

ロツクにもそういうことってあるのか……  
つていうか浮いてる癖に！疲れないでしょ……

ーコダマタウンー

黒歴史（仮）を生産してしまった展望台の階段を下りながら、見知った顔がこちらに向かっていることに気がついた。

「……………あつ、委員長さんたちだ」

普段の勝ち気な態度はどこへやら、委員長さんの機嫌はすこぶる悪い。もしかして、五陽田さんにトランサーいじくられたかな？

……あまり馴染みのない話だけど、この世界のトランサーは身分証や財布を兼ねているため、これ一つ見るだけで、所有者の個人情報から経済事情まで丸裸にされるようなもの、らしい。

「まったく、何なのよ！いきなりゼット波が何だとか、ああ、もう、あんなことされたらお嫁に行けないわ！」

委員長さんは美人系なんだから、もつと凜としていれればいいのに、何であんなに感情的なんだろう……いや、魅力的ではあるのだけど。………からかいの対象としては。

「やあ、委員長さん。ゴン太にキザマ口も、元気にしてた？」

「アラ、スバル君、ワタシの機嫌が良さそうに見えたのかしら？……なら眼科に行くことをオススメするわ。腕の良い人を紹介してあげてもよくてよ？」

「……………段々遠慮がなくなってきたな……………軽口を叩ける位なら、そんなに気にしてるわけでもないのかな？」

「視力は両目とも1.5あるから心配は要らないよ……………ところで、何かあつたの？」

「うるさいわね、アナタにはカンケーないでしょ！」

「そうだ、そうだ！おまえにはカンケーない！さつきヘイジとかいうヘンなオツサンにしつこくつきまとわれた上に、トランサーの中をしらべられたコトなんてな！」

「ゴン太エ……………」

「ゴン太くん、それ全部言ってますよ」

「んなつ！」

「オトコのお喋りはみつともないわよ！……………あんなオツサンにトランサーの中を見られるなんて、一生モノの屈辱よ！……………あ、あのヘッドセットは……………」

「ゲエツ！五陽田さんだ……………まだどこかに行つてなかつたのか……………」

「ウムム……………また異常なゼット波を感じしたぞ……………やあ、スバル君。さつきぶりだね」

「五陽田さん……………」

「アナタはさつスキの……………」

「委員長おちついて!!」

「流石に国家権力が相手は、マズイですよ!」

五陽田さんの姿を捉えた委員長が、まるで親の敵でも見るような目で睨んでいるのをおっかねえ……と思いつながら、ボクは挨拶をする。

「どうしたんですか?」

「ああ、また異常なゼット波を感知してね……発生源は……キミの体?……ちよつと調べさせてもらおう!」

そう言つてボクの体に迫ってくる五陽田さん……ヒイツ!つて、ヤバイぞ、今はロツクがトランサーにいるんだ……

「ご、五陽田さん。さつき家に来たときにボクのトランサーは調べましたよね?……それにここに来るまでに散歩中の女性が話していたんですけれど、事件現場にいた訳でもない女性のトランサーを調べまわしたんですよね?……訴えられても文句は言えませんよ」

「む、ムウ……ほ、本官は、ゼット波の発生源をだね……」

「だからボクのトランサーはもう調べたじゃないですか。……それに、どうせ人間の体に溜まったゼット波の放出される条件なんてわかっていないんでしょう?なら、偶々今ボクの体から出ただけかも知れないじゃないですか……?……もう一度言います。勝

手に他人のトランサーを調べるなんて訴訟モノですよ？」

「ムムム……確かにキミの言う通りかもしれないな……では、本官はここらで失礼させてもらおうよ」

……………ふう。

……………なんとか誤魔化せたか。あの人勘は鋭そうだからなあ……

「全く、年頃の女性のトランサーを調べまわすなんて！」

「す、スバル君？その、さつき言ってた、散歩中の女性っていうのは……」

……………ああ、委員長さんのコトを言ったと思ったのか。

「違うよ。全く関係ない、すれ違ったただけの人さ……もしかして、自分のために怒ってくれた……とか思ってた？」

「キーーーーッ!!ゴン太、キザマロ!もう行くわよ!」

委員長さんは展望台の方に行ってしまった。……………おつかないなあ……ふふっ……

「い、いいinchょう、そうとうキゲンわるいな……おい、おまえのせいなんだから……」  
「うう、あの委員長を落ち着かせるにはかなり苦勞しそうです……この分だと、中々家に帰してはもらえなさそうですね」

「いいinchょうにはわるいけど、明日はミソラちゃんのライブがあるからな……」

「そうですね……出来れば早く帰って体力を温存しておきたいトコロなんですけど……」

せつかく徹夜してチケットをゲットしたんですからね、ぜひとも万全の状態で、本番に臨みたいですよ！」

「ミソラちゃん、ねえ……その人の曲ってそんなに良いの？」

「響ミソラと言えば今二ホン中で大ブレイクしているミュージシャンですよ!?!……因みにボクもゴン太くんも、ミソラファンクラブの会員なんです」

「そのミソラちゃんがなんと!明日このコダマタウンでライブをするんだぜ!……明日はゼンリヨクでミソラコールのよていなんだぜ!そして、今夜の晩飯はミソラにかけてミソカツ定食だ!」

別にそこまでは聞いてないんだけど、やっぱり凄い有名人なのか……

「へえ……」

「けど、今日の委員長はあの調子でしょ?委員長がああなったら、きつと夜遅くまで反省会ですね……」

「こ、こうなったら……逃げるか。……け、けど、そのあとどうなるやら……」

「い、いいですかゴン太くん、委員長は毎日会います……しかし、ミソラちゃんには今後、何回会えますか?」

「……きつといいんちようも、ゆるしてくれるはず!」

「何してるの!早く来なさい!」



委員長さんの声が展望台の方から聞こえてくる。幸い聞かれてはいないようだ。

「いいんちよう!!ゴメンなさい!!」

……えええ……行つてしまった……あれは帰つたな。

普通にやられたらかなり引きずりそうなコトを平然とやってのける……そこに痺れる憧れるっ……わけはない。

……多分これボクのせいでもあるんだろぅなあ……

「今のが五陽田とかいうオッサンか……オレたちのコトをかぎまわるなんて良い度胸してるじゃないか。ちよつくらヤツの素性を調べさせてもらうとしようぜ」

「トランサーの中にでも忍び込むの?」

「そういうコトだ」

「でも、ちよつと待つて……展望台に行つて委員長さんにゴン太とキザマロのコトを話して来なきや」

「……ほつとけばいいじゃねえか」

「ダメだよ……ボクが原因でもあるんだから、責任はとるよ。……それに置いていかれるとか、割とトラウマになりそうだからね。委員長さんには、いつもあの調子で

いてほしいのさ」

「オマエも物好きだな……」

……何とでも！

——展望台——

展望台の階段を登りきると、天体観測時に使われる、少し広まったスペースに委員長さんを発見することができた。

「……何かしら……またワタシをからかいに来たの!？」

おお、おつかないです。

「違うって……今回はボクのせいでもあるからね……責任は取るさ」

「せ、責任……!? 天地研究所で起きた事件は偶然よ……!? いえ、と、トランサーの中を見られたけど、そこまで!？」

「何を言ってるの……」

「そ、そういうのは、まだ覚悟が……って、え?」

何で狼狽えてるんだ……?」

「だから、ボクが委員長さんを怒らせてしまったからね、ゴン太とキザマロが帰っちゃったことを伝えるに来たんだ……流石に自分のやったことの責任くらいは持つさ」

「あ、アナタねえ……! いえ、今はワタシの勘違いね……そう、ゴン太とキザマロが……」

「それじゃ、伝えたからね」

「よし、ロック。五陽田さんのトランサーにウェーブインしよう」

「オマエ、やっぱりあのオンナに気があるのか？」

無いつたら！やっぱりって何さ!?

——コダマタウン・ウエーブロードー

「見つけたよ……五陽田さんだ」

「早速ウエーブインと行こうぜ」

——コダマタウン・現実世界——

「ム？異常なゼット波を感じ……近いな。ゼット波の影響を受けたら大変だ……よし、ゼットリフレクター起動！」

——コダマタウン・ウエーブロードー

「ケツ、何をしたかはしらねえが、ちよいとオジヤマさせてもらうぜ」

………何か固そうなフィールドが五陽田さんの周りを包んでいる……

「大丈夫かな……行くよ、ロック」

「おう！ウエーブイン！」

——ガキーン！

A.T. フィールドみたいなヤツに弾かれたっ！

「痛ッ！電波を弾く何て……キャノンでも撃ち込んでやろうか……！」

「オイヤメロ、スバル！」

……止めないでよロック！……さっきのコトもある。

コイツにはトランサーを新調してもらおうことにするぞ！

「落ち着け！……あのゼットリフレクターってフィールドのせいだな。今の地球にはあんなモノを製作する技術はないはずだぞ……？アイツ一体何モンだ？」

知るかそんなモン！どうせサテライトの三賢者か何かだろ！

「チツ！じゃあ本人を気絶させて調べよう……確か展望台にピッチングマシンがあったはずだよ」

「それだな」

よし、じゃあまずはピッチングマシンの所有者に話を通さない。

……確かBIGWAVEの周りにいた子が、野球がどうか言ってた気がする。確か、『コダマタウン・カイキ』ってピッチングマシンに書いてあったはずだから……

ーコダマタウンー

ええつと、ああ、いたいた。雰囲気はまさしく野球少年といった感じだけど、どうしてだろう、全身から自棄気味な雰囲気を感じる。

「……え？カイキはボクだけど……展望台のピッチングマシン？悪いけど貸すわけにはいかないね」

「どうしてか、聞いてもいいかな？」

なるべく優しく、諭すように話しかける。

「……ボクは野球を捨てたんだ。キミには関係ないだろ！」

だから、何でなのか、聞いてるじゃないか！

「(ピッチングマシンの情報を吐かないなら色々やりようはあるぜ……)」

——コダマタウン・ウエーブロード——

「それじゃあ、あの子のトランサーに入って、原因を探るよ」

カイキ少年がウエーブロードから離れて、トランサーにウエーブインできなくなる前に、調べてしまおう！

「おう、いいぜ！」

「それじゃあ、レッツ、ゴー！」

フフ、潜入ミッションスタートだ！

——カイキ少年のトランサー内部——

はい、来ました。見知らぬ少年のトランサー内部です。中は思ったより広くて、自動車の電脳辺りを一回り小さくしたようなサイズのパネルとウエーブロードが広がっている。さて、お目当てのデータは……

「何々……あのピッチングマシンで遊ぼうとピッチマンのカードを通したとき……ピッチングマシンの上に赤い火の玉が見えたんだ……あのピッチングマシンには何かがりついているに違いない！あのピッチングマシンのカードはベンチの下に封印したから、きつと火の玉はもう出ないだろう……だって」

「そいつはウィルスだろうな。ぶっ倒せば解決だぜ！」

うん。そういう単純なのは、嫌いじゃない。

「まずはカードを見つけて読み込ませてみようか」

「いいぜ、どうせウィルスだろうがな」

——展望台——

カードを通したけど、こっちの操作を受け付けない……内部の回線が切れているということも無さそうだ。これはつまり……

「やっぱりウィルスか」

「そうだね……じゃ、行こうか」

——ピッチングマシンの電脳——

「へっ！案の定ウィルスにやられてやがるな……ぶっ倒すぜ！」

「うん！」

ウィルスは……ベルゴングが一体に、キャノベースのGタイプが二体。キャノベース

は戦ったことがあるけど、ベルゴングは初めてだ。原色のUFOから、頭を出したような形をしている。一応気をつけよう。

「ハッ！」

チャージしたロックバスターをキャノベース一体に向け、発射。着弾と同時にウォーロックアタックで近づき、ワイドソードを振るう。

デリートを確認し、既に発砲されていたキャノベースの砲弾をシールド斜めに受け、爆発の威力を幾ばくか逸らす。ここまでベルゴングは沈黙を保っているけど……いけるか？

二体目のキャノベースに向かってチャージ済みのロックバスターを発射し、先ほどと同じようにウォーロックアタックで接近し、ロングソードで斬り捨てる。

キャノベースがデータを電腦の海に散らせていくのを横目に、ベルゴングに注意を向ける……ツ!!消えた!?

「うわあっ……くー!」

いきなり消えたと思ったら、目の前に出現しUFOのライト部分に当たる膨らみを取り外して殴ってきた!

なんとかシールドの展開に成功し、ガードする。

油断したッ!

「うおおおっ!」

シールドを前に思いっきり突き出し、ベルゴングを弾き飛ばす。その隙にバトルカードを選択し、追撃をしかける!

「ロック!」

「オラアアアツ!!」

ヒートアップ! ベルゴングは回転しながら宙を舞い、やがてその体を飛散させた。

「よし、やったぞ!」

「まさかウイルスが瞬間移動してくるなんてな……」

ああ、良い勉強になったよ……

「さ、ピッチングマシンを起動させよう……あ、どうやって五陽田さんを誘き出す?」

「それはオレが担当してやろう……オマエはオレが誘いこんだヤツにボールを叩き込んでやれ!」

「イエッサー!」

ーコダマタウナー

ボクは今、展望台にある機関車の影に隠れて、ロックを待っている。

「ロックが誘きだしに行つてから、結構経つけど、大丈夫かな……」

あのロックが捕まるとは思えないけど、またゼット何たら、とかいつて捕獲用の装備



があつたらマズイ。

『待て、ゼット波の発生源……ハアハア……』

ロックがこつちに来るのがビジライザー越しに見える！

「来たッ！」

「ハアハア……やつと止まりおつたな……もう逃がしはせんぞ……」

「スバル、今だ！」

「(ピッチングカード、カードイン！)」

おっと、声を出して気づかれるわけにはいかないぞ。……なるべくそーつとカードイ

ン！

……モエルタマシイでイツキュウニユウコン、らしい。

ともかく、発射ーッ！

「グアッ！」

よし、ヒット！……じゃない、ストライク！バッターアウト！

「見事なデッドボールだったぜ……気を失っているだけだな。調べようぜ」

ー五陽田ヘイジのトランサー内部ー

こーやって他人のトランサーに入り込むのにも慣れてきたボクがいるよ……

「何々……捜査メモ……ゼット波は宇宙からやって来た電波で、それを発生させるのが

電波のカラダを持つ宇宙人……この付近でゼット波の関係すると思われる事件発生……要注意人物……星河、スバル!」

ボクだ! サテラポリスはもうそこまで……クッ! 無能ではないってことか……サテラポリス本部の施設内部には、WAXAのヨイリー博士もいたはずだし。

「サテラポリスって一体何だ?」

………スバル君の記憶にあるぞ……

「サテラポリスっていうのは、フォースサテライト直属の組織で、警察じゃ解決できないような事件を担当してるって話だけ……」

確かエリート中のエリートって3で言われていたような……そう考えると、ルパン三世の銭型みたいな感じかな?……単独任務が許されているってことは、それなりにサテラポリスの中でも優秀ってことのはズだし。

「なるほどな、そんなヤツに狙われていたのか……よし、データを消しまくるぞ! オレたちに関わる情報を全て消してやる!」

ちよつと待つて!……ただ消すのはマズイって……

「バカ!……そんなことしたら逆に怪しまれるじゃないか! データが消えている。消えたのは星河スバルに関するデータで、私はさつきその少年に会った。急に何かが飛んできて顔に当たり、気がついたらこの有り様だ。」

って……どう考えても怪しいじゃないか！」

「もう遅いぜ、ゼット波に関するデータは粗方消してやった……」

……うわああああ……

『う、うーん……本官は……確か何かを追いかけていたはず……そうだゼット波だ！強いゼット波を追いかけてここまで来たのだ！ゼット波の数値は……う、う、うわああー！ほ、本官の調査データが全部消えている！……何て報告すればいいんだ！』

……気が動転していて、それどころじゃなかったみたい……何故バックアップを用意しておかないんだ……？

トランサーは不壊じゃないのに。

「さ、家に帰ろうぜ」

ロツク強心臓過ぎるよ……

——翌日・星河家——

目が覚める。昨日はあまり動かなかったためか、いつまでも布団に籠っていたい、なんて思うことはない。

「朝か……昨日みたいに居なくならないでよ、ロック」

「ククク……いいのか？あのオンナにまた会えるかもしれないんだぜ？」

「だから、茶化さないでってば……」

……昨日はロックが居なくて、久しぶりに一人で散歩できて、リラックス出来たハズなんだけど……

最近はいつも側にロックがいるし、居ないと落ち着かなくなってきたのかな……？

——ピンポン！——

「何かこの展開、前にもあったな……ロック、一応隠れておいて。五陽田さんだったら、ゴヨウされちゃうよ」

「何だそのゴヨウってのは？」

「相手をゴヨウし過ぎたあまり、牢屋にぶちこまれた哀れな守護者だよ……今度釈放さ

れるらしいけど」

ゴヨウ・ラリアットオ！

「……？警察もタイヘンなんだな」

「そうだね……捜査行為自体が犯罪にならないようにしなくちゃいけないんだもの」

五陽田さんの捜査ってかなりギリギリだからなあ……

勘は良さそうなんだけど。

「へっ！あのオッサンだったらオレがおねんねさせてやるぜ」

おねんねって……フフツ……！！

ピンポーン！ピンポーン！

「また、マナーのない人だな……母さんへの用事だったら大変だし、出ようか……」

……ノロノロと玄関の戸を開ける。……もちろんチェーン付きだ。

「はあい、どちらさま？」

ガチャツ！

……また足を入れて来やがった！……でもこれは五陽田さんじゃないな。……スーツを着ている。趣味悪いけど。

「ミソラー・ミソラは居ないか!?……ミソラはどこだ!?」

本日未明、怪しげなスーツを着た男が無断で住居に侵入したようです。容疑者は自称

響ミソラのマネージャーだと供述しており……なんて。

「失礼ながら、どちらさまですか？」

「あ、またやってしまった！おじさん、人を探していて、その……」

「そのミソラって人を探しているんですね？」

「何でそれを知ってるんだ！？ま、まさかミソラを匿ってるとかじゃないな……!?!」

話が飛躍し過ぎじゃない？……それだけ焦ってるってことかな？

「知りませんよ、そんなの。おじさんが自分でミソラ、ミソラって言ってたじゃないですか」

興奮して我を忘れてたってことにしといてあげよう……

「おお、そうだったのか、それはすまなかった！……そ、そうだキミ、響ミソラをこの辺で見かけなかったか？キミも顔位はしってるだろう？」

「名前は知っていますが、歌を聴いたことがあるわけじゃないので、何とも……」

嘘は言っていない。聴いたのはあくまでも演奏、だ。

「何?!ミソラを見たことがないのか!?!……キミ、もつとテレビを見たほうがいいぞ！じゃないと、学校の会話についていけなくなるからね」

……不登校児ですが、何か？それにテレビ位見ているよ。この世界のことについて知れるからね。

……最近だと『危ない暴れん坊ウルトラ大將軍』が中々面白い。何やら200年以上前から続いているらしく、噂のモンドコロニウムレーザーの威力は冗談抜きで半端じゃなかった……大河ドラマのハズなんだけどね。

「キミのことはいいとして、ミソラだ！ミソラを早く見つけなくては……今日はライブだったのにドコ行っただよ！キミ、ワタシは響ミソラのマネージャーをやっている者だ。……もしそれらしい子を見たらワタシに教えてくれ！……それでは失礼した！」

ああ、忙しい人だったな！

「ミソラって、昨日のあの子だよね」

「オマエが一目惚れしてたオンナだろ？」

だから違うって！

「……昨日演奏してた子だよ……まあ、いいや。ロック、外に出ようよ」

「何だ？オマエもあのオンナ探しか？意外とミーハーなんだな」

最近のロックはそういうのばかり口達者になっちゃって……

でも、少し気になっているのかも。ゲームのキャラクターとしてではなく、この世界に血縁が居なくなった人間として……ボクにはあかねさんがいるけど、本質的には星河あかねの息子ではない。その記憶をもっているだけだ。

「違うって。BIG WAVEに行ってみようよ……昨日は行けなかったでしょ？」

「おつ、それもそうだな……じゃあ行こうぜ」

ーコダマタウンー

………チュイン！チュイン！チュイン！

「ヘルプシグナル？」

ヘルプシグナルって結構適当な理由で鳴らすヤツもいるんだよね。……以前のサツカーボールが良い例だよ。だから実はそんなに助けに行く人は多くない。それどころか、トランサーの設定で、ヘルプシグナルをキャッチしない設定にしてる人も居るんだよね。

「助けを求めてるってヤツか？たまには人助けってヤツに勤しんでもいいぜ、オレは」

ロックも結構、何て言うの？慈愛の心を持つようになったよね。……昨日のほっとけばいいじゃないか、は忘れないけど。

「ふうん。まあいいよ、助けに行こう。……ウイルスバスティングとランニング漬ければ、変わり映えないからね」

ー展望台ー

ボクたちは今、以前暴走した機関車の前にいた。こんなトコロに隠れるなんて……やはり普通じゃない……

「ヘルプシグナルはここから出てるね……誰か、いませんか？」



……機関車で遊んで、足を挫いたとかだといんだけど……あつ！……これ、ゲームの展開だったのか。

「あつ、キミは……お願い！ワタシを何処かに匿って！」

別にいいんだけど、プロ意識足りなくない？

「キミは、昨日の……響ミソラ」

「……うん」

普段は澁刺とした笑顔を浮かべているであろう響ミソラが、俯きがちに首肯してくる。これはこれで庇護欲を誘いそうだけどなあ……いや、違うな。そうじゃない。もっと深いトコロで、ボクは彼女に何かを感じている。

……これは……孤独？いや、当然か。FM星人は人間の発する孤独の周波数に引き寄せられる。

それはこの世界に疎外感を感じているボクも例外では無かったんだろう。

「さつきマネージャーだつて人がキミを探しに来てたけど……ライブがあるんじゃないの？」

「ライブなんて中止になればいいんだ……！あの人の頭の中には、お金のコトしかないのよ……お願い、ワタシ、帰りたくないの。何処か人目のつかない場所に連れて行って……」

.....

『ミソラー!!どこだー!!』

「ヤバツ!こつちに来て!!」

.....ミソラ.....ちゃんに連れられて機関車の影に隠れる。

.....ここ、ピッチングマシンの時も思ったけど、結構死角になるな.....

「くそ、何処に行ったんだ.....ライブが中止になれば、オレの首が飛んじやうよ.....何が何でも見つけ出してやる.....!」

誰に言ったのか、まだ諦めていない旨を喋り、マネージャーさんは行ってしまった。あのマネージャーさんの首が飛ぶのか.....まあ、担当歌手は大切にすべきだよね。

「.....行つたよ」

「お願い.....何処かに連れてって.....ワタシ.....歌いたくない.....」

.....アイドルで騒ぎそうにないのは.....天地さんか、宇田海さん辺りかな?まさか家に招くわけにもいかないし.....いいスキヤンダルだ。

「.....そうだね、知り合いの研究者なら匿って貰えるかも?」

「(ヤケに親切じゃねえか。オマエらしいっちゃあ、らしいが.....やつぱりホの字か?)」

「(.....恩を売るってわけじゃないし、人助けは悪いコトじゃない。真剣に頼んでいるなら、尚のことさ。それに、FM星人を引き寄せるかもしれないんだろ?なら、わかる場

所にいたほうが対処しやすいよ」

「……………ゲームでスバル君が、どこか他人として割りきれなかったのが、今ならわかる気がする。」

見ていてとても心に響くんだ。自分の孤独や、寂しさが胸を圧迫するようで……………だから、かな。

もうボクは、あの世界で経験したコトを思い出すことも出来ない。ただこれはこう、つていう認識があるだけだ。その認識も、日々実感として感じられなくなってくるのが怖い。

そもそもボクは、本当にあの世界にいたのか……………？

普段ならウイルスバスターングで紛らわすんだけど……………

「……………誰と話してるの？」

……………これ以上口ツクと話すのはマズイか……………

「……………何でもないって。……………ただの一人言だから……………それじゃ、案内するね……………あ、マスクを着けてフードを深く被ると他の人にバレ難いかも？」

「……………うん、ありがとう」

ぐぬぬ、元気なイメージがあつたから、何だか調子狂うな……………さて、天地さんに連絡しない……………

でも、ボクはこの時油断してしまった。

「……………う？アレは……………ミソラちゃん？」

……………バスに乗るところを見られるとは、思っても居なかつたんだ！ファン恐るべし！だったね。

——バス内部——

幸いにして、ライブまでの時間はかなり余裕があるようなので、天地研究所までバスで行っても開始時刻までは時間があつた。

バスの中では、バレないようにするのが難しかったから、フードを深く被ってもらい、マスクをして、響ミソラに成りきっている少女を演出してもらっていたんだけど…………

「(何か、見られているね)」

「(…………ホントごめん。こんなことに付き合ってもらっちゃって…………)」

「(いいよ。…………何だか他人事に思えないんだ。どうせボクは不登校だしね)」

きつと彼女の境遇もあるのだろう。

血の繋がった、ただ一人の肉親を亡くし、自分がまるで世界に取り残されたように感じているのかもしれない。

そんな境遇の彼女に、ボクは自己投影しているのかもしれない……

「(そうだったの？あんまりそんな雰囲気には見えなかったけど……)」

「(ちよつと理由があつて。……でも、クラスの人が連れ出しに来てくれるよ)」

「(……そうなんだ。そういう人、ワタシにはいないからなあ……)」

「(アハハ、何だか意外だね)」

「(それでもないよ。あのマネージャーさんがたくさんお仕事を持つてくるから、あまりそういう機会をつくれないうつてのものもあるけど……)」

「(大丈夫、いつかそんな人が出来るさ……なんて、連れ出しに来てくれる人たちに、心を開いていないボクが言えることじゃないけどね……)」

「(……)」

「(どうしたの?)」

「(いや、さつきから周りの人が、ワタシたちを生暖かい目で見てくるんだけど……)」

あれ？なんだろう、この雰囲気……

「(なんだろうね?)」

「(さあ?)」

そんな感じでアマケンまでの時間を過ごした……

——アマケン・研究室——

天地研究所は今日の一一般解放はしていないらしく、職員の人たちの不思議そうな目線を浴びながら、足早に天地さんの研究室に向かうことになった。

「あ、天地さん。この子がさつき言つてた匿つて欲しい子です……出来ますか？一晩でいいんですけれど」

「スバル君からそんなお願いをされるとは、ちよつと驚きだな……家出でもしたのかい？」

この反応は、響ミソラを知らない？

研究に没頭し過ぎて世間には疎いのかな？そもそも響ミソラは同年代の少年少女に大人気！つて話だったから、大人の世界ではそこまで有名ではない……？うーむ、わからない……

「……みたいなものです……だ、ダメですか？」

「フム、何か悩みがあるみたいだね？……いや、言わなくていいよ。人間生きていけば何かしらの悩みは抱くものさ……僕もキミぐらいの時に何度か家出をしたことがある。今日はゆつくりしていったらいい」

天地さんの頼りがいが凄い。きつと職場でも頼りにされてるんだらうなあ……。

「……ホントですか？ありがとうございます！」

「だけど、明日になったらちゃんとかに帰るんだぞ……キミが思っている以上に親御さんはキミを心配しているんだからね」

「……ハイ」

「スバル君、キミも泊まっていくかい？」

「おお、ボクに振ってくるとは……」

「い、いえ、母さんに心配させたくないのです……」

「スバルって言うんだ……助けてもらったのに、名前も聞いてなかったね……ゴメン。それと、アリガト……」

「どういたしまして。ボクもキミと話すのは、結構楽しかったよ」

「……これは本当だ。しかし、最近の小学生のコミュ力はバケモノか!？」

「あまり知らない人とよく会話が続いたもんだ……これで孤独の周波数放ってるって、凄いな……いや、表面的なもののかな？」

「ふふっ……ワタシも楽しかった。気をつけて帰ってね！ケガでもしたら、悪いから……」

「二人はもう結構仲がいいんだね……そうだ。いい機会だから、二人でブラザーバンドを結んでみたらどうだい？スバル君、キミのお父さん、いつも言ってたよ……『一人じゃ

解決出来ない問題も、誰かと繋がれば乗り越えられる。……誰かが自分を強くしてくれ  
るし、自分も誰かのチカラになれる。この星の全ての人がブラザーバンドで繋がって、  
お互いをチカラづけ合いながら生きている世界になればサイコーだ』ってね」

……………それは。

「それは……」

実のトコロ、ちよつと怖いんだ。だつてブラザーバンドを結んで、アビリティが発現  
するトランサーは良いけど、スターキャリアー以降は、キズナリヨクが表示される。だ  
から、ボクと相手がお互いをどう思っているのか、数値化されてしまうんだ。

それで自分が、やっぱり一人だつて認識するのが怖い。

きつと、ボクとのブラザーバンドで発生するキズナリヨクはとても低いのだろう……  
「フフフ、まあいいじゃないか。ちよつとだけ考えてごらんよ」

「……………少し、考えてみます」

こんなボクが、誰かとブラザーバンド、ねえ……

委員長さんとの絡みは表面的なものだし……

でも。良い機会なのかもしれないな。

……………ミソラちゃんの境遇を利用するようで気が引けるけど。

……………いつかは、この心のことも話さなくちゃいけない。



その時、ボクはどれだけあの世界に実感を持てるのか……う？

「じゃあ、よろしくお願ひしますね」

さて、そろそろ帰ろう、コダマタウンへ……

ーースバル退出後ー

スバル君がエレベーターを待っている姿を確認しながら、家出少女に話かける。もちろん声が聞こえないように小さくして、だ。

「あんまり悪く思わないで欲しい。あの子はある理由で他人と深い関わりを持つことに、少しだけ臆病になっているんだ……」

「……………」

「ブラザーバンドか……」

天地さんの研究室の出口で、エレベーターを待ちながら考えてみる。

「へっ！ホントはブラザーになりたいんじゃないかねえのか？」

どうなんだろう。……ミソラちゃんは、こんな紛い物のボクを受け入れてくれるのだろうか。

……………っ！何だ！

「……………あつ、停電!？」

「一体何が起こったんだ!?!緊急用のバックアップ電源はどうしたんだ!?!」

天地さんの声で我に帰る。

「ククク、これはタダの停電じゃないぜ……」

「タダの停電じゃない?」

……………どうということ?まさかウイルス……?」

いや、FM星人の襲撃の可能性も……でも、ミソラちゃんはここに……と、いうことは。

「ビジライザーを掛けてみる」

「うん」

そうだ、こういうときはビジライザーだ。……………何かわかるかもしれないし。

「……………何か、プラズマボールみたいなのが浮いてる……?」

「いや、ヘイジとかいうサテラポリスのオツサンが言つてたゼット波つてやつだ!……ゼット波が一ヶ所に集まるとあんな感じになってウイルスを生み出す……放つておけばFM星人を呼び寄せちゃうかもしれないぜ。……………何にせよ、あのプラズマ……いや、デンジハボールはぶつ壊さないかぎり消えないな……へっ!新種のウイルスがいるかもしれないねえぜ、スバル!」

……そういうことなら！

「ロック、このデンジハボールがいくつ発生したかはわかる？」

「そうだな……ざつと5つってトコロだ。……全部潰さなきゃあ、停電は直らねえ……へへっ、腕が鳴るってヤツだぜ！」

よおーし！ 久々に楽しそうな展開が来たぞ！

………最近はやつと考え込みすぎなんだよね。

それじゃ、まずはウエーブホールを……つと、その前に……

「キミは大丈夫!？」

ミソラちゃんに声を掛けておく。勝手に解決したら、何だか変だしね。

「……暗いところは苦手なの……っ！ コワイよ……！」

「スバル君こそ、大丈夫かい!？」

「大丈夫です！ バトル用のナビを持っているので偵察に送ってみます!……じつとしていて下さいね！ キミもだよ！」

これで一応は動ける言い訳になっただろう。

後はとつとと解決するだけ……お楽しみは、これからだ！

ーアマケン・研究室ー

………マズイぞ……。ウエーブホールが近くに、ない。

……エレベーターは当然止まってる。生身のボクが使えるのは、屋上への階段だけだ。

ーアマケン・屋上ー

………ここがアマケンの屋上か。……風が気持ちいい。今日は晴れやかな天気で何やらポカポカしている。

………眠気を誘いそうな、何と言うか昼寝日和ってヤツなんだろう。

「さて、取り敢えず人目を避けてみたけれど、どうしようか？」

「そうだな………今日は一般解放はしていなかったハズだから………見たところ周りに人の目はなさそうだ」

………そりゃ屋上に人は居ないだろうさ。だって天地さんの研究室と繋がってるんだもの。

………いや、周りについて、まさか………!?

「まさか、アマケンの外にあるウエーブホール目掛けて飛び降りるつもり!?」

「おうよ!ある程度……つつても空中なら5〜6メートルの高度で電波変換は出来るぜ」

……無茶言うなよオツ!ボクにヒモなしバンジーの経験はない!

「無理でしょ……ロックは飛べるからいいけどさあ……」

……もうロックをトランスミッションして送り出したほうがいいんじゃないか  
?

いや、でも信じて送り出したロックがデリートされました……じゃ、地球滅亡待った  
なしなんだよなあ……

「さあ、準備は出来たな!?!いくぞ!」

……失敗しませんように……

「いざ……南無三ツ!」

フェンスから飛び降り、いや、研究所の壁を蹴って加速するっ!……何とか行けそう  
か……

「準備は!?!」

「もちろん……行くよ!電波変換!星河スバル、オン・エアアツ!」

……もう、こんなダイナミックウエーブインはしたくないよ……

ーアマケン外観のウェーブロードー

……………何とか、成功したようだ。実際他に方法がなかったからね。仕方ないね  
(泣)

「あとで返しておかないと……」

因みに、電波変換時に所持していたモノはある程度収納出来るらしい。収納っていつも、電波変換を解かないと触れるようにはならないので、注意が必要だ。

勿論トランサーやバトルカードの類はその限りではないが。

「よし、アマケンの電子機器にウェーブインして内部に侵入しよう」

やっどデンジハポール退治か……

ーアマケン内部・科学館ー

……………やっぱり一般客が来ないと、静かでちよつと不気味だな……………なんか、あの白鳥擬きの残留電波でも出てきそうだ。……………気をつけないと。

「……………おい、スバル！あつたぜ、アレだ！」

「……………何か、っていうかウィルスがいそうな感じがするね」

うーん、デンジハポールを発見したけど、どうやって破壊すればいいんだろう……

「で、どうすればいいの、ロック？」

「そうだな……………バスターをブツ放してみるか」

……そんな感じでもいいの？ならバスターじゃ足りねえ！

レーダーミサイルをぶちこんでやろうぜ、ヒヤッハーッ！

「レーダーミサイルでいくよ！」

ーピーピッ！……ドカアアン！

「ふふっ、汚い花火だね」

ウイルス、即、散！

「やり過ぎだろって……オイ、まだ生き残りがいるぞ!？」

チツ、無属性じゃなかったか……おっと、これはビリーエースのGタイプだ。ここま  
でしたのに、既知のウイルスか……

「片付けるよ！」

「ウオオオツ！」

ウオーロックアタックを発動！相変わらずノロノロ飛行、というよりは浮遊している  
ビリーエース（G）に一気に突進し、ロングソードを振り抜く。確かに斬り裂いた手応  
えを感じ、バックステップで距離を……いや、まだいける！

「疾ッ！」

袈裟に斬り裂いたビリーエースを、逆袈裟で斬り返す。

……普通ならここで体制を立て直すんだけど、ビリーエースホント遅すぎんよ……

「……終わっちゃったね」

リザルトでゼニーがトランサーに振り込まれるのを確認して、ロックと一緒に溜め息を吐く。……最近手応え無さすぎない？

「あつけねえな……あと4つだぜ」

……この調子だと他も似た構成のウイルスな気がする ……

——十分後——

「セアアッ！」

ナイナイのGタイプを、ロックバスターで蜂の巣（誇張）にして倒すことに成功し、やっと人心地着く。

「これで、5つか……結局たいしたウイルスはいなかったね……」

「そうだな……ケツ、久しぶりに新ウイルスとバトルれると思つてたのによー！」

あんまり気が乗らなかったのもあるけど。

ブラザーバンド、ねえ……ボクはどうしたいんだろう。

誰かに話してスッキリしたいのかな？それとも……ミソラちゃんなら……つて思つてるのかな？

ボクが存在を受け入れてくれるか、なんてわからないのに。

……あつ。



「……停電が、直ったね」

「どうする？このまま家に帰っちゃまうか？」

……それはちよつと薄情なんじゃないかな……

「二人のところに戻るよ。ブラザーバンドは……うん」

「まあ、オマエがいいならいいんだけどよ……つと、そういやあのミソラってオンナだが、ありやなんか危険なニオイがするぜ……せいぜい気をつけるコトだな」

……え？

「危険って、何が？」

「さあな、……そんなニオイがするだけだ」

えええ、ちよつと大丈夫なの……？

ーアマケン・研究室ー

……外のウエーブホールから走ってきたから、クタクタだ。最近走ってるんだけどなあ……やはり元がもやしだったと言うことか……!?

「天地さん、さっきのブラザーバンドの件ですが……」

「ああ、どうだい……結ぶ気になったかい？」

……ボクは。

「……あの、もう少し、待ってもらえませんか？」

「そうか……いや、急かしたりはしないよ。キミの好きにしたらいい。強引だったね、悪かったよ」

「いえ、彼女とは気が合いそうではあるのですが……その、まだ……」

もう少し、彼女の気持ちを知りたい。彼女の口からだ。それからでも、遅くはない、はず。

「ねえ、この後少し、時間取れる?」

……なんて、考えていたら、ミソラちゃんに引き留められた。

「特に用事はないよ……どうしたの?」

「少し、屋上で話さない?」

この機会に、ミソラちゃんの思いを聞いておくのも良いかもしれない。多分、まだボクは誰かに話すのが怖いんだ……

「いいよ……じゃあ一緒に行く?」

「うん」

……ボクたちは、連れ添って屋上に向かった……

——アマケン・屋上——

屋上に続く扉は一人ずつしか通れなかったため、先に通ったミソラちゃんが申し訳なさそうに話しかけてきた。……やっぱり、良い娘なんだろうな……

「引き留めちゃって、ゴメンね」

「いや、構わないよ」

ここでミソラちゃんは、思いを馳せるが如く、晴れ晴れとした空を仰いだ。……とても辛そうだ。ボクの気持ちをわかってもらえるかも、なんて考えてるのが浅ましくなってくる。

「キレイな、空だね……この空の向こうに、天国って、本当にあるのかな……」

……それは個人の思い入れの違い、だ。死んだ人間はどこにも居ないし、どこにだっている。胸に手を当てれば感じられるっていう人もいるし、お墓の前でやっと感じることの出来る人もいる。要は自由ってことなんだ。

「……………空を見上げるとね、ママの声が聞こえてくる気がするんだ……」

「……………」

今は、口を挟むべきじゃない。ボクは、聞かなきゃならないんだ。ボクの、ためにも……

「ワタシ、ママとずっと二人暮らしたんだ。……ママはね、元々病弱で寝込みがちだったの……一年中、何も変わらない部屋の中で過ごす生活じゃ、ママが可哀想だって、楽しませるためにいろいろ考えたわ……それで思い付くことが、歌うことだった。」

……………ボクだって。いきなり誰のかもわからない知識が入ってきて……気づ

いたら、こんな風になった。

ボクは星河スバルじゃない、偽物なのに、あかねさんや天地さんに、甘えて……

「……ワタシが外で見てきた全部、歌にしてママに聞かせてあげたの。ママ、本当に喜んでくれて、それから一緒に歌を作って歌ったり……歌はね、ママとワタシを繋ぐキズナなの……」

「……………」

「そんなある日、テレビでやっていたオーディションが目に入ったの。……ママがワタシには音楽の才能があるから、チャレンジしてみたらどうかって言ってくれたんだ。……ワタシがホンモノの歌手になれば、ママ、きつと喜んでくれるだろうって、オーディションを受けたの……このギターはそのときにママが買ってくれたわ……」

彼女は、ミソラちゃんは……まだ、立ち直れてないのか。……お母さんの死から……………」

「必死で練習して、オーディションを受けて、練習の甲斐あって、オーディションには合格……デビューすることが出来たわ……ママもハナが高いって喜んでくれた。ワタシ、もつともつとママに喜んで欲しくて、必死に歌ってきたわ……だけでもう、ママに歌を聞かせてあげられなくなっちゃった……」

「……………キミの、お母さんは……」

きつと、本当に大切な人だったんだろう。ともすれば、彼女の全てで、生き甲斐だったのかもしれない。

「3ヶ月前にね、あの空の向こうに行っちゃった……ワタシ、ずっとママのために歌い続けてきたの。……ママを喜ばせたいから……だけど、ママはもう……。……マネージャーさんはファンのために歌えって言うけど、結局はお金儲けのためなのよ……」

「ワタシ、もう歌いたくない……」

……ボクが、今、やるべきことは。

「ボクは、キミの曲を一度聞いたきりで、多分まだわかってないと思う。……でも、それでも、お母さんのために思って弾いたあの曲は、とても素敵だったよ」

「そんなコト……」

ボクと同じように、世界に孤独を感じて欲しくはない。

今の話最後まで聞いて、やっと出た結論だ。

そうだ。ボクは、ボクは……あかねさんやミソラちゃん、いや、違う。他人にまで、こんな思いにさせたくない……！だから……

「ボクは」

『ちよつと待ってください、困りますよ……ね、ちよつと待って！』

……何だ？

ーガチャッ！

あ、貴方は……ミソラちゃんの、マネージャー……！

「ミソラ!! 大変なコトをしてくれたな! ……お前が逃げ出したお陰でライブは中止だ! 一体どれだけの損害が出たとも思ってる!! さあ、帰るぞ!!」

「いやっ! これ以上ママとワタシの歌を汚したくないっ!」

……ミソラちゃん! ……これ以上、彼女を追い詰めるなアツ!

……ミソラちゃんと、マネージャーの間に割って入る。

……頭が沸騰しそうだ! コイツは許せない!

「ここは、通さない!」

「お前がミソラを隠していたのか!」

「違う! けど、彼女は……ヘルプシグナルまで出していたんだぞ! ……放つとけるわけ、あるかツ!!」

ここで見過ごしたら絶対に後悔する!

……彼女をFM星人に取り憑かせることになってしまうかもしれないんだ。それは、被害をコントロールするためにも、何より響ミソラ以外に周波数の合う人間がいたとしたら、完全に動きが読めなくなるかもしれない。それは困る……けど……

ボクは! 自分の意思で……ッ! 彼女を……守る!!

「そこを、どけっ!!」

「スバルくん……」

ぐっ!重い……大人のパンチだ……ゴン太のそれとは違う……!でも、慣れてる!何か、捌いたっ!

「チッ!ならこれでエッ!」

何だ?黒い、棒……?

まさかッ!

ーガンツ!!

「うっ……」

け、警棒を……

「スバルくんツ!!……マネージャーさんツ!」

「大丈夫か!スバル君!……アンタ、子供に何するんだ!……それにその子も嫌がつているじゃないか!」

「うるさい!そのボウズがミソラを匿ったお陰でこっちは大損したんだ!……今回出た、数千万ゼニー、アンタが肩代わりしてくれるのか?……それにオレはこの子の保護者だ!他人は口出ししないでもらおう!」

凄いい剣幕、だ……ううっ、血はでてないようだけど……意識が、朦朧とする……ダメ

だ、行かせるわけには……

「ミソラッ！行くぞー！」

マネージャーがミソラちゃんの手を引っ張っている……！

……クソッ……もう力が……

「大丈夫!? スバルくんッ！……うう……ゴメンね……」

い、行かせるか……ッ！

「クソッ！ スバル君、力になれなくてすまなかつた……まずは医務室にいこう……さっきのはカツコよかつたぞ。だが、無理はしないでくれ……いいね？」

……この後、医務室で治療を受けたボクはそのまま家に帰った。ボクは……無力だったんだ……



ーアアマケン外観ー

それは、星河スバルがまだアマケンで治療を受けている頃……

「ミソラ!!本当にえらいことをしてかしてくれたな!この損害はキツチリお前の歌で稼いでもらうぞ!」

わ、ワタシは……もう……

スバルくんだつて……あんなにしてしまつて……うう……

「も、もう、イヤなの!!ワタシ、もうお金のためなんかに歌いたくない!ワタシの歌は、ママを喜ばせるために……ママのためにあるのよ!」

「いつまで夢みたいなのを言つてるんだ?……お前の歌は商品なんだ!お前が歌わないと、俺はメシが食えなくなるんだよ!……歌え!歌え!……俺の金のために!」

もう……もう、限界ツ!……ワタシはツ!!

「イヤアアアアツツツ!!」

こんな、車なんか、マネージャーさんなんかっ!出ていつてやるっ!……うう……

「ハアハア……ママ……助けて……助けてよ……!ワタシはもう、歌いたくない……!」

『ポロロン……お金儲けのために歌を歌わせようとするなんて、ヒドイ大人よね……』

……この、声は……ッ!?

「だ、誰!？」

『ポロロン……ワタシはここよ……』

……また、まただ。この声、それに、ここ……??

……あっ!?

「ワタシはハープ……音楽を愛する者よ。ミソラ、アナタは音楽をチカラに変えることの出来る選ばれた人間……アナタの音楽はアナタだけのモノ……」

天地研究所の……巨大な望遠鏡?の上にいる。

今ワタシがいる場所からして聞こえない距離のハズなのに、不思議とあのハープに顔が付いたような奇妙な存在の声ははつきりと聞こえてくるのはどうしてなんだろう

……

「ミソラ、アナタに歌うことを強要し、アナタの歌をお金で汚すヤツらをみんな始末すれば、アナタの歌はアナタのモノ……ママとの思い出も美しいままよ……」

……

「アナタの音楽は、アナタ自身の手で守るのよ」

……ワタシは、どうすれば……

「ワタシの音楽を……守る。けど、そんなこと、どうやって……」  
「ワタシを受け入れなさい」

……………ツ!?

あんなに離れていたのに、一瞬でここまで!?

ただの現実逃避が見せた幻じゃない……!

「そうすれば、ワタシがアナタにチカラを貸してあげるわ……アナタの音楽を、守るチカラをね」

「……………」

……スバルくんなら、何て言うだろうな。

まだ会ったばかりで、お互いの趣味もわからない、そんな関係の女の子が、チカラを欲してる。きつと、危ないことをするんだろう。

このハープ擬きのチカラは普通じゃない。それは今までのやり取りではつきりしてる。また、助けに来てくれるかな……?

……違う。スバルくんは、普通の男の子だ。ちょっとわからないトコロもあるけれど、初対面のワタシとも、物怖じせず話せる、優しい子なんだろう。

だからこそ。ワタシはスバルくんに頼っちゃいけないんだ。

……もうママが、親しい人が、居なくなるなんて嫌だから。

だから、ワタシ一人で。

『ミソラ!!』

マネージャーさんが追いかけてくる。

でも、もう怖くない。

「もう、逃げられないぞ……お前にはまだまだ稼いでもらわないといけないからな」

……ふふつ。運が良い。きっとワタシは、彼にチカラを振るうことに何の躊躇いも持たなくて済む。

「……………」

「クスクスクス……………どうやら、ワタシを受け入れる気になったようね。音楽のチカラを思いしらせてやるのよ……………」

……そうだね。この人は、許せない!

「ミソラ! 帰るぞ! 次のライブの準備をするんだ!」

「……………ハープ擬き」

「ヒドイわね……………『ハープ』よ」

わかった、ハープ。ワタシ受け入れるよ……

……………つ! ハープがワタシに溶けていく。

……………これは、融合……………?

「な、なんだ！その姿は！」

「クスクスクス……ミソラ、ワタシたちとっても相性が良さそうね」

「何のつもりかは知らんが、帰るぞ、ミソラ！」

………本当に、反省すらしていない……。ワタシと同じくらいの子供を警棒で殴つたというのに！

いくらへっぴり腰だとしても、警棒の威力なら、スバルくんに残るかもしれないのに！

「思いしれ！」

鼓膜を破つてやる！歌が、声が聞こえるありがたさを、その身で思いしれ！

「ギャー……ツツ!!」

「クスクスクス……アナタの音楽を汚すファンたちを始末するのよ！」

………ちよつと、ワタシのファンでいられなくするだけだから。大丈夫だよ……ママ。

ーコダママタウン・星河家前ー

………やつと、家に着いた。何だか凄く長い間バスに揺られていたような気がする。帰り道に、ミソラちゃんを見かけることはなかった。きつと、もう取り憑かれてしまった

んだろう。

彼女が亡き母を想う気持ちは、何よりも真剣だった。

ボクは、彼女の事情を知っていると、自惚れていたただけだったんだ。あの顔は、ボクが時々あの世界に思いを馳せるときの、届かないモノに手を伸ばすような、そんな顔だった。ボクに、彼女を止められるのだろうか……

『ちよつと、待つてください!!』

何だ?……この声は……キザマロ?

「スバル君、キミは今日、天地研究所行きのバスに乗りましたね?」

うるさいなあ……

「……………」

「一緒にいたのは、誰ですか?……響ミソラと、一緒だったんじゃないんですか!」

……………。

「ミソラちゃんのライブが中止になったのは、キミが関係していたんじゃないんですか?」

「オイ、何とか言ったらどうなんだよ!」

「……………ちよつと、早計なんじゃないの?」

……………なんとか喉の奥から捻り出したような答えに、キザマロはどこか自身を納得させ

るように溜め息を吐いた。

「……まあ、確かにキミがミソラちゃんを知り合いだなんて、ありえませんがね」

「そりやそうだよな。ホンモノのミソラちゃんがこのあたりをうろつくはずないだろう？……それにしても、今日はついてないぜ。ライブは中止になるわ、委員長にはこっぴどく叱られるわ、もう踏んだり蹴ったりだぜ」

ああ、そういうえば、委員長さんにゴン太とキザマロが帰ったって教えたんだっけ……「確かに……けど結構似てたんですけどねえ……ミソラちゃんを探してたマネージャーさんには悪いコトをしたかもしれないね……バスに乗り込むミソラちゃんを見たなんて言っちゃって……」

……お前、だったのか！

「……どうしたんです……何だか険悪ですよ？」

「もしかしてホントウにミソラちゃんといっしょだったとか？」

「……違う、けど」

……いや、悪気があつた訳じゃない。

ファンとしては正しい行動だ。でも……クソツ！

「（オイ、スバル。なんか来るぜ……気をつける）」

……クルマ？あ、五陽田さんだ。なんだろう、また見回りかな？

「キミたち、この辺りで何か変わったことが起こつたらんか？高いゼット波を感知したので急行したが、特に何も起こつたらんのだ」

「いや、べつになにもおこつてないぜ」

「あつ！そんなことより、アナタが委員長のご機嫌を損ねたせいで、ボクたちエライ目にあつたんですよ！……スバル君！キミもですからね！」

「……からかったことは悪いと思つてるよ。でも可愛かつたし……反応が面白かつたんですすみません。」

「本官は職務を忠実に遂行したまでだ……スバル君の件は悪かつたと思つてるがな………ムッ！？ゼット波の数値が急激に上がつておる！……あつちだ！」

「………何だ？」

「ウワアツ！」

「……音波が飛んできた！これは……ハープ・ノートか！」

「クソツ！もう電波変換してしまつたのか！ということはこの近く……」

「だ、大丈夫ですか!？」

「……また飛んできた！これは、キザマロに直撃コース！」

「そしてもう一発……今度はゴン太だ！」

「来やがつた！スバル！ビジライザーを掛ける！」



「わかってる！」

「……………やはり、既に来ていたのか！」

「アラ、あのボウヤ……………こつちが見えるみたいね」

ミソラちゃん……………ハープ・ノートのハープ兼ギターから、声が聞こえる……………。クソツ、楽しんでるな！声が愉悅に満ちているぞ……………！

「やつぱり、憑かれちゃまったか……………お前が殴られた時、凄く辛い顔してたからな。こうなるコトは予想できたぜ……………見たところ、取り憑いているのはハープだな」

ここでロックが珍しく苦虫を噛み潰したような顔をする。……………ロックにも苦手なものがあったんだね。

「オンナか……………やりにくいな」

「目を覚ますんだ！キミは、そのチカラをもっと優しく扱えるはずだよ！」

「ーバシユツ！」

何かが発出する音と共に目の前にハープを象ったFM星人が現れた。……………こいつが、ハープ……………今は敵なんだ。

「クスクスクス……………カワイイボウヤ、ワタシたちのジャマをしないでちょうだい……………ハープ・ノート、あの子はワタシたちをジャマする悪い子よ。少しの間眠ってもらいな

「やっ」

………音符の攻撃が来るぞッ!

……………アレ? 来ない?

「ダメ、ハープ……スバルくんこれ以上、ワタシのせいでキズつけさせたくないの! ……お願い、スバルくん。……ワタシたちのジャマをしないで」

……………ミソラちゃんは、真剣だ!

操られている素振りは全く見えない……

「ハープは音波を操るFM星人だ! 油断するなよ、スバル!」

………ボクに戦えって、そう言うのか………でも、ゲームのスバル君のように、ボクが彼女を説得出来るとは思わない。なら、戦って止めるしか……

「本当に、お願い。ワタシはもう、キミに合わせる顔が……」

「そんなの、気にしてない! ボクは、ボクの意思で庇ったんだ!」

「そうだ! ボクはこれ以上、誰かに同じ思いをさせたくないって………そう決めたんだ! 画面越しなんかじゃない、この世界に生きる、一人の人間として!」

「………ミソラ、行きましょう」

「うん………スバルくん、さっきはカッコ良かったよ。………ホント、ゴメンね」

「そう言ってウェーブロードを駆けていく……」

「ミソラちゃん!!」

『ウワァーッ!』

くっ!やはり襲っているのか……無差別に……!

「どうするよ?後を追わなくていいのか?」

そんなの決まってる!

「追うに決まってるさ!ウエーブインして追いかけるんだ!」

……うう……!ミソラ、ちゃん……

ーコダマタウンのウエーブロードー

……いつも通りの、ウエーブロードだ。デンパが少し騒がしいくらい。

「行くよ!ロック!」

早く!止めないと……うわっ!音波攻撃っ!?

でも、痛くない……少し痺れるだけだ。

「ロックバスターで撃ち落とせ!いいな!」

……うん!

「ハッ!」

近づいてくる音波にロックバスターを当てる。ロックバスターによって誘爆した音符型の攻撃は、消滅時に音を奏でるようだ。

……この音は……！

ーコダマタウンのウエーブロードー

展望台に続くウエーブロードに、ミソラちゃんは居た。

さつきまでと同じ、ボクを見ると辛い表情をする。でも、どこか覚悟を決めたような顔だ。

「ミソラちゃん！もう、やめようよ……ボクはもう、ミソラちゃんと敵対したくない……」

こんなに戦いたくないのは、初めてだ。さつきから、胸がズキズキ傷んで、どうしようもない。

「スバルくん……わ、ワタシは……！」

「お願いだよ！ボクたちは、ブラザーにだってなれたハズなんだ！……あの時言おうとしたことだって……」

バスの中で話してわかった。優しく、明るくて、歌うことが大好きな普通の女の子なんだって！ゲームなんて関係ない……！

彼女なら、本当の意味でボクを受け入れてくれるって、理由はないけど、確信があるんだ！だから！

「ワタシは……ワタシの本当の気持ちなんて、わかりっこない……だから、もうジャマ

しないで！」

そう言って、彼女はハープ兼ギターを弾き、足場になるサイズの音波を空中に出現させた。

「ハッ！」

サーファーのように音波を乗りこなし、離脱してしまった。……あつちには天地研究所だ……

「ロック！ボクらも行くよ！」

「オレだけなら飛んで行けるが、ロックマンの状態では無理だぜ？」

わかってるよ！

「だから、バスの電脳にウエイブインして行くんだ……！」

そら、バスが来たぞ！

「ああ、……今日のスバルは何だか怖いぜ」

「真剣にもなるさ！……やっとボクを理解してくれるかもしれない人に出会えたんだ！」

彼女と対話するなら、しっかり聞いてもらえるように、戦闘が終わった後だ……！

「……そうかい」

ゴメン、ロック。

「……うん。今回の件が終わったら、ロックにもちゃんと話すよ……ボクの本当を」  
 「へっ！ソイツは楽しみってモンだ！」

……さあ、天地研究所へ！

——アマケン外観——

……心配がする。やはりこのアマケンに来ていたらしい。

「……ロック、進むよ……彼女を止めなきや」

「ああ、さっきの音符型の攻撃には気をつけろよ」

……来たっ！同時に他方向から音波攻撃が飛来してくることからして、恐らく設置型の攻撃……意志のない攻撃なんてッ！

「撃ちまくれ！」

「うん！」

……よし、これで終わりらしい。

それにしても、悲しいな。あの時展望台で聴いた音は、曲はあんなに良かったのに……

今は悲しみしか伝わってこないのが、何とも言えない。

「また来たぞ、スバル！」

「撃ち落とす！」

だから……こんなところで止まっていられない！

——アマケン外観のウエーブロード・最奥——

天地研究所外観にあるウエーブロード。その最奥、パラボラアンテナの直上、大きめのパネル状になった場所に、彼女は立っていた。

「もう、ヤメなよスバルくん……なんでそんなにワタシのジヤマをするの……？」

「ボクだって、守らなくちゃいけないモノがある……！キミが襲っていた町には、ボクの母さんだっていたんだ！母さんは……三年前、父さんを失ってから、まだ立ち直っていない……だから、ボクが守らなくちゃいけないんだ……！」

「……！父さんを失うって、まさか……！」

ミソラちゃんの表情が驚きが変わる。

……スバル君の記憶からは、お父さんを失った時の気持ちは痛いほど伝わってくるんだ。

でも、こんな言い方しか出来ないボクを許してほしい……

「ミソラ、いえ……ハープ・ノート。そんな戯言に惑わされてはならないわ。他人の心が本当にわかる人間なんて、居やしないもの……あの子はアナタを惑わす悪いコよ。今ここでやってしまわないと、必ず後悔することになるわ」

「わ、ワタシのジヤマは、させたくない……いくらスバルくんでも……だから……」  
絞り出すような声と共に、彼女がボクに向ける圧力を増したのが伝わってくる。

……何でこんなに辛いんだ!?

「ケツ、相変わらず取り入るのが上手いじゃねえか……なあ、ハープ」

……ロツクが何か喋っているが、気にならない。

どうせ『アンドロメダのカギ』関係だろう。

「(お久しぶりね、ロツク……悪いけど、ワタシのジヤマはしなくてももらえるかしら? これからが楽しいトコロなんだから……アナタこそ、そのコを使って何をするつもり?)」  
「(オレの目的は一つ、FM王への復讐だけだ……と、言いたいのが最近はいつのこと結構気に入ってる。正直いいダチってヤツなんだぜ……)」

「(アナタがそんなコトを言うなんて、珍しいこともあったモノね……とはいえ、上の人たちが目くじら立ててアナタを探しているわけがわかったわ……)」

「(オレはオンナ相手にホンキで戦うシユミはねえ。ヤツらの情報をオレに教えてこの場から消えるんなら、イノチだけは助けてやるぜ)」

「(クスクス……優しいのね。ヴァルゴのコトは黙つといてあげるわ……今回はワタシの趣味でやっているコトだから、アナタにはジヤマさせないわよ)」

「ケツ、ならやるしかないな……オレの居場所を知られちゃった以上、仕方がねえ」



「ワタシをオンナだと思つて甘くみたら、ヤケドするわよ」

「へっ、抜かせ！……宿主の違いつてヤツを教えてやるよ！」

どうやら話がついたらしい。

ロックが止めてくれるかと、少し期待したんだけど……

「面白いわね……行くわよ、ハープ・ノート！」

「大丈夫、少し眠つてもらうだけだから……」

「ミソラちゃん！」

……ダメか！こっちに向かつてくる！

「スバル、油断するなよ……来るぜ！」

……絶対に負けられない！ウェーブバトル、ライドオン！

## 21

ーアマケン外観のウェープロード・最奥ー

……ウェープロード上に立つハーブ・ノートは先ほどから動いていない。こちらに向ける圧力は変わらないので、彼女が戦闘体勢を解いたわけではないのがわかる。

……何だ？ そっちが来ないなら、こっちからいくぞ！

「ロックー」

「おうーウオオオラアアア!!」

ロックの雄叫びと共に、ハーブ・ノートの前に躍り出る。左手にロングソードを展開して……っ！

………ハーブ・ノートが笑った!?! 何かマズイ………ツ!!

「うああッ!」

ぐっ! 死角から音波攻撃が飛んできた!?

ロングソードを展開していた左腕でガードすることは出来ない……まさかっ!?

「……キミがここに来るまでに、ハーブから聞いたんだ。ハーブはキミのウオーロックと知り合いだったんでしょ? だから、キミの突進力が脅威だってしっかり教えてくれた

んだ。……キミに、ケガはさせたくないから」

「ポロロン……力で勝てないのは理解していたわ……だから、策を講じさせてもらったのよ」

ぐっ！食らってしまった……！

ダメージは押さえてある……こんなトコロで、気を使わせてっ！……しかし、攻撃を食らっている間に距離を離されてしまった。

既に周りには、遠隔操作で音波を発射するスピーカーが設置してある！これを避けながら、やるしかないッ！

「うおおおっ!!」

まさかバトルカード主義の世界で、弾幕を拝むことになるとはッ！クソッ……ガードするしかない！

「ロック！接近するしかないよ！」

接近すれば、あの弾幕染みた音波攻撃も使えないハズだ！ロックバスターで破壊しているけど、数が多すぎる……近づけさせないつもりかッ！

「わかってるぜ！……ウオオオオッ！」

無理やり音波攻撃を突破し、ハーブ・ノートの正面に再び躍り出る。今度はシールドを展開済みだ！

「甘いッー！」

今度はコード!? いや、糸……ストリングだ! ガードを貫通してくる……マズイツ! これで!

「ハアアッー……ぐっ!」

ストリングがヒットする前にパワーボムを投げておいたお陰で追撃はなかったが、これは……強敵だ!

「フウ……まだまだ、行くよー!」

ハーブ・ノートの掛け声と共に、ロックバスターによつていくらか数を減らしてはあ  
るものの、未だに弾幕として機能する数の音符……シヨックノートが飛んでくる!

「クッー的確にボクを狙ってくる……!」

設置型の遠隔操作攻撃で、どうしてここまで……!

「後の先を打つ!」

……まさか、ウオーロックと同じで電波変換時に体の一部……いや、ギターか! ハー  
プ自身が戦場を俯瞰して、ミソラちゃんに戦術的なアドバイスを行っている……?

なら恐らく、回避運動はミソラちゃん任せにしているはず……素人の体捌きなら、対  
処できるぞ……

こちらだって、ミソラちゃんにケガなんかさせたくないんだ! 衝撃はなるべく与え

ず、HPを削る戦法でいく！

……なら、ソード系やバブルフックなんかの、近接か状態付与系統が適している……ハズ。

戦術を練り、バトルカードを選ぶ。

……やれるか？ いや、やるんだ！

「ロオツク！」

「オオオオオオオオ!!!」

今までにないロツクの雄叫びと共に一瞬で最速の域に達し、景色を置き去りにする。今度こそツ！

「甘いつて、言ってるでしょう！」

再びガード不可のストリングを発射してくる……二度は食らわないツ！

「ハアツ！」

シールドに接触し、一瞬進行スピードが緩まったストリングを右手で掴む。ストリングはハープ・ノートのギターと繋がっているから、そうは捨てられないハズだ！

更にギターを捨てれば使えるのはショックノートだけ……これならツ！

「……キャアツ！」

可愛らしい声をあげてギターごとよろめくハープ・ノート。まだだ！ハープ・ノート

の腰を右腕で抱え、ジェットアタックを使用する。……空中ならッ!

「疾ッ!」

ジェットアタックの発動が終了し、宙に投げ出されるボクとハーブ・ノート。身動きが取れないハーブ・ノートに、落ち着いてバブルフックの泡を当てる。

「……ッ!」

水中で喋った声は流石に拾えない。動きを封じられたまま、ウェーブロードに叩きつけられたハーブ・ノートだが、衝撃自体は体を包んでいたバブルによって緩和されている。水中から解放され、脱力しているハーブ・ノートにロングソードを展開した腕を向ける。

「ミソラちゃん……もう、やめようよ……」

これがチェックメイトだってことくらい、ボクにだってわかる。

「うう……ワタシの音楽は、ワタシが守るの……スバルくんに頼るわけには……いかなかった」

「そんなこと……! キミが音楽を始めたのは、キミのママのためだったハズだろ! ママはキミの歌を通して、キミの世界を知ったハズなんだ! そんなキミのママが、こんなことをして、本当に喜ぶはずがない! キミ自身が、キミの世界を壊していくことなんてッ!」

「それは……でもワタシは、限界だったの！もう、嫌になったのよ！」

「ボクだって、三年前に父さんが行方不明になった時は誰にも心を開けなくなつた！親しくなつた人が、ある日突然いなくなるなんて、耐えられるハズがなかつたんだ！母さんがボクに『学校なんて行かなくてもいいんだよ』つて、『いつか、自分から行きたいと思えるようになったときに行けばいい』つて母さんにそう言ってもらえなかつたら、ボクは、自分を傷つけていたかもしれないんだ……！だから、キミの気持ちはよくわかる……」

……ここまでは、スバル君の記憶が語つてる部分。

「スバルくん……キミも、やっぱり同じだったんだ……」

「でも、そんなコトはどうでもいい！ボクはこの前、初めてキミの曲を聞いた時、キミのファンになつたんだ！だから、わかつた！だから感じた！さっきの戦闘も、ここに来るまでの音波攻撃も、キミが奏でる音は悲しみに満ちていたんだ！」

「……………ッ！」

「ミソラちゃんがどんな気持ちで歌わされていたかなんて、ボクにはわからない……でも、これだけはわかる！そんな音で奏でる曲を聞くために、キミのママは、キミに歌手になつて欲しかつたわけじゃない！」

「なら、ワタシは……どうすれば……」

「ママのために歌えないなら、他の何かを見つければいい!!今朝、キミとバスの中で話した、学校に誘ってくれる人たち……その中の人がキミのファンだったよ。キミが急にラブを中止にしても、戸惑ってはいたけど、キミを信じていたんだ!世間はキミを大切に思ってるよあれ、歌うことを強要なんて、していない!歌いたくなつたときに、また歌えばいい!キミが歌いたい誰かや、何かを見つけてからでも遅くないんだ!」

「ーバシユツ!」

ハープ・ノートの隣に、FM星人のハープが出現した。戸惑っているように見える。

「なぜ、トドメを刺さないの?」

「言っただろうがよ……オレはオンナ相手に本気で戦うシユミはねえってよ」

結構本気出してたよね……ロック。でも、ありがとう。キミのお陰で、ボクは戦える。「クスクス……わかったわ、敗けを認めて降参するわ……かといってこのままオメオメ帰っても、厳しい罰が待っているだけ……そうだわ」

「オ、オイ……まさか……」

「そのまさかよ。暫くこの星でお世話になることにするわ……ミソラってコも気に入ってるし、安心して、もうFM星人側につく気はないわよ。一度しかない人生だもの、楽しく、刺激的に生きていきたいじゃない……この星には女心と秋の空ってコトバがあるの知らないかしら?」



「……だから怖いんだよ……けどよ、コッチにいる以上、オマエも狙われるぜ？」  
「そのときはアナタに助けてもらおうわ」

「ケツ！勝手にしやがれ！これだからオンナってヤツはニガテなんだ！」

……ロック、何だかんだで嬉しそうに聞こえるのは気のせいかな？やっぱりFM星人の味方がいると精神的にも落ち着くんだろうか。

「ふふっ、任せといてよハープ。ボクはキミと、ミソラちゃんを守る」

「また変な気を起こしたらぶっ飛ばしてやるからな！」

「……頼もしいね、スバルくん。でも、大丈夫！ハープが変な気を起こさないようにしっかり見張っておくから！……それに音楽を愛する者に根っからの悪人はいないわ」

そこで、言葉を切つてボクを見つめてくる。もう決意は硬いようだ。辞めてほしくないんだけどなあ……

「スバルくん、ワタシ……歌手を引退するわ」

「……………」

「ワタシ、ずっと独学で音楽をやってきたから、一から勉強をしながら、いつかもう一度歌を聞いてもらうんだ。……天国のママと、ワタシの歌を待っていてくれる人たちのために。その前に、ちゃんとケジメをつけないとね……」

「……………ケジメって……………」

「サイコーの席を、用意しておくね」

彼女の顔は、吹っ切れたような、でも何か新しい希望を見出だしたような、そんな輝く笑顔だった。

——三日後・展望台——

ミソラちゃんが正式に引退を発表し、その引退ライブがコダマタウンの展望台で行われた。

ボクは、ライブの調整で忙しいミソラちゃんの代わりにハープが届けにきた、ライブチケットのデータをトランサーに入れて、ライブ会場である展望台に来ていた。既にライブは始まっており、観客のボルテージは最高潮に高まっている。

「凄い熱気だね……」

「(人間ってヤツは、ホントよくわからないぜ)」

「(あ、次の曲が始まるみたい)」

「みんな、今日は来てくれてありがとう！次が最後の曲です!! 『グツナイ ママ』」

母への別れを告げるような、しんみりした曲調が続いたあと、未来への期待を告げるような晴れやかなメロディーでその曲は幕を閉じた。

そして……

「みんな……グスツ……今まで応援してくれて……ありがとう……！勝手にライブを……中止にしたりして……本当にごめんなさい……ワタシの心が弱かったせいで、皆に迷惑をかけちゃったね……今日、ワタシは……引退します……けど、この引退は昨日までの弱いワタシからの卒業……いつの日か、もっと強いワタシになれたときに、また皆の前に立ちたいと思います……」

『ミソラちゃんやめないでー！』

『ミソラちゃん！！』

『ウオオオツ！ミゾラちゃん！！』

「ワタシ、こんなに沢山の人に支えられてたんだ……なのに、ワタシって自分のコトばかり……」

みんな!!ワタシ、絶対戻ってくるからね!!ありがとう!!」

……ステージが終わっても、拍手は暫く鳴り止むことはなかった……そして、全てが終わった後……

――展望台――

トランサーにきた連絡でミソラちゃんがいる展望台に向かうと、そこには申し訳ない……といった様子の子のミソラちゃんが待っていた。やっぱり、人のコトを気遣える優しい人間なんだと思う。

「……今日は、来てくれてアリガト……キミのお陰で、前に進めそうなんだ……」

「なら、良かったよ……きつと天国のママも、キミの世界の広がりを楽しみにしてるはず」

「……うん。……それじゃ、そろそろ行かないといけないんだけど……」

若干、濡れた瞳でこちらを見つめてくる……

ボクも、覚悟を決めなくちゃ……

「これからはワタシ、一人で頑張っていくから……うう……どうして……？ ナミダが……ワタシ、もっとしつかり……うう……」

……泣かせてしまった。ボクが発端なのだけど。

「あーあ、泣かしちまったな！ この間テレビでやってたぜ……地球じゃ、オンナを泣かすのはツミになるんだろ？ 早く何とかしねえとタイホされちまうぜ！」

……それはロック、もしかして煽ってるつもりなのかい……？

でも、ボクにだって、覚悟がある。今日、ちゃんとロックやミソラちゃんに話すことだ。さしあたっては……

「（おおっ！ 抱きしめちまったぜ！ コイツはミモノってヤツだな！）」

「うう……グスツ、ヒック……スバルくん……う？」

「……母さんが言ってたんだ。泣いてるオンナのコが居たら、抱き締めてあげなさいっ

て」

「うう……ワタシのママは、泣いてるときに優しくするオトコには、注意しなさいって……言つてたよ……？」

ミソラちゃんのママエ……

「まずは落ち着いて欲しいんだ……三日前、コダマタウンのウエアブロードで言ったでしょう？ボクたちは、ブラザーにだつてなれるハズだつて」

「……ウン……スバルくん……いい匂いがする……」

ちよっ！ボクにアブノーマルな趣味はないよ！

「だからさ……えと、その……ボクとブラザーになつて欲しいんだ」

「……いいよ」

……ミソラちゃんが了承してくれた後、落ち着くのを待つてボクたちはブラザーバンドを結んだ。彼女とブラザーバンドを結んだことで、発現したリンクアビリティのファーストバリアとアンダーシャツは、ボクを確かに守ってくれることだろう。

……ここからは、ボクの告白になる。もう、覚悟は決めたんだ。

「そろそろ行くね……」

……ミソラちゃんが帰ろうとする。

……今しかないんだ！

「待って！……もう少しだけ、話があるんだ」

「秘密のコト？……誰にもしゃべらないよ。トランサーの中に宇宙人が居候してるなんて……喋っても、信じてくれる人はいないだろうけどね！」

「違う、違うんだ……ボクには、もうひとつ秘密があるんだよ……」

「宇宙人がトランサーの中に居候してるコト以上の秘密ってこと？」

若干訝しげにミソラちゃんがこちらをうかがってくる。

……大丈夫。きつと、ミソラちゃんなら……

「これはロックにも聞いて欲しいことなんだけど……」

「おう、この前言ってた、オマエの本当ってヤツか？」

「うん。中々言い出せなくてゴメンね……でも、話すよ。今こそボクは、ボクの真実を話そう」

一旦そこで話を切って深呼吸する。ああ、心臓がドキドキしているのが、伝わってくる。怖いんだ。拒絶されるのが。でも、大丈夫。ボクはミソラちゃんを信じるって決めたんだ。

「ボクは、厳密には星河スバルじゃない。その記憶と体を持った、ニセモノなんだ」

「……………っ！どういう、コト？」

ミソラちゃんが震える声で問いかけてくる。やっぱり、こういう反応になっちゃうよ

ね。だけど、ボクはもう、最後まで話す覚悟は出来ている。

「ボクは今年の4月……小学五年生になった時からこの体に憑依した、誰かなんだ。なぜ、この体に憑依したのか、そしてこの人格が誰なのか、ボクにはわからない……でも、これだけは言える。4月になるまでのボク……星河スバルの人格では、決してないと言うことだ」

「……………」

ここまでロツクは静観を保っている。もしかして、失望したのかな……それでも、別にいいんだ。ボクはずっとロツクに隠し事をしてきたってことだし。信用出来なくなつたのなら、それで……

「……そんなの！ワタシは気にしない！」

え？

「例えキミが、本来の星河スバルじゃなくつても、ワタシが、ワタシとブラザーバンドを結んだのは、キミだよ！キミなんだよ！……だから、だから自分をそんなふうにするのは止めてよ！」

……………ミソラ、ちゃん。

「そうだな、別にオレも気にしねえぜ……実はFM王の手先だった……とかじゃなけりゃあな。それに、オレの相棒はオマエだぜ？相棒が相棒を信じてやらなくて、どうす

るよ?。」

ロック!ミソラちゃん!……ううつ、ありがとう……

「ほら、スバルくん、泣いてるよ……ギューってしてあげる、こっちにおいで……」

ううつ!良かった……ボクは、ボクは……この世界でやつと、確かな繋がりを得るコトが出来たんだ!

「ふふつ、スバルくんにも、カワイイトコロあるんだね……それに、ワタシたちだけに話してくれた秘密……ワタシたち、だけに……」

………何だかゾクツとしたのは気のせいだと思いたい。

「ふふつ……一件落着と言ったトコロね」

ハープが起こした事件じゃないか!

『オオーツ!!何だこのゼツト波は!』

……ゲツ!五陽田さんだ!……また展望台から、ジャンピング・オン・エアするしかないのかな……

「あの人はヤバいんだ!……FM星人を探して破壊するって……」

「ふふつ、ワタシが守ってあげる……ハープ、いくよ!……それっ!」

生身で音波攻撃を……ハープか!いや、気絶する威力だったよね……

「それじゃ、ワタシ行くね!また、来るからね……アリガト!」



何故かまた来るといふ表現にゾクツとしてしまう。  
なんでだろう？

「それから、これからもヨロシクね」

「うん！何時でも来なよ……しつかり時間をとつてからね！」

「ふふつ、もちろん！」

「それじゃあね、ロック。長いお付き合いになりそうね、ウフフ……」

そう言つて、二人は行つてしまった。

「ロック、ボクは今、とても晴れ晴れとしているよ」

「そうかい……全く、エラいのとブラザーになつちまつたんじゃねえのか？」

いいんだ、良かったんだ、これで。

………あつ！ペンダントが……

「ペンダントが光つてる………あ、止んじやつた」

これつて確か、通信機だつたつけ？後で天地さんに聞いてみようかな……

「オイ、そんなコトよりよ、あのオッサンがノビてる間に帰つたほうが良くないか？ペン

ダントのコトは後でオマエのオフクロにでも聞けばいいぜ」

「………そうだね、ひとまずは家に帰らなくっちゃ………」

最高にハイな気分で、ボクたちは家への帰路についた。

## 第四話 『天秤座』

## 2 2

——星河家・翌日——

……ああ、凄く晴れやかな朝だ。もう何でも出来るような気がするね。ロックも受け入れてくれてるし、怖いものなんて何も無いぞ！

「オイ、スバル！起きろ！」

何だ？ロックが急かすなんて珍し……くもないか。

「オレはいい加減、我慢の限界ってヤツだぜ！」

「ふああ……どうしたの、ロック？」

「BIGWAVEだよ！なんやかんやでまだ行けてねえだろう!?……流石に我慢の限界ってヤツだ！」

あつ……そう言えば、ロックとは行つてなかったね。

ミソラちゃんに会う前にロックを探しに入つたけど、あんまり詳しく見たわけじゃないからなあ……

「うん……ゼニーも貯まつてるし、バトルカードの貯蔵は十分だ！ロック、決戦の時間だ

よ……………」

あそこには、沼がある……!!

——BIGWAVE——

「とうとう来たね……ロック」

今日、ボクは一世一代の大勝負をするぞ！

「おう、中々良さそうなトコロじゃねえか」

BIGWAVEの店長、南国ケンさんに話しかける。まずはバトルカードの購入だ。

「いらつしやい！チョーいいモノ一杯あるよーざっと見てくかい？」

「お願いしますー！」

「なら……はい、これが当店のラインナップだよ！データにしてキミのトランサーに送ったから、決まったら何時でも言ってるね！」

品揃えは……なるほど。汎用性のあるカードが多い。特にリユウエンザンやHPメモリ、スタンナツクル辺りは買いかな……。

「……じゃあ、リユウエンザン、HPメモリ、スタンナツクルを下さい……三つずつで」

おお……これが大人買いと言うヤツか……一気に強化された気がするぞ！

「なるほどな……ウイルスバスターングのリザルトで手に入るデータってよりは、完全に戦闘用に調整されたカードって感じか……面白いじゃねえか」

ロックも楽しそうで何よりだ！そして、ここからが本当の戦いなんだよ……

「オイ、スバル……急に顔が長くなって、顎が尖ったように見えるのは、オレの錯覚か？」

ざわ……ざわ……さあ！勝負を始めよう！

カードトレーダー3用に数えきれない（誇張）ほど集めたグランドウェーブを使う時が来たようだね！

……無心で回せ……回転数が、全てだ！

うおおおおおっ!!

まず一枚目！……バトルカード『プラズマガン1』！

まだボクのバトルフェイズは終了してないぞ……ッ！

そして二枚目！……バトルカード『エアスプレッド1』！

まだまだだ！三枚目！……バトルカード『ソード』！

四枚目！『パワーボム1』！

五枚目！『キャノン』！

こ、これしきでボクのバーサーカーソウルを止められるとでも……!?

六枚目！ドロー！『グランドウェーブ1』！

七枚目え！ドロー！『リカバリー30』！

まだまだアッ！

——十分後——

「まだ、まだまだ！諦めるわけにはッ！」

「もうやめるんだ、スバル！余りのバトルカードはとくにゼロだぞ！」

HA☆NA☆SE！

「オイ、スバル！しつかりしろ……そういうときもあるさ」

ロックに慰められた……うん、そういうときも、あるよね。

……カードトレーダーの電腦に忍び込んで、排出率をいじるか……？

——カードトレーダー3の電腦——

……来てしまった。いや、違うから！ウイルスに侵されてないか調べるだけだから！

排出率をイジったりなんかしないから！

「スバル……」

ロックの視線が痛い……

「ええつと……どこかに異常は……あ」

……あ、居た。メットリオが排出プログラムをイジってたのか

……ゆ　　る　　さ　　ん！！

「うおおおおおッ！！」

純真なボクの心を、よくもッ！

——十分後——

「まあ、なんと言うか、災難だったな」

ロックが優しい……………

「そうだね……………今日はもう家に帰ろう……………」

——星河家・夜——

さーで、割と楽しみにしている『危ない暴れん坊ウルトラ大將軍』の時間だ！昼間の悪いことなんて忘れてしまおう！あれは、嫌な事故だったんだ……………

「……………あれ？テレビの調子が悪いな……………」

どうしたんだろう？またウイルスかな？ボクの部屋のテレビはそこそこ新しいモデルのハズなんだけどな……………」

『ザザ……………ザザ……………ス……………くん……………き……………える……………』

何だ、声が……………聞こえる？

『ザザ……………スバルくん！聞こえる!?』

画面にハープ・ノートオツ!?どういうこと!?

「え、えええ？なにこれ……………ちよつと、ロック！これは……………?」

「……………多分、居やがるな」

居るって、まさか……!?

「……ザザ……やつと画面に出れた!ハアイ!スバルくん、昨日ぶり!」

凄いハイテンションなんですけど……

「え、どうしたの?わざわざこんなコト……」

「もちろん、スバルくんに会いに来たんだよ……ちよつと待つてね……よし!」

元気な掛け声と共にハーブ・ノートの姿がテレビから消え、ボクの部屋の中にミソラちゃんが見れた……。

どうやら、まだ混乱しているらしい。今週は遂にモンドコロニウムレーザーの2号機、インロウビームバズーカが出るとか、そんなことは頭の中から吹っ飛んでしまった。

「ふふつ、会いに来ちゃいましたー!!」

いや、そんないい笑顔で言われても……不法侵入ですよん……いや、構わないけどさ

……

「うん、で、どうしたの?」

何か用事かな……?」

「ヒドイよスバルくん!……何か用が無ければ来るなって言うの!?!」

「え?あ、いや、違うって……でも急だったから、ビックリしちゃったんだ」

「うんうん、そうだよね!ワタシたち、ブラザーだもん!……えいつ!」

うわあっ！腰の辺りにタックルしてきたぞ！

……いや、これは……

「ふふっ……スンスン……やっぱりスバルくんの匂いは落ち着くなあ……」

信じられますか？この娘、昨日までアイドルだったんですよ？

「いや……え？ホントどうしたの？」

「……んっ……ちよつとね、寂しくなっちゃったんだ」

……まあ、悪い気はしない。ミソラちゃん可愛いし？何だかへんな気持ちになりそうだ……

「そっか……」

「ウン……あつ！ちやんと用事もあるんだよ！」

ああ、そうなのね。まさかこんな変態行為をしに来たわけじゃないだろうし……

「ホラ、スバルさんと初めて会ったとき、スバルくんハミングしてたでしょ？聞いたことない曲だったから、音楽の先生に聞いてみたんだけど……知らないって言うんだよね。ワタシとスバルくんの思い出の曲だから知っておきたいなあ……って」

……そりゃ、アナタが未来で歌う曲だし？しようがないよね……ま、いつか。

「いいよ……あの歌はね、ボクがこの世界にいるコトの証でもある曲なんだ……だから誰も知らないはずだよ」



「ふふつ、そっか。またワタシとスバルくんだけの繋がりが増えたってコトかな？」  
……何で凄く嬉しそうなんですか……

「あ、その曲の名前は……？」

『『シューティング・スター』って言うんだ』

「そっか……『シューティング・スター』。うん、覚えた！」

そんな感じで辺りが寝静まっても、ボクの部屋は少々騒がしかった……

——数日後・就寝中——

……ここは、精神世界？ベルセルクの時と同じ……と、言うことは。

「……………ロック、居る？」

「ああ、居るぜ。だがここは……以前見たことがあるな。精神世界ってヤツか……しかし、辺り一面何も見えねえな。いつの間にこんなところへ来ちまったんだ？オレたち……………」

……………っ！気配がする……後ろか！

「……………コレは……幻獣……？」

カゲ、のようなモノが3体、こちらを見つめている。

「……………スバルよ」

ペガサスを象ったようなカゲがボクの名前を呼ぶ。間違いない。以前、夢で語りかけてきた存在の声だ。

「……何ですか?」

「それと、その腕に取り憑いているのは……FM星人、ウォーロックだな」  
ライオンを象ったような姿のカゲが話しかけてくる。

ぶつちやけドラゴン、ペガサス、レオって、レオだけ格落ち感ないかなあ……?

「オレの名前まで……何なんだ、コイツら……」

「ワレワレはオマエたちをずっと見守ってきた。そしてこれからも……」

まさか、憑依のコトがバレている……!?

「まさか、ミソラちゃんとブラザーバンドを結ぶ時も、見ていたんですか……!?!」

「スバル、今はおいておけ……コイツら、かなりヤバイぞ。雰囲気明らかに違う……」  
心配してくれるのは嬉しいけど、彼らのスターフォースは重要な戦力になる……でも、聞かれたくは、なかったんだ……まだ、知っているかわからないけど……音声までは拾えなければ、まだ……

「ワレワレはただ、伝えに來ただけだ……既にある程度のチカラを持っているようだが……いずれオマエたちの存在がこの地球の命運を左右することになる、と」

ペガサスを象ったカゲ……ペガサス・マジックの分身がボクに告げる。

正直、ボクの中ではプライベートを覗く変態幻獣集団だけどね！

……………夢が、覚める……………絶対分身をコテンパンにしてやるからな……………！いいか、絶対にだ……………！

——星河家・朝——

「うーん……………」

やっぱり変態幻獣集団に見られていたのか……………なんだか悲しくなってきたよ……………  
「あつ、ペンダントが光ってる……………」

……………消えて、しまった……………そう言えば天地さんかあかねさん辺りに聞こうと思つてたんだっけ……………

……………着替えようつと……………

——五分後——

「それで、やっぱりロックも同じ夢を見ていたのか」

「ああ、妙な黒いカゲが三つ……………意味のわからないコトをほざいてやがった」

間違つては、いないんだよね。『アンドロメダのカギ』の件もあるし。

「意味がわからないと言え……………朝、起きたらペンダントが光ってたんだよね……………後で、母さん辺りにでも聞いてみるよ」

「それがいいぜ……何なんだろうな、それ」

……確か、通信機だったハズ……

——星河家・リビンググー

「あれ?……母さんがいない……」

パートだったかな?

——数十分後——

『……ただいま』

あ、帰ってきた。

「お帰り、母さん」

「あら、スバル……ただいま」

「朝から居なかったけど……どこに行ってたの?」

「うん、実はね……」

どうやらボクの学校に行ってたらしい。

「担任の先生に会ってきたの……アナタの様子を聞きたいって連絡があつたから」

……確かに、最近は前よりもあかねさんと会話している気がするな……

「新しく担任になった人みたいで、お母さんも初めて話をしたのだけど、とても感じの良  
い人だったわ……アナタのコト、とても心配していたし……あの先生ならスバルもきつ

と好きになると思うの。……どう？そろそろ行ってみない？学校に……」

……確か、学校ではリブラ・バランスが現れるはず……

取り憑かれたのは……確か育田ってフラスコを持った教師だった、ハズ。

「……少し、考えてみるよ」

これが、今の精一杯。FM星人の襲撃がある以上、あまり縛られるわけには……でも、ちよつと気になるな……

「……っ……そう。でも、無理はしなくていいのよ？本当に行きたくなつたときに、行ってくれれば、それで……」

「うん、ありがとう……ところで、父さんからもらった、このペンダントなんだけど……」  
聞いてみたが、やはり知らないらしい。天地さんなら……と言っていたので今日はそつちに向かうことにする。

その前に、ウィルスバスターングだ！カードトレーダー用の残弾を確保しなくちゃ  
……

## 23

ーコダマタウンのウエーブロードー

……ふう、今日はこのくらいでいいかな。

「中々鬼気迫ってたぜ、スバル」

ロックが茶化するように感想を述べてくる。

だって残弾が足りないんだから、仕方ないじゃないか！

回転数が全てだからね……あ、でも良いことはあったよ。

「それよりどう、ロック？新しい装備データの性能は」

そう、コダマタウンでメットリオ狩りをしている途中、まだ散策していなかった電脳やウエーブロードに、ミステリーウエーブが残ってないか、調べに回ったんだ。

そうしたら、見事ロックの装備データ『ベアリング』を発見、早速装備してもらったってわけ。

「コイツはいいぜ！今までとは、段違いの安定感ってヤツだな」

確か、『ベアリング』の性能はアタック、ラピッド、チャージの全てが2で、安定性に重きを置いた装備だったはずだ。それでも今までの『ヒキサクツメ』や『スルドイキ

バ』に比べたら、はつきりとした性能差がある。

ロツクの機嫌も上々だ。

「さ、そろそろ天地研究所に行こうか」

「おうー」

相棒がご機嫌だと、こつちも調子がいいってモンだよ。

「んじゃ、ウエーブアウトー」

いつものように展望台のウエーブホールへウエーブアウトし、バス停に向かう。バスを待っている間にメールの確認でもしておくか……あ、ミソラちゃんからメールが来る。

早く返信しないと。……またテレビから乗り込んでくるなんてコトになったら大変だ。

そつちのほうが嬉しそうだったけど……

ーロコダマタウン・バス停ー

……天地研究所行きのバスは……あと、10分か……

『ちよつと、待ちなさい！』

おおっ！久しぶりに聞いたぞ、この声は……

「やっぱり、委員長さんだ……オーイー！どうしたの？」

「オーイー!どうしたの?……じゃないわ!全く、もう……!ところで、どこかへお出かけの様子かしら?」

「うん。今から天地研究所に行こうと思って……」

「何よ、その苦笑いみたいな顔は……!」

あんまり都合が良くないんだけど……

「(へっ!そりや、このオンナが来るときは大抵ヤツカイゴトが起こるからな!)」

「(そこは別に気にしてないよ)」

「アナタねえ……一体、いつになったら学校に来る気なの?」

……うーん、どうしようか。正直ティーチャーマンで勉強は足りているんだけど、あかねさんのために思うと……いや、リブラもいるし。

確かジェミニ関係のジャミンガーも出たような……

まとめて対処するには、ちょうど良いってコトかな?

「そうだね……今少し、復学については考えていたとこなんだ。でも、久しぶりだから……」

ここで委員長長さんが喜色満面になり、心なしか興奮しているように見える。まあ、苦労してたしねえ……

「……そう!やっとな来てくれる気になったのね!」



「うーん、まだ決心がついてないと言うか……」

心にもないことを言っている自覚はあるけれど、コレは確かスターフォースに繋がる……ハズ。一応ミソラちゃんに連絡しておくべきかな？メール辺りで。FM星人関係なら、ハープだつて無関係とはいかないだろう。

ちやうど、さつき確認したメールの返事にでも綴ればいい。

「なら、今度の学芸会でワタシたちのクラスがやる演劇のセットでも見に来ないかしら？……アナタにもちゃんど役があるんだからね！」

「学芸会？」

「ええ！もちろん委員長長の全面プロデュースです！」

「かんとく、きやくほん、しゅえんもぜんぶいいんちようだ。……スゲエだろ!!」

ゴン太とキザマロがまるで自分のコトのように誇らしく語ってくる。二人の中心に立っている委員長さんも満更では無さそうだ。

「……ボクにも役があるの？」

正直面倒臭いが、委員長さんも本気つてコトは伝わってくる。人の本気にはちゃんと応えられる、そんな人間でボクはありたいんだ。

それに、そろそろティーチャーマンの授業には退屈してきたんだよね。確か担任の育田先生の授業では、普通じゃ中々聞けない話が聞けたハズだ。

リブラを警戒する意味でも、通う価値はあると思うけど……

「ええ、そうよ。……こういう行事は皆でやることに意味があるの。アナタもクラスの一員だし、参加して当然だわ。それに、アナタの役はとつても大事なのよ………とくつてもね」

それって路傍の木の役ですよねえ……ドヤ顔委員長さん可愛い。

いや、確か全身を覆うタイプのセットではなかったハズだから、クラスの輪に入りやすくするための配慮だったとか？ 全校生徒に顔を売るっていう意味として考えれば、まあ……

「まあ、すぐに終わるなら見ていつてもいいよ……委員長さんの全面プロデュースなんですよ？……ちよつと気になるしね」

「ふふつ……楽しみにしてなさい！」

ニヤケ顔が止まらない委員長さんも、ボクは嫌いじゃないよ。それにスターフォー関係もあるしね。

「そうですよ！あのセットを見れば今回の劇がいかに素晴らしいか、わかるハズです！」  
「きつと、アナタだつてやる気になるわ……学校にも来なくなるでしょうね！さあ、セットがある体育館に行くわよ！」

「（良い流れだな……これでやつと学校とやらをこの目で拝めるぜ！）」

ロックも学校に興味があつたのか……

ちよつ、ちよつと委員長さん!?腕を引つ張らないで!

小学生女子の腕力、侮れないな……

ーコーダマ小学校・玄関ー

「……どう?三年ぶりに学校に足を踏み入れる気分は?」

中々キレイな学校だ。それにしても学校に購買なんてあつていいのだろうか。あ、3  
でソロ(笑)に斬られる職員室があるぞ!結構分厚い扉だつたんだなあ……

それに、スバル君の中にある記憶とは若干の相違がある。

「どうつて……結構変わつてる、かな?」

「さいきん、かいそうしたんだぜ!なんでもこうちよう先生のいこうとかで……」

『オーイ!何やつてるんだ?』

おお!あのツインフラスコシステムは!育田先生だ!フラスコの中にある牛乳と  
コーヒーを混ぜることで生み出されるコーヒー牛乳の味は二乗化される……

「まったく、こんな時間に何をやつてるんだ?」

咎めるようなセリフなのに全然嫌味に感じない。これも育田先生の持つ人徳という  
ヤツか。

こんな先生が疎まれているなんて、世も末つてヤツだなあ……やはり集団心理とは恐

ろしい。確か学習プログラムを導入していないから、だっけ？

「あら、育田先生」

「もう、下校の時間はとつくに過ぎてるぞ」

やはり良い先生だ。

「先生、今日は特別なんです」

「先生たのむ！ちよつと多目に見てよ」

「特別つて言つたつてな……ん？おやおや……その子は……キミは……」

わざわざ委員長さんたちを迂回してこちらに近づいてくる。ホント良く出来ているなあ。どれだけボクからの評価を高くする気なんだろうか。

「スバル君ですわ、先生」

委員長さんが誇らしげにボクを紹介する。珍獣か何かの扱いなんだろうか、ボクは。

「おお！やつぱりスバル君か！奇遇だね！実は先ほどキミのお母さんと話をしていたところなんだよ」

「ええ、それは母さんから聞きました」

「おっと、私の自己紹介がまだだったね。私は育田、キミのクラスの担任だ」

「先生！スバル君は遂に学校へ来る気になったそうです……このワタシの説得のおかげで！」

委員長エ……いや、間違っではないけど。

「ええと、少し、考えているんです」

「何と……！委員長が強引に連れてきたのかと思ったよ」

「そんな……酷いですよ、先生！ワタシが強引に、なんて！」

「(ウソだな)」

「(ウソですね)」

「(嘘乙)」

この瞬間、ボクらの心は一つになった。これが、ブラザーバンドか……ダイゴさん、ボクやっとわかった気がするよ……！

しかし委員長さんが、心外とばかりに憤慨する。いや、かなり強引だったよ、今までは……

「……確かに学校は大事だが、ホントのコトを言うと学校なんてムリしてまで来ることはないんだ」

おう、育田先生ぐう聖……

「え？いいんですか、教師がそんなこと言って」

キザマロが信じられない！とばかりに聖人育田へ疑問を投げ掛ける。

「人生には……ね、学校で教わる公式なんかより、よっぽど大事なコトが山ほどある。」

……私はいつもそう思ってる」

ここで一度話を切って、ボクを見つめてくる。

暖かい目だが、真剣でもあるんだろう。

「だから、キミが本当に来たいときに、学校に来ればいいんだ。私はそれを待っているからね」

「さ、さすが先生……いいこと言うぜ……」

「ハハ、ちよつとカツコつけすぎたか？……おつと、私はそろそろ行かなくちゃな。今日は早く帰って子供と遊んであげる予定なんだ」

「子供はたしか……6人兄妹だっけ？」

「違うよ、7人だ！」

ゴン太の間違いを断固として訂正する、育田先生（ルーラークラス）。

「職場でも、家庭でも子供に囲まれて……本当に子供好きなんですネ」

「子供は『宝』だよ！目に入れてもきつと痛くない……そう思えるくらいさ。……もちろん、私の生徒であるキミたちも同じだよ……じゃあ、私は行くからみんな、出来るだけ早く帰るんだぞ」

そう言つて去ろうとする育田先生は、最後にボクを向いて相談事があつたら何時でも言うように言つてくれた。

シーユーアゲイン、育田先生！

「さあ、劇のセットを見に行きましょうか」

さつきまでの威勢を取り戻した委員長さんが号令をかけ、一同は体育館に向かう。

見せてもらおうか、委員長さん全面プロデュースの演劇とやらを！

ーコダマ小学校・体育館ー

時代が違ってもやることはあまり変わらないのか、体育館の造り自体に現代校舎と大した違いはなさそうだ。

しかし、壁面には電子パネルが多数配置されており、様々な操作が出来そうだ。

今はバスケット用のラインが引かれているが、恐らく他の競技をするときにこのパネルを操作することで、対応するのだろう。

そして、肝心の劇のセットは……

「青い衣装に角が付いた被り物。それに……トラック、折れたポスト……」

間違いない、ボクの劇だ。(○)

「いいんちようの全面プロデュースの作品なんだ。……コイツはでんせつになるぜ

……」

意気込みを語ってくれるゴン太（怪物役）。

「きつと驚きますよ」

キザマロ（照明役）も鼻が高そうだ。

「フフ、よく聞きなさい。一度しか言わないからね。……今回の劇のタイトルは……  
『ロックマンVS牛オトコ』よー！」

ルナルナ団のネーミングに通ずるモノがかいまみえる。

いや、犬にネコ太郎とか付けるレベルだからなあ……

まだ earth satellite とかのほうがマシなレベル。どっちも月だけ  
ど。ルナさんだからね、しようがないね。

「ロックマン、ねえ……」

「アラ、アナタロックマンを知ってるの？」

「この角が付いた被り物が牛オトコだとしたら、こっちの青い衣装がロックマンなんで  
しよ？この前のアマケンで見なかったっけ？」

取り敢えず惚けておく。

……何か正体を隠すヒーローって響きがいいね。仮面ライダー何かも、こんな気持ち  
だったのだろうか。

「ロックマンはよお、ナゾのじんぶつでよ、オレたちがピンチの時にさつそうとあらわれ  
て、バケモノを退治して風のようにさつて行く……オレのあこがれのオトコなんだ!!」

キミのせいで、終盤にブラザーバンド画面が暑苦しくなるんだよね……



いや、別に嫌がつてないけど。スーパーアーマー便利だし。本気には本気で応えるよ、ボクは。うん。

「忘れもしないわ。ワタシはロックマン様に危ないトコロを2回も助けられたの。……一度目はトラック暴走事件の時……二度目は天地研究所で光の尾を引いて現れる姿はまさに流星……」

それは回転していたからじゃないの……？

その後にやったサンダースラッシュによるハメはスルーなのね……

「ああ、ロックマン様、アナタは今どこに……」

……………ブフツ！吹きそうだ……

いや、うん。委員長さんがやると絵になって良いと思うよ、うん。

「今回はロミオとジュリエットのオマージュなのかい？」

「……何か言った？」

ヒイツ！ちよつと、人でも殺しそうな目だったよ!?

「……で、今回はトラック暴走事件の時をモデルにしているの。主演女優であるワタシがナゾの牛オトコに襲われ……そこに颯爽とロックマン様が助けに来てくれるっていう感動のストーリーよ」

……いや、あんなハメ技しても慕ってくる辺り、彼女の中では半ば神格化してるん

だろうなあ……

「脚本はとつても評判がいいんです。ただ、クラスメート全員、ロックマンを架空の人物だと思ってるんですが……」

「そりゃ、そうでしょ」

青いピッチリしたスーツを来たヒーローなんて、誰だつて疑う。ボクも疑う。

「キザマロ、もしかしてアンタまで疑うつもりじゃないでしょうね？ アンタだつてロックマン様に助けられたのよ！」

「で、でもトラックの時も研究所の時も、ボク、イマイチ何が起きてたのか覚えてないんです」

「オ、オレは……よくおぼえてるぜ。アマケンでアイツが助けしてくれなきゃ、オレたちはどうなっていたか……」

「ロックマン様は絶対にいるわ！ ワタシは信じてる！……困ってる人がいたら絶対に助けてくれる。そう、あの方はヒーローなの！」

努力はするよ、努力はね。ボクだつて必死なんだ。

死にたくはない。……出来るのは精々、ウィルスを倒すことくらいさ。あ、でもミソラちゃんのためなら火の中、水の中だよ！ なんだつてブラザーだからね！

「そうだね。ボクもあの事件が偶然解決したとは思えないよ。……何か超常の存在がい

たとしても、不思議ではないんじゃないかな」

……そろそろ上を警戒しておくか。油断してエリック上田になったら嫌だし。

「オイ、スバル上だ！危ない！」

「……ッ！」

ーガッシャーン!!

「ふう……危ないトコロだった」

流石ロック、ネタがわかっている……なんて言っている暇もなかった！照明はやバイよ、

照明は……

「な、なに……照明が落ちてきたの？」

「(スバル、ビジライザーだ)」

「(うん、わかっている)」

……いた。ジャミンガーだ、間違いない。

「(アイツは……ジャミンガーだね)」

『……………ニヤッ』

「(オレたちを見て笑いやがった……つてことは、狙いも恐らく……)」

「(挑発には死をもって遇するよ、ロック)」

まあ、ベルセルク使わないんですけどね。ジェミニにデータ録られるかもしれない

し。

「よし、スバル、ウエーブインだ！経験的に言つて、ああいった不意討ちをするタイプはすぐに倒さないと厄介なコトになるぜ。もし、ここで逃がせば……オレたちは当分不意討ちに怯えながら生活しなくちゃならない……正面对決ならスバルが勝てるだろうけどな)」

ふふつ、ロツクの信頼が厚くて困つちやうよ……

秘密を明かしたからかな？何だか高揚するようだ。

大丈夫、何だつて勝てるさ。

「さつきから何をブツブツ言ってるの？もしかして頭でも打った？……今日のアナタは素直過ぎて、何だか変ね」

委員長さんからの信頼が厚くて辛い……

「ボク、ちよつとトイレに行つてくるよ……」

さあ、ショータイムだ！スターフォースのための踏み台になつてもらおうぞ、ジャミンガー！

まだスターフォースもつてないけどね。

## 24

ーコダマ小学校・体育館ー

さて、ウェーブホールは……あ、あった。バスケットボールが山積みのカゴの裏だ！  
ここならバレないだろう。たとえ見られても、一瞬の幻にしか見えないだろうさ。  
(カーディアス感)

「さ、ロック行くよ！」

「(ちったあ手加減してやれよ……余裕があつたらオレたちを探し当てた情報源も知りたいからな)」

あれ？ゲームでそんなこと言ってたっけ？

……ああ、ロックも成長しているってコトなのか。

……………電波変換！

ーコダマ小学校のウェーブロードー

おお！このウェーブロードのつくりは……BIGWAVEのモノに似てるような気がする。直接ウェーブロードが繋がってない嫌らしさとか、まさにそっくりだとボクは

思う。ギミック面倒臭いんだよなあ……デンプakんとか迷ったりしないのだろうか。

「……あつ、アイツ、体育館のウエーブロードから出ていったね」

あのニヤけた顔は忘れられない……ヤロウ、血祭りやあツ！だが、落ち着こう。焦つちやあいけない。

星河スバルは狼狽えないツ！

「ま、ワナつてトコロだな」

「あれ？あんまり警戒してないね。ワナなんじゃないの？」

いやに冷静なロツクだな……

「そりゃ、今更ジャミンガーごときに手こずってらんねえだろ。……追うぞ、あつちは多分玄関のウエーブロードのほうだ」

信頼……なのかな？

……えーつと、コダマ小学校玄関のウエーブロード、つと。

ーコダマ小学校玄関のウエーブロードー

玄関のウエーブロードも体育館と同じように、複雑化している様相だ。移動ギミックがあるのは良いけれど、ウエーブロード自体の規模を大きくしてもつと単純化したほうがいいんじゃないかなあ……

「ヤツツきのヤツは……」

「……こつちだ……ハッ！」

……あ、天井に張り付いてる！どれだけ上が好きなんだ、コイツ……？……降りてきた。やっぱビルドアップするなんて信じられないくらいだよ。

「オイ、オマエ！オレたちにケンカ売るとは、中々いい度胸してるじゃないか、ええ？」  
ロオー！それはチンピラっぽいって！

「……キサマ、ロックマンで間違いないな」

何か出来るヤツっぽい会話をしている気がする……

「やっぱオレたち、有名になってきてるみたいだな……クク」

「（後々世界規模の有名人になるんだけどね）」

「何か言ったか？」

いえ、何も。

「何でもないよ……それで、コイツを倒せばいいのか……」

「こんな安っぽい挑発に乗せられてノコノコやってくるとは……思ったより大したことなさそうだ」

がつつり侮っているのが伝わってくる。ボクは言ったハズだ……挑発には死をもつて遇すると！

「よし殺ろう」

「待て！待て！スバル落ち着け！」

「ロック、ボクア、久しぶりにキレちまったよ……今宵のロックバスターは血に飢えてい  
る……!!」

「ロックバスターはオレだぞ?!」

何だか楽しくなってきたな。

「フン……！並みいるFM星人を倒したそのチカラ、見せてもらおう！」

うおっ！やっぱりデカくなった。

「つ!?どういうコトだ!?急に別人みたいになりやがった！……来るぜ！」

「ライディングバトル・アークセラレエション！」

ヒャーハハハッ！満足させてもらうよ！

……来る！さあ、新バトルカードのお試しと行こうか！

ジャミングーGタイプが襲ってくる！でもパターンというか武器は、以前戦った時に  
覚えたんだよね……

まずは連射してくるジャミングマシンガンをシールドで受け、威力を確認する。……  
ざつと三割増しの威力つてトコロか。あとはジャミングナックルだけだ……

アレはシールドでは受けきれなさそうだ。回避の方向でいこう。

「ケケケ……防戦一方だな」



なんか前にやったジャミングーともこんな会話してた気がするぞ……何だ？ 星座モチーフのFM星人に劣等感でもあるのか、ジャミングーは？

「そつちも、当たって、ない、みたいだけどっ!？」

そろそろこつちも攻めるべきか。リュウエンザンをセレクトし、ロックオンを開始する。草生やせたらもつと大ダメーじなんだけどね。

「ロック!」

「おう!イクゼエツ!」

ジャミングマシンガンを左に回避して、射撃中の無防備な側面にウオーロックアタックで一気に接近する!

ダメだ……リュウエンザンがヒットしてもまるで効いた様子が見えない!……これが負けイベントというヤツか……あーベルセルク使いたい。

「(オイスバル、ベルセルクを使え! パワーが足りてねえぞ!)」

「(これをワナって言ったのはロックじゃないか……他にも見てるヤツがいるかもしれないよ、いいの?)」

あんまりジエミニに、ベルセルクのデータは渡したくないんだよね……警戒させそうだし。

なりふり構わなくなったら大変だ……

……それにしても全然効いた様子がないな……HPの減りも鈍い。何かアビリティでも装備しているのかな？

「コイツマジでタフだぞ！」

「クツクツクツク!!……そんな程度か。パワーが足りないなあ……？」

「ゲエツッ! やっぱ効いてなかったのか！」

「マズイぞ、このままじゃあ……!」（棒）

『ハアッ!』

「この、音は！」

「クツッ! なんだコレは……音符?」

「ヘルプと聞いて、直ぐ様参上! ロックマン専用・愛と音楽の戦士、ハーブ・ノート!」

「ミソラちゃああああん?! それは恥ずかしいから止めてって言ったじゃないかあああ

!

「チッ! 二対一か……流石に不利だ。……ここは撤退させてもらおう」

「あつ! ウェーブアウトしやがった! 妨害できる距離でもなかったし……き、今日は見

逃してやる(震え声)

「……………行っちゃったか。ケツッ! 別に助けなんて要らなかったぜ、ハーブ!」

「ロックは少々お冠のようだ。いや、ベルセルク無しじゃ勝てないから。ああいうタイ

プもいるってわかったただけでもラッキーってことで。

「クスクスクス……その助けも要らない相手に手を焼いていたのは……誰かしらね？」

「グヌヌ……」

「まあまあ、落ち着いて。……ありがとう、ハープ・ノート。助かったよ」

「ワタシが、スバルくんのピンチに駆けつけないわけがないじゃない！」

いや、うん。あの掛け声さえ止めて頂ければ……

「あの、ところでさっきのセリフは……」

「やっぱりこういうの大事かなって！」

かなって！じゃないよ、ホント……

「ち、ちよつと恥ずかしいかなーって、思ったり……？」

「え……？」

そんな悲しそうな顔しないでよ！ぎ、罪悪感が……

「い、いや、何でもないよ」

「そう？……なら良かった！あ、トコロで今日ってこれから時間ある……？」

う、上目遣いだと……いや、凄く可愛らしいけども。

「ええつと、学芸会の演劇のセットを見ていたトコロだったんだ……そしたら照明が落ちて来ちゃって。その犯人を追っていたんだけど……」

「…………え？照明……スバルくんが、死んじゃうトコロだった……？あの、ジャミンガーのせいで……」

ヤバい、何かわからないがとにかくヤバい！

ハープ・ノートの体から黒い障気が……さっきのジャミンガーさん、大丈夫かな……逆に心配になってきたぞ。

「いや、うん。大丈夫だったから！ゴメン、呼び出しちゃって。後で埋め合わせはするよ」

「埋め合わせ……？じゃあ、考えておくね！」

なんとか機嫌を直したぞ……ロックもたまには助けてよ！

「そーいうのはオマエの役目だろ？」

えええ……

「それじゃ、ボクは劇のセットを見に行くから……気をつけて帰ってね」

「そういえば、学芸会？なんていきなりどうしたの？」

「ああ、実は学校に復学してみようかと思って……」

「ホント!？」

やけに食い付くなあ……

「う、うん。委員長さんたちに誘われたんだけど、そろそろいい機会かなって」

「ここでミソラちゃんの雰囲気が一変する。さつきも見たぞ、これはあの黒い障気……マズイ！」

「委員長……？誰ソイツ」

ヒイツ！怖いよ！

いきなりソイツ扱いですか、そうですか。

かなり地雷だったか……？

「え、えつと……よく学校に来るように誘ってくれるんだ。中々面白い子でね、ゴージャスな髪型してるんだけど、からかうと面白くって……」

本心だぞ、本心。

「へえ……そうなんだ。学芸会のセット、だっけ……それはその委員長さんと一緒に見てるの？」

「う、うん」

何だか今日のミソラちゃんは怖いぞ……

「そっか、じゃあ邪魔しちや悪いね……ワタシは帰るよ……あ、そうそう。学校にいる間はビジライザーを掛けないほうがいいよ。そのメガネ、特徴的なデザインしてるから」  
ええつ、やつぱりビジライザーって奇抜なデザインなんだ……こんなので連絡を取ってた星河ダイゴってかなり変人だったんじゃない……

「(ミソラの顔を見るに、ウェーブロード上でそのコを……ポロロン……悲しいわね)」  
ハープの眩きを拾った者はいなかった。

ーコダマ小学校・体育館ー

……結構時間が経ってしまった。

委員長さん、怒ってないかなあ……

「どこ行つてたのよー」

「いや、その、トイレ何処かわからなくて……トイレも委員長さんに案内してもらつた  
ほうが良かったかな？」

「そんなコト、出来るわけないじゃない……おかげで随分遅くなつてしまつたわ。も  
う今日は帰りましょう。いいこと、スバルくん。早く学校に来なさいよね！アナタがい  
ないと劇の役もそろわないんだから！」

「(いつものテンションだったな、このオンナ)」

学校では猫を被つてると思つてたのか、ロック……

ーコダマ小学校・玄関ー

「(そういえば、アイツ何者だったんだらうな、オレたちのコト、知ってるようだったが  
……)」

ジエミニの回し者です、何て言えないよね。

『……ねえ』

この、声は……

「……？」

「今日はとても、いい天気だね。こんな日は気持ちも晴れやかになる……毎日こんな日が続けばいいのにつて……そうは、思わないかい？」

カヲルくん！じゃなくて、ツカサ君……

「そうだね……ボクは結構晴れやかな天気、好きだよ」

こちらに近づいてくるツカサ君……優しそうな顔をしている。

確か二重人格者だったんだよね。ヒカルだっけ？

「……キミはスバルくんだろ？」

「ボクを知ってるの？」

「もちろんさ。ボクはキミのクラスメートだからね……生徒の名簿でキミの写真を何度か見たことがあるんだ、だから直ぐわかったよ。……初めまして、ボクの名前は双葉ツカサ」

正直クラスの名簿なんて見ても覚ええないと思う。

「初めまして、双葉君」

「ツカサでいいよ。呼び方は大事なんだ、呼び方次第でその相手と親密になれたりすることもある。だから……」

なんかアヤしいオーラ出すのは止めてくれ！

「そういうことなら。初めまして、ツカサ君」

「フフフ……ねえ、知ってるかい？毎朝出席をとる時、先生は必ず居ないとわかってるキミの名前を呼ぶんだ……で、もちろん返事は返ってこない。その度にボクは想像したんだよ、スバルくんって一体どんな子なんだろうって。良かったよ、キミはとてもいい人  
そうだ」

「そうかな……？あんまり考えたコト、なかったよ」

「控えめな部分もあるんだね……ボクはそんな性格が嫌いじゃないよ。これは予感だけど……キミが来てくれればもつと学校が楽しくなりそうな気がする。ボクらは気の合う友達になれるかもしれない」

「友達、か」

「おっと、もうこんな時間か……ボクは行かなきゃ。じゃあここでお別れだけど、キミとはまた会いたいな。それじゃ」

……行ってしまった。なんだかなあ……変な邪推をされそうな子だったような……  
気のせいかな？



……さて、天地研究所に行くか。  
スターフォース！スターフォース！念願の飛行能力！

## 25

――天地研究所・研究室――

相変わらずここに置いてあるロケットは凄い。よく見ると壁にかけてあるフライイングジャケットの翼が大きくなっているようにも見える。だからあれほど推進力をつけろと（ry

「天地さん、こんにちは」

「やあ、スバルくん。今日はどうしたんだい？」

しまった、事前に連絡を入れ忘れていた。天地さんは一応この天地研究所の所長だから、忙しかったかもしれないのに。スターフォースに浮かれ過ぎたかな？

「突然すいません……実は……」

天地さんにペンダントのコトを伝える。そういえば、ペンダントの機能について聞きにきたんだよね。随分長いこと忘れていたような気がするよ……

「ほお……そのペンダントが光ったのか。僕も大悟先輩がそのペンダントを身につけていたのは知ってるけど、それが具体的にどんなモノかはまではちよつと……」

「調べてもらうことは、出来ませんか？」

「ああ、もちろん。光ったっていうのも妙に思っていたしね。ちよつと構造が気になっていったんだ」

なるほど、研究者の思考だね。未知を既知にするという発展的思考はとても好感が持てる。

「では、よろしくお願ひします」

——時間後——

「スバル君、わかったよ。分解して調べただけけど、そのペンダントは小型の通信機みたいなんだ」

「通信機、ですか……」

スターフオース！スターフオース！スターフオース！

「ただし、その通信機はある特定の条件を満たすまで作動しないようになってるんだ。で、その条件というのが……ブラザーバンドなんだ」

「ブラザーバンド……」

ミソラちゃんとのヤツだね。

「そのペンダントからごく近い場所でブラザーバンドが結ばれると、それを感知して通信機能がONになる仕組みなんだ。ペンダントが光ったのもそれが原因だと思う。大悟先輩の意図はわからないけど……それが通信機である限り、何処かの誰かと繋がって

る可能性はある」

確かサテライトの三賢者、だったかな？

「誰か、ですか。天地さん、この通信機で誰かに通信することは出来ますか？」

「その通信機……相当古いし、あちこちが痛んでるせいで、通信が成功するのも稀みたいなんだ。電波の通りが良好な場所なら、あるいは……」

「電波の通り道が良好な場所ですか……」

「そうだねえ……この建物の屋上はうってつけかもしれないな。ペンダントを持って屋上で待っていれば誰かがコンタクトしてくるかもしれないね」

「屋上ですか……じゃあ少しお借りしますね！」

「ああ、気をつけるんだよ！」

流石に落っこちやしないよ。

——天地研究所・屋上——

……さて、ここで待ってればいいのかな？

「ブラザーバンドが作動条件だったんだね、このペンダント」

「そうだな、アレがブラザーか……確かにかなりのエネルギーってやつを感じたぜ」

ミソラちゃんは特殊なケースだから！

「……光った」

「誰かがコンタクトしてるってコトか？」

「……光がドンドン強くなってる。……こ、これは……」

……これが、AM三賢者の圧力か……まるで空気が揺れているようだ！

「オイ、スバル……かなり強力な電波がコッチに近づいて来てるぞ……猛スピードで！」

「凄い、こんな電波が……」

「い、いや、コイツはかなりヤバイぞ……スバル、そのペンダントを急いで壊せ！」

「無理だよ！生身の小学生の貧弱さを舐めるな！」

「だが、ヤバイぞ。そいつが何かおかしなモノを呼び出しちまったのかもしれねえ！

……手遅れにならない内に早く……チツ！もう来るぞ！」

辺りが閃光に包まれる。閃光が止んだ後にいたのは……

「こ、コイツらは……」

変態幻獣集団！

「夢の中に出た黒いカゲ……！」

「……驚いているようだな、スバルよ」

ペガサス・マジックが重々しく口を開く。

馬の口でどうやって喋っているのだろうか。

「オマエたちに伝えるコトがある……」

ドラゴン・スカイは簡潔にコンタクトを取った目的を話してくれるようだ。飛行出来るし、ドラゴンが一番好感度高いね、変態だけど。

「伝えるコト……貴方たちは……？」

「我らは三つのサテライトを管理するモノのカゲ……」

サテライト

ペガサスの管理者、ペガサス・マジック

「サテライト

レオの管理者、レオ・キングダム」

「サテライト

ドラゴンの管理者、ドラゴン・スカイ」

三体のカゲがそれぞれ自己紹介をした後、ペガサス・マジックが事情を説明するようだ。

「本体はサテライトを離れられぬ故、このような姿でオマエの前に現れている」

サテライトの管理者という言葉にロックが反応する。

五陽田さんのトランサーの謎でも解けたのだろうか。

「サテライトの管理者だと？コイツら、オレと同じ電波体だぞ。何でこんなヤツらが地球のサテライトを守っていやがるんだ……？」

「サテライトの管理者……」

「戦いの時が迫っている……そのための準備をしに来たのだ……」

やっぱり簡潔って良い。ドラゴン・スカイのスターフォースが欲しいです。飛べるし

ね。

「オマエにも守るべき大事な『絆』が生まれたであろう？……それが合図だ」

ミソラちゃんのコトなら、まあ確かに。

「ブラザーバンドのコトですか」

「そうだ……オマエにブラザーが出来たコトをそのペンダントが教えてくれた……我々は待っていたのだ。オマエにブラザーバンドが出来たのを……」

「人は守るモノが出来た時、本当の強さを手に入れる……オマエがその強さを手に入れるのを待っていたのだ」

レオ・キングダムがペガサス・マジックの話を解説してくれる。やっぱり仲間内でもペガサス・マジックの話ってわかりづらいと思われてるんじゃないかな……

「今、この星に脅威が迫っている……その脅威がこの星に舞い降りたとすれば、オマエの大切な人々は失われ、生まれたばかりの絆もことごとく切り裂かれるであろう……」

「そう、オマエたちはその脅威に立ち向かわなければならぬ……」

「ボクたちがやる理由は、何ですか？」

ロックがAM星人でスターフォースを受け入れられるコトもそうなんだろうけど。

「これも星の定めた運命……そう、かつてそのペンダントの持ち主だったあの男の子として生まれたときから、こうなることは決まっていたのかもしれない……」

そういうことなら、この体に宿る意思としての責任がある、ということなのかな？

「父さんを知っているんですか？」

「我々はオマエの父親と協力してブラザーバンドを産み出した……」

「絆を何よりも大切に作る心優しき男だった……」

「オマエの持つているビジュライザーとペンダントは、オマエの父と我々が連絡を取る時に使っていたものだ」

「父さんが……」

既にメテオGにアクセスしているんだろうか……

「スバル、そしてウォロックよ。大いなる脅威に立ち向かえるものはオマエたちしかないのだ。この星の運命はオマエたちにかかっている」

「逃げるわけには、いかなさそうだねロック」

「我々も手を貸したいトコロなのだが、我らでは大いなる脅威に打ち勝つコトは決して出来んだ……脅威に打ち勝つには、オマエとウォロックの融合したチカラ……即ちロックマンのチカラが必要だ」

「来るべき決戦の日に備え、我々はオマエにチカラを授ける必要があると考えた……星のチカラ……『スターフォース』を！」

「しかし、このチカラを受け入れるには大切なモノを守ろうという強い心のチカラ……」



即ちブラザーの精神を知る必要があったのだ」

話長いよ……

「けどよ、ブラザーがいる電波人間のチカラが必要なら、オレたちの他にもハープ・ノー卜つてのがいるぜ。そいつにもスターフォースつてのを与えりやあ、戦力になるんじゃないかねえのか？」

ロックの疑問は最もだけど、ハープはFM星人だから、『スターフォース』を受け入れられないんだよね。

「残念だが、我らのチカラはオマエたちにしか受け入れることが出来ないのだ。あのハープというFM星人は我らと周波数が違い過ぎる……その点ウオーロック、オマエはFM星人でありながら、我らに非常に近い周波数を持っている。故にオマエたちでなければいけないのだ」

ドラゴン・スカイが事情を説明してくれる。周波数か……

「その口振り……オマエら、まさかAMプラネットの生き残りか……？」

ロックもAM星人だけだね。

「……いかにも。我らはAMプラネットの生き残りだ」

「FMプラネットとは、違うんだね」

確かFMプラネットの隣にある星、だったかな？

「AMプラネットつてのはFMプラネットの隣に浮かぶ星さ……そこにはFM星人と同じく電波のカラダをもったAM星人が暮らしていて、昔はお互い双子星として友好的な関係が続いていたんだが、今のFM王の代になって突然戦争が始まった……イヤ、あれは戦争なんてモンじゃねえ。……FMプラネットからAMプラネットへの一方的な攻撃だ。そして、最後にはヤツが出てきた……FMプラネットの最終兵器……『アンドロメダ』がな!!『アンドロメダ』の凶悪なチカラの前にAM星人たちは瞬く間に全滅させられた……まさか生き残りがいたとはな」

ロックも信じられないといった心境らしい。

「しかし、何でAM星人のオマエたちが敵であるオレにチカラを与えようとしている?」  
その質問には、既にボクから説明下手の評価を受けているペガサス・マジックが答えてくれる。

「ウォーロック、では逆に質問するが、何故オマエはFM星人と戦っているのだ?」  
質問を質問で返すなあーッ!!

アンドロメダによって地球を飲み込ませないために……だったような。ダイゴさんも関係していた……ハズ。

「ケツ!そんなコト、オレの勝手だろ!」

「ならば我々も勝手にやらせてもらおうぞ……」

「チツ！好きにしやがれ!!」

「では、チカラを与える前に言っておこう。……オマエたちは、弱い」

「何だと!?!」

「我々は見えていたのだ……オマエたちがあのジャミンガーに手を焼いているのを、な」

「あ、あれは……出力が足りなかつたんだ！ロックマンはスピード寄りの万能型……ベルセルクがあれば、あんなヤツ……！なあ、そうだろ、スバル!」

「まあ、そうだね。ああいう特化型には中々攻めきれないつてのはあるよ」

「そうだ。我らはオマエたちの能力は認めている……しかし、単純に出力……パワーが足りないと感じているのだ。スターフォースなら、その足りない出力を補える」

なるほど……やっぱパワーが足りてないのか。ゲームの時よりも、大分良い評価をもらつてる気がする。

「しかし、我らとしてもオマエたちにただスターフォースを与えるわけにはいかない……スターフォースを手にするために星の試練を受けるのだ、星河スバル、そしてウォーロックよ……」

「その『星の試練』とやらは、どのようなモノなんですか……?」

「へへッ！それでこそスバルだぜ!……あのヤロウに、オレたちのチカラを見せてやるぞ!」

「意気込みは十分ということか……では、早速試練の開始だ。……ビジライザーをかけて辺りを見回してみるがいい」

……あつ、居たぞ。あの趣味の悪い金色のデンパくん……間違いない、星の番人だ。

「全部で5人……星の番人が授ける試練を突破してみせよ。……健闘を祈るぞ」

そう言つてペガサス・マジックを始めとしたAM三賢者は行つてしまった。

や、やつと星の試練か……

「よし、行くぜスバル！」

「うん！ウエーブインだ！」

……しかし、周りにウエーブホールはない。

「それじゃ、一旦アマケン外観に出ようか……流星にもうダイナミックウエーブインはしたくないよ」

「そうだな……」

## 26

——天地研究所外観のウエーブロード——

……周りに人気がないことを確認してウエーブインしたけれど、毎回気を使ってたらいつかハゲそうだ……

「オイ、スバル。とつとつこんな試練クリアして、あのカゲヤロウをびびらせてやろうぜ！」

ロツクの気合いも十分だ。今更雑魚ウイルスに負ける気は、流石にしない。

「うん！」

——五分後——

「ワレは星の番人……『星の試練』を突破し、『星のチカラ』を手に入れてみせよ……『星の試練』に挑戦するか？」

「もちろん！」

「では、行くぞ……」

……これは、ウイルスのデータ!?

ウイルスは……モエローダーにモノソード、ベルゴングがそれぞれGタイプか。殆ど

既知のウィルスだ。

この中ではモノソードが初見だが、確か正面に立った時にだけ硬化状態を解除して斬り掛かってくる、という感じだったハズ。ぶっちゃけカモだ。

「ハアツ！」

セレクトしたリユエンザンを展開し、振りかぶりながらウオーロックアタックの加速に身を任せる。

モエローダーに側面から急接近し、リズム良く振り切る。

デリートを確認し、ベルゴングへとワイドウェーブを発射。マヒプラスで強制的に硬直しているベルゴングのHPをロックバスターで削りきり、残るモノソードはゆっくり側面から近づき、ヒートアッパーによってガードブレイクすることであっさり倒すことが出来た。

「受けとるがよい」

そう言って渡してきたのは『星の証』。

あと四人かあ……リザルトもゼニーだしなあ……

「オイ、スバル。気を抜くなよ！」

「わかってるって」

ペガサス・マジック（シャドー）とのバトルまで体力を温存しておくのが吉かな？

——三十分後——

「ヤアツ！……………ふう」

「……………受けとるがよい」

……………これで星の証は5つ。

さあ、ペガサス・マジック。絶対負かしてやるかな！

『スバルよ、どうやら最初の試練は突破したようだな……………しかし、ここからが本番だぞ。ここで次の試練を行う……………証をもってこちらに来るがいい』

さつき屋上で消えた三賢者が、屋上の直上にある少し拓けたウエーブロードに佇んでいた。

やつとか……………接近戦で勝てるかな？

「よし、行くぞスバル」

「わかつてる！」

——天地研究所外観のウエーブロード・最奥——

わかっているけど、これは凄い迫力だぞ……………

カゲとはいえ、AM三賢者が揃い踏みだ。ウイルスも近寄って来ないのだろう。その代わり、ボクがしわ寄せのごとく大量にエンカウントするハメになったけどね！まさかこれも星の試練……………ペガサス・マジック、なんて卑劣な……………！

「証は集めてきたよ！」

「次はなんだ!？」

ロツクが若干キレ気味で三賢者に話しかける。

ていうか電波人間でもないのに、なんでこんな偉そうなんだろう。一辺三賢者のタメ口とか、聞いてみたい気もするけど……

「そう、急くな。次は……私が相手だ」

次は……私が相手だ（キリツ）いや、馬面なんだけど。

分かりやすい強キヤラ感……

「私に見事勝利すれば星のチカラを与えてやろう」

「そうこなくっちゃ!……別に、デリートしてしまっても構わないのだろうか？」

「ああ、チンタラこつちの手を待ってたら、本当にデリートしちまうぜ!……オレたちを弱いと言ったコト、後悔させてやる！」

「言っておくが、私を星の番人たちと同じだと思わないよ……」

分かりやすい小物感……一体強いのか弱いのかわからなくなってきたよ……

「ウエーブバトル・ライドオン！」

さて、変態天馬のカゲ、もといベガサスシャドーとの戦闘が始まった。



……? こちらの出方を観察している……?

……ッ! 違う、これは……照準を合わせていたんだ!

なるほど、確かに対処はできる。処理能力の低さからして、所詮はシャドーというところか……

ペガサスシャドーが発生させた三角錐型の氷柱をシールドで受けながら考える。

「(これは……素体のロックマンじゃキツいか?)」

スイマセン! この空間に怪しい電波体の類いがいないか、わかりますか!」

……戦闘中に会話は不粋ってわかるんだけどなあ……

「……………特にそのような電波体は確認していない……少なくとも、この場所を覗ける電波体は我ら以外に存在していない。……………ベルセルクとやらを使っても構わんぞ」

なら、手加減無しだ! 全力全開! 上げていくよッ!

「いくよートライブオン……ベルセルク!」

ベルセルクのカードを使用し、体を稲妻が駆け抜けるイメージで展開。変身は一瞬だが、辺りに体から漏れでた電撃が散布される。近づきづらい迫力を相手に与えるので、変身中に攻撃を仕掛けられるということは無さそうだ。浅倉じゃあるまいし。

「ウオオオオオオオッ!!」

ロックの雄叫びがこだまする……勝利の鉄槌よ、大地を砕け! いや、違うけど。それ

はジャックか。

「コイツを全力戦闘で使うのは、久々だからなあ！戦士の血が騒ぐってヤツだぜえつ！」  
これはウオリアードブラッドですね、間違いない。

HPバグは遠慮させてもらいたいな……

いや、ベルセルクのチカラに感化されているのか……？

「ロック！」

「オオオオオツ!!」

ロックの全力の雄叫びと共に、素のロックマン時よりも高速で移動しているのを感じる。が、しかし感覚自体は引き伸ばされたように周囲を気に配る余裕がある！

「疾ツ!!」

まるでシノビのような掛け声でペガサスシャドーに斬りかかる。……入った！

しかし、何故羽があるのに飛ばないんだ？

舐めプ？流石に対空砲撃の用意はしていないから助かるんだけど……

「ハッ！」

シャドーとは思えないほど、やけに力のこもった発声と共に氷柱を再び発射してくる。今度は避けられる。やはり大したことはなさそうだ。

「この巨体なら、取りついて斬るコトに専念したほうが良さそうだ」  
「ああ！ 斬り刻んでやろうぜえっ！」

やはりベルセルク……いや、まあ問題ないんだけども。

氷柱を飛ばしてくるペガサスシャドーの周りを小刻みに跳躍とウォロックアタックを駆使して跳び回る。ペガサスシャドーの死角に入った瞬間に接近し、浅く斬り裂いていく。

固定装備は打ち込んだ勢いや装甲の厚さなどで与ダメージが変わるようなので、一度に与えるダメージ量自体は大したコトないが、徐々にペガサスシャドーの余裕がなくなってきたコトがわかる。

あくまでも手加減しているにしては、だけど。

「ハアツ！……疾ッ！」

段々作業的になってきたな……

「そろそろ決めるよ！ ロック！」

「おうよ！ ヒツサツワザってヤツだ！」

戦闘中に発生した余剰エネルギーを雷撃に回しているらしいが……『サンダーボルトブレイド』級のチカラともなると、一度の戦闘中には一回が関の山ってトコロだろう。長引けばまだわからないけど。

「うおおおつ!!サンダアボルトップブレイドオツ!!」

「……甘い!」

これは……ただの突進?しかしあの巨体なら相応の威力になるはず……なら、競り勝つてやるツ!!

「ハアアアツツ!!」

「……ググ……残念、ブラフだ」

何?!ここで飛翔するだつて!?

飛び立ったペガサスシャドーの背後に配置されているのは……総勢20以上の氷柱の一斉攻撃だ!

これは殺す気だろツ!?

「おおおおおツ!!」

雨あられと降り注ぐ氷柱を、必死に斬り開いていく。これは実際の数より多く感じるぞ!

……つていうかペガサス!アンタ人が捌いている間に氷柱追加したな!?

「フフフ……」

チクショウ、愉悦しやがって!

ならば!ベルセルクからの出力を、刀身の中心に集中……直刀型の片手剣へ!そして

左腕にリュウエンザンを展開……手数勝負といこうか！

「うおおおつつ!!」

「何……!?!」

イケる、イケるぞ！氷柱を砕ききった！

既にウエーブロード上に降り立ったペガサスシャドーへ、ウオーロックアタックで突進する……

「ロオオック!!」

「カクゴしやがれええつつ!!」

ペガサスシャドーの正面まで急加速！して、その勢いのまま右手のベルセルクソードで頭部をアッパー気味にカチ上げる！振り切った勢いで回転、次はリュウエンザンを叩き込む！踊るように2つの刀身でペガサスシャドーを切り裂いていく……うおおおつ！

「もういいッ！そこまでだ！」

何だ!?!炎の壁!?!これは……レオ・キングダム！

そうか、終わりか……久しぶりに全力だったよ……

悪くなかったけどね！

「……………やるな。想像以上の強さだった」

「……………オイ、オレは騙されないぞ、何で手を抜きやがった!」

「確かに、これ見よがしに飛ばなかったからね」

「それもそうだが……………コイツ、本気なんて出しちゃいねえぞ!」

「我々の目的はオマエたちと争うコトではない。……………今の戦いはオマエの潜在能力を  
図つただけに過ぎないのだ。思った通り、オマエたちはこの星の人々を守るに十分な素  
質を持っている……………受けとれ!我が、スターフォースを!!……………ハッ!」

何か光った?……………うわっ!

これは……………体内に入ってるのか……………

「特に、変化はないようだけど……………」

「何がスターフォースだ!大層なコト言いやがって……………オレたちを騙したんだろ?」

「スターフォースは確かにオマエの体内に宿った。しかし、そのチカラを呼び出せるか  
どうかは……………オマエたち次第だ。……………試練はまだ『おわっていない』。スターフォース  
は何かを守るチカラ、誰かを守りたいという強い意志がスターフォースを呼び出す……………  
オマエにはまだそれが足りていないのだ」

……………確かに、ミソラちゃんはハープ・ノートになれる。

強い意志には届かなかったか……………じゃあやっぱり、学校の事件で……………ごめんよ、委員

長さん。

「あとはオマエたち次第……我々はまた、見守るコトにする。オマエたちの成長を……」  
……ペガサス・マジック等は行つてしまった。

「……思い出したぜ。ペガサス・マジック、レオ・キングダム、ドラゴン・スカイ……ヤツらはAMプラネットの三賢者と呼ばれたヤツらだ……大いなる知恵とチカラを持ち、AMプラネットに繁栄をもたらしたとされるAM星人で、確かAMプラネットが滅びるより前に星を離れたと聞いていたが……まさか、地球にいたとはな」

スターフォース。ボクは自分のチカラのために委員長さんたちを危険に晒すのか……いや、もう決めたことだ。ボクは、あかねさんと、ミソラちゃんを守る。

それがこの世界に生きるボクが、ボクであるために必要なコトだから……もう、繋がり失うわけには。

「……何だかくたびれちまつたぜ。なあ、もう家に帰らないか?」

「うん。そろそろ家に帰ろう……母さんが待つてる」

——翌日・星河家——

「スバルー！母さん、パートに行ってくるからね」

あかねさんの声がする。

どうやらいつもより寝坊してしまったようだ。昨日は中々ハードだったからね。仕方ないね。

………つと、そうじゃない。あかねさんに言わなくちゃいけないことがあったんだ。

「母さん、ちよつと待つて！」

慌てて引き留めにかかるボク。そうだ、復学のコトを話さないといけないんだ。

「どうしたの、スバル？何かあったの？」

最近朝食と一緒に食べる機会が増えたことから、あかねさんと会話する頻度も上がっている。なので、記憶にあるあかねさんよりは元の調子に近くなってきたようなんだ。食欲に負けた、なんて考えていたけれど、思わぬ副産物があったらしい。

「実は、その……また学校に行ってみたいんだ」



「……そう！直ぐに復学の用意をするわ。でも、無理はしないでね……？」

「うん、わかってる。ありがとう、母さん」

「スバル……」

何だか気恥ずかしくなってきたな。

ウィルスバスティングでもして気を紛らわすか……

——十分後——

「さて、オマエのオフクロは行っちゃったが……どうするんだ、今日は？」

「そうだね……もう決めてあるよ。今日は残留電波を狩りにいく」

具体的にはオックスだ。あんまり放置していると危害が出るかもしれないし。正直、メガクラスカードとかどうなっているんだろうと考えたことはあるけど、暗転しない時点で大して役には立たないだろうと踏んでる。

ま、慈善事業みたいな感じで。

ゼニーが入ればそれでいいかな……

——コダマタウン・トラックの電脳——

例によって展望台のウェブホールで電波変換したボクたちは、今まであえて避けていた暴走トラックの電脳にウェブインした。ゲームのようにウェブロード上の特定の場所で遭遇したり、とはいかなかったよ。

「しっかし、残留電波ねえ……」

「どうしたの、ロック？」

何やら引つかかることがあるようだ。

まあ、ボクとしては今日を除いてもあと二回はオックス・ファイアの残留電波にお世話になるわけだから、あんまり感動とか、思うことはないんだけども。

さつさと片付けるか……ぐらいだろうね。だつてゴン太入ってないし……実際にどんな感じなんだろう。残留電波には意識とかあるのかな？

「いや、残留電波がこんなトラックに残ってるってんならよ、あのゴン太とかいうヤツにも残留してるんじゃないのか？」

す、鋭い……しかし、3でハンターV Gが出るまではオックスを完全にデリートするわけにはいかないんだよね。

「まあまあ、その時はその時ってことで……」

「ナンか怪しいな……」

「そんなコトないって」

何で今日はこんなに鋭いんだよ!?

「……………まあ、いい。とつとと行こうぜ」

……ふう、危なかつた……

ーートラックの電腦・最深部ー

……いた。オックス・ファイアだ。以前見たようなはつきりした姿ではなく、所々揺らめいているように見える。まさに残留電波というトコロなんだろう。

……しかし、さつきから微動だにもしないな。どういうコトなんだ？ 暴れていないのは嬉しいんだけど……

「……………」

「おい、スバル。コイツさつきから全く動かねーぞ！」

「(うーん、どういうコトなんだろう。キャノンでも撃つてみる?)」

ひそひそ話しながら、オックス・ファイアに近づくボクたち。電媒体は呼吸の必要がないので、息を荒くすることは興奮作用以外にないのだが、あのオックスはブルブル言っていた。ボクは青いので、あの牛を興奮させる要素はないんだけど……

「……………」

「うわあつっ!! キエエエエアアアアウゴイタアア!!」

何か無言で襲いかかってきたぞ!

おい、オックス! 倒した後に寄越してきたメールで語っていた、あの意気込みはどうしたんだ! そうだ! 炎なんて捨ててかかってこいよ! うおおおつ!

「炎には炎! ロック!」



「うおおおおつ！」

バブルフックだオラア！

バブルに包まれたな……ト ド メ だ!!

「無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄ア！」

……勝った。

オックス・ファイアはついに、このロックマンの下に破れ去ったのだ……

フウーツ、スツとしたぜ！

「お疲れロック！いやー、ナイスバトルだったね」

「オレは時々、オマエが怖いぜ……」

何言ってるのさ！ロックだつてノリノリだったじゃないか！……あ、リザルトだ。

「バステイングレベルは……1。リザルトは……オックス・ファイア？」

まあね、三十分もかけたからね。仕方ないね。

「おおつ！ソイツはメガクラスカード！中々強力なバトルカードだぜ！」

ロックが嬉しそう。そういえば、自分をモデルにしたメガクラスカードってあるんだ

ろうか？OSSでは普通に『SSロックマン』渡してたしなあ……あれはナビチップか。

でも二百年前の環境に合わせたバトルチップを置き土産にしていく辺り、WAXAって

凄くない？

「メガクラスカード、ねえ……どうなの？」

「ああ、ソイツは一時的に戦闘体を再構築するカード……そのスペックはグレードによつて変化するがな……あ、フォルダには入れておけよ。一応普通のカード扱いだからな」

へえ……そうなつてたんだ……まあ、召喚なんて無理そうだしね。

「じゃあ、早速使つてみようよ……カードイン！」

……おおお！これは、凄いぞ！目線が高くなつてる。

つまりボクは今、オックス・ファイアになつてるんだ！

「ブルルルルッ！」

しかし、ブルブルとしかしやべれないぞ！

これは欠陥過ぎやしませんか……

「ブルルルルッ！……ああ、戻った」

大体十数秒といったトコロか。

まあ、技一発くらいだね。オックスフレイム！

「ああ、凄いチカラだが、電波体への強制力は低い……直ぐに戻つちまうつてわけだな」  
「でも凄いよ、コレ！耐久力は上がつてたからね……」

壁くらいにはなるんじゃない？」

「オマエも結構酷いな……」

そんな！ボクは正直に言っただけじゃないか！

「今日はもう疲れたよ、BIGWAVEに寄ってから帰ろっか？」

「ガチャは程々にしておけよ」

あれえ!?新カード欲しくないの!?

「フフフ……そう言ってられるのも今の内さ。見てろよ！今日こそは……」

「ハイハイ……ほら、ウエーブアウトするぞ」

ああ！もうちよつとちやんと取り合つてよ……！

——BIGWAVE——

……ふつ。

余りカード、全部スツちまつたぜ……

「(さ、帰ろうぜ)」

最近のロツク酷いよ！

ボクの挑戦を軽く扱いやがつて……！

「そうだね。急いては事を仕損じるとも言うしね」

「(強がんなよ)」

「ううっ……」

ロツクが優しい……のか、これは？

目から汗が……いや、これは汗だから。絶対涙とかじゃないから。ホントだから。

——星河家・夜——

ボクは灰になった自分を奮い立たせ、なんとか家に帰ってきた。ベッドに寝転がり、愚痴を吐く。

カードトレーダーに挑戦した日は、いつもこうだ。

「はあ……最近ツイてないなあ……」

「自業自得だと思っぜ」

「酷い！酷いよロツク！ううっ……ボクの味方はミソラちゃんだけだよ……」

ああ、ミソラちゃん的笑顔が恋しい……

「呼んだ？」

「うん、ボクの味方はミソラちゃんだけだよって話してたんだ……今何してるのかなあ……」

突然聞こえた声と会話を続けるボクは、壊れかけているんだろう。もう寝るか……明日は良いカードが出ますように。

「ボク、もう寝るよ……」

「ふふふっ……っつて、ちよつと待ったーっ！」



「何さ……つてミソラちゃん!?……ゲエツ!また不法侵入したの!」

もうホント、心臓に悪いので急に来ないでください……

「ええ、そこ!?それにしても、ブラザーが会いに来たのに不法侵入扱いは酷いよ、スバルくん……」

いや、だつてさあ……ねえ?

「ゴメンゴメン、それでどうしたの?こんな時間……つて言うにはまだ早いけれど」

また下らない理由そうだけど……

「遊びに来たんだよー」

ええ……いや、確かに小学生だけさあ……

普通に連絡してから来ればいいのに……

「……………そうだね……じゃあ、ウエーブバトルの練習しようか」

「ウエーブバトル?」

「うん。ボクはキミを守るけれど、キミにもある程度強くなって欲しいんだ。だから、練習……というよりは、訓練だね」

以前バトルしたときのような事前準備は、ハープがロックのコトをよく知っていたが故の芸当だと思う。

だから、汎用性のある戦術やバトルスタイルを身につけてほしいんだよね……

「うん、いいよ！スバルくんと訓練かあ……なんだかドキドキしてきたよ」

とても眩しい笑顔だが、あと何分続けていられるかな？

こうして、たまにボクとミソラちゃんやんで戦闘訓練をすることになった。頻度は週一回くらい。ただ、前よりも家に来る回数が増えたコトだけが計算外だった……

――数日後・星河家――

そして、ボクの復学手続きが済み、この意識になってからの初登校の日がやって来た。「スバル、今日から学校だけど……本当に大丈夫？」

「うん、大丈夫。クラスの人も知り合いになれたんだ。……いい人ばかりだったよ。だから心配しないで、母さん。……じゃ、いってきます」

「そう……いつてらっしやい」

さあ、今日から登校だ。通つてる時は毎日ダルい思いで行つてるのに、いざ長期間休んでみると、途端に学校が恋しくなる……なんてこと、ないかな？

――コダマタウン――

うん、今日はいいい天気だ。絶好の初登校日和ってヤツだね！登校時間にはまだ余裕がある。ゆつくり行こう。

……おっ！校門前に委員長さんがいる。ご苦労様だなあ……こうして毎日生徒たちに挨拶しているのだろうか。

確か生徒会長になりたいという野望があつたはず。

「委員長さん、おはよう！」

「ええ、おはよう。……話は聞いたわ。今日から登校するそうね！……改めてコダマ小学校へ、ようこそスバルくん。フフ、これもワタシの優しさのおかげよ、感謝しなさい！」

なるほど、わざわざボクのために。それは悪いことをさせちやつたかな？

「そつか。わざわざボクのために校門前で待つててくれたんだ。ありがとう！委員長さんのおかげだからね……これからは委員長様つて呼ぶことにするよ」

「や、やめなさい！……もうちゃんと登校するのだから、同級生に敬称をつけるのは関心しないわよ。普通に呼びなさい、普通に」

何故普通を強調するんだらう。

なんだか照れ臭いけど、そういうことなら。

「じゃあこれからよろしく、ルナ」

うむむ……これはかなり恥ずかしいぞ。委員長さんも照れているようで、顔が赤い。普段は委員長つて呼ばれるからかな？

「え、ええつと……そ、そうね。よろしくスバルくん」

何だか二人してもじもじしていると、変な人として見られそうだ。ここはただでさえ

人通りが多いのだし。

「別に『くん』はつけなくてもいいよ？ ゴン太やキザマロにはつけていないんだし」

「ええ!?! い、いや、それもそうね……では改めて、よろしくね、スバル」

ブハッ………本当に言っちゃよ………凄い顔真っ赤だけど。

いや、うん。からかうのも止めにしておこう。

「ゴメンゴメン………いきなり名前呼びはちよつとね。よろしく、委員長」

もう委員長でいいだろう。あえてさん付けするのも違和感があったし。

そして、委員長の感情が急激に沸騰していくのを感じる。からかい過ぎたかな？

「……………ツ!!!……………す、スバルくん………アナタねえ……………」

「アハハ、ゴメンね！」

「グヌヌ……………ツ!!……………ハア、ハア!! もう、大丈夫よ。……………取り敢えず、教室に行く前に先

生へ挨拶してきたらどうかしら？」

何とか感情を押さえ込んだ委員長が、教えてくれる。

不登校からの復学だから、気を遣ってくれたのかな？

「うん、ありがとね！」

そう言つて校門から敷地内に入る。思ったより校庭が広い。きつと、生徒の娯楽を大切にしている人が設計したのだろう。

——コダマ小学校・正面玄関——

目当ての人物は職員室の前で見つかった。

以前会った、聖人育田先生だ。ボクとしても、育田先生の話には大変興味がある。これから楽しみだ。

「おお、スバル君！話はお母さんから聞いているよ。キミが決断したことなら、私は最大限サポートするつもりだ。だから安心して、学校生活を楽しんでほしい……さ、もうすぐ授業がはじまるぞ。キミのクラスは2階にある5—Aだ」

うーん、やはりぐう聖……というか、委員長と話しすぎたかな？もう少しゆとりがあると思ってたけど……

「はい、ありがとうございます」

「いいんだ、もう少し砕けても。我々は教師だが、教える者との距離がありすぎると、私たちの言葉が耳に入らなくなるからね。ほどほどに気安くすればいい」

「そうですね……じゃあ、また会いましょう」

「ああ、キミを紹介するのを楽しみにしているよ」

——5—A教室・朝会——

「えー、今日はみんなに報告がある。新しい仲間の紹介だ……さあ、入っただい」

育田先生の声を聞いて教室に足を踏み入れる。何だか緊張するな。

あ、委員長だ。最前列とは、期待を裏切らないね。

小さく手を振っておく。委員長が遠慮がちに手を振り返してきた。恐らく、ボクを鼓舞してくれているのだろう。がんばるぞい。

「星河スバル君だ。今日から復学することになった……みんな、仲良くしてあげてくれ。じゃあ、スバル君、自己紹介を」

ううん、何を言えばいいんだろう。

まあ、適当でいいか。

「星河スバルです。星を見たり、機械を弄ったりするのが好きですよ。……あと、バトル用のナビを持っているので、電子機器のウイルス除去に役立てるかも？」

パチパチパチパチパチパチパチ!!

「よろしく〜!」

「仲良くしてね!」

「ウイルス退治とは、中々凄いヤツがきたね!」

等と、案外好評のようだ。一応、バトル用のナビは普及していて、一般人でも扱えるようになっている。

じゃないとバトルカードだけ持っても仕方ないしね。

とは言え、お粗末な操作性のモノが多く、あまり役に立っていないのが現状なだけ

ど。そこら辺は、ハンターV Gが出るまでしようがないか。

「みんな、よろしくね」

取り敢えず愛想よく、は基本だよね。

あかねさんと、ダイゴさんから受け継いだと思われる優しい笑顔を振り撒いていれば、問題はないだろう。

「先生」

「どうした？委員長」

先生からも委員長って呼ばれてるのか……

「クラスみんなに追加の報告があります。……スバルくんには、学芸会の劇で例の役をやってもらいます」

ざわ……ざわ……

何だ!?! 人生奪還にはまだ早いぞ、ボクは! まだカードトレーダーの沼にハマりきつてはいない! カイジじゃないんだ! というか、路傍の木の役なんだよね……

「例の役って……」

「まさか……」

思いの外、みんなのノリがいい。

楽しそうなクラスでよかった。

「はいはい、静かに。劇の話は午後の練習の時間に回してくれ。それよりスバル君の席だが……最後列の空いている席が、キミの席だ」

「はい、わかりました」

先生の指示に従って、席に向かう。隣は……カヲルくん、じゃなくてツカサ君だ。

「やあ、スバルくん。また会えて嬉しいよ」

「こちらこそ。わからないこととか聞くかもしれないから、よろしくね」

簡易の挨拶を交わし、育田先生の授業に耳を傾ける。

「さて、早速二時間目の授業を始めるぞ」

「先生！それよりも何か、おもしろいハナシをきかせてよー！」

ゴン太が手を上げて、要求する。実際、かなり面白い話なんだろうね。ボクも聞きた  
い。

「オイオイ、ゴン太。つい昨日、怖い話をしたばかりじゃないか……まあでも、今日はスバル君もいることだしなあ。しようがない、特別だぞ！よし、みんな教科書しまえ」

「ここが、天国だったのか……！」

「イエーイー！」

「やった!!」

ゴン太やキザマロが喜びの声をあげる。委員長が何も言わないってことは、委員長も



育田先生の話が好きなんだろうな。

「育田先生の授業は変わってるんだよ。教科書をあまり使わず、代わりにいろんな話を聞かせてくれるんだ」

ツカサ君が説明してくれるが、やはりにわかには信じられないよなあ……その面白い話を授業内容と絡められたら、疎まれることもなかったらうに。

「先生はよく言うんだ。勉強しか出来ない人間にはなるな……」

それはわかるけど、辛い勉強を乗り越えてきた人間同士には歪だけど絆ができるのも、本当だ。人は人の苦しみを体感することで、よりその人を理解できる。

「じゃあ、今日はブラザーバンドにまつわる話だ。みんな、ブラザーバンドは知ってるね……」

ほうほう、なるほど。へえ、そういう見方もあるのか。

——約一時間後——

「……というワケで、どんなにテクノロジーが発達したとしても……『絆』の大切さを忘れてはいけない……そういう願いがブラザーバンドには込められているんだ」

うん、これは有意義な話だった。聞く価値アリだ。

——キーン・コーン・カーン・コーン

「ちようどいいところでチャイムだ。この話はここまで！ 休み時間にしていいぞ」

「これが授業ってヤツか、中々面白いモンじゃねえか……こんなに面白いんなら、もつと早くに来てけばよかったじゃねえか」

「育田先生は特別だよ。6年生になって担任が変わったらその意見を180度変えるに100000ゼニーかけるね、ボクは」

「(そういうモンか)」

さて、休み時間の間にクラスみんなに挨拶しておこうと……

## 28

ーコダマ小学校・5―A教室ー

さて、今のうちに挨拶回りってヤツだ。

ちよつと違うかな？ま、気楽にいこう。

「やあ、キザマロ。おはよう」

今日は珍しく3人一緒ではなかったようで、各々教室に散らばっている。まずは合いに声をかけるのは常套手段ってヤツだね。近かつたし。

「おや、スバルくんですか。おはようございます……ところで、『学習電波』って知ってますか？ウチの学校がもうすぐ導入するとウワサの装置です」

キザマロの言う、『学習電波』っていうのは確か、頭に直接電波を流すとかいう、危険な側面もある装置だったハズ。というか、歴史以外は流石に小学生レベル程度なら大丈夫とたかをくくっているけど、どうなんだろう。

「へえ、そんなモノが……そういうえばテレビでやってたよ、ソレ。確か操作をミスすると危ないとか、何とか……」

マイクロウェーブで電子レンジは勘弁してください……

……次はゴン太だ。

「ゴン太、おはよう。これからよろしくね」

「おう！よろしくだぜ！……そうだ、休み時間にいつもドッジボールやるんだけど、オレのチームに入らないか？」

おお、ドッジボールとかやるのか……楽しそうだ。

「いいよ！それにゴン太が相手じゃ、中々当てられなさそうだからね」

「言うじゃねえか！……じゃ、そういうコトでな！」

ゴン太も結構ノリのいいヤツだったんだね。

さて、次は……

ー五分後ー

ふう、粗方話しかけたかな。

みんないい人そうでよかった。あと話しかけていないのは……

「やあ、委員長。さつきぶりだね……おはよう」

「アナタ、挨拶して回っているのはいいけど、ワタシが最後とは、どういう了見かしら？」

微妙に不機嫌だ。まあ、自分が引つ張り出してきたという自負があるので、最初に挨拶しにくると思ってたんだろね。

「そんな……ボクは委員長と長く話していただけだったのに……そんな言い方ないよ

……」

よよよ……とばかりに、委員長に泣き言をいう。

演技だけど。

「そ、そう……なら、仕方ないわね。ともかく、これでクラスメートが全員揃ったわ！これは学校への復帰祝いよ！……確か、バトル用のナビを持っているんだったわね？それに役立つんじゃないかしら」

そう言つて渡してきたのは……フォルダ、フォルダだ！

これは凄い嬉しい！残弾を確保したぞ！

……いや、嘘だよ？流石に、人からもらったモノでガチャったりしないさ。

「(それはどうかな……?)」

ロックからの信頼が厚い……別の方向で。

ボクはギャンブラーじゃないぞ！

「……魂を、賭けよう！」なんて言つてみたくないんだからね！いやでも、ちよつとだけ……うん。

「ありがとう、委員長！ボクはとても嬉しいよ……わざわざ欲しいモノをくれるなんて、もはやボクたちは以心伝心の仲と言つても相違ないね！」

取り敢えず全身で喜びを表現する。今ならミソラちゃんの前でも、委員長に抱きつけ

そうだ！

……その後が怖いけど。

「そ、そうかしら……いえ、喜んでくれてワタシも嬉しいわ」

ボクからの誉め殺しに照れ始める委員長。

……おかしいな、完璧と名高い委員長はいつも誰かから賞賛を浴びているハズ……可愛いからスルーするけど。

「うん、ボクも。きつといい仲間になれるハズさ！」

「いい仲間……え、ええそうね。……もうそろそろチャイムが鳴るわ。席に着いておきなさいな」

あ、確かにそうだ。もうすぐ時間になりそう。

いやー、委員長と話すのは楽しいね。表情がコロコロ変わるの、見ていて面白い。あと可愛い。

ま、秘密を話さないなら、ブラザーにもなれそうだ。

ー5ーA・午後の授業ー

「午後は劇の練習よ。すぐに準備して、体育館に集合。いいわね！」

教室のあちこちから、はい、なんて返事が返ってくる。今教卓に立っているのは委員長だ。

まあ委員長の全面プロデュースという話だし、当然だろう。

さて、移動しないと……不用意にセットでも触らないように、みんなの後ろを歩いていこうか。

ー体育館ー

「じゃあ、昨日の続きから……今日は衣装無しでいいわ」

委員長の掛け声とともに、劇の練習が始まった。

意外と役自体は少ないんだね。代わりにセットの交換やら、製作班やらの人材には不足していなさそうだ。

「シーン35、ロックマン登場……スタートッ!!」

ええ……シーンそんなにあるの……?

「そこまでだ!牛オトコ!」

衣装ナシのツカサ君が登場する。すでに衣装を着ているような服装だけだね。

「だれだ!オマエは!?!」

牛オトコ役のゴン太が迫真の演技をする。

……そりゃ本人だもん。

「助けを呼ぶ声がある限り……私は必ず現れる!青き戦士!ロックマン参上!」

これは……笑いそうだ……まあ、200年前に行ったときは、静かな青!ロックマン

ブルー!とか言っちゃってるんですけどね。

この世界に文献とか残ってないといいなあ……

「ククツ、スバル……笑いを堪えてんのか……オレもヤバい、吹き出しそうだ……つ  
!」

二人してプルプル震えながら、シーン35を見ることになってしまった。(傍目には一人だけど)

「カーッと!!」

委員長のストツプがかかる。どうやらゴン太の動きが気にくわなかったようだ。

しかし、怪物の気持ちになれて……なったことないからわかんないや(すつとぼけ)

オックス・ファイアは、あの言語制限さえなければなあ……

「……それと、照明係のキザマロ!ちよつとタイミングが早いわよ!」

鋭いね。

「き、厳しいですよ」

「ねえ、委員長」

「何かしら、スバルくん」

「ロツクマンのセリフ、少しカツコつけすぎじゃない?」

いや、妄想でも中々言えないぞ、あんなセリフ。



「ワタシの脚本に文句があるっていうの？」

「ちよつとカツコよすぎて、逆にキザになつていような気がするんだけど……」

「そんなことないわ！あの方はどんな時でも絶対に来てくれる……ヒーローなのよ！」

「(クククツ……物凄い信頼だな、スバル)」

「(信頼や本気には報いるよ、ボクは。……出来る限りだけど) そうだ、ボクの役つていうのは？」

「あつ、そうだったわね……忘れるところだったわ！アナタの役は……」

はい、路傍の木ですわわかります。

実際ボクじゃなかったら、また不登校になつてそんな仕打ちに見えるのは気のせい？

「やっぱりピツタシよ！」

「そうだね……他のクラスの人に顔も売れるし、流石委員長だよ。ボクは感激で木のセツトを持つてる腕がプルプルしてきたね、これは間違いない」

「そ、それもそうね……ハハハ……」

体育館に委員長の乾いた笑いが響く。

鍛えているとは言つても、これはキツイ。廊下で水入りバケツを思い出してしまふのは、何故なんだろう。

ーキーン・コーン・カーン・コーン

「じゃあ、今日の練習はこれでおしまい。明日もあるから、各自準備しておきなさい」  
委員長の解散宣言とともに、ボクは解放された。

う、腕が……

「(そろそろ家に帰ろうぜ)」

「(そうだね、疲れちゃったよ……)」

もうクタクタだ。BIGWAVEによる気力もないよ……

あ、明日は確か育田先生がりブラに取り憑かれて『学習電波』を流すハズ……気絶しないといいんだけど……

――職員室・夕方――

生徒たちが下校した後に廊下を歩く教師がいる。

5-A担任の育田だ。彼は本日復学した生徒の様子に満足しながら、家に帰って子供たちの世話をしようと張り切っていた。

「さて……そろそろ子供たちが腹を空かせているころだろう。へそを曲げる前に帰ってやらなければな」

……そう思っただけで帰路に着こうとしていると、進行方向に今年赴任してきた校長先生の姿が見えた。

私はあまり、この校長が好きではない。勉強、勉強と進学校への切り替えを叫ぶばか

りではなく、あんな装置まで導入し出したのだ。

確かに勉強は大切だろう。個人の努力を測るという意味では、これほどわかりやすいモノはない。しかし、勉強は柔軟な想像力や、行動力を生み出してくれるわけではないのだ。社会に出れば答えのない問いや、出来ないコトというのは必ずある。そんなときに、決められたルートをなぞるだけの人間にはなつてほしくない。

一人一人が生き生きと、確固たる自分を持つて生きて欲しい。……私が子供たちに共通して願うことだ。

どうか、健やかに。

どうか未来ある子供たちに、幸あれ、と。

「育田先生……」

何だろう、また嫌味でも吐いてくるのだろうか。

この校長の指導に従わない私を、良く思っていないのは確かだろうしな。

「校長先生……」

「ちよつと話がある。ついてきなさい」

やはり、またお小言か。まったく嫌になる。

「はあ、お話ですか……」

——放送室——

「何でしょう？お話とは……」

「ここで、嫌味な校長が振り向く。苦々しい顔をしているな。……そんなに私のやり方が気に入くわないのか。」

「キミの授業は相変わらず、学校が用意したカリキュラムに従っていないそうだな。……再三の注意にも関わらず、だ」

……きたか。だが、私にだつてやりとおす意志がある。

「お言葉ですが、校長。私はあの偏差値を重んじるカリキュラムに賛成できません」

「キミも知ってるだろう？私が校長に就任するにあたって掲げた目標を！この学校を一流の進学校にすることだ！そうすれば入学者も増える、結果として入学金も増える。一体何の文句があると言うんだ」

「確かに勉強も大事ですが……それ以外に大事なコトもたくさんあるのです。勉強が出来るだけの人間を育てても、何の価値もありませんよ」

そうだ。私は子供たちに……

「……キミがいくら理想を語ったところで、生徒の成績が悪ければ他の学校に入学者を取られてしまう……違うか？」

それは……

「……………」

「そういえば……キミは『コレ』の導入にも反対してるそうだな」  
『学習電波』……ですか？」

「そう、この学校が進学校に生まれ変わるための切り札だ。この学習電波の発生装置は全ての教室と繋がっていて、教室中に脳を活性化する電波を流す。キミのクラス以外はかなりの成果をあげているぞ」

「学校は人と人との触れ合いを学ぶ場でもあるはずです。なのに機械任せにするなんて……それに学習電波は操作を誤ると、人体に影響を与えと言われてるじゃないですか」

「こんなモノに頼るなんて、教師としては認めることなど到底出来ないだろう。コレを使って、どんな子供になるかなんて、考えたくもない。」

「だったら操作を間違わなければいいだけの話だ。いいか、直ぐにこの学習電波をキミのクラスでも使いたまえ。……さもなければ、クビだ！」

「……………」

「キミの代わりはいくらでもいる。キミも生活するための金は必要だろう？それが現実だ！何の役にも立たない理想なんて捨てるべきなんだよ！」

そう言って、校長は退室していった。

「……………私には、出来ない……………成績を上げるためだけの授業なんて……………そんなコトす

るくらいなら、いつそクビになったほうが……」

しかし……

「もし、私がクビになったら……私の、子供たちはどうなる。あの子たちを、生活させるお金は……?」

そうだ、私は親だ。親には親の、義務がある。

だが、しかし……5—Aの生徒たちは……

「しかし、あいつらだって我が子みたいなものだ。勉強だけしか出来ない人間には育てたくない……クッ!」

私は、どうすればいいのだ……!

『……悩めるものヨ』

……声!?

「な、何だ!?!」

クッ!これは……眩しい……!何だ、閃光……?」

「その悩み、我が天秤にかけてやろう」

「な、なんだ!?!お前は!?!」

柱の部分が流動的な光の流れで構成されている、天秤のような不思議なモノがそこにいた。良く見ると、柱の上部にある、金属的なパーツには顔のようなものが見える。と

「うか、喋ったな。この口が。」

「私がナニモノか、などどうでもヨイ。それよりも、オマエが抱えている悩みのほうが大事なのではないか?」

「……どういふことだ?」

「なぜ、知っている。私が悩みを抱えていると……」

「ワタシにはなんでもお見通しなのダヨ」

「聞かれた?……さっきの独白を?」

「……そうだ。私は悩んでいる……理想を選ぶべきか、現実を選ぶべきか……」

「そんなコト、本来天秤にかけるまでもナイ。より確実な方をエラベ。……権力のある側につくのダ」

「し、しかし!!」

「それではあいつらが……!」

「思い返してミロ。オマエはこの学校で浮いた存在になつてはいないか?」

「……そ、それは!」

「……確かに。確かに私は他の教師連中に疎まれている。」

『カッコつけやがって』『どうせ生徒の人氣が欲しいだけじゃないの?』『……ヒソヒソ』

そんな会話を何度も聞いた。しかし、私は!しかし……

「うう……」

「大方、ホカのやつから疎まれ、孤独を感じているのではないか？」

「ど、どうして、そこまでわかる？」

コイツは何を知っている……!?

「理想を迫及したニンゲンの末路など、大抵そんなものダ」

「わ、私はどうすれば……」

「この星には、こんなことわざがあるらしいナ『長いものには巻かれる』と……ククク、まさにその通りダ。それが最も賢いやり方なのダヨ……クククク……」

私は、私は……子供たちを……!!



——翌日——

「ふあーあ、眠いな……」

そろそろ起きよう。既に育田先生はリブラに取り憑かれているんだろうか。

正確な日時はわかっていないハズだから、どうなんだろう。ボクが復学した日になっていたハズけど、多少ずれ込んでいるかもしれない。ボクはもう少し先生の話を聞いてみたいけど。

正直コナン君の気持ちが少しわかった気がするよ。学ぶことはあると言っても、先生向けの授業なんだ。段々飽きてくるのは仕方ないとボクは思う。だからこそ、育田先生の話がより面白く聞こえるっていうのもあるんだろうけど。

「行つてきまーす！」

「いつてらっしやい、スバル」

——コダマ小学校——

入る前からわかる。この異様な雰囲気、間違いない。既に育田先生はリブラに取り憑かれている！

電波変換する前にリブラだけ倒せたら最高なんだけど、そんなうまい話なんてないんだらうなあ……

さて、ダークサイド・オブ・育田先生とご対面といこうか……！

ーココダマ小学校・5-Aー

「遅いぞ、スバル。早く席に着きなさい」

君をつけるよデコ助野郎！

「はい、すいません」

とつとと席に着いてしまおう。まだ始業時間でもないんだけどね。謂れなき叱責にスバル君は心が痛いです。

「……じゃあ、早速算数の授業を始めるぞ」

算数！算数だつて！そういうえば小学生だと算数なんだよね。忘れちゃったよ、算数なんて言葉……

「え？でもまだ授業の時間じゃないぜ？」

「私語は慎みなさい」

ゴンの正論をばつさり切り捨てる育田（アベンジャー）。これは酷い。

「え？……（ぐ）、（ぐ）めんなさい」

何だか今日は調子狂っちゃうな。

まさかゴン太が素直に謝るなんて……

「そうそう、今日からこのクラスも『学習電波』を導入することになった」

ざわ……ざわ……

そして再びのカイジタイム突入。でもこのノリ嫌いじゃないよ、ボクは。

「どうして、急に……？」

委員長が疑問を唱える。

「何か、文句でも？」

しかし今は登校時間だ。

「い、いえ……」

そこで引き下がらないで欲しかったよ。こつちが正しいんだから。

皮肉にも、逆の立場で実感することになってしまったわけだ。生徒との距離がありす

ぎると、生徒の声が届かなくなる、ってね。

「準備はいいか？ 学習電波、オン・エア」

お、始めてオン・エアって聞いたぞ。意外と普通に使われていたんだね、知らなかった。

ーブーーン

お、始まった。どんな感じなんだろうか。

「……あら。不思議……頭に数式が浮かんでくるわ」

へえ………つて、これは、確かに妙な気分だね。頭に入ってくるような、そんな感じだ。でも既知なので、大して頭が圧迫されるような感覚はない。

「本当ですね」

「 $1 \times 1$ は1、 $1 \times 2$ は2、 $1 \times 3$ は3……」

キザマロも反応が鈍い。流石に九九は知ってるよね。

て言うかゴン太エ……

「オイ、スバル。ちよつとビジライザーかけてみる」

ロックがボクに声をかけてくる。なんだろう、ウイルスでもいたのかな？

「ほいっと。……変なのが浮いてるね」

これが学習電波。デフォルメされた教師の顔をしているように見えるね。ダサイ。

「あんまり、いいカンジの電波じゃないな」

そりや人体に影響があるからねえ……

「いいカンジじゃないつて？」

「カラダに悪そうつてコトだ」

とうかこの学習電波つて教師殺しじゃない？

誰でも操作出来て、本人が授業する必要はない。コレが導入されたクラスに必要なの

は、壊れても直ぐに直せるエンジニアだけだよ、まったく。

——数分後——

『ブツブツ……』

みんな小声で入ってきた内容を口に出して反復するだけだ。感情がこもっていない、嫌に静かに感じるのはなぜだろう。

『ボソボソ………こんなつまらない』

「誰だ!? つまらないだと……? 結構だ! 授業は面白い必要などない! 大事なものは成績だつ! もっと成績を上げろつ! もっと、もっと、もっと、もっと、もっと、もっと、もっと、もっととオー!」

いきなり教室が閃光に包まれたかと思うと、そこには電波変換したリブラ……リブラ・バランスがいた。

自分の炎で火傷とかないんだろうか、別に体が炎で構成されているわけでもないのに。

「キヤー!」

「ゲゲゲッ!」

「セ、センセー!」

委員長の十八番に続いてゴン太とキザマロが驚きを示す。こんな展開に二度も遭遇

したからね、流石に反応が早い。

「おいでなすつたぜ！」

ロックの興奮した声が聞こえる。最近は特に苦戦もしていなかったから、刺激でも足りないのだろうか。

「私は、変わった。理想など何の役にも立たず、大事なものは如何に世の中を上手く渡っていくか、だ。学習電波、出力最大！」

ーバチチチ!!

なんかヤバイぞ！次から次へと……

ウツ！歴史はキツイ……でも、一教科だけなら耐えられる！いい機会だ、覚えきつてやる……!!

「これは、次から次へと……頭に直接問題が……」

「1×4は4、1×5は5、1×6は6、1×7は7、1×8は8、1×9は9……あく目が回るく!!」

ゴン太さん出力最大でも1の段なんですか……

「アイ            ハブ            ア            ペン、アイ            ハブ            ア            ペン、アイ

ハブ            ア            ペン……い、意識が……! アイム            フロム            コダマタウ

ン、アイム            フロム            コダマタウン、アイム            フロム            コダマタ

ウン……遠くなっていく……助けて、誰か……」

委員長は英語のようだ。小学生なら妥当、かな？

「……………」

「……オイ」

「わかつてる。もう迷わない」

リブラと育田先生は電波変換したまま教室を出ていってしまった。放送室にいるんだっけか……

「（オイ、スバル!!）」

「何だよ、今歴史の確認を……」

貴重な詰め込みの機会じゃないか！ボクにとつては死活問題だぞ!?!本能寺の変みたいな常識を知らなかったらそれはそれで問題じゃないか！

スバル君はあまり歴史に興味がなかったようだから、薄ぼんやりとしか記憶にないみたいなんだよ！

「（そんなコトしてる場合か!）」

……わかったよ。委員長たちに影響が出る前に止めようか。でも、もうちよつとだけやりたかったな……

「わかったよ、FM星人なんでしょ?」

「ああ、取り憑いているのは見る限り天秤座のFM星人、リブラの野郎だ」

「オーケー、じゃ行こうか」

「何を一人言言ってるんだい？」

あ、カヲルくん！じゃなくてツカサ君。

そういうえば影響を受けてないんだよね。ヒカルに負担全部押し付けたのか、それとも、ジェミニによる保護を？

しかし、ジェミニが出てこないコトを見るに、単独行動中なんだろうね。そういうの、結構あつたっばいし。

「ツカサ君、大丈夫なの？」

「うん、何でだろうね……先生、どうしちやっただら？」

やはり影響を受けていない。

「そっか、よかったよ」

「それより、みんなが危険だ。早く学習電波を止めないと……」

「多分放送室だよな？他所のクラスでも流してるって言っていたし」

「そうだね……多分先生もそこにいるんじゃないかなあ……」

「了解。止めに行くよ、ボク」

ここから先はジェミニか、その部下に見られていると思って行動したほうが良さそう



だ。ベルセルクは使えない。何せ同じ雷のチカラ、あのジェミニが警戒しないはずがないんだ。どうせキグナスからバレるだろうけど、復活するまでは大丈夫だろうし、何よりボクはロツクと形だけでも別れたりはしない。

「気をつけてね……」

やだ、ツカサくんマジヒロイン。

——放送室——

放送室は5—Aと同じ2階にあつたので、直ぐに追いつくことができた。育田先生は学習電波を操作しているようで、こちらを向いてはいない。今の貴方って指、無いよね？

「先生……」

育田先生がこちらに気づいたようだ。いや、既に気づいていたのかもしれない。ボクを、子供を傷つけまいと……いや、考え過ぎか。

「おや、授業を抜け出すとは悪い子だな」

「こんなことをして、何になるといふんです?」

「説明出来るコトなんて、何も無い。大人の事情ってやつだよ。ただ、言えるのは……私はこの学校が進学校を目指すことに賛成する、それだけだ」

全く、育田先生がこのままじゃ、ボクが学校に行く意味が一つ、減っちゃうじゃない

か！

「貴方は……それでいいんですか？この前言ったじゃないですか、『公式以外にも大事なことはたくさんある』って」

「そ、それは……」

「それに、この授業みたいなナニカを、本当に続けていいんですか？今日の授業で貴方がしたことは、学習電波を流したことだけ……貴方が教師である必要なんて、どこにもない。今の貴方は、まさしく吐いて捨てるほどいる人材の一人ってヤツですよ」

「この体制を続けていたら、いつか学校の先生とはエンジニアを示す言葉になっちゃうよ！宇田海さんは喜びそうだけど。学習電波に触れられる！ってね。」

「うう……私は……」

「しつかりシロ。またココロの天秤が、傾き始めたぞ」

チツ、持ち直したか……

「ああ、心配するな。……とところで、スバル君。キミはどうして自由に動ける？そうか、まだ学習電波が足りないのだな。ならば……」

「フン、小学生の授業内容程度でボクを拘束しようなんて、不可能だね。でも、歴史はもう少し……」

「ならば、もっと強めるだけだ。今度は装置の内部から！」

.....。

「チツ！電脳の中に入りやがった！こうなったら、オレたちも電波化して追うぜ。スバル、ビジライザーだ」

「うん。……ウエーブホールがないね。他の場所……確か教室にあつたような」

「バレないかな？劇のセットで隠れて見えないはずなんだけど……」

「おう、なら教室へ急ぐぞ！」

その前に……さつきから何か光ってる。

あれは、カメラ？おっ！HPメモリ、ラッキー！

——5——A——

教室に戻ってわかったけど、みんなの状態が思ったより悪い！またタイムアタックかよっ！

「(電波変換！星河スバル、オン・エア！)」

——5——Aのウエーブロードー

「学習電波の電脳へ急ぐぜ！」

「わかつてる！」

しっかし、迷路然としてるなあ……動きづらいつたらありやしないよ。

それに……みんな真剣だった。本気で助けを求めているようだった。なら応えな

きや、いけないだろ！みんな生きているんだ、ゲームとは違う。誰かの本気は、それをボクに確認させてくれる。だから助けたいって、思っちゃう。こんな理由で、ホントにゴメンね……

「そういえば、教室からあのツカサってヤツが居なくなってたな……アイツ、どこかで見たような気がするぜ」

前にドリームアイランドに行った時だろうね。

「今、そんなコト考えても仕方ないか。とにかく、リブラを一刻も早く倒すんだ」

「わかつてる……何か、来る？」

『そう上手くいくかな？』

この声……生きていたのか、あのとときのジャミンガー！

ミソラちゃんに追われて生き残るとは……つと、落ち着け。今は急いでる。委員長が危ないんだ。コイツの相手をしている暇は……！ゲームのように、スターフォースに覚醒するなんて、そんなラツキー期待出来ないんだ。

「アンタは……この前の！」

「チツ！リブラだけでも手一杯だったのに！」

「……ニヤツ」

「オイ！オマエ何者なんだ!?!リブラの手下か!?!」

違う、違うんだ。コイツはジエミニの……

「今度は、逃がさない」

前みたいにミソラちゃんは来ないだろう。今日は一日音楽と学校の勉強があるって  
言ってたし。

「く、来るぞ！構えろスバル！」

クソツッ！ベルセルクなしでは！……最悪、ベルセルクを晒さないとダメか……！

「……いくぞ」

クッ！向かってくる！何とか捌ききらないと……！

「ロックー！」

「ウオオオオ!!」

リュウエンザンで斬りかかる。が、腕を交差させたジャミンガーGタイプに防がれる。……相変わらず、凄く耐久性だ！

「フーン！」

交差させた腕を勢いよく振りほどき、その勢いでボクをふっ飛ばす。やはりパワーが  
ダンチだ！

「今度は、此方からいくぞ……！」

ウェーブロードが軋むような踏み込みによって得た、純粹な突進力でボクたちに突つ

込んでくる。ウォーロックアタックのような特殊性が無くとも、このパワーはとても厄介だ。何せ汎用性が高い。

高度な特化型は、それだけで大抵の分野をカバーしてしまうのは、戦闘ならではないということか……！

「オイ、スバル！このままじゃ、じり貧になっちまうぞ！（ベルセルクを使い！コイツを始末すれば、口は塞げるハズだ！）」

ダメだ！ジェミニに狙われるかもしれない！戦って負けるとは思えないけど、ミソラちゃんやあかねさんを人質に取られたら、ボクは何も出来ない！

痛いんだよ！やつと手に入れた絆を失いかけるのは！体を引き裂かれるより、ずっと痛いんだ！

——精神世界——

何だ!?ボクはあのジャミンガーと戦って……いや、これは精神世界？

とても殺風景だ。まるでボクみたい。いや、今は違うか。それよりも。

「( )は……」

『スバルよ……』

この声……ペガサス・マジック！

「( )で、朽ち果ててしまうのか？」

「オマエは……この前のヤツ！」

ロックも来ていたのか。

「随分苦戦しているようだが……オマエのチカラはこんなものじゃないはずだ」  
「今も、十分やつてるさ！」

思わず、声を荒らげる。クソツ、焦っているのか、ボクが……！

「フン……オマエには聞こえないのか？オマエを呼ぶ、あの声が……！」

声？ そうだ、教室には、委員長たちが……

『……す……て』

よく、聞こえない。でも、ボクはこの声にしつかり耳を傾けなきゃいけない。そうじゃなきゃ、多分一生後悔することになる！

『……すけて』

『助けて……助けて、ロックマン……！』

「この、声は……」

クソツ！ 何で泣きそうなんだ！ 委員長が、助けを叫んでるんじゃないか、必死に！ 不甲斐ない、ボクに……

「ううっ……委員長……」

そうだ。委員長は、本気なんだ。こんな時に、ロックマンに、心の底から助けを求め

てる。存在すら確かではないって、誰も本気で信じていないというのに……

ああ……うん。もう、大丈夫。ありがとう、委員長。キミのお陰でボクはまだ、戦える。

「さて、もう一度言う。ここで、朽ち果ててしまうのか？ オマエを呼ぶ、あの声を捨て置いて……」

答えなんて、決まってる！ ボクは、委員長を守るぞ！

「ありがとう、ペガサス・マジック。貴方のチカラ、お借りしますね。ボクの守りたいモノが、増えたんです」

「その言葉を、待っていた。大事な誰かのためなら、無限に強くなれる。それが『人』というものだ……さあ！ 準備は整った！ 星のチカラ、『スターフォース』を今こそ解放させるのだ！」

ペガサス・マジックのカゲが、ボクの中に入っていく。これは、翼。……無限に羽ばたける、ボクの翼だ……！

ーードクン！

うおおおおおおツツツ!!!

ー5ーAのウェーブロードー

「何だ？ 急に立ち止まって……こ、これは!? 何だ!? 何が起きた!？」



「うおおおおおツツツ!!!」

胸に埋め込まれたスターフォースの鼓動を感じる。

スターフォースの輝きがボクを包む。溢れ出るチカラの奔流が止まらない。ボクは今、誰よりも強い!

「…………この、姿。ペガサス。アイス、ペガサス……!!」

「…………面白い」

ボクは決めたんだ! 覚悟を決めた男を、止められると思うなよ……!!

『スバルよ…………』

…………これは、ペガサス・マジックの声。そうか、スターフォースによって得たチカラを解説してくれるらしい。

…………うん、うん。わかった。ありがとう。これで、心置きなく戦えるツ!

「くぐぐー」

この戦い、絶対に負けられない!

ウエーブバトル・ライドオン!

ー5ーAのウェーブロードー

チカラが溢れてくる。背中の翼が震えだす。今にも弾けそうな勢いだ！

ボクは、コイツを退けて委員長を助けるために行かなくちゃいけない！そこをどけえッ！

「うおおっっ！」

肉薄し、シールドバツシユを敢行する。ベルセルクよりも出力が高い！やはり宿したチカラの総量の違いってヤツか！300%は固い……これなら正面からでもッ！

「チツ、このパワー……！何なんだ!？」

「まだまだアツ！」

休む暇など与えない！

既にチャージは完了しているぞ！アイススラツシユ（射撃）を食らえッ！もちろん動きを封じるため、足狙いだ！

「ッ、これは……凍結!？」

ゲームと違って現実で凍結状態は中々解除されはしない。そして、ベルセルクよりも

余剰エネルギーが多い今、SFB（スターフォースビッグバン）を放てる頻度も上がっている。威力もだ！この状況、外す訳にはいかないッ！

「覚悟しろ……！ボクは、急がなくちゃいけないんだ。邪魔するって言うのなら……！」  
かなり昂っていることを自覚しながらも、コイツへの戦意は衰えるコトを知らない！  
氷漬けにしてくれるッ！背中の羽を振るい、ウエーブロード上から飛翔する。これでア  
イツの攻撃は届かない……！体に纏う、冷気の流れをイメージ……対象の範囲に魔方阵  
が出現、発動する。

「ハアアツツ!!マジシャンズ!フリーーズツ!!」

「ガアツ!く、くそ……ジエム……」

魔方阵から発生した氷柱に飲み込まれ、完全に動きを停止するジャミンガー。分厚い  
氷に閉じ込められ、あとは回りのウィルスによってデリートを待つばかりだろう。

そこで凍つてろ!永遠に愉快なオブジェとしてなあ!

「スターフォース、凄いやカララだったぜ」

予想以上のチカラだったよ。でも、ありがとう委員長。キミの声、確かに聞こえた。  
とても心に響いた。だから頑張れたんだ。

「いくよロック!助けを求める声を、放っておくことは出来ない!守りきってみせるぞ、  
絶対に!」

「おうー！」

飛翔したまま、放送室へ向かう。これが、三次元機動。今までとは、まるで世界が違う……

『いま……の……こえ……ロック……マン……？』

——学習電波の電脳——

……周囲には数式や四字熟語、化学式などが飛び交っている。学習電波の電脳らしいといったらそうなんだろうか。

「先生はこの奥か……」

「ひとつ飛びだせ、スバル！」

わかってる！けど、流石にセキュリティはかかっているだろうな……一々解除して回らなきゃいけないのは、苦労しそうだ。

「フウ……飛ぶよ、ロック！」

いきなり体に新しい器官が増えたんだ。まだ慣れていない翼の動きを意識し続けるのは、中々苦労する。これも要練習だね。

「なんだ、アレ？」

視界の先では、ウェーブロード上にデフォルメされた恐らく初代校長のモノと思われ

る顔が見える。これはまさか……アレか？

この先のセキユリティ突破のためにクリアしなきゃいけないとか……

「やるしかないね……行くよ、ロック」

「おう！」

デフォルメされた校長の顔……デフォルメ校長の前に降り立ち、破壊を試みる。何だ？テストペーパーに顔がついたようなヤツが出てきたぞ。

「河童の……」

「何だ、コレは?！」

「5、4、3……」

「これはことわざだね……ええつと、川流れ！」

「ーピンポン！」

軽快な音とともにテストペーパーのオバケのようなものが四散する。これで、オーケーみたいだ。そしてロックバスターを放つ。

「やったぜ！」

今は急がないと……！幸いペガサスは負担も小さいようで、そこそこ長く続けていられる。リブラまで持てばいいけど……

「ー五分後ー」

「1+2+3+4は？」

「こんなの間違うかつ！」

「10！」

「ーピンポン！」

「やったぜ！」

更に2つのデフォルメ校長を破壊した。このエリアにはもう無さそう。先へ進もう。

「スベテ ノ カダイ ヲ クリア シタヨウ デスネ……ヨクデ

キマシタ！」

セキュリティを突破した！やっぱりあのデフォルメ校長がカギだったのか！

ー学習電波の電脳2ー

まずは空高く飛翔し、エリア内のデフォルメ校長を探す。……あった！3つだ。やっぱり、次のエリアは封鎖されている。あそこからしか、次のエリアには入れないみたいだ。

「とつとと破壊しちまおうぜ、スバル！」

「ああ！」

学習電波の前に降り立ち、ロックバスターを構える。

チツ！また出てきたか……

「臭いモノに……」

「蓋！」

ーピンポン！

「よし、やったぜ……次だ！」

よし、順調だ。落ち着いて、冷静に、冷静に……！  
時間制限があるんだ。落ち着いて解かないと……

ー五分後ー

「風が吹けば……」

さつきからことわざ多いな！

「桶屋が儲かる！」

ーピンポン！

よし、これで全部だ！

「スベテ ノ カダイ

ヲ

クリア

シタヨウ

デスネ……

ヨクデキマシタ！」

さあ、次へ！

ー学習電波の電脳3ー

よし、見つけた。四つだ。それに、このセキュリティを突破した先に、恐らくリブラ・バランスがいる。急がなくちゃ！」

「桃栗三年、柿……」

「八年！」

よし、クリアだ。あと3つ……！！

——五分後——

「りゅああうあせああああああい……あを抜くと？」

え、えつと……

「りゅうせい！」

——ピンポン！

よし、これでクリア！リブラ・バランス……育田先生が待っている。止めないと！

——学習電波の電脳3・最奥——

セキュリティを突破した後続く長いウエーブロードを進んだ先に、リブラ・バランスはいた。先程よりも落ち着いている。持ち直されたか……

「おや、何者だ？」

「ボクは、ロックマン！貴方を止めに来ました。もう止めてください！」

「よお、リブラ！オマエだろ？」



ロックが声をかける。結構ロックの人脈って広いのね。他のFM星人の時も思ったけど。

「その声……裏切り者のロックではないカ。随分と妙な姿をしているが……所詮は忠誠とウラギリの天秤が測れぬ愚か者ヨ」

「へッ、だからってな、炎と水の重さが測れても、全然嬉しかねえぜ、オレはよ」

全くだ！早く学習電波を止めたい……

「何にしてモ……これで此方から探す手間が省けたというワケだ」

やはり、こちらを追っていたのか。しかし、まずは宿主の確保が最優先なんだろうな、きつと。

「あまりナメるなよ……！こっちは新しいチカラを手に入れたばかりでな、全く負ける気がしないんだよ！なあ、スバル！」

「今すぐ、学習電波を止めてください……！」

「そうはいかない。……生徒の成績を上げねば、私はクビになってしまう」

それも、わかるけど……！

「貴方は、それでいいんですか!? あんなに大事にしていた生徒たちを、苦しめて……！ 貴方は先生でしょう!? それに、掲げた目標があるのなら、やらなきゃいけないコトだって成し遂げてみせろ！ 貴方の話は評判なんだ！ なら、授業に活かせばいいじゃないか！ 貴

方の言葉は、この学校にいる、教師の誰よりも生徒に届くんぞ!?それをよく考えもせず、流されて……!カッコいい大人の見本だった、あの育田先生はどこにいったんだ!」

「……そ、それは……」

頼む、このまま……!

早く学習電波を止めなきゃならないんだ!

「オイ、何度同じコトを言わせる気だ?何かを守るには、何かを犠牲にせねばならナイ。それがこの世の真実なのだ!」

また、邪魔をして……!まずはリブラをやらなきゃダメか……ッ!

「ああ、すまない。私はクビになるわけにはいかない。何故なら、私は……私は親として、自分の子供たちを守らなければならん!」

「こつちだつて、譲れない!守りたい人がいるんだツ!」

「そうか……なるだけ乱暴なコトはしたくないが、こうなれば!」

「来るぞ、スバル!迎え撃て!」

わかつてる!ウエーブバトル・ライドオン!

「ロツク……『アンドロメダのカギ』は返してもらおうゾ!」

リブラ・バランスは両腕が天秤になつている性質から、恐らくは後衛型。接近戦なら、ロツクマンの独壇場だツ!しかしアイスベガサスはその飛行性能から、安全圏である空

中で砲撃を行うのが得策のハズ。でも今のボクのフォルダは近接戦闘寄りの構成になってる。流石に今からフォルダを変える暇はない。何で気づかなかったんだ、ボクは！

「動かないのなら……此方からいくぞ！」

「ッ！」

リブラ・バランスが右腕？に渦巻く水流を放ってきたぞ！不意打ちだけど、危なげなくシールドで防ぐ。

なるほど、腕を振るう必要はないのか。まさに魔術師と言ったところだ！バランスと  
いうからには、炎に関しても同程度の威力、操作性を誇っているのだろう。コイツに近づくのは、容易じゃなさそうだ……！

「フン……反応は良いようだな」

反応はって！パワーだって張り合えるぞ、このアイスpegasusならッ！……落ち着け。ムキになっちゃダメなんだ。ここまでの移動で翼の扱いには慣れてきたけど、FM星人を相手取った戦闘機動はまだ無理そうだ。だから……

「食らえッ！」

道中の戦闘で手に入れたバトルカード『パワーボム2』を投擲する。これは今までよくお世話になってきた『パワーボム1』の上位にあたるバトルカード。

「フン……こんなモノで！」

左腕の天秤で発生させている炎を砲弾のような形状にして、空中のパワーボムを迎撃する。

……狙い、通りだ！

「ロック！」

「ウオオオオツ!!」

ロックの雄叫びを置き去りにする速さでリブラ・バランスに突進する。心なしか、ノーマルのロックマンよりも速い！

「わざわざ死地に乗り込むとはなあッ！……何!?!」

そうさ！パワーボムは攻撃用じゃない。両天秤に発生させている炎と水流を爆発でふっ飛ばして、一時的に使えなくさせるためだッ！

「うおおおっ!!」

左腕にリユウエンザンを展開！ついでに翼で更なる加速をツ！直線なら今の練度でも出来る！速攻で決着をつけてやる！

「チッ！……ハアアアアツ!!」

クツ！体ごと天秤を回転させて範囲攻撃を行う気だ！一旦下がって……

「逃がさんぞッ！」

回避先にカゲツ!? いやこれは分銅……違う、もはやこれはグリップのないハンマーだ！明らかに重力に従っている気配がしない。こんなモノまで操れるのかッ!?

「ウグツ……こんなのでエツ!!」

両腕でハンマーヘッドを受け止め、何とか左に逸らす。あ、危なかった……!

「フン、馬鹿力というヤツか……」

クソツ! 今の際でリブラの炎と水流が再発生してしまった。仕切り直しか……!

「私は私の家族のために、キミを倒す! それが最も優先されるべきことだからだ!」

「そんな詭弁が通じるかあッ!!」

再びパワーボムをリブラ・バランスに投擲する。しかしリブラも先程のような焦りはない。この先の展開を読まれていなければ、まだ!

「二度も同じ手を! 大人を舐めないでもらおうかッ!」

再び回転する構えだ!

「ロック!」

「……ああ、ウオオオオツ!!」

ありがとう、信じてくれて! ここで決める!

「突っ込むぞツ!!」

ウオーロックアタックで突っ込み、リュウエンザンを展開。ここまではさつきと同

じ。しかし、これからだ！

「吹き飛ぶがいいッ！……何!?姿が消えただど!?……何処だ！」

リブラ・バランスの回転に巻き込まれる瞬間！バトルカード『インビジブル』を発動する！見失った隙に、上空へ！回転とは言っても、その中心ならッ！

「……………ッ!!」

喋って気づかれないように、無言でリブラ・バランスの遙か上空に滞空し、一気にダイブする！突き出した左腕にはリユウエンザン！これで決める！

「風切り音？まさかッ!」

もう遅い！脱出不能だアッ!!

「ぐあああああ!!」

こちらを向いたリブラ・バランスの顔からリユウエンザンを突き入れ、貫通する！そのままウエーブロードに叩きつけ、リユウエンザンを引き抜く。HPはギリギリ残っているから、死んではない、ハズ。

そういうえば、さっきの『インビジブル』は、委員長から貰ったルナフォルダに入っていたカード。委員長が、守ってくれたのかな？

……ああ！何だか照れ臭くなってきたぞ！

「そうだ！今の内に学習電波を止めないと！ええつと、これで……」

ーピー！ガクシユウデンパ ヨ キンキュウテイシ シマス

ガクシユウデンパ ヨ キンキュウテイシ シマス……

「フウ……これで学習電波は止まったハズ」

「く、クソ！や、やられてたまるものか！」

「まだ動けるのか!？」

痛みは軽減されてるとはいえ、顔から刀身が入ったんだぞ!？そんな馬鹿な！

「もうやめろよッ！」

「負けるわけには、いかない。ここでクビになってしまつては……」

強情な人だ！だからこそ、今までやってこれたんだろうけど。その意志の強さには、

敬服する。

『……せんせ〜い!』

!?

「……ここ、この声は」

『……せんせ〜い!』

ー現実世界・放送室ー

「ここにもいないわね、育田先生」

「先生、どうしちゃったんですかね」

「なんかヘンなものでも食べたんじゃないのか？」

「熱でもあったとか？」

「そうじゃないと、あの育田先生が、成績上げろー!!……なんて言うワケないしね」

「だったら、早いところ病気を治してもらっていつもの先生に戻ってもらわなきゃ。さあ、手分けして探すわよ。……全く、スバルくんまで何処に行つたのかしら」

——学習電波の電脳3・最奥——

「……そんな。まだ、信頼してくれると言うのか、こんな私を……」

「オ、オイ！動揺するナ！」

リブラが焦っている。もう、ボクのチカラは必要ない。育田先生が自分で何とか出来るだろう。

「私はバカだった。……これじゃあ、生徒に顔向け出来ない……」

「それでは、オマエの子供たちはどうナル？一家共々路頭に迷う気力？」

「いいや、子供たちも守って見せる。絶対に！」

「な、何を言っている？気でも触れた力？」

「私は、教師を続ける。でも、私の哲学も曲げない。私に足りなかったのは、それを貫く『覚悟』だったんだ……生徒たちの優しさに触れて、やっと気がついたよ」



「そんなのは無理に決まってる！」

もうリブラは動揺を隠そうともしない。無駄だよ。育田先生は強い人だ。本来、お前なんかが付入れ入る隙なんて無かったんだ。

「確かに。しかし、大事なのは『努力』を続けること。努力を続ければ、無理を可能にすることも出来るかもしれない。……何より、私はその事を子供たちにこの身をもって示す義務がある。私は親であり、教師でもあるのだから！」

「グオオオオオオオオ!!!」

消えた……か。

「リブラのヤツ、ざまあねえな！ さあスバル、早いところ戻ろうぜ！」

「うん、そうだね。これならきつと、大丈夫」

何とか解決出来たか。良かった。

それにしても……スターフォースと合わせて、二度も助けてもらっちゃったな、委員長には。

ミソラちゃん以外にも秘密を話すべきか、真剣に考えなければならぬかもしれないね……

3  
1

——翌日——

こうして、今回の事件は解決した。事件後、直ぐに騒動の原因究明が行われたけど……結局学習電波の操作を育田先生が誤ったから、と判断された。誰も電波変換して暴走してたなんて信じないだろうから、当たり前だけど。

それを受けて、学習電波の使用は見直されることになったんだ。そして育田先生は、今回の騒動の責任を取る形で辞表を出した。

このままじゃ、先生が学校からいなくなってしまう。ボクたちは行動を起こすことにしたんだ。

15—A・放課後——

「皆、少し残ってもらえるかしら？」

きつかけは委員長の提案だった。

「みんなも知つての通り、育田先生が辞表を出したわ……このまま学校が受理してしまつたら、育田先生はコダマ小学校の教師を辞めることになる。……皆は、どう思ってる？これはただの質問よ。正直に答えてくれて、構わないわ」

きつと委員長も腹に据えかねているんだろう。あの育田先生が自ら辞表を出して、コ  
ダマ小学校から出ていってしまふなんて。

「……そんなの、イヤだ」

教師の居ない生徒だけの教室で、誰かが呟くような、そんな声が出た。それが呼び水  
になったのだろう。教室は育田先生の辞任を惜しむ声で溢れることになった。

「こんなの間違ってる！」

「あの育田先生が辞表なんて、おかしいに決まってるよ！ワタシたちを、自分の子供たち  
と同じくらい大切にしてた先生が……こんな、途中で放り出すようなこと！」

「そうだ！そうだ！」

「僕は育田先生以外の授業なんて、もう受けたくないぞ！」

「育田先生は、色んなクニのウマそうな料理の話をしてくれるんだ！」

「ぼ、ボクだって知らないような、興味深い知識を披露だつてしてくれませう！」

教卓に立つ委員長も、満足そうだ。ホント、良いクラスだよ、まったく。

「みんな、ありがとう！ワタシも、これで覚悟が決まったわ……！覚えておいて。この件  
に関して、ワタシたちは、決して一人じゃない！いいわね、取り戻すわよ！育田先生を  
！」

『うおおおおーっ!!』

クラスのみんなが声を大にして叫ぶ。委員長つてやつぱり凄いや。こんなのボクには真似できないよ。

クラスが気持ちを一一致団結し、落ち着いた頃、委員長が再び話し始めた。

「さて、特に大きな権限をもっているワケでもない、ワタシたちが出来ること……それは、大多数の意思を示すコトよ！」

「だいたすうのいしをしめす？」

ゴン太が、あまりよくわかっていないような反応を返す。ゴン太にはちよつと仰々し過ぎたかな？

「そうね、簡単に言うと、生徒の署名を集めるわ。但し！学校側の人間に見られないよう、学外でね！」

なるほど、学校の意味にそぐわないコトをしていたら、止められるかもしれないからね。上手いことを考えたモンだ。

「具体的には、どうやって署名を集めるんです？」

キザマロの疑問は最もだ。どうやって短期間に学外で多くの署名を集めるというのか。しかも生徒限定だ。

「フッフ、よく聞いてくれたわ！それはね……スバルくん！」

えっ!?!ボク？

「どうしたの?」

「貴方、天体観測が趣味とか言ってたわよね? 星座や、星に関する知識は多少なりともあるんでしょう?」

まあ、スバル君の記憶としては頭に星に関する知識は入っているけど……

「まあ、そうだね。あんまり誇れるようなモノではないけど、多少は」

「なら、十分よ! 多くの生徒たちを学外に集める、その方法は……!」

『その、方法は……?』

クラスのみんなが唾を飲むような音が聞こえる気がする。やっぱりノリがいい。

「生徒主催の、天体観測よ!」

なるほど、この町には中々立派な展望台もある。夜中とはいえ集団で行えば、危険も減るだろう。それに、子供が夜にクルマを運転出来る時代だ。親だつて大勢で参加するなら、反対もしづらい、のか?

しかし、全ての生徒を引っ張ってこれるわけではないハズだ。来れなかった生徒の分はどうするんだろう。

「委員長、質問いい?」

「何かしら、スバルくん」

「来れなかった人はどうするの?」

「それは、来なかった人の友達に署名の用紙を届けてもらうわ。それで恐らく、生徒のほ  
ぼ全体に行き渡るハズよ」

「なるほど……わかったよ、委員長」

「わかればいいわ。さあ、大天体観測会の段取りを決めるわよ！」

この後、日が沈みそうになるまで会議は続けられた。

そして……

——二日後・展望台・夜中——

「みんな、今日は参加してくれて、ありがとう！話はこれくらいにして、今日はみんな  
星を見ましよう！帰りにチラシを持っていくのを、忘れないでね！」

このチラシというのが、署名用の紙ってワケ。

「それじゃあ、スバルくん。解説よろしく！」

なんと委員長は、星座の解説をするという大役を、ボクにやらせたんだ！恩があるか  
ら引き受けたけど、中々大変そうだな……

「ええつと、解説をします。星河スバルです、よろしく。早速ですが、まずはあの春の大  
三角について話したいと思います。あの大三角は牛飼い座のアルクトゥールス、乙女座  
のスピカ、そして獅子座のデネボラを結んだ図形で……」

——十分後——

「……と、いった感じで、星と言えば夏に見える天の川などが有名ですが、春には春の星空があるので興味を持った人は是非、この展望台に足を運んでくださいね。……以上です」

パチパチパチパチ……!とそこその拍手が上がった。まあ、無難にこなせたかな? 横で聞いていた委員長が褒めてくれる。

「(中々良かったわ! またお願いするかもしれないわね!)」

ええ……またやるの?

「ゴホン……さて、では次は各々自由に星を見ていきましよう! 三十分後にまた声をかけるので、そのときに今みたいに集合ということ!」

委員長の号令とともに、展望台のあちこちへ参加者が散らばっていく。結構来ていたんだね。なんだか嬉しいな。

「スバルくん……何してるのかしら?」

委員長が話しかけてくる。ちよつとポーツとしてたかな?

「ああ、委員長。えつと、結構人が来たなーって」

「そう……ところで、暗いのによくワタシが話しかけたってわかったわね。夜目がきくほうなの?」

「何言ってるのさ。あんなに夜空で主張してるでしょう? 見失うワケないよ」

中々上手いコトを言った自覚があるね！

「……………」

ちよつと、黙らないでよ！表情とかまではよく見えないんだからさ！

「え、えつと…………アハハ…………」

「そ、そうね、ありがとう…………」

こんな感じでボクたちの計画したイベントは割と上手くいった。つまり署名は集められたんだ。

——二日後——

そして、集まった署名によつて校長先生を説得することができた。流石にほぼ全校生徒分の署名は無視出来なかつたらしい。校長先生は渋々それを受け入れることになった。

後で聞いた話だと、同期の人たちが学校の成績を上げている中、自分の担当するコダマ小学校の成績が中々振るわなかつたことで焦っていたらしい。プライドも大事だとは思うけどね。

そして、育田先生が帰ってきた。これでこれからも先生を続けることができる。いいことをすると、気分が晴れやかになるね！

——数日後——



そして、学芸会の本番を迎えたんだ。

「え、ツカサ君休んだの?」

「やっぱりこうなったか。」

「本番の日に風邪を引くなんてワタシの計算外よ、まったく……」

「それで、劇の代役は?」

「……考えは、あるわ。さ、ちよつとコレに着替えて……」

「ここで? 委員長そういう趣味があつたの!?!」

いや、流石に恥ずかしいから。

「え? い、いや、違うわよ! さっさと着替えてきなさい!」

「はーい」

――五分後――

「ピツタリじゃない」

そこには、ロックマンのコスプレに身を包んだボクがいた。せめてバイザーくらいは欲しかったよ……

「路傍の木からヒーローまでこなすとは、ボクの演技の幅、広すぎない?」

「もう諦めなさいな! アナタしかいないのよ! あつ、それから台本に新しくセリフ追加したからね。この場面で……」

「『助けを求める声を、放っておくことは出来ない。守りきつてみせるよ、絶対に!』?」  
 何だか近いセリフを言ったような……

「……この前の騒動の時なんだけど、ワタシが『助けて』って言ったら、それに近い言葉  
 が返ってきた気がしたのよ。確かに、ロックマン様の声で……って、何でそんなコトま  
 でアナタに説明しなくちやいけないのよ!」

……………。

「(ククク、聞かれてたみたいだなあ?)」

うっさいロック!

——学芸会本番——

「キヤー! 助けてエツ!」

委員長迫真の演技が体育館に響く。今はまさに劇本番の真つ最中だ。

「お、大人しくしろ!」

ゴン太も中々の演技力。

「イヤ!! 誰かーッ! (ここでロックマン様の登場よ! しつかりやりなさい、スバルくん  
 !)」

準備はオーケー。照明の仕込みも終わってる。んじゃ、いきますか!

「そこまでだ!」

舞台袖からロックマンの姿で登場する。もちろんコスプレのほうじゃない。多分ここはビジブルゾーンなんだろうね。

「……え？」

「誰だ、オマエは？」

「……青き戦士、ロックマン参上！」

「(ウ、ウソでしょ？これってホンモノじゃないの!?)」

驚愕の表情を浮かべる委員長にウインクし、照明の明かりが落ちるのを待つ。……よし、落ちた。

『……ザワザワ』

「ちよつと、何？アクシデント？」

狼狽える委員長に近づいて耳元で囁く。

「委員長、ありがとう。キミのお陰で頑張れたよ」

「えっ？え？ロックマン様？」

そして元の場所に戻り、電波変換を解除する。

フウ、これでお礼は言えたぞ。

「し、しまった！うっかりしてました」

明かりが戻る。当然ロックマンのコスプレをしたボクが舞台上に上がっているという

構図ができることになる。

「……ア、アレ？一瞬ホンモノに見えた気が……それにきつきの声。あれは……いや、気のせいよね、やつぱり。スバルくんがロックマンに見えるなんて、ワタシ疲れているのかしら？……でも」

「（い、いいんちよう、セリフ！）」

「あつ……え、えつと、助けに来てくれたのね！」

あ、ボクのセリフだ。

「助けを求める声を放っておくことは出来ない！守りきつてみせるよ、絶対に！」

これは決まった！

「（でも、どうして？胸の鼓動がずっと早のまま、全然収まらないわ……）」

この後、何とかキザなロックマンをこなして、学芸会は終了した……

——一週間後・星河家——

——ピンポン！——

「スバル……みんなが来てくれてるわよ……！」

母さんの声がする。今日もいなくなっちゃ！

「はーい！行ってきます！」

「いってらっしゃい、スバル」

ーコダマタウンー

玄関を出たボクを待つていたのは、委員長たちだった。最近はよく誘いに来てくれる。なんだか嬉しい。

「いつまで待たせる気よ！このワタシが自ら迎えに来てあげてるんだから、もつと早く出てきなさいよ！」

ええっ!?まだ2分くらいだよ!?

「待たせるって……まだ2分しか経ってないじゃないか。でもありがとう。よし、行くか！」

「ワタシが号令をかけるのよ!まったく、スバルくんったらー!」

「そうだそうだ!いつも号令は委員長がかけてるんだぞ!オマエも委員長のやさしさにこたえて、早くじゅんぴをしろ!」

「朝は30分早く起きてください!」

ゴン太とキザマロのペースに飲み込まれそうになる。コイツらも委員長と登校して起床時間が早まったクチだな……!?

「みんな、いつもありがとうね」

玄関からあかねさんが出てくる。ホントにその気遣いが嬉しいよ……

「アラ、おばさま、おはようございませす！」

あかねさんにおばさまだとツ!

お姉さまだろうがこのスカタン野郎ツ! いや、冗談です。でも、他人におばさま扱いされるとちよつと悲しくなるのは何でだろう。

「この子、学校でうまくやつてる? 長い間学校に通っていなかったから、クラスに馴染めてるか心配だわ」

「おばさま、心配は無用ですわ。このワタシ、コダマ小学校五年A組クラス委員長、白銀ルナが責任をもつて面倒をみますから! ね? スバルくん?」

「そうだね、よく話しかけてくれて、とても助かつてるよ。ありがとう、委員長」

「……ツ! そ、そういうのはあんまり気にしなくていいのよ……?」

「フフツ、まあそうなの! これからもスバルと仲良くしてやつてね」

「もちろんですわよ……ねえ、ゴン太、キザマロ?」

「オウツス!! もちろん!」

「当然ですとも!」

二人とも、元気一杯だね。こんな朝っぱらから……

「まあ! よかつたわね、スバル。優しい友達が出来て! 母さん、安心だわ!」

いや、母さんが安心ならいいんだけど。

「ま、もうこんな時間！早く学校に行かなくては！」

確かに、もう結構いい時間だ。歩いてギリギリと行ったところだろう。

「まあ、引き留めちやつて悪かったわね。気をつけて行ってらっしゃい」

「おばさま、行つてまいります〜！さあみんな、行きましょ！」

こうしてボクは、今日も学校に行く。

育田先生の授業が楽しみだ。

「(そろそろ飽きてこないか?)」

何で水を指すのさ！

## 第五話 『蛇遣い座』

## 3 2

——5——A教室——

「教室のドアを潜ると、そこは別世界だった」

「なぐに言ってるのよ、スバルくんは」

委員長が呆れたような声を出しつつ、ボクをジト目で見る。そこまでされるようなことかなあ!?

「委員長、最近ボクの扱い酷くない?」

「フン! 誰かさんがワタシのコトを、からかうからではなくって? まったく、この前の天体観測の時だって……」

「そんな、ボクは何時だって本心だよ!」

委員長の反応が面白いなんてコトは全くない。(棒)

「え? あ、あら、そう? ……別にワタシを褒めたって、何も出ないわよ?」

何だか、クネクネしながらそっぽを向く委員長も新鮮でいいと思うんだ。(歓喜)

「(オイ、またはじまったぞ。この二人)」



「(何だか雰囲気か怪しいですからねえ……藪蛇な気がしますけど)」

「(やぶへびって何だ？ウマイのか?)」

「(ゴン太くんに諺の話題を出した、ボクが間違っていました)」

ーキーンコーンカーンコーン

「あ、そろそろ時間だね」

「さあ、貴方たちも席につきなさい。育田先生は時間ピッタリに来るんだからね！」

「「はぁーい」」

ー放課後ー

「さて、これで帰りのホームルームを終わるぞー！みんな、寄り道しないで真っ直ぐウチに帰れよ……あ、そうだ、ゴン太。課題の算数ドリル、まだ提出していないな？明日持つてこなかったら一週間居残り勉強だぞ！」

あれから、育田先生は面白い授業であることはそのままに、少しずつ学校のカリキュラムに沿った内容を重視し始めた。いい傾向だとボクは思う。既知の内容でも、育田先生の語り口なら不思議と楽しめるから興味深い。

「そ、そんなあー！ムリにべんきようしたら、アタマがパンクしちゃうよ、オレ……」

「おかしいな？ドリルはやったけど、持つてくるのを忘れたんじゃないかな？三日前はそう言ってたぞ？」

「あ、ウググ……」

オックス・ファイアにでも変身しそうな唸り声を放つゴン太。残留電波があるから、あながち嘘と言いつれ切れないのが面白い。

「い、いいんちよう……」

ゴン太が救いの女神に、祈るような声を出す。しかし、委員長はこういうことに厳しいのだ。多分。

「ワタシは手伝わないわよ、頑張つてやりなさい！……ワタシが手伝わたら、アンタのためにならないでしょ。ね、先生？」

育田先生は全てわかつているような顔だ。きつと前に委員長が手伝ったことがあるんだらう。

「そうだな、たまには自力で頑張つてみるのもいいだろう！」

「そんな言い方しないでよ。オレがいつも自力でやっつてないみたいじゃないか」

「お前の提出する課題の間違つてるところが、いつも最小院と同じなのは、単なる偶然か……」

丸写ししてたのかよ！流石に草バエル。

「ゲッ！」

「アチャー……いつもあれほど丸写しはやめて下さいって言っていたのに……」

『アハハハハハ!!』

クラスが爆笑に包まれる。あー面白い。

「あ、そうだとスバル。この後、放送室に来てくれんか？ちよつと話があるんだ。何、説教じゃないから安心しろよ」

「ハ―イ」

説教以外で話とか、何なんですかねえ……（疑惑）

いや、確か五陽田さんが来てるんだっけ？

「ようし、それじゃ今日はここまで！ゴン太、ドリル忘れるなよ！」

『さよーならー!』

――解散後――

委員長はゴン太とキザマロに話があるようで、教室の隅に集まった委員長たちに、ボクは聞き耳を立てていた。待つてるように言われたけど、先に行つてもいいかな？というか、さりげなく下校するように言つたけど、やつぱりボクに人を動かす才能はありませんでした、まる。

「つたく、なにやってるのよ！算数ドリルくらい、サツサとやつちやいなさいよね！ワタシのブラザーのアンタがそんなじゃ、ワタシまでバカだと思われるじゃないの！」

委員長はお冠だ。いや、流石に算数でコケたらキレるだろうけど。

「め、面目ない……」

「キザマロ、今からゴン太のウチに行つてドリルを手伝つておあげなさい」

おおっ！普通に優しい。

「け、けどさつき自分でやりなさいって……それにボク、夕方から見たいアニメが……」  
馬鹿野郎！今日の夕方は『危ない暴れん坊ウルトラ大將軍』の再放送だろうが！そつちを見ろよ！

「ゴン太が一人でやつて明日までに終わると思つてるの？二人がかりでちやつちやつと終わらせて来なさい！」

「は、はい……」

「わ、わかりました。ゴン太くん、行きましょう……」

ソロソロと教室を出ようとする二人。

「何、タラタラしてるの！走りなさい！」

「ヒイツ！」

こえーよ。

「ブラザーがアレだと、ホント疲れるわ……」

「（あのオンナ、いつも怒鳴ってるな……）」

「（それが個性つてモノだよ、ロック。FM星人にはそんなヤツ、いなかっただ？）」

「(……: そういや、オックスの野郎がいつも怒鳴ってたような気がするぜ。いや、あれは興奮してたのか? ブルルルッ! ってな)」

「(赤いモノ見て興奮してたんじゃないの? あ、オックス自体が赤かったね……)」

「(ガハハハ! 違いねえ!)」

さて、そろそろ放送室に行かないと……

あんまり待たせて、五陽田さんに変な邪推させても面倒だからね。あ、連絡連絡つと…… 忘れるところだった。

——放送室——

「失礼します、星河です」

「おーい、こっつちだ!」

育田先生の声を聞いて放送室の奥を確認する。

やっぱりいたか。

「……………」

「どうした? 早くきなさい。こちらは、サテラポリスの五陽田ヘイジさんだ。先日、この学校で起きた事件について調査に来られたみたいだね」

うーん、ファーストコンタクトが悪かったのか、あんまり良い印象がないんだよなあ

……

「久しぶりだね、スバル君……だったね」

集めたデータを失い、悲鳴を上げていた姿はそこには無かった。リカバリー（データ）出来たのかな？

「久しぶりです、五陽田さん。今日は、どんなご用件ですか？……また家を検索させろ、とか言い出さないですよね？」

ううん、やっぱり少し辛辣になってしまう。

「……アレはすまなかつたよ。先日、この学校を舞台に事件が起きたのは覚えているな？」

同じようなやり取りを、したような気がするぞ。

「ええ、もちろん」

「今日、この学校を調査したところ、非常に強い残留ゼット波が検知されたのだよ。つまり、先の事件にはゼット波が関わっているのは火を見るより明らか。そして事件はキミが三年ぶりに登校した時に起こっておる……」

正確には、登校して二日目だけだね。

「五陽田さん、ちよつと待ってくださいよ。あの事件はワタシがおかしくなつて起こしたものです。この子は何も関係ありません。寧ろ、彼は被害者だ」

やはり聖人育田は健在であつたか。

「まあ、先生。落ち着いてください。ワシは別に、この子が犯人だと言ってるワケではありません。ただ、この子は何かをしっているのではないかと、そう睨んでいるのです。我々の知らない何かを……」

さつきから物理的に睨んでいるけどね。これは言わぬが花なんだろうか。ぶつちやけ人相悪いからね。

「なあ？スバル君」

「知りませんよ。これで満足ですか？」

「だが、キミが事件現場にいたのは紛れもない真実だ。我々は、サテラポリスの名に懸けて市民を守らなければならない」

……言うじゃないか。

「……いいかね、スバル君。驚かずに聞いてくれ。ゼット波の正体とは、宇宙人なのだ！」

「唐突ですね。フィクションの見過ぎじゃないですか？いくらNAXAで地球外生命体の反応をキャッチしたからと言って、宇宙人何て誰も信じませんよ？」

地球外生命体のことに関しては、NAXAの公開情報によって調べたか、当時のニュースを覚えている人なら知っていてもおかしくはない。ましてや、交流のための宇宙ステーションに乗っていたのは星河大悟、つまり星河スバルの父親だったのだから。

「……いいか、その宇宙人は人の目には見えない電波の体を持ち、そつと人間に近づき、心に取り憑き悪事をはたらくのだ。キミも下手をすればその宇宙人に取り憑かれてしまふかもしれないんだぞ!? そうなったらキミにも危害が及ぶかもしれないんだ」

そもそも解決してるのがボクですし? というか、FM星人に悪事をはたらかないヤツってウルフとかキャンサー以外にいるのか……? 見たことないけど、ゴート・カンフーとか? あ、ムーン・デザスターとかいう、変なシンガーがいたっけ。オレの歌を聞けYOOOO!! みたいな。違つたかな?

「ハツハツハツハ! 電波の宇宙人ですと? それは中々ユニークな発想ですな! スバル、NAXAに絡めるとは、中々良いポイントだったぞ! 五陽田さん、もういいでしょう? ワタシの生徒は宇宙人のコトなんて何も知りませんよ」

そういえば、学習電波の電脳で、ロックがボクのコトをスバルと呼んでいたような気がする。スルーしてたけど、もしかして覚えていたとか?

「スバル、もう帰つていいぞ。あとは二人で話をしておく」

「困りますな、先生…… (いや、反感を持たれてもマズイ。ここは引くべきだな) まあ、いいでしょう。今日はこの辺にさせていただきます。スバル君、時間を取らせて悪かったね。近いうちにまた会おう……」

こんなオッサンに運命を感じることは、流石のボクにも出来ないよ。



「ええ、さようなら」

なるべく余裕を見せるように、悠々と退出する。何だかラスボスっぽい言動をしているような気がするな。

「あのオツサン、オレたちFM星人のことを知っていやがったな……あの様子だと、今後もしつこく付きまどつてきやがるぜ？」

「コロコロしちゃう？」

そのメンポには、『警』『殺』！そう、彼はポリススレイヤーだったのだ！

「流星に飛躍し過ぎだ！」

「ありや、やっぱり？」

「ですよねーつと、そろそろ教室に戻って帰る準備しに行くよ」

「ハイハイ、何だかどうでもよくなってきちまったぜ」

「ああ、ロツクが思考を放棄してる……！」

「1-5-A教室」

「ほい。準備終了。」

「もう先生の話は終わったの？」

「ありや、委員長。まだ帰ってなかつたのか。もつと強く帰すよう促したほうがよかつたかな？ いや、急に帰れって言い出したら不自然だし……」

「先生の話、何だったの?」

いやに食い付いてくるな……

「そうだね……ま、近況というか、クラスの雰囲気というか……色々聞かれたってことで」

「ことであつて……まあ、いいわ。ゴホン! え、えつと……今は一緒に登校したりしてるけど……その、これからもワタシたちと一緒に行動してもいいのよ? どう? 嬉しいでしょ? 嬉しいって言いなさいよ!」

凄くテンパっているように見える。

「えつと、元々そのつもりだったんだけど……」

「ホント!?!」

凄い笑みだ。キラキラしてる。星が舞っているような高揚を委員長表情から感じる。踊りだしそうだ。

「じゃ、じゃあ! ブラザーバンド、結ばない!?! ワタシたちの繋がりを深めるために、必須だわ!」

キラキラしてた瞳がギラギラしているように感じるのは何故だろう。ボク草食系だから、肉食動物の気持ちなんてわからないよ。

「だが、断る!」

「エエッ!? 何で!？」

この星河スバルが最も好きなことの一つは……じゃなくて! ミソラちゃんに相談しない……勝手にブラザー増やしたら怒りそうだし。

「いや、実はボクには一人、ブラザーがいて……結構深い仲だから、勝手にブラザーバンド結んだら拗ねそうなんだよね」

「そ、その子って……」

ーガラッ!

委員長の声を遮るように、教室のドアが開いた。ドアから入ってきたのは……やはりゴン太とキザマロ……の偽物だ。こうして見るとそっくりだけどね。

「いきなりドアを開けるなんて、ビックリするじゃない! ところでアナタたち、算数ドリルはどうしたの?」

委員長が二人に語気荒く問いたです。なんだかやけに機嫌悪くない?

「……………」

「……………」

「こんなに早く算数ドリルが終わるわけないわ……アナタたちサボってきたんでしよう!!」

「……………」

「……………」

目標、完全に沈黙しています！

「黙ってないで、何か言ったらどうなの？ 凶星を突かれて何も言えないワケ？」

「チイツ、厄介なヤツらが来やがったぜ」

「ロツクの中では厄介なヤツ認定なワケ？」

「馬鹿、厄介つてのはそういう意味じゃねえよ！」

あれ、ロツクにはもうわかっているのか。電波体だからね。

「ジエミミミ……ミギヤー!!」

「ミギヤギヤギヤー!!」

パターン青、敵です！二人の偽装を解いた、デンジハ人間が割とゆっくりボクたちに襲いかかってくる。その姿は紫色のゲンガーといったところか。目の色が一色なので、あまり知性は感じないけれど。

フツ、トラツクから逃げ切ったボクに死角はない。

「キ、キャアーツ!!」

『ジエミ、ジエミ!!』

「ゴ、ゴン太とキザマロが、かかかか、怪物につ！」

「この教室から出るよ、委員長！」

『ケツケツケツケ！ピンチ到来だな、星河スバル！』

落ちていてビジュライザーをかける。ええっと確か……

『ケケケツ！こつちだこつち！』

ウェーブロードの上に立つあのフォルム。間違いない、ヤツだ。氷漬けにしたハズなんだけどな……

『久しぶりだな！そいつらはオレが作り出したデンジハ人間だ！知能は低いが、そいつらの放つ電磁波に長時間触れ続けると人間でもオダブツだぜ！大人しく『アンドロメダのカギ』を渡すのならば、命だけは助けてやろう。拒否するのであれば、その娘共々あの世に行ってもらうぜ！』

ぶつちやけ『アンドロメダのカギ』って、渡しても問題なくない？アンドロメダをデリートすればいいだけだし。今の戦力で出来ないとも思えないんだよね。後は宇宙ステーションに飛ぶ設備さえあればね。

「ちよつとアナタ、さつきからどつちの方向見てるのよ！」

そりゃ、唐突に教室の上を向いたら怪しむか。

『そうか、『アンドロメダのカギ』を手放す気はないようだな！いいだろう……ならば力づくで奪わせてもらうぜ！いけ！デンジハ人間ども！』

例のジャミンガーの指示に従って、デンジハ人間たちがこちらに向かってくる。遅

い。

「ヤダッ！アイツらが動き出したわよ!？」

「逃げるよ……学校の外へ！委員長！」

「ハ、ハイ！」

「走ってドアから脱出を！」

委員長の後ろを走って教室から出る。まずは1階に行かないと……

——コダマ小学校・玄関——

「シッ！止まって、委員長」

やっぱりいたか……。

「急に何よ！」

その問いには答えず、玄関出入口の方を指でさす。

「さっきの、おかしなヤツ……」

なるべく多くのデンジハ人間の場所を、探っておかないと。それに、そろそろ……

「(取り敢えず戻って様子を見に行こうか)」

「(……アナタがそう言うなら)」

よし、決まり。取り敢えずは時間稼ぎかな。

——コダマ小学校・1階廊下——

「さて、何とか気づかれずにここまで戻ってこれたけど……」

「早くエレベーターで2階に上がりましょう!」

待てよ、確かこのエレベーターには……

「ねえ、スバルくん。アナタさっきのヤツ、もしかして知っているんじゃないかって?」

「知らないさ。200年くらい前のゲームのキャラクターにあんなのがいたような気がするけど……」

ゲンガーである。

「それはちよつと参考にならないわね……ああ、こんなとき一緒にいるのがロックマン様だったら……」

キミが近くにいるから変身出来ないんだけどね。

ボクがロックマンだと今知るのは、委員長のためにならないだろうし。変に心に余裕が出来てしまったら、委員長の両親を説得出来るかどうか……

「ボクだって、ちゃんと守るさ」

あんまり生身では頼りにならないかもしれないけどね。

「フフツ、期待しておくわ……」

ーピンポーン!

「一応、警戒しておいて……」

「どうして?」

いや、多分デンジハ人間乗ってるし……

『ジエミミミ!!』

ほら、やっぱり。この辺はタイミングをずらしてもしようがなさそうだ。というか、エレベーターだと逃げ場がない。

「……近くの教室に!」

「え?!あ、うん……」

一番近い教室は……1—B教室か!

1—1—B教室——

『ジエミツ!!ジエミミツ……!!ジエミミミ……』

コイツらはジエミミミしか言えんのか!

「よし、行つたね。ケガはない?」

「ええ、大丈夫よ。それにしても、まったく何匹いるのよ、あの怪物は……このままじゃ遅かれ早かれ捕まってしまうわ……」

「(オイ、そのオナナの言う通り、逃げ回ってるだけじゃどうしようもないぜ。あのジャミンガーをブツ倒さない限り、ここからは出られないな)」

わかつてるよ。そろそろ来るハズなんだけど……



「わかってる。ここはボクの設定を利用するしかないね」

「(設定を利用だあ?)」

そう、こんなときに便利な設定がボクにはある……

「アイツらは、ボクが何とかする。キミはここで待っていて。いいね? あ、一人で寂しいって言うのなら……」

「バ、バカじゃないの!? どうするって言うのよ!」

心配してくれるのは、嬉しいけどね。

「大丈夫。ボクはバトル用のナビを持つてるからね。見たところあの変な怪物は電波で体が構成されている……つまり、どこかの電脳に誘い込めば何とか出来るかもしれないんだ。確率は低そうだけどね」

「け、けど、危ないわよ!」

「助けを求めている声を放っておくことなんて、出来ない。守りきってみせるよ、絶対に。……なんてちよつとくさいセリフだったかな?」

まさにピッタリな使用タイミングだと思うんだけど。

「今そんなこと言ってる場合じゃないでしょう! (こんなときにドキドキさせるようなセリフ吐かないでよ、まったく……)」

「心配しないで、いい? ここで待っていてね。直ぐに戻ってくるから……」

よし、ウエーブインからのサーチ&デストロイだ！

メールも来たし、大丈夫。委員長は守りきれる！

——1階廊下——

ウエーブホールは……あつた！

「よし、行くよロック！」

「おうよ！」

電波変換！星河スバル、オン・エア！

——1階廊下のウエーブロード——

「よし、5—Aのウエーブロード上にいたジャミンガーをぶつ飛ばしにいくぞ！」

「オツケー！いくよロック！」

——2階・5—Aのウエーブロード——

やっぱりいいないか。と、なると委員長の方へ……

「いないね」

「まんまと裏をかかれたな。ヤツは多分、あのオンナのところだろうよ。しかし、アイツには同情するぜ……」

ホントにね……

「よし、急ごう！」

——B教室のウエーブロードー

「ギャアアアアツツ!!」

そりゃ、そうだよね……

「あ、スバルくん?こっちはもう終わりそうだよ!」

ストリングを煌めかせながら笑うと寒気が走るのは何故だろう……

「あ、うん。委員長を守ってくれてありがとう、ミソラちゃん」

「いいんだって!それに……この前、スバルくんを殺しかけたのって、コイツなんでしょ?ワタシ、張り切っちゃうよー!!」

ウエーブロードの下で、委員長は不安気にボクを待っているのが見える。よかった。電波化は防げたか……

「ク、クソツ!あのムスメと『アンドロメダのカギ』を交換するハズだったのに……!」  
残念!読みきってましたア!放送室に行く前に呼んだのは、ミソラちゃんだったので  
す!

「よし、ここで倒す!」

「りよーかい!」

「クソツ!ハープ……裏切りモノめ……!」

行くよ!ウエーブバトル、ライドオン!

——B教室のウエーブロードー

既にミソラちゃん、もといハープ・ノートによってポロポロになっているジャミンガーを始末することは、人数差から見ても難しいってワケじゃない。だから、今回のバトルはボクとミソラちゃんのコンビネーションを実戦で試す絶好の機会ということになる。

「ハープ・ノートは援護をよろしく！」

「もちろん！あ、これってもしかして、スバルくんとの共同作業……」

A. 違います。

「早速スターフォースを全開だアツ！」

「行くぜエツ!!」

これで飛行が可能。空と地からの同時攻撃に晒される恐怖を思いしれ！というか、また水像オチになりそう。今回はトドメさすけど。

「チッ！」

やはり人数差で不利を悟ったのか、右腕のジャミングマシンガンでボクに牽制射撃を

撃ち込みながら、射軸が重なるように位置取りを続ける。恐らく隙を見てウエーブアウトする腹積もりなんだろう。

まあ、脅威的には正解なんだけど、キミはさつきまで自分をボコっていたハーブ・ノートを軽視し過ぎじゃない？

「それっ！」

ハーブ・ノートがウエーブロード上に発生させたスピーカー、もといアンプから音符型のシヨックノートをジャミンガーに発射する。先の戦闘で辺りには既に、いくつかのアンプが設置されていた。ぶっちゃけボク要らないんだけどね。

「ウグッ！……クソッ！汚いぞ！」

「委員長を人質に取ろうとしたくせに、どの口が言うんだ！」

まったく、都合の悪い時だけそんなことをっ！

「ロック！」

「ハッ！わかつてるぜ……ウオオオリヤアアア!!」

ウエーブロードの上を滑るように飛び、ウオーロックアタックの時だけウエーブロードに足をつける。ウオーロックアタックの突進には、足場が必要なんだ。

そしてお馴染みリウエンザン！コイツは痛いよ！

「ク、クソッ！受け止めてやる！」

腕を交差させ、ガードの構えだ。アイスペガサスの出力なら正面突破出来るんだけど、今は二人で戦ってるからね。相方を利用しない手はないよ。

「ハープ・ノート！」

「任せて！」

ハープ・ノートがマシンガンストリングをジャミンガーの足に発射する。ガード不可のストリングは、ジャミンガーの足に絡まり、脱出を不可能にしていた。

「ナイスアシスト！……いくぞー！」

「ウ、ウワアツ！オレの側に近寄るなアツ！！」

ディアポロ乙。戦闘中なのに、吹き出しそうになったのはしょうがない。

「セエエエイツ！！」

瞬間移動に近いスピードで接近し、そのまま下半身を切り裂く。直ぐ様飛び立ち、離脱する。さて、アレを使ってみるか。

「ブルルルルツ！！」

オックス・ファイアのメガクラスカードだ！ブルルルルツ！！しか言えなくなるけど。

「スバルくん!?!」

ミソラちゃんが驚愕しているのが目に入る。いきなりデカくなったんだから、しょうがないね。

「ブルルルアアアツ!!!」

腕に力を集約し、一気に振り切る！普通だったら、当たった箇所が吹き飛ぶレベルの一撃だ。

「ゴハアツ！」

「……フウーツ！トドメだ！」

オックス・ファイアの展開を解除し、満身創痍のジャミンガーに向けてトドメのレーダーミサイルを放つ。フツ、汚い火花だ……！

「ウガガガガ……クソ、もう少しだったのに……ジエミニ様……申し訳……ありま……せ……グワーーーツツ!!」

ふう、やったぜ。

「ジエミニ……双子座のFM星人？」

2対1とか反則だとボクは思うのです。(ブーメラン) しかも同一のFM星人だからコンビネーションもピッタリだ。

「なるほどな、ジエミニのヤツが裏で糸を引いてやがったか。何を考えているかわからねえ厄介なヤツだ」

「アイツはハーブ・ノートのストリングに引かれてたけどね」

「ガハハハ！ザマアねえぜ！」

あ、そうだ。今回は別に電波化してないし、普通に家に送ったほうがいいのかな？

『この部屋から、強いゼット波が出ておるぞ!』

「ゲツ! 五陽田さんだ! 早く現実世界に戻らなきゃ……」

「スバルくんは、この後どうするの?」

あー、そうか。別にミソラちゃんの力を借りなくても送ることは出来るからね。

「えーつと、委員長を家まで送ってから帰るつもりだけど……」

大丈夫、だよね……?」

「ふーん……まあ、いいよ。多分ワタシたちが原因なんですよ? さっきの敵って」

「うん、そうみたいなんだ。『アンドロメダのカギ』を狙ってた」

「巻き込んだじゃったなら、ワタシから文句を言うことは出来ないよ。……じゃあ、言いた

いこともあるから、スバルくんの家の前で待つてるね」

な、なんとか誤魔化せたか……」

ーコダマタウン・高級マンション前ー

申し訳なさそうに渋る委員長を説き伏せ、やってきたのはコダマタウンにそびえる高級マンションだ。

ここが委員長の家があるマンションか。のどかな雰囲気のあるコダマタウンにおい



ては、結構異質に思えるのはボクだけだろうか。

「その……スバルくん？ わざわざ送ってくれなくても、良かったのよ？」

何だか申し訳なさそうだ。

「いいんだよ。委員長、かなり不安定に見えたから。このまま帰すとなんだか危険に感じたんだ。ボクの自己満足だから、気にしないで」

「じゃ、ワタシ、〇〇〇〇号室だから……」

何と、思わぬところで委員長の住所を知ってしまった。

「それはもしかして、何時でも来ていいよってこと？」

「え？ あつ、ち、違うわよ！」

「ゴメン、冗談だよ。親御さんにも迷惑かけそうだからね」

あつ、しまった。委員長の両親は……

「それは問題ないわ。ウチはパパもママもママも仕事で忙しくて、ほとんどウチに来ないの。幼稚園の頃から、ウチじゃ一人ぼっちよ……」

哀愁を漂わせ家庭事情を語る委員長。いや、これは諦感？

「それは……」

「もう、慣れちゃったけどね」

「じゃあ、今度遊びに行ってもいい？」

「だから何でそうなるのよ……家に二人きりとか、そんなの……」

「ごもる委員長。何だか今日はしおらしいな。」

「さて、それじゃボクも用事があるから。また明日、じゃあね委員長」

「ええ、また明日……あ、あの、さっきのアナタ、中々カッコよかったわよ……ロックマン様には及ばないけどね！でも、アリガト」

ポカーン。いや、お礼を言ってるのか。ロックマンはボクだから、一生及んでも越えることはないけどね。

「な、何ニヤニヤしてるのよ……気をつけて、帰りなさいよね！」

赤面した委員長を尻目に、ボクは悠々と家に帰った。ほ、星河スバルはクールに去るぜ……

――星河家前――

委員長をマンションまで送った後に家に戻ると、その近くで待っていてくれていたミソラちゃんを発見出来た。辺りは薄暗くなっていて、小学生が出歩くには少し遅いだろうか、という時間だ。

「ミソラちゃん、今日はありがとね。とても助かったよ。どうしても人が足りなくて……キミが来なかったら、どうなってたか……」

「いーのいーの！ワタシたちブラザーでしょ？それにスバルくんのためなら、光の早さ

で助けにいくんだから！ね、ハープ？」

「ねーっ！」

「チツ、すっかりこっちの暮らしに馴染んでやがる。オイ、ミソラとかいうオンナ。ソイツは何時裏切るかわからねえからな、気をつけることだ」

「何だか最近、ハープがミソラちゃんに毒されてきているような。……女子のノリつてよくわかんないよ。」

「ま、ちよつと過剰な気もするけど、とても助かるよ。」

「シマーツ、失礼しちゃうわね！ワタシはミソラとこの星が気に入ってるの。FMプラネットに戻るつもりもないわ！」

「意外とミソラちゃんとハープの相性はよかったらしい。知ってたけど。」

「そっか……仲がいいようで良かったよ」

「ふふん！あ、そうだ。今度の日曜日って空いてる？」

「あ、この前の埋め合わせか。」

「うん、空いてるよ」

「えっと、それじゃあ、お買い物に付き合ってくれない!? ヤシブタウンにある、103デパートに行こうと思ってるんだけど……ど、どう？」

「ヤシブタウンねえ……今度『危ない暴れん坊ウルトラ大將軍The Movie』が

上映されるから見に行ってみようかな……確か映画館もあったはずだし。

「もちろん！ミソラちゃんには結構迷惑かけちゃったからね……それくらい、付き合う  
さ」

「むーっ、結構反応が慣れてるね。……もしかして、誰か他のオンナノコと行ったことがある、とか？」

そしてダークオーラを纏うミソラちゃん。

ええ!?!心外だよ！

「そんなことないって！ミソラちゃん以外に誘われたこともないし、多分これからも誘  
われないよ！」

ちよつとオーバーな気もするけど、これくらい言わなきゃ納得してくれないだろう  
ね。

「……ふふっ。ワタシはね、初めてなんだよ？」

何やらイケない波動を感じる。頬が熱い。このボクが照れている、だと……!?!

「なーに二人して赤くなってやがるんだ？」

「ガサツな貴方にはわからないかもしれないけど、これが地球人の言う青春なのよ！」

「ふーん、青春ねえ……そういやあのオンナともスバルのヤツ、こんな感じのやりと「そ  
れ以上はいけない！」……なんだよ、スバル」

ロックめ！なんという恐ろしいことを！

「ふふふつ、それでねえ……」

よかつた。自分の世界に入っていたようだ。い、命拾いしたような気がするぞ……！

「あ、それじゃ次の日曜日、朝10時にヤシブタウンの忠犬バチ公像の前で待ち合わせね  
！」

「うん、大丈夫」

「遅れちゃダメなんだからね……」

もうスバル君のライフはゼロよっ!!

「う、うん。わかってるよ……」

「ふふつ、じゃねー!」

「じゃ、じゃあね……」

そう言つて元氣よくミソラちゃんは行つてしまった。だ、大丈夫か、ボク……？

『スバルもスミにおけないわね〜』

この、玄関から聞こえる声は……

「あんなカワイイ子にデートに誘われるなんて、中々やるじゃない!」

あ、あかねさん。聞かれたね、これは。

「彼女、ボクのブラザーなんだ。だ、だから、普通だと思ふよ……?」

「母さんは騙されないわよ？ 彼女、今度母さんに紹介しなさいよね」

「ま、またの機会に検討させていただきます……」

「あら、スバル。恥ずかしがつちやって……まあ、いいわ。後でじっくり聞いちやうわよ  
〜?」

「ゲエツ！ やめてくださいなんでもしますから！」

「もう疲れちゃったよ、今日は」

「お疲れ様、ウフフ……」

意味深な微笑みはやめてエツ！

## 34

——その日の夜・白金家——

騒動のあった夜、白金ルナが寝静まった頃を見計らって、娘の身を案じる両親は話し合っていた。

「ルナのことだが、また何かトラブルに巻き込まれたらしいな。この忙しい時期に……やはりあのような公立の小学校に通わせたのが間違이었다ようだ」

「そうね……やっぱり育ちの悪い友達と一緒にいると、ルナにも悪い影響があるかもしれないわね……」

「ああ、このままコダマ小学校に通い続けてまたおかしな事件に巻き込まれたら、ルナの経歴にキズがついてしまうかもしれない」

「ええ……早いウチに私立の小学校へ転校させたほうがいいかもしれないわ」

「そうだな、来週の月曜日にも学校に行つて転校の話をするか。どこか全寮制の躰の厳しい小学校に転校させよう。ルナにはエリートコースを歩んでもらわなくてはな」

「そうね、いい学校に入つて一流の企業に就職するのが、幸せになるための最短ルートなものね……ワタシは転校先の小学校を探してみるわ」

「そうか、頼んだぞ……あ、そうだ。仕事の話で悪いんだが、今回の催しものの会場についてだが……あそこのレイアウト、もう少し奥に寄せればいいと思うんだが、どうだろう？」

「そうね、あそこはそうしましょうか。だとすれば、あの木のオブジェはもつと手前がいわい」

「そうだな……」

委員長……白金ルナの両親は娘のことを思つての会話であつたが、それを娘が聞いているなどとは、露ほども思つていなかったのだ。故に、白金ルナにより大きなショックを与えることになつてしまった。

「て、転校……ワ、ワタシが……？」

二人が話している部屋の外で彼女は、体を掻き抱いて震えていた。幼い頃と同じように、たった一人で……

——日曜日・白金家——

「さて、今日は何をして過ごそうかしら……」

パパとママの話の聞いてから、数日。ワタシはある種の諦めと、それを諦めきれない反感に思考を支配されていた。

反感と言っても、僅かな二人との時間でそれを表に出したりはしない。こんなこと、



ワタシが幼かった頃からの慣れっこというものだ。そう、慣れて、しまったのだ。……時々、こんなワタシが嫌になる。学校でみんなに見せている、気丈で頼れる委員長のとやらを、あの二人に出せないワタシの情けなさが。

「そうだ、ゴン太とキザマロでも呼んでやろうかしら。どうせ来週には、何処か全寮制の私立小学校に転校だしね……グスツ」

そうだ、あの二人にも会えなくなる。頼りないし、イライラさせられることも多いけれど、両親を除けば一番長い付き合いでもある。それに、スバルくんとも……。

ああ、胸が痛い。キリキリ締め付けられて、今にも決壊するダムのような不安定さを感じる。

「さ、ゴン太にでも電話しようかしら」

一頻り胸の痛みをこらえ、何とかいつものワタシを彼らに見せられる自信が出来た頃、ワタシはゴン太に電話をかけることにした。

「ゴン太の番号は……これね」

ピポ。パポ。ピつと、何処か前時代的な音が鳴り、数秒後。眠そうな欠伸とともにゴン太が電話に出た。

「ファ……もしもし、あつー！いいんちよう！どうしたんだよ、こんな朝早くから」

随分リラックスした声だ。ワタシは、震えそうな声を必死に押さえているというの

に。八つ当たりとわかっていても、腹が立ってくる。ワタシは！来週には……

「アナタ、今日ヒマでしょ？キザマロを連れてウチに来なさいよ」

ついでにスバル君も呼んであげようかしら。ゴン太とキザマロ、きつと驚くでしょうね。フツツ、何だかちよつとだけ元気が出てきたわ。しかし、ゴン太から聞こえてきたのは、信じられない言葉だった。

「ええつ、今日？ちよつと無理だよ!!今日はこれから母ちゃんと船上タコヤキパーティーに行くんだ」

船上、タコヤキパーティー？何よ、それ。

「何よ、船上タコヤキパーティーって！ワタシの誘いより、タコヤキの方が大事なの!」  
「そ、そんなムチャな！半年前からヨヤクしてたんだぜ！そ、そうだ、来週なら何時でも空いてるけど……」

「もういいわ、アナタには頼まないわよ！精々タコヤキを頼張つてなさい！」

多分、今のワタシの声は情けないくらい震えていると思う。そんな声をこれ以上聞かせたくなくて。ゴン太の態度に激情を押しさえきれなくて。

「あ、ちよつと、いいんち……」

ーブツツ!

通話を切った。何だか気持ちが悪い。

ワタシたちはブラザーバンドで繋がっているハズなのに、今はこんなにも遠く感じる。ああ、胸が痛い。

「バカなゴン太……来週なんて遊べるかどうかわからないのに……次は、キザマロよ」  
ピツピツピツと……再び数秒後。キザマロが通話に応じてきた。流星にこの時間には、起きているらしい。

「もしもし……あ、委員長？どうしたんですか？」

ゴン太と同じような、のんびりとした声。きつとワタシが今どんな状況かなんて、考えてもいないんだろう。

「キザマロ、アナタ今日ヒマでしょ？ウチに遊びに来なさいよ」

仕方がない。キザマロとスバルくんだけでもいいだろう。ゴン太には夜に電話をして、少し話でもしておこうか。あのゴン太に限ってワタシの転校を悟るなんてコトはないでしょうし。

「あ、あの……申し訳ないんですけど、今日はこれから身長伸び伸びセミナーに出席しますんで……あ、そうです。ゴン太くんを誘ってはどうかでしょうか？」

キザマロに関してはもう諦めなさいと言いたいところだけど、本人にとっては大きなコンプレックスだ。努力を邪魔するつもりはない。……けれど！

「わかったわよ！もう、結構よ！背が伸びるといいわね！」

ーブツツ!

もう知らないわ!

「何よ、ドイツもコイツも……そうだわ。スバルくんだけでも、誘いに行きましようか。きつと泣いて喜ぶに違いないわ……グスツ」

スバルくんとはまだブラザーバンドを結んでいないから、通話をする事が出来ない。番号も知らないし……

でも、とても楽しみだ。フフツ、ちよつと違うけど、最後の晚餐つてヤツなのかしらね?

ー星河家前ー

つ、遂にスバルくんの家まで来てしまった。

「よし、チャイムを押すわよ……」

なんだろう。ドキドキする。顔が赤い。動悸が早い。ソワソワする。指が震えてきた。頭がカーツとする。

ホントにどうしたんだろう。こんなのドラマで見たヒロインが好きなのに……い、いえ、何を考えているのかしら、ワタシは。

「ば、バカバカしい! 毎朝来てるじゃないの……押すわよ」

情けない自分の背中を押すように眩き、インターフォンに手をかける。何だかフワフ

ワするような気分で、ワタシはインターフォンを押しかけて……

「母さん、行つてきます！」

え？

「えっ？」

ま、マズイ。何がマズイのかわからないけど、今はマズイ。

というか、スバルくんにも用事があったんだ。

ばか。ドキドキを返せ。いや、違う。隠れないと！

「遅れちゃダメよー!!」

あ、おぼさまの声がする。

「わかつてるよー!!」

ーガチャツ！

玄関が開いた音だ。ワタシはスバルくんの死角から出て頃合いを見計らい、目で追う。ゆっくり歩いていられるらしく、ワタシでも追い付ける。

「外出する予定があつたのね……」

何処に行くのかしら。……気になるわ。あ、もしかしてブラザーの人に会いに行くのかしら。話を通す……といったところでしょうね。

「では、追いましょうか……」

誰に話すでもなく、行動を口に出す。急がないと、見失ってしまう。

ーバス停ー

スバルくんが乗ったバスの時間と時刻表からヤシブタウンに行ったのだと推測する。あそこには確か、シヨツピングセンターがあつたハズ。男の子がわざわざシヨツピングセンターでシヨツピング？

何かがおかしいような気がする。別にあそこじゃなくても、コダマタウンの近くに品揃えの良い店はある。なのにわざわざヤシブタウンに足を運ぶとすれば、それは……

「(会っているところを、学校の人に見られなくない？もしくは、シヨツピングが好きな……女の子)」

なんだろう。モヤモヤする。いや、三年も引きこもりだったスバルくんに限ってそんなこと、あるハズが……

「(しかし、スバルくんは客観的に見ても美男子に入る。ツカサくんに近い、優しげな顔が女の子にウケる可能性は捨てきれない)」

何でこんなに真剣にスバルくんのことを考えているのかしら？ああ、このことは後回し！とにかく追わないと！

ーヤシブタウンー

あかねさんに見送られ、遂にヤシブタウンにたどり着いたボク。行きのバスに委員長長

は乗っていないから、きつと次のバス辺りで来るのだろう。委員長の問題を解決するためには、委員長自身の声をはっきりご両親に言つてやるのが大切だから、あんまり干渉は出来ない。

ま、小学生同士なんだから、気を楽しんでデートを楽しんでいこうか。

「さ、頑張れ星河スバル!」

「(何だ?自分で頬を叩いたりして)」

「(己を鼓舞してるんだよ)」

「(地球人の習性はわからないぜ)」

気合いつて大事だと思うんだよ。

ーヤシブタウン・バチ公像前ー

「あつ、ミソラちゃん!ごめん。待たせちゃったね」

「ううん、ワタシも今来たトコ。それじゃ行こつか、103デパート!」

「うん。荷物持ちは任せてよ!」

「それじゃあ、頼りにしちやおつかなく?」

イタズラを思い付いたような顔で冗談のように言う。ま、まさかそんなに買わないで

すよね……?」

「アハハ……じゃあ、行こうか」

「エへへ……うんー」

ボクたちは連れだつて103デパートへの道を進んだ。

近い、近いですよ、ミソラさん。

ーヤシブタウン・スバルたちが行つた後ー

驚愕を押さえられない。

「今のは、響ミソラ……?」

ま、まさかスバルくんのブラザーというのは……

「この際、小さなプライドは捨てる!見つかからないように後をつけてやるんだから!」

このままじゃ、この白金ルナは終われない!絶対に真相を突き止めてやるんだから!

ー103デパートー

103デパートの中は結構広く、オープンな感じだ。来る途中に映画館があるのも確認している。今度ボク一人で来てみようかな……

「見て見て!ステキな服ね!ワタシももう少し大人になったらこんなを着たいなあ!」

「ミソラちゃんは素材がいいから何でも似合うと思うけど、やっぱりこういう明るい服が似合うね」

「そう!?!じゃあ、こんな服を着れるようになったら、一番に見せてあげる!」



今日も元気澆刺なミソラちゃんが眩しいです。

しかし、ここからだ。女の子のショッピングの長さを舐めてはいけない……！

「あ、このアクセサリー、ステキね！」

なるほど……星を象ったペンダントみたいなヤツだね。

「へえ……良くできてる」

「でしょ!? お揃いで付けたら……エへへ……！」

はい、星を象ったペンダント2つ、お買い上げです！

「すいません。これ下さい」

「ハイ、2つで20000ゼニーです」

高ッ！ いや余裕で買えるけども……

「ダメだよ、スバルくん。お揃いなんだから、一緒に買ったのに……」

いや、ミソラちゃんにお金出させるとか、クズ過ぎるから！ しかし、通信機のペンダントと被つちゃうな……

普段は服の下に入れておくか。

「いいの、いいの。お礼だよ。キミが連れ出してくれなかったら、こんな場所来なかったと思うしね。こういう場所って、中々来づらくて……」

もちろん嘘だ。後で映画を観に、一人で来る予定である。

「フフフツ、ありがとう。大事にするからね」

「アハハ……」

「さっ！あっちのお店も見に行こうよ！」

戦いはまだ、始まったばかりだ。

「(クツクツク……こりや、一日中引つ張り回されるな……精々頑張ることだぜ！)」

「(ロックもトランサーの中で結果的に付き合うことになるの、わかっている?)」

「(……寝てるか)」

き、汚い！

「スバルくん、早くおいでよー！カワイイバッグを見つけたよー！」

「ハイ……」

「ねえ、見て！このバッグ、カワイイよね?！」

「ミソラちゃんに、ニアツテルヨ」

だ、段々機械的になってきたような気がする……

ー1103デパート・少し離れたショッピンングエリアー

み、見誤っていた！これは……紛れもない、デートだ！

「スバルくんの癖に、生意気じゃない……！」

とても、嫌な気持ち。今すぐあの二人に割って入ってやりたいけれど、それをやった

らスバルさんに嫌われる、かも。なんでこんな不確かなコトで怯んでいるのだろう。ワタシ、こんなに脆かったっけ？

ーピーンポンパンポーン！

『お客様にお知らせいたします。ただ今、当店屋上にて、亜熱帯のジャングル展を開催しております。ジャングルに生息するさまざまな蛇がご覧いただけます。皆様お誘いあわせのうえ、当店屋上のイベント会場へお越しくださいませ』

ーピーンポンパンポーン！

「亜熱帯ジャングル展……確か、パパとママが中心になって取り仕切っているイベントだわ……」

どうしようかしら。見つかったら、きつと小言を言われるだけじゃ済まないだろう。リスキーだ。しかし……

『ジャングル展だつて！ちよつと面白そうじゃない？行ってみようよ！ね!』  
『いいよ、ボク蛇には結構興味あるんだ』

ま、まさかイベント会場に行くつもりなの……？これでパパとママに出会う可能性は上がってしまった。いえ、取り仕切っていると云つても、常にいるとは限らないハズ。ここは……賭けに、出るしかないわね。

「……こつそり、つけてやるわ！」

ーイイベント会場『亜熱帯の館』ー

103デパートの屋上には、その1/3程のスペースを使い中々立派な建物が出来ていた。外壁には、青いカエルと赤い魚が描かれており、背景色の濃緑と相まって異質な空間と化しているのは、製作者の狙いなのだろうか。ボクにそういったセンスがないことはわかっているから、どう判断したものかわからない。

「ここがジャングル展……」

なるほど、中は結構暗くなっているんだね。入り口の案内を見たところ、正式名称は『亜熱帯の館』と言うらしい。亜熱帯か……なるほど、何となくジメジメしているのも納得というわけだね。正直結構不快な湿度なんだけど、ミソラちゃんは平気そうだ。女の子。パネエ。

「『亜熱帯の館へようこそ！ここには世界各地の珍しい蛇をたくさん集めました。蛇はみんな獯猛で危険ですので、触ったりエサをあげたりしないでください』だって。ここ、本物の蛇がいるんだね……」

と、いかか柵もないのが気になる。危ないでしょう？何か起きたらどうするつもりだったんだろう。

「ミソラちゃんは蛇、ダメなの？」

「ワタシ、爬虫類は大丈夫なほうだけど、これだけたくさんいたらちよつと怖いな……」

「ここで袖を握ってくるのは狙っているのでしょうか。  
あ、あざとい。」

「ま、まあ、ゆっくり見ていこうか」

「うん！」

——十分後——

「へえ、オオマダラ・アナコンダっていうんだ、このへび。世界最大クラスの大きさを誇っていて、人でも丸飲みに来るらしいよ……」

「……………」

無言で腕に抱きつくのは止めて頂きたい。

「レプリカだから！別に襲ってきたりはしないよ？」

「……………うん」

あ、ウェーブイン用の小さなウェーブホールがある。確か今は通行禁止になってるんだっけ？

「でも本物の蛇も結構いるんだよね。さつき会った蛇博士なんか、凄い詳しくったなあ

……………」

ホントビックリした。この世界の蛇ヤバすぎでしょう。

絶対に王蛇とかいたはず。イライラするんだよ……………！

——五分後——

「フウ、いろいろな見て回って、ちよつと疲れちゃったね。少し休憩しない？」

「おお、渡りに船ってヤツだね。もうクタクタだよ……」

「うん、そうしようか」

「よし、決まり！それじゃ外に出よつか！この近くにお洒落なカフェがあるんだ」

「あれ？確かここで委員長が……」

「カフェ？ああ、103デパートの近くにあったカフェのこと？ボクカフェなんて行ったことないなあ……」

「うーん、ボクが一人、カフェで休憩しているイメージを思い浮かべる。……イツツ、シユール！」

「フフツ、ワタシについてきたら大丈夫だって！さ、行きましょ！」

——亜熱帯の館・白金ルナ視点——

「マズイ。こつちに来た。偶然を装って挨拶をする？いや、スバルくんはともかく、響ミソラの方は何か勘づきそうな気がする。女の勘だ。間違いない。」

「（取り敢えず、逃げないと……）あつ」

「……しまった。パパとママが此方に向かってくる。既に見られてしまったようで、今更逃げて後で追及されるだろう。何より、体が動かない。蛇睨みをくらって、金縛り

にでもあつたかのようだ。

「ルナ、こんなところで何をしているんだ？」

パパが咎めるような口調で話しかけてくる。どうしよう、何か、何か言い訳を……

「あの……そ、その……」

言葉が上手く紡げない。完全に借りてきた猫のような状態だ。

「どうしたの、はつきりおっしやい？」

ママ、これは、ええつと……

「そ、その……」

『スバルくん、早く行こうよ！』

あ、スバルくんたちも来る……

「あ、委員長。奇遇だね、こんなところで」

不思議そうな顔をするスバルくん。まさか追跡されていたなんて、思いもしなかった

でしょうね。

「ええ。き、奇遇ね、スバルくん……」

「ルナ、この子たちは？」

絞り出すように返事をしたワタシにパパが関係を聞いてくる。ワタシだって二人の

関係、知りたいわよ！

「お、同じクラスのスバルくん、と」

「その友達の響ミソラです」

ワタシの言葉を引き継ぐように、彼女……響ミソラが自己紹介をする。

「フン、小学生のクセに大人気取りでデートかね？ 感心できんな……大人の真似事をする暇があるのなら、より優秀な大人になるために、もっと勉強するべきだと思うがね」

響ミソラが眉をひそめ、反論しようとするのを制し、スバルくんが口を開いた。

「ボクは小学生の学習内容は全て自宅で学習しましたし、彼女はミュージシャンでもあります。多くのモノに触れて、より良いモノを生み出そうとすることは、おかしいですか？ 貴方たちだって、外部からインスピレーションを得たりしますよね？」

スバルくんが、庇ってくれている？ いや、連れの彼女を貶されたとか、そんな理由だろう。でも、嬉しい。そしてちよつと羨ましい。ワタシには、パパとママに反抗するなんて、できっこないから。

「それを語るには、キミはまだ幼すぎる。せめて社会の荒波に揉まれてからでないとな。言葉に重みが足りんよ」

「そうね、こんな子たちが周りにいたのでは、ルナに悪い影響が出てしまうわ。転校の手続きを急いで済ませてしまわないと」

そうね。わかりきっていたことだわ。あの二人が子供の話なんか、まともに聞き入れ



るわけはなかった。もし本当に聞き入れる耳があつたのなら、転校なんて言葉が出てくるはずがない。

「転校……委員長、転校しちゃうの?」

スバルくんの問いに答えたのは、パパだった。

「それは、私が説明してやろう。ルナの輝かしい将来のために、しっかりと管理された環境で学習できる学校に転校させることにした。転校すれば、キミたちとももう、会うことはあるまい。あまりルナの前にしやしやり出て、ルナを混乱させてやらないで欲しいものだ。大体キミらみたいなの……」

もう、限界!

「パパ、もうやめて!」

「黙っていなさい、ルナ。お前はパパとママの言うことを聞いていればいいんだ」

そんなこと!

「イヤ!ワタシはパパとママの人形じゃない!」

もう嫌よ!こんなもの!

——委員長退出後——

「ルナ……」

「放っておきなさい。ウチに帰ったら厳しくいきかせないとな。もっと早くにルナを

転校させておくべきだったよ。キミらもさっさとウチに帰りなさい」

立ち去ろうとする委員長父母。流石にこのまま行かせたくはない。

「ボクは、つい最近まで、引きこもりでした」

唐突に元引きこもり宣言をしたボクを、委員長父母は不思議そうに見てくる。話を続けよう。

「不登校だったボクの前にしゃしゃり出て、学校に引つ張り出してくれたのが、委員長……貴方たちの娘なんです。だから口を出さずには、いられなかった。覚えておいてください。彼女には彼女の、世界があるんです。彼女が築いた、彼女の世界が。それはきつと、彼女の心の支えになっているはず。……あまり、壊さないであげてほしいんです」

「フン、ならば私たちが、より正しいルナの世界を構築する手助けをしてやるまでだ。それにキミとルナじゃ、事情が違う。キミは、キミの心の問題だったが、ルナの場合は将来がかかっているんだ。こればかりは、譲れない」

行くぞ、と言って二人は行ってしまった。

「……………」

「何アレ!?アツタマ来ちゃう!!」

ミソラちゃんもお冠だ。

「ホント！感じ悪いっただらありやしないわ！」

ハープもお冠のようで、やはり二人は気があっているらしいね。

「どうしたんだ？あのオヤジにガミガミ言われてビビっちまったのか？」

ロックが意外そうに聞いてくる。

「いや、あの二人に言葉を、届かせられなかった……それに委員長の顔、とても張りつめてたんだ。普段からは信じられないよ」

「ムムツ、ワタシとしては複雑な気持ちだけど……でも、誰かに自分を縛られるのがとても辛いつてコトはわかるから……」

ああ、あのマネージャーか。そういえば彼、どうしたんだろう。

「ミソラちゃん……」

「うん。それじゃ、様子を見に行ってみようか？」

そうだね。多分、今頃オヒュカスが……

「行くんなら、急いだほうがいいぜ。何かイヤな予感がする」

イヤな予感、ねえ……大体百発百中だけどね。

「わかった。急ごう、ミソラちゃん！」

オヒュカスを利用するようで、何だか複雑な気分だ。でも委員長は一度、両親に思いの丈をぶちまけた方がいいと思うんだよね。

さて、委員長を追わないと……

## 35

——103デパート屋上——

両親から逃げ出してきた白金ルナは、103デパート屋上の隅で一人、震えていた。悲しみではない。体を震わせる程の怒りに体を支配されているのだ。

「パパもママもキライ……!」

自分の気持ちなど欠片もわかってくれない両親に嫌気が差し始めていた頃、不意に、心に染み込むような声があった。

『両親の前ではよく出来た娘を演じ、友人の前では虚勢を張る。……本当のあなたはどこにいるのかしら……?』

「この、声は……?」

「……誰?!」

『(ハハ)よ……』

声のする方を向くと、イベント会場の屋根の上、亜熱帯の館と書いてある看板の上に、奇妙な色の揺らめきを発見した。

「ワタシはオヒユカス……お前をしがらみから解き放つためのチカラを貸してあげる

……」

何か気になるようなコトを言っているように見えたが、ワタシの心を最初に支配したのは、怪物に会ったという恐怖心だった。

「か、怪物……!!」

怪物と呼ばれて、首を竦めるような仕草をしたあと、再びあの心に染み込むような声色で話しかけてくる。

「何も、恐れることはない……。ワタシはお前にチカラを与えるためにやって来たのだ」  
何が恐れることはない、だ。人を騙す存在とやらは、揃って自分は怪しくないとおピールしてくるものだ。それに……

「そんなの信じられないわ！ワタシ、アナタみたいな怪物に何度もヒドイ目にあってるんですから！」

今更、信じられるものじゃない。特に炎を纏った牛の怪物には手加減されたとはいえ、無理やり気絶させられたのだ。キズは残らなかつたけど。

「そうか、ワタシ以外のFM星人に会ったことがあるようだな……。ならば話は早い。お前の体をワタシに貸せ。そうすれば、お前が転校せずに済むようにしてやるぞ」

「えっ……?」

どういうこと……?」

「お前一人で両親に転校を止めさせるなどできるはずもあるまい。しかし、ワタシがチカラを貸せばそれも不可能ではなくなるんだぞ？」

こ、これは……悪魔の誘いだ！ だけど……

「けど、どうやって？」

ーバシユツ！

看板の上から此方にワープのように飛んできて、ワタシに言った。目を合わせて、じっくり浸透させるように……

「見せるんだよ、お前の意思を。明確な意思表示を両親にしてやるんだ。『ワタシはパパとママの操り人形じゃない!!』 ってな……」

……………。

「意思表示……」

一人では出来なかった。でも、コイツを受け入れれば……

「そうだ、ワタシを受け入れろ。そうすれば、お前の意思をワタシがお前の両親に強く見せつけてやる」

コイツを受け入れれば……パパとママに、ワタシの意思を……

『よく考えて、委員長！』

この声、スバルくん!?

「ソイツは委員長を利用しようとしているんだ！だから、よく考えて！」

「ワタシを受け入れるか、受け入れないかはお前次第だ……しかし、受け入れなければ、何も変わりはないがな」

「そうね……このオヒュカスの言ったことと、スバルくんの言葉を踏まえて考えてみる。」

ワタシは転校したくない。そしてワタシ一人ではパパとママの考えを覆すことはできない。なんだ、ワタシ一人じゃあ、何一つ改善出来ないじゃない。

「委員長！」

スバルくんの声が聞こえる。こんな状況なのに安心なんかしちゃって、ホントワタシ、どうかしちやつてるわ……でも、ワタシにだって譲れないものがある！

「ワタシ、転校なんてしたくない！」

「お前の願い、ワタシが叶えてやる!!」

さあ、チカラを貸しなさい！オヒュカス！

「……ダメか！委員長は、何処へ……？」

「屋根の上だ！」

スバルくんたちの驚いた顔が見える。ちよつとやり返した気分。だけど、ワタシの邪魔はさせない！



「ワタシの邪魔をしないで……」

さあ、パパ、ママ。今までのワタシの心の痛みを、その身で味わってもらおうわ!! 無理やりにでもね!

ーオヒユカス・クイーン退出後ー

「委員長は、イベント会場の電波世界にいる……! 急ごう!」

あんまり被害は出したくはない。幸い血清を持つてる蛇博士がいるから、死亡者の心配はないけど……

「オヒユカスか……厄介な場所に現れたものね」

ハープはオヒユカスについて知っているようだ。もしかして知り合いだったかな?

「厄介な場所……亜熱帯の館か!」

「そう、オヒユカスは蛇遣い座のFM星人だ。気を抜くと、ガブツといかれるぜ」

毒蛇怖い。

「うん、気を付けなきゃ……」

ージリリリリリリリリ!!!

これは……イベント会場で何かが起こった?

蛇をばらまいたのか?

「早くイベント会場へ!」

「うん！」

「ーイベント会場ー」

ダメだ！やっぱり毒蛇が入り口から先を塞いでる！

「ウエーブインして中に入るよ！」

「ー屋上ー」

まずはウエーブホールを……あつた！

「よし、屋上の隅にウエーブホールを見つけた。……そこからウエーブインしよう、ミソ

ラちゃん！」

「了解！」

「ーイベント会場のウエーブロードー」

「やっぱり、そこら中にへビがばらまかれている……」

「……そうだね」

ミソラちゃん、もといハープ・ノートの様子がおかしい。大変な事態つてのはわかるけど、それだけじゃないようにも見える。

「ミソラちゃん、どうしたの？体の調子でも悪い？」

「えっと、あのルナって女の子、この前学校で守った子でしょ？それに、ちよつと話してみたいことがあって……」

何か興味を引いたコトでもあったのかな？

「それは委員長を止めた後にでもたっぷり話せばいいよ。委員長、いい人だから」

「むっつ、スバルくん、その子のコト気に入ってるの？」

ミソラちゃんが不機嫌なのも何となくわかるけどね。

頬を膨らませても可愛いだけですよ、ミソラさん。

「えっとね、その子にブラザーバンドを結ばないかって、誘われたんだ。今日はミソラちゃんにそのことも話そうと思ってたんだけど……」

「え」

ハープ・ノートが呆けた表情で硬直した。

いや、酷くない？

「さつき委員長の親御さんにも言ったけど、ボクを学校に引つ張り出してくれたのが委員長なんだ。恩がある」

「……………」

「それに、学校でもよくしてもらってるし……ミソラちゃんは唯一のブラザーだから、最低限話を通しておきたかったんだ」

ど、どうですかね？

「……………さつきのあの子の表情を見て、ダメって言ったらワタシ、人でなしだよ……」

な、何とかいけるか!?

「ただし!条件があるの……」

何でもどうぞミソラ様!

「な、何かな……?」

死ぬクス野郎ツ!とかじゃなければ何でもしますとも。ええ!何でも!

「……ううん、やっぱりあの子を止めたあとにする」

ええ……逆に怖いんだけど。

「さ、行きましよ、スバルくん!」

気を引き締め直したミソラちゃんを追う形でボクたちは、委員長の元へ向かった。

あ、ウエーブアウトしていかないと……

——現実世界・イベント会場最奥——

……やっぱり、委員長の両親が蛇に締め付けられている。すいません、もう少し委員長の話を聞いてあげてくださいね。

「ウググツ……!た、助けてくれえっ!」

「クハツ……!く、苦しい……」

と、言うか聞いたことがあるぞ。確か蛇の締め付ける強さは、握力で換算すると数百からトンまでいくらしいから実はかなり危ないんじゃないのか、これ!?

い、いや、流石に両親を殺したりはしないだろうから、蛇に手加減するように命じているに違いない。

「大変、助けなきや!」

ミソラちゃんの叫びに応じるように委員長……オヒユカス・クイーンの声が響く。

「邪魔はさせないわよ!」

イベント会場の最奥にある、オオマダラ・アナコンダのレプリカ、その頭部付近に現れたオヒユカス・クイーン。

「委員長! キミのパパとママが苦しんでいるぞ! このままじゃ、死んでしまう!」

「違うわ! ワタシはオヒユカス・クイーン。ワタシは生まれ変わったのよ! ワタシには自分の意思がある! それをこの人たちにわからせてやるのよ!」

激昂するオヒユカス・クイーン。頼むから、取り返しのつかないことは止めてくれよ

……!

「お、お前……ル、ルナ……なのか……!? グハッ!」

「ル、ルナ……は、離しなさい……ワタシたちに何故、こんなことを……」

「なら普段からアナタがワタシと話しなさいよ! もういい、ワタシはアナタたちの操り人形じゃない! アナタたちはいつもワタシのためだと何でもかんでも勝手に決めてしまおう。そのくせ毎日仕事でワタシには見向きもしない……アナタたちは、ワタシより

も仕事が大事なんでしょう!?!だからワタシはアナタたちの子供であるコトを止めて、一人で生きていくことにしたのよ!!」

火に油を注ぐ形になってしまったようだ。

「バ、バカなことは止める!」

「心を縛られるのはカラダを締め付けられるよりも苦しいのよ!へびたちよ、もつと締め上げなさい!」

「グ、グワアアアツ!!」

「キヤアアアアツ!!」

ヤ、ヤバイぞ!

「やり過ぎだよ、委員長!」

ダメだ。聞く耳持たぬって感じだ!毒蛇を警戒してじりじりと下がり始めるボク。意図に気づいたのか、ミソラちゃんも真剣な顔を崩さず、ボクに合わせる。これで!

「ありやダメだ、オヒユカスに心を操られている。こつちの言うことなんて、聞きやしな  
いぜ!」

「やっぱりか……それ以上締め上げたら、キミのパパとママが!」

「うるさい!ワタシの邪魔をするなど何度も言っているだろう!!毒蛇よ、そいつを黙らせろ!」

口調まで変わってる。これは本格的に我を忘れてるな……って、ヤバい!

「ミソラちゃん!!」

「ワアツ!」

あ、危ない……咄嗟にミソラちゃんの腕を引いて助けることが出来た。凄く禍々しい色のヘビだ。これは噛まれたらかなりヤバイヤツだったな、絶対。予め来るってわかってなきや避けられないよ、まったく。

というか、最初からボクじゃなくてミソラちゃんを狙ってきたぞ!? どういうコトだ? 「ならば……出てきなさい、ヘビたち!」

す、凄い数だ! さっきのヘビとは違い、一般的なヘビのイメージ通りの色をしている。因みに緑色だ。

「チイツ! このままだと形勢不利だ! 一旦出直すぞ!」

「わかった! ……ミソラちゃんも!」

「う、うん!」

何だ? 大人しく逃がしてくれる……? やっぱり追い払ってるだけなのか。よし、なら早いところズラかろう。

——イベント会場——

何とか、離れられた。しかし、途中で毒蛇に噛まれた人が何人もいたんだ。やはりへ

ビを何とかしなければ……

「オイ、早くオヒュカスの野郎をぶっ倒しに行こうぜ」

「ダメだ！ヘビを何とかしないとイベント会場で被害が出てしまう！流石に放つとけないよー！」

「チツ……ならまずあのヘビどもを何とかするぞ！アテはあるのか、スバル？」

「……ヘビは変温動物だから、周りが冷えると眠っちゃうんだ。冬眠つてヤツだね。どうにか空調を弄ることができれば……」

「スターフォースで何とかならねえか？」

それは考えたけど、流石にこのイベント会場全体を冷やし続けていたら、いつか限界を超えてしまうよ。それに……

「無理だ。長時間の使用は負担が大きすぎるし、オヒュカス・クインとの戦闘までではなくて体力を消耗したくないんだ。それにイベント会場の空調でこの気温や湿度を保っているから、冷やしても直ぐに元通りになってしまう」

「チツ！ならしようがねえか……」

よし、ならまず……

「確か空調管理者のエンジニアがイベント会場にはいたはずだね。でも、ここまで来るのにその人を見かけることはなかった。つまりヘビの特性を知ってるってことなん



だ。だからヘビが来ないような、冷えた場所にいる可能性が高いってことになる」

「えつと……確か103デパートに、北極を題材にした展示があったはずだよ、スバルくん」

「ああ、あそこか……頼もしいよ、ミソラちゃん」

「この後のコトも考えて、おべっかも忘れない。」

委員長を止めてハッピーエンドじゃないんだから、しようがない。

「フフフ、ちよつと持ち上げ過ぎじゃない？別に心配しなくても、彼女に悪意があるわけじゃないんだ。ただちよつと、今までの話を聞きたいだけ。スバルくんが気にするようなことはないよ」

穏やかに笑うハープ・ノート。ヤバい惚れそう。

圧倒的笑顔……！

「アハハ……じゃ、行こうか」

103デパートのウエーブロードー

やつぱりここにもヘビがばらまかれている！

ええつと……北極の展示は……あつた！

「よし、北極の展示スペースへ急ごう！あ、ミソラちゃんはウエーブロード上で待っててね」

「え、どうして?」

そりやミソラちゃんって有名人なんだもん。下手に混乱させるよりはいい。それに万が一にもヘビが来ないとも限らないし。ミソラちゃんの柔肌にキズをつけるなんて普通に暗殺案件だと思うんです、ハイ。

「えっと、ヘビに噛まれてほしくないし……」

「心配してくれるんだ。そう……ふふっ」

満足気なミソラちゃんを何とか説得し、ボクは北極の展示スペースへ向かう。さつさと済ませないと。

——103デパート・展示スペース——

現実世界に降り立ったボクは、かまぐらの展示物に人の気配を感じ、声をかけた。

「エンジンアさん、いますか?」

『……………』

無視されたかと思ったが、ビビってるだけなのかな?

「あの一?」

「ちよ、ちよつと待っててくれ!」

いそいそと出てきたのは紛れもない、空調管理のエンジンアさんだ。

「ガチガチ……い、いったい何がお、起こったんだ? ききき、急に大量のヘビにおお、

襲われて……と、咄嗟にこのひ、氷山にか、隠れたんだけど……」

コイツがイベント会場にいれば問題は起こらなかつたんだよね。まあ、いいや。昼食に休憩してただけだろうし。人の勤務時間にまで口を出す気はないよ。

「あの、エアコンをコントロールするカードを持ってますよね？ボクに貸して欲しいんです！急いでいるので！」

「え、ああ、エアコンの？何に使うの？」

「人命救助ですよ！」

「そりゃ、大変だ！持っていきたまえ」

よし、『エアコンカード』を手に入れたぞ！

「ありがとうございます！」

「き、気をつけてな……」

——103デパートのウエーブロード——

「お待たせ！エアコンカード、もらってきたよ！」

「じゃ、イベント会場に急ぎましよう！」

何か楽しんでない？

——イベント会場のウエーブロード——

「ここからはウエーブアウトしていくよ！」

「了解！」

……なんだか今日って、電波変換と解除、し過ぎじゃない？

——イベント会場・最奥——

「オヒュカス・クイーン！」

ホントはイベント会場に入っただけ使ってもいいんだけど委員長……オヒュカス・クイーンの出方を見ないといけないからね。不思議に思っただけ、イベント会場の外まで出張されたらたまらない！

「また性懲りもなく現れたわね……アナタが何をしたところで、ワタシを止めることは出来ないわ！」

「取り敢えず、ヘビの毒に苦しんでいる人は解放させてもらおうぞ！『エアコンカード』、カードイン！」

……また何か出てきた！エアコンマンだつて。触れ込みは『暑さ寒さも自由自在！快適空調エアコンマン』らしいけど。とにかく、冷房をタッチ！

『クラクラクラ、クーラーラーラー!!温度を下げましょヒュールルル！』

その変な口上はカードナビ共通なんですか……？

何はともあれ成功！

「バ、バカな……このエリアの温度が下がっていく!!ああ、ワタシのヘビたちが……」

前から思ってたんだけど、普通へびを操ってたらその弱点にも気を配らないかなあ？  
「……温度が下がったせいでへびたちが冬眠状態になってしまっただど!? お、おのれ  
……!!」

F M プラネットのへびは冬眠なんてしなかったとか？ 電波体のへび？

『冷却完了!』

「委員長、もういいはずだよ! キミの声は、ご両親に届いてる! それに、もうへびを操ることは出来ないんだぞ!? 詰みなんだよ!」

「うるさい! うるさい! ワタシの邪魔は誰にもさせない!!」

……オオマダラ・アナコンダの電腦に入ったか。

「そのデカイへびのロボットだ! ヤツは電腦世界に逃げやがった! 追いかけるぜ!」

「オツケー! 行くよロック!」

「わ、ワタシも行くよ、スバルくん!」

ええつと、飛び回るから、あんまり飛行不可ユニットは要らないんだけどな……。でも、ミソラちゃんは真剣に見える。電腦体なら、死ぬことも滅多にない……。か？

「えつと、ボクは電腦世界に入ったたら、飛び回らなきゃいけないんだ。だからミソラちゃんと一緒に行動するのは……」

「……………」

「何？ミソラちゃん。腕を伸ばしたりして……」

「……………お姫様抱っこ」

えええ……………ボクたちって、何しに来てるんだっけ……………？

っていうか、最後のセキユリティを突破したらオヒユカス・クイーンにゴルゴンアイだっけ？で、撃ち落とされそうなんですけど。いや、何でかはわからないけど。

「どうやら女王は二人いたみたいだね……………」

どつちもクイーンと言うには可愛らしすぎるけど。

「もうっ、スバルくんったらー！」

ああ、もうわかったよ！任せとけ！

「それじゃ、ウェーブインしてオオマダラ・アナコンダの電腦へー！」

おかしい……………こんな感じじゃなかったはずなのに……………

「クスクスクス……………ミソラも大胆になったわねえ……………」

……………ハープの入れ知恵だったの!?

ーオオマダラ・アナコンダの電腦ー

これは……食虫植物？のような背景の電腦だ。分かりにくい人はウツボットつて言えはわかるだろうか。アナコンダの電腦なのに、どうして植物モデルの背景になってい  
るのかはよくわからない。関連性ないよね？

ボクたちのコトを暗示しているのだろうか。バトルカードやミステリーウェブに  
寄ってきた虫……みたいな。

「この奥に、オヒユカス・クイーンが……急ごうか、ハープ・ノート！」

「んーっ！」

ハイハイ……

「じゃ、抱えるから楽にしてね……」

「♪♪♪」

ノリノリですね、ミソラさん。

「……ロック、行くよ！」

「おうー！」

スタアアフオオス!!

そういうえば、ブラザーと共闘してブラザーになる人と戦うって、何だかおかしくないかなあ……

いや、委員長には必要なことか。

「よし、行くぜ! 追い詰められたヤツは何を仕出かすかわからねえから……とつとと探して仕留めようぜ」

「わかった!」

「ラジャツ!」

絶対楽しんでるよ、ミソラちゃん……

さて、まずは周りをひとつ飛び……するほどでもないね。ゲートタイプのセキユリテイがかかっている。すぐそばにデンパくんが倒れているから、話を聞いてみよう。

「キミ、大丈夫?」

「……ウウ、ジ、ジツハ           ヘビツカイミタイナオンナガ           キュウニ           デ

ンノウニ           ハイツテキテ……ア、アチコチニ           ドクヘビヲ           マイタンデス

……ソノ           ドクヘビニ           カマレテシマイマシテ……」

やはり毒か。デンパくんにも効く毒なんて、よく聞くととんでもないよね。

「大丈夫なの?」



「ワ、ワタシノカラダヨリ　タイヘンナノハ　ソコノ　トビラデス……ソ  
 ノトビラハ　ワタシジヤナイト　ヒラキマセン。シ、シカシ　ワタシガコ  
 ノ　アリサマジヤ……」

「解毒は？出来ないの？」

「ハ、ハイ。ドコカニ　ゲドクザイ　ガ　アルハズデス……ソレサエアレ

バ……」

さつき見たときにあつたな、解毒剤。なんとかかなりそうだぞ。……やっぱり飛行つて偉大だね。

「オツケー、任せて！」

ウエーブロードを跨いですぐそこだ。数秒もかからないだろう。

「よし、飛ぶよ……大丈夫、ハープ・ノート？」

「んっ……」

回答は微かに身をよじらせたことで、喉を鳴らした音だった。まるでネコみたい。……だから妙な気分にはさせないでよ！

——二分後——

よし、取ってきたぞ、解毒剤！途中でデカイヘビがいたけど、飛行するボクには関係なかった。

「…………ン？オオ！ナオツタヨウデス！アリガトウゴザイマス！！オツト、ソウソウ…………ト  
 ビラデシタネ…………ムン！！」

ーガシャーーン！！

扉が開いた。結構楽に進めそうだぞ、この電腦は…………

「ドウゾ オトオリクダサイ」

「ありがとう！」

よし、次だ…………

「ウウ…………ドクヘビ ニ ヤラレマシタ…………」

「解毒剤取ってくるから待っててね！」

あと何回繰り返すんだっけ…………？委員長父母の骨がもつといいんだけど。

ー二分後ー

「…………ン？オオ！ナオツタヨウデス！アリガトウゴザイマス！！オツト、ソウソウ…………ト  
 ビラデシタネ…………ムン！」

ーガシャーーン！！

さつきとまるで同じパターンだ。

「ドウゾ オトオリクダサイ」

「うん、ありがとう」

よし、次のエリアだ。

——十五分後・アナコンダの電腦3——

都合9体程のデンパくんに解毒剤を渡し、とうとうボクたちは全てのセキュリティを突破した。因みにボクはずっとハープ・ノートを抱えたままだ。スターフォースの影響か、あまり腕力の衰えを感じない。

あとは一気にオヒュカス・クイーンにいるエリアまで飛ぶだけか。でも、さつきからちよくちよく飛行中のボクたちに二筋のレーザーが飛んでくるんだけど、こんな仕掛けあつたっけ？

「よし、じゃあオヒュカス・クイーンまで一気に移動するから、ちよつと揺れるよ」

「うん、優しくしてね……?」

ハープウー! いい加減にしてよ、頼むから……

ミソラちゃんにそういうの教えたらダメじゃないか!

「スバルくん、頑張つて……!」

もちろんですとも!

——アナコンダの電腦3・最奥——

遂にたどり着いた電腦の最奥には、委員長……オヒュカス・クイーンが佇んでいた。側には倒れ付した委員長の父母の姿がある。やはりFM星人のゼット波に影響を受け

ているようだ。

「オヒュカス！委員長の体から出ていってもらうよ！」

「ロックマン……………」

何だか怒ってる？

……………あ、ハープ・ノートを抱えたままだったね。

「それじゃ、降ろすよ……………」

「あつ……………」

そこ！名残惜しそうにしない！罪悪感が半端ないけど、悪いのはボクじゃない。

何だか変な空気になりそうだったが、空気を讀んだオヒュカスが出てくることで再び緊迫した雰囲気に戻ることとなった。

「やはり現れたな、ウォーロック。このムスメからはお前の匂いがプンプンしてたからねえ……………このムスメに取り憑いて、騒ぎを起せばキサマが現れると思っていた。……………まんまと誘き出されてくれたようだね」

なんと言うか老練？というかオバサン臭がするのは気のせいだろうか。

「ケツ、相変わらず気にくわねえヤツだぜ……………オヒュカスよお！どうせやるんだらう？ サツサとかかってこいよ！」

「血の気が多いのは変わらないねえ……………まあ、落ち着きな。……………どうだい、ワタシと取引

しないか？」

ロックの威勢を軽くないなし、余裕を見せつけるオヒユカス。常に両手で持っているブーイングのような笛も、電波で出来ているのだろうか。

「取引だど？」

首を傾げるロック。そりやそうだ。こっちは戦うためにここまで乗り込んできたんだから。

「そう、取引だよ……お前の持つている『アンドロメダのカギ』なんだが、ソイツを使って二人でこの星をシハイしないか？お前も知つての通り、『アンドロメダのカギ』だけではアレは動かせない。アレを動かすためにはお前の持つカギと、FMプラネットの管理するコントロール装置が必要だ。お前さえチカラを貸してくれるのならば、コントロール装置はワタシが王を欺いて手に入れてやろう。そうすればFMプラネットの誇る最終兵器、『アンドロメダ』は我々のモノとなる！」

あー、そうか。カギと本体だけじゃダメだったのか。

別にアンドロメダを破壊することに変わりはないから、問題ないんだけども。

「なるほど……で、オレがその誘いを断つた場合は……？」

ま、ロックも渡す気はないよね。

「そのときはチカラづくで頂くまでだ……！まさか、断られるとは思っていないのだが

ね」

「そうか……オレがカギを渡しさえすれば、地球をオレたちが手に入れられるんだな……?」

何だ?この流れ……何処かで聞いたことがあるぞ。

「ああ、そうだ。だからワタシと一緒に……」

「だが断るぜ!!」

「ナニツ!?!」

ロック!?

「……このウオーロックの最も好きなことの一つは、自分が絶対に正しいと思っているヤツに対し、NOと言ってやることだ!スバルが言つてたぜ……こういうヤツには、こう言つてやればいいってな!!」

「ちよつ、今言うことかい、それ!?!」

【悲報】ロック、ジョジョラーになる。

いや、ロックがスタンドみたいなモンなんだけどね。

どつちかって言うのと、悪霊よりの。

「ウオーロック、キサマふざけているのか……!?!」

「へッ、違うね!このオレに地球をシハイする気なんざ、欠片もねえ!興味があるのは、

いかにオマエらFM星人を全滅させるかだけだ!!」

自信満々に啖呵を切るロツク。岸辺露伴さえなければカツコよかつたのに!

「交渉決裂……では、チカラづくでカギを頂くとしよう……ワタシの誘いを断つたコトをあの世で後悔しな!!シャーローツ!!」

蛇遣いなのにヘビの真似事をするなんて、律儀なヤツもいたもんだ!

「いくらロツクマンであろうと、ワタシの邪魔をさせるワケにはいかない!それに、アナタたちふざけてるの!?さつきから見ているらば、イチヤイチャと……」

返す言葉もありません……

「……………いい、委員長の体から出ていってもらうぞ、オヒユカス!」

「え、ええ……そうよ!アナタには正気を取り戻してもらおうわ!聞きたいことも、あるもの……」

何故、今回は何処か締まらないんだろう。

「来るぜ!」

「わかつてる!ハープ・ノート!」

「援護は任せて!」

ウエーブバトル、ライドオン!負ける気がしないぞ!

「さあ!ヘビたちよ……行きなさい!」

オヒュカス・クイーンが体を振ると、割と大きな体から染み出るようにへびたちが此方へ向かってきた。

なるほど、2対1だからね。同時攻撃による足止めは必要か。各個撃破が理想なんだろうけど、生憎とボクもミソラちゃんもそこそこ速い程度のへびに掴まるような鍛え方はしていない。そもそもボクは飛べるんだ。こういった攻撃はハープ・ノートにしか通じない。

「ハープ・ノート！」

「大丈夫！これくらいなら、対処出来るよ！」

そう言っただけで出現させたアンブからシヨックノートを発生させ、へびを迎撃するミソラちゃん。あつちは任せて大丈夫だろう。ボクは本体だッ！

「行くぞッ！」

因みにボクの前は既に、ミソラちゃんとのデートまでの数日間で一応整えてある。今回はミソラちゃんが援護してくれるので、接近戦用の構成だ。つまりソード系オンリー。

おっと、戦闘に集中しないと。滞空しているとウォーロックアタックが使えないから、ロックバスターでチマチマ削らないといけなくなる。なので地上戦メインでいくのが良さそうだ。ゴルゴンアイ怖いし。



「ハアッ！」

リユウエンザンで側面から斬りかかる。オヒユカス・クイーンには足がないから、ズルズルと這わないと移動することが出来ない。これがどう影響してくるか……

「グッ……ハアッ！」

攻撃を受け、一瞬苦しんでから尻尾を振り回してくるオヒユカス・クイーン。振り回すというよりは、回転した体に尻尾が振り回されているといった感じだ。やはり尻尾自体を操ることは出来ないらしい。

「危ないッ……フウ」

不意打ちに近い一撃だったが、何とか避けることが出来た。今度は背後からだッ！

「ロックー！」

「ウオオオオッ！」

一度目のウオーロックアタックでオヒユカス・クイーンの右側面を通り過ぎ、オヒユカスの死角十メートル程に移動。二度目で一気にオヒユカス・クイーンの背後を取るッ！

「うおおおつつ!!……つて、これは?！」

尻尾で捕らえられた?……精密に操作することは出来ないハズじゃあないのか!?

「フフフ……教えてアゲル。ヘビの体って、結構筋肉質なのよ。……意外だったかしら

「？」

「じゃあ、さっきのは……」

さっきのは、動かせないと思わせるための……トリック！

「ブラフに決まってるじゃない。……電波体だからって浮いてるとでも思ってたの？ それにワタシ、幼い頃から演技は得意な方だから……」

両親の前では優等生をつてヤツか……！オヒユカスは浮いてたけどね……クソツ、油断した！

「このまま締め上げてアゲル……！」

「こ、これはヤバイ……オヒユカス自身に毒はないハズだから、ヘビの構造上持久力を重視した構成の筋肉になっているハズ……！」

「ウ、ウググ……」

「折角翼があっても、こうなっちゃったら形無しね……」

「マズイ……！脱出不可能だ……！」

「スバルくん！」

明るいメロディーと共に飛んできたシヨックノートがオヒユカス・クイーンの尻尾にヒットする。

「ラッキーだ、拘束が緩んだぞ！今のうちに脱出を！」

「ありがとう、ハープ・ノート！」

「気にしないで！」

よし、次はこれだ……！

「き、消えた……？いえ、これは……『インビジブル』！ワタシが以前所持していたカード……！」

へびの聴覚が悪いことは知っているからね！

姿を見失った以上、こちらを感知することは出来ない！

「クッ！ならば……！」

足音を消すため、既に飛翔しているボクの目にはオヒュカス・クイーンの目が発光しているように見えた。

あれは、一体……？

「……見えた！そこかッ！」

あれはゴルゴンアイ！嘘だろ!?インビジブル中で見えないはずなのに。……対インビジブルってそういうことなの!?!

「ウッ……やはり見えている！」

何とかシールドで防ぎきったものの、これはマズイぞ……！ハープ・ノートの攻撃じゃ軽すぎるし、決定的に決め手が欠けているんだ！マジシャンズフリーズを当てられ

ればイケるかもしれないけど、ベースは委員長。素直に当たってくれとも思わない！  
「どうすれば……！」

いや、あるぞ！オヒユカス・クイーンを攻略する方法が！

「ハープ・ノート！」

「オツケー！」

アンプからショックノートを出し、牽制するハープ・ノート。

「こんなもの……！」

今！

「チツ！また『インビジブル』を……！」

今回はスピード勝負だ。高速でウォロックアタックを繰り返し、オヒユカス・クイーンの背後を取る。

「そこかあッ！」

動き出した尻尾の先を掴み、そのまま最大速度で飛び上がる！伸びきった状態なら、拘束も出来まい！

「ウワアアアッ!!」

悲鳴を上げるオヒユカス・クイーン。

なんかごめんなさい……

「食らえッ！」

上空高くまで引き上げた巨体を、今度は地面に叩きつける！いきなりウェーブロードに叩きつけられたオヒュカス・クイーンは直ぐに戦闘態勢を取ることが出来なかった。当然だ。さつきまで普通の女の子だったんだからね。

「いくよッ！マジシャンズ・フレイイズッ！」

気合いを入れて発生させた氷柱は、見事オヒュカス・クイーンを捕らえ、氷結させた。「ウグアアアアッ!!」

女の子がしちやいけないような叫びを発するオヒュカス・クイーン。これはオヒュカスが叫んでいるに違いない。違いないったら、違いないんだ。

「フウ……」

氷柱を解除することで支えを失い、倒れ伏すオヒュカス・クイーン。デリートは避けられたようだ。よかった。

「ウググウウ……」

「チツ、限界はとうに越えているクセにしぶといヤツだ！」

ロックが鬱陶しそうに毒を吐く。キミってオンナには本気を出さない趣味じゃなかつたっけ？

「オヒュカス！委員長から直ぐに出ていけ！……既にお前は詰んでいる！」

「ハ、ハアハア……お、お断りするよ！こうなったら、このムスメも道連れにしてやる……！」

そんなコト、させるものかよ！

『往生際が悪いのは、美しくないね』

ゲツ！ジェミニ！やつぱり潜んでたか……！

「その声は……まさか、ジェミニ!?」

オヒユカスが驚愕を表すように叫ぶ。

「……ジェミニだと!? 2対2、いや3か……ジェミニの野郎は万全の状態か。これは分が悪いぞ！」

何? そんなにジェミニって評価高いの!?

「ジェミニ、いいところに来てくれた! ワタシと一緒にこの裏切りモノを始末しておくれ!」

一筋の希望を見つけた! と、ばかりにジェミニに助けを求めるオヒユカス。しかし、なあ……

『……フフフ。そうだね、始末を着けなきゃね』

「ロツク、ジェミニの気配は!?!」

無駄とわかっていても、聞かざるを得ない!

「わからねえ……！ただ、オレたちがヤツの射程距離に入っちゃまってることだけは確かだ！」

「ジエミニニ！早くやってしまつて!!」

もう後がないことを自覚しているんだろう。オヒユカスの声色は、既に懇願するようなものに変わっていた。

『フフ……せつかちだね、キミは。……そんなに焦らなくても、直ぐに始末してあげるさ』

来るッ！

『……ジエミニサンダー!!』

「ギャーッ!!」

一応ボクに落ちてくるかと思つて警戒したけど、ジエミニの選択は変わらなかつたらしい。突如降つてきた落雷は、敵であるオヒユカス・クイーンの体に叩き込まれることになった。

「ジ、ジエミニ!!な、なぜ……!」

未だに自分に起こったことが信じられないという表情のオヒユカス。

「ウ、ウワアアアア!!」

断末魔の声をあげ、消滅するオヒユカス。キミの存在は無駄ではなかつたよ……

『ウォーロック……いや、ロックマン。いずれキミとは直接戦うコトになるだろう……そのときまで『アンドロメダのカギ』は、大事に抱えていることだな』

「何故、オヒュカスを殺った!？」

ロックも信じられなかったらしい。

『邪魔だから……さ。オレにはオレの目的があるんでね。……けど、次は間違いなくキミを狙うことになるだろう』

「行きやがった……ケツ、いけすかねえヤロウだぜ」

どうやら行ったらしい。正直何処に隠れていたのか、検討もつかない。あんまり隠れるスペースはなかったハズなんだけどな。

「あ、委員長は!？」

オヒュカスが消え去り、両親の側に倒れ付した委員長の元へ駆け寄るボクとハープ・ノート。

「委員長!大丈夫!?しっかりするんだ!」

「……ウ、ウウン……ハッ!ロ、ロックマン様!？」

ボクの呼び掛けが聞こえたのか、意識を取り戻す委員長。ハープ・ノートは空気を読んで特に何も言ったりはしない。

「ワ、ワタシ……大変なコトをして……ど、どうしよう」



今さらながらに、自分のやったことを自覚したらしい。体が震えている。あんまりいい気分じゃないな、折角オヒュカスを倒したつてのに。委員長には常に自信満々、というか唯我独尊でいてほしいし。

「大丈夫。キミの思いは伝わってるはずだよ。それに悪いのは心の弱さにつけこんだF M星人さ。それももういないんだ。安心していい。キミのパパとママも気を失っているだけだから」

ーゴゴゴゴツツ!!

ウツ！ 電脳が揺れている！

「オイ！ さっきの爆発の衝撃でこの電脳世界が不安定になってるぞ。早いトコずらかったほうがいいんじゃないか？ 電脳世界が消えたら、このまま現実世界に戻されちゃうぞ」

ハープ・ノートの方を見ると、了解したとばかりに親指を立てている……ウインク付きで。心配は無さそうだ。

「そっか……じゃ、委員長、ボクは行くから……」

この後は……わかってるんだけどなあ……流石に女の子一人にするのは……でもなあ……いや、これも星河スバルとしての責任か。

「ロックマン様……!!」

やはり抱きついてきた。きっと今の委員長は凄く不安なんだろうな。まあ、どうせブラザーになったときにロックマンの正体なんて、わかっちゃうことでもあるし……

「ワタシ、これからどうしたらいいか……グスッ！」

「……大丈夫。キミは一人じゃないよ」

抱きついてきた委員長の頭をゆっくり撫でて、励ます。そう、委員長は一人じゃないんだ。ゴン太やキザマロ、それにボクだって……

「うう……ロックマン様あ……！」

「……電脳世界が消えるぜ」

ロックが教えてくれるけど、その声には覇気がない。何故だろう……背筋に寒気が走ったような気がするの、気のせいかな？

「キヤーーーーッ!!ロックマン様ーーーーッ！」

委員長の絶叫を聞きながら、ボクたちは強制ウエーブアウトすることになった。……さつきから怖くてミソラちゃんの方を見れないんだけどね。

——現実世界・イベント会場最奥——

抱きついてきた委員長の頭を撫でた状態のまま、現実世界に戻ってきたボクと委員長（とミソラちゃん）。

すぐそばには委員長の父母の姿もある。どうやら無事に脱出出来たようだ。

「ロックマン様……………ロック……………ク……………スバルくん……………？そ、そんな……………！」

慕っていたロックマン様の正体がクラスメートだと知った委員長の驚きは凄まじいものだった。開口したまま後退りするなんて、普段の委員長ならはしたない行為として絶対にやらないだろう。

「ウ、ウソでしょ……………まさか……………アナタが口、ロックマンだったなんて……………しかもピンクの方は、響ミソラ……………!?!」

「……………黙ってて悪かったよ」

「ホ、ホントに……………?」

委員長がまだ信じられないとばかりに確認してきたが、返事をする前に委員長の父母が意識を取り戻した。

「う、ううん……………」

「パパ!!」

「うう……………」

「ママ!!」

意識を取り戻した父母を介抱する委員長。ここは手を出すべきではないだろう。

「ルナ……………」

「ママたち、夢を見ていたわ……………ルナが泣いている夢……………『もっと、ワタシを見て』って

……」

「夢の中のルナに本心を聞かされてシヨックを受けたよ……生き方を縛られるコトは、カラダを縛られるよりも苦しいコトだ……私たちは、今までお前を見えない鎖で縛っていたのかもしれない。……転校の話も白紙に戻そう。私たちは、一度話し合う必要があるんだ。しつかりとな。……お前の意志を聞いておきたい。すまなかつたな、ルナ……」

「パパ……ママ……」

親子三人で抱き合い、家族の絆を確認する委員長たち。

とても、美しい光景だと思う。

人が人を理解することは、本当に難しい。たとえそれが常日頃から側にいる人だったとしてもだ。だからこそ人は、分かり合うための努力をしていかなきゃいけない。分かり合おうとする勇氣も出せないで、本当の絆を手にすることは出来ない、ボクは思う。「じゃあ、ボクはそろそろ帰るよ……ミソラちゃんは？」

「流石に水を差すわけにはいかないよ。……また今度の機会にしようかな」

「ちよつと待ちなさい！」

ボクたちが揃って帰路に着こうというときに、委員長が引き留めてきた。別に明日の学校でもいいのに。

——十分後——

十分後にまたイベント会場の最奥に來なさい！とのご要望だったので、ボクたち二人は連れ添ってこのイベント会場・最奥にやって來ていた。

「パパとママはどうしたの？」

「ほ、他のフロアの様子を見に行つたわ……」

何だか委員長の様子が変わだ。赤面しているように見える。いや、いつもからかつてばかりのヤツなんかがロックマンでゴメンね……

「そ、そんなコトより……その……助けてくれて……アリガト」

わぁーい、委員長のデレだぁ……！そんなコトより、ミソラちゃんの反応が怖いよ、ボクは。さつきから喋つてないし。ニコニコしてるし。確か笑顔つて、威嚇の意味じゃなかったっけ？

「……まだ、信じられないんだけど、アナタ、ロックマンなのよね？その……響ミソラも」

「うん、そうだね」

「そうだよ」

ボクたちの反応を見て、やはり真実だと悟つたのだろう。委員長が息を吐く。……何だか安堵している？いや、直ぐに赤面に戻つたぞ。面白いな、コレ。

「そ、その……勘違いしないでよ！ワ、ワタシが今までロックマンに向けてきた思いは、

あくまでロックマンに向けたものであって……その、アナタに向けたモノじゃないんだからね！」

なんとという典型的なツンデレ。

「アハハ……劇のロックマン役も、ボクは楽しかったけどね」

「ア、アナタねえッ！ やっぱりあのととき、耳元で囁いたでしょう！」

顔を更に赤くする委員長。ま、あれはボクも恥ずかしかったからね。おあいこだよ。

「あ、バレてた？ でも助かったのは事実なんだ、別にいいでしょ？ 本物のロックマンだったんだから」

「スバルくん……その話、後で聞かせてね……？」

ゲエツ、藪蛇だったか！

「えっと、それは……」

「アナタもそうよ！ 響ミソラって……有名人じゃない！……二人はやっぱりブラザー、なの？」

最後だけ語調の弱まった発言になる委員長。別に気にすることじゃない？

「フフツ、そう！ ワタシがスバルくん唯一のブラザー、響ミソラよ！」

何故かとても誇らしげに胸を張るミソラちゃん。やはり小学生か。張る胸は流石に

「スバルくん？」

「ヒイツ！ごめんなさいミソラ様！」

怖い、怖いよ！

「フフツ、まあいいよスバルくん。ところで、アナタ、スバルくんのクラスメートなんだよね？ちよつと話しておきたいことが……」

「え、ええ。構わないけど……」

そう言つて密やかに話し込む二人。

ミソラちゃんの手の動きからして、男は邪魔らしい。星河スバル、退散します。

二十分後、イベント会場から出てきた二人はとても親しそうに見えた。仲良く手を繋ぎ、話をしているが、ここからじゃあ聞くことは出来ない。

「何を話してたの？ミソラちゃん」

「フフツ、女の子には女の子にしか出来ない、話があるんです〜！」

ボクの質問に対し、はぐらかすような答えを告げるミソラちゃん。委員長の機嫌も良さそうだ。本当に何を話していたのだろうか。

「あ、そうだ委員長。ブラザーバンドの件なだけけど……」

ここでミソラちゃんの方を見る。相変わらず満面の笑みだ。ダークオーラなんて微塵も感じない。

「うん、ワタシからは何も言うことはないね。ルナちゃんも良い子だし、大賛成だよ！」  
ホントに何があつたんだ……!?

「ええ、じゃあ早速ブラザーバンドを結びましょう!」

委員長も凄くニコニコしている。逆に怖くなってきたよ、ボクは……

「あ、ワタシもルナちゃんとブラザーバンド結んだから、そのところもヨロシク！」  
ノリノリのミソラちゃんから告げられたのは、衝撃の内容だった。

「え?! ミソラちゃんも?」

いや、いいの?

「ルナちゃんとは、凄く気が合つたんだ。ね?」

「ねーっ!」

イエーイ、とばかりにハイタッチする二人。もう着いていけないよ……

「あ、あのコトも、ルナちゃんには話して大丈夫だと思うよ!」

ええ!? もうそこまで信頼してるの!?

「いや、別にいいけどさあ……」

ボクとしては、ミソラちゃんが分かっていたらいい、ぐらいにしか思っていなかったけど、どうなんだろう。委員長は受け入れてくれるのだろうか。

「ええつと、実はボクは……」



——五分後——

「……というワケなんだ。頭可笑しいと思うなら、ブラザーバンドを切ってもらっても構わないけど……」

「バカね！ワタシがずつと接してきたのはアナタでしょう!?今さらそんなコトで……」  
何ということだろう。さらつと受け入れられてしまった。ボク自身も理解者がいるだけで、結構オープンに話せるようになってきたのだろうか。

この日、ボクは新しいブラザーと秘密の共有者を同時に一人、得ることになったんだ。

## 第六話 『双子座』

37

「数日後・夜」

「ドゴツ！バキツ！！」

「グ、グフツ！」

一人の男が、子供に襲われていた。信じがたいことに、大の大人に暴力を振るっているのは小学生高学年程度の少年だということだ。

それも、複数ではなく、一人で。

「か、勘弁してくれ……」

「……………フン」

鬱憤晴れず、とでも言うように少年は鼻を鳴らして去っていった。襲われていた男としては、他に被害者が出るのではないかと気が気でない。先程まで、一方的に殴る蹴るの暴行を受けていた男ならではの心配だった。

「翌朝」

「ピンポン！」

あ、もうこんな時間か。

「スバル〜！ルナちゃんが来てるわよ〜！」

「はい！今いくよ〜！」

委員長は毎朝一緒に登校しようと、ボクの家を訪ねてくる。今までもそうだったんだけど、オヒユカスの件があつた翌朝から、少し早く訪ねてくるようになったんだ。……委員長一人で。

ボクの家がみんなの中では一番遠いんだけど、わざわざ最初に寄ってくれる辺り、委員長もブラザーに成り立てのボクを気遣ってくれているのだろうか。委員長はゴン太とキザマロに多少の猶予を与えてやっているのだ、と一息で言っていたので、そういうことなんだろう。

ーガチャツ！

「おはよう。今日もよろしくね、委員長」

「ええ。時間はたっぷりあることだし、ゆつくり行きましようか。その方がゴン太とキザマロも喜ぶでしょうし」

「違うないね」

二人してクスリと笑いつつ、今日も学校への道に行く。ゴン太とキザマロは起きてるかなあ……？

「スバルったら……ルナちゃんを泣かせないといいんだけど。……まったく、誰に似たのかしらね」

ドアの向こうで口に出たあかねさんの呟きが、ボクの耳に入ることにはなかった。

——放課後——

——キーンコンカンコン——

「それじゃ、今日の授業はこれでお仕舞い。みんな寄り道せずに帰るんだぞ〜?」

『ハイ!』

元氣よくクラス全員で返事をして帰宅の準備をする5—Aのクラスメートたち。ボクもそろそろ帰らないと……

——コダマ小学校・玄関——

あ、委員長だ。一人で帰るのかな?

「オーイ、委員長〜!」

「!?」

ボクの声に反応して周囲を見回す委員長。心なしか口角が上がって見える。良いことでもあったのだろうか。

「やつ、委員長。もう帰るの?」

「ア、アラ……スバルくんじゃない。ええ、もう帰るところよ。よかつたら一緒に……」

ーブルルルル!

トランサーに着信?

「ちよつと待つててね、委員長……………はい、もしもし」

『星河スバル。面白いモノを見せてやるから今すぐヤシブタウンに來い』

……………ツ!!これは……………ツカサ君……………いや、ヒカルか!

何だかはつきりしない声だ。ボイスチェンジャーでも使っているのだろうか。いや、ジエミニが直接いじくった音声を流しているのか?

しかしなるほど、このタイミングで来るか……………

『お前がロックマンだということはわかってる』

「……………何のコト?岩男つて……………センスない名前だね」

「ククツ……………まあいいぜ。とにかくヤシブタウンに來い。いいな?」

ーガチャツ!……………ツーツー

あの反応からして、多分マジに笑ってたね、ヒカル。

「今のは……………」

「氣になるな……………。一応行つてみたほうがいいだろう、ヤシブタウンに」

ロックが倒置法を使いこなしている……………!

「そうだね。行つてみよう、ヤシブタウンに」

ボクもロックの口調を真似してみる。何だか大物感が出てるような気がするぞ……。  
「ちよ、ちよつと！……何かあったの？」

「うん。いきなりお前が岩男だと知っているから、バラされたくなければヤシブタウンに来いって」

「岩男……？つてそれロックマンのことじゃない！」

一瞬怪訝な顔をした後、急に興奮する委員長。多分今の委員長のほうがジェミニよりロックマンの正体が漏れる可能性高いんじゃないかなあ……

「委員長、シート！」

委員長の肩を抱き、声が大きいと注意するジェスチャーをしながら、廊下の隅に行く。  
「ここなら滅多なことでは聞かれないだろう。」

「え、えと……ス、スバルくん？ワタシたち、こういうことはもつと大人になってから……」

急にあたふたする委員長。何だ？顔が赤いし、目がぐるぐるしているように見える。

「委員長、ロックマンの正体は秘密だったこと、忘れてない？」

「……え？あ、ああ……そうね！そうだったわ！」

「とにかく、ボクはヤシブタウンに行くてくるから。ゴメン、今日は一緒に帰れないね」

「あ……そうね。一緒に、帰れないわね……」

さつきまでの威勢というか、勢いは何だったのか一気にシヨボくれる委員長。まるで捨てられた子犬のようだ。なんだか罪悪感が湧いてきたぞ。

「それじゃ、今度何か奢るから。それでチャラってことで。ウィルスバスティングでそれなりの稼ぎはあるんだ、ボク」

「え……？ホ、ホント!?じゃ、じゃあ今度ヤシブタウンのカフェでお茶でも……」

今度はパアーつと表情が明るくなったぞ。現金なヤツということなんだろうか。ま、いくら委員長の家が裕福だと言つても、子供に与える小遣いなんてたかが知れているし、委員長でも中々行けるワケではないのかもしれない。

「あ、うん。それじゃ、明日までに決めといてね。ボクは行ってくるから」

「き、気をつけなさいよ!」

「フフツ、心配してくれるの?」

「あ、えつと……違うわよ!その……カフェが楽しみなだけだからね!勘違いしないでよ!」

はい、ツンデレ頂きました。お手本のようなツンデレですねえ……解説のウォーロックスさん、どうですか?

「(ハーブのヤツに言つてもいいか?)」

「(ごめんなさい何でもしますから許してください!)」

ロックめ……何という恐ろしいコトを！ハープに言ったらミソラちゃんにバレちゃうじゃないか！そうしたら自分も……と言い出すに違いない。これは委員長への埋め合わせなんだから、ミソラちゃんに奢るつもりはないよ。今回はね。

「うん、わかってるから。じゃ、行ってくるね」

「うん……」

両手を胸の前で組み、目を潤ませる委員長。やっぱりブラザーになってから、よく気を遣ってくれるようになったなあ……。

「ーヤシブタウンー」

さて、バスで数十分。遂にやって来たヤシブタウン。確かジエミニのチカラでブラザー同士を反発させあっているんだよね。

「ーザワザワ……」

もはや当たり前のように展開されるカイジ空間の中心には二人の男がいた。原理は解つてても、見ていて気分のいいものじゃないね。

「オレは前からお前のことが嫌いだったんだ！」

「オレだって、お前の声を聞くだけでイライラすんだよ……！」

口喧嘩だが、その雰囲気は剣呑だ。今にも殴りかかりそうな二人。早いとこ止めた方が良さそうだ。



「ケンカか……」

「オイ、スバル。ビジライザーをかけてみる」

「うん」

これも慣れた動作だ。淀みなくビジライザーをかけると、そこには見慣れた電波世界が広がっていた。

「プラスの形をした電波が二人にくつついてるね」

「ああ、あの二人が興奮してるのもアレのせいっぽいな。さつき電話のヤロウが言った『面白いモノ』ってコレのことか？」

ま、そうなるよね。

「どうする？」

「そりや、デストロイでしょ、ロック？多分人為的だし……」

「だな。んじや、電波化して調べようぜ」

いいね、この自然なコミュニケーション。

ーヤシブタウンのウエーブロードー

よし、取り除きますかね。ビリビリ怖いけど……

「行くよ……ハアッ！」

ーバリバリバリ！

ふう、思ったよりビリビリはしていなかった。プラスの電波をちよつと乱してやるだけだったから、手間はかからなかったよ。

『ちよつと！アンタ、調子にのつてんじゃないわよ！』

『それはコツチのセリフよつ！』

今度は……

「マイナスの電波か……まるで磁石だね、これは」

「恐らくそうだろう。あの電波は人間同士を反発させあうシロモノらしいぜ」

『なんじゃと！』

『キー!!このヨボヨボジジイ!』

おばあさん……言っちゃいけないことだつて、あるんだよ……??

「キリがねえな……よし、あの妙な電波の発生源を探そうぜ。この付近にあるに違いない」

ロツクの勘つて結構頼りになるよね。ハナが利くつてヤツなのかな?

——五分後——

ウエーブロードを進んだ先、103デパートの大型ビジョンが脇に見える場所には、いかにも怪しい電波体があった。

……というかジャミングだ！周りにはプラスとマイナスの電波が漂っている。

「ロック、コイツじゃない？というかコイツでいいよもう」

「些か早計な気もするが、確かに怪しいな」

「キヒヒヒヒ。……来たなロックマン」

笑い方……もう少しまともに笑えないのかな？

……ジャミンガーになった者は元の笑い方を失ってしまうのだろうか。嫌すぎるぞ、

そんなの。

「この悪趣味な現象は、キミがやってるんだね？」

「そうだ。これは『あるお方』からお借りしたチカラ……このチカラを使い、ブラザーの関係をブチ壊す。それがオレに与えられた指令だ。キヒヒヒヒ」

お役所仕事ってワケでもなさそうだ。どう見ても楽しんでいる。

「なるほど、あの人たちはブラザーか」

「そうそう……キーツヒツヒツヒ！」

「まったく無駄なコトをして……。使えるチカラの数が限られている以上、起こせる規模は限られているのに。……何故、こんなことを？」

「『あのお方』はブラザーバンドを憎んでいる……。だから壊す！わかりやすいだろ？」

ま、わかりやすい敵ではある。というかブラザーバンドを憎んでいるくせに、ブラザーの破壊から何までほとんど人任せなんだね。そんなので実感なんて湧かないだろ

うに。

「オイ、スバル。こんなヤツ早いとこやっちまおうぜ」

「オツケー……ま、見逃す理由もないか」

「そう簡単にいくかな……？キヒヒヒヒ！」

此方に向かつてきた。ウエーブバトル、ライドオン。

「ケヒヒヒヒッ!!」

お決まりのジャミングマシンガン乱射にパワーボム2を放り投げ、誘爆させる。パワーボムの爆発によって一時的に視界を奪われたジャミンガーだが、棒立ちよりはマシだと思ったのかジャミングマシンガンの連射を止めることはない。何故退避しないんだらう。射撃の音と角度から居場所をモロバレなのに。

「(ジャミンガーの相手も手慣れてきたね……)」

そんなジャミンガーの抵抗を、ボクは背後から悠々と観察していた。先程から見ているが、やはりジェミニのチカラを使う以外は他のジャミンガーと大差ないようだ。

「……！」

がら空きのジャミンガーの背中に『ライメイザン』で斬りかかる。ジャミンガーはただこちらの位置すら掴めていなかったたので、簡単に入った。

「ウガツ！ガガガガ……」

『ライメイザン』のエフェクトによって体が痺れるジャミンガー。隙だらけだ。

「疾ツ！ハアツ！セイツ！」

最早ただの的と化したジャミンガーにブレイブソードを振るっていくボク。勝ったぞロック、我々の勝利だ！

「ウガガアツ!!」

雑な断末魔とともにデリートされたジャミンガー。慈悲はなかった。

「大した敵じゃなかったね」

「ああ……って、プラスとマイナスの電波が消えていくぜ……」

あ、ホントだ。これってどういうことなんだろう。ジエミニが見てたってことなんだよね？

『あ、あら？わたし何してるの……？』

『何か、すごい怒ってた気がするんだけど……』

『……？ばあさん、何をそんなに怒っておるのかの？』

『おじいさんこそ……』

よし、収まったぞ。

「取り敢えずウエーブアウトしようか」

「ああ……そうだな」

ー現実世界・ヤシブタウンー

「じゃ、ウチにかえ……」

様式美というヤツだね。

ープルプル!!

「もしもし」

『よう、岩男。楽しめたか？ブラザー同士のケンカは』

「ブフツ……こ、この声はさっきの人か」

堪えきれず吹き出してしまったぞ。いや、だってノってくるとは思わないじゃない！

『フン……こんなもんで驚くんじゃないぞ。今に見てろ、この世界を覆っている欺瞞を暴いてやる。「ブラザーバンド」という欺瞞をな……』

「そんなことをして、どうするっていうんだよ。……新世界の神にでもなるつもりかい？」

『クククツ……オマエ中々センスあるぜ！……オレの名は「ヒカル」。覚えておきな』

ーガチャー！ツーツー

何故か着々とヒカルの好感度が上がっている気がする……

「切れたね」

「オマエ結構楽しんだろ……。知り合いか？」

「いや、知らないって」

「んじゃあ、『ヒカル』って名前を聞いたことは？」

「だから無いって」

「ま、そういうヤツって、たまにいるよな……」

「だよ。もしかして、偶々押した番号が通じてテンション上がっただけのイタズラかもしれないよ？」

そんなことないんだけどね。

「とにかく、コッチからはどうしようもない。今日のところは、取り敢えず引き上げようぜ」

「はい。あ、ついでに103デパートにあるトレーダー5でガチャつてもいい？」

「オマエも緊張感ねえなあ……」

あんなことがあった後に、家に帰って寝ようって言えるほうが緊張感くない？

『スバルくん！』

あ、忘れてた。ジエミニが見てるってことは、ヒカル……もといツカサ君もいるん

だったね。

「あ、ツカサ君」

「やあ、偶然だね。……買い物かい？」

「いや、トレーダー5でガチャリに来たんだ。ツカサ君は？」

「そ、そうなんだ……ボ、ボクはちよつと用事があつてね。それより、せつかくだからこのカフェで話でもしていかない？ トレーダーは逃げないんだからさ。もし良かったらだけど……」

なるほど、男からデートに誘われるつてこういう気持ちなのか。虚しいな。

「いいよ」

「なら決まり。カフェは直ぐそこにあるから、そこで話をしよう」

こうして、人生初、男（ツカサ君）とのデートが始まってしまった。テンション下が  
るね。

ああ、ゴン太と行った牛丼屋が懐かしい……



ーヤシブタウン・カフェー

ヤシブタウンの街道沿い、先程倒したジャミンガーがいたウエーブロードが見えるだろう位置（もちろん、ビジライザーをかける必要はあるけど）にあるカフェに、ボクたちは向かい合って座る。

先に口を開いたのはツカサ君だった。

「スバルくん、ここ最近は特に表情が明るくなった気がするけど……気のせいかな？」

ええ？ボクの表情をよく見ていたんですか？それってもしかして……いや、邪推はよそう。きつとツカサ君は純粹に復学したばかりのボクを気にかけているに違いがない。以前の委員長と同じように。

「そうだね……ボク、ブラザーが増えたんだ。今まで学校に行ってなかったのが不思議な位、今は学校生活を楽しんでるよ」

「へえ……じゃあ差しつかえなければいいんだけど、スバルくんが学校に来れなかった理由を聞いてもいいかな？」

なるほど……そりゃあ、気になるよね。好奇心ってヤツなんだろうか。

「いいよ。父さんが事故に遭って行方不明なんだ。そのショックで、ちよつとね」

表向きの理由を話すボク。ま、四年生までの『星河スバル』なら間違っていないんだけどね。

「……そう。ゴメン、あまり聞いちゃいけないことだったかな？」

誰だって、不登校児からこんな重い話が出てくるなんて思わないだろうし、仕方ないと思うけど。

「大丈夫、もう折り合いはつけてるんだ」

苦笑しながら答えたボクの言葉が意外だったのか、目をパチクリさせるツカサ君。

「そうか……それにしても驚きだよ。キミはボクと境遇が似ているみたいだ」

……確かに。血縁的な意味でツカサ君は両親を、ボクは父を失っている。そして体には本来あるはずの無い人格……ツカサ君には『ヒカル』が、星河スバルには『ボク』が宿っているんだ。ツカサ君の言葉は結構、的を射ていると言えるだろうね。

「境遇が似ている？」

まだ知らないハズのことを仄めかすわけにもいかないので、惚けるフリをするボク。段々この演技が板についてくるようで、嫌になる。

「ボクもね、親がいないんだよ。ボクの場合、両親の二人ともだけど……」

「……………」

ツカサ君の言葉を促すように黙って聞く姿勢をとる。ツカサ君もボクのスタンスを

理解したらしく、話を続けてくれる。

「初めてキミと会ったときから思ってたんだ。他人とは思えないって。もつと聞いてもいいかい、キミの話を……。それに、ボクの話も聞いてほしい。……キミに」

ボクとしては構わないんだけど、何だか一方的に思いの丈を聞くようで申し訳なく感じる……

——数分後——

「時々、失ったコトを思い出して胸が痛くなるんだけどね、そんなときは思いっきり風に当たれるような場所に行ったりするんだ。体に当たって流れていく風が気持ちよくて、なんだか暗い気持ちを吹き飛ばしてくれるような気がするからね。コダメタウンだと……展望台かな。あそこは夜に行くと星も見えるし、気晴らしや考え事にはぴったりなんだ」

「悲しみを癒す場所か……ボクにもそれと同じような場所があるよ」

ドリーム公園だったよね、確か。あそこにはサワニガーが出ないから以前は行っていなかったような気がする。

「それは……どんなトコロなんだい？」

「そうだね……口で説明するよりは、実際に見たほうが伝わると思う」

時刻は大体4時を回ったところか……今は5月で日が長く、まだ子供が出歩いている

も大丈夫だろう。

「いいよ、乗り掛かった船だし。付き合うよ」

「フフツ、ありがとうスバルくん……それでね、その場所はドリームアイランドというところにあるんだ。ドリームアイランドへはバスを使えば行けるから、早速出発しよう」

「うん、了解」

ボクたちは静かにバス停まで歩き、ドリームアイランドへと向かった……

——ドリームアイランド——

このドリームアイランドは元々海が広がっていただけの場所だったんだけど、ごみ処理で周辺の海を埋め立てていくうちに広大な敷地が生まれるようになり、それがドリームアイランドと呼ばれるようになった、らしい。

らしいと言うのは、この情報が案内に書いてあった内容だからだ。しかし、海を埋め立てる程のごみか……電波技術が発達し排出されるごみも減ったはずんだけど、未だにこのドリームアイランドには多くのごみが集まって来るらしい。悲しいなあ……  
(ドルマゲス感)

「こつちだよ、スバルくん。この先にある場所が、ボクを癒してくれるんだ」

バス停側の橋を渡り、道沿いを行くと看板が見えてくる。看板によるとこのまま道沿いでごみ集積所、道路を渡って右手に公園があるとのことだった。ツカサ君は当然のよ

うに右の横断歩道を渡り、公園の入り口ゲートを指差して言った。

「公園、か……」

「そう、この奥にボクが連れていきたい場所があるんだ。……さ、行こうか」

そう言つて先にゲートを潜つていくツカサ君。きつと先を歩きながら、話すことを整理したいんだろう。

——ドリーム公園——

「これは……」

「この花畑が、ボクの大事な場所……ボクの悲しみを癒してくれる場所さ」

「凄く、キレイだ……」

言葉が出ない、とはまさにこのことなんだろう。公園……ドリーム公園の奥に広がっていたのは、それはもう、表現するのも難しいほどに美しい花畑だった。なんというか、センスのないボクには凄……！としか言い様がないね、これは。

「こんな場所が、あつたなんて……」

「差し支えなければ、さっきの話の続きをしてもいいかい？」

「うん、もちろんいいよ」

——数分後——

「それで、宇宙飛行士だった父さんの乗っていた宇宙ステーションが行方不明になって、

今もそのままなんだ」

「……それは、さぞシヨックだっただろうね」

悲しそうな顔をするツカサ君。

「まあ、うん。当時はね……。あの事故以来、ボクは人と関係を築くことを恐れていたんだ。いや、誰かを失うことを極端に恐れていたんだだろうね」

「そう……」

これは元々あつたスバル君の記憶からの受け売りだったんだけど、きつと考えただけで恐ろしかったんだろう。大切な人を失う辛さは、失った人にしかわからないからね。「スバルくん、こういうことを言うの、変かもしれないけどありがとう、色々話をしてくれて」

「いいんだ、もうボクは一人じゃない。だから心配は要らないよ」

「そうか。キミはもう、一人じゃないんだね……。よし、今度はボクが話す番だ。ボクの両親がいなくなった理由……聞いてくれるかい？」

ツカサ君は、一体何時自覚したのだろう。自分が捨てて子だつてことを。物心つかない内は何もわからず、ただ自分の父と母がいないことを疑問に思っていたのだろうか。それは一体、どんな気持ちで……？

「もちろん、こんなボクで良ければ話してほしい」

「そう自分を卑下することはないさ。さて、話をするならちよつと場所を変えたいんだ。そっちの方が説明しやすいからね……だから、ついてきてくれるかな？」

公園を出て、先程の看板から道沿いにゴミ集積所へ向かおうとするツカサ君にホイホイついていくボク。早速ゴミ処理場の入り口にたどり着いた。ゴミ処理場の方を指差して、この奥までついて来てほしいと言うツカサ君。別に断る理由もない。

——ゴミ集積所——

ゴミ集積所の名に違わず、辺りはゴミで埋め尽くされそうな勢いで溢れている。こんなところに産まれたばかりの子供を……いや、他人事だ。同情してもらうためにここまですて連れてきたわけじゃないんだろう。

「ゴミだらけ、だね」

「この辺一帯のゴミがここに集められているんだよ。ゴミの処理は『分別ロボ』が自動でやってくれるようになってる。ボクが案内したい場所は、もう少し奥なんだ。……すすもう」

——ゴミ集積所・最奥——

ゴミによって圧迫されつつも、一応舗装された通路を通り進んだ先にそこはあった。『そこ』と言っても何か特別な何かがあるわけじゃない。普通の行き止まりだ。でも、ツ

カサ君にとつては違うんだ。ここは、彼が家族から切り離された場所……ということになるのかな。

「結構奥まで来たね……ここは？」

そもそも小学生なんて、何か多数から離れた事情や特徴を持つ人間を排斥する傾向にあるのが普通だ。両親がいないというのは、中々言いづらい理由にはなるのだろうか。

「ここは……ここは、ボクが捨てられた場所なんだ」

「……………」

何でもないことのように語るツカサ君。しかし、声が震えていた。恐らく、両親への憎しみや怒りで……

「驚いたかい？ボクは捨て子だったんだ」

「……………続けて」

「うん。……十年前、赤ん坊のボクはここに捨てられた。タオルにくるまれたボクを、分別口ボクが発見したらしい。そのタオルには『ツカサ』とかかれていたんだ。それがボクの名前さ。その後、ボクは施設に送られた。そして今日に至る……というわけだよ」

ツカサ君が表面上でもおだやかでいられるのは、ヒカルのせいもあるけれど、コダマ小学校の人たちがツカサ君を暖かく迎えたからだろうね。

「やっぱりショックだったかい？今の話は……」



「そりやあね。衝撃のカミングアウトってヤツだったよ。ツカサ君は？」  
「両親のこと、どう思ってるの？」

「それは……あんまり、考えないようにしてるんだ。とにかく一人でも生きていけるように……。ずっとそれだけ考えてきたから」

「やっぱ、両親への怒りや憎しみはあるらしい。」

「そうか……ツカサ君は強いんだね。今だから言えるけど、ボクは自分が一人で生きていけるとは、とても思えないなあ」

「強いだなんて……そんなこと、そんなことないんだ、本当に……」

「まあ、別人格をつくっちゃうくらいだから逃避的な弱さはあるんだろうけど。」

「それよりも、ボクの話聞いてくれてありがとう。この話を自分からしたのは初めてなんだ」

「実は初めて人に話したというツカサ君。そんなにボクって信用できるのかなあ？客観的に見て。」

「キミになら話してもいい。ボクがそう思ったから……」

「ありがとう。とても嬉しいよ。でもボクを衆道に誘うのは止めてくれ！」

「そうだったんだ……わざわざありがとう、ツカサ君」

「フフフ……今日はいろんなコトを話したね。もつと色々話したいけど、もう遅く

なつてきたし、帰ろうか？」

ウググ……通路を封鎖しているシヨベルカーの先にはトレーダーSPがあるというのに。畜生。

「そうだね、帰ろうか。あ、ヤバい。早く帰らないと……」

そんな理由をつけて、ツカサ君より先んじて前を進む。ほら、ヒカル。出てきやすくしてやつたぞ。

時刻は既に5時を回っている。そろそろ帰らないと、あかねさんに大目玉を食らいそうだ。つたく、ジェミニはまだなのか……

ー プルルル!!

ツカサ君が完全に見えなくなった頃、ボクのトランサーに着信があった。そら、釣れたぞ。

「はい、もしもし」

『よお、岩男』

ちよつと、最早それ挨拶と化していないかい!?

「ブフツ……その声は、さっきの。お久しぶり。まだ何か用?もしかして暇人かな?」

ここぞとばかりに全力で煽るボク。

『チツ、この野郎……フン、まあ聞けよ。いいことを教えてやるぜ。……オマエ、スク

ラップにならないよう、気を付けろよ。クククク」

実はヒカル善人だった説。普通スクラップにしようとしてるヤツにこんなことしな  
いって。

「予言者（笑）の類いかな？それとも今朝見た朝の星座占いで12位だったからかなあ  
……親切にありがとう」

『ケツ！そんな態度を取っていられるのも今の内だぜ！……じゃあな』

ーガチャツ！

こんなフレンドリーだっけ？ヒカルって。

「今のヤツ……スクラップとか言ってたな。意味がわからん……取り敢えずほっとけ  
よ。今日は早いとこ帰っちまおう」

おい、あの警戒していたロックはどこへ行った!?

「あっちの方から、トレーダーの匂いがする……」

うう……やっぱり諦めきれない！

「オマエがそう言うなら、本当にあるのかもな」

遂にボクの嗅覚を信用しだしたロック。何がロックをここまで変えたんだ……？  
(すつとぼけ)

ーウー・ウー・ウー！

これは……随分マイルドになった、サイレンだ！どつちかって言うのと侵入者発見、侵入者発見！みたいなイメージが湧くような音だね。

「これは……」

『フホウトウキハツケン！フホウトウキハツケン！』

うわわわわわ！同じ分別ロボが3体、来るぞ遊馬！

「同じ分別ロボが3体……来るぞスバル！」

まったく同じことを考えてやがった！

「ロオーツク!?何でそれを!？」

「いつものように、オマエの寝言だよ。中々汎用性あるな、コレ」

そういう感想は要らないよ！

『タダチニシヨブンシマス』

ゲッ！こつちに来た！……もう3体で合体する想像しか出来ないんだけど、どうしてくれるんだ！

『フホウトウキハツケン！フホウトウキハツケン！』

うわっ！ゴミ処理場の入り口からも来たぞ。これじゃ出れないな……

「コイツら、ボクを徹底マークしている……」

ゴミ処理場の最奥を見ても、既にツカサ……もといヒカルはいない。

「ツカサ君もいない……」

「スバル、それどころじゃねえ！急いでビジライザーをかける！」

「オーケー！おつ、ウエーブホール！」

Dゲイザー……もといビジライザーをかけるとウエーブホールを発見出来た。  
ラッキーなんだろうね。ここで襲われたのは。

「一旦電脳世界に逃げるぞ！」

「ラジャツ！」

ボクは人間を辞めるぞ、ジヨジョーツ！

ーゴミ処理場のウエーブロードー

電波変換！星河スバル、オン・エア！なんて口上、要らなかつたんや……

「よし、退避完了。あとはツカサ君を探してから、トランサーにでも潜んでバス停まで行こうよ」

「オイオイ、完全に帰る気じゃねえか！まだだぞ。あのロボットは明らかにオマエを狙っていた。多分誰かが操っていたんだろうな」

ヒカルですれ間違いない。

「ハイハイ、ヒカルヒカル」

あー、トレーダーSP回したい。

「滅茶苦茶おざなりだな……まあ多分そいつか、その関係者だろう。とにかくまだこの辺りにいるに違いない。探しだして相応の報いってヤツを与えてやれ！」

スタンドはスタンドでしか倒せない……いや、電波体は電波体でしか倒せない、か。  
「りよーかい」

ーゴミ処理場の電脳ー

「あ……あれじゃない？」

ゴミ処理場の電脳には、どうみても怪しい電波体が3体、話し合っていた。知ってたんだけどね。

「ン？お、お前は……ロックマン！な、なぜここがバレた!?ど、どうする？一先ず退散するか？」

ちえつ、ジエミニから岩男呼称が広がっているかと思つたのに。まあ、昨日の今日だし、仕方ないね。

『狼狽えるな』

この声……ジエミニか？

「む、この気配……オ、オマエは!!」

おはジエミニ。

「情けないヤツらだ。敵に怯えやがって……」

それ、キミの管理責任じゃない？

「す、すいません、ジエミニ様」

「ジエ、ジエミニ？お前がジエミニなのか!?今まで散々オレたちにちよっかい出しやがって！」

ああ、ロツクつてジエミニに会ったことは無かつたんだっけ。

「オマエがロツクか……お互い、こうして顔を合わせるのは初めてだな。ただ、オマエのウワサはかねがね聞いているぞ。『アンドロメダのカギ』を盗んだ大罪人だ……とな」

「オレもオマエのウワサは聞いていたぞ。ただ、あまりいいウワサはなかつたけどな」

「オレのウワサを聞いたことがあるというなら、この後オレがどういう行動をとるかわかるよな?……オマエら、やれ! 『アンドロメダのカギ』を奪え!」

「来るぞ、スバル!」

「了解!」

ウエーブバトル、ライドオン!

ーゴミ処理場の電脳ー

さて、あんまり気乗りしないウエーブバトル。だってジェミニにガン見されてるんだもん。ええっと、敵ウイルスは……ジャンクネスとヤマガンコのGタイプが一体ずつと、ジャミンガー2一体の3体構成。ジャミンガーはビビってたし、正直あまり驚異には感じない。

「……ロック」

「おうー」

先ず対処しなきゃいけないのは、重砲撃型のヤマガンコと射撃能力持ちのジャミンガー2。特にジャミンガータイプは他のウイルスと違って知能が高いようなので、気をつけないといけない。だから……

「ハアッー」

ヤマガンコは強力な砲撃を可能とするウイルスだけど、そもそもシールドで防げる上に、足がないため機動力は死んでいる。

ぶっちゃけボクみたいな動き回るタイプには絶好のカモだ。クエー。……あんまり



似てないな。これじゃシタツパーだ。

さて、ふざけている場合じゃない。いや、ふざける余裕はあるんだけど。……動きの鈍いやマガンコに向かってリユウエンザンを展開した左腕を振るう。砲撃タイプだから、弾に誘爆してくればと思っただけそう上手くはいかないらしい。一手間増えただけなんだけどね。返すリユウエンザンでマガンコにトドメをさし、ジャミンガーに振り返る。一連の動きにすっかりビビりあがってしまったようで、心なしか震えている。かわいそうだ。(棒)ま、キミがいて困る理由はあるけれども助かる理由はない。ジャミンガーになったことを後悔するしかないと思うね。

「ヒ、ヒイツー！」

「逃げないでよ……キミの上司が見てるつてのに」

そう言うどジャミンガーはハツとしたのか、ジェミニの方を見る。ジェミニはただ笑うだけだ。……ニヤニヤとね。

その間に、浮いた駒となったジャンクネスをデリートし、残るはジャミンガーただ一人だ。

「……ウ、ウオオオオ!!」

破れかぶれといった体でこちらに突進してくるジャミンガー。何か、ボクが悪者みたいじゃないか……

「ウオオオオ!!……グハッ!」

殴りかかってきたジャミンガーにクロススタウンターでスタンナツクルを当て、吹き飛ばす。吹っ飛んだジャミンガーはピクピクしているが、これは殴り飛ばしたからではなく、スタンナツクルのエフェクトによるものだ。

「……」

無言でヘビーキャノンをぶっ放し、ジャミンガーを物言わぬ軀とするべく追い討ちをかける。声なき悲鳴が聞こえるようだ。

「ぐああああ!!」

最後に断末魔を上げるタイミングでマヒが切れる程度の幸運は残っていたらしい。アヴドウルはいきなり腕以外を吹っ飛ばされたというのに……

「……フン。何て役に立たない連中だ」

「フツ、何て役に立たない上司だ……」

ジェミニの嫌味を鼻で笑いながら返してやると、一瞬だけど体から迸るイカズチが膨れ上がった気がした。お前はサイヤ人か。

「ケツ、まったくだぜ!しかし……次は、やっぱりお前が出てくるんだよな? FM王の右腕と呼ばれる雷神ジェミニ!」

信用出来ないし、左腕でいいんじゃないかなあ……

「へえ……結構デキるヤツなの？」

「ああ、コイツはヤバイ……が、ヤツは今人間と融合していない。つまりぼっちだ。オレたちFM星人はぼっちの状態じゃあ本来のチカラを出せないからな、地球では。今のオレとスバルなら、負ける要素はねえぜ」

おう、何だか照れ臭いって……しかし双子座のジエミニをぼっち扱いとは……中々斬新だね。

「クク、確かにオマエの言う通りだ。ぼっちが何かは知らんが、ヒカルのないオレじゃ、流石に分が悪い」

「分」どころか、「割」の単位で負けてると思うよ！

「ヒカルって……さっきの自称新世界の神兼預言者(笑)兼朝のアナウンサーじゃないか！」

朝のアナウンサーとは、星座占いをする人のことだ。

「ブハッ！そんな愉快なヤツに取り憑いてやがるのか……ジエミニは！」

「フン、ヒカルにそんな趣味はないが……まあ、そうだ。そのヒカルがオレの相棒だ」

一応宿主のフォローをするジエミニ。まさかジエミニに人を気遣う優しさがあったなんて……！

「だが、何故そのヒカルってヤツは姿を見せないんだ！」

最も脆い姿である状態の宿主の情報に晒すほど、ジエミニはバカではない、ハズ。そういうのは真つ先に疑うところだからね。疑惑という感情がカタチを持ったようなジエミニに限ってそんなリスクを侵すハズがない。

「あいつは人前が嫌いだからな、オマエたちの方から探してみたらどうだ？クククク。……じゃあな」

稲光の如く一瞬のフラッシュが過ぎた後、ジエミニの姿はなかった。先手を打って葬るべきだったか……？いや、そうなると後が怖い。FM王によつて復活したジエミニはやり方を選ばなくなるだろう。

「逃げやがった……」

「ヒカル……ね。また属性が増えたな……」

新世界の神・預言者（笑）・朝のアナウンサー・電波変換可能（new!）

改めて見ると、コイツはヤバいな……誰も（キャラが濃すぎて）勝てる気がしないよ。さて、ゴミ分別ロボのコントロールパネルをいじってオーバレイ待ち状態の分別ロボを元に戻さないよ。……ほいっと。よし、完了。

オーブウーロン

これで正常になったかな？

「よし、ウエーブアウトだ」

「はーい」

「ーゴミ集積所ー」

「……………ふう」

最近、あんまり手応えのある敵に会っていない気がする。作業染みてきたしなあ……何か縛ってみようかな？

『オーイ！スバルくん！』

あ、カヲル君！まったくキミのスタンドのせいで酷い目に遭ったよ……あれ？何か可笑しい？まあ、大体あつてるでしょ、多分。もう疲れたよ……

「スバルくん、大丈夫だった？大変な目に遭ったね。急にロボットが暴走するんだもの……………」

「へーきだよ、ツカサ君。それに忘れてない？ボクはバトル用のナビを持ってるんだ。ソイツが解決してくれたよ。まったくタチの悪いウイルスがいたんだってさー……………」

「……………」

ボクの割とギリギリで投げやりな発言に反応するツカサ君。おお、可哀想に。

「そっか、それは苦勞をかせさせたね……ゴメン、ボクがこんなトコロに連れ出したばかりに」

申し訳なさそうなツカサ君。別に気にしてないけどね。

「止めてよ、こんなトコロなんて……ボクはともかく、キミにとつては印象深い場所なんだ。ボクはキミの過去や現在を否定するつもりはないよ」

「……ありがとう。そんなコト言われたの、初めてだよ」

男のデレはちよつと……いや、ギリギリ男の娘に分類出来るかな？どつちにしても、頬を染めるのは止めてください。

何故かミソラちゃんと委員長が笑顔で握手するイメージが……二人のキズナリヨクは∞を指している。いや、トランサーじゃないのかよ。

「ああ、もう湿っぽいのは止め止め！ボクは気にしてないから！ハイ、終了！」

「フフフ……そうだね。じゃ、改めて帰ろうか」

「そうそう、それがいいよ」

ボクたちは再び連れ添ってバス停を目指し、歩き始めた……。

——バス停——

——プツプツ——

お、バスが来たみたい。

「ボクは違う方向のバスに乗るから、ここでお別れだね……今日はとても楽しかったよ、ありがとう」

「うん、それじゃ。また今度、学校でね」

笑顔で手を降って、バスに乗ろうとする。しかし、バスに乗る直前、ツカサ君の眩き  
が聞こえてきた……。

「キミみたいな人とブラザーバンドを結んでいる人はきつと、幸せなんだろうね……」

……うん、そうか。

「……………」

バスに乗らず、ツカサ君の方へ向くボク。

「ど、どうしたんだい?」

「キミの眩き、聞こえたんだ。……どう?良かったらでいいけど、ボクとブラザーバンド  
を結ばない?」

何というか、あんまりに純粹過ぎて応えなくなつた、では言い訳としては不十分かな  
?この後を知っているボクとしても、手酷い結果になるのはわかっているんだけどね……

ああ、もうクソツ。何か照れ臭いな……!

「えっ?ブ、ブラザーバンド!?!」

「そう、ブラザーバンド。ツカサ君、キミは良い人だ。多分、5—Aのクラスメートに聞  
いたら十中八九同じ答えが返ってくるだろうね。そんなキミが、わざわざボクにあまり  
良く思っていない、本来なら憎むべき両親のコトまで話してくれたんだ。キミを信頼す

るには、十分過ぎる。それに、境遇も似ているし……」

ああ、もう何だか言葉がまとまらない。畜生！こうなったらやってやるぞ！ジエミニを倒しながらツカサ君との繋がりも断たないようにする。出来るか？いや、やってみせるんだ。ボクはボクだ。ボクのやりたいことは、ボクが決める。

「スバルくん……」

「どうだろう？」

「ありがたい、スバルくん。嬉しい、本当に嬉しいよ」

本当に嬉しそうにはにかむツカサ君。今はホモ要素なんて目を瞑ってやるぞ。

「……………」

「ボクは今までブラザーなんて結んだコトなかったんだ。だからそんなコト言ってくれなんて、感激だよ。……ただ」

そう言っつて海の方を向くツカサ君。そもそも周りは海なんだけどね。

「ただ？」

「ただ、その……言いくいんだけど……ボクにはとても大事な秘密があるんだ。ボクが『捨て子』だつてコト以外に……」

ヒカルのことか。ボクは仲良く出来そうなんだけどなあ……。

「その秘密はボクにとつてとても深刻なコトなんだ。ブラザーになるためには、それを



教えなくちゃいけない。

もしキミがその秘密を知ったら……ボクのコト、嫌いになってしまいかも……」

「大事な秘密か。そうだね……例えば誰か、知らない人間の魂が宿ってる……とか？」  
ま、これはボクなんだけどね。

「……キミを信頼していいわけじゃないんだ。ボクに勇気が無いだけなんだよ」

敢えてボクの問いには答えず、穏やかに喋るツカサ君。

「……………」

「……そうだね、1日だけ。1日だけ考えさせてくれないかな……その間に決心がつけば……」

そうか、まあ結局はそうなるよね。仕方ない。でもジエミニとの戦いは、これで手を  
抜けなくなつたぞ。必ず勝つ。そう、遂にあれを使うときが……！

「いいよ、待つさ。ボクの提案だったんだから、ボクが待つのは当然だよ」

「フフ、ありがとうスバル君。さ、今度こそウチに帰ろっか」

あ、次のバスが来たみたい。

「そうだね、何だかもう、疲れちゃったよ……次のバスが来たから、それじゃあね」

今度はちゃんとバスに乗る。バスの窓から小さく手を振ってボクたちは解散したんだ。

——コダマタウナー

「オイ、スバル。今日はもう寝ちまおうぜ」

ロツクの提案は渡りに舟だ。ここからウィルスバステイニングいこうぜ！とか言われたらロツクと暫く口をきかない自信がある。

「そうだね……」

——星河家——

「母さん、ただいま」

「あら、スバル。おかえりなさい」

あかねさんは夕食の準備をしているようで、厨房からは美味しそうな香りが漂ってくる。寝る前にご飯食べてシャワー位は浴びておくか……

ーその頃・ゴミ集積所ー

ボクは、スバルくんに自分の出生を話した場所で一人、黄昏ていた。スバルくんならきっと、大げさだよ、なんて言って茶化してくれるだろうか。彼とブラザーになったら、もっと彼のコトを知ることが出来るのだろうか。ブラザーバンドとは、両者のあらゆる秘密を共有させることだと聞いているから、スバルくんの恥ずかしい秘密なんかもわかったりするのかな？フフフツ、なんだかおかしくなってきたぞ。それにしても……

「……ボクにブラザーか、まるで夢みたいだ。でも……本当に出来るだろうか、このボクに。……スバルくん、キミは『ボクたち』を受け入れてくれるかい……？」

彼なら大丈夫だと言う自分と、やっぱり信じられないと迷う自分がいる。もちろん、ヒカルのことじゃない。ボクの……双葉ツカサとしての葛藤だ。

『オイ！』

不意に、咎めるような声が聞こえた。

「ここは立ち入り禁止だぞ！ダメだろ！勝手に入ったら……！」

アナタにとってはまだの立ち入り禁止区域かもしれないが、ボクにとっては両親から

切り離され、第二の誕生ともいえるべき体験をした場所なんだ。しかし、この作業員の言葉は正論だ。たとえホワイトハウスで産まれたからと言って、敷地内に無断で侵入していい理由にはならないのだから。

「す、すいません」

「まったく近頃はルールも守れない子供が多いこと、多いこと！『親』の顔が見てみたいもんだ！本当に！」

「親……？親だつて？」

ダメだ。その言葉は言っちゃあいけないんだ……！

「どうせ、親からロクな教育も受けてないんだろ？」

「……うう………ぐっ！うぐぐぐ！」

ううー！もうダメだ、アイツが……ヒカルが、出る……！

くっ！い、意識が……

「何だ？反抗する気か？」

「……るせえよ」

……やつと、出てこれたぜ。

「な、何だど!?言葉の使い方も知らないのか!？」

あん？何だコイツ?……ああ、なるほど。親つて言葉に反応したのか。ケツ、いつも



息が荒い。心臓が早鐘を打っている。やはり、また暴れたな、ヒカル！そして、心の中で声が聞こえる。

(だから、オマエは甘ちゃんなんだよ。……ツカサ)

だからって！だからって、こんなコト……ボクは望んでいないんだ……！

「……………」

丁度いい。ヒカルにも話しておかなきゃ……

——数分後——

(な、何だと……！ツカサ、オマエ正気か!?)

ヒカルの驚愕した声が聞こえる。直接ボクが喋っているわけじゃないから、どこかエコーでもかかったような声だ。もう、慣れてしまったけど。

「いたって正気さ。ボクはスバルくんとブラザーになりたいんだ」

(……オマエ、忘れたんじゃないよな？オレたちは親に捨てられたんだ！まるで……ゴミみたいにな！そんなオレたちにとって、『絆』という言葉ほど憎いものはない！……違  
うか?)

……………そんなの、忘れるワケがないじゃないか……！

「忘れてないよ……そうさ、ボクらは捨てられた。そのことはいつまで経っても頭からぬぐい去ることは出来ない。だいたい、キミのような二つ目の人格が生まれたのだっ

て、親への憎しみが原因だし……忘れられるものなら忘れたい……今すぐに！」  
(だったらブラザーなんて下らないコト、言うんじゃねえよ)

呆れるような、そしてわずかな焦燥を滲ませた声でヒカルがボクに語りかける。こういう声を出すときは、ボクを説得にかかっている時が多いことを、ボクは知っている。「でも、ボクは……ボクはスバルくんが好きになった。それに……スバルくんのブラザーが羨ましくなったのも事実なんだ。どんな気持ちなんだろう、スバルくんのブラザーでいることって……」

(バ、バカバカしい！どうしちまったんだよ、ツカサ！オレは認めないぜ……絶対に！) とうとう焦りを表面化させたヒカル。ボクの決意が固いことを悟ったのだろう。ヒカルは昔から、相手の気持ちや悟る能力に長けていた。別に超能力とかいう類いではないけれど。

「お願いだ！ヒカル！こんな気持ち、生まれて初めてなんだよ！」  
(ふざけんな!!……いや、待てよ。……そうだな、オマエがどうしても言うなら、好きにしてもいいぜ)

何だ？急に意見が変わったぞ……。いや、ヒカルも復讐に囚われず、前を見始めるきっかけを見つけたのかもしれない。いつか、いつか二人で心の底から笑いあえるだろうと、この時のボクは信じていた。

「本当かい?」

(ああ、気が変わったぜ。オレは止めねえよ。……ククク)

なら、善は急げだ。明日の朝、早速電話してみよう。

——次の日・星河家——

——プルプル!!

あ、着信だ。ツカサくんかな?

「はい、もしもし……ああ、ツカサ君?」

『やあ、スバル君。あの……昨日の話の続きなんだけど改めてボクのほうから言わせて欲しい。ボクと……ボクとブラザーになつてくれないかな?』

よかった。ヒカルはともかく、ツカサ君は乗り気みたいで。結構元の性格と違うから、断られる可能性も考えていたけど……

「もちろん!こちらこそ、だよツカサ君」

「ありがとう、スバルくん」

「いいんだ、折角めでたい話なんだ。すぐにブラザーバンドを結ぼうか?ボクは今からでも会えるけど、ツカサ君はどこなら会える?」

「そうだね……ヤシブタウンなんてどう?」

「いいよ。じゃ、すぐ向かうから……」



「フフ……スバルくん、ホントありがとう。ボクは今、とてもドキドキしているよ。何せ初めてのブラザーだからね」

「誰だつてそうさ。ボクだつて初めてのブラザーバンドはとっても緊張したんだ。その気持ちは間違つてないよ」

「……そつか。じゃ、ボクもヤシブタウンに向かうから……忠犬バチ公の像の前で会おうか」

「うん、オツケー。じゃあね、ツカサ君」

「うん、じゃあね、スバルくん」

ー・ツ・ツ・ツ

通話の途切れた音だ。さ、覚悟は十分。

今日ボクは、双葉ツカサと本当の友達になるために行くんだ。ジエミニを倒すためじゃない。ボクなら出来る。大丈夫、大丈夫。やりきってみせる。

「オイ、スバル。今回はオンナども二人より、かなり積極的にブラザーを申し込んでいるな」

ロックが少し不思議そうに聞いてくる。事情を知ってるだけあつて意外だったのかな？

「そうかな……？ 思いの丈を話し合つて、それを分かち合ったならそれはもう友達つて

ヤツだよ。少なくとも、今のボクはそう思ってる」

「フーン……ま、好きにしろよ。オレは別に構わねえからな（しかし……あのツカサってヤツ、妙な電波を感じたな。以前感じたような気もするが……いや、気のせいだろう）」

よし、そろそろバスが来る時間だ。急がないと。

ーヤシブタウン・待ち合わせ場所ー

少し早く着きすぎたかな？ 周りを見渡すと、休日の盛況ぶりを見せてやる！……とばかりに賑わっているが、ツカサ君の姿は目に入らない。もう少し待つか……

学芸会でやった路傍の木役を練習した成果を披露するがごとく、周囲の空気に溶け込むように佇むボク。

気分はよく休載する某マンガの『絶』だ。

『スバルくん』

お、来た来た。雰囲気を見るに、まだツカサ君だね。

「やあ、待った？」

「いや、ボクも今来たところだよ」

……男同士でやっても、気持ち悪いやり取りにしか見えない気がするよ。

「なんか……少し照れ臭いな。ボク、緊張してるんだ。生まれて初めてのブラザーバンドだし……」

.....

「大丈夫だって。すぐ終わるよ。さ、結んでしまおうか、ブラザーバンドを」

.....あ。どうしよう。ミソラちゃんと委員長に相談とか、した方が良かったよね.....。ヤ、ヤバイぞ。事後報告で納得してくれるかな.....？

「うん。ブラザーになるにはまず、お互いの秘密を交換する.....そうだよね？」

ま、ボクの最大の秘密はもう言ってるんだけど。

「そうだよ。決心はついた？」

「うん、ボクは決めたんだ.....キミにはボクの全部を知っておいて貰おうって.....」

「そっか.....」

「ボクの秘密、それは.....うっ！.....うううっ！」

頭を抱えて唸るツカサ君。.....来るか。

「うぐぐぐあ！な、なんで.....こんな時に.....」

やはりツカサ君は、自分でヒカルが出てくることを抑えられないのか。

「(クククク。ここまですご苦労だったぜ、あとはオレに任せときな)」

「(ヒ、ヒカル.....な、何をする気だ!?)」

「(今オレたちが裏切ったらコイツ、一体どんな顔するんだろうな?)」

「(ま、まさか!)」

「オマエは暫く黙ってろ！」

「アグッ！」

時間にして数秒といったところだろうか。ツカサ君の雰囲気明らかに変わった。

「大丈夫かい、ツカサ君？」

「クツクツクツク……何でもない。さあ……スバルくん、ブラザーになろう」

「つたく、その変な笑いかたから出直してこい！と、言いたいもんだ。」

「……そう、だね」

「(スバル！そいつから離れろ！今すぐに!!)」

「(……わかつてる)」

後退りするように、ヒカルから距離を取るボク。

「……どうしたんだい？スバルくん」

少し不思議そうに訪ねてくるヒカル。いや、これはこちらが気づいていることに気が始めてきている……？

「(急に変わりやがった……まるで別人だ。……突然ニオってきたんだよ。FM星人が取り憑きそうな人間のニオイだ)」

「……FM、星人……」

「チッ……バレたか」

ボクの口からこぼれた声に反応したのか、取り繕うことすら止めたヒカル。

「オイ、もう出てきていいぞ。……ジエミニよ」

以前にも食らったフラツシユが収まると、そこにはジエミニがいた。コイツを殺れば……いや、ダメだ。ジエミニ・スパークとして倒さないと、ヒカル抜きで話すことができない。

「待ちくたびれたぜ」

相変わらず、王の右腕を自称するには言動が小物過ぎるんだよ、ジエミニ。上の立場なら、もっと余裕を見せてよ、余裕を。

「ジエミニー！」

「本性を隠してたってわけじゃあ、なきそうだね」

「勘づいたようだな。そうだ、コイツには人格が2つある。……多重人格者なんだよ」

「……そういうコトか」

ロツクも合点がいったようだ。

「お前の予想は惜しかったぜ。正直結構ヒヤヒヤさせられたんだ、バレちまったかってな」

「そう、コイツにはツカサってヤツとヒカルってヤツの人格が宿っている」

ヒカルの言葉を補正するように、ジエミニが説明する。四重人格者のデュエリストを知っているから、あまり驚きを感じない。

「……………」

「クツクツクツク。まさか自分がブラザーを結ぼうとしていたヤツがこんなのだっただんて、考えもしなかっただろ？ ええ？ 岩男さんよお!! …… ついでにもつと良いことを教えてやるぜ。オレがオマエに近づいた目的……それはオマエの相棒が持つ『アンドロメダのカギ』だ」

「どういうこと？」

惚けたフリをするボク。アンドロメダを正攻法で倒せることは知っているし、ふん。といった感じだ。

「ケケツ、ブラザーになりやあ、その有りかを突き止めるのも簡単なもんだろ？ オマエを利用しようとしてたんだよ、オレはな」

「ツカサ君がそんなことするわけないでしょ？ デタラメもいい加減に……」

「そいつは、どうかな？ オレとツカサは同一人物なんだぜ？ …… 心の中で考えてることわかるし、話し合うことも出来る。コレはオレとツカサの総意なんだよ！」

いや、そんなハズはない。ツカサ君はちよつとホモホモしいだけの、優しい男だ。

「ククク……………グッ！ググッ、オ、オマエは引ッ込んでろ！」

再び頭を抱えるヒカル。やはり、ツカサ君は抵抗している。良かった、本当にヒカルと結託してなくて。

「ううっ……スバルくん……」

「氣をしっかりと持ちつんだ！落ち着いて、心を強固に保つことだけを意識して！」

……無駄だとわかっているけど、本当に苦しそうなんだ。何もしいのは、ボクの良心が痛む。

「ゴ、ゴメンよ……こんなコトになって……うっ……な、何がゴメンよだ……あまっちよろいコト言いやがって……!!いい加減目を覚ませ！ツカサ!!オレたちの目的を忘れたのか!」

これは……争っているのか。

心の中で、2つの人格が……。

——双葉ツカサ・精神世界——

「いい加減甘い考えを捨てろ！ツカサ!!オレたちの目的を、忘れたとは言わせねえぞ！」  
ぐうっ……!頭に響く……!で、でもボクは……

「わかっている、わかっているけど……!」

「ガキの頃から心に誓っていたハズだ!いつかオレたちを捨てた両親に復讐してやると!」

「でも……それとスバルくんは関係ないじゃないか！いいじゃないか、ボクがブラザーをもったって！ヒカルはただ暴れたいだけ、そうだろ!？」

「そんなコトはない！オレはジェミニのヤツから聞いたんだ！アイツの相棒が持つてる『アンドロメダのカギ』があればこの星を破壊するコトだって出来ると!……それをオレたちが手に入れれば、復讐なんて簡単に出来る！」

そ、そんなモノがあつたのか……でも、ダメだ。この機会を失つたら、ボクは多分一生、誰かを信用出来なくなる気がするんだ！

「でも……!」

「思い出せ！ガキの頃どれだけツライ日々を送ってきたか!!一人で生きるのがどれだけ苦しかったか!!」

「うう……!」

そうだ。ボクは……ボクがどれだけ苦労したかなんて、ボク自身が一番わかつてる!だから、ヒカルの言ってることも、絶対に否定はできない。ああ、そうだ。ボクは両親が憎いんだ!顔も見たことのない、双葉ツカサの親という概念に、堪えきれない怒りと憎しみを抱いている……!

「その苦痛のせいでオレたちは2つに分かれちゃった。……不完全な人間になっちゃった!!オマエだって、許せねえはずだ!少なくとも、オレは許せねえ!!こんなオレたちが、



この世界で救われる方法はただひとつ！復讐しかないんだよ！！憎しみは吐き出さなきゃ消えることはない！絶対！！」

ーヤシブタウンー

「目を覚ませ！！ツカサ！！アイツから『アンドロメダのカギ』を奪うんだ！！」

ヒカルの叫びを自身の中で聞いたらしいツカサ君の動きが止まった。もう、頭を押さえて苦しんでいる様子もない。今は、これでいい。これでいいんだ。

「……………スバルくん。ゴメンよ…………」

「ツカサ君……………決めたんだね」

「そうだ！オレたちにはそれしかない！さあジエミニ、出番だー！」

抵抗を失ったツカサ君の体を動かすヒカル。オマエとは一度、本気でぶつからなきゃいけないね…………。

「おうー！」

了解したジエミニがツカサ君の周りを覆っていく。電波変換だ。しかし、通常の電波人間と違って融合したあとに構成された電波の体は2つとなっている。もしかして、2つの人格それぞれが了承しないと電波変換できない仕組みだったのだろうか。

「……………二人」

「さあ、やるぞツカサ！！」

「……………」

ヒカルの声に返事はないが、逆らうつもりもないらしい。

「ハアツ！」

ツカサ君……ジェミニ・スパーク（ホワイト）から以前見た、プラスの電波が放出される。ヒカルの人格で動いているジェミニ・スパーク（ブラック）からはマイナスの電波だ。ジャミンガーの時とは違って、放出される電波に限りがあるようには見えない。

「あ、あれは……前に見た＋電波と－電波！」

『うおおお!!やるってのか!?!』

『何だ?!?うおおお!!』

『キー!!ちよつとアナタ!!』

『何さね!?調子にのって!!』

これは、またブラザー同士で争っているのか。人為的なモノとはいえ、見ていて気がいいはずがない。

「クツクツク。今度の＋電波と－電波は前に比べて、ワケが違うぞ。オレを倒さない限

り、消すことは出来ないぜ。もし騒ぎを止めたければ……ゴミ集積所の奥にある、廃棄物置き場までくるんだな！」

廃棄物置き場とは、シヨベルカーによつて塞がれた道の先にある場所のコトだ。因みにカードトレーダーSPもある。カードトレーダーSPがある。……何で2回紹介したんだろう。わからないな。

「……スバルくん。お願いだから、言うコトを聞いて欲しい……」

ツカサ君はとて苦しそうな顔をしている。

どっちなんだよ！キミは本当はどうしたいんだ！

「……わかった。廃棄物置き場だね？」

「もちろん、『アンドロメダのカギ』は持つてこいよ！……いいな!!」

クツ！……またフラツシュだ！やはり、目が馴れると、既に二人の姿を見つけることは出来ない。行つたか……

「どうするんだ!?!スバル!迷つてるヒマはないぞ!」

「わかつてる!ジェミニを引き剥がしてから、一発ぶん殴つてやるからね!付き合つてもらおうよ、ロック!」

「おう!その意気だぜ!……じゃ、行くぜ!廃棄物置き場へな!」

「ああ!」

早く解決して、ツカサ君とブラザーになってやる！  
ジエミニごとき、ベルセルクのかませにしてやるぞ！

## 41

ードリームアイランド・ゴミ集積所ー

やはり、廃棄物置き場への道はシヨベルカーによって塞がれている。まずはシヨベルカーを退かさなければ。

確か、都合よく作業員が持っていたシヨベルマンのカードを無くしていたはず。それの捜索に手を貸せば、貸し出しの許可が降りたはずだけど……あ、いた。作業員だ。困っている様子なので、やはりカードを紛失したらしい。……それって管理問題じゃない？

「おかしいなあ……この辺に落としたと思うんだが……」

「あの、ちよつといいですか？」

「ん？私に何か用かい？」

多分この人、昨日ヒカルに暴行を受けた人だ。分かりにくいのが、顔が少し腫れているし動きもどこかふらついている。もしかして、ヒカルに襲われた時に紛失した、とか？そこまで見越して廃棄物置き場に来いよって言ったのなら、最早策士じゃない？流石はFM王の右腕ということか……いや、ないな。たまたまでしょ、多分。

「ええ、シヨベルカーを退かしたいんですけど……あの通路の向こうに行きたいんです」「いや、いや、実はね。そのシヨベルカーを動かすカードを落としてしまつて……昨日この辺で不審者に襲われて気を失つてね、そのときに落とすたと思うんだ。キミも一緒に探してくれないかな？」

「ええ、もちろん。協力させてもらいますね」

さて、向かうは最も近くで稼働しているクレーン。

操縦室を保護している、窓ガラスに張り付いていたシヨベルカードを発見した。

「ありました！これですよね？」

シヨベルカードを見せ、確認を取る。シヨベルカードじゃなくてシャベルカードだった、なんてオチはなかったようだ。

「おお！見つけてくれたのかい!? 丁度いい。シヨベルカーの方もキミが動かすといてくれないかな？ 私もちよつと忙しくて……頼んだよ」

「わかりました、では！」

急いで先程のシヨベルカーが塞いでいる道に戻る。

カードイン！シヨベルマン・exe、トランスミッション！

『ドガガガ!!このシヨベルカーを動かすのか？ならばレバーを動かすといい!!ドガガガ

!!』

邪魔なモノはオレのシヨベルが退かしてみせる！ドガ！ドガガガ！！……という触れ込みらしい。トランサーにレバーが表示され、このレバーを操作することで、シヨベルマンに指令が行き渡る、という仕組みのようだ。

ええつと、左側に寄せてつと……よし。これでOK。

……先を急がないと！

——廃棄物置き場——

この先のエリアにジエミニ・スパークが……しかし、ゲームでは通ろうとした時に崩れ落ちたタイヤは、既に崩れて道を塞いでいる。思ったより規模が大きい。通るのは難しそうだ。

「オイ、スバル。ビジライザーを……って既にかけてるか」

「うん。ウエーブロードが隣のエリアに繋がってる……いけそうだね」

「そうとわかりやあ、早速ウエーブインだ！」

「了解！」

——廃棄物置き場のウエーブロード——

道が途切れている。電波が乱れているようだ。

「何か原因があるはずだぜ。……ん？あのデツカイ廃棄物が怪しいな……スバル、アレ

にウエーブインだ」

「アレだけウエーブイン出来るしね。怪しんで下さいって言うてるようなモンだよ」  
「クククツ、違いねえ！」

今回の戦いでは、なるべくジェミニ戦まで、ペガサス系のパワーアップは控えておきたい。

何せ変則的な2対1のバトルを強いられるんだ。体力を温存しておいて損はないだろう。それに、直前の戦闘データでも採られていたら困るしね。ジェミニにはそれが可能な手下がわんさかいるんだから。

――廃棄物の電脳ローラー

これは……ブルドーザーか。廃棄物の電脳なのに、背景がブルドーザーに処理されるゴミとはこれ如何に。

「あ……あれは、ジャミングガー？」

廃棄物の操作パネルをいじっているように見える。コイツいつも悪さばかりしてるな……

「電波が乱れているのはアイツのせいかもしれない、というかアイツのせいだろ」

「だよ。んじゃ、デリートで」



「おうー！」

しかし、ジャミンガールの元へ向かうウエーブロードは、ゴミの山が塞いでしまっている。このゴミも一種のセキュリティらしく、上空を通ることも出来なさそうだ。

「タ、タイヘンデス〜！ヘンナデンパガ　シンニユウシタセイデ、デンノウガ  
パニツクデス！」

確か埋まつてるデンパ君を探すんだっけ？苦勞しそうだな……

「どうしたの？」

「ジ、ジツハ……ブルドーザープログラムガ、カツテニ　アバレダシテ　コチ

ラノセイギヨガ　マツタクキカナイノデス。ヒエ〜〜！」

（>|<）……といった顔で訴えるデンパくん。これは後のコトを考えてもやったほうがいいな……

「どうしたら、元に戻るの？」

「ワタシト、ワタシノナカマガ　チカラヲアワセレバ、タブンセイジョウニ　モ  
ドリマス」

「で、その仲間はどこにいるの？」

「ブルドーザーガ、アバレタセイデ……ゴミノナカニ　ウマツテシマイマシタ……」

うわあ……やっぱりか……

「ソトカラデハ ドコニウマツテルカ ワカリマセン。デモコレヲ ツカ  
エバモシカシテ……」

そう言つてプログラムを渡してくれるデンパくん。これは……ソナー？レスキュー  
ソナーか。

「トランサーノ マップガメン ニ フレルト、ソナープログラムガ キ  
ドウシマス。ナニカガ ウマツテイルバシヨニ チカヅクゴトニ アオ  
↓キイロ↓アカ ノ ジュンデハンノウシマス」

なるほど、リアルだとこんな感じなのか。トランサーのマッププログラムと連動した  
仕組みになっているとは知らなかった。このプログラム、何かに使えないかな？埋蔵金  
発掘とか？いや、非現実的過ぎるか。

「コレハ ヒントニナルカ ワカリマセンガ……ワタシノナカマハ クルマ  
ノカイタイ ガ シゴトノデンパト……テレビノ ハイキガ シゴト  
ノ デンパデシタ…ゼビ、タスケテクダサイ!!」

「オツケー！ロックも、わかった？」

デンパくんの話つて聞き取りづらいから、長い会話だとよく伝わらなかつたりするん  
だよな。

「ああ、だいたい理解したぜ」

んじや、レッツ、トレジャーハント！

ー十分後ー

「プハーツ！タスカリマシタ！」

よし、これで最後。

「「ミンナ、ソロイマシタネー……デハ、セーノ！」」

よし、ゴミの山が取り除かれたぞ。コントロールパネルに行かなくちゃ！

ー廃棄物の電脳ー・コントロールパネルー

「そこのジャミンガー！」

「……ん？キ、キサマはロックマン！ジェミニ様の敵！」

「やっぱりジェミニの手下かよ……」

「先には進ません！」

お、コイツはやる気十分らしい。

「行くぜスバル！」

「もちろん！ウエーブバトル、ライドオン！」

見たところ、このジャミンガーは以前戦ったジャミンガー2のようだけど、あの時は

あつちがビビりまくってたからねえ……

「オラオラオラア！」

テンプレ通り、ジャミングマシンガンを連射しながら突っ込んでくる。動きながらの射撃なので、狙いはブレブレだ。それでも牽制する程度の意味はあるけど。

「ロック！」

「おう……ウオオオオオッ！」

久しぶりに聞いたロックの雄叫びと共に、テレポートと見紛う速度で突進し、ジャミングガーに突っ込む。多少のダメージは計算内だ。別に痛くもないし。虚を突かれるカタチとなったジャミングガーは、未だに右手からマシンガンの弾を吐き出し続けている。咄嗟には反応出来なかったらしい。

「ハアッ！」

左腕にライメイザンを展開し、斬りかかる。やっぱり行動阻害って最強だと思うんです。特にハメはね。

「ツ!?グアツ……グググ……」

特段耐久力があつたわけでもないらしく、あつさりとマヒにかかるジャミングガー。本格的に縛りを検討してみようかな……

「ハアッ！ハアッ！ハアッ！」

「ギヤアツ！ギヤアツ！ギヤアツ！」

フェイバリットに入れていたライメイザン以外にも、ヘビーキャノンが三枚来ていたので連続発射する。並のウィルスじゃあ、データの欠片も残らない程の砲撃だ。ジャミンガーのご冥福をお祈りします……。

「ふう、いいのだったね……」

「流星はスバル。やることに容赦とソツがない」

……それって褒めてんの？

「ジエ、ジエミニ様ー！ウガガアツ！」

「よし、早いところ正常に戻しちまおうぜ！」

「了解！」

……うわ、酷い。滅茶苦茶に設定されている。いや、でも初期設定ボタンで……

ーブルーーン！

「これで、外の電波も大丈夫になったろ。渡れるようになってるハズだぜ」

「よし、じゃあウエーブアウトしよう」

ー廃棄物置き場のウエーブロードー

よし、通れるようになってる。しかし、少し行った先も道が途切れてる。また探し回らなくちゃいけないのか……

「また途切れてるね……」

「ここも原因はさつきと同じだろ。……あのデツカイ廃棄物が怪しいぜ」

今度はスペースシャトルみたいなヤツだ。何でこんなモノが廃棄物扱いされているんだらうか？

「オツケー、んじやウエーブインしようか……」

――二十分後――

埋まっていたデンパくんを発掘し、ついでにまたコントロールパネルをいじっていたジャミングガーをデリートしてボクたちは、再び廃棄物置き場のウエーブロードに戻ってきた。リカバリー200を発掘出来たのはラッキーだったよ、うん。

「よし、この先のエリアにツカサ君がいるハズだ！」

「ああ、ジェミニのヤロウをぶっ飛ばしてやろうぜ！」

ロックの気合いも十分だ。

「いいかい、行くよ……！」

――廃棄物置き場2・現実世界――

遠目でジェミニ・スパークの位置は確認出来たけど、電波体のままでは向かうことは出来なかった。ウエーブロードが繋がっていないからだ。

なので、電波変換を解いてツカサ君の元へ向かう。

「ここで戦闘が始まるわけじゃないのを知っていなかったらとても出来ない芸当だ。」

「ツカサ君！」

「スバルくん……」

「来たな!!」

ボクの声に反応したツカサ君とヒカルがこちらを振り向く。ツカサ君が苦しげな顔をしているのに対し、ヒカルの方は好戦的な雰囲気だ。いや、平常運転つてところかな？

「先に言っておくよ。ボクはまだ、キミとブラザーになることを諦めていない。ジエミニを引き剥がした後に、改めてブラザーになるつもりだよ、ツカサ君」

「……キミとブラザーになりたかったのは本当なんだ。でも、ボクはもう……だから、それは無理なんだ。ゴメンよ、スバルくん……」

裏切ったコトを、気にしているのか。

大丈夫、ボクは大丈夫なんだ!……人は何時だつて過ちを犯す。だけどそれで終わりなんて、悲しすぎるじゃないか!

「……キミに理解してくれとは言わない。これはボクが決めたコトだから」

「クッククック! そういうコトだ。ザアーンネン、諦めるんだな! 岩男さんよオ!!」

ヒカル。お前の挑発には全力で応えてやる。……後悔、するなよ?」

「オイ、ロック。『アンドロメダのカギ』は持ってきただろうな？」

「フン、そう簡単に渡すと思うか？」

「だろうな。ならばチカラづくで奪うまでだ！」

ジェミニも簡単に渡さないことは理解していたらしく、戦う意思を明らかにした。

「こうするしか、ないんだ。ゴメン、スバルくん……」

「オレたちを止めたければ、さつさと『アンドロメダのカギ』を寄越すんだな！……ハッ！」

二人は浮遊し、ここからでも大きさのわかる大型アンテナにウエーブインした。あそこで、二人と戦うのか……。

「チツ！ 電脳の中に逃げやがった！」

ロックが推測するけど、それは違う。

「逃げる？ そいつは違うぜ！……こうするためだ！」

大型アンテナから、ヤシブタウンの時に見たプラス電波とマイナス電波が大量に放出される。

「そういうことか……！ あの廃棄物を利用して電波が届く範囲を広げる気だ！ このままだと、被害がデカくなっちまう……」

ー！ プルルルル！



着信？これは……ミソラちゃんか！

「もしもし、ミソラちゃん？」

『スバルくん!? 大変よ!』

もう既に、ジェミニのチカラが効力を発揮しているのか!……流石に早すぎるぞ!?

「どうしたの!？」

『た、大変なの! 周りの人が……』

ま、待てよ? ミソラちゃんは確か、委員長とブラザーバンドを結んでいたはずだぞ!?

「大丈夫!? ミソラちゃんは今何処にいるの!？」

『ワ、ワタシはヤシブタウンにいるんだけど、急に周りの人たちがケンカしだしたの!』

さっきまで、あんなに親しそうにしてたのに……』

よ、よかった。ミソラちゃんと委員長の衝突は避けられたらしい。

「そっか、教えてくれてありがとう、ミソラちゃん。それと、後で話しておきたいことがあるんだ」

『え? それってもしかして……エへ、エへへ……』

何だか妄想モードに入っている気がするんだけど、どうしたんだろう。

「ごめん! 時間がないんだ! 後でね!」

『え、あ……うん。頑張ってるね、スバルくん……』

「ありがとう！じゃね！」

ーブツツ！

「……どうする？」

「決まってるでしょ！止めに行くんだよ！」

「ヘッ！そう言うと思ったぜ！なにせ……お前のダチだもんな！」

フフツ、ありがとうロック。

……よし、ツカサ君とブラザーになりに行くぞ！これは曲げない、曲げられない！

「ああ！電波化してウェーブインだ！」

「おうよ！」

ここからは実力行使、お話をしようか！ツカサ君……いや、ジエミニ・スパーク！

## 42

「――廃棄物の電腦3――」

先程ウエーブアウトしたウエーブホールとは別のウエーブホールからウエーブインし直し、ボクたちは廃棄物の電腦に来ていた。

「…………この奥に、ツカサ君が…………！」

「よし、気をつけて進めよ！」

当然！誰に言ってるんだ！

「――二十分後――」

「…………プハア〜！アリガトウゴザイマシタ！コノゴオンハ　　ワスレマセン

ケツシテ…………」

じゃあもう少し、トレーダーの中のメットリオを減らして下さいお願いしますから！

…………さて、これで終了！多分、ここまできと同じように道を塞いでいたゴミの山が片付けられているはずだ。

…………ようやく、ようやくここまで来た。後はツカサ君…………ジエミニ・スパークに勝つだけ。その後は、その後だ。

——廃棄物の電腦3・最奥——

大型アンテナの電腦の最奥、そこには此方に背を向けコントロールパネルを操作するジエミニ・スパークの姿があった。

……ここからプラス電波とマイナス電波を飛ばしているのか。

「ツカサ君！」

此方の声を聞き、振り替える二人のジエミニ・スパーク。相変わらず好戦的なヒカルと対称に、ツカサくんの顔は暗い。だからツライならやめろよオツ！

「スバルくん……」

「もうやめるんだ！こんなこと……キミたちが吐き出した憎しみは、また別の誰かが心に宿すことになるんだぞ!?関係のない、誰かだ！」

「そいつは無理な話だぜ。オレたちは既に、優先順位を決めている。……地球をブツ壊して、オレたちの両親に復讐するつてなア！この広い世界だ。何処かにいるアイツらも死んぢまうだろうさ！……オレたちを捨てるようなクソ親が、地球の外に出ていけるようなエリートの子はねえだろうからな。エエ？父さんが宇宙飛行士のスバルくんみたいにはなア!!」

クソ！ヒカルのヤツ、予想より口が悪い！煽ってるな……このボクを！

「この……！」

「スバルくん、ボクは……ボクはボクのことを捨てた親が憎い。この憎しみは、復讐を果たすまでは消えないと思う」

「クツクツク……そういうワケで、オマエたちの持つ『アンドロメダのカギ』がどうしても欲しいってわけだ」

「ボクは決めたんだ。復讐のためなら……キミですら利用させて貰うって……！」

「ツカサ君！ボクはキミとブラザーになりたいんだ！ヒカルがいたっていい！ありのままのキミと、ブラザーに……！」

継ぎ目なく交互に話す二人のジエミニ・スパーク。

……もう、いい。対話はここまでだ。交渉決裂、相互不理解。なら、ボクの思いを……戦って押し通すだけだ！

「……さあ、お喋りはここまです。そろそろ決着を着けようか！」

「ツカサ君……この、この………わからず屋アツ！」

「やるぞスバル！ここは退くなよ！何があってもだ！」

わかつてる！

「ゴメンよ、スバルくん」

その言葉を放っていいのは地に倒れ伏してからだアツ！

「この戦い、ボクの全てをぶつける！ウエーブバトル、ライドオオオオン!!!」

だが、落ち着け。落ち着くんだ星河スバル。このパターンは前にもあった。そう、ハーブ・ノートの時だ。あの時はハーブが元々ロックを知っていたが故の対策だったけど、今回は違う。今回は大量のジャミンガーを有した人海戦術によって採取したデータによる対策をとってくるハズだ。なんせジェミニがバツクに着いてるんだ。勝率なんて、当然疑って計算するに違いない。だから……

「ロック！」

「ああ！」

「偽装血族・内包……ベルセルク！」

未知のチカラで圧倒する！目には目を、歯には歯を、雷には雷を、だ！

「うおおおおおっ！ロオオック!!」

「オラアアアッ！」

ロックの雄叫びと共に、ウオーロックアタックで突っ込んでいくボク！ベルセルクの大剣で斬りかかる。当然狙いはジェミニ・スパーク（ブラック）……ヒカルだ！コイツを、コイツを先に倒せば！

「……………」

「クッ！」

ツカサ君がロケットナックルを放ってくる！アレはガード不可だけど、弾速が遅いで動きの遅いやつか、動きを牽制するために使用するのが主なはずだ。

「ハアッ！」

慣れ親しんだモーションでロケットナックルを斬り裂き、再び攻撃を開始する……が、流石に体勢を立て直すには十分過ぎる時間を与えてしまったようだ。ジェミニ・スパーク（ブラック）もエレキソードを展開して鏝迫り合いとなる。

「よお、岩男……！ナンだよ、そんなチカラ、こつちのデータには無かったぜ？」

「こつちも警戒してたんだよ！あれだけジャミングがいたら、偵察役もいるって思うだろ!!」

「クツクツク……まあ、そう、だよな！それにしても……」

それにしても、何だ!?

「?……………グハッ！」

クソッ！背中に着弾……………ツカサ君か！

「……………」

無言で腕を構えるジェミニ・スパーク（ホワイト）。既に発射した腕は再生している。

「クソッ！」

「クツクツク……………オマエって結構周りが見えなくなる

タイプなんだなあ……背中がお留守だったぜえ!？」

「オマエは一度、そのよく喋る口を閉じる、努力をした方がいい!」

「そいつは無理な相談、だつての!」

跳躍し、斬りかかってくるジェミニ・スパーク（ブラック）。遅い、遅いが故に長く注意し続けなければならない! さつきからずつと、ツカサ君が死角に入り続けているんだ。気を抜くとロケットナックルがヒットしてしまう!

「そらッ!……セアアッ!!」

ツカサ君がいるであろう方向に、ここまでの戦闘で手に入れたパワーボム3を投擲する。パワーボム系統では最大の威力・範囲を誇るそれは、辺りを爆煙で包むという役割をきっちり果たしてくれる。そしてそのままジェミニ・スパーク（ブラック）の斬撃を受け止め、弾き飛ばす。今の内だ!

「チッ! この状況じゃあ、オレの不利か……だが!」オラアッ!」

今度は跳躍し、真上から突きこんでくる! そんな攻撃でえッ!!

「無駄だ!」

「ぐあッ!」

情けない声を出し、吹き飛んでいくジェミニ・スパーク（ブラック）。あの方向にはまだ、パワーボムの爆煙が残っている……



ーゾクッ！

マズい！よくわからないけどマズい！……取り敢えずシールドを！

「……うわあつ！グググ……」

爆煙を切り裂いて発射されたのはジエミニサンダー。そうだ、あちにはツカサ君がいたんだつた！なんとかシールドでガードできたけど、今のはかなりヤバかつたぞ……！

「チッ！これも防ぐつてのか……」

「……………」

「……………強敵だ」

これは、今までの敵とはまったく違うパターン。

このコンビネーションは厄介だ……！ならばこちらも！

「ロック、頼むよ！」

「ヘッ！任せとけ！」

ボクたちは電波人間になるにあたって融合しているため、口頭で話さなくとも意志の疎通が可能なんだ。今回は、それを活かす！

「行くぜ岩男オツ！」

「(スバル、もう片方のジエミニが右腕を構えてる。剣を振り切ったら発射してくるぜ)」

「オツケー！……！」

エレキソードを避け、ジエミニ・スパーク（ブラック）の背後に回り込む。

「よし、射軸を合わせて！」

「（白ジエミニと！）」

「（同時攻撃を！）」

「うおおおつ！」

下から掬い上げるようにジエミニ・スパーク（ブラック）……黒ジエミニを打ち上げる。不意を突けたようで、慌てて姿勢を直しているのがわかる。……今度はチャージショット！ボクの死角に立ち続けているが故に、その居場所には検討をつけられる！

「グッ！」

チャージショットを食らってマヒするツカサ君……白ジエミニ。今の、内イ！

「サンダーアツボルトオツブレイドオツ！」

空中に打ち上げられ、身動きの制限された黒ジエミニに向かい、ベルセルクのKFBを叩きつける！二度、三度と巨大化させた大剣で切り裂き、最後に振り抜いた剣から膨大な雷撃を発射する。サンダーフォース！……これはオシリスか。

「ガッ……グハッ……！」

よし、黒ジエミニは倒したぞ。ダメージが大きかったのか、気絶しているように見え

る。どっちみち戦線復帰は不可能だろう。

「ツカサ君！ヒカルは倒したんだ！……もういいだろ!?」

「……………ゴメンよ、スバルくん」

クソオツ!!一人でもやるつもりか!

「なら、せめて終わらせる!……すぐにでもだ!」

「スバル!油断はすんなよ!」

当たり前だ!

——二分後——

「グツ…………ハア、ハア、ハア…………」

ツカサ君との戦闘は直ぐに終わった。当たり前だ。今まで暴力を振るってきたのはヒカルで、ツカサ君は心の奥に引っ込んでいたんだから。そろそろ黒ジェミニも目覚めるだろうか。

「…………ハッ!ち、チクシヨウ、こんなハズじゃ…………!」

「…………うろう」

二人は完全に限界だ。

「く、くつそ…………!ぐああああ!!」

ジェミニが消滅し、二人の電波変換が解かれる。ここからだ。ツカサ君とは。ここか

らなんだ。

「ジエミニめ……ようやくチカラ尽きたようだな」

「よし、ウエーブアウトしよう……」

——数十分後・廃棄物置き場2——

「……うろう」

ツカサ君を担いでウエーブアウトしてから数十分。ボクはひたすら考えていた。ツカサ君に言葉を届かせるためにはどうすればいいのかを。未だにはつきりした答えは出ない。でも、気持ちをはつきりと示すことが事態を良くすることだつてあると、委員長が教えてくれた！

「……うろう……ハッ！」

どうやら、気づいたようだ。

「ここ、ここは……？そ、そうか……負けたのか」

脱力したようにふらつくツカサ君。

「キミは……ツカサ君のほうかな？」

わかつていても聞かなくちやいけないことだ、これは。

「うん、ボクはツカサだよ。ヒカルは……今、大分弱つてる。チカラを使いきつたんだと思う」

「そっか……」

「うん……もう、キミの前には現れないよ。キミと一緒にいるのはツライから……」

そう言つて立ち去ろうとするツカサ君。このまま行かせて、いいわけないだろ！

「ツカサ君！ボクはまだ、諦めてないぞ！……今日ボクは、キミとブラザーになるために来たんだ！」

「ボクだつて、キミとブラザーになれると、なりたいたいと思つてた。でも……ボクはキミを、手酷く裏切つたんだ。今更……」

「バカ言うな！こんなの気にしちやいない！友達つて、ブラザーつて、過ちを犯しても、お互いを許せる間柄つてことなんじゃないの!？」

「所詮、こんなものかもしれないね……人と人との関係なんて」

フツ……つと、投げやりに笑うツカサ君。ボクはそんな顔を見に来たわけじゃない！

「違う！誰かのためなら、どこまでだつて強くなれる！前に進める！それが人の絆で！誰もが心に持つ、スターフォースなんだ！」

「……それでもボクは、今更キミに合わせる顔がない。こうして話しているのだから、心が縛られるようで……ツライんだ」

胸を押さえ、所々つつかえながらボクに心情を話すツカサ君。多分、一刻も早くここから立ち去りたいんだろう。

でも、ダメだ。ここは譲れない、譲っちゃいけない！

「ツカサ君」

「……何だい？」

「キミはボクを裏切つて、心が苦しいんだろう？ボクという存在が、心を縛ってるんだらう？」

「そうだよ。キミにとっても大きな引け目を感じてる。もう一生、キミの前には現れないつもりさ。」

「……教えてあげる。ココロを縛られるのは、カラダを締め付けられるよりも苦しいんだ。」

「……？」

こんなときに、何の話だろうと首を傾げるツカサ君。

「ボクのブラザーの受け売りなんだけどね……だから、この一発で終わらせる！」

「え？」

何となく悟ったのか、及び腰になり後退りするツカサ君。ハッハッハ、逃がさんよ！

「歯ア食いしばれエツ！」

「ーバギツ！」

「グハアッ!？」

ツカサ君の顔面を、思いつきり殴ってやった。腰を捻り反動をつけて殴ったので、素人でもそれなりの威力が出たはずだ。

「ス、スバルくん……!?!」

困惑した様子 of ツカサ君。

「ほら、おあいこだ。電波体じゃないから、リカバリーでアザは治せない。……これで一方的な裏切りじゃなくなっただろ? キミはボクに危害を加える大義名分が出来たってことだ。……順序が逆だけどね」

「ボ、ボクは……」

「いいから! 気にしないで! ほら立って! ブラザーバンドの契約!」

「え? あ……うん」

ツカサ君が茫然自失といった状態の間に、さっさとブラザーバンドを結んでしまった。後はどうにでもなる!

ー数分後ー

ようやく落ち着きを取り戻したツカサ君。しかし未だにボクとブラザーバンドを結んだことを信じきれていないようだ。

「えっと、スバルくん。その、ボクは……」

「いいんだ。これでいい、これでいいんだよ」

「……わかったよ。ありがとう、スバルくん」

「さ、今日は疲れたね。……帰って休もうよ」

一件落着、とばかりに帰ろうとするボクに、ツカサが話しかけてきた。

「ホントにありがとう、スバルくん。でもボクは、キミの前から姿を消すよ」

え? どうして!?

「な、何で!？」

「このままじゃ、キミに迷惑をかけそうだから……。いつか、ボクがちゃんとヒカルを制御できるようになった時、正面から会いに来るよ」

ツカサ君の顔を見る。決意は固そうだ。でも……

「そんなの気にしないよ、ボクは」

「ううん、これはボクが決めたことなんだ。両親に復讐すると決めた時以来の、絶対にやり遂げるための決意。だからこればかりはダメなんだ。ゴメンね」

申し訳なさそうな顔をしているが、どこか吹っ切れたような気もする。うう……仕方ないか……

「……わかったよ。でも、ボクたちはブラザーだ。いつでも繋がってる。……具体的に今は週2で電話するからね!」

「プツ、アハハハハ! あー、もうこんなに笑ったのは久しぶりだよ……。うん、ボク頑



張るから」

「そうだよ、その意気だ！」

「うん。それじゃあ、ボクは行くから……」

「今夜辺り電話するからね？」

「フフツ、わかったよ。楽しみにしてる」

ツカサ君が行ってしまうことは防げなかったけど、彼は新しい絆を手に入れることが出来た。きつとこれでいい。これでいいはずなんだ。後は、委員長とミソラちゃんに話しておかなきゃ……

## 43

——???

ここはとある空間に作られた玉座。そこで王は一人、熟考していた。無論、現在侵略を目論む星についてだが。

「オックス、キグナス、ハープ、リブラ、オヒユカス、ジエミニ……余が送り込んだ戦士たちが悉く返り討ちに遭い、ハープに至つては敵に寝返る始末……やはり信頼できるのは己だけということか」

とある星の王は自らの手を握りしめ、決意をあらわにした。疑惑、恐れ、悲しみ、怒り。王のこれまでの人生が語っていた。疑わしきは罰せよ。容赦はしない、と。

「見ておれ、ウォーロック……いや、地球人ども。このFMプラネットの王自らの手で地球をかのAMプラネットのように死の星へと変えてくれよう！アンドロメダよ……もう一度、余にチカラを貸すのだ……！」

——翌日——

「ふあゝあ……うう、もうこんな時間か……」

夕べは遅くまでツカサ君と話し込んでたからなあ……ツカサ君の話では今暫くは国

内にいるけれど、いずれは国外に出て多くのモノを見て回りたいそうだ。世界を知って、それからヒカルともう一度話し合おうらしい。大変だけど、今のボクはこれまでの人生で一番ワクワクしている、とはツカサ君の弁だ。そんなツカサ君を、ボクは尊重していききたい。

「スバル〜！ルナちゃんが来たわよ〜！」

「はぁーい！」

——ガチャツ！

「おはよう。今日もいい日だね、委員長」

何だかとっても気分が軽い。自然と口角が上がってしまった。ああ、そうだ。ボクは新しいブラザーを手に入れたんだ……………ハッ！し、しまった。委員長とミソラちゃんにも言わないと……………

「ツ……………え、ええ。おはよう、スバルくん。どうしたの？何かいいことでもあった？」  
朝から顔を赤くする委員長。ボクの顔を見て赤くなったので、ニコニコ笑ってるボクにイラついたのだろうか。以前はニコニコしながら手を振ったらガチギレされかけたし。あのときは煽ってるように見えたんだっけ？

「あ、うん。そうなんだ。実はね……………」

——少年説明中——

「ええっ!?! ツカサ君とブラザーに!?!」

愕然とした様子の委員長。まあ、言わなかったのは悪いと思ってるけどさ……

「うん。ゴメンね、言えなくて」

「えっと、その……双葉ツカサ君のことよね? また国民的アイドルとかじゃないわよね!?!」

何故か涙目の委員長。いったいボクが何をしたって言うんだ? (棒)

「ほらほら、落ち着いて……委員長らしくないよ、そんなに取り乱すなんて」

「こういう委員長にはコレだ。」

「ううっ………んっ、ちよつとくすぐりたい……」

あら不思議、頭をナデナデするだけで落ち着きました! きつとボクの左手には、人を落ち着かせるチカラが宿ってるに違いない。電波化するとロックの顔が宿るけど。早くハンターV.G欲しい。

……いや、冗談だよ。委員長はこれまで、あまり親の愛情を受けられなかったんだ。最近関係が改善したとはいえ、まだまだ甘えたい年頃なんだろう。

「ん………ハッ! ス、スバルくん! も、もういいわ!」

「はぁーい、それじゃ、行こうか?」

「ええ、そうしましょう。……おばさま! 行って参りますわ!」

「フフツ、行ってらっしゃい。ルナちゃん、スバルをよろしくね」

圧倒的あかねさん！もう最近は見られてもどうってことなくなってきたような気がするよ。

「お任せくださいな！スバルくんはこの私がキツチリ面倒見ますので！」

「そう……ならこのままスバルのコト、お願いしちゃってもいいかしら？」

「それは……！ス、スバルくんの了承がないと……えっと、その……」

もごもごし出した委員長。何だか歯切れ悪いな……

「ハイハイ、それじゃ行ってきます！ほら、委員長も」

「スバルくん、これは、えっと、別に嫌ってわけじゃなくて……その、お互いに……ああ、

もう！行ってきますわ！」

「フフツ、気をつけてね」

やはりラスボスはあかねさんかもしれない。

1-5-A教室

「ええ、今日はみんなにお知らせがある。昨日、ウチのクラスの双葉ツカサから、休学したいという申し出があった」

帰りのホームルームで、突然語りだした育田先生。周りがざわめく中、不思議と育田先生の声は教室に響いた。

「先生が対応したが、本人の意志は固かった。どうしてもやりたいたいことがある……ということだ。なので、暫くはツカサに会えなくなるが、必ず戻ると本人は電話で言っていた。……だからな、ツカサが帰ってくるまで、みんなで待とうじゃないか！そして、戻ってきたツカサに言つてやろう！おかえりーッ!!つてな」

「そうだ！ツカサはいいヤツだったんだ！」

「アイツはいつまでも、5—Aのクラスメートだぜ！」

「オレ、アイツが帰つてきたら牛丼おごつてやるんだ！」

「ボクたち5—Aの絆は不滅ですよ！」

「凄いよ、やつぱり。このクラスは凄い。ボクはこんなクラスで学校生活を過ごさせて、本当に幸せだ……！」

——放課後・星河家——

ツカサ君の休学という一騒動があつた後、ボクはミソラちゃんにもツカサ君のコトを告げるべく、震えながらトランサーの操作パネルをいじつていた。

——プルルル……

こちらから電話をかけているため、その音は控えめだ。さて、そろそろ……

——ガチャッ！

『はい、もしもし』

出た！

「あ、ミソラちゃん？」

『スバルくん！待ってたよ！私、待ってた！』

……なんでこんなにハイテンションなんだろう。

「ゴメンね、連絡するの遅くなっちゃって……」

『ううん、いいんだよ！それで、話しておきたいコトって何かな!?』

あ、そんなに気にしてくれたんだ。なんだか申し訳ないな……

「えっとね……」

『うん、うん!』

「その、実は……」

『(フフフ……ルナちゃんには悪いケド、やっぱり初めてのブラザーの存在は大きいって

コトね)』

「実は、新しくブラザーバンドを結んだんだ」

『』

「え？」

『……………』

反応がない？いや、委員長の時は大丈夫だったし……

『……………どんな子なの?』

あ、確かに。気になるだろうし、普通の反応か。

「えっと、『双葉ツカサ』って名前の子なんだけど……」

『(ツ、ツカサ!?)は、判断に困る名前ね……いや、でもどっちなんだろう?ここまでの傾向を振り返ると……お、女の子の可能性が高い、よね……)も、もしかして、クラス委員長やってるようなしつかりしてて、それでいて手の出しやすそうなコ?』

……何処かで聞いたことあるような特徴なんだけど。

「イヤに具体的だね……」

なにやら長い葛藤があつたような声だつた。

……大丈夫、だよね?

『アハハ……つ、続けてスバルくん』

——少年説明中——

『なるほど、そういう子だつたんだ……その子のブラザーは、スバルくん一人だけなんだよね?』

実は、ボクのブラザーに限ってツカサ君の出生や二重人格のコトを話す許可はもらつている。昨日話した時に、ツカサ君のほうから申し出てくれたんだ。ボクのせいでキミに迷惑はかけたくない、つてね。



「うん、そうだよ。ツカサ君は今、自分の中の人格を制御するために頑張ってる。ボクは彼を応援したいし、そんな彼のブラザー……友達でいたいんだ」

『なるほど……むむむ、わかったよ。でも、今度またヤシブタウンに付き合ってもらわね！』

あ、委員長の時結構大変だったからなあ……また行くうっていうなら悪くはない。あつ、そうだ。

「もちろん、喜んで！ついでに委員長も連れてっていいかな？カフェで奢る約束があるんだけど……」

『スバルくん？』

地の底から響くような声だ。この声には、逆らっちゃあいけない。

「すいません冗談ですハイ」

『フフツ、ならよろしい！いい？女の子の誘いは、大事にしくちやダメなんだからね？』

「わかっておりますとも！」

いやあ、なんでこんな馬鹿げたことをしようと思ったんだろう。きつと錯乱してたんだね、うん。

『それじゃ、ヤシブタウンのコト忘れないでね！……あと、ちゃんとルナちゃんにも付き

合ってあげること！わかった？」

「ハイ！」

『……………うん。じゃ、またね！』

「またね……………」

「プツツ！」

「……………はあ」

「なんだかドツと疲れた……………」

「クツクツ……………自業自得ってヤツだな、スバル」

「なんだよ！ロツクまでさあ！」

「ちよつとくらい労ってよ……………。相棒が大変な思いをしたつてのにさあ……………」

「ま、これもハープの言う青春ってヤツなんじゃねえの？」

「……………ロツクって、青春が何かわかってるの？」

「さあな。だがよ、今のオマエを近くで見るとな……………まったく退屈しねえぜ！」

「ギャハハハハツツ！つと笑うロツク。酷いな、もう……………」

「あ、ロツク。今日はどうする？」

「そうだな……………お！いいコトを思い付いたぜ！」

「ロツクが方針を提案するなんて珍しい。別にやることもないし、話くらいは聞いても

いいかな。

「ホラ、オレたちのバトルスタイルって、基本は接近戦だろ？」

「まあ、そうだね。どちらかと言うと、ロックの特性にあったバトルスタイルなんだけども」

だつて遠距離系に補正とか、かからないし。強敵だと銃口の向きから避けられそうなんだよね……

「まあ、そうなんだが……だがよ、常に接近戦ばかりだと雑魚の相手でも消耗するし、ここは中遠距離寄りのフォルダを組んでみる、というのはどうだ？」

ふむふむ、一理あるか。……それに、戦場を俯瞰で見る訓練にはなりそうだし。プラスもある。悪い提案じゃないな。

「いいよ、暫くはそつち系のバトルカードの収集を優先しようか。……今日からやるの？」

「当然！」

トホホ……

——星河家・夜——

つ、疲れた……ああ、今日は『危ない暴れん坊ウルトラ大將軍』の放送日だったのに……ま、まだだ、モンドコロニウムレーザーをこの目で拝むまで、寝るわけには……

『ハアイ、スバルくんヤツホー!』

テレビに映ったミソラちゃんの幻影が見える。いや、現実逃避か……

「も、もうダメだ……」

い、意識が遠のいていく……

——スバル寝落ち後——

「ス、スバルくんが倒れちゃった!ど、どうしよう!?ねえ、ハープ!」

「クスクスクス……落ち着きなさい、ミソラ。ボウヤは寝ているだけよ……いや、コレはチャンスね」

「チャンス?」

「そう、あのルナってコに先んじるための……チャンスなのよ!」

「オマエら、オレがいるってコトを忘れちゃいけないか?」

「アラ、年頃の男女の機微もわからない、ガサツなロツクは黙ってなさい。ねっ、ミソラ!」

「ねーっ!」

「取り敢えずスバルの冥福を祈ってるか。強く生きろよ、スバル……」

主人が寝落ちした部屋は、暫く賑わっていた……

——翌日・朝——

ーチユンチユン……

「……ハッ！し、しまった。『危ない暴れん坊ウルトラ大將軍』、見逃してしまった……！」

この星河スバル、一生の不覚！しかし、寝る前にミソラちゃんの声が聞こえたような……

「……………んっ」

「え？」

オイオイオイオイオイ、ちよつとなんでベッドに膨らみがあるんですか教えてください  
いお願いしますからあ！

そーつと、シーツをめくる。そこに眠っていたのは……

「……………んっ……………」

ギャーツ！未だ眠りから覚めないミソラちゃんの姿だった！しかもパジャマだ！どこから持ってきたんだよ！？し、しかしマズい。これはマズい。

「ロオオック！」

全力のウォーロックアタックの合図よりも全身全霊でロックを呼ぶボク。とにかく  
余裕がない。

「ころせ！」

あ、ビジライザーをかけてなかった。まったく、ソロが羨ましいよ。

「ロック！これは!?どういうことなの!」

涙目になっている自覚がある。

「そのオンナに聞いたらどうだ?」

え?

「え?」

「……うーん……あ、スバルくん、おはよ」

寝起きのため、眠たげな目付きがどこか妖しい魅力を醸し出していて、ボクは吸い寄せられるように……じゃない!落ち着け、落ち着くん。星河スバルは狼狽えない!「ああ、おはようミソラちゃん。ところで、夕べの記憶がないんだけど何で隣で寝てたのか、聞いてもいいかい……?」

恐る恐る、といった具合に問いただすボク。

「え……?スバルくんと一緒に寝ようって言ったんじゃない。……忘れちゃった?」

フフ……と妖しい笑みと共に衝撃の事実を告げるミソラちゃん。う、嘘だろ承太郎!

「な、何だって……!」

「フフツ、冗談だよ、冗談。スバルくんがテレビの前で倒れちゃったから、ベッドまで運んだんだけど、ワタシまでウトウトしちゃって……」

な、なんだ。ボクが誘ったとかじゃないのか。なら安心……は、出来ないな。それに今日は平日、学校があるんだった！

「ミソラちゃん！ボク、今日学校あるんだ！」

「あ、ワタシの学校は今日、創立記念日だから気にしなくていいよ？」

畜生！ミソラちゃんの余裕はコレが原因か！

ああ、もうそろそろ委員長が……

『スバル〜！ルナちゃんが来たわよ〜！』

あ。

「ヤバい！もう行かなきゃ！」

「あ、ワタシも付いて行っていい？」

「無理だよ！」

「大丈夫、電波変換してスバルくんのトランサーの中にいるから……ハープ！」

言うが早い、ミソラちゃんはハープと電波変換して、ボクのトランサーに入ってしまった！

「えええ……嘘お……」

トランサーの画面では、画面の大きさに合わせてデフォルメされたハープ・ノートがウインクしていた。

『スバル〜!』

うわわ、あんまり待たせると委員長の機嫌がヤバイ!  
「はぁーい!今行くよ!」

こうしてボクの長い1日が始まった……



## 44

ーコダマタウンー

ーガチャツ!

「お、おはよう。委員長……」

「あら、スバルくんおはよう。……顔色が悪いけど、何かあった?」

「どうやら昨日の疲れが顔に出ていたらしい。苦笑いしてたってのもあるかもしれないけど。」

「いや、何でもないって。フツツ、ありがとう。心配してくれたの?」

「い、いや……その、ちよつと気になっただけだから! 何もないならいいんだけど……」

「行つてらつしゃ〜い!」

「今日もあかねさんは満面の笑顔だ。いや、とても嬉しいんだけど何やら寒気が……」

「わあっ!」

「な、何? どうしたの!」

「左腕のトランサーが勝手に動き出した……? いや、ミソラちゃんの仕業か!……画面

にはムスツとした顔のデフォルメハープ・ノートが映っている。フキダシが出ているぞ……何々、なんか新婚さんみたい、だって？知らないよ、そんなこと……

「な、何でもないよ……」

「そう？まったくスバルくんだったら、世話が焼けるわねえ……フツツ」

なんでそんなに嬉しそうなんですかね。こういう年相応の可愛いところもあるんだなあ……つて、うわあ！またかよ！ミソラちゃん自重してください……！

——コダマ小学校5—A—

ここは普段ボクたちが授業を受ける教室だ。生徒用のデスクには全てPCが搭載されており、トランサーとデータのやり取りをすることで宿題なり、ドリルなりのデータを送受信出来るというわけだ。

「よくし、みんなちゃんと座ったか？それじゃ、授業を始めるぞ！今日は……算数の教科書、24ページをからだな。オマエたち、ちゃんと宿題はやって来たか？」

育田先生の声で授業が始まったことを悟る。どうやらこの後の苦労を想像して、現実逃避していたらしい。トランサーを見ると、フキダシが出まくっている。面倒くさいのでデフォルメハープ・ノートに向かって、

「(ゴメンね、ちよつとミソラちゃんのコトを考えててボーツとしちゃった)」

そう言つて授業に集中しようとしたけど、トランサーの画面を確認したらフキダシは

消え去り、代わりにトランサーが熱を持ち始めた。ア、アチツ！

——休み時間——

幸運にも、授業中にボクの行動を訝しがられることはなかった。隣のデスク……ツカサ君が不在だったのも大きかったのかもしれないけど。今は委員長と話し込んでいる。話題はトランサーに書き込んでいない情報のことだ。まあ、好き嫌いとかそういう類いのものだけだ。それに、この話題になってからハープ・ノートがトランサーを動かすこともない。平和な話題だ。

「あ、そうだ委員長。ボクたちはブラザーなワケだけど、何かトランサーに入力してない、気になるコトとかってある？」

「そうね……スバルくんの好きな食べ物とかってワタシ、あんまり知らないわ。あ、あと、気になる人とか……」

最後はボソツと言ったので聞こえなかったけど、言いづらいことか……あ、もしかしてもっと早く登校したいとか？誰よりも早く登校して、委員長の威厳を見せたい……とかなら納得出来るそうなのが委員長なんだけど。フツ……ドヤ顔で、登校してきたクラスメートに向かって挨拶する委員長可愛い。

「オーイ、スバル……ドツジボールしようぜ！」

あ、ゴン太の声だ。そういえば、今日の昼休みはドツジボールをするって約束してた

んだっけ。実はボク、結構ドツジボールは好きだ。使うボールは結構柔らかいヤツだから、トランサーを着けたままでも出来るし、カウントプログラムを用いるので正確にアウト・セーフがわかるという親切仕様だ。

「はぁーい！あ、委員長……そういうわけだから、また今度ね！」

「あ……うん……また、今度ね……」

学校にいれば何時だって話せるのに、なんであんなに寂しそうにするんだろう。トランサーの画面ではデフォルメハーブ・ノートが強敵だねえ……というフキダシを出しているが、何が強敵なんだろう。まさかボクのトランサーにウィルスが!?

「オイスバル！まだか〜!？」

「ハイハイ！今行くよ〜!!」

まあ、いいや。ウィルスならハーブ・ノートが何とかしてくれるでしょ。フフツ、今宵の左腕は血に飢えているぞ……!?

――放課後――

「よし、それじゃ、帰りのホームルームも終わり！オマエら、寄り道しないで真っ直ぐ帰れよ〜!」

『はぁーい!』

……やっと、終わった。体育の授業の時なんか、ずっと震えっぱなしだったもんね。特に着替え中は。ボクの着替えなんか覗いて、何が楽しいんだろうか。よし、とにかく帰ろう。流石に今日位はロックも外出を諦めてくれるはず。ほとほと疲れたよ……。

「あ、スバルくん？い、一緒に帰らない……？」

おっと、委員長だ。というか、頻繁と言えるくらいには一緒に下校してるんだから、あんまりビビらなくてもいいんじゃない？

「もちろん喜んで！」

「……そう！フフツ……」

「あ、そういうえばゴン太とキザマロはどうしたの？姿が見えないけど……」

「ああ、あの二人なら算数ドリルで居残りよ。まあ、キザマロはゴン太の付き添いなんだけど……」

「アハハ、キザマロらしいね」

「フフツ、そうね……」

うわわつ、またかよ……！相変わらずトランサーでは不機嫌なハープ・ノートが映っている。タチの悪いウィルスより厄介だぞ、これは……！

「あ、マンシヨンが見えてきたわ……じゃあ、スバルくん。またね……」

毎回思うんだけど、何でそんなに傍げに笑うんだろう？一生の別れみたいじゃない

か。

「委員長は、もう少し明るく笑っての方が可愛いよ。自信満々な委員長じゃないと、こつちも調子狂っちゃうしさ」

ーゴフン！

委員長の顔と、左腕のトランサーから爆発的に湯気が迸ったような気がした。アチツ！熱いって！

「ス、ススス、スバルくん!？」

「アチツ！……え、何？」

「アチツ？い、いえ……その、今のは……？」

一瞬訝しげな顔をした委員長だけど、すぐに顔を真っ赤にして問いただしてきた。照れくさいのかな？まあ、自分の表情のコトを突っ込まれたら、誰だって恥ずかしくなるか。

「そのまんまだよ。儂げな委員長もキレイだけどね」

「ワワワ、ワタシ、今日は帰るわ！」

キヤーツ！つと、珍しく慌てて走り去る委員長。今日は中々、珍しい委員長が見れたな。

さて……

「ミソラちゃん、今日はどうだった？」

別にトランサーに話しかけていても、普通に通話しているようにしか見えないはずなので、問題はない。

『さっきのルナちゃん、スツゴく可愛かった……』

「え？」

『え？あ、ゴメンゴメン！今日はアリガト！楽しかったよ、ワタシ！』

楽しかったならいいんだけどね。

「そっか。けど、いい学校でしょ？コダマ小学校って」

実際に自慢できる程度にはいい学校・いいクラスだと思う。

『そうだね、ワタシもスバルくんと同じ学校に通いたかったよ……』

「でもウチの学校、ミソラちゃんのファンが多いから、大パニックになりそうだけどね」

『アハハ……』

実際ゲームではなるしね。

「さ、今日はもう帰るよ。ボクの部屋でウェーブアウトすればいい」

『うん、わかった。あ、ヤシブタウンのコト、忘れないでね！』

「はいはい、ちゃんと覚えてるから」

『むーっ、なんだかおざなりだなあ……』

気のせいですハイ。

——星河家——

さて、ミソラちゃんも行っちゃったし、今日は早めに寝るか……

「オイ！スバル！」

「あ、ロック。いたの？」

「二日中ずつといたわ！トランサーの中でなあ、アイツらの機嫌を窺いながら過ごすの、スゲー大変だったんだぞ!！」

あ、それはそれは……ご迷惑をおかけしました。

「悪いね」

「軽ツ!？」

「でも楽しかったでしょ？」

「あんなんキツいだけだったの!！」

ロックのフラストレーションがヤバい。まるで爆発寸前の火山と言ったところだ。しかし、今日はもうウイルスバスターをやる体力もないし……あ、そうだ。

「じゃあ、昨日集めたバトルカードでフォルダをつくってみるってのは？これなら体力も要らないし、ボクも付き合えるよ？」

「そういうのだよ！そういうのがやりたかったんだ！オレは!！」



「それじゃ、持ってくるから……」

ウィルスバスティングのリザルトで手に入るバトルカードのデータはあくまでデータなので、カラのカードにバトルカードのデータを入れないと現実でやり取りするのは難しい。表面上は取り繕ったウィルスデータだった、何てのもあるし。しかしウィルス対策に関わるツールだから、というよりも様式美としてトレーダーや店売りの商品の仕様としてリアルなカードを採用している部分もある。カラのカード自体は安売りされているので、手に入れるのに苦労はしない。

「……つと、こんな感じだね」

ざつと広げてみると、結構集まっていることがわかる。苦労したなあ……

「おつ、このヘビーキャンオンってのはいいんじゃないか？」

当然3積みを決まっているじゃないか！早く3の環境にならないかなあ！同名カードは三枚までなんて、そんな殺生な……

「このファイアバズーカなんてのも良さげじゃない？ 不動の重砲撃型……ロマンがあるよね」

「おお……ロマン！ いいなソレ！」

ロックもお気に召したようだ。ヴァーチエカッコいいよね。途中でセミヌードになるけど。因みにボクは金ジムが好きです……ネタとして。あとはフラッグ。あれはお

かしい。主にパイロットが。

こうしてボクたちの賑やかな夜は過ぎていった。

……最近、ボクの部屋賑やか過ぎない？

——翌日——

ね、寝不足だ……

『スバル〜！』

も、もう来たのか……

「はぁーい」

——ガチャツ！

「お、おはよう委員長……」

「大丈夫!? アナタ、昨日より顔色悪いわよ!」

「ああ、うん。ちよつと寝不足なんだ……」

　　瞼を擦りながら言うと、委員長はおずおずと手を差し出してきた。何、この手は……  
?

「ホ、ホラ、今日のスバルくん、フラフラしてて危なっかしいじゃない? だ、だからこのワタシが! わざわざ手を引いてあげようかと思ったのよ! 嬉しいでしょ! 嬉しいって

「言いなさいよ！」

「あーうん、ありがとう。……委員長の手、あつたかいな……」

「さ、さあ行きましょう！」

「ウフフ……」

この声は、あかねさん……？ま、また見られたのか……

やはり大魔王あかねさんからは逃げられない……！

## 45

——放課後——

「し、しまった！もう放課後だよ……」

授業中は白目を剥いたまま寝ていたために、意識はなかったのでバレていたかも……。いや、育田先生のことだ、確実にバレているだろうね。

……後で謝りに行くか。

「(そういえばよ、スバル。あのツインドリルのオンナとカフェに行くんじゃないのか?)」

あー、うん。すっかり忘れてたね、こりや。今日は授業時間の少ない日だし、丁度いいかな？あ、丁度委員長が荷物を纏めてる。纏めるといっても、トランサーの他にはデータとして取り扱えないモノだけなので、あんまり大荷物にはならないのが電波社会の現状だ。

「委員長つ」

「ヒヤッ……って、なんだスバルくんね。まったく後ろから耳元で囁くのは止めてちょうだい。心臓に悪いわ」

「ロックマン様に囁かれたコトを思い出しちやった？」

「くっつ………で、何かしら？」

ロックマン様カツコいいもんね。しかたないね。(棒)

「あ、ほらこの前さ、ヤシブタウンでカフェご馳走する……みたいなコト言ったじゃない？」

「ええ………そうね」

途端にツインドリルをいじり出す委員長。委員長がヤシブタウンに行きたいって言ったんじゃないか？

「で、今日は授業時間が少ない日じゃない？」

「そうね」

興味無さそうになっているが、ツインドリルをいじる速度が上昇しているので満更でもないはずだ。

「ボクも一杯寝てスッキリしたし」

「アナタねえ……」

何だか嬉しそうにため息を吐く委員長。なんで嬉しそうなの？世話焼きが好きとか？

「だからさ、今からヤシブタウンのカフェに行くってのはどう？」

そう言った瞬間、委員長の目がパアーツと煌めいたのが見えた。ま、眩しいよ委員長

……

「しよ、しようがないわ！スバルくんが行きたいって言うなら、ワ、ワタシはいいわよ？」

「よし、決まり。じゃ、早速行こうか」

「え、あ……うん」

「ほら、どうしたの？……エスコートでもしてあげようか？」

「いい、いらぬわよ！」

冗談めかして言うど、顔を赤くしながら憤慨する委員長。やっぱりエスコートは恥ずかしいよね。ボクも恥ずかしい。

委員長なら似合いそうではあるんだけど。ほら、割と高貴なイメージあるし。ボクだってそれなりの格好をすれば……いや、止めとこう。小学生同士だから微笑ましい光景になるだけだね。

ーヤシブタウン・カフェー

「おお……」

なんとというか、新鮮だ。実は件のカフェにはツカサ君と話した時に一度来ているんだけど、純粹にティータイム（なのかな？）目的で来たのは初めてだ。トランサーのデジ

タル時計を見るとまだ3時を過ぎた辺りで、他の客の姿も少なくあまり人の目を気にしなくていいのはラッキーだと言えるのだろうか。

「どうしたのかしら?」

優雅に注文したケーキを食する委員長。動作が洗練されていて美しいので、ついつい目がいってしまふ。

「あ……うん。実はこういう店って、あまり来たことがないんだよね」

「フフツ……そうなの?」

なんだろう。調子狂うな。ボクは今、錯乱しているに違いない。委員長が、とても輝いて見える。なるほど、動作一つでここまで印象を変えるのか……少し、勉強してみようかな。

「それに委員長って、キレイだし……」

「え?あ……ス、スバルくん?」

年相応に可愛らしい狼狽え方をする委員長。

「いや、マナーっていうの?凄く優雅っていうか……」

「あ……そうよね!マナーのことね、アハハ……」

何故乾いた笑いをするんだろう。正直に言ったのに。

「うん。ボクもちよつと練習してみようかなって」

「な、なら……ワ、ワタシが教えてあげましょうか？」

おお……助かる。いや、迷惑になっちゃうよね。

「そういえば、委員長は誰から教わったの？」

両親は遅くまで帰ってきていなかったから、両親は除くとして……誰なんだ？

「ああ……マナー専門のティーチャーマンがあるのよ」

なるほど。そういうタイプのティーチャーマンもいるのか。そういえばウチにあるティーチャーマン、暫く使っていないな……

「へえ、便利だねえ……そのティーチャーマンって借りてm」

「ウチでしか使えないわ！」

食いぎみにティーチャーマンの不便さを語る委員長。流石に用途が違々と仕様も違うらしい。委員長の家の電波にしか反応しない、とか？

「あ、そうなの？」

「ええ、そうよ！ウチでしか使えないわ！」

フフン！とばかりに胸を張る委員長。どこに誇れる要素があったんだろう。ただ持ち運び出来ないってだけじゃない？

「じゃあ、委員長が迷惑にならない時にでも、訪ねさせてもらってもいい？」

「フフフ……しよ、しょうがないわね……！」



ニヤケ顔を抑えきれないといった様子だ。ボクが四苦八苦する様子でも見て、からかうネタにするつもりなんだろうか？

――五分後――

「ふう……そろそろ会計しない？」

「あ、じゃあ103デパートに寄つてもいいかしら？ ついで、なんだけどね」

何か用事でもあったのかな？ まあ、ミソラちゃんの時みたいに一日中……とかじゃなければ大歓迎だけど。

「いいよ」

「フフフ……！」

委員長が悪い顔をしている。嫌な予感が……

――1103デパート――

「……あつ！ ママー！」

ゲエツ！ 委員長のお母さんだ……。何だか気まずいな。

「あら、ルナ。どうしたの？」

「フフフ……実は今日はね……」

「あら、そうなの……あのときの彼が……」

母娘の会話だ。聞き耳を立てるのは無粋だろう。しかし何を話しているのだろうか。

……取り敢えず一段落したらしい。挨拶位はしないと。

「こんにちは。ええつと……白金、さん？」

ちよつと躊躇いがちに言うのと、白金さん（人妻）は首を傾げ、それから意味深に微笑んだ。

「キミはあのときにいたスバル君ね？ルナからよく話は聞いているわ。何でもルナのヒーローなんだとか……？」

ちよつと、委員長!?! ロックマンの正体は秘密なんじゃなかったの!?! あ、でも委員長、親御さんと話す機会は増えたんだ。それは良かった。

「いやいや、大きいですよ！ちよつと委員長が困つてた時に助けただけ。それだけです。

……家から引つ張り出してくれた恩もありますしね」

「フフフ……そう。まあ、いいわ。これからもルナのコト、よろしくお願いするわね……？」

あかねさん然り、百合子さん然り、どうもボクは大人の女性に弱いらしい。……変態みたいだな、ボク。

「ええ、わかりました。でも委員長はしつかりしてますからね。ボクなんかで助けになるかどうかわかりませんが。それで良ければ」

「そう、良かったわね、ルナ」

そういうえば、さつきから委員長が喋ってないな。どうしたんだろう。

「~~~~~っ！」

顔を真っ赤にして白金さんの後ろからチラチラとこちらを窺っている。いや、親の前でいろいろ話されると恥ずかしくなるよね。ボクなら逃げ出してるよ。

「あ、そうそう。白金さんじゃ他人行儀だし、百合子でいいわよ？ワタシって基本的に夫と共同で仕事をする人が多いから、あまり白金って呼ばれ慣れていないのよね……」  
へえ、なるほど。確かに夫婦で仕事をするのに、名字呼びじゃあ何かと不便なんだね。

「そう、ですね。わかりました、百合子さん」

「それで、ワタシのことは名前呼びなのに、ルナのコトは委員長呼びなのかしら？」

うわっ、百合子さんめっちゃ策士だ！こ、これは断れないぞ……！

「い、いや、スバルくん？無理をしなくても……」

「ルナは黙ってなさい」

「ハイッ！」

委員長が即座に従った、だど!?こ、これは……委員長以上のカリスマ性！流石に親子というわけか。というか委員長って将来こんな感じになるのか。こえーよ。

「さあ、スバル君……？」

まるで蛇ッ！既に獲物を締め上げ、あとは飲み込むばかりといったところだ！いや、実際に締め上げられたのは百合子さんの方だったんだけど。

「ぐぬぬ……」

おのれおのれおのれおのれ!!無限の剣製に囚われた英雄王の気分だぞ、これは！

「ル、ルナちゃん……?」

「ちゃんはやらないわ。クラスメートでしょう?」

百合子さん追い込み過ぎイ!

「ル、ルナ……?」

「~~~~っ!ハ、ハイ……」

なんだこの雰囲気。周囲の視線を感じる。顔から火が出そうだ!だ、誰か……!

「(ロツク!助けて!)」

「(オレは今、ハープが言っていたセイシュンってヤツが何か、わかってきたような気がするぜ)」

悟ったようなコトを言うなよロオオツク!あの猪突猛進なロツクは何処に行ったというんだ!

「(バカ!そうじゃないって!)」

チクシヨウ!頼れるのはボクだけか!?

ボクは、ボクだけを信じる！今なら孤独のカケラにも反応しそうだ！

「フフ、青春ねえ……」

アンタが仕組んだんじゃないか！アンタが！

「ママ、ワタシ、そろそろ帰るわ……」

何だかポーツと上気した委員長の言葉を聞いて満足したのか、委員長の背中を押してボクの方に押しやる百合子さん。相変わらずニヤニヤしている。クソツ、今日は完敗だ。何に負けたのかはわからないけど。

「ホラ、しっかりエスコートしなさいよ、スバル君？」

「……わかっていますよ、百合子さん」

「スバルくん、いきましよう……？」

何だかちよつと舌足らずな感じ。普段は大人っぽく見えるけど、今は年不相応に幼く見える。

「フフ……今日は帰らない方がいいかしら……？」

アンタは小学生に何を言ってるんだ！

「委員長、大丈夫？ちゃんと歩ける？」

「……うん」

ダメだね、こりゃ。

「……ほら、引いてあげるから、手を握って」

「……アリガト」

差し出した手をとる委員長だけど、俯いていてその表情はよくわからない。

「それじゃ、今日はこの辺で失礼しますね」

「フフフ……ええ、また会いましょう……？」

ボク、この人苦手だよ……

「ええ、機会があつたら、ですけど」

「わからないわよ？でも、そうね……いつか、ルナが紹介してくれる男の子がスバル君みたいなコだったら、ワタシは嬉しいわ」

「アハハ……」

この人怖い。というか、何て紹介するんだろう。電波変換出来る時点でサテラポリスには戦力扱いされるし、そのままサテラポリスに就職とか？いや、考えてみると、結構悪くないかもしれない。電波人間は貴重だし、数少ないAM星人との融合例だ。ぶっちゃけ将来は安定だろう。一応エリート、にはなるんだろうか？いや、今考えても栓なきことか。

ボクたちは手を繋いでバス停まで行くことになったんだけど、途中でもかなり周囲の注目を浴びていた。し、視線が痛い……。しかし、微笑ましいものを見るような視線

だったの、ただ恥ずかしいだけだ。これなら何とか……

ーコダマタウンー

多くの視線を浴びながら、ボクたちは何とかコダマタウンへと帰ってきた。つ、疲れ  
たよ……

「ほら、委員長。着いたよ」

「……………んっ……………」

委員長が手を離してくれない。困ったなあ……

「ハイハイ、もう少し付き合ってあげるから……」

「……………アリガト」

マンションの内部、白金家の前まで来ても委員長は手を離してはくれなかった。いや、ボクもう帰りたいんですけど……

「ほら、後は一人で大丈夫でしょう？」

「……………ダメ……………!」

今日の委員長は駄々っ子だな……

「……………中、入って」

あかねさんがそろそろ心配してるんじゃないかなあ……

「ハイハイ……………はあ」

委員長はちよつと待つててと言つて自分の部屋に引つ込んでしまった。え、ボクはこれから何をさせられるの!？ スツゴい不安なんですけど!

「スバルくん」

「ヒヤアツ!」

……変な声が出た。何だよ、もう……つて、パジャマ? あ、このパターン知ってる。添い寝させられるヤツだ。ミソラちゃんで経験済み、なんて言つたらぶん殴られそうだけど。

「こつち……きて?」

「え、いや、その……ボクそろそろ……」

「いいから、きて……!」

そのままフラフラと誘われるように、ボクは委員長の部屋に入つていった。先に行く委員長はベッドに入り、何かを期待するようにこちらを見ている。

「委員長が寝ちやつたら、ボク帰れないんだけど……」

「オートロック、あるから……」

あ、そうですか。便利ですネ。

「手、にぎつて……?」

うわ、これ委員長が寝るまで帰れないパターンだ。でも仕方がないので、ベッドの近



くに椅子を持ってきて座り、委員長の手を握ってやる。あつたかい。

「ほら、これでいい？」

「うん……今日はありがとね………ワタシ、たのしかつたわ………スウ、スウ………」

穏やかな寝息を立て、委員長は眠ってしまった。まさに、眠り姫だ……！いや、変態フラッグファイターの言葉を借りている場合じゃない。早く帰らないと……

## 第七話 『アンドロメダ座』

## 4 6

――翌日・放課後――

さて、今日は金曜日。ツカサくと諸々あつたのが月曜日だから、既に4日経つてい  
ることになる。FM王が配下のFM星人たちを復活させるまで、あと3日といったところ  
だろう。

そろそろ本格的に準備しないとイケないな。でもミソラちゃんにもヤシブタウン行  
くつて言っちゃったんだよなあ……どうしよう。いや、土日の間に行っておくべきか。  
約束を破られた女の子は、超怖いからね。誰だつてそうする。ボクもそうする。

そうと決まれば、早速電話を入れよう。しかし、百合子さんに遭遇しないといいんだ  
けど……ヤバーンだもん、あの人。

「ええつと、ミソラちゃんのトランサーの番号は……」

ピ、ポ、パつと。

ー プルルル……

『もしもし……あ、スバルくん?』

喜色の滲み出たような声が聞こえる。良かった。機嫌は良さそうだ。

「うん、そうだよ。こんにちは、ミソラちゃん」

『こんにちは、スバルくん！それでどうしたの？珍しいじゃない、スバルくんから電話をかけてくるなんてサ』

最後の『サ』だけ茶目つ気たつぷりといった感じに話すミソラちゃん。相変わらずテンション高いっすね。

「ああ、えつとほら、前にミソラちゃんとも約束したじゃない？ヤシブタウンに行くつて。その約束を消k……じゃなくて果たそうと思つてさ」

危ない危ない。消化つて言いそうになつたよ……

『スバルくん？今、消化つて言わなかつた……？』

ヤバツ、気づかれてる！やっぱりの勘つてヤツか!?

「言つてない、言つてないよミソラちゃん！」

『本当……？ならいいんだけど……』

ボクの必死の弁明が功を奏したのか、渋々引き下がってくれたようだ。

「そうそう！で、今度の日曜日とか、どうかな？」

『それつて、明後日のコトよね？……いいよ。でもワタシ、午前中は用事があるから、午後集合でもいい？』

「もちろん！あ、そうだ。ミソラちゃんは何かしたいコトとかって、ある？」

『そうだね……今度は映画でも見に行く？』

お、ミソラちゃんって結構映画とか見たりするのかな？

「いいね、じゃあ今度やる映画で……」

『ダメ。ワタシが決めるわ。フツツ、スバルくんはただ楽しみにしてればいいの！』

何だか悪巧みでもしていそうな、愉快的な声だ。ど、どんな映画を見せられるというんだ……!?!

「それじゃ、前回と同じ忠犬バチ公の像前集合で！」

『はーい、楽しみにしてるね！』

ーガチャツ！

よし、ミッションコンプリート。今日と明日はバトルカード集めや、調整に使おう。

「ロック」

「なんだ？」

「提案なんだけど……」

ー十分後ー

「チツ、だがそれは最後の手段だからな！いいか、オレは反対だぜ、そんなコト……！」  
ま、そうだよね。現状のままの方がいいに決まってる。でも、それじゃダメなんだ。

どうしてもアイツを……あのアンドロメダを破壊しない限り、FM王に言葉を届かせることは出来ないと思う。絶体絶命で、藁にでもすがるような気持ちでなきやダメだと、ボクは思ってるんだ。

今話したのはカギが奪われ、アンドロメダを起動させてしまった時の対応だ。この方法は体にかかなりの負担がかかる。だけど、やる。折角選択肢があるんだ。最高のモノを選びたいじゃない？

「まあまあ……最終手段だからね、コレは」

「ケツ……」

ロックも、ボクを思いやってくれているのだろうか。そうなら嬉しい。

「ほら、今日はウィルスバスターングしに行くよ！気合い入れてよ、ロック？」

「おう！そんな方法に頼らなくてもいい位には、鍛え込んでやるぜ！」

そ、それはちよつと遠慮したいかな……

——二日後・天地研究所——

「これでよし……と」

ふう……と一息着いて、作業を止める天地守。彼は今、新型のエンジンの開発を行っていた。開発、と言うよりも組み立てと言ったほうが近いが。

『天地さん!!天地さん!!』

同室で同じく作業中だった宇田海君が声を張り上げる。珍しいな、彼がこんなに取り乱した声を上げるなんて。

「天地さん、大変です!」

こちらに駆け足で向かってくる彼の動きも普段の不健康そうな歩き方と違って覇気に溢れている。いや、必死なのか?……こんな言い方だと、失礼だったかな?

「どうしたんだい、宇田海君?」

「と、とにかく来てください!」

そう言って促す宇田海君。そつちには確か、レーダー関係の設備があったような……

「レーダーが捉えた、宇宙からの電波です」

何だって!?

「こ、この電波は……!!」

——星河家——

「スバルく!母さん、友達とヤシブタウンにお買い物に行ってくるからね〜!」

……う、嘘でしょ!?!まさか、ずれ込んだっていうのか……!?!

「わ、わかったよ!気をつけてね!」

——ピピッ!——

め、メールだ。送信元は、天地さん。

……と、いうことはつまり、今日なのか!?

「内容は……『キミに伝えたいコトがあるんだ。今からボクの研究室に来てくれないか?』か……」

「なんだ? 行かないのか、スバル?」

大丈夫、大丈夫だ。ゲームでは駆けつけた時でもまだ、あかねさんが電波化する事態は避けられたはず。即行で行って、ヤシブタウンに向かえば。それに、ミソラちゃんが解決してくれるかもしれない……

「行くよ。急ごう!」

「オ、オイ! 待って!」

ダツシユでバス停まで向かうボク。今は一秒でも惜しい……!

——天地研究所・研究室——

「ハア、ハア……き、来ましたよ、天地さん!」

「あ、ああ、よく来たねスバル君」

少し引き気味の天地さん。しようがないよ。全力で走って来たんだから。

「そ、そんな、ことより、早く、用件を……」

息が切れているので、途切れ途切れにしか喋れないのはご愛敬だ。

「ああ、わかった。……キミに伝えるべきか悩んだんだけど、やはり伝えておくべきだろ

うと思つてね」

「な、何ですか……?」

わかつてはいるけど、早く喋つてくれ!

「昨日、この研究所のリーダーが宇宙から発信されたある電波をキャッチしたんだ。実はその電波というのが、NAXAの宇宙ステーション『きずな』……つまりはキミの父さんの乗っていたステーションの認識信号だったんだ。そして、その信号はゆつくりと地球に近づいているコトがわかつた」

「父さんの、ステーションが……」

「オイ、スバル。今のオマエにはあんまり関係ないんじゃないかねえのか?」

ボクの事情を知っているロックが聞いてくる。

「(いや、この体……星河スバルとしては、知っておかなきゃいけないことだと思ふ)」

「(ヘッ……オマエのそういうトコロ、オレは好きだぜ)」

なんか照れ臭いから止めてよ!

『我々としては、あまり近づいて欲しくないシロモノだがな……』

この声は……五陽田さんか。

「キミの父上が例のステーションの乗組員だったコトは聞いた。父上の生存を期待する気持ちはわかるが、今やあのステーションは……巨大なゼット波のカタマリだ」



「……じゃあ、父さんは……!」

こういう演技をしていると、委員長やミソラちゃんの存在がどれ程ありがたいか思い知る。人は誰でも、自分を明かせる誰かを望むものだから。

「……わからん、しかしあまり期待はせんほうがいいと思う」

「そんな……!」

「ーピーピーピー!!」

何だ!?

「ムツ、新たな電波をキャッチしてみたんだ。どれどれ……」

研究室に備え付けてあるPCに向かう天地さん。カタカタとキーボードを叩く音が聞こえる。これは実際にカタカタ言ってるわけじゃなくて、押したことを知らせるための音声なんだけど。

「フム、音声電波のようだ。解析してみよう……」

これはアレだ。ケフェウスの宣戦布告というヤツだったはず。

「解析が完了……再生するよ」

流石に仕事が早い。あちらも解説に手こずるような電波にする意味はないんだけど。

『……ザザツ………ザツ………ザザツ………地球人たちに告ぐ。余はFMプラネット

王……地球は余の手によって、滅ぼすこととした。地球人よ、FMプラネットの王の手

によって直々に滅ぼされるといふ榮譽に預かるがよい。……ザザザ……」

「……な、何だと!? これは……宣戦布告じゃないか……!」

「FMプラネットと言えば、大吾先輩がブラザーバンドを結ぼうとコンタクトをとった星。ま、まさか……大吾先輩はFM星人に……」

惜しい、ちよつと違う。AM星人に、電波化されたんだ。この、ロックにね。

「……うわっ!、これは……!」

ーゴゴゴゴゴ!!

これは……あ、停電だ。だけど、ここでは何もすることが出来ない。五陽田さんがいるからね。

「な、何が起こつたんだ……?」

「気を付けろ……ゼット波がどんどん上がっている!」

ーパッ!

あ、停電が止んだ。予備電源か。

「こつ、これは何事だっ!」

ウエーブロードが見える。ビジライザーはかけていない。やはりゼット波の影響つてことだよね……

「ま、まさか……ゼット波が測定不能!? この部屋はゼット波で満たされておる!……」

ムウツ！気を付けろ！凄まじいのが来るぞ！」

上だ！巨大なデンジハボール……！」

「グウツ！」

「な、何が起こってるんだ……!?!」

「グググツ……あ、あのゼット波のせいだ……!?!あのカタマリの放つゼット波を浴び続けなければ……危険だ！」

うわわわっ！体が軽い！いや、冗談じゃなく！

「カ、カラダが……！」

「スバル！ヤベエぞ！早く電波変換して、あのデカブツを……！」

「ダメだ！五陽田さんもいるんだ！バレるわけには、いかない！」

「(クソオツ!)」

「いかん!!凄まじいゼット波を浴び続けたせいで我々のカラダの周波数が同調し始めている!!このままでは、我々のカラダがゼット波になってしまう！」

「何とか、ならないんですかアツ!?前にBAN!ってやってたじゃないですか!」

早く使ってくれエツ!

「ム、ムウ……こうなれば、アレを使うしか……一発しか撃てんから外せん……！」

そんなモノをトランサーに付けるな!別に用意してよ!

「ゼットイレイザー起動！アンチゼット波エネルギー充填！エネルギー90パーセント！98、99、100パーセント！……ゼットイレイザー、発射！」

な、何とかなったか……！

「イツツツ……何とか命中したようだな」

「た、助かった……」

——数分後——

「た、大変だ……他の場所でもさっきの電波化現象が起きているようだぞ……!!」

「クソツ！一刻も早く現場に向かわねばならんが、さっきの一撃で本官のトランサーは使い物にならない……!!一旦本部に戻るしかないか……！それでは本官は、失礼する！」

また本部からトランサーを持ってくるのかな？

……一発しか撃てない、トランサーを。

「天地さん、電波化現象は、どこで起きているんですか……う？」

「そうだな……ニホン各地で起こっているんだが、ここから近いトコロだと……ヤシブタウンだ！」

クソツ！やっぱりか！

「ボク、行ってきますね！」

「お、おいスバルくん……！」

「母さんがツッ!いるんだ!」

「ーピンポンパンポーン!天地所長、問題が発生しました。事務所までお願いします。」

「……仕方ない。だが、ダメだ。ここで暫く休んでいきなさい。今外を出歩くのは危険だからね。……それじゃあ」

天地さんは行ってしまった。……よし、行かなきゃ!

「急ぐよ、ロック!」

「へッ、当然だ!」

ーヤシブタウンー

ヤシブタウンで歩いていたらと思われる人たちは全て、さっきのボクたちみたいに軽く……いや、質量を失いかけている!あかねさんの姿も、あるぞ……!」

「やつぱり……!母さん!」

「スバル!早く電波変換だ!オマエのオフクロを助けるんだろう!」

わかつてるよ!ウェーブホールは……あつた!忠犬バチ公の陰になっている場所!

「間に合え、間に合え……!」

電波変換!星河スバル、オン・エア!



月は、出ているか……？いや、違う！母さ……あかねさんを助けないと！

ーチユイイン！

さっきのサテライトキャノン（仮）がもう一発、デンジハボールを貫くカタチで降ってきた。凄い威力だ……

「母さん！」

『案ずるな……気を失っているだけだ』

やはりこの声……ペガサス・マジックか！

「この声……アナタたちは、サテライトの管理者……！」

どんだけカッコいい登場の仕方だ！カゲとはいえ！

「星河スバルよ、我らは見ていたのだ。オマエの心が、最大に高ぶるのを、な」

「そうだ。スターフォースとは想いのチカラで、その出力を増す……！」

「この星に、かつてない脅威が迫っている……だからこそ、我らはオマエを見定めていたのだ……」

三人のAM三賢者が紡ぐように話を続ける。この展開は、知らない……！

「ど、どういうこと、ですか……？」

「今、その脅威に立ち向かえるのはオマエとウォロックだけだ……」

「ボクと、ロック……」

「オイ、今回は何なんだ！AM三賢者のカゲが、揃いも揃ってよお！」

ロックが三賢者の言葉を聞いて憤慨する。難し過ぎるからね、彼らの話は。

「フツ、慌てるな。我らは見定めていたと言っただろう……？」

「そうだ。我らはオマエに、更なるチカラを託せると判断した……！」

な、何だ!? ただのギガクラスカード進呈式だよね!?

「……というワケだ。故に再び授けよう！我がチカラの一端を！この星の命運を握りし、新たな英雄に！」

「うわあっ！」

辺りが光に包まれる。周りの人たちは、デンジハボールから解放されてばかりで気を失っているため、誰もこの光景に気づく様子はない。

「うっ、何だったんだ、今のは……？」

視界が開けた時、目に映ったのはやはり、ギガクラスカード『ペガサス・マジックG X』だった。これが、見定めていた理由……？

「先ずはコレだ。……我がチカラを宿してある。好きに使うがいい……」

「ありがとう、ごさいます……？」

先ずは？ まだ何かあるような口振りだ。

「そして次は……ハアッ！」



ーチユイイイン!

ギヤアアアア!!サテライトキャノン降ってきたア!

……つて、痛くない。というか、スターフォースに反応している……?

「親和性を上げてやったのだ。これで星の危機にも対応出来るだろう……」

「親和性?何のコト?さっぱりわからないぞ……」

「では、さらばだ。地球を……頼んだぞ」

そう言つて三賢者のカゲは消えてしまった。

なんだつてばよ!本当に!

「あ、ミソラちゃんと待ち合わせの時間が来ちゃう」

取り敢えず、忠犬バチ公の像の前で待つていよう。

ー三十分後ー

「あれ……?ミソラちゃん、来ないな……」

ロックと仲違いしたわけじゃないから、探しに行つてFM星人にやられた……なんてことは無いはずなんだけどな。

まさか、ミソラちゃんに限つて約束をすつぽかすなんてないと思うし……

「(あのオンナ、おせえな)」

「(うーん、女の子には色々あるつてことなんじゃない?)」

「ケツ、オンナの気持ちなんてこれっぽっちも知りたくはねえぜ」

「まあまあ……」

それにしても、どうしたんだろう。もうとつくに約束の時間は過ぎていくのに……

ープルルルル！

あ、電話だ。この番号は……ミソラちゃんのトランサーからだ。なんだろう、もしかして来れなくなったとか？

「もしもし、ミソラちゃん？どうしたの？」

『久しぶりだな、ロックマン』

サーツと、血の気が引くのを感じた……

## 47

——1時間前・ヤシブタウン——

実は、星河スバルが来る30分前には既に、響ミソラは待ち合わせの場所に来ていた。一応、映画館の混み具合と、他に気になる店がないか下見をしに来たのである。響ミソラはデートに妥協しなかった。凄い。

「フウ……取り敢えず、これくらいでいいかな。ハープはどう？何か気になるお店とか、あった？」

「(ポロロン……そうね、強いて言うなら……今日は103デパートには近づかない方がいいわね」

女の勘恐るべし。今日は白金百合子……つまり、委員長の父母がイベント会場の調整に来ていた。イベント自体が始まって、仕事というのは結構あるものである。

「うん、ワタシもちょっと感じてた。何だか凄くイヤな予感がするんだよね、あのデパート……」

女二人で自分たちの勘が正しそうだということを再確認している最中、不意に聞きなれた声が聞こえてきた。聞きなれたと言っても、ハープにとつてだが。

『見つけたぞ……FM王を裏切り、地球側に与した大罪人……ハープよ』

「これは……！ハープ！」

「わかってるわ！」

お互いに言わずとも、電波変換の体勢に入っていた。阿吽の呼吸というヤツである。

「電波変換！響ミソラ、オン・エア！」

ーヤシブタウンのウエーブロードー

咄嗟の電波変換の後でも、ミソラたちは油断しなかった。声は聞こえど姿は見えず……そんな存在と暮らしているミソラにとっては敵が電波体か、それに関する類いだということとはわかりきっていたからだ。

「ハープ、周囲は……？」

「そうね、イヤな感覚が5つ……」

「(思ったより多い……！)」

顔に苦澁を滲ませたミソラに追い打ちをかけるようにそのイヤな感覚の持ち主が5人、姿を表した。

「やはりオックス、キグナス、リブラ、オヒユカス……そしてジエミニー！」

「オレたちの存在に気づいていたのか……？」

ジエミニの疑問に答えるつもりはなかったが、この状況だ。あまり彼らを刺激しては

いけないだろう。

「ポロロン、忘れたのかしら？ワタシは音波を操るFM星人……音を扱う故に、耳は効く方なのよ」

本当は耳が効く、程度ではないがあまり敵に情報を与えるのも良くない。恐らく、この後は……

「フン、まあいい。オレたちはFM王の手により蘇った。そしてFM王の配下であるオレたちが、オマエたちの前に現れた理由、まさかわからないハズはないだろう？」

代表してジェミニが話しかけてくるため、他は黙っている。まさか戦闘時にも静観、というわけではないだろうが。

「ええ、そうね。ところで、こんな場所でレディに襲いかかるなんて、いささかマナーがなっていないのではなかつて？」

挑発のように言うと、ニヤリとジェミニが笑ったことがはつきりとわかった。この反応を読んでいた……？

「だろうな。オレたちも、オマエのFM星の戦士としての最後の矜持くらいは保たせてやる。……ついてこい」

そう言つてジェミニたちは、ワタシを囲むように並び、飛行するように促してくる。音符のサーフボードを出して乗れつてことね、これは。

「ミソラ……」

「……わかつてる」

あの方向には、確か……ドリームアイランド、だったかしら？前に地図で見たような気がするわね……この状況では、迂闊に助けを呼ぶことも出来ない。

早く来なさいよね、ロックマン……！ミソラにケガさせたら、責任とってもらわよ！

ーヤシブタウンー

『と、いうワケだ。ハープ・ノートの身柄はこちらで預かっている。……取引といこうじゃないか』

ジェミニ……！クソツ、原作通りに進まなかったことが裏目に出るなんて！

「こちらからは、何を出せばいいんだ……？」

分かりきっている。アレだろう。

『クククク……わかつてるだろ？「アンドロメダのカギ」だよ。まあ、こつちで預かっている裏切り者の命が惜しくないっていうのなら、別に来なくてもいいぜ？』

こ、この野郎……！

『『アンドロメダのカギ』とハープ・ノートを交換しろって、そう言ってるんだよね？』

『まあ平たく言うそうそうだ。場所は廃棄物置き場の奥。……なるべく、早く来た方がいい

いぜ？オレは親切だからなあ、忠告はしといてやったぞ』

——ガチャツ！

「オイ、スバル。どうするんだ……って、決まってるよな！行くぜ、ヤツらのトコロへ！」  
何だよ、ロツク。ボクまだ何も言っていないじゃないか。でも、そうだね。行こうか、廃棄物置き場へ！

「ゴメンねロツク。せっかく守ってきた『アンドロメダのカギ』を、こんなカタチで……」  
ボクの言葉に目を丸くしたロツクだったが、すぐに好戦的な笑みを浮かべてボクの片を叩いてきた。

「へッ、よく考えればよ、あんな古くさいウスノロなんてぶっ壊しちまばいいって気づいたのさ。あーあ、何で今まで思い付かなかったかねえ……」

「うん、うん……ありがとうロツク……」

クソツ、前がよく見えないじゃないか……！

「ほら、行くぜ！」

「わ、わかつてるよ……」

——廃棄物置き場——

この先に、ミソラちゃんが……！

「ロック、いい?」

「ヘッ!誰に聞いてんだ?」

オツケー、じゃあいくよ。電波変換。星河スバル、オン・エア……!

——廃棄物置き場・最奥——

以前ツカサ君とブラザーバンドを結んだ場所には、今まで倒したFM星人たちが勢揃いしていた。ミソラちゃんは……いた。電波変換した状態で、オックスが肩に抱えている。どうやら気を失っているようだ。コイツら、女の子に対する扱いじゃないぞ……!  
「待っていたぞ、ロックマン。いや、ウォーロック。さあ、『アンドロメダのカギ』を渡して貰おうか」

ジエミニ……お前はボクを、怒らせた。

オラオラじゃ足りないからな!

「……ロック」

「ああ……ほら、コイツだ。触らないなら、確認してもいいぜ」

やけに穏やかなロック。いや、堪えているのか?怒りを……

「いや、いい。確かに『アンドロメダのカギ』だ。オレはFM王の右腕だからな、一度見たことがある。……確か、AMプラネットを滅ぼす時だったっけなあ?」

「……………ツツ!!」



ロツクが震えている。怒りを堪えるのも限界か……。もう少し、待ってくれ。ミソラちゃんを取り戻すまでは……

「ほら、早くミソラちゃんを此方に。無駄話をしに来たワケじゃないでしょ？」  
「クククク……おっと、そうだったぜ。さあ、交換といこうか……」

オックスがミソラちゃんを抱えて此方に歩み寄ってくる。良かった。ちゃんと息はしてる。キズも少なく、痕にもならないだろう。

ミソラちゃんと『アンドロメダのカギ』の交換は、粛々と行われた……。まあ、流石に『アンドロメダのカギ』を奪還するチャンスをついに果たさなかったのだろう。返還された『アンドロメダのカギ』は、上空へと飛んでいってしまった。FM王の下にいったのか……？

「ミソラちゃん……」

「……う、うくん………ハッ！」

「大丈夫、ミソラちゃん!？」

腕の中で目を覚ましたミソラちゃん。取引の最中に目覚めなくて、よかったよ、ホント。

「あ……スバルくん？エへへ……また、お姫様抱っこだね……？」

ミソラちゃんは笑うけれど、いつもの覇気がない。早く休ませなければ！

「いいから！取り敢えずジツとしてて。ちゃんと、家まで運んであげるから……ハープも、ありがとね」

「ポロロン……この子を褒めてやってほしいわね。この子、あんな状況でアナタに心配かけまいと、5対1で立ち回ったのよ？ワタシがキズついたら、スバルくんもキズつくんだって、そう言つて……」

「ハープ、恥ずかしいってば……」

ミソラちゃんが恥ずかしそうにハープを制する。

ボクのことなんか、気にしなくていいのに！

「さて、感動の再会は済んだか？」

「ジエミニ？何だよ、取引はもう……」

いや、ちよつとまさか……!?やるつてののか!?

「ああ、取引は終わったぜ。しかし5対1だ。ハープという足手まといを連れた状態で、これ以上の条件もないだろう。この状況で、オマエを潰さないつてのも非合理だからな。悪いが、全員でかからせてもらおうぞッ！」

……汚ねエツ！ま、負けられるかアツ……!!

「ミソラちゃん、ちよつとゴメン！」

「うん、ワタシのことは、気にしないでいいよ……?」

気にするに決まってるでしょオツ!

「ロツク!」

「おうツ!」

即行でカタを着けなきや、ミソラちゃんが!

「スタアフオオスツツ!!」

ーバチバチツ!

何だ?これは……反応している?ベルセルクの、カードが……!?

ーバチバチバチツ!

「何だ、あの形態で帯電している、だと?」

「どういうことだ!?!データにはあんな状態は……!?!」

F M星人たちが何か言っているが、どうでもいい!

ヤツらを氷漬けにするまで、ボクは戦うからな!

「オマエたち、覚悟してもらおうからな!」

「ああ!ここからは、ずっとオレたちのターンだぜ!」

変なネタを挟むな!

「チツ、いい気になるなよ!数はこつちの方が上だ!ここでくたばってもらおうぞ……!」

『……余の下へ集え。……我が戦士たちよ……』

この声……FM王か！要らぬ横槍をッ！

「ハッ！……悪いがこの戦い、お預けだ。アンドロメダが、遂にお目覚めだぜ……！」  
クツ、フラツシユ!? ジェミニの仕業か！

「待てエツ！」

『慌てるな！おめえの相手はこのオレがしてやるぜ！』

何だ!? ジャミンガーのGタイプ? 今更こんな雑魚に構っていられるか! だけど、放つておくわけにも……! しょうがない。ミソラちゃんの安全はほとんど保証出来たんだ、十分だろう。

「いいの? ボクは今、とてもキレている。とぼつちりだよ?」

「へへッ、アンドロメダに食われる前に、オレがおめえを葬ってやるぜ!!」

「後悔すんなよ……? 今のスバルはつええぞ……!」

そうだ! ロックと一緒になら、負ける気がしない!

「行くよロック! ウェーブバトル・ライドオン!」

「へッ! FM王までぶっ飛ばしてやるぜ!」

それはちよつと無理かな……

「くたばるのはおめえのほうさ! 行くぜ!」

お決まりのジャミングマシンガンを乱射しながら此方に向かってくるジャミンガー

G。流石にGタイプだけあるのか、ジャミングマシンガンを撃ちながらでもパワフルに動けるらしい。さて、バトルカードは……って、これは、さっきの……!

いいじゃないか!御披露目にはおあつらえ向きだ!

「今日は最初からクライマックスで行くよ、ロック!」

「大歓迎だぜ、スバル!」

「じゃあいくよ……!」

ギガクラスカード『ペガサス・マジックGX』発動!

って、何だ!?トランサーからオーラみたいなモノが……

「うわわわっ!」

すっばりオーラで覆われてしまった!でも別に、何がどうってわけじゃないぞ?

「そ、そのオーラ……まさかペガサス・マジック!」

敵のジャミンガーがボクの姿に反応する。確かにアイスペガサスのフォームではあるけれど、そこまで似通ってはいないはず……って、このオーラがペガサス・マジックのカタチってことなの!?中からじゃわかんないよ……

「まあ、いいや!そういうことなら……うおおおっ!」

ボクの雄叫びに合わせ、普段の二倍近い大きさの魔方陣がジャミンガーの真下に出現する。凄いぞ、コレ!

「な、何だ……!? ツ……グアアアアアツ！」

完全に氷漬けになってしまったジャミンガーG。いつか溶けるって。多分、きっと、メイビー。

「フツ、また愉快的なオブジェを作ってしまった……！」

「あんまりキマってねえぞ、その決め台詞」

ありやりや? そうだった……?

「じゃあ、とんだインチキカードだったよ……で、どう?」

「羽が黒けりやあ、完璧だったな」

チクシヨウ! って、こんなことやってる場合じゃないぞ! ミソラちゃんが!

「ミソラちゃん!」

「あ、お疲れスバルくん」

なんか元気そうなんですけど!?

「あれ、ケガは……?」

「そりゃあ、あれだけ時間あったらリカバリーだって使ってるよ」

さ、左様ですか……

「まあ、元気ならいいんだけど……」

「フフフ……でもスバルくん、送ってくれるって言ったでしょう?」

あ、そうだった……

「ほら、行こっ！」

ボクの手を引っ張ってバス停まで向かうミソラちゃん。ちよつ、ちよつと！指が絡んでるって……！

「ケツ、一件落着と言ったトコロか。今日は随分素直だったじゃねえか、ハーブよお？」  
「ポロロン……まあ、今日はワタシも疲れたわ……。もしもミソラがホントにケガしたら、ボウヤに責任取らせるつもりだったのだけど……電波体が仇になったわね」

「責任ってなんだよ……？」

「ガサツなロツクにはわからないわ……。複雑な乙女心なんて、ね」

「まあ、別にどうでもいいが……そろそろアイツらのトランサーに戻らないと、置いていかれちまうぜ？」

「そうね、戻りましょうか……」

「ちよつと、ミソラちゃん!?早いってば!」

「♪♪♪」

「ああ、もう、聞いてよお……!!」

何だよもう！突然元気になつてさあ！



ーコダマタウンー

や、やっと帰って来れた……。

今は、ええっと……4時を回った辺りだね。なんかもうドツと疲れたよ……

「あつ、委員長だ。ゴン太とキザマロもいる……」

BIGWAVEの付近は拓けているけれど、ベンチ程度の設備もあり待ち合わせや休憩にはもってこいのスペースになっている。

「(どうするんだ？ 疲れてるんだろ？ そのまま帰っちゃまうか？)」

いや、まあ疲れてるけどさあ……流石にブラザーをスルーしては帰れないよ……

「おーい、委員長……」

若干声に覇気がないのは、仕方ないことだと思いたい。

「……スバルくん？」

キヨロキヨロし出した委員長だけど、ボクの姿を先に捉えたのはキザマロだったようだ。委員長に何事かを告げて、手を振ってくる。委員長もキザマロの言葉を聞いてボクの位置を悟ったらしい。遠慮がちに手を振ってくる。何だか、照れてる？

「ご、ごきげんよう、スバルくん」

「ブフツ！何だよ改まって！吹いちやったじゃやいか！」

「ブフツ……ご、ごきげんよう、委員長」

「わ、笑ったわね！ワ、ワタシがあれからどんな気持ちだったか、スバルくんにも教えてやりたいくらいだわ！」

「だってさあ、いきなりまた、ご、ごきげんよう、なんて言われたら吹いちやうに決まってるじゃないか！」

「あれからって、百合子さんの時のコト？……お迎えに上がりましたよ、ルナ。みたい感じで、挨拶すれば良かった？アハハ……って、委員長!？」

「」

「い、委員長が！顔から出る湯気の量がヤバい！冗談だつてば!？」

「委員長！大丈夫ですか!？」

「いいんちよう！いいんちよう!？返事をしてくれ、いいんちよおおおッ!」

「ゴン太の雄叫びを意に介することもなく、委員長のオーバーヒートは止まらない。ど、どうしろって言うんだ！」

「(コイツはオマエの自業自得だな)」

「ロツクが訳知り顔で語る。いや、ロツクは絶対わかってないだろ!？チクシヨウ!な

ら、やってやる！いや、乗りきってみせる！

「ほら、委員長。落ち着いて……深呼吸だよ、出来る？」

優しく諭すように委員長の腰を支え、手をとり、耳元で囁く。委員長の体、柔らかい  
な……

「……………スバルくん…………？」

「深呼吸、深呼吸…………」

「スバルくん、ボクたちは一度退散します。多分今ここにいと、後でとぼっちりを食  
らいますから。ほら、ゴン太くんも」

「お、おう。頼んだぞ、スバル」

「うん、任せて。あ、ゴン太、今度新しく出来た牛丼屋に行こうよ。そこの牛丼は安く  
て美味しいって評判なんだって」

「フツ、このオレがそんな耳寄りなコト、つかんでいないとでも…………？」

「(フツ、そっか。じゃ、来週辺り、どう?)」

「(おう！いいぜ。…………それじゃあな!)」

こういうやり取りも結構好きだ。ゴン太の牛丼屋サーチは中々侮れないからね。  
そのまま続けると、ようやく委員長も落ち着いてきた。

「……………落ち着いたわ」

「良かった……心配したんだよ？」

「くく……わ、悪かった、わね……」

シヨボくれた表情の委員長。頬が赤いのはご愛嬌だ。

「ボクは気にしてないから。それよりも、笑顔笑顔！もつと明るい委員長が好きだって、ボク前に言ったよ？」

沈んだ顔の委員長なんて、見たくない。やっぱり女の子は笑顔が一番、だよ。

「ス、スバルくん……」

何でもつと俯くんだ!?人差し指をツンツンしてもわからないよ……。

ーゴゴゴゴゴ!!

な、何だ!?つて、こつちもズレ込んだのか!?

「キャッー!」

「わぷつ!?!……ちよつと、委員長!?!」

抱きついてきたぞ!?ちよつとニヤけてたのは、気のせいだと思いたい……。

「これは……やっぱり、天地研究所やヤシブタウンの時と同じ……!」

「な、何コレ!?!」

ウエーブロードが見える。ということは、あのデンジハボールがまた……つていうかゴン太とキザマロが危ない!?

「フ、フンギャー……ッ!!」

「や、やめろ!」

キザマロ……叫び方位、もうちよつと頑張ろうよ……

「……ゴン太、キザマロ!?!」

「……うん!急ごう!」

声が聞こえた方向……キザマロの家の前まで急行するボクたち。一緒に行った方が守りやすいってのもあるけどね。

「……あつ!」

いた。ジャミンガーが3体。何だ雑魚か……

「ゲヒヒ……ノコノコ人間が二人、出てきやがったぜ」

アンタら、笑いかたで見分けてんの? ってくらい統一感がないな……

「チクシヨウ、はなせ! はなせ! はなせ! ば!!」

HA☆NA☆SE! 流石にゴン太。ネタをわかってる、わけはないか。

「た、助けてください!!」

二人とも屋根の上だから、結構キツそうだ。

「委員長、離れてて」

「スバルくん!?!」

いいの?とばかりにボクの顔を伺う委員長。ええい、袖を掴むな、袖を!

「バカ!お前じゃ無理だ!逃げろ!」

「誰か大人を呼んできてください!」

ま、そうなるか、普通は。心配してくれてるんだろうけどね。そこは理解しないと。彼らの優しさだ。

幸いここはデンジハボールの影響で、ウエーブホールなしでも電波変換出来る。

「おうおう!カッコいいじゃねえか!どうやって守るんだ?ああん!」

このチンピラジャミンガーム。その命、神に返しなさい! (753感)

「トランスコード!……じゃ、ないね。……ゴホン!電波変換!星河スバル、オン・エア!」

ウエーブホールが無いから、間違えそうになったよ……

ーコダマタウンのウエーブロードー

「青き戦士、ロックマン参上!ってね。待ってて二人とも。こんなヤツら、一捻りだから!」

ボク、超ノリノリである。

「お、お前は……!!一人で数々のFMプラネットの戦士たちを倒してのけた……」

「……ロックマン!?そんな、まさか……」

「スバルくんが……ロックマンだったなんて……!」

解説  
演出「苦労!」

「意外だったかな?」

「そ、それはもう……」

キザマロも気づいてなかったのか。疑ってるかな、とは思ってたんだけど。

「チイツ! 相手がワリイゼ!」

途端、逃げ出す雑魚たち。ジャミンガーもうちよつと、やる気見せようや……

「ハッ!」

一気に跳び上がり、最小院家の屋根に乗る。ジャミンガーたちは、向かいの牛島家の屋根の上だ。

「これでも、食らいな!」

攻撃をする前に、宣言するなんて! 戦隊モノの見すぎなんだよツ! 放り投げてきた小さなデンジハボールをロックバスターで撃ち落とす、ジャミンガードも睨み付ける。

「逃がさないよ、キミたちは!」

「チクシヨウ!!」

「待てやコラアツ!」

ロツク……それじゃこっちが893だよ。

よーし、3対1か。ボク、張り切っちゃうぞ！

「行くよロツク！」

「おう！」

スターフォース！

フハハ！制空権を譲ることの恐ろしさを教えてやる！

「オ、オレたちといつもつるんでたアイツが……」

「ロ、ロツクマンだったなんて……」

二人は顔を見合わせて呟いた。未だに信じられなかったのだ。

「二人ともーっ！大丈夫ーっ!？」

屋根の下から委員長の声が聞こえる。あんまり慌てていない？……もしかして知っていた？

「ええ、大丈夫ですよー！」



「キミたち、ウイルス？ウイルスだよね？ウイルスだな？……首、置いていきなよ」  
「ヒイッ！」

ドリフターズ式の恫喝は効いたらしい。

「ヒイッ！お、お前ら、やるぞ！」

お、遂に観念したらしい。

「やるよ、ロック」

「あ、ああ……」

ちよつとドリフターズ式はキツかったかな？

「ほら、しっかりと！ウエーブバトル、ライドオン！」

しかし、緊張感ないなあ……

——二分後——

「二分!? 僅か二分で俺たち三人を全滅させるなんて………ウ、ウ、ウギャー——ッ！」  
ストフリ乙。大した敵ではなかった。

「フウーッ！よし、終わり。上からヘビークャノンゲーだったね」

「バトルってこんな一方的なモンだったっけか……？」

ロックが戦いの意義について考えだしたぞ。きつと熱でもあるに違いない。(錯乱)

「あ、デンジハボールを破壊しないと……あつた！」

出血大サービスだ！（移動がめんどくさいとも言っけれど）行くぞ、マジシャンズ・フリーズ！

ーバキバキバキ………パリン！

砕け散った氷柱と共に四散するデンジハボール。これでやつと終わりか……

「よし、ウエーブアウトして戻ろう」

ーコダマタウン・現実世界ー

「お疲れ様、スバルくん」

まず劳いの言葉をかけてくれる委員長。ちよつと、照れるじゃないか……

「いやあ……委員長が応援してくれたお陰だつて」

照れ臭さから、つい誤魔化すようなコトを言ってしまった。だつて、委員長がマネージャーみたいな雰囲気出してくるんだもん。

「そ、そうかしら……う……フフッ」

嬉しそうな委員長。何とか誤魔化せたかな？

「ところで二人とも、ケガとかはない？」

「……………あ、ああ。そんなコトよりよ……………まさかお前がロックマンだったなんて……………  
何で黙ってたんだよ！」

「だって二人とも、口が軽そうだったし……………」

「ギクウーッ！」

わかりやすいな。

「ま、そんなワケで……………」

「なあ、スバル。……………前にオレがおかしくなっちゃったとき、たすけてくれたのはお前  
だったのか？アマケンのときも、学校のときも……………そうか、そうだったのか」

「ロックマンはボクらの中ではちよつとしたヒーローだったんです。それが毎日顔を会  
わせていたスバルくんだったなんて……………ボ、ボク、ちよつと感動してます……………」

そんなに大層なモンじゃないんだけどね。

「そんなに気にしなくていいのに……………」

「いや、すまねえ！ありがとう！そして助かった！」

そう言つてカラカラと笑うゴン太。いいね、こういうの。本当に、いいよね。

「なら今度の牛丼屋に行くときは、奢ってもらっちゃおうかな？」

「おう！任せとけ！……………それで、その……………ス、スバル！オレとブラザーになつてくれ！」

ありや？ そうなるの？

「はあ……」

「オレ、ずつとロックマンに憧れていたんだ。オレもロックマンみたいになりたいって、そう思ってた……だから頼む！ オレとブラザーになってくれ……ダメか？」

委員長の方を見る。委員長は無言で自分のトランサーを示してきた。なるほど。ブラザーだからこそ、信用出来ると言い切れるワケか。

「うん、いいよ。これからもよろしく」

「ホントかあ!?! じゃあ、お前からオトコってヤツを学ばしてもらおうぜ！」

大袈裟だなあ……

「いいからいいから。今まで通り、仲良くしていこうって」

「へへっ、ま、よろしく頼むぜ！」

「うん！」

最後に拳を合わせてブラザーバンドの契約は終了した。男の友情ってヤツだね。

「うう……ボクもブラザーになりたいですけど……今は恐れ多くてブラザーになんてなれませんが……けど、いつかは……」

「いつかって、今さ。結ぼうよ、ブラザーバンド」

「ご、ごめんなさい……もう少し、もう少し勇気が湧いたら……」

ま、しょうがないか。強制するモンでもないし。

「フフフツ………さあ！アナタたち、行くわよ！」

あ、そうだ。ボクは帰宅途中なんだった。

「安心しな、お前のコトは絶対誰にもしやべらねえ。オトコとオトコの約束だけ？コイツは破れねえよ。……じゃあな！」

「失礼します！」

そう言つて委員長たちは行つてしまった。

「あんまり気を抜くなよ？これからFM星人たちとの戦いにケリをつけなきゃなんねえんだからな」

わかつてるつて。

「でも、どうやつて『絆』まで行くか……アンドロメダも、多分そこにあるんでしょ？」

「そうだな……あの天地つてヤツなら何か知ってるんじゃないか？」

時刻は午後4時30分……ギリギリかな？

「じゃあ、天地さんのところに寄つていくか……」

「別に、明日でもいいんだぜ？」

「いや、調べなきゃいけないコトとかがあつたら、直ぐにはわからないかもしれないよ。だからなるべく今日の内がいいのさ」

さ、人探しミッションも含めると……これは無理だね。

今日は天地研究所に行ったら一度帰ろう。恐らく、あと一日は余裕があるはず。というか、ステーションの残骸を直すまではジエミニも探知出来なかつたんじゃないかな……？

——天地研究所・研究室——

幸いなコトに、研究室には天地さんの姿があつた。用事とかで席を外していたら目も当てられないからね。よかつたよ。

「こんにちは、天地さん」

「どうしたんだい、スバル君？」

「実は、宇宙ステーションに此方から通信する方法を探しているんですけど……」

こんな時間にこんな相談をしても眉一つ動かさず真摯な対応をしてくれるのはありがたいよ、本当に。

「……うーん、正直それは難しいと言わざるを得ないだろうね……宇宙の、それもどこにあるのかもわからない宇宙ステーションを探し出すなんて、広い海の中からたった一粒の真珠を見つけ出すようなものだ」

実際真珠なんて目じゃないくらい難しいからね……

「そうですか……」

「確かに目の付け所はいいと思うんだけど……あ、そうだ。たった一つだけ、方法がある……」

「……………ゴクリ」

唾を飲むボク。ここは、こうしなくちやいけない気がしたんだ。

「あの事故の後、地球に先輩のステーションの一部が落下してきたのはキミも知っているだろう？」

「ええ。確か……ニホン海に落ちたとかなんとか……」

「そうだ。もし、その機体の一部を起動させるコトが出来れば……宇宙ステーションにコンタクトがとれるかもしれない」

コンタクト……融合……キモイルカ……ハッ！ボクは一体……!？」

「それで、その機体の場所はわかるんですか？」

「……すまない。その情報を知る人は今のNAXAにはいないんだ。知っているのはただ一人……当時のボクらの上司で、FMプラネットとのブラザー計画最高責任者だった人さ。あの事故の後、事故の調査を担当していたんだが、ある日突然全ての情報と共にNAXAを去って……それ以来音信不通になってしまったんだ」

人探しミッションの場合、大抵は最初の町にいるのはなぜだろう。

「それで、少し前にこの近所で見たというウワサを聞いたけど……とはいえ、キミはそんなに頑張らなくても、きつとNAXAが何とかしてくれるよ。NAXAもステーションからの電波をキャッチしているはずだし。NAXAには高性能の電波兵器もある……おっと、これは誰にも言っちゃいけないよ」

それってもしかして、ノイズキャンセラー？

「(ケツ、電波兵器だと？そんなモン、アンドロメダにエサをやるようなモンだけ……！)」

「天地さん、その元上司の方の特徴ってわかりますか？」

「そんなコト聞いてどうするんだ？」

「何かの役に立つかもしれないと思って……」

「ハハハ、そうかい……ボクの上司はね、暫く会ってないけど、上品な老紳士だったな」

間違いない。コダマタウンの、あの人だ。(棒)

「老紳士……ありがとうございます、天地さん！」

「スバル君、色々言っただけどこんな状況だからね。あまりお母さんを心配させてはいけないよ」

そのあかねさんのために、こうして頑張ってるんじゃないか！大吾さんを連れてこないで、あかねさんは本当の意味で立ち直れないんだから。ま、ステーションにはいない



「ただね……」

「はい、わかっていますよ。それじゃ、天地さん、ボクは失礼しますね」

「ああ、気を付けて行くんだよ……」

よし、日も暮れてきたし今日は帰るか……

## 49

ー翌日・コダマ小学校・放課後ー

「よし、これで今日のホームルームは終わり。週明けだからって、寄り道せず真つ直ぐ帰るんだぞ〜?」

『ハアアア!』

よし、やっと終わった。さっさと元上司の人にコンタクトをとらなくちゃ……。

今日は学校のサーバーにウイルスが見つかったそうで、急遽午前授業になったのは僥倖だった。本当に。何でも、これを期に電子機器を一通り調べ直すらしい。とにかく、これで時間は確保出来た。さっさとステーションの残骸を、天地さんに直してもらわなきゃ!

「よし、ロック。人探しだよ、わかってる?」

「(おう!行くぜライザー刑事!)」

おっと、そういうえば最近のロックのマイブームは刑事モノだった。確か……『全然危なくない刑事』<sup>デカ</sup>だったっけ?まあ、いいや。気分って大事だからね。

「(フフツ……確かにロックのハナは、頼りになりそうだ。よろしくね、ロック刑事)」

「（へへッ、わかってるじゃねえかスバル！行くぜ！探し人がオレたちを呼んでいる！）」  
ノリノリじゃないか。いや、賑やかでいいんだけど。

「ス、スバルくん。よかつたら一緒に帰らない……？つて、もう行ってしまったわ。  
……………はあ」

——コダマタウン・ウエーブロード——

「さて、それじゃあレッツツトランサー捜索タイムなワケだけど」

————ついて来れるか、この発見スピードに！

「オイ、スバル！もうちよつと裏取りとかをだなあ……………！」

「何言つてんのさ。トランサー内の情報こそが、何よりも確かな裏取りじゃないか」

「いや、そうだけだよ……………なんかこう、もうちよつと刑事っぽいことをだな……………」

何だよ、これが一番手っ取り早いってのに。

「ほら、いいからいいから。時間だつてあんまりないんだ。取り敢えずこのコダマタウンにいる人は根こそぎ調べていくよ。こういう地味な聞き込み（物理）も、刑事っぽくない？」

「何か、不穏な響きを感じる聞き込みだが……………まあ、いいぜ。やってやる！先にへばんな

よ、スバル！」

残念、実は一人目でヒットするんですけどね。

「わかつてるって。……お、あのお爺さんとかいいんじゃない？ いかにもな老紳士だよ」

「何？……確かに匂うな。このオレのハナも、コイツがそうだと言っているぜ！」

へえ……ロックも怪しいって感じるのか。まあ、当たってるんだけど。

「それじゃ、ウエーブイン！」

「おう！」

光の速さでイントウ・ザ・トランサー！ 語呂悪いな……

——うっかりした老人のトランサー内部——

「何々……何やら妙な胸騒ぎがする……この胸騒ぎ、まるで三年前のあの日のようじゃ……こんな日は大好きな酒、『ハードトロピカル』でも飲んで眠るのが一番じゃ。しかしあの酒は中々手に入らんでのう……確かBIGWAVEの店長が持つておったようじゃがカードシヨップに正面から行って、酒を売ってくれと言うのも気が引けるし……困ったものじゃ……だつてさ、ロック」

「イヤに自分語りの多い老人だな……。しかし、やはりこの老人怪しいぜ！ ここは一つ、ジジイの好きな『ハードトロピカル』とやらをチラつかせてみるというのはどうだ？」

「まずは本人を問い詰めるのが先さ。子供に酒を買い取らせた負わせるつもりかい、

ロックけ・い・じ?」

「ウグツ……………チツ、しようがねえな。ウエーブアウトして直接聞き込みといこうぜ」  
「それじゃ、ウエーブアウト!」

ーコダマタウン・現実世界ー

「あの……………」

「なんじゃな……………」

「実はちよつと、聞きたいことがあるんですけど……………」

「悪いが今は誰かと話す気にはなれんのじゃ……………」

ちえつ、ま、いいけどさ……………」

「よし、それじゃBIGWAVEの店長のところに行こうぜ!」

はぁーい。ボク未成年んだけどなあ……………」

……………あ!あれは……………委員長!帰宅途中だったのかな?何だか沈んでいるように見えるけど……………」

しかし助かった。やはり委員長はボクの女神だったのか……………」

「委員長〜!」

「はぁ……………つて、この声……………スバルくん!?」

手を振って此方の存在をアピールする。委員長も手を思いつきり振る。なんだろう、

コレ。

「委員長助けてお願い！」

うがーっ！つと、委員長に詰め寄る。いや、ホント助かったよ……！

「ま、待ちなさいスバルくん！ち、近いわ……！」

ハッ！……しまった。肩を掴んで揺らしていたらしい。これは申し訳ないな。

控えめに言っても端正な顔立ちをしている委員長だけど、今はアワワワ……！と普段の凛々しさが見る影もない。

「あつ……、ゴメンよ委員長……ボク、嬉しくて……」

ボクの反省を聞き入れた委員長だったけど、その顔は未だ赤いままだ。委員長は、あがり症ではないはずなんだけどな。

「あら……そ、そう。そ、それなら仕方ないわね……」

最近の委員長って結構ニヤけること、多いよね。

「ところで、どうしたのかしら？……何か用事でもあったのではないの？」

気を持ち直した委員長の指摘によって、ようやく思い出す。そうだった。

「えっと、実はさ。ちよっとお酒を手に入れたんだけど、ボク一人じゃあ売ってくれかわからないだよね……」

そこで委員長にも話してもらって、説得力を出そうという戦法だ。

「ふうん……ま、スバルくんだものね。いいわ、ワタシはどうしたらいいの？……手伝うわよ？」

「ありがとう、委員長！……基本は、一緒にいてくれるだけでいいんだ。ただ、事情を聞かれたらボクに合わせて欲しいんだ。……出来る？」

「アナタ、ワタシを舐めすぎよ。それくらい、朝飯前つてところね」

「フフン！と、自信満々に同行を表明する委員長。ロックとはまた違った方向で頼もしいね。」

「いやあ、ホント助かったよ……やっぱり委員長は、そうでなくちやね！」

「フフフ……！ワタシも少しは成長しているのよ！（前に、明るい方が好きだって言っていたし……）」

再び胸を張った後に、少しだけ赤くなる委員長。見なかったことにしておこう……。

——BIG WAVE——

「いらつしやい！チョーイイモノ揃えてるから、ガンガン買って行ってね！」

相変わらずハイテンションな人だ。騒がしいけれど中々憎めない、不思議な魅力があるのもこの人らしい。

「こんにちは！ええつと、今日は……」

——少年説明中——

「…………え? 『ハードトロピカル』? あー、アレね! 一口飲むごとにココロが南の島に飛んで行っちゃう、甘くてハッピーでスパークリングなニュアンスのお酒のことだよね?」

その酒、結構ヤバくない…………? 甘くてスパークリング以外は信用出来ないぞ、これは…………!

「ええ、多分それです…………」

「その酒、店には置いてないんだけど…………個人的には持つてるよ」

「どうにか、譲ってもらえませんか?」

「まさかキミたちが飲むわけじゃないだろうし…………未成年なんだ。ワケくらいは聞かせてもらおうけど、いいよね?」

ま、当然の対応か。ここで直ぐに渡してくるようだったら、逆に信用出来なかっただろうね。

「ええ、ちよつとした要件で必要なんですけど、その人が好きなモノがそのお酒ってことしかわからなくて…………」

そこまで言つて店長の南国さんを見ると、目を丸くしているのがわかった。その後はボクと委員長長へと視線を右往左往させている。困惑しているようだ。何か変なコト、言つたかな?

「……………なるほど。その年でご挨拶とは、最近の子供は進んでいるんだね…………」



な、何だ!?急に遠い目をし出したぞ?

「ご挨拶……?ええまあ、そんなものです」

お爺さんへ、挨拶代わりの土産みたいなものだから間違っではないんだけど、何だか変なニュアンスだ。

「ス、スバルくん………!?!」

え?え?何!?何で委員長が赤くなるの!?ホントにどういうこと!?ワケがわからないよ……!

「いいねえ、こういうの。応援したくなっちゃうなあ……。よし、決めた!持つていきなよ、『ハードトロピカル』!お代は要らない。その代わり、その娘を泣かさなないこと。……わかった?」

え?お代は要らない?つてことは……タダ?だけど何だろう、まったく安心出来ないぞ……!

「ええつと………ありがとうございます」

「いいっていいって!未来ある若者にエールを送るのは、ボクたち大人の役割さ!」

なんて言っつて、ウインクを飛ばしてくる南国さん。なんか釈然としないな……

「そうですか………委員長、ありがとうございます。付き合ってもらっちゃって」

「ワ、ワタシはそんな……ま、まだ早いわ………そんなの………!」

「おーい、委員長さーん?……ダメだ、戻ってこない。」

「ほら、行くよ委員長……」

仕方がないから、委員長の手を引いてBIGWAVEを後にする。南国さんまで、どうしてそんなにニヤニヤしてるんですか……!?

「ーココダマタウンー」

「付き添ってくれてありがとう。それじゃあまた明日、委員長」

「ええ、また明日……」

あ、明日つてもうステーションに飛んでるじゃないか。学校は休まないとな……

「さて、さっきの老爺さんのところに行かないと……」

「そうだな……ジジイは気分が変わりやすいらしいからな、急いだほうがいいかもしれないぜ」

「ええ……わかったよ……」

「こんにちは、お爺さん」

「なんじゃ……?」

「ちよつと、聞きたいことがあるんですけど……」

「ーチラッチラッ」

「そ、それは……!!」

効果は抜群だ!

「ワシの大好きな酒……『ハードトロピカル』ではないか!」

「ちよつと、聞きたいことが、あるんですけど?」

「は、話を聞くだけ聞いてやろうじゃないか……」

落ちたな。(確信)

「実は……」

——少年説明中——

「むう……いかに。ワシは元NAXAで例の宇宙ステーションのオペレーションチームで指揮をとっておった……そうか、キミが星河君の息子じゃったか。星河君には悪いことをした……謝っても許してもらえとは思っておらんが……」

「お爺さん、今は一刻を争うんです。どうか、地球に落下してきたステーションの一部がある場所を教えてください」

「も、もしや、ステーションにアクセスするつもりじゃなからうな?」

そうしなきゃ地球はオダブツなんだよ!

「……そうです。お願いします、早くしないと……」

「……その目……覚悟は、あるようじゃの。……わかった。封印した場所を教えてください」

う……」

「ありがとうございます！それで、その場所というのは……う？」

よかった……。ここまできて、教えてもらえなかったらキツイよね。確か天地研究所にあるスペースコロニーの電腦だったっけ？

「それは……どこじゃったかのう？」

これは酷い。いや、自分から流出するのを防ぐため……とかだったはずだ。

「ええ……」

「実はワシの口から誰かにあの場所をいつてしまわんように、手術を受けて封印した場所に関する記憶を消してしまったのじゃ。そのおかげで物忘れが激しくなってしまったがな」

それは正直、訴えてもいいと思う。後遺症酷すぎない？

「じゃあ、その場所にはもう……」

「いや、来るべき時の場所のために、ある場所にその場所を書き留めたデータを隠しておく。確か……そうじゃ、ワシの元部下の研究所の中、だったはずじゃのう。宇宙ステーションに因んだモノのプログラムの中に組み込んでおいたのじゃ」

隠した場所を記したデータの場所を覚えていたら、手術を受けた意味が、あまりないんじゃないの？

本当に隠したいなら、そのデータをNAXAとは無関係の誰かに預けて、その人に隠してもらいなりしてもらえばよかつたんじゃないかなあ……

「それって……天地研究所のことですか？」

「おお、そうじゃそうじゃ！」

他人のプログラムに無断で組み込むって、普通に犯罪なのでは……？ いや、今はよそ

う。  
「お爺さん、ありがとうございます！」

そう言うって『ハードトピカル』を渡す。さつきから目線がチラチラいつてたもんね。  
「それにしても、どうしてステーションの一部を隠したりなんてしたんですか？」

「……あの事件が起こった時、ステーションからの通信の一部始終を聞いておった。FM星人の地球に向けた敵意を知ったときは、戦慄が走ったよ……」

当時の恐怖を思い出したのか、若干震えているお爺さん。『ハードトピカル』を飲んでいないことによる禁断症状だとは思いたくない。

「そしてステーションの一部が地球に落下した。調べてみると、ステーションの一部に生きている通信機能を見つけたのじゃ。破壊してしまうことも出来たが、アレは宇宙ステーションの居場所を知ることが出来る唯一の手がかりじゃった。しかし、通信ログからFM星人に地球の場所を突き止められる恐れがあるため、通信を遮断し誰にも場所を

明かさずに封じ込めたのじゃ……いつでも通信を再開できるように、修理を施してな。ステーションのクルーたちには申し訳ないことをしたが、ワシは責任者として地球に危機が迫る事態だけは避けなければならなかったのじゃ……」

このお爺さん、ステーション本体にある航行データから逆算されるとは、思わなかったのだろうか。いや、されてないからいいんだけど……

「そうだったんですか……」

「キミにも、ツライ思いをさせたな。……すまんかった」

深々と頭を下げる老紳士。あんまり見られたくはない光景だね、これは。

「お爺さん、頭を上げてください。きつと父もわかってくれるハズですから……では、ボクは行きますね」

「そうか……いや、もうよそう。気をつけて行きなさい」

神妙な顔をするお爺さんと別れて、ボクたちは天地研究所に向かった。ロックはその間、ほとんど喋らなかつた。何か感じ入ったものでもあったのだろうか？

「ロック……？ どうしたの？」

「……………グガア、スピー、グガア……」

こ、コイツ、寝ていやがる！

心配しただけ損だったよ……

——天地研究所・科学館——

「(一通り探したけど、やっぱりあの『スペースコロニー』の展示が怪しいね。ウェーブイン出来るようだったし……)」

「(おう、それじゃウェーブインだ。とつとと見つけちまおうぜ)」

ロックも巻きをお望みだし、ちやつちやと進めてしまおう。

——電波変換！星河スバル、オン・エア！

——スペースコロニーの電脳——

「さて、スペースコロニーの電脳に入ったワケだけど……」

「ああ、アレだな。間違いなさそうだぜ」

データはあった。あったんだけど……

「コイツはヒデエ！かなり電磁波を帯びちまつてるな……まずはこの電磁波を何とかした方が良さそうだ。多分出てくるぜ？……ウイルスがよ」

「ウイルスかあ……キグナスの残留電波でも出てこないかなあ……」

もうウイルスなんかじゃあ、満足出来ないよ……

早く3環境になって、オックス・ファイアと好きなだけスパリングしたいなあ……

「物騒だなオイ……」

「さ、やってしまおうか。準備は？」

「いつでもオーケーだ！」

ウエーブバトル・ライドオン！



ーースペースコロニーの電脳ー

ウイルスは……ええつと、メットリオ3とビリージョーカーのGタイプが一体ずつ、それにアイズのノーマルサイズが一体だ。

ビリージョーカーというのは、以前科学館でバトルしたビリーエースの上位個体で、体色は紫と強者オーラを身に纏っている。相変わらずノロいので、いいのなんだけど。アイズは色違いのモンスターボールにアンテナと目がついたようなウイルスで、カーソルを飛ばして遠隔攻撃をしてるのが特徴だろうか。

全体的な講評としては、あんまり苦戦はしなさそうだ。機動力のあるウイルスはいないため、ヒット&アウェイがテンプレかな。

「行くよ、ロックー！」

「おうー！」

この掛け声も慣れたもので、ロックは素早くウォーロックアタックの態勢に入ってくる。阿吽の呼吸ってヤツだ。

「疾ッー！」

まずはロックオンされると回避が難しい、アイズを葬ることにする。ウォーロックアタックで急加速した体をアイズの正面で停止させ、ロックオンカーソルを飛ばしてくる目にリュウエンザンを突き入れる。目が、目がアア！（アイズ視点）

「よし次……ハアッ！」

巨体故に小回りの利かないメットリオ3をライメイザン、スイゲツザンと連続で斬りつけ、デリートする。ぶつちやけGじゃない方がやりにくいよ。的の大きさがダンチなんだもん。

「後は……」

残ったのはビリージョーカー。雷球は既に発射しているが、動体にヒットさせるには……あまりに遅い！

「これでッ！……ッ！……ッ！……ッ！」

連続してヘビーキャノンを撃ち放つ。残ったHPはチャージロックバスターで削りきり、戦闘は終了した。

電磁波が、晴れるぞ……！

「……終わったね。あ、これが例の……『NAXAデータ』みたい」

「ああ、取り敢えず調べてみようぜ」

ええつと……

「何々……例のモノはドリームアイランドの地下深くに埋めた……。入り口はゴミで塞いでいるが、何かで退かせば入れるようになる。だつてさ」

「そんなじゃ、とつとドリームアイランドに行こうぜ！」

「了解！」

ードリームアイランド・廃棄物置き場2ー

さて、淀みない足取りで向かうは以前色々あった、あの廃棄物置き場2……つまり最奥だ。場所には大体の検討がついているので、この目前にあるシヨベルカーを使えば発掘することが出来る。

「おつと。このシヨベルカー、動きそうだね」

「ああ、シヨベルマンのカードを使って見たらどうだ？」

「よし、それじゃあ……カードイン！」

『シヨベールー！』

酷い掛け声だ。さつさと操作してしまおう。

「ええつと、こうしてこう……つと」

トランサーに映る、単純にして明快な操作方式。つまるところレバーを動かしてシヨ

ベルカーを操作する。黄色の機体に映える鋼鉄の巨爪が、スクラップの塊を一掃していく。見ろ、ゴミがゴミのようだ。あれ、何かおかしいな。というか、回りくど過ぎだ！

ーガラガラガラ……ガツシャーーン！

よし、入り口を発見したぞ。何だかピラミッドの入り口でも探すような気分だったな……

「おつー！どうやら当たっていたようだぜ。……入ってみるか、スバル？」

酸素とか大丈夫だよね……？

「うん、行こう。あのデータからして、修理を施してからはほったらかしにされていたはず。システムが生きているかぐらい、確かめないと……」

「おうー！行くぜスバル！」

ーアイランド地下ー

扉はエレベーターになっていて、三年の年月が経っていても正常に作動してくれたのはラッキーだった。途中で止まっちゃうんじゃないかと、ヒヤヒヤモノだったけどね。

「これは……結構な規模だね」

「ああ、一個人に用意できたとは、とても思えねえな」

確かに。これだけの規模だ。用意するだけでも、かなり目立つはずなんだけど……

元々管理していた場所だったとか？まあ、所詮は憶測だね。

「あ、通路の終わりが見えてきた……」

割と長い地下廊下を進んだ先に、ステーションの一部はあった。多くのパーツやパネルがスクラップと化している中、最奥に位置しているほぼ無傷に近いパネルが異様に目立っているのを感じる。乗組員たちの執念が乗り移ったかのようにも見えるのは、流石に考えすぎだろうか。

「どうだ？動きそうか？」

ロツクの声をBGMにシステムの損傷具合を調べていく。特に大きな損傷もなく、しつかりとした知識のある人間なら問題なく復旧出来るだろう。

「うーん、損傷は小さいから、あとは専門知識を持った人が復旧させればなんとかいけるかも……？」

ボクの言葉に、ロツクが難しい顔をする。そろそろ、天地さんがボクたちに追い付く頃だろうか。来なかつたら呼びに行くけど。

『……スバル君。まさか本当にここを見つげ出すとは驚いたよ……』

「天地さん……どうして、ここに？」

「あの後、シゲさんから連絡があつてね……キミに手を貸してやってほしいって、頼まれたんだよ」

シゲさん……？もしかして、うっかりシゲゾウだからシゲさん？

「あのお爺さんが……」

「それにしても……こんなトコロに隠してあったのか。よし、取り敢えずコイツを動くようにしてNAXAに連絡を入れないとな……」

ある意味当然の反応なんだよね。この件は、一般人に対処できる限界を越えている。

「まって下さい！NAXAには……」

「スバル君、自分で何とかしたい気持ちはわかるけど、実際の話、どうやってFMプラネットと戦うんだ？我々には戦う術はないんだよ？」

ーゴゴゴゴゴゴ！

まさか、もう来たのか!?はえーよジエミニ！

「この揺れ……!」

やはりこれはデンジハボール！

「あ、あれは!」

今しかない!多分ツカサ君はこの近くに来てはいないだろうし、これを逃せばジエミニに殺られる可能性は跳ね上がる!

「ロック!」

「( )でやんのか!?!」

「今対処できる人間はいないんだ！それとも、今からサテラポリスの五陽田さんに連絡する？ゼットトレイレイザー付きのトランサーを持ってきて下さいってさ！」

「さつきから、誰と話しているんだい？」

天地さんが訝しんでいるぞ。そろそろジエミニも来そうだ。やるしかないって！

「行くよ！電波変換！星河スバル、オン・エア！」

「オレは知らねえからなっ！」

——アイランド地下・電波世界——

「そ、その姿は……………」

「少し黙って下さい、天地さん……………来るッ！」

閃光を纏って現れたのは、やはりジエミニだ。コイツだけはオラオラじゃ済まさない  
と、そう決めていた！

「ジエミニ！」

「クククク……………悪いがオレたちの邪魔はさせないぜ！」

「コイツをデリートします……………天地さんは隠れてて！」

敬語を使う余裕もない！

「あ、ああ。わかった……………」

よし、これで戦える！」

「調子に乗っていられるのも、今のうちだけだぜ？……まあ、こつちもロックマンが相手なら本気にならざるを得まいが！ハアツ！」

またフラツシュ！ピカピカ眩しいんだよ、さつきから！

「ツカサ君なしで、その姿に……！」

視界に映ったのはご存知、ジエミニ・スパークだった。

しかも以前より感じるチカラが大きい！

しかし、どうしてツカサ君と合体しないんだ……？（遊星感）

「オレの記憶の中のデータを使つて具現化させたのさ！もうツカサの存在は必要ない。行くぜロックマン！」

「憑代無しで電波変換だど!? インチキ能力もいい加減にしろ！」

こんな時にネタに走りやがって！

「こつちだつて、負けられない！ヒカルに取り憑かなかつたこと、後悔させてやる！」

粉碎！玉砕！大喝采だ！

「くつちやべるのは、勝者の特権だ……！お喋りはここまでにさせてもらうぜ！」

全身から雷を撒き散らすジエミニ・スパーク。電子機器が……！

「来るぜスバル！」



「オーライ！ウエーブバトル、ライドオン！」

「ジエミニー！アンタはボクを、怒らせた……！」

「こつちから行くぜエツ！」

黒ジエミニがエレキソードで斬りかかってくる。白ジエミニは黒ジエミニの陰に隠れて目視することが出来ない。ジエミニだって、以前の戦法が通じるとは思っていないはず。いや、通じないと疑っているはずだ。

と、いうことは……

「ツ！随分と、決着を、急いでるねっ！どうしたんだい!？」

黒ジエミニのエレキソードをシールドで受けながら、言葉を交わそうとする。

「ククク、それを言うことは、出来ねえなあ……っ！」

跳び退いた!いや、このパターン……知ってるぞ。

やはり黒ジエミニの陰にロケットナックル！安直だけど遣りにくいぞ、これは！

「フウ……危ない危ない……」

「オイ、スバル！スターフォースは使うんじやねえぞ！」

了解、トランザム！

「なら、いくよロック！派手にいこうか！」

古の導きを得て、ここに新たな継承者とならん！

ト  
偽装血族・内包！……ベルセル

クー！ちょっと、クサかったかな？

「そうだ……オレはこれをやりたかったッ！」

「ならお望み通り、斬り刻んでやる！今度は真つ二つを覚悟してもらおうよ！」

「クツクツク……スバルを舐めんなよ、ジェミニ！」

ロツクからの信頼が厚くて照れる。というか、ベルセルクだと大剣の技量に左右されるのが難アリなんだよね。もつとこう、誰でも使えるようにだね……

「いくよロツク！」

「おうよ！」

高速で黒ジェミニにロツクオンカーソルを合わせ、大剣で突き込むようにウォーロツクアタックを敢行する。元いた足場にはバチチッ！つと静電気が走る。電光石火だね、まさに。

「うおおおっ！」

「ツ!? チクシヨウ!……グハアッ！」

「ウグッ！」

コイツ、ロケットナツクルを盾にしやがった！大剣の刺さったロケットナツクルは爆発し、ジェミニとボクを襲う……痛ッ！

「ハア、ハア……ククク、どうだ？久々のロケットナツクルの味はよオ!？」

既に黒ジエミニの右腕にはロケットナックルが再構成されている。今度は誘爆させてやろうか!?

「ツカサ君の方が上手かったね。……彼はボクのことをよく知っていた。ボクのクセも……」

だからやり辛くて仕方なかったんだ! ホント、どうやったらあんなに死角に入り続けられるのか、知りたいくらいだよ!

「チツ、減らず口を……!」

「どっちが!」

「やっちまえスバル!」

わかりきってるよ、そんなの!

そろそろ決める! おあつらえ向きのカードは、既に来ているぞ!

「……よし、これでファイナーだ!」

ギガクラスカード『ペガサス・マジックGX』を発動!凍てつく冷氣に溺れてしまえ!

「うおおおっ!!」

「何だ、虚仮脅しか?……テメエ!やりやがったな!」

ボクが狙ったのは後方の白ジエミニ。アイツは残しておくど面倒だし、最悪持久戦に



既に死に体といった表現が相応しい黒ジエミニを氷像に閉じ込める。瞬間、氷像は四散し中の黒ジエミニも解放されるが、既にHPは尽きている。あとは消滅を待つばかりというところだ。

「チ、チクシヨウ……またしても負けるとは……か、勝てると思ったのに……！」

電波体を崩壊させる黒ジエミニ。特に言うことはない。強いて言うなら、自業自得なんだろうね。

ーアイランド地下ー

ジエミニが消滅したことで、デンジハボールも消え去ってしまった。ここはまだ、ウエーブホールもまともに発生していない空間なので、デンジハボールの消滅とともにボクとロックの融合も解除されてしまった。

「スバル君……キミは一体……」

天地さんが、未だこの状況が信じられないといった風に聞いてくる。

「青き戦士、ロックマンですよ天地さん」

ちよつとふざけて言う、天地さんもツボに入ったのかクスリと笑って頷いてくれた。

「確かに、さっきの姿は青き戦士といったところだったな……クフツ……」

「中々、気の利いたジョークだったでしょう?」

「そうだな……中々効いたよ。ところで、ちゃんと話してくれるんだろうね? さっきの姿を……」

「わかつてますよ、天地さん……」

——少年説明中——

「……俄には信じられない話だが、そのウオーロックってFM星人がキミと融合してさっきのロックマンという姿になるのか……しかし、キミがFM星人に対抗するチカラを持っていることはわかった。そしてボクがこの装置を修復してキミを宇宙へ送れば、FM星人の野望を阻止することができるかもしれない……」

やはり理解力は高いな、天地さん。流星に科学者だ。

「そういうわけです。なのでこの装置の修理を……」

「悪いが、考えさせてくれ」

やっぱりか。

「理由を、聞かせてもらっても?」

「FM星人と戦えるチカラがあるからといって、キミ一人を宇宙に送り込むわけには……行かない」

それでもボクは、行かなくちゃいけないんだ。

………ボクのために。

「………それでも、守りたい世界があるんです。ボクを支えてくれる、ボクの世界が！」  
「だが、キミにもしものコトがあつたら、キミのお母さんはどうなる!? 大吾先輩に続いてキミを失つたら………ボクはキミのお母さんにどんな顔して会えばいいんだ!? ボクはキミのお父さんを宇宙に打ち上げたんだよ! ……この手で!」

天地さんにとつても、大吾さんの事故はトラウマなんだろう。その息子を死地かもしれない場所を送り込むなんて、かなり苦しいに違いない。

「母さんだって、ボクの世界の一部なんだ! 母さんを守れなかったボクに、天地さんは一体どんな顔して会いに来るって言うんですか!? もうボクは、ボクの世界を失いたくはない! 父さんの時の様には!」

最も天地さんに響く父さんというワードの部分だけが虚飾なんて、酷い皮肉だよまったく。

「………一日、時間をくれ。明日には、コイツを使い物になるようにしよう」

観念したらしい。良かった。多分ボクが大吾さんの言葉を借りても、天地さんには届かなかつただろうし。

「ありがとうございます!」

「但し、いいか………絶対に帰ってこい! 男の覚悟を見せたんだ。最後までやり通して、何

でもないようにお母さんには笑ってみせろ！……いいね？」

クソツ、天地さんめつちや良い人じゃないか……！ああ、こんなコトを言える大人になつてみたいモンだよ、ホント。

「ハイッ!!」

「よし、良い返事だ！今日は帰って、ゆっくり休め！明日の大勝負、妥協はするなよ！」  
そう言つてカラカラ笑う天地さん。こりやあ宇田海さんも陥落するよね。しようがない。

「わかりました！えっと、その………ホント、ありがとうございました！」

よし、さつさと帰って寝るぞ！一昨日まで、既にバトルカードやアイテムは揃えているから、あとはコンディションの問題だ。大丈夫。ボクはやれる。

ースバル退出後――

「……これで、よかったんですよ……大吾先輩……」

そう言つて天地守は背後のモニターに向かい、作業を開始した。彼の夜は、長い。



## 51

——星河家——

「ただいま〜」

気持ちいつもより明るく、あかねさんに帰宅を告げる。それでも多分、何かしら勘づいてしまうんだろうけど。

「おかえりなさい、スバル。……ねえ、母さん昨日、ヤシブタウンに行つてたわよね？全然思いつけないわ……」

「大丈夫だよ、母さん。何も心配は要らないさ……」

「そう、かしら。ごめんなさいスバル。母さんちよつと

心配性になつて……」

サテラポリスに記憶処理でも受けたのだろうか。あんまり感心はしないが、心の安定を守るためなら仕方がないと、割り切るしかないのだろう。

「そんなことより母さん。今日の晩御飯は何か決めてる？ボクもうお腹空いてきちやつて……」

「え、ええ。そうね……カレーにでも、しましようか」

カツが付けば、験担ぎには最高だね！今回は三度勝てばいいワケじゃないし……

「ホント!? やったあ！ そうだ、今日は学校でウィルス騒動があつてね……」

「フフツ、そうなの？ 詳しく聞きたいわね……」

「もちろん！」

——その頃・宇宙ステーション『絆』・最奥——

『アンドロメダのカギ』を奪還することに成功したFM星人たちは、王の命により玉座に集結していた。

FM星人にはその構造上、腕が翼になつていたり天秤になつていたりする者がいるので、各自思い思いに敬礼のポーズをとっている。

『我が戦士たちよ、よくぞ「アンドロメダのカギ」を取り戻した。褒めて遣わずで……』  
安堵と決意を滲ませた王の言葉が聞こえた。

「ブルルツ、ありがたきお言葉！」

オックスが代表してFM王の言葉に答え、受けた感銘を表現する。他のFM星人たちも、似たような状態だ。

『これより、アンドロメダの封印を解く……地球もこれで終わりだろう！』

喜色を含んだ王の言葉に、キグナスが口を挟む。

「FM王……」報告が。ジェミニがテリートされたようですが……」

キグナスの報告を受けても、王は僅かに眉を潜める程度で、大した動揺は見せなかつた。

『構わぬ。あやつが居らずとも、何も変わりはありません。愚か者が……折角甦らせてやったのに、ムダ死にしおつて……では我が戦士たちよ、アンドロメダ解放の準備を開始せよ！』

「ブルル！」

「ハッ！」

「了解！」

「ハッ！」

各々が忠誠を誓う王に返答をする。

しかし王は……

『（戦士にしては、統一感のない者共よな……）』

若干呆れていた。

——翌朝——

——チュンチュンチュン……

小鳥のさえざりで目が覚める。一応シーツをめくつて誰か潜り込んでいないかを確認するのは、仕方のないことだと思ふ。よかつた、今日はいい。

たまににいるからね……

「よし、今日もいい調子。ロックはどう？」

「へへッ、最ツ高のコンディションってヤツだぜ！」

ま、心配はしてなかったけどね。

「じゃ、行こうか。ボクたちの平和を、勝ち取る戦いにさ！」

ちよつとクサイセリフだったかな？

「あんまり気負うなよ？」

「わかってるって。でも案外、大したことないかもしれないよ？」

「ま、デカブツではあるからな。小回りは利かねえようだから、ペガサスで攪乱してやれば案外いけるかもしれないが……」

自分の星を滅ぼした兵器なんて、中々侮れるものじゃない。それでもそう言ってくれてるってことは、アンドロメダのチカラよりもボクを信じてくれているということ……だ  
といいな。

「そうそう、その調子！あのやられ損ないのFM星人たちを、ぶっ飛ばしてやろうよ！」  
「ケケッ、オマエも結構言うぜ！」

ーゴゴゴゴ……

この揺れは……あんまり時間は無さそうだ。急がないと！

ー星河家・リビンググー

リビンググでは、あかねさんが一人テレビを見ていた。全国でも電波化現象が起こっているらしいし、当然か。

「おはよう、母さん」

「おはよう……出掛けるの？」

やっぱり元気がない。こんなあかねさんを、ボクはあまり見たくはない。

「うん、そうだよ」

「おかしな地震が続いてるの。こんな時に外には……」

親としては、危険な外に出したくないに違いない。ボクだって、無関係なら部屋にこもってやり過ごしていただろうさ。でも今は、ボクがやるしかないんだ。バトルが楽しかったのもあるけどね……

「ごめん母さん。ボク、どうしても行かなきゃいけないんだ」

「……グスツ……ゴメンなさいね。あの日、お父さんがウチを出る時も母さん今みたいに父さんを止めたの……やっぱり宇宙に行くのを止められないかって……そしたら父さん……『どうしても行かなきゃいけないんだ』って」

ゴメン、知ってた。本当にゴメン……

「……やっぱり、親子なのね。ワタシ……昨日の夜、夢の中に父さんが出てきて……そし

て笑いながら遠くへ消えていくの……グスツ……」

このバカ親父ッ！こんな良い人を泣かせ続けやがって！……再会したら、絶対にぶん殴ってやる！絶対にだ！

「スバルが出ていってそのまま……帰ってこなかったらって、そう思ったら……グス……」

「大丈夫。ボクは絶対に帰ってくるよ」

「スバル……」

「フフツ、あんまり心配しなくても大丈夫だって。そうだ、帰ってきたら母さんに紹介したい人がいるんだ。実はその人、料理が苦手な人で……」

百合子さんのことなんだけどね。前にトランサーの中に潜り込んだ時、料理が苦手だって書き込んでいたからなあ……。母さんとも、相性は悪くなさそうだし……

「そう……フフツ、なら楽しみしてるわね」

「うん！それじゃ行ってきますす！」

「行つてらっしゃい、スバル」

ーガチャッ！

「ヒャアッ！」

うわっ！……何だ、委員長か。

「おはよう、委員長。……どうしたの?」

「どうしたのって……今日は火曜日よ? い、一緒に登校しようと思って来たのだけど……」

しまった!今日は平日、つまり登校日だ。後で学校に休むって連絡しとかなきゃ……  
「あーうん、ゴメン。今日はボク、学校休むよ……」

ーピロン!

ーピロン!ピロン!

メールだ。委員長にも来てるみたい。しかも二通?

ボクの方は……ええっと、学校からか。

「何々……外は危険なため、今日は臨時休校とします……だつて」

「ワタシは……学校と天地さんからね。何々……ツ!あ、アナタ、宇宙ステーションに乗り込むつもりなの!?!」

あ、天地さんからのメールってそれか……

「うん、ちよつと地球を救ってくるよ。青き戦士、ロックマンとしては本懐かな?」

「こ、こんな時に……アナタって人は……グスツ……アレ?な、涙が……」

「(あーあー、泣かしちまったな)」

うっさいロック!あーもう、わかったよ……

「ほら委員長、取り敢えず、ええつと……人気が少ない、展望台にでも行こうか？」  
「……うん、わかった……グスッ」

委員長の手を引いて、ボクたちは展望台に向かった。

ーコダマタウン・展望台ー

ここはいつも、人氣が少なくない。風も気持ちいいし、見晴らしもいいんだ。何で認知度の割に、訪れる人が少ないんだろうね？

「ほら、委員長……大丈夫？」

ここに来るまでに大分落ち着いたのか、委員長の落涙は既に収まっている。代わりに顔が赤いけれど。泣き顔を見られるのって、恥ずかしいもんね。仕方ないね。

「ええ……もう大丈夫よ。でも、さっきのは本当……？何もアナタが行かなくなつて、大人が何とかしてくれるんじゃないの？」

「それは無理だよ。だよ、ロック？」

「ああ、NAXAの電波兵器で何とかするなんて、息巻いてはいるが……アンドロメダにとつては、タダのエサに過ぎないぜ。AMプラネットの住人は電波体だったんだ。そいつらを根こそぎ食いつくしていったんだぜ？電波の兵器なんて無駄だよ、無駄」

「そう……会話をしたのは初めてかしら？アナタがスバル君のトランサーに住み着いて



いる宇宙人……ウオーロックね？」

「そういえば委員長とロックに、直接の意志疎通の機会は無かったんだっけ？」

「ああ、別にロックでいい。ともかく、今はスバルじゃないと地球は救えねえ。当然帰ってくるつもりだが、どうなるかはわからねえ。だからよ、コイツが無事に帰ってこれるよう、祈ってやっててくれないか？……頼むぜ」

ロック……ありがとね。

「フーン……当たり前だわ！ワタシのロックマン様が、あんな宇宙人なんか遅れをとるハズがないもの！」

強がってはいるが、委員長の目は潤んでいる。心配かけさせて、ホントに悪いと思ってるんだけどね。

「ゴメン、委員長。どうしても、ボクがやりたいんだ。だけど絶対に帰ってくる。約束するよ」

「わ、わかってるわ！でも………グスツ」

堪えきれなくなったのか、またグズリ始めた委員長。なんか……デジャビユだ。

「ほら、スバル。慣れてるだろ、オイ」

酷い言い種だな、もう！一体ロックには、ボクがどんなヤツに見えてるっていうんだ！

「……心配要らないから。ボクはね、誰かのためにこそ全力を出せるんだ。誰かのために尽くしたりしていると、ボクがちゃんこの世界で生きてるって、そう感じられるんだ。だからさ、委員長」

「なに……?」

「信じてほしいんだ。ボクのことを、ボクの思いを、ボクの強さを、ね」

泣いてる委員長の両手を取って、照れ臭いけどそう宣言する。委員長は少しだけ呆けていたけど、すぐに満面の笑みになって抱きついてきた。

……わぶっ! く、苦しい……

「バカ! こんな時だけ、カッコつけないでよ……」

最後だけ尻窄みになった委員長。今度は、ちゃんと聞こえてたよ。……ありがとう。「いいんだよ、これくらいじゃなきゃね。世界を救うんだ。ちよつとくらいカッコつけたって、バチはあたらないうよ」

「ああ、もう! ……一度しか言わないからね! 心して聞きなさい! いいわね!」

「え、あ、いや……ハイッ!」

「いい返事よ、星河スバル! 帰ってきたら、ワタシとデートしてもらおうわ! ミソラちゃんのこと、忘れちゃダメよ! わかった!」

え? デート? え? なに、どういうこと……! ?

「ハイッ！わかりましたッ！」

「フフツ………いい？絶対に、帰ってきなさいよね………！」

何？ご褒美的な感じだったの？そりゃあ嬉しいけどさ。

で、出来ればヤシブタウン以外で……百合子さんを相手にするのは骨が折れるからね。いや、別に嫌ではないんだけど。何か外堀を埋められそうで怖いんだよね……

「うん、わかった。じゃあ、行ってくるよ！」

「そうよ、その意気よ！」

ーパアアン！

背中を叩かれた！ジンジンする……

「イタタ………」

「ほら、シャキツとしなさいな！」

委員長は相変わらず満面の笑みだ。さつきまで泣いてたクセに、なんだよまったく

……

「はぁーい………」

「フフフ………」

ーードリームアイランド・アイランド地下ー

ーピロン！ピロン！ピロン！

あ、メールだ。

「差出人は……委員長、ゴン太、キザマロ？」

「読んでみろよ、スバル」

「じゃ、委員長から……無事に帰って来なかったら、タダじゃおかないから……気をつけてね。だって」

「あのオンナらしいな……」

まあ、そうだよ。うーん、地味に嬉しい。

「じゃあ次、ゴン太ね。何々……委員長から話は聞いたぜ！……頑張れよ！お前ならきつと、この地球を救ってくれるって、そう信じてるぜ！お前が帰ってきた時のために、上手い牛丼屋探しとくからな！頼むぜブラザー！……だつてさ」

こういう気負わなくていいところが、ゴン太の良さなんだよね。何だか牛丼食べたくなってきたな……

「ケツ、あの野郎の言いそうなことだぜ」

「ロック、口角が上がってるのは気のせいかい？」

「ち、ちげえから！気のせいだつての！」

ツンデレ乙。別にロックのツンデレは、お呼びではないんだけどね。

「最後は……キザマロだね。……ゴホン、スバルくん、頑張ってください……微力ながら、応援しています。だからその……帰ったら宇宙ステーションでの話、聞かせてくださいね！……終わりだよ」

「そういや、あのチビとはブラザーじゃなかったな。どうするんだ？」

「結ぶさ。キザマロだって、ボクの友達ブラザーなんだから」

「それもそうだな！へへ……（スバルが、ここまで臆面なく言い切るとはな……ま、打ちつてのはいいもんだ。スバルもそれをわかってきたんだろうよ）」

「何だよロック、ニヤニヤしてさ……」

「いいや、何でもない……クククッ」

「あーもう、何だよロック！」

気になるじゃないか！これから決戦なんだから、憂いは無くしておきたいのに！

「ほらほら、そろそろ見えてくるぜ。修理が終わつてるといいがな……」

誤魔化したな!? あつ！天地さんが倒れてるぞ！大丈夫だと思つてたのに……

「天地さん……いや、起こしたらマズいかな？」

ボクがワタワタしていると、寝落ちしていた天地さんが身動きした。どうやら起こしてしまつたらしい。

「……ん？スバル君か。いけない、いけない……眠つてしまつていたようだ」

「あんまり無理はしないでくださいよ……でも、ありがとうございます」

「ああ、大丈夫さ……よつと」

「ブフツ……」

起き上がった天地さんの顔には、跡がついている。足元の模様が写っていたので、ちよつと吹き出してしまった。

「いえ、それで修理は出来たんですか？」

「ああ、もちろんさ。ちよつと待ってて……エネルギースイッチ、オン！」

「オーブオーン！」

デカイ牛型のモンスターの名前みたいな音を出してモニターが動き出した。チカチカしてるけど目が痛くなることはない。乗組員のことも考えられた設計だったようだ。

「動いた……」

「オイ、スバル。ビジライザーをかけてみな」

しまった。何か起こったらビジライザー。わかっていたはずなのに……ロックに促されるとは、ボクも衰えたな……

「うん」

お、ウエーブロードが発生してる。

ステーションハウエーブインするための場所は……あった。

「あそこから、宇宙ステーションに行けるんだね」

「おう、じゃあ行こうぜ！」

『待って！』

「、この声……間違いない。やはりたどり着いていたのか、ミソラちゃん……！」

「ミ、ミソラちゃん……」

「スバルくん……何で行くつて、教えてくれなかったの？ワタシも、スバルくんのチカラになりたいのに……」

「いや、流星に……ねえ？一応宇宙空間に行くわけだし。というか、帰り方を知ってるだけに酸素の量が足りなくなりでもしたら取り返しがつかなくなっちゃうからなあ……」

「ミソラちゃん……ゴメン！今回は地球に残つてほしいんだ。みんなを守ってもらいたいんだけど……ダメ？ボクが行った後に、またコダマタウンで電波化現象なんて起こつたら目も当てられないんだ。だからお願い。ボクを信じて……！」

「だけど……」

まだ諦めきれない様子のミソラちゃん。

「大丈夫、ちゃちゃつと終わらせて帰ってくるさ。それに委員長と約束したんだ。終わつたら、ご褒美にデートなんだつてさ！」

「スバルくん……………むーっ！」

あれ、しまった。もしかして地雷だった？ミソラちゃんがどんどん不機嫌になっていく。ど、どうしよう……………

「えつと、ミソラちゃんともデートしなさいって言われたんだけど……………委員長から、話がいつてない？」

「来てないよ……………いや、メールが来てる。……………なるほど、そういうことだったんだ。ならワタシから言うことはないケド……………えいつ！」

「うわあっ……………どうしたの？」

何だよ今日は！委員長もミソラちゃんも、急に抱きついてきて！しかも凄くギューつと密着してる。

ほあっ！耳に息を吹き掛けるのは止めて下さい……………！

「フフツ……………（これでいいんだよね、ハープ？）」

「（そうよ、これでボウヤはイチコロってヤツね！）」

うーん、何やら共謀の匂いがある……………これはハープかな？やっぱりハープさん怖い。

「ミソラちゃん、ボクちよつと苦しいかなあ〜って」

「何？女の子を払い除けるって言うの？そうしたらワタシ、シヨックで泣いちゃうかも……………シクシク……………」



嘘泣きだコレエ！絶対ハープでしょ!?!これを仕込んだのは！

「と、取り敢えず離れて……」

「……………あんつ、酷いわスバルくん」

もう止めてエ！とつくにボクのライフはゼロなんだよ！

「と、とにかく、ボクは行ってくるから……」

「フフツ、うん。わかった、ワタシ信じてまってるから。絶対に帰ってきてね！約束だよ！」

よ、よーし。やっといつもの雰囲気に戻ったぞ。

「じゃ、じゃあね……天地さんもありがとうございましたー！」

「いや、いいものを見せてもらったよ。気にしないでくれ。ボクだって、時々自分の無力さを恨めしく思うんだ。しかし今は、キミに頼るしかない。頼んだよ……!」

ホント天地さんはいい大人だよ、まったく。

「それじゃあ行つてきます！電波変換！星河スバル、オン・エア！」

「あ、スバルくん。キミ、新しくブラザー増やしたでしょう？相談無かったの、寂しかったなあ……」

キヤアアアア!!バレてたああ!!

しかしもう間に合わない。電波変換は滞りなく行われていく。……こうなったら、地

球を救ってチャラってことにするしかないな！ああもう、負けられない理由が増えちやつたじゃないか……！

ーアイランド地下のウエーブロードー

「ここからステーションまで、ダイレクトで行けるんだよね……」

目前には、宇宙から近づいてきている『絆』へとウエーブインするため射出装置が見える。射出装置と言っても、ウエーブロード上にあるウエーブホールの色違いと表現するのが正しいだろうね。

「ああ、覚悟はいいよな？……行くぜ！」

「FM星人たちに、殴り込みと行こう！」

さあ、人類の存亡を賭けた、決戦の始まりだ！

「よし、外に出るぜ！」

ドリームアイランドの海面に構築されたゲートから超スピードで上空へ飛んでいく。

イヤツホオオオオオ！

「次は……大気圏を抜けるぜ！宇宙ステーションまで一直線だー！」

アチチチチチ!!!……何てことはなかった。でも凄い。グングン昇っていく。昇っていくというよりは、地球の重力から解放されて大宇宙へと飛び立っていくという感じか

な。ペガサスになつとけばよかったかも。まさしくギャラクシーペガサス！ゴー  
 シュートされそう。シュートされてるけど。

「凄……地球は青かつたんだね」

お決まりだけど、言わずにはいられない。ボクたちの世界は、まさに青い宝石だ……  
 !

「知ってるだろ、そんなこと。何ならオレたちの方が青いぜ？」

そんな人工色じゃなくってさあ……

あーあ、ミソラちゃんとも一緒に見たかったよ。ハープ・ノートなら、大気圏も突  
 破出来るだろうし。

「ロマンだよ、ロ・マ・ン！」

「しまった、ロマンか……！しかし、こうして客観的に地球を見ちまうと、確かに欲しく  
 なるよなあ……スゲーキレイなんだからよ」

キミたちの王様は、破壊しようとしてるんだけどね。

まったく美的センスのない王様だよ。配下のFM星人も苦勞しそうだよねえ……

「おっとロック、不穩な発言はNGで。それにそろそろ着きそうだ……」

こうして話してる間にも、宇宙ステーションはどんどん近づいてくる。いや、ボクた  
 ちの方が向かっているのか。

ーサービスマジールのウエーブロードー

「……着いたね。ここが、宇宙ステーション『絆』……」

「ああ、下を見てみな」

あ、まだモニターやシステムは生きてるみたいだ。

「そういえば、空気は……」

あるんだよね、確か。

「今は電波状態だから空気は関係ないが、現実世界はどうだろうな……。恐らく、空気は残ってると思うが降りてみないとほんととも言えないぜ」

そういえば、電波状態だと空気は要らないんだよね。でも、解除したときには正常に呼吸を再開する……。何だか怖くなってきた。あんまり長く電波変換していると、体が呼吸を忘れてしまいそうでヤバいんじゃないのだろうか。

「まあ、大丈夫じゃない？ 何とかなるって」

「オマエなあ……。いや、多分大丈夫だろう。スバルが言うんだ、それにどっち道空気がないと何も出来ないしな……」

「あはは……。取り敢えずウエーブホールから降りてみようか」

「だな」

ーサービスマジューラー

「宇宙、キタアー!!」

取り敢えず何か叫びたかったんだ。他意はないよ。

「ツ！何だよいきなり、騒々しいな……」

ロツクの方が、いつも騒がしいじゃないか！

「まあまあ……それにしても、凄いね。何故か重力がある。宇宙空間なのにね」

不思議なこともあったもんだね。一応、天地研究所の疑似宇宙空間でトレーニングしてきたというのに。

「そういえばそうだな。この辺りにも、FM王のチカラが及んでいるというワケか……気は抜けねえな」

あ、そっちに考えがいくのか。便利だなくらいしか思ってたボクが恥ずかしいな……

「それにしても、結構ハイテクな雰囲気だね。三年も前のモノなのに」

「一応は当時最新のテクノロジーが、惜しみ無く使われてるってことなんだろうな」  
ほうほう……しかし中々興味深い。

ーパシャ！パシャ！

「オイ、スバル。……何で写真なんか撮ってるんだ？」

「だって折角宇宙ステーションに来れたんだし、写真でも撮つといた方がお得じゃない？それに皆へのお土産にもなるし……」

まあ、モニターに映ってる文字を記録するつてのもあるけどね。……一々見に来るのが、結構面倒くさいんだもん。

「すっかり観光気分だな……」

いいじゃない！趣味と実益を兼ねた行動だよ！

「まあまあ……つて、この扉は……こつちからの操作を受け付けないね」

「つてことは、電腦世界から解除するしかないつてコトだな」

「でもさ、来るときに使ったウェーブロードはこつちの方には繋がっていなかったよね」  
「うーむ、お！もうひとつ扉があるぜ！コイツは電子ロックだな……つて、違うぞ！洒落じゃねえからな！」

ニヤニヤしながら見てたのを気づかれました。いや、ロックは何も間違つてないよ、ホント。……クスッ。

「べ、別に気にしてないよ……フフッ」

「オマエなあ！ケツ、何だよ……！」

ありやりや、ヘソを曲げてしまった。め、めんどくさいな……

「ゴメン、ゴメンつて！ボクが悪かったよ、ね？」

「フーン!……まあ、今はケンカ何てしてる場合じゃないしな……」

よし、なんとか怒りを納めてくれたか。って、あれ? ロックの自爆じゃなかったっけ? まあいいか……

「あはは……取り敢えず、オープンマンのナビカードを使ってみるね」

「おう、それがいいと思うぜ」

ロックの賛同も得られたことだし、早速やろう。

「それじゃ、カードイン……オープンマン!」

『オープン! 扉を開けるのは、オレにお任せ!』

「……で、何を打ち込めばいいんだ?」

「と、取り敢えず扉を調べてみようか……あ、何か書いてある。……赤の周波数、だって」  
「赤の周波数……さっきのモニターに映ってたやつか? 取り敢えず戻って確認してこようぜ」

「フーン! こんなこともあるかと写真、撮っておきましたよ? ロックの旦那」

圧倒的ドヤ顔!

「お、おう……頼もしいな。それじゃ早速、入力してみようぜ」

「りよーかい! ええつと……2、1、8、3……つと」

『オープン!』



それって掛け声なのか解除に成功したのか、はつきりしないんだよね……

「よし、解除成功！」

「先に進もうぜ！」

「うん……つて、おおく！凄いい、宇宙服だ！コレって確か、一着10億ゼニーするんだよね……！」

施錠ロックが解除された扉の先には、船外活動用の設備が揃っていた。あまり使われた形跡はない。新品同様だ。ビジュライザーをかけると、ウェーブホールを発見することが出来た。

「ああ、確か……『極小の宇宙船』だったか？とにかくウェーブインして扉のセキュリティを突破しようぜ！」

「うん、了解！」

「サービスモジュールのウェーブロードー」

「よし、繋がってるね。これなら行けそうだ！」

「おう！とつとと進もうぜ！」

オツケー！

「ーステーションの電脳ー」

「何か、ヤバい空気を感ずる……！」

キグナスのことかな？

「ヤバい？」

「この先に、何か居やがる。まあ、スバル程じゃねえが……へッ、よく考えりやあ、ここは敵の本拠地だ。何もいないほうがおかしいぜ。とにかく気を抜くなよ！」

「何か聞き逃しちやいけないうセリフがあつたような気がする……」

「気のせいだよ、気のせい！」

ホントかなあ……？なんかヤバいやツ扱いされたような気がするんだけど……

「ほら、ボケツとしてる暇はないぜ!?急いだ急いだ！」

「ロック!?あんまり急かさないうでよ……!!」

ちよっ!引つ張らないでえッ!

——十分後——

「取り敢えずこの電脳を見て回つた限り、奥にあつたセキュリティを突破するには星座の配置に関する知識が必要みたいだ」

つまり余裕のよつちやんだね。

「おう、サクサク進めるのはいいことだぜ」

だよな。ボクとしても、手間がかからなくていい。

「中央にあった星座の配置を見る限り白鳥座……キグナスの線が濃厚つてところかな？」

「おう、だが以前とは違つてこつちにもスターフォースがあるからな。かなり楽に相手出来るハズだぜ？アイツは飛行能力に全振りだからな」

「酷い！シタツパーのことも忘れないであげてよ……」

「ボクは思い出したくもないけど。だつてアイツら五月蠅いし……」

「シタツパーなんていなかったんだ……」

「そうだな……」

二人揃つて遠い目をし、あの喧しいアヒルたちを想起する。あの流れ星空間はホント、めんどくさかった。

「さて、ちやつちやと解いてしまふよ」

流星に白鳥座の配置位はわかる。というかこのセキュリティの場合だと、プレイヤーの方がスバル君より星座の知識で足を引っ張つてるんじゃないかなあ……

「……よし、先に進むぜ」

では……くたばり損ないの姿を拝ませてもらおうか。

——ーステーションの電腦——最奥——

セキュリティとも言えないお粗末なセキュリティを突破したウエーブロードの先には、やはりと言うべきかキグナスの姿があった。復活した時に強化されたためか、イヤに自信満々だ。

「ここまで来るとは大したものだ……褒めてやろう」

何故一度倒されたのに、こんなに余裕なんだろうか。

「ご褒美を貰う相手には困ってないんだよ、ゴメンね」

「スバル……いや、そうだな。悪いが先を急いでいるんでな、道を開けてもらおうぜ？」

ロックが何故か呆れたような顔をした気がする。左腕はキグナスに向けているから、確認は出来ないんだけど。

「フッフ……道を開けると言われて簡単に道を譲るワケにはいかないだろう！……：ハアッ！」

閃光が視界を塗り潰す。一々ピカピカ光らないと変身出来ないのだろうか。もう慣れそうだから、変身中に攻撃してみようかな？

これは卑怯ではない、浅倉リスペクトだ。なら、初手不意打ちマジシャンズ・フリーズもアリなんだろうか。氷漬けにしてから現れてNDKするのも悪くない。

「なるべく美しくデリートしてあげよう！」

「凄く情けない理由でデリートされたヤツが、何か言ってるぜ？」

ロックの煽り能力が全快だアー！まあ、しょうがないよ。バトルで負けて、その上宇田海さんに精神力で葬られたからねえ……同情するよ、可哀想にね。（焼け野原ひろし感）

「ダメだよロック。そんなコト言ったら宇田海さんに失礼じゃないか。こんな情けないヤツに取り憑かれてたなんて黒歴史モノだよ、ホント」

「ここぞとばかりにボクもロックをサポートする。問題はないよ。嘘は言っていないから。やっぱりパートナーに必要なのは、相手が今何をしてほしいか察し合う能力だと思うんだよねえ……」

「コ、コイツら……ワタシが黙っていれば、調子に乗りやがって……！」

口調が崩れてますよ、バレリーナ？

「オレたちを邪魔するヤツは、何モンだろーとぶつ飛ばす！覚悟しなアツ！」

ロックが完全に悪役な件について。ダイヤモンド小悪党は砕けない。

「行くよロック！ウエーブバトル、ライドオン！」

「せめて、少しでも無惨に散れ！」

ゲームより酷いぞ！せめて美しく散れ！とかじゃなかったつけ！？

「ロック！」

「おう！」

スターフォース！

「ハアアツ!!」

「それがデータにあつた、スターフォースによる強化形態……面白い。ワタシの翼とどちらが上か、はつきりさせるとしようか！」

何か急にキグナス・ウイングのテンションが上がつたな。もしかして翼に並々ならぬ思いでもあつたのだろうか。ま、知らないけど。

「人の想像を越え続けるからこそ、幻獣は幻獣足り得るんだ。それを教えてやる……イカロスイカロス機鳥人間！」

「へへッ、いつも上から見下ろされてるヤツの気持ちを教えてやるぜ！」

この勝負バトル、完全勝利することで証明してみせる！

「行くよー！」

天高く飛翔する！着いてこい、キグナス・ウイング！

「フン、その程度のスピード……このキグナスの翼に出せない速度ではない！」

背中の生物的な翼をはためかせ、猛スピードで追ってくるキグナス・ウイング。中々のスピードだ。

……でもね！

「セイツ！ハアツ！」

展開したヘビーキャノンやガトリングを連射して牽制する。当然避けられるけど、追撃のスピードは緩まった。ここからだよ……空中戦は！

「うおおおっ！」

空中で体の向きを反転させ、キグナス・ウイングに向かって左腕にリュウエンザンを展開して斬りかかる！リュウエンザンは羽のミサイルを切り裂くには有利なんだ。何せ羽だから、燃えるんだよ。

「チツ、だが抜かったな！」

凄……空中で回避するとは。流石にバレリーナ擬き、身のこなしは良い。左から袈裟に斬りかかったリュウエンザンを、ボクの後ろに回り込むように回避するキグナス。

「(後ろを) とった！」

「オイ、スバル！マズいぜ！」

完全に後ろをとられている……けどねエツ！

「ハアッ！」

周囲を流れる電波に冷気を飛ばし、氷結させる。簡易のウェーブロードを発生させ、それを足場として着地。そのまま瞬時に反転、ウォーロックアタックを敢行する！

「何……グハアッ！」

よし、当たった！けど、これで終わるとは思っていない！既にキグナスとの距離は離れ

てしまっている……ならっ！

「そらっ！ワイドウエーブだ！」

「キサマ……以前と同じ手を！」

低威力だけど、広範囲に広がるのが横波。ワイドウエーブ動きを誘導させるにはもってこいだ。

「うおおおっ!!」

ペガサスの翼を振るい、再びキグナスに急接近する！

「ジェットアタックの代わりということか……二度も同じ手を使われるとはね……！」

侮辱に感じるんだらうね。F M星の戦士としては。キグナスはワイドウエーブを回避するために減速しており、グングン近づくことが出来る。

「ッー」

「バブルフック……ここまでボクを愚弄するなんてね！対処は出来るさ！何せ死因の一つだからねえッ！」

流石に一度デリートされたヤツは言うことが違う。何か悟ったのかな？しかし、発生させた泡をどう対処するんだらう。

「ハアアッ!!こんなモノ！」

何と、背中から羽を飛ばしてバブルを割るとは……！確かにこれなら体勢も崩れない上に、運が良ければバブルを割った羽がボクに当たるかもしれない。流石にそんな幸運



はなかつたけど。

「わかつてるさ、そんなこと」

本命はバブルフックじゃない、チェインバブルだ。バブルフックの射程圏内で弾速の早いチェインバブルを外す道理はない。

だからまだ、射程圏内ッ！……狙い撃つよ！

「ク、クツソオオオ！」

「対処出来るからこそ、油断する。戦士と言うには想像力が足りないね、キミは」

ー チュイン！

弾速の早いチェインバブルがキグナス・ウイングにヒットして、その体をバブルが包む。既に籠かごの中の鳥だ。退路は途絶えている。

「そしてこれが、ボクの全力全開。マジシャンズ・フリーズ……！」

相手は死ぬ。それはエターナルフォースブリザードか。

「アアアアアッ!!」

空中に発生した魔方陣から生み出される氷柱に飲み込まれるキグナス・ウイング。

……チエックメイトだ。

ー パリン！

氷柱が砕け散り、キグナスがウェーブロード上に投げ出される。既にHPは尽きてい

て、あとはデリートするのを待つばかりだ。

「うおおおおお……まさか……まさかワタシが……せ、せめて夜空の星に……うわああああつ！」

何が言いたかったんだろう……

「最後まで、ワケのわからないヤツだったな」

ロックの総評が酷い！

「……扉のセキュリティを解除するよ、ロック」

「おう、頼むぜ」

了解！ええつと、ここをこうして……ポチつとな。

ーピーピーー

「よし、これで解除出来たはず。先を急ごう！」

さて、ウェーブアウトして通れるか確かめないと……

## 53

ー空調モジュールー

キグナスの掛けたロックを解除したボクたちは、扉の先に広がっていた空調モジュールに足を踏み入れていた。相変わらず重力はあるので、移動に困ることはない。

「今度はゴミの山か……」

都合良くクレーンなんてないので、シヨベルマンのナビカードに頼ること出来ない。通路を塞いでいるゴミの山を退かすには、デュエルマッスルが必要みたいだ。もうひとつあった通路の先には、サービスマジュールと同じタイプの嚴重にロックされた扉があったので、このゴミの山を抜けた先に扉へと繋がるウェーブホールがあるのだろう。

「退けられるか？」

「うーん、頑張ればなんとか……ハア、ハア……」

それに何だか息苦しいな……

「オマエがゴミの山に興奮するヤツだったとはな……」

「違うって！ それじゃボクが変態みたいじゃないか……」

最近のロックが頻繁に毒を吐く件について。

「息が、苦しいんだよ……空調システムを、調べてみようか……？」

「だんだん言葉が途切れ途切れになってきたな……」

「おう、なるべく急げよ！最悪、サービスマンから空気の入ったタンクを持って来なくちゃな……」

「それでも活動限界が短くなるのは困るな……」

「よし、カードイン、エアコンマン……」

『エアコーン!!暑いのか?寒いのか?どうするの?』

A. 送風で!

「何でエアコンマンの選択肢には無いのにトランサーには送風が表示されてるんだ!？」

『ビュービュールルル!!風を送るよビュービュールルル!!』

「決め台詞がテキトーすぎるよ……」

「ビューオオオオオ!!」

「た、助かった……」

「よし、とつとあのゴミの山を何とかしちまおうぜ」

「はぁーい、まだ少しダルいけどね……」

「――二分後――」

通路を塞いでいたゴミの山は、何とか通れる程度まで退かすことが出来た。結構骨だったよ、まったく。

「それじゃあウエーブインだ。ここからなら、さつきみたいに嚴重なセキュリティのかかった扉にもウエーブイン出来るだろうぜ」

わかっているけど、ちよつと待ってよ……

「ハア、ハア……うん、もう大丈夫。行こうか」

電波変換、星河スバル、オン・エア……

ーーステーションの電腦2ーー

キグナスのいたステーションの電腦1と同じ雰囲気構造になっているステーションの電腦2だけど、ウエーブロードの構成と中央に描かれている星座が牡牛座という点で異なっている。

「ここは牡牛座……オックスが管理している電腦みたいだね」

「ああ、キグナスよりも楽なんじゃねえか？」

オックスエ……

「まあ飛べないしね……」

「だな。飛べない時点でまともな戦いにはならねえぜ」

うわあ……へビーキャノンゲーになりそう。ジャミンガーと同じ扱いか……南無三。

「それじゃ、セキュリティゲートを解除するよ……」

一応、遠距離メインのフォルダに交換しておくか……

ーーステーションの電腦2・最奥ー

セキュリティゲートを解除して進んだ先には、星座が示していた通りにオックスが佇んでいた。こんなに長い時間、よく待っていられたね。オックスって気が短いから、悪あちからから乗り込んで来るかもしれないと思ってたんだけど。

「ブルルル!!」ここまで来たということは、キグナスはやられたのか。しかし、これ以上先に進ませるワケにはいかねえ! 扉を開きたくば、オレを倒していくんだな!!ブルルル  
ルオオオオオツ!!」

テンション高いな! いや、いつも通りか。

そしてまたこの閃光……凄く眩しいんだけど、これも戦術の一環なのだろうか。

「ブルルルル!! オマエたちの宇宙旅行は、ここが終着点だ!」

その自信……まさか、対空能力を手に入れたのか!?

「コイツがそんな気取ったコトを言えるとはな……来るぜ!」

「わかってる! ウェーブバトル! ライドオン!」

この戦い、結構気が抜けないかもしれないぞ……!!

「宇宙のチリにしてやるぜ!!」

キミの戦い方じゃ、チリつてよりミンチだよ!

「行くよロック!」

「合点!」

キミは江戸時代の岡っ引きか!

気をとり直して……スターフォース!

「おおおおっつ!」

ウイング  
オープン  
飛行翼、展開!

「さあ、巨大牛退治といこうか! タイトルは『ロックマンVS牛オトコ』だ!」

学芸会の再演といこう!

今回は闘牛士の気分だけどね!

「ケケツ! そういうこった! わりいが翻弄されて貰うぜ、オックス!」

「ほぎけ! オックスタックル! ブルルオツ!!」

猛スピードで突進してくるオックス。慌てて背中を震わせ飛び上がるボク。そのすぐ真下をオックス・ファイアの巨体が通りすぎていった。

「フワー、危ない危ない……」

さて、ここからどうでるか……しっかりと見極めない。

「オイ、卑怯だぞ！降りてこいッ！ブルルルルオオオツッ！！」  
かなりお冠だ。しかし……

「……………」

対策ナシかよ?! 気合いだけで空を飛べたら苦労しないっての！

「…………ヘビーキャノン」

「グワッ！」

…………これは酷い。

「スバル…………」

ロックも何か思うところがあるようだ。そりゃあね、上から砲撃してるだけだし……  
戦士の誇りってヤツなんだろうか。

「ロック…………」

「ああ、流石に見ていられねえ。だからよ…………」

うん、わかってる。

「なるべく早く、楽にしてやろうぜ！」

「オーライ！……………ヒヤッハー!! 撃ちまくるよ！」

ガトリング、ヒートバズーカ、パワーボム、チェインバブル、ブルーインク、プラス



キャノン。砲撃の嵐がオックスを襲う！頑張れオックス！負けるなオックス！キミが倒れたら誰がキグナスの仇を取るの？まだHPは残ってる！これを耐えきればロックマンに勝てるんだから！

次回、『オックス死す』。デュエルスタンバイ！

「グウワアアアアアア!!!」

オックスの悲痛な叫びが聞こえる。

「その調子だぜ！」

それじゃあ、トドメだ！

「マジシャンズ・フリーズ！」  
ゴツド フェニックス

ーパキパキパキ……パライイン！

満身創痍のオックスが立ち尽くしているパネル型のウェーブロード全体をカバー出来る大きさの魔方阵から巨大な氷柱が生成される。氷柱の生成に飲み込まれたオックスは全身から炎を噴出することで抵抗するが、スターフォースの出力には追いつけずに完全に氷結される結果となった。その後、砕け散った氷群とともにウェーブロードに投げ出されるオックス。効果は抜群だ。

「やっぱり制空権って大事だね」

「そうだな」

やったぜ。

「お、おのれ……キサマ、そのカラダの何処にこれほどのパワーを秘めているんだ……!?!」

A. スターフォースの入った胸部です。

「オレもコイツと出会うまでは知らなかったぜ。信じ合うことで生まれるパワーってヤツをよ。仲間を本当に信じきれないオマエらにやわからねえかもしれないがな。スバル、何か言ってるやれ」

おっと、突然話を振ってきたな。嘘だろ承太郎！

「ゴン太ナシでボクたちに勝とうなんて……百年は早いね！」

「と、言うわけだ。アバヨ、オックス！」

これから度々会うことになるけどね……

「し、信じ合うことで……生まれるチカラだと？我ら孤独の周波数を持つFM星人には理解できん……ウオーロック、やはりキサマ……ブオオオオオオオツ!!」

そして、オックスはカラダを維持出来ず、消滅してしまった。最後に言おうとしてたのは、AM星人だってことなんだろうね。

「最後に言いかけていたのは……」

「いいじゃねえか、別によ。そんなことよりも、先に進もうぜ！」

「確かにね。別にロックが誰だろうと、ロックに違いはないし……」

「……………ほら、早く解除しようぜ」

「あつ、ちよつと引つ張らないでよ……………」

「つたく、もう。カタカタカタ……………ポチツとな。」

「ーピーピーー！」

「よし、解除完了！ウエーブアウトして先に進もう」

「ああ」

「何だよ、さつきから。……………何でニヤけてるのさ！」

「ー発電モジュールー」

オックスによつて封鎖されていた扉の先には、発電モジュールが配置されていた。例のセキュリティが嚴重な扉と、開かない扉がある。しかし扉には張り紙が貼つてあり、何やら開かない事情がありそうだ。

「これは、何々……………大吾、電力供給の配線修理を頼む。配線の不具合を直さないとこの扉が開かない。船外作業ロボは外にスタンバイ済みだ。側にあるコントロールパネルで操作出来るぜ。よろしくな……………b y ステイプ、だつてさ」

「、これはまさか……！」

「なるほどな……作業ロボか。やってみようぜ、スバル！」

「もちろん！こんなところで遠隔操作とはいえ、ロボットのパイロットになれるとは思ってなかったよ！」

「だな！ロマンだぜ、これはよ……!!」

ロボットの目がキラキラしてる。よし、やるぞ！

「それじゃ、早速コントロールパネルをいじってみようか……！ええつと、結構複雑だね」

「オイオイ、諦めんのかよ!?夢のスペースロボットだぞ!」

「当然、やってみせるさ！まずは電源を入れて……」

「ーカタカタカタカ……」

「よし……CPC設定完了。ニューラルリンケージ。イオン濃度正常。メタ運動野パラメータ更新。原子炉臨界。パワーフロー正常。システムオールグリーン。作業ロボ、いきます！」

そして、力強くEnterキーを押す！

「……つて、ダメじゃねーか！何だよ、さっきの起動しそうな雰囲気の詳細用語は……」

ちえつ、キラさんの様にはいかないか。ウンともスンとも言わないよ。

「うーん、ダメだね。あ、プロペラマンのナビカードでいけるんじゃない？宇宙を飛び回るんだからさ、ラジコンと似たようなモンじゃないかな？」

「最初からそうしろよ……」

ロックが疲れ果てたような声で賛同する。どうしたんだロック、いつもの元気がないよ？

「それじゃあカードイン！……プロペラマン、頼むよ！」

『ラジャー！プロペラマン、作業ロボ発進するよ！』

ああっ！凄く言いたかったセリフを取られた……！

一生に一度は言ってみたかったのに！

「クツ、こうなったら……」

「オイ、スバル。スゲエよコイツ！へリコプターの四倍以上のパワーがあるぜ！」

ああっ！また言われた……

「………操作を始めるよ！」

もうヤケクソだ……！

——五分後——

コーディネイターもかくやという速度で修理を終えたボクは、このやるせなさをFM星人にぶつけるべく電力供給の済んだことにより開いた扉に向かっていた。

「なあスバル、機嫌直せよ、な？」

「ロツクにボクの気持ちはわからないよ……」

「まあまあ落ち着けて。そうだな……これからはオマエのブラザーのオンナなども居るときでも、困ったら助けてやるぞ……これでどうだ？」

むむつ！それは見過ごせないな……

「……こつちも悪かったよ。ちよつと大人気無かったね」

「オマエはまだガキって年だろうに……」

「ほら、ウエーブホールあったよ……電波変換！星河スバル、オン・エア！」

——ステーションの電脳3——

最早慣れた構造の電脳世界の中央には、天秤の星座が描かれていた。と、いうことは……待ち構えているのはリブラか！

「サクサク行こうぜ。しかし、今回はリブラか……ヤツが操るのは炎と水……遠距離砲撃は相殺される可能性があるな」

「なるほどね……それじゃあ中近距離中心で組むことにするよ」

「オレもそれがいいと思うぜ」

「よし、油断大敵だ！しつかり勝つていこう！何せ、一度は攻略してるんだからね」  
「おう！」

——ステーションの電脳3・最奥——

「驚いたナ……まさかこんなところまで来るとハ……しかし、これ以上先に進めさせるワケには行かない……！」

既に戦闘準備は万全のようだ。……こっちだつて、ね！

「へッ、天秤ヤロウなんかにおれたちは止められないぜ！」

「その減らずグチ……相変わらずだナ」

「テメエこそ、一度デリートされてるくせに相変わらずだな！そうやって何でも測ろうとするから足を掬われるんだよ……覚えときな！」

「フン、その減らずグチを叩けるのも今日で最後にしてヤロウ……ハアッ！」

お決まりの閃光が晴れた先には、育田先生ナシで電波変換したリブラ・バランスの姿があつた。

やはり強化されている！以前よりもリブラから感じる圧力が増していることから、それがヒシヒシと伝わってくるようだ。

「この天秤ハ、お前の罪の重さヲ測ル、地獄の天秤……サラバだウオーロック！我らヲ裏切つた罪を、地獄で償うがイイ!!」

「オマエの言葉は一々聞きづらいんだよ……行くぜスバル！アイツの天秤を断ち切つて、火起こし機みたいにしてやるぜ！」

な、なんて惨いことを思い付くんだ……流石はロック！

「任せてよ、ロック！育田先生と融合していないことを後悔させてやる……覚悟しろ、リブラ・バランズ！」

「この鬼畜どもガ……地獄に落ちるがイイ!!」

鬼畜って酷いな！

「ウエーブバトル！ライドオン！」



ーーステーションの電腦3・最奥ー

ここはステーションの電腦3、その最奥だ。対峙するのは天秤座のFM星人、リブラ・バランス。両腕が巨大な秤になっていて近接戦は好まず、変幻自在の烈火と激流、と言つて差し支えないほどの炎と水を操る能力を持つ中遠距離の後衛型だ。以前は高速接近からのインビジブルで攪乱した後に、リウエンザンでズブリだったけど流石に対策はしてきてるだろうね。勝敗の確率を天秤に掛けないほど、リブラも馬鹿じゃないだろうし。

「しかしリブラは遠近両用と言つても、弾を飛ばすような攻撃ではないからこちららも空中にいれば、攻撃が当たることはない。つまりは……おっと！」

危ない！油断し過ぎたか。

「オイ、スバル！どうすんだ!?……さつきからずつと膠着状態つてヤツだぜ!」

「どうしようね……砲撃は相殺されるけど、あちらの攻撃も回避出来ないスピードじゃない。もう10分も続けてるけどキリが無いよ……」

戦闘開始早々、スターフォースを解放し飛行したボクだったけど、あちら側も砲撃は

警戒していたようでリブラが生成した炎と水はこちらの遠距離攻撃を通さない。完全に膠着していると言える。

「チツ、やっぱり接近戦しかないか……さつきやった、即席のウエーブロードを作るヤツはどうだ!？」

「アレはまだ慣れていないから、咄嗟に生成するのは難しいね。もつと練習すれば別だけど……」

「チツ、ならしようがねえな……」

さて、どうするか……

「流石にインビジュアル戦法が二度も通用するとは思えないしねえ……」

「そうだな……左腕の炎さえ何とか出来りゃあな。……またパワーボムでも投げてみるか?」

「そんなの、近づくと前に誘爆して無駄弾になっちゃうよ」

近づいても以前見た分銅を落としてくるだろうし……

「難攻不落ってヤツだな……」

「うーん……」

いや、突破出来なくはないんだけど、この後の連戦も考えるたらあんまりダメージを蓄積させたくはないんだよね。

「仕方ないか、背に腹は代えられないよ……ロック！」

「なるべく避けるよ！」

背中の翼を急速に震わせ、リブラへ向けてスカイダイビングを敢行する。気分は紐無しバンジーだよ……

「おおおおっ！」

全速全開！

「フン、破れ被れというワケカ……甘イ！」

左腕の天秤で燃え上がる炎が蛇の如く襲いかかってくる！全速の状態では、細かい回避が出来ない。だからッ！

「ハアッ！」

「何ッ!？」

ヘビーキャノンをあらゆる方向へ発砲、その反動で大きく進路を変更することに成功し、回避する。ホントはガトリングみたいな連射型がよかったんだけど、あれじゃあこの攻撃は避けられなかったね、うん。

「うおおおっ！」

「クツ……！ウオオオッ！」

プラスキャノン！……ヘビーキャノン！何とか回避に成功したけど、何発かかすった

ダメージは食らってる。熱い！既にセレクトしたカードは使い切ったので、あとはシルドで乗り切るしかない。だけど既にかなり近づいている。もう十メートルといったところだ。

「……落ち口！」

ゲツ、例の分銅だ！しかし、こちらにも既に見た攻撃に対処出来ないハズはない！

「うおおっ！……ラアツ！」

シルドを展開し、滑らせるように巨大な分銅を流していく。あ、危ない……が、しかし勝ったぞこの戦い！我々の勝利だ！

「ハアツ!!」

左腕の炎をロツクバスターで吹き飛ばす。これさえ封じればチョロいもんだ！

「オオオオツ！」

リブラが残った右腕の激流を発射してくる。凄い威力だね。だが無意味だ。

「ハアアアアア………セイツ！」

アイスペガサスを舐めるなアツ！水流程度、氷結させるなんてワケないんだよ！

「ク、クソ………こ、このワタシが………！」

「終わりだよ………リブラ・バランス！」

ギガクラスカード『ペガサス・マジックGX』カード発動！既にリブラに回避手段はない。為

す術なく氷柱に飲み込まれ、HPは速やかに0を刻んだ。

「グオオオオオツ……ワ、ワタシヲ倒したとしてモお前には……必ずヤ滅びノ未来が待っている……アンドロメダ……が、めぎ……め……ル……」

そう言い残してリブラ・バランスは消滅してしまった。中々強敵だったね。

ーゴゴゴゴ……！

「この揺れは……！」

「アンドロメダの目覚めは近いぜ……！」

神妙な顔をして呟くロック。やはりAMプラネットの滅亡が頭から離れないのだからか。

「ロックまで不穏なコト言わないでよ……」

「わりいわりい、とつとあのデカブツをぶっ壊しに行こうぜ！」

「最初からそう言ってよ……」

「ほら、ウエーブアウトするぜ」

はぁーい……

ー居住モジュールー

リブラ・バランスを倒し、セキュリティを解除したボクたちは、発電モジュールの先にある居住モジュールに足を進めていた。しかし、これは……

「ロック、もしかして……」

「ああ、もしかしくなくとも、この先にはFM王、そしてアンドロメダがいるだろうぜ。この雰囲気、プレッシャーとでも言おうか。コイツは間違いない、ヤツのモノだ……!」

凄い圧力、というかプレッシャーを感じる。PPを余計に使ってしまいそうだ。電波体なので、情報圧と言ったところかな?

「なら取り敢えず、この扉のロックを解除しなくちゃね」

「この先に進むためにはあと一つ、難関がある。残るFM星人は……!」

「だな。残るはオヒュカスのヤツだけだ。しかしアイツは正直、オレたちにとつちやカモだからな」

「ヘビのスピードに、遠距離攻撃がゴルゴンアイだけだしね。かなり有利に立ち回れるハズだよ」

うーん、一番の強敵はリブラだったね、やはり。

「とにかくウェーブインしようぜ。まだ向こうは探索してないが、恐らくウェーブホールがあるハズだ」

「そうだね、そうしようか」

プレッシャーを感じる方とは逆の通路を進むボクたち。その先にあつたのは……

「ここは……多分、父さんたちが使っていたスペース。あ、写真がある。……写っている

のは、ボクだ」

「そうだ。ここは星河ダイゴが使っていた実験室。……聞くか？今のオマエには、あまり関係のない話だが……」

ちよつと、気を使つてくれてるみたい。

「聞くさ。ボクが星河スバルである以上はね」

「……そうか。あれは、今から三年前だったな……」

物思いに耽るロック。ダイゴさんとも友達だったらしいし、思うところがあるんだろう。彼は今もメテオGの最深部で攻撃を続けているのだろうか。

「あの日、オレたちはFM王の命により、この宇宙ステーションを占領した。そして乗組員は全員捕らえられ、FMプラネットで裁判にかけられた……」

「なるほど、さつきまで戦つてたのはロックの同僚だったんだね……」

ロックはボクの言葉に返すことなく、話を続けていく。

「FM王が下した判決は……全員、例外なく死刑だった」

王様が政治やつて、侵略して、裁判やつてるなんて、相当人材が不足してたんだね、FMプラネットつて。

「物騒なんだね、FM王つて」

「いや、極まった疑心暗鬼つてヤツだな。……それでその後、刑が執行されるまでオレは

乗組員たちの世話係をかって出た。そして、そこでオレはオマエのオヤジと会った……。ダイゴのヤツ、やたらオレにちよっかい出してきやがって、気がついたら、いつもアイツのペースになっちまってたな……」

過ぎし日を語るロックだけど、その表情は柔らかだ。きつと、とても印象的な時間だったんだろう。

「そしてあの日、『アンドロメダのカギ』を手に入れたオレは追っ手に追われ、あの宇宙ステーションに逃げ込んだんだ……」

ここからは、ダイゴさんの言ったことも話してくれるみたいだ。

「そうだ……あの時は……」

――回想・ウオーロックー

「ウオーロック、これからどうするつもりだ？」

追っ手が来るといふプレッシャーから、堪らずステーションに逃げ込んだままだったオレだが、既に落ち着きを取り戻し、さあ行くかと思つてた矢先だったんだ。ダイゴが話しかけてきたのは。

「どうするも何も、FMプラネットのヤツらをブツ倒してやるのさ。そろそろ行かねえと、ヤツらが来ちまう……！へへッ、短い付き合ひだったが、楽しかったぜ」



「そうだな、オレだって戦士の端くれだが、それなりに付き合っただらばそれなりの情も湧いてくるってもんだ。」

「待ってくれ、ウォーロック」

「何だ……?」

「我々も、連れていってほくれないか?」

「何を言ってるやがる……気は確かか? オマエたちは地球人だろうか? どうやってオレについてくるつもりなんだ?」

「オレたちのカラダを電波化させてくれ。電波のカラダを持つ宇宙人から放出される高濃度のゼット波を浴びれば、我々地球人でも電波化出来るハズだ」

「確かにゼット波には触れた物質の周波数を変化させ、電波化させるチカラがあるが……」

「しかし、簡単には領けねえ。何せ、コイツは自分で人間を辞めるって言ったんだぜ? どうせ、このまま待っていてもロクな末路にはならないだろう。どんなに小さくても、そこに希望があるなら命を賭ける価値はある。頼む、ウォーロック」

「オマエ、オレが追われている立場なのはわかっているだろう?」

「なあ、ウォーロック。復讐なんてやめて、オレたちと地球に来ないか? きつと、オレの息子とも仲良くやっていけると思う」

この時のオレは確固たる目的があったからな。ダイゴの誘いを受けるワケにはいかなかったんだ。今？今は……どうだろうな。

「地球に？仮にオマエたちが電波化出来たとして、何を目印に帰るつもりなんだ？電波になったからって、万能じゃねえ。宇宙で迷ったら永遠に宇宙空間をさまようことになるかもしれない？」

別に心底心配してたワケじゃないが、憎めないヤツではあったからな。宇宙の真ん中でくたばっちゃったら寝覚めが悪い、それくらいの気持ちだったんだ。

「オレのトランサーから息子のトランサーにアクセスシグナルを送る。その信号を伝っていけば、息子のところまで導いてくれるハズだ。今ならまだ間に合う、『アンドロメダのカギ』を捨ててオレたちと……」

だがアイツの、ダイゴの目は本気だった。どんなに小さな確率でも、それを掴み取って生還する。そんな目をしてたんだ。だから……応えたくなくなっちゃったんだろうな。

「ハッ、止めてくれ。オレは安息なんて求めちゃいけないだ。オレの目的はただ一つ、FM王をブツ倒すコトだけだ。悪いがオマエたちを連れていくワケにはいかねえ。……が、そこまで地球に帰りたいって言うんならオマエたちを電波化させてやるよ。けど、そこから先はオマエたちでどうにかするんだな」

「ウォーロック……ありがとう。それじゃあ、乗組員を呼び出すよ」

ー居住モジュールー

「その後、オレはダイゴを始め乗組員たちにゼット波を浴びせ電波化させた……。そしてオレたちが宇宙ステーションを出た、その時だった。オレを監視していたオックスが、突然攻撃を仕掛けて来やがった」

「そりゃあ監視対象が逃げ出そうとしたんだから、脱出阻止も含めて攻撃するのは当たり前なんじゃないの？」

「……………は、激しい攻撃が止み、気がつけばそこにダイゴたちの姿はなく、ダイゴのトランサーだけが浮いていたんだ……」

「凶星だったみたい。話の腰を折りそうになっちゃったな。あんまり口を挟まないようにしないと……」

「キズついたオレは、ダイゴのトランサーが放つ信号を頼りに飛んだ。そしてスバル、オマエの元にたどり着いたってワケだ」

「その、父さんのトランサーはどうしたの？ 届ければ、母さんが喜ぶかも……」

「本人程ではないだろうけど、今となってはダイゴさんの遺品に近いモノだ。あかねさんの慰めにはなるだろう。」

「すまねえが、大気圏を抜ける時に燃え尽きちゃったんだ。かなりの速度で飛んでいたから、シグナル元の喪失に対し、オマエのトランサーが反応するまでに時間があつた

んだろう」

そういうことか……まあ、仕方ないね。

「まあ、オックスの攻撃はオレに集中していたからダイゴたちには直撃していないと思うが、恐らく今も電波のカラダで宇宙をさまよい続けているハズだ……」

「なら、いいよ。父さんのコトは、いつか助けに行く。大して実感も湧かない父親だけでもボクを守ろうとしてくれる。それが親の強さなんだろうね。スターフォーستと同じだよ。誰かの為になら、どこまでだって強くなれる。それが人の持つ可能性なのかもね……」

「人の可能性、か。オマエも言うようになったな……」

酷いなあ、ボクってそんなに人を信じられないように見えてた？元のスバル君じゃあるまいし。でも、もしそうだとしたら。

「フフツ、ロツクのお陰かもね？」

「アン？オレが何をしたっていうんだよ」

「一番の理解者がいつも側に居てくれるってのは、思いの外心強いってコトだよ。だからありがとね、ロツク」

「……………ほら、さっさと行くぞ。この先には、あの扉に繋がるウェーブホールがあるは

ずだ」

「あつ！もう、引つ張らないでよ……！」

「――ステーションの電腦4――」

「ロツク、やつぱり……」

「ああ、間違いいねえ。やはりこの奥で待ち構えてやがるのは、オヒユカスだ」

「だよね……」

「さ、流石に蛇遣い座は予習の時間をください……」

「――少年確認中――」

「よし、トランサーにも蛇遣い座の並びは記録しておいたし、これでいつでもセキュリティが突破出来るよ」

「おう、それじゃ行くか。蛇睨みが通用するのは蛙だけだつてことを、ヤツに教えてやろうぜ！」

「うん！委員長も居ないからね、今回は大分気が楽だよ」

「ケケツ、あのオンナの有無に随分拘るじゃねえか、なあスバル？」

「ちよつと、そういうこと言うのは卑怯だよ！」

「いや、違うつて！委員長は大事なブラザーだし、それに色々お世話になつて……」

「フン、まあそういうことはオレにはわからんからな、好きにしていぜ」

やっぱりわかってないのね……。いや、何をだ？

「まあいいや。それじゃあセキュリティを解除するよ、ロック」

「おう！」

——ステーションの電腦4・最奥——

「待つていたよ……」

「へびらしく冬眠でもして待つてりゃあ、デリートされることもないだろうによ、へビオンナ！」

ロックの啖呵に一瞬笛を持つ手が硬直するオヒユカス。蛇遣い的には歓迎出来ない呼称らしい。

「へビオンナとは随分酷い言い方だわね……。このオヒユカス、FM王の命を受け、最後の扉を任されたからには蟻一匹この先へは……。通さないわ！」

また閃光。もう飽きたよボクは。というか電腦世界に蟻なんていないだろうに。FMプラネットには生息していたんだらうか、蟻は。

「スバル！コイツを倒せば、残るはFM王だけだ！アンドロメダを止める為にも、こんなトコロで足留めを食らってる場合じゃねえ！さっさと消えてもらうぞ！」

ロックの消化試合感が半端ないな……

「そう簡単にいくかな……？我が毒牙の前に倒れ伏すがいい！」

強化されたオヒュカス・クイーンが脅しをかけてくる。キミ自体が嘔むワケじゃないよね……？

委員長がベースだったらまあ………ハッ！ボクは何を考えていたんだろうか。

「煩惱退散！……ウエーブバトル、ライドオン！」

「煩惱……？」

うっさいロツク！

ーーステーションの電腦4・最奥ー

「……………」

氷漬けのへびを前にして、ボクは思った。高機動高火力つて、もしかしくなくても強すぎない？

バトルスタートと同時に上空へ飛翔して、上からキャノン祭りをするというオツクス  
の二番煎じな展開。為す術無くマジシヤンズ・フリーズによって凍結させられた時は正  
直、こんなモンかと思ってしまった。スターフォースでファイアレオになっていたら、  
こうはならなかったのかな？ いや、オヒユカス・クイーンは木属性。よく燃えていたか  
どうかの違いしかないか。ドラゴンは知らん。

「それにしても……虚しいね」

「ああ、本来スターフォースなんてモンは、オレたちにとつて過ぎたチカラだったのかも  
しれないな……」

ああ、ロツクが悟りを開きかけている。仕方ないよ。勝負にならないんだもん。ゴル  
ゴンアイなんて撃ってくる隙もなかったからね。やはりーは遠距離ゲーだったか。も



しかしてA M三賢者たちは、遠距離に頼りすぎて地力が身に付かないまま決戦に臨むことを恐れていたのかもしれない。遠距離だけの舐めプで勝てる相手ではなさそうだからね、アンドロメダは。

ーパキパキパキ………パリン！

あ、氷柱が砕けた。既にHPが0を刻んでいることは確認済みなので、辞世の句でも聞いてあげるべきなのだろうか。

「FM王……お許し……を!!おのれ……ウオーロックーキ、キサマなぞ……アンドロ……が……ギヤアアアアツ!!」

さようならオヒュカス。キミのことは2ヶ月位忘れないよ。多分。

「煩惱を封じたスバルの敵ではなかったな」

どこかからかうような口調のロック。何かしたっけ？

「何かを得るためには、何かを捨てなくてはならない。悲しい闘いだっただね……」

残念ながら、真理の扉を拝むことは出来ないけどね。

「クククツ……ほら、残るはFM王とアンドロメダだけだぜ？」

どうしてそんなに笑っているのさ。

「うん、行こっか」

扉のセキュリティをロックオープン！

大將軍とはいかないけれどね。

——居住モジュール——

遂に、来た。この先のウエーブホールから行ける場所に、FM王がいる。思い返せば、長いようで短い宇宙旅行だったな。

「FM王は、この先だ。目と鼻の先つてヤツだぜ。しかもこの先の空間はハザマの世界。FM王の放つ強烈なゼット波が現実の物質に干渉して電波化させてしまっている。つまり、半分は現実世界だが、半分は電波世界だ。今までのように、危なくなったら現実世界に逃げるなんてコトは出来ないぜ」

そんな状態になってたのか。不便な体質だなあとしか感じないけれど、腐っても王ということなんだね。

「このウエーブホールからウエーブインして、再び現実世界に戻ってくるためには……」  
少し、言いづらそうに説明するロック。何だよ、そんなに頼りない？

「FM王とアンドロメダに勝てばいいんでしょ？」

「お、おう……だがよ、スバル。そう簡単には……」

珍しくロックが弱気だ。流石に慎重にならざるを得ないといったところなのかもね。

でも少し悲しい。ボクたちが揃っていて遅れを取るなんて、ありえないってのにさ。「やれるさ。ボクとロックならね。……違う？」

「……………」

ボクの言葉にロックは呆けたような表情になり、次いで目を閉じた後、深呼吸をした。電波体に呼吸は要らないんじゃないの？

「すまねえ、もう大丈夫だ。オレ、オマエを巻き込んだ負い目もあつてよ……頼りきれなかったんだ。だけどそれも、もう止めにする。だからよ……頼むぜ、相棒！」

ロックの目は、今までにないくらい真剣だ。最後に茶化した時は凄く嬉しそうだったけど。それにもちろん、ロックはボクの相棒だ。そんなこと、今更確かめることもない！

「こつちこそ頼むよ、相棒！」

「ーバチン！」

「イテテ……ロック、ちよつと強すぎじゃない？」

手がヒリヒリする……。あんまり気にならないけどね。

「へへッ、気つけてヤツだよ」

そういうモノなのかな？ だとしたら、ちよつと嬉しい。ツカサ君とじゃこういうの、出来なさそうだしね。

「フフツ、それじゃあ行くよ！」

「ばつちこいやー！」

ロツクの気合いも十分！

スウウ……ハア、と一度、深呼吸する。

「電波変換！星河スバル、オン・エア！」

「首洗って待つてろよ、FM王！」

ここからが本当の決戦だ！

——第二実験モジュール——

「ここが第二実験モジュール……ハザマの世界。随分酷い様相だ。こんなトコロにいるなんて、FMも変わっているんだね」

モジュール内にあつた現実世界の物質は触ってみた感じ、ウェーブロードに近いような気がする。周囲には固形化した毒々しい色の電波も所々浮いているようだ。触ってみたいけど、こんなところでリスクを負うのはゴメンかな。

「地球の物質が脆いのもかもしれないが……だが、この先にFM王がいることに変わりはない。慎重に進んでいこうぜ」

「わかつてる。油断はしないよ」

油断出来るハズもない。こんな危険な空間なんだから。うっかり気を抜いて、ウイルスにデリートされましたじゃお笑い草だ。

——二十分後——

凄まじいゼット波の中を慎重に進んだボクたちは、遂にFM王の待つと思われる場所に通じる階段へとたどり着いた。

「いるな、この階段の上だ」

「やっぱり？更にゼット波が強くなってるような気がするよ……」

肌にピリピリとくる。これがFM王のゼット波か。生身に影響がないといいんだけど。

「いよいよ王様の登場ってヤツだぜ……」

興奮を押さえきれないロツクという言葉を遮るように、階段の上から偉そうな声が聞こえてきた。

『ウオーロツク……卑しい身分でありながら、余に弓引く愚か者よ。特別にその階段を登ることを赦してやろう。さあ、登ってくるのだ……』

ふーん。

「アンタに言われるまでもなく、そうさせてもらうつもりだぜ。スバル行くぞ……」

「オイ、スバル?」

「ふん、ほら行こうよロック」

「あ、ああ……どうしたんだよ、スバル?」

「相棒をコケにされたんだ、タダじゃおけないね」

「お、おう……」

ロックは悔しくないのかよ!? 卑しいって、卑しい身分って言ったんだぞ!? アンドロメダに頼りきって戦闘力0のクセに……許せるか! 決めた、一発殴る! ツカサ君の時とは違う、ボクがムカついたから殴ってやるんだ!

「はあ、これじゃヒカルを笑えないね……」

後悔はしないだろうけど。その自信だけはある。

「何だよ急に」

「何でもないさ。ただ、あの裸の王様をぶっ飛ばす理由が一つ、増えただけ……」

何でドン引きするのさ!?

「ああ、そうだな……」

——第二実験モジュール・最奥——

第二実験モジュールの最奥は、FM王の座す玉座の間。玉座の背後からは道が途絶え

ており、恐らくはアンドロメダが眠っていると思われる。

「よく来たな……ロックマン、そしてウォーロック。余の前に現れた敵が、よもや我がFMプラネットの戦士だとは……飼い犬に手を噛まれるとはこのことか。AMプラネットには余の前までたどり着けた戦士はいなかったが流石は我がFMプラネットの戦士……と、褒めておこう」

アンタの称賛なんて要らないんだよ！

「一応聞いておくけど、FM王。地球への攻撃を止める気は？」

「黙れ！FMプラネットに害をなす星は、全て滅ぼすのだ！」

聞く耳持たず、か。都合がいい。

「父さんたちは、アンタたちとブラザーバンドを結ぶためにそっちまで赴いたんだけど、そこるところわかってる？」

ダイゴさんの目的を知らなかったワケじゃ無さそうだけど、きつと信じてなかったんだらうな。

「黙れ黙れ！何がブラザーバンドだ!!どうせ建前……我が星を侵略するつもりだったのだから！余は騙されん！」

なんて横暴な王様だ。部下も失っているのによく吠えるもんだ。

「ケツ、とりつく島もねえな。スバル、ヤツを止めるには方法は一つしか……って、わ

かってるみたいだな」

ロックにも伝わってるみたい。ボクの、押さえきれない闘志が！

「方法は一つ……？何を言っている。キサマらに余を止める方法などありません!!」

「なら出しなよ。いるんでしょ？アンドロメダ。デリートしてリザルトデータでも見せびらかしてあげる」

「キサマ、余を愚弄するか!？」

そろそろ我慢の限界だ……！

「……王様よお、さっき言ってたよな。アンタの前にたどり着いたA Mプラネットの戦士はいないってよ……。だったらオレが一人目だ」

「……キサマ、A Mプラネットの生き残りか……」

ロックの言葉を聞いて、一応の冷静を取り戻したF M王は確信のこもった呟きを漏らす。

「……………」

「驚かねえのか？」

「だって、スターフォースはA M三賢者から受け取ったものでしょ？なら可能性としては考えてたよ」

多分誰でも気づくだらうけどね。



「そう、だからオレの大事なモンは全部、コイツに奪われちゃったのさ……。だからよ、今のオマエの気持ち、少しはわかるんだぜ……」

そんなことはない。ロックの方が辛いに決まってる。

「ボクとは違うさ。ロックは大事なモノが奪われる様を、実感しながら耐えてきたんだ。強いよ、ロックは」

ボクは唐突に失ったように感じたけど、命が消える様を見たワケじゃない。言うなれば失った妄想に過ぎないんだよ。だからこそ、ロックはボクなんかよりずっと強い。そして今は、きつと復讐だけに囚われてはいないはずだ！

「へへッ……とにかく、このままじゃ地球はオレの故郷、AMプラネットと同じ末路をたどっちまう。だから今ここで、ヤツを止める!!」

「わかってる!」

ボクたちの会話が、FM王には余程滑稽に聞こえるらしい。自分は戦わないクセに、随分と偉そうなことだ。

「ハハハハハ!! AM星人の生き残りと地球人一人に何が出来ると言うのだ! 余を止められるものなら止めてみるがいい……目覚めよ、アンドロメダ!」

ーゴゴゴゴ……

第二実験モジュール全体が揺れているような衝撃を放ちながら、玉座の背後にある空間から現れるアンドロメダ。なるほど、確かに凄いプレッシャーだ。

「これがアンドロメダ……」

今は巨大な顔のような形態をしている。確か追い詰められると、より戦闘に適した準人型形態になるはずだ。なるべく準人型形態とはやりあいたくない。デカいつてのはそれだけでアドバンテージだと、誰かが言つてたな。誰だっけ？

「ヤツの正体は孤独な心の塊だ。寂しくて寂しくて、自分と同じ電波体を片っ端から飲み込みやがる！」

！  
そういう仕組みか……だけど片っ端とは、まったくもって不完全な兵器だよ、ホント

「アンドロメダよ！地球を片付ける前のオードブルだ！余に逆らう愚か者を倒せ！」

こっちだって、負けられるかアッ！

「ロック！この大勝負、勝ちにいくよ！ボクらの戦いに、地球の未来がかかっている！」

敢えて最後の戦いとは言わない。ボクたちはずっと、相棒なんだから！

「おう！他人が信じられないお坊ちゃん王に見せてやろうじゃねえか、絆のチカラをよ  
！」

「あとあのバカ王は一発殴るからね！ウェーブバトル、ライドオン！」

「この不敬者が……！余に楯突いたコトを後悔するがよい！！ゆけ、アンドロメダ！」  
戦いはポケモンじゃないってコトを教えてやる！

## 56

——第二実験モジュール・最奥——

「グオロロオオオン！」

吸引力の変わらないただひとつの掃除機のようなチカラを見せてくれるかと思ったけど、普通に戦闘モードも存在していたらしい。推進機関もないのに凄いスピードだ。……って、そうじゃない！回避イーツ！

「ロック！」

「おうよ！」

「スターフォース！」

青き賢者のチカラを纏い、アイスベガサスここに推参！

「うおおおっ！」

背中の翼を全力で振るわせ、遙か上空へ羽ばたかんに飛翔する。流石に兵器、こちらの準備を悠長に待つてはくれないか……！

「オロロオオオン！」

今度は……隕石!? 頭頂部から露出している砲身の射出口から隕石型の砲弾……確か

リュウセイグンだっけ？使う度に威力の落ちそうな名前だけど、数撃ちや当たるの精神なのか連続して撃ってくる！その内の一発がここにくるために通った実験モジュールの壁に直撃し、盛大に爆発する。ドカーン！と、ありきたりな音だけに、その凄まじい威力を物語るには十分だ。

「うわわわっ！セイツ！ハアツ！トリヤツ！」

迫り来るリュウセイグンを左腕に展開したリュウエンザンで斬り裂いていく。固そうだけど、斬ることは可能なようなのでこれ幸いと、除けていく。しかし、これは遠ざかっていると損をするタイプの敵っぽい。火力と射程に差がありすぎる。ダンチだ！それでも接近系は温存するんだけども。

「取り敢えずは削っていかないと……」

第二形態を引つ張りださないことには、コアと思わしき部分へのダメージが入らない！HPも全く減っていないし、外殻をいくら攻撃しても中心にダメージはいかないってことか……！クソツ、何でラ・ムー仕様なんだよ！

「ハアツ………ツ………ツ！」

ヘビーキャノンを連続して放つ。全く抵抗せずに砲撃を受けるが、むしろチャンスとばかりに攻撃が激しくなる。どうしろってんだ！

「グオロロオオオン!!!」

またリユウセイグン!……ヘビーキャノンの射程まで近づいているから、この量はマズイ!

「うわあああつ!」

グツ! 対処仕切れずに一発貫つてしまった。イッタイなあ……! 変身が解けないだけマシだけど。

誰だよ! ダメージ40の雑魚技なんて言ったのは!

グラン・ミラオスより高威力、高速度で撃ってくるんだけど!

「ハハハハハハ!! やはりアンドロメダの前には全てが無力! 残念だが、ここで朽ち果ててもらおうぞ!」

ちくしょう! 好き勝手言つて……!」

「まだまだあツ!」

持ち得る限りの中遠距離バトルカードを撃ち込んでいく。まさに古龍でも狩つてる気分だよ、これ。

「グオロロオオオツ!」

今度はミサイルか! 瞳つばい意匠のパーツのサイドに取り付けられている……ええつと、ガンダムでいうバルカンみたいな場所からミサイルが発射されている。そこはマシンガンじゃないのか!? 非誘導性のミサイルだから鬱陶しくはないけど、当たると

リュウセイグン以上の大爆発だ。やっぱり鬱陶しいなコレ！

「ハアアアアア!!!」

とにかく撃ち落とすしかない！幸い誘爆するみたいで、近くのミサイルごとまとめて落とすことが出来た。ロックバスターに大感謝！

「グオオオオオオッ!!」

結構効いているのか、咆哮が荒々しくなってきた。プログラムには必死な感じだな……。いや、寂しいのか。自分がいなくなることが、何よりも寂しいんだ。

だけど。

「そんなの知るかアッ！」

「どうした！何かあったか!?!」

「何でもない！アンドロメダの気持ちまで汲み取ってられるかってことだよ！」

「それは道理だ！行くぜスバル！」

「ああ！」

冷気を集約し、即席のウエーブロードを精製。それを足場にしてウオーロックアタックを敢行、一気に近づく。ゼロ距離ならアッ！

「グオオオオオオン!!」

ビッグバンイーター……コイツ、読んでいたんだ！それにこれは補食体勢……ボクた

ちを飲み込んでしまうつもりか!?

「ウグツ!ま、マズイ……」

アンドロメダの巨大な口に挟まれてしまった。こ、こうなったら、アレをやるしかない!やらないきや……殺られる!

「うおおおつ!ペガサス・マジックGXツ!」

アンドロメダの喉奥に向けて虎の子の一発を叩き込む。クソツ、第二形態で使う予定だったのに!

「グオオオオオロロオオオン!!」

悲痛な叫び声を上げるアンドロメダ。どうやら喉奥に当てた攻撃は通っていたらしく、HPが減少している。ラッキーだ。

「オオオオオオオン……!」

遂に来るか。第二形態が。ここから対アンドロメダ戦の一番。かなりヤバイぞ……!

ーガシヤツ!ガコン!ギギギ……

やはり変形したか。顔から人型になるなんて、何か戦隊モノのロボットを彷彿とさせ



るな。因みにさつきからずつとロックバスターを撃ち込んでいるけど、効いた様子はない。人型の胸部にあるシエルターが閉じている以上こちらの攻撃は通らないようだ。それにリュウセイグンの量も1・5倍になるかもしれない。ゲームじゃ2発から3発だったけど。

「チツ、どうやら胸部シエルターが開いている時じゃないと攻撃は無効化されるらしいな」

「ある程度のタイミングが読めればいいんだけど……」

シエルターが開閉するタイミングを読めれば、先んじてウオーロックアタックで切り込むことも出来る。しかしそんなこと、あのアンドロメダがさせてくれるのだろうか。因みに現在は、少し離れた場所からアンドロメダを観察している。

「ウオオオロロオオオン！」

ゲツ、あの動き……初手ネビュラブレイカー!? 初手ぶっぱは反則でしょう! や、ヤバイ。ビームが過ぎて撃ってから回避余裕でしたなんてことは出来なそうさ。なら出来ることは……

「ロック、シールドを！」

「回避運動は!?!」

「多分無駄! 受けきるしかないと思う! ビーム系ならシールドでやり過ごせる……ハ

ズ」

正直自信はないけどね！巨大な右の掌にある射出口が輝き、エネルギーの充填が済んだことをボクに知らせてくれる。親切設計だなあ、なんて呑気してる余裕はない。個人で有しているチカラじゃないよ！あんなのは！

「オオオオオオン！！」

雄叫びを上げて右の掌から特大・極太のビームを吐き出してくる。ビームの範囲、スピードから判断するにボクの予想は正しかったらしい。眩しくて、キレイなビームだ……！

「ぐっ！ううおおおっ！」

び、ビームの威力が強すぎる！受けきれないイツ！あ、足が地面を離れそうだ！……ッ！うわあああッ！

ー……ガラッ！

「うう………」

威力が強すぎて、壁に叩きつけられてしまった。やっぱり遠距離は止めた方がいいみたい。取りついでから近距離系で地道に斬っていったほうがいいのか……

「スバル、大丈夫か？」

「ああ……うん、何とか。でも凄い威力だったね」

「あの攻撃は何度も食らえねえ。早々にケリをつける必要があるな」

ロックも近距離への切り替えには賛成みたいだ。まあ、何発も食らってられないから仕方ないんだけど。

「うん賛成。それじゃアレ、やってみる？」

アレとは、アレだ。合体、融合。ロマンである。

「……おう。だがよ、アレはオマエの体に負担が……」

「水くさいこと言わないでよロック。それに、以前ペガサス・マジックが言ってたでしょ？ 『親和性を上げてやった』ってね。今なら多分、やれると思うんだ。どう？」

ずっと考えてたんだ。ペガサス・マジックは親和性を上げたと言っていた。では何の親和性を上げたのか？ 彼らはボクをずっと見定めていたんだ。ボクが戦う姿を、だ。つまりは……

「スターフォースとベルセルクのチカラを融合することによる、新しいチカラ……！」

「キサマら、何を喋っている!? もう終わりだ！ そこで最期の時を待つがいい！」

F M王の罵声すら、今は気にならない。

「ぶつつけ本番だぜ!? ……いけるか?」

「ロックがいて、ボクがいるんだ。失敗なんて、するはずもないよ!」

ボクはロックを信じてる。一蓮托生ってヤツだ!これ以上の出会いはもうないだろうね。ボクにとつて一番の幸運は、ロックと出会えたことだった!

「お互いに思い、守り、競い、高め合う。それこそが最高の相棒ってヤツなんだ!だからボクは、いやボクたちは……勝つ!」

「何をふざけたコトを!」

最も身近な誰かの為に戦うボクらを、止められると思うなよ!

「だからF M王……地球舐めんな!ファンタジー!」

「よく言ったアツ!」

「いくよロック!ダブル……いや、ツインだ!」

ダブル  
二重じゃ足りない!……双トライブだ!

ツイン  
高次元血族融合!……ベルセルクツ!

ロードオオツ!

ベルセルクを読み込むと、上空から降ってきた稲妻が、ボクのカラダを貫いた。苦しくはない。痛みも感じない。天馬と戦士のチカラが、融け合うように混ざりあつていく

のを感じる……!」

「何が起こっている……!?!」

F M王の困惑した眩きが聞こえる。今ボクの周りは、凄まじい冷氣とイカズチの混ざりあつた暴風が吹き荒れている。チカラが溢れてくるようだ!それに知覚能力もペガサス、ベルセルクより拡張されている。周囲の状況が、手に取るようにわかる。

ここまで圧倒的な性能だったなんて!

「……ベルセルク。ハザード、ベルセルク!いくよロツク、ここからが本当の大一番だ!」

地球の代表なんだ、地球のチカラであるベルセルクを名乗らせて貰ったほうが、格好つくハズだ!

「おうよツ!」

右手に掴んだベルセルクブレードで、辺りを切り裂くように振るう。ボクのカラダから放出されていた冷氣とイカズチを斬り払い、超速のウォーロツクアタックを行う。超高速で突進しているというのに、軽く目で景色を楽しむ位の余裕はある。どれだけ強化されているんだか。

「セイヤアツ!」

「ッ！オオオオオッ！」

右手にスタンナツクルを展開し、コアを露出したアンドロメダに殴り込む。そこまで本気で殴ったわけでもないのに、低空飛行していたアンドロメダは物凄い勢いで吹き飛んでいく。完全にアンドロメダを圧倒しているようだ。

ベルセルクのチカラが混じることで雷撃を迸らせる翼を展開し、通常のウォーロックアタックと遜色ないスピードで吹き飛ばされたアンドロメダを追う。

「逃がすかアッ！」

ツイントライブによって強化されたロックバスター、『テンペストランチャー』で追撃しながら、アンドロメダを追い詰めていく。負ける気がしないぞ！

「グ、グオオオッ！」

最後の足掻きとばかりに両腕からネビュラブレイカーを同時発射しようとするが、そんな隙など与えるワケはない。

「セアアッ！」

右手のベルセルクブレードを、丁度露出したアンドロメダのコアに突き刺す。これだけでも、かなり効くはずだ。

「グウオオオオッ!!」

コアに大剣を差し込まれて怯んだアンドロメダを尻目に、ボクは限界まで高く飛翔してからダイビングキックの体勢に入る。狙うはコアに突き刺したままのベルセルクブレード！

「うおおおおおつ!!!」

ーードガッツ!!ギギギ……!

これだけの勢いで蹴り入れているのに、貫通仕切らない!? 背中の電撃を纏った翼が更なる推力を生み出し、押し進んでいく。もう、少しッ!

おおおおおりやああアツ!!!

「ハアアアアアツ!!」

「グッ、グオロオアアアアアツ!!」

ーギギギギギギ……バギイツ!!

「うおおおおつ!………やった!」

コアを貫通し、反対側から飛び出るボクたち。これ、ライダーキックじゃないかと今更気づいた。

「ば、馬鹿な！まさか、アンドロメダが……い、いやあり得ぬ！アンドロメダを打ち倒すチカラなど余は認めぬぞ！アンドロメダ！今一度立ち上がり、こやつらを打ち倒すのだ！」

既にHPは0を示しているアンドロメダだが、第一形態に戻ることで完全崩壊への時間を稼いでいるように見えた。

「グオロオオオオン！」

ここから再起動するっていうのか!? コアを完全に貫いたんだぞ!?

「ウオロオオオオオツ!!」

クソツ、何て諦めの悪さだ!

「スバル、来やがるぜ!!まだ行けるか!?!」

「やれるさ!今度こそ……ウグツ！」

何だコレは!?!か、カラダが……重い!これがツイントライブのペナルティ。なんて負担だ!こんなのを、親和性の低い状態で使おうとしてたなんて!



「ハ、ハハハッ!! 先ほどの戦いでチカラを使いきってしまったようだな! アンドロメダ! トドメをさしてやれ!!」

座るか煽ることしかしてないクセに!

「ウオロオオオオオッ!」

「スバル! 頑張れ!……もう一息なんだ!」

「ウググ……! カラダが重い! う、動けない!」

「クソオッ! こんなときに負担かよオッ! FM王のゼット波の影響も、地球人には厳しすぎる! チクシヨウ……!」

こんなところで再現なんてしなくていいってのに!

「観念しろ、ロックマン!!」

ーギユイイイイン!

アンドロメダの目が再び輝き、FM王の命令を受諾する。は、早く崩壊してしまえよオッ!

「オロロオオオオオッ!!」

第一形態の特徴たる大口を盛大に開け、変わらない吸引力を披露する。攻撃でなくてよかつた、けど。

「や、やめろ! アンドロメダッ!! ウワアアアッ!! 助けてくれええッ!」

やはりこうなったか！アンドロメダは既に暴走し、FM王を飲み込もうとしている。助けてやりたいけど、カラダが……！

「何とかしねえとヤベエぞ！」

「か、カラダがもう……！」

動け！動けつてんだよ！

母さん！委員長！ミソラちゃん！……チクシヨウツ！

「こんなところで……！」

『スバル、お前は一人で戦ってるんじゃない。さあ、立ち上がるんだ！』

「この声……まさかダイゴさん!?もしかして、残留電波か!?

『さあ、立ち上がれ！みんながお前にチカラを貸してくれる！スバル、お前の紡いだ絆のチカラを、今こそチカラに変えてゆけっ!』

「そうだ……！わかつてる、いやわかつてたんだ！ボクは一人じゃない！ミソラちゃん、委員長とデートしてゴン太と牛井屋に行くっていう約束が、あるんだアツ！」

誰かの声が、こんなにもチカラになるなんて！

まだまだ、まだやれる！立てよスバル！

「うおおおおおっ!!!」

「な、なんだ……このチカラは……！」

ケフェウスが何か言ってるけど聞こえない！今はボクの、全力全開をツ！！  
「行くよツ！！」

大上段に構えたベルセルクブレードから、爆発的にイカズチとブリザードが吹き荒れる。この、一撃ならアツ！

「これで終わりだ！」

「うおおおおつ！！デッドエンドオオオ！ハリケエエエエッ！！」

一気に振り切り、アンドロメダにブチ当てるツ！もう、終わつちまえよオツ！

ーバリバリバリ……ドカアアアアン！！

「ああ、アンドロメダが……アンドロメダが……い！」

衝撃で吹き飛ばされたFM王が嘆きの声をあげる。助かってよかったじゃないか。

「な、なぜ……余にトドメを刺さんのだ！？余に復讐するためにここまで来たのだろう……」

これはロックに言ってるな。少しだけ、聞き流しておいてあげるよ。

「……いいだろう、苦しませないように一思いにやってやるぜ。……と、思ったが止めといてやる。復讐に身を焦がすオレなんぞ、相棒は見たくねえだろうからな。それに部下を失い、アンドロメダも失った今、オマエに出来ることはねえ」

なんか照れるな。いやあ、相棒って響き、良いよね。

「……確かにオマエの言う通り、余の負けのようだ。1つだけ聞かせてくれ。アンドロメダを倒す程のチカラをどうやって手に入れたんだ……？」

「ハッ、よく覚えておきな。これが地球人たちの大切になっている絆のチカラってヤツだ」

「絆のチカラだと……？」

……はあ。

「そう。さつきボクは、アンタがロックを卑しい身分何て言ったからキレたでしょ？ そうやって互いを思い合い、支え合い、信頼することでもどこまでも強くなっていけるんだ。それが、絆のチカラだよ」

……FM王、いや、ケフェウスはハツとしたような顔をした。そろそろ、いいよね？

「もう一度言うよ。ボクは、さつきアンタがロックにほざいた罵倒が許せない。今はね。でもボクは、キミを許せるよ」

「ど、どういうことだ……？」

わかってないような顔。

「こうするのさっ！ 歯ア食いしばれエッ！」

ーバキッ！

「グハアッ！」

「スバル……」

フウ、すすきりした。

さあ、

友好ブラザーバンド関係を始めようか……！

## ――第二実験モジュール――

そこそこの強さで殴り飛ばされたFM王は、最高権力者としての意地なのか這う這うの体で立ち上がり（浮き上がり？）、心中を吐露した。

「お前たちの言う絆の大切さは余にも伝わった。だが、それでも余は他人を信頼することは出来ん。余は、生まれた時より王の座を狙う者たちから命を狙われておった。兄弟、親族、その側近たち……」

なるほど。本物の兄弟ブラザーに命を狙われ続けた、ね。そりや誰も信じられなくなるか。

「そやつらは余を亡き者にしよう、様々な策を企ててきた。実際、命を落としかけたことすら何度もあった……。本来最も心安く出来るはずの身内の者に命を狙われ続けて来たのだ。身内も信用出来ないのに、他人を信じることなど出来ようか？他人を信じたところで裏切られることはわかっておる。どうせ裏切られるならば、始めから信用などしなければ良いのだ。他者を信じないこと、即ち孤独こそが余の生きる術だったのだ」

孤独こそが自分の生きる術、か。

「余にとって、笑顔で近づいてくる者程怪しい者はない」

それで友好関係を結ぼうとした者たちを滅ぼしていったんだっけか。

「FMプラネットがAMプラネットに攻撃を開始したのも確か、AMプラネットが友好条約を結ぼうとした翌年だったな……」

「AMプラネットに不審の目を向ける余の下にジェミニが現れ、AMプラネットがFMプラネットに攻撃を仕掛ける計画があると報告してきたのだ……」

やはりジェミニ。これ、完全にジェミニが発端だよ。デリートしておいて良かった。

「ジェミニのヤツが……フン、疑心暗鬼に陥った幼い王を操ることなど、ヤツには造作もないことだ」

ロックのジェミニに対する謎の信頼は何なんだろう。オヒユカス委員長とバトルしたときの、オレたちは既に射程距離に入っている、とかさ。

「地球に攻撃を仕掛けたのも、父さんたちがブラザーバンドを結ぼうとして、アナタたちにコンタクトをとったから、か」

「……そうだ。しかし、その計画もここまでだ。さあ、トドメを刺せ」

何でロックが止めたのに、わざわざ蒸し返すのだろうか。ボクの怒りだって精算しているというのに。

「その必要はないよ」

「!？」

驚愕を隠しきれないFM王。

「父さんはアナタたちFMプラネットと、本当に友好的な関係を築こうとしていたんだ。星河ダイゴの息子、星河スバルとしては、その思いを踏みにじることは出来ないんだよ」

ボクが星河スバルである限り、その周りの人間の思いを無下にすることは、出来るだけしたくない。それにシリウスの件もある。彼とは友好的な関係でいたい。中々良い煽りスキルを持っているようだしね。

「な、何だと……!？」

「キミは産まれてから、何度も命を狙われてきたと、そう言ったね？」

「ああ、思い出したくもないが……」

そう、そこだ。そこがおかしいんだ。

「それでも、それでもキミは、FMプラネットの王になった。それはキミ自身に、FMプラネットを守りたいという強い意志があったことに他ならないと思うんだ。普通は王の座を狙って命を狙われ続けていたら、そんなヤツらがいる星なんて、統治したくなくなっちゃうでしょ？」

親族や兄弟など、王位を継げそうな存在がいたならなおのことだ。

「た、確かに。……余にとつて、FMプラネットは唯一のブラザーだったのかもしれない



な。星に、明確な意思などないから……」

「ボクとキミは、実は近い存在なんだよ。ボクは、ボクとボクの周りの人間、それにボクが住んでいる星を守るために戦った。キミは、キミ自身とキミの星を守るために戦ったんだ。キミの場合、究極的には、だけどね。だから許すさ。キミの送り込んだ戦士のお陰で、良い結果に転んだケースだってあったんだから」

もちろん、委員長のことだ。彼女はたまにだけど、ボクに家族の団らんを嬉しそうに語ってくれる。何故かその団らんの場である夕食に頻繁に誘われるのが不思議なんだけど。理由を聞くと顔を赤くしながら百合子さんの名前を出すので、大魔王百合子さんの差し金なのだろうね。怖い。

「なっ……！地球を滅ぼそうとした余を、赦そうと言うのか……？」

「地球の代表として勝ったのはボクだ。それくらいワガママは、許されて然るべきじゃない？」

「だ、だが……」

茶化すようにFM王に言うけど、FM王は困惑したままだ。……もう一押しか。

「なら代わりにボクのお願いを2つ、聞いてほしいんだ」

「願ひ……だど？」

「一つ目は、ボクを信じること。ボクの強さを信じることでいいよ。きっとそれが、誰

かを信じる切っ掛けになるだろうし。まずはお互いを知って、分かり合うべきなんだ。争いは相手を理解することが出来ないから起こるって、昔父さんは言っていた……」

ボクたちは分かり合うことで、未来を築くんだ！沙慈くんも言ってるんだから、間違いない。

「確かに、誰かを思って戦うお前たちは強かった。それに互いを理解し合う、か。わかった、それで2つ目は何だ？」

「ボクの友達に、なつてくれないかな？」

実際中々良い付き合いが出来そうな予感はあるんだよね。王様の苦労話とか、聞いてみたいし。

「余がお前と……？ハ、ハハハハハハ!!余に友達になれなどと、生まれて初めて聞いたぞ！」

何だよ、笑うことないでしょうに！やーい、ぼっち！

「何かのために、そこまで必死になれるキミに共感したんだ。誰かを心から信じられるのって、結構良いよ。ボクが断言する。それに、結構気も合いそうだし……。どう？友達第一号にする気になった？」

「ハハハ……！王に対して気が合いそう、とは……。また随分適当な理由で誘われたものだ。……だが、悪くない。地球人よ、お前の言葉……。信じて良いのかな？」

どこか吹っ切れた顔をするFM王。別に、ボクを疑って聞いてきたワケじゃないんだろう。

「ケツ、何言つてやがる。アンドロメダを倒す程のチカラを持ったヤツがオマエを騙しても、何の得もないだろうがよ」

呆れたように言うロック。もう以前のように、復讐に惑わされていたロックじゃない。だからこそ、FM王にだってその言葉が届く。

「ロックマン……いや、地球人。名を教えてくださいませんか？」

君の名は。

「ボクの名前は星河スバル！特別にスバルって呼んでもいいよ？」

「フツ、特別か……ならば余のこともケフェウスと呼んでくれ。間違つても王様なんて呼んでくれるなよ？」

ニヤリと笑って自己紹介してくれるケフェウス。いいね、こういうの。

「もちろん！」

「……スバル」

「何？ケフェウス」

「その、なんだ……よろしく頼むぞ」

なんか照れてる？フツ、おっかしいなあ……

「フフツ、うん、よろしくね」

「ああ。ウォーロック、お前はいいのか?」

「何がだよ?」

「本当に余にトドメを刺さずとも良いのかと聞いているのだ……。余はジェミニに踊らされたとはいえ、AMプラネットにアンドロメダをけしかけ、滅ぼした……」

今更、後悔してゐるんだろうか。でもこれは、ロックの問題だ。ボクが口を挟む場合じゃない。別に心配は要らないだろうけど。

「バカヤロウ! オマエはスバルのダチなんだろう!? そんなヤツにトドメなんて刺したら、オレが悪者になっちまうだろうが!」

「……そうか。スバル、ウォーロック、ありがとう。余はこれよりFMプラネットに戻り、FMプラネットの民に伝えよう……。信じる心の強さと大切さを、な。そしてせめてもの贖罪に、AMプラネットの復興を約束しよう」

そうだ。人は過去を乗り越えてこそ、前に進める生き物だ。FM星人だろうと、それは変わらない。彼にとっては、AMプラネットの復興こそが過去の清算に必要なことなんだろう。

「そっか。頑張りなよ、ケフェウス!」

『AMプラネットの復興には、我々もチカラを貸そう……』

この声……変態幻獣集団！

「アナタたちは、サテライトの……！」

「AMプラネットの三賢者……」

あ、ケフェウスも知っていたのか。まあ、滅ぼしたヤツのことなんて忘れちゃったぜ、なんてキャラでもないか。

「ロックマンよ……よくぞここまで戦った。ウォーロックよ、やはりオマエは我らの同族だったのだな……」

「ココロを開きし、FMプラネットの王よ。ロックマンより学んだ信じるココロを持ち続けるならば、AMプラネットの復興にチカラを貸そう」

「AM星人は全て滅んだワケではない。少数ではあるが、我らのように他の星に移りすんでいる者もいる。皆を呼び寄せて、再び豊かなAMプラネットを取り戻そうではないか」

ペガサス、ドラゴン、レオの順に話を進めていく。やっぱり三人で分けて話す必要はないんじゃないかなあ。無口キャラ扱いはされたくない、とか？三人で話す内容の打ち合わせをしているところを想像してしまった。シニールだね……

「ペガサス、ドラゴン、レオの三賢者よ……余はここに誓う。信じるココロを失わないことを……」

よかった、決意は固そうだ。頑張つてOHANASHIした甲斐があったね。

「……よかろう」

ケフェウスと三賢者はこのままAMプラネットの復興のためにFMプラネットへ戻るといふことらしい。何だか寂しくなるな……。

「スバル、ウオーロック。去らばだ、また会おう……」

「ウオーロック、オマエはいいのか？」

思い出したようにドラゴンが聞いてくる。言うの遅いよ！結果は変わらないけど。

「オレはパスだ。オレがいないとスバルは地球に帰れねえし、やっと地球に慣れてきたとこだ。もうちよつとのんびりさせてもらうぜ」

実際これから、どれくらい地球にいてくれるのだろう。五年生の間は確定として、いつかAMプラネットに帰りたい、なんて言ったらボクは笑顔で送り出せるのだろうか。それはまだ、わからない。

「フフフ……オマエらしいな」

何故かドラゴンの質問の返答にレオが反応する。ホントどうなつてんだろう、この三人は。

「ケフェウス、元気で！風邪とか引かないようにね！」

約半年後、シャボンディ諸島……じゃなくてFM星のコスモウエーブで！また会おう

!

「スバルは余の母上か……!?!」

「頑張れってことだよ、オ・ウ・サ・マ?」

「スバルめ、言いおるな………当たり前だ!余は………FMプラネットの王なのだからな!」

少年のような笑顔で啖呵をきるケフェウス。

……頑張れよ、ブラザー。

「では、行くぞ……」

フラッシュ。閃光が晴れるとそこにはもう、誰もいなかった。ワープ能力でも持ってたのだろうか、三賢者は。

「これで、よかったんだ。よかったんだよ」

「へへッ、オマエが地球を救ったんだ。誰にも文句は言わせねえよ。そんなことより、いとこオレたちも帰ろうぜ……地球によ!」

「了解!!」

——居住モジュール——

さて、ここからはタイムアタック。どうにか間に合えば、大変な思いはしなくて済むんだけど……

「急ぐよロックー！」

「おう！ここの崩壊もあり得るからな……サービスモジュールへ急げよスバル！」  
わかってる！

ーサービスモジュールー

な、なんとか間に合った……！よし、ウエーブホールからウエーブインだ。

「急げスバル！このステーションはもう、もたねえぜ！！」

「電波変換！星河スバル……うわっ！」

だ、ダメだ！やっぱりこうなったか！

「ウエーブホールが……地球への直通だったのに……」

ウエーブホール周辺が、崩壊を始めた！ビジライザーをかけてもウエーブホールはもう、見えない。完全に消えてしまったみたい。

「チイツ、マズイことになっちゃったな……」

『こつちだ、スバル！』

またこの声。やはりダイゴさんの残留電波……？

「どうした？」

「今、声が出たような気がして……こつちだって」

あつちには確か、切り離しの出来るスペースがあつたはず。脱出用のモジュール、



だつたっけ？

ー脱出用モジュールー

「このモジュール、切り離しが出来そうだよ！ ロック、これなら帰れるかも……！」

「オ、オイ……オマエに操作出来るのか？」

「……昔のボクは、父さんに宇宙ステーションのコントローパネルを見せてもらったことがあるみたいなんだ。……いけるさ。ハッチを閉めよう」

「……そうか」

ピッピッピッと操作して、ハッチを閉める。

「脱出用モジュール、星河スバル、発進します!!」

よっし！ 言えた、言えたぞ！

ーピロンー！

「何かの電波を受信してみたみたい。……音声電波かな、これは」

「聞いてみようぜ？ どうせ暇なんだしよ」

ロックは完全にリラックスモードだ。グラスンでもかけてタバコを吸っている幻影が見えたよ……

「はあーい」



『ドンと来い!』

『グスツ、グスツ……!』

「これは……キザマロか!

『スバルくん、ありがとうございばす〜ツ!』

「な、泣いてる!心配してくれてたのか……ありがとう。」

『ちよつとキミたち、離れなさい!スバルくん、その脱出モジュールの操作は大丈夫かい?』

「何とか!今はオートパイロットモードで運転中ですけど最悪、ロックをウエーブインさせてみます!」

オートパイロット、スタンバイ!ファイブデイズの頃の機械音声懐かしい。

「ちよつと、オイ、スバル!マジかよ!」

マジだよ。多分無理だけど。

『そうか……それなら一安心だ』

「ゴゴゴゴツ!!」

「うわわっ!ゆ、れ、る!!」

「システムエラー発生!システムエラー発生!キドウヲハズレマス!キドウヲハ

ズレマス!

『スバル君!』

「揺れが凄い、ですっ!」

『スバル君!スバル君!』

パネルを見ると、どんどん地球への帰還コースから外れていく!わかってても、これは焦る。それに通信の向こうから、キャー!だのイヤア!だの悲鳴が聞こえる。だ、大丈夫。気絶さえしなければ……!

「オートパイロットのシステムエラーです!地球への軌道から外れていきます!このままじゃ……」

『システムをオートパイロットからマニュアルに切り替えて!マニュアルの操作は出来るか、スバル君!』

で、出来るか……?システムエラーによる揺れは既に収まっているため、精密な操作は可能だ。

「やってみます!……切り替えくらいなら!」

ピーピッピッピッピッピッ!

よし、これで切り替わった。

『細かい操作はこちらで説明する!だから帰ってこい、スバル君!』

「ありがとうございます!やるよロック!」

「あ、ああ……おう！やってるぜ！」

絶対に帰ってやる！宇宙を漂流するなんて、一瞬でもゴメンだからね！

『グスツ……頑張れスバルくん！』

『か、帰って来なかつたら、承知しないんだからね！』

『ヒーローは、帰ってくるまでがヒーローなんだ！だからスバル！諦めるな！』

『頑張ってください、スバルくん！』

みんな！ありがとう……やってる、やってるぞ！

ーピコーン・ピコーン・ピコーン！

「こ、これは……」

ーピコーン・ピコーン・ピコーン！ピキーン！

光、光が、ボクのトランサーから……！

「光のライン……いや、ウエーブロードか！」

「みんなが応援してくれて……やるよロック！」

こんなことをされて、失敗なんて出来るわけがない！

「おう！任せろ相棒！」

ー三十分後ー

『……よし。これで大体の設定入力は終了したはずだ。お疲れ、スバル君』  
「……ふはあああーっ！」

っ、疲れたあ〜っ！

『後は大気圏に突入する時だ。それまではゆっくりしていて大丈夫だよ』

「ロックもお疲れ……帰れるよ、ボクたちの、地球に……」

「ああ……」

?..どうしたんだろう。

「どうしたの、ロック？」

「フツ、なあスバル……満足か？こんな、世界で……！オレは……結構気に入ってるぜ、

ククククッ！」

「ロックオオオオン!!!って、気に入ってるのかよ！」

「急にどうしたのさ……」

そんな紛争根絶を掲げたテロリストの最後みたいなセリフ言ってさ。

「いいや、良い星だと思ってるな。ホントによ……」

「何言ってるんだよ。ロックもその星に住んでるんじゃないか」

不思議なことを言うもんだ。

「へへッ、そうだな。さあ、そろそろ見えてくるぜ。……地球がよ！」

帰ろう。ボクたちの、地帰る場所へ。

――新章『真ベルセルク編』

『ああんまありだあああ!!!』

『ロックマンのバトルは、エンターテインメントでなければならぬ!』

『イマコソ ヒトツニ!』

『ボクは、ボクだけを信じる!』

『エン<sup>空っ</sup>プ<sup>ほ</sup>ティーなんて、タチの悪い冗談だよまったく!』

『このアルティメットぼつちがアツ!』

『神殺しなんて、そそる響きじゃないか。ねえロック?』

『これなら……! オマエなんて、大陸ごと叩き斬ってやる!』

お楽しみに。



# 第八話 『乙女座でもない星河スバルのセンチメンタリズムな日常』

58

ーOHANASHIから四日後の朝ー

アンドロメダを破壊して地球に戻ってきたボクだけど、疲労も溜まっていたのか、帰還した後にすぐ、眠りについてしまった。記憶が不確かなんだけど、取り敢えず家には帰ってこれたらしい。朝起きたら星河家のベッドの上だったのは軽くホラーだったけど。両隣に委員長とミソラちゃんがいたのは最早ファンタジーだったけど。

「ふあゝつ、や、やっと休日か……」

そうだ。帰還したボクを待っていたのは朝チュンだけではなかったのだ。忘れてはならない。ステーションに飛び立ったのは、火曜日だったということ。世界を救ったとはいえ、ボクは一介の小学生に過ぎない。待っていたのは、登校という現実だったのだ……

「スバル〜！朝御飯出来たわよ〜！」

あ、朝食の時間か。今日は予定があるんだったね。お待ちかね？のデートだ。今日は委員長、明日はミソラちゃんという流れだったはず。まだ疲れは抜けきっていないので、今日はゆつくり寝ていたかった……

「はあ〜い！今行くよ！」

———食事中———

「あら、スバル。今日はよく食べるのね？」

唐突にあかねさんから問われた内容にどう返答すべきか迷っていると、何かを察したのか笑顔になった。ニヤニヤした感じで、あかねさんらしくない。いや、委員長かミソラちゃんのコトを聞く時の顔なのでむしろあかねさんらしい顔と表現すべきなのだろうか。

「ああ……ええつと、実は今日、ちょっと用事があつて……」

「ルナちゃん？」

何でわかるんだよオツ！

「……ツ!!?ゴホツ、ゴホツ！」

「あらあら……大丈夫？」

「な、何でわかったの……?」

実際気になるところだと思う。あかねさんの情報源はいつたい……?」

「百合子さんから聞いたのよ」

「ええっ!? そつちからか……」

ステーション出発前に言った通り、帰還した翌日にはあかねさんに百合子さんのコトを伝えている。というか、何故か百合子さんからメアドと通話番号がメールで送られてきたので、連絡をとること自体は難しくなかった。

百合子さんに聞いたところ、料理上手の友人が欲しいわね……と言っていたのであかねさんを紹介したというわけ。通話を始めた二人はすぐに意気投合し、今日は実際に会って料理談義とやらをするらしい。百合子さんはあまり料理上手とは言えないので、あかねさんに教えてもらおうカタチになるんだろうね。

「(しかし、百合子さんから漏れるとは。いや、あの人なら嬉々として漏らしそうな気がする……)」

「そうよ〜! 百合子さんって、結構ワタシと気が合うみたいで娘共々よろしくお願いますね、なんて言われちゃったのよ。これはどういふことかしらね、スバル〜?」

凄く楽しそうだ。怖い。

「さあ……ちよつと頑張ったからね、ご褒美ってコトらしいけど……」

デート場所は例によってヤシブタウン。今度ロッポンドーヒルズとかも行ってみたいけど、何やら改装中らしくてTKタワーやら映画館やらは閉館中らしい。残念。もしかしてマテリアルウエーブ用の改修工事、なのかな？よくわからないけど。

「ふくん、ご褒美、ねえ？」

「何でそんなに怪しい目付きなの……？」

「一体誰のご褒美なのかしらねえ……」

どういふこと？

「そりゃあボクなんじゃないの？」

「どうかしらね……ウフフ！」

やはり、あかねさんは今日も大魔王であった。

ー暫くしてー

「さて、そろそろ行くか。ロック、準備は？」

「バツチリだぜ！というか、今日はオレにやることはないんじゃないか……？」

ふあああ……つと、欠伸をしながら体をほぐすロック。ロックって寝ないし、カラダは電波で出来てるはずだよね……？代謝とかよくわからないけど。

「何言ってるんだよ！ステーションの中で助けしてくれるって言ったじゃないか……」

忘れたとは言わせないぞ！

「ああ……………そういえば言ったな」

酷いよロック！

「そんな……………ボクがどれだけロックを頼りにしているか、知らないわけじゃないでしょ！？」

デートとか、したことないし……

「そうは言うがよ、オレってぶつちやけ邪魔者なんじゃないか？……………多分あのオンナ共にとつては、だがよ」

オンナ共？ああ、ハーブのことね。

「でも……………」

でも今日は、委員長だけだよ？

「まあ、どうにもなりそうになかったら助けてやるから安心しろ！多分大丈夫だぜ、多分！」

「多分を強調しないでよ……………」

なんかちよつとテキトー過ぎやしないですかね、ロックさんや。

ーヤシブタウン・忠犬バチ公像前ー

「うん、まだ時間はあるね。委員長も来てないし……」

『スバルくん!』

え、はえーよルナ。

「おはよう、委員長」

「ええおはよう……つていう時間でもないかしらね。ごめんなさい、待たせちゃったかしら……?」

今は丁度10時。約束の時間が10時30分だから、おはようと言うかは人によって分かれる時間だね。

「うん。今来たところ。まだ30分以上あるのに、もしかして委員長、結構楽しみにしてた?」

フフツツ、とからかってやると委員長の反応がない。

「………うん。たのしみにしてた……!」

俯いてボソツと言ったので、あんまり聞こえなかったけど、楽しみにしてくれたのなら嬉しいかな。

「さ、行くのか?」

委員長に向かって手を差し出す。

「………手?」

「デートなんだからさ、手くらい繋いでいこうよ。雰囲気は出るだろうし」

ー！ボフツ！

うわっ！委員長の顔が爆発した！湯気が凄いな……

「嫌ならいいけ『そんなコトはないわよ!?』……あ、そうですか……」

食いぎみ委員長。心なしか必死に見える。別にデートなんだからそれっぽいことをしようよ、位の気持ちだったんだけど。

「じゃあ……行こっか？」

「うん……」

ボクの手を握った委員長の手は、柔らかくてスベスベしていた。因みにボクは手フェチではない。断じて。

ー！103デパートー

委員長の趣味とかもよくわからないので、取り敢えず買物でも、という感じで103デパートに来たボクたち。因みに今日百合子さんがいないことは確認している。だつてあかねさんと料理談義するらしいし。

「委員長は、何か見たいものでもある？」

「そうね、それじゃありボンを少々……」

あ、そういうえば委員長つてリボンしてたんだよね。ツインドリルの印象が強すぎて忘れてたよ……

「それじゃあ、あっちの方かな」

確か103デパートに新しいバトルカードショップが出たとか何とか……気になるね。リボン選んだら行ってみるか。おい、バトルしろよ。みたいな展開にはならないだろうけど。

「あ……うん」

相変わらず、手は繋いだままだ。

ーへアアクセスサリー店ー

よ、よくわからないな。ボクはリボンなんてしたことないし。因みにボクの髪型はセツトしているワケではない。何故か重力に逆らってしまうのだ。あかねさんの遺伝だからね、仕方ない。

「……………」

一心不乱にリボンコーナーを見定める委員長。その眼差しは鷹のようだ。いや、良さげなものを見つけると顔が綻ぶので真剣なだけなんだろう。どんなリボンでもばつち



こいだ！予算はそれこそ莫大にある……！

——時間後——

「あ、これ……！」

そう言つて委員長が指で示したのは、赤いリボン。普段、というか今も着けてるリボンと同じ色だ。特にデザインというわけではなく、単に上質な素材を使っているのかとても高い。(小並感)

「今着けてるのと、あんまり変わらなくない？」

「そんなことはないわ！とつても手触りがいいし、それに今のリボン、大分古くなつてきたもの……」

ああ、そういうこと。ツインドリルにばかり目がいくものだから、リボンの状態にまでは気が回らなかつた。でも、値段が……

「委員長、値札、見た……？」

「値札……？……あつ！」

五万ゼニーとか、誰が買うんだろう……。

「ご、五万ゼニー……！今回は、諦めましょうか……」

一気にショボくれる委員長。そういうのも可愛いんだけど、中々正面切つて買うわけ

にはいけないよね。小学生が買うには高過ぎるし。

「まあまあ、そんなこともあるって。ね？」

サワサワと委員長の頭を撫でながらそう諭す。

「んっ………って、もう大丈夫よ！大丈夫！」

「そう……う？あ、そうだ。実は見たいところがあるんだけど……いい？」

デート中にバトルカードを漁るのはマナー違反だろうか。

「ええ、いいわよ。それにしても、暑いわね……」

パタパタと手を扇ぎながらそう言う委員長。顔が赤いからじゃないかな？

ーカードショップー

「おぉー！凄い！流石は大型デパート内部につくられたショップだけはあるよ！この品揃え、南国さんのBIGWAVE程偏ってない、幅広いラインナップだ！」

凄いな、ホントに！ウィルスのリザルトデータと思われるカードデータもある。どうやって補充してるんだろう。あ、対戦用のカードだ！シラハドリ、だって。流石にウラギリノススメとかギガメインとかは無いようだけど。

「カ、カードショップ……？」

委員長が呆気にとられたような顔をしている。いや、まあデート中に寄るところじゃ

ないけどさあ……

「うん！最近新しく出店したらしくて、凄く賑わいでしょ!？」

「ええ、確かに凄く賑わいね……」

休日ということもあつてか、人は多い。というか、ウイルスに対抗出来る数少ないツールだから、バトルカードを収集していてもオタク扱いされるようなことはないらしいんだよね。なんか嬉しい。

「さ、見て回ろうよ!？」

「わ、わかったわ……」

ボクの勢いに押されて遂に入店を決意した委員長。でも前に委員長からもらったナフォルダって、結構構成はしっかりしてたんだよね……

――30分後――

「へえ……結構種類があるのね、バトルカードって」

少しは興味を持つてもらえたかな？

「確か……全部で200種類位、だったかな?」

「なるほど……。ワタシはそういうこと、あまり考えたことはなかったわね……」

「エンジニアの人とかだと、ウイルスバスターングが出来るかどうかって、結構重要だか

ら拘ってる人とかは結構いるんだ。天地さんとか、まさにその典型例だったよ」

「あ、天地さんが？……フフツ、そう……」

確かに、天地さんがカードコレクターだなんて中々想像出来ないよね。フェイバリットカードも強力なものが多かったし。

「あ、そろそろお昼だね。ボク、お腹減ってきちゃったよ」

「じ、実は……」

そう言つて、肩に下げたバッグに手を入れる委員長。何だろう。

「ええっ!?お弁当作ってきた!」

「(スバルくん、声、声!)」

あ、しまった。つい慌ててしまった。しかしこれは喜んでいいことなのかな?委員長長つて確か、料理上手という属性は持つていなかったはず。まさかポイズンクッキングになったりはしない……よね?

「あ、ごめんごめん。ちよつと意外だったものだから……」

というかお弁当を入れるために肩掛けバッグを持つてきたのか。ボクなんてトランサー一丁だよ。あ、空のポーチもベルトに付けてたっけ。忘れてた。

「そ、そんなに意外だった?」

「いや、だって、料理が得意ですアピールとかしてなかったし……」

「ま、まあ練習したのよ！（まだ三日目だけどね！）」

「そうなの……？まあ委員長がわざわざ用意したと言うのなら、そつちを優先すべきだろう。」

「それじゃ、外にベンチでも探しに行こつか？」

「そ、そうね。い、行きましようか……」

いつの間にか指が絡んでいることに、ボクたちはベンチにたどり着くまで気づくことはなかった……

——ヤシブタウン・ベンチ——

「ど、どうぞ……」

「何で敬語なのさ……」

「いえ、何だか緊張しちゃって……」

まあ確かに。自分で作ったものを人に出すって、緊張するよね。楕円型の弁当箱の中身を見る限り、全体的にちよつと不恰好なのを除けば不自然なところもない。

ただ女の子が一生懸命につくったお弁当が、そこにはあった。

「そう？美味しそうだよ？それじゃ、いただきます」

「め、召し上がれ？」

委員長が言うのと、何だか少しえつちに感じるのは何故なんだろう。大人っぽいから？

「あれ？委員長の分は……？」

「あ、忘れてたわ……」

うそーん。なんか悪いんですけど……

「それじゃあ、半分こしようよ。ね？」

「……っ！そ、そうね。ししし、仕方ないもの……」

キヨドリ過ぎイ！

——十分後——

「ふう、美味しかったよ。ありがとう委員長」

意外や意外、普通に美味しかった。あれれ？おかしいなあ？（某高校生探偵感）

「そう？よかった……」

ホツとした様子の委員長。そんなにお弁当の出来が気になってたんだ。そういうものの、なのかな？

「あ、そうだ。ボク飲み物買ってくるよ。委員長は何かいい？お弁当をご馳走になったし、奢っちゃおうよ？」

今がチャンス！

「じゃ、じゃあ……何でもいいから、お茶で……」

「了解！ちよつと待つててね！」

委員長の視界から外れると、すぐさまダツシュを敢行。急げ急げ……！

――五分後――

「ハア、ハア……か、買つてきたよ！」

何とかミツシヨコンコンプリート。

「だ、大丈夫……？」

「ああ、うん。ちよつとね！」

「そう……それじゃあ、そろそろ行きましょう？」

「あ、次は映画とかどう？ヤシブタウン内には、映画館があつたはず……」

「そうね。そうしましょうか……」

この後、何故かラブロマンスを見ることになったのは、ボクが生涯考えても理解出来ないと思う。

――2時間後――

「中々良い映画だったね」

「ええ！凄かつたわ！まさかあそこでヒロインが主人公に………キヤーツ！」

テンション高いっすね。まさか、顔を赤くしてイヤイヤする委員長が見れるとは思わなかったよ。

——更に2時間後——

「スバルくん、今日は楽しかったわ！」

「それは次のお誘いってことかな？」

「っ!?え、あ、いや……その、予定が合えば……」

ま、マジにならなくても……

「ま、まあ。ボクも楽しかったし、ね。また今度来よつか?アハハ……」

「そ、そうね!アハハ……」

乾いた笑いが、忠犬バチ公像の周りに響いた。既に結構いい時間である。お子様デートなので、そろそろお開きになるのかな。

「あ、そうだ。これ、委員長に……」

ふと思ひ出し、綺麗にラッピングされた包装紙を渡す。

「これは……?」

「今日のお礼。というか委員長には結構お世話になってるし……」



「べ、別に気にしなくてもいいのよ?……その、開けても?」  
「もちろん!」

「ーペリペリペリ……」

丁寧包装紙を外していく委員長。ボクならペリペリペリ!とかになりそうなもんだ。

「こ、これは!103デパートで見た、あのリボン……!」

驚愕といった表情の委員長。流石に予想出来なかつたかな?だが、それでいい!

「フフン!実はさっきジュースを買いにいったときにだね……」

「そ、そんな、悪いわ!だってこれ、五万ゼニーもするのよ!」

委員長的にも五万ゼニーは大金らしい。良い教育をしていると思えますよ、百合子さん。

「ボクが日夜、ウィルスバステイニングに勤しんでいることを知らないね……?まあ、そこそこの収入があるってことで……」

「で、でも……!」

まだ納得がいけないといった様子だ。五万ゼニーは流石に罪悪感が湧いちゃうかな……?

「まあまあ……着けてあげるから、ね?後ろ向いてよ委員長」

「え？あ、うん……」

「ー スルスルスル……」

元々委員長の着けていたリボンを外し、新しいリボンを着けていく。委員長はソワソワしていて落ち着かない様子なので、早く結んであげなきや……

「ほら、出来たよ」

「に、似合ってる？」

結構似合ってる。色は変わらないけど、なんというかりボンの上品さが委員長の魅力を更に引き出しているというか……ああもう、何を考えているんだろう。

「うん、スツゴク似合ってる。可愛いよ」

「ー ボフツ！」

ま、また委員長か湯気を吹いた！

「あ、ありがと……」

「いえいえ、そんな……」

何だか平行線になりそうな予感がしたので、そろそろお開きとする。

「アハハ、凄く似合ってるから、家で確認してみなよ。百合子さんにも、見せてみたら？」

「そ、そうするわ……」

「うん、それじゃあ、また学校で！」

「ええ、学校で……」

こうして、委員長との1日デートは幕を下ろした。

## 59

——翌日——

委員長にリボンを送った翌日。ボクは爽やかな気持ちで目を覚ますことに成功していた。やっぱり女の子の笑顔って、人を元気にさせる何かがあるんじゃないかと思う今日この頃。

——チュンチュンチュン……

「……ふぁーあ、今日はミソラちゃんか……」

「呼んだ？」

「え」

——バサッ！

体にかけていた布団を翻し、颯爽と現れたのはミソラちゃんだ。ボクの布団の中からでなければ、とても幻想的な雰囲気になっていただろう。しかし、もう慣れっこだ。

「響ミソラ、推参！」

「ミソラちゃん、何してんの？」

「エへへ……」

ボクが冷めた<sup>覚</sup>目を向けると、ミソラちゃんは苦笑しながら頭を掻いた。そんな仕草も絵になるのは、響ミソラが響ミソラであるが故の芸当なのだろうか。

「エヘへじゃないよ、もう……」

ステーションから帰ってきた翌日に、二人を隠したままあかねさんをやり過ごすのがどれだけ大変だったと思うんだ！

「だって、久しぶりじゃない？ たまにはサブライズでもくっついて思ったんだけど……ダメだった……？」

目を潤ませて上目遣いのミソラちゃん。だから慣れっこなんだって。

「サブライズって、元々週1で潜り込んでるじゃないか……」

「それは……だってスバルくん、暖かいし。一緒に寝てギューってすると、とつても幸せになれるんだよ！」

だよ！とばかりに息荒く語ってくる。いや、知らないってば。ちよつと、ハアハアしない！

「まあ、今更か……」

はあ、と幸せが一つ抜けていく。

「フフツ、そーいうスバルくんも大好きだよ〜？」

「ハイハイ……」

ようござんすね。

「し、信じてないね……!?」

だから慣れっこなんだってば。ボクを取り乱させたくば、緩急をつけなさい、緩急を。

「ほら、ミソラちゃん。そろそろ……」

『スバル〜!朝御飯よ〜!』

「……ね?」

「はあーい。……ちえっ」

何かに邪魔されたような顔をしながら持参したと思わしき私服に着替えていくミソラちゃん。肌色が眩しいけれど、なんだかもう慣れてしまった。枯れてるのかな、ボク。

――星河家・リビンググー

リビンググに降りると、あかねさんが朝食の準備をしていた。基本的に休日は、三人分の朝食が用意されている。

「おはよう、母さん」

「おはようございませす!」

「あら、今日はミソラちゃんも居たのね。おはよう、ミソラちゃん」

「はい!」

「元気よく返事をするミソラちゃん。何かがおかしい気がする。なんだろうか。それじゃあ、いただきます……」

「いただきます……ッ！この卵焼き、スツゴク美味しいですね！」

「ウフフ、ミソラちゃんはお上手ねえ……」

ボクをそつちのけに、二人の間で会話が弾む。なんでこんなことで孤独を感じなきゃいけないんだろうか。因みに朝食中は、ボクの部屋にいるようにロックとハープに頼んでいるため、ここには地球人しかいない。地球人しかいないって、違和感が凄いな……。

「フウ、それじゃご馳走さま。美味しかったよ、母さん」

「お粗末様〜！」

「あ、食器洗うの手伝いますよ！」

「ウフフ、それじゃちよつとだけ、お願いしちやおうかしら！」

「はい！任せてくださいいね！」

ーキヤツキヤツ!!

こんな光景も既に慣れてきている。ミソラちゃんが、母性全開のあかねさんに懐くの時間は要らなかった。だって、朝起きたら既にリビングで一緒に朝御飯つくってたんだもん。唐突過ぎて開いた口が塞がらなかつたのをよく覚えている。

話を聞くに、朝起こしにきたあかねさんがベッドに眠るミソラちゃんを発見したそう

な。そして何がしかの話し合いの後、このような光景が許容されることになったのである。ボクは全く着いていけなかったよ……

——30分後——

取り敢えず日課のカード整理をした後、そういえば今日はミソラちゃんとデートだったと思ひ出す。朝起きたら既にいたから忘れていたね。仕方ないよ。

「ミソラちゃん、今日のことなんだけど……」

完全に寛いでいるミソラちゃんに向かって問いを投げ掛ける。割とボクもテキト—だ。

「ヤシブタウン！」

左様ですか……

「どこか行きたいところとか……」

「映画館！前に見たい映画があるって言ってたよね！それがいいかな……」

ああ、何か見たい映画があるとか、言ってたような気がするな。でもどんな映画を見たいかってのは教えてくれなかったんだよね、確か。

「どんな映画なの？」

「ん〜？それは……ヒ・ミ・ツ！」

超ノリノリだ。楽しそうでいいね。（棒）



こうして頻繁に家で一緒に過ごしていると、デートとか要らないんじゃないかと思っ  
てしまう。こうして、一緒に寛いでいるだけで………寛いでいるだけで、なんだろう。  
よくわからないけど、安心はする。それでいいと思うんだけどなあ。

「まだ結構早いけど、出発しちゃう？」

「んーん。まだ行かない」

？

「じゃあ、何するの………って、わわっ！」

「こうする！」

ミソラちゃんは、バトルカードを並べてその前に座っていたボクの後ろから勢いよく  
抱きついてきた。ミソラちゃんの顔が肩の上に乗っている。あつたかくて、柔らかいよ

……

「どうしたのさ、いきなり………！」

「ちよつとだけ、もうちよつとだけ………」

抱き締める力が強まる。肩や首の辺りにミソラちゃんの息が当たり、ゾクゾクツとす  
る。

「……………」

「もうちよつとだけだから………んっ……………」

「いいよ、好きただけどうぞ」

あかねさんの優しさに触れて、母恋しくでもなったのだろうか。今止めるのは、ちよつとね……

「スバルくん、スバルくん………!!」

よしよし。しようがないにやあ。

——1時間後——

「………フウ！もう大丈夫！」

「お役に立てたようでは何よりですよ、お姫様？」  
ミソラちゃん

「もう！からかわないでよお………!!」

むすーとした表情のミソラちゃんは、全身で不機嫌を表現している。何だかそつちのほうが可愛いや。

「アハハ……悪かったって！」

「ふんだ！」

「ごめん、ごめんってば………」

ありや、結構怒らせてしまったかな？

「……でも、アリガト。ワタシ、時々寂しくなっちゃう時があつて。でも、そういうときにスバルくんが居てくれると、ホントに助かる……」

しみみりした雰囲気のミソラちゃん。

ああ、もう！

「よし、出発しよう！」

「え!？」

「ほらほら、早く！ヤシブタウンは待っちゃくれないよ!？」

「ヤシブタウンは逃げないよ!？」

「いいからいいから！今日は楽しもうよ、ね?」

そう言つてミソラちゃんの手をとる。既に準備は出来ているから、後はバス停まで

行くだけだ。

「あつ、もう…………スバルくん……!」

いぎ、ヤシブタウンへ！

——ヤシブタウン——

昨日に引き続き、今日もヤシブタウンに来たけれど、相変わらず大勢の人で賑わっている。さて、目的の映画館は……

「よし、行こっか?」

「うん!」

女の子は笑顔が一番だよね、やっぱり。

——映画館——

うわつ、結構混んでるな……何か新しい映画でもやるのだろうか。ボク自身はあまり詳しくはないために、その辺の事情はよくわからない。

「それで、ミソラちゃんほどの映画が見たかったの?」

「ええつとねえ……あ!アレだよ!」

ミソラちゃんが指した方向にあったのは……昨日委員長と見た映画だった。ええ!?何でエツ!?

「何がそんなにいいんだろう……」

「あーっ!酷いよスバルくん!あの映画はねえ、とつてもロマンチックなんだって。まだ見たことないんだけど、スツゴク面白ってルナちゃんが言ってたよ!」

委員長エ……自慢したのね、ミソラちゃんに。

多分一人で見に行ったことになってるんだらうなあ……

「ソウナンダ……」

「どうしたの、スバルくん？」

止めて！そんな純粋な目で見ないで！二回目かよ……とか思ってたボクが恥ずかしいよ……

「ううん、何でもない。いいよ！見よつか、あの映画」

「それじゃあ、決まり！並ぼつか……！」

並ぶと言つても、人が多いから並ぶだけで、それもすいすい捌けていく。トランサーマジ便利。因みにロックは暇すぎてトランサーの中でぐだツとしているところを、ハーブに連れられ離脱している。この裏切り者オツ！

——2時間後——

うーん、やつぱりよくわからないよ。ラブロマンスとか、小学生には早すぎない……？

「スゴかったね！ワタシもあんな風に愛されてみたいなあ……！」

チラチラ見ながら言うのと、途端にあざとくなつちやいますよ、ミソラさん。

「ハイハイ、大好き大好き」

「むむむっ！ちよつとテキトーだよ、スバルくん！（冗談でも、ちよつと嬉しいケド）」

少しだけ頬を赤くしながら、ボクに当たるミソラちゃん。 やっぱり怒ってる？

「劇場でポップコーン食べたから、お腹もいっぱいだし、そろそろ帰らない？」

「えっ、もう？」

「後は家でのんびりしない？たまにはそういう日があってもいいんじゃないかなって。ミソラちゃんが居ると落ち着くし……どう？」

「もう、しょうがないなあっ！フフフツ……」

まあ、ヤシブタウンに二人で来るなんて、割とよくあることだからね。仕方ないね。

——星河家——

「ただいま、母さん」

「お邪魔しまーす！」

「あら、ミソラちゃん。別に遠慮とかしなくていいのよ？将来的には、スバルがお世話になるかもしれないのだし。ねえスバル？」

「どういうこと？お世話？」

「あ、あかねさんっ！ま、まだそういうのは、ワタシ……！」

何故ミソラちゃんが慌て出すんだろう。

一つだけ言えるとなれば、それはあかねさんが大魔王だと言うことだ。こんなの、誰

だつて勝てないよ。

「まあまあ、落ち着いてよミソラちゃん」

「お、落ち着いてなんていられないよっ!」

何がミソラちゃんをそこまで駆り立てるのだろうか。何か委員長と仲良くしつつも争つてゐる感あるし。女子の思考つて、ホントわかんないよ……

「あ、ミソラちゃん。夕食は食べていくのかしら?」

「いただきますっ!」

うわあーん、とボクの部屋に突撃していったミソラちゃん。リビングに残されたボクとあかねさんに、何とも言えない空気が漂つた。

「あーうん、それじゃあボクも行くから……」

「スバル」

「何?」

「しつかり、考えて選りなさいよ」

今日のあかねさんはホントよくわからない。選り?何を?ミステリアスなあかねさんとはまた、珍しいな。

「よくわからないけど、多分大丈夫だよ、母さん」

「そう……」

「それじゃあね」

「(いつか刺されないといいんだけど……)」

——自室——

自室に戻ると、既にパジャマに着替えたミソラちゃんがボクのベッドの上で突っ伏していた。いやまておかしいぞ。なんでやねん。

「ミソラちゃん？大丈夫？」

「うう……死にたい……」

思いの外堪えているようだ。全身から負のオーラを放出している。ビジライザーをかけると、ハープも困惑しているのが見える。どんだけだよ……

「もうすぐ夕御飯だけど、もう寝ちゃうの？」

「起きる……」

ノロノロと起きたミソラちゃんの顔は上気していた。委員長がよくする表情ですわわかります。

「ほらほら、元気だして。ミソラちゃんは笑ってた方が可愛いんだからさ、もつと笑顔笑顔を！」



「うん……」

ダメだこりや。結局この後は、あかねさんの超美味しい夕御飯を食べて帰ってしまつた。

因みに後日、学校にあるピアノの電脳に巣食っていたウイルスとジャミンガーどもをデリートし、キザマロとブラザーになった。酷い数の暴力で口に出すのもめんどくさい戦いだつたので、ここに結果だけ記すことにする。ブラザーが増えたよ！やったね！終わり！

## EXTRA-1

ーコダマタウン・展望台の電波ー

無事に地球へと帰還したボク達が、漸くアンドロメダ戦の疲れが取れただろうか……という頃合いになったので、ミソラちゃんとの模擬戦闘を再開することとなった。

なお、先方の強い要望により再開が早まったということ、ここに記しておく。だって、もの凄い食い気味で頼んできたんだもん。

今現在、ボクとミソラちゃんは電波体同士で向かい合う形をとっている。これは戦闘前の精神統一も兼ねていて、集中力向上による高いパフォーマンスを期待することが出来るのである。多分。

しかし改めて見ると……ハープ・ノートってアイドル要素強すぎないだろうか？ボクが全身タイツにブーツとバイザー付きヘルメットと考えると、酷い変身格差ではないかと思う。まあブランク体みたいなものだと思えば、理解は出来るけどね。理解だけは。

「……それじゃ、始めよっか？」

「りょーかいです！今度は負けないんだからねっ！」

言葉の最後が跳ねている。どうやら元氣一杯、気合い十分と言った具合らしい。こういう純粋な、組み手染みたバトルも嫌いじゃない。寧ろ好物です！

……つと、そうだ。今回はちよつと違うやり方にしようと思っていたんだっけ。

「ねえ、ミソラちゃん……ちよつといいかな？」

「なにかな？早く演ろうよ！……フフフ、今日こそはスバルくんをストリングでガチガチに縛って、あんなコトやこんなコトを……」

おっと、話を聞かないモードに入ってしまったようだ。って言うか、あんなコトやこんなコトってなんだよ。頬が上気して赤くなっているのがバイザー越しに確認出来るけれど、今の不穏な発言を聞いて興奮出来る程、ボクはその道の上級者ではない。

「今日は少し、特殊な趣向を凝らしてみようと思うんだけど、ミソラちゃんはどうかな？」

「……趣向を凝らす？」

ふう、どうにか話を聞く態勢になってくれたようだ。ただ、趣向を凝らすという響きから何かを連想したのか、とてもだらしがない顔になっているのが悲しい。一応元アイドルシンガーだったのに、墮落し過ぎだと思うのはボクだけではない……はず。

「そう。今からボクが『ハーブ・ノート』系列のカードを使ってハーブ・ノートに成りきるから、今日はその状態でバトルしてみない？つてことなんだけど。どう？」

「へえ……ミラーマッチだねー」

あ、知ってたんだ。まあ格ゲーとかじゃありません、知っていても不思議じゃないか。兎に角、興味を持ってくれたのは幸いだ。

「全く同じ能力を持つ相手とバトルすることで……」

「対策してくる相手の気持ちになれるってワケだね!」

対策の対策(？)の練習になるのだろうか。正直興味本意だから、楽しければそれでいいんだけどね。命のやり取りをするわけじゃ無いのだし。

「そうそう……で、どうかな?」

毎週のように模擬戦(と残留電波狩り)を繰り返しているので、ボクは既にハープ・ノート系列のバトルカードは全て収集を終了させている。終了と言っても、『ハープ・ノート』『ハープ・ノートEX』『ハープ・ノートSP』しかないのだけど、断続的に使えば戦闘一回分程度はもつ。

「面白そうじゃない! いいよ、ワタシは賛成!」

ハープ・ノート本人からも色好い返事を貰えたので、暫くハープ・ノート系列のカードが来るまでバトルカードを無駄撃ちすることになった。面倒だけど、手間暇かけてやる方が、遊ぶ側としても楽しいじゃない?

「……よし、OK!」

暫く周囲にネバついた雨が降った後、漸くセレクト可能なカードに『ハープ・ノート』系列が全種類現れた。

準備が完了したのを見計らい、向こうも闘気を纏って戦闘態勢に入り、ピリピリとした空気を作り出す。

「それじゃあ……いくよー！」

セレクトした『ハープ・ノートSP』を読み込み<sup>ロ</sup>込み<sup>ド</sup>すると、足元から黄色いリングのようなモノが出現して頭の天辺までを通過していき、電波体の再構成を行っていく。ロツクの頭部になっていた左腕は自由の身となり、代わりと言うべきか『ハープ・ノート』専用装備のギターが出現する。視界の端では金髪が揺れているので、既に再構成は完了しているのだろう。

「ッ………いつでもー！」

こちらを見たハープ・ノートの瞳が一瞬見開くも、直ぐに好戦的な表情へと変化させ、同時に手元のギターへと指を滑らせる。なんだか楽しくなってきたな……

「ウェーブバトル！ライドオン！」

展望台の電波に、ハープ・ノート二人分の叫び声が木霊する。周囲の電波体は何事かと注目するが、その戦闘の激しさから、数秒もせずには大多数が目を逸らしたくなったのは余談である。

「ハアッ！」

「えいッ！」

頭部の『フラットライブモニター』に収納されていたアンプを前面に召喚する。間髪入れず、同時に飛び出した音符が発射された後、ぶつかり合うことで双方ともに消滅してしまう。

基本的なスペックは同等なので、同じ技を使っても差が現れることはないというのが、メガクラスの強みだ。

「中々っ！スバルくんもやるねっ！」

ストリングを伸ばし、引っ張られる形での高速移動を続けながらそう評価してくれる。どうやらオリジナルの目に敵う程度には使いこなせているらしい。

つと、ハープ・ノートがウェーブロードに着地した。次にストリングを伸ばしても、移動にはワントempo時間が要る。畳み掛けるなら……今だっ！

「ロック！」

国民的シンガーの可愛らしい美声が、今はギターの本メインシステムとなりし相棒の名

を叫ぶ。

「おうツー……つて、今は無理だぞ！」

あ、そうだった。ロックも今はハープ扱いになっているから、ロックオンサイトを出すことも出来ないのを忘れていた。つ、使えねえ……！

「なら、コレで！」

移動用に使っていたマシンガンストリングを発射し、ハープ・ノートをがんじ絡めにせんとする。しかしハープ・ノートは慌てることなく弦を見切つて回避すると、後方にアンプを設置してその場を飛び退いた。

「……あつー！」

マシンガンストリングは着弦(?)した時に対象を縛る能力があるため、囷として呼び出したアンプへと見事に絡まってしまった。

ウゲツ、早く引き戻さないと……いや、一度切断すべきか? 因みに、一度弦を切断するとギター内部で再生するまで使用不可能になってしまう。それはつまり、機動力で大幅に遅れをとってしまうということ……

「今ツー！」

好機と見たのか、跳躍して背後へと回り込んだハープ・ノートがギターを鋭い刀へと変換して、躊躇なく斬り掛かってくる。それはまるで、雷が形を為したかのような見た

目の、どこか見覚えのある形状……って、それ『ライメイザン』じゃねーか！

「ちよつとそれ汚くない!？」

殺意の塊みたいなバトルカードじゃないか！

いや、ボクも常習犯だけどさあ!?!だって凄く便利なんだもの!しよがないでしょう!?

「問答無用っ!」

ハープ・ノートにシールド機能など無いことは本人がよく知っているため、防がれることは考えていない大振りなフォームだ。殺陣の経験でもあるのか、やけに堂に入っている。

というか、こっちは後続のカードが全て変身系統だから、実質バトルカード無しで戦ってるようなモノなんですけどオツ!?

「ッ!」

「はあああつ!」

漆黒の意思が乗り移ったようなライメイザンを、なんとか手元のギターで受け止める。専用装備らしくそれなりに頑丈な造りになっているようだ。因みに、絡まっていた弦は既に切断している。

「痛 い痛 い痛 いッ!!」



生身(?)で刀身を受けているロックの悲痛な叫び声が響くけれど、今は一体化してないので痛覚までは共有していない。しかし……鏢迫り合いなら、それは好機でもあるってコトだ!

「♪〜ツッ!♪〜ツッ!」

「これは……う……ああッ!」

適当な歌詞を歌い、パルスソングを発生させる。鏢迫り合いの状況ならば、不意討ち程度にはなるはず。歌とも言えないような酷い声だったけれど、胸についているハート型の装備『ハミングハート・トランスデューサー』(と言うらしい)によってパルス波へと変換された音波攻撃がハープ・ノートを吹き飛ばす。吹き飛ばされたハープ・ノートはすぐに立ち上がったけれど、その足取りはフラついている。目を押さえていることからして、どうやら盲目の追加効果を与えたいらしい。歌で盲目とは一体……バツハ?

「……大丈夫?」

既に切断した弦は再構成が終了している。いつでも追撃は仕掛けられるのだけど、盲目の女の子を襲撃するって絵面がちよっと、ねえ……う……ヴァルゴみたいなガチの敵なら、問答無用でハメ倒しても良心が痛むことはない(と思われる)のだけど。

「うーん……自分の声で心配されると、何だか変な違和感を感じちゃうね……」

そういうモノなのだろうか?

流石にそんな体験をしたことは無いので、何とも言い難いだけの……。今度録音して聞いてみようかな？

「……………どうする？もう止めにしようか？」

「オレは反対だぜ！……………マジで引き千切られるかと思ったからな……………」

どうやらライメイザンで斬り裂かれかけたのが、よほど堪えていたらしい。まあ、普段ならシールドも相まって一番ダメージの少ない場所であることに違いないからね。こういうのに不慣れつてのは少しわかる。

「アラ？ロックつてば、もしかして怖じ気づいたのかしら？地球を救ったというのに、随分と怖がりやさんなのね。ウフフ……………」

ここぞとばかりに、ハープがロックのコトを煽ってくる。ハープってロックのコトが好きなのか嫌いなのか、時々わからなくなることがあるんだよね……………

「ウルセーよー！」

「アラ、アナタこそワタシと全く同じ声なのだから、あんまり乱暴な口調では喋らないでほしいわね！」

互いのギターから発声された、全く同一の声色でケンカしているのを客観的に見るのは、実際ちよつとシニールだ。

「あはは……………つと、時間切れみたい」

制限時間が過ぎたようで、電波体の輪郭が曖昧になってくる。ここで同じ系列のカードを使えば連続して変身することが出来る。要はポリジューズ薬みたいなモノだ。

「フフフツ、そうだね。よし、それじゃ今日はもう止めにしようか！それにしても……自分と同じ姿をしている人と戦うのって、思ったより神経使っちゃうみたいだね……」

若干草臥れたような、弱々しい表情を見せる。電波体は心理状態に結構左右されるところがあるので、あんまりよろしくない傾向だ。

「こういうのって、現実じゃまず不可能なコトだから、あんまり影響とか考えていなかったなあ……一応、大事はとっておくべきだろうか。」

「うーん……辛いのなら、少しウチで休んでいく？今、家に誰もいないんだよね」

あかねさんは今日もパートなので、夕方まで家には誰もいないことになっている。ミソラちゃんに『母さん』ってワードは基本NGなので、詳しく説明することはないが。

「ホント!?行く行く〜っ!」

「……………」

先程の憂鬱そうな表情が嘘のように、これ以上ないと言わんばかりな満面の笑みを浮かべている。うーん、ミソラちゃんってば名演技。

「そうと決まれば！早速ウエーブアウトだよ、スバルくん!!」

「何か釈然としないような……」

まあ、どうせ口でミソラちゃん（と言うよりはハーブ）に勝てるとは思えないし、ここは大人しく従っておいたほうが良さそうだ。序でに今日の反省会でもすれば、万事OKだろう。

コダマタウンの展望台から、二筋の流星が飛び立っていく。青とピンクの電波は、連れ添ってコダマタウンの住宅街方面へと向かうようだ。

『オイ……これ、どうするんだ……!?!』

残ったのは、電波人間同士の争いによつて散々に荒らされたウエーブロードの残骸である。ウエーブロード自体は時間が経てば復活するが、周りで見物していたデンパ達の心は、決して穏やかでは無かった。

『オデタチノウエーブロードハボドボドダア!』

『オレアアイツララムツコロス!』

『ナゼミテタンデス!?!』

『ダツテ、カラダガボドボドニナルンダド?!』

怒りのあまり滑舌がおかしくなっているが、ようするに巻き込まれるのを恐れて何もしなかつた連中である。

『ミンナ、オちツくんだ!』

展望台エリアのデンパ達のまとめ役をしているデンパが、騒がしい場を納めようとす  
る。流石にまとめ役の影響力は無視出来ないのか、取り敢えずは話を聞く姿勢を見せ  
る。

『イマのサンジョウはミンナもすっかりミただろう。だが、サワいでいても、しょうがな  
いんだ!なんとかカイケツサク……いや、ヒガイをサイショウゲンにオサえるホウホウ  
を……』

『ムリですヨツ!だつてアイツラ、マジでツヨすぎるんですもん!』

『チートですよチート!』

『でも、ピンクのホウはカワイかった!』

『ワカル!』

『それはワタシもオモってました!』

ざわざわ……とまた暫く騒がしくなるが、今度のデンパ達の話は、ピンクの方ではなく青い電波人間の方に集中していた。主にその暴れっぷりであるが。

『あつ』

愚痴っていたデンパの一人が、唐突に間の抜けた声を出す。それは騒がしかった場で、嫌に響いていた。

『どうしたんだ?』

『どうにもデキないんだったら、せめてホカのデンパにもわかりやすいように、トクチョウをツタえるためのヨビナをカンガえたら、どうです?』

恐る恐るといった風に進言したデンパの言葉を、展望台にいたデンパ全員が反芻する。確かに、あの電波人間達がここだけで暴れるとは思えない。ならば危機を伝えるためと考えれば、至極妥当ではないだろうか。

『ヨシ……それじゃあミンナ、ナニかいテイアンがあつたらオシえてくれ!』

『ボウソウトツキュウ!』

『アバレンボウシヨウグン!』

『バーサーカー!』

『ヤマトケヤマトケ!ミつかったらケされるかもしれないぞ!』

再び展望台の電波世界は騒がしくなっていく。しかし、中々良い案が見つからない。

明らかに化け物じみた渾名だと、バレた時に命の保証が無い……！という共通認識が会議を難航させていた。

『じゃあ……ブルー……ライオット・ブルーというのはドウデスカ？』

それは、先程の呼び名を考えようと提案したデンパだった。

『ソレだ！』

『ビミヨウにツヨそうなナマエにカモフラージュしたな!?』

『ワタシはサンセイ！』

『ワタシも！』

『それじゃあ……ライオット・ブルーにケツテイする！みんな、アシタはイソがしいぞ！  
しっかりハツシンしよう！』

『オオツ!!』

それは、ライオット・ブルー暴 蒼の渾名がニホン中に知れ渡る、その前日譚の出来事だった。

## 真ベルセルク編・第一話『ファントム・クライシス』

1

ーFM星人との戦いから二ヶ月後ー

ーコダマタウン・公園ー

「遂に、遂にこの時が来てしまった……!」

予約から二ヶ月待ちとも言われる程の最新型携帯端末、『スターキャリアー』の梱包された箱が今、ボクの目の前にはある。

「オイ、スバル。やけに悲観的じゃねえか」

ロツクの声がする。ロツクだって、他人事ではないというのに!

「ボクがどれだけこの日を憂鬱な気持ちで待っていたか……ロツクだって知ってるでしょ?」

「まあ確かに、イヤってほどしってるぜ。最近のオマエ、魔されてたもんな。『スターキャリアー』が、スターキャリアーがこつちにやってくる……!」つてよ。中々退屈しなかつたぜ。クククツ!」

チクシヨウ!人の悪夢を娯楽にしやがって!



「酷いよロック！ロックもきつと、スターキャリアーの仕様を見たら青ざめるところか  
らね!?」

まったく、しんじらんないよ！

「フン、どうだかな。ところでよ……今のオマエ、他のヤツから見るとかなり危ないヤツ  
じゃねえか？頭抱えて段ボールの梱包を解いているヤツなんて、サテラポリスと呼ばれ  
ても不思議じゃねえぜ？クククツ！」

「グヌヌ……その余裕も、いつまで続くかな!？」

フン！今からロックが吠え面をかくのが目には浮かぶようだ！

「まあ取り敢えずその箱を開けてみるよ」

ロックの催促に従って、ゆつくりと包みを開けていく。最後の足掻きのように。うう

……嫌だなあ……!

「これがスターキャリアー……学校でも話題なんだよね。ちつとも嬉しくないけど！  
ちつとも嬉しくないけど！」

だって委員長やミソラちゃんも既に代えてるって言うし……仕方ないにしても、未だ  
かつて、これ程ワクワクしない機種変があっただろうか？いや、ない。

「スバル……」

何だよもう！哀れむな！チクシヨウ覚えてろよ！

「それで、ソイツはなんなんだ？ 強力な武器でも買ったのか？」

「それならどれだけよかったことか……」

「オイオイ……」

ホント、弱体化するためにお金を払うなんて屈辱過ぎるよ……！ どうして、どうしてフォーマツトされてしまうんだ！

「これは新型の携帯端末。いや、電波端末だっけ？ 以前着けていた『トランサー』をより発展させたモノなんだ……」

「普通に便利じゃねえか。なんだってそんな嫌々なんだ？」

よくぞ、よくぞ聞いてくれたね……！

「このこのスターキヤリアーに使われているシステムの関係上、既存のバトルカードは入力出来ないんだ。つまり、フルコンプリートしているボクのトランサーがほぼガラパゴス化したってことさ……」

しかも最近の電波技術の発展は電波世界にも影響を及ぼしている。以前の電波世界では基本的にウエーブロードの上を通っていたけど、今は普通に地面の上も通れるようになってる。その辺りの対応がトランサーでは出来ないから、かなりの不便を強いられるんだよね……

「あ、あ、あ………ああんまありだあああああ!!」

愉悦。これ以上の表現はないだろう。

「さて、説明書によると……『スターキャリアーには、最新のエア・デイスプレイが搭載されています。表示させる際は、このように叫んでください……『ブラウズ！』』」

絶望しているロツクを尻目に、スターキャリアーの新機能を試してみることにする。どうかブラウズって……わざわざ叫ばせるといふ変態仕様をどうにか出来なかったのだろうか。

ーブオーーーン！

「おお……」

ハエが飛ぶような音を出しながら目の前に現れたのが新機能、エア・デイスプレイだ。これがあるからスターキャリアーの開封は屋外が推奨されている。当たったら痛そうだもん。

「説明書によると、『エア・デイスプレイは、手で触ったり、持ち運んだりすることが出来ず』か。どれ、早速……」

へへへ。ちよつとお兄さんに触らせてなあ？大丈夫、ほんのちよつと、さきつちよだけやから。

……何やってるんだろう、ボクは。

ーガシッ！

「セアアッ！」

天空へ向けてエツ！スパークキング！

ーシユルシユルシユル……

な、投げることも出来るのか……。そして戻ってきた。ブーメラン仕様なんですな。凄いです。

「こうやって直接操作するんだね。良くできてるなあ……」

さつきからロックの返答がない。

「ロック？大丈夫？」

「真っ白に、燃え尽きたぜ……」

まあ、なんだかんだでカード集めを一番楽しんでたのがロックだし、仕方ないか。しかしここで、更なる絶望を与える！絶望には、鮮度というモノが（以下略）

「実はロック、機種変をするとボクたちのステータスも初期化されるんだよね」

「」

神は死んだ！いや、ロックが死んだ！

「さ、続きを読むよ。ええつと、『パーソナルビューを選択すると、自分の個人情報を映し出すコトが出来ます』だつてさ」

ブラウズの画面をタッチして、個人情報を映し出す。一応、一通り入力済みだ。

ーブウン！

「お、映ったよ！見てみてロック！やっぱりHPは100、アイテムの類いもフルリセットだ！ロックの装備もトランサーと連動してたから、今は初期装備かな？ここまでされると清々しいね、まったく」

「

大変！ロックが息してないよ！元々だけど。

「続きは……『パーソナルビューは自分で見ることは勿論、個人情報他人に教える際にも利用出来ませう』……つまり名刺みたいなものってことかな？」

「

ダメだ。まだ復帰してない。……もう！

「ほらロック！元気だせ！キミはボクの相棒なんですよ!」

「……………そ、そうだな。それに考えようによつちやあ、マジなバトルがまた出来るいい機会かもしれねえ」

よし、それでこそウオーロックだ！

「それじゃあ、パーソナルビュー機能を試してみようか？」

「おう、そうだな……あそこにいるオンナとか、いいんじゃないか？」

ロックが指差したのは、BIGWAVEの側でエア・ディスプレイをいじっている女

の人。勿論赤の他人だ。

そして結構美人だ。

ーゾクツ!

唐突に寒気が。なんだろうか。まあいいや。

「そうだね……すいません!」

「あら、こんにちは。どうかしたのかしら?」

結構人当たりもいい。

ーゾクツ!

なんだろう、さつきから。

「ええっと、実は……」

ー少年説明中ー

「なるほど……パーソナルビューを使うのが初めてなのね。いいわ、よろしくね」

「はい、よろしくお願ひします!」

なるべくニコニコと。初対面とはいえ、美人に嫌われるのはちよつと気が引ける。

ーゾクツ!

もういい加減にしろオツ!

「まずは私のパーソナルビューを見てね。頭上に表示されてるでしょ?特に顔の画像が

傲慢なの！」

唐突な自分語りが始まったぞ……意外と地雷だったのかもしれないね……

「確かに、お姉さん結構美人ですからね」

「あら、お上手ね。実はここだけの話、このパーソナルビューで何人もの男をメロメロにしてきたんだから！」

す、凄い……！まさに奇跡の一枚ってヤツなんだね。元も良いけど。

ーチクツ！

痛ッ！なんか首筋に針でも刺さったような……いや、特に刺したような跡はない。気のせいか……？

「ウッフ、冗談よ。じゃ、キミのパーソナルビューも見せてね！……スバル君か、ちゃんと覚えておくわね」

「わあ、嬉しいですね！こんな美人のお姉さんに顔を覚えてもらえるなんて！」

「ちよ、ちよつとスバル君？」

「冗談ですよ、冗談」

お姉さんの顔が引きつったような気がした。多分気のせいだろう。

「ま、まあ。こんな感じでお互いのコトを知り合うの。あつ、それから……自分のパーソナルビューを頭上に表示し続けることも出来るわよ！ただし、個人情報バラ撒きに近

いから、あんまりオススメは出来ないわね」

「なるほど……ありがとうございました！」

「ええ、それじゃ……良い出会いを！」

ホントに良いお姉さんだったな……

「なあスバル。さつきからずつと気になつていたんだが……空に浮いてる、あの妙な物体はなんだ？」

ああ、そういうえいば何か浮いてるな……あ、ゴーストクライシス。ということは今日が2のスタートか。

以前、倉庫でベルセルクを確認しているから、ベルセルクルートで間違いないのはわかっているんだけど……

「あれはコマージュナルシツプだよ」

空に浮いている、黄色い消しゴムにプロペラを着けたような機体について説明する。

「何だそれは？新しい兵器か？」

ロツクは鋭いな……

「コマージュナルシツプの役割は『宣伝』なんだけど、ロツクの言う通り情報兵器としては役に立つかも……まあ、ありえないけどね」

むしろそのまま敵地で落とした方が強いまである。マテリアルウェーブじゃないし。



「ふーん、宣伝ねえ……」

「ほら、ああして宣伝したい内容をエア・ディスプレイとして映すのさ。上空なら、色んな人が見れるでしょ？今は……『ホラー映画の傑作、その名もゴーストクライシス！ただいま大ヒット上映中！』だつてさ。オバケの映画……結構面白そうじゃない？」

何せゴーストクライシス危機だからね。というか、某幽霊退治屋のパクリでは……？いや、今さらか。

「ウィルスバスターの方が楽しくねえか？早くフォーマットされたライブラリを埋めたいもんだぜ」

ロックがカードコレクターになっていた件について。

「まあまあ……」

「つて、オイ。何かおかしくないか？あのコマージュルシツプ……」

そりや元々おかしいつて。あんな危なそうなモノを住宅街に浮かべるとか、正気の沙汰じゃないよ。

「確かに、動きがフラフラしてるね……」

ーバチバチバチ!!

うわっ、バチバチいつてる……一応離れておこうかな。

「オイオイ、滅茶苦茶動いてるぞ?！」

パーフェクトジョングも真っ青な高機動っぷりを見せてつけるコマージュアルシップ。いや、普通に制御不能なだけなんだけどね。

「あ、止まった」

止まったというか……

「落ちて来るぞー！」

しかし既に範囲外に出ていたので、慌てることなくバックステップ。決まった。

ーードオーーーン!!

やっぱり大質量じゃないか！こんなもん飛ばしたら苦情が来るに決まってる！

「危ない危ない……」

「元々範囲外だったじゃねえか」

塩！

「こういうときは、余裕感を出すのがだね……」

ーざわ……ざわ……

野次馬か。

「オイ、オレたちも、もつと近くで観察しようぜ。さっきの動きからして、何かいるかもしれねえしな？」

ニヤリと笑うロツク。いいねえ、楽しくなってきた!

「……コマーシャルシツプから音声が入こえてくるね。『ホラー映画の傑作、その名もゴーストクライシス! たいまだ大ヒット上映中!』だってさ!」

「さつき聞いたな、ソレ」

確かに。このまま待てばいいのだろうか。

ーギギギ〜イ……ホラー映画の傑作……ギギギ〜イ……その名も……ゴースト……ギギギ〜イ……クライシス……ギギギ〜イ……ただいま……ギギギ〜イ……大ヒット……ギギギ〜イ……じょうえい……ギギイ……ギギギ〜イ……ギギギ〜イ……

が、頑張れ! あとは『中』だけだぞ! 最後まで諦めるな、コマーシャルシツプウウツ!

ギギギギ〜イイイ!!!

ギギギギ〜イイイ!!!

ギギギギ〜イイイ!!!

こ、これは……キツイ!

『こ、この騒音はまるで……!』

『ガラスを引つ掻くような……! 発泡スチロールを擦るような……!!』

『や、やめてくれ〜!!』

野次馬たちにとつてもキツいらしい。喋ってる暇があつたら行つちやえよ!と思つたボクは悪くない。

『うわあ〜〜つ!!』

あ、逃げた。だけど……これぞ!

ギギギギ〜〜〜イイイ!!!

ギギギギ〜〜〜イイイ!!!

ギギギギ〜〜〜イイイ!!!

「しつかし、これは結構、キツい!」

「スバル!もうわかつてるな!」

ああ!元々わかつてる!

「ウイルス、でしよツ!?ビジライザーをツ!」

カチャツとかけると、コマージュルシツプの周りをウイルスが取り囲んでいるのが確認出来た。こんなの、FM星人よりタチが悪いぞ!

「コマージュルシツプが落つこちてきたのも、この騒音も、全部ウイルスのせいだ!バトル、バトルの時間といこうぜエツ!」

ヤバイ。ロックがこの縛りプレイに快感を覚え始めている。こんなのは縛りじゃな

い！踊らされているんだ！メーカーに！露骨に環境テーマを禁止制限しやがって……  
！って、何の話をしているんだらう。

今じゃベルセルクも使えない。天地さんにでも、データを移動させて貰わないと……  
！

「オツケエツ！蹴散らすよ、ロック！」

「それでこそだ！」

よし、方針は決まった！まずはウエーブホールを……えつと、確か……あつた！ラツ  
キー、ウチの庭の側だ。人目に着きにくくなっている。もう、展望台までわざわざ行か  
なくてもいいんだ！やった、やったぞ……！！

「それじゃウエーブインだ！」

「おう！」

全力疾走タイムだ！

「……よし、いくよ！」

「さあ、やっちまうぜ！」

電波変換！星河スバル、オン・エア！

——コダマタウンの電波——

おお……！凄い、地面の上にウェーブインしたのは初めてだ！確か、トランサーを使つてた時の電波世界は、地面の上を移動すると通信速度が落ちるとか何とかで、かなりの行動制限がかかつてたんだよね。ボクも最近までは……つと、そう考えると機種変も悪くなかつたのかも。

「地面の上でも、以前のようにスイスイ動けるようになるとはな……電波技術の発展もバカにならないぜ」

「確か、ここ最近からなんだよ。大幅なバージョンアップがあつたとかで、ウェーブロードのつくりごと変わっちゃつたんだよね。でもトランサーを使つてたボクたちはその恩恵に預かれないから、苦しい思いをしてたつてワケなんだ」

ホントに酷いと思う。何で三年も使つてたトランサーをすぐにスクラップ扱いに出来るんだ!?      ダイゴさんの時代から使つてたつていうのに……やつてらんないよ。

「なるほどな……だが地面の上か。上等だ、コイツは戦術が広がる予感がするぜ！」

ロツクの目がキラキラしてる。確かに三次元的な機動のしにくいウェーブロード上では、ウォーロツクアタックの性能を完全に活かしきれているとは言いづらかつたもんね。このバージョンアップされた電波世界なら、アクロバットな戦闘も可能かもしれない。楽しみだ。

三角跳びとかしてみたいし。あと壁キックも。

「ああ、それと……ウエーブロードの大部分を、上空……空の上に移動させたんだよね。それで電波の通信距離も飛躍的に向上したとか……」

スカイウエーブのことなんだけどね。

「へえ、オマエ意外と物知りなんだな……」

あのねえ……

「戦場の理解は命に繋がるんだよ？それに、最近はおツクだつて不便な思いをしてたじゃないか」

FM星人のおツクらしくない反応なんだよね。どうしたんだろう。ここ2ヶ月で色んな電波で荒らし回ったからかなあ？

確か一時期ライオット・ブルー暴蒼とか呼ばれてたような気も……いや、多分気のせいだろう。気の

せいだよ。多分。

「グヌヌ……いや、悪い。ちよつと無関心過ぎたな、すまねえ」

「おツク、水くさいことはナシだよ！相棒なんだから、さ？」

今更そんなことで一々、目くじらたてたりはしない。煽りには全力で応えるけどね！

「へへッ……おうよー！」

「よーし、それじゃ行きますかア！」

とつととデリートしちゃおう！どうせ雑魚しかいないし。新フォルダの肩慣らしに

丁度いい……かもね！



ーコダマタウンの電波ー

スタタタツと素早くコマージュナルシッブが落ちた場所まで移動する。既に電波化しているのでウィルスは可視状態なのだけど、地面の上に立っているウィルスと戦うつてのはどこか、不思議な気分させる。違和感なのだろうか。

「よおーし！新生ロックマンの初バトルとこうか！ロック、準備は？」

「いくぜー！」

気分は最高潮！いいね……この感じ！トランサーの時とは、感覚が微妙に違う……と  
いうかパワーアップしている？端末がバージョンアップされると、電波体にも影響が出るのか。いや、道理だね。

「ファーストバトル！ライドオン！」

「オマエがファーストバトルって言うのは、チョット違和感があるよな……クククツ」

ま、割と最近までバトル漬けだったからねえ。今更言ったら、ちよつと滑稽だったかな？

「ほら、来るよロック！」

「おうよー！」

改めて……ウエーブバトル、ライドオン！

「(さて、初期フォルダの中身は……)」

スターキャリアーには、購入した時点で初期フォルダが搭載されている。これはサービスのようなもので、比較的入手しやすいものが入っている傾向だろうか。

見た感じだと……ワイドソードが二枚来ているので、中近距離戦闘用の安価カード群といったところかな。ワイドソードとか、懐かしいなあ！でも初期フォルダにワイドソードみたいな近接系を入れるのは、サービスとしては酷いと思う。大部分の人間は遠距離系のカードじゃないと攻撃出来ないんだから。

「よし……セレクト完了。いくよー！」

敵はメットリオが7体。数は多いけど、基本は雑魚の群れなのであんまり脅威だとは感じない。精々死角から攻撃されないように、って警戒するくらいかな？

「ロックー！」

「おうー！」

ウオーロックアタックの後押しを受け、一足跳びにメットリオの群れへ接近する。やはり反応が遅い！

「セアッー！」

！  
ワイドソードを横一文字に振り、2体のメットリオを同時にデリートする。あと5体

「次！」

展開時間の限界が迫っているワイドソードの刀身を飛ばし、メットリオに突き刺す。  
あと4体。

「ワイドソード！」

メットリオたちがピッケルを振り上げ、地面に叩きつける前にウオーロックアタックで接近し、再び展開したワイドソードで2体のメットリオを葬る。そして……

「うおおおっ！」

残りのメットリオを……斬ッ！

「……よし、終わり。どうだった？」

勿論バトルの感触だ。こういう確認って、結構大事なんだよね。感覚がズレてると、ウオーロックアタックの精度にも響くし。

「悪くはねえな。スターキャリアーの影響か……？」

だろうね。ウオーロックアタックも、かなりスムーズに動けた気がする。

「かもね」

「まあいい。兎に角、これで騒音は止まったはずだぜ。早いところウエーブアウトしちま

おう」

はぁーい……

ーコダマタウンー

電波変換を解いたボクたちは、再びコマールシヤルシップを調べていた。調べるといつでも、騒音の有無くらいだけだ。

「よし、騒音は収まったね」

「コイツの寿命も来ちまったみたいだがな」

確かに。ウンともスンとも言わない。ヤバツ、弁償とかないよね……？い、いや、ビジブルゾーンじゃないんだ。見られるということはない、ハズ。

『アラ……奇遇ね！』

あ、委員長。昨日ぶり。ゴン太とキザマロもいる。

「こんにちは、スバルくん。ご機嫌いかが？」

「清々しいくらいにいい気分さ」

「?……どういうコト？」

あれ、わからないか。

「さつき、コマーシャルシップが落ちて来たでしょ？」

というか、すぐそこにあるんだだけ。

「そうだぜスバル。それでさつきから委員長はご機嫌ナナメなんだ」

あれ？あんまりそうは見えないけど……

「でも今の委員長、結構機嫌良いように見えるけど……」

「それはですね……この騒音の原因を確認しに来てみたら、なんとスバルくんがいるじゃないですか！……そんなワケで、委員長は機嫌が良くなつたんですよ」

「？……キザマロ、どういうこと？」

「フフフ……いいですか？委員長はスバルくんに会えてうー『キザマロ！』ツハイツ！」  
???全く話の流れがわからない。別に昨日も会ったじゃないか。別段、不思議なことでも

もないよね？

「よくわからないけど、ボクは委員長と会えて嬉しいよ。だからキザマロに当たるのは……」

「……ツ！わ、悪かつたわねキザマロ！」

顔を真っ赤にしてキザマロにキレながら謝る委員長。まあ、人前で指摘されると恥ずかしくなるからね。仕方ないね。

「それで、騒音が酷かったからそのコマージュルシップをビジュライザーで覗いてみたんだ。そうしたらウィルスがいてさ、電波変換してみたんだけど……」

「コマージュルシップかあ……オレはてっきりデカイ卵焼きかと……」

さすゴン。安定のクオリティで少し安心する。取り敢えず、コマージュルシップは食えないからね。

「た、卵焼きが空を飛ぶわけないじゃないですか!」

「ええ?!じゃ、じゃあ……ロックマン様になったの!?!」

え、あ、はいそうです。

「うん。そのロックマン様になって原因のウィルスをデリートしたんだけどさ、新しい端末になったからか電波体の調子も最高に良かったんだよ!」

「おお!じゃあスバルがああ騒音を止めてくれたのか!助かったぜ……」

「委員長がピアノのお稽古中だったそうで、ああ騒音に折角ノっていた気分を台無しにされたんですよ」

あー、そういうえばそうだったか。それでピアノのお稽古中だったのに、ゴン太たちが動員されたってことなのか。苦労してるなあ……

「そう……流石はロックマン様ね。ま、まあ?アナタも少しは頑張ったんじゃないかしら?」

「委員長、顔赤いままですよ」

ここでキザマロの的確な突っ込みが委員長に突き刺さる。もうオーバーヒートしそうだ。

「ワ、ワタシは……スバルくんに……いえ、ロックマン様が……あ、でもどつちもスバルくんで……」

何か葛藤があつた後、耳まで真っ赤にして俯いてしまった。両手で赤い顔を覆い、アワアワしている。

「あ、そうだ。ゴン太、キザマロ」

「何だ？」

「何ですか？」

「今度さ、新しいゲームセンターが出来るらしいんだ。一緒に行かない？」

たまには、男だけで遊びたい時もある。うん。

それに二人ともブラザーだし。今はフォーマットされてるけど。

「おつ、いいなそれ！パンチングマシンなら、まかせろよ？」

「フフフ……クイズゲームでボクに勝てると思わないことですね……！」

よし、二人とも好感触。

「じゃ、そういうことで……」

そろそろ委員長も落ち着いたかな？

「ほら委員長、落ち着いて……」

「……え、ええ。もう大丈夫よ」

『あー!!』

つ！何だ!?!向こうから来る二人組……あ、関係者か。

「こ、こんなトコロに落ちたのか!!これじゃあホントに費用の無駄遣いだよ……。弱つたぞお、ああ、弱つたぞお……費用が……費用が……」

何か責任者の物悲しさを感じる……大変なんだね、管理者つて。

「弱つたぞつて……なんか、困ってるみたいですけど……」

キザマロも困惑しているようだ。

「そうね……ちよつと話を聞いてみましょうか」

「おお！流石！委員長は委員長の鏡だけぜ！」

ゴン太の賛辞にドヤ顔で応えると、早速事情を聞き始める委員長。中々出来ることじゃないよ。

「失礼ですが、どうかいたしましたか？」

委員長の外向き？の言葉遣いを聞くのは久しぶりだ。まあ、見知らぬ大人だし仕方な



いか。

「費用が……費用が問題なんだ！」

「費用ですか……あの、詳しく聞かせていただいても？」

完全にデキる女の雰囲気醸し出す委員長。うつすらと百合子さんに重なるのは気のせいか、否か……

「私の肩書きは映画プロデューサー。映画の宣伝のため、このコマーシャルシップを飛ばしたんだ。なのにコマーシャルシップがこの有り様で……」

「なるほど……私は機械に関しては素人なのですが、このコマーシャルシップをもう一度、空に浮かべることは出来ないのですか？」

しかし委員長がいると話がサクサク進んでやり易くて仕方ない。助かるなあ……

「不時着の衝撃でプロペラが外れてしまったらしいんだ。どこかに落ちているとは思うのだが、見つからないのだよ。ああ、費用が……費用があ……！」

これは酷い。

「プロペラ、ですか……ゴン太、キザマロ、スバルくん。手分けして探してみましようか？」

衝撃で外れたのなら、既に破損しているような気がするの、ボクだけだろうか。

「りようかいだぜ！」

「ボクも探してみますよ!」

「よし、それじゃ、見つかったら連絡するってことで。ボクはあっちの方を探してみよう」

「お願いね、スバルくん」

「はい。どうか何処にあるかはわかってるんだけどね。確か……」

「――五分後――」

委員長が住んでいるマンションの屋上、その端に引つ掛かっている件のプロペラを発見した。

「……あつたよ、ロック」

「ああ、だが高過ぎるな……スバル、ビジュライザーだ」

「了解……お、屋根にウエーブロードが続いてるね」

「取り敢えず委員長たちに連絡しておくか……」

「――五分後――」

「それじゃ、取り敢えず電波変換して回収するから、委員長達はコマースャルシップのところに戻っててもらっていい?」

『わかったわ。……すぐに来るのよ!?!』

何故そこを強調するのだろうか。

「わかってるって。それじゃ……」

「ーガチャッ！」

「さ、とつとと回収しますか……」

「ロツク？」

「オツケーだぜ！」

電波変換！ 星河スバル、オン・エア！

ーコダマタウンの電波ー

地面の上から繋がっているウエーブロードを伝い、どうにか高級マンションまでたどり着いたボクたち。ウィルスは現れたけれど、メツトリオじゃあ足りないような気がする。いや、カードトレーダーの残弾くらいにはなるか。

「よし、これがプロペラだね」

「そんなじゃ、とつととウエーブアウトしようぜ。そんなデカブツを抱えたままじゃあ、万が一ってこともあるからな」

確かに。モンハンで運搬クエでもやってるような気分だ。まあ、ウエーブアウトっていう個数無限のモドリ玉を持っているようなものなんだけど。

「了解！……ウエーブアウト！」

ーバシユッ!

そういえば、思いつきりに物に触れたまま飛んでいるんだけど、周りにはどう見えてい  
るんだろうか。

プロペラが高速で空を飛んでる、とか? シュールだね。多分電波体が触ってる間は見  
えなくなるのか、そんなところだと思っただけ……

ーコダメタウンー

「こうしている間にも、費用が……費用があー!」

こんな醜態を見せ続ける方が映画の宣伝としては良くないと思うんだけどな。

「委員長! 取ってきたよ!」

「よくやったわ! 流石はワタシのスバルくんよ!」

……ワタシの? まあ、深く考えてはいけない気がする。

「それじゃ、このおじさんに、渡すね) あの、すいません」

プロペラをチラつかせながら、頭を抱えるおじさん……費用 減作さんに話しかけ  
る。改めて見ると、かなり個性的な名前だよね……

「おおーこれはもはや……!」

「コマーシャルシッポのプロペラですね」

口数の少なそうなエンジニアさんが確証をとる。

助かった。わかっていたとはいえ、違うプロペラとかだったらお手上げだったよ。

「おい、キミー！急いでコマージュルシップを直してくれたまえ！」

費用さんがエンジニアさんを急かすようにする。時は金なり、つてことなのかな？この人の場合。

——数十分後——

コマージュルシップはエンジニアさんの手によつて修理され、またコダマタウンの上空で宣伝活動に精を出していた。

「おおー直った直った!!」

凄じ喜びようだ。費用費用言つてさえいなければ、この人も結構いい人なのかもしれない。

『ゴースト・クライシス』はね、プロモーションにかなり費用をかけているんだ。それが無駄にならなくて済んだよ、ありがとう。プロデューサーとして何か、お礼をしなくてはいけないな、これは」

気前いいよね。

「いえ、お気持ちだけで結構ですよ」

委員長が代表して言うところだけど、流石に委員長が断ると何様、みたいになつてしまふのでボクが答える。

「いやいや、キミのお陰で費用が無駄にならずに済んだんだ。受け取ってくれたまえ」

そう言つて差し出してきたのは『ゴースト・クライシス』のチケットだ。へえ、チケットのデザインも結構凝っている。こりやあ本当に面白いかもしれないね。

「これは『ゴースト・クライシス』のチケットだ。この映画はね、最新技術で描かれたりアルなオバケたちが見所なのさ。お友達も誘つて、是非来てくれると嬉しいよ」

最新技術で描かれたオバケ……！こ、今度一人で見に行つてみようかな……

「ありがとうございます」

「それじゃあ、私たちはこれで……」

満足そうにしながら、費用さんはエンジンニアさんを連れて行つてしまった。

「行っちゃったね。チケット貰ったけど、どうする？」

ほら、と三人にチケットを見せる。

「へえ……」

「場所は……TKシティにあるロッポンドーヒルズですね」

ロッポンドーヒルズ、六本土ヒルズ……いや、何も言うまい。

「ああ、結構な大都会だったよね、確か」

「アナタ行つたことないの？」

「人が多すぎるところに一人で行くのははちよつとね……」

「というか、人目が多すぎてロクに電波変換できる場所もないのがいけないと思う。」

「!じゃ、じゃあ……今度二人で……」

「その前にさ、このチケットのコトなんだけど……」

「……………そ、そうね。チケットもあることだし……決めたわ!明日にでも、皆で行きましようよ! ロッポンドーヒルズに!」

「いいね。賛成だよ。噂のロリコンとやらのチカラ、篤と見せてもらおうじゃないの!」

「それじゃあ、ロッポンドーヒルズで美味しいもんたらふく食べようぜ!」

「賛成!」

「だろ!?!」

「そうだそうだ!」

「ゴン太くん、目的は映画ですよ……って、スバル君もですか……」

「だって、気になるじゃない?」

「おっ、そうだったな」

「テヘツ!」

「それじゃ、映画館でポップコーンを山程食べてやる!」

「あ、ボクはハーフ&ハーフがいいな! キヤラメルと塩のヤツでさ……」

「何! オマエ結構わかってるな……! じゃあオレは、ハーフ&ハーフの最大サイズだ!」

それは流石に無理だよ……

「ボ、ボクはキャラメルオンリー派です！」

キザマロって、結構甘党だったのか。なら今度、パフェの美味しい店でも紹介してあげようかな。

「アナタたち、仲良いわねえ……」

呆れたような顔でボクたちを見る委員長。ポップコーンの味とか、拘らないタイプなのだろうか。

「まあいいわ……兎に角、明日はバス停前に集合！集合時間は時刻表を調べて後で送るから。いいわね？」

「うん、それじゃまた明日！」

「あ……一人でロツポンドーヒルズ……」

背後で委員長が何か言ったような気がするけど、小さい声だったし、多分どうでもいいことなんだろう。何にせよ、明日はファントム・ブラック戦だ。

寝る前には暖かいミルクを飲んで、20分ほど体を解してからベットに入らないと。そうすればほとんど朝まで熟睡さ。



——星河家——

家に帰ると、ノイズがザーザー流れているテレビの前で途方に暮れるあかねさんの姿があった。ウィルスでも潜んでいるんだっけ？

「困ったわねえ……」

「ただいま、母さん」

ボクの声に漸く気づき、こちらに振り向くあかねさん。

「あら、おかえりなさいスバル」

どことなく元気がないように見える。日常の不幸に、なんとなくため息を吐きたくなるときつてあるよね。

「このテレビ……」

「ええ、どうも映りが悪いみたいで……どうしても見たい番組があるのに……」

ああ、確かダイゴさん関係の番組だったような気がするような。……どうにもはつきりしないなあ。

「そうなんだ……」

「スバルの方が母さんより機械には詳しいでしょう？原因は、わからない？」

そう言われても、所詮は趣味レベルだったスバル君の知識では画面が酷く乱れている、程度にしか判断できない。とすると、多分……

「ええつと、多分このテレビ、電波の受信状況が悪いんじゃないかな？……直らなかつたら、ボクの部屋にあるテレビで見たらいいと思うよ」

ボクの部屋にもリビングのテレビ程の大きさではないけれど、視聴するのに不便は感じない位の大きさのものはある。まあ、直すんだけども。

「オイ、スバル。どうするんだ？」

「そりゃあ、一応調べてみるけど……」

「(どうせウイルスだろ？早くやっちまおうぜ！)」

血気盛んだね……

まあ、人のコトは言えないんだけど。

「(だね。いくつか新しいバトルカードも手に入ったコトだし、試し撃ちくらいにはなるかもよ?)」

あ、思い出した。これ、デンパくんが眠ってるヤツだ。つてことは、バトル無し。……ちえつ。

「(スバルも言うようになったモンだぜ。確かに今更ウイルスじゃなあ……せめてFM

星人クラスの敵でもいりやあな)」

さっきのバトルも終始圧倒してたからね。ロックとしてももつところ、熱い戦いがしたんだろう。

ああ、最後にFM星人の残留電波とやったのはいつのコトだったか……

「スバル、何をブツブツ言ってるの？」

首を傾げながら聞いてくるあかねさん。どうやら話しすぎたようだ。

「何でもないよ。あ、ボクちよつと用事を思い出しちゃった。外行ってくるね……」

「夕御飯までには帰ってきなさいよ〜！」

「はぁーいー！」

ーガチャツ！

ー星河家の電波ー

取り敢えずテレビの電脳を調べようと思い、電波変換してウチに戻ってきたボクたちはウエーブインしようとしていた。

「そーいえば、電脳にウエーブインするのも久しぶりだね。なんだか様式が変わってる。」

具体的には、以前のように小さなウエーブホールといった体ではなく、テレビから流れた電波が上空に向かって伸びているって感じだ。

「ああ、これはテレビが受信している電波の集まりだな。今は天井があるから見えないが、外に出れば上の方に伸びている電波が確認出来たはずだぜ」

そういうえば何か伸びてたね。割と当たり前過ぎて忘れてたけど。

「なるほど……ああ、ウエーブロードを遙か上空に移したとか、その影響なんだったわけ？」

「まあ、取り敢えずウエーブインしてみようぜ」

「オツケー！それじゃ……昇っていく電波に乗るようにして……トオツ！」

「ブフツ！そんな気合い入れなくても大丈夫だぜ？」

「あつ！笑ったなあ!?もう……ちえつ」

ともかく、この電波の流れに乗れば映りの悪い原因まで直ぐつてことだ。それだけ分かれば十分さ。

「んじゃ、行くよ……セイツ！」

「だ、だからそういうの要らねえって……クククツ！」

あ、しまった……

ーチユイン！

ヒヤッホオオオツ!!グングン昇つてくぞー!ステーションに飛んだ時のコトを思い出

すね。これはクセになりそうだ！

ーテレビの電脳ー

ーチューイン！

「イヤッホオオオ……つて、もう着いちやったのか」

「ギャッハッハッハッハ!! オマエ、ホント最高だぜ!!」

何故が大爆笑しているロック。何かツボるとこあったかな？

「ハイハイ、落ち着いて。さて、ここがテレビの電脳か……」

凄いな。ウエーブロードの巨大なパネル一枚つて感じの構造だ。変に枝分かれしてなくていい。それに……

「スゴいよロック！雲が、真下にある……!」

何で今まで来なかつたんだろう。あ、違う。凄く来づらかつたんだよね。電脳の入りの多くがウエーブロードから外れた場所に配置されるようになったから、トランサー組のボクたちには敷居が高かつたんだ……

「ステーションの件で散々見たろうに……ま、兎に角だ！テレビに向かって送られてくる電波は数多くある。そいつが集約した場所つてのがココだ」

「へえつて、ロック知つてたの？」

知ってる割には、あんまり事情とかには興味ないみたいだったけど……どういうこと？

「いや、知識としては無いが夜中の暇な時とかに、この家にある電子機器の電腦に忍び込んだり……したりしてるウチに気づいたんだよ」

ええっ！聞いてないんだけど……

「そういうこと。まあ、ロックならいいんだけどさ。それにしても、やっぱり高いよねえ……」

スカイウエーブもこのくらいだっけ？

「ま、電波つてのは大概が宙に浮いてるもんだからな。ほれ、さっさと調べちまおうぜ。明日は早いんだろ？」

ああ、そうだった。委員長との約束に、遅刻はヤバイ。前に遅れた時は大変だったのもね……不機嫌なら手なんて繋がなきやいいのに。不思議なコトをするよね、委員長も。

「そうそう、早く寝てしまわないと……」

よし、原因のデンプくんを探さなきや。それにしても、結構広いな……

……あ、いた。完全にイビキまでかいてるぞ！

「グ〜グ〜」

「ねえ、キミ」

「グ〜グ〜」

「起きろオツ！」

うわあつ！急に叫ばないでよロツク！

「ギャアツ!!……………つて……………」

「……………」

「ネ、ネ、ネてません！ケっしてネてませんヨ！」

あれ？以前より聞き取り易くなってる。これもバージョンアップの影響、なのかな？

「……………ねえキミ、もしかして」

「エエ！ワタシはテレビのデンパです！テレビにウツし出される映像はこのワタシがハコんでいるのですよ！エツヘン！」

偉そうなデンパだなあ……………

「実は、さつきからウチのテレビの映りが悪いみたいなんだけど……………」

「ギクツ！」

分かりやすつ！今時ギクツ！なんて言う人……………いやデンパ、初めて見たよ……………

「で？まさかオマエの居眠りのせいじゃないだろうな？こっちはウィルスだと思ってるんだ。原因は、取り除かなきゃなあ……………」

なんて言つて、勝手にロックバスターのチャージを始めるロック。流星に怖いっての！

「ウ、ウ、ウウウ…………ワタシ…………『TKタワー』という場所から送信されてきました。かなりの距離を移動してきたのです。おかげでヘトヘトに…………だから…………その…………」

「(ちよつとロック！脅し過ぎだつて！)」

「(アン？いや、オマエがいつも見てる番組の真似をただけだぜ?)」

それ『re：危ない暴れん坊ウルトラ大將軍』じゃないか！いや、まさか……………すいません確かに言つてました。もう見るの止めようかな……………

「ようするに、オマエの居眠りのせいなんだろう!?アア!?」

「よく見たら…………貴方たち、もしかして暴ライオット・ブルー蒼?……………ヒエエツ！すいま

せん！今すぐ正常になりますから命だけはあつ！」

一体どんな認識になつてるんだ!?

「オレたちも有名になつたモンだな」

何呑気なこと言つてるのさ!?うわああ……………暴れすぎたか……………!?

「どう見ても歓迎出来る知られ方じゃないでしょ!?!」



「いいんだよ、別に。有名になればもつといろんなヤツと戦える。オマエだって悪くないだろ?」

おかしい。ロックの言っていることは明らかにおかしいのに、賛成しそうなボクがいる。ボクがおかしいのか、ロックがおかしいのかわからなくなってきたな……

「ま、まあ兎に角、これでテレビの映りは良くなっただろうし。一旦戻って確認してみようよ」

「だな。……オイ、オマエ。次居眠りしたら……」

「居眠りシタラ……?」

ニヤリと笑って再びロックバスターのチャージを開始するロック。拳銃のトリガー扱いするのは止めた方がいいと思うんだけど。

「ヒエエツ!」

効果は抜群だ。ちよつと可哀想だけど。

「よし、行こうぜ」

「う、うん……」

ウエーブアウト……

——星河家——

一仕事終えてリビングに戻ると電源の入っていないテレビが見えた。もしかして、直らなかったのだろうか？あのビビり方なら心配ないと思うんだけど……

「あらスバル、随分早かったのね」

「あはは……ホントにちよつとした用事だったからね。それより、テレビは直った？」

「ああ、そうなの！テレビ、突然直ったのよ。何が原因だったのかしらね」

あ、直ったから消していたのか。考えれば普通のことだったね。まだその番組の放送時間ではなかったみたいだし。

「不思議なこともあるんだね」

「フフツ、そうね。何にしてもよかったわ。どうしても見逃したくない番組があったの

よ」

やっぱりそうか。

——2時間後——

「もうすぐ始まるわ」

夕食の後、あかねさんが観たいと言っていた番組を観ることになった。確かドキュメンタリーを謳っていたはず。面白そうではある。

——ピッ！

『……さあ、今週も始まりました「ドキュメンタリー220X」、今週取り上げるのは宇宙ステーション「絆」号です……』

やはりこの番組だったか。

「母さん、『絆』って……」

「そう、『絆』号は貴方のお父さんが乗っていた宇宙ステーション……これはそのドキュメンタリー番組よ」

そう言うあかねさんは、何だか寂しそうに見える。早くメテオG来ないかなあ……

『「絆」号は、地球外生命体との交流という人類の夢を乗せて打ち上げられました。しかし夢半ばにして原因不明の事故に遭遇……未だにその行方はわかっていません。当番組では……』

——数十分後——

『残念ながら……現在の科学力では、「絆」号を見つけ出すことは不可能だと言われているのです……』

というか、崩壊してなかったっけ？しかも今更見つけたところでケフェウスの超強力なゼット波が残ってるだろうし、人間に何とか出来るとは思わないだよね……

「母さんは……まだ、父さんが生きてるって、そう信じてる？」

「……もちろんよ。私は、信じてる。きっと大吾さんは無事だって。大吾さんの居ない間は、私がこの家を守って貴方を育てていくわ。大吾さんが帰って来た時、笑顔で言いたい。『おかえりなさい』ってね」

凄いな。普通は三年も宇宙から帰って来なかったらスッパリ諦めてるだろう。なんというか……無性にダイゴさんを殴り飛ばしたい気分だ。いい嫁さんを貰ったと思うよ、本当に。ボクもこういう人と……いや、まだ小学生だしそういうのにはまだ、早すぎるよね。

「……母さん」

「さあ、ドキユメンタリーも終わったことだし、今日はもう休みなさい。明日あたり、何かあるんでしょう?」

何も言っていないハズなだけだな……ちよつとソワソワしてのかな? まあ楽しみだったし? それに本気のバトルも出来そうだし……!

「うん、実はロッポンドーヒルズに行くんだ。映画を観に行くんだよ」

「へえ……! 誰と行くの? ルナちゃん、それともミソラちゃん?」

ちよつと、何でゴン太とキザマロの名前が出てこないのさ! 邪推し過ぎだよ……

「違うって! 委員長、ゴン太、キザマロの三人だよ!」

最近のミソラちゃんは何だか忙しいらしいし。楽しそうだからいいんだけどね。

「そう……ま、楽しんで来なさいね！」

ニコニコするあかねさん。何だか、釈然としないんだけどな。

「はぁーい……」

それじゃあとつととシャワーでも浴びて、寝てしまおうか。ああ、何だか疲れたな、今日は……

——その頃・とある場所——

「この地球には、致命的に足りぬモノがある。それが何か分かるか？ハイドよ」

質問、と言うよりは既に自分の中で既に確信がある……というような女性の声が響いた。

「さて、何でございましょう？」

問われた男にはこうだ、という確信はなかった。故に聡明な上司に答えを仰ぐことにしたので。それにこんなことで不興を買っても、面白いことはない。

「それは支配者だ。絶対的な支配者が必要なのだ。そして、それに相応しいのは、妻のような優れた人間だ」

絶対的な自信と、それを裏打ちする優秀さを自覚している女性の声は、更なる確信に満ちていた。

「ソフフ……なるほど。流石はオリヒメ様。並の人間ではそのようなこと、考えもしないでしょう」

それは、考えもつかなかったハイドも同じことなのだが。

「愚かな人間たちに知らしめるのだ。誰が地球の支配者であるかを……それが、妾に与えられた使命である」

女性の声は、怒りに満ちていた。はつきりとこの地球、いや、人類に対する憎しみを持っているのだろう。

「ハッ……このハイド、必ずやご期待に応えてみせましょう!!」

跪いた男は既に、自分の脚本のことで頭が一杯だったが。

——翌日——

ベッドを含む、この部屋全体を照らす朝日の眩しさによってボクは目覚めた。手元のスターキヤリアーを確認するに、約束の時間にはまだ余裕がある。一応、ラジオ体操でもしておこうかな……

「1、2、3、4……」

「何やってんだ?」

「あ、おはよ」

「おう。それでよ、そのダンスみたいなのは何だ？」

別に、電波体のロックには関係なさそうだけどね。ただルーティンのような意味合いもあるから、習慣としてはオススメ出来るかもしれない。

「ああ、これね。これはラジオ体操と言って……」

スラスラとラジオ体操の内容について説明していく。体を解して急激な運動に備える、という部分には興味があるようだ。バトルに関係あるもんね。仕方ないね。

「……と、いうわけ。どう？」

「ふむ……まあオレには関係なさそうだが、スバルはなるべくやっという方がいいかもな、それ」

まあ、確かに。バトルは待っちゃいけないからね！

「オツケー。じゃ、ちよつと続けてやってみるよ」

「おう、だが程々にな」

はあーい。

――1時間後――

「よし、そろそろ行こっか？」

スターキャリアーのデジタル時計もそろそろ約束の時間に近づいている。急ぐ程

じゃないけれど、早めに行っておいて損はない。

「オレは何時でもいいいぜ」

「それじゃあ出発!……母さん、行ってきます!」

「気をつけて行くのよ!」

「わかってるよ!」

ガチャツ!

——コダマタウン・バス停前——

バス停の近くまで来ると委員長が一人、待っているのが見える。流石に委員長だ。誰よりも早い。

「おーい、委員長!」

「スバルくん?……おはよう。ちゃんと遅刻しないで来たのね。……早めに来るのは、ポイント高いわよ!」

ポイントって何?

「ポイントって……何のポイントなのさ」

「それは……ええと、ワ、ワタシの好感度が上がるポイントよ!」

それはちよつと無理がないかなあ……



顔が赤いけど、自分で自分の発言の恥ずかしさに気づいたのだろうか。正直ボクなら、頭抱えてベッドで転げ回るレベルだけど。完全に黒歴史じゃないか。

しやーない。フォローでも入れてあげるか……

「フフツ、それなら頑張つてポイント貯めちゃおうかな。好感度が上がったら、何かしてくれたりするの?」

「そ、それは……ワ、ワタシがアナタに……つて、何でもないわ!今のナシ!ポイント制もナシ!」

「あはは……あ、キザマロが来たみたい。おい、キザマロ〜!」

ふああ、と眠そうな目をしたキザマロがバス停までやって来た。そこまで早い時間じゃないんだけど、さっきまで寝てたのだろうか。寝る子は育つてね。

「ああ、委員長、スバルくん。おはようございます……!」

「キザマロ、アナタ眠そうだけど大丈夫?ちゃんと早寝したんでしょうね?」

訝しむような口調で問い詰める委員長。

「ああ、実は昨日の夜は見たかったドラマの再放送があつてですね……!」

ーギロツ!

「ヒイツー!」

ヒイツー!

「ドラマの再放送く？キザマロ、アナタ……！」

ヤバイ、委員長がお冠だ。

「まあまあまあ……一旦落ち着こう、ね？」

「スバルくん？」

怖いってば！

「何でもありませんどうぞ懲らしめてやってくださいッ！」

「スバルくん、裏切りましたね!？」

だって正面から見た委員長、凄くキレてるんだよ！ヤバイよ、寿命が縮まるレベルだよ！

「いや、だって委員長の迫力が半端ないっていうか……いや、ほらよく言うじゃない！美人が怒ると凄く怖いってさあ!？」

「それにしたって……あ」

キザマロ？何々……後ろ？後ろっていうか、委員長？

「どうしたの、委員長……って、また湯気が！」

「美人って、スバルくんに美人って言われた……！」

ジュワアアア、という音でも聞こえてきそうな程顔を赤くした委員長が、そこにいた。しかし、助かったぞ。これでキザマロへの怒りは収まってくれる……ハズ。

「そ、それにしても……ゴン太が来ないね？」

「え、あ、そうですね！ゴン太君のことですから、まだ寝てるかもしれませんよ！」

「あ……そういえば、そうね」

『ゴメ〜ン!!』

あ、来た。

「ハアハア……な、何とか間に合ったか!？」

「普通に遅刻よ!……どうせまた、夜遅くまでゲームでもしてたんでしよう!？」

「ゲツ!ど、どうしてそれを……!？」

「フン、まあいいわ。今は気分が良いから、このくらいにしてあげる。あつ、そうだから……スバルくん、新しくスターキヤリアーを買ったみたいね。ブラザーバンドもリセットされているから、後で結び直しましょう」

「ああ、そうだった。改めてよろしくね」

「フフツ、今更ね」

それにキズナリヨクって結構大事だし……。確か、ブラザーバンドによる繋がり**の強さを表しているんだっけ？**これが高いと色んな恩恵を受けられるとか何とか。分かりやすく言うと、皆に一目おかれる存在になる……とかだったはず。

ーっプツッ!

「あつ、バスが来ましたよ！」

「それじゃ皆、乗りましようか。自慢じゃないけどワタシ、バスの運賃は半額なのよ」  
へえ、それは凄い。

「委員長はブラザーがボクたちより多くてキズナリヨクが高いですから、そのおかげです」

そういえば、テレビでやってたんだよね。何でもキズナリヨクが高いと、パスポートなしで外国に行けたり、試験ナシで有名大学に入学出来るとか。眉唾の話だけど、キズナリヨクが高いってことはそれだけ周りの人に信頼されてるってことだから、人材としては優秀なのかも。

「さっすが委員長だぜ！」

それは多分、両親の分では……？

「よし、それじゃあ……いざ！ ロツポンドーヒルズへ！」

「おう！ ポップコーンがオレたちを待っている！」

「ボクも楽しみですよ！ キャラメル！ キャラメル！」

「アナタたち、ホントに仲良いわねえ……ちよつとだけ羨ましいわ、まったく……」

因みに、バスの中では騒がなかったよ。本当。

それにしても、ロツポンドーヒルズまでは大体……一時間くらいか。楽しみだなあ

……!

「(また変なコトに巻き込まれなきやいいけどな)」

「(不穏なコト言わないでよ!)」

その日、ボクは黒き幻影に出会う。知ってたけど。

——TKシティー——

バスに揺られること約一時間。ボクたちは大都会、ロTKシテイへと足を踏み入れていた。揺られると言っても、実際のバスの揺れはほとんどないけどね。このあたりも、2ヶ月で随分変わったような気がする。

「やっ到着いたわー!」

委員長が目をキラキラさせながら到着を喜ぶ。やはり都会はいいねえ……

「ウホホホー!! スゴク賑わってるな!」

「凄い人混みだよね……休日にしたって凄いよ」

老若男女、一通り揃ってる感じだ。周りを見渡せば人人人。人ばかりだ。それはバス停も例外じゃない。

「アンタたち、迷子にならないよう気をつけなさいよ? この混み具合は半端じゃないんだから」

確かに。バス停でこれなら、建物内はどれだけ混んでいるんだろう。想像もつかない。

『マロ辞典』によると……この先にエレベーターがあるはずですよ。そこからロッポンドービルズに行けるようですよ」

マロ辞典凄いな。そんなことまで載ってるんだ。

「じゃ、早速行きましょー！」

『おおー！』

ーロッポンドービルズー

かなりの高さまでエレベーターで上昇し、ついにたどり着いたロッポンドービルズ。エレベーターの中で聞いたキザマロの説明によると、ロッポンドービルズは地上200メートルに建築された最新の街、ということらしい。地上200メートルとか、普通は考えないって……

「ここがロッポンドービルズの中心部……」

それによく見ると、下が透けている。青いパネルが敷かれているお陰で分かりにくくはなっているけど、ダメな人はダメなんじゃないかなあ。

『ロッポンドービルズへようこそー!!』

ービュインー！

「わわっー！」

何だ何だ!? 宣伝!? 四方をディスプレイに囲まれたぞ!? これは初見だとビビるよ……

『美味しいコーヒーが飲める「カフェ・ダマー」は駅からすぐの場所です!』

「エア・ディスプレイ?」

『ただいま、ショッピンングプラザでは大特価セール中でございます!』

グイグイくるな……

「都会じゃ、こんな感じでCM用のエア・ディスプレイが溢れてるの。常識よ」

いや、エア・ディスプレイが非常識なんじゃないの!? 普通に鬱陶しいんだけど……

『「滅びの文明展」美術館にて近日公開予定!』

あ、これは……オーパーツのヤツか。やべつ、どうしよう。オリジナルのオーパーツ

にチカラ返せとか言われたらマズイよな……暫く天地さんに預ければいいか。

「CMならもう結構よ」

ービュイン!

行つてしまった……唐突だったね、ホント。

「ん?……アツチ見てください」

キザマロ? アツチには足場もない空間が広がっていたはず。何で仕切りも作っていないんだろう。普通に落下事故位、起きていそうなものだけど……

……つて、まさか!



『イヤツホオオオ!!』

ま、まさか!あのスケボーにアンテナが付いたような先鋭的なフォルムは……!

「マロ辞典によると、あれはスカイボードですね。最近人気の乗り物です」

スカイボード来たアツ!これは凄い楽しみにしてたんだよね。か、買うか……?

「おおつ!凄いなあ!」

「オレも乗ってみたいけど、もう少し横幅のあるモデルが出てくれないとな……」

ゴン太……ドンマイ。

「アナタさつきから驚き過ぎじゃない?」

「あはは……」

すいません……

「オイ、みんな!早くポップコーンを食べに行くぞ!うおおお!!待ちきれねえ!」

「流石にそこまで切羽詰まってないけどさ、ボクも楽しみだったんだよね、ポップコーン」

「ああ、ボクのキャラメル味は売り切れてないでしょうか……!」

キザマロは切羽詰まっているらしい。

「アナタたちはホントに……まあいいわ。上映開始までかなりの時間はあることだし、この辺りを見学しましょうよ。どうせ時間間近にならないと、ポップコーンも買えない

でしようし」

普通ポップコインって何時でも売ってるモノじゃないの？マテリアルウェーブの恩恵なんだろうか。

「え、そうなの？」

「最近の電波技術の発展で、ポップコインなんかの類いは手続きがかなり短縮されたの。別に、上映前に長時間並ばなくてもよくなったのよ。それに映画館はポップコイン売りがメインじゃないしね。だから上映時間が迫らないと売りに出されなくてわけよ」

確かに、貨幣もゼニーになっちゃったし、利便性が高まつてることなのだろうか。儲けとかどうなってるんだろう。ああ、でも販売時間を限定することで、出来立てを提携しやすくなるってメリットはありそうだ。

「ポ、ポップコインは後回しなのか。チエツ！」

「まあまあ……ほら、面白いモノとかあるかもしれないし。さっきのスカイボードとか」

「グヌヌ……ま、しようがねえよな」  
よし。

——五分後——

ボクたちは何故か、ナンパの現場に遭遇していた。遭遇っていうか、委員長が見ているだけなんだけど。

『ねえ、一緒にドライブしようよ〜?』

『……』

うわっ、脈無さそう……

「あれはナンパってやつね」

『いいじゃないじゃない、楽しいドライブにするからさ〜!オレさ、乗り物だったら一杯持ってるし!見てみて!オレのマテリアルウェーブのコレクション!……マテリアライズ!スポーツカー!』

おおっ!スターキャリアーから車が出てきたぞ!これが音に聞くマテリアルウェーブ……ホントに買ってみようかな……

『ねえ、どう?どう?イカすでしょ〜?』

「マテリアルウェーブの車か……」

「凄いわよね。乗り物や電子機器まであらゆる物を生み出せる電波なんて。ただ、マテリアルウェーブの電波は大人気で、手に入れるのが大変だって聞いたけど……」

ネットオークションみたいなので売ってればいいんだけどな。残念。

『……え?ダメ?中々ガード硬いなあ……じゃ、これならどう?マテリアライズ!バイ

クー!」

バイクがどう見てもオマルにしか見えない件について。これは酷い。デザイン担当は何をやってたんだ! (憤怒)

『他にこんなものもあるよ。マテリアライズ! スカイボード!』

おっ! さっきのヤツだ。いいなあ……

『最新のスカイボードだよ! ねえイカすでしょ? ねえねえ』

ナンパ下手すぎない? いや、ボクもしたことないけど。

「あの人、相当なマテリアルウェアのコレクターみたいね」

「頼んだら売ってくれないかなあ……」

「諦めなさい」

ピシヤリと言われて、ボクの計画は儼く崩れ去った。

——二十分後——

あっ!

「ねえ、見てよ! このエア・ディスプレイに映ってるの、ミソラちゃんだよね!」

確か一月ほど前に歌手活動を再開するって宣言していた、ハズ。本人はアイドル路線からは離れたいって言ってたけど、普通に歌だけでも売れると思うんだよね。

「お、確かに！いいよなあ、スバルは。ミソラちゃんともブラザーなんだろ？」

ゲームでは、ボクが不登校になった時に連れだそうとした委員長の連れで来ていた時にミソラちゃんとの関係が知られたけれど、このボクは不登校にはなってはいないのでアイランド地下でボクの脱出モジュールに通信をする時に始めて知ったらしい。

「あはは……うん。ミソラちゃんは大事なブラザーだからね。今はフォーマツトされてるけど……」

「ふーん」

あれ、委員長がご機嫌ナナメだ。何で？

ああ、ハイハイ。そういうこと。

「まあまあ、委員長。そんなに拗ねないで……」

「拗ねてないわよ！……フンだ！スバルくんのスケコマシー！」

ええっ?! 逆効果!?! っていうか、委員長に罵倒されると、何だか不思議な気持ちになりそう。

「ちよっ、スケコマシは酷いよ!?!」

「スケコマシってなんだ？ 美味しいのか？」

「スケコマシって言うのは、女性を口説いたり、騙したりする人のコトですね。この場合、委員長とミソラちゃんという二人のブラザーを持つスバルくんは、紛れもないスケ

「コマシでしょう」

「キザマロツ!？」

「フフフ、さっきの仕返しですよ!」

やることがえげつないよ!

「(スバル……)」

うわああ! ロックまでそんな憐れまないでくれよ!?

「ごめん、ごめんってば……」

そして何故か委員長にパフェを奢ることになってしまった。今度、二人で。今日でいいじゃないか……

——五分後——

「さて、まだ上映まで時間があるわね。それじゃ、TKタワーでも見に行きましようか?」

ご機嫌の委員長が言うには、一通り見て回ったので次はTKタワーに行こうということとらしい。TK、タワー。TK……あまり深く考えないほうが良さそうだ。

「TKタワーですか! いいですねえ〜! ボクの『マロ辞典』によると、TKタワーは日本で一番大きな建物らしいですよ」

そんなものを地上200メートルに建てていいの？

「日本一って言葉には興味がそえられるわね」

「キザマロは絶対見ておいたほうがいいぜ！」

おい、やめろ！それ以上言つては……

「なんでですか？」

「ちよつ、ちよつとゴン太……」

「そのタワー、スンゲー高いんだろ？それを見たら背を伸ばすヒントが掴めたり……」

「で、できませんよ！それにボクは今の身長も気に入ってます！だいたいですね……」

ああ、止められなかった。ゴメンよキザマロ。

「まあまあ……それでさ、そのTKタワーは何処にあるの？」

ぶつちやけ、ここに来るまでに見えていたんだけど。だって日本一高いんだし。TKタワーのモデルになった例のタワーだって、近づく前に気づくよね。だから何処に、というよりはどこから行けるのが気になる。

『マロ辞典』によれば、TKタワーはここからすぐに行けるはずですよ。具体的には

……」

ほうほう。なるほど。

「それじゃ、行ってみよう！」

——TKタワー前——

なるほど、確かに高い。しかし思った程じゃないな。今の時代、電子機器の小型化も進んでいるからあんまり巨大な電波施設って存在しないんだよね、確か。役割的には仕方ないのかもしれないけど。

「おお、これがTKタワー」

一応外観位は覚えておいたほうがいいかもしれない。攻略には役立つだろうし。

「流石に高いわね」

『知っているかね?』

フアントム・ブラック! 貴様! 見ているな!

「ッ!」

振り返ると、金髪長身で全身を黒多めな配色の服で包んだ男が、片手に杖を携え立っていた。というかハイドだ。

「ビ、ビックリしました」

「いつの間に……」

「ソフソフ……この、TKタワーはただ高いだけの建物ではないのだよ。巨大な電波送



信設備が備えられているんだ。この場所で、日本の電波の全てが管理されているのだよ。所謂、電波ターミナルというヤツだな」

ここまで聞いていると、普通に豆知識を教えてくれた優しい人にしか見えない、ワケはない。だって、格好が怪しすぎるもの！

「オイ、スバル。ちよつとビジライザーをかけてみる。それから後ろのTK何たらを見てみるんだ」

略すところおかしくない!?

「ハイハイ……ええつと、ほい」

ビジライザーを通して見たTKタワーは、とても多くのデンパくんで溢れていた。普段はこんな感じなのか。どうも人気がないイメージが先行しちゃうな。これも全部、フアントム・ブラツクってヤツが悪いに違いない!

「デンパくんが一杯だ」

「(このタワーが電波ターミナルだっていう話はホントだろうぜ)」

「(そういえば昨日ビビってたテレビのデンパくんも、TKタワーから来たっていったよね)」

「つまり……このTKタワーは日本で最も大事な施設とも言えるワケだ。何故かわかるかね? 少年少女たちよ」

「それは……今の社会にとって、電波はなくてはならないモノだから……ですか？」  
「その通り」

キザマロの回答に、満足したような顔で正解を告げるハイド。しかし今のアンタ、かなり嫌なニヤケ方してるよ？

「言ってしまえば、ここは日本の電波の供給源になるわけだ。ソフソフ……」

趣味悪い笑い方だな……

「何が可笑しいの？」

委員長が純粹に不思議、といった表情で問う。何か引つかかるような笑い方だったからね。仕方ない。

「想像してみるといい。もし、この大切な施設に何かあったら、世間がどうなるかを……ソフソフソフ」

そう言ってロツポンドーヒルズの方へ歩いて行ってしまった。ぶつちやけ職質かけられそうな男だった。

「き、気味の悪い男です」

「都会ってというのは、いろんな人が集まるところなのよ。ま、気にせず見学を続けましょうよ」

都会の一言で片付けるのはどうかと思うけど、正直全く否定出来ないからなあ。人が

多いと変人の割合も増える。嫌な方程式だよね……

「それにしても、相変わらず委員長の安心感は凄いいね。まったく動じてなかったしき」  
「え？あ、そうね！フフン！もつと頼ってもいいのよ？」

「ドヤツ！と言った表情の委員長。ぶつちやけ委員長のドヤ顔つて凄く可愛いと思う。反論は……あまり認めたくない。」

「よし、それじゃTKタワーに入ってみようか……あれ？入れない」  
「何で？」

「おかしいわね……あ、案内のディスプレイがあるわ。何々……本日は大変混雑しており、恐れ入りますが入場を制限しております……つまり入れないのね」

「どうする？まだ上映には時間があるけど……」

「そうね……ちよつと早いけど、映画館に向かっちゃいましょうか。……キザマロ！」

キザマロが完全にデータベース扱いされているような気がする。頑張れキザマロ！  
後で腹黒メガネの話でもしてやろうかな……さっきのキザマロは真っ黒だったけど。もうあんまりからかうのは止めとくべきだろうか。

「はい。ええつと……ロツポンドーヒルズ内、ショッピングプラザの中ですね」

「おおっ！それじゃあ遂にポップコーンが食えるのか!？」

ゴン太エ……

「取り敢えずロッポンドーヒルズに戻ろうよ。ボクもポップコーンには興味あるしね」

「ハーフ＆ハーフ！ハーフ＆ハーフ！」

「(スバルもポップコーンへの執着はかなり強いような……?)」

「(何か言った?)」

「(何でもねえよ)」

「変なロツク。」

「ローロツポンドーヒルズー」

「……この建物の中に、映画館があるはずですよ」

「じゃ、早速行きましょう！」

「あ、そうだ。」

「皆、ちゃんとチケットは持ってる？」

「ゴン太が落としてないことを祈る……！」

「……あるわよ？」

「ボクもありますよ」

「ああ、オレもあるぜ」

「何?!落としてない、のか。よかった。フウ……」

ービュウウウツ!!

「うわあっ!」

「ツ!ス、スカートが……!」

必死にスカートを押さえる委員長。じゃなくて!

これは……突風?こんな無かったハズだぞ!?

「ああ〜ツツ!!」

チケツトか!?嘘、こんなので!?油断した!

「ど、どうしたんですか?ゴン太くん」

「ちよつと!そんな大きな声出さないでよ!!」

「無い……」

この世の終わりのような、青ざめた顔のゴン太。

「オレのチケツトが無い……」

「チケツトが無いって……それどういうコトよ!まさかさつきの突風で……」

「ああ、確認しようとして取り出したところに……チクシヨウ、強風で目を閉じていたから方向もわからねえ……」

一瞬の油断、後悔は遅く……悲しすぎるね。

「これはマズいぞ、非常にマズい!あのチケツトが無いと……あのチケツトが無いと

……ポップコーンが！食べられないじゃないか!!」

「何だってエツ!?」

「そ、それは重大事件です!!」

取り敢えずノっておくボクたち。楽しい。今は。

「アナタたちね……!」

「でも実際、どうする? 広大なロップンドーヒルズで探すのは難しいかも……」

プロセスが違うから、ゲーム通りとは限らない。どうしよう……

「……オレ、一人で待ってる」

「え?」

「映画には皆で行ってくれよ。だってオレ、遅刻はするし、チケットは手放しちゃうし……めいわく「そんなことない!」……スバル?」

クソツ、これくらい予想出来た……とは思えないけど、チケットの飛んでいった方向さえ確認していれば! しまった……これはボクの責任もある。

「そんなことない! そんなことないから、皆で一緒に探そうよ! 時間はまだ、あるんだからさ。これも思い出だと思ってるさ! ね、どう?」

「スバル……!」

「ハア……しようがないわね」

「委員長、別にオレのことは置いていても……」

「このワタシが！アナタのことを！置いていけるワケないじゃないの！だってアナタは……ワタシのブラザーなんだから！そうでしょ!?」

「ハ、ハイッ！」

委員長スゲー。カッコいいよね、本当に。いや、ボクも罪悪感あるんだけど。

「仮に、映画がどれ程よく出来ていたとしても、アンタが居なかつたら絶対楽しめないもの。ワタシたちは、全員揃ってこそなのよ！わかつた!?!」

「う、う、う、うおお!!委員長！オレ一生ついていくぜ!!」

「映画を見るのが少し遅くなるくらいですよ。皆で手分けして探しましょう！」

「ボクも全力で手伝うよ！電波変換解禁も辞さないからね！」

それくらいしないと、申し訳が立たないもの。

「お、おまえら……ありがとう！サイコーの友達だぜ！」

グヌヌ……心が……！今度牛丼でも奢るか……

ーロツポンドーヒルズー

取り敢えず何処かに引つ掛かっていたりしないか、しらみ潰しに探すことになったのでボクはまず、ゲーム通りにゴン太が落とした場合に発見した場所へとやって来た。ロツポンドーヒルズに来てすぐに見た、スカイボードが飛んでいた空間である。地上200メートルなので落ちたら命はないだろうに、よくやると思う。ボクもやりた  
い。

「この辺りに引つ掛かっていればいいんだけど……」

「(スバル、オレがちよつと飛び回って、この辺を調べてやろうか? ロックマンじゃ無理だが、オレ単体ならいけるぜ、どうだ?)」

渡りに船ってヤツか。助かった。

「ありがとう、頼むよロック」

「(お安いご用ってことさ……よつと)」

ビジライザーでロックの動きを確認しながらボクも目を凝らす。頼む、あってくれよ

……



「……あつたぜスバル!」

「ホント!?よかつたあ……」

ここからじゃ見えないけど、奥の方にそびえる電波の中継ステーションに引つ掛かっているらしい。

「じゃ、ロック、そのまま……」

「だがよ、何故かわからねえがウイルスがいやがるぜ。ウジャウジャとだ。オレ一人じゃ無理とは言わねえが、ちよつと厳しいぜ。ロックマンで行くにしたって、ウエーブロードがそこまで繋がってねえんだよな……」

な、なるほど。つまりスカイボードか。電波世界の影響もあまり受けないし合理的かな?

「うくん、さつき見たスカイボードならなんとか出来そうだけど……」

「ああ、あの宙に浮く板切れか」

酷い例えようだ。確か、マテリアルウェーブには自意識があるものもあるって話だし、スターキャリアー内でケンカとかは止めてほしいんだけどな……

「さつきの、ナンパしてた人にでも頼んでみようか」

「頼むんじゃないくて、奪つちまえよ。時は一刻を争うんだろ?」

デジタル時計では……まだ大丈夫だ。あと一時間弱はある。そこまで焦る時間じゃ

ない。

「まだ時間には余裕があるから大丈夫。それにそんな方法で取り戻したって、ゴン太は喜ばないよ」

「(まあ……そうだな。よし、決まりだ！ さっさと借りに行こうぜ！)」  
「うん！」

さてと、あのチャラ男はどこだろうか……

——五分後——

あ、いたいた。帰られてたら、流石にお手上げだったしね。

「あの、すいません」

「ん？ 何だ？」

「実は……」

——少年説明中——

「え？ スカイボードを貸してほしいのかい？」

「ええ。何とか出来ませんか……？」

「うーん、どうしよつかなあ……」

この人、普通にしていたら結構いい感じだったんじゃないか？ いきなり現れた子供の

話を聞いてくれる人なんて、中々いないように感じるのは気のせいだろうか。  
「お願いしますー！」

「結構高価なんだよねえ、アレって……。簡単には貸せないなあ……。」  
だよ。全くもって常識的な対応だよ。

「あ、でも……。オレのお願いを一つ聞いてくれたら貸してあげよう。どうだい？ギブアンドテイクってヤツさ」

アツー!!……………冗談です。

「お願いって、何ですか？」

「実は、さつきからずっと声をかけてる女の子がいるんだよ。その子がまた、スツゴいマブいんだ」

マ、マブい？なんだっけ、それ。結構古い言い回しのように感じる……

「マブい……？」

「カワイイって意味さ。でも、中々ガードが固くてねえ。オレとしては、その子の好みのタイプが知りたいんだよ。キミが聞いてきてくれない？」

うーん、積極的ですね……

「はあ……」

「相手が子供だったら油断して喋ってくれるかもしれないじゃん？」

いや、知らないよ。

「それじゃ、わかりました。聞いてきますね……」

「アレ?でもキミ、ナンパの経験あるの?」

ねーよ!困ってねーよ!

「いや、ないですけど」

「フフフ……それじゃオレがナンパのいろはを教えてあげよう。……………つて

感じで声をかけるのさ」

ま、マジっすか!?!というか、この人なら普通に知り合いになった方が良くない?パーソナルビューーだつてあることだし。

「ええ……」

「最初は誰だつて恥ずかしいもんさ。その女の子、ちよつと目を離れた隙に逃げちゃつたんだ」

「脈無しですね、それ」

「え?」

あ。

「何でもないですよ」

にっこり。誤魔化せているといいけど。

「そう……まあ、まだ近くにいると思うから、よろしくね〜!」

笑顔で送り出されてしまった。やるか? ナンパを! 委員長に殺される可能性があるけど……心なしか、ミソラちゃんが映っているディスプレイからも圧力を感じる……よ  
うな気がする。

「ハア……それじゃ、さっきのナンパされてた人を探そうか……」

「オマエも苦労してんな……」

泣きそう。

――五分後――

取り敢えず探し回って五分、遂に件の彼女を見つけた。

「すいません」

「あら、何かしら?」

うーん、確かにマブい。でも年齢差が……

「(さっき教わった通りやってみるよ。面白そうじゃねえか)」

ええ……黒歴史モノになりそうなんだけどな……

「(さっきそれやってた人が失敗してたじゃないか)」

「(やらないよりマシだ! 早くしろ!)」

この薄情者！いい、嫌だからな！ボクは絶対にやらないぞ！

「あ、あの………実はボク、スターキャリアーを手に入れたばかりなんですけど、ブラザーバンドの結び方がわからなくて……」

(注)嘘です。今はボクのブラザーバンドがフォーマットされている状況を……活かす！

「あら、それでワタシを？」

「困ったときに、頼れる人を探す目安としてキズナリヨクの高い人を探せって、テレビでやってたんです」

これは本当だ。このお姉さん……織幡タクミさんのキズナリヨクは300。一般人の中だと高い部類に入る。

「なるほど……いいわよ。ボク、時間はあるわね？」

「ハイ！」

チヨロいな。

——説明中——

「……と、いうワケ。どう、わかった？」

うーん、知ってた……いや、それが目的じゃないんだけど。

「ハイ！ありがとうございます！あ、そういえばテレビでやってたんですけど、キズナ

リヨクが高いとモテるって本当なんですか？お姉さん美人だから、そんなの関係ナシにモテそうですけどね！」

本命だ。これで喋ってくれたらな。

「ウフフ……お上手ね。確かにキズナリヨクが高いと、異性に声をかけられることは多いわ。ワタシとしても、キズナリヨクの低い人だと少し、警戒してしまうかも……」

「なるほど……ありがとうございまして！それじゃボク、失礼しますね！」

「ええ、頑張りなさいな」

キズナリヨク高そうな人だったな、本当に。

「うーん、微妙に情報が足りないな……」

「あのオトコが言っていたのは、好みのタイプだからな。そうだ、オレに良い案があるぞ。……コイツのスターキャリアーを覗いちまおうぜ」

「(トランサーと同じ要領でいいんだよね?)」

「(ああ、だが最近の技術発展により、スターキャリアーのセキュリティも厳しくなってるからな。かなり近づかないといけないぜ)」

なるほど、直接調べなきゃならないってのはそういう解釈だったのか。

「(オーケー、それじゃ電波変換だ)」

「(オーライ！待ってましたア！)」

だから急いでるんだって。

「調べるだけだから、ウイルスは避けるよ？」

「(チエツ、しょうがねえか)」

ええつと、ウエーブホールは何処だったか……

ローロップドールヒルズの電波ロー

よし、流石に電波人間にコマーション用のエア・ディスプレイは出てこないらしい。とにかく、ボクたちは割と急いでさっきの織幡さんのところまで戻っていった。

「さて、それじゃ入りますか」

「おう、さっさと終わらせようぜ」

それじゃ、スターキャリアーの電脳にウエーブイン！

リースターキャリアー内部ロー

流石に最新機種、ウイルスの類いもないし、結構快適な空間だ。確かエグゼに出てきたP E Tの内部も似たような感じなんだっけ？ 召し使いプログラムはいないけど。いや、あれは改造だったような……

「ほう、ここがスターキャリアーの中か。結構広いじゃねーか！ さてと、何か面白そうなデータは……つと」



容赦無いな。そこに痺れる憧れるウツ！いや、冗談だよ、冗談。

「なるべく荒らさないようにね。五陽田さんみたいになつたら目もあてられないよ」

データ全消滅は泣いていいと思う。

「あれはあのオツサンの自業自得だろ？……お、日記データを見つけたぜ」

「読んでみようか。……○月×日、ワタシの趣味がちよつとだけ変わつてることに気づく。どうもキズナリヨクが高い人が好きみたい！……だつて」

「なるほどな……ほら、さっきのオトコに教えてやろうぜ。どんな顔するだろうな……クククツ」

趣味悪ツ！因みに、パーソナルビューってのは、持ち主の精神状態によって色が変わるように出来ているらしい。悩みや不安を抱えている人は赤色になるとのことだ。以上、ロツクからの受け売りでした。

「それじゃ、ウェーブアウトしようか……」

ローロツポンドーヒルズー

「あの、さっきの件なんですけど……」

「聞いてくれた？あの子の好みのタイプ」

「キズナリヨクの高い人が好きらしいですよ」

「うっ！オレ、キズナリヨクはそんなに高くない……だからダメだったのか」

それでも、この男の人のキズナリヨクは150。別に低いってワケじゃないんだけどね。

「そういえば雑誌でやってたな。最近の女の子は顔や性格なんかより、キズナリヨクを男に求めるって……」

うわっ、ボクの魅力低すぎ……？

「残念でしたね。でも、もう少しどっしりしているといいかもしれませんよ」

「言うねえ……よし決めた！キズナリヨクを上げてもう一度アタックするぞ！あ、約束は守るよ。スカイボードだったね ……ほら」

そう言ってデータを転送してくる男の人……イケツラ モテツグさん。どうやって漢字充てるんだよ!?

「それはキミに譲るよ。さて、キズナリヨクを上げて男の魅力をアップだ！」  
凄いなこの人。いや、好感は持てるよねって意味で。

「よし、それじゃあいくよ……」

『スカイボードのマテリアルウェーブ、スタンバイ!』

うわっ、って合成音声か……

「ではでは……マテリアライズ！スカイボード！」

ーチユイン！

スターキャリアーから放出された目に見える電波が形を持ち、サーフボードのような形へと形状を変化させていく。凄いね、これがマテリアルウエーブ……！

「これは……！」

『イエ~~~~~イ!!乗ってるか~~~~い!!?』

キイエエアアアアシャベッタアア!!!

「ノってるよー！」

「(うわっ、喋ったぞコイツ!?)」

「(マテリアルウエーブは皆、意思を持つてるんだ。原理はよく知らないけど)」

『オレの名前はオーリー!ノリノリだろ?イエ~~~~~イ!!』

「こつちこそ!フフツ、ついて来れるか?……ボクのノリに……!」

気分は赤い弓兵だ。

『イエ~~~~~イ!!そのノリで頼むぜエツ?』

「オツケエイ!それじゃ乗るよ……よつと!」

おおお……これは凄い、確かに浮いてる!ボク、浮いてるよ!

「イイヤアツホオオオオツ!!!」

『その調子だぜ！ベイバー!? イエ~~~~イ!!』

スピードデュエル! スタンバイ!

「(風を掴め! シューティングスター!!)」

ここでボクが使ってるスターキャリアーのハンドルネームとは、わかってるじゃないか、ロック!

「うおおおつ! チケットアクセス!」

このままチケットを回収してしまおう! 何か意味的におかしい気もするけど、今はスルーだ!

『何やってるかわからねえが、コイツは最高にノってるぜえ! イエ~~~~イ!!』

ヒヤツホオオオウ!! Into the VRAINS!

——二分後——

「イヤツホオオ……つと、よし終わり。ありがとうオーリー」

『お安いご用だぜ! イエ~~~~イ!!』

ふう、何とか回収には成功したし、早くゴン太に届けてやらないと。

「(いやあ……最高だったな!)」

——五分後——

「お？おお？おおお！？それはオレのチケツト!!」

「ちよつくら風になつてきたのさ」

「よくわからねえが、助かつたぜ！ありがとな!!」

フツ、いいつてことよ。なんかまだ、さっきのノリが抜けてないな。自重自重。

「よく見つけたわね、スバルくん。ゴン太も！よかつたじゃない！」

「心配してくれて、ありがとう委員長……」

「もう手放さないように、気をつけなさいよ。さて、改めて映画館に向かいますよ」

委員長マジカッコいいよね。惚れそう。

『おおくつ！』

「だから大声出さないつ！」

ごめんなさい……

——ショッピングプラザ——

映画館はショッピングプラザの内部にあるとのことなので、取り敢えずエレベーターにて上がっていくボクたち一行。三階構造らしいので、先ずは二階へと上がる。このエレベーターは、フロアの両端にあるため、移動するのが多少面倒ではある。そして二階

にしているのは……

「天地さん、お久しぶりです!」

「おやおや! キミはスバル君じゃないか! 久しぶりだねえ……暫く見ないうちに、また父さんに似てきたんじゃないかい?」

それは流石に違うと信じたい。だって中身が違うもの。

「あはは……ところで、天地さんはここで何を?」

「ボク、実はスターキャリアーの開発に少し関わっているんだ」

それってかなり凄いことじゃないの……?

「凄いですね!」

「そんな大したことじゃないさ、ムフフ! このシヨツピングプラザの二階はスターキャリアーのオフィシャルシヨツプになっていてね。ユーザーにどれくらいスターキャリアーが受け入れられているか、ここでリサーチしてるんだよ。やっぱり気になるでしょ? 自分が開発に関わった製品は、ね」

プロ意識ってヤツかな?

何にせよ、頼みたいことがあったんだった。

「天地さん、実は頼みたいことが……」

「おや。どうしたんだい? 珍しいね、スバルくんが頼みごとなんて」

そりゃあ、重大案件ですから。

「このカードのデータを、スターキャリアーでも使えるように調整してほしいんです。……出来ますか？」

そう言つてベルセルクのカードを取り出し、天地さんに渡す。

「へえ……なるほど、興味深い。いいよ、任せておいて！ そうだね……結構かかるから、終わったらメールするよ。それでいいかい？」

流石はスーパーハカー！ キズナリヨク650の男！ 頼りになるね。

「はい、ありがとうございます！ それじゃ、ボクたちはこの上に用事があるので……」

「ああ、『ゴースト・クライシス』か。あれは結構怖いからね、気をつけておくといいよ」

「見たんですか？」

「違うよ。ここは映画館へ行くための通路でもあるからね、通る人の顔色でわかるのさ」  
へえ、つというかそれ、結構暇なんじゃないの？

「はあ……それじゃ……」

「ええ……そんなに怖いのか？ ワタシ大丈夫かしら……？」

袖を掴むな袖を。

「委員長の方が怖いから……何でもないです、ハイ……」

「……………ワタシって、スバルくんに怖がられてたのね……もう少し、素直に……いえ、恥ずかしいし……」

ギロリと睨まれてしまった。しかし、今度は頭を抱えてしまったぞ。今日の委員長も変だな。別に飽きないけども。

「そろそろ行かない？ 始まつちやうよ？」

「アナタのせいでしょうツ!？」

酷いなあ、もう。

「(実際オマエのせいだがな)」

ロツクまで!?



ーシヨツピンググラザ・三階ー

最新の建造物のクセに、何故か直通ではないエレベーターで三階まで来たボクたち。何故一階ずつしか上がれないのだろうか。不便じゃない？

とにかく、やつと映画館へとたどり着いたので、先ずは手続きをすませることにした。チケツト、チケツト……

「当映画館へようこそ！」

元気のいいスタツフさんだ。女性の受付職の人つてのは、美人が起用されやすいのだろうか。イテッ！

「ちよつと委員長!?!」

思いつきり足を踏みつけてきたんだけど。結構本気だったんですけど。淑女の行動じゃないんですけど。

「デレデレしない！」

何がどう見えたならデレデレしているように見えたというのか。ボクはただ心中でこの人、美人だな……くらいしか思っていないというのに。

「デレデレって……年齢差考えなよ、委員長……」

「お、お客様？先ずはチケットの確認をさせていただきたいのですが……う！」

受付さんの顔が引き吊っている。しまった、女性に年齢の話はタブーだよ。悪いことをしちやつたな……

「すみません……はい、これです」

委員長がボクたちの持つているチケットを集めて受付の人に渡す。何故か勝ち誇っているように見えるのは何故だろうか。……挑発？

「はい、ありがとうございます。ただいま上映中の『ゴースト・クライシス』ですが……この映画は3Dムービーと呼ばれる最新技術で製作されています。電波によつて生み出される、ハイクオリティな映像を是非御堪能くださいね！」

3Dってあんまり驚きを感じないよね。何か4Dとかも聞き覚えがあるような……どうだったか。前の出来事は、もうあんまり覚えていないからなあ……

「そうそう、それから……キズナリヨクが1000以上の方には、特別にスペシャルロイヤルシートをご用意いたしますよ！」

なんだそのキズナリヨクの怪物は。逆に怖いよ。

「せ、1000以上?!流石にボクらの中にはいませんね。一番高い委員長でも80ですし……」

ゴン太とキザマロが50だったはずだから……親子間でたったの30……それ、めっちゃ冷めきつてない？

「憧れるわねえ、そのスペシャルロイヤルシート。スバルくんとブラザーを結べばもしかして……いや、流石に難しいかしらね。仕方ないわ、今日は普通のシートで見ましよう」

「それって計算おかしくない？」

そこで何故、ボクとのキズナリヨクが920以上になると思えるんだよ。ゴン太とキザマロでも25ずつなのに。桁が違くない？せめて90でしょう。

「え？」

「え？」

「え？」

え、何この空気。何で三人ともボクがおかしいみたいな顔するんだよ!? あ、でもロツクマンになってキズナリヨクの数値に細工をすれば……ボクが入れなくなっちゃやうね。それじゃダメだ。

「皆がボクをどう認識しているのか、時々わからなくなるよ……」

「いや、まあ……元気だせよ！オマエ、そんなにおかしくねえから！」

そんなに!? そんなにって何さ!? それって多少はおかしいって言うてるようなもの

じゃないか!

「ゴン太……」

「アハハ……」

誤魔化すのが下手だよ、ゴン太……

「ほら、元氣出しなさい!……さっさと行くわよ!」

「委員長〜!」

頼りになるのは委員長だけだよホント。

「うっ……(グラツと来るわね、これは)き、さあ、中に入るわよ!」

テンパった委員長に手を引かれて、ボクは映画館の中に足を踏み入れた。そういえば、ここでバトルすることもあるんだよね。一応セットの配置くらいは頭に覚えておこうつと……

——映画館——

——ブ〜〜!ただいまより、上映を開始いたします。

ブ〜〜ィングではなく、上映開始の音が館内に鳴り響いた。いよいよ、ゴースト・クラ  
イシスが始まる。ガラにもなく、ワクワクしちゃうね。

『おにいちゃん、帰ろーよ。ここ、気味わるいよ』

『何ビビってんだよ。オマエまさか……あの噂を信じてんのか？オバケが出るっていう……』

物語は洋館に入り込んでしまった兄弟から始まる。凄いな。スクリーンに映すっていうよりは、ホログラムに近い感じかもしれない。

『そ、そうじゃないけど』

「(凄いキレイな映像だよね)」

「(『マロ辞典』によれば、あれは電波でして……マテリアルウェーブを使って人間を立体的に表現しているんです。後ろの建物もそうですよ)」

マテリアルウェーブで構成しているのか。ということは、本当に意思をもって動いたりは……流石にないよね。しかし、背後の洋館や、月までマテリアルウェーブとは……二ヶ月で発展し過ぎじゃない？

『ガタツ!!』

映画の方でも、進展があつたようだ。ゴーストムービーにはありきたりな、ポルターガイストチックな演出。流石にこれくらいではビビらないね。

『い、いまなにか、物音がしなかった？』

『ガタガタ……』

『やっぱりへんだよ、ココ!』

分かりやすい演出だけど、技術レベルが違うせいで中々楽しめる。ドキドキしてきた。

『やっぱ帰ろうよ!』

『そ、そうだな……!』

「ここでやつとお兄ちゃんも決心がついた模様。

『ヒュ〜ドロドロドロ〜!』

ドロドロドロ〜?ドロドロ〜、ドロ〜、ドロ〜。引き分け、乱入、中断……うつ、頭が!

「(上映が)止まるんじゃねえぞ……!」

うわあつ!止めてよロック!鉄血のアークフレンズ……いや、もう止めよう。誰も得をしない。そんな感じに損得言つてたヤツは、黄金のジャスレイ号ごと吹き飛んだけどね。やっぱスゲエよ、ミカは。

『うげっ!』

『ヒ、ヒィー!』

「キヤ、キヤー!」

上映中に叫ぶのはお止めください。そして隣の人に抱きつくのも止めてください。こつちの方が怖いって。

「どわ〜〜!」

「ブルブルブル!!」

震えているだけのキザマロが一番マナーがいいという悲しさ。

『に、逃げろ〜〜!!』

逃げた兄弟を頭からシーツを被ったようなオバケが追う!正直、要所要所で抱きついてくる方が心臓に悪い気がする。良い匂いするけど。

『ドロドロ〜ン……楽しいなあ、人間をからかうのつて。ドロドロ〜ン!』

喋れるのかよ!?!意外とIQの高そうなオバケもだ。

『待てい待てい!』

勇ましい声!この作業服のおじさんが主人公か。冴えないな。というか、マテリアルウェーブの声は誰が発声しているんだろう。この世界の映画産業では声優の方が女優・男優より認知されているとしたら、何だか可笑しいよね。よく知らないけど。

『そこまでだ!オバケども!』

『ドロドロ〜ン……何だコイツ?人間のクセに生意気だな!脅かしちゃうぞ〜ドロドロ〜ン……!』

脅かすのが主目的とは、何て平和的なオバケたちだ！人間とも共存出来るんじゃないの？

『フッフ、私はただの人間じゃないぞ。「オバケの掃除屋」だ！オバケ掃除機、スイッチオン！』

うゝん、この幽霊退治屋感。

『ドロドロ？……ウギャー！！』

掃除機の口から発生した、変わらない吸引力によって内部に吸い込まれたオバケ。吸い込んだオバケは何処に……？

『ギャーース!!!』

『ギャイイーローン!!』

『お掃除完了!!』

三匹？のオバケを吸い込み、オバケ掃除屋の仕事は一段落着いた。掴みとしては……どうだろう。よくわからない、かな。分かりやすさを重視したと思えば……まあ、そこそこ？それにしても決め台詞酷いな……

「(すげえ……あの掃除機カッコいいなあ。オレ、将来オバケの掃除屋目指そうかな)」

あの掃除機、顔が着いてたけど……それに、どうせ3、4ヶ月後にはオバケよりもつとヤバイヤツらと対峙することになるから……



「いやいや、きつとボクの方がピッタリですよ。ゴン太くんはむしろ、オバケの方が似合うんじゃないですか?」

キザマロの身長ではあの掃除機を運ぶのは無理なんじゃないかなあ……

「(二人とも物好きだねえ……)」

「(なんだよ、スバルは冷めてんなあ……)」

「(だって脅かすだけなんて、ウイルスよりかはよっぽど健全だよ? アイツら、全力でボクを殺しにかかってくるし……)」

別にウイルスごときじゃあ、相手にもならないんだけどね。

「(流石にヒーローの言うことは違うってことか)」

「(現実なんてそんなもんだよ。カッコよく見えるのは一部だけ。ヒーローなんてものは、大抵が命懸けで泥臭いものなのさ)」

「(スバルくんはもう少し、自分を大切にしなさいな。貴方は自分で思ってるより、ずっと多くの人に思われているのよ? ワタシだって……)」

「(そろそろ映画に集中しない?)」

何故か話が脱線してしまった。ボクの勘では、ここから面白くなると言っている。

——1時間後——

ー前編が終了しました。15分の休憩を挟み、後編を開始いたします。

……ふう、中々良い映画だね、これは。同じ監督の別作品でも探してみようかな……  
「なあなあ！今の内にポップコーン買ってこようぜ！食いまくるぞー！うおおお!!」

あ、忘れてた！

「あ、待ってよ！ボクもハーフ&ハーフがっ……!」

「キャラメル味は売り切れてませんよね!」

「男って、ホント単純ね……まあいいわ。それじゃ皆で売店に行きましょうか」

ハーフ&ハーフ！早く食べないと、ファントム・ブラックが来てしまう。

どうせファントム・ブラックのキャストイングは委員長に決まるんだろうし。下手に妨害して、ヒーロー気取りのファントム・ブラックの気分を害しても面倒だ。ヤツの本にヒーローがヒロインに暴行する展開はないだろうからね。上っ面だけだけど、紳士的なのが幸いしている。後はロックマンの事情を知っている人間の方が都合が良いってのもあるけど。至近距離で顔でも見られたら、流星に言い逃れ出来ないし。

ーショップPINGプラザ3階・売店ー

「いらっしやい！こちらは売店です!」

元氣のいい美人さんが受付だ。

「スマイルください」

イタツ！

「スバルくん？」

「あはは……冗談だよ、冗談……」

一度やってみたかったのに。

「?……ところで、劇中で使われている『オバケ掃除機』……と同じデザインの掃除機は  
いかがですか? マテリアルウエーブでの販売となります!」

「売ってるんですか?」

「10000ゼニーになります!」

や、安い!

「……買ったアツ! それ、お願いします!」

どうせ手に入るけど、後で返せとか言われても面倒だしここで買ってしまおう。

「はい、10000ゼニー、確かにお預かりしました。……どうぞ!」

スバル は 掃除機 の マテリアルウエーブ を ゲットした!

「うわっ、大人気ねえぞスバル!」

「ハハハハハ! 悔しかったら、ウイルスバスターでもしてチマチマ稼ぐんだね! ポ  
クはそうしたよ……」

実際チマチマ稼いだからなあ……つらたんでした。

「命懸けってヤツか……いや、うん。好きにしたらいいと思うぜ、オレは。ただ、たまに貸してくれよ?」

「もちろんさ。あ、ポップコーンのハーフ&ハーフってあります?」

「申し訳ありません。当店では取り扱っておりませんので……」

「」

「(スバルが死んだ!この人でなし!)」

ランサーエ……時々ネタをぶっこんでくるロックは一体、何なのだろうか。

「ま、まあ、ないなら仕方ないよ。別に、全然気にしてないし?あ、キャラメル味のMサ

イズください」

「(無理すんなよ)」

む、無理とかしてないし?べ、別に楽しみしてたとか……子供じゃあるまいし!?

——二分後——

「よし、皆買えたね。そろそろ行くっか?」

「おう!」

全員で無事にポップコーンを購入し、映画館へと戻る一行。そういえば、委員長は塩

味のポップコーンだったんだけど、意外とポップコーン好きだったのだろうか。

「あ……あの人は」

映画館前にいるのは紛れもない、ハイドだ。相変わらず職質かけられそうな格好しているな。

「アイツは……さっきの不気味なヤツ……!」

「静かに。関わりあいにならないほうがいい……」

『オリヒメ様……ご覧になっていきますか?まもなく開演いたしますよ。このハイドによる、空前絶後のホラームービーが……ソフフフ』

一般人の前でボスの名前を明かすバカが一匹。オリヒメさんも苦勞してそうだ。可哀想に。そのバカは館内に入っていったけれど、館内にウエーブホールなんてあったわけ?

ーブー!まもなく後編が開始されます。席にお着きになってください。

「ヤバツ、急いで戻ろう!」

ーブー!では、後編を開始いたします。

さて、後編が始まった。さて、ポップコーンを食べようか……！

「スバルくん、スバルくん」

委員長？

「(どうしたの?)」

「(えっと、ほら、アナタ-half & halfが食べたいって言ってたじゃない? ワタシ、あんまり食べられないし……その、少し分けてあげても、いいわよ……?)」

何でそんなに詰まってるのだろうか。でもありがたい申し出だ。やった!

「(ホント? ありがたいとう! それじゃ遠慮なく……)」

うーん、美味しい。やっぱりポップコーンは-half & halfだよ。間違いない。

「(美味しい……あ、委員長も少しどうぞ。分けてくれたお返しに)」

ギブアンドテイクは当然だ。何かしてもらったら、何か返さなきゃ。

「(え? あ……その、いいの? それじゃあ……あ、美味しい)」

そ、そんなに大事に食べなくても。ポップコーンは逃げたりしないよ? それになんかこの塩味のポップコーン、妙に甘いな……キャラメルじゃないし、なんだこれ? 雰囲気? よくわからない。

そろそろ映画に集中した方が良さそうだ。

『た、助けて……! オバケの掃除屋さん……!』

『ドロロ〜ン！いくら叫んでも、あの掃除屋は来な……』

ーバッシュ！

明かりが消えた。映画も止まった。ということは……来たか！

「あら、何かしら？……演出？」

「真っ暗だね……」

ーパツ！

「おつ、明かりが着いた」

「ん？映像が消えていますね」

ゴン太とキザマロって、意外に暗い場所とか平気なんだろうか。小学五年生なのに、結構胆力あるよね。

『レディース・エーンド・ジェントルメーン！！ンフフ……』

この煽り……笑顔教の尖兵か!?バトルで皆を、笑顔に……！

『ここにいるアナタたちはラッキーな方々だ。今から、今夜限定のスペシャルホラームービーをお送りしようではないか！』

館内の客席後ろに配置されていた洋館の屋根、その最も高い位置にヤツ……ファントム・ブラックはいた。風もないのにたなびくマントが痛々しい。

ーざわ……ざわ……

観客たちが騒ぎ出す。そりゃあ、聞いてないだろうからね。というか、スタッフの人くらい名乗り出てこないものだろうか？

「今夜限定？そんなの聞いてないけど……」

委員長が呟く。映画館だって、まさか乗っ取られるとは思ってないでしょうに。

「オイ、スバル！アイツ、映画の登場人物なんかじゃねえぞ……！ちゃんと意思を持った電波人間だ！」

「わかってる。流星に場馴れしたからね。あの迫力……本物だと思うよ」

『監督、脚本、主演、すべてこのファントム・ブラックによるものである。以後お見知りおきを……では、早速上映するコトにしようではないか！……ハアッ！』

ーざわ……ざわ……

ファントム・ブラックが手にしたステッキを振りかざすと、閃光が映画館を満たす。



閃光が止むと、そこには黒い帽子のようなものを被ったオバケ、確か……オロロンが出現していた。

「さつきとは、また違うオバケだぜ……」

「(ヤ、ヤバイ……ありや電波ウイルスだ!)」

「(でもここには、ウエーブホールがないよ。今は無理だ)」

『ソフフフ……さあオマエち、ここにいるお客さんたちを……襲うのだ!』

ゲツ、こつちを先になんとかしなきやダメかな、これは……!」

『キャツ!』

『アワワワワ!!』

『うひゃく!!』

『じ、じいちゃん、怖いよお……』

『ナンマイダ、ナンマイダ!』

まだ様子見に近い感じだけど、やっぱり先に館内のウイルスをなんとかしておこう。

ゲームより面倒だ……!」

「なんなのよ、コレ!」

「ま、まさかホンモノ!?!」

「あっち行けって！」

『ソッフッフ……オリヒメ様、ご覧になっていきますか？ 愚かな人間たちが悲鳴を上げておられます！ 貴女様のご期待通りでございましょう！? ソッフッフハハア……ハッハ!!……つと、失礼。あまりに愉快だったものでね、ソッフッフ……』

コイツホント腹立つ性格してるな。

『さて実のところ、この脚本にはヒロイン役が用意されている。が、まだキャスティングが決まっていないのだ。そこでだ、この中から選ばせてもらおうと思う、ソッフッフ……』  
フアントム・ブラックがその愉悦に歪んだ顔で、客席を眺め回す。わかってるけど、委員長が凄く心配になってきたぞ……!-

『……決めた。そこのお嬢さんだ』

委員長を指し、そう宣言するロリコン。  
フアントム・ブラック

「え……ワタシ!？」

『イメージにピッタリなのだよ。ハッ!!』

またか！ 閃光が晴れると、既に委員長は拉致されていた。ロックマンなら見切れたかもしれないけど……

「い、委員長?」

「どこに……?!？」

ゴン太とキザマロも困惑している。これだけ友達思いでキズナリヨクが一人あたり25つて、かなり低くないかな？

『キヤーー!!た、助けてー!!』

委員長の叫び声。洋館の屋根には、既に軽く縛られた状態の委員長が抵抗しようともがいていた。

『クライマックスの舞台はTKタワーの屋上だ。アツと驚くラストをお見せしようではないか。是非、足を運んでくれたまえ。もしも来られるのであれば……だ。ソフッフ……』

「ああつ!!いいんちよー!!」

「き、消えたです!」

今日幾度目かの閃光の後、ファントム・ブラックは姿を消した。電波人間はなにかをするときにはフラッシュするのはデフォルトなのだろうか？

「よし、ロック」

「わかってる、まずはウエーブホールだ。館の外に出るぜ。あのウィルスどもに絡まれないよ?オレ一人じゃ手間だからな」

別に処理出来ないわけじゃないのね。

「誰に言ってるのさー！」

「いいぜ、その意気だ。久々に思いつきり暴れられるかもしれねえ……！コイツはラツキーだったかもな」

バトル思考過ぎない？

「先ずは館内のウィルスだよ。ファントム・ブラックは委員長を傷つけない。それをやったら悪役になっちやうからね」

「だな。まずは肩慣らしといくか！」

「オーライ！任せといてよ！」

さて、ウエーブホールは何処にあつたかな……

——映画館内の電波——

「セアツ！」

ワイド剣スラツシユ！ワイド剣スラツシユVの字斬り！

「オロロン!?!」

よし、これで館内のウイルスは全てデリートしたぞ。結構時間を食ってしまった。あとは……そうだ。取り敢えずエレベーターの電源を復旧しないと。またオロロンどもが来たら元も子もない。避難路の確保だ。

『あれ？オバケが消えた？』

『こつちもだ！……どうなってるんだ？』

デジタルゾーンではなかったか。それじゃ、ロックマンはクールに去るぜ……

——シヨツピングプラザ1階——

電波変換したまま、ウェーブロードを伝って降りてきたボクたち。出入口には何だか危ない雰囲気のおロロンがいる。どうやら、おロロンどもに本物の幽霊退治を見せてやる時が来たようだ！

「オイ、スバル！そのウィルスはヤベエぞ！危険なエネルギーを発してやがる。近づくと電波体でもヤバイかもしれないねえ……！」

「大丈夫だよロツク。こんな時は……ジャジャーン！さつき買ったマテリアルウェーブ……！」

「そのダミ声は何なんだ？」

気分だよ、気分。

「兎に角、もしかしたらコイツで何とかなるかもしれないってこと。どう？試す価値はあるんじゃない？」

「へへッ、即席のゴーストハンターってヤツだな？いいぜ、そういうの！オレは好きだ！」

ロツクにも好評なようで、何より。

「それじゃいくよ……マテリアライズ！掃除機！」

『シュココ……!!』

名前は……吸い太郎っていうらしい。オーリーより控えめな気がするな。

「よし、オバケ退治といこう！」

『オイラは掃除機のマテリアルウエーブだシユ。名前は吸い太郎だシユ』

語尾が……潜水用のマテリアルウエーブもそうだけど、悲しみを背負ってるよね。マテリアルウエーブって。

「吸い込んで欲しいのは電波ウィルスなんだけど大丈夫？」

『オイラの体はマテリアルウエーブ……つまり電波だシユ！相手が電波でも問題ないだシユ！』

よし、ささっと終わらせよう。委員長が高所恐怖症にでもなったら、大変だしね。

「なら、いくよ！スイッチ・オン!!」

『シユココココ!!!』

ーギユイイイーン!!

凄い吸引力だ。10000ゼニーの割には高性能な気がするな。だって掃除機つてもつと高価なモノでしょ？

「オロロ〜ン!!」

恐らく館内を封鎖することを目的に配置されたオロロンたちは、抵抗もなく吸い太郎に飲み込まれていった。

「ミツシヨンコンプリート！」

「他愛ないもんだぜ……ん？」

ーバチバチ！バチバチ！

吸い太郎がバチバチと警告音のようなものを鳴らす。確か満腹なんだっけ？というかこのウイルスたち、どうしよう。……ダストシユートとかに入れてもいいのだろうか。

『……ゲフ、お腹一杯でもう吸い込めないでシユ』

「お疲れ吸い太郎。あとはゆっくり休んでいいよ」

『すまないでシユ』

ーバシユッ！

勝手にスターキャリアーの中に戻っていく吸い太郎。ま、しようがないよね。後は……

「おつとそうだ。エレベーターが止まってるんだったね。こういう場合、大抵はカウンターの何処かに予備電源が……あった！それじゃ、ポチツとな」

よし、これでエレベーターは動いたはず。館内に閉じ込められるということは無くなった。さて、外に行こう。

ーローツポンドーヒルズの電波ー



「オイオイ、コイツは……」

『オロロ〜ン』

外は真つ暗で辺り一面オバケだらけだ。元々夕方からの上映だったから、今は9時〜10時くらいだろうか。……確認したら10時30分を少し回ったくらいだった。少しウィルス討伐に時間をかけすぎたかな？

人が襲われているのは確認出来ないので、皆建物の中にでも籠っているのだろう。そこはよかった。

「一つの町を一瞬でこんなパニックに出来るとはな。あのマント野郎、結構ヤバイヤツだったのかも……」

ロツクのロリコンへの評価が上方修正されている。過大評価な気もするけどなあ……

「でも、アイツ自身はまだほとんど何もしていない。恐らくあのウィルスも、外付けの手下的なものだろうし……オヒユカスみたいに生み出しているわけじゃないから、多少は楽じゃない？」

「そうかあ？まあ、やってみなきやわかんねえよな……ウズウズ……」

左腕が疼く……！って、これじゃ中二病みたいじゃないか！止めてよホントにさあ

……！

「ほら、早くTKタワーの屋上に急ごう！道中でウィルス退治も忘れずにだよ！」

あのオロロンどもを駆逐しておかないと被害が出るかもしれないし……タワーのウエーブロード上にいるヤツは知らんけど。

「わかってるっての!!」

——TKタワーの電波——

TKタワー内部への入り口には、先ほど吸い込んだばかりのオロロンと同種のオロロンたちがいた。コイツらにさつき吸い込んだオロロンをぶち当てれば……いや、無理か。

「やはりタワー内部からは無理か。掃除機も使えねえし……よし、ならウエーブロードを伝つてくぞー！見ろ、屋上まで繋がってるいやがるぜ」

「元々、エレベーターだけで屋上に行けるとも思わないからボクも妥当だと思うよ」

普通に考えて、屋上への扉が解放されてるとも思わないし。エレベーターみたいに封鎖されてるんじゃないかなあ。どっちにしろウエーブロードを使うしか方法はないと思っただけだね。

「よし、それじゃタワーのウエーブロードへ繋がってる場所は……あつたぞー！」

TKタワー側に配置されているワープポイント？みたいな場所からタワーのウエー

ブロードに飛ぶことが出来る。見た目としては、以前ステーションに飛んだ時に使ったものをダウングレードした感じだろうか。

「よし、それじゃあ早速……!」

ワープポイントに飛び込むボクたち。一気にタワーのウエーブロードへ飛ばされる感覚。最高だ!イヤッホオオオ!

ーチユイン!

「よし、無事にたどり着いたな。行くぜスバル!」

「うわあ……結構高いね……」

これ、落ちたらどうなるんだろう。想像はしたくないなあ……

「そんなの平気だろ?落ちそうになったら、手近な電脳にウエーブインするか、ウエーブアウトしちまえばいいぜ」

「いや、まあそうなんだけどさあ……」

景色はキレイだし、楽しむ方向でいくか。わあ!夜景がキレイだなー(棒)

「おっと、誰か倒れてるぜ」

誰かっというか、デンパくんだ。

「キミ、大丈夫?」

「オ、オバケにやられました……アナタもキをツケてください」

「オイ、スバル！来たぜ！」

ウエーブロードの先からオロロンが近づいてくる。大丈夫。当たりさえしなければ、襲ってはこない。

「……行つたね」

やはり何もしてこない。

「ウ、ウウ……あの、オバケたちは……オバケたちのモクヒヨウはあくまでニンゲンらしくって、ワレワレデンパタイにはあまりカンシンがないみたいなんデス。きづかれなければナニもしてきませんが、もしチカづきすぎたりすると……ワタシのようなメにあつてしまいますよ……キをツけてください……」

なるほど……これはもしかして、サイレントミッション的な感じになるのかな？

「だよ。スバル、どうする？」

「うくん、出来るだけ避けていく方針で……」

体力を浪費し過ぎるのもどうかと思うなあ。

「わかつたぜ、まあ仕方ないわな。それじゃミッションスタートだ！」

声！声がデカイって！

「気づかれるってば！」

「ワリイワリイ……」

改めて、ミツシヨンスター！

——二時間後——

結構、キツイ！流石に日本一を誇る高さだ！まだ半分くらいなんだけど、無理ゲーっていうか無謀じゃない!?ゲームとは段違いに長いんだけど!?しかもオロロンを避けながら進んでるから、余計に時間がかかってしまう。ベルセルクがあればなあ……

「オイ、スバル。大丈夫か?」

「お子様には、結構ツライ時間かな……?」

ボク自身は、割と夜にミソラちゃんが遊びに来る関係で夜型の人間だ。元々天体観測が趣味だったしね。しかし、こうも登ってばかりだと小学生にはキツイ。多少は鍛えていたとは言っても、まだまだ一人前のデュエルマッスルには程遠いからね。精進あるのみだ。あれ、筋トレの話だっけ?

「もう少しで半分だ!……止まるんじゃねえぞ!」

ロツクのアホオ!気の抜けるようなこと言うなよ!

「もう……あ、ウエーブロードが途切れてる……」

確か……は……

『うつ、うわああ!!』

「スバル、下だ!」

オウガテイルはイヤア!じゃなくて……作業員の人がおロロンに襲われている。故障している箇所でもないか、調査していたのだろうか?

『だ、誰かあつ!』

『お助けく!!』

実は結構余裕なんじゃないかと疑いたくなってしまう。お助けく!!なんて普通言わなくない?

「それじゃ、助けに行くよつとオツ!」

「ヒヤッホウ!」

作業員の乗っているリフトは丁度真下にあつたので、そのまま飛び降りる。一々降りていられるか!

ーードシン!

いくらボクが身軽な小学生と言えども、思いつきり飛び降りたら振動くらいは起きる。

「な、何だ!?!」

「オロロ〜ン?」

不意打ち上等！ロングソード三段突きイ！

「セアアツ！」

「オロロ〜ン?!?!」

フウ……何とか仲間を呼ばれずに倒せたか。

「よし、倒したぞ！」

バレないようにバイザーを操作し、顔を覆っている部分の色を濃くして見えにくくする。

「ありがとう、青い少年!!」

「見えてるのか……」

『私』を……見たな！

「どうやら、オレたちは『ビジブルゾーン』に入っちゃったようだな。見えないはずの電波も、人間に目撃されることが希にあったりする。それはその電波がビジブルゾーンに入っちゃったからだ。ビジブルゾーンに入った電波は周波数に変化が起こり、人間からも見えるようになっちゃまうんだ」

解説乙。

「つてことは、ここはそのビジブルゾーンか」

「ああ、そのようだけ。ビジブルゾーンは何の前触れもなく突然発生する特殊な空間だ。

めったに遭遇するもんじゃないんだが……」

これからはしょっちゅう遭遇するから心配いらぬよ。ていうか、電波体同士が戦うとビジュアルゾーンが発生しやすくなるんじゃないやなかつたっけ？

「キミは一体何者だ？」

「……ボクは通りすがりの……」

「ーガコン!! ウイーン!

「ん!?!」

「うわーっ!!」

電波人間です。と言おうとしたんだけど、その前にリフトの操作ボタンに触れてしまったらしい。戦闘するためウエーブロード上にいたボクは置いていかれる形になってしまった。ここから登り直すのか……

『スママセン……上昇スイッチを押しちまいました……』

『気をつけてくれよ!! 折角青い少年が助けてくれたつてのに、ゴンドラから落っこちたら元も子もないだろ!』

なんて言ってるのが聞こえる。

「おつ、道が繋がったぜ。これで先に進めるぞ!」

ウオーロックアタックでも向こう側へ行けたような気がしてならない。



――五分後――

よし、さっきの場所まで戻ってこれたぞ。

やはりリフトで通れるようになってる。

「た、助かった……キ、キミ、何者かは知らないけど恩にきるよ」

「ありがとう、キミのお陰で助かったよ……」

「気にしないでください！先を急ぎますので……！」

「ああ、通ってくれ。すまないな」

「いえ、ではこれで！」

あと半分か……

――三時間後――

「や、やっと屋上までたどり着いた……」

さっきよりオロロンの数が増えるなんて聞いてないよ！特にダメージは負っていないけれど、取り敢えずリカバリー使つところ。多少は疲れが紛らわせるはずだ。

「もう一息だ。頑張れよ、スバル」

確かファントム・ブラックがいたのは一般解放されてる屋上の更の上、TKタワーのアンテナ付近のウェーブロードにいたはずだ。

「わかっている。わかっているけど……ファントム・ブラックめ、わざわざこんなところで待つなんて……!」

「バカと煙は高い所が好きってことなのだろうか？」

『キャアアアッ!!』

悲鳴?! 委員長の声……ではない。同じ年くらいの女の子がオロロンに襲われている! 紛らわしいなあ、もう!

「オロロロン!」

「ヒイ!」

凄くビビってる。これが普通の反応か。

「今助ける! ハアツ!!」

ウオーロックアタック! 左腕にソードを展開して斬りつける。オロロンハットを投げる暇など与えるものか!

「オロロロン!?!」

「まったく、弱くて多いとか最悪でしょう、このウィルス。」

「た、助かりました!! ああ、あの……お名前を……」

「ゴメン、もう行くから!」

一々答えていられるか！さっきのはファンサービスだから！

「あつ……」

顔が赤いけど知らん！

『ひえ〜！助けとくれ〜!!』

今度は老人か！

「何でこんなに外にいる人が多いんだ！」

「まったくだぜ！」

しかもここは屋上だぞ!?室内に隠れてろってんだ！

「ナンマイダ、ナンマイダ〜!!」

「オロロ〜ン！」

またこのパターンかよ！今度は不意討ち一択だ！

「疾ッ！」

高速でオロロンの背後に位置取りし、オロロンが気づく前にモエリングを押し当てる。焼けちまえ！

「オロロ〜ン……」

サラサラと消えていくオロロン。周りには……もういないな。後はファントム・ブラックだけだ！

「ありがたや、ありがたや……それにしてもあなた、強いのお……」

「若さです！ではこれで！」

この先にあるワープポイントからいけるアンテナ上部のウェーブロードに、ヤツがいはるはずだ。しかし、何だか腹が立ってきたぞ。こんな重労働させるなんて、脚本家の風上にもおけないっての！……そうだ！

「ねえ、ロック。ちよつといい？」

「あん？何だよ、休憩か？」

それもあるけどね。

「重労働させられっぱなしじゃあ、なんだかシヤクに触るでしょ？だからさ

………つて感じはどう？」

「なるほど。思いつきり………してやるのか！いいなそれ！乗ったぞ！」

決まりだ。ファントム・ブラックめ、このままただボコつて帰すと思うなよ………！

「よし、行くよ！」

「ああ！」

ーチユイン！

ーTKタワー屋上の電波ー

「ルナちゃん！大丈夫!？」

委員長呼びから素性を看破される危険を回避するため、今は名前呼びだ。仕方ない。委員長もきつと、わかってくれるはず。

「な、名前呼び!? あ、いや、その……………た、助けに来てくれたのね!? ロ、ロックマン様!」

アンテナ近くにあるそこそこ広い足場にて、拘束されている委員長を発見した。近くにフアントム・ブラックの姿は……………上か!

「おやおや……………ソフフフ」

バーカバーカ! 何で電波変換解いてるんだよ! 生身でアンテナの上に乗るとか、もはや狂人の所業だぞ!?

「よもや、ここまでたどり着く者がいるとは……………私の描いた脚本には全くない展開ではないか」

「さっきのマント野郎じゃない……………?」

「あの人は今日何度か見かけた職質かけられそうな人……………」

わかってるけどね。

「失礼、自己紹介が遅くなった。『ハイド』……………それが私の名だ」

「ハイド、ハイドねえ……………」

「……おや？ンフフフ……これは驚いたな。その姿は電波人間……キミは電波変換が出来るのかね？」

見ればわかるだろうに。というかここもビジブルゾーンか。生身のハイドにも、ボクたちの姿が見えている。

「おもしろい……実に面白い脚本になってきたぞ！」

「電波人間のコトをよく知っているみたいなき草だ」

「ンフフフ、知っているとも。まさか自分だけが特別だとも？」

そう言つてスターキャリアーに似た端末を出すハイド。普段から使っているのだからか。

「出でよ、我がしもべ……ファントムよ！」

ま、まさか……ペンデュラム召喚!?ファントムとか、もろ真ファの榊遊ントム矢じやないか！

ーピカアッ！

何て間抜けな想像をしている間に、ハイドの偽スターキャリアーからは赤いオバケのような電波体……ファントムが出現した。弱そう。

「呼んだかい？ハイド。人間にイタズラでもするの？キヤキヤキヤ！」

笑いかたキモッ！

「スターキャリアーからオバケが出てきたね」

「あれは恐らく電波体だが……妙だぞ。ヤツから得体のしれない周波数を感じる。こんなのは初めてだ」

確か……電波変換の相手を選ばないんだっけ？ぶっちゃけかなり凄いよね、地球産の電波体って。

「名はフアントム。街で暴れているオバケたちの『ボス』だ」

ああ、そういう……

「アイツらを大人しくさせたければ、ボクに頼みなよ。ま、頼まれても絶対言うこと聞かないけど。キャキャキャ！」

ならばジャツジメントチエーンしかないな！オバケを退かせるか、それとも死か！でも確か、ある程度の同意が必要なんだっけ？忘れちまったよ、富樫なんて言葉……

「ソフソフ……さあいくぞ、フアントムよ。電波変換！ハイド、オン・エア！」

ノリノリで電波変換するハイド。ぶっちゃけ実際の戦闘力はヤムチャみたいなものだけ。

「電波変換しやがった！」

「ハッ！」

電波変換したハイド……フアントム・ブラックは掛け声と共に眼前へと瞬間移動してきた。割とフワッと現れたね。あんまり移動スピードは早くない。

「この姿を私は自らこう呼ぶ……『フアントム・ブラック』と……中々美しいだろう？」  
服装はピッタリだけど、ヘアースタイルと口調で台無しだよ！

「フアントム・ブラック、アンタは……！」

「ここからは、ボクたちのターンだ！」

「スバル、コイツ多分マジだぜ……！」

「ソフフフ……恐れ戦いた、と言ったところかね？」

「そんなワケあるか！」

「まったくよお、キヤクホンカを名乗るなら事前のキャスティングくらい済ませとけてんだ。なあ、スバル？」

「そうだ！いくらルナちゃん可愛いといつても、拐かすなんて！アンタは今、世界中の紳士を敵に回したってことを覚えとけ！」

「イエスロリータ、ノータツチだろ！そんなの基本でしょうが！委員長は愛でるものなんだよ！」

「……何を言っているのかはわからないが、まあいい。それでは……我が『古代のスターキャリアー』のチカラ、その身で思い知るがいいとも！」

「性能にあんまり差はなかったはずだけど……」

「ちよつと待て、古代のスターキャリアーだと……？オマエ、何が目的なんだよ！街を滅



茶苦茶にしやがって！」

完全にバトルに入ろうとしていた所へ水を差すロック。そんなに気になったのだからか。

「……このTKタワーは日本中に電波を供給する重要施設だ。もし、それを占拠したらどうなるか？ 想像してみるといい」

サテラポリスがすっ飛んで来るんじゃないの？ そこからハイドの指名手配までは秒読みだと思う。国家権力って結構ヤバいし……

「……電波を支配すれば、人々を支配出来たも同然なのだよ。主人公がヒロインを連れてこの二ホンを支配する……それがこのホラー映画のフィナーレなのだ。最高だろう？ ンフフフ、ンフフハハアアアハッハ!!」

だから笑い方怖いつて。

「まずはルナちゃんを返してもらおう！ アンタのフィナーレは……ここだ！」

「……止められるかな？ 映画の主役は強い、と相場は決まっているものだ」

嘘つけ！ 強い俳優アクトーなんて聞いたこと……あんまりないぞ！

「ロック！」

「いくぜ……！」

半身になってポーズをとる。

「さあ、お前の罪を数えてもらおうか!!」

決まった!これだけはやりたかったんだ。ちよつとオマージュだけどね。

「ンフッフ……脚本家ワタシに罪はないとも!そうさ、罪深きはキミたち……脚本家ワタシの想像を掻き立ててしようがないキミたちなのだよ!ンフッフハハーハーハッハ!!」

「コイツ開き直りやがった!」

「やるよロツク!ウエーブバトル・ライドオン!」

クソ雑魚ブロツコリー……じゃなくてヤムチャ・ブラックなんて蹴散らしてやる!

——TKタワー屋上の電波——

戦闘が始まったのだけれど、ファントム・ブラックは例のフワツとした瞬間移動で数メートル後方に下がり、そのままフワフワと滞空したままだ。滞空といっても数センチから数十センチといったところなので、ドラえもんと大差はないと思う。

「ンフフフ……まずは様子見というヤツだ。安心したまえ、悪役にも見せ場は用意してやるとも。見事な散り様というものを遂げさせてあげようじゃないか！ンフフフ！」

うへえ……気持ち悪い。しかも幼女趣味とは救えないよ。寧ろ同情するね、可哀想に。(棒)

「どうするんだ？」

ロツクが聞いてくるけど別になあ、と言った感じだ。ぶつちやけ負ける要素があんなりなさそうだしなあ……

「いつも通りでいいんじゃない？」

「ま、そうだよな！」

警戒し過ぎても敵の思う壺って感じだし。ここはゲームのクソ雑魚ファントム・ブ

ラックだと思つてやるしかない。ただ、しぶとそうなんだよね。

「んじゃ、いくよロック!」

「おうツ!ウラアアアツ!!」

ウオーロツクアタツクで瞬時加速、一気にファントム・ブラックの眼前に躍り出る。左腕にはシンクロフック。まずはワンパンだ!……意味違うけど。

「セアアツ!」

「何ツ!?!……グハツ!」

よし、入った。目線を見るに、多分対応出来てない。電波体、特に電波人間同士のバトルでは動体視力が命だというのに。未知の能力に対応するには、事前知識か動体視力なりの見極めを鍛えなきゃいけないんだよ。ボクは前者+後者つて感じだけど。強い。

(小並感)

「……なるほど。私の脚本に割り込む程度のチカラはあるというわけか。ならば私も、そろそろ反撃タイムといかせてもらおうかツ!」

余裕無くなるのはえーよホセ。

「ンフフフ……」

不気味な笑顔のまま、フワツと消えていくファントム・ブラック。殴られた頬が赤くなければ完璧だったのね。

「消えた?……スバル!」

「わかつて、るッ!」

無言で背後に現れたファントム・ブラックが、手にしたステッキソードで斬りかかってくる。思いつきり不意討ちじゃないか!というかシールドでガードした感じ、剣じやなくて普通のステッキだコレ。つまりは鉄血メイス先輩……!?いや、ほっそいステッキだった。ひ、貧弱過ぎる……!」

「ソフソフ……中々の反応だ」

それはさつきウオーロックアタックに反応出来なかった自分への自虐? 酷いピエロだ……

「なら、こつちからッ!!」

あんまり長引かせて、データを採られるのもマズイ。取り敢えずは適度にゴコつて撤退してもらおう。

「うおおおっ!!」

左腕にソードを展開し、前方に出現したファントム・ブラックに袈裟に斬りかかる。

これは決まった!

「ハアッ……アレ?」

斬ったと思ったら、幻? いや、瞬間移動で避けたのか。中々上手い使い方だ。

「甘いッ……ハッ！」

そして後方に再出現し、マントで首から下を包む。瞬時にマントを開き、中から大型の伸びる腕……ファントムクローを伸ばして攻撃してくる。確かファントムクローは防衛不可だったはず。避けるか。

「……………おおおッ!!」

伸びた腕を半身になつて避け、シールドで包んだ左腕で掴み、回転しながら思いつきり引く。当然、腕と繋がってるファントム・ブラックは……

「ヒートアップだアッ！」

「な、何だ?!?うわあああッ!!」

よ、弱っ……その辺のウィルスにもやられそうなのはボクの気のせい? 取り敢えず吹っ飛ばされたファントム・ブラックは、TKタワーの外壁に背中から衝突し崩れ落ちた。これが敵さんの幹部か……

「グ、ググ……な、中々やるな。よ、よろしい。き、今日のところは、この辺で幕引きに……………」

無理すんなよ。もういいでしょう?

「……………」

「こ、今回はそれほど無理をするな……」。そ、そう言われているのでな……」

満身創痍じゃないか！リカバリーサービスでもした方がいいかな？煽りになりそうだけど。

「せ、せっかくのホラー映画が台無しになってしまったのは、い、いささか癪ではあるがね……ただ、これだけは約束しておこう。今日は私の風が吹かなかったようだが、いずれ更なる恐怖をお見せする……と」

ーバシユツ！

音と閃光からして、恐らくはウエーブアウトだと思う。それよりも、あれだけポコポコにされてたというのになんという強キャラ感だ。そのうち対閃光防御とか言い出すに違いない。(棒)

「消えたか……大した敵じゃなかったな、スバル」

ロツクの講評が酷い。まあ、ぶっちゃけ弱かったからね……。いくら数字的ダメージより肉体的ダメージの強い殴打系のカードで攻撃したからって、小学生にツーパンとか流石に情けなくない？

「そうだね……しぶとそうなヤツだったけど」

「違いねえ！ギャハハハハ!!」

ちよっと、下品だつてば……

「だがよ、妙なスターキャリアーと得たいの知れない電波体に、電波変換……多分、いるぜ。アイツ以外にもな。久々に、血が疼いてきたぜ……!」

ロツクは年中ボクの左腕で疼いてるじゃないか。ヤバい。中二病にしか見えないぞ。

ーざわ……ざわ……

下の方が……何だか騒がしいな。野次馬?

「おい、タワーの下が騒がしくなってきたぜ」

「ホントだ。それに日も明けてる……」

うわあ……徹夜でタワー登ってたのか。ファントム・ブラックは瞬殺だったからノーカンで。

ーざわ……ざわ……

『……夜が明けてきたぞ』

『……あつ!見て!ビルの天辺に何かいるわ!』

『ほ、本当だ……あれは……人?』

『あ、あの人に助けられたんだ!』

『オバケに襲われて危ないところを助けてくれたんだよ』



『じゃ、もしかして……さっきの助けてくれた、カッコいい人……?』

ーざわ……ざわ……

「うわっ、皆こつち見てるよ……手でも振ってみる?」

「いいじゃねーか! やってみろよ。ファンサービスつてヤツだぜ?」

ロックに本当のファンサービス（物理）を教えてやろうか……?

「しようがないにやあ……」

タワー下にいる人たちに、手を振ってみる。

ーキヤーキヤー!! ワーワー!!

いい気分。

「スバルくん!? ワタシのこと、忘れてない!」

あ、忘れてた。……そうだ。いいことを思いついたぞ。

「ゴメンゴメン……それじゃ、運ぶからね。体を楽にして……」

委員長の背中と足に手をかけ、一気に持ち上げる。

やっぱり軽ッ! ファントム・ブラックの弱さより驚いたよ……

「え? ああ、そうね……って、抱っこ!」

「こつちの方が大衆受けが良さそうだし……患者を倒したヒーローは見事、お姫様を奪

還しました！みたいな？」

ぶつちやけ少女誘拐なんだよね、コレ。事案怖い。おまわりさんこつちにこないでください。

「う、あ……その、えつと……ううう……お願い、するわ……くっッ！」

「うわっ、ちよつと委員長？」

「いいから！早く！」

顔を押し当てるのは止めてくれませんか……？バランスが崩れちやいそうだ。

——キヤーキヤー！！キヤーキヤー！！

何か全体的に女性が騒いでる比率が大きい気がする。よくわからないけどね。

——三十分後——

取り敢えず、人気のないところまで退避することに成功し電波変換を解いたボクたちは、映画館の前に戻ってきていた。ゴン太とキザマロが映画館内にいるのは連絡で知っているからなただけだ。

「そえばケガとかない？」

「大丈夫よ。あの男さえ視界に入らなければ、夜景を楽しむ余裕はあつたしね」

そういうモノなの？

「まあ平気ならいいんだけど……」

「……その……何て言うか……カ、カツコよかったわよ」

今更？

「確かに、今日のロックマン様はカツコよかったもんねえ……突如あらわれ、お姫様を  
浚った悪党相手に殴って殴っての大立ち回り！そういうえばパンチしかしてないな……」

酷い戦いだった。

「か、勘違いしないでよね！ロックマン様だけじゃない、アナタもカツコよかったわよ  
！」

なんとという高度なツンデレだ……。ボクには何を言ってるのかよくわからないよ。

「はあ……」

「よくわかってないような顔ね……。まあいいわ。あつ、そうだわ。えつと、何て言うか  
………例のアレをここで……」

ああ、ブラザーバンド？

「ブラザーバンドでしょ？丁度いいし、結んじやおうよ」

「そ、そうよ！ブラザーバンドよ！ワタシ、結構楽しみにしてたのに……」

「え?」

別に結び直すくらい、普通じゃない?

「ほ、ホラ! えつと……これからもワタシの、大事な………大事な、と、友達でい、いてね……」

???

「そりゃ、もちろんだけど……まあいいや。これからも宜しく、委員長!」

ええつと、ブラザーバンドを結ぶには……ここをこうして……よし!

「これで完了!………つて、ええつ!」

なんだこれ!?

「な、何!? 何か起こったの!」

心配するような顔の委員長。いや、これは流石に……

「キ、キズナリヨクが……」

「キズナリヨク?……な、何コレ!? き、380……!?」

何で!? 委員長の元々のキズナリヨクが80だから……300。一人で、300……!? キズナリヨクシステムがおかしいってことは……なさそうだ。だって昨日届いたんだし。

「これは……喜んだ方がいい、よね?」

「え、ええ。そうね。とても好ましい状況だわ」

好ましい？ どういうこと？

「よくわからないけど……取り敢えず、ゴン太たちを迎えに行こうよ。ボクもうクタクタ……」

日本一高い建築物を一夜かけて登ったんだ。疲れも溜まるよ……

「フフツ、それじゃあ、帰りのバスではワタシに寄りかかってもいいわよ？ それくらいはしなくちゃね。♪♪♪」

委員長もご機嫌みたいだし、さっさと二人に合流しなくちゃ。ふあーあ。眠い……

「あ、来ましたよゴン太くん」

「おつ、大丈夫だったか？ 二人とも」

軽いけど、その軽さが逆にありがたい。根掘り葉掘り聞かれたら困ってたところだよ。

「何とかね。ただ、凄く眠い……」

「チエツ、ポップコーンのおかわり貰いにいこうと思つてたのに。まあ、しようがねえな」

ゴン太はブレないねえ……そこがちよつと羨ましいけれど。しかし、夏休みまで後少しだ。次の敵まではまだ時間があるし、暫くは筋肉痛と戦つても文句は言われないよね

……？

「あゝつ!!」

「何!？」

どうしたんだよ、ゴン太。珍しく大声なんて出して。

「オイスバル! ハーフ&ハーフのポップコーン、今日からだつてよ!」

ななな……何だとオツ!?

「そ、それは本当!?!……本当だ! やつた! 頑張った甲斐があつたよホント……」

お陰で目がパッチリ覚めた。よし、今日はポップコーン食べるまで帰らないからね!

「すいませーん! ポップコーンのハーフ&ハーフ、Mサイズでください!」

待ちに待ったハーフ&ハーフのポップコーン! やっぱりボクはツいてるってことだね。

「申し訳ありません。先程の騒動でポップコーン用のマシンが故障してしまいました……ただいま提供させていただくことが出来ておりません……って、お客様!？」

「」

真つ白に、燃え尽きたよ……

「(スバルが死んだ! この人でなし!)」

## 第二話 『ミスフォーチュン・オブ・イエティ』

## 9

——10日後・星河家——

ボクたちの学校は、夏休みに突入していた。当然の如く出された大量の宿題に、ゴン太がマジ泣きしていたのは余談である。兎も角！遂に入ったのだ。学生・生徒達最大の長期休暇である夏休みに！ああ、夏休み。なんて甘美な響きだろうか。ボクは知るだろう。ロックマンに休みなど無いことを……何だか悲しくなってきたな。

それにしても驚いたのは、提出課題にデータ以外のものがあつたことだ。自由研究等がそれに該当するけれど、完成したものは廊下に張り出すらしい。結構楽しみだ。

「ふあーあ……実に清々しい気分だ。歌でも一つ歌いたいような、いい気分だよ……」  
「待ちに待った夏休みってヤツが始まったもんな」

「そうそう。だからあのハイドってヤツの件さえ無ければもつとゆつくり出来るんだけどねえ……」

「ああ、あの『更なる恐怖』ってヤツか。だが今は、情報が少なすぎるぜ。考えたってしようがねえ。……それに、もつと色んなヤツと戦えるかもしれないねえだろ？」

ロックはもうちょっと警戒とかさあ……いや、ロックらしいっちゃらしいけれど。

「取り敢えず、不意打ちや拉致関係には気をつけよう。ボクたちは一度、それで痛い目を見てるからね」

「ああ、アンドロメダのカギの時か。だがアレは仕方ないんじゃないかねえのか？ 流石に他人まで気を配り続けることは出来ねえぜ」

「まあそうなんだけどさ。可能性として頭に入れておく位はしようってこと」

「ハイハイ……」

気のない返事だなあ。そういえばロックも夏バテとかするんだろうか。電波体が夏バテつても面白いけど。

ロープルル!!

あ、電話だ。

「ブラウズー！」

ロープルルン!

相変わらずハエが飛ぶような音で出現したエア・デイスプレイ。出現するときの音と違って要るの？ 盲目の人間の機能だったりするのだろうか。

「あ、委員長。おはよう」

『おはようスバルくん。今日はね、スバルくん提案があつて電話したのよ』



ああ、旅行先を決める件か。決定事項ではないところが少し驚きなだけだ。

「提案……どこかに遊びに行くとか？」

『そ、そうよ！折角の夏休みだし、何もしないんじゃないから、皆で旅行に行くと思うってね。どうかしら？』

それやあ、行くけど。行かなかつたとしても、結局雪男の件で行くことになりそうだし。

「もちろん、と言いたいところだけど……」

『え……？そ、そんな……！』

一気に冷や水でもかけられたように勢いを失う委員長。一々反応が面白い。

「一応母さんに話を通しておかないといけないでしょ？母さんがOKを出してからなら、いいよ」

画面の向こうで委員長が安堵の息を吐く。どれだけ心配だったというのだろうか。

「ホッ……ならいいのよ。それじゃ行き先を皆で決めるから、これからウチに来てちょうだいな」

あれ、あかねさんがOKを出すのは決定事項なの？いや、まあそうなんだけどさ。

「うん、わかつたよ」

「あつ、そうそう……アナタスターキャリアーのプロフィール機能、使ってないでしょう

!？」

「そうだったけ？」

結構ものぐさなところもあるから、放置してたかも……

「そうよ！折角ブラザーになったのに、相手の好きなものとかわからないと困るじゃないー！」

「それって、何が困るの？」

ぶっちゃけ、別に知らなくてもいいことなのは……？

「え？あ、そうね……プレゼントだったり、料理の練習の参考にしたりとか……た、例えばの話よ！」

イヤに具体的な話だったな。それに……

「料理？」

『あ……いや、何でもない！何でもないのよッ！ううっ……』

画面の向こうで委員長が半べそをかき始めたので、これくらいにしておこう。

『ううっ……グスン。と、とにかく！スターキャリアをバージョンアップして「プロファイル機能」を使えるようにしておきなさいよね……グスッ』

確か天地さんをお願いすればいいんだったよね。それに、そろそろアレが……！

「大丈夫？委員長……」

『ア、アナタに心配されるようなことなんてないからッ！ウチにはスターキャリアを  
バージョンアップしてから来ること。……いいわね!?……………グスン』

ーブツッ！

切れてしまった。委員長大丈夫かなあ……

「どうするんだ？」

ロックが若干の困惑を滲ませながら聞いてくる。流石のロックも委員長の半べそに  
は面食らったようだ。

「取り敢えず、天地さんのところに持っていこうよ。もしかしたらあっちの方も終わっ  
てるかも……………」

「おおっ！マジか!？」

「まだわかんないけどね。進捗状況くらいは知れるんじゃないかな」

既にお祭り騒ぎのロック。騒がしいな……

「よっし、それじゃとつとと天地のところに行こうぜ！確か……………ロツポンドーヒルズの  
ショッピングプラザに居たはずだ」

「うん、それじゃ行こうか！」

実はボクも結構楽しみだ。……………スキー旅行の話だよ？

ーピーロン！

あ、メールだ。確かここで初アビリティを貰えるんだっけ？燃費が結構良いやつだったような……

「メールだぜ？読んでみるよ」

「うん。ええつと……ビビビツ！やあどうもです！センジツはおセワになりました！……デンパくんからじゃないか！」

わかつてても普通に驚きだよ。デンパくんが勝手にメールを送ってきた相手なんて、ボクくらいなんじゃないの？

「続きを読むよ。……えつ、オボえてらっしやらない？ほら、TKタワーでのオバケソウドウの時、オバケにやられてノびてたデンパです！TKタワーをマモってくれたおレイにこれをおウけとりください！」

データが入ってる。内容は……『HP+50/50』だ。

「これは『アビリティウエーブ』、リヤクして『アビリティ』といって、ワレワレデンパのセカイではなくてはならないヒツジュヒンです！なんとソウビするだけでジブンのノウリヨクがアツプしちゃうスグレモノなんですよ！」

HPメモリの存在を忘れてはいけない……！

「たとえば、ワタシなんかTKタワーからサイシンのジョウホウをハッシンしているのですが、トレンドアンテナというアビリティをソウビしているおかげで、ヒトビトのク

チコミでヒロがっているリユウコウやトレンドをいちやくキャッチできるので!」

それってHP強化系よりよっぽど凄くない? 情報収集能力の拡張ってことだよな? 悪用すればかなりヤバそうなアビリティに聞こえるのは気のせいだろうか。

「なぜこのようなモノが生まれたかという点、かつてワレワレがスむデンパセカイは3つのサテライトによってアンゼンがマモられていましたよね? しかしそのサテライトはヤクメをオエ、イマはもうソーンザイしません」

そういえば、AM三賢者のいなくなったサテライトってどうなったんだろう。NAX A辺りにでも回収されたんだっけ?

「そのサテライトのかわりにデンパのチアンをマモるため、すべてのデンパたち、それぞれをパワーアップさせようとカンガえられたのです。それで生まれたのがアビリティというワケですね。きつとアナタもソウビでできるはずですよ! あ、そうそう……もしもワタシのナカマがタスけをモトめていたら、タスけてやってくれるとウレしいです! カナラずおレイはイタします。おレイといつてもアビリティをさしあげるくらいしかできませんが……ま、そんなこんなでよろしくおネガいます! それでは! ビビビッ! ……だつて。ハア、ハア……」

なげーよ! 何でアビリティ渡すのにこんなに長文なんだよ! 長文スマソ位入れてよ

!

「お、おう、ご苦労だったなスバル。取り敢えず、ソイツを装備してみようぜ」  
「わかってるよ……」

何だかくたびれたな……

「ええつと……はい、装備したよ。キズナリヨクの限界を超えた装備は出来ないみたいだね」

『HP＋50／50』で50使ったから、残り250。もつと送ってくれば良かったのに。

「なるほどな……そういえばデンパどものキズナリヨクって、どうなってるんだ？」

それは永遠の謎だよ……

「さあね。同じ職場のデンパくん同士でブラザーにでもなってるんじゃない？」

電波体同士でブラザーとはこれ如何に。

「うーむ、不思議だぜ……つと、あんまり油を売ってる暇はねえな。あのツインドリルにどやされる前に、バージョンアップを済ませちまおうぜ」

ああ、そういえば天地さんのところに行こうとしてたんだっけ。完全に忘れてたよ

……

「それじゃ、ロッポンドーヒルズに行こっか……」

「おう！」

ローロツポンドーヒルズー

バスに揺られること数十分。ボクたちはロツポンドーヒルズに来ていた。

「よし、大分持ち直してきたぞ」

「(天地のヤロウは……まさか夏休みの休暇中とか言わねえよな?)」

それは洒落にならない。

「じゃないといいけど……」

社会人に長期休暇を期待してはいけない。(断言)

ローロツピングプラザ2階ー

シヨツピングプラザの2階には、変わらぬ様子の天地さんがいた。天地さんに夏休みがなくて助かったよ。何だか酷いことを考えているような気がするけど。

「天地さん!」

「おや、スバルくん。どうかしたのかい? ああ、例のカードならもう少し待つてくれ。もう殆ど解析は終わっているから、今日明日には出来ると思うけどね」

「そうなんですか!?! って、そうだ。今日は別件で来たんです」

「もちろん、話を聞こうじゃないか」

——少年説明中——

「なるほど……スターキャリアーのバージョンアップ。……それならお安いご用さ！ちよつと貸してくれ……よし、完了つと！これで『プロフィール機能』が使えるようになったぞ。入力したプロフィールはブラザー間で確認出来るから、お互いの新しい一面を知れるかもしれないな」

「それじゃあ、早速好きな食べ物でも入力してみますね……ええつと、じゃあハンバーグつと」

「(ハンバアアアアグツ！)」

止めてよ！

「フフツ、スバル君の好みは重要な情報かもしれないぞ。特に、キミのブラザーにとって  
はね」

「……どういうことですか？」

ボクの好みなんてゴミみたいな情報を欲しがっているのなら、一度その顔を拝んでみたいもんだね。

「いいや、独り言だよ。さて、用件はこれで終わりかい？」

なんか釈然としないなあ……

「そうですか……それじゃ天地さん、ありがとうございました！」



「ああ、気をつけるんだよ！」

ブランクカードは無しか。いや、まあ仕方ないんだろうけど。ウェーブコマンドカードっていう概念が無さそうだし。

「(そろそろ帰ろうぜ)」

ロックもなんかダレてきたな。

「(だね。委員長、キレるとヤバいからなあ……)」

具体的にどうヤバいかは発言を控えさせて頂く。

ただ、かなり怖かったです。

ーコダマタウン・白金家ー

「……と、いうわけで天地さんにバージョンアップしてもらったよ、スターキャリアー」  
委員長の家には、既にゴン太とキザマロが揃っていた。さつきまで旅行先の話し合いでもしていたのだろうか、部屋にはメモが散乱している。

「お疲れ様。ちゃんと『プロフィール機能』は使えるようにしたみたいね。じゃ、旅行の計画を立てるわよ！」

「……と、言ってもオマエが来る前に行き先は決めちまったんだけどな」

ゴン太が若干の申し訳なさを滲ませて教えてくれる。

「あ、やつぱり？遅れちゃったからね、仕方ないよ」

「それじゃあスバルくんは、行き先のヒントをあげるわ。そうね、暑い夏と言えば……？」

海しかないじゃん！

「海……もしくはプールとか？」

「日焼けはお肌の大敵なのよ……！それにプールなら、マンション用があるしね」

ああ、そういうえば白金家のある高級マンションにはプールがついてるんだっけ。マンションの住人は、いつでも使用できたはず。いいよね、専用プール。因みに修学旅行は常夏のビーチです。(笑)

「暑い夏と言えば……スキーよー」

普通、夏にスキーへ行こうとは思わないんじゃないかなあ……小学生の考えることはわからんですよ。

「スキー……今って冬だっけ？」

「夏バテも程々にしなさいな。……キザマロ、説明なさい」

ジト目で見られてしまった。ボクの発言は至極全うなものだと弁明させていただく。

「目的地は『ヤエバリゾート』！『マロ辞典』によれば、夏でもひんやりな大型人工スキー場と名物グルメタウンを備えた、今話題のクールなメガリゾートということですよ」

多分今は別の話題でホットなんじゃないかな……

「うおー！ー!!今から腹がなるぜ！」

圧倒的ゴン太!ぶれないね。グルメタウンはちよつと楽しそうだけど。確かグルメタウンオリジナルのハンバーガーとかがあつたはず。

「あんだね!さつきからメインはスキーだつて言つてるでしょ!」

ですよねー。

「スキーかあ……ボクはやったことないんだけど……」

「言つておくけど、アナタに拒否権はないわ」

凄く良い笑顔で言われました。にっこり。

「ああ、違うよ。転倒とかしたら危ないじゃない?誰か教えてくれる人とかはいないかな……つて」

「ああ、そっちね。多分、向こうの人が教えてくれるんじゃないかしら?ヤエバリゾート側も、スキーで商売してるワケだしね」

だといけれど……

「それに、ですよーこの『マロ辞典』によりますと、ヤエバリゾートでは現在、UMA絡みの事件が起きているらしいですよ」

ボクと!ロックで!オーバレイ!ロックマン・ZEXAL!シャイニングドロで

いつでもギガクラスカードを創造出来るぞ!……チート過ぎるね。

「UMAって、あのUMA? ユーフオーとか、ネツシーとかの……」

「UMA、正しくはアンデファインド・ミステリアス・ア ニマル。つまり未確認生物ってヤツですね。この間のオバケもUMAの一種と言えるでしょう。ヤエバでは雪男が目撃されているらしいです。この雪男の件、もしかしたらTKタワーのオバケ騒動と何か、関連があるかもしれません」

ロックマンもUMAの一種なのだろうか。ロックはもろUMAだけど。

「な!? これは行ってみるしかないだろ?」

「なるほど! つまりボクがロックマンになって、その雪男を捕獲すればいいんだね? これは腕が鳴るぞ……!」

イエティの捕獲レベルってどれくらいだろう。捕獲レベル……8くらい? ガララワニよりは弱そう。あと不味そうだ。食わないけど。食えないけど。

「バカ! そんなこととしてどうするのよ!」

イエティを捕獲すれば、ボク自身がイエティ・ブリザードになれるよ。なりたくないけど。でも、ちよつといい案かもしれない。イエティとかブラキオは要らないけれど、コンドルの飛行能力はちよつと魅力的だよね。

……今度、天地さんに電波体を捕まえるアイテムでも頼んでみようかな?

「あはは……ついで」

「ついで、じゃないわよ……もう！兎に角、旅行の行き先はヤエバリゾートで決まり！」  
『オーー!!』

委員長長の部屋に、ボクたちの叫びが響いた。委員長は呆れた目をしている。

「出発は明日の朝。皆、家の人にOKをもらっておくのよ、いいわね？」

そういえば、あかねさんに聞くのを忘れてた。帰ったら聞いておかないと。

「了解！」

「オレはもう、OKもらってるぜ！」

「ボクは帰ってからですわ……」

よし、帰ろう。宿題はちゃんとやってるし、今日はゆっくり眠れそうだ。

——星河家——

さて、あかねさんにスキー旅行の報告をしなければ。調理場から漂ってくる匂いからして、今日の夕御飯は恐らくカレーだ。やったね。

「母さん、ただいま」

「あらスバル、おかえりなさい」

特に変わったところもない、いつものあかねさんだ。よし、今の内に言っ飛ばさよう。

「ええつと、実は……」

——少年説明中——

「……お友達と旅行？ いいじゃないの、行ってらっしゃいよ」

わーい。

「フウ、よかった……」

「た・だ・し！ 今日までの分の宿題を、ちゃんと終わらせてからよ！」

そう言われると思ってたさ！

「フフフツ、既に自由研究を残すばかりだよ！」

嘘ではないよ!

「あら……勤勉ね、スバル。じゃあ今日は明日に備えて早く寝ちやいなさいな」

「うん、わかった!」

パソコンにウィルスが潜んでいたような気がするけど、スキー旅行から帰ってきてからでいいや!

もちろん、ご飯を食べてシャワー浴びた後に寝るよ。

——翌朝——

——ピリリリリリリ!!!

昨夜セットしたアラームが鳴り響き、ボクを夢から現実の朝へと叩き起こす。あ、あと5分……

「オイ、スバル!アラームが鳴ってるぞ!」

ウゲツ、目覚まし代わりにロックはちよつとイヤだな……

「ふぁーあ……うん、起きたよ」

「ほら、準備してとつとと行こうぜ!」

ロックは元気だなあ……

「――二十分後――」

よし、いい時間だし、そろそろ出発しようかな。

「ロック、そろそろ行こっか？」

「おう！」

因みに待ち合わせ場所はバス停だと、昨日の夜委員長からメールが届いている。

「ああ、そういえば」

「どうしたの？」

「昨日の夜、荷物の用意してただろ？」

「今回は泊まり込みだからね。着替えとか色々、必要なモノがあるんだよ」

なのでボクの出で立ちは、リュックを背負ったものになっている。

「その荷物の中によ、変な液体の入ったビニールみたいなのがあったよな。……ありやなんだ？」

ああ、アレね。

「あれはホツカイロって言うんだ。分類的にはリサイクルカイロかな。液体の入った袋の中に、金属のパーツがあったでしょ？あれを押すと、固まって暖かくなるんだ。スキー旅行だからね、防寒対策はしておかないと……」

これは自分で使う用ではないんだけどね。今回は割と凍傷とかが怖いので、ゴン太か



アイちゃん（だっけ？）に持たせられればベストだ。

「ふーん、なるほどな。チエツ、強力な新兵器かと思つたのによ」

スターキヤリアーと同じ扱いとは……

「酷いなロツクは……どうみても戦闘用には見えないでしょうに」

「じゃあ何でハート型なんだ？」

「昨日家中探してあつたのが、これだけだつたんだ」

恐らくは、あかねさんとダイゴさんで使つていたのだと思う。だつてハート型だし。マテリアルウエーブのホツカイロとかなひかなあ。高そうだけでもしあつたら買つちやうかもしれない。

「それじゃ、待ち合わせのバス停に行こうぜ」

「うん！」

ーバス停ー

「今日は誰も遅刻しなかつたわね。いつもこうなら、ワタシも安心できるのだけど……」

委員長がボクたちの不甲斐なさを嘆く。主に遅刻しているのはゴン太だけど。

「ちよつ、酷いぜいいんちよう！オレがいつも遅刻してるみたいになさあ……」

「事実じゃない」

「グハッ！」

ゴン太アッ！

「それに今日ゴン太くんが遅刻しなかったのはグルメタウンのために、ご飯を抜いたからその分早く着いたってだけの話ですよ」

もう止めてエツ！ゴン太のライフはとづくに……

「グヌヌ……ま、まあいつもはメシの時間を一時間はとってるからな。グルメタウンじゃハンバーグが美味いって評判だぜ」

おおっ！やっぱりそうなのか！

「ホント!?ボク、ハンバーグとポップコーンには一家言あるんだよね。グルメタウン……名前負けはしていなさそうだ……！」

「お、乗り気だなスバル！んじゃあ、後で一緒に回ろうぜ！」

「こつちこそ！先にへバんじゃないでよ？」

「あつ、ボクも行きますよ！美味しいアイスクリームがあるって評判なんです！」

調子乗りすぎて夕御飯食べれなくなったりしたら、委員長に大目玉食らいそうだ……

「誰に言ってるんだ！このゴン太様に胃袋で勝とうなんざ、十年は早いぜ！」

「その余裕が何時まで持つかな……？」

「上等！……へへッ、楽しみになってきたぜ」

「だからメインはスキーだからね!? アナタたちってホント、変なところで気が合うのねえ……（ワタシも後学のために、そのハンバーグは食べてみたいところだけど）」

何だか委員長もこのノリに同調しているような気がする……というか、男は大抵、ガッツリした美味しいモノが大好きなんだよ！だから話が合うだけどね。

「あ、バスが来たよ」

「それじゃ、ヤエバリゾートへ出発よ！」

『オー……!!!』

ーヤエバリゾートー

バスに揺られること一時間と少し、意外と近くにヤエバリゾートはあった。凄いな。トンネルを潜ったら、そこは雪国だったレベルの変貌だ。トンネルを潜る前は夏全快だったのにね。

『ヤッホー……!!』

窓の向こうで、恐らくは上級者と思われる成人男性が急勾配なコースを滑っていくのが見える。

スキーの経験は……スバルくんの体では0だけれど、悪依前向こうでは何度か滑っている、

はず。初心者に違いはないけれど。

ーウーイーン

バス停に着いたバスの扉が開き、ボクたちはサクサクとした銀世界に足を踏み入れた。

「ステキね！ホントに夏なのに雪があるわ！」

バスの中でキザマロから聞いた話だと、ヤエバリゾート自体割と最近完成した施設らしい。ただグルメタウンの方が先に完成したらしく、リゾートのホテルが調整中の傍らで賑わっていた、という裏話もあって中々面白かった。

「なるほど、雪が積もっていないところは夏って感じてすね……！」

「雪かぁ……凄いやきやきしてるよね。人工雪なんだっけ？」

ーサクサクサクサクサクサクサクサク

「スバルくん、はしやき過ぎよ……！」

だってなんだか凄く楽しいんだもの。子供だけの旅行っていうシチュエーションに興奮してるのかな？

……変態みたいだから止めよう。

「あはは……！」

「兎に角、まずはホテルにチェックインしましょう」

バス停の道路越しの向こう、そこには巨大なホテルがあった。流石は話題を浚っているだけはある。外観からしてスペシャルって感じた。

「ウホホホー!!画像で見るよりゴージャスだぜ〜!」

ゴン太の感動もひとしおだ。

「でも……チエックインってどうやるんだっけ?」

委員長も、子供だけで旅行したことはないんだろうね。それが普通なんだけど。

「オ、オレは知らねえ……」

ゴン太は悪くないよ。

「ま、まあゴン太には期待してないけど……キザマロは?」

「え、ええと……『マロ辞典』によりますと、ホテルのフロントに予約した人の名前を言えばいいはずですが……し、知らない人に話かけるのってボク、苦手で……」

「しょうがないわねえ……じゃあスバルくんで」

ええつ、そんなテキトーでいいの?

「スバルなら知らない人相手でも大丈夫だと思っただけ!」

ゴン太から謎のフォローが。何かしたっけ?

「あら、どうしてかしら?ゴン太」

「だってこの前オレがチケットを落とした時に、知らない綺麗な女の人と仲良さそうに

喋ってたじゃねえか。あれが出来るなら多分、大丈夫だぜ！」

.....

「スバルくん、今のは？」

「ち、チケツトを回収するために必要な行為でして.....その、別に他意は」

「そう言えば、キズナリヨクが高い人が好きだって情報を手に入れたって話してましたよね」

それはイケツラさんに話した内容だよ！

「スバルくん？」

「ち、違うよ！これは誤解だ！あれはモテて」

モテツグさんに頼まれたんだよ！

「モ、モテたかった、ですって!？」

話を最後まで聞いてくれよオツ！

「ま、待って！委員長は今、重大な思い違いをしている！ボクがナンパなんて、するわけがないでしょ!？」

このままでは、ボクの印象がチャラついた元引きこもりになってしまおう！それは.....嫌過ぎるぞー！

「.....それもそうね。でも、詳しく聞かせてくれるんでしょう？ねえ、スバルくん？」

「もちろんでございます……」

——少年弁明中——

「ふーん、そう。スカイボードを手に入れるために、ねえ……まあ、そういうことなら仕方ないわ。ゴン太のためってことだし……」

「な、なんとかわかってくれたようだ。っていうか、何でこんな思いしなくちゃいけないんだ！」

「チクシヨウ二人とも、恨み晴らさしておくべきか……！」

「そうそう！ゴン太のためだったんだよ！ホントは嫌でしょうがなかったんだ！」

「へ、へえ……そう。別にワタシは、スバルくんが誰にナ、ナンパしようが、か、構わないけれど？」

「だよね。でもチェツクインはボクがするよ。何だか申し訳ないし……」

「わりいなスバル、頼んだぜ」

「お願いしますね」

「クソツ、いけしやあしやあと……！」

「ま、任せておいてよ」

「そ、それじゃあ、お願いするわ……行きましよう！」

はあーい……そこらに生えてるヤシの木辺りに、雪玉でもぶつきたい気分だ。ていうかヤシの木って……夏要素にしては安直過ぎない？

ーリーゾートホテルー

「あれ……なんだろう。イヤに混んでるね」

防寒対策だろう、二重のドアを通った先にはお客でごった返したフロントがあった。恐らくU M A事件の対応を求めた客達だろうね。

「あの、すいません。チェックインしに来たんですけど……」

その辺のホテルマンを捕まえて、この混雑の説明を要求する。

「申し訳ありません……現在、お客様方の対応に追われております。手が空きましたら、すぐにメールでお知らせさせていただきますので……」

「わかりました。こちらこそ、忙しいのにすいません」

「いえ、私どもの不手際です……」

謙虚なホテルマンさんだ。好感が持てる。

「じゃあ適当に散策しますので、メール宜しくお願いしますね……」

「ええ、申し訳ありません……」

手を振ってホテルマンさんと別れる。うーん、やっぱり時間がかかっちゃうか。



「……どうする？少し散策でいいかな？」

「ま、仕方ないわね。適当に見て回りましょう」

『はい！』

というわけでヤエバリゾートを散策することにしたボクたち。まずはエレベーターで2階に上がり、そこから外に出ることにした。グルメタウンやスキー場にはホテルの2階出口から行ける。

ーヤエバリゾトー

リゾートホテルの2階から出ると、直ぐに中継路へと出る。ホテルの上に取り付けられたスキーコースか、スキー場にかかることの出来るリフトがあるグルメタウンに分かっているようだ。だけどまず、ボクの目に入ったのは……

「ウゲツ、五陽田さんだ……」

とつつあくん、やつぱりいるのかよ……

「おや、キミは……おお！スバル君じゃないか。友達も連れて何をしているんだね？こんなトコロで」

「こんなトコロって……ここはリゾート地じゃないですか。普通に遊びに来たんですよ」

ファーストコンタクトが悪かったのか、やつぱりこの人は好きになれない。ていうか

キズナリヨク54だつて。やーいやーい！……止めよう。虚しくなつてくる。

「フム……まあ、そうだろうね」

「五陽田さんはどうしてここに？」

確かUMA関係の事件を追つてるんだっけ？取り敢えず、ゴリを直ぐに逮捕出来る人材がいるのは助かる。アイツは絶対、取り調べで余罪が見つかるパターンだろうし。

「雪男のコトはキミも知っているだろう？見たまえ、その巨大な足跡を。それが、雪男の足跡と言われている」

そう言つて背後の地面を指す。そこには正しく巨大な足跡としか表現しようのない足跡があつた。これつて観光資源じゃないの？

「確かに、凄く……大きいわね」

委員長さん下ネタは止めてください。言つてもわからなさそうだけど。汚れているのはボクのほうか……

「まあ、あくまで噂だがね。しかしこれは本官の勘だが……この騒動は後々、相当危険な事態に発展しそうな気がするのだ」

「危険な事態……」

取り敢えずゴン太とスキー少女は危険な目に遭うよね。ただ、敵の目的にスキー少女（アイちゃん？）の負傷があつたはずだから、多分そつちを未然には守れない。四六時中

警戒も出来ないし。ボクたちの旅行が終わってから事に移られると、タイミングを逃してしまふ。

「コトは一刻を争う。だからロックマンの正体を探る任務は一時中断して、本官は雪男に関して捜査をすすめることにしたのだ」

「なるほど……」

「何か情報があつたら、すぐに本官に知らせてくれ。頼んだよ」

「ええ、わかりました！それじゃあ連絡先を……」

「ああ、わかっている。これだ」

あんまり気が進まないんだけど、仕方なく五陽田さんの連絡先をスターキャリアに登録した。顔見知りの捜査官がいるなら何かと便利かもしれないし。

そんなワケで五陽田さんと別れたボクたちは、次の散策場所を話し合っていた。

「それじゃあ次は……取り敢えずグルメタウンの方にも行ってみようか？」

「賛成賛成！オレは大賛成だぜ！」

ま、ゴン太はそう言うよね。

「そうですね……アイスクリームの件もありますし、ボク、気になります」

キザマロがやつても映えないと思うよ……

「まあ、いいんじゃないかしら？」

委員長も異存はないようだ。

「それじゃ決まり！グルメタウンへGO！」

『オーー!!』

一々ノリが良くて助かるよ。

ーグルメタウンー

「オ、オイ……………嘘だろ？嘘だろオツ!？」

崩れ落ちるゴン太。それもそのはず、雪男がやったと思われる（やったんだけどね）落雪事故の影響でグルメタウンに出店している店は、軒並み臨時休業と相成ってしまったからだ。

「ゴン太……………」

「スバル……………オレはよう、スキーなんて出来ないし、ベッドだって家にある普通のヤツで文句なんか無かったんだ。それでも、それでもだ！オレは、オレはオマエらと一緒にグルメタウンを回ったかったんだよ！それが最高の楽しみだったんだよオ！うわああああっ!!」

ゴ、ゴン太……………お前はもう、一人の立派な漢だよ…………

ーピロン!

あ、メールが来た。ホテル側の準備が出来たみたい。それと、今日はリフトが使えない旨が記されている。

「ゴン太、取り敢えずチェックインしようよ。大丈夫、きっと良いことあるって」

慰めにもなっていないな、コレ。

「スバル……ああ、オレ決めたよ。今回のスキー旅行、全力で滑りまくってやる! グルメタウンなんか忘れちまうくらい、皆と思いい出をつくるんだ!」

「おおっ! それでこそゴン太だよ!」

「へへッ、オレも成長してるんだぜ。例えアンラツキーがあつてもな、それ以上のラツキーを自分で見つけなければいい! ……全ては自分次第なんだ! そうだろ?」

まさに漢だよ、ゴン太!

「うん! 今のゴン太、凄く輝いてるよ!」

「なんか照れくさいな……」

もつと誇つていいよ! もしボクがゴン太の立場なら、旅行中はずっとしよげてるだろうし。

「よし、それじゃあチェックインしに行こうか!」

「おう!」

「もう、何だかこのままブラザーでも結びそんな雰囲気ですよね、あの二人」

「いいんじゃない？ワタシこういうの好きよ？」

「委員長にそういう趣味があつたとは……！『マロ辞典』にも載ってませんでしたよ」

「ちつ、違うわよ!?!ワタシはただ……！」

「別にわかつてますから弁明しなくてもいいですよ」

「ちよつと、それはどういう意味かしら!?!キザマロ？キザマロー!?!」

蚊帳の外の会話であつた。

リーリゾートホテル・フロントー

メールで対応完了とあったように、フロントに押し掛けていた落雪事故関係の客達は、その殆どが既に捌けられていた。これならチェックインも可能だろう。

「すみません、星河という名前で予約していた者なんですけど……」

これじゃ偽名みたいだ。いや、代表が委員長だし、白金にしておけばよかつたかな？  
「先程は失礼いたしました。……チェックインでよろしいですか？」

「はい、お願いします」

「星河様………白金ルナ様とご一緒の方ですね。……少々お待ちください」

ーカカタカタ……

「お待ちせいたしました。お手続きは全て完了です。こちらがご予約のスタンダードルームのキーになりますので、どうぞお受け取りください」

ああ、元々スタンダードルームを予約していたんだっけ。そういえばどんな内装なんだろう、スタンダードルームって。っと、そんなことを考えている内にフロントにあるスタッフ専用の出入口から、特徴的な眉の人が入ってきた。この人がオーナー、だった

はず。

「…………おや、キミたちは？」

「実はチェックインをお待たせしてしまいました…………」

フロントの受付さんがオーナー(?)さんに状況を説明してくれる。それを聞いたオーナー(?)さんはとても苦々しい顔をしたが客の手前、すぐに表情を切り替えた。結構追い詰められていそうだ。客の前で表情を歪めるなんて。気にはしないけどね。

「…………そうか。折角ホテルに着いたというのに、待たせてすまなかつたね。そうだ。キミ、彼らの部屋をスイートルームに変えてあげなさい」

「え、よろしいんですか支配人? スウィートルームは信用のおける方のみが宿泊できるお部屋。この子達にキズナリヨクをご提示していただかないと…………いままで、キズナリヨクが低いお客様にはお断りしていましたし…………」

300…………委員長でも380か。これってどうなんだろう。それでも足りない気がするけど。

「いいんだ、いいんだ。お待たせしたお詫びだよ」

空いてるとはいえ、凄い人だ。周りに聞かれていたら結構ヤバそうなのにね。胆力?

「ス、スイートルームって…………一番良い部屋のコトですよね?」

「コイツがグルメタウンに 代わるラツキーってヤツか! ウホホホー!! テンション



上がって来たぜ！」

「フフフ……いいんだ。このホテルは、近頃客足が減っていてね。部屋も結構空いてるんだよ」

苦笑しながらホテルの内情を話す支配人さん。こんな子供に口を滑らせるなんて、やはり追い詰められているのかな……？

「へえ……こんな面白いホテルなのになんで？」

ゴン太の疑問も最もなんだけど、その理由はグルメタウンで聞かなかったつけ……？  
落雪事故で休業云々だよ。

「ちよつとしたトラブルだね」

「ひよつとしなくてもUMA……雪男に関するトラブル、ですよね？」

「ああ……その噂を知ってたんだね。確かに雪男を見かけたって話はあるんだけど、それはあくまで噂だね。確かなのは、原因不明の落雪事故が起きてるってことなんだ」

噂じゃないです。そういえば、電波体の雪男……イエティ・ブリザードをどうやって噂できたんだろう。またビジブルゾーンに入ったところを目撃されたのかな？

「落雪事故って？」

詳しく聞きたいのだろう、委員長が説明を求める。あれ、これってさつきまでのクレーマー達と同じじゃない？

「雪の塊がいきなり、頭上に落ちてきたりするんです。さっきのお客様方も、そのせいでケガをしてしまわれまして……」

「だから念のため、グルメタウンとスキー場を今日は閉鎖しているんだ」

「グヌヌ……やっぱりか」

ゴン太、大丈夫だって。確か後で大食いイベント的な催しがあったはず。

「申し訳ない、今は全力で原因を調査中……」

つと、支配人さんが話を切つてボク達の背後に視線を向ける。その眼差しは厳しい。ボクらも振り返ると、ゴリラ・ゴリラ・ゴリラ……じゃなくて人っぽいゴリラ……でもなくて、高そうな服を着たゴリラ似の人がいた。黒服のお姉さんを二人連れている。社員だろうか？

「ケハハハハ！支配人の滑田すべりたさんよお！今日も景気の悪そうな顔してるじゃねえか！」

うわつ、営業妨害つてか名誉毀損じゃない、これ？

「ゴリ！」

ゴリ！なんて端的にこの人を表した呼び方だ。きつとジョークでも言い合える仲に  
 違いのない（棒）

「オイオイ、呼び捨てはねえだろ？もうすぐオレの下で働いてもらうことになるのによお」

腹立つ性格してるな。いや、助かるけど。躊躇いなくフルボッコに出来そうだ。

「(ゴリ?)」

ゴン太がヒソヒソと受付さんに問いかける。

「(あの人の名前……五里門次郎、通称『ゴリ』。最近急成長を遂げたある会社の社長で、その会社というのが悪どいのつとりで酷い評判なんですよ。……そして今はウチのホテルを乗っ取ってしまおうと、企んでいるんです……!」

受付にまでゴリ扱いか……強く生きろよ、ゴリ。

「乗っ取りの話なら何度きても無駄だ!お客様を金儲けの道具にしか思っていないお前  
の下で、私たちは働くつもりなどない!」

正直向こうのバックについてるほうのボスが考えれば良いのでは、と思ってしまう。  
だって優秀な人間らしい……拠点一つ確保出来ない人間ってどうなの?

「ケハハハハ!相変わらず強がるねえ!だがよお、事故やトラブルの絶えないホテル  
だって評判になってるぜえ?客も少ないみたいだし、大赤字になる前に売った方が得な  
んじゃないかねえのか?」

確かに。下がった評判を再び戻すのは難しい。人の噂も七十五日ってヤツだね。  
「ですから、支配人はそんなことしません!」

受付さんも必死だ。今の職場環境がよっぽど気に入っているんだろう。滑田さんに

は管理人の才能があるに違いない。

「まあいいわ、今日はここに泊めさせてもらうぜ。金はあるからスイート用意してくれよ」

金はあるから……何だかキズナリヨクの低そうな言葉だ。というか寧ろ、ゴリのキズナリヨクが気になるね。

「それはダメだ。スイートルームはこの子達に使ってもらう」

「あ？このガキ達がスイートに泊まる？お小遣いやるからお兄さんと部屋を交換してくれよ」

お小遣い……トランサーから持ち越した、ボクの総資産額を教えてやろうか!? FM 星人の残留電波達は、リザルトで大量のゼニーを落とすんだ。それをこの2ヶ月間狩り続けた、ボクの保有ゼニーは……止めとこう。

「し、失礼ね！子供だからって安く見ないでもらいたいわ！」

おお、委員長カッコいい！

「ケハハハハ！冗談だよ！まあとにかく、しばらくはゆつくりさせてもらうぜ！ホテルを売る気になったら早く言いに来てくれよ……ケハハハハ！」

どんな笑い方したらケハハハハ！なんて声出せるんだろう……？

「感じ悪〜」

端的にゴリを表したゴン太。確かにゴリは感じ悪くって感じた。

「おじさん、あんなヤツの言いなりにならないで頑張っちゃってよね！」

「ああ……だがヤツの言う通り、今このホテルの経営は苦しいんだ。このままトラブルが収まらなかつたら……」

やはり苦しい状況らしい。しかし電波人間に対抗出来るのはウイルスによる物量作戦か、同じ電波人間しかいないからね。仕方ないよ。

「おじさん！ワタシたちに任せて！落雪事故のコト、ワタシたちも調べてみるわ！困ってる人がいたらほっとけないのよ。だってワタシは、クラスの委員長だから！ね、いいでしょ？皆！」

「さっすが委員長だぜ！」

流石はカリスマ持ち。いずれ生徒会長にもなるし、ランクはCとD辺りだろうか？

「ありがたいが……危険だし、そんなコトを頼むワケにはいかないよ」

普通の対応だ。客に原因究明を手伝わせてケガでもされたら堪らないもんね。ホテル側の信用に関わっちゃう。

「いえ、大丈夫です。何故なら、こっちのスバルくんはちよつとしたヒーローなんです」  
地球を救ったヒーローをちよつとしたと申すか。よろしい。オルガ、次は何を救えばいい？何を守ればいい？……最後に死にそうだから止めておこう。

「ヒーロー?」

「あはは……ちよつとした何でも屋みたいな感じですよ。大したことは出来ませんが……それで良ければ」

「とにかく、手助けするわ!おじさん!」

「……わかった。ただ、無理はしないって約束してほしいな。これは元々私たちの問題だからね。ヤツにホテルを取られないよう私たちも全力を尽くすとも!」

結果的には正解なんだけど、支配人としては……

「頑張つて!おじさん!……じゃあ、ワタシ達も一度部屋に行かない?」

「そうですね、スウィートも気になりますし」

「ワタシたちのキズナリヨクじゃ本当は泊まれなかったような部屋よ。ワタシの380でも難しかったでしょうね」

やっぱりか……

「どれだけ豪華な部屋なんでしょう?」

「おお!ルームサービスの食い物が楽しみだぜ!!」

ゴン太……ぶ、ブレねえ。

「さ、行きましよ!」

『オー!!』

ーリゾートホテル2階ー

エレベーターによって上がり、分かれ道を出入口ではない方に進んだ先には、明らかに仕様の異なる絢爛豪華な扉があった。これは確かにスイートだ。

「ここがスイートルームね！それじゃあ、ルームキーでドアを開けるわよ！……緊張するわね」

委員長でも緊張するんだ。というかそもそも、両親の仕事があったから、旅行自体ほとんどしたことがなかったとかありそうだ。

ーウーイン……ピコピコピコ!!

「OK！ロックが開いたわ！」

ーガチャガチャ！

開かない。

「あら？」

「開かないの？」

「ええ、ロックは解除出来たのに……おかしいわね」

ホント嫌らしい手を使ってくるよね、向こうも。大体黒服のお姉さんがやってるんだ

けど。黒服有能過ぎない？

ーガチャガチャ！

「ど、どうして！ちゃんと開きなさいよ！！つもう！」

「どうします？ホテルの人を呼びますか？」

「でも皆、事故のコトで忙しそうだぜ」

最高ランクの部屋で異常が起こっていることも、十分ヤバイような……ホテル側に問題はないんだけどね。

「オイ、スバル。部屋の中からだったら開くんじゃねえか？」

「あ、ロックいたの？」

随分久しぶりに会話する気がするな……

「ス、スバル！オマエなあ……」

だって全然話しかけてこないんだもん。

「でもまあ、部屋の中からというのは、一理あるよね。ウエーブロードを伝って入ってみようか」

散策中に、部屋の中へとウエーブロードが繋がっているのは確認済みだ。

「おう！」

ええっと、ウエーブホールウエーブホール……確か2階の出入口から出て直ぐの場所



にあつたはず。

「それじゃあボク、ちよつと見てくるね」

「お、電波変換か？」

一応ロックマンという呼称は控えてくれている。モロバレルだからね。仕方ないね。

「うん、内側から調べてくるよ。ちよつと待っててね」

「わかつたわ、チャチャつと調べてきなさい」

「もちろん！蹴破つてくるかもしれないけどね」

結構面倒なロックがかかっていたような……

「危ないことはダメよ？」

「大丈夫だつて。それじゃ、行つてくるね」

よし、一度外に出よう。

ーリーゾートホテルの電波ー

外で電波変換し、ホテル内に戻つてきたボクたち。取り敢えずはスイートルームの中に入らないと。

「あんまり複雑なウエーブロードじゃなくて助かつたよ」

時間をかけすぎると委員長がお冠だ。

「……はな。下の階はもつと複雑だぜ……」

確かワープポイントが複数箇所あつたはず。  
うわあ……めんどくさいなあ。

ーースウイートルームの電波ー

そして遂にスウイートルームへと侵入した僕達。凄いな。部屋中マテリアルウエーブだらけだ。テレビにベッドにソファア、椅子にテーブルまでマテリアルウエーブだ。ここまで揃えるのに、一体いくらかかるんだろう。

「取り敢えず部屋の中に入れたね。それじゃあ、扉を……」

「さあ、やつちまおうぜ！」

「うん……あれ？変なロックだな」

これは……デュエルマツスルでなんとか出来そうな類いのものだ。別にロックに詳しいわけでもないし、力づくが一番だろう。

「これは……誰かに細工されたヤツだな。力づくで開けるしかなさそうだが」

ロックも同意見らしい。さっきからロックロック紛らわしいな。

「……よし、ならヒートアツパー辺りで……！」

「それじゃ扉が燃えちまうだろ！」

ありや、失敗。

「あはは……じゃあシンクロフックで……ホアタアッ！」

八極拳つぼかったかな？マジカルをつけるには、あと十年は修行しないと……

ーガチャッ！

「よし、ミツシヨンコンプリート。部屋の中にウェーブホールがあつたから、そこでウェーブアウトしておこっか」

「ああ、了解だ」

ーースウィートルームー

「皆！もう開いてるよ〜！」

しかし、こうもマテリアルウェーブが多いと熟睡出来るか不安になってきたな。何せマテリアルウェーブには意志があるんだから。

「おお？その声はスバル！」

ゴン太を皮切りに、次々と入ってくる委員長達。と言つても三人しかいないんだけど。

「あれ？ロックマンじゃないんですね」

「ほら、ロックマンだと皆に見えないし……」

「ロックマン様も見たかったのに……まあいいわ。それにしても……やっぱり良い部屋

ね！」

委員長も部屋の内装を見てご満悦だ。

「流石スウィートですね！」

「部屋にキッチンがついてるなんてすげえぜ！」

確か全自動の手間要らず……という煽り文句だったはず。便利そうだけど、ボクはあかねさんの手料理の方が好きです。

『ようこそ、スウィートルームへ』

ホテルマン！キサマ、見ているな！

『このスウィートルームでは、このワタクシがミナサマのおセワをいたします』

「なんだなんだ？」

僕達の背後にあるテーブルのマテリアルウエーブ、その上に乗っていた人形が話しかけてきている。

キイエアアア！シャベツタアア！！

「ワタクシ、『ホテルマン』のマテリアルウエーブです。ナマエは、『ヒゲダンディー』でいじります」

ヒゲwwwwダンディーwwww

おっと、失礼だよね。思わず大草原が生えたボクは悪くないと思う。

「所謂『コンシエルジュ』みたいなものかしら？」

コンシエルジュ。コンシエルジュか！そう、中々思い出せなかつたんだよね、コンシエルジュ。

「『コンシエルジュ』？なんか美味そうな名前だよな。お前……食い物なのか？」

え？

「……え？」

人型のマテリアルウェーブを食べられたら、それはもう人じゃないと思うんだけど……

「食べられませんよ、ゴン太くん。『マロ辞典』によれば、『コンシエルジュ』とはホテルにいる世話係です。お客さんのあらゆる要望に応えるのがお仕事みたいですね」

それじゃあ、食い物扱いされることも……？

「そのトオリでございます。ワタクシのホカにもイロんなマテリアルウェーブがいますので、ごジユウにごシヨウくださいませ。それからキズナリヨクのタカさにオウじて、サマザマなサービスをヨウイしております」

へえ……300もあれば、何か良いサービスでも受けられるかな？

「キズナリヨクが500イジヨウでしたら、シエフやミュージシャンをこのへやにヨぶこともデキますので、そちらもぜひ……ちなみに、ホテルのコトでワタクシにワからな

いコトはありません。マテリアルウエーブやサマザマなマシンのコトなど、コマったコト、わからないコトがありましたら、いつでもおコエをかけてクダさい」

「なんとというか、プロフェツショナルって感じだよね。凄いなあ……」

「ゆつくり寛いでたいけど、そうもいかないわ」

ええ……もう少しグダっていききたいよ……

「落雪事故の調査ですね」

「取り敢えず、リゾート全体を調べて回ろうぜ！」

「あら、ゴン太にしてはいいコト言うわね」

「へへ、だろ？」

「そうね……それじゃあ、グルメタウンにはスバルくんが行ってきて。アナタならちゃんと調査してくれそうだしね」

ゴン太に任せたら、休業中の店を回ってオススメグルメのラインナップでもつくりそうだからね。

「うん、わかったよ」

「言っておくけど、一人で抜け駆けして美味しいモノ食べてたら……って、今日は臨時休業中だったわね」

「うん、だからグルメタウンは任せて！」

「よし、ならワタシ達はそれ以外の場所に行きましょう。誰が何処を調べるかは、行つてみて考えるわ」

まあ……まだ土地勘とかないだろうし、妥当じゃない？

「了解です！」

「おう！」

「じゃあスバルくん、ワタシ達、先に行くから」

「うん、頑張つてね」

「……アナタもやるのよ？」

わかつてるよ……

「あはは……それじゃあ」

「……大丈夫かしら？……ゴン太、キザマロ、行くわよ！」

「そうそう、スバルくん。雪男にも……」

キザマロが、部屋を出ていく前にボクへ警戒を促してくれる。心配してくれてるんだよね。ありがたい。

「わかつてる、気をつけるよ」

「ですよね！ではでは……」

ーガチャッ！

行ってしまった。す、少し位寛いでもいいかな……？

「あの……」

「ヒエツ！つて、ヒゲダンディーさんか……」

やっぱり後ろめたいことはしちやダメだね。枕を高くして眠れないよ。

「あの……忘れておりましたが……その、スキーセットの説明がまだでしたので」

マ、マテリアルウエーブだからね、それくらいあるさ……つていうかやつぱり、マテリアルウエーブに意志を持たせるのは失敗だったような気がする。……だってこれ、ヒューマンエラーの類いじゃないか。

「スキーセット？」

「ええ、キズナリヨクが20イジヨウのカタには、ムリヨウでおかしています」

20……この部屋に泊まる人なら、あつてないようなものだね。

「20ですか……それじゃあそのスキーセット、お願いします」

「かしこまりました。とりあえずアナタだけにおかしておきます。スキーセットもマテリアルウエーブでおワタししますので、ごジユウにおツカいください。では、スターキヤリアーにデータをおくりします。……ソレツ！」

最後の掛け声は必要だったの？マテリアルウエーブが踏ん張るなんて……あつ、スキーセットのマテリアルウエーブが来た。確か左右で兄弟なんだっけ？



「アレ、でも今日はスキー場、空いてないんですよ？」

「確かにそうなんです。ただし、マテリアルウエーブでつくられたトクシユなスキーです。オクガイでしたらユキのないトコロでもツカえます。ホテルのソトにでたらツカつてみてクダさい」

「凄い。雪の上じやなくても使えるスキーセットか。アスファルトがギヤリギヤリいったりしないかな？」

「よくしやべるマテリアルウエーブだな」

「仕事熱心なんだよ、多分」

「そういうモンかねえ……」

「さ、そろそろ出掛けよう。あんまりダラダラしてたら委員長に大目玉食らつちやうよ」  
「ああ、わかってる。早く雪男のツラつてヤツを拜んでみたいもんだぜ。なあ、スバル？」

もう変身前のツラは拜んでいるけどね。

「うん、簡単に尻尾を出してくれるといいんだけど……」

やっぱり落雪は怖いよね……ボクはちゃんと避けられるだろうか？ああ、憂鬱だ。

## 12

ーグルメタウンー

取り敢えずはグルメタウンに急行することにしたのだけれど、休業中の店には散策時の時、既にいくらかのやりとりをしている。そのため、あまり目新しい情報を手に入れることは出来なかった。精々が降ってきた雪魂に一瞬何かダブって見えた、とかその程度だ。いや、間違っではないのだけど。このグルメタウンは割としよっちゅうビジュアルゾーンになるらしく、そういう証言は多かった。

「あまり目新しい情報はなかったね」

「だが、無いこともなかっただろう？ オレにはそのダブって見えたモンが、スゲー怪しく感じるぜ」

流石に勘が鋭い。そのダブったモノはウィルスで、結構めんどくさいヤツだった記憶がある。ただ属性が水だったので、プラズマガンがよく効くハズだ。

「確かに、一瞬だけ見えたってのは怪しかったよね。もしかしてウィルスだったり？」

「だが、ウィルスどもが連続落雪事故を起こしている犯人、とも考え辛いよな。ヤツらにそんな知性があるとは思えねえ。何か、裏で糸を引いているヤツが……」

ーブルルル!!

来たか。有能黒服だ。多分。

「電話だね。誰からだろ?……ブラウズ!」

毎回思うんだけど、大衆の前でブラウズ! って叫ぶ仕様は本当に止めてほしいよね。天地さんに改造でもしてもらおうかな……

ーブウーーン

相変わらず、ハエが飛ぶような音を放ちながら出現したエア・デイスプレイは酷いノイズで画面が乱れたモノだった。エア・デイスプレイにも干渉出来るなんて、これ以上有能っぷりを見せないでほしいよ、まったく。

「(オイ、なんで顔が出ねえんだ?)」

『もしもし……』

はつきりしない声だ。何か機械でも通して喋っているのだろう、少しばかり低い声が聞こえる。

「もしもし……どなたですか?」

『星河スバルくん……でしよう? キミ……落雪事故のことを知りたいんだってね』

こちらの名前、電話番号、目的を既に知られている……黒服さん達有能過ぎるでしょ

う!?

「ボクがしていること、知ってるんですか?」

『他にも知ってるわ……スウィートルーム扉に細工をした犯人とか……あれは、私よ』

な、何イツ!?!ど、どうやって室内から細工をして、脱出出来たというんだ!?!ば、バカな! ありえない! もう全うな職にでも就けよ! サテラポリスの特殊工作チームとかになら入れるレベルだろコレ!

「どういう、ことですか……!?!」

『知りたい? それじゃあホテル玄関の噴水……いえ、噴水電波の前で待つてるから』

ーガチャツ!

改めて考えるとかなりヤバイ集団だよ、ゴリの会社の社員って。ゴリよりも圧倒的脅威に感じる。ゴリ要らないでしょ! というか、スターキャリアーの電話番号をバラ蒔かれるだけでもヤバいんですけど……

「切れちゃったね。向こうにはかなりの情報アドバンテージがありそうだ。……どうするロツク?」

「コイツはワナの匂いがプンプンするぜ。……だが行ってみるぞ、スバル!」

「ワナ……なんだよね? いいの?」

「だから行くんだよ! そこに怪しいヤツがいれば、ソイツを取っ捕まえて情報を聞きだ

せばいい。コイツはチャンスだろ！」

子供に期待するには過剰過ぎる結果じゃない？

それにあの黒服お姉さん、絶対なにか武道かじってるタイプだよ！震脚からの発射でもされたら、小学生のボクは死んでしまう！いや、どうせ待ち合わせ場所にはいないだけだよ。

「ヤバそうならロック、頼むよ」

「わかってる！こっちもフォローはするぜ」

やっぱりロックは頼もしい。ハンターV Gが普及し出したら、バトルウィザードとしても鍛えてみようかな？

「それじゃあ行くよ。待ち合わせは……噴水電波の前、だったね」

そういえば、どうしてさつきは一度言い直したんだろう。噴水電波はマテリアルウェーブで出来ているから、別に噴水でも間違いいのではないのだけど……まあいいか。多分完璧主義だとか、そんなんだろう。

ーヤエバリゾート・噴水電波ー

やはり黒服お姉さんはいない。それにさつきから何時雪玉が降ってくるか気が気でない。……震えてないよね？

「誰もいないね……」

「ああ、周りから見られてるってワケでもないみたいだな」

ならよかった、とはならない。多分今頃は、ウエーブロードの上でイエティ・ブリザードが雪玉を構えてボクを狙っているのだろう。

「取り敢えず、警戒はしておこうよ」

「ああ、わかって……」

『危ない！走って!!』

考える暇は無かった。声が聞こえた途端、ボクはその場から走り出して離脱する。クソッ、会話中の隙を狙ってくるなんて！

『早く!』

「ツツ!!」

ーードゴオツ!!

何とか上空から降ってきた巨大な雪玉を回避することに成功し、ホッと一息安堵する。今のはヤバかった……

「……あ、危なかった」

「まるでオマエを狙ったように落ちてきたな」

そりゃあ、ボクを狙ったんだから当たり前だろ！しかし、ターゲットのチョイスまで

完璧とは恐れ入る。ボクさえ負傷させれば、ロックマンの介入は出来なくなるんだから。万が一に備えてミソラちゃんを呼ぶべきだっただろうか？

「つまり、さっきの電話は……」

「ま、ワナだろうな。オレも流石に予想出来なかったぜ、落雪事故の被害者になりかけるなんてな」

まっただくだ！

「ま、避けられてよかったよ。あのサイズなら打撲じや済まなさそうだし……」

思い出したら、少し震えてきた。やっぱり生身つてかなりリスキーだよ。アイアンマンみたいなスーツ依存症ならぬ、電波体依存症にならないといいけど……

「声がした方向は……ええっと、あっちか」

ホテル外部に取り付けられたスキーコースのスタートラインの上に、スキーウェア姿の少女を発見した。足にはマテリアルウェーブで構築された、専用と思われるスキーセットを装着している。スキーセットがピンク色なのは、年頃のお洒落というヤツなのだろうか。なんて考えている間にスキー少女はコースを滑り降り、心配そうに近寄ってきた。

「よかったあ、助かって……」

「うん、ホントに助かったよ。さっきのはちょっと、本気でヤバかった……」

冷静に考えると命の恩人、になるのだろうか？

「アハハ……でも気をつけてね。ここじや最近、こんなコトばかりで……」

「今のが落雪事故つてヤツだよ。キミは……確かテレビで見た……天才スキー少女の

アイちゃん、で合ってる？ゴメン、ボクあんまりスポーツ系には詳しくなくて……」

「なんだか照れくさいけど……うん、そうだよ！アタシ、アイ！」

も、もう少し情報を集めておくべきだったかな？でもアイちゃんの個人情報つて、今回あんまり関係ないし……

「確か世界選手権を目指しているつて、ドキュメンタリーか何かで見たんだ。有名人、になるのかな？」

「有名人だなんて……別に普通だよ……」

け、謙虚だ……その愛らしい容姿も相まって、ファンも一定層いるだろうに。普通は思いつきり調子に乗っちゃいそうなものだよ。いや、本人はスキーが大好きなだけ、なんだっけ？ミソラちゃんといい、アイちゃんといい、この世界の有名人は謙虚というか、ストイックな人が多いよね……

「いや、謙虚つてのはいいことだよ。謙虚さは二ホン人の美德だって、母さんが言つてたんだ」

「へえ……立派なお母さんだね！」



お、こやつ中々話がわかるな？ 確かこのホテルの支配人さんがお父さんなんだよね。人格者の親を持つと、子供も一本筋の通った性格になるのだろうか。

「自慢の母さんでさ……ボクが世界で一番尊敬してる人でもあるんだ。ボク、母さんには一生頭が上がらないだろうね……」

ホント、あの人には返しても返しきれない恩がある。憑依したばかりで不安だったボクを、あの人は星河スバルとしてとはいえ最大限に愛情を注いでくれた。それは今も続いている。もしあかねさんが母親だったら、スバル君じゃなくてもマザコンになっっているっていう不思議な自信があるくらいだ。

「凄いい母さんなんだね……」

感心したように呟くアイちゃん。フッフ、あかねさんの偉大さは、こんなものではないよー！

「もちろん！ あ、自己紹介もせずに長々とゴメンね。ボク、星河スバルって言うんだ。さつきは助けてくれて、ホントありがとう！」

「うん！ よろしくー！」

元氣つてのはいいいモンだね。なんとというか、ミソラちゃんに通じるモノがある気がする。周りを元氣にするパワー、みたいなの？

『あー！！！！アイちゃん！！』

この声……ゴン太とキザマロか。ホテル出入口を見ると、凄いスピードでこちらに向かってくる二人が見えた。後ろからゆつくりと追う委員長はどこか投げやり？に見える。

「すごいです、ホンモノです！」

「ハ、ハ、ハ……はじめましてアイちゃん!!」

「ブフツ！」

吹き出したボクは悪くないと思う。

「オラ、アイちゃんの大ファンなんです！」

「ちゃんと覚えてないですよ」

キザマロの突っ込みが的確にゴン太に刺さる。

「フフフ、ありがとう！」

こういう純粋なファンの反応も嫌いではないのか、満更でもなさそうな笑みを浮かべる。うーん、やはりリミソラちゃんとダブってしまうな……

「でも、アイちゃんがどうしてココに？」

「アタシ、普段ココのスキー場で練習してるんだ」

そりゃあ、親が経営してるスキー場だからね……環境が名選手を育てるってのは間違っていないと思う。

「でも最近は落雪事故が起こってるよね。ちゃんと練習出来てるの?」

「うん、こんな事故が多くってね。練習出来なくてちよつと困ってるかな。もうすぐ代表選考会だしね……」

そういえば、アイちゃんってボク達と同じ10歳だったよね? 10歳でニホン代表つてかなり凄いような気がする。U—15みたいな年齢制限があつたりするのだろうか?  
?

「これはアイちゃんのためにも、なんとかしないといけなくなりましたね」

キザマロもかなり乗り気なようだ。可愛い女の子のためだからね。仕方ないね。

「フッフ、スバルくん達、優しいんだねっ!」

これは男を惑わす魔性の笑みってヤツだね。も、もちろんボクには通用しませんけど?  
?

「そんなことないって……」

「ちよつと!」

ゲツ、さつきから黙ってた委員長がお冠だ! ゴン太とキザマロもビクンツ! 反応し、恐る恐る委員長を伺う。

「委員長、どうしたの?」

べ、別に……ちよつと話し込んでただけなんだからね! 他意なんてないんだから! 勘

違いしないでよね！

委員長つぼく思考してみたけど、ボクがやってもかなり気持ち悪いな……あと疲れそう。

「スバルくん、アナタ……グルメタウンで落雪事故の調査をしてるはずじゃなかったの!?なのに、なんでこんなトコロで女の子とイチヤイチャしてるわけ!?!」

ちよつと、完全に冤罪だ！

「委員長、スバルはフツーに話してただけだぜ?」

ゴン太からフォローがもらえらるとは。でもチェックインする人を決める時のフレンジーファイア逆援護射撃は忘れてないからね。

「ゴン太は黙ってて!ワタシはなんでイチヤイチャしてるかを聞いているの!」

なんだ、イチヤイチャって!小学生に何を期待してるって言うんだ!?

「待って、待ってよ!ボクはただ、母さんの素晴らしさについてアイちゃんとだね……」  
 なんか変態みたいだな……いや、ここは引けない!マザコンじゃない男子なんて、いないんだよ! (錯乱)

「ワタシ達に落雪事故の調査をさせておいて、自分は女の子とこっさり逢い引きだなんて見損なつたわよ!」

ダメだ!聞いてくれやしないよ!

「アイちゃんがいなかったら、ボクは今頃病院送りだったかもしれないんだよ!」

さっきのはマジでヤバかったんだ。誰だつて相棒との会話中くらいは気が緩んじやうでしょう!?

「フーン、なるほど。助けるフリしてスバルくんをたぶらかそうと寄つてきたつてワケね?!よくある手だわ!」

一体何時からボクは女の子ホイホイにでもなつたんだ!つていうか、よくある手つてなんだよ、よくある手つて!学校じゃあそんなこと……た、たまにしか無かつたぞ!

クソツ、ツカサ君さえいれば、スケープゴートに出来たものを……!

「そもそも初対面なんだつてば……」

「ああ、そう!スバルくんもそのコを庇うワケね!」

話が通じない!乱神モードかよ!?!ゴン太、キザマロ、ヘルプミー!

「い、委員長、おかしいですよ」

「キザマロのクセに、ワタシにお説教するつもり!?とにかく、も・う・い・い・わ!!男三人揃いも揃つてデレデレ鼻の下伸ばしちやつてみつともないつたらありやしない!そんなに皆そのコが好きなら、もう勝手にしなさい!!フン!!!」

そう言つて委員長は鼻息荒く、ホテルの方へ行つてしまった。一步步毎に地鳴りでも鳴っているかのような怒りっぷりだ。

わ、わかっていたのに宥められなかった……いや、アレは無理だつて！小学生がしていい怒り方じゃないよ！

「行っちゃったね……」

男三人、みつともなく遠い目をしております。失った委員長の機嫌はプライスレス……

「アタシ、悪かったかな？」

なんかもう全て計算ずくでやっているように見えてきたな。このタイミングでアタシ、悪かったかな？つて言われても『ハイ、そうです』なんて言えるわけじゃないじゃないか。いや、多分勘違いなんだろうけどさ。

「そうじゃないんです。委員長、ああなると止められないんですよ」

「うん、アイちゃんは気にしないで！」

こ、こいつら……！なんて塩反応だ！とぼつちりはボクに来るんだぞ!?

「ハア……と、とにかく、この雪玉をなんとかしないとね」

「そのことなんだけど……さつきスバルくんを雪を投げた犯人……雪男かもしれないの」

平常時なら、雪男なんていませんよ。ファンタジーやメルヘンじゃあないんですから、なんて冗談を飛ばすか電波少女扱いするところなんだけども、電波少女って

該当する人結構多いような……電波人間的な意味で。

「え、どういうコトですか？」

「雪が勝手に浮いて、あれ？って思ったらその時、雪男が見えたんだ。直ぐに消えちゃったから見間違いかもしれないけど……」

もしかして、電波人間が現実のモノに直接干渉するときは一時的にビジブルゾーンが発生しやすい、とか？

「ロック、これは……」

「ああ、ビジライザーだ。落ちてきた雪玉を見てみるよ」

「うん」

ーカチャ！

ビジライザーをかけて落ちてきた雪玉を見ると、顔だけの雪だるまみたいなウィルスが見えた。コイツが……！名前は確か……スノーゴロン、だっけ？

「うわ、やつぱり……」

「電波ウィルスだな。やはり雪男は電波世界の住人だったらしいぜ」

「うん、ならこつちのものだ。アンドロメダよりは弱いだろうし、ポツコボコにして足形でも採ってやろうよ！」

「お、おう……」

なんでロックが引いてるの？漸くおっぴらに探し回れるつてのにさ。

「そうだスバル、同じようなことが他でも起きてたぜ」

うわっ、そうだった……

「移動が出来なくなっていて、ホテル側からしたらいい営業妨害ですよ……」

だよね。うっし、気張っていくぞ！

「わかった。ボクが何とかするよ」

「場所はここ以外に2箇所あります。後でメールを送っておきますね」

思ったんだけど、キザマロって結構オペレーターとして優秀だよね。直ぐにビビらなければ。いつかサテラポリスにオペレーターとして推薦してみようかな？本人が望めば、だけど。

「それじゃあ、危ないから皆は屋内へ！」

「了解！アイちゃんもここは、スバルに任せてくれ」

「よくわかんないけど、いいんだよね？」

ちよつと心配そうな様子のアイちゃん。ダメだな。どうしてもあざとく見えてしま  
う。

「うん！」

「フフツ、それじゃ了解！」



「ゴン太、アイちゃんは任せたよ！」

「……おう！任せとけ！」

ググツと拳を合わせる。脳筋みたいだな、これ。

「……よし、行ってくるね！」

「おう、じゃあな！」

そう言つてゴン太達はホテルに避難していった。ここからはボク達の戦場だ！今宵のロックバスターも血に飢えている……！

「へッ、お楽しみの時間だぜ！雪玉を潰し回つていれば雪男が釣れるかもしれないねえしな  
！）」

なんだよ、なんだかんだで楽しみなんじゃないか。

先ずは一つ目、手早く潰してしまおう！ウエーブホールは……あつた！

電波変換！星河スバル、オン・エア！

「よおし、暴れまくるぜ、スバル！」

わかつてらあつ！

ーヤエバリゾートの電波ー

周りに誰もいないことを確認してから電波変換を完了し、噴水電波に急行する。噴水電波と言っても電脳世界ではなく、現実世界の落雪事故が起こった場所の方だ。

「改めて見るとホント、デカイ雪玉だよね……」

現実の雪玉と上に乗っている雪玉型のウイルスで、巨大な雪だるまに見えるので、どうもコメディ感が抜けきれない。ちよつと愛嬌のある顔だよね……ハツ！デリートしなくちやいけないんだつたね。

「おう、コイツの原因になつてるウイルスを片付けちまおうぜ！」

「うん！」

「……ギャオオオオッ！」

向こうもやる気みたいだ。雪玉の顔は動いていないのに、どうやって叫んだんだろ。あれ、中身がある雪玉タイプなんだっけ？

「それじゃロック、いくよ！」

「おう！」

ウォーロックアタックで雪玉から降り、戦闘体勢に入ったウィルスへと高速接近する。コイツ、転がって攻撃するタイプだな!?! ならいいカモだぞ!

「ハアツ!」

雪玉状態のウィルスに、展開したプラズマガンを押し付け内部へ直接電撃弾を撃ち込む。思った通り、この雪は外れるタイプの外付けアーマーだ。

「……………ツ!」

プラズマガンのエフェクトにより、微動だにせず硬直するスノーゴロン(だったはず)。一応、ロックバスターの連射で雪のアーマーを削っておく。チョバムアーマーとは違うけれど、ウィルス側である程度自由に取り外し出来るようだ。

「本体は猿かよ……………」

ロックの眩きも最もで、スノーアーマーを削りきった内部にはまさに猿としか言いようのない姿があった。雪玉の外見とは酷くミスマッチに見える。

「ハイハイ、油断しない油断しない……………セイツ!」

マッドバルカンを展開、一斉発射しスノーゴロンのHPを削りきる。コイツは数でかかられるとマズいタイプだと思う。一斉に転がって来られたら……………跳躍でなんとかかな?

「ーピロン!」

「あ、メールが来たよ。キザマロからだ」

「落雪事故の場所だろ？読んでみるよ」

「うん、ええつと……落雪事故の起きた場所ですが……ホテルの入り口の前に二ヶ所、グルメタウンに二ヶ所になります。くれぐれも気をつけてくださいね！……だって。グルメタウンか。あそこはスキー場へ続くリフトがあるから、落雪事故の被害が大きくなっちゃうよね」

被害つてより被害額だけど。折角スキーをしに来たのに目玉のスキー場が雪玉で封鎖されているんじゃ、酷い営業妨害だよ。

「ならとつと雪玉を潰しちまおうぜ！」

「わかってる！」

しかし、あのファンシーな雪玉の内側にキモい猿つて、なんだかなあ……気持ち悪いつていうか、やる気が削がれるというか……とにかく変なウイルスだったね。

「先ずはグルメタウンへGO！」

「おう！」

トランザム！じゃなくてウォーロックアタックで高速移動を繰り返しグルメタウンへと急ぐ。やっぱり移動にも使えるよね、これ。ロックオンした後には跳躍しているから、立体起動のイメージだろうか？

とにかく急がないと！

——二十分後・グルメタウン——

「……よし、これで終わりかな？」

グルメタウンへと急行し、雪玉ウイルスを潰し回ったのもう大丈夫なはずだ。到着して確認したら、雪玉の上にウイルスがいなかった時はちよつと焦ったけどね。探し回るのは結構、骨が折れたよ……

——ピロ——

「またメール……キザマロからだね。ええつと、ゴン太達はホテルのロビーで待ってるってさ」

確か今、ホテルのロビーには……

「ならさつさと行こうぜ。あのツインドリルのゴキゲンも伺わなきやいけないんだろ？」

「うわあ……それは思い出したくなかつたよ」

難易度高すぎるミッションだよ……普通にインポッシブルじゃない？

「ククククツ、オレは高みの見物を決め込ませてもらうぜ。オマエの反応は面白いからな、いい娯楽ってヤツだ」

遂に認めやがったな!? 人の受難を娯楽扱いしやがって! スターキャリアー開封の時からそんな節があつたような気がするけど……

「ちえつ、それじゃまずはロビーに向かうよ……」

何でこんな気持ちでソロさんに会わなくっちゃいけないんだ! さん付けは必要ないかな。一応敵だし。

ーリーゾートホテル・フロントー

フロントとロビーは役割の関係上、同階にある。あとはゴン太たちを待つだけなんだけど……

「ゴン太達、遅いな……」

もう別にソロは来なくていいんだけどね。ていうか何してたんだよ。こんな所で。

「……あ」

うわー、やっぱり来たよ。民族衣装に近いけれど、古めいた感じはあまりしない。そんな不思議な服装に身を包んだ白髪赤目の少年がこちらへ向かって来ていた。別にこの通路を通らなくてもいいじゃないか! どうせロックを見て近づいてきたんだろうけど。

「……」

「こちらを睨んでくるソロ少年。ブラザーバンドや絆を憎んでいるんだっけ？」

「何かな？」

「目障りなんだよ……」

初対面の人間に目障りとか言ってるから、ぼっちになるんだよ……

「いきなりだね」

「もし……自分の身が大切なら、下らん電波ごっこは止めておくんだな。そして今すぐ、ここから立ち去れ」

下らんって！世界救ったんだぞ!? だけどブライも接近戦タイプ。正直実力の程なんてわからないからな……

「マテリアルウェーブのことかな？ あれは別に誰だつてやってることで……」

「(スバル！ 気をつけろ!! 凄まじい電波のオーラを背負つてやがる!)」

普通に丸聞こえなんだけどね。

「……………」

「コ、コイツ……………」

「ああそうだ。聞こえてるし見えてるんだよ、その電波体」

電波が見えるなんて、不便な生活送つてそうだよね……ボクならしよつちゆうコケちやいそう。

「クツ……！ナニモンだ……!？」

ロックの警戒レベルもマックスだ。後でブライ対策でも考えておくか……でも電波障壁なんていうA. T. フィールド持って来られたら、打つ手なさそうだしなあ。

「言っておくがオレは雪男じゃないし、このホテルがどうなろうと興味は無い。お前が目障りだから忠告しただけだ。……そこを退け」

「……別に、少し迂回すればいいだけの話なのに」

「聞こえなかったのか？そこを退けと言ったんだ」

「はいはい、わかりましたよ……」

「……フン」

鼻を鳴らし、ホテルの出入口から出ていつてしまった。酷い態度のヤツだったな。あんなのとブラザーとか、絶対無理だよきつと。

「ヤロウ、ビジライザーもかけずに……」

「同じ年くらいに見えたけど……」

「フンツ！今度会ったらコッチの実力を見せてやるぜ！」

どうせ戦うんだ。ロックのやる気があるに越したことはない。あとはボク次第か

……

「まあまあ、ロックの同族に心当たりとかはないの？」



「いや、見たところ普通の人間みたいだな。オレらみたいな電波体が取り憑いている様子もねえ。だがそれじゃあ、凄まじいオーラの説明がつかねえしな」

うーん、凄まじい電波のオーラって一体なんのことだったんだろう。ムーの遺産から出てたとか？それって虎の威を借る狐……いや、本人も強いらしいし、それは違うか。

「ふーん……」

『オーイ!!』

あ、遅いよゴン太、キザマロ！アイちゃんは……別れたんだね。

「雪の方、片付いたみたいですね」

「うん、凄く気持ち悪いウイルスだった……」

あの猿は暫く忘れられそうにないよ。キモい猿……クソ猿……EM……禁止。ウツ、頭が……！

「そ、そうでしたか……」

「で、雪男は？出てきやがったか!？」

猿は出てきたけどね。雪玉の中から。

「いいや、ダメだった」

「うーん、オレはゴリのヤロウが怪しいと思うんだけどなあ……」

「でも証拠はないからね。尻尾を出してくればいいんだけど……」

電波体の罪を立証するのって、実は限りなく難しいような気がする。戦闘力を持った電波体なんてかなり限られてるし、目撃者は皆殺しだ！……が罷り通っちゃうのが電波人間なんだしね。

「今度会ったらオレ、問い詰めてやる。アイちゃんのためなら、ちよつとぐらい怖い目にあつてもいいぜ」

流石にブリザードに突貫は止めたいところだけど。

「……やはり動機はそれですか」

「うるせーよ、キザマロ！」

痛いところを突かれた、とばかりに反論するゴン太。反論っていうか誤魔化し？

『キミたち！』

この声……滑田さんか。

「雪を片付けてくれたんだね。助かったよ！一体どうやったんだい？」

「それはこのスバルが……」

「ゴン太ストップ！」

ちよつ、ナチュラルにバラそうとしないですよ！

「?!まあ、とにかくありがとう。これで明日からスキー場をオープン出来そうだよ。その前祝いに、この後、グルメタウンでイベントを開催することにしたんだ」

おつ、ついに大食い選手権か!? ゴン太が興奮してオックス・ファイアになっちゃうんだよね、確か。なるべく止めたいところだけど、本人は出たがるだろうし……何とかフオローするしかないか。

「イベントですか?」

「ああ、『大食い大会』をね!」

選手権じゃなくて大会だったか。スキーの方とごつちやになってたね。

「待ってましたー……!!!」

ゴン太エ……いや、切り替えが早いのはいいことなんだけども。

「タダで参加出来るけど、誰か参加するかい?」

「ハイハイハイハイ……!!!」

テンション高過ぎじゃない? でもタダか……いや、ボクが参加しちやダメだな。万が一の時に、動けなかったら困る。公衆の面前でリバーズなんてゴメンだし。

「なるほど、キミなら期待出来そうだな。活躍を楽しみにしてるよ。それからさつき、アイの話をしていなかったかい?」

そういうえば……あんまり似てないよね、親子にしては。眉もあんまり……

「アイって……スキーのアイちゃんですか?」

「……ムツ、滑田さん、いくら支配人だからってちよつと馴れ馴れしいですよ」

ゴン太……それ、完全に痛いフアンじゃないか!

「ハハハハハ! アイは私の娘だよ。仲良くしてくれてるみたいだから、お礼を言おうと思ってるんだけどね」

そういうえば、滑田さんの奥さんってどうしているんだろう。シングルファザーだったり?

「エ!? お、お父さん!? オ、オレ、お父さんに向かって……もうダメだ、終わった……」

ゴ、ゴン太が真っ白な灰に……ゴン太の魂が一筋の煙となつて天に昇っていくのが見える……いや、冗談だよ。

『『マロ辞典』によりますと、ここからの回復は不可能ですね』

ま、まだアイちゃん本人が……目はある、ハズ。

「ハハハ、眉毛とか似てるから気づいてると思ってるんだけどなあ……」

いや、似てないです。というか、会話中に出現していたパーソナルビューでわかってたけど。

「まあそれで、アイも大食い大会を見に来るって言うってたんでね。キミたちに教えておこうかと……」

「ウオー……!!! お父さん、オレやります!! 挽回のチャンスを!!!」

大食い大会で優勝することがアピールになるかは甚だ疑問だけど……

「ま、まあ頑張れとしか……」

ボクには応援しかできないよ。

「ハハハ、まあいいさ。とにかく、またアイとも仲良くしてやってね」

そう言つて、滑田さんは行つてしまった。きつと大食い大会の準備があるんだろう。大変そうだなあ……：他人事だけど。

「ウォー……!!!燃えてきたー!!!」

「遂に來た見せ場つて感じですね。どうします？グルメタウンに行つてみますか？」

「そ、その前にさ、委員長のコトをこれ以上放置するワケには……」

やべーよ。絶対マジギレしてるよ。何か手土産でも持つていけばいいかな？それかロックマンの状態で行くとか？いや、電波体じゃ委員長に見えないよね……都合よくビジブルゾーンが発生するとも思えないし。

「確かにそうですよね。でもまだ、機嫌は直つてないと思いますけど……」

チラチラと見ないでくれよ！

やっぱりボク一人で何とかしなくちゃいけないのか……

「ボク一応、委員長の様子見てくるよ……」

「じゃあボクは、こつちでゴン太くんが暴走しないように見張つておきますね」

暴走を警戒されるつてどんだけ入れ込んでるんだ……？部屋にアイちゃんのポス

ターを張ってるようなレベルではないと信じたいけど……

「（それじゃあ、あの口煩いドリルのところに行こうぜ。ちゃんと看取ってやるからよ）」  
 どういう意味だそれは！

「（それじゃボク、死んでるじゃないか！）」

「（それくらいの気持ちでいけてことだよ。クッククック……）」

他人事だと思つて楽しみやがって！

ーーススイートルーム・寝室前ーー

恐らく、と言うより確実にこの先にいる。禍々しいオーラだ。きつとネズミ一匹入つていけない領域になつていゝらんだらう。ケフェウスの電磁波にも似た強力なプレツシャーを感じる。なんでボクが、こんな目に……

「い、委員長？入るよ……？」

寝室に一步踏み入れた瞬間、何かゾワツとしたものがボクの全身を突き抜けた。人間の出していいプレツシャーじゃないよ、ホントにさあ！

「ちよつと!!そこから一步でも入つてきたら、タダじゃおかないわよ!!」

ヒエツ！怖い……こんなの説得とか無理だろ！

「（クククククツ……説得は無理みたいだな。諦めてゴン太たちのところへ行こうぜ。」

クツクツク……」

「(わかつてるけどさあ……もう少し協力してくてもいいんじゃないの?)」

「(オレに何を期待するってんだ?)」

そりやそうだけどさあ……

「ハア……もう行くこうか」

「(おう!)」

委員長とスキー、結構楽しみにしてたんだけどな……

ーガチャっ!

ーリゾートホテルー

ープルルル!

あ、電話だ。黒服お姉さんからだっけ?

「ブラウズ!」

ーブウー!ー

エア・ディスプレイの画面に映ったのはゴン太だった。ああ、大食いマシンの件か。

忘れてたよ……

「あつ、ゴン太。どうしたの? こっちは全然ダメだったんだけど……」

『頼むスバル！助けてくれ!!』

「……何かあったの？」

『オレ、大食い大会で、どうしても優勝したいんだ。だからスバル！わりのが「大食いマシーン」を探してきてくれないか!？』

普通そんなモノ持つてる人いないってば。いや、いるんだけどさ。

「大食いマシーン……なんか凄そうな名前だね」

『大食いマシーンは食いしん坊達の間ではかなり有名なんだ。食い物を無理やり口に運んでくれるんだぜ。例え……どんなに腹が一杯でもな』

それ大食いマシーンじゃなくて拷問マシーンじゃない？

「うわっ、聞いただけでお腹一杯になってきたよ……」

『わかるか、スバル。コイツを使うにはかなりのリスクが伴う。胃袋がおかしくなっちゃまうかもしれねえ。ただ……それでも、それでもオレは優勝したい!!』

画面の向こうのゴン太はかなり焦っているように見える。そこまでするか……?とは思うけれど。これがゴン太の良さなのかもしれないね。

「まあ、探してみるけど……あんまり期待しないでよ?」

『ああ、わかってる！恩に着るぜ！今回は何としても勝ちたいんだ！オレ、アイちゃんにいいところを見せたくてよ……!』



そこまでの覚悟なら、止めるのも野暮か。どうせ怪我人は出ないんだし。

「わかった。……頑張れよ、ブラザー」

『へへ……おう！あ、もうすぐ大会が始まるから、なるべく早めに頼むぜ！じゃあな！』

ーバシユツ！

「……よし、『大食いマシーン』を探しにいこう。ゴン太は本気だからね。ボクも少しは応えなくっちゃ！」

「（だが時間的にそう遠くへは探しに行けないぜ。取り敢えずはホテル内部だな）」

確か……ヒゲダンデーが所有者を知ってたはずだ。ホテルマンは多いから、名前まで特定出来ればいいんだけどね。

「まずはヒゲダンデーさんに情報を聞きにいこう」

「（ああ、確か『困った時は何時でも相談しろ』って言ってたしな！）」

取り敢えずはスイートルームに戻って、ヒゲダンデーに話を聞かなくちゃいけないな。

つてことは、またマジギレ委員長がいるスイートルームに入らなくちゃいけないのか。嫌だなあ……

## 14

ーススイートルームー

先程潜ったばかりの、豪華な装飾で彩られたスイートルームの扉を鬱々とした気持ちで再び通る。ああ、どうか委員長に気づかれませぬように……

「あつ、いた。ええつとヒゲダンディーさん、ちよつといいですか？」

「ナニかおコマリですか？」

慌てることなく対応しようとする姿は正にコンシエルジュの鏡つてやつだね。しかも年中無休。そのうちマテリアルウエーブの反乱とか起こったり、しないよね……？なんだか不安になってきたな。

「実は『大食いマシーン』っていうマテリアルウエーブを探してるんですけど、心当たりありませんか？」

「そうですね……タシか2カイにいるセンタクタントウのホテルマンがモトオオグイチャンピオンで、オオグイマシンのマテリアルウエーブをイマもっているハズですよ」

「なるほど……ありがとうございます！」

「ただ、コジンジョウホウですのでシヨウウシヤがヘンコウされたまま、ジョウホウがコウシンされていないカノウセイもありますが……」

うわ、確かに。個人情報をもんな頻繁に更新するわけにもいかないだろうしね。更新時にハッキングでもされたらコトだ。仕方ないよ。

「（それじゃあ、その大食いチャンピオンってヤツを探すか）」

「（うん、担当の仕事が終わらない内に急ごう！）」

仕事が終わるか休憩時間なんかで場所を空けてたら困っちゃうからね。

1-2階・収納ルーム前

ゲームのように、ウエーブロードを伝っていかないと到達出来ないという仕様ではなかったのに、普通にホテル内の案内板を見ながら収納ルームへとたどり着いた。確か洗濯した布団やシーツなどを入れるために、洗濯担当のホテルマンさんが来ているはずだ。

「つと、来たね。多分あの人だ」

見た目は普通のデキる女性ホテルマンって感じの風貌だ。割と美人だし、スタイルもいい。食べた物は一体何処へ……？

「フウ……これで一区切りってとこね。……あ。お客様、こちらの収納ルームは関係者

以外立ち入り禁止となっておりますが……」

ヤバツ、注意されちゃった。

「ええと、すみません。実はルームのコンシェルジュに、洗濯担当のホテルマンが『大食いマシーン』のマテリアルウエーブを持っている元大食いチャンピオンだと聞いたもので……」

ボクが経緯を話すと、ピクンツと一瞬震えたのが確認出来た。女性としては、大食いチャンピオンだった過去なんて消し去りたいってことなのだろうか？

「……ど、どうしてそのことを……！大食いマシンのマテリアルウエーブならお貸ししますので、このことは内緒にしていただけと……だって、恥ずかしいでしょ？」

テハツと誤魔化すような笑顔を見せるホテルマンさん。多分婚活中なんだろうな……いや、邪推が過ぎる。失礼だし、止めとこう。

「それじゃ、お借りしますね。ありがとうございます！」

ホテルマンさんにお礼を言っつて、その場を離れる。後はグルメタウンにいるゴン太に大食いマシンをマテリアライズしてあげるだけだ。

「（それにしても……布団なんか、わざわざ専用の部屋があるんだな。布団のクセに生意気だぜ）」

「（その発想はなかったよ）」

これ、確かゲームでもやった会話だ。なんか可笑しくなってきた。フフツ……!

「オイ、どうしたんだ? 突然ニヤケだしたりしてよ!」

「ちよつと思ひ出し笑いつてヤツだよ!」

「(テレビでやってたが、思ひ出し笑いをするヤツつてムツツリらしいぜ)」

「(ちよつと、それは誤解だよ!)」

でもそれ、確かボクも聞いたことあるぞ。なんだか悲しくなってきたな……

「(へいへい、そういうことにおいてやるぜ)」

「だから誤解だつて!!」

ロツクめ……ニヤニヤしやがつて! ボクはムツツリじゃないつてのに! とんだ冤罪だよ……

ーグourmetタウンー

大食いマシーンを手に入れ、漸くやってきたグルメタウン。先程までの臨時休業が嘘のように賑わい、美味しそうな匂いで満ちている。お、お腹減ってきたかも……

「ええつと、ゴン太は……あ、キザマロ。ゴン太は?」

「ああ、ゴン太くんなら、少し集中したいと言って向こうに行っちゃいましたよ。流石に邪魔するわけにはいきませんしね!」

なるほど、ゴン太はかなり本気だな。それに、今日は元々朝ごはんを抜いてきてるって話だから、食欲もきつと最高潮だ。

「そっか……あ、そうだ。キザマロは参加しないの？大食い大会」

「ブツツ！と吹き出すキザマロ。笑っているワケではなさそうだ。」

「な、何を言い出すんですか!? 『マロ辞典』によると、世に言う大食いの人って胃の大きさがとんでもなく大きいらしいんですよ！大食いなんて、ボクにはとてもとても……」

「フラグ乙。強制参加だろうけど、頑張つてね」

「それは残念。アイちゃんにいいところ見せられるかもしれないってのにさ」

「それはゴン太くんだけですよ……スバルくんこそ、参加しないんですか？」

「おっと、カウンターを食らってしまった。」

「うん。あんまりアイちゃんとイチャイチャしてたら、また委員長に大目玉食らいそうだしさ」

「テヘペロ、と冗談めかして言う。つたく、ブラザーがちよつと異性と会話してたくらいで大袈裟なんだよな……」

「スバルくんが本気になったら、ゴン太くんにはいよいよ勝ち目が無さそうですし、いいと思いますよ」

「？」

勝ち目？誰かと戦うの？

「まあ、わからない方がいいんですけど……」

キザマロって時々、不思議なコト言うよね。

「まあいいや。それじゃボク、ゴン太のところに行つてくるから」

「はい、委員長の分までゴン太くんを応援しましょうね！」

うん。キザマロの分までゴン太を応援するよ。

グルメタウンに立ち並ぶ店群の奥、巨大なバーベキュー装置が設置されている大食いの大会の会場に、ゴン太はいた。こちらの姿を見つけると、思いつき手を振つてくる。ブンブンと、元気はよさそうだ。

「……そ、それは！大食いマシーンのマテリアルウェブ!!恩に着るぜ、スバル!!さあ、早速マテリアライズしてくれ！」

「お任せあれ！それじゃいくよ……!!」

大食いマシーンのマテリアルウェブ、スタンバイ！

『ゲップ……大食いのサポートをするでゴワス!』

「マテリアライズ！大食いマシーン！」

ーバシユツ!

出現した大食いマシンのマテリアルウェーブは、コック帽のような外見で、頭に見え、被って使用するタイプのように見える。説明文には満腹丸と書いてあるので、これが名前なんだろう。

「サンキュースバル!! ホント恩に着るぜ! よーし、やってやるぞ!! 見ててくれ、アイちゃん!!」

「あんまり無茶し過ぎないですよ?」

「スバル。男には、やらなきゃいけない時があるんだよ……!」

「それでも、それでもゴン太が体を壊したら、きつと委員長が悲しむよ。引き際は見極めておくようにするんだ。ただし、全力で勝ちにいくこと! わかった!」

「……おう。わりいな、気を遣わせちまって。オレ、頑張るからよ。スバルもしつかり見ててくれや!」

そう言ったゴン太の顔はとても晴れやかだ。まあ暴走するんですけどね。取り敢えずは大食い大会を楽しんでくれれば、それでいいや。

「よーしその意気だ! 行ってこいゴン太!」

「うおおおっ! 待ってろアイちゃん! 男ゴン太! 本気の食いつぶりを見せてやるぞ!!」



今から暴走とか、ないよね？

——20分後——

「それでは只今より、『大食い大会』を始めます！」

——ワーワー!!ワーワー!!

盛り上がりは十分だ。

「……な、なんでボクが」

数合わせだったんだ。強く生きろよ、キザマロ。

「へるはら減腹 なるみ鳴美です！頑張りまーす！」

ゴン太と同じ年くらいで、シュツとした細身の女の子だ。でも名前からして大食いしそうな感じがする。それに細身なのにあの自信……強敵だな。間違いない。

「(このメンツなら勝てそうだけ……!!)」

ゴン太は既に勝ちを貰ったと思ったのか、余裕そうな表情だ。慢心せずして何が王か、と最古の英雄王も言っている。とにかく、この三人で大食いチャンピオンを競うことになったわけだけど、ゴン太大丈夫かな……？

「ゴン太くんもキザマロくんも、みんな頑張り——!!!!」

大会会場に、主催者の愛娘にして天才スキー少女であるアイちゃんの声援が響く。男がどう応援されたら嬉しいのか、まるで熟知しているかのようだ。ううん、きつと邪推なんだろう。

「ア、アイちゃん!!オレ、頑張るっす!!!」

ゴン太のテンションも最高潮だ。これなら油断することもないだろう。油断している暇もなさそうだけど。特にあの、減腹さんを見る限りではね。

「大食い大会にセレクトされたメニユーは、『特選ヤエバ牛』で作りましたハンバーガー、そしてそれをクリアした選手には巨大ハンバーガーへと挑戦してもらいます!選手にはヤエバのグルメをとくと堪能してもらいましょう!!」

な、なんだって!?巨大ハンバーグだ?!ちよつとくらい、分けてもらえないかなあ。しかも特選ヤエバ牛とか、絶対美味いに決まってるよ……!」

「それでは大食い……スタート!!」

ーワーー!!ワーー!!

滑田さんの合図によって大食い大会がスタートした。やはりボクの予想通り、減腹さんのペースが早い。大食いマシーンを使っているゴン太と同程度のスピードだ。しかもまだ、かなりの余裕がある。それはゴン太も同じだけど、問題は余裕の底が深いのはどちらだということだ。

ーワーワー!! ワーワー!!

底の深さ次第では、まだ序盤ながら早食いにスパートをかけてくる可能性がある。ゴン太も胃の大きさには自信があるだろうけど、大食いマシーンのスピード以上の速さで食べられたら、ゴン太の勝ち目は限りなく減ってしまう。

ーワーワー!! ワーワー!!

その辺りの見極めを減腹さんが完了させる前に、勝負を決めたいところだ。ところで、どうしてボクはこんなに解説っぽいコトをしているんだろうか？別にフードファイトなんて興味はないんだけどな。ハンバーグの熱にでも充てられたのかな？

「ゴン太!! 頑張れー!!」

「さあゴン太選手、もの凄い勢いで食べている!だが隣の減腹選手も凄いスピードだ!!そしてキザマ口選手は既に論外の様子!ゴン太対減腹!!これは歴史に残る大食い勝負になりそうだ!!」

滑田さんも、結構ノリノリで解説やってるよね。しかも中々ユーモアがある。キザマ口はよく頑張ってるよ……

「ウォーワー!!」

ゴン太が吠える!凄いい気合いだ!喋ってる暇があったら食えと言いたいけど!

「ふいふいん」

やはり減腹さんは強敵だ……！まったく動揺を見せていない。バーガーを噛み千切ってすぐに飲み込んでいるのかと疑いたくなるような速さだ！もつと噛めよ！

「さあ、両者一步も譲らない！だが減腹選手は余裕があるぞ！」

「ク、クソ！」

ゴン太が焦り始めた。まだ平気とはいえ、予想外なダークホースの出現に戸惑っているのだろう。

「ゴン太くん！ファイトー！！」

アイちゃんの黄色い声援が響く。キザマロにも応援してやってよ！

「!!ま、負けられねえ!!ブルルオオー！！!!」

ーワー！！ワー！！

「さあゴン太選手！更にスピードアップ!!」

負けるなゴン太アー！！

「ふふふーん！」

「おおっと！それならと、減腹選手も楽々スピードアップだ！」

コイツの胃袋は化け物か!?

「ブルルーッ！！（ヤ、ヤベエ、そろそろキツイ……！それに、なんかあの火で頭がポーツとしてきたぜ……）ク、クソオ！」

「オーオーオー！！！！」

「な、なんだ？」

「ゴン太？まさかもう……?!？」

「さあ、メインテーブルの巨大ハンバーグが、いよいよ焼き上げられようとしています  
！」

「凄、巨大な鉄板の大きさに見合った、超巨大ハンバーグだ。それに中まで火を通す  
為なのか、炎が燃え盛っている。相当な火力だ。」

「ゴン太選手と減腹選手、どちらが先にハンバーグへたどり着くのか！一段と燃える火  
の手が、二人を激励しているようです！」

「(火が、ブルル、火が、ブルルル……)」

「ヤバイ、明らかに様子がおかしいぞ！既に乗っ取られかけているのか!？」

「……ゴン太くん!？」

「アイちゃん呼び掛けにも応える様子はない。ただ黙々と食べているだけだ。それ  
でも減腹さんに追い付くので手一杯に見える。」

「(ヤバイぞスバル！ビジライザーだ!)」

「わかってる……あれは、オックスだ!」

「ひたすら食べているゴン太の背後に揺らめく炎……間違いなくオックスだ。」

「ああ！オマエもオックスのことは覚えてるだろう？最もあれは本物のオックスじゃなく、今まで散々潰しまくってきた『残留電波』みたいだけだな！大方オックスの電波がまだゴン太の体内に残っていて、ソイツが覚醒しちまったんだらうよ！」

まだ、まだだ。まだゴン太は乗っ取られちゃいない！

「まだゴン太と融合してはいないんだ！ゴン太には、なんとか優勝させてやりたい……！」

「そんなこと言ってる場合か?！」

大丈夫、大丈夫だ！やってやる！

「ゴン太アアー!!もうちよつとだよ！気張れ!!」

大食いのタイムリミットはあと30秒。なんとか持ちこたえてみせろよ、ゴン太！

「ブルルルル……す、スバル！オレ、オレ！うおおおつ！」

ーワーワー!!ワーワー!!

「おおつとゴン太選手、大食いマシンの手に加えて自分の手も使い、バーガーを口の中に押し込み始めたぞ!!なんというスピード！速い！とにかく速い！」

「っ！手が足りない……!（だけどこんなペースじゃ、あと数秒も保てればいい方。そこから追い上げてしまえばっ!）」

よし！物理的に、減腹さんは一度に口へ運べる量に限界がある。大食いマシンの腕

四本にゴン太自身の両腕を加えての腕六本体制！これに追い付ける人間はいない！

「これには減腹選手も追い付けない！！さあ残り時間は後10秒、デッドヒートになってきました！！」

これなら、これならいけるはずだ！

「ゴン太アアー！！このままぶつちぎれ！！」

かなり荒い言葉を使っている自覚はある。だけど今は、ゴン太にボクの声が届かせる方が先決だ！

「ウオーーーーー！！」

「カウントダウン！5……………4……………3……………2……………1……………0！そこまで！！」

ーオーーーーー！！

こ、これは……………まさか!?

「激闘を制したのは……………ゴン太選手だあああつ！！」

ーオーーーーー！！

凄い熱気だ。そして遂にやったのか、ゴン太。ゲームじゃ途中でオックスに乗っ取られたけど、頑張った、ホントによく頑張った！

「ゴン太……………お疲れ！よく頑張ったよー！」





で、より凶暴化したように見えるのは、多分気のせいじゃない。

『怪物だー!!』

『こつちを睨んでるわ!』

普通の人間である野次馬にも見えているってことは……やはりビジブルゾーン。

「キヤーーー!!!!」

アイちゃんも既に恐慌状態だ。このままゴン太がバケモノになった記憶なんて、忘れてくれると助かるんだけどね。

「(言わんこつちやない!どうする!?オレ達にしか止められねえぞ!)」

わかつてるよ!こちとら、それでもゴン太に勝たせたかったんだ!尻拭いはするよ!完璧にね!

「(電波変換だ!残留電波なんて、もう何十回も戦ってるでしょ!?今更狼狽える相手じゃないよ!)」

この2ヶ月の戦いの成果を見せてやる!バトルカードはフォーマットされたけどね!

「(なら急ぐぞ!)」

「(わかってる!確かりフト側の物陰に、目立たないウエーブホールがあったはずだよ!そこからウエーブインする!)」

待  
っ  
て  
ろ  
よ  
、  
ゴ  
ン  
太  
！

ーグメルメタウンの電波ー

「ブルルオオーー!!!」

『キャアーー!!』

ヤバい、もうホントに暴れだすギリギリだ！早くなんとかしないと、ゴン太への負担も大きくなってしまふ。それは誰も喜ばないだろうし。任された……いや、知ってて促した以上、最大限被害を出さずにオックス・ファイアを鎮圧しなければならぬ！

「待て!!」

人混みの上を電波人間の跳躍力で飛び越え、我を忘れ暴れそうなオックス・ファイアの眼前に着地する。

「!?!」

オックス・ファイアは困惑しているけど、明確な意思はないと思われる。やはり、完全な覚醒にはノイズドカードが必要ってことか……！

『な、なんだ？あの青い少年は!?!』

『ちよつと危ないわよー!!』

周囲の観客にも見えているらしい。バケモノ扱いされたオックス・ファイアしかり、ここはビジブルゾーンであるってことだ。それに確か、強力な電波体同士が一ヶ所に集まるとビジブルゾーンが発生しやすいって、コダマタウンにいる物知りデンパくんが言っていた！

「皆、ボクのコトが見えているのか！」

「ああ、そうらしいな。ビジブルゾーンに入っちゃったようだけ。……まさか野次馬がいるからって、ビビったりしねえよな？」

「冗談！」

ロックも面白いジョークを言うようになった！意思なきオックス・ファイアじゃもう、スパーリングの相手にもならないってのにさ！

「へへッ、上等だ！」

『皆さん！あれはロックマンです！一見するとただの少年ですが、実は凄いヒーローなんです！だから皆で応援しましょう!!……ウツプ』

お腹一杯だろうに……ヤムチャしやがって！でもありがとう、キザマロ！

『そ、そんな話信じられないけど……』

『今はキミに賭けるしかない！』

『頑張つてー！ロックマンー！』

ーワーワー!!ワーワー!!

黄色い声援で、ボクのパワーも大幅アップだ!……なんてやってるから、毎回委員長にどやされるのか。反省反省。

「凄い注目ってヤツだね……」

「クククツ、これは負けられねえな!」

ボクだって、公衆の面前で赤っ恥をかく趣味はないよ!

「それにオックス・ファイアのヤロウ、大分イラついてるみたいだぜ!」

「ブル……ブル……ブルルオオー……!!!」

これだけイラついているのなら、動きの誘導はかえって楽かもしれない。観客への被害も、抑えやすいだろう。願ったり叶ったりってヤツだ!

「わかってる!周りに被害が出る前に……コイツを止める!ウェーブバトル・ライドオン!」

「ブルルオオー……!!!」

オックス・ファイアもやる気満々って感じに見える。わかつてはいるけれど、あのパワーはかなり厄介だ。ベルセルクやスターフォースを使えない今のボクなら、機動力で翻弄するしかない。もう何度もやっていることだけだね!

「いくよロック!」

「おうー！」

オックスの主な攻撃方法は突進、パンチ、オックスフレイム！。ただし残留電波のよ  
うな自我の薄い状態だと、手っ取り早い突進……オックスタツクルを多用する傾向があ  
る。そのオックスタツクルにも分かりやすい隙……突進前に行く、前傾姿勢への移行時  
間がある。つまりは……

「いつも通りにやるよ（後の先を取るよ、ロツク！）」

「おうよ、任せなアツ！」

いくら自我の薄い残留電波といっても、前傾姿勢も取らずに突進してきたりはしない  
だろう。体に染み付いた動きってヤツだからね。

「ブルルオオーー!!」

ハイ今！

「ロツク、オン！」

「ソイヤツ！」

それはフルーツの方だつて！

い、いや、ウオーロツクアタツクはちゃんと発動している。前傾姿勢になったオツク  
スが晒した刹那の無防備状態を見切り、懐に飛び込む。左腕にはヒートアツパーを展  
開。歯ア食いしばれよオツ！

「うおおおおおつ!!!」

「ーバギイツ!」

「ブツ、ブルオオツ!」

前傾姿勢のために俯き、ボクの姿が視界から外れた瞬間を狙つてのカチ上げアツパー  
!コイツは脳天に響くよ!

「ブル……オオオオツ!」

おっと、持ちこたえたか。アツパーを食らい、後ろにふっ飛びそうな体を無理矢理足  
で支え、耐えきる。

しかし、ダメージは受けてもらう!

「コイツ……ゴン太が入ってる影響か、中々タフだぜ!」

ロツクの言う通りゴン太の精神的な強さの影響なのか、アツパーを食らつて頭を振る  
という絶好のチャンスだつてのに、あまり隙には見えない。むしろ罠……?のような気  
さえる。

「大丈夫。油断さえしなければ、負けはない!」

「へへッ、オレらに勝とうなんざ、十年は早いんだよ!この亡霊電波がアツ!」

それじゃボクたちの方が悪者じゃないか……つと、今回は衆目もある。なるべく優雅  
に?倒さないといけない。

「ブルル……ブルオオツッ！」

よし、戦闘再開つばいぞ。オックスの場合、完全に暴走してると逆に遣りづらいんだ。動きが読みにくくなるからね。

「よし、ばつちこい！」

左腕にはシールドを、右腕にはロングソードを展開！正にナイトスタイルってヤツだね！特に何か、スペックが上がるワケじゃないけれど！気分だ気分！

ーワーワー！！ワーワー！！

まるで拳闘士グレートファイターにでもなった気分だ。しかし……中々、悪くないツッ！

「いくぞー！」

「ウラアツッ！」

！  
ウオーロツクアアツクで再びオックス・ファイアの眼前に出現する。今度は正攻法だ

「ブルルオオー……！！！」

激昂し、殴りかかってくるオックス・ファイア。強烈な右ストレートを、左腕に展開しているシールドで回転しながら衝撃を流していく。完全に右腕を振り切り、再び無防備な姿を晒すオックス。もう慣れてるんだよ！

「おおっ！セイッ！セアアツッ！」



回転の勢いそのまま、右腕のロングソードを横に薙ぎ、ついでに逆袈裟に斬り裂いていく！斬撃なので衝撃は少ない。だが切れ味は（以下略）

「ブルッ！ブル、ブルルオオオーー！！！」

「コイツ、完全に怒り狂ってやがるぜ！まるで暴走列車ってヤツだ！」

「ブルルルオオオオッ！！！」

ゲッ、そのまま突進してくる！凄いスピードだ。セレクトしているカードは……よし、イケる！

「ハアッ！」

右に跳躍し、回避すると同時にバトルカード『モエリング』を左方に放つ。燃え盛る車輪に目を取られたオックス・ファイアの視線を、一瞬だけ釘付けにして動きを止める。

「そこオッ！！」

着地と同時にウォーロックアタックを敢行し、モエリングによって急停止したオックス・ファイアの側面へと、音速を越えて跳躍する。そのまま左腕を右腕に添えて、ロングソードをオックスの腕ごと胴体に突き刺す！終わっちゃまえ！

「うおおおっ！」

「ブ、ブルルオオオーー！！！」

怒りの猛牛が放つ、苦し紛れの断末魔がグルメタウン全体に響く。フウ……お疲れ様、ゴン太。

ー暫くしてー

「あ、ゴン太くんが目覚めました！」

ホテル側の申し出を断り、介抱すること数十分。遂にゴン太が目を覚ます。

「オレ……確か大食い大会で優勝して、その後……そうだ！大食い大会はどうなったんだ!?」

自分が大食い大会で優勝したことは覚えているらしい。

「実は……」

ー少年説明中ー

「……というワケなんだ」

「オレ……やっぱりあの牛みたいなヤツに取り憑かれちゃったのか……折角優勝出来たつてのに……」

説明を受けたゴン太は沈んでいる。因みに優勝者が意識不明になってしまったため、巨大ハンバーグは会場の皆さんで美味しくいただきました。ラッキー。

「それでもないよ。ね、キザマロ？」

「ええ。アイちゃんなら、ゴン太くんのことを心配してましたよ。それに優勝おめでとう、とも言ってました」

「流石にゴン太がオックス・ファイアになったのは見間違いだと思ってるみたいだね」

これは本当に幸運だった。会場中の注目がゴン太に注がれていたんだもの。しっかりと見られていたから、お仕舞いかと思っちゃったよ。

「そうかあ……アイちゃんて、やっぱりいいコだなあ……よし！オレ決めた！ここにいる内に、絶対なんかでアイちゃんの役に立つぞ！」

リフトで猛吹雪に突貫するのは止めるけども。というか、リフトに乗っても上級者コースまでは10分以上かかるわけだから、直ぐ後ろに乗れば追い付けないことはないはずなんだよね。でもスキー場にはウエーブホールは存在していないハズだったし……やっぱりゴン太は止める方向かな。ちゃんと延命措置は用意してあるし。

「もう十分な気もするけどなあ……」

「まあまあ。立直りが早いのはゴン太くんの長所ですよ。じゃあそろそろ夜ですし、部屋に戻りましょう」

部屋……つまりはマジギレ委員長か。あんな捕獲レベル80の般若パンダみたいな状態をどうしろって言うんだろうか。普通にミッショ<sup>お</sup>ン・インポッシ<sup>手</sup>ブル<sup>上</sup>だよ。

「委員長は……どうにか、しなくちゃいけないんだよね？」

「……………」

「……………ス、スバルなら大丈夫だぜ！……多分」

多分ってどういう意味さ！

「ちよつと！今多分って言ったでしょ!?ボク聞こえたんだからね!」

「き、気のせいだぜ。なあキザマロ？」

「え、ええ。きつとスバルくんの空耳ですよ。ここは一応、地形的には山に分類されますからね、高山病には注意してくださいよ？」

クソツ、いけしやあしやあと……なんでこんな時だけ抜群のコンビネーションを發揮するんだよ!?うう………どうしてボクばかり、こんな役回りなんだ……

「(自業自得ってヤツだぜ、スバル。あ、オレはあのオンナの機嫌が直ってない方に1000ペリカだ)」

ボクに味方はいないのかツ!?

ーースウィートルームー

「い、委員長〜?」

さつきと全くプレッシャーの圧力が変わってない。というかより鋭くなってないか

!?立ってるだけで足が震えてきそうだ……

「ちよつと!!今日はもう寝るんだから入ってこないでよ!!」

ん?もう寝るってことは……

「あれ、先にお風呂入っちゃったの?」

随分と早風呂だなあ……

「くっつ……このバカ!変態!エッチ!アナタなんかソファァーで寝ちやえばいいのよ!!」

委員長に罵倒されると、なんだか背中中の辺りがゾクゾクつと……危ない。何か新しい扉でも開きそうになってしまったな。引き返せてよかった。ホントに。

「仕方ない。それじゃあゴン太たちのところに戻るか……」

ゴン太達はキツチンルームやトイレのあるリビングで待つてくれている。ここで付いてきてくれない辺りが……いや、二人だつて怖いんだ。ボクが原因なんだし、仕方ないと思つて享受するしか……

「……おっ!スバル、どうだった?委員長の機嫌は」

た、他人事だと思つて……!

「ううん。完全に聞く耳持たずつてヤツだよ。ソファァーで寝ろつてさ」

「そうか……じゃ、頑張つてな」

「ハイ、応援してますから!」

え?

「ちよつと酷いよ二人とも!」

完全にお開きムードじゃないか!なんだよ、この面倒ごとは取り敢えずスバルに任せ  
とこうみたいな雰囲気は!

「だつて、なあ……?」

「ええ、そうですよ」

慈悲ナシ? あんなに頑張つたのに!?

「ボクもベッドで寝たいんだけど!」

マテリアルウェーブのベッドなんて、もう一生使えるかわからないつてのに!

「悪いなスバル。このベッド、一人用なんだ」

「すいませんね」

「」

う、嘘だろ……ホントにソファァで寝ろつて言うの!?

「それじゃあおやすみだぜ、スバル!」

「グッドナイトですよ、スバルくん!」

そこはゲーム準拠じゃなくてもよかったよ！……チクシヨウ！慈悲など要らぬ……！

「(ほら、諦めて寝ようぜ)」

「わかったよ……」

ああ、夢の高級ベッドが遠のいていく……

――10分後――

よし。取り敢えず、寝る準備は完了した。ビジライザーは……近くのテーブルに置いておくか。

『やあ』

!?

「うわああっ!?!……な、何!?!」

って、テーブルはマテリアルウェーブなんだっけか。よく見るとテフォルメされた顔がある。ビ、ビビった……

『キミもボクの上に物を置くんだね』

「……………」

ええ……何でこんなイヤそうっていうか、辛そうなの？

『別にいいけど……』

それ嫌ってことだよね!?でもテーブルの上に置いておかないで、寝惚けたゴン太辺りにでも踏まれたら致命傷だし……

「それじゃあ、遠慮なく……」

『……………いいけど』

無理だろこんなの!もういいよ!ふて寝してやる!



## 16

——その頃——

スキーコースにある2つのゴール地点、その1つで思考を巡らせる男の姿があった。辺りは既に、夜の帳が降りているため、人気はない。男の体格は大柄で、派手なスーツに身を包んでいる。因みにもう1つのゴール地点はグルメタウン方面へと続くルートである。

「チツ……」

大柄な男……五里門次郎はイラついていた。誰だって、絶対の自信を持って臨んだ件で失敗の目を見たら、平常心でいられはしないだろうが。

『……落雪事故の作戦は失敗。乗っ取りは上手くいっていないようだな』

不意に、若干の失望を含んだ声が辺りに響く。決して音量としては大きくないというのに、不思議と頭に入ってくるような声だった。

「誰だ!?……アンタか。そんなこと、声高に言われちゃあ困るじゃねえか」

暗がりから姿を現したのは、先程の不思議な声の持ち主……ハイドだった。

「けどハイドさんよ。あんなに青い電波人間が邪魔してくるなんて、オレはこれっぽつ

ちも聞いてなかったぜ？」

五里……ゴリとしても、この代えが効かないスポンサーに後援を外れられるのは避けたい。よつて計画の範疇にない妨害者を挙げて、追及を逃れようとする。

「確かに……あれは私にも予想出来なかったが、有能な乗っ取り屋なら常に、筋書きは複数描いておくものだろう？」

ハイドとしてもそこを突かれると痛いので、発破をかけるようにゴリとの会話を進めていく。何せ、自分も一度その青い電波人間とやらに、苦渋を舐めさせられているのだから。

「ケハッ！ 見くびつてもらつちやあ困るぜ！ そうだな……こうなつたら、アンタが退屈しないよう一気に決着を着けてやる。次の作戦は………だ」

ゴリはハイドに自分の計画を語っていく。流石の青い電波人間と言えども、自分のホームグラウンドならなんとか出来るという自信があるのか、えらく饒舌だ。乗っ取り屋として口が上手いことは、商売を円滑に行うための前提条件でもあるのだが。

「面白い。大自然を舞台にしたショーが見られるというわけか。明日を楽しみにしているぞ」

ゴリの計画はハイドとしても満足のいくものだったらしく、上機嫌だ。脚本家として他人の創造するショーが気になるようにも見える。

「ケハ！高見の見物を決め込むつもりか？……まあいい。じゃあオレは、早速仕込みにかかるぜ。アンタに貰った、『古代のスターキャリアー』を使つてな！」

そう言つてゴリが懐から出したのは、ハイドよりもたらされた古代のスターキャリアーだった。これこそが、ハイドに後援を離れて欲しくない、最大の理由である。

何故なら、このチカラは代えが効かないのだから。

「出でよ!!イエティ！」

ゴリがスターキャリアーを構えると、閃光が辺りを塗り潰す。ハイドが自身の目を、被っているソフトハットで対閃光防御する。閃光が晴れると……

「また、新しいミッシュョンか？……何であれ、私は呼ばれた人間にチカラを貸すだけ。争いがあるところなら、何処へでも行つてやる……」

顔と両手、それに足首から下をプロテクターで覆つた電波体が現れた。電波人間を行う者同士だからなのか、ハイドとゴリにはその姿が見えている。

「ケハ！大したプロ意識だ。今度のはとびきりのミッシュョンだからよ、頼むぜ！それじゃあ……電波変換！」

再びの閃光。

「グハーーーー!!!」

そこには、正に雪男と呼ぶに相違ない姿のゴリ……イエティ・ブリザードが佇んでい

た。だらしなない体型のオツサンと、シユツとした猿のようなイエティが融合した姿なので、二言で表すと……とても汚い。

「だが、未だに信じられないぜ。これが世界中で目撃される、UMAの正体だったとはな」

汚い雪男……イエティ・ブリザードが冗談混じりにハイドへと確認する。その体格はゴリの時よりもかなり大きくなっており、威圧感すら醸し出す程だ。

「フツ、全ては電波のチカラだというわけだ。では頼んだぞ、『イエティ・ブリザード』よ。このヤエバリゾートを、我が組織の日本での活動拠点にするためにもな」

イエティ・ブリザードの力強さを目の当たりにし、これならと確信したハイドは、余裕そうにゴリへと計画を明かす。ハイド達の組織は、ここを活動拠点にするつもりであつたのだ。

「グハ!!だがその時は、料金はキツチリ払ってもらうぜ!」

「フツ……契約通りになることを期待しておくでしょう。ではな」

颯爽と歩き去っていくハイド。その姿には一分の淀みもない。

「グハ!グハ!!グシャーア!!」

誰も居なくなつた雪原に、氷雪を纏いし雪男の咆哮が鳴り響いた……

——翌朝——

「ふあくあ」

うう、あ、朝か。起きなくっちゃ。

「ウグ……何だか、体の節々が痛いような……」

ソファアで寝たせいなんだろうな、きつと。

「ソファアで寝たせいだろうな」

考えることは同じ、か。

「うん、多分そうだろうね」

『オハヨォー!!!』

ヨッシーみたいな声出さなくなっちゃって聞こえてるよ!

この感じからすると、ぐっすり寝られたみたいだね。畜生。呪ってやる。

「おはよ……」

「おう、大丈夫か!?今日は絶好のスキー日和だぜ?」

「部屋の窓から見える景色はサイコーでした」

お?お?ケンカ売ってる感じ?

「……………」

拳をポキポキ言わせながらにつきりすると、二人とも黙ってくれた。何だ、もう少し

話してても良かったのに。

「わりいわりい……」

「アハハ……あ、ボク委員長を起こしてきます！」

そうやって駆け足で委員長の御休みになられている寢室へと、愚かにも足を運ぶキザマロ。神の裁きが降るぞ……！ガタガタ……

「キザマロっ……」

なんまいだ、なんまいだ……

「……五月蠅いわね!!ワタシに構うなって言っているでしょ!!」

ーードンガラガラガツシャーン!!

「ひええ……」

何をどうしたらあんか音が出るというのか。むしろ怖いよ。元々怖いけど。

「イテテテ……」

あ、キザマロが帰還してきた。どこかぶつけたのかな？

「大丈夫か？」

「委員長にも困ったもんだよ……」

これ、旅行が終わっても続いたりしないよね？

「まあまあ……委員長と付き合ひの長いボクに言わせれば、これも委員長の愛情表現みたいなものです」

なにそれこわい。

「キ、キザマロは愛されてるんだねえ……」

顔が引きつっていいいだろうか。

「いえ、スバルくんの方が……」

「あ、そうだ！愛と言えば……アイちゃんとの待ち合わせに遅れちまう！」

おつ、手が早いね。ボクも見習った方がいいのかな？

「へえ、いつの間にそんな約束を？」

「昨日の夜、思いきって電話してみたんですよ」

『「一緒にスキーしてください」ってな。そしたら、『もちろんいいよ！』って、オツケー

くれてさー！」

う、羨ましい……ボクがテーブルとソファーによる呪詛を受けている間に、そんなことをしていたなんて！この恨み、晴らさしておくべきか……！

「いいなあ……」

「あ、でも一人じゃなくて、皆で来てねって言われたんですよ」

「ま、まあな。あー、でもオレ、じつとしてられねえ！行くぜ!!」

あ、そうだ。忘れてた……

「ゴン太！待って！」

「何だ!？」

「コレ！」

ポイツとゴン太に投げ渡す。

「これは……何だコレ？」

「それはリサイクルカイロ。ゴン太、張り切り過ぎて迷子になったら大変でしょ？ホントにヤバくなったら、真ん中に浮いてる金属のパーツを押してね！」

「……お、おう。サンキューなスバル！ハート型だけど……」

「それはその形しか家に無かったんだよ！」

変な誤解はゴメンだからな！

「そうか。ならありがたく借りてくぜ！じゃあな！」

「あ、ちよつとゴン太くん!……つと、因みに待ち合わせの場所は、グルメタウンからリフトを2回登っていったトコロです。じゃあボクも行つてきますね」

行つちやつた……

「それじゃあ、ボクたちも行こうか？」

「だな！オレもスキーつてヤツには興味あるぜ！」



どうせゲレンデの電波で、電腦スキーすることになるんだけどね。あれは面倒だったよな……

つと、そうだ。確かスイートルームの電波にはロック用の装備があつたよな……何だつたっけ？

ーグلمETAウナー

スイートルームの電波にあつたのは、『タンガロピアス』という万能型の装備だった。貧弱なスルドイツメから漸く卒業出来たので、ロックの機嫌も上々だ。

「おっと、スキー場……ゲレンデへのリフトには、スキーをマテリアライズしないと乗れないのか……」

「(そう言えばまだマテリアライズしてなかつたな、スキーセット)」

だつて無くて問題ないんだもん。

「そうだね……それじゃあいくよ！マテリアライズ！スキーセット！」

ースキーのマテリアルウエーブ、スタンバイ！

『ボクらはスキーセットのマテリアルウエーブ！人呼んでボーゲン兄弟だよ！実は右が兄で左が弟なんだ！よろしくね！』

意思ある存在をスキー板として下に敷くなんて、中々精神にキそうだな……

「……おお！確かにスキーセットだ！」

なんとスキーウエアまでマテリアルウエーブの一部らしい。但し、その意識は下のボーゲン兄弟に集約されているらしく、意識の気配は感じない。

「よし、行くぞ！」

リフトへGO！

ーゴウンゴウン……

「着いたけど……ここは中間地点だね。あともう一度乗るんだっけ……」

あ、幽鬼うさぎがあるー……ん？何かが違ったような……

ーゴウンゴウン……

「ええつと、ゴン太達は……」

『おいスバル、こつちだぜー！』

左奥の方から、ゴン太の大声が聞こえる。

「今行くよー！」

ーザシユツ

おおっ！中々滑れるな、ボク。

「……お待たせ！」

辺りは一面銀世界だ。何故か視界の隅に、クリスマスツリーがあるような気がするけど……

「おおつ、スバルくん結構上手いですね！ボクら、途中で何度も転んじやったんですよ。スキーって結構難しいですね」

へえ……というか初心者ならそんなモンか。いや、ボクも初心者だけど。

「まだ来てないのは……アイちゃんだけだな。ちゃんと来てくれるかなあ……」

いや、来るでしょ。これで来なかったら、紐神様のように、ヴァレン某って呼んでしまいかもしれない。本家はアイズだけど、些細な違いだろう。多分。

『みんなー！お待たせー!!』

声の方向は……ゲレンデの上級者コース頂上か！

「あ、この声は!!」

急にテンション上がったな、ゴン太。

そんなことを思っている間に、アイちゃんは華麗なスキー捌き？で滑り降りてきた。おお……これが噂のゲレンデマジック。キラキラして見えるね。あんまりよくわからないけど。

「流石世界選手権の候補ですね！」

「オレ、惚れ直したぜ！」

うわ、ゴン太ストレート過ぎィ……

「?、ゴン太くん、今なんて？」

な、難聴持ちだど!? コイツ……ラノベ主人公だ! きつと鈍感属性も持つてるんだろかな……見た目も相まって、とてもあざとく見えるのは気のせいだろうか。

「イ、イヤ何でもないよ!」

あの態度で多くの男を惑わしてきたんだろな……自覚無いのって、ボクは逆に良くないと思う。

「アハハ! ゴン太くんって、面白いね! じゃあ皆でスキーしようか!」

誉め言葉が『△□くんって、面白いね!』だと十中八九アウトだと思っただけ……気のせい?!

「ハイ! コーチしてください! ボクたち初心者なんです」

「ハイ! わかりました! ……じゃあそうだね、最初は細かいコトよりスキーに慣れるのが大事! 転ぶのを怖がらずに前傾姿勢で雪に乗ってみて!」

これならゴン太も得意そうだ。何せオックス・ファイアで散々……

「ハイ!」

「じゃあ、ココの初心者コースを滑ってみよう! アタシの後に、皆ついてきて!」

「わかりました！」

キザマロも張り切ってるな……

「ちよつと待ったー！」

あ、やつぱり？

「そのコトなんだけど。アイちゃん、やつぱりオレ達だけで滑るよ！」

突然の突き放し。誘つというやつぱ止めるとか、鬼畜の所業だよ！いや、冗談だけでも。

「どうしたんですか、ゴン太くん？」

「だってよ……アイちゃん、選考会あるのに最近練習出来てなかったんだろ……？ だったら今日は、自分の練習しなきゃ」

まあ、普通そうだよな。アイちゃんは一体、どんな気持ちでゴン太の申し出を受けたのだろうか。

「ゴン太くん、アタシなら別に大丈夫だよ」

「そう言つてアイちゃんがオレたちとスキーしてくれるのはサイコーだけど、でもそれより自分の練習をしてくれた方が、もっと嬉しいんだ」

「だね。それでアイちゃんが世界選権に出れたなら、ボクたちも凄く嬉しいよ」

「……うん、わかつた!!アタシ、練習する！皆のためにも頑張らなきゃ、だもんね！じゃ

あ、向こうのプロコースで滑ってるけど、何かあったら連絡してね！」

実はこの初心者コースをリフトで上がると上級者コース、そして更にリフトで上がるとプロコースへと行くことが出来る。確かプロコースのスタート地点にイエティ・ブリザードがいるんだっけか。

「あ、アイちゃん！えつと……コレ！」

「これは……リサイクルカイロ？」

良かった、ちゃんと渡してくれるみたい。

「うん。コレ、借り物なんだけど……スバル、いいか？」

「もちろん！」

願ったり叶ったりだ。これでゴン太が突貫しなくても、アイちゃん一人で持ちこたえられる時間が出来るだろうし。ラッキーだ。

「そっか……エへへ、ありがと、ゴン太くん、みんな！」

「うん、頑張つて！」

「ハイ！」

ゴン太の声に元気よく返事をして、アイちゃんは行ってしまった。アイちゃんには申し訳ないけれど、ちよつと我慢しててね……

「……あーあ、行っちゃった」

ゴン太が気の抜けたような声を出す。顔もまるで、萎んでいるかのようだ。

「ゴン太くん、楽しみにしてたのに。でも、いいこと言いましたね」

「うん、カツコよかったよゴン太！」

取り敢えずフオロー。とにかくフオロー。

「そ、そっかな……お前らにそう言われたらオレ……グズツ……グズツ……よし！こうなったらとことんスキーを楽しもうぜ！行くぞスバル！キザマロ！誰が最初にグルメタウンにたどり着くか、競争だ！」

「立ち直りが早いですね！流石ゴン太くん」

ーザシュツ！

言い終わるが先か、ゴン太は行ってしまった。最近じゃ、世界陸上でもフライングは一発アウトなんだぞ！

「あ、フライングはズルいですよ！スバルくん、行きましょう！」

「そう言いながら先に行かないでよ！」

汚い、流石キザマロ汚い！

「ボクも行くぞ……！ライディングスキー！アクセラレーション！」

「(スバル、オレがビジライザーにウェーブインして、コースのナビゲーションしてやる

うか?」

そんなことも出来るの!?!ぜひお願いします!



ーゲレンデ・スキーコースー

「イヤッホオオオツ!!」

風が気持ちいいよ! ウオーロックアタックで高速移動は慣れ親しんでいるけれど、これはこれで悪くない!

『前方200メートル先、二人組……カップルだぜ』

轢き殺してやろうかアツ!? スキーヤーの戦場で、堂々とイチャイチャしやがって!

……万死に値する!

「了解!……チエツ」

ーザシユツ!

……と、物騒な事を考えてはみたものの、結局はカップルを避けてコースを滑り降りていく。……今日は見逃しておいてやる! 次はないからな! (憤怒)

『後はゴールのグルメタウンまですぐだぜ! コースを間違えるなよ?』

「わかってるさ!!」

既にゴン太とキザマロのことは抜き去っている。背後に二人が迫っているというこ

ともない。これなら……! !

ーググルメタウンー

ーザシユツ!

「……よし! ボクの勝ちだ!」

圧倒的だったね。

ーザシユツ!

ーザシユツ!

数十秒後、悔しそうな顔のゴン太とキザマロが追い付いてくる。フハハ! 悔しかろ

う、悔しかろう!

「クツソー! やられたぜ!」

「でもキモチ良かったです!」

それはわかる。最高の爽快感だったものね。

「上に登って、もう一回勝負しようぜ!」

「今度はジューズでも賭けない?」

負ける気がしないね。

「そうやって余裕ぶつてられるのも、今の内だけですよ!」



ビジライザーで対降雪防御を！

ーカチャツ！

ー数分後ー

「ふう………どうにか収まった………か？」

ゴン太の言う通り、一過性のものだったらしい。多分屋外にいる人間を、屋内に誘導するためのブリザードだったんだろう。……嫌らしい手を使う！

「でも上の方はまだ、吹雪いてるみたいですよ」

ーピンポンパンポーン！

アナウンスだ。

『ホテルより、スキーをお楽しみの方々にご案内します。ただいま、リゾート全体の天気を制御している電波システムに原因不明の異常が発生しています。そのためリゾート内で吹雪が発生し、ゲレンデ方面、特にプロコースの辺りは猛吹雪になっています。大変危険ですので、お客様はゲレンデに立ち入らないようにしてください。なお、間もなくリフトの運転を中止しますので、現在リフトに乗られている方以外はリフトに乗らないでください………』

システムの方に異常？いや、どっちにしるイエティ・ブリザードをぶつとばせば済む話だ。

「上の方はかなりマズイことになってるみたいだね……」  
「ひよつとしなくても、ヤバいですよね？」

確かにヤバい。プロコースで滑っていない人はなんとか下山してこれるだろうけど、プロコースにいるアイちゃんが自力で脱出出来るとも考えにくい。それに、アイちゃんのことはいエティ・ブリザードが見張っているのだし。

「……アイちゃん!!」

「バカッ！止まれ！」

ーガシッ！

何とか、ゴン太のスキーウエアを掴むことに成功する。あ、危なかった……！

「離せよスバル！オレは……オレは！アイちゃんを助けに行くんだ!!」

「初心者が何言ってるんだ！ミイラ取りがミイラになっちゃうよ！」

ここは止めないといけない。ゴン太が行く必要なんて、ないんだから。暖房器具も持っているから、あと30分程は問題ない。それまでになんとかすれば……！

「何言ってるのかわかんねえよ！でも、でも……アイちゃんが……！」

ーピンポンパンポーン！

『ただいまをもちまして、リフトを停止しました。復旧まで暫くお待ちください』

よし、時間稼ぎはできた！

「……クソッ！これじゃあ……！」

「ボクが行くから！電波体なら吹雪の影響はほとんどない！それにアイちゃんを見つけても、ゴン太まで一緒には運べないんだよ……！」

「ゴメン……だけど、こつちにも譲れないものがある。被害はなるべく少なく、だけどルートから外れきらない程度に、だ！アイちゃんには申し訳ないけれどね。」

「……わかった。すまねえな。オレ、ちよつと熱くなりすぎてた………フウ、それじゃ任せるぜ、スバル！」

「(どうやらお呼びのようだな……へへッ、それじゃ行こうぜ!!)」

「よし………つと、それじゃあ行つてくる！」

「スバルくん、頼みましたよ！」

「アイちゃんに変なコトするなよー!？」

「ちよつと!?!どういふことさー！」

「一体どんな変態認定を受けてるつて言うんだよ!?!腫れ物扱いは暴<sup>ライオット・ブルー</sup>蒼で十分だ！」

「(ほら、さっさと行くぜ)」

「またかよ!?!ロツクまで、なんだか最近、ボクに対して塩対応過ぎない……？」

「(こ)こなら周りに人もいない……電波変換！星河スバル、オン・エア！」

久しぶりにちゃんと口上を言えた気がする。いつもは人目を避けるために小声で

いつてるからね。仕方ない。

ーグルメタウンの電波ー

「先ずはスキーで滑ったコースを登っていきこう！この辺りはまだ吹雪が弱いから、進めるはずだよ！」

「おうー」

出来ればゲレンデ2……プロコース前までは登っていけるといいんだけど……

ーゲレンデーの電波ー

「酷い吹雪だ……」

やっぱりスキーコースを直接登っていくことは不可能か。どうにもこの吹雪、通信速度に影響を与えるみたいだ。具体的に言うと、トランサー程じゃないけれど地面の上での行動に制限がかかる。この状態でウィルスの相手をするのは楽じゃなさそうだ。つまり、ウェーブロードを伝って行くしかない。いつものパターンと言えば、そうなんだけどね。

「だがウェーブロードはちゃんと伸びてるぜ。これは多分、リフト間でやりとりするためのウェーブロードだな。だから多分、頂上のプロコースまで繋がってるぜ」

ああ、なるほど。ロクに電子機器もないのにどういうコトかと思ったら、リフト同士で通信していたのか。リフト自体が停止したとしても、使用されていたウェーブロード

は残留電波として残る……って感じなのかな？

「ならラッキーだ。アイちゃんを持つているカイロの熱が切れる前に駆けつけないと。凍傷で壊死、なんてことになったら目も当てられないからね」

実は結構、危ない橋を渡ってるんだよね……

「おう、それじゃ急がないとな……！」

ま、基本はタイムアタックみたいなモノだから、急ぐことに変わりはない。でも確かこのゲレンデって、アイテムが落ちていたような……プロコースにあるリフト乗り場の部分だけ？まあ、今回はスルーかな。

「で、コレどうしようか？」

「何だこりゃ？」

「多分、電波の結晶だと思っただけ……」

ウエーブブロードが上がってすぐ、道を塞いでいるボールのような電波を発見したボク達。これ、多分電脳スキーをしなくちゃいけないヤツだ……

「この玉の中からスゲー数の電波体を感じるぜ」

やっぱりか……いや、やるしかないな。ウォーロックアタックでショートカットして



もいいんだけど、それじゃあ電波体に厳し過ぎる。バランスが難しいな。

「何とか退かせない?」

「スゲーエネルギーだぜ。中からどうにかしねーとダメだろうな。この中に飛び込んでみるか?」

「もちろん!」

——電波の結晶内部——

「……(ハハ)は」

「スゲー眺めだな」

ワケがわからないよ。結晶内部にウエーブインしたと思ったら、スキー板とストックを装着して遥か上空にあると思われる、ウエーブロードで出来たスキーコースの頂上にいたなんて。

『……すけてー!』

蚊のような声が聞こえる。助けて?……デンパくんか。

「何だ!？」

『たーすーけーてーっ!! S O S S!! S O S S!!』

元気なデンパだね。

「助けて?……この声は、下から?」

『ユキのシタデース!! SOS!! SOS!! ボクたちー!! カンゼンにウまってマース!!』

電波体がウエーブロード上で雪に埋もれるモノなのだろうか? いや、今はそんなこと  
 どうでもいいよね。

「今助けるからツ!! ちよつと待っててねー!!」

『タスカリまーす!! あとチョットでデられそうなのでー! ナニかボクたちにシヨウゲ  
 キをクダさーい!!』

よし、スキーで踏むしかないな。

「衝撃か……どうする?」

一応聞くという形をとってはいるけれど、半ば確認のようなものだ。だって、状況が  
 全てを物語っているもの。スキーセット、ウエーブロードのコース、埋まっているデン  
 パくん。……これは滑るしかあるまい!

「雪の中なんだろう? スキーで滑って踏みつけなければいんじやねえか?」

「だよね! デンパスキーなんてボクやったことないけど、中々楽しめそうだ!」

今だけは全てを忘れて電波の風になっても、文句は言われまい……! というか、下手  
 に慎重になっても長引きそうだし。

「二重の意味でな……よし、いっちょやるか!」

ああ、電波デンパくんスキーってことね。

「……じゃ、今から行くよー!!」

ワクワク。

『あ、「キ」とか「スノーゴロン」にはキをつけてクダさーい!!』

物騒なスキーコースだな……

『「キ」にぶつかったらとつてもイタいしー!!「スノーゴロン」にぶつかったらボクたちがまた、ウめられちゃいまーす!!』

スノーゴロンに関しては、散らばった雪が云々ということなのだろうか？まあ、当たるつもりはないんだけどね。何か特殊なエフェクトとかだったら嫌だな……

「わかったー!!気をつけるよー!!」

一々大声で叫ぶのも、そろそろしんどくなってきたな。喉が枯れそうだ。電波体の喉が枯れるかは知らないけどね。

「行くぜ!!3!2!1!……スタート!!」

「イヤッホオオオオッ!!」

ライディングスキー!アクセラレーション!!

――1分後――

「イエエエエイツ!!」

ーザシュツ!

フツ、またつまらぬコースを滑ってしまったな……もしかしてボク、割とスキーのセンスがあつたり? いや、調子に乗りすぎか。

『ゴーーーーール! ありがとうとーーーーーっ!!』

ーワーー!!ワーー!!

救出されたデンパくん館が、大声援を送ってくれる。そういえばなんだってこんなところに、こんな数のデンパくんが一度に集まったんだろう。普通に不自然じゃない?

「よし! 粗方デンパを掘り起こしたぜ! これで先に進めそうだ!!」

「うん!! それじゃあ、ウエーブアウトしよう!!」

歓声が五月蠅くて、大声で叫ばないとお互いに聞こえない!

ーゲレンデの電波ー

……よし、戻ってこれた。電波の結晶も消えている。さつさと進まないと! 恐らくだけど、リミットはあと30分程だ。

「先を急ぐよ!」

「おうー！」

でもこれがあと、3〜4個くらいあるんだよね。正直、結構ダルい……

吹雪も強くなってきたな。頂上はもつと酷いんだっけか。元々人間だったゴリにとつても、結構遣りづらいんじゃないのか？

「……」こもかつー！さつさと電波を掘り起こしちまおうぜ!!」

「了解！それじゃあ、飛び込むよー！」

それにしてもこの電波結晶、以前見たプラズマボールの色違いにしか見えないな。費用削減……いや、気のせいだろう。とにかく、今は滑るしかないな……

――10分後――

よし、そろそろ上級者コースの頂上が見えてきたぞ。この先にあるプロコースの頂上に、イエティ・ブリザードと気象制御システムがあつたはず。

それにしても、気象制御システムか。もしかして、シーサーアイランドみたいな天候完全制御のテストケースだったりして？……考え過ぎか。

ープルルル!!

おつとこれは……通信か。

「スバル、通信みたいだぜ。……回線を開くぞ」

「うん。ありがとう」

「いいってことよ。……それ、繋がったぜ」

「ブーン！」

相変わらずハエみたいな（以下略）だけど、電波体時は叫ばなくていいのか。これはかなり便利、かも？いや、四六時中電波体で居続けるのは難しいんだけどね。それに、間違電話で正体がバレるのも馬鹿らしい。エア・デイスプレイってやつぱり不便だ。なんでオンオフ切り替えられないんだろう。やはりまた、黒服お姉さんの有能さが際立ってしまったな。

「……あ、ゴン太！どうしたの!？」

吹雪が酷くて、大声じやないと互いに聞こえないのは結構な弊害だ。スターキャリアーの集音機能が高いのは、とても助かるんだけどね。

『スバルか！さっき、アイちゃんに電話したんだけどよ！通じたんだ!!』

「え、通じたの!？」

『ああ、何とか無事らしい。ただ、カイロの熱が切れたらチョット危ないって……!それとどンドン吹雪が強くなってきているらしいんだよ!』

「アイちゃんの場所は!?!ボクは今上級者コースまで見てきたけど、人っ子一人いなかったよ!？」

『ああ、今いるのはプロコースの一番上の方らしい。横に天気電波システムが見え

るって……』

やっぱりそこに居たか。一応確認しながら進んで来たけれど、確証が取れて良かった！頑張ってプロコースの頂上にたどり着いたけど、そこにアイちゃんはいませんでした……じゃ笑えない。

「ありがとう！それじゃボク、急ぐから！」

『ああ……頼むぜスバル！』

ーブツツ！

よし、ゴン太まで向かっていないから、どうなることかと思っただけど、何とか良い方向に向かっている。ただ、吹雪の中で持ちこたえられるかどうかで、二人以上であることが重要らしいし、そこには注意しないと。やっぱり励まし合いつて大事だよ。

「よし、プロコースはこの先だ！パパッと救出しに行こう！」

「おう！へへッ、腕が鳴るぜ……！」

全く、子供の負傷を乗っ取りの計算に入れるなんて！

このド畜生があーッツ!!って気分だよ。まあ、ゴリラって畜生なんだけどね。いや、雪男だっけ？

ーゲレンデ2の電波ー

「更に吹雪が強くなってきた……」

「オイオイ、結構ヤバいんじゃないか……？」

こりゃあ、いよいよマズイことになってきたかもしれないな。この視界の悪さだ。戦闘にも影響が出るだろうし、何よりプロコースの頂上はウェーブロードではなく地上になっている。地の利は向こうにあると見ていいだろう。

天気 of 電波システムが発する電波の影響で、多少は通信……もとい行動しやすくはなっているんだろうけど、依然としてこちらが不利だということに変わりはない。特にドラミングをトリガーとして引き起こすナダレダイコはヤバい。ダイナソーじゃなくてもヤバい。

アイちゃんも巻き込まれてしまう可能性がある。使わせる隙を与えないような立ち回りが必要だ。

「これ以上酷くなる前に、天気 of 電波システムを正常に戻さないと……」

「ああ、だがさつきの結晶、あと2〜3個はあるだろうな。複数の場所で凄数 of 電波を



感じる……」

それはボクも感じていた。あちこちからSOSが聞こえるものだから、気になる……  
という気が散ってしようがない。まあ、助けるのだけど。

「わかつてる。今は兎に角、先を急ごう！」

「おうー」

間に合ってくれよ……！

——10分後——

「……よし、粗方デンパを掘り起こしたぜ！」

「フウ……それじゃ、ウエーブアウトするよ」

恐らく最後の結晶にウエーブインし、多数のデンパくんを踏みつけまくることに成功してゲレンデの電波へと戻ってきたボク達。既に山頂は見えている。

アイちゃんのスキューエアは……ここからじゃよく見えないな。

「そろそろ山頂だ。あまり気を抜くなよ！」

「うんー」

——ゲレンデの電波2・山頂——

「……アイちゃん！」

雪に埋もれていて時既に遅し……という最悪の事態は回避できているようだが、意識を失ったらしい彼女は体を丸めて天気のエ波システムを管理している建物に寄りかかっている。……あまり看過出来る状況ではないな。

山頂は思ったより吹雪いていない。流石のゴリも人殺しには躊躇したのだろうか。

……今は、向こうの事情を考えている場合じゃない。人命最優先だ。

『グハ！その先は行かさねえぜ!!』

「スバル、上だ！」

死亡フラグ乙。

降ってくるシルエットは……って、コイツ結構……デカイ！

「縁起でも無い……って、このブリザード……!」

地響きが木霊する。辺りを包囲するは、更なる極寒の檻。

「コイツが雪男か!……如何にもって感じの見た目だ」

生物的な体毛、異常なまでに発達した四肢。

実はホントにUMAだったりするのではないかと、疑いたくもなってしまう。

「グハ！まさかここまで来るとはな！ホントにまさかまさかだぜ!……グハハハハ！オレがウワサの雪男、『イエティ・ブリザード』様だ！」

わかりやすくチカラに溺れてるな……

巨大な体躯に紫色の鬘、あとは肘から先と膝から先に分厚いプロテクターって感じの風貌だ。それにフェイスパーツも仮面みたいな感じだし……ホント、こんな風にならなくてよかった。

「……スバル、やつぱりだぜ！」

「ああ、この声……」

「オレも波長を感じるぜ……コイツはあのゴリってヤロウだ！」

「じゃあ、今回の事件を起こしていたのは……」

「ああ、そうだ！やつぱりゴリのヤロウが企てた陰謀だったってことだぜ！」

「グハ！その通りだよ！だが、このミッション：ワイルドブリザードは邪魔させねえぜ！」

ゴリ……イエティ・ブリザードが戦意をみなぎらせて叫ぶ。

合わせて、周囲のブリザードが一層強まった。

……これ以上はアイちゃんの容態がマズい。

「ホテルの邪魔をしているのは、アンタの方じゃないか！」

「グハ！このまま電波システムの異常が続けばリゾートの人気はガタ落ち。しかも有名な人のアイまで被害者となれば世間が許さねえ！そうすりゃあ、あの滑田のヤロウもリ

ゾートを手放すしかなくなるってもんだ！コイツはお買い得だぜ！グハハハハハハハハ  
!!」

既に落雪事故で苦情が来てるってのに、欲張ったな！アンタが犯した最大の失敗は、その堪え性の無さを改善しなかったことだ！

「お買い得はコッチの台詞だ！決して現場には姿をみせなかつアナタが、今は証拠付きでここにノコノコやってきた……これ以上ない、絶好の機会に違いない！」

「グハ！中々威勢のいいガキだぜ！どこのどいつかは知らねえが……言うことを聞けばオレの部下にしてやるぜ！オレは樂が出来て、お前は金持ちになれる！……どうだ？」  
にやけながら問うてくる雪男。

まさか応じるとでも思っているのだろうか。

「お金持ちと幸せはイコールじゃない！そんなお金持ってたって虚しいだけだ！」

お金に困ってるワケでもないしね。

「グハハハハ！わかんねえなあ、そんな理屈、！……金はチカラだけ、がきんちよ！その金の為になんでもやってやるっていう気概がなきやあ、乗っ取り屋なんてやってらんねえよ!!」

ダメだコイツ。早くデリートしないと！

「いつそ清々しいくて助かるよ！アナタに対しては、全く引け目無しに戦えそうだ！」

「ケツ、これだからガキはキライなんだよ！なら、お前もここで遭難してもらうぜ！助けが来るかはわかんねえけどなあ！！グハ！グハ！グシャシャシャー！！！！」

本物のゴリラのように、胸を叩くゴリ……イエティ・ブリザード。流石にゴリラの真似は得意みたいだ。

今のは戦意高揚を狙ってのものらしいけど、次からは雪崩にも気をつけないと。

「来やがるぜ！」

「上等！ウエーブバトル！ライド・オン！！」

こういうヤツには正面からだど相場は決まってる。インファイトだ。

「いくよー！」

「おうー！」

まずは近づくことから！

足裏でいつもより気持ち強めに踏ん張り、ロックオンを開始する。

パターンに入れば素人のゴリならいくらでも圧倒出来るハズだ。

「ソオイッ！」

つて、跳躍した!?

……凄い脚力だ。数十メートルは飛んでいる。

「これは……硬質化した雪玉か！」

幸いウィルスが潜んでいるということではなく、ただの雪玉だった。

だが結構大玉なので、余裕をもって避けないと飛び散った雪塊に足を取られてしまいかもしれない。これも要注意だ。

「グハハハハ!!今のはほんの挨拶代わりってヤツだ!さあ……いくぜエツ!」

イエティが吠えた。

両拳にブリザードの結晶が集まり、指先までが氷柱を思わせる形状に覆われる。よく見ると、手の甲からスパイクすら生えているのが確認出来た。

……直接拳を突き合わせるのは危険か。

「遠距離から削ったら時間が……!クソツ……ああ、やってやるさ!接近戦だ!」

「よく言っただぜ、がきんちよよお!」

右の抜き手。

氷柱のコーティングで強化された刺突攻撃は、受ければバターののように容易くボクの体を貫くだろう。だが……直線的過ぎる!

「力比べには突き合わないぞ!」

シールドを展開。後方に受け流しつつ、滑るように懐に潜り込む。

踏み込みをかけるが、足場が悪い。仕方なくソードを展開させ、イエティの体を十字に切り裂いてシステムのダメージを与えていく。

今回は踏み込みに失敗したが、この感触ならば次はいけるはずだ。今度はその鼻っ面にヒートアップをお見舞いしてやろう。

「痛かねえよ！そんなもん！」

「ケツ、脂肪で痛覚が鈍ってるだけじゃねえのかア!？」

不敵に笑うイエティを、ロックが煽っていく。

が、特に反応した様子もないことから、どうやら本当に効いていないらしい。

「ほざけよ青二才共！」

熱くなるゴリとは対照的に、吹雪はますますその攻勢を増していく。

暑さ寒さの影響を受けにくい電波体ですら、指先がかじかんでしまいそうな冷気。

バイザー越しでなかったら、今頃は吹き寄せるブリザードに目を開けることも叶わなかっただろう。

しかし、今はイエティとのクロスレンジを保っている。故に吹雪の影響は殆どないと言つて差し支えない。

「……………」のままー！」

「やらせねえー！」

牽制として射出したワイドウェーブ。イエティは空中で凍らせてから殴り返す。

シールドで払った時には既に、氷塊で出来た巨大な大槌を振り下ろそうとする雪男の

姿が目に入っていた。

回避は間に合わない……なら！

「これでー！」

右腕に展開していたソードを切り離し、イエティの手首が重なるポイントめがけて射出。

「なん……ッ!?!」

勢いのままのけぞり、ガラ空きの顎を晒すゴリ。

これはもうアレしか無いだろう。

……ボクの右手が真っ赤に燃える！運命がヒートアップ！しろと叫んでいるッ！

「悔い改めろアツパーアアアアアッ!!」

雪原の大地を踏みしめ、さながらジェット機のごとく跳躍したボクの拳は、いつそ芸術的なまでに美しくゴリの顎にめり込んでいく。

そのまま十メートルほど吹っ飛ばし、ボクは危なげなく着地。残心を取って構え直す。

しかし、確認しなくともわかる。勝敗は明らかに決していた。

……しかし、やり過ぎた感もあるので、一応リカバリー10をイエティ・ブリザードに使ってやる……が、既に電波体を崩壊させつつあるので、まあ命は助かるのではない



だろうか。

「やった！」

元に戻ったゴリはかなり消耗しているが、思ったより無事といった容態だ。リカバリーが間に合ったのだろうか？それに吹雪も止んでいる。

「ク……」

「へッ、ザマアねえぜ!!コイツを倒したことで、吹雪も収まったみたいだな」

というか、どうやって吹雪を起こしていたのだろうか。イエティ・ブリザードとしての能力？それとも電波システムを利用していた？まあ、既に終わったことか。

「よし、それじゃあアイちゃんを回収して帰ろう」

丸つきりアイテム扱い（両手がふさがるというデバフ付き）だが、気を失っている以上、それは仕方ないと思うのだ。

「ケハ！まだ勝負は終わっちゃいねえぜ！」

「まだやるのか……!?!」

確かハイドが見てるんだっけか。

でもぶつちやけ、あんまり脅威には感じないんだよな……

「こうなりやあ癪だが、ハイドのヤロウのチカラを借りてやる……!」

「ハイドねえ……」

「今度の事件もアイツが絡んでやがったのか。ここでもう一戦となると……体力的にちよつと厳しいか!」

(そんなに厳しい) ないです。

寧ろアイちゃんがね……

「ケハ! 形勢逆転だな! じゃあ、ハイドを呼び出すとするぜ!」

まあ、来ないんですけどね。

『……その必要はない』

やっぱりか。もしかしてビビってる、とか? TKタワーの時も、普通に肉弾戦をしていたような気がするし……

「気配は近いぜ……油断するなよ!」

「わかつてる……!」

「ハイド、今ならこの青いガキをやるチャンスだ! 頼むぜ!」

なんでそんなにボコボコにされたのに、余裕でいられるのだろうか。普通にボコボコにされたあとに助けを求めると、かなりダサくない?

『……断る』

「なんだと!」

『こんな酷いシナリオに、乗れるわけがない。吹雪は既に止んでいる。つまり、もうすぐ

ここには大勢の救助隊が現れるだろう。そんな時までここで油を売っていては、お前と一緒に捕まってしまうではないか』

悲報：世界征服を目論む組織の幹部、救助隊に捕まることを恐れる。

いや、それって電波人間としてどうなのさ……

「ゲハ!!裏切るってのか!?!」

『ハハハハハ!!……裏切る?冗談はよしてもらおうか。私達は仲間じゃない。金だけで繋がった、ただのビジネスパートナーなんだろう?』

……古代のスターキャリアーは回収しなくていいのだろうか。

貴重品らしいし、普通に失態なのは……?」

「ゲハ……チクショウ!」

万策尽きたのか、崩れ落ちるゴリ。趣味の悪いスーツが雪に埋もれる。運動するならばジャージでも着ておきなよ……

『それにこの青い少年を倒す機会など、まだいくらでもある。では、そろそろお別れだ。少年よ、次の恐怖を楽しむにしておくんだな』

アンタのシナリオはイラつくだけで、全然怖くないんだよ!せめてジエミニがやった、人質作戦くらいはしなくっちゃ。……なんかこれ、フラグっぽいな。

「……」

「心配が消えやがった……」

「ふう……ああ、もう少しスキーしたかったな……」

出来れば今度はゴン太とキザマロだけじゃなく、委員長も一緒に滑ればいいんだけど……」

「オイオイ……」

ー プルルル!!

あ、電話だ。

「通信だね。……出るよ」

ー プーン!

『よかった! やつと繋がりました!』

つと、なんだキザマロか。

「キザマロ! こっちは終わったよ! 今から戻るね!」

『おお、流石です! ところで今は何処に?』

「今はゲレンデの一番上……アイちゃんも一緒にいるよ!」

『本当か!?!』

「うわっ!?! って、ゴン太?」

『おう！サンキューなスバル！もうすぐ救助隊がそっちに着くそうだぜ！』

お、一応救助隊は編成されていたのね。

「ありがとう！」

「これで事件は解決、だな！なら、とつとつとウエーブアウトして退散するでしょうぜ」

「うん！」

これで終わりか……ああ、疲れた。

——数十分後——

「今回の吹雪騒動の容疑者として……五里門次郎！オマエを逮捕する！」

その後、たまたま居合わせた五陽田さんに五里は無事逮捕された。恐らくは取り調べで余罪が出るだろうし、暫くシャバには出られないだろう。

「……………グハッ！」

——暫くして——

——リゾートホテル・玄関——

楽しかったスキー旅行もホテルのチェックアウトが済み、漸く終わりの時を迎えた。

委員長とも滑れなかったのが、唯一の心残りではあるけれど……

「アイを助けてくれて、本当に感謝しているよ。皆、ありがとうございました！」

滑田さんがボク達にお礼を言ってくれる。なんとリゾートホテルの支配人とその愛娘に見送られるというVIP待遇だ。因みにこの場合の助けた、とはカイロであったり、救助隊に情報を流したり……という意味だ。流星にロックマンの正体は知らないだろうし。

「敬語で言われたら照れちゃいますよ……それに、今回一番頑張ったのは、ゴン太ですからね」

「リフトが止まるやいなや、アイちゃんに連絡を取って現在位置や安否確認をするゴン太くんは、確かに胸を打たれましたよ」

キザマロも感動した！とばかりにゴン太を褒めちぎる。確かにボクも、ゴン太の行動には少し驚かされたよ。ただ無事を祈ってるだけかと思つたし。

「そうだったんだ……ゴン太くん、ホントにホントにありがとうね！」

「そ、そんな風にアイちゃんに喜んでもらえたらオレ……」

「ここでテンパっちゃダメだよゴン太！攻めなきや！」

「でも……気を失いそうな時に届いたゴン太くんの声で、アタシ頑張つて起きなきやつて思えたんだ。あの時、ゴン太くんからの通信がなかったら今頃……そうやって頑張れ

たのは、ゴン太くんの声だったからかもしれないね」

神妙な顔で語るアイちゃん。実際ゴン太が電話していなかったら、ボクが着くまで持たなかった可能性もあるわけだし……やっぱりお手柄だね。

「エへ、エへ、エへへへへ」

うわっ、だらしない顔だ……

「フフ、ゴン太くん、にやけてますよ」

「う、うるせー!!」

ーハハハハハハハハハ!!

ホテルの玄関に、ボク達の笑い声が響く。

「まあしかし、アレね!モテないゴン太のサポートでスバルくんもキザマロも、走り回ってたってわけね。そういうことなら、ワタシもまあ納得つてとこかしら」

先程から考え込んでいた委員長が、漸く怒りを収めたことを表明する。その表情は大変明るかった。

た、助かったぞ……

「あはは……それじゃあ、そういうことにおこうか」

「そうですね、そうしないとまた、ややこしい状況が続きそうです」

あの委員長は確かにややこしかった……やつぱり委員長は怒らせるものじゃないね。慌てさせるのが一番だよ。アワアワしてる委員長が一番可愛いと思うのはボクだけだろうか？

「はん？キザマロ、今なんて？」

ビキビキビキ……という音が聞こえそうな表情に早変わりした委員長がキザマロを問いたです。こえーよ。

「いいいいいいええ、なんでもないですよ！」

「そ、そうだよ。委員長は笑ってたほうがさ……」

ここでまたマジギレ委員長リターンズをするわけにはいかない！というか変態呼ばわりは流石にヤバかった。二つの意味で。

「笑ってたほうが……？」

ゲツ、そこ言及する!?

「え、えつと……ほら、委員長も一応女の子だし？笑ってたほうが……か、可愛いんじゃないの？」

く、苦し紛れ過ぎたか……？

「フ、フン……そんなのわかってるわよ！」

ヒエツ！地雷だった!?!顔も赤いし、委員長沸点低すぎないか!?!



「つと、そうだスバル」

「どうしたの？ゴン太」

「いや、ほら……今回は色々助けられたしな。（最後までってロツク……じゃなくてお前が助けに来てくれなかったら、結構ヤバかったし……）」

「それはいいよ。だってボク達、友達じゃない？それに今回はゴン太のお手柄だって。ボクだけじゃあ、どうにもならなかったしね」

「へへッ、なんか照れるな……ま、ダチなんだ。これからも助け合い、だぜ！よろしくな  
！」

「こういうのも案外悪くない。頑張った結果としちやあ、まあ上等なんじゃないかな？

「こちらこそ、だよゴン太！」

「だからオレ、改めてお前にブラザーを申し込もうと思う。オレとブラザー……結んでくれるか？」

「当たり前さ！これからもよろしく、マイブラザー！」

「へへッ、おうよ！」

「ええつと、ブラザーバンドの設定は……ここをこうして……ホイホイホイつと。よし、完了！」

「今度なんかあったら、オレが助ける番だからな！」

あれ……ナンスカで散々走り回されるような予感がしてならない。ま、ブラザーだしね。しょうがないか。

「OK! その時は頼むね!」

ガシツと握手をして、笑い合うボク達。やっぱりブラザーは最高だ!

「うーん、素晴らしい友情だね! そうやって友達と助け合う気持ちはとても大切なものだよ。ゴリにも気持ちが悪かった友達がいたら、お金だけで人を動かせるなんて思わなかっただろうに……」

確かに。因みに戦闘後に確認したら、ゴリのキズナリヨクは100ほどだった。多分、ビジネススライクなブラザーだったか、社員達と結んでいたんだろうなあ……

「滑田さん……」

この人も中々苦勞していそうだけどな。まだ一代目だし、マテリアルウェーブからリアルウェーブへと技術が移行したとき、このリゾートホテルがどうなっていくのかも少し、気になるところだ。案外、変わらなかつたりしてね。

「あーあ、でもホントにゴン太くとスバルくんが羨ましいなあ……アタシ、ゴン太くとブラザーになろうと思ってたのに……」

お、よかつたじゃないゴン太!

「え、マ、マジで!? アイちゃんとブラザーになるってコトは……オレ、アイちゃんのヒ、

ヒ、ヒミツを……!!」

「ヒミツが目当てなんですか？」

「実際否定は出来なさそう……」

「え、そうなの？ ゴン太くん？」

「からかうようにゴン太へと尋ねるアイちゃん。やっぱりどころなく雰囲気はミソラちゃんに似ているような気がする。何かが決定的に違うような気もするけど。」

「そ、そんなコトないよ!! い、いや……でもヒミツもやっぱ知りたい……ワァァァ!! どうすりゃいいんだよおー!!」

「ハハハハハハ!!」

「逆に考えるんだ、どっちも大事ってさ。」

「(………つたく、地球人つてのは平和な人種だな)」

「(戦闘民族のロツクには言われたくないよ)」

「(お、言いやがったな!?! どうやら、久しぶりにオレ単体のチカラを見せてやる時が来たようだな……!!)」

「ノイズ率急上昇して灰になるのは止めてください。」

「(ハイハイ、ロツクはスゴイネーツヨイネー)」

「(ちよつとオイスバル！オマエ信じてねえだろ!?! いいか、オレがFMプラネットにいた

頃はなあ……)」

うわ、ロツクの一人語りが始まってしまった。とうるかロツクって、コーヴァスとヴァルゴのコトだけは頑なに話さないよね。いや、ボクも知らないってことにしているんだけどさ。

「(……って感じでな。オレが道を行けば、大抵のヤツはオレに道を譲ったんだぜ!)」

「(ふーん、へー、凄ーい!)」

「(オマエやっぱり信じてねえな!?!オイ!)」

そんなことないと思うよ。多分。(棒)

## 第三話 『ロンリー・ブライ』

19

——その頃——

サテラポリスにも検知されていない、謁見の間と呼ぶには少々手狭な空間で脚本家を気取った男……ハイドは跪き、報告を行っていた。ここはハイドの所属する組織の拠点である。少々手狭なのは組織の人員数に合わせた広さで設計されたから、ということだ。

「……報告いたします。妙な青い少年が、我々の邪魔をしております。名前は『ロックマン』、正体は未だ掴めておりません……」

この謁見の間は正方形に造られており、その一角にこの場所へと通じるワープポイントが設置されている。その対面は二段ほどの段差があり、ハイドの所属している組織のボス……ハイド風に言うならばスポンサーが座していると思われる。思われると言うのは、スポンサー兼ボスは仕切りによってその姿を隠しており、ハイドには影しか見せていないからだ。

『愚かな人間がいたものだ……妾の崇高な計画を邪魔しようとはな』

仕切り……三百年以上前の二ホンで使われていたと思われる御簾を真似た仕切りから、女性の声が聞こえてくる。相変わらず自信と確信に満ちた態度である。このようなアジトを用意出来る辺り、優秀であることは間違いないさそうではあるが。

「まったく、その通りでございます。オリヒメ様に楯突くとは……恐れ多いとは、まさにこのことでございます。ただ、気になることも……その少年、電波変換を行つていようなのです」

ハイドの報告に、御簾の向こうから僅かな動揺が伝わってくる。無理もない。電波変換を可能とする人間は、かなり限られている。ボス……オリヒメが言うには、人工的な電波変換の技術開発も行われているらしい。しかし酷い欠陥があり、まともに運用し続けることは不可能なのだそうだ。

『其奴も「古代のスターキヤリアー」を所持しておるのか?』

一瞬で思考をまとめたらしいボスが、ハイドへと問いただす。現実的に考えて、ハイド達と同じ方法で電波変換しているのではないか考えたのだろう。むしろ例の文明出身で、未確認の電波体だったケースが濃厚だと考えた方が自然かもしれない。

「いえ、それがどうも違うようでした……我々とは異なる方法で電波変換を行つていようのです」

『ならば然程気に病むこともあるまい。あの文明のチカラに匹敵するモノなど、この世

に存在するはずもなからうよ。これ以上其奴が計画の邪魔をするようであれば………其奴を、消せ！」

報告の続きを聞き、安堵したオリヒメは特に策を講じることはせず、ハイドにその対応を任せることにした。実際、この地球にかの文明を越えるチカラが存在した記録、物証はない。まさか宇宙人と融合しているとは、優秀な人間と自負するオリヒメであればこそ、考え付くはずはなかった。

「ハッ。オリヒメ様の仰せのままに……」

「……………オリヒメさま。どうやらヤツがカエってきたようです」

先程迄オリヒメの御簾の側にて、無言で控えていた全身をローブとマスクで覆った男が、このアジトに帰還してきた構成員の存在を知らせる。一切の肌を覆ったその姿は、まるで魔術師のような出で立ちだ。

「オーバッシュ！」

アジトのワープポイントから出現した構成員と思われる少年は、無言のままハイドの横に並んだ。その表情はとても鋭く、段上にいるオリヒメを睨んでいるようにも見える。

『戻ったか……ソロよ』

「オーパーツの在処が判ったぞ」

簡潔に要件のみを口にした少年……ソロは、やることはやったとばかりに、オリヒメの言葉を待っている。本人にオリヒメと馴れ合う気は微塵もないのであろうが。

『随分早かったな。流石であるぞ』

ソロの報告を聞いたオリヒメは、僅かに喜色を含んだ声色でソロを称賛した。オリヒメは優秀な者や、しっかりとした功績を挙げた者には優しいのだ。本人の優秀さと相まって、まさに組織を率いる長の鏡である。

「この程度、造作もない。オーパーツは現在……にある」

『……か。警備を掻い潜るのは容易ではなからう。丁度よい道具がある。エンブテイー、アレをソロに……』

「……………」

オリヒメの指示を聞いた魔術師然とした男……エンブテイーは、瞬時にソロの眼前に現れ、巨大な目玉のようなモノを出現させた。対するソロには、僅かな動揺すら見られない。ソロの瞳は、何が起きたかを正確に捉えていたからだ。その正体までは判りはしなかったが。

『それをそなたにやろう』

「なんだ、コレは？」

流石のソロも、使い方すら解らないモノをいきなり与えられて困惑している。困惑と



いうより、訝しむような感じともとれる。

「ブツシツテンソウソウチ『カミカクシ』である。ナニかをヌスミだすのにはうってつけであろう」

巨大な目玉……『カミカクシ』を運んできたエンプテイーによって、簡易な説明が為される。

「……必要ない。初めに言ったハズだ。オレはお前らと馴れ合うつもりはない。オレの体に流れる血が、それを赦さないからだ。……オレは一人でやる」

特殊な生まれと、今までの経験からか断固とした態度をとるソロ。

『そう言うな、ソロよ。カミカクシは元々例の文明の遺産であるぞ』

オリヒメから、ソロにとって無視出来ない事実が告げられる。例の文明の遺産ともなればソロとの関係性も深く、その文明の為に手を組んでいる身としては引くことの出来ないモノだった。

「……！」

『そなたと例の文明は、縁があるのであろう？そなたの言う血というやつが、騒いでこぬか？』

「……………」

既にソロの選択は決まっていた。

——数日後・星河家——

『今日のトップニュースです。先日ロッポンドーヒルズを救った青いヒーローですが……今度はヤエバリゾートに現れたようですね。現場に中継を繋いでみましょう。現場のアベさくん』

『……は、いい、現場のアベです！ここ、ヤエバリゾートに突如現れた謎の青いヒーローですが、人々の間ではその正体について、様々な憶測が飛び交っています』

おっふ。遂に報道されるようになったか。いやあ、人気者は辛いですねー。(棒)というかこの人、どこかで見たようなりポーターだ。別に興味はないのだけど。

「この青いヒーローって、ひよつとしなくてもボク達のコトだよね？」

「だろうな。あんだけ派手に暴れてたんだ、当然つちやあ当然じゃねえのか？」

いや、まあ確かに？楽しんでる節はあったけども？でもいざ報道されるとなると、どうも恥ずかしさが先行しちゃうよね。ほら、偶々遊びに行つた先でインタビューを受けちゃつたみたいなの。

自分としてはテレビ映りが気になるけど、知り合いに知られそうで緊張する……というのがわかりやすいだろうか？

「あはは……」

「そんなにビビることはねえと思うぜ？結果的にはシミンサマを危険から守ったつてことになってるんだ。歓迎こそされ、迫害されるつてことはないと思うが……」

「ロツクは認知度が上がることの恐ろしさをわかつてないんだよ……」

今の時代の有能な特定班とか、考えたくもないよ。まあウエーブアウトまで目視出来るとは思わないから、取り敢えずはソロにだけ気をつけていればいいかな……

「ま、何にせよ喜ぼうぜ。こんだけヒーロー扱いされりゃあ、多少大暴れしても目を瞑つてもらえるだろうよ」

小悪党のような邪悪な笑みを浮かべてくるロツク。この世界の民度が低くないことを祈るしかないか……勝てば官軍負ければ賊軍、みたいな感じにならないといいんだけどね。シンクロ次元怖い。

「ま、電波世界じゃ既に悪ライオット・ブル名があるしね……」

「それは……いや、兎に角オレたちは今や、巷で有名な人気者つてヤツだぜ。おつ、そうだ！町に出てよ、青いヒーローの評判を聞いてみないか？」

ウゲツ、なにその痛いヤツ。自分の評判を自分で聞き回るとか、委員長達に知られたら爆笑されるに決まってる！黒歴史不可避なんですけど!?

「ええ……」

ドン引きです……

「ンだよ、そんな目すんなよ。まるでオレが悪者みたいじゃねえか」

「さつきまでの発言で、ロックのことをヒーロー扱い出来る要素なんて無かったんだけど……」

「……………」

「……………」

「と、兎に角だ！行くつつつたら行くんだよ！」

「ええ、仕方ないでござるなあ……」

「なんかその口調、無性に腹立つな……」

そりゃあ時代に合っていないしね。NOUMINの凄さは今の人にはわかんないだろうさ。昔の人は遅しかったんだよ、ロック。便利だからって、何でも電波技術で簡略化するののは考えものだと思うんだけど……

ーピーロン！

「あ、メールが来たよ！差出人は……天地さんからだ」

「おっ、まさかアレか!？」

「らしいね。ええつと、データの移行は完全に成功したから、後は好きな時に取りに来なよ……だつてさー！」

天地さんマジスーパーハカー。体型的にも、渾名はダルでいいんじゃないだろうか。

「なるほどな。よし！それじゃ天地の元には、話を聞いてから向かうとするか！」  
「やっぱり……？」

「おう！当たり前だぜ！」

正直ダルいなあ……でも確か、ミソラちゃんがお忍びで遊びに来るんだっけ？それで  
ロツポンドーヒルズに行くことになったハズだし、それまでの暇潰しなら……

——20分後・コダマタウン——

「フウ……一通り聞いてみたけど、皆、ボク達に凄く期待しているね……」

肩凝りで困ってるとか、しょうもない悩みを解決してほしい人とかもいたけど。ロツクマンをお手伝いか何かと勘違いしているのではないだろうか。その老人の肩は揉ませてもらったけど、正直なんとか出来るとは思わなかったね。

「まあ、話題のヒーローならそんなもんじゃねえか？FMプラネットだって、アンドロメダの活躍には沸いていたしよ」

「へえ……」

まあ、人的犠牲を減らせるって点では画期的だったのかもしれないけど……

「ねえ、青いヒーローのコト、知ってる？」

「ツ……っと、何ですか？」

危ない危ない。普通にエア友達と会話している怪しいヤツに見られたかと思った。話しかけてきたのは……以前スターキャリアーのパーソナルビューの使い方を教えてくれた人（一人目）だ。

「こんにちは、スバル君。実は私……そのヒーローに憧れてるの！ヒーローって言う位だからきつと、チカラ持ちで頭が良くて、背も高くてハンサムに決まってるわ！」

「ええつと……すいません」  
うわつ、何一つマッチしてないじゃないか。こちとらただの、元引きこもり小学生のシヨタだよ……

「そう……まあ気にしないで……それじゃあね、また会いましょうー！」  
そう言うって手を振って向こうへ行ってしまった。元気な人だなあ……

ーコダマタウン・公園ー

「まあ、別に気にすることは無いと思うぜ？」

「それは何の慰めなんだい!？」

べ、別にさっきのハンサム云々は気にしてないよ！本当だよ!？今日は早く寝ようなんておもっちゃあいない。多分。

「(そんなことは置いといて……つまり、こいつは良いことなんだ！有名になったつ

てことは、それだけオレ達が強いって証明だろ!？」

露骨に話を逸らしてきたな……

「ハイハイ、戦闘民族は黙っててくださいいな」

また自慢話でもされたら堪ったもんじやない。

「(チエツ……)」

『だ、誰か……!!』

これは……悲鳴?……BIG WAVEからだ! ああ、確か現実にはウィルスを手配してライズしてしまっただけ?

「……行つたほうがいいかな?」

『ぐあ……!!』

うわつ、結構ヤバそう。でも店内には、電波人間の蟹泡がいたんじやなかったっけ?

「(この声は確か……)」

「(BIG WAVEの店長、南国さんだよ!)」

そういえば暫く閉まってたんだよね。新環境のカードでも集めていたのだろうか。それじゃあ元々あった、トランサー専用のカード代の分は……考えたくもないな。

「(兎に角、BIG WAVEに行ってみようぜ!)」

「(はぁ……)」

——BIGWAVE店内——

自動式の扉を通った先に広がっていたのは、困惑した様子の南国さんとビジライザーをかけずとも目視出来るウィルスの群れだった。今はまだ様子見といった風に見えるので、本格的に暴れだす前にデリートした方が良さそうだ。

「……南国さん！これは!？」

「ああっ！スバル君!!そ、それがさあ……ボク的にお気に入りのサーフボード的なモノがあるんだけど、それってマテリアルウエーブだね。そのサーフボードをマテリアライズしたら……ウイルスまで一緒にマテリアライズされちゃったんだよ!どうやら、サーフボードのデータがウィルスの的なモノに侵されていた感じなんだ」

これもスターキリアーの弊害だよな。多分こんなコトが起こらないように、ハンターV Gではウイルスバスティング機能が強化されているんだ。あっちもリアルウエーブだかを扱えるはずだしね。ていうか話長いよ。

「なるほど……」

「このままじゃ、お店的なモノがメチャクチャになっちゃう……うう、しよ、しようがない……ボクはこのお店の店長だ。ここはボクがやる感じで……」

え、うわっ凄いな。バトルカードもナシにウィルスへ突貫するなんて!いや、好都合



なんだけど。

「ちよ、南国さん!？」

「やあああ〜!!」

ーードカツ!バキツ!

ひ、酷い。タコ殴りをするなんて!

「う〜〜ん……………、BIGWAVEをよろし……………」

「南国さん?……………南国さアアアアん!!」

「気絶しただけだぜ」

「わかってるって」

ちよつとやってみたかっただけなのに。

「……………取り敢えず、これでおおっぴらにウエーブインできるぞ」

「うん!ウエーブインしてさつさとウィルスをデリートしてしまおう!トレーダーまで

イカれちやったら、ボクの生き甲斐が……………」

「お前は一体何の為に生きているのかと、たまに聞いてみたくなることがあるぜ……………」

「そりゃあ刹那的な快樂と……………あとは母さんの為?」

メテオGの攻略は絶対条件だ。あの妻不幸ダイゴさんを取り戻さないと、あかねさんに真の安ら

ぎはやってこないだろうし。

「……兎に角ウエーブホールを探すぜ。そこからウエーブインだ」

「え、何その反応!? どういうことさ!?!」

ボクはいたって真面目に答えたハズなんだけど! いいじゃないか、ガチャ狂でも! 回転数が全てなんだよ!

「何でもねえって! ホラ、早くこのウィルスどもをやっちまうぞ!」

何か腑に落ちないような……まさかマザコン扱いされてないよね? いや、あかねさんの子供なら誰だってマザコンになるはずだ。ボクはおかしくない……ハズ。多分。きつと。恐らく。違うと言ってよ、バーニー!

## 20

ーBIGWAVEの電波ー

一度BIGWAVEから出たボク達は、近場のウエーブホールで電波変換した後に再び店内に戻ってきていた。

「んじや、手早く仕留めちまおうぜ！」

「なるべく被害は抑えたいし、出来るだけ慎重に、だよ」

「どうしようか。もしかして、ウエーブロードにでも誘導した方が良かったりするかな？」

「一応『ホイッスル』は持っているけど……」

「今騒ぎを収められるのは、オレ達しかいないんだぜ？あんまり慎重になりすぎて手が回らなくなるってのは避けたいが……」

「それじゃ、一旦ウエーブロード上に誘導しようか」

「やっぱりそっちの方が安碑っぽいな。暫く休業中だったのに、開店早々臨時休業だなんてちょっといたたまれないしね。」

「……ホイッスルか？」

「うん、いくよ……！」

ーピーーッ!!!

店内を、バトルカードによって発生した行動強制の効果を持つ笛の音が鳴り響く。ホイツルの効果、それはウィルスの引き付けだ。よくわからないけど、ウィルスの注意を集めて襲いかからせるプログラムということ、らしい。多分だけどね。

「よおし、集まってきた……そら、コツチだ!」

BIGWAVE天井付近に広がっているウエーブロードへと飛び乗りながら、更にウィルスの注意を引くように発破をかける。恐らく、意味は通じていないのだろうけど。

「ウエーブロードは一本道だからな……一気に斬り倒していけよ!」

「わかってる!……うおおおっ!」

ウエーブロード上に集まってきたウィルス達を、小刻みにウオーロックアタックを繰り返しながらソードで斬り進んでいく。バルガンナーやメットリオ2等の、機動性に優れていないタイプのウィルスしかいなかったのも大きいと思うけれど、やっぱり誘引つて強い。電波人間には通じない可能性大だろうけど。

「……つと、よし。終わったな」

「うん、早いとこウエーブアウトして南国さんを起こさないと……」

ロックマン相手ならサービス価格で売っちゃう的な感じだよ！とか言われたらそのまま対応する気はあるけど。

「うーん……ハッ!!」

あ、起きてしまった。別に正体がバレるワケでもないし、取り敢えずバイザーの赤色を少しばかり、濃い目にしておく位だろうか。

「あ、あれ……? ボクは一体何を?」

「大丈夫ですか?」

「ワッ!!」

ワッ!!とはなんだ、ワッ!!とは。こちらからお助けに参上したつてのに。そんなに驚かれても、コツチだつて困惑するだけなんだけど。

「ホントに大丈夫ですか?……因みにウィルスは、全てボク達が倒しておきましたよ」

気絶している南国さん以外誰も居なかったからこそそのホイッスル作戦だしね。多分この空間なら、ホイッスルの音は普通の人間にも聞こえていただろうし。

「……え? ホントだ……キミは一体誰だい?」

「ええつと、最近お茶の間を騒がせさせていたでいるような……」

どう説明すればいいんだろう。話題の青いヒーロー様です!とか?普通に痛いよう

な……

「……あつーもしかしてキミ、ニュースで言つてた青いヒーロー!？」

「……まあ、ヒーローって柄ではないんですけどね」

苦笑しながら言うと、南国さんは少しの間呆けた顔をボクに見せた。なんだろう、もつとオレオレくつていう積極的なタイプかと思つていたのだろうか？

「へえ……中々好青年？だね。まさかあのニュースがホントだったなんて、思いもしなかつた感じだよ……ま、兎に角！お店のなモノを守つてくれて、ありがとう！」

「いえ、気にしないでください。ボクも好きでやつてることですので……」

具体的にはカードトレーダーの死守！とかね。これでカードトレーダーが故障でもしていたら、普通に号泣していた自信がある。

「ほうほう……ん？そういえば、スバル君はどこ行つたんだろ？ま、まさかウイルスにやられちゃつたんじゃ……」

「スバル君、ですか？スイマセン、ボクがここに来た時には既に、店内にはアナタしかいませんでしたし……」

別に嘘は付いてないからね。

「ええっ!？」

「ただ、ボクが店内に入る前に住宅街へ走り去つていく赤い服を着た少年なら見ましたが……もしかしてその子ですか？」

「……………そ、それだよ！ホッ……良かった」

この人って結構いい人だよな。普通ここまでただの客を心配できるかな？いや、客商売だから普通なのかもしれないけれど。

「それにしても……………つと、何ですか？」

さつきから南国さん、ジロジロ見てくるな。なんだろう、バイザーを調整しているから、半ばマジックミラーみたいに見えるハズだけど。

「キミ……………誰かに似ている気がする……………」

「あはは……………気のせいですよ。それでは、ボク達はこの辺で失礼しますね」

察しのいい大人は嫌いだよ……………

「ボク達……………？つと、あ、ちよつと待って！せめて、何かお礼を！」

そ、それじゃあHPメモリをありったけ……………！

「（オイ、スバル。今余計なコト考えてねえか？）」

「（き、気のせいだよ！）……………結構ですのぞ！」

兎に角今は、店から出るべきだ。天地さんの所にも行かなきゃいけないし……………

——コダマタウンの電波——

「うゝん、南国さんの勘って結構、侮り難いものがあるよね……………」

「いつそバラしちまおうぜ。青いヒーローの正体がオレ達だと知れたら、きっとチャホ

やされるに違いねえ。皆オレ達の言うことを何でも聞くようになったりしてな……クック」

「ロック、地球侵略の気はないんじゃないやなかったの？」

前にオヒュカスとの問答で言っていたハズだし。オレは地球侵略なんざ、これっぽっちも興味ないね！的なコトをさ。

「へへッ、ジョーダンだよジョーダン！」

「まったくロックつてば、冗談キツイよ……」

「まあいいじゃねえか！それよりよ、とつととウエーブアウトして天地のヤツの所に行こうぜ！オレ、もう待ちきれねえよ！」

うーん、考えたんだけど、やっぱり今日はやめておいた方がいいんじゃないかなあ……FM星人による地球侵略は終わったし、オーパーツにチカラを回収されてしまうかも……つて考えると、暫く天地さんに預けた方がいいような気もしてきたぞ。

「はぁ……」

ウエーブアウト！

ーコダマタウンー

都合よく配置されている、自宅脇のウエーブホールでウエーブアウトしたボク達。多



分そろそろ……

『スバルく〜ん!!』

やっぱり。

「あ……久しぶり?」

大体、二週間位会っていないような気がするな。まあ、その気になれば何時でも来れるんだろうけど。今は作曲なり、ライブなりも凄く楽しんでるらしいし以前に比べたら間違いなく成長していると思う。精神的にね。

『人の顔を見て、そんなに苦笑いしないでよお……!』

相変わらず元気だねー。って感想しかないけれどね。兎に角、道路を渡ってこちらに向かってくる大人気歌手は……

「こんにちは、ミソラちゃん!」

「うん!久しぶり〜!」

一体この元気は何処から湧いてくるんだろうか。滅茶苦茶ニコニコしてるし、尻尾でも振つていそうな勢いだ。ミソラちゃんに犬コスチューム……イイネ!おっと、なんだか思考が乱れていたような気がする。まあどうでもいいや。

「久しぶりって程でもないかもだけどね」

自分で言っておいてなんだけどさ。

「そんなことないよ！ワタシは一日千秋のような気持ちで日々を過ごしてಿದೆだね……」

それは捉えようによつてはヤンデレ認定されそうなんですけどね……

「大袈裟だなあ……」

「フフフ、響ミソラは何事にも全力なのです！スバルくんも少しはワタシのこと、見直した〜？」

「見直したも何も、ミソラちゃんはボクのブラザーじゃないか。キミがいつも頑張っていることは知ってるよ。ボク、とつても凄いなと思う……」

今はブラザーバンドがフォーマットされているけれど、機種変する前はトランサーの情報自体を共有してたんだ。いろいろと、わかっちゃうことだつてあるし……

「エヘヘ……そう言つて貰えると嬉しいな。……うん、ワタシもつと頑張るね！」

キラキラキラ……という感じだ。ま、眩しい……！やっぱり先週会ったアイちゃんなんて目じやないね。流石は有名人、手慣れていらつしやる……のだろうか？ボクには自然な笑顔にしか見えない……。ので、多分そういうことなんだろう。ブラザーを疑うのは良くない。反省反省……

「そつか、それじゃあ頑張つてね！」

手を振りながら帰宅するべく足を進める。そういえば、まだお昼ご飯食べてなかった

な。どうしようか……

「ストツプ！ストツプ！」

「あはは、ゴメンゴメン……つと、それでどうしたの？」

ちよつとした冗談のつもりだったんだから、そんな必死にならなくても……ボクがブラザーを蔑ろにするワケ、ないでしょうに。

「オ、オイスバル……ビジライザーをかけてくれよ」

「え？いいけど……」

珍しく慌てた様子 of ロックに、ついつい応じてしまう。どうせハーブが苦手だー！とか言い出すのだと思つてただけど……

ーカチャッ！

「よし……かけたよ。一体どうしたつてのさ？」

ビジライザーをかけても、ミソラちゃんの側に誰かを確認することは出来ない。あれ、もしかしてスターキヤリアーの中？

「このオンナがいるつてコトは『アイツ』も近くにいるつてことだろ……！」

そんな戦慄したように言わなくても……

『ポロロン……その通りよ』

ーバシユッ！

ピンク色の炎が燃え上がるような演出とともに、ハープに顔と手が付いたようなFM星人……ハープが現れた。よく思うんだけど、ハープにハートを意図した飾り？が無かったら、凄く性別がわかりづらかったような気がする……いや、女性相手に失礼なんだけどね。

「お久しぶりね、ロック。クスクスクス……」

「ゲッ！ハープ!!」

何でそんなに恐れるのだろうか。

「アラ……連れない反応ねえ。私達、同じFM星人同士じゃない。仲良くしましょうよ、クスクスクス……」

い、いつも通り内心が全く読めないハープさんはマジハープさんだ。自分でもちよつと、何考えているかよくわかってないけど。

「オレはFM星育ちのAM星人だ。同じにするんじゃない」

「違うと言ってもお隣の星じゃないの。それにAM星人とFM星人も、体が電波というのは共通化してる。だと言うのに、どうしてそんなによそよそしいのかしら？クスクスクス……」

「ご近所(の星出身)の幼なじみってヤツなのだろうか、よく考えると。ぶっちゃけハープに気があったり？」

「……前にも言っただろ。オレはオンナって生き物がイマイチ得意じゃないんだよ」  
ボクもです……

「ウブねえ……クスクス」

「ハープさんはウブじゃないんでしょうか。というか電波体の恋愛観ってどうなってるわけ？」

「チツ！」

「やっぱりマジに苦手なのかな？」

「ハープ、あんまりロックくんをからかっちゃダメだよ。……あ、そうそう用事だったね。スバルくん、今日はこれから用事とかあつたりする？」

「ううん、特にないよ」

「（オイ、スバル！天地のヤツはいいのかよ!?）」

別に何時でも来ていいって書いてあったし、オーパーツさんに回収されたくないし……もしかしたら分離しておくことで、ラ・ムーの出力低下を起こせるかもしれないし……と、あんまりいいことがないような……

「じゃ、今からロツポンドーヒルズへ遊びに行かない？」

「構わないけど……でも、どうして？」

「曲作りに忙しくて、最近外の空気を吸ってなかったの。久しぶりにお買い物したり、美

味しい物を食べたりしたいなあ……って」

ああ、なるほどね。ウチには割とよく来るけど、遅い時間がほとんどだからゴロゴロしたり駄弁つてるのが殆どだしね……

「その……なんていうかき、こういう風に誘える男の子って、スバルくんしかいなくて……」

割と何でもない用件なのに、ミソラちゃんが言うときに変に意識してしまうのは、アイドル？の為せる技ってヤツなのだろうか？

「あはは……それはその、なんと言いますか……光栄です？」

「フフフ、スバルくんってやつぱりスバルくんだよね」

それは褒め言葉なんです？

「今のやり取りをあのツインドリルが聞いたら、どうなるんだろうな」

ロツクにしては、よくわからない例えだよ。でも、どうなんだろう。二人してキヤツキヤしながらボクを荷物持ちにする未来しか見えないような気がする……

「（そりゃあ……自分も行きたいって言い出すんじゃないの？委員長だつてミソラちゃんブラザーなんだし）」

「（聞いてたのかよ……）」

「（聞いてたよ？）」

そりやあ何時も会話してますし？相棒の言葉を聞き間違えたらアウトじゃない？  
コミュニケーションは円滑に、は大切だと思う。

「じゃ、早速行こうよ！♪♪♪」

ノリノリですね、ミソラさん。あつ、ちよつと、手を引つ張らないで！

「ま、待つてよ！ちよつと急ぎ過ぎじゃない？」

「オンナのコの時間は短いの！命短し、恋せよ乙女！だよスバルくん！」

……恋せよ乙女？

「あれ、ミソラちゃん好きな人とかいるの？」

結構意外だ。ミソラちゃんは音楽音楽アンド音楽みたいな感じだと思っていたのに。  
それにしても羨ましい男もいたもんだ。こんな可愛い女の子に想いを寄せられている  
だなんて。まあ、犯罪的な絵にならないといいんだけど。

「え、あ……ち、違うよスバルくん！」

「別に無理しなくてもいいけど……」

ちよつとませてると思えば……別に、ねえ？

「ホントに違うの！えつと……あ、そ、そう！今考えてる新曲がね、ラブソングなんだ！  
だからちよつと恋するオンナのコの気持ちになつてみたり……とか？」

ああ、なるほどね。それは確かに一理ある。作詞するのには成りきるコトが大切だつ

てのは、何処かで聞いたような気がするし。ミソラちゃんも苦労してるってことなのだろうか。それにしても、そんなに焦ることもないだろうに。なんだか顔は赤いし、目もグルグルと混乱しているようにも見える。アワワワ……って感じた。

「まあ、別になんでもいいんだけどさ。取り敢えずロッポンドーヒルズに行こうよ。このままじゃあ、向こうに着く前に日が暮れちゃうよ」

「う、うん……そうだね！（た、助かったあ……）」

なんでここで安堵するのだろう。別に何かおかしいことをしたわけでもないだろうに。

「ボクも美味しいモノには目がないからね、楽しみだなあ……」

確か今は、美味しいスイーツの店がロッポンドーヒルズを中心街で短期的に開いていたはず。あんまり男所帯で行くわけにもいかないし、ここはボクも楽しませてもらうかな！



## 21

ーヒルズ前通りー

バスに揺られて数十分、ボク達はロツポンドーヒルズの入り口へとたどり着いていた。相変わらず凄い賑わいだよね、ホント。

つと、ここは人通りが多すぎる。親子連れ云々から、天国のママさんを思い出されてしんみりするよりも、今は楽しむことが優先だ。

「さあ、行こう行こう！」

「わわっ!?!どうしたのスバルくん!?!」

申し訳ないが少々強引にミソラちゃんの背を押し進み、ヒルズ入り口のエレベーターへと急行する。

「いいからいいから！早く行けば、それだけ長く居られるでしょ?！」

ちよつと無理矢理な感否めないけれど、多分これは正解なはず。大切な人を忘れないことは大事だけど、その度にしんみりされちやあ天国のママさんも浮かばれないだろう。

「……もうっ、しょうがないなあ……!！」

困っているようにも見えるけど、何処か嬉しそう？いや、気のせいだよ。とにかく、ホント申し訳ない。

ーローロッパンドーヒルズー

「さて、ドコ行くっか？」

「今日は基本的にミソラちゃんにお任せ……だけど、何かリクエストがあれば応えるよ。美味しいパフェの店、とかね」

ぶっちゃけボクの欲求なんだけどね。確かゴン太の情報網にいくつかロッパンドーヒルズのレストランがヒットしていたはずだ。特にパフェ！

「パフェね……あつ、ねえスバルくん、あそこのカフェに行こー！有名なお店なんだよ！パフェが美味しくて、テレビとかで紹介されてるの」

そう言うってミソラちゃんは、ヒルズ内にあるお店の一つを指し示す。おおつ、この店は……

「ボクも知ってるよ！美味しいパフェなんだってね！」

この店だ！ゴン太が言ってた美味しいパフェがある店は……キザマロも結構甘党だったので、三人で暫く談義したのを覚えている。ゴン太が食べたと言ってたのは……確か『フジヤマクリームパフェ』だっけか？

「あれ、そういうの興味あるんだ？結構意外だった、カモ？」

本当に意外そうな顔で聞いてくるミソラちゃん。まあ確かに、マイプロフィールに好物はハンバーグって入力しているし、分かりづらいつらいつらいのかもしれないけど。

「あはは……ゴン太やキザマロとたまにご飯食べに行ったりするんだけどさ、どうにも男子だけだと行きづらくって……よく話題にはなってるんだけどね」

因みに数日前、ポップコーンリベンジを果たすために、映画館まで足を運びました。映画は見ていないんだけどね。ゴーストクライシスは未だに人気で、客が来てしようがないらしい。たまたま会った、プロペラ事故が起きた時に現場にいた責任者……費用減削さんが嬉しそうに語っていた。

「へえ、でもルナちゃんを置いてけぼりにしちゃったら後でオオメダマ……になったりはしないの？」

がおーっと、可愛らしく委員長長の真似をするミソラちゃん。全然似てないよ。委員長はもつと怖いから。怒りの日だから。ガチで雷落ちるから。ブルブル……

「うーん、それは男同士の秘密ってヤツになるのかな？でも、結構楽しいんだ」

「それじゃあ今度、ワタシもルナちゃん誘って何処かご飯食べに行ってみようかなあ……」

「所謂ガールズトークというヤツだろうか？気になると言えば気になるけど、貴方は知りすぎた……になるのも嫌だしね。プライベートって大事だと思うよ。まあ、プライベートを売るのがアイドルと言えばそうなんだけど……ミソラちゃんはアイドル（？）の歌手だしね。」

「それがいいよ！委員長もミソラちゃんのコト、もつと知りたいだろうしさ！」

「うん………つて、立ち話もなんだし、まずはカフェに行つてみよう！」

あんまり立ち話していると、周りの目を集めちゃうしね。それはミソラちゃんも望んではいない。だつて肩肘伸ばせなくなっちゃうもの。

「了解！」

——カフェ店内——

「いらつしやいませー！こちらがメニューとなります！」

元気な店員さんが表示してきたメニューには、色とりどりの美味しそうなパフェが映し出されていた。うわつ、中々迷うな……これは美味しそうだ。値段もポリュームの割に安い。そりゃあ人気店にもなるわけだ。

「ねえ、スバルくん見て見て！どれも美味しそう！スバルくんは何頼む？」

「むむむ……これもいいけど、これも捨てがたい……」

き、究極の二択つてヤツだ。どっちを食べても、食べなかつたもう片方に未練が残り

そう……

「あ！コレ、ワタシも食べたいと思ってたやつだ！それじゃあスバルくん、ワタシがこれ頼むから、スバルくんはそっちを頼めばいいんじゃないかな？」

そう言つて、ボクが悩んでいた片方を指すミソラちゃん。つまり、これは。

「も、もしかして……！」

「フフツ、チョットだけ分けてア・ゲ・ル！」

華麗にウインクを決めながら、イタズラっぽい顔で天恵をもたらしてくれるミソラちゃん。後光が見えるよ……

「やった！ありがとう、ミソラちゃん大好き！」

ホントミソラ大明神様々だ！今ならラブコールだつて唱えられそう！L・O・V・E  
！ミ・ソ・ラ！

「……ホント、スバルくんはズルいよ……」

「ズルい？」

「ううん、なんでもない！……それじゃ頼もつ！」

「あ、ボクが頼むよ。……すいませーん！」

一応有名なんだし、目立つコトは控えるべきだ。まあ、無駄な足掻きなんだろうけど。

——30分後——

「……フウ！」

「美味しかったあ！」

「だね！期間限定で出張開店してたみたいだし、今度来るときもやってたらいいな……」  
凄い量だったけど、お昼ご飯だと思えば……そうでもないような。電波人間として動き回ると思ったよりカロリーを使うみたいだから、これからの考えると丁度いい、のかな？

「フフフ、今度はルナちゃんも入れて四人で来たらいいかもね！やっぱり男の子だけじゃあ、入りづらいみたいだし……」

「確かに。店内には女性客とカツプルばかりだったよね。委員長と一緒になら、四人で行っても……いや、ミソラちゃんも予定が合えばどう？」

あんまり大所帯になりすぎても落ち着かないけれど、数人で少しだけワイワイやるなら良さそうだ。もちろん他の客の迷惑にならないようにはするけれど。

「もちろん！でも最近はやット忙しいから、暫くは難しそうだけだね……」

申し訳なさそうに言うミソラちゃん。ああ、いや、そんな気持ちで言ったワケではなかったんだけど……

「ゴメン、ちよつと無神経だったね。忙しいのに休みを催促するようなコト言っちゃつて……」

ミソラちゃんは歌うのが好きだから歌手をしているんだということ忘れてはいけない。もちろん友達だから、こういう謝罪は要らないのかもしれないけれど、ちゃんと自分の気持ちを伝えるって大切なことだと思うから。

「ううん、いいの。……さあて！次はどうしようか!？」

「うーん、お腹は膨れたし、腹ごなしに何処か見て回れるところとか、どうかな?」

「いいよーニュースでも確か、ロツポンドーヒルズで展示をやっているとか……あ！ニュースで思い出したんだけどさ、最近報道されてる青いヒーローって、スバルくんのコトでしょ?」

どうなのどうなの?と肘でツンツンしてくるけれど、別にそんなことしなくてもミソラちゃんに隠すつもりはない。だってブラザーだから。いや、スターキャリアーのブラザーバンドはフォーマツトされているから、ソウルブラザー?どちらにせよ、ミソラちゃんはボクの大切なブラザーだ。それに変わりはない。

「あはは……判っちゃおう?」

「フフツ、隠したって無駄なんだからね！ワタシ、スバルくんのことだったらなんだってわかつちやうんだから!」

ええっ!? ホントにごさるかあ……? 部屋に盗聴機とか仕掛けてないよね? いや、いや、ミソラちゃんに限ってそんなこと……ないハズだ。多分。

「やっぱりミソラちゃんには敵わないよ。まあ、色々あつてさ……」

簡単に何があつたかを、ミソラちゃんに話す。

「へえ、でも凄いや! ニュースで紹介されるなんてさ!」

「そうかなあ、物珍しさつてだけのようない気もするけど……」

掌ドリルは止めてほしいもんだけどね。

「そんなことないって! だって世間じゃ『ヒーロー』って言われてるんだよ? カッコいいじゃない!」

ミソラちゃんに言われると、そんなに悪い気はしないような。いや、まあ役得?

「あはは、ありがとうミソラちゃん。これなら頑張った甲斐があつたかもしれないね」

ちゃんと人となりを知ってる人から貰う励ましつて、割と無視できないレベルで活力源になったりするよね。ソースはボク。

「もう、大袈裟だよ……アレ?」

モニターが近づいてくる? いや、違うな。

「これは……CM用のエア・ディスプレイだね」

『ただいま美術展では、「滅びの文明展」を開催しております! 是非お越しになってくだ



「さい！」

「『滅びの文明展』だって……面白そうだね」

遂に来てしまったな……ボクはオーパーツを制御しきれののだろうか。ベルセルクに飲み込まれて暴走、なんてオチはゴメンだけでも。

「あ、コレだよ。ニュースでやってた展示のやつは。スバルくん、こういうの好きなの？」

「好きというか……ちよつと無視出来ないというか……」

オーパーツさんに再会するのがちよつと怖いです、ハイ。実際何言われるかわからないから怖いんだよな……

「へえ……ちよつと意外だけど、いい機会だし、行ってみようよ。場所はえつと……TKタワー内部の美術館だって。じゃ、早速TKタワーに行こー！」

「うん……あ、ミソラちゃん映ってる。これは栄養ドリンクのCMかな？」

空中に浮いたエア・ディスプレイからは、ミソラちゃんの元気な声で栄養ドリンクを宣伝しているのが聞き取れる。これはバカ売れ間違いなしだね。

「あはは……やつぱり恥ずかしいな、自分が出てるCMって」

まあ、なんとなくわかるけど。ボクも今朝はなんだか、身体中がこそばゆかったから。「そう言えばさ、ミソラちゃんって歌手活動に復帰してからはこういう宣伝によく出演

?したりしてるよね。歌手一本でやってるのかと思つたから、結構意外だったんだ」

「ああ、それは……………もつと多くの人に、ワタシを知つて貰うためかな。ワタシね、歌手を引退して自分で少し、考えてみたんだ。自分のやりたいコトを、ね。」

「自分のやりたいコトか…………」

そう言えば、ボク自身がやりたいコトつてなんなんだろう。あかねさんの為に、ダイゴさんを救出するのはやりたいコトだ。でもそれは誰かの為であつて、自分の為ではない。ダイゴさんを救出した後何をやりたいか、そして何をしたいか。それらを考えていく必要が、きつとボクにはあるのだろう。

「うん、自分のやりたいコト。自分出来るコト。時間はかかったけど、漸くそれを見つけたの。それはね…………世界中には、ワタシやスバルくんのように親を亡くした人だつてたくさんいる。そういう人たちのために、歌を作りたいの。…………スバルくんはちよつと特殊だけだね。親を喪つた気持ちを知つてるワタシなら、その悲しみを和らげる優しい曲が作れるんじゃないか…………つて」

「そつか…………凄いな、ミソラちゃん。自分のやりたいコトを、ちゃんと自分で見つければ…………ボクは何一つわからない。何故ボクが、ここにこうして存在しているのか。…………ボクは一体、何を為せばいいのか…………」

わからないから、取り敢えず生きる為に世界を救う。もちろん、あかねさんの件を優

先させるけど。

そうだ、ボクは一体何のために……何のためにこの世界にいるんだ？ 誰かの意思？ まさかこれもゲームの一種だとか？……フフツ、確かに二次創作なんかではありそうなジャンルだ。ま、考えてもしょうがないだろう、こればかりは。

「スバルくん。……別に、いいと思うよ。わからなくつても」

わからなくつても？

「それは、どういう……？」

「事情が事情だし、スバルくんの場合は、まだ半年も過ごしてないんだよ？ そんな状況で自分を決めるのって、凄く難しいコトだと思う。だからね……ゆつくり、ゆつくり色んなコトを知って、わかっていけばいいと思うんだ。時間をかければ、それだけ自分に納得出来ると思うの。……ワタシみたいに」

自分のやりたいコトを、しっかりと考えたミソラちゃんだからこそその言葉なんだろう。

「そっか……ありがとう、ミソラちゃん」

きつと、答えを出すのを急かし過ぎたつてコトなんだろうな。それに色んなコトを知る……か。既にこの世界の流れは概ね知ってはいるけれど、多分まだボクの知らない世界コトがたくさんあるんだろうな。色んなコトを知って、そうしてボクを決めていく……ああ、なんて素晴らしい響きなんだろうか。

「ううん、気にしないで。ワタシは以前、スバルくんに助けられた。だから今度は、ワタシがスバルくんにエールを送ってあげたいんだ」

……カツコいいな。惚れちやいそうだよ。ボクならこうはいかないだろうし。きつと何処かで茶化しちゃうだろう。

「フフツ、そつか。……なんだかミソラちゃんって、ボクのヒーローみたいだよね」

「あつ！ヒドイ！ワタシ、オンナのコなんだよ!?!ヒーローじゃなくて、ヒロインが適役なんじゃないかなあ!?!」

おっと、申し訳ない。でもミソラちゃんが（性格的に）イケメン過ぎるのが悪いと思う。今のミソラちゃんを見ていたらきつと、女の子でミソラちゃんに憧れる子も出るだろうね。ビツキーって呼んでいいですか。

「あはは、ゴメンゴメン。なんだか湿っぽくなっちゃったね。それじゃそろそろ、TKタワーに行こつか?」

「うん!」

流石はアイドル(?)、いつでもシャイニースマイルというヤツだね。ボクも見習った方がいいかな?

「……………」

「スバルくん、笑顔引きつつてるよ?」

ダメでした。

## 22

——TKタワー前——

色々と考えさせられることがあったりしたものの、当初の目的通り、ボク達はTKタワー前へとたどり着いていた。それにしても、やつぱり凄い高さだよね……この高さを徒歩で登りきったなんて、今でも信じられないくらいだ。

「あ、ワタシ美術館はタワーの最上階に設けられているって、ニュースで見たことあるよ」

「最上階かあ……また凄い場所に美術館をつくったもんだよね。万が一倒壊したりでもしたら、かなりマズイコトになりそうだ……」

しかも美術館には窓が無かったハズだから、ぶつちやけそんな場所で開催する必要は無かったのでは？まあ、マーケティングだとか経営論的な知識はボクの専門外なので、稚拙な予想しかできないのだけど。専門と言っても、ウィルス系に関する知識に限っているけれどね。

「フフフ……スバルくんは心配し過ぎ！大丈夫だって。さつ、早く中に入ろうよ！」

「そうかなあ……」

結構このTKタワーって、厄ネタだと思っただよね。だって、世界征服系の組織に狙われたし……オリヒメ陣営以外にも、狙ってる組織とかいそうで怖い。ていうか銃火器とか持って来られたら、普通に為す術がない。

——TKタワー内部・最上階——

TKタワーの最上階に設けられた美術館は窓が無く、照明頼りで辺りを見渡すことが出来た。足元に敷き詰められた暗色のパネルも、未知の文明を展示するというコンセプトに合っているような気がする。キヤー怖ーい！みたいな部類ではないのだろうけど。

「……が美術館かぁ……」

確か日光が当たると、色褪せちゃったりするんだっけ？今の科学力ならなんとか出来そうな気がするけれど。

『おや？』

おや？この声は……美術館受付の向こうから、初老に差し掛かったら、という年頃のおじさんが近づいてくる。その足取りには微塵の躊躇いもない。というか、以前映画館で再会した費用 減削さんだ。

「おや？おや？おや？確かキミは……！」

「あ、こんには費用さん。ゴースト・クライシスの方は、もういいんですか？」

「ああ、実はあの『ゴースト・クライシス』、本物のオバケが出る、なんて噂が立って公開中止になってしまったんだ」

「あれ?でも以前行ったときは上映してましたよね?」

ポップコーンリベンジで映画館まで行った時のコトだ。ハーフ&ハーフはとても美味しかったです。

「それはだね……今話題の青いヒーローが出るとい噂も同時に流れたみたいで、一時的に動員数は増えたんだ。だけど、やはり不安要素は取り除きたいらしくってねえ。残念ながら『ゴースト・クライシス』の公開は中止ってわけさ。それに公開後直ぐに中止となつてしまったから売上的には酷い大赤字でさ、おかげで私は映画プロデューサーという肩書きを失ってしまったんだ……」

「そ、それはお気の毒に……」

この人も、電波社会における被害者なんだよね。まあ、利便性だけに目を向けていてはいけないよっていう教訓なのかもしれない。

「グフフ……そう慌てないでくれたまえ。私は世の中の渡り方を熟知している男だ。転んでも、タダでは起きないぞ……!」

やつてやる、とばかりに拳を握りしめる費用さん。か、可哀想に。この滅びの文明展も……ぶっちゃけ全てを止めるには人手が足りないし、御愁傷様としか言えないのが



なあ……なるべく、奪われたモノも回収してみようかな？余裕があれば、だけど。

「今度はね、美術館のプロデュースをするコトになったんだ」

「じゃあ、この『滅びの文明展』って……」

「そう、私のプロデュースだ！」

「せ、成功するといいですね……」

「ああ！もちろんだとも！君には以前助けてもらったし、この『滅びの文明展』には無料で招待しよう。ホントは入場料をキツチリ取るんだがね」

おお、太っ腹だ。流石に世渡り上手を誇るだけはある。経営と言うか、プロデューサーとしての才能はあるんだろうけどな。いかんせん、幸運E並の不運に巡り会っているのがね……

「いいんですか？その、費用が……」

かけた費用がもつたいない、とか言い出したりはしないだろうけど。

「ああ、気にしないでくれ。受けた恩は返す、これも私の処世術……というか信条みたいなモノだからさ。……まずは受付にいる係員に言っつて、入場の手続きを済ませるといい」

「……そうですか、ありがとうございます！」

「ああ、心ゆくまで楽しんでいくといい。序でに学校の友達にでも、この展示のコトを宣

伝してくれると私としては嬉しいがね」

流石はプロデューサー、抜け目ない。費用P……あんまり響きはよくないな。やっぱり費用さんで。

「あはは……伝えておきますね。では！」

委員長の父母さんにも紹介してみようかな？ 確か同じような職種だったはずだし。いや、プロデューサーのノウハウを独占したがるのだろうか？

まあ、飯の種ってヤツだし、仕方ないのかも。

「よし、行こっか？……ゴメンね、蚊帳の外にしちゃってさ」

「ううん、別にいいの。ワタシ、お金に拘る人ってまだちよつと苦手で……」

うっ、確かに。ちよつと無神経だったか。お金に拘る人って多分、例の元マネージャーのことだよ。そういうえばあの人、今は何をしているのだろうか。

「そっか。でもあの人、普段は結構いい人なんだよ。前にちよつと話したコトがあるんだけどね、お金が絡まなければかなり好印象だったかも……」

気前はいいし、子供だからって侮ることもしない。ホントお金で凄い苦労したんだなあ……って位お金に神経質で無ければ、欠点とか無さそうなんだけど。キズナリョクも260と、一般人では高い方だったし。

「スバルくんがそう言うなら……って、先ずは受付に行こ？ 今日を楽しまなくっちゃ！」

「それもそうだね。ええっと、受付の人は……すいませーん……!」

受付の女性に話しかける。確かマテリアルウエーブが貰えるんだっけ? 益々太っ腹なコトだね。

「はい……『滅びの文明展』へようこそ! この地球の歴史を紐解くと……過去に滅んでしまい、今はもう見ることも出来ない文明や生物が、数多く存在します。ここでは、そうした文明や生物が残した遺産を展示しています! どうぞご覧になってみてください!」

ぶつちやけシノビとか滅ぶ要素あったの? って感じだけど、キズナリヨク云々で説明するなら裏切りが相次いで一族内で殺し合いにでもなったってところだろうか? うわつ、そう考えるとシノビのオーパーツじゃなくてホント良かった……

「へえ……結構面白そうだね!」

「うん!」

ミソラちゃんの反応も上々だ。美術館の密閉された空間独特の雰囲気も相まって、かなりそれっぽく感じる。やっぱり費用さんって、かなりやり手のプロデューサーだったんじゃない……

「展示をご覧になる前に、こちらをお受け取りください! ガイドのマテリアルウエーブですので、館内ではガイドの誘導に従ってお進みください。では、ごゆっくりお楽しみ

「くださいませー！」

「ありがとうございます」

「ねえねえ！早速使ってみようよ、そのマテリアルウェーブ！」

オラ、ワクワクすつぞ！みたいなノリで催促するミソラちゃん。そういえば、入館するのは二人なのに、配布されるガイドは一人なのか。一団体につき一人つてことなのか  
な？

「うん、それじゃあいくよ……マテリアライズ！美術館のガイド！」

ガイドのマテリアルウェーブ、スタンバイ！

『展示品の解説を行いますわ！よろしくお願いしますですわ！』

名前はシャベクリンっていうらしい。多弁そうな名前だ。

ーバシユツ！

「ワタクシ……当美術館のガイド……シャベクリンと申しますわ。よろしくお願いしますですすわ!!」

無理してですわ口調にしなくてもいいような気がする……

「よろしくー！」

「よろしくねー！」

「はいですわ！それでは早速、参りますですわ！」

だから、無理しない方がいいと思うんだけどなあ。多分そういう風にプログラミングされているのだろうけど。

ー展示スペースー

「まず、最初の展示は『ムー大陸』についてですわ」

ムー大陸。ついに出たな。そういえばムーメタルって結局なんだったんだろう。というか、地球人としては『宇宙に誇る、我らがムー大陸！』って開き直った方がいいのだろうか？だってどう考えても、アシッドやジョーカーを抜いたら純地球産の対抗戦力って足りてないしなあ……ガチガチのバトルウィザードでギリギリってところだろうか。バトルオペレーション！セット！すればなんともなりそうな気はするけど。

「ムー大陸？」

「かつてこの地上には、現代を遥かに上回る科学力を持った……とある文明が存在したらしいですわ。それをムーと呼称しているのですわ」

「現代を遥かに上回る科学力かあ……：社会の授業でも教わってないし、教科書にもそれらしき記述は無かったような……」

まあ、知ろうと思えばネットで知れるんだけどね。実際検索して、簡単な情報なら集められたし。

「ムーが本当に存在したかどうかは、まだ判っていないのですわ。仮説では……ムーはある時期を境に、突如その姿を消したと言われているのですわ」

不確定な情報を教科書に載せるワケにはいかなかってことか。ということとは、来年からは教科書にムーのことが載るんだろうな。だって大陸ごと出現しちゃうし。学習要領の変更とか、受験生泣かせだと思う。おのれムー！

「へえ、不思議な話だね」

「(多分、ボク達の方が不思議な生き物なんじゃないかなあ？……宇宙人と生活してるなんてさ)」

「(アハハ！それもそうだね！)」

「ムーのモノと思われる遺産が各地で発掘されているのですわ。それらが、ここに展示されているのですわ。ゆっくり、ご覧くださいですわ！」

取り敢えず、この辺りにある展示品なら……

「じゃあ、この石板みたいなのは？」

先ずはこのムー文字の描かれた石板だ。確かソロもこれと同じ模様を宙に描いて変身していたハズ。ということとは、ぼつち的な単語である可能性がワンチャンあるかな？「ゴホン、この石板に刻まれた模様は……ムーの人々が用いていた文字の一つだと言われていて、何を意味しているのかは未だ解明されていないのですわ」

やっぱりまだ解明されていないのか。ソロ辺りが解説してくればわかるんだろうけど、それは贅沢つていうか失礼なことだね。滅んだ先祖をその末裔に解説させるなんて、流石に鬼畜が過ぎるような……

「現代の技術でも解明されていないなんて……よっぽど難解につくられていたのかな？」

「うーん、どうだろ？ワタシには『門』みたいに見えるけど……」

確かに、割と近い例えだと思う。『門』以外だったら、『弓』の字を左右対象に並べたような見た目だろうか？いずれにしても、さっぱりわからないことに変わりはない。雰囲気を楽しむ位でいいんじゃないかと思う。

「ホントだ。……もしかしてミソラちゃん、暗号解読の才能があるんじゃない？」

「大袈裟だつて！」

「あはは……冗談だよ。でもさ、案外ボくらみたいな素人の想像が真実だったり……なんて考えると楽しくならない？」

考えても仕方ないことだからこそ、いくらでも想像できる。このムーの模様だつて、もしかしたら十字架のようにムー大陸の人々にとっては神聖な模様なのかもしれない。

「アハハ、確かにね！……よし！それじゃ、次の展示行つてみよ！」

「うん、それじゃあ……これは？」

「こちらに展示されている遺産は、ムーの人々が使っていたと思われる、携帯端末らしき装置なのですわ！」

正しく、ハイドの使っていた古代のスターキャリアーだ。……中身は入ってないよね？

「凄いな、この展示品……スターキャリアーにそっくりだ。というか……」

「ああ、ハイドが電波変換に使ってたシロモノにソックリだぜ」

「確かハイドは『古代のスターキャリアー』とか言ってたよね。もしかしなくても、関係がある……と考えるのが自然かな」

　　というか盗品だし。もちろんハイド達のほうが、だけど。

「(そうだな……その展示品を、もつと詳しく調べてみるよ)」

　　無茶ぶり酷いよ。

「(それはダメだつて、セキュリティが……)」

「(オイオイ、ビビってんのか？……なら、オレがやってやるぜ!)」

　　そう言つて古代のスターキャリアーに近づこうとするロック。どうせ後でいくらでも触れるようになるつてのに。カミカクシの中で、だけど。アレつて結構脱出するの面倒だったんだよな……



「（バカ！ここのセキュリティはマテリアルウェーブの警備員だから、電波体のロックだつて普通に感知されちゃうんだよ！）」

入り口のパネルに表示されていたのをちゃんと確認しているから、間違いはない。まあ向こうにとつては問題ないのだろうけど。

「（チエツ、しようがねえな……）」

ふう、なんとか止められた。ボクはいいけど、ミソラちゃんまで目立つちゃうのは避けないと。迷惑だつて、なるべくかけたくないし。いや、カミカクシによる拉致を黙認する時点で今更か。でも、不必要なコトはするべきじゃない。

——五分後——

「続いては、『滅びの種族』についての展示ですわ」

ああ、ベルセルク、シノビ、ダイナソーね。それにしても、なんだかピリピリしてきたような……オーパーツの影響かな？

「……滅びの種族つて？」

「現代では存在しない、既に滅んでしまった三つの種族のコトですわ。その種族達は強力なチカラを持ち、長く繁栄を築いていたと言われていますわ。この展示では、その種族達を紹介しているのですわ」

ムー大陸についての展示の先、通路を渡ると先ず目に飛び込んできたのは、巨大な恐

竜……多分ダイナソーのレプリカだった。何で出来ているんだろう、本物感が凄い。

「へえ……なんとというか、分かりやすく凄いいよね」

「デカイ恐竜だとか、戦士の決闘の再現だとか、素人にも分かりやすく展示されている。うわあ……この模型、凄くおっきいね……」

ミソラちゃんが言うとは何故か凄くエッチに聞こえるのは、多分ボクが汚れきっているからなんだろうね。まあ、まだアレは来てないし、特に反応することもないんだけど。でも、逆に怖くなってきたな……

「こちらは、太古の昔に栄えたという、ダイナソーと呼ばれる種族ですわ。滅びの原因は諸説あるのですが、隕石の落下が有力といわれていますわ！」

この辺は同じなんだな。そういえばダイナソーのオーパーツって、誰がどうやって製作したんだろう。ガチの恐竜に、そんなモノを造れる知恵はないはずなのだけど。

「この展示品は、マジカミツイタロサウルスとクビナガスギリユウの壮絶な闘いを再現しているのですわ」

「ブフツ！ちよつ、ちよつとそれ反則……！」

どんな名前だよ！マジカミツイタロサウルスとクビナガスギリユウって！そこは普通にテイラノサウルスとフタバスズキリユウとかでいいでしょ!?

「スバルくん、どうしたの？」

ええ!?!これ笑うトコロじゃないの!?!嘘お……

「いや、ちよつと……むせちやつてさ!」

酷い言い訳だ。なんだよむせるって。

「ふうん……大丈夫?背中擦ってあげようか?」

本当に心配そうな表情だ。こ、心が痛む……

「あ、いや……もう平気だから!」

「そう?」

「あはは……それじゃガイドさん、これは?」

全身に鎧を纏った戦士の展示を指して説明を求める。露骨な話題逸らしなんだけどね。これは……多分ベルセルクかな?全く電撃を操っている風には見えないけれど……

「中世を生きた、ベルセルクと呼ばれる闘いの種族ですわ。闘いに明け暮れた日々が、彼らを滅びの運命に導いたと言われています」

それボクらのコトじゃね?いや、そこまで殺伐とした日々は送っていない、ハズ。いやしかし、戦闘狂と言われてもあんまり否定できないような……

「この展示品は、戦士ベルセルクと戦士アクノ・キーシの決闘の様子を再現していますわ」

「ブフツッ！」

何得的確にコチラのツボを突いてくるのだろうか。ベルセ・ルークって最早ただの種族名じゃないか！

「大丈夫？」

「ホント大丈夫だから！よ、よし、次行こう！」

これじゃあミソラちゃんに変人扱いされてしまう。抑えろ、抑えるんだ、笑いの衝動を……！

「うん！」

——五分後——

「あつ、これは知ってるよ。忍者でしょ？」

忍者は結構有名ドロコで、よくアニメーション化だったり、ドラマ化したりしており、よく知っていても別に不思議ではない。正確にはシノビなんだろうけどね。

「こちらは、センゴクジダイを暗躍したシノビと呼ばれる種族ですわ。一族間の強力な結束と、恐ろしいオキテによって種族の秘密は守られ、その結果歴史の表舞台から滅び去ったと言われているのですわ。ニホンでは、このシノビをモチーフにした創作物が数多く製作されているのも特徴と言えそうですわ」

秘密が守られたのなら、普通に末裔が生き残っていてもおかしくないような……忍界大戦でもあったのだろうか。多分その辺りも秘匿されたのだろうけど。

「この展示品は、ハトリゼンゾウとカザマコジロウが闇夜に行つた果たし合いの様子を再現しているのですわ」

「へえ、凄い。クナイや忍刀なんかもあるよ」

「あ、ワタシ知ってるよ！この巻物を口にくわえて……カトンノジュツ！つてするんでしょ？」

ニンニン！といった感じで手を組むミソラちゃん。可愛いだけです。闘う役よりも拐われる役の方が似合いそうだとするのは、ちよつと気が引けるので黙っておく。

「ミソラちゃんは可愛いから、目立つちゃってあんまり忍べないかもね……」

ピンク色の忍装束とかを着て、敵にすぐ見つかつちやいそう。そしてそのままライブでも始めそう。ワタシの歌を聞けエーツ！つてね。

「……フツ、ありがとスバルくん！」

照れくさいのを誤魔化すようにウインクしてくるけれど、耳まで赤くなっているのを隠しきれではない。

「どういたしました……つと、そろそろ『滅びの種族』に関する展示は終わりだね」

時代を再現したようなセットが現代風のモノに変わり、そして益々ピリピリしてくる

ような気がする。

これは多分、普段からベルセルクを使用しているから、その影響でオリジナルの電波に対して敏感になってきているのだろうね。

「シノビ、ベルセルク、ダイナソー……この三つの滅びの種族には共通するコトがありますわ。それは、それぞれの種族が滅びる直前に、『キズナが弱くなった』コトですわ」  
ダイナソーのキズナってなんだろう。仲間意識とか？縄張り意識の方が強そうなんだけどなあ……

「キズナが弱くなったというのは？」

「種族が繁栄するに連れて……仲間同士の繋がりが薄くなっていったらしいのですわ。その結果、争いや戦争が起き、これらの種族は滅んでしまったのですわ」

全く関係ない隕石で滅んだダイナソーを、忘れてはいないですかね……？アレもキズナが弱くなったせいなのだろうか。解せぬ。

「仲間同士で争っちゃったんだね」

というか、今の人類そのままでは？規模と数は縮小されたとはいえ、未だにそういう国や団体がいるのも事実だし。……ジャックやクインティア（先生？）がいい例だ。

「滅ぶ直前にキズナが弱くなる……このコトを、専門家は『滅びの前兆』と呼ぶのですわ」  
「滅びの前兆……なんか怖いフレーズだね」

ミソラちゃんはなにか嫌な想像でもしたのか、体を掻き抱くようにする。若干震えて  
いるようにも見える。具体的な例を見て、怖くなってきたのだろうか。

「……さて、では次の展示に行きますですわ。次の展示はこの美術展の目玉、『オーパー  
ツ』ですわ」

「（オイ、スバル）」

「（わかってる。多分そのオーパーツだよ）」

「（何かしら、変なコトでもされなきゃいいが……）」

だといいんだけどね。なんだか緊張してきたな。

今のキズナリヨク的に、心配は要らないと思うんだけど……

## 23

ーTKタワー内部・美術館ー

「こちらに展示されていますのが、滅びの文明展の目玉……オーパーツですわ！」

心なしか、ガイドも胸をはっているように見える。マテリアルウェーブは意思を持っているから、自分の職場を誇りたくもなる……ということなのだろうか？

「オーパーツ？」

ミソラちゃんが不思議そうにガイドに尋ねる。まあ流石にオーパーツなんて言葉は、普段生活している中じやあまず聞かないよね。確かオーパーツってのは略称で、正式には *out of place artifacts*。そこから OOPARTS の略称になったという流れだったはず。記憶違いかもしれないけれどね。

「発掘された年代ではありえない材料や方法で造られた遺産、それが『オーパーツ』ですわ」

「それって、どういうコト？」

イマイチ実感が湧かないみたい。

「例えば大昔って、車みたいなモノは無かったでしょ？それなのに車の化石が出てきた



りしたら、変だよな？そんな感じで、歴史的に考えれば絶対ありえないんだけど……それにも関わらず、発掘されてしまった遺産がオーパーツなんだよ」

ま、スバルくんも知ってたみたいだけど。どうやらダイゴさんによく、こういう展示を見に連れ回されていたらしい。中々印象的なイメージとして残っている。

「へえ、スバルくん結構博識なんだね……！」

「こんなの情報サイトや専門書の受け売りだよ。ボクが何かしたワケじゃない」「フフツ、ワタシ、スバルくんのそういうトコロ……結構好きだよ！」

アハハ……と笑いながら、何やら慰めてくれるミソラちゃん。別に褒められたくて解説したワケじゃないから、そんなに過剰に持ち上げられちゃうと……なんだか照れる。

「ハイハイ、続き聞こ？」

「あく！スバルくんヒドーイ！……ってあれあれ？顔赤いよ？」

照れくさいんだよ言わせんな！

「……………」

「あつ、もう……拗ねないでよお……！」

ちよつと涙目になってきたな。罪悪感が凄いけど、幼気な男子を弄んだ罪は重い。ボクの自爆っぽい気もするけれど。

ーギロツ！

「そろそろよろしいのですわ?」

アツハイ。怖い、ガイドが怖いよ!

「すみません……」

「ゴホン!ここに展示されたオーパーツは……ベルセルク達が造り上げたモノだと考えられていますわ」

おっと、オーパーツが眼前にあるのを忘れていた。というか、一応チカラを貸した存在が目の前にいるというのに、オーパーツ側で特に反応が無いとはどういうことだろうか。もしかして忘れてるとか?

「これがオーパーツかあ……浮いている以外、他の展示物と大差ないように見えるね」

マテリアルウェーブ特有の輪郭を電波で覆ったような違和感が無ければ、初見の間はタダのガラクタと評すかもしれないね。後は浮いていなければ。

「このオーパーツには大きな秘密があるのですわ。材質を詳しく調べてみたところ……現代でも解明出来ない、未知の物質で構成されているらしいと判ったのですわ」

「未知の物質で構成して……ホントにそんなモノあるの?」

宇宙から降ってきたとか言わないよね?

「最新の研究で、『あるもの』に似ていることがわかったらしいのですわ。そのあるものというのが……マテリアルウェーブなのですわ!」

マテリアルウエーブに似ていると言っても、マテリアルウエーブそのものではないから、依然として未知の物質であることに変わりはないってワケか。

「へえ……じゃあ、大昔にマテリアルウエーブが存在してたってコト?」

それを考えると、マテリアルウエーブを発明した人ってやつぱり凄いいよね。何せ、古代の電波文明からやつと進歩出来たってことなんだから。

「そんなコトは歴史的に絶対ありえないですわ。でも実際、遺産として発掘されてしまったのですわ。おかげで、学者たちはいまでも頭を抱えているということですよ」

どことなく哀愁を浮かべながらそう話すガイド。もしかして、その学者さんとやらが見学にでも来て、苦労話を聞かせていった……のかもしれない。所詮はタダの妄想だね。

「こんな不思議なコトってあるんだね」

「そうだねえ……」

ビジュライザーを通して見ると、まるで電波が溢れているように見える。これだけのオーラを纏っているというのに、意思らしきモノは感じられない。……もしかして、寝てる?」

ーヴイイーン

「あら、なんの音かな？」

歌手故に、普段から様々な音を聞いているのだろう、ミソラちゃんがコテンと首を傾げて不思議そうな顔をする。萌えく……………じゃなくて！ということとはつまり……………来るか、『カミカクシ』が！

『な、なんだコリヤ！』

この声は……………費用さんだ。声に反応し展示スペースを見ると、先程ロツクが触りそうになった古代のスターキャリアーを中心として、黒い穴のようなモノが発生している。美術館を半時計回りに進行してきたので、進行ルートの最後にあつたオーパーツ展示スペースから、入り口近くのムー大陸に関する展示を目視することが出来た。

「この黒い穴はなんだ？いつの間に？」

ーズズズズズズ……………

何か引つ張られるような音を出して、無情にも展示されていた古代のスターキャリアーは、黒い穴へと飲み込まれていった。今気づいたけれど、電波兵器だからなのか、黒い穴は波立っているようにも見える。だからどうだっていう話なんだけど。

「ゲゲゲ！！て、展示品が……………吸い込まれた！！」

漸く、事態を理解するに至った費用さんが慌て始める。やっと美術館のプロデュースから展示まで漕ぎ着けたんだ、その悲しみはひとしおだろう。少し、頑張ってみようか

な？

ーヴイイーン

そして、そんな費用さんを嘲笑うように、隣に展示されていたムーの人々が送っていた生活様式を紹介するかなりリアルな顔付きのマネキンの下にも、黒い波紋が広がった。

「っ、っつちにも……！」

ーズズズズズ……

今度は割と間髪入れずマネキンに着せられた当時の服ごと飲み込まれてしまった。ここからでも、費用さんの顔がドンドン青くなっていくのがわかる。こちらでも動き出したいところだけど、今動く toward 察知されるかもしれない。少し、収まってからの方がいいだろう。

「ヒイイイー!! 展示品があっ!!」

ーヴイイーン……ズズズズズ……

今度は一度に複数体のレプリカを持っていかれてしまった。多分、ハトリゼンゾウとベルセ・ルーク、あとはマジカミツイタロサウルスだろう。こうして考えると、ハトリゼンゾウが普通過ぎて逆に浮いているように感じる。命名者どもめ! どうしてあんな名前を付けたんだ!

「や、止めてくれえー!!」

今にも泣き崩れそうな費用さんを、ボク達はただ眺めることしか出来ない。だって今飛び出したら、ついでに吸い込まれてポイツとかありそうだし。

「け、警備員は何をやっているんだ!!」

「ウウウウ……!」

マテリアルウエーブの警備員……ミスタープロテクト×3は、カミカクシの発生させた黒い穴に体を半分程吸い込まれ、身動きが取れていない。完全に吸い込まないのは、マテリアルウエーブ自体に用はないから……?

「こ、ここの展示品は貴重品なんだぞ!?費用があ……!費用があ……!ひいひいよおうおー!!」

貴方まで騒ぎ出したら、カミカクシに目をつけられるぞ!

「展示品がどんどん吸い込まれている……!」

「スバルくん、さっきのプロデューサーの人、かなり困ってる。これってヒーローの出演じゃない?」

ニヤリと笑って肘でボクをつつき、やつちやう?やつちやう?みたいな顔になるミソラちゃん。思いつきりノリノリじゃないか。

「……うん、わかってる。良くしてくれた人が不幸になるのは、ボクとしても忍びないし

ね」

「よし、決まり！モチロン、ワタシとハープも手伝うからね！」

「ありがたい、ミソラちゃん！それじゃ、まずは電波変換しなくっちゃね」

「了解です！……それじゃ、行こ！」

ビシッと敬礼をして、いち早く美術館入り口近くにあつたウエーブホールへと向かつていく。元気だねえ……つと、こつちも急がないと！

「……よし、ここのだね。いくよミソラちゃん！」

「何時でも！」

「電波変換！星河スバル（響ミソラ）、オン・エア！」

——美術館の電波——

「イエーイー！」

二人でなんとなく決めポーズをしながら電波変換を完了し、なんとなくハイタッチする。特に意味はないんだけど、ノリでやってしまった。

「ポロロン……仲良くやりましょ、ロック」

「フン、足を引つ張んじゃねーぞ」

「あら、心外ね。この『ハープ・ノート』のチカラ……忘れたわけじゃないでしょう？」

「……………チツ」

前から思ってたんだけど、ハープってロックのコトをどう思ってるんだろう。仲良くしたいのかからかかっていたいのか、イマイチハッキリしないんだよね。

「まあまあロック、落ち着いて……」

「フン、さつさと解決しちまおうぜ。あのヤベエ残留思念どもが起きないウチによ」

やっぱりロックも寝てると思ってたのか。チカラを分割した影響なのか、なんとなく反応が鈍い……ような気もする。ま、オーパーツの意識なんて誰もわからないんだろうけど。……本人達を除いては。

『……………キキキッ！』

「待って、スバルくん……何か音、いや声がするよ」

ハープ・ノートの強化された聴覚が、カミカクシの声？を聞き取ったらしい。ボクにはあんまりよく聞こえないけれど、これも音系統特化による恩恵なのだろうか。

「うん、ボクも聞こえた……ええつと、音の発生源は……」

美術館奥のウエーブロード上に、巨大な目玉のようなモノを発見した。多分あれが亜空間物質転送装置……じゃなくて物質転送装置『カミカクシ』なんだろう。デザインはシンプルにキモい。こんなの使いたがる人なんていないだろうに。

「な、なにかしら、アレ？気持ち悪い……」



遠目でしか見えないけれど、カミカクシのキモさはミソラちゃん……もといハープ・ノートにもしつかり理解出来たらしい。

「アレが、この騒動に関係しているのかも……側に近づいて、調べてみよう。ダメなら破壊で」

破壊一択なんだけどね。ホント気持ち悪すぎる。絶対製作者はマッドの付くサイエントティストだと思う……

「うん！」

「それじゃ、まずはあの目玉のある場所に繋がるウェーブロードを……アレ、ないね」

確か……シノビの掛け軸の先が通路になってるんだっけ？ 一体誰が使うんだ、そんなモノ……変なトコロで拘ってるよね。

「ええっ!?!……どうするの?」

「……職員用の通路があるかもしれない。多分一般人が間違って通らないように、隠されているはず。と、なると……」

「と、なると……?」

ゴクリ……と、ミソラちゃんが唾を飲む音が聞こえた気がする。ホントノリいな。

「多分、『滅びの種族』エリアだ」

「……あつ！ 展示されていた掛け軸！ ならスバルくん、急がないと!!」

頭の回転が早くて助かる。というか本当に小学五年生？何はともあれ、シノビの展示エリアまで急がないといけけない。出来れば盗られた展示品も回収したいトコロだけど、それは余裕があれば、かな。

ー美術館の電波・滅びの種族エリアー

「……………ここだね。よし、捲るよ……………」

「……………ドキドキ」

口で言わなくてもいいから。ええつと、クルクルクルつと。やつぱりあった。隠し通路だ。ここからコントロールルームを通って、カミカクシまで行けるハズ。

「流石はシノビだな！正に隠密の種族だぜ！」

「多分偶然だと思っけど……………」

実際わざと造ったのだろうか？……………考えても仕方のないコトなんだけどね。

「とにかく、先へ進もう！」

なんだか賑やかな感じだ。一人より二人、二人より四人つてコトなのかな？まあ、電波人間はソコを除いて二人で一人つてイメーজなんだけどね。

ーヴィヴィーン

「……………つて、これは！」

足元に黒い穴！……………カミカクシは、こちらを既に捕捉しているのか。ということは、

さっきの笑い声？は恐らく、お前ら全員引きずりこんでやるっていう嘲笑の意味だったのか。なんか腹立ってきたな。

「チイツ、なんだこのチカラは!?引きずりこまれちまう!!」

確かに……凄い、引力、だッ!

「スバルくん大丈夫ツ!」

「オイスバル!左右に動いて、この変な引力をなんとか振り払うんだ!」

ちよつ、これはかなりキツイ……というか、もう無理だ!

「ゴメン、ちよつと落ちてくる…………うあああああ!!!」

「スバルくんツ!……行かないでよツ!!」

さよーならー……一度は落ちなきやいけないと思ってたんだけどね。飲み込まれた遺産を回収出来るかもしれないし。なんとか被害を減らす方向でいきたいものだ。オーパーツを持っていく罪滅ぼしのようなものなのかもしれない。

——異次元空間——

なんというか……四方八方が紫の壁?で覆われた世界って感じだ。電波兵器らしく、波打っているようにも見える。あんまり気分のよくなる場所じゃないな。

「チツ!異次元空間に飛ばされちまったらしい……出口を探すぜ!」

「ロック、ゴメン……」

「気にすんな。あれは不意討ちだった。多分オレでも引つ掛かってたぜ」

ロックが慰めてくれるなんて、珍しいこともあったもんだ。ぶっちゃけ来るってわかってたとしても、結構危なかったかも……

「……ありがと。それにしても……」

「ああ、黒い穴に飲み込まれた展示品が、そこかしこに置いてあるな。どうやらあの黒い穴で飛ばされた先は、すべて繋がっていたらしい」

これは助かった。最悪、何度かサルベージをしなくてはいけないかと思ってたからね。

「それじゃ……よっころしよつと」

取り敢えず、ムー人の服付きマネキンとハトリゼンゾウ？の模型を脇に抱えて発光している出口を目指す。残念ながら、古代のスターキャリアーの方は小さすぎて見つけれなかった。後は重すぎて無理だ！……マジカミツイタロサウルスや全身鎧を着ているベルセ・ルークの模型とか、どうやって運べって言うんだ!?

「オイオイ……いや、スバルらしいっちゃあ、らしいけどよ。……ウィルス共には見つかるんじゃないぞ?」

「うん、わかっている。……よし、出口だ。飛び込むよ」

「おう!」

なんとか無事に出られそうではよかった。こんな状況でウイルスに袋叩きとか、割と洒落にならない。

——美術館の電波——

「……よし、脱出完了！」

取り敢えず、通路脇に回収した展示物を置いておく。また吸い込まれたら、その時は御愁傷様としか言えないのが心苦しいが。

「スバルくんツ!!」

「うわっ、ちよつとどうしたの!?!」

仕事を終えて、一息ついたと思つたらミソラちゃん……ハープ・ノートが抱きついてきたでござる。意味がわからないけれど、とにかく凄い力だ。これが女の子のパワーだつて!?!信じられない!?!というか、く、苦しい……

「ダメだよ、勝手にいなくなっちゃ……ワタシ、スツゴクスツゴク心配したんだから!!」  
「ゴ、ゴメンナサイ……」

「わかつてない! わかつてないよ、全然……」

ヒエッ! 何でこんな目に!?! そりゃ、ドジつたのは悪かつたけどさあ……

「あの……そろそろ先を急いだ方が……」

「……ウン、わかった」

そう言つて抱擁を解いてくれるハープ・ノート。

……ちよつと泣いてる？ そんなに心配だったのか。悪いコトをしてしまったな。

「心配かけちやつてゴメン。でもね、転んでもタダじゃ起きないよ。ほら、向こうで見つけて回収してきたんだ。これであのおじさんも、号泣から半泣きくらいには回復するはずさ」

そう言つて側に置いた展示品を指す。

「……フフツ、そうだね。あーもう、心配して損しちゃつたかな？」

「ええっ!? 結構大変だったのに……」

脇に抱えて忍走りつて、結構骨だつただけだなあ。デスサイズみたいなウイルスを見たときは、気が気じゃなかったよ……

「先行つちやうよー♪♪♪」

そう言つてハミングしながら、スタスタと歩き出してしまった。さつきここでボクが吸い込まれたのを見ていた……よね？

「あつ、さつきの黒い穴には気をつけてよー!」

「モチロン!……あつ、いやあああッ!」

余所見していたミソラちゃんは、案の定異次元空間へと飲み込まれてしまった。そ

ら、言わんこつちやない。

「お前も苦勞背負ってんな……」

ノ、ノーコメントで……

## 24

——美術館の電波——

「だから気をつけてって言ったのに……」

数十秒後、異次元空間から脱出出来たらしいハープ・ノートが目の前に出現した。いきなりヒュツと現れるたらびびっちやうね、これは。

「アハハ……ゴメンね、スバルくん」

手を合わせてこちらの機嫌を伺ってくる。微妙に上目遣いなのは計算か、それとも天然か……今はそんなこと、どうでもいいか。

「とにかく、焦らないで行こうよ。慎重になりすぎるつても考えものだけどね」

こつちがたどり着く前にオーパーツを飲み込まれてしまったら一貫の終わりだ。オーパーツをボクらの預かりにするには、あのカミカクシが明確にオーパーツを狙っているシーンを見せなければならぬ。どつちにしろただの盗人ではあるのだけど。災いを避けるため、という大義名分が出来るのは大きい。……改めて考えると、結構ゲスイ作戦だ。遺産を回収していて良かった。多少なりとも罪悪感が薄れるのだから……



「……それじゃ、早速GO！」

「立ち直り早いね……」

さっきのが、まさかポーズだったってことはないのだろうけど。それにしたって……いや、切り替えが早いのはいいことだ。特に今回みたいな、二人で行動する場合にいつまでも引き摺らないでくれるのは、こちらとしても助かっている。

「うん！ワタシ、元気が取り柄みたいなモノだからネ！」

こちらに振り向いて、ピース&スマイルをかましてくる。これに騙される男は多いだろう……なんかミソラちゃんが悪女みたいな物言いだ。反省しないと。ミソラちゃんは大切なブラザーだ。それを忘れちゃあいけない。

「そうだね……ミソラちゃんの元気な姿に、たくさんの方が励まされているんだから、もう少し誇っていいと思うよ？」

「そう？エヘヘ……ワタシの元気、チャージ補給中のデス！」

途端にしまりのない顔になってしまった。クネクネしてるし、ちよつと近寄りがたいかも……先、進んでもいいかな？

「……先行っちゃうよ？」

「あつ、待ってよ〜ッ！」

さつきから怒鳴ったりクネクネしたり、どうにも今日のミソラちゃんは忙しい。二人

で事件解決……みたいなのはここ最近なかったから張り切ってるのかな？って、マシンガンストリングを飛ばしてくるのは止めるオツ！

「ったく………つてうわっ！……危なかった」

ホツと一息ついたらすぐこの黒い穴だ。なんとか振りきれたけれど、油断も隙もあつたものじゃない。

——五分後——

巷で噂のハイクラスセキュリティ（無能）が備えられた職員スペースを通り過ぎ、その最奥から伸びていたウエーブロードを伝うことで、ボクらはこの騒動の原因……カミカクシの側まで接近することに成功していた。

因みに、ハーブ・ノートのコードを巻き付けてから引き摺ることで、何とかベルセルクとマジカミツイタロサウルスの展示品も回収に成功している。こんなところでオックス・ファイアのメガクラスカードが役に立つとは……今ばかりは、グルメタウンで暴れたオックス・ファイアに感謝しなくっちゃね。

「近くで見ると……なんていうか、凄く気持ち悪いよね」

電波兵器のクセしてイヤに生物的だから感想にこまる。一言で言えば……キモい！それにさつきから瞳孔が開いたり閉じたり……いや、電波の波紋を表している、のか？

さっぱりわからない。

「スバルくん、気をつけてね……」

あまりのキモさに恐れをなしたのか、ハープ・ノートはボクの後ろから首だけをひよっこりと出して、注意を促してくる。女の子にはやはり、このビジュアルはキツいということなのだろうか。

『キキキッ!』

……というか絶対笑ってるよね!?まさか誘きだしていた、なんてことは無さそうだし……コイツ、やっぱり全自動式か。

ーヴィイイーン

とか考えていたら、足元には例の黒い穴が。

「ッ!」

「スバルくん!」

いち早く下がっていたらしいハープ・ノートが、マシンガンストリングのコードを巻き付けて吸い込まれかけていたボクを引つ張り出してくれる。コードを巻き付けられるのは凄いいけれど、その怪力はどこから……?考えない方が良さそうな気がしてきた。ライブで歌うのって凄い体力を使うらしいし、多分筋トレしてたんだろう。

「やっぱりコレが原因だ!」

「スバルくんをよくも……」

怖い！怖いから！

『……キキキ！オーパーツ……キキキ！』

キイエエエアアアアシャベツタアア!!というかコイツ、やっぱり明確な意思を持つてるいるぞ?!もしかして、カミカクシもマテリアルウエーブに属している可能性が……?

ーバシユツ!

「ぎ、消えた……!」

黒い穴とか全く関係なしに、自力で瞬間移動出来るのはどういうことなのだろうか。黒い穴要らなくない?それより、オーパーツだ。これで間に合わなかつたら、笑い事じゃ済まないよ。多分、今ラ・ムーとやりあつても惨敗しそうだし……何よりカードパワーが足りない!

ーヴイイーン

「スバルくん、向こうだよ!」

「わかってる!……オーパーツがツ!」

「このままじゃ、飲み込まれちゃう!」

既にオーパーツの真下には、例の黒い穴が広がっている。こりゃあ、チマチマ降りて

いたんじや間に合わないな。

「何とか阻止しないと!」

「……オイ、もしかしてこりやあ、チャンスなんじやねえのか?」

「急にどうしたんだよ、ロック!」

チャンスつて……まさかロックまでオーパーツを回収する気になったのか!? あんだけヤバいやバいや言つてたのに?

「今まで散々あのチカラに世話なつてたから、よくわかる。……アレはマジでとんでもねえ武器だぜ」

「そんなのわかつてるけど……どうしてチャンスなの?」

「いいか、よく考えろ。あのチカラの内の、ほんの一部ですらあそこまで強化出来たんだ。なら、そのオリジナルなら……? ってことだよ。それに恐らく、ヤツは今眠りについている。本体に直接妨害されることはないだろうぜ」

「いや、それ絶対起きたらヤバいやツじやないか……」

「そんなときやあ、またオマエの口八丁でなんとかすりやあい。とにかく、今はそのチカラをオレ達が入れられるかもしれねえチャンスつてことだ! コイツを逃す手はねえぜ!」

口八丁でなんとかなる相手ではないような気がするんだけどなあ……まあ、最悪暴れ

だしても、キズナリヨク的には問題ないはずだ。ゴン太とのブラザーバンドで、既にボクの子ズナリヨクは400を示している。いくらオーパーツと言っても、このキズナリヨクではなんともならないだろう。……多分。

「……………」

「なあ、どうなんだ？ オレは、ここらで更なるパワーアップをしないとの方がいいと思うぜ？ 今までのベルセルクじゃあ、スターフォース程のパワーアップは見込めねえ。どのみち、ハイドみたいなのがいつ襲ってきても直ぐに返り討ちに出来る程度のチカラは必要なんだよ」

意外とよく考えてるな。コチラとしても、オーパーツINロックの腹の中なんてのは（ロックの負担的に）ゴメンだし、ロックが賛成なら、是非もない。

「何にしても、このままじゃあオーパーツを持っていかれちゃう。それだけは阻止しない……………」

「ああ、わかったぜ。だが、オレの考えも忘れないでくれよ？」

「……………もちろん！ ミソラちゃん！」

「な、何?！」

「このまま道なりに行ったんじゃあ、間に合わない。だから……………ウエーブロードから飛び降りていくよー！」

「……うん、わかった!」

いくらウエーブロードが空中に浮いてると言っても、別に大した高さじゃない。飛び降りたらちよつとジーンとくるかもしれないってくらいだ。

「それじゃ……行くよッ!」

「ハッ!」

なんとかオーパーツのある展示エリアへと着地することが出来た。ウエーブロードが美術館の上空中心辺りに集まっていたお陰で、どのエリアにも繋がっていたのが功を奏したようだ。

「……よし!」

「……つとと……!」

ハープ・ノートが若干フラついているけれど、そこまで問題ではないハズだ。

「急げ! オーパーツが飲み込まれちゃうぞ!」

「わかつてる!」

「ーズズズズ……」

「ヤバい!……うおおおっ!」

飲み込み始めるのが早い!と、とにかくダッシュで近づかないと……

「よし、オレに任せろ!」

やっぱりイ!?

「ええ!？」

「……ガブツツ!!」

威力60の確率で怯みそうな噛みつきっぷりを見せたロック。コレ、あとでオーパーツに菌形とかつかないよね？

「噛みつくのツ!？」

「スバル!オマエも全力で引つ張れ!!」

「うん!うおおおおつ!」

つて、ヤバイ!このままじゃあ、オーパーツはロックの腹の中に……どうせロックもオーパーツを手放す気はないんだし、別に誤飲する必要は……ない!

ーーズズズズ……

「ウグググ……ダメだ、引き離せない!……ミソラちゃん!」

「わかってる!あつちの気味悪い目玉を殺れば……」

ミソラちゃんの殺意がヤバイ!つて、そうじゃない!ここはミソラちゃんにしか出来ないことを……

「違う!ボクがやるから、少しでもコードで引つ張つて欲しいんだ!アレを倒せば、黒い穴も消えるだろうし!」



「わかった!……ハアアツツ!」

「ギーギユギユギーユ……!」

ミソラちゃんのギター（ハーブ?）から伸びたコード（弦かもしれないけど）が幾重にもオーパーツの刀身へと結び付いていく。オーパーツ自体に切れ味はないようなので、コードが切れることはない。

「……ありがとう!それじゃ、食らえ!」

一旦オーパーツからロックを引き抜き（?）、ロックバスターを構える。チャージ状態を解放し、単発のロックバスターを発射する。FULL CHARGE……いけ!ボクの必殺技……パトロー!

「……キ、キキイイイ!!!」

「やったぜ。」

「きやあつ!」

「うわあつ!」

破壊に成功したせいか、辺りが閃光に包まれる。しかし、なんとか飲み込ませずに上手くいったようだ。実際、結構辛そうだったから負担を軽減出来るのは嬉しい。

「……イタタタ。黒い穴が消えた……。これで一件落着つてことでもいいのかな?」

「いいや、まだまだぜ。そのオーパーツをどうするか決めてねえ」

あ、そうだった。コードで縛っていたハーブ・ノートが、後ろに吹っ飛んだせいで既に拘束は解けている。なんとか上手いこと持っていけるといいんだけど……

「スバルくん、どうかしたの？」

「ああ、それなんだけどさ……」

——少年説明中——

「確かに、さっきの不気味なヤツはそのオーパーツを狙っていたよね。それはオーパーツを名指ししていたことからわかるし……でも、勝手に持っていくのは……」

ロツクの計画を聞いて、ハーブ・ノート……ミソラちゃんも悩んでいるようだ。美術館側の防衛戦力に期待出来ないからとはいえ、勝手に持ち出すのはやはり気が引けるのだろう。

「だよねえ……」

「オイオイ、わかってねえな!? スゲエチカラが手に入るんだぜ?……コイツを放っておく理由はねえだろ! それにこのままオーパーツを放置していたら、絶対また同じことが起きるぜ。今度はオレ達が対応出来るかはわからねえ。アンゼンカンリってヤツだと思うぜ?」

屁理屈に近いけど、向こうに利用されても困るって意味ではロツクも危機感を持っているんだろう。なにせ凄い電波兵器だからね。

「ううくん……」

何とか、費用さんの許可でも貰えればいいのだけれど……

『おや!!』

あつ、この声は……費用さんだ。向こうから近寄ってくる。まるで今話題のヒーローに会ったかのような顔をしている。……それってこの状況そのままか。

「アナタはもしか、ニユースで噂の青いヒーロー?」

「え? ああ、それは……」

開口一番だったので、少しつつかえながら話そうとするボクをミソラちゃん……もといハープ・ノートが遮る。

「そう! この人が青いヒーロー! さっきの騒動を納めてくれたのも、この人よ!」

「(ちよつと、ミソラちゃん!)」

「(いいじゃない、ホントのコトなんだし)」

いや、まあそうなんだけどさあ……

「ありがとうございます! アナタはホンモノのヒーローだ!」

費用さんの純粹な目が痛い。これからオーパーツを持ち出す為の交渉をしないといけないなんて……

「そんなこと、ないですよ」

「いいや、現に私は助かったんだ！感謝を述べさせてくれ！ありがとう！」

そう言って割と直角に近い角度で頭を下げてくる費用さん。む、むしろ交渉がしづらくなつたような……

「ええつと、守っておいてなんですけどね。その、オーパーツのコトなんですけど……」

——少年説明中——

「な、何だつて!? さっきの黒い穴は、オーパーツを狙つてきた!? しかもこのままオーパーツを狙つてまた同じようなコトが起こるかもしれないだつて!?」

「ええ、そうなんです。ボクらで預かつてもいいんですけど、このオーパーツは美術館が管理しているモノですし……」

「ここでわざわざ欲しいんです！とは言えないのが辛い。まだるっこしい会話は疲れるんだよなあ……」

「ムムム……だが、既に相当数の被害が出ている以上、オーパーツまで失つては、費用が、費用があ……」

「あ、展示品なら回収しておきましたよ。確か、滅びの種族エリアにまとめて置いておいたはずですよ」

「な、何だつて!? そ、それなら何とか建て直せるかもしれないぞ！」

もう一押しか。

「これ以上被害が出たら、困りますよね？」

「……背に腹は代えられないか。かけた費用はもつたいたないが、コチラで守りきれとも思わない。防衛戦力に費用を取られても意味がないし……グヌヌ……仕方ない。も、持つていつてくれ！」

よし、ミッシヨンコンプリート！最悪、ロックに首トンでもしてもらおうかと思つていたから、大分平和的に済んでくれてよかつた。

「ええ、コチラでも原因を追つてみますので……」

『滅びの文明展』をやっている間に頼むよ！」

「ぜ、善処します……」

もう戻つてこないとは言いつらいよなあ……いや、この人の安全の為でもあるし。展示品全滅よりはマシだと思つてもらうしか……

「それじゃ、ボクらはこれで……」

アンドロメダのカギ方式で体内に保持しておけるらしく、ロックには取り出し可能な状態で取り込んでもらった。新しいチカラが手に入つて、ロックもご満悦だ。

「あつ、待つてよー！」

おつと、忘れてた。なんだか後味悪いし、後でこの美術館に寄付でもしておこうかなあ……ゼニーだけは有り余つているし。普通に寄付したら足が着きそうだから、ロッ

クマンの状態で費用さんのスターキャリアーに直接置きに来ることになりそうだけど。ロックマン名義で予告でもしておけば、悪用もされないだろう。

「はあ、費用が……いや、まだチャンスはある。何とか立て直してみせるぞ！ まずは、どうにか費用を捻出しないとな」

費用さんの戦いはまだ、始まったばかりだ！

——二人が去った後——

——ヴィイーン……ズズズ……

人知れず、カミカクシによって転移してきた少年……ソロはやる気に満ち溢れた美術館のプロデューサーを眺めていた。計画が失敗したからか、その表情は厳しい。

「……………」

——TKタワー前——

何とか当初の目的（もちろん誰にも明かしてはいないのだけど）を果たし、オーパーツを回収することに成功したボク達は、電波変換を解いてTKタワーの前に戻ってきた。いた。

「いやあ、大変な目に遭ったね。せっかく遊びに来たってのにさ……」

「ううん、ワタシもスバルさんと一緒にいられて楽しかったよ。それに刺激的な体験は、いい歌を作る上でとつても大切だからね！」

屈託のない、輝くような笑顔だ。楽しんでくれたなら、いいんだけれど……でも、なんとというか面と向かって言われるとどうにも調子が狂ってしまう。

「そこまで言われると、なんだか照れちゃうな」

「フフツ、それなら……成功ってコトかな？」

何か賭けでもしてたのだろうか？ ミソラちゃんには珍しく、よくわからない言い回しをする。

「成功？ 成功ってなんのこと」

「ヒ・ミ・ツ！ ……フフフツ！」

妙に色っぽい仕草だ。こういうのは大抵、ハープの差し金なんだよね。やれやれだぜ

……

「そう……まあ、別にいいんだけどね」

「むう………つと、しまった。気づいたらもうこんな時間……」

スターキャリアーに表示されているデジタル時計は丁度午後5時を示している。今が夏休みだからといって、あんまり悠長に遊んでいられる時間でもなさそうだ。あかねさんにも心配させたくはないしね。

「そろそろ帰らなくっちゃね。あーあ、もつと遊んでいたいのに……」

「そう、楽しい時間って、ホント直ぐ終わっちゃう……でも、今日はアリガト!」

あの、それは自分がバトルジャンキーだと言っているのと同義に感じるんですけど……その内ノイズも克服しそうで怖い。やっぱり一番恐ろしいのは人の執念だと思うね、ボクは。別にミソラちゃんとは何も関係ないのだけれど。多分。

「どういたしまして。ボクも楽しかったよ」

「ワタシも。……あ、そうそう! スバルくん、丁度最近スターキャリアーに機種変したばかりでしょ? ブラザーバンドがリセットされてるよね?」

ああ、そうだった。確かミソラちゃんと会った三日後位に丁度機種変したんだった。

それから二週間近く会ってなかったから、仕方ないね。

「うん……そうだ。ここでブラザーバンドを結び直さない?」

「モチロン! でも、スバルくんから言い出すとは思ってなかったからチョット意外かな?」

「そりゃ酷いよ!」

こういうのは男子から言いなさいって、あかねさんも言ってたんだ。間違っではないない、ハズ。

「フフツ、冗談だよ。さっ、結んじやお。ワタシもスバルくんのキズナリヨク、気に



なつてたし……」

「それじゃあ、ブラザーバンドを結ぶよ……」

情報を共有出来るシステムだからか、ブラザーバンドの設定って結構手間がかかってしまう。アレだ、倫理コード解除みたいな感じ。……自分で言っておいてなんだけど、ホント酷い例えだと思う。

「……よし、完了!」

「ええつと、キズナリヨクは……300! 凄い、300だよ! これはもう、スバルくんとワタシは一心同体と言つても過言じゃないね!」

ミソラちゃんの機嫌は最高潮に達している。余程嬉しかったんだろう。ガチのガッツポーズまでしている。そ、そんなに……?」

「あ、委員長と同じ数値だ」

「」

ミソラちゃんが死んだ! この人でなし!

というか、どうして落ち込むんだろう。300って凄い数値なんじゃないの?

「オマエって時々、ヒデエことするよな……」

「ポロロン……これは擁護出来ないわね……」

何でそこで集中砲火なんだよ!

ーTKタワー前ー

「も、もう大丈夫だよ、スバルくん……」

十分程取り乱していたミソラちゃんも、どうにか元の調子を取り戻すことに成功していた。

なんと言いますか……ホントすいません。

「ゴメン、ちよつとデリカシーなかったね」

あの後、ハープさんにちよつとこっち来いや……!という意図を込めたと思われるジェスチャーをされたので、暫くハープさんの『解析!ウルトラプリーティール・響ミソラ!』を受講するハメになってしまった。それにしても、ネーミングセンスから古めかしい香りを感じる……なんとなくだけど。これ言ったらハープさんガチギレしそうだけど。

「いいの。ワタシがスバルくんを大切に思ってるってコトは、何一つ変わらないから……」

憂いを帯びたように見えるのは、未だに立ち直っていないからだろうか……

「……そう言ってくれるととっても嬉しいよ」

「あ、そうだ。コレもあげるね！」

そう言つて渡してきたのは……フォルダ？なんかこのパターン、委員長の時もあつたような……いや、委員長の場合はブラザーバンドを結ぶ前か。

どちらにしても、ここでそれを言つたら今度はハープさんにどんな目に遭わされるかわからない。行動力のある女の子が一番ヤバいつて、ボク、今日1日でしつかり骨身に染みたまよ……

「わあっ！ありがとうミソラちゃん！」

ちよつとわざとらしくたただろうか？

「ワタシのバトルカードが入ったフォルダだよ！中のカードは自由に使つてね！」

コレ、多分マニアにとつては垂涎の品なんだろうな。……あとでトレーダー用のカードと見分けられるように、スターキャリアーのマーキングプログラムでもかけておくべきかもしれない。

「それとね……ワタシ、久しぶりにルナちゃん達に会いたいな。……どう？」

委員長に会うことがメインに聞こえるのは、恐らく気のせいではないのだと思う。たまに二人で遊びに行つていたみたいだからね。

「モチロン！委員長も喜ぶだろうし……委員長とも、ブラザーバンドを結び直せるから

ね」

ミソラちゃんもフォーマットしたまま、委員長とはブラザーバンドは結び直していいと思われる。最近は特に忙しいみたいだったし……

「じゃ、明日とか皆で集まれるかな？」

「いいよ。それじゃあ、皆に連絡しておくね」

夏休み中なので、特に問題はないと思う。ただ、そうなると明日はブライとやり合わなくちゃいけないのか……ダルいなあ。

「やった！ありがとスバルくん……ワタシ、楽しみにしてるからね！」

「あはは……ゴン太とキザマロも忘れないでね。二人揃って、ミソラちゃんの熱狂的なファンなんだからさ」

「フフフ、わかってるって。それじゃあね、スバルくん！」

「うん、気をつけて帰ってね！」

ミソラちゃんとは、ここで手を振って別れることになった。どうにもバスの時間が違うらしく、あとほんの少しだけロッポードーヒルズにいるらしい。

「それじゃあ、帰ろっか」

「（おう！いやあ、全く今日は大漁だったな……！いつもこんな感じなら、文句もねえんだけだよ）」

ロツクの言う大漁とは、恐らくオーバーパーツとロツク用の装備データのことだと思われる。バーストグロブと言って攻撃力に重きを置いた装備だったので、ロツクはいたく気に入っていた。……それにしても、何か忘れているような？

「あはは……そう毎回上手くはいかないって」

あ、TKタワーに繋がる通路を、見知った格好の大人……五陽田さんが歩いてくる。またUMA騒動の調査に来たんだっけ？

「五陽田さん、こんにちは！」

「たった今、通報があつて駆けつけたんだ！美術館で妙な騒動が起きていると聞いたぞ！」

割と慌てている。確かに通報があつて駆けつけたのなら、この慌てようも納得だ。周りの人が特に騒いでいないことから、既に解決したのだと知れ渡っているのかと思つていたんだけど……

「ああ……それならもう収まりましたよ」

「な、なに!?ま、まさかまたロツクマンか!？」

「さあ……どうでしょうね？ボクは偶々事件に遭遇しただけなので、何とも言えないですよ」

「………まあ、取り敢えず騒動が収まって何よりだ。本官の元に入った情報だと、事件

は妙な黒い穴のようなモノが現れて、展示品がみるみる消えていったと言うじやないか。まるで『神隠し』のように……」

やっぱり、この人って結構鋭いよね。この220X年に、カミカクシっていうワードが出てくること自体が凄い発想だと思う。

「神隠し？」

知らないフリをする。五陽田さんのやりとりで、誤魔化す方法なら既に手慣れたモノだ。言つて悲しくなってくるけれど。

「怪奇現象の一つだ。何の前触れもなく、人が消えてしまうことを昔からそう言うんだよ。オバケ、雪男、そして神隠し……妙な事件ばかりが続いているな。本官の勘だが……これらの事件には、何か関連性があるような気がするのだ」

この人にビジライザーの類いさえあれば、結構早期に事件の真相に気付きそうなのが逆に恐ろしい。ただ、キズナリヨクが54という数値で、職場でもあまりよく思われていないんだらうな……という想像を掻き立ててしようがないのが、なんとも言えない。

「兎に角、本官はこれから美術館を調査しに行く。急ぐので、これで失礼するよ」

「はあ……頑張ってくださいね」

「ああ、ありがとう。では……」

急ぎ足で、行ってしまった。現場は刻一刻と変わっていく……という持論でもあるのかもしれない。まあ、普段の五陽田さんの調査なんて、別に興味もないのだけど。

ーピーロン！

「あ、メールが来た」

「（読んでみるよ）」

確か……ヒエヒエボディが欲しいのおお！とかいうデンパくんのSOSだったはず。なんでヘルプシグナルを廃止したのだろうか。まあ、元々活用する機会は少なかったのだけど……

「タイトルは……SOSデス!!だ。結構切羽詰まっていそうだけど……ええつと、内容は……アツい！アツい！ダレかタスけてデス〜!!キュウにカラダがモえるようにアツくなったデス!!ダレもタスけにきてくれないデス〜!!アツい！アツい！……ここSOSメールをウけとったカタ……タスけにきて〜！おネガいく〜!!ワタシのバシヨは……そ、そうですね……ロツポードーヒルズにあるスターキャリアーのカンバンまでくれ、ワタシのスガタがミえます！アツい！アツい！……だつてさ」

電波体が人間にメールを超越してくるとは……どうやったんだらう。そこら辺にいるデンパくんに頼んだ方が確実なんじゃないだらうかと、思わずにはいられない。

「何か、スゲー困ってるみたいだな。……大した手間でもなさそうだし、助けてやればい

いんじやねえか？」

「あれ、結構意外。ロツクのコトだから、放つとけよめんどくせえ！くらいは言うと思つてたのに」

「オマエはオレを何だと思つてるんだ!？」

そりやあ、青い悪魔？ 戦闘狂？ 今日はかなり良いことがあつたから、多少寛容になつているのかもしれないな。

「あはは……冗談だよ。でも、ロツクには賛成かな。ロツポードーヒルズならすぐそこだし、助けに行つてあげようか」

「チエツ、たまに親切心を出せばすぐコレだ……」

そりやあ、本人の印象つて、普段の言動で決まっちゃうものだし……普段から戦闘狂感バリバリ出してるからね。仕方ないよ。……これはボクもあんまり否定出来ないのだけど。

「兎に角、先ずはロツポードーヒルズにある、スターキャリアーの看板前まで行つてみよう」

「了解だ。………はあ」

そんなに落ち込むところなのかなあ。



ーロツポードーヒルズ・看板前ー

一応、スターキャリアアの看板前で探してみる。地面の上まで降りてきてくれれば、コチラとしても助かるんだけど……そう上手くはいかないか。

「それらしい人も見えないし、やっぱり電波世界の方だったのかな？」

「だろうな。オイ、ビジライザーをかけてみる」

「うん……あ、いた。ウエーブロードの上だね。何だか苦しそうだ。早く助けに行つてあげなきゃね」

熱くてヒーヒー言つてそんな顔のデンパくんが一人。多分あれが件のデンパくんなんだろう。取り敢えず、ウエーブインしないと……

ーロツポードーヒルズの電波ー

電波化したボク達はウエーブロードを伝つて、なんとかスターキャリアアの看板上にいたデンパくんへとたどり着いていた。なんでわざわざ、こんなに入り組んだ場所にいたんだ……？

「アツい！アツい！ヤケドしちゃうデス〜!!」

その割には、体色はいつも通りに見える。大袈裟なんじゃないかなあ……

「……大丈夫？」

「キュウにカラダがアツくなってきたのデス!!アツい!アツい!」

「そういえば電波体って発熱するんだ……電熱かな?いや、多分違うような気がする。

「急にだつて?何か原因とかは、思い当たらないの?」

「ゲンインってイわれても……ただ、ワタシはここからカンサツしてただけデス〜!」

「やっぱり……コイツストーカーなんじゃないだろうか。」

「何を?」

「オトコのコとオンナのコが、タノシそうにしてるのを……あれは、正にデートだったデス」

「……………」

「あまりにアツアツで、ミてるコッチがアツくなっちゃったデス!!アツい!アツい!」

「感受性が強いんだねえ……」

「オトコのコとオンナのコ?コイツが見たデートって、さっきまでのオマエらのコトじゃねえか?」

「まあ、否定は出来ないね」

「ただ、ラブソングが云々言っていたので、そういう気持ちでデートする感覚が知れたかったんじゃないだろうかと睨んでいる。フフ、ボクって意外に探偵とか向いているかもしれないぞ。」

「ケツ、つまんねえの。ま、兎に角だ。コイツがこうなった原因はオマエにあるってことになるぜ」

「……わかつてるよ」

「おネガイ……『ヒエヒエボデイ』をもってきてデス!!」

ヒエヒエボデイ……業務用アブリテイも、使いようによつては中々活用出来そうな気がする。惜しむらくは、入手出来る機会がないということか。

「ヒエヒエボデイ?」

『ヒエヒエボデイ』はギョウムヨウのアブリテイデス! ホンライはクーラーやレイトウコでハタラクデンパヨウなんですが、イマのワタシのホテったカラダをヒヤせるのはアレしかありませんデス!!」

体を冷やすためのアブリテイなのに、何故冷氣系のデンパくんが持っているんだろう。体温の保持が目的なら、熱い場所……サウナのデンパくん辺りが持つてそうなんだけどな。寒い場所で更に冷やしたら、デンパくんと言えども永眠してしまうよ。まさかデンパくんの容態が、現実に影響を及ぼし得ると思えないし……精々、管理中の電波が乱れるくらいだと思う。

「それで……その『ヒエヒエボデイ』つてのは何処にあるの?」

『ヒエヒエボデイ』をウツてるデンパがTKタワーのソバにある、フルいソウガンキョ

ウのデンパにいたはずデス……」

「うん、わかった。ボクが取ってくるよ」

まあ、このまま放置しておく理由もないし。汚名暴者なんて何時までも被つてられないからね。ボランティア暴者でこと。

「そりゃあ、オマエらのデートが原因だからな。放つとくワケにはいかねえだろ？」

ケケケツとタチの悪い笑みを浮かべてくるロツク左腕。一応今は同化しているんだから、あんまり目立つ笑い方は控えて欲しいんだけどなあ……

「いやあ、照れちゃうね。……ま、取り敢えずはその古い双眼鏡の電波に行ってみようよ」

ミソラちゃんは今日も可愛かったし、これくらいなら別に気にする程でもない。それにいつだったか、こういう尻拭いは男がするものだって、天地さんが言っていたような気もするし。その後に、肩を掴みながら滅茶苦茶真剣に『頑張れよ……！』って言われたんだけど、そこだけが未だによくわからない。……なんだったんだ？

「コイツ、段々開き直ってきてやがる……！」

だって、曲作りの息抜きなんですよ？それもラブソングの為って言われたら、こつちだって割り切れるってものだ。実際アツアツ？に見えただろうし。ボクも楽しかったので、ウインウインというヤツではないだろうか。

——TKタワー周辺の電波——

TKタワーは、正方形に近い浮遊パネルの上に建造されているため、外周部は観光用に双眼鏡等が設置されている。さっきのアツアツデンパくんが言っていたのは、その中の一つで特に古い双眼鏡なんだろう。

「……あつた。多分、これがその古い双眼鏡だね」

「ん？この双眼鏡……レンズが汚れてやがるな」

「拭いてみよう」

フキフキフキ……つと、そこまで汚れているワケでもなかったもので、比較的簡単に綺麗にすることが出来た。確かこれでウエーブイン出来るようになった……ハズ。

「……お？望遠電波が出たみたいだぜ！……これでウエーブイン出来そうだ！」

「よし、望遠電波に入ってみよう！」

「おう！」

「いくよ……イヤッホオオオツ!!」

相変わらず、この電脳世界へのスカイジャンプは最高だ！あ、因みに電子機器の内部にウエーブインするワケではないので、普通に望遠電波の電波世界って呼称でいいらしい。

——古い双眼鏡の電波——

——チューイン！

「……つと、よし。ここが双眼鏡の電波世界か……ええつと、『ヒエヒエボディ』を持っている電波商人は……」

「おつ、アイツじゃねえか？」

確かに。電波商人特有の紫色のボディに、大きめの顔パーツ。頭部から放出している電波は、供給源にでも繋がっているのだろうか。ともかく、この電波商人が探していたデンプで間違いなさそうだ。

「そうだね。……ちよつといいかな？」

「おや、なんでしよう？」

商人らしく、人の良い笑みを浮かべている。しかし、この笑顔に騙されてはいけない。なんとか値切つて、経費の削減を……つて、費用さんに影響受けすぎかな？

「実は、『ヒエヒエボディ』つていうアビリティを探しているんだけど、キミが持っているつていう情報があつて……」

『『ヒエヒエボディ』ですか？タシかにそれならもっていますか……』

「それをちよつと譲つてほしいんだ。ダメかな？」

「……コレはダイジなモノなんです。ウリモノではありませんので、カンタンにはユズ

れません」

やはり業務用、そう簡単にはいかないか。

「体が熱くて困ってるデンパがいるんだ。……それがあれば、助かるんだけど」

「それ……ホントですか？ワタシから『ヒエヒエボディ』をウバうために、ウソついてたりしてませんか？」

なんと、デンパに疑われるとは。これも電波商人としてプログラムされたことによる性というヤツなのかもかもしれない。商人なら、目利きは必須スキルだしね。

「疑われてるなあ……」

「……ン？……オヤオヤ？アナタ、かなりキズナリヨクがタカいですねえ」

「そりゃあ、700だからね。多分、一般人ならかなり高い方なんじゃないかな？」

ぶつちやけ400でも十分高いんだけどね。恐るべしは委員長とミソラちゃんということか……女の子って凄い。

「……わかりました！いいでしょう！ユズってあげます！」

お、やった。やはりキズナリヨク格差社会か……キズナリヨク700って、多分かなり優遇される数値だよな。ちよつと楽しみだ。まあ、あと2ヶ月程の栄華なんだけども。

「ホント？……ありがとう！」

「イエイエ……キズナリヨクがタカいというコトは、シンライできるナニよりのシヨウコです。では、どうぞ」

電波商人が手を翳すと、一枚のカードデータが掌で構成された。業務用だとこんな感じのアビリティなのか。どうもボクとは規格が違うっぽいな。

「因みに、コレはギョウムヨウのトクシユなアビリティですからアナタにはツカえませんよ。アト、ヘタにイジるとシモヤケになっちゃうんで、キをつけてクダさいね」

シモヤケ?……霜焼けか。電波体に霜焼けとは……これ如何に。原理がわからないけれど、考えたら負けっぽい気もするし……不思議電波つてことでもいいか。

「わざわざありがとね!」

「おキをツけて……」

よし、早いとこ届けてあげないと。もういい時間だから、暗くなってしまう。

ーローツポンドーヒルズの電波ー

「アツい!アツい!」

うわっ、湯気っぽいエフェクトが出てる。これは結構ヤバかったのかもしれない。これでオーバーヒートなんてことになったら、洒落にもならないぞ。

「おまたせ!『ヒエヒエボディ』、持ってきたよ!」



押し付けるようにデンパくんに『ヒエヒエボディ』のアビリティカードを渡す。手に取ったアビリティを、体に溶け込ませるように装備したデンパくんは沈黙してしまった。オーバーヒートからの急冷凍とか、嫌な予感しかないんですけど……

「……………」

「だ、大丈夫……?」

「カラダがス〜ツつとヒエヒエするデス!ハイ!もうダイジョウブデス!!」

ふう、なんとかなかったみたい。知ってても、少しビビってしまったよ……

「よかった……」

「アリガトウデス!……アレ?」

回復したデンパくんが、ボク……ロックマンを視界に認め、目を見張ったような素振りを見せる。あ、これはアレだ。偶々助けてくれた親切な人が有名人だったパターン。

「?……どうしたの?」

「アナタ……もしかしてロックマン?ねえロックマンでしょ!ワタシ、アナタのファンなのデス!!」

やっぱりか!というか、電波体からのラブコールなんて要らないよ!せめて電波人間になつてから出直してきてくれないかなあ……

「フ、ファンねえ……」

「ニンゲンたちだけじゃなく、デンパセカイでもアナタはユウメイなのデス！イゼンのアバれっぷりがウソみたいに、まるでヒーローみたいだって！アえただけでワタシ、カングキデス！またカラダがアツくなっちゃいそうデス！サインクダさいデス！」

「んんん？何か聞き逃せないワードがあったような……」

「以前の暴れっぷり……？やっぱり危険人物扱いじゃないか！ぶっちゃけボクって、サテライトが廃止されてからかなりの間、この辺りの治安を守っているんですけど!? FM 星人の残留電波とか、その辺のデンパじゃ太刀打ち出来ないんだからね!」

「……サ、サインは書けないよ。練習してないもの……」

「オイ、そろそろ行こうぜ。帰るんじゃねえのか？」

「うん、わかっている。わかっているけど……」

「何か、忘れているような……ええっと、なんだっけ？」

「……あつ！天地さんに預けたベルセルク！どうしよう、今から行って間に合うだろうか。」

「ねえロツク。天地さんに預けたベルセルク……回収してから帰る？」

「……オリジナルがある以上、そこまで必要性があるとも思わねえが……そうだな、一応回収していくか」

「ロツクも回収には賛成らしい。後は天地さんが定時に帰っていないことを願うしか」

ないか。デジタル時計は既に、18時を回ってる。あの人、マジでスーパーハカーだからなあ……

——数分後・シヨツピングプラザ前——

「(ゲエツ!?!閉まつてんじやねえか!)」

「何々……オバケ騒動の件を踏まえ当分の間、シヨツピングプラザは18時をもって営業を終了させていただきます……だつてさ。酷いね」

ホント酷い。ヤベツ、どうしよう。明日は素ロックマンでブライとやることになりそうだ。

いや、今向こうにベルセルク強化体を知られるのはマズい、と考えればいいか。それにしても、さつきからまるで反応していないオーパーツさんが気になるんですけど……突然暴れたり、しないよね?

「ケツ、オマエがいつまでもアツアツなデートつてヤツをしてるからだぜ!」

「アツアツなデート(笑)」

鼻で笑つてやる。この程度で動揺させようなんて……もう聞き飽きたよ。残念だったね、

「チツ……帰るぞ!」

「あはは……わかってるって。それじゃ、帰ろっか」

ふぁーあ……今日はもう疲れたよ。何だか眠くなってきたし。

バスの中で少し、仮眠でもとっておくか……後でロツクに起こしてもらえばいいだろうし。あ、その前に委員長達に連絡しておかないと。メールでいいかな……

『……カラ……ダ……コノ、カラダ……ナラバ……!!』

## 26

——その日の夜——

自らの所属する組織のアジトへと帰還していたハイドは、一先ずオリヒメに今回の調査で得られた情報の報告を行っていた。

「……オリヒメ様」

めぼしい情報を一通り報告した後、ハイドはオリヒメに、以前から気にかかっていたコトを質問しようとしていた。この組織はデータによるやり取りが少なく、重要案件は口頭で伝えられるコトが多いため、こうして一々謁見しなくてはならないのが面倒だ……とハイドは常々思っていた。

「どうした？ハイドよ」

「少し、気がかりなコトが……」

「オーパーツのコトか？それなら案ずるでないぞ。必ずや、ソロが奪取してくるであろうよ。ヤツのチカラは本物故、な」

オリヒメの口調には淀みがない。ソロがオーパーツを入手してくることは、既に彼女の中では規定路線なのだろう。実際、この組織の中でもソロの実力は有数であるから

だ。そもそも、数えられる程度の構成員しかいない、という問題は除くが。

「ソロのチカラなら、私も存じています。私が気になってるのは、それとは別のコトなのです。……ソロは我々の仲間になったワケではありません。その上、あれだけのチカラを所持しております。なぜ、オリヒメ様の指令を素直に聞き入れるのでしょうか？」

「そうか、そなたはまだ知らぬのだったな。ソロの目的を……」

この組織に構成員のプロフィールを記したデータは存在していない為、任務に関係のないコトは本人の口か、ボスのオリヒメから聞き出すしかそれらしい方法がないのである。

「目的？」

「偶然にも、妾とヤツは同一の目的を持っていたのだよ」

ここまで話されては、流石のハイドと言えどもピンときてしまう。ハイドとて、自分の組織が遂行しようとする計画くらいは理解しているのだ。その計画の一つが目的で誘いに乗ったということもあるが。

「では、ヤツも例のモノを復活させよう……」

「ヤツは、どうしてもそれを叶えたいと願っておる。例のモノに対するヤツの執着は相当なものだ。そうでなければ、あれだけ人を寄せ付けようとしないう男が誰かと手を組もうなどとは、到底考えられないであろうな」

どうにも件のソロは、オリヒメの中で一定の信用があるらしく、裏切り等の心配は微塵も感じていないようだ。

「……………正直に申し上げまして、私はヤツをどうしても信用出来ませぬ」

「そう言うな。目的が叶うまでは、ヤツも大人しく妾の言うことを聞くであろうよ。……………さあ、ソロよ、早く妾の下にオーパーツを持つてくるがよいぞ……………」

オリヒメの発する、えも知れない上品さをも感じさせる不敵な笑い声が、アジトに響いていった……………

——翌日・星河家——

『今日のトップニュースです。青いヒーローが、又も人々を救いました。今度はコダマタウンのカードショップと、ロツポンドーヒルズの美術館です。救われた方による、インタビュが入っています』

画面が切り替わり、南国さんの顔がアップで映る。どうやらBIGWAVEで収録したらしい。そういうえば、収録機材つてマテリアルウェブだったりするのだろうか。自分で調整してくれたりとか……………結構便利そうだ。

『あの青いヒーローは最高にカッコいいねっ！』

「カッコいいだよ」

「よせやい、照れるじゃないか」

「ククク……お前も段々、ヒーローが板に着いてきたじゃねえか。オレは嬉しいぜ？」  
「なんだよ、嬉しいって？」

「へへッ、お前がもつとヒーロー然としてくれりやあ、こつちとしても暴れやすいしな」  
ロツクはボクの腕でバスター吐いてるだけじゃないか！いや、ロツクオンのサポートもしてくれてるし、確かに助かってるけどさあ……

「ハイハイ、これからもよろしくね」

「おう、任せな！……とところでよ、今日は約束があつたハズだよな」

「うん……そうだね」

「なんだよ、元氣ないじゃねえか」

わかつてても……見ず知らずの土地に放り出されるのをスルーするのは、良心が痛む。

ただ、今回のコトはキザマロにとつては成長の糧となるハズだし、ミソラちゃんにはどうしてもオリヒメ達をバミューダラピリンスの最奥まで案内してもらわないといけない。

ムー大陸を復活させないまま、中途半端にオリヒメ陣営だけを片付けた結果、『ディーラー』に目をつけられた挙げ句にメテオG掌握と同時展開でもされたら完全に詰んでしまう。『ディーラー』はムーの技術も取り入れていたハズだから、万が一を考えられずに



はいられない。どちらにしても……はあ。

「……ううん、ちよつと昨日の疲れが残つてただけ。公園に集合する手筈になっているから、気の早い委員長長辺りは、既に来ているかもしれないね」

「なら急ごうぜ。あのツインドリルの怒髪天は、オレとしても見たくないからよ」

クククツ……つとロツクは悪戯小僧のような笑みを浮かべている。……暫くは、委員長の顔しか見られなくなることを思うと、何だか複雑な気分だ。ただ、自然的にバミューダラビリンスマで行く方便があるわけでもないのです、やはりスルーするしかないんだよな。

あくまで向こうに、こちらを正面から倒せる相手だと思つてもらわないとどんな手に出られるかわからないのも悩みドロコだ。手加減してなんとか出来る相手ばかりとも思えないのだけど……

「違うないね」

「へへツ、それじゃあ行こうぜ」

「……うん！」

ロツクには、いつも助けられてばかりな気がする。常に明るい相棒がいるつてのは、思いの外頼もしいものだ。

ーガチャツ！

ーコーダマタウン・公園ー

天気にも恵まれ、頭上でサンサンと自己主張する太陽がとても眩しい。マテリアルウェーブで気候管理されているワケではないので、ここも時期に蒸し暑くなってくるのだらうけれど、今はまだ、朝らしい若干の涼しさを残している。

それにしても、ロックによって取り込まれたオーパーツは、昨日から全くの無反応を決め込んでいる。以前のようには傲岸不遜というか、偉そうな態度で乗っ取ってくるかと思っていたので拍子抜けしてしまった。逆に不安でもあるのだけだね。

「……まだ、誰も来ていないみたいだね」

「(よかつたじゃねえか)」

「うん。ヤエバリゾートの悪夢を繰り返すワケにはいかないからね……」

あのとときの委員長はかなりヤバかった。ブルブル……

『そんなの知らないよ!』

……来たか。これは南国さんの声……BIGWAVEは公園に隣接しているので、ここからでも一部始終を確認することは出来る。

『ニュースで言っていたな? 青い男に助けられた、と……ヤツは一体何者だ?』

BIGWAVEの前で南国さんに詰め寄っているのは白髪の少年……つまりソロだ。

これって客観的に見ると、かなり痛い行為なんだよな。……もしかしたら、ストーリーカー  
気質でもあるのかもしれない。気をつけないと。

『だからわからないよ、ボクにはさ』

南国さんも戸惑っているようだ。まあ当たり前なんだけれども。普通なら正体不明  
のヒーローを、助けられただけの被害者に聞いたりはしないような気がする。顔を見た  
可能性を考慮したとか？それでも、専門家辺りに映像でも見せた方が確実なんじゃない  
だろうか。

『……教えろ。どうやってたら、ヤツに会える？』

『そんなコト言われても……彼は困っている時に現れるヒーローなんだ。ボクにどうこ  
うは出来ないよ』

『……フン、そうか。誰かが困れば、ヤツは現れるんだな？』

そう言い残し、ソロは去って行ってしまった。多分、カミカクシを取りにいったのだ  
と思うけど……

「(……オイ、アイツ、ロックマンのファンか何かなんじやねえか？まさか、こんな近く  
にそのロックマンがいるとは思ってねえだろうがな。クククッ！)」

「いや、あの白髪……間違いない。ヤエバリゾートで会った人だよ。ホテルのフロント  
でつつかかってきた、やけに睨んでくる人だったからよく覚えてる」

「（そういえば、確かにそうだな。じゃあ、なんでアイツがロックマンを探してやがるんだ？）」

「さあ……電波体だつてコトに気づかれたとか？」

「（ありそうだな……一応、警戒はしておくか。ま、そんなに神経質にならなきゃいけねえ相手でもなさそうだがな！ガハハハ！）」

ちよつと調子に乗りすぎなんじゃない？

「ま、程々にね……」

一応、フォルダの整理でもしておくか。近距離中心で組んでおかないと、ブライには対応出来なさそうだ。多分、典型的な撃つてから回避余裕でしたタイプだろうし。ああいうのが、一番やつかいなんだけどな……

――数分後――

無事に委員長、ゴン太、キザマロ、ミソラちゃんが公園へと集合し、それぞれが再会を喜び合っていた。いささかゴン太とキザマロの反応がオーバー過ぎるようなきらいもあるのだけれど。

「久しぶりだね〜！」

ミソラちゃんつて、ホント何時でも笑顔だよね。何やら不思議な方法でエネルギーを

チャージしているようだし、後で秘訣でも聞いてみようかな？

「ミソラちゃん！会いたかったぜー！歌手を引退してた間も、キミを忘れたコトは一度もないぜー！」

「ゴン太くん、キミにはアイちゃんがいるでしょう？ミソラちゃんが一番のファンはボクです。歌手活動に復帰してくれて、どれだけ嬉しかったことか！思わず、目頭が熱くなりましたよ……！」

「そんな、大袈裟だよ……」

どうにも若干引いているようにも見える。二人とも、がつつき過ぎつてコトなんじゃない？

「大袈裟じゃありませんよ」

「オレたち、ずつとファンだぜー！」

ブレないなあ……そこが二人の良いところでもあると思うけどね。ただ、ボクもファンだという点では同感だ。

「なんか照れちゃうなあ……ありがとー！」

ま、眩しい……これがアイドルオーラというヤツか!?……一般人には刺激が強すぎないだろうか。

「……へへー！ミソラちゃんはやっぱりサイコーだぜー！」

ゴン太エ……ま、あんまり頻繁にアイちゃんとは連絡を取れないとはいえ、あんまり浮気はよろしくないんじゃないかと思う。ただ、何となく件のアイちゃんとは気が合いそうな気もするので、一度じっくり話し合ってみたいものだ。なんというか……他人とは思えないんだよね。精神や体とかじゃなくて、なんというか……在り方？

「……………」

「(なんでしよう……？背中に殺気を感じます)」

キザマロの予感の間違ってはいないと思う。だって委員長、さつきからあんまり機嫌良さそうじゃないもの。恐らく、自分をほつたらかしてミソラちゃんと会話を弾ませている二人に嫉妬しているのではないだろうか。なにせ、二人はブラザーだったからね。

「ところでアナタ……最近あまり顔を見せなかつたけど、やつぱり歌手活動が忙しいからってコトなの？」

「うん……ゴメンね、ルナちゃん」

言い咎められたと感じたのか、若干俯き気味にミソラちゃんは肯定する。委員長の罪悪感が凄そう。

「うっ……い、いえ、別に気にしているワケではないのよ。ただ、その……ブラザーだし」  
ミソラちゃんの態度に焦ったのか、委員長は途切れ途切れに本音を語る。どうにも女子同士の繋がりは、ボクが思っていた以上に強固だったようだ。絵的にもベリーグッド

である。

「エへへ……ワタシもルナちゃんのコト、大好きだよ！」

実に自然な流れで委員長へと抱き付いたミソラちゃん。

ま、まさか……これが狙いだったとか？ミソラちゃん、恐るべしだ。やはり本当に怖いのは行動力のある女子だ。はつきりわかったよ。

「え!?あ、いや……ワ、ワタシも……」

それにしても……なんだこの百合空間は。甘い、空気がとんでもなく甘い！まさか突如として百合の花が咲き乱れるとは、このボクの慧眼をもつてしても読みきれなかった……！

もう、二人でゴールインしたらいいんじゃないかな。

なんてことを考えている間に、二人は既に抱擁を解き、ブラザーバンドの結び直しまで行っていた。はえーよ。

「……よし、と。それでね、こうやって誰かとお喋りしたり、何処かへ遊びに行ったりするのも大事だと思ってるんだ！外の空気を吸った方が、いいフレーズを浮かべられるコトもあるし……昨日なんかはロッポンドーヒルズに行ったんだよ」

あ、これマズイ流れだ。

「へへ、ロッポンドーヒルズかあ。誰と行ったの？一人？」

時既に遅し、ゴン太が的確な質問をミソラちゃんへと投げ掛けてしまっていた。クソツ、イケツラさんの件で懲りていたハズなのに……!」

「え、えつと……スバルくんと、ふたりきりだけ……!」

何故か、最後の方を強調して話すミソラちゃん。少し胸を張ってるような? いや、薄すぎてわからん

「(イテツ!)」

ミソラちゃんのスターキャリアーから衝撃波が飛んできたんですけど!? これ、多分ハープだよな? やべーよ、ハープさんホントマジやべーよ……

「ふ、ふ、ふ、ふ、ふ、二人きりですつて! ホ、ホントなの!? スバルくん!」

こ、ここは……なんでもないことのように流すしかない、と思う。大丈夫、大丈夫だ星河スバル。絶対に乗りにきれる。そうだ、最大のピンチにこそ、最大のチャンスは訪れる!……ハズだ!

「ま、まあ……でも、そんなに気にすることじゃないよ。タダの気分転換なんだつてさ」「きたねえぞ! オレたちも誘えよ!」

「まあ、スバルくんですし……」

何故か一定の理解があるキザマロはいいとして、ゴン太には悪いことをしてしまった。何せ、以前から食べたいと言っていたパフェを先に食べてしまったからね。



「……………（ま、まだよ！この程度、ワタシだって何度かスバルくんと……………）」

委員長がとても難しそうな顔をしている。何か思うことでもあったのだろうか。まあ、イケツラさんの件よりはキレてないみたいだし、ここはなんとかなりそうだ。

ーヴイイーン

「え、なに？」

この音は……………カミカクシだ。遂に来てしまったか。

『うわあああ!!』

『きやああ!!』

『す、吸い込まれる!!』

公園内に出現した黒い穴に、散歩中と思われる人達が捕まってしまっている。多分、この人達を完全に吸い込んでしまうわけではないのだろうけど……

「あれは……………もしかして！」

『ひいひい!!お助けー!!』

向こうではお婆さんが！腰、大丈夫かな？

「……美術館を襲った黒い穴だ！どうしてコダマタウンに!？」

「な、なんなのよ……アレ！」

「あんな現象、『マロ辞典』にも載ってません！まさかまた、UMA騒動ですか!？」

「ここにいたら、オレたちも危ないんじゃないか!？」

いち早く危険を察知する辺り、結構皆成長しているような気がする。そりゃあ、踏んできた場数が違うか。

「大丈夫！ワタシ達には、強い味方がいるわ！」

「お、そうだった！オレ達にはロックマンがいた！」

「そうです！ロックマンならきつと、解決できますよ！」

信頼が、とても厚いな。これは確かに、中々クモるモノがある。ただ、悪い気はしない。  
「……うん、わかつてる」

「フフツ、それでこそワタシ達のヒーローだよ！」

ミソラちゃんプの為なら火の中水の中だ！これは誰でも変わらないけどね。ただ、男子ザって結構単純だから、可愛い女の子の為なら百人力ってヤツかもしれない。

「（ヘツ、ヒーローは辛いな。さ、早いとこあの気味ワリイ目玉をやっちまおうぜ！アイツ単体に戦闘力は無いからな、近づいて破壊するぞ！）」

「あ、スバルくん、ワタシは……」

正直、カミカクシ相手に電波人間二人は過剰戦力だ。取り敢えず、今出てるカミカクシを倒し終わるまで皆の安全を確保してもらおう方が先決か。

「ミソラちゃんはこのにいてほしいんだ。あの黒い穴が出てきたら、皆をお願い！」

「……うん、わかった！ 気を付けてね、スバルくん」

「モチロン！ それじゃ、行ってくる！」

先ずは電波変換しなくちやな。ウエーブホールは……家の庭近くの芝生上だ。急がないと！

## 27

——コダマタウンの電波——

星河家の庭隅にあるウエーブホールで電波変換を済ませ、コダマタウンの電波にウエーブインする。黒い穴が発生している以外は、特に普段と変わりのない電波世界だ。ただ、なんて言うか……

「何だか、いつもより調子が良い？」

オーパーツを取り込んだ影響だろうか、やけに調子がいい。体の奥底からチカラが湧いてくるようにも感じる。しかし、未だオーパーツは沈黙を保ったままなので、どうにも不気味さが先行してしまう。

「オイ、大丈夫か？」

ロツクが、若干の心配を滲ませた声をかけてくる。少し、呆けているように見えたのかも。今回はタイムアタックの要領でいかないと、委員長達が意図せざる場所に飛ばされてしまう可能性がある。それだけは、何としても避けないと……！

「あ、うん。ゴメン、もう大丈夫だよ。……それじゃ、発生源のデカ目玉を探そうか」「デカ目玉ア？」

結構的を射た例えだと思つてたんだけど。目玉親父でもいいんだけど、手足が付いてないから違和感が凄いなだね。

「ほら、アレだよ。美術館に現れた、趣味の悪い目玉みたいなヤツのこと。……分かりづらかった？」

「クククツ……いいや、確かにアイツはデカ目玉つて感じだったよな。そう思うと、大して恐ろしく感じねえからオドロキつてヤツだぜ」

どうやら気に入つてもらえたらしい。今日の結果如何では、クソ目玉にランクダウンしそうだけど。ここで会つたが百年目エーツ！とかなつたり……それはないか。

「で、そのデカ目玉は何処に……」

「そうだな……お、見ろよスバル！1、2……3。今度は3体もいやがるぜ。全く、厄介なヤツらだよな」

うわつ、BIG WAVEの屋根上にもいるよ。……結構面倒な位置にバラけたな。先ずはあのカミカクシからデリートした方が良さそうだ。屋外で高い場所にいるつてことは、それだけ黒い穴の有効距離が広くなるつてコトだからね。

「……ありがとロツク！それじゃあ行くよ！」

「おうー！」

公園に隣接しているBIG WAVEの方向へと走り出す。公園にはまだ委員長達が

いるので、破壊対象としては最優先だ。

『…………ツカエル…………ツカエルゾ…………コノニンゲンハ…………ワガシユゾクノ…………フツコウニ…………!』

ーードクン…………!

「アレ? ロック、何か言った?」

「アン? オレは何も言っただけだ。オマエのソラミミじゃねえのか?」

…………これ、凄く嫌な予感がするんですけど。もしかしなくてもオーパーツさん、狸寝入りを決め込んでいたんじゃないのか!? 戦闘中に乗っ取りとか、ホント止めて欲しいんだけどなあ…………

「そう? ……ならいいんだけど」

「ハッ、オマエは心配し過ぎだつての! もっと気楽に暴れようぜ?」

それはちよつと極端過ぎやしませんかねえ。いや、今回は暴れないとマズイかもしれないけど。

「兎に角今は、あのデカ目玉を破壊するコトを優先しなくちゃ…………!」

「なら、油断するんじゃないぞ! あの異次元空間で足止めを食らってる暇はねえんだ」

ロックこそ！止まるんじゃねえぞ……！！

——十分後——

「……これで、最後！ハアツ！」

「……キイイイ！！」

バーストグロープによって強化されたチャージロックバスターをデカ目玉……もといカミカクシの瞳中心部に叩き込み、破壊する。よく考えると、カミカクシって電波世界でしか破壊出来ないから、現実世界側では打つ手ナシってのが恐ろしい。正に電波兵器だ。

「よしー！」

「おう、これで全部だろうな。しかし、最後のヤツは往生際が悪かったよな」

「全くだよ。殺られそうになったら逃げるなんて！撃っていいのは、撃たれる覚悟のあるヤツだけだ……とはよく言ったものだよな」

「そんなコトを言ったヤツがいたのか？」

あ、この世界じゃやってないんだっけか。学習プログラムの件を鑑みて、洗脳系のコンテンツはテレビ側が放送を避けるようになってしまった……はず。

「い、いたような……？」

「スバルにしちやあ、珍しくハッキリしないが……まあいい。周りを見る、スバル。どうやら一件落着らしい」

お、確かに。取り溢しはなかったようで、無事に怪奇現象は収まっている。……だけど、ここからだ。ここからが本番なんだ。

「うん、皆無事みたいだ。よかったよ」

因みに現在地はコダマタウン、ゴン太宅の前だ。往生際の悪いカミカクシがいたせいで、ここまで追いかけるハメになってしまった。いや、カミカクシを操作しているソロが、戦いやすい場所へと誘ってたとか？なんとなく、ありそうな気がしてきたぞ。……さすソロ？

「それにしても……あの黒い穴は、一体なんだだろうな。本体の方にはどうも、意思があるようだったが……あのデカ目玉自身、そこまで高い知性があるようにも見えなかったしな」

「ボクに聞かれてもわからないよ……五陽田さんは、神隠しじゃないか……つて言つてたけど」

というかそもそも、ムー大陸の技術で造られた物質転送装置の名前が『カミカクシ』つておかしくない？完全に日本名だと思っただけど、当時ニホンはニホンとして存在していたのだろうか？



『……見つけたぞ』

「ツ!!」

ソロ！貴様ツ！見ているなツ!?

ーゴゴゴゴツ……

「これは……」

空気が、震えている？

「な、何だ？空気がピリピリしやがる」

やはりロックもそう感じているみたいだ。何とも言い難い、得体の知れないプレッシャーを感じる。

ーゴゴゴゴツ!!!

「や、ヤベエぞー!」

「……わかつてる。ロックも、周囲に気を配って……」

ーヴイイーン

「上だ!!」

凄く、大きな穴が空に空いている。ソロ一人通すだけなら、こんなサイズにする必要ないだろ!……傍迷惑なことをするよ!まったく!

「黒い穴だ……!」

『……食らえ!』

「来るよ!」

来るとわかっていて、対処しないバカはいないよ!つて、何かビームのようなモノが降ってきたぞ!?

取り敢えず、シールドでガードをしなくては……!!

ーチユイーン!

「……グッ!」

やはりこの重量感……人だ。つまりはソロってことになる。なんて無茶なコトをするんだと思う。キミはマサラ人か!

「……」

衝撃によって発生した砂埃が晴れた後には、小柄な人影が一つ、佇んでいた。ムー特

有の模様が入った装束……やはりソロだ。

「空から、人が降ってきた……」

「……なるほど。困っている人間がいると、姿を現すという情報は本当だったようだ。そこまで他人を気にかけるとはな……オレには到底理解出来ない」

そこでふと、ロックマン<sup>ボ</sup>に関する分析を止め、此方に視線を向けてくる。一体、ソロの目にボクはどう映っているのだろうか。全てを見透かされているようで、この視線は  
どうも好きになれそうにない。

「凄く、冷めた目だ……」

「……さあ、大人しくオマエの持つオーパーツをこちらに渡せ」

フン、と小さく鼻を鳴らし、本題に入ってくる。今はあまり私情を挟む気はないらしい。

「どうしてボクがオーパーツを持っているって、知っているんだい？」

ここにきてシラを切る必要はない。

「アレは元々オレが狙っていたシロモノ……オマエが邪魔さえしなければ、オレが手に入れていたはずだ」

若干鬱陶しそうに、ソロは此方を睨んでくる。計画を邪魔されたことに、少々苛立っているようだ。……私情ありありじゃないか！

「それじゃあ、あの黒い穴を操っていたのは……キミか」

「今頃気づくとはな。……ハイドはこの程度の男に苦戦していたのか」

自分は安全圏に籠って、カミカクシの操作だけやってたクセにね。気づく方が無理に決まってる。小学五年生に対するハードルを、あまり上げないでもらいたいね。ボクは褒められて伸びるタイプなんだ。

「ハイドだと!？」

「やっぱり。美術館で古代のスターキャリアーを狙っていたから、何かしらの関係はあると思うていたけれど、まさか仲間がいたなんて……」

「仲間……だと? ふざけるな。……言葉には気をつける。仲間等というつまらない言葉を、オレに向けて発するな」

どうにも仲間というワードに強く反応するらしい。……知ってたけど。手酷い態度を取られてしまった。

「……」

「……」

改めて見ると、ホントに冷たい目だ。人がここまで冷たい目を向けられるなんて。実際に相対してみるとよくわかる。コイツは、完全に自分一人で完結しているタイプの人間だ。ラプラスみたいな例外でもない限り、ソロが心を開くことは恐らくないのだろ

う。

「全く、イヤな視線を向けられたもんだぜ……」

ロックもソロの視線の冷たさ故か、若干引き気味だ。普段はあれほど威勢がいいというのに。それほどソロの雰囲気油断ならないってことなのだけど。

「オーパーツは、オマエでは到底扱えるモノではない。自滅するのが関の山だ。さあ、こちらに渡せ」

「そいつはおあいにくさまだったな……：オーパーツは渡せねえよ！」

「……………」

「オーパーツは、このオレがカラダの中で大事に保管してる。貴重なパワーアップパーツとして、精々利用させてもらうぜ。クツクツクツ！」

酷い悪役染みたセリフだ。完全にボク達の小悪党みたいじゃないか。多分、ソロとしては優しく忠告したつもりなんだろうな……：全然伝わってこないんだけどね。

「その程度で、このオレが諦めるとでも思ったか？それならば……：オマエの体ごと持ち帰るまでだ！」

カチャリ、と懐から携帯端末らしきモノを取り出す。電波体が共通して持つ、基礎感知能力向上の恩恵としてソロが手に持っている携帯端末を、ハッキリと目に捉える。どうにもハイドたちと同じ、古代のスターキャリアーを使っているようだ。ハッキリとし

た違いは見受けられない。

「あれは……古代のスターキャリアー？」

「ああ、ハイドが持つていたモノと同じように見えるな。ハイドはあそこからオバケの電波体を出しやがった」

「……言っておくが、オレは電波体のチカラなど借りない。誰かに頼って闘うなどという、そんな無様な真似は、オレには耐えられないからだ。何より……オレの体に流れる”血”が、それを許さない！」

そう言いながら、古代のスターキャリアーのアンテナ部分を筆のように使い、空中にムー文字を描く。描いた文字は消えることなく空中に留まり、所有者であるソロの言葉待っているかのように沈黙している。

「……！」

「どうした？」

「美術館に展示されていた文字にそっくりなんだよ。やっぱり、あの文字には意味があつたんだ」

「ハッ！」

ソロの気合いを込めた吐息に反応してか、空中に描かれたムー文字がソロの周りを囲む。敵対することを抜きにすると、純粹にカッコいいと思う。

「覚悟しろ、青い男よ。……電波変換！ソロ、オン・エア！」

辺りを電波変換時特有の閃光が走る。このエフェクトは、電波体全てに共通するらしく、ロックマンになる時も発生しているらしい。電波体か、その関係者にしか感知出来ないらしいので、最近はあまり気にすることをやめている。

「……………」

閃光が晴れた後に立っていたのは、ムーの遺産による恩恵を受け電波変換したソロ……ブライだった。カラダの周囲には黒いオーラを纏い、圧倒的なプレッシャーを発してくる。コイツは口だけじゃなさそうだぞ……！

「バ、バカな！一人で電波変換しやがった！電波体なしで、どうやって……!?!」

ロックが驚愕を隠しきれないといった様子でブライに問い掛ける。恐らく、ロックも現実を受け入れられないあまりに口を突いて出ただけで、回答があるとは思っていないと思われる。

「オレは、オマエらとは違う。自分の意思のみで電波変換が出来る。これはオレの、生まれ持った能力だ」

あれ、そうだっけ？てつきり遺産のチカラにおんぶにだっこの状態で電波変換しているのかと思ってたけど、ムーの末裔にはスターキャリアーだけで電波変換するチカラがあつたらしい。

「つまり、こつちと同じ土俵に立てるってことか……油断は出来ないな」  
「ああ……!」

『ロックマン様〜!』

「ここで委員長達の登場か。どうにも胸糞悪いけど、多分ここで助けたら結果的に後悔する。最後に笑って帰ってくるためには……クソッ。

「皆、来ちゃダメだ!」

説得も虚しく、公園で待っていたはずの四人がきてしまった。しまった、じゃないな。本気で止める気なんて無かったんだ。来させた、が正しいだろう。

「ここは危ないんだ、どこか安全なところへ……」

「ロックマン様の活躍を、側で見たいのよ!」

「この目に刻みますから!」

「そんなヤツ、いつもみたいにふんじばってくれよ!」

思ったけど、ここ普通にビジュアルゾーンになっているよね。多分、強力な電波体同士が対峙しているからだと思うんだけど……

「いや、でも……」

「ワタシ達なら大丈夫!だってロックマン様が側にいるじゃない!」



委員長……子供故の過信なんだろうけど、電波体同士の戦闘ってかなり激しいから、こんな時でもない限りは近寄せたりしないよ。今回は近接同士だから平気なワケで……

「スバルよ、随分と期待されているようだな」

「……わかつてる。だけどその代わり、そこから動かないでね」

そう言つてブライの方へと振り返り、ファイティングポーズをとる。これからやりますよつていう合図だ。

「いくよロツク！」

「……アレはオマエの仲間か？」

確認するように、問い掛けてくる。

「アレ呼ばわりは心外だけど……そうだよ」

「フン……下らないな」

ああ、もう。無性に腹が立つてきたな。一々否定されるのつて、結構ストレスになる。……どういふこと？」

「血”が酷く疼くんだよ。『馴れ合いは排除しろ』……とな」

ブライが手を振ると、側にカミカクシが出現した。……遠隔操作も出来るのか。やっぱり物質転送装置にしてはオーバースペック過ぎない？

「あれは……黒い穴を発生させていたデカ目玉だ！」

「……………やれ」

ーヴイイーン

短く指示を出すと、カミカクシが反応して委員長達の足元に見慣れた黒い穴を発生させる。完全に不意を突かれた形で、誰一人範囲外に逃れた様子はない。

「……………しまった！」

ーズズズズ……

黒い穴から引力が発生し、四人を異次元空間に引き込もうとする。人間用に出力が調整されていたようで、抵抗しているためにその沈むスピードはかなりゆっくりだ。それでも、完全に切り離される前に委員長は助けないといけない。委員長が引き込まれた場合、何処に飛ばされるかわからないからだ。

「キャー……」

「み、みんな……………止めろ！皆は関係ない！！」

「なぜ、オレがオマエの指図を聞かねばならない」

わかつていいるとはいえ、相変わらず人の神経を逆撫でするようなヤツだ……………！

「止める……………チカラづくでもだ！」

「……………いいだろう。身の程を思い知るがいい」

「いくよーっつて、うわあっ!？」

コイツ、いきなり足払いをかけてきたぞ!？」

……ちよつと、油断し過ぎたか？それにしても、向こうだつて冷静だ。

「クソツ……!？」

「ロックマン様!!」

まだ、時間はある。大丈夫、落ち着いて対処すればイけるハズだ。委員長だけは、助けられる!

「大丈夫、こんなの平気だから……!待ってて、必ず……!？」

「聞こえていなかったのか？馴れ合いは目障りだと言ったハズだ。……フン、いいだろう……今すぐ断ち切つてあやる！オマエらの美しい『友情』つてヤツをな!」

「!!」

ーズズズズズ……

ブライが指示したのだろう、強制的に黒い穴へと四人は沈みきってしまった。やつぱりやりやがった!人間用の出力を変更したな!？」

ここからが、タイムアタック。カミカクシが展開したのは巨大な黒い穴だ。完全に閉めきるにはかなりの時間がかかる。美術館の時も、使用した黒い穴はいつまでも残っていた!

「そんな……!」

「心配するな。オマエも、今楽にしてやる」

「マズイ!既に眼前まで移動している!?なんてスピードだ。なんとか、時間を作らないと……!」

「皆は、返してもらおう……!」

「……仲間が気になるのか?ハッ!」

「シールドツ!

「ードガアツ!

「ぐああっ!」

「ガ、ガードブレイク性能か……クソツ、キックは回避するしかないみたいだ。それにしても……キックを受けた腹部が割と痛むな。打撃系の攻撃が、こんなにも体中に響くなんて!」

「……ま、まだだ!」

「そんなに馴れ合いが大事か?オレから見れば、それは弱い証拠だ。強ければ他人など必要としない。違うか?」

「あまり調子に乗られても……困る!絶対にノウだ!

「違う!人は、人間は……誰かの為なら無限に強くなれるんだ!今はチカラを失ってい

るけれど……この体に宿るスターフォースがそれを証明してくれる！だから、ボクはボクで在れるんだ！」

ペガサスだって、言っていた。人間のキズナは無限のエネルギーを生み出せるって！……そんなニュアンスだったけど、ボクは信じてる。少なくとも、ここは負けられない！

「……………」

ードクン!!

チカラが湧いてくる。今だけは、オーパーツの気まぐれに感謝しないとイケない！

「まだやるというのか……まあいい。……今度は、楽にくたばれると思わないことだ！」  
「うおおおッ！亡霊擬き……チカラを貸せエツ!!」

ードクン！ドクン！

凄い、体の中にあるオーパーツから、エネルギーだけが流れてくる感じだ。エネルギーの底がまつたく見えない。正に、無限と呼ぶに相応しいくらいの性能だ……！

「これは……まさかオーパーツのチカラ？なぜ突然……!?!」

「……………これが、人が生み出す、キズナのチカラだからだ！」

やはりキズナリヨク700はハツタリではないらしく、息苦しさも感じない。なんだか、ボクに都合が良すぎて逆に怖くなってくるくらいだ。終わつた後に変な代償とかがないといいけれど……今はブライを撃退することが先決か。

「……フン、キズナのチカラだと？……なるほど、どうやらオマエは、オレの一番気に入らないタイプのようだな!!」

知るかそんなこと！一々人の好みに合わせていられるか！ボクは、来年以降も皆と一緒に笑っていたい……そのためにも！メテオGを破壊するまで立ち止まってはいただけないんだよ！

「スバル、気をつけろ！」

そんなの、今更だ！

「キミを倒して……そのデカ目玉を止めさせてもらう！今日のボクは、いつもの3倍は強いぞ！ウェーブバトル！ライド・オンツ！」

## 28

ーコダマタウンの電波ー

改めて、相対しているブライを観察してみると、右腕が紫色のオーラに包まれていること以外には、左腕と両足首に赤色の機械的なパーツが装備されているくらいしか、こちらとの大きな違いは見受けられない。

やはり近接重視の電波体なのだろう。なら……その近接で意表を突かせてもらう!

「ロオオツク!!」

「オラアアツ!」

「……………ツ!」

渾身の踏み込みによって得た加速力をウオーロックアタックの突進スピードにプラスし、左腕に展開したソードを突き込む。距離感を悟りにくいように、ブライの目線に合わせた角度の突き込みだ。

「フン……………疾ッ!」

「クソツ……………!」

読んでいた!とばかりに、オーラを纏った右腕でソードを弾く。……硬い!ガード性

能があったようで、ブライのHPに変化は見られない。それよりも……！既に左腕は脇を締め、パンチングの構えに入っている。やはりコイツ……手慣れているぞ！

「フツ……ハアツ！」

「ウグツ……うわあぁっ！」

素早くジャブを懐に叩き込み、振り払った右腕を引き戻す流れのまま強烈な右ストレートを打ち込んでくる。

左腕を弾かれてシールドを張ることの出来ないボクは、為す術なく受けることしか出来ない。

「……ハア、ハア……！」

右ストレートの勢いそのまま数メートル程吹き飛ばされつつも、なんとか着地に成功する。……ブライさん、マジで強いんですけど!?!

「……………ブライナックル」

休ませる気もないようで、ブライは右腕を大きく振りかぶった後に、こちらへと思いつき突き出してくる。突き出した右腕からは、ドッジボール大の拳型エネルギー弾が多数発射されるため、中距離にも対応出来る技のようだ。

……これは大丈夫。ブライナックルは、シールドで防ぐことができるはずだ。

「……………うおおっ！」



シールドでブライナックルを防ぎながら、ブライの元へと突貫する。どうやらアドレナリンのようなモノが出てきているようで、攻撃の痛みは既に消え去っていた。

「……しぶといヤツだ」

「ここは退けないんだアツ！」

左腕はシールドを展開しているため、右腕にヒートアップパーを構成する。流石にヒートアップパーを素手で弾いたり、掴もうとは思わないハズだ！だって凄く熱いもの！

「……ツ！」

シールドを一度解除して繰り出したヒートアップパー（フック）を、ブライは背後へとバックステップすることで回避する。……この瞬間を待っていたんだアツ！

「うおおおらあああツ!!」

再びシールドを展開し、今度は即座にウォーロックアタックでシールドバッシュを行う。跳躍中なら、ガードブレイク性能のキックを放ることは出来ないのです、返り討ちに遭う可能性はない！

「……ツ!?ググツ！」

「ハア、ハア……!!」

よし、ワンヒット。無理に機動したせいで、どうにも息が続かない。ただ、オーバーツの影響でパワー切れはありえないので、存分に暴れ回ることが出来る！やっぱりコイ

ツはスゲエー!とんでもねえ兵器ってヤツだ!

「あまり調子に乗ってもらつては……困るツ!」

首を振つて調子を取り戻したらしいブライが、大地が揺れる程の踏み込みのまま突っ込んでくる。さっきの超スピードの正体はコレか!クソツ、シールドを……!

展開したシールドで身を固めることを読んでいたのか、ボクの直前で両腕を引き締め、体を捻る。回転……?いや、キックか。ガードブレイクを狙っている!?

「……なっ!?!うわあっ!」

案の定右足による強烈なキックにより、シールドを割りながら回し蹴りを食らつてしまう。しかも構えていた腕の下部……ボディに食らつてしまった。……痛みが半端じゃない!これが打撃系の痛覚攻撃か……

「ツ!!………フン」

「………ゴホッ!まだ、まだまだまだアツ!おおおおおツ!」

体の底に眠るオーパーツを意識して、腹の中心にチカラを込める。そうでもしないと、痛みで気を失つてしまいそうだ!

『ソウダ……モット、モット……トウシヲモヤセ……!』

何か聞こえるけど、今は聞く耳持たぬ！いいから黙ってチカラだけ貸してるこの亡霊どもがアツ！

ーードクン！ドクン！ドクン！ドクン！

「何だ……このプレッシャーはッ!?」

どうやらオーパーツから放出されている闘気が、凄まじいプレッシャーとなってブライに向けてられているらしい。向こうが及び腰なら、こちらにとつては追い風だ。今が畳み掛ける千載一遇のチャンスとなるハズだ！

「……痛みが引いてきた。よし、これならアツ！」

「クッ！コイツ……ゾンビか何かか!？」

ソロ……ブライが戸惑っているのがハッキリと知覚できる。むしろ眉間に刻まれている皺だつて見えるぞ！これがオーパーツによる感覚拡張。……スターフォースにだつて負けていないレベルの強化だ！

「ロツクッ！」

「ああ、わかつてる！うおおおおおらああアツ！」

ーードクン！

まるで本物のダイナソーもかくやという踏み込みによって、先ほどとは比較にならない速度・勢いでブライに向かって突進する。両手にはヒートアツパーを展開済みだ。……これなら殴り合いだつて！

「ただのスピードでこのオレを翻弄出来るとでも思ったかッ!!……セアアツ！」

目を見開きながらも、超高速で移動してくるボク達の姿をハッキリと捉えているらしいブライ。完璧なタイミングで全力のボディブローを放ってくる……が、元よりこちらを避ける気は全くないんだよ！肉を切らせて骨を断つてヤツだ！

「……ゴホッ！」

「フン……ッ!!何だと?！」

腹部に貫つた渾身の一撃を、オーパーツによる超絶的な身体能力の強化で耐えきり、更に踏み込む。ヒートアツパーの射程上、もう少し近づかないまともに威力を発揮することが出来ないからだ。

「うおおおおおおつ！ぶつ飛べええエツ!!」

全力で引いた炎拳を、ブライのから空きなボディへと右ストレートの要領で叩き込む。どうにもベルセルクのパワーが宿つたらしく、炎拳なのに荒々しい黄金のオーラを纏い強化されている。ちよつと人に向けるにはヤバイ威力だけど、ソロならヒットの瞬間に後ろに跳んでいるとか、その辺しつかりしているだろう。周りの被害?そんなん知

るか！

「……………グハアツ!？」

黄金の右腕による一撃は思ったより勢いがあつたようで、一直線に吹っ飛んでいく。……死んでないよね？

「ハア、ハア……………よし、やったぞ……………」

終わったと安心していたら、急に脱力感が湧いてきたな。やつぱりアドレナリンがドバドバだったらしい。戦闘中に受けたダメージによる痛みも凄しいし、ブライってかなりヤバい相手だよな、ホント。

「……………チツ」

なんて考えている内に、若干フラつきながらブライがこちらに歩いてくる。やはり後ろにバックステップしていたらしい。コイツ軍人家系の出身って言っても違和感ないくらいタフなんですけど。こっちもゾンビゲーマーはもうやりたくないなあ……………オーパーツで、実質ライフ無限みたいなモノだけだね。痛みが酷すぎる。

「まさか、このオレが手傷を負うとはな。……………だが、勝つのはオレだ。オレの中の”血”にかけて、オマエのようなヤツは完膚なきまでに叩きのめさせてもらおう！」

そう言つて再びファイティングポーズを取るブライ。コイツやつぱりやべーよ。

「チツ……………まだチカラが残つてると言うのか!?コイツ……………まるで底無しだぜ!？」

「底無しは今のボク達だと思うよ。だって完全にゾンビ状態だもの。オーパーツからのエネルギー供給が途切れたら、30秒と持たないって断言出来るまでである。」

『……そこまでだ』

気品のある女性の声……オリヒメか。なるほど、中々に威厳があるらしい。ブライが戦闘を中断する程となれば、よっぽど無視出来ない影響力があると予想出来る。

「……その声は、オリヒメか？」

「女性の……声だ」

『今はまだ、事を荒立てるな。その辺にしておくがよいぞ』

今ばかりはオリヒメ様々だ。初見でブライ完全討伐は難易度がハード過ぎる！対策を練っておかないと、ナンスカで完璧に負けてしまうだろうな。

「オレに引き返せと言うのか？」

『まだ全力ではないと言っても、そなたも傷を負っているではないか……今は無理をす  
るでない』

「……運がいいな。青い男よ」

ファイティングポーズを解き、ブライは撤退するようだ。……助かった。これ以上はキツかったしね。

「逃げるつもりか！」

「……………！待て！皆を元に戻すんだ！」

「いずれ決着は着けてやる……………覚悟しておけ」

「待て……………うっ！」

辺りを閃光が覆う。どうやら電波変換を解いたらしく、そのままカミカクシで撤退する腹積もりのようだ。

『オレの名はソロ……………次に闘うその時まで覚えておけ』

今更君の名は。なんてやるつもりはないっての！

「……………逃げられたか！」

閃光が晴れた先には、既にブライの姿もカミカクシの姿も確認することは出来なかった。

ーズオオオオ……………

ヤバい！黒い穴が閉じてしまう！

「クソツツ！間に合えエツ！」

ズポツと異次元空間へと右腕を突っ込み、手探りで感触がないか探し回る。……………あつた。この柔らかい感触……………間違いない委員長の手だ。あとはこれを引っ張れば……………！

「……………掴んだ！うおおおっ！」

この手だけは、離すわけにはいかない！全員で夏休みを終えるためにも、ここで委員

長が完全に所在不明になることだけは避けなければ！

ーズポツ！

「委員長！」

なんとかカミカクシの引力を振り払い、引つ張り出すことに成功する。ふう、良かった……！

ーズオオオオ……

「閉じてしまった……」

わかっていたことで仕方がないとはいえ、ハッキリ言えば胸糞悪い。心臓が変なりズムを刻んでいるようで、嫌な汗が流れているような感覚もある。

「ボクが……もう少し上手くやっていたら、こんなことには……」

そもそも、ムー大陸復活からラ・ムーのデリートまでを確実にこなせる方法があれば、こんな気持ちにならなくて済むというのに。

キザマロに限って言えば悪いことばかりではないとは言っても、数多くの人に負担を強いるやり方であることに変わりはないのだから。

ーオリヒメのアジトー

「……オーパーツを見つけた」



カミカクシの空間移動能力によってアジトへと帰還したソロは、今回の顛末をオリヒメに報告していた。

「例の青い男が持っている」

「ソッフフフ……」

ソロの報告を聞き終わったハイドが不適な笑い声を漏らす。むしろ挑発の意味が強いようにも見えるが。

「……何がおかしい？」

ハイドの鼻につく笑い方はソロの気に障ったようで、不機嫌そうに眉をひそめてハイドへと問い掛ける。

「おっと、気に障ったならあやまろう……深い意味はない。まさかキミともあろう男が手こずるとはな。あのチカラも使ったんだろう？キミが電波変換した姿、『ブライ』のチカラを……」

やはり挑発の意味合いが強かったようで、ハイドは尚も発声せずに忍び笑いをソロに見せつける。他人の不幸は蜜の味とは、よく言ったものである。

「……………チツ」

『何を苛立っておるのだ、ソロよ？ロックマンとやらが手にしたところで、そやつにオーパーツを扱える程のチカラはあるまい。あれは危険なモノ……チカラの無い者が扱え

ば、却って身を滅ぼしてしまいうだろうさ。かつて、ベルセルク達が辿った運命のように……な』

「……………」

「……………」

ソロと、いつものようにオリヒメが控える御簾の側で魔術師然とした男……エンプティーは、揃って黙り込む。エンプティーはオリヒメに対しては絶対の服従を誓っているために、特に不自然ということではないが、ソロが黙って聞き入るといのは、それだけオリヒメの言葉が正しいと、ソロ自身が理解しているからだろう。

「とはいえ、オリヒメ様。あの青い男に好き放題やらせておくのも、いささか癪と言うもの……」

ここでハイドは一步前に足を踏み出す。まるで絶対の自信があるように……だ。

「ここは、この私めにお任せあれ！見事、あやつの手からオーパーツを奪い取ってごらんにいれましょう！」

「なに……!?オマエ、オレの邪魔をするつもりか……!?あれはオレの獲物だ。……手を出すんじゃない！」

ソロとしても、あれだけの名乗りを上げた以上は自らの手で青い男を下したいと思うもの。ハイド程度に譲る気は更々なかつた。

「オリヒメ様、どうかご命令を……！私には、良い考えがあるのですよ。ソフフ……！」

『ふむ……まあ、面白そうではあるな。……よい。ハイドよ、やってみるがいいぞ』

「ハッ！有り難き幸せ！」

喜色を滲ませた笑みを浮かべたハイドは、ソロから更なる制止を食らう前にその姿を消した。自らの脚本を、更に煮詰めるのだろうというのが、満場一致でその場に居合わせた全員が思い浮かべた考えだった。

「……！！」

しかし、ソロはどうしても納得出来なかつたために、オリヒメが控える御簾へと続く段差を登ろうとする。しかし、いち早く気づいたエンプティーが、御簾の前に立ち塞がってしまった。

「……！！」

「それイジヨウ、オリヒメさまにチカづくことはユルさない」

ソロとしても、電波変換を解いた状態でエンプティーの相手をすることは不可能に近いと理解しているので、憎々しげにその歩みを止める。

『ソロよ、そう熱くなるな。なにもそなたの邪魔をしようと言うわけではない。そなたはそなたで、今まで通り一人で好きなようにやればいい』

「……………くっ！」

ソロが下がることで、エンプティもオリヒメの側へと再び移動する。そのスピードは、ソロの動体視力をもつても読みきくことは出来ない。

『ただ……我々にも我々のやり方、というものがある。願わくば……今回はそなたにそれを見届けてもらいたい。そなたも、我々のことをもつとよく知りたいであろう？』

「……………」

ソロとしても、オリヒメの言葉には領かざるを得なかつた。一人であることの強さを保つ為の手段として、他の情報を軽視することは出来ないからだ。

そして、ファントム・ブラックによる恐怖（○）のシヨールが、再び幕を開けることになる……

――夜・星河家――

痛む体を引き摺るようにして帰宅したボクは、心配するあかねさんを余所に、さっさとシャワーを浴びて就寝していた。今はゆっくり体を休めて、委員長オヒュカスに備えないと。幸いにして、オーパーツは静観を決め込んでくれているようなので、これ幸いと熟睡させてもらうことにする。

因みに委員長は、白金家まで送り届けた後に目が覚めたらしく、明日委員長の家で対策会議をやるから絶対に来なさい！とのことだった。一応体を気遣ってくれたのか、メール送信で済ませてくれている。

『……ヤハリ……ワレワレノミコンダトオリダ……！コノカラダ……イヤ、コノニンゲンコソガ……ワレラガフツコウノ……アシガカリニフサワシイ……！』

わかったから、わかったからもう今日は眠らせてくれよ……っ！リカバリーで出来る限り治療したけれど、それでも体中が痛むんだ。死人の相手なんて、一々していらねえ

いよ……

——翌日——

「ううう……早く、何とかしないと……！」

「オイ……大丈夫か？」

誰かにゆさゆさと体を揺らされている……ああ、ロツクか。どうにも魔されていたらしい。夢だったので記憶はないけれど、ロツクが思わず起こしにかかる程だ。相当に酷い魔され方だったことは予想が着く。

「……うん、大丈夫。ボクは大丈夫だから」

「……………」

どうにも調子が悪い。昨日の好調っぷりが嘘のようだ。全身に脱力感を感じるし、思考も上手く纏まらない。こんなんじや、エランド相手にも苦戦しそうだ。

「取り敢えず、着替えないと……」

「（結構堪えてるみたいだな。ま、無理もねえか……何だかんだ言っても、コイツはまだガキなんだ。ダイゴみたいなポジティブさを期待する方が間違ってるし、何より中身がちげえからな。今のコイツは、どうにも不安定で危なっかしいぜ……）」

ノロノロと着替えを終わらせ、ラジオ体操を真似た柔軟運動をする。兎に角、体を解

しておくぐらいはしておかないといけない。

「……なあスバル」

「どうしたの?」

「これから、どうするんだ?」

ああ、なんだそのことか。……決まってる。まずはキザマロからだ。確か海外放送のチャンネルに、キザマロが出演するんだっけか。それでドンブラー村?に向かうことになったハズ。まずは海外放送を受信している、委員長の家に行くべきか。

「うん、取り敢えずは……」

ーブルルル!

「あ、電話だ。委員長からみたいだね。……ブラウズ」

ーブブーン

相変わらず、ハエのような音を（以下略）なエア・デイスプレイには、憤怒の表情を浮かべた委員長が映っていた。今のボクには怒り狂った委員長でさえ、心のオアシスになり得るかもしれない。ロックを除けば……だけど。

『遅〜〜い!!何してるの!いつになったらウチに来るのよ!!』

「あ、うん。今行こうと思ってた」

『そう……?まあいいわ!兎に角、早くウチに来なさいよね!わかった!』

「わかったよ」

どうにも声に覇気が宿らないな。これが喪失感なのかもしれない。ただ、やるべきコトがわかっているだけましなのだろうけど。

『ちよつとアナタ、しつかりしなさいよ！皆がいなくなつたわ……つまりこれは緊急事態つてコトなの！私達がなんとかしなさいけないのよ！何度も言うけど、まずはウチに来なさい……いいわね！』

ーブツツ！

通信が切れてしまった。そうだ、塞ぎ混んでいる暇なんてない。誰が何処に飛ばされたかはわかっているんだ。本当にどうにかなくなってしまおうワケじゃない。

「スウ……ハア……！」

大きく深呼吸をする。まずは切り替えだ。ボクの調子如何によつては、委員長まで失つてしまふかもしれない。それは絶対に避けないといけないんだ。絶対に。

「……スバル？」

「……うん、もう大丈夫。ボクはやる。……やってみせる！」

「なんだよ急に……？」

「ううん、気にしないで。ただの自己暗示みたいなものだから。さ、委員長の家に行こう？」



「まあ、スバルがそう言うなら……」

さあて、今日は大忙しつてヤツだ。暴れまくつてやるぞ……！

「母さん、行つてきます！」

「いつてらつしやい、スバル」

よし、特に悟られてはいないようだ。あかねさんつて凄く鋭いから、あんまり長く話しているの見透かされてしまいそうだ。

——ガチャツ！

——コダマタウン——

先ずは委員長の家に向かわないとね。つと、その前に確か、困つてるエンジニアさんを助けなきゃいけないんだっけ？いくぞデンパくん。Dエネルギーの貯蔵は十分だ！……何か違う気がする。

『むむむ……』

やっぱりいた。あれは……確かゴン太ん家の犬小屋型防犯装置。その調子が悪いから困つてる……つて具合だったはずだ。

「（オイ、あそこで誰か困つてるみたいだぜ？）」

「（そうだね……） ええつと、どうしたんですか？」

「むむむ……ん？いや、ちよつとね……この犬小屋を修理してるんだけどさ、これ、タダの犬小屋じゃないんだ。犬小屋型の防犯装置なんだ。不審者が家に近づいたら警報がなるようになってるんだよ。『ワンワンワン!!』って」

「(防犯装置か……フン、よく考えたもんだぜ)」

ロックも結構犬っぽい顔してるから、親近感でも抱いたのだろうか。大音量でワンワンワン!!されるより、青い宇宙人に脅かされたほうが効きそうだけどね。

「修理してくれて頼まれたんだけど、原因がわからなくってね。このままじゃ仕事がいままでたつても終わらない……今日は早めに仕事を切り上げるつもりだったのに！」  
プロ的にどうなんですかね……?という疑問は置いておいて、どうにも事情があるようだ。流石に細かい事情までは網羅してないので、ここは静かに聞いておくべきだろう。

「……実はさ、今日ボク……結婚記念日なんだ！早く帰るって嫁さんと約束したんだ。……どうしよう！あ……そ、そうだ。あの人を呼ぼう」

「あの人？」

ああ、ここでロックマン助けてーの展開なのか。ま、大した手間でもないし、引き受けることに躊躇いはない。ただ、結局ダメなんじゃなかったつけ？

「そう！青いヒーローロックマン！ロックマンを呼ぼう！」

「ど、どうやって……？」

「さあ……って、そもそもこの程度のことじゃ来てくれないよね。はあ……どうしよう、折角の記念日なのに」

「(お呼びのようだな。全く、ヒーローは辛いぜ……)」

ビジライザーをかけていないからロックを見ることは出来ないけれど、やれやれだぜ……とかぶりをふっている姿を鮮明にイメージすることが出来る。今は悪霊ベルセルクに憑かれて  
いるようなものだから、あんまり笑えないよ……

「(だね。取り敢えず、犬小屋にウエーブインして調べてみよう」

「(おう！)」

ええっと、ウエーブホールは……無いな。一旦家に戻って、庭先で電波変換しないと

……

『ホウ……ヨメ……カ……』

ー犬小屋の電波ー

ゴン太の家からボクの家までの往復運動を済ませ、犬小屋の電波へとウエーブインを完了する。今日も綺麗な空だ……おっと、少しセンチメンタル気味になっていたかな？

「ええっと、犬小屋を管理しているデンパくんは……あ、いた。ねえ、キミ」

どうにも草臥れたような印象を受けるデンパくんへと話しかけるも、あんまり反応が芳しくない。オーパーツぶっ込んでやれば一発に見えるけど、破裂しそうなので却下だ。

「……はあ」

「大丈夫？」

「……ん？おやおや……！ア、アナタはもしや、ロックマンさん!？」

遂にさん付けで呼ばれるようになったよ。つい数週間前までは、「暴蒼のバトルが始まるぞッ！該当するウェーブロードを直ちに封鎖しろーッ！」なんて違法ライディングデュエルみたいな扱いだったのにね。情報の更新とは、かくも恐ろしやつてことだろうか。

「ワタシシつてますよーこ、こんなトコロでヒーローにデアえるなんて!!カンゲキですくー!」

「あはは……ありがとう。ところで、犬小屋が故障しているみたいなんだけど、思い当たることはあるかな？」

「あ……すいません。タ、タブンワタシのせいです。サイキンカラダのチョウシがワルクつて……ゲンキがでないんです」

「体の調子、かあ……」

体の調子つてより、通信能力に異常をきたしているのかもしれないな。

「あの……おネがいなのですが……『Dエネルギー』をサガってきてイタダメせんか？もしかしたら、それでナオるかも……」

「うん、いいよ。……はい、Dエネルギー」

一応保険として、常に幾つか携帯している。ただ、リカバリーで事足りることの方が多いで、役にたったことはないけれど。それに、ボクつてRPGなんかだと最後まで使いきりのアイテムを残しちゃうタイプだから、どうにも使い時がわからないんだよね……

「ホ、ホントですか!!ありがとうございます!まさかあのウワサのヒーローからDエネルギーをモラえるなんて!」

「大袈裟だよ……」

「イヤイヤ!ミンナにジマンがデキますよ!サツソクツカつてみます!」

そう言つて、犬小屋のデンパくんはカードタイプのDエネルギーを体内に差し込むように使用する。Dエネルギーを使用したコトで、デンパくんの足元から頭の天辺までを覆うように一瞬だけリングのようなモノが通つていった。体を再構成するエフェクトということなのかもしれない。中々カッコいいな。今度ボクも使つてみよう。

「……………ア、アレ？アレレ？ナニもかわりませんね…………」

「まだまだ在<sup>Dエネルギ</sup>庫はあるけど…………」

どうせ使わないだろうし、ここで一齐に放出しちゃっても構わない。戦闘中には使えないしね。

「い、いえ！ダイジョウブです！それにしても…………うゝん、なんででしょう？」

「さあ…………ボクは医療用の電波体じゃないから、そこまで詳しいことは何とも…………」

「キ、キにしないでクダさい！いくらヒーローだつて、こういうコトもありますよ！」

「…………そうなの？」

「ホントおきになさらずに、アトはジブンでナンとかしますので…………わざわざありがとうございます…………」

まあ、デンパくんもそう言っているし、後はボク達が干渉することでもないだろう。あのエンジニアさんにはちよつと悪いけどね。

ーコダマタウンー

「はあ、ロックマン来ないかなあ…………」

「まあ、ロックマンにも出来ないことはありますつて…………」

「そうかなあ…………まあ、ロックマンにしか出来ないコトでもないし、仕方ない…………のかも

ね」

「ええ、きつと彼も万能じゃないんです。都合のいいヒーローなんて、ファンタジーやメルヘンにしかいませんよ。誰だつて、現実には生きていますから……」

「……そうか。よおし！なら頑張つてきつさと終わらせてしまおうぞ！嫁さんだつて、きつと分かつてくれるはずだ！」

おおう、ポジティブシンキング。中々出来ることじゃないね。ボクも見習いたいくらいだ。

「(オシ、あのオンナのところに行こうぜ。随分と待たせちまつたしな)」

「そうだね。まあ、委員長も事情を話せば鎮まつてくれるでしょ……多分」

「(そこで絶対と言い切れない辺りが、あのオンナらしいよな)」

「違うない」

さて、委員長が待つてるマンションは……つと。そう言えばゴン太の家の近所なんだつた。直ぐそこじゃないか。……やつぱり疲れているのかな？

「さて、委員長がマジギレしていないといいんだけどねえ……」

「(神のみぞ知るつてワケだな)」

……それ、委員長も神になってない？

『な、直つたぞーッ!!』

良かったね。嫁さんも喜ぶんじゃない？

ーピンポーン！

もしかして、何気にインターフォン鳴らすの初めてじゃない？……なんだか微妙に緊張してきたな。

『……………』

アレ？留守のハズはないんだけど……まさか呼ぶだけ呼んで、自分は外出なんて鬼畜行為はとらないだろうし……

ーガチャッ

「……………入りなさい」

「え、あ……………はい」

やっぱり激おこぶんぶん丸だった件。ただ、マンションの廊下でぶちギレる程非常識でもないようで、一応は家に入れてくれるようだ。でも凄く怖いです……

「……………ちよ」

「……………」

怒りを必死に抑えたような表情の委員長に連れられ、取り敢えずは委員長の部屋に向かうことになる。……………先に部屋へと入っていた委員長は、大きく深呼吸をして



いる。落ち着け……落ち着くんだ！

「……………遅い。遅い！遅い！遅い！遅いッ!!」

「ヒエッ!?す、すいませんでした!」

「こんな時だつていうのに、なにのんびりしてたのよ!」

「(やっぱりな…………)」

ロックの、委員長に対する信頼が(悪い意味で)厚いような気がする…………いや、なんとなくわかつてたけども。

「別に、のんびりしてたワケじゃないんだけど…………」

「いい、よく聞きなさい!さつきスターキャリアーのブラザー画面を確認したんだけど、まだ皆とのブラザーバンドは切れていないのよ!」

スターキャリアーにGPS機能があれば直ぐなだけどなあ…………まあ、ロックマンの位置を確認される可能性もあったから、一長一短だとも思う。

「つまり…………これは皆がまだ無事だつていう証拠なの!でも、帰つてこないってコトはケガしたり、交通機関の通つてない場所にいるのかもしれない…………だから、ワタシ達が探し出して助けに行かなきゃいけないのよ!」

「わかつてる。…………だから先ずは情報を集めようよ。委員長、心当たりとかあつたりするかな?」

やるべきことはわかってはいるけど、一人よりも二人で取り組んだ方が、とても心強い。

「……ええつと、そうね………つて、そんなのワタシが知ってるわけないでしょ!? だからアナタのチカラが必要なのよ!」

「ボク、そんなに力自慢じゃないよ?」

「アナタねえ………そっちじゃないわよ! ナヨつちいスバルくんじゃなくて、ロックマン様の方! ロックマン様のチカラがあれば、きつとなんとかなるわ!」

ヒデエ言い様だ。

「(ヒデエ言い様だ……)」

珍しくもなく意見があつたね、ロック。割とトレーニングを積んでいるから、実はそんなにナヨつちくもないんだけど。

「ああ、委員長がボクをどう思ってるのか、今のでハッキリとわかってしまったよ……」  
いくら華奢に見えるとはいえ、日夜ウィルスバスティングに勤しんでいるボクが、そんな貧弱な体してるワケはないだろうに。

「え? そ、それはその……べ、別にワタシは……」

なんだ? いきなり上気し始めたのだけど、何かマズイことでも言つたつけ? 頬も赤いし……もしかして照れている? まあ、どうでもいいや。

「ロックマン様<sup>体</sup>だけが目的だったんでしよう!? ……このケダモノ!」

「フンッ！」

渾身の右ストレート！痛い！ブライのストレート並に痛いよ！

「ゴフッ！」

「下らないことやつてないで、なんとか打開出来る方法でも考えなさいよ……」

ちよつと茶化し過ぎてしまったか。いや、だつてさあ……つて、そうだ。打開策か。

ううむ……例の番組はまだ放送していないだろうし……

「……あ、パソコン」

「パソコン？」

「もしかしたら何か、情報サイトに載っているかもしれないよ」

可能性は薄そうだけど、最もありそうではある。既に一日経過しているから、誰かが情報をアップしていても不思議じゃない。何せ空から人が降つてきたりするんだ。上手くいけば、ナンスカの情報も手に入るかもしれない。自然に現地まで向かう口実さえあれば、こつちのものだ。ただ、ムー大陸を最大効率で攻略するためにも、ブラキオ・ウエーブやコンドル・ジオグラフィとは戦つておきたい。

「そうね。それじゃあ少し、調べてみましょうか」

そう言つて委員長は、部屋に設置されている最新型のパソコンを起動させる。流石に最新型、立ち上がるのが早い。ゼニー余つてるし、パソコンを新調することも考えてみ

ようかな……?」

「先ずはキザマロからね。検索ワードは、そうね……小学生、小さい、緑、メガネ、辞典……つと、これくらいでいいかしら?」

分かりやすい特徴ではあるけれど、キザマロがこんな検索ワードで見つかったと知ったら、本人が泣きそうだと思うのはボクだけなのだろうか。

「……………『ドツシー』?」

「どうやらヒットしたらしい。ホントにヒットするとは思わなかったよ。」

「どれどれ……お、確かにこれはキザマロっぽい感じがするね。これは海外放送している番組のホームページか。ええつと、放送時間は……」

キザマロっぽい特徴の少年が、証言をするらしい旨が書かれている。やっぱり放送日は明日だ。プロデューサーの名前もキュー出間崎と、間違いはないだろう。

「ちよ、ちよつとスバルくん……?ち、近くないかしら?」

「あ……ゴメン。ちよつと寄りかかっちゃったね」

つい、身を乗り出して操作してしまった。確かに、後ろから見たらボクが委員長に覆い被さっているように見えていたかもしれない。申し訳ないことをしてしまった。

「べ、別に大丈夫だから!それより……いえ、とにかくこの番組を見てみないことには始まらないわね。放送日は明日らしいし、後はゴン太についての情報収集をするわよ!」

幸先よくキザマロと思わしき（本人なんだけど）子供の情報を手に入れ、ご満悦の委員長。とはいえ、場所が場所だけに慎重に行動したらしい。何せ海外だもんね。ちゃんと確証を持つてからいききたいに決まってる。

「うん！」

——数時間後——

しかしその後、ゴン太の情報に関しては得ることは出来なかった。やはりナンスカにいと、情報の発信が遅くなりがちなのかもしれないな。

「今日は、このくらいにしましょうか。あんまり根を詰めすぎてもいけないし、ワタシ達が体を壊したら、本末転倒だわ」

「……わかったよ。それじゃあ、一度ボクは帰るね」

「ええ。明日は例の番組を視聴するから、ちゃんとウチに来なさいよ！わかったわね！」  
「わかってるよ……また明日ね」

知っていても動けないってのは、やっぱり辛いよ……別に動いてもいいんだけど、あらゆる局面でそれをやったら多分、周りの人にとってボクは人じゃなくなっちゃうんだよな。

どうしてそれを知ってるの？……ってね。だからこそ大筋の流れの中で、ボクはボク

が対面した事象にしか対応したくない。これは甘えなのかもしれないけどね。

## 30

――翌日――

朝。昨日はずっと同じ姿勢で調べものをしていたので、体の節々が痛む……というか違和感がある。因みに、委員長の部屋は凄くいい香りでした。

……いけない。明日は多分、アメロツパまでスカイウエーブを使って行くことになるだろうから、疲れを残さないためにも体は入念に解しておかないと。それにしても……  
「ふあくあ、眠い……」

眠いし、微妙に元気が出ない。

「昨日は結構粘ってたみたいだから……大丈夫なのか？」

「ああ……うん、大丈夫。平気だから」

「そうか……」

ひよつとして、出かける前からホームシックというヤツなのかもしれないな。だって母親があかねさんだし。もう認めるけど、ボクってマザコンだからね、仕方ない。

――数時間後――

さて、既に日もそこそこに登っている時間だし、そろそろ委員長の家に向っても失礼にはあたらないだろう。委員長だって女の子（笑）だからね、寝起きは機嫌が悪そうだとぼつちりはもうごめんだよ……

「……よし、行こうか」

「ああ、あのオンナの家か。確か……『ミステリーワールド』だったか？」

あ、覚えてたんだ。そういうの、あんまり興味ないと思っていたのに。

軽く部屋を掃除し、リビングへと降りる。あかねさんはいつも通り、パートへ行く用意をしているのが確認出来た。やはりこの人には頭が上がらないな。

「それじゃ母さん、行ってきます」

「ええ、行ってらっしゃい……って、アラ？スバル、どうしたの？そんなに浮かない顔をして……」

ヤベツ、顔に出ていたか。ボクもまだまだだな。どうにも険しい表情をしていたらしい。まさか一瞬の邂逅で見破られるとは思っていなかった。

「ううん、なんでもないよ」

つくり笑い。五陽田さんとのやり取りで培った、全く褒められたものではない特技だ。ごく自然に苦笑しているように見える……ハズ。

「そう……？人に話したら楽になるかもしれないわよ？」



疑問系でありながらも、何か確信があつて言及しているような声色だ。やはり母親、いや、やはりあかねさんか。この人に即席の演技で隠し事なんて、ちよつと無謀過ぎたと考える方が無難かもしれない。

……ここは、多少ぼかして正直に話した方が吉だろう。

「えつとね……………その、ちよつと失敗しちゃつたんだ。それはボクがやつたコトの結末なんだけど、ボクだけじゃない、周りの人にも迷惑をかけてしまった。あんなに、ボクを思ってくれたのに……………」

仲良くなった友人に予めわかっている負担を強いるのは辛い……………とは言えないよね。これはボクが心の中に留めておくべきことだ。

「……………」

「……………」

これ以上は言えないという意味を込めて、口を閉ざす。それでも、言いたいことの半分くらいは伝わっているはずだ。

「そう……………ウフフ」

「?」

「スバルもそういうコトで悩むようになったのね。母さんの知らないトコロで、どんどん大人になっていっちゃう。あーあ、ちよつと寂しいな……………」

寂しい、なんて言っているけれど、あまりあかねさんの表情に寂しさは見当たらない。もちろん、幾ばくかの寂しさは感じているのだろうけど、一抹の……というヤツだと思う。

「それは……」

「なんだか……昔ダイゴさんに聞いた話を思いだしちゃうわね」

「父さんの話……?」

「そう……宇宙飛行士ってね、大勢の人の期待を背負って宇宙に飛び立つの。沢山のスタッフ、それを見送る人々、そうした人達の願いを……一身に背負わなきゃいけないよ。」

でね、母さん聞いたコトあるの。『失敗は怖くないの?』って。……だってそうでしょう? 沢山の期待を裏切ることになるんだから……」

在りし日のコトを懐かしむように両の瞳を閉じ、胸に手をあてながら子供の寝物語でも語るようにゆつくりと言葉を紡いでいく。自然と聞き入ってしまうような、そんな優しい声だ。

「……………」

「そうしたらダイゴさんは、こう答えたわ。『失敗したっていいんだ。大事なのは、勇気を示すコトだ』って……」

「勇気を、示す……」

確かに、あの人なら言いそうなコトだ。

「そう……どんな困難でも踏み出す勇氣……『もし、俺が失敗しても……俺が示した勇氣はきつと、他の誰かを勇氣づける。そいつがまた失敗しても、また別の誰かを勇氣づけてるはずだ。人と人が、勇氣によつて繋がれる。そうして出来た絆は、とんでもないパワーを生み出すんだ』。ダイゴさんは、そう言つていたわ」

あの妻不孝も、中々いいことを言うじゃないか。絆が生み出すチカラは、決して侮れるものじゃないつてことなんだろうな。……まったく、ソロにでも話し聞かせてやりたくらいの名言つてヤツだよな。こんなん惚れるに決まつてるやろ！

「どう？ 悩みが解決するキツカケになればいいけど……」

「母さん……その、ありがとう」

「ウフフ、それにね？ そんなに思い詰めていたら、幸せが逃げちゃうわよ？ ミソラちゃんやルナちゃんだつて、そんな顔のスバルは……つと、言い過ぎたわね」

言い過ぎた？ そりゃあ、万年辛気くさい顔のヤツとは付き合いたがらないだろうけどさ。

………ゴン太やキザマロは？

「………うん？」

「……まあ、頑張りなさいってこと！アナタは前よりずっと強くなったわ。少なくとも、母さんはスバルを信じてる。だから、思いつきりやっちゃいなさい！」

「……………」

もうホントにガチのマザコンでいいかもしれない。あかねさんが優しすぎて前が見えないよ。

……ちよつと目頭が熱くなってきた、かも。

「ほら、男の子が泣かないの。男が下がっちゃうわよ？」

母さんの言葉にハツとして、目をゴシゴシと拭う。やはり抑えきれなかったらしく、手の甲は部屋に入り込んだ日光を反射して、キラキラと光り輝いていた。

「……………うん！それじゃ、行ってきます！」

よし、もう大丈夫。さて、早く委員長の家に行かないと。また大目玉食らっちゃうよ。「ええ、いつてらっしゃい、スバル」

——ガチャツ！

——白金家——

「……………来たわね」

昨日ぶりに訪れたボクを迎えてくれたのは、大分顔色の悪い委員長だった。微妙にメイクで隠しているけれど、目の隈は中々隠し通せるものじゃない。

「委員長、大丈夫……？」

「え、ええ……もちろんよ。さあ、番組はもうすぐ始まってしまおうよ？早く入りなさいな」

多分、ボクを帰してからも一人で情報収集していたのではないだろうか。委員長の様子を見るに、めぼしい情報は得られなかったようだけど。……はあ。（罪悪感が）辛いよ。

「……つと、そこのソファアにでも掛けてちょうだい」

白金家のリビングへと案内されたボクは、委員長の指示に従って柔らかそうなソファアに掛けることとなった。因みにマテリアルウエーブではない。高級品に間違いはないのだろうけど。

そう言えば、委員長の部屋にはテレビを置いていなかったことに気がついた。恐らく、白金家の教育方針なのだろう。設置されているテレビの型からして、節約つてことはないだろうし。

「さて……それじゃ、つけるわね」

委員長もボクの隣に掛け、いよいよキザマロが出演すると思われる秘境探索系番組、

『ミステリーワールド』を視聴する運びとなった。

ーピーッ!

『……………』

「……………うん?」

何やら理解出来ない言語で語りだしたキャスター。アメリロツパだから、アメリカだと思つて公用語は英語だと高を括つたのに……こんな翻訳機無しじゃ無理だろ……と言うか、以前学習プログラムでアイ ハブ ア ペンつて練習してたじゃないか!

「アラ、これ外国の番組つてコトを忘れていたわ」

「やつぱり言語が違うよね……」

「……………パパが世界中の番組を見たいつて言い出して、凄く性能のいいパラボラアンテナを屋上に取り付けたみたいなのよね」

「やつぱり、ちよつと羨ましいなあ」

「そ、そうかしら? ワタシはあまり興味ないんだけど……つて、そ、そんなに見たいんだつたら……べ、別に見に来てもいいのよ?」

「あはは……ありがとう。あの、そろそろ翻訳機能の方をお願いします……」

「……………(海外の番組つて、ニホンのものより過激なヤツが多いのよね。そ、その……キスしたり……とか……ハッ!ワ、ワタシは何を考えているのかしら!?)」

「おーい、委員長〜?」

「そ、そんな……………スバルくんだったら……………キャ〜ツ!」

何か委員長が徹夜明けのヤバイテンションみたいになってるんだけど、一体何時になつたら翻訳機能を使つてくれるのだろうか。もうキザマロが出ちゃうんだけど……

「あの、勝手に弄つてるからね? ええつと、自動翻訳機能は……………これか」

ーピーピツ!

何とかリモコンで切り替えることに成功し、翻訳されたニホン語が流れ始める。よく見ると、喋つてるキャスターはプロデューサーでもあるキュー出間崎だ。

『……………あなたを神秘の世界へと誘う! ドドーン! 「ミステリーワールド」!!』

「おつ、始まつたよ」

「エへへ……………もう、しょうがないわね……………」

委員長は疲れているみたいだし、暫く放置しておこう。どうせキザマロが出演すれば、目の色を変えるだろうしね。

『世界中で起こつた怪奇現象を、いち早く究明! 今週は……………ドギャーーン!!! 遂に姿を見せた! 「ドンブラー湖」の古代竜、その名も「ドツシー」!!』

ドドーン! とか、ドギャーーン!!! とかは効果音であり、キャスターが直接言つていくワケではない。それにしても……………このキュー出間崎がまつたく信用出来ないコト以

外は、中々面白そうな番組だ。キャスターが無精髭のおっさんなので、若干汚い絵面なのが珠にキズなのだけどね。

『ドンブラー湖』で謎の巨大生物が目撃された！直ぐ様現地へと飛んだ我々番組スタッフは、一人の少年と出会った！そしてその少年は……驚くべき真実を、我々に明かしたのだ!!』

そこで画面が切り替わり、ドンブラー湖を背後に映したと思われる場所で問題の少年……キザマロがインタビューを受けていた。

「あ!!」

「もう……どうしたの、スバルくん……って、嘘!? 本当!?」

『ボクは見たんです！湖を悠然と泳ぐ、巨大な影を……！あれは伝説の古代竜「ドツシー」に違いありません！「ドツシー」は本当にいるんです!!』

STAP細胞は……本当にあるんです!! 並に眉唾な話なだけどね、ドツシーって。もう観光資源扱いでいいんじゃないかってレベルで知れ渡っているみたいだけど。

「や、やっぱり……これ……キザマロよね!!」

委員長はやっぱり信じられないとばかりに、あぐりと口を開けている。嘘だろ承太郎! みたいな雰囲気になってきたな。

「うん! 間違いない……キザマロだよ! 良かった……」



「で、でも……あのコ、こんな番組に出て何しているの!? ワタシ達には連絡の一つも寄越さないで……!」

うわ、凄く怒ってるぞ。徹夜明けっぱいから、かなり気がたっているようにも見える。障らぬ神に……

「さ、さあ……?」

「~~~~ッ! ゆ、許せないわ!! このワタシがこんなに心配しているのに! アイツったら、一体何様のつもりなの!」

そりゃあ、ドツシー発見者様だけど……って言ったら理不尽な暴力に襲われそう。

……マジギレした美人の怒りは恐ろしいのだ。

「……………」

「スバルくん!!」

「ハ、ハイイ!!」

「迎えに行くわよ!」

「で、ですよね……」

「あのコに帰ってくる気が無いのなら……こつちから迎えに行つて、無理にでも連れ帰るわよ!!」

スゲーよ。ぶつちやけ小学生が思い着く発想じゃない。流石は未来の生徒会長だ

……!

「そうと決まればグズグズしていられないわ!早速、『ドンブラー湖』へ向かうわよ!」

「(ああなったら、何言っても聞かねえぞあのオンナ)」

ロツクも、お手上げだあ……とばかりに老けた老人のようなトーンで降参を勧めてくる。元から反抗する気なんてないんだけどね。

「(わかつてるよ。やっぱり、迎えに行くのが一番だ)」

「さあ、スバルくん!『ドンブラー湖』は何処にあるの!？」

「ええつと……ワールドマップに載っている、かも?」

最新型の端末であるスターキャリアーには、当然のようにワールドマップが搭載されている。検索機能もついているので、割と簡単に探し当てられると思うんだけど……

「それよー!」

――十分後――

エア・ディスプレイに表示されたワールドマップを、穴が空くほど見つめること早数分、遂にドンブラー湖を発見することが出来た。今はドンブラー湖周辺の情報を集めているけれど、思ったより上手いききそうだ。

やっぱりリアルブラザーなんていなかっただんや!同時にダブルトライブの芽も潰え

たつてことなただけどね。

「なるほど……ドンブラー湖はアメロツパにあるのね。細かい地理情報も頭に叩き込んだし、早速出発の準備をするわよ！」

「……えつと、その、ボク海外旅行なんて初めてなただけど……」

「…………は、初めて……？じや、じや当然パスポートは……？」

委員長が目を見開き、動揺しながらも問い掛けてくる。一応といった感じで、既に悪の想像が浮かんでいるのか、口調がたどたどしい。

「持っていないです……」

「くっッ!!パスポートが無ければ、飛行機に乗れないじゃないの!こ、困ったわ!」

「確か、今すぐ申請しても一月は取得出来ないって、テレビでやってた……」

「……そうよ!そんなに待つてられないわ!!」

「(それでも無いだろ?要は外国へ行ければいいんだよな?だつたらよ……さつき見たテレビ番組、どうやって外国からニホンまで届いてきたと思う?)」

なんと、自力で気づくとは。流石はロック。頭の回転は意外に速いんだよな。知ってたけど。……それにさつきの委員長もそうだけど、地理情報を頭に入れたってハイスペック過ぎない?部屋にもトロフィーが数多く飾ってあつたし……

「(そうか、電波体なら行けるかも……!?)」

「(そう言うこつた)」

「……委員長! その、『ドンブラー湖』へは先に行つてほしいんだ」

「何よ、藪から棒に……アナタはどうするの? まさか来ないつもり!? 外国に女の子を一人で送るなんて……アナタ、そういう趣味でもあつたの?」

「どういう趣味だよ、それ!?!……兎も角、ボクも必ず行くから。方法がありそうなんだ、ボクを信じて……ダメ?」

両手を合わせ、上目遣いで委員長に頼み込む。実際、未成年が一人で国外に出るなんて、sightseeing 観 光で通るかどうか……いや、人探しだったか。

「うっ……(可愛い……じゃなくて!) 大袈裟ね……わ、わかつたわよ! ワタシ、先に行つて待つてるから、アナタも後からちゃんと来なさいよ!」

一瞬、苦しうに胸を押さえたけれど、大丈夫だったのだろうか。喉に何か詰まらせたとか? ゴン太じゃあるまいし、それは無いか。

「うん! 『ドンブラー湖』で合流つてコトで!」

「わかつたわ。それじゃワタシは準備をするから……」

「うん、ならボクは一旦帰るね。それじゃ!」

「ええ、遅れたら承知しないわよ!」

え?! それはわからないよ……だつてスカイウェブの規模とかまつたくわからない

し、どれだけ時間がかかるかわかったものじゃない。

兎に角、委員長宅のあるマンションから退出する。ボクの方も、すっかり準備していかないといけない。海外を舐めると酷い目に遭うつてのはボクの持論だ。この体じや行ったことないけれど、おぼろげながらにそう思う何かがあつたことだけを理解出来る。

——コダマタウン——

「よし、それじゃあ今日はもう帰って寝ようぜ！明日に備えてな！」

「了解……ボクも荷造りしなくちゃいけないしね」

——数十分後——

軽く荷造りを終えた白金ルナは、空港へ向かうバスに乗るために、マンションの外に出ていた。昨日今日と常に室内にいたために、日の光を浴びて軽く伸びをする。バキバキと嫌な音が聞こえるが、彼がいるワケでもなし、名譽の旋律だと解釈することにした。「……よし。それじゃあ、ワタシも空港に向かわないといけないわね。スバルくんのコトだし、本当になんとか出来る考えがあるんでしようね……」

『ソフソフ……久しぶりだね、ヒロインのお嬢さん』

どこからともなく、胡散臭さが形になったような声が辺りに響く。ルナはハツとして辺りを見渡すが、辺りには誰もいない。愛しの彼も、既に自宅の方へと歩き去ってしまつたようだ。

「……………え!？」

『もう一度、私の作品に御出演願おうと……………』

人間には知覚出来ないスピードで、絶妙に手加減された一撃がルナを襲つた。電波変換もしていないただの人間では、攻撃されたことにすら気づくことは出来なかつた。

「きや……………!？」

『こうして、迎えに参つたのだ。ンフフフ……………!』

倒れた白金ルナを確認し、声の主……………ハイドが現れる。その顔は、不適な笑みで満ちていた……………

「これであの青いヤツを何時でも誘き出せる、と……………おや?このお嬢さん、もしや……………間違いはない!ンフフフ!こいつは想像以上に面白い筋書きが期待出来そうだし……………!」

——それから更に暫くして——

ーブルルル!!

「あ、電話だ。……委員長から? どうしたんだろう。……まさかパスポートの有効期限が切れてたとか?」

確か子供のパスポートだと、五年しか使えないんだったよね。いや、小学生がトラックを運転出来る時代だからな……なんとも言えないや。

いや、それとも……もしかしてファントム・ブラックからか!? そういえば、ボクが委員長から逃げ出していないから、委員長を浚うタイミングがなかったんだろうな。だから今になって……! クソツ、ゆる”さ”ん”!!

「ブラウズー」

ーブウーン

委員長からかかってきたと思われる通信には、やはり委員長が映し出されることはなく、ザーザーとしたノイズ混じりの映像が映し出されるのみとなった。

『やあ、このお嬢さんのお友達かな? 突然だが……暫く彼女は姿を消すそうだよ』

「……………この声……………ハイドか!」

『何……………? 私を知っているだ?! バカな! 何者だ、貴様……………いや、その声……………聞き覚えがあるぞ?!……………貴様、あの青い少年か!? ロックマンだな!? そうなんだな!』

どうせ声質でバレていたので、ここで隠す必要はない。

「この通信は委員長のスターキャリアーからだ……ハイド、委員長をどうしたんだ！ 答えろ！」

『ソフフフ……まさか貴様の方から現れてくれようとは……これまた予想外だ！ 実に面白い！』

脚本家が予想を外しくつてるのって、あんまり考えゴトが向いていないってことじゃないの？

「狙いはボクか!? 委員長は関係ないハズだ！ 直ぐに解放するんだ！」

『ソフフフ……！ そう急ぐことはない。私の脚本では

直ぐに再会出来るという筋書きになつていて！ おつと……貴様にはまだ言っていないのか？ かな？ 今回の作品の主人公は……貴様なのだ！』

「クソツ、相変わらず趣味の悪いコトをしやがるヤロウだぜ！」

『舞台は前作と同じ……映画館だ。なるべく急いで来てくれたまえよ？ 他の役者は既にスタンバイして、貴様を今か今かと待っているぞ……ソフフフ……これは大傑作になる！ では後程……待っているぞ、ロックマン！』

ーブツツ！

「委員長……」

ああ、わかっていても腹が立つ！ ハイドめ……今度はツーパンじゃ済まさないからな



！オマエラムツコロス!!

「100%ワナだぜ、こりゃ……」

「大事なものは、勇気を示すこと……だよロック。ワナならワナで、踏み潰して進めばいい。今のボク達なら、それが出来るハズ。そうでしょ、ロック！」

「へへッ、それでこそいつものスバルだ！さあ、あのふざけたマントヤロウに殴り込みと行こうぜ！」

「うん！」

映画館は……ロツポンドーヒルズのショッピングプラザ内にあっただよね。……急がないと！

ーローロッパンドーヒルズー

地上200メートルに浮遊しているロッパンドーヒルズ、その中心へと足を運んだボク達を待ち構えていたのは、ヒルズ全体を包んでいる異様な雰囲気だった。シヨツピングプラザ入り口に大勢の人が集まっている。こりやあ、既に一騒動起きてるな……！

シヨツピングプラザの入り口に、見慣れた人影が確認できる。あれは……

「……天地さん！」

「あ、スバル君！大変なんだ！シヨツピングプラザに妙な男が立て籠っているみたいなんだよ！しかも人質をとっているらしくてね……こつちも下手に動けないんだ！何とかしないと……！」

あの天地さんが、かなり慌てているというだけで、相当にマズイ事態だということは理解出来る。願わくば、シヨツピングプラザの関係者に被害が出ていませんように……「(……こつちで何とかしますから！天地さんはパニックが起きないよう、野次馬を抑えてもらっていいですか!?)」

「……そういうコトか。(今更キミを疑うことはしないが、立て籠っているのはかなり危

険なヤツだからな。気をつけていくといい)」

申し訳ないけれど、もう少しだけベルセルク（分体）は預かっけてもらおう。丁度いいし、このままトライブオンさせてもらおう。

「（はい！それじゃ行ってきます！）」

一応聞かれるとマズイことなので、小声でやりとりを済ませることになる。電波変換して、ショットピングプラザ内のウエーブロードを伝って行かなくちゃいけない。

プラザ内のエレベーターは人間専用なので、電波体には反応しないんだよな……いや、反応したらしたでマズイんだけど。

——ショットピングプラザ三階の電波——

「この先に、委員長が……！」

微妙に時系列はズレたけれど、この先でファントム・ブラックが待ち構えていることに変わりはない。委員長オヒュカスとの戦闘がメインではあるけれど、そこはソード系を用いれば現実の体へのダメージは極限まで抑えることが出来る。

「いくぜスバル！」

「うん！」

……突入！

——映画館の電波——

やはり、映画館には関係者はいない。まあ、脚本家として余計なキャストは招かない主義だろうから、予想はしていたが。

「……いたぜ、ヤツだ！」

ロツクの声が示す方向……ゴーストクライシスのセットである、洋館のマテリアルウエーブの屋根の上で満足げに佇むファントム・ブラックと、仰向けに倒れていると思わしき委員長を発見した。

「委員長！」

「ソフフ……来たか！これで役者は揃った……さあ、皆さんお待ちかね！シヨールタイム上演開始だ！いでよ！古代の兵士、『エラント』よ！」

ファントム・ブラックが大仰に腕を振ると、ファントム・ブラックへと続くウエーブロード上に、鎧を着た兵士然とした電波体が数体現れた。

「古代の兵士だつて……？」

如何にもな量産型のアーマーを装備し、右手には単色の大剣、左手には大楯で武装しているのは共通らしい。いや、完全遠距離型とかいても困るんだけどね。

「気をつける……おかしな周波数を発してやがる」

ロックも警戒する程度の脅威ではあるらしい。おかしな周波数なんて、今に始まったことではないような気もするけれどね。

「さて、ロックマンよ。私のところまでたどり着けるかな？ シッフフー！」

コイツホント性格悪いな……！ 後でベルセルクブレードでも投げ付けてやろうか。まあ、今は兎に角……

「「ぶっ飛ばす!!」」

この圧倒的シンクロ率。例え最強の拒絶が来たって、まるで怖くないね。あやな m ……委員長を返せ……ッ！

「蹴散らすよ、ロック！」

「へッ、先にバテるんじゃないぞ！」

誰に言ってるんだ！

「大丈夫、今のボク達にパワー切れは無い。……ねえ、オーパーツ。聞こえているんだしよ？」

「オイ、何言ってるんだ……!?!」

ロックは困惑しているようだけど、ボクにはハッキリとオーパーツが覚醒していることが感知出来る。いつまでも狸寝入りを決め込まれては、コチラとしても困るんだ。

キズナリヨクの数値的に無いとは思うけれど、万が一にでも我を忘れて委員長に襲いかかってしまったら、事案以前に悔やんでも悔やみきれない。

『……………ナンダ……………？』

ほらやつぱり。大体、毎回ロックが聞き逃す空耳なんて都合のいい真似を、この残留電波達の思念がするとも思えない。ロックには聞こえていないようだったから、ボクを対象として意図的に聞かせていたんだろう。その理由は恐らく……

「チカラを貸して欲しいんだ。……ボクがああ兵士擬きに倒されたら、困るんでしよう？」

言外に種族の復興がおじやんになっちゃいますね、こまったなあ？（大魔王）と脅しているようなものである。単純だけど現在の切羽詰まった状況では効果的……だと思う。

『……………ヨカロウ……………』

体の奥底から、何重にもダブって聞こえてくるような声だ。一人ではなく、数多のベルセルク達の意味が宿っているのだから、仕方ない。ただ、コイツ偉そうな言い方してんな……的な雰囲気を感じ取ったので、そこは弁明させてもらいたい。

「ボク達だって、成長しているんだ。いつまでも、貴方達に遅れを取るような鍛え方はしていない」

『……………ワカッテイル……………』

大層期待してくださるそうで、ありがたいことだ。やはりチカラを供給してくれていたのは、チカラを使いこなせるかどうかの試験運用的なものだったらしい。全く、老人ってホント遠回しなコトをするよ……………

体を譲り渡す気は毛頭ないけれど……………今は遠慮なく、精々酷使させてもらう！

ーードクン！ドクン！

「フウウウウ……………よし、イケる」

体の調子を確認しながら、ゆつくりとエランド達が待ち構えるウエーブロードへと足を運ぶ。

アドレナリンが分泌しているみたいで、どうにも高揚感が拭えない。……………ファイターズ・ハイとか？

バトルジャンキーだと思いたくはないけどね。

「だ、大丈夫か？」

やはりロックには聞き取れなかつたらしく、心配するように声をかけてくる。客観的に見たら、さっきまでのボクって空中と会話していたようなものか……………って、いつも

ロックとやってることだね。なら大丈夫だ、問題ない。(白目)

「大丈夫だつて。……ロックも分かるでしょ?」

「ああ、チカラが溢れてくるようだぜ……!」

これなら、あんな兵士擬きの物量に遅れをとることはないだろう。文字通り、蹴散らしてくれる!

「……で、コレがエランドか」

件のエランドの前に立つ。どうやら攻撃的な行為を取るまでは沈黙しているようにプログラムされているらしく、積極的に攻勢に出ることはないようだ。ただ、三メートル半径まで接近した途端に武器を構えだしたので、やはり衛兵的な目的で製作されたのだろう。

「近くで見るとやはり異質に感じるが……いけるな、スバル!」

「もちろん! ウェーブバトル! ライドオン!」

——十分後——

「うおおおおつ!!」

エランドの構えた大楯の上から、ヒートアッパーで殴り込んで映画館の壁面まで吹っ



飛ばす。壁面と衝突したインパクトによるダメージでデリートされたことを確認し、先へと進む。

「よし、次……って、やっと終わりか。フウ……」

エランド達にかける時間を減らすためにオーパーツのチカラを引き出ししているけれど、思ったより負担が少なくて助かった。負担が無いわけではないんだけどね。

「あいつら、雑魚の割には中々タフなヤツらだったよな」

そりゃあ、電波変換する相手を選ばない万能電波体だからね。ボクもエランドになってみたかったよ……

いや、流石に冗談だけど。兎に角、漸く洋館の屋根までたどり着くことができた。委員長はスヤスヤと眠っているように見える。まさに眠り姫だ……いや、クイーンか。……やはり委員長は、拉致られていても絵になるような気がする。拉致され慣れているということなのだろうか。最早職人芸では？と思うまでである。

「来たな……ンフフフ……いいぞ、脚本通りだ」

「委員長を返してもらおうぞ！」

おつといけない。既にオーパーツとは話が着いているとは言え、委員長オヒュカスの戦闘力を侮ってはいけない気がする。以前やったときに食らった、あの締め付けは中々ヤバかったからね。

「フム、それもよからう……だが、彼女自身はどうしたいと思っっているのかな？……直接聞いてみるがいい！」

「フアントム・ブラツク野郎の声に反応し、委員長が目を覚ます……が、ボクは今の委員長がフアントム・ブラツクによって催眠状態に近い処置が施されていることを知っている。胸糞悪いけど、連れ去られた段階でこれは防ぐことが出来ないので仕方がない。」

「委員長……気がついたの!？」

「……………」

一応呼び掛けてみるも、特に反応がない。目が虚ろなのもあるけれど、何よりも以前感じたアイツの周波数を色濃く感じる……！

「ーバシユツ！」

委員長の側で、薄紫色の炎が燃え上がるようなエフェクトが起こり、蛇遣いがよく用いそうな笛を構えた電波体が現れた。はつきりとした意識は存在しないようで、揺らめきながら佇む姿は正しく残留電波といったところか。

「ツ!!」

「オ、オイオイ！勘弁してくれよ！ありや、オヒユカスじゃねえか!？」

ロツクの言う通り、コイツは間違いなくオヒユカスだ。とは言え、委員長が電波変換した姿であるオヒユカス・クイーンは、この2ヶ月間で闘い慣れた相手でもある。油断

さえしなければ、こちらの勝率だけは揺るがないだろう。そう、勝率だけは。勝つだけなら楽なだけだなあ……

「オヒュカスって……委員長、まさか!？」

微動だにしない委員長の体を覆うように、オヒュカスがその体を融合させていく。残留電波とは言っても委員長を媒体にしているのだから、最新の注意を払って闘わないといけない。

「チツ、そのまさかだぜ!」

電波体やソロのような特殊技能か、ビジライザー特  
殊  
性  
癖を使用している者にしか知覚することの出来ない閃光が映画館を包み込む。フアントム特  
殊  
性  
癖・ブラックの  
変  
態も今ばかりは自らのハットを深く被り、対閃光防御の構えを見せる。

……お前がやつても強キャラ感はないぞ!

「委員長が……また電波変換してしまうなんて!」

閃光が晴れた先には最早見慣れた姿ではあるものの、しかし明らかにこれまで薙ぎ倒してきた个体達とは違う、女王然とした雰囲気纏ったオヒュカス・クイーンが佇んでいた。

「おやおや? お嬢さんは、貴様と戦いたいそうだ。ンフフフ……」

今回は自分が戦うつもりもないんだろう、やけに余裕そうな顔をしている。やつぱり

絶対一撃叩き込んでやるべきか、真剣に検討した方がいいような気がしてきたぞ。

「クソツ、委員長に何をしたんだ!」

「なに、大したコトはしていない。お嬢さんのカラダに面白い『記憶』が刻み込まれていたの……そいつを少し、呼び起こしてみただけだ」

呼び起こす……? ノイズドカードのようなことを可能とする技術がオリヒメ側にはあるらしい。それとも、脚本家らしく人の感情を把握することには長けているということなのかもしれない。……となると、コイツかファントムの個人的な技能だと考えた方が自然か。

……もうメンタリストにでもなつちやえよ!

「テメエ……ロクな死に方しねえぞ! ヤクシャだか脚本だか知らねえが、気取りやがって……!」

激昂するロツクを他所に、ニヤニヤとボク達を笑うファントム・ブラック。ホント、腹立つ顔をしているよ!

……決めた。やっぱり一撃入れることにしよう。極めて正当な憂さ晴らしをしてやる!

だけど、それよりもまず……

「委員長! 目を覚ましてくれ……気をしっかり持って、電波変換を解くんのだ!」

ここで委員長と戦う必要って、実はほとんどないんだよね。だからまあ……ダメ元で説得をさせてもらう。これで目覚めたら儲けもの……くらいの浅い希望だけど。

「……………」

やはり効果無しか。洗脳された委員長と戦うって、そこはかたなくエロティックな状況だ。委員長が素で戦闘態勢をとっているとも思えないし、体は許しても心だけは……というヤツなのかもしれない。

というかミソラちゃんも含めて、このパターン多すぎだろ！

「無駄だ！彼女が目覚めることはない……ソフフフ！元はと言えば、貴様のせいだ。貴様がちゃんとヒーロー役をこなしていれば、彼女はこうならず済んだ……違うか？」

責任転嫁とはまた、姑息な考えを……！

「全部、自分で仕組んでおいて……何を言っているんだ!!」

「ソフフフ！ソフハーハッハッハ!!」

ファントム・ブラックの声に反応し、委員長……オヒユカス・クイーンが戦闘体制に入る。とても2ヶ月超のプランクがあつたとは思えない程、堂に入っているように見えるのは、FMプラネットの戦士としての最後の意地だろうか。

「……やるしかない。ちよつと我慢しててね、委員長……！」

「……は向こうの脚本に付き合っつてやるしかない。」

はつきり言つて、凄い癩だけどね！

「さあ、戦え！そして物語は感動のフィナーレを迎える!!」

アンタはホント、地獄G.o.t.o.h.e.l.lに落ちろ！

「来るぞスバル！構えろ!!」

「必ず、必ず元に戻す!……ウエーブバトル！ライドオン！」

ボクとしても、あのフアン脚トム本・ブラ家ック気に一発入れてやらないと気がすまない。

今回はOHANASHI方式じゃないぞ！

……アイツとブラザーになるなんて、死んでも御免だからね！

## 32

——映画館の電波——

現在、オヒユカス・クイーンと戦っている洋館の屋上は50メートル×100メートル程の長方形になっており、更に客席から見て奥側の中心に5メートル×5メートル×5メートル程度の立方体型の小部屋がある。

見たところこの洋館は映画で使用されるセットのため、部屋として使うことは出来ない造りになっているようだ。その立方体型の上にファントム・ブラックが位置取りをしている。

「セアアツ！」

左腕にソードを展開し、ウォーロックアタックを敢行し、すれ違い様に委員長……もといオヒユカス・クイーンの右腕を斬り裂いていく。あの長い尻尾に捕まってしまったら最後、ウエーブアウト以外に自力で脱出する術はない。慎重に立ち回らないと……

「……………」

「チツ、面倒な……スバル！」

「わかってる！……………乱れ射つよッ！うおおおッ！」

オヒユカス・クイーンが腕を振るうと、その周りの足場から大量のヘビが湧き出してくる。これは確か『スネークレギオン』だ。このヘビ達が毒持ちの個体でないことは知っているけれど、人海戦術をとられると厄介なのでロックバスターを乱射してデリートしていく。

「……………!!」

無限ヘビ湧きは困ったらしく、本命と思われる『クイツクサーペント』という突進技を繰り出してくる。どうにもスピードに補正がかかるようで、その動きはヘビとは思えない程素早い。

「……………うわあっ！つと、危ない…………」

進行ルートから飛び退くことで、オヒユカス・クイーンの『クイツクサーペント』を避けることに成功する。残留電波ならヒートアップで返り討ちなのだけど、委員長の顔に炎拳を叩き込むわけにもいかないだろう。

「……………!!」

予め読んでいたのか、なんとか回避したボクに向かって最大威力・射程の『ゴルゴンアイ』をぶつ放してくる。なんとかシールドで防ぐことに成功したものの、首を振って範囲を広げようとした『ゴルゴンアイ』が洋館の足場や立方体型の部屋を焼き切ってしまう。



「ムッ……これは崩れるな。早く隣の洋館に退避しなくては……！」

高見の見物を決め込んでいたファントム・ブラックも、これには若干の焦りを滲ませながら揺らめくように瞬間移動し、隣の洋館へと移る。使用したのは、例のフワツとした瞬間移動だ。

「うわ……うわあああッ?!」

「………ッ?!」

マテリアルウェーブで構築されていた洋館は思いの外脆く、全体の構造を管理するプログラムが殺られたようで、一気に崩壊していく。当然、その屋上で戦闘していたボクとオヒユカス・クイーンも落下へと巻き込まれていく……

「こ、これはヤバい………」

この洋館は客席から屋上が見物出来るように造られているために、実際の地上は客席よりもずっと下になっている。いくら電波人間とは言え不死身じゃない。素のロックマンでは洋館屋上からの落下死も現実的であり得る。

つまり……もう委員長との絆を強くする云々を言っている場合じゃない!

「うおおおっ!!ベルセ……ルウウウク!!」

『……ベルセ・ルーク……デハナイ……!ワレワレハ……ワレワレハ………アクノ・

キーシダツ!!」

……つて、ええエエエツ!? アンタ、それって展示されてたヤツじゃないか! 我々つて言ってるから、集団の中の代表がそのアクノ・キーシってヤツなんだろうけど……

「……いや、知らないよ!」

しかも、普通に悪役つて感じの名前なんですけど!? 悪魔と相乗りなんて、絶対に御免被るからね!」

『ニドトマチガエルナ………クソガ』

「これもうわけわかんねえな!

「兎に角、頼むよホント!………トライブオン真・血族内包………ベルセルクツ!!」

落下中のボクの体を、凄まじい雷のオーラが包み込む。やはり圧倒的なチカラだ。これは先人達が溺れるのも無理はない。

……つと、その前に姿勢を整えないと。このままじゃ頭から地面に正面衝突だ。電波体でも痛いものは痛い。

空中でなんとか姿勢制御に成功し、両足でなるべく同時に着地する。

「動ける……!」

オヒユカス・クイーンと戦っていた洋館は割と縦長の構造をしていたために、着地の

衝撃もかなりのものが想像されたけど、ベルセルクの強化体にとっては屁でもないようだ。全く行動に支障が出ない。

「……………見つけた！」

辺りは碎け散った洋館の瓦礫が散乱し、元々壊れることが想定されていたのか埃まで立ち込めている。……………が、その立ち込めた埃の向こう……………50メートル程奥にオヒュカス・クイーンンの姿を確認した。

向こうもボクとほぼ同時にこちらの位置を把握したらしく、既に遠距離攻撃……………『ゴルゴンアイ』を放とうとしている。目が煌めいているのがその証拠だ。

「つて、マズイー……………うおおおおっ!!」

「……………ッ!!」

デス、ソードオツ！（投剣）

黒いオーラを纏った超次元的なシュートというワケでもないただの投剣は、オヒュカス・クイーンンの放ったゴルゴンアイを斬り裂きながら一直線に進んでいく。

「……………アアアアッ!?!」

ドスッ!……………という音でも聞こえてきそうな威力で、オヒュカス・クイーンンの顔に投げつけた剣は吸い込まれていった。うわあああ……………ど、どうしよう。ついやってしまった。これで顔に傷でも残ってしまったら……………!?!

「い、いや。今は兎に角、この戦いにケリを着けなくちゃいけない!」

強化されたベルセルクの脚力でもって、顔面に大剣が突き刺さったままのオヒュカス・クイーンに接近する。ベルセルクブレードが突き刺さったショックで悶えたまま、オヒュカスは抵抗するそぶりを見せていない。ちよつと気が引けるけど、ここは一気に止めを刺すべきだ!

「委員長、ごめん。……やらかしちゃったら、絶対責任取るから。………セアアアアアツ!!」

顔面に刺さって固定されている大剣を両手で掴み、そのまま両断するように斬り裂いていく……だ、大丈夫だよな?

「……………ツ!!」

流石に体を二つに引き裂かれるショックには耐えきれなかったらしく、委員長とオヒュカスの電波変換が解けていく。どうか無事であつてくださいお願いします……育田先生にも同じようなやり方をしたけど、特にマズイことにはならなかったので、大丈夫だと思いたい。いや、信じたい。

「……………う……………ロ……………ロックマン……………さま?」

ショックで電波変換の解除とともに気絶したのだと思っていたけれど、数秒で再び目

が覚めたので多分大丈夫だったのだろう。

「無事で良かった……」

さて、いくらか消耗したとはいえ、オーパーツからのエネルギー供給にはまだまだ余裕がある。やはりここは……大剣の一撃を叩き込んだ方がいいんじゃないだろうか。今ならまだ、大量の瓦礫によつて発生した土煙が晴れていない。隣の洋館屋上から様子を窺っているフアントム・ブラックに、こちらの状況が筒抜けすることはないだろう。恐らく、この姿もまだ視認してはいないはずだ。

「ロ、ロツクマン様？その姿は一体……？」

ああ、そういえば委員長にはサンダーベルセルクの姿を見せたことはないんだっけか。以前委員長入りオヒュカスとやり合った時はアイスペガサスで対応したから仕方がないと言えば仕方がないのだけど。

「ええつと……委員長（との絆）のおかげ、かな？」

多分、オーパーツに宿るベルセルク達の意識も、ボクの高いキズナリヨクによつて発生した強固な精神防壁によつて満足に支配することが出来なかったんだろう。まあ、事前に面通ししていたつてのもあると思うけど。

「……え？そ、そんな……ワタシのおかげだなんて……！ス、スバルくんだったら、しようがないわね……！」

滅茶苦茶嬉しそうに両手を頬にあててイヤンイヤンしているけれど、ちよつとオーバー過ぎない？ そりやまあ、委員長のことには凄く大切に思っているけどさ……

フアントム・ブラツクがまだこの場にいること、忘れてない？ 不意討ちとかされたら結構怖いんだけどなあ……

「ほら委員長、しつかりしてよ……」

「エへへ……ワタシのおかげだつて……エへへ……」

「コイツ、話も聞いちゃいねえぜ？ 暫くそつとしておいた方がいい。こうなつたら何をしても無駄だろうさ」

確かに……ダメだこりや。既に委員長は夢の国へと旅立つてしまったらしい。さつきから目を閉じてイヤンイヤンしているから、こつちの言葉が聞こえていない可能性すらあるな。

『なつ！、こんなコト……私の脚本には……』

どうやら漸く土煙が晴れてフアントム・ブラツクの目にこの姿が入ったらしく、驚愕の声が離れているこちらにまで、ハッキリと響いてくる。

恐らくオリヒメに聞かされていたのだろう、チカラの無き者がオーパーツを使うと身を滅ぼす……という話から、ボクにオーパーツを使いこなすチカラがないと高を括っていたのだろうな。

「バ、バカな……その姿は……べ……ベルセルク……!!な、なんなんだこれは……」

「これが、本物のオーパーツのチカラ……それに、オレにもハッキリと聞こえる……オーパーツどもの声が!」

どうやらロックにも聞こえるようになったらしい。元々取り込んでいたのはロックだから、聞こえない方がおかしいんだよね。もしかしたら、ボクにだけ聞こえていたことを気にしていたのかもしれない。……相棒なんだから、そういうのってなんだか水くさいよね。

「い、出よエランドよ!!そいつを……早くそいつを始末しろオオツー!!」

まるで三流の小悪党が、本当に焦った時に発するような声色で叫ぶ。同時に、客席方向の壁を背にしているボクの周囲に、エランドが群れを為して出現する。

今のボクなら、大した脅威じゃない。

久しぶりに、全力で暴れてやれる!

「父さんの言っていたことは本当だったんだ。勇気を示して、誰かと繋がったことで出来た絆……そこから生まれるチカラは……何よりも強い!!」

委員長を後ろに庇い、背中に背負った大剣を引き抜く。この程度の物量、庇いながら戦うなんて造作もない!

「スバル……新しいチカラの御披露目だ!下手こくんじゃねえぞ!!」

多分、以前の分体ベルセルクとは分けて考えろってことなんだろう。確かに、それだけ出力に差がある。もはや同じチカラを発現しているといっても、完全に別物と言っている。

「わかつてる!!……絆舐めんな!ファンタジー!」

両手を使って大剣を保持し、サンライズ立ちを決める。……やつぱり新戦力の御披露目は、ド派手にいかなきやいけないよ!!

「おうよ!いくぜスバル!」

「ああ!ウエーブバトル・ライドオン!」

開幕ぶつぱの恐ろしさを教えてやろうか!ええ!?古代の兵士さんよオツ!

「うおおおつ!……ツ!らあつ!」

斬りかかってきたエランダの斬撃を大剣で防ぎ、一瞬のつばぜり合いを交わした後に、右足で蹴り飛ばす。やはり通常時とは比べ物にならないほど強化されているらしく、面白いように吹き飛んでいく。

「次イッ!」

ロックスバスターで遠距離攻撃をかましてきそうなエランダに牽制をかけていく。どうやらエランダは胸の中央にあるパネルに強い振動が加わると、少しの間動きを止める性質をもっているようだ。



さつきまではそんなのまったく気にしないで殴り飛ばしていたから、全然気がつかなかった。

「セアアツ!!」

再び斬り込んできたエランダの剣を、剣の出力を上げることで今度はつばぜり合いを起さずに、エランダの剣ごとその体を二つに切り裂いていく。切り裂かれたエランダは微動だにせず、その体を虚空へと散らしていった。

……………そろそろいいだろう。

「オーパーツ……………コイツはとんでもねえ兵器だ。戦闘のし甲斐がある……………！オイ、そろそろ決めるぜ！スバル!!」

「ああ、わかっている……………いくぞ……………サンダアツボルトオツブレイドオツ!!」

大剣に走るエネルギーを、二振りの間だけ最大威力・射程まで強化してから風ぎ払う。このチカラ…………『サンダーボルト・ブレイド』は幾度も使用したけれど、流石に本家はモノが違う。わざわざ二度振った後に巨大な雷撃を落とさなくとも、エランダ達をチリにするには十分な威力を見せてくれた。

「ぐぐ……………」

フロントム・ブラックの歯噛みする音が聞こえてくる。相当な距離があるはずなのに、問題なく聞きとれるのは、オーパーツの聴覚拡張によるものなのだろう。

「し、信じられん、その姿……そのチカラ！ 本当にベルセルクだと言うのか……!? 私の脚本にはまったく無いぞ！」

ベルセルクって言うかアクノ・キーシらしいけどね。ま、どうでもいいか。真偽なんて、どうせわからないのだろうしね。

『……』は、ヒケ』

音もなくファントム・ブラックの側に現れたのは、古代の神官を彷彿とさせる、全身フード＆マスクの魔術師然とした男だった。というかエンプティード。マジックの方にはお世話になりました……つと、そんなことはどうでもいい。マズイな、アイツがいたんじやファントム・ブラックに手出しが出来ないぞ……！

「誰だ……!?」

「エ、エンプティード!? き、貴様見ていたのか……!? このような醜態を目撃されるとは……なんたる不覚だ!!」

元々醜態しか晒してなくない? というツツコミは控えておこう。事態をややこしくするだけだろうし。

「……」はヒケ。……そのオトコはキョウイだ」

ふうん、随分冷静なコトで。普通、敵が強化形態を手に入れたら、慣れないウチにハメ殺すのが定石だと思うのだけど……少なくともボクはそうする。

「……!!ど、どういうコトだ!?まさか、本当にヤツがベルセルクとでも……!?!」

「……かつて、ベルセルクたちは、ミズからがウミダした『オーパーツ』というチカラによって、ホロビキえさった。……カレらは、そのチカラをツカいこなせずジメツしたのだ」

「……………」

やはりエンプティーの組織内での地位は高いらしく、あのファントム・ブラックが大  
人しく話を聞いている。というか、エンプティーって結構カタコトな感じなんだね。知  
らなかった。

「だが、そのオトコはチガウ。ベルセルクたちをホロぼしたキョウダイなチカラを、おの  
れのチカラとしてミにつけている。ナカマのチカラによって、セイギョしているよう  
にもミえるな」

「……仲間のチカラ!?ヤツが言っていた『絆』か!」

「ここはヒクのだ。イマはまだ、そのオトコとタタカうべきトキではない」

言うだけ言って、エンプティーはまた音もなく姿を消してしまった。●RECられて  
たつてことはないよね……?」

「オリヒメ様になんと言いつつ……!クツ!!」

大の大人が言い訳とか……ダサくない?なんて思っているうちに、ファントム・ブ

ラックは揺らめくようにその姿を消してしまった。ああ、一撃入れ損ねた……

「消えちゃった……」

『ここは一度退かせてもらう……だが、この屈辱……！いつの日か、必ず晴らしてくれる……！覚えておけ……』

だからセリフが一々三下なんだって。実際組織内でも三下扱いだけど。可哀想に。子供にしか威張れない大人程、惨めなものはないよ……

「……逃げられたか」

気配も完全に消えたので、まず間違いないこの場から去ったのだろう。はあ……疲れ  
たあ……

「委員長、終わったよ。取り敢えず、一度コダマタウンに帰ろっか……」

「エへへ……もう、ホントにダメなんだから……！」

まだ戻ってきていなかった模様。委員長も大概、めんどくさいよね。……言ったらも  
がれそうだけど。

## 第四話 『라이어・ウエーブ』

### 33

——その日の夜——

「ロックマンめ……あのような醜態がオリヒメ様に知れ渡ってしまったら、私の株が下がってしまうのは避けられまい……！何としても、手柄を立てなくては……何としても……！」

オリヒメ至上主義のエンプティイが、これ程の重要案件の報告を怠るとも思えない。人知れず、ハイドによる名誉挽回作戦が決行されようとしていた……！

——翌日——

フロントム・ブラック

委員長

変態に浚われたお姫様を救い出すというどこかで聞いたようなミッションを達成し、ボク達は一度コダマタウンに戻ることにした。

幸いにも飛行機は夜間フライトだったので、空港へ向かう委員長とはコダマタウンで分かれている。そして『今日は疲れも溜まっちゃまってらるだろうから……ゆっくり休んで、明日行こうぜ！』と言うロックの言葉に従い、ぐっすりと休息をとることにした。

「昨日は大変だったね……」

「あのオンナはもう、飛行機とやらでアメリッパに向かっているんだろ？オレ達も急ごうぜ」

そういえば、ロックつて飛行機に乗ったことがないんだっけ。まあ、自前で飛べるから必要ないんだろうけど……

「ああ、そうだった。それじゃ、ボク達も出発しよっか！ええつと確か、パラボラアンテナ………だったよね？」

「おう、あのオンナが住んでいるマンションの屋上に取り付けられていた、ドデカイアンテナだな。先ずはウエーブインして、件のパラボラアンテナを調べてみようぜ」

「了解！」

ロックと話していると、方針がサクサク決まってやり易い。気が合うつてのはいいことだ。毎日一緒に過ごしていても、飽きがないからね。

——二十分後・コダマタウンの電波——

簡易的な荷造りも完了し、予定通り電波変換した状態でウエーブロードを伝い、高級マンションの屋上までたどり着いていた。

屋上までの道のりで、オーパーツの声を聞いたらしいロックがダブルトライブとトリプルトライブに関する説明をしてくれるが、ぶっちゃけ無駄じゃないかと思うんだよ

なあ……

オーパーツなんてヤバイモノが発見されていたら、それだけでネットに情報くらいは出回りそうだな。まあ、発掘者が情報を秘匿している可能性がなきにしもあらず……と言ったところだけだね。

「さて、早速調べてみようぜ。このパラボラアンテナと繋がっている電波とやらを、な」  
思いの外ノリノリに見えるんだけど、実は結構楽しみにしていたり？まあ、ダイゴさん達を世話してた頃にくらか聞いていそうだけだね。

何せ、最低でもステイプという名前の外人が乗っていたことがわかっているのだから。

「海外から届く電波かあ……乗り心地とか、どうなんだろうね」

「一先ずこれだけは言えるぜ。……そんなことを気にしてんのは、オマエくらいのモンだな」

「そういうものかなあ……？移動用のウェアブロードなんだからさ、使い心地って結構大事じゃない？」

「デンパ達に与えられる、労働環境の改善を求む！とかは聞いたことないけどね。ただ、アビリティを装備させるってことはつまり、デンパくんたちを戦闘の危険に晒す機会が増えますよ〜ってことだと思っただけ、そこのところどうなんだろう。」

「こ、こんなデンパにいられるか！ワタシはカエらせてもらう！とか、一度見てみたいよね。」

「さあな……」

「さいですか……ま、初めて使うんだから、なるべく慎重に行こう。道を間違えて南極あたりに出ちやつたなんて、考えたくもないからね……」

「あんまビビっててもしょうがねえって。迷ったらその辺のデンパでも取っ捕まえて、ちよつとお話間でもすりゃあい！」

「なんとという世紀末電波世界だろう。ヒヤッハー！汚物デンパは消毒だアーツ！とか言いながらヒートグレネードが飛び交う戦場には行きたくないよ……」

「そんなんだから、暴蒼なんて呼ばれるんだって！」

「ケツ、あんなのは腰抜け共が勝手に付けた、タダの通り名じゃねえか。ほら、とつとと行くぜ！あんまり遅くなつちまったら、ご機嫌だつたあのオンナもどうなるかわからねえからな」

帰宅途中にスターキャリアーを確認したところ、委員長とのキズナリヨクが高まつていたんだ。それを見た委員長は狂喜乱舞し、繋がらないとわかっているはずのミソラちゃんへと煽りメールを入れていた。返信は無かつたけれど、オリヒメ陣営の人間は暫くハーブ・ノートに近づかない方が賢明なんじゃないかなあ……



マジギレした女の子こそが最怖だつてことを、ボクはよく知っている。

「……………だね。よし！行くぞ、スカイウエーブ！」

「電波転送！スカイウエーブ！オン・エア！」

まだ見ぬウィルス達が、ボクらを待っている！

そうさ、ボク達は漸く進み始めたばかりなんだ。この果てしなく遠い、ドンブラー湖への道をよ……………！

ーースカイウエーブー

「おおお……………!!ここは……………高い！広い！それに見晴らしもいい！ボクもう、ここに住むよ！」

電波体だから呼吸も要らないし、ずっと居続けることになんの障害もない。スカイウエーブ、快適過ぎるって！

「オマエな……………！目的を忘れんなよ？電波は世界中を移動しているんだ、時には空を渡り、遙か遠方へと赴くコトもある。ここは恐らく……………そういった長距離を移動する電波の為にある通り道なんだろうな」

「へえ……………つと、凄いな。宇宙が近い……………」

この先に……………コスモウエーブがあるのか……………

「オイ、あんまりブーツとしてんなよ？ ウィルス共に不意討ちでも食らって、地上へ真っ逆さまなんてコトになっちまったら笑えねえ」

「あはは……ごめん。よし、先ずは『ドンブラー湖』に通じているかどうか、デンパくんたちに聞き込みをしよう！……流石に、ワールドカップと同じようには出来ていないだろうからね」

「おう……お話尋問だな!? 任せとけ!」

「違うって! 普通に聞くだけだから!」

ロツクはなんでこう、物騒な方向に持つていくんだろうか。まあ、ノリノリで付き合ったボクも悪いんだけどさ。

「………んにちは!」

取り敢えず近場にいたデンパくんに話しかける。スカイウエーブバージョンなのか、天使のような造形の羽が生えている。デンパくんですら飛べるというのに、ボクは……! ころしてでも　うばいとる! してやろうか!

「どうも〜!」

……なんて冗談はさておき、割と親切そうなデンパくんだ。この分なら、問題なく質問に答えてくれるのだろう。因みに体色はほぼ真っ白で、ところどころ黄色いカラーリングに、天使の輪が頭の上に浮かんでいるといった容姿だ。神々しい。

「ええつとね、ちよつと聞きたいんだけど……『ドンブラー湖』ってどう行けばいいのかな？」

「あーレイのドツシーソウドウの？ドンブラーコでしたら、このままミチなりにいったサキの『ドンブラー村』にありますネー。サビれたナもなきムラだったのが、ドツシーのおかげでカンコウキヤクだらけですネー」

「へえ〜……………あ、教えてくれてありがとう！」

成る程、道なりか……………スカイウエーブ扱いのウエーブロード自体がこの広さだから、イマイチ道なりってわからないのだけど、まあなんとかなるでしょう。きつと。多分。

「……………おしー行こうぜ！」

さて……………ノーコンテニューで、踏破してやるぜ！

——20分後——

「……………ええ！このサキが、ドンブラーコ上空のスカイウエーブへとツナがるワープポイントですよ！」

「ありがとう……………さて、と……………ここからドンブラー湖……………つまりはアメロツパまで飛べるらしいよ。何だか、とても信じられないよ！」

現在、ボク達の眼前には巨大なワープポイントが存在している。ドツシー騒動は伊達では無かったようで、先程から忙しくなくデンパくん達が出入りしているのが見てとれる。

「ほら、飛び込むぞ！ 快適な空の旅へ、ご案内つてヤツだ！」

「ちよつ、ちよつと……わかった、わかったから！」

唾を飲み込み、柔軟体操を始める。いや、ほら……アレだよ。着地の衝撃で足を痛めるかもしれないし？ ウイルスがいきなり襲いかかってくるかもしれないじゃないか。別に緊張してソワソワしてるってワケじゃない。……ホントだよ？ つて、誰に言い訳してるんだか。

「……よし、行こう………ハアアツ！」

勢いよく、ワープポイントへと飛び込んでいく。ワープポイントというか、射出装置だったらしく、一定の方向へ電波体を超加速させて飛ばすシロモノようだ。

「アツ！ あんまりイキオイよくトビコむと、アブないですよ！ つて、キいてないか……」  
遙か後方で、デンパくんが何か言ったような気がするけど、既に離れ過ぎて聞き取るのは不可能だ。どうやら、射出中の電波体の思考速度を加速させる機能もあつたらしく、超高速移動中でも考えことをする余裕がある。

恐らく、到着した先で事故るのを防ぐための措置なのだろう。

ードンブラー湖のスカイウエーブー

「……おっとつとー！」

ワープポイントに飛び込んだ時の勢いが保存されていたようで、飛び込んだ勢いそのまま飛び出ってしまった。

周りのデンパくん達には、一見さんを見るような目をされたけれど、実際ドンブラー湖のスカイウエーブに関して言えば一見さんなので問題ない。次から気を付ければいい話だ。

「ウエルカーム!!ここはアメロッパにあるドンブラーコのマウエにウカぶスカイウエーブです!!」

ちやんとドンブラー湖のスカイウエーブにたどり着けていたようでよかった。そういえば、電波変換を解いた途端にボクって一応密入国扱いになるんだけど、小学生にさせる行為としてはどうなんだろうか。

「こんにちは……ところで、ドンブラー湖周辺に降りたいんだけど、なんとかならないかな?」

「そうですね……このあたりはキホンテキにイツポンミチですので、トクにマヨウようなことはないとオモいますケドー……」

また道なりか。いや、電波の通り道つてことだから、あんまり入り組んでいと利便性の問題があるんだろうな。その辺りを考えると、スカイウエーブつて実は結構よく出来てると思うのは気のせいではないはずだ。

「そっか……ありがとう。助かったよ」

「イエイエー！ トウチャクしたデンパのアンナイも、シゴトのウチですのー！」

へえ……デンパ専用の案内役にプログラムされた電波もあるのか。さしずめ、ウエーブナビゲーターと言ったところかな？ ふふん、我ながら中々のネーミングセンスだと思う。少なくとも委員長よりはね。

委員長つて、猫に『いぬまる』とか名付けるのがデフォルトだからなあ……本人は真剣なだけに悲しい。

――数十分後――

やけに飛行しているウイルスが多いと思いつつ、広大なスカイウエーブを進むこと数十分、漸くドンブラー湖周辺へと降りられるポイントを発見した。途中で幾つかのデンプくんをウイルスから守護したので、お札にアビリティを貰っている。ぶっちゃけコスパ悪いけど、特殊強化系は戦術の幅が広がるのでありがたい。

「それじゃ、アンダーシャツとリフレクトを装備して……つと、こんな感じかな？」

「オイ、アビリティの整理はその辺にして……そろそろ行かねえか？」

「こういうのって結構楽しくない？ 限られた範囲の中で、何とかやりくりする……みたいな」

「……別に限られてねーじゃん。寧ろ、装備許容量は余裕だろ？ つーかオマエ、手に入れたアビリティを片っ端から装備してただけじゃねえか」

人はそれを、カオスぶこつた煮と呼ぶ。

……だって、フルクローズ全部乗せて最強じゃないか！ 寧ろロマン！ ロマンだよこれは！

しかし、反論出来ないのも事実ではある。

「……………さ、さあロック。そろそろ行こうか」

「露骨に誤魔化し始めたな……」

うっせえやい！

「ま、まあ別にいいじゃないか。……えっと、キミ！ このワープポイントって、ドンブラー湖周辺に通じているので合ってる……かな？」

丁度案内役っぽいスカイウェーブ版デンパくんを見かけたので、これ幸いと話題を逸らす。左腕のロックが、なんとも言えない表情になっていることを、はつきり自覚出来るのがもの悲しい……

「エエ！ そのワープホールにハイれば、ドンブラーコにわかぶムラにオリるコトがデ

キますよー！」

あ、ドンブラー村って浮いてたのか。ロツポンドーヒルズしかり、ドンブラー村しかり、最近の建築業者って妙に建造物を浮かせたがるんだよね。

「へえ……あ、村ってさっきのデンパくん聞いた、ドンブラー村のことだよね？」

「ああ、だろうな。まあ、気にしたってしようがねえよ。兎に角、そのワープホールからドンブラー村に降りてみようぜ。後のことは、あのオンナと合流してから決めりゃいいい」

そういえばワープポイントだと思っていただけけど、正式にはワープホールと呼んでいいらしい。今まで案内役の電波なんて会ったこともなかったから、全く知らなかったよ。

「……確かに。よし、それじゃあ行くよ……って、勢い余って地面に激突とか……」

別にビビっているワケではない。ただ……そう、ただ単純に気になっただけなのである。本当に。

「ねえよー！とつとと落ちろー！」

左腕だけウオーロックアタックという、何気に高度な技術をかましてくるロック。これは……落ちるって!!

「ちよつと……！って、うわあああああつ!!」



ワープホールの射出機構によって加速された体が、真下に位置しているドンブラー村へと真つ逆さまに落下していく……

ヒモ無しバンジーより余裕で怖いんですけど!?

## 34

ードドンブラー村の電波ー

「……うわあああああああああああつ?!……つて、アレ?」

ドンブラー村へと真つ逆さまに落下していたので、相当な衝撃が体を襲うだろうと覚悟していたんだけど、どうにもスカイウエーブ間で移動した時と同じでワーブホールに入る時の勢いだけが保存される……というよくわからない処理になったようで、目立った外傷や痛みはない。体勢は崩してしまっただけだね。

「……大丈夫か?」

「な、なんとか……つていうか酷いよ!降下してるつてのに、気分は天に召される三秒前みたいな感じだったんだからね!」

アレは本当に命の危機を感じたよ……電波体の死因が転落死つても間抜けな話なんだけどね。ただゆっくり降りていたら、ウィルスの横槍が入りそうではあるので、割と合理的なシステムなのかもしれない。

「大袈裟なヤツだな……」

「いっつもフワフワ浮いてるロツクに、地に足着けて生きるボクらの気持ちは一生分か

んないよ……」

「フン………まあ、ここで話していてもしょうがねえ。兎に角、そのウエーブホールからウエーブアウトしようぜ」

「……それもそうだね」

現在のボク達は、テレビ局の放送用車両に設置されていたアンテナのすぐ側にいる。どうやら、このアンテナが簡易型のパラボラアンテナになっていたようだ。

都合よく、視界の隅にウエーブホールを発見することが出来たので、一先ずボク達はウエーブアウトすることにした。委員長も探さなくちゃいけないし……

ーードンブラー村ー

ドンブラー村は、湖上に浮かんだ最新型の居住地ではあるものにも関わらず、何故か道は舗装されていないという不思議な村だ。前時代的（と言っても、2017年基準で考えると立派な住宅地が存在してはいるが）な町並みならぬ村並みが広がっている。

しかし、村に住む人達の顔は皆明るく、お祭り騒ぎなのか屋台まで出す始末だ。美味しそうな異国の料理が並び、グルメタウンもかくやといった様相を見せている。お腹減ってきたな……

「おお………電波変換を解いた途端に、海外に来た………っていう実感が湧いてきたよ。

ロツク、わかつてる？ボクらは今、密入国してゐるんだよ!？」

「オイ、あんまり滅多なこと言うんじやねえぞ?」

「大丈夫だよ。どうせドツシー騒動で訪れたミーハーな観光客が、派手に騒いでるようになしか見えないって」

言葉も通じてないだろうしね。英語圏でもないようだし、アメロツパって一体、どうなっているんだろうか。

「まあ、確かに一理あるが……そのドツシー騒動とやらで、他国の人間……つまりは二ホン人がいる可能性もあるってこつた。用心に越したことはないぜ」

それもそうか。そもそも五陽田さんが出張つてきてるハズだから、あんまり怪しまれないように立ち回らないといけないな……

「チエツ、わかつたよ。取り敢えず、委員長を探そうか。……外国に女の子一人なんて、心細いだろうし」

「(ハツ……オマエも漸く、オンナゴコロってヤツが分かるようになってきたんじやねえの?)」

「そりゃあ、ハープに嫌つて程仕込まれたからね……それに女の子を泣かすのって、最低なんですよ?そもそも、ロツクこそ理解してるワケ?その女心つてヤツをさ」

「(さあ?どうせオレには関係ねえし、適当にやればいいんじやねえのか?)」

「また無責任なコトを……」

「（へへへ……そんじゃ、後は任せませ）」

「つたく、テキトー過ぎるんだよな……」

兎に角、このドンブラー湖上に浮遊している村の中から、例の金髪ツインドリルを探さないといけない。委員長つて、割と外人の中に紛れていても判りづらい顔をしているから、ヘアースタイルで判別するのが一番簡単なんだよね。美人だからすぐわかるつてもあるけど。

そもそも、ニホン人のクセに金髪だったり赤髪だったり、ややこしい見た目が多いのも問題なんだよな……

……ボクの髪型？知らんよ。

――十分後――

取り敢えず、ドツシー騒動でそこその賑わいを見せるドンブラー村の中を探し回ること十分、ボク達は未だに委員長と合流出来ずにいた。ヤベツ、どうしよう……

「はあ、委員長は何処にいるんだろう……」

「（取り敢えず、何か大声で叫んでみたらどうだ？当然、ニホン語でだがな。あのオンナが近くまで来ているのなら、何か反応するかもしれないねえぜ）」

……ほう。ロックにしては珍しく、理に合った意見だ。翻訳機がない以上、ニホン語が理解出来る人としか意志疎通は出来ない。なら向こうから呼び寄せようってコトなんだろう。さて、問題は何を叫ぶかなんだけど……

「……………ラブリーマイブラザー……………委員長〜！」

どうせ声色で判断出来るだろうし、てきとうでいいよ。多分。

「オマエ、漢だな……………それに、『委員長』しかニホン語の部分がねえぜ？これは流石に……………」

「あはは……………」

逆にフラグっぽい気もするけどね。

『ふあああああああつ?!』

あ、釣れた。意外と近くにいたのか……………どうやら屋台を見学していたらしく、突然呼ばれたことに大層驚いたのが伝わってくる。も、申し訳ない……………

「あ、委員長！探したんだよ……………合流出来て良かった……………」

「ア、アナタねえ！突然何を叫んでいるのよ……………ああ、もういいわ！どうせ、ワタシのコトをピンポイントで探したかったのでしよう!」

委員長は頬を染めながらも、一応は理解の姿勢を見せてくれたようだ。まあ、今回は

ボクの方が全面的に悪いんだけどね。

「あ、分かってくれた？実は中々見つからなくてさあ……」

「海外と言ってもこんな田舎、探し回ればすぐでしょうに………というか電話しなさいよー！」

「……………」

「思いつかなかったのね……」

いや、ほら……………アレだよ。通話記録とかで足が着いたらマズイじゃない？近くの通信局に記録が残っちゃうかもしれないし……ハイ、言い訳ですぬすいません。

「……………ええっと、それじゃ早速キザマロを探しに……」

「露骨ね……………つとそれなんだけど、実は言葉が通じなくて困ってるのよ。アナタもあの方法を探ってたってコトは、会話が出来なくて困ってたんでしよう？」

ジトつとした目も最高です。あ、いや……………別に何か目覚めたというワケではない。ちよつと外国に来たばかりで反応がオーバーになっているだけだと思いたいんだけど……………あんまり説得力無いのが悲しい。

「うん。村の人に話しかけても、何を言ってるかさっぱりわからないんだよね」

「スターキャリアーにも翻訳機能は搭載されていないし……………そうね、先ずは言葉が通じる人を探しましょうか。ワタシ達と同じ、ニホン人がいるかもしれないわ」

「了解！」

一先ずは行動方針が決まり、ボク達は二ホンを探すことと相成った。ええっと、確かにポーターをやっていたキュー・出間崎がいたはずで……あまり好きなタイプの人ではないんだけどなあ……番組を盛り上げようってのはわかるけど、嘘はいかんでしょ、嘘は……

しかし、彼は自動翻訳機を所持していたハズなので、ここは頼らせてもらうしかないだろう。

——五分後——

浮遊している島同士を繋ぐ橋を渡った先に、探していた件の人物……キュー・出間崎の姿を発見した。先程見て回った時に見当たらなかったのは、収録した映像の編集のためだろうか。

「あの……こゝ、こんにちは……」

「……………」

反応がない。というかこちらに振り向いてさえくれない。酷い塩対応だけど、異国で言葉も分からない子供に付きまとわれるっていう迷惑をかけている自覚があるのでマナー云々は考えないことにする。寧ろ大衆の前で叫んだボクの方がマナー違反まであるしね。



「ボクの言葉、わかりますか……?」

「……………」

やはり無視されている。しかし改めて見ると……ホントに酷い格好をしている。半袖短パンつて……無精髭を生やしているから、なおのこと汚いおじさんにしか見えないんだよなあ……

「通じてないみたいね……」

因みにこの村の人だと、ペラペーラという理解出来ない言語ながらも一応は返答してくれる。実際のところは、単にめんどくさがられているだけなのだろう。

「ニホン人っぽいから大丈夫だと思っただけだね……仕方ないよ、他を当たろう。……ええつとすいません。失礼しました」

「……………オイオイ、静かにしてくれっつーの!」

ボク達が立ち去ろうとすると、突然こちらに背を向けたまま怒りだした。いや、こっちも悪いんだけどさあ……施しを受ける側なので、こちらからはなにも言えないのがボクの心をモヤモヤさせる。

「……………」

「二、ニホン語だわ!」

「せっかくいいネタかが浮かびかけたのに……話しかけられたせいで、全部忘れちゃまっ

たっつーの！ たたく、これだから素人は……空気読めっつーの。……で、何か用？ そのガキんちよども」

……コイツ、マジで腹立つ性格してるんですけど!? スターキャリアーで盗聴していたら、炎上確定モノだったのよね。……いや、落ち着け。落ち着くんだ星河スバル。キレたって、事態を複雑にするだけだ。それに、翻訳機をコイツが持っていることに変わりはない。

「……あの、ボク達言葉が通じなくて困ってて……ニホン語がわかる人を探していたんです。それで……」

「確かにオレはニホン語が話せる。オレはニホン人とアメロッパ人のハーフだからな」

普通ハーフって美形になりやすいハズなのに……

「それじゃあ……」

「断るっつーの!」

ボクが言い切る前に、腕を大仰に振りながら遮ってくる。どれだけせっかちなんだ……? 時は金なりとか座右の銘にしてるタイプなのかもしれない。

「ま、まだ何も言っていないじゃないの!」

流星にこの塩対応には我慢ならなかったのか、委員長が眉を釣り上げ出間崎に抗議する。一応、パーソナルビューでフルネームは確認出来るのだけど、自己紹介をする前に

名前を呼ぶのは失礼に当たるのだと、以前ニュースでやっていたような気がする。

「どうせ、『助けてくれ』とか言う気だろ？この『デマキュー』ことキュー・出間崎様が、なんで子供のお守りなんかしなきゃいけないーんだ。こっちは忙しいんだよ！空気読めつつーの！」

……………正論ではある。コイツにも仕事があるのは知っているから、間違いではない。職場で周りに迷惑をかけないように振る舞うのは当然と言えば当然なだけだ  
……

「ちよ……………ちよつとアナタねえ……………!!」

ヤバい。委員長の怒りが最高潮だ。背中に流したツインドリルは震えだし、揺らめくオーラはそんじよそこらの大人すら圧倒する程だ。端的に言うくと、凄く怖い。

「い、委員長……………もう行こうよ！この人忙しいみたいだし……………他を当たる？ね？」

「くくッ!!」

委員長の肩に手を回し、無理やり反転させる。そのまま怒る委員長の背中を押しながら愛想笑いでこの場を去ろうとするボク達。しかし、その様子を見ていたキュー・出間崎…………『デマキュー』の目が見開いた。どうやら何か閃いたらしい。

「……………いやいやいや!!ちよつと待てつつーの!!」

「「？」」

「ガキンちよども……オマエら二人だけで『ドンブラー湖』まで来たんだよな？」

突然の制止に疑問符を浮かべるボク達を気にすることなく、デマキューは確認と云うべき質問を繰り返す。よし、コノシユンカンヲマツテイタンダーツ！

「ハ、ハイ……………」

「それで、言葉が通じなくて困ってる…………？」

「ええ…………」

「……………いいね、いいねええええ！！こいつは視聴率取れるっの！！カメララー！！何処だ？こつち来いっつの！」

悪どい笑みを浮かべたデマキューが、別行動させていたらしいカメラマンを呼び出す。多分、時間からして昼休憩をとっていたのだと思うけど……嫌な上司だ。

——数分後——

離れていたカメラマンも無事に見つかり、いよいよもってニヤケ面を隠さなくなってきたデマキュー。彼の頭の中では既に、高視聴率をとる絵図が出来上がっているらしい。

「これからオレが、途方にくれているいたいけな少年少女にこの『自動翻訳機』を渡すから、そのシーンを情熱的に映すんだ！頼むぜ！」

因みに、ここまでこちらへの説明は一切ない。完全にアドリブでやれっことらしい。その方が『自然』に見えるのだと。番組製作のダークサイドなんて、こちとら知りたくもなかったよ……

「カメラスタンバイ!!ホレ、ガキンちよども、途方に暮れて!」

酷い無茶ぶりである。でもこの茶番に付き合わないと、翻訳機が手に入らないんだよな……翻訳機はマテリアルウエーブ並みに汎用性が高いので、常に品切れ状態が続いている。ちくせう。

「いきなりですね……」

「ハイ、本番!………キュー!!!」

この『キュー』つてのが合図なのだろう、カメラマンが撮影を始めている。対面しているデマキューの表情は、既に視聴者向けのにこやかなもの変わっているのを見ると、やっぱり番組製作って大変なのだと思う。

「……………おや、キミ達。なにやらお困りの様子だね?」

猫なで声……とも違うけれど、とても耳障りのいい声だ。流石にプロは違うってことなのだろう。ただひとつ言わせてもらえば、汚いオッサンではなくイケメンか美人にやって欲しかった……因みにボクはホモではない。今のはテレビ映りの話であると弁明させて戴く。

「…………あの、実は言葉がわからなくて困ってるんです。ドツシーに憧れてドンブラー村まで来たんですけど、これじゃあ…………」

「そうかあ、わかったよ！言葉が通じなくて困ってるんだね!?おお、可哀想！なんて不憫なんだ！こんな外国で言葉も通じず、少年と少女が二人きり…………さぞ心細かっただろう…………」

グスグス…………つと、セルフで泣き真似を入れるまでの名演技（笑）である。ただ、視聴者受けしそうな身ぶり手振りのせいで大根役者っぷりもあんまり気にならないのが逆に恐ろしい。

「さあ…………黙ってこれを受けとりなさい。ほら…………」

そう言つて、自動翻訳機を登録してあると思わしきデータカードを渡してくる。これ幸いと感動的な雰囲気を出してうやうやしく受け取っておく。翻訳機をタダで貰えるんだ。これくらい付き合ってもいいだろう。

「あ、ありがとうございます！やったね委員長、これで大丈夫だよ…………」

ほら、と笑顔で委員長に催促する。委員長も演技に付き合つてほしい…………という合図だ。

「…………え？あ…………そ、そうね！」

「イヤイヤイヤイヤ！礼なんて止してくれたまえ！ボクは、ね……困ってる子供を見ると放つてはおけないんだよ……」

フツツと、優しい笑みを浮かべながら一步下がるデマキユー。そろそろ感動のシーンも終わりらしい。ああ、疲れた……

「それじゃボクは、そろそろ行くよ……！キミ達……強く……生きろヨ……！」

そう言つてデマキユーは去つていく。明らかな茶番ではあつたけど、その背中には一分の演技っぽさもない。セリフより、所作で語るタイプの演技なのかもしれないな。

それにしても……ヤ、ヤバイ。草生えそうだ。さつきから、どうにもいい感じの雰囲気になると思つていたらカメラマンがしんみりするようなS Eをかけていたらしい。てつきりお祭り騒ぎの屋台エリアから流れてきたのだとばかり……

「オツケエエエ〜イ!!いいね、いいねえ!!」

先程までの優しい雰囲気や嘘のようにハイテンションなデマキユーが、ボク達の元へ戻ってくる。カメラマンにハンドサインで指示していたので、既に収録は終わったのだろうか。

「いいね、いいね、いいねいねえ〜!!これなら高視聴率間違いなやつーの!!シツシツシツシ……あ、キミ達にもう用はないから、どっか行つてくれる?」

最後まで腹立つ性格してんなコイツ！

——数分後——

さつさと引き上げてしまったデマキューを尻目に、委員長の機嫌は微妙に悪化していた。やはり最後の言葉がまずかつたらしい。しょうがないよ。誰でもキレるって、アレは。

「嵐のように去っていったよね。なんだつたんだろう、あの人達……」

「TV番組のディレクターってヤツでしょ!? サイターよアイツ! カメラが来た途端に態度変えちゃって……! 完全に『やらせ』じゃないのよ!! しかもなによ、あの棒読みのセリフ! なんなのよ強く生きろって!」

「さあ? ……家出してきたカップルにでも見えたんじゃない? フフツ、考えたらちよつと面白くなってきた……」

想像すると結構面白いけどね。反対し引き離そうとする両親を振り切って、海外へ高跳び……うん、なんかありそうな設定だ。……ただし、片方は密入国者である。でもこれじゃ、締まんないよね。

「バ、バカね。そ、そんなこと……あるわけ、ないじゃないの……」

段々声が尻すぼみになっていってる。ありや、もしかして拗ねてしまった? どうにも



委員長つて、海外のドラマとかを見る節があるんだよな……つて、別にどうでもいいか、そんなコト。

「まあ、そんなどうでもいいことはさておき……」

「ど、どうでもいいコト……!?!?」

崩れ落ちた委員長を放置し、スターキャリアのアイテム一覧を確認する。先程貰ったカードに入っていたデータは、既にスターキャリアへと登録済みだ。これでドンブラー村の人達と、いつでも会話することが出来る。

『自動翻訳機』もくれたし……助けてもらったコトには変わりないし……兎に角これで、本格的にキザマロを探せるようになったワケだ。早速聞き込みをしよう!」

「そうね……」

「ただ引き摺ってるんだよ、委員長……」

## 35

ードンブラー村ー

『ようこそ、外国からのお客様！ドンブラー村を、満喫していただくさいね!!』

『あ、さっきのお客様さん？なんだ、カップルだったのネ。ならお姉さん、サービスしちゃうわヨク！というわけで、ドンブラー村特製の「ドッシーフランクフルト」はいかがですか？』

『「ドッシー団子」……食べてみない？ビッグサイズだから、二人で食べても満足出来るわよ？』

『ボク、ドッシーを見るためにはるばるこの村までやってきたんだ！ここまでの交通費で、貯めてたお小遣い全部使っちゃった。絶対この目で拝むまで帰らないゾ！』

『そこのお熱いカップルさん！「ドッシースーパーボール」に興味ないかい？表面にドッ

シーが描かれた、活きのいいよく跳ねるボールさ！デートの記念に一つ、どうだい!？」

『お、その彼氏さん! 「ドツシー掬い」で遊んでいかねえかい? 紙の紐で掬い上げたドツシー人形を持って帰るんだぜ! 彼女さんに良いところ、見せるチャンスじゃないか……?』

『ワタシ観光に来たノ。もちろん目当てはドツシー! ドツシーを写真に撮れたら、きつと高く売れるワ! 一攫千金を狙うのヨ!』

『いらつしやくい! 「ドツシー焼き」だよ! 美味しいよ!!……え? 何を焼いたものかって?……美味しいよ!!』

『やあ、ニホンからのお客さん! 湖で採れた、新鮮な魚のフライを食べてみないかい? マヨネーズを付けると最高だよ!!』

『この「潜水マシーン」を使って、これからドツシーを探すのさ! ドツシーさえ捕まえられればボクはモテモテさ!……イヒヒ!』

『ドツシーアイスクリーム』、是非ご賞味ください！ドンブラー村特製のミルクをふんだんに使った、コクのあるアイスクリームですよ。おや……お客さん、キズナリヨクが500以上ですね。では「ドツシーアイスクリーム」を一つ、無料で差し上げますよ！』

『そこのお兄さん、鳥の丸焼きは要らんかね？ドンブラー村の名物なんだ、買って損はないよ。……どうだい？』

——数分後——

取り敢えず一通り村の人と話してみたけれど、キザマロに関する情報は、これと見て分かることも無かった。後探していないのは………展望台エリアと、ドツシーの入江エリアくらいだ。

確かキザマロは、ドツシーの入江エリアにいたはず………ただ、いきなり人気のない入江に赴くのもおかしいので、情報収集がたら歩き回っていたというワケである。不謹慎ではあるけれど、委員長と屋台を歩き回るのは楽しいので、ボクとしても焦るようなコトはなかった。

「うーん、あんまりロクな情報は集まらなかったね」

「や、やつぱりワタシ達、カップルに見えるのね……………フフフ……………」

ちよつと引くレベルでニヤケ出した委員長をその辺に放っておき、ボクはこの散策で邂逅しなかつた人物を探すことにした。確かこの辺りに……………

「あつ……………五陽田さん！」

背中にXのロングコート、そして特徴的なヘッドセット。間違いなく五陽田さんだ。今回、この人にはお世話になるかもしれないので、面通しをしておく必要があつたんだ。「んんっ!? ス、スバル君かね!? こんな所で会うとは……………なんて偶然だ」

「あはは、事実は小説より奇なり……………かもしれないね。ボクも外国で顔を合わせるとは思いませんでしたよ。それにしても、五陽田さんがここにいてるってことは……………」

「ああ、そうだ。本官はドツシーのコトを調査している。その為に遠路はるばるここまでやってきたのだ。これまでオバケ、雪男、神隠し……………と3つの騒動が起きた。ドツシーもUMAの一種だからな、これら3つの怪事件と何か関連がありそうな気がするのだ」

「へえ……………」

「兎に角、あまりいい予感がしないんだ。早く捜査を進めねばならん。それじゃ失礼するよ」

難しい顔をして、五陽田さんは何処かへ行ってしまった。まあ何時でも連絡は取れる

し、特に問題はないだろう。

「オイ、そろそろあのオンナの所に戻った方がいいんじゃないか？あんまり待たせると、後が怖いぜ）」

「う……………確かに。それじゃ一旦合流しよう」

「オマエも段々、あのオンナの扱いが雑になってきたよな。まあ、別に構わねえが」

「そこは信頼が厚いと言つて欲しいなあ……………」

ええつと、委員長を放置してきた場所は……………あ、いた。ヤベツ、ちよつと涙目になつてゐる。

「……………ど、何処行つたのよ……………」

「ああ……………ゴメンね。実はさつきそこで、五陽田さんを見つけてさ……………キザマロつて、パスポートを使つて入国したワケじゃないでしょ？一応、帰国する時に頼るかもしれないじゃないか。あの黒い穴を知っている、数少ない警察関係者でもあるんだし」

「そういうことなら……………まあ、今回は不問にするわ。それにしても……………キザマロつたら、一体何処をほつつき歩いていいのかしら！あと探していない場所と言つたら……………」

一旦言葉を切り、展望台の方を向く。ドンブラー村には展望台が建設されており、元々は広大なドンブラー湖の見学用だと思われる。ただドツシー騒動のせいで、展望台に訪れるのはもっぱらドツシー目当ての観光客ばかりとなっている……………といった感じ

だったはず。

「あつちにある『展望台』くらいね……行ってみましょう！」

「了解！」

——数分後——

「……………」

展望台へ続く木製と思わしき橋の前で、委員長が突然足を止めてしまった。……確かにデンパくんが乗ってミシミシいつてるんだっけ？

委員長は電波変換の経験もあるので、微妙に普通の人よりも敏感になっているのかもしれない。

「どうしたの？突然立ち止まっちゃってさ。展望台はこの橋の向こうじゃないか」

「変なのよ、この橋……さっき『ミシミシ』って音がしたのよね……」

一応耳を澄ましてみるものの、やはりこれといって奇妙な音は聞こえてこない。ビズライザーを通して見れば別なんだろうけど……

「ミシミシ、ねえ……うん、特に何も聞こえないよ。委員長の空耳か、振動音が橋まで響いて……」

「失礼なコトを言わないでちょうだい……確かに聞こえたのよ。この橋、危ないんじゃないかしら……？」

「はあ……見た限りでは新調されてからあまり年月が経っていない、新品なんだけどね。他の人も普通に使ってるみたいだし……」

へびつて、音に鈍感らしいんだけどな。いや、この場合は橋の上にいるテンパクんから伝わる、微細な振動を感じているのかも……と考えると、委員長にオヒュカスって割といいコンビだったのかもしれない。今となつては残留電波だけだね。

「ワタシは特別デリケートなの！もしワタシが湖に落ちたら、どうやって責任取つてくれるのよ！」

言外に神経質過ぎない？という意図を感じ取つたのか、責任問題まで言及し出す始末だ。

「……そこまで？」

ブンブンツ！と、凄いい勢いで首肯している。後ろに結んだツインテールが、首の動きにつられて上下に揺れるので大変可愛らしい。

「イヤ……このオンナの言うことは、そんなに的外れじゃねえぞ」

「ホント？さっきの散策中にちよつと食べ過ぎたとか、そんなんじやなくつて？」

「……スバルくん？」

にこやかに笑っているのに、何故か震えが止まらない。瞳を閉じて微笑んでいるのだけれど、今の委員長なら、見開いた瞳から『ゴルゴンアイ』をぶっぱすることも不可能



ではないんじゃないか……と思わせるオーラを纏っている。結論：委員長を怒らせる  
と、とても怖い。

「あはは……で、どういこうとっ」

「(電波変換して、橋を調べてみりゃわかる)」

ロックは電波体なので、橋の上で起こっているコトを既に理解しているのだろう。ピ  
ジライザーは電波体を目視出来ても、何故か会話することは出来ないんだよね……きつ  
と、電波体側が配慮しているのだろう。傍から見ると、電波を受信している人にしか見  
えないし。いや、間違っではないのだけど。

「わかったよ。取り敢えず、電波変換して橋を調べてみよう。……委員長も、それでOK  
？」

「ええ……つて、ロックマン様になるの!？」

「そうだけど……どうせ見えないだろうし、ぱっぱと終わらせて戻ってくるよ」

電波体同士で戦闘しているわけでもないのに、わざわざビジブルゾーンが発生してく  
れるとも思わない。況してや木製の橋上だ。特殊な電波的エリアが展開されるには条  
件が厳しすぎる。

「ムムム………仕方ないわね……!ワタシはここで待っているから、直ぐになんとか  
しなさいよ!……お願いね」

「うん、任せといてよ！委員長の為なら火の中の水の中……とまではいかないけれど、大抵のことはなんとかしちゃうからさ。だってボク達、ブラザーでしょ？」

我が儘に付き合うのもブラザーの内だ。それに、そんなことで一々嫌がつているのなら、始めから仲良くなったりはしない。互いに補い、埋め合い、許し合える関係……つてのが理想形だと思うね。

「ふ、ふーん。べ、別にそれくらい、ワタシだつてわかつてるわ……」

なんだ、急に髪を弄り出したぞ。ボクも結構クサイセリフを言つたつて自覚あるんだからさ、出来ればそこは茶化してほしかつたよ。

兎に角、橋からデンパくんを退けないことには委員長が橋を渡れない。優先順位を考えないと……

「……よし、それじゃ行つてくるねー」

「あ………うん。それじゃ……」

俯いたまま手首から先だけを動かし、ボクを送り出してくれる。そんなにしんみりしなくても、どうせ数分で戻つてこれると思うのだけど。

ーードンブラー村の電波ー

「……で、橋の上まで来たけれど、橋がミシミシいつた原因つて、もしかして……」

「ああ、もしかしくなくても、橋が軋んでるのは、あのデカイデンパのせいだぜ」

委員長が怖がっていた橋の上には、デカイデンパクン（ロッククにしては、相当オブラー  
トに包んだ表現だったけれど）が中央を陣取っていた。ビジライザー越しじゃない、電  
波体だからこそわかるこの質量感……凄く、デブいです……

「……ねえ、キミ」

「………ウツプ」

うーん、こりや有罪ですな。

「これは確定だな」

「………だね」

「……ウツプ。あの、ナニかゴヨウですか？」

キミをゴヨウして、何処かに強制送還出来れば最善なんだけだね。どうも浮いてる  
だけで精一杯っぽいな。浮いているのに橋が軋むとは、これ如何に。

「実はね………」

ー少年説明中ー

「………え？そ、それはすいません！まさかそんなフウにゴメイワクをかけていたと  
は！………ウツプ」

いや、普通の人は大丈夫なだけだね……ウチの委員長は特別デリケートらしいか

ら、寧ろ申し訳ないくらいだ。

「…………リブラ並に細かいあのオンナにも、少しは問題があると思うがな」

「……………ま、まあそんなワケで。ボクの友達が『ミシミシ』って音に酷く怯えているんだ。悪いんだけど、この橋から移動してもらえないかな？」

「そ、それが…………ワタシ、ついサキホド『HP+100/150』のアビリティをソウビしたんです。そしたらミテのトオリ、こんなアリサマになってしまいました…………ウツプ」

キズナリヨクの限界を超えてアビリティを装備すると、このデンパくんみたになっちゃうのかもしれないな。『ご利用は計画的に』ってことなのだろう。ボクも気をつけないと。

「そうだったんだ…………」

「イドウしようにも、カラダがオモくてウゴけないんです…………ウツプ」

思ったより深刻な状況らしい。こうして話してみると、口調に『ウツプ』が付くのも結構嫌なペナルティに感じる。

「その『HP+100/150』を外してみたらどう？」

「それはダメしたんですが、すぐにはモトにモドらないみたいで…………ウツプ」

外してコレか。何だか、オックス・ファイア辺りで引っ張った方がいいような気がし

てきたぞ。制限時間足りなさそうだけど。

「うーん、困ったなあ……………」

「ホウホウがあるとすれば……………ワタシのトモダチに、カラダをカルクするアビリティをモったデンパがいるんです。そのデンパにタノめば……………ウツプ」

それって確か、フロートシユーズだっけ？そんなもので、この巨体がどうにかなるのだろうか。残念ながら、そのフロートシユーズなるアビリティをボクは所持していないので、そのトモダチのデンパとやたらに頼るしかない。

「体を軽くするアビリティね……………そのデンパは何処にいいのかって、わかる？」

ドンブラー村周辺に存在するデンパくん達は二ホンのもとは仕様が違う、やけにハイテンション且つ全身のカラーリングが派手なタイプが多いのが特徴だ。

「いつも、ドンブラームラのチュウオウにイチする、ハナれコジマにいます。……………ウツプ」

「離れ小島、だね。わかった、探してみるよ」

こんな時にスターフォースが使えるば……………と思ったことは一度や二度じゃない。都合のいい時だけアクセス出来るようになってくれないかなあ……………

「おネガイします……………ウツプ」

――数分後――

「……………つと、ここだな。それにしても、随分と時間食っちゃった」

「やっぱり土地勘が無いからね……………しようがないよ」

ボク達は現在、件の離れ小島にきている。この離れ小島というのがまた曲者で、中々この場所まで繋がっているウエーブロードを見つけることが出来なかった。

まさかあんな場所から繋がっていたなんて……………取り敢えず、今は離れ小島のデンパクんにアビリティを譲ってもらおうのが先決だ。

「……………ちよつといいかな？」

「ハイ、ナンでしよう？」

――少年説明中――

「……………え？カラダをカルくするアビリティ？エエ、ソレならもってますけど……………」

「……………よかった。それで悪いんだけど、そのアビリティを譲ってほしいんだ。キミの友達が困ってる……………」

「へ？ワタシのトモダチがコマってる!?!そ、そういうコトでしたらもって行ってクダサイー！」

いそいそと体から取り出したのは、体を軽くするというアビリティ……………フロートシューズだ。見た目では、特に大きな差異はないようで、普通のフロートシューズと言

えばそのまま信じてしまうだろう。

「イマワタしたモノはホカのプロートシューズよりも……ダイエツトコウカがバツグンなのです！そのショウゴに……ムカシのワタシの스가タをミたら、きつとオドロキますよ。イマのバイくらいタイジユウがありましたからね〜」

へえ……ダイエツト効果か。ミソラちゃん……もといハープ・ノート辺りにあげたら喜びそうだ。いや、逆に怒られる、かも？

「カラダがオモくてコマっているなら、きつとこれでカイケツするはずです。ワタシのトモダチをヨロシクおネがいします〜！」

友達思いのデンパくんだ。どっかの古びた双眼鏡の電波にいた商人とは、まるで反応が違う。まあ、あの時は仕方なかったんだらうけどさ。業務用つてことらしいし、秘匿していたのかも……

「うん、任せといて！あ、でも後でお見舞い行ってあげなよ？結構苦しそうだったからさ」

「そうですね……わかりました！アトでヨウスをミにイつてみます！」

「うんうん……それじゃあボク達は、この辺で！」

「んじゃ、早速あのデカイデンパにプロートシューズを届けに行こうぜ！オレも、ドンブラー村の展望台とやらが気になってきた」

「ああ……コダマタウンにもあるもんね、展望台。最近あんまり行ってないし、今度風に当たってこようかなあ……」

——数分後——

「おお！それは！！……ウツプ」

急いで橋まで戻ってきたボク達は、漸く例のデカイデンパくんフロートシューズを渡すことに成功していた。な、長かった……

「……………オオ!!カラダがカルくなりました！サスガフロートシューズです！アリガトウゴザイマシタ！」

フロートシューズを装備したデカイデンパくんは、その鈍重そうな見た目が嘘のように、元氣よく歩き始めている。これならそう時間もかからない内に橋の上から移動出来るだろう。

「よし、これでもう大丈夫なはず。委員長もビビらずに橋を渡れるよ、きつと」

「ア、ちよつとおマちを！カンシャのキモチです！どうぞこれをおウけトリクダさい！」

そう言つてデンパくんは、先程まで装備していた強化アビリティ『HP+100/150』を渡してくる。これコスパあんまり良くないんだよなあ……無いよりはマシなのだけだ。



「ハシがコワれなくて、ホントヨかったです〜！」  
呑気ですね。他人事では無かったんだけどなあ……

ーードンブラー村ー

「……お待たせ委員長！どう、渡れる？」

「ええ、さつきから『ミシミシ』っていう音がしなくなったのよ！これで渡れるわ……！  
えっと、その……ありがと、スバルくん」

あんまり真正面からお礼を言われると、なんだか照れてしまうよ。ちよつと頬が赤く  
なってるような自覚もある。……委員長に見つかったら、笑い飛ばされるに違いないの  
で、ここは堪えないと。

「……………うん、きつともう大丈夫。じゃ、改めて展望台に行こつか？」

「ええ、そうね……………フフッ」

なんだよもう、やけにニヤニヤしちゃってさ。調子狂っちゃうから止めてほしいんだ  
けどなあ……

## 36

ードンブラー村・展望台ー

ウキウキの委員長を伴って橋を渡り、ボク達は漸く、展望台に足を踏み入れることが出来た。浮遊している展望台へは、専用に建造された浮遊型のエレベーターを使って入場する。

入場と言っても、特に入場料等を取られるという事もなく、備え付けの双眼鏡すら無料で利用出来るという親切仕様だ。ドツシーの写真なり、ハントなりで一攫千金を狙う連中にとっては、費用がかからなくて助かっているのだろうね。結果として現れるブラキオ・ウエーブをドツシーとするかどうかは、人それぞれなのだろうけど。

……兎に角、ボク達は聞き込みを続けることにした。どうにもロツクは既に飽き始めているようで、先程から溜め息や欠伸等が頻繁に聞こえてくる。なんだかボクまで眠くなってくるようだ。

『へーいー……メガネのボーイ？ドツシーを見つけた子だね、こっちには来てないよ。それにしてもサイキンは、ドツシーのおかげでカンコウキヤクが増えたよネー』

『メガネの子供?……うーむ、知らないな……そんなコトより、ココからのケシキはマキシマムさー! ドツシーも、ココからだったら見つかるカモしれないヨ!』

『おう! 観光かい? この村の名物は、マテリアルウエーブで浮き上がったこの展望台だね! 大昔、この辺りにあった村が地震と津波で沈んじやってね。で、こうなったら全部浮かせちやえってコトになったのさ!』

『このドンブラー村は、村も家もゼーんぶマテリアルウエーブで浮き上がってるのヨ! お陰で地震も津波も回避出来るってわけ! まったく、マテリアルウエーブは本当に素晴らしいワ!』

『……うえ? メガネの子? ああ……ドツシーを見つけた子かい。見かけとらんなあ……。つい数ヶ月前はこの村も、過疎化が進んでデンジャーだったのじゃがのう。最近はいえらいたくさんの人が増えたのでサプライズじゃ!』

——数分後——

やはり展望台にキザマロは来ていないらしく、有力な情報を得ることは出来なかった。この辺りになると、訪れているのはドツシー目当ての観光客ばかりなので、中央のような賑わいは薄れている。割と真剣に探しているように見受けられる人も多く、あまり居座り過ぎると迷惑になりそうだ。

「話を聞く限りでは、ここにもいない……みたいだね」

「……………一度、村の方に戻りましょう」

有力な情報を得られなかったからか、先程までの威勢はすっかりと鳴りを潜めていく。黙っていれば、割と文句のつけようがない淑女に見えるのは、気のせいや錯覚の類いだと思いたい。

ードンプラー村ー

……………なんだろう。イヤに賑わっているな。ここから見えるのは……機材、つてことは撮影中かな？

一体『ミステリーワールド』って、一週間に何度放送しているのだろうか。それとも収録だけしておいて、放送は後日……というタイプかもしれない。いや、搜索中の編集を考えると、やはり生放送ではないんだろうな。マグロ釣りの一攫千金モノだと考えれば、納得がいく。

『……前回は引き続き、神秘の舞台はここ「ドンブラー湖」！遂に！伝説の古代竜「ドツシー」が、我々の前に姿を現す！………かもしれない！』

「テレビ番組の撮影中みたいね……あのディレクターがいるわ」

あ、デマキュウの姿を視認して、微妙に委員長が怒りが再燃している。

……ちよつと根に持ちすぎじゃない？

「ねえ、委員長。この番組つてき、ひよつとして……」

『ミステリーワールド』の番組タイトルであることは確認していないけど、デマキュウに例のカメラマン……もしかしなくても、『ミステリーワールド』の収録だということは容易に想像が着く。多分、委員長も何の収録かは理解しているのではないだろうか。

『前回はカメラの故障というアクシデントに見舞われ、惜しくも「ドツシー」をこのカメラに納めることが出来ませんでした……しかし、我々スタツフは決して諦めません！世界中にいらつしやる「ミステリーワールド」ファンの皆様の為に、今日も神秘の世界へと果敢に挑みます！』

……自分で果敢とか言っちゃいます？まあ、重箱の隅を突ついても仕方がない。デマキューの言い種だと、世界中にファンがいるみたいだし、番組を盛り上げるための演出だと割り切りべきだ。どう見ても合成映像だとわかるUMA特集でも、騙される子供は一定数いるわけだし。

アレって、ゲストもコメントを一々考えるのが大変そうに見えるのは、ボクだけなのだろうか。

「やっぱり、『ミステリーワールド』だ。……キザマロが出ていた番組だよ！」

……と言うか、ここでキザマロが登場するのか。ゲームじゃ飛ばしていたような気もするし、微妙に前後関係が理解出来ないような気がする……

「そうよね。ってコトは……！！」

『では、今回もこの人にお話を伺いましょう！「ドッシー」の第一発見者……「ドッシーを見た少年」!!どうぞ、こちらへ!』

司会兼ディレクターのデマキューの手招きに従って、屋台エリアの向こうからキザマロが近づいてくる。遠目なのでよく見えないが、その顔はまるでロトシックスで3億2000万当てた男のように、鼻息荒く興奮している。

「キ、キザマロ……なによ……こんなところで何やってるのよ……ワタシ達の気も知らないで……グスッ」

ああ、委員長が泣きそうになってる。キザマロめ、可愛い女の子を泣かすなんて、最低の所業なんだぞ!?

……酷いブーメランだけど。

「委員長……」

『……………オツケエエエ〜イ!!いいね、いいねえ!!今回も視聴者はテレビに釘付けだっつーの!』

なんて考えている内に、撮影が終わってしまった。それにしても……こんな姿を衆目に晒していたら、アンチスレの一つや二つ、立ちそうなものだけ……ネットです十年近く、殺人事件の犯人扱いされた芸能人の例を知らないのか?あれは酷かった……

「撮影が終わったみたいだ。委員長、キザマロのところへ急ごう……!」

「ええ……そうね」

収録が終わり、野次馬達が残らずその場を去つても、キザマロは収録場所に居続けている。どうやら深呼吸しているようで、意識の切り替えでもしているのだろうか？

兎に角、今がキザマロに話しかけるチャンスであることに変わりはないので、ボク達は急いでキザマロの元に駆け寄つた。

「キザマロー！」

此方に背を向け、精神統一でもしていると思わしきキザマロへと呼び掛ける。勿論、周囲の人に迷惑をかけない程度の音量だ。

「……スバルくん!?それに、委員長!?ど、どうしてここに……!?」

ボクの声に肩をビクつかせて反応し、振り向いたキザマロは目を見開いて驚愕の声をあげた。まあ、普通は海外で友人に会えるとは思われないわな……キザマロも密入国者なんです、それは。

「それはこつちのセリフでしょう!?アンタこそ、こんな所で何やつてるの!?無事なら無事だつて、連絡くらい寄越しなさいよ……!!ど、どれだけ心配したと思つてるの……?ワタシ達が、どれだけ……!」

「い、委員長……」

委員長の、取り繕うこともしない純粋な言葉に、キザマロも罪悪感を覚えているようだ。普段あれだけ好き勝手に振る舞っている委員長が、泣きそうな顔で叱責しているん



だ。これで何も感じないワケはない。

「キザマロ。ボク達……本当に心配したんだ。偶々、『ミステリーワールド』の公式サイトでキザマロらしき情報を見つけて……それで、迎えに来たんだよ……!」

「ボクを……迎えに?」

信じられない……とでも言いそうな顔で、鸚鵡返しに口で反復するキザマロ。つい、口に出てしまったような呟きだけど、ボクと委員長の耳には確かに聞こえていた。

「……そうよ!アンタが帰ってこないから、ワタシ達の方から迎えに来てやったのよ! さあ、二ホンへ帰るわよ!」

「ちよ……ちよつと待つてください!ボクはまだ、帰りませんよ!」

泣き笑いの表情で委員長が差し出した手から目を逸らし、キザマロは確かな決意を滲ませながら、絞り出すような声で自らの方針を明らかにした。

「は……?な、なんですすつて!?!」

「いえ……帰れないんです!何故なら!ボクには重大な使命があるからです!」  
「……重大な、使命?」

ボクにも重大な使命があります。それは最低でもあと二回は世界を救わなければいけないことです。運が悪ければ、クロックマンの件も合わせてあと三回……

正直イヤになりそうだ。ただ、ダイゴさん救出はどうしても成し遂げたいことだ。ボク

クという存在がこの世界にあることで、星河スバルの周囲に不幸をもたらしてはならない。これは絶対だ。

……おっと、少し考え過ぎたみたいだ。

『ドツシー』ですよ！

「ハア？」

アンタ馬鹿ア？とでも続きそうなトーンだ。ツインテール以外共通点無いけど。

「忘れもしません……コダマタウンであの妙な空間に飲み込まれた後……気づくと空から落っこちていました。その落っこちた場所がドンブラー湖だったんです」

それって、普通に殺されかけたってことなのでは？ 尋常な人間は、高所から落とされただけで転落死確定だ。湖に落ちたと言っても、その衝撃は凄まじかったはず。高さによつては、アスファルトに叩きつけられるのと同じレベルの衝撃が体を襲う……とも聞いたことがある。流石はコダマ人……なのだろうか。

「一瞬で外国まで……？」

「そうです。ボクも何がなんだか……見知らぬ土地に迷い混んで、困り果てて……スターキャリアーで助けを呼ぼうとした、その時です！」

先程の『ミステリーワールド』を撮影していた時のような、興奮した語り口でキザマ口は当時の状況を話し出す。恐らく何度も話した内容なのだろう、実に語り慣れている

ように見受けられる。

「……………」

「……………」

「ボクの目の前に、現れたんですよ！あのドツシーが!!…………ドツシーは直ぐにその姿を消しましたが、ボクは足の震えが止まりませんでした。でも、それは恐怖じゃない。ボクは、今までにない興奮を感じたのです！そうです！あれは確かに本物でした！ボクはこの興奮を、誰かに伝えようと思いました。それが偶々、側にいたテレビ局の人達だったんです」

真実が、いつだって人を幸せにするものとは限らないけれど…………それにしたって、残酷過ぎやしないだろうか。

「それって…………ディレクターさっとカメラマンの？」

「そうです！彼らはボクの話をも、興味深そうに聞いてくれました！そして…………取材を受けている内に、ボクは感じるようになったんです。これは何かの運命だって…………！」

熱に觸されたような上気した顔で、キザマロは語り続ける。それにしても…………運命か。ボクの運命とは一体…………

「ボクは『ドツシー』の第一発見者として、『ドツシー』が本当にいるというコトを証明しようって！そう思ったんです！」

語り終えたキザマロは、興奮の余韻なのかとても満足げな表情だ。最後に話しかけたのがボクなので、ボクの方を向いているから気づいていないと思われるが、隣の委員長が震えだしている。当然恐怖の類いではない。激おこスティックブンブンドリームの方だ。怖い。

「バツ……バカじゃないの!?!それがワタシ達より大事なコトだつて言うの!?!そんなの絶対認められないわ!こつちへ来なさい、キザマロ!アンタはワタシ達と一緒に、ニホンへ帰るのよ!!いい!?!これは命令よ!!」

「い、委員長の命令でも……おおお、お断りします!デマキューさんが言ってくれたんです!ボクなら『ドツシー』を見つけられるつて……キミなら歴史に名を刻めるつて……!」

委員長の罵詈雑言と怒声の嵐を正面から受け、足の震えを自覚しながら目を見開いて反抗するキザマロ。

まあ……事情もわかっているし、ボクとしては無理に止めない方がいいと思っっている。誰にだって、心の支えは大切だからだ。ボクなら、あかねさんやロック、ブラザーの皆、みたいだね。

「デマキューつて……『ミステリーワールド』でディレクターをやってる人のコト……だよね?」

ボクの確認に、キザマロは恐る恐る首肯する。やはり委員長に罵られた恐怖が、まだいくらか残っているらしい。その膝は震えている。

「キ、キ、キ、キザマロ〜ッ!!」

委員長も既に怒髪天レベルで怒り狂っている。このままスーパーコダマ人に覚醒しそうな勢いだ。いや、オヒユカスが再び出てくる可能性もあるな……

「とと、兎に角、絶対に帰りません!ボ、ボクのコトは……放つておいてくださ〜いッ!!」  
泣きそうな顔でそう言ったキザマロは、怒り狂う委員長から体ごと顔を逸らし、橋を渡って向こうへと走り去ってしまった。あの方向にあるのは確か……ドツシーの入江か。

「あつ、ちよつとキザマロ!?委員長、キザマロが……」

「……放つておけばいいわ!!もうアイツとは友達でも何でもない……絶交よ!!」

キザマロの強硬な姿勢に、興奮した委員長は絶交宣言までしてしまった。幸いなことに、キザマロには聞こえていないはずなので、関係修復には問題ないだろう。

「(この迫力……生半可な胆力じゃ近づくことも出来ないよ……!)」

「(今、このオンナに近づいたらヤバいんじゃないかねえか?とぼちちりを食うぞ)」

「(そういうわけにも行かないよ……キザマロにも、譲れない部分があるみたいだしね)」

「(フン……まあいいんじゃないかねえか?向こうはまだ行つてねえし、オレも多少は興味があ

るぜ)」

ロックも多少は乗り気の様子だし、早速向かわなくては。その前に、まずは委員長に行き先を告げておかないと。……委員長、一人で放置されると直ぐに泣いちゃうし。

「ねえ、委員長」

「……………」

委員長は、先程の絶交宣言からこちらに背を向けているのでその表情を見ることは叶わないが、内心では荒れに荒れていることが簡単に理解出来る。

ただ、無反応は止めてくれませんかね……

「さっきのキザマロの態度……きつと何か理由があるんじゃないかと思うんだ。ボクが少し話してくるから、委員長は、ちよつとこの辺りで待っていてくれないかな？」

「……………」

やはり反応はない。一応聞いてくれてはいるようなので、制止が無い以上は勝手にさせてもらうべきだろう。

「じゃ、行つてくるね……………」

「……………」

うーん、無反応。ビジライザーはかけていないけれど、ロックが肩を叩いて励ましてくれているらしい。凄くジンジンする。

……何？気にすんな？余計なお世話だっつーの！

ードツシーの入り江ー

ドツシーの入り江は羊の放牧地帯にもなっているようで、色とりどりのカラフルな羊達がメーメーと鳴きながら草を食み、水を啜っていた。近くには既に使われていない風車もある。これは恐らく、景観の為に残しているだけの置物扱いなのだろう。長閑な霧囲気を醸し出して、草花の香りが心地よい。

全体の構造はコの字を対称にした地形に近く、奥にはマイナスイオンでも放ちそうな滝まである。随分と霧囲気のいい場所にも関わらず、人気はほとんどない。ドツシーを探すなら展望台へ、という認識が既に広まっているのかもしれないな。

「やあ……さつきぶり、キザマロ」

入り江奥にある、滝近くの足場で黄昏ていたキザマロに、後ろから声をかける。どうやら考え事をしていたらしく、ボクの呼び掛けにビクツと肩を震わせてからキザマロは振り向いた。

「スバルくん、ですか……言っておきますけど、ボクは帰りませんよ」

ウソダンドドコドーン！



……茶化していい話じゃないな、コレは。

「うん、それはわかっている。でもさ、ちよつと意外だったんだ。委員長、かなり怒ってたじゃない？……まさに鬼って感じだったよね」

ボクという言葉に、キザマロは一瞬だけ驚いたような表情を浮かべ、次いで苦笑する。どうやら、先程の委員長が見せた憤怒の表情をコミカルに思い出したらしい。

「フフツ、確かにあの委員長には、鬼という表現がピッタリでしたね。ああ、今思い出しただけでも恐ろしい……ブルブル」

笑っている内に恐ろしくなってきたのか、今度は震えだしてしまった。今日のキザマロは忙しいな……

「……で、それだけ怖がっていても譲れない何かがあるんだよね？……単刀直入に聞くとよ。どうしてそんなにドツシーに拘るの？」

ボクがストレートに聞いたことで、誤魔化すことが不可能だと悟ったようだ。体の震えを止め、顔を俯かせる。何だか尋問しているようで、嫌な気分だ。

「……流石にスバルくんですね。……隠しているも仕方がないので、この際言ってしまう。ボクがドツシーに拘る理由、それは……」

そこでキザマロは、俯いていた顔を上げてボクとしっかり視線を合わせて言い始める。

それは何か、堪えていたモノが染み出すような……そんな危うげな予感を感じさせる瞳だった。……こんな顔を、ボクはブラザーにさせているのか。

「ボクも、欲しいからですよ。何か『誇れるモノ』が……」

そこまで聞いて、ああ……気づいてしまった。キザマロのスターキャリアーが示すキズナリヨクの数値が、10まで低下している。これは……酷い皮肉だ。

「……………」

「委員長には生まれ持ったリーダーシップがあります。ゴン太くんは力自慢。そしてスバルくん………キミはヒーローです。……そう、ボクだけなんです。ボクだけ、何もなんですよ。誇れるモノが……」

そう言って自嘲するようにフフフ……とキザマロは笑う。もしかしたら二ヶ月前、ボクが自身をロックマンだと明かすまで、特別な友人では無かったにしても何か、親近感のようなモノを感じていたのかもしれない。

「キザマロ……」

「だから………どうしてもドツシーを見つけないんです。そうしたら、ボクはきつと変わることが出来る………そう思ったんです」

人は、変わるこの出来る生き物だ。今回でキザマロは、大人の汚さを知るのだろう。しかし、新たな繋がりを得ることも出来る……ハズだ。

それを踏まえて、どう自分の糧としていくかは、キザマロ次第。ただ……自分を誇るために勇気を示したキザマロの行動を、ボクは否定したくない。

「……………」

「スバルくん、ありがとう。……でもお願いです。ボクのコトは放っておいてください」  
「……………うん、わかった。いや、わからないけど……キザマロの決意はちゃんと伝わってきたよ。ボクとしては、キザマロの言うことも……ううん、ダメだ。ちよつと考えが纏まらないや。……兎に角、ボクは行くけど……でも、諦めないよ。委員長も……ボクも」  
「……………」

「それじゃあ……………」

それだけ言って、ボクはキザマロの前から立ち去る。後ろからキザマロの視線を感じるが、今は交わす言葉が見つからないようで、特に声をかけてくることはない。

ーードンブラー村ー

「あ、委員長……………」

呼び掛けたボクの声に反応し、こちらを振り向くも傍らにキザマロがいないことから、説得に失敗したことを理解したらしい。

「……………キザマロは、やっぱり戻らないのね？」

「でも、ちゃんと理由があつて……」

「理由？……ワタシ達を拒否するほどの理由つて、どんな理由よ！ワタシとあの子はもう、絶交なの！………フン!!」

ダメだこりや。

「取り付く島もないね……」

「(このオンナなら、いつものコトじゃねえか?)」

「(………)」

まあ、もしボクが面と向かつて委員長に『絶交なの!』なんて言われたら、一週間は余裕で引きこもる自信があるけどね。そしてそのまま、ツカサ君にコンタクトを取つてしまふそうだ。

……いや、他意はないのだけれど。

ーその頃・ドツシーの入江ー

「何としても、ドツシーを見つけるんです……」

スバルが去つた後、入り江の更に奥、離れ小島へと続く橋の上を渡りながら、最小院キザマロはドツシー探しに勤しんでいた。

「だってボクには、何も無いじゃないですか。背は低いし……目は悪いし……運動も出

来ないし……」

彼にとつても、二ホンまで遙々迎えに来てくれた友人達を無下にすることは辛かった。

「勉強が出来ると言つても、委員長には勝てません……こんなボクにも何か、誇れるモノが……」

だが、それ以上に辛いことがあつたのだ。委員長達は自分のことをちゃんと見てくれている。それは理解出来るのだ。ただ、自分から見た彼らは眩し過ぎる。彼らの眩しさは、まるで自分の輝きの弱さを自覚させられてしまうように感じてしまうのだ……

「……………!?!」

橋を渡りきつたキザマロが目にしたのは、異国に迷い込み、右も左も判らぬ自身の話を、興味深いと聞き入ってくれた『ミステリーワールド』のディレクター、デマキュウの姿だった。

「あ、あれはデマキュウさん!?!こんな所で一体、何を……?」

暫しの間、小学生にしては優秀な部類の頭脳をはたらかせるキザマロ。真剣に思考を巡らせた数瞬の後、遂にキザマロの脳内で一筋の電流が走った。

「……………そうか!『ドッシー』を探しているんですね!?!疲れたから一休みするつて言っていたのに……すごいです!ドッシーにかける、その情熱!よし、ボクも見習わなけれ

ば……」

この位置・声量では、入り江の奥にいるデマキューまで声が届かない。デマキューへの評価を上方修正したキザマロは、協力を申し出ようと大声で呼び掛けようとした。ここで振り返り、音も無く立ち去っていれば幸せな夢を見続けていられたのだろうか……

『マテリアライズ！潜水艦！』

「……………え？」

デマキューの構えたスターキャリアーから現れたのは、青色を基調としたボディを持つマテリアルウエーブ……潜水艦だった。

『……………いいね、いいねええ！！遂に「ドツシー」がテレビに登場だっつーの。これで間抜けな視聴者どもは大騒ぎだ!!』

そのマテリアルウエーブは、機体の上部に細長い棒状の装飾……つまり首のようなモノがついていた。当然、その細長い首の先には、まるで恐竜のようなヘッドパーツが取り付けられている。

『……………よく考えてみるっつーの！いるわけないだろ、ドツシーなんて……………！どうせ視聴者どもは娯楽しか求めてねえんだ。真実なんざ、ねじ曲げちまえばいい!!』

誰もいない（と本人は思っている）入り江に來た解放感からか、番組の眞実をつまびらかにするつたデマキユー。

小島の陰で一部始終を目撃していたキザマロは、既にシヨックで倒れそうな足を何とか支えているような状況だった。

「そ、そんな……あのディレクターさんが、ヤラセを………!?じゃ、じゃあ………ボクが見たあの影も……!?」

緊張とシヨックから、無意識に後退りしていたキザマロだが精神状態が不安定だったためか、周囲の把握を怠ってしまう。その過失は、地面に落ちていた小枝を踏み折ってしまうという最悪の結果を招いてしまった。

「ヒッー」

「ムッ!?ダ、ダレだつーの!!そこにゐるのは……!?」

キザマロの悲鳴が耳に入ったデマキユーは、反射的に振り向き、背後だった場所に注意を凝らす。これでもディレクター兼リポーター兼プロデューサー。秘境探索で培った観察力には、並々ならぬ自信があつた。

「あわわわわ………」

「………!!!み、み、み………見てしまったなッ!」

眞実を知られしまい、焦りを隠せないデマキユーがキザマロへと歩み寄る。その足取

りはゆっくりだが、确实だ。デマキューの凄まじい形相に相對し、腰を抜かしてしまつたキザマロに逃げる術は無かつた……………

「うわあああつ!?!」

——数分後——

焦るデマキューは半端に暴れるキザマロを縛り、何とか潜水艦へと押し込むことに成功していた。その行動に計画性は無く、短絡的なその場しのぎであることは疑いようもない。

『だ、出してくださいいいッ!!』

「や、やべーつつの! 取り敢えず小僧は潜水艦に閉じ込めたが…………」

『出してくださいよおおつ!!』

「う、うるせーつつの! 出せるわけないだろ!」

『な、何でヤラセなんかを……………!』

未だに信じられない……………! という思いのこもった叫びを聞いたデマキューは、一度スーハーと深呼吸をした後、やれやれ……………とばかりに頭を振り、開き直つた姿勢を見せる。

「いいか、小僧……………オレのいる業界じゃあな、真実なんぞ、何の価値もねえ。…………大



事なのは数字だ！視聴率だ！！

『ひ、酷い！！』

「酷いだあ？それはこっちのセリフだ！！オレだつて若い頃はこうじゃなかった！カメラに映る、有りの俣を視聴者に届けてた……！」

今は無き過去の姿を、苦々しい思いと共にデマキューは吐き出す。掌が真っ白になるほど強く握り込み、更には歯噛みまでしている。ギリリ……！という音が聞こえてきそうな程だ。

『じゃあ、一体どうして……』

「それじゃ数字は取れねえっつーの！！今じゃ業界の天才なんて言われてるけどな……昔は結果が出なくてうだつの上がらない日々だったんだ！！そんでやむにやまれず、ちよいと映像に細工してみたんだっつーの」

在りし日の自分を嘆くように語り、そしてある分岐が起きた時のことを話すデマキュー。その分岐点でもし、違う選択肢を選んでいけば、今ここに立っていなかっただかもしれないと考えると、デマキューは震えが止まらなくなるのだ。

「そしたらどうだよ……数字は鰻登りだ！！オレはな、このやり方に味を占めたわけよ。シッシッシッシー！」

——答えは得た……とばかりに清々しい顔で青少年の夢と希望を粉碎しにかかる

『汚い大人  
デマキユー。』

『……………』

「これを聞いても、オレが悪いと思うか？ええ？悪いのは視聴者だろ！」

キザマロの精神力は、とつくにゼロである。信じていた人間に裏切られる事ほど、心を扶るものはない。キザマロは今、何を信じていいのかさえわからなくなっていた。

『そ、そんな…………と、とにかくここから、出してくださいさあああ!!』

「……………チツ！そ、それにしてもやべーつつーの…………この後どうするつつーの？逃がしたら、ドツシーのコトがバレちゃう！」

逃がしたらドツシーのコトがバレてしまうし、逃がさなくとも、この音漏れのする潜水艦を収録現場に登場させるわけにもいかない。音声は後で編集出来たとしても、この番組は現地人の反応も視聴率の重要なファクターになっている。雰囲気ばかりは誤魔化すことが出来ないし、明らかなヤラセだとバレてしまったら、誰もが持っているスターキャリアで、明日には世界中に拡散されてしまう。

「大体、ミステリーワールドの収録はどうする？もう締め切りまで時間がないつつーの…………どうするつつーの？どうするつつーの!?!どうするつつーのおお!!」

『……………だったら、「本物」を出演させればいい』

潜水艦越しに聞こえるキザマロの声ではない、静かに耳へと入り込むような、妙に耳障りのいい声が辺りに響いた。しかし、焦りに焦っていたデマキューは、突然聞こえた声にビビりあがってしまう。

「ウ、ウヒイツ!?ダ、ダレだっつーの!!」

慌てて周囲に目を配り、キョロキョロと必死に声の主を探すデマキュー。そんなデマキューの無駄な努力を嘲笑うかのように、声の主……ハイドは音も無くその眼前に現れた。

「ヒ、ヒイツ?!」

「怯えなくていい……貴様の番組の、新しいスポンサーなのだから!」

いつものように、ニヤリとした嫌味な笑みを携えたハイドは、失態を取り戻そうと内心必死でもあった。しかし、自らスポンサーと名乗った以上は下手に出ることは出来ない。最後まで怪しげな、余裕寂々の態度でなくてはならないのだ。

「ス、スポンサー?」

「ああ、そうだ……これから貴様に、チカラを与える。そして私の脚本通りに動くのだ……」

「きや、脚本?バカ言うなっつーの!素人の脚本だろ!オレを誰だと……」

如何に詐欺番組のプロデューサーと言えどもデマキューは天才であり、視聴率を取れ

る、言うならば視聴者を沸かせる方法……手口には長けていた。

その想像力には、目を見張るものがある。アニメーションの監督でもやっていれば、まともにも大成していた可能性もあったのかもしれないが、今となっては過ぎた話である。

「いいから、言うことを聞け。悪いようにはしない。但し……失敗は許さん。貴様の失敗は、私の面目をも潰すコトになるからだ！」

「な、なんなんだっつーの……」

「(そうだ……失敗は許されん！何としても、手柄を立てなくては……)」

ここに、二人の汚い大人による最悪級の『ミステリーワールド』収録が計画されてしまった……

——十分後——

「こ、これをこうして……で、出てこいっつーの！」

ハイドによって簡単な操作方法を学んだデマキューは、その手に持った古代のスターキャリアーを操作して、内部に封じられし水竜を現実へと解き放つ。

「何もかも水の底へと沈めてやろう。それこそが私の使命……！破壊こそ、私の全て！」  
物騒な水害を語るのは、古代のスターキャリアーより出でし電波の体を持つ水竜

………ブラキオだった。体色はオレンジで、頭部が茶色、体中心が黒色と茶色の複合色でデザインされた鎧で覆われている。解りやすく表現すると、一般的に知られているフタバスズキリュウの子供……幼体に近い容姿だろうか。

「………いいね!!!いいね、いいね!!!これはいけるっつーの!!あの男の脚本通りにやれば……視聴率が取れるっ!!かつてない数字になるっ!!こりゃあ、生活が変わるっつーの!!オレの未来はバラ色だ!!」

シツシツシツシ!と、一頻り笑った後、プロ意識なのか精神統一をした後、その手に掴んだ古代のスターキャリアーを眼前に翳す。

「電波変換!」

「シツシツシ!テレビの前にいる、視聴者の皆さんども!前代未聞の衝撃映像を、これからお茶の間にお届けしてやるぞ!精々首を長くしてお待ちくださいやがれっつーの!!」  
電波変換特有の特殊な閃光が辺りに広がり、デマキューとブラキオの電波変換を完了させる。閃光が晴れた先にいた……もとい湖面に浮かんでいたのは、巨大な水竜……ブラキオ・ウエーブだった。

先程までのブラキオがフタバスズキリュウの幼体ならば、こちらのブラキオ・ウエー

ブこそが混じりけ無しの完全体と言ったところか。体もブラキオ単体時と比べると、二回り程肥大化している。

「……あつ、首が長いのは、今のオレか？なああんつつてな!!シツシツシツシ！」

観客もいないというのに、小粋なクビナガリユウジヨークを披露したデマキュー……ブラキオ・ウエーブは、鼻息荒く水中へと潜水していつてしまった。残されたのは、潜水艦に閉じ込められたキザマロただ一人である。

『……………で、です……………』

潜水艦に閉じ込められた少年の無力な叫びが、人気がない入り江中にこだました……残念ながらこの少年も直ぐに、ブラキオ・ウエーブの手ヒレ?によって潜水艦ごと湖底へ引き摺りこまれる羽目になるのであるが。

ーードンブラー村ー

「……ねえ、委員長。キザマロもさ、ちゃんと理由があつて帰りがらないんだよ。でも、ボク達に愛想を尽かした……とかじゃなくて、すっかり前を向いて歩いていく為に必要な……」

「……………」

ダメか。ちつとも聞いてくれやしない。さつきからずっと橋の上で湖面を見つめていて、ロクに反応も返してくれない。

「はあ……………ん？……………地震!？」

なんだ、こんな時に……つて、まさかもうブラキオ・ウエーブのお出ましか!?

……どうしよう。ボクに水中戦の心得はないのだけれど、ちゃんとブラキオ・ウエーブの相手が務まるのだろうか。

「いや……………なくんか、妙だぜ」

ロツクの勘は正しい。地震が起きた時、水辺なら真つ先に警戒しなくてはいけないもの。それは……………

『ツ、ツ、ツ……………ツナミだあああつ!!』

「津波……………だつて!？」

ボク達が状況の確認に努めている間に、幾人もの村人が橋を渡っていく。こんな場所に住んでいる人間だ、津波の脅威なんて嫌って程理解しているに決まっている。それに、展望台にいた人の話では、大昔に近隣の村々が纏めて津波で沈んだコトもあるそうだし、一層敏感になるってものだろう。

『高い所へ……………「展望台」へ避難しろおおおつ!!』

村人と思わしき声が、周囲の人々へと避難を促す。何処へ避難すればいいのかわからずにオロオロしていた人達が、一斉に展望台へと駆け出していく。

「ボク達も早く、『展望台』へ避難しよう!」

ここで油を売っている暇はない。流石に津波に巻き込まれて溺死なんて結末はごめん被りたいところだ。

「……………」

喋らなくても危険は理解しているようで、委員長は駆け出したボクの後ろにピッタリと張り付いてくる。あれ、結構本気で走っているんだけど……………相変わらずのハイスペツ



クぶりである。委員長の部屋には、何かの大会や賞で手に入れたと思わしきトロフィーが、山ほど飾ってあったので今更感はあるけどね。

……兎に角、一刻も早く展望台にたどり着かなくては！

——展望台——

轟音と共に、ドンブラー村へと巨大な波が唸りを上げて襲い掛かる。……これが津波か。まるで、死を振り撒く死神かのような存在感だ。村全体を覆い尽くす程の水量は、意思なき破壊者として表現するのも烏滸がましいレベルの衝撃を、各々の家屋に与えていく……

「フウ………危なかった……！」

記憶の中にも、実際に津波を体験したという事実はない。なので、これが初めての実体験になるのだろう。端的に言うのと、とても恐ろしかった……死が鎌首を上げて追い縋ってくるような、そんな得体の知れない恐怖だ。

「……………」

委員長は何も喋らない。先程から展望台に避難してきた人達を確認していたので、恐

らくはキザマロがないことにも気づきかけているのだろう。

津波による影響を鑑みても異常な程に水位は上昇し、展望台の周囲は完全に水没してしまっている。復興するにも手間と費用が掛かりそうな状態だと推察出来る。

『あ、あれは何だ!? おい!! 皆、あれを見てみる!』

観光客が突然、驚愕の声をあげる。展望台にはドンブラー村にいたほぼ全ての人間が集まっているので、自然と皆、声をあげた観光客の方へと注意が集まっていく。その視線の先、湖面に見えたのは……

『ド……「ドツシー」だあああツ!!』

『本当に居たぞ!』

『だ、大発見だ………ツ!!』

驚きと興奮が、見物人達の心を支配する。津波に襲われたばかりだというのに、人々はドツシー（と思われる存在）を発見したことで大いに沸いていた。

「シツシツシツシ! いいね、いいね!! その反応!! カメラッ!! 「ドツシー」様をしつかり録ってくれよな!! 世紀の大スクープ映像!! ……本物の古代竜だぞ!!」

心配しなくとも、既にカメラマンは撮影を始めている。リポーターがいないので、若干味気ない映像になること請け合いだろうけどね。

「あれが『ドツシー』!?……………ロック!」

「(……………ああ。コイツはヤベエ!あの感じ、間違はなく電波体だぜ!!)」

「やつぱり……………それにしても、『ドツシー』の正体が電波体だったなんて……………!?それに、ビジライザー無しでも見えるってことは……………」

「(ああ、ここはビジブルゾーンなんだろうな。……………なんてコトはどうでもいい!兎に角、さっきの津波はヤツの仕業だぜ!クッククックツ!やつと面白くなってきたじゃねえか!!大暴れしてやるぜ!!)」

「ロック、ブレないね……………」

「(へへッ、そりゃ褒め言葉ってモンだぜ!)」

もうちよっと、程々にブレてほしいというのがボクのお願いではあるんだけど……………まあ、乗り気なのは良いことか。あとはレッドホット・チリペツパーみたいに、水中で拡散しちやわわないといいんだけど……………

「スバルくん!!」

ブラキオ・ウエーブを視界に納める為に、委員長から一度離れていたのだけど、今度は委員長の方からボクに寄ってきている。流星に何時までも無言のまま……………というワケにはいかないのだろうか。

「どうしたの、委員長?」

「や、やつぱりいない……いないのよ………！キ、キザマロが………何処にも!!」  
 「いない?………キザマロが!」

「ふと気になって、展望台を探し回ってみたの!そしたらやつぱり、いないのよ!あのコマさか………逃げ遅れたんじや………!」

ープルルル!!

「ツ!!」

「ツ!!………つと、キザマロからだー………ブラウズー!」

反射的に発声したブラウズの指示に従って、ボクの眼前にエア・デイスプレイが出現する。その画面は乱れ、ノイズが走ってまともに見ることは出来ないようだ。

『助けてくださいああああい!!』

音声のみのエア・デイスプレイから、キザマロの悲痛な声が響いてくる。何事か………と周囲の視線が集まるが、逃げ遅れた人が通信出来るとは思えないだろう………という判断によって、直ぐにその視線は霧散した。

「無事なの?キザマロ!今、何処にいるの!」

『そ、その声は………委員長………!』

「大丈夫!?!ケガは無い!」

『お、怒っているんじゃないんですか……?』

キザマロが恐る恐る……といった具合に委員長のご機嫌を伺う。こんな状況で気することじゃないっての!

「バカ!!何言ってるの!こんな時に!!もう一度聞くわ!今、何処にいるの!」

『い、委員長……今、どうやらボクは湖の底にいるみたいです!せ、潜水艦に閉じ込められているんです!!狭いし……真つ暗だし……もうどうしていいか、わかりません……!!お、お願いし……す!助け……くだ……』

ーブツツ!

通信状況が悪くなったのか、遂に音声すら届かなくなってしまったようだ。

「キザマロ!キザマロ!……ダメ、かからない!……う、ううう……ワ、ワタシのせいだわ……ワタシがキザマロと喧嘩なんてしなれば……」

直ぐに自分のスターキャリアでもキザマロへ電話を試みるが、やはり通信状況が悪いらしく、ちつとも繋がらない。しまいには、泣きそうになってしまった。

「委員長……」

まったく、今日のキザマロはサイテーだ。……二度もダイアモンドメンタルの委員長を泣かすなんて!因みにダイアモンドって、実は結構……いや、何も言うまい。

「スバルくん……お願い。一生のお願い!!キザマロを助けてあげて!!」

「キザマロだつて、ブラザーなんだ……そんなの当たり前だ！ボクに任せて！絶対に、キザマロはボクが助けてみせるから！だから大船に乗った気持ちで待つてよ！」

幸いなコトに、キザマロは凍傷になりかけているとか、永遠にコチヨコチヨの刑を執行されている……とかでは無いので、多少の余裕はある。あとは残存酸素量の問題だけ、仮にも潜水艦つて呼ばれているくらいなんだから、酸素の貯蔵量にあまり気を配る必要はないだろう。

「う、うん……」

「オイ、助けに行くのはいいとして……どうやって湖の中を探すつもりだ？この湖、かなりデカイし底も深そうだ。何も考えず探したら、途方もなく時間を食っちまいそうだよ」

なんか、こういう時に限つてロツクの勘が冴え渡るのは何故なんだろうか。必要な物資を手際よく提案してくれるところとか……

「確かに……効率よく探す方法か……いや、あるよ……ほら、潜水用のマテリアルウェーブを所持してた人がいたじゃないか！」

「（それだ！じゃあ次は……）」

「決まつてる！その人を探して、潜水用のマテリアルウェーブを貸してもらうんだ！」

目当てのドツシーハンターは、展望台に避難していたので直ぐに見つかった。まあ、側に件のマテリアルウエーブを展開していたから、丸わかりだったんだけどね。

「ヒイイ……危なかった。この潜水用のマテリアルウエーブが無かったら、今頃湖の底だよ！」

激流の中を、マテリアルウエーブにしがみついて展望台へ泳いでこれたのか………それって、かなり凄くね？

名前は………マルボーズ・ヘタツリーか。変な名前だ。ここにも、製作側による被害者が………

「……あの、すいません！その『潜水用のマテリアルウエーブ』を貸していただけませんか!？」

「……へ？」

よく理解していないような返答だ。ここは………曇み掛ける………というか押しきる！

「人が………友達が！湖に沈んじやったんです！だから………お願いします！」

「は？沈んだ!?!……それは大変だ！いいよいよ！持っていて！早く友達を助けてあげなさい！」

軽いパニック状態になった釣り下手……………ヘタツリーさんは、マテリアライズを解除してカード状になった潜水マシーンを手渡してくる。……………助かった！

「ありがとうございます！」

「……………これで湖に潜れるぞ！」

「(スバル、ビジライザーをかけてみる！)」

「了解……………あつ！」

ビジライザーをかけると、展望台の一角から、湖中まで繋がっているとかわしきウエーブロードが視認出来る。

「(おう！あそこから潜れそうだぜ！……………まずは電波変換を忘れんなよ！何せ、生身じゃあ潜水時間なんてたかが知れてるからな！)」

……………それはちよつと、抜け過ぎじゃない？いや、釣り下手……………ヘタツリーさんならいけるかもしれないけどね。津波の中を泳いできたんだ、今更湖中なんて何のそのって感じはする。

「……………うん！」



——展望台の電波——

「よし……それじゃ、行くよー！」

説明欄によると、『ブクボン』という名前があるらしい。コイツも語尾に自分の名前の一部を付けなければいけない呪いに侵されているらしい。

……それってほとんどウィルスじゃね？

潜水マシンのマテリアルウェーブ、スタンバイ！

『例え深さ一万メートルでも潜ってみせるだブク!!ブクブク……』

「それじゃ乗り手が保たないよ……つと、マテリアライズ！潜水マシーン！」

スターキャリアーの機能を搭載したバイザーを操作して、湖面へと潜水マシンのマテリアライズする。

湖面へとマテリアライズされた潜水マシンは、饅頭のような黄色いヘッドパーツにロボアームが接続されたような見た目をしている。顔にはゴーグルを模した蒼と水色のペイント?が描かれている。

「ふうん……こんなので水中へ、ねえ」

ロツクは何処か懐疑的だけど、普通の人間を津波から救いだした性能を侮ってはいけない。電波人間なら呼吸の心配も要らないので、これならドンブラー湖中を自由に探し

回れるだろう。

「まあまあ、ずつと泳ぐのつて大変だし……推力があるだけマシつてものだよ。釣り下手……ヘタツリーおじさんには、感謝しなくちゃね」

それじゃ、Let's diving!

竜宮城に行くみたいで、何だかドキドキしてきたぞ……!

ーードンブラー湖の電波ーー

湖底に続くウェーブロードを降ること数分、ボク達は水中に広がる幻想的な世界へと足を踏み入れていた。魚が沢山獲れるというところで、割と濁った水質だと思っていたのだけど、電波体になったことによる感覚拡張影響か、かなり広範囲まで見渡すことが出来る。

……総評としては、中々快適な空間だ。

「へえ……キレイなところだね」

『タスケテタスケテ!おつそろしいカイツツが!おつそろしい!ブクブク……!』

周りの景色を満喫していると、いきなり水中型のデンパくんが話しかけてきた。見た感じ、藁にもすがるような雰囲気ではあるけれど。

「……大丈夫だから、落ち着いて!そのおつそろしい怪物は何処に行ったの?」

おっそろしい怪物とは、もしかしくともブラキオ・ウエーブのコトだろう。もし、同じような電波体がもう一体いたとしたら、とてもボク一人の手に負えないよ。

「ブクブク……ふう、アブなかつた。オボれるところでした。カイブツはここよりもつとフカイバシヨにイってしまいましたよ」

「……ありがとう！」

「あ、ちよつとマつてクダさい！このままむかつてダメなんです。カイブツのエイキヨウで、スイモンのセキュリテイがウゴいてます。セキュリテイをカイジヨしないとオクにはススメません！ブクブク！」

「……………あつ。そうだった。ここはトレジャーハント的な仕掛けのエリアなのを忘れていた。幸い上昇すれば見晴らしの良さを確保出来るので、直ぐに攻略出来ると思っうけれど……」

「……………どうやったらセキュリテイを解除出来るの？」

「ヌシです！このエリアのドコかにウまっている、スイモンのヌシをサガせばカイジヨできます。……………この『コモンジヨ』をモっていつてクダさい！ヌシのウまっているバシヨのヒントがカかれています」

「デンパくんからデータが送られてくる……これが古文書のデータなのか。何か書いてあるみたいだけど、元人間のボクにはさっぱりわからない。」

「この『コモンジョ』はデンパモジで力かかれていて、デンパタイにしかよむコトができません！」

「もちろんボクには読めないよ！」

「威張ってんじやねえよ！……チツ、メンドクセーけどオレが読んでやる。有り難く思えよ！」

「ありがとうございます、ウォーロック様！」

「その気持ちワリイ敬語を今すぐ止めてくれ！背中がむず痒くなってくる！」

……今のロックに背中とか、存在して無いよね？

「あ、そう？じゃ、兎に角任せたからね！……つと、ヌシは埋まつてるんだよね。あとは穴を掘る道具か……」

『ボクにお任せくださいボク！潜水マシンのボクボンですボク！怪しい場所を教えてくださいれば、ボクがゴソゴソ掘りたいと思うでボク！』

ゴソゴソつて、まるで黒光りするG……いい、いや、丁寧に掘り起こすって意味だと受け取っておこう。邪推は良くない。

「ウイルスもウもれているので、クレグレもキをつけてクダさい！」

ここだ！と思つて掘り起こしたらウイルスが出てきたとか、酷いホラーじゃないか。しかも不意打ちを受ける可能性も高い。確か、ピラニアみたいなウイルスもいるんだよ

ね、ここ。噛まれたら、痛そうだ。

「ええ……………テンション下がる情報止めてよ……………」

「オラ、このエリアにいるヌシの数は……………3体。とつと探しに行くぜ！」

「……………古文書は任せたからね、ロック」

「おう！」

地図でもあれば、湖底でのヌシ搜索が楽になるんだけど……………それは高望みが過ぎるつてモノだ。まずは水中での動きに慣れないといけないな。スイスイ進むだけでも、意外とコツがあるので大変だ。

ロードンブラー湖の電波——

「あ、ピラニア擬き」

湖中を悠々と泳ぐように移動するのは、ピラニア型のウイルス『ピラニツシユ』だ。体色は赤と黄色で構成されており、どことなくコイの王様を思い浮かべてしまうカラーリングである。実際にはデフォルメされていても、ピラニアモチーフなんだけどね。というか歯がめつちや鋭い！ 噛まれたら絶対に痛いヤツだよ、アレ！

「悪・即・弾！」  
プラスマガン

バトルカードの使用により、近未来的な銃身が左腕に展開される。プラスマガンは弾速やマヒによる副次効果を重視した設計の為、威力は控えめとなっている。しかし、スターカードや属性相性の影響で、非常に効率的なウイルス<sup>ァン</sup>スバ<sup>ッ</sup>ステ<sup>ィン</sup>グ<sup>ッ</sup>が可能になったのはありがたい。

水中ではまともな戦闘が出来ない（と思われる）ので、こうして見つかる前に遠距離射撃でデリートしている。

ただ、このままずっと暗殺暗殺&暗殺戦法を採っていたんじゃ、いつか対処しきれな

くなるような気もするんだよなあ……

「……次は何処だっけ？」

因みに、3体いるヌシの内、既に2体は掘り起こしているので、残りはあと1体だ。

それにしても………ミステリーウエーブが埋まるとかい場所の、酷いデマ情報を通してきたクソデンパめ、次にあつたら許さんぞ！三度も騙されて、ウィルスを掘り起こしてしまったじゃないか！

「古文書には、『一人は今亡き王の証の下に眠る……』って書いてあるぜ。王の証って言えば……そうだな、王冠とかか？」

王冠、王冠ねえ………エリアの端に沈んでいた、古い沈没船から溢れた落とし物とか？そういうのって、持ち帰ってもいいんだっけ？幾つか拾っていけば、ドンブラー村の立て直しにかかるお金の足しになるかもしれないけど……

「まだ探索していいのは……向こうにある、洞窟エリアだね。行ってみようか」  
「おう！」

――数分後――

「おおお………ぎ、財宝だ！凄い、金貨に宝剣、装飾品までほとんど手付かずで残ってる………！」

巨大な巻き貝が目印の洞窟エリアへとやってきたボク達は、船の荷物だったと思われ

る財宝が山程散らばっている場所を発見していた。こりやあ、最低でも一財産は築けるレベルの価値があるぞ……!!

「こりやあいいいな!!ちよつと戴いていこうぜ!」

悪魔 ロツクの誘いが、ボクの左(腕)から聞こえてくる。見た感じ、割と年代物にも見えるな。ただ、電波技術の発達で物質自体の耐久度も上がっているので、もつと昔……百年近く昔のモノかもしれない。

「……よく考えたら、今持つてても邪魔になるだけだよ。……金貨の鳴る音でウィルスを引き付けちゃったら、嫌じゃない?」

別に、今直ぐに回収する必要はないんだ。ブラックボックスを回収しに来る時もあるし、それこそ機会は沢山ある。どうせ他人に持つていかれることも無いだろうし、ここは諦めておこう。

「……ケツ、しようがねえ。じゃあ目当ての王の証とやら………王冠も見つかったことだし、さっさと掘り起こしちまおうぜ!」

そう、先程の山と積まれた財宝の中には、一際輝きを放つ王冠があった。デザインもあることながら、貴重な宝石の類いをふんだんに使った意匠は、見事と言う他ないだろう。被つてみたいけど、クラウン・サンダーみたいな電波体に取り憑かれていたら、嫌だなあ……



「それじゃブックボン、よろしく頼むよ」

「お任せするブック！ここ掘れブックブック……………」

相変わらず、酷い掛け声だ。どうにもマテリアルウエーブの決め台詞って締まらないものが多いような気がする。子供が使うことを考慮してのコミカル仕様だとか？

「……………すっぽし!!」

なんて考えていたら、どうやら当たりだったようでヌシを発掘出来た。もうちよつとヌシとしての威厳をだね……………って、基本部外者のボクが言ってもしょうがないか。そもそもヌシと言っても、水門セキユリテイを司っているということを除けば、見た目はただのデンパクんに過ぎないのだから。

「…………ウオツホン。ワタシをメザめさせたのはオマエか。ブックブック…………すべてのヌシをホリオこしたトキ、ミチはヒラかれる…………ブックブック」

「よし、コイツで終わりだ！」

「中々骨が折れる作業だったね…………」

「何言ってるんだ？古文書は8枚もあるんだぜ？このエリアはまだ序の口だと思うが……………」

「」

「スバル？スバアアアル!!!」

聞いてねーよ！もうちよつと単純なセキュリティにしろや！ブラキオ・ウェーブルーも防ぎきれないってのに……！どう考えても、敵に利用される為に作られたセキュリティにしか見えないんですけど!?

クソつ、<sup>音</sup>diving <sup>マ</sup>critical <sup>ン</sup>strike<sup>キ</sup>でリプログラミングでもしてやろうか……!?!?……なんだかもつとヤバイものを生み出しそうなので、流石に自重するけど。

レベル99は勘弁してください死んでしまいます。

何て考えている内に、ドンブラー湖の電波1の奥にあるスイモンセキュリティの側へと、発掘されたヌシ達が一同に会していた。どうやら意識を同期する必要があるらしく、奇妙なダンスを踊っている。ダンスは苦手だな……

「……ブクブク。いくぞ!………ツ!………ツ!………」  
 ブウー………ツク!!」

ヌシ達の息を合わせた（電波体に呼吸は不必要のだけど）雄叫びによつて、漸くスイモンセキュリティが解除される。なるほど……今気づいたけれど、要となるセキュリティを中心として、薄ピンクの防壁がエリアの境目に広がっている。どうやら、これで電波体の侵入を阻んでいるらしい。スイモンセキュリティが解除された後も、薄ピンク

の防壁は残ったままだ。

「……よし、セキュリティが解除されたぜ！」

「先を急ごう！」

ーードンブラー湖の電波2ー

スイモンセキュリティが解放されたことよって入れるようになったドンブラー湖の電波2には、より一層幻想的な光景が広がっていた。巨大な珊瑚やウニ、そしてタコまで存在している。ドンブラー湖の生態系は一体、どうなっているのだろうか……

「……………つて、ロック！あれ見てよ！」

「何だよ、藪から棒に……」

湖底を見渡してみると、明らかにヤバイモノを発見した。おかしい、あれは実在しないはず。漁師がマナティか何かを見間違えたのだと、以前特集番組でやっていたぞ!?

「に、人魚……」

岩場の間に佇んでいるのは、紛れもない……人魚だ。下半身が魚類の尾になっており、上半身は貝殻でコーデイネートされている。

「ああ？……よく見ろよ。コレ、人魚じゃなくて人形だぜ」

「え？………あ、ホントだ。でも凄い作り込みだよ。あんまりよく出来ているから、遠目じゃ本物にしか見えなかったよ」

何でこんなものがドンブラ湖の底にあるのだろう……

隣のエリアにあった財宝や沈没船なんかを見るに、何か作爲的なモノを感じるな。

「別にどうでもいいが……あんまり周囲の警戒は怠るなよ？オレは古文書を読むのに、だいたい神経使っちゃまってからな」

「わかつてるつてば。こっちは任せてよ。……あ、サワニガー。……タアツ！」

湖底を単独で横歩きしているサワニガーにカーソルを飛ばし、『ポルティックアイ』で放電する。このバトルカードは、自動でロックオンカーソルを飛ばし、任意で操作することで高速で電流を浴びせかける、という仕様らしい。ドンブラ湖は水属性のウィルスが多いので、数少ない雷属性として役立つてくれている。

――十分後――

「……又シですよっ!!」

なんとというか……引き抜かれる時に何か叫ばなくてはならないルールでもあるのだろうか。正直、近くのウィルスを呼びかねないので、出来るだけ控えて欲しい。



ーードンブラー湖の電波2・最深部ー

スイモンセキュリティによって、一部分だけ封鎖された最深部には、キザマロを乗せたと思わしき潜水艦のマテリアルウエーブが沈んでいた。そういえば、マテリアルウエーブには意思がある……とのことだったけど、悪事に加担するマテリアルウエーブってどんな気持ちなのだろうか。NDK？

「キザマロ、大丈夫かい!？」

あなたは、そこにいますか？

『そ、その声は……スバルくん!!』

潜水艦の中から、くぐもったような声が聞こえてくる。大きさからして、あまり快適とは言えない造りのようだ。人が乗ることを前提としているのに、小学生一人で一杯一杯とか……それ、欠陥品じゃない？

『助けに来てくれたんですね!?!ぶ、無事です!!ボクはここです!!』

「……戻ったら、委員長に思いつきり罵倒されることを覚悟した方がいいよ。委員長、半泣きだったからね……」

『そ、それは……』

「あはは……冗談だって。……今助けるからね!」

『冗談キツイですよ……』

割と冗談では無いのだけど……まあ、一息入れることも必要だろう。焦りすぎて過呼吸でも起こされたら困っちゃうからね。

「……待て!!何か近づいてくるぜ!!」

ここでブラキオ・ウエーブのお出ましか!やはり、ボク達が来るタイミングを伺っていたに違いない。相変わらず、嫌味なコトをする……!

『シツシツシ……!!』

まるで商人が、顧客のいない所でほくそ笑むような声が湖上の方から聞こえてくる。端的に言うくと、悪どい笑いかただ。

「いいねえ、いいねえ……!!ホントに来やがった!!噂の『青いヒーロー』が!!……スゲエ、あの男の脚本通りだったの!」

『脚本』……またハイドか!?

「そうよ、そのまさかよ!!全て新しいスポンサー……ハイド様のおかげよ!」

なんだか、国ごとやけ野原にしてしまいそうなテンションだな……電波変換による興奮作用とか?

「ハイド様がこのブラキオ・ウエーブのチカラを与えてくれたおかげで、オレの番組は視聴率大幅アップ間違いなしだったの!!連続ヒット番組製作記録更新!これで昇進確

定だっつーの!!」

番組ディレクター227。彼はもう終わりですわね……

「番組……それにその声……アンタ、デマキューだな!」

『え……デイ、ディレクターさん?そこにいるんですか、ディレクターさん!?どうして……どうしてボクをこんな所に閉じ込めたりしたんですか!?あ、あんなに親切にしてくれたのに……ひ、酷いです!』

潜水艦の内部からは外の景色が見えないようで、ボクのデマキューという言葉に反応したキザマロが、自身の心を傷つけたデマキューへと、非難の言葉を浴びせる。

「……あくん?あら、まだいたの?『ドッシーを見た少年』!いや、『ドッシーの偽物を見た少年』か!?オマエはもう、用無しだ!」

高らかに笑いながら、無慈悲なまでにキザマロの価値を斬って捨てるデマキュー……いや、ブラキオ・ウエーブ。その顔には一切の罪悪感もない。

絶対許さねえ!ブラキオ・ウエーブ!

「子供を使えば数字が取れると踏んだから、色々メンドー見てやってただけだっつーの!大体騙される方が悪いんだっつーの!!シッシッシ!!」

『そ、そんな……うう……』

強く信頼していたデマキューに裏切られたショックからか、キザマロは堪えきれなく



なつてしまつたらしい。潜水艦の中から、噁り泣く声が聞こえる……

「酷い……」

「お、やるつてののか?! いいね、いいねえ! そうこなくつちや!! ここでオマエを倒さない  
と、このチカラも取り上げられちまう! そういう契約なんぞな!」

なるほど……そんな裏取引が。いかにもハイドがやりそうな手口だ。これならデマ  
キューも必死にならざるを得ないだろう。

「このチカラはサイコーだつつの! 失うワケにはいかねえ! オレがバラ色の未来を送  
る為に!」

「それが大人のやることかツ! ……人に夢を見せるなら、最後まで責任くらい取つてみ  
せろ!!」

視聴者に娯楽をもたらしているだけなら、別に問題は無いんだ。ダメならダメで、見  
つかりませんでした……とでも流しておけばいい。けど……わざわざ絶望を与えて  
やる必要はないハズだ。しかも、年端もいかない子供を食い物にするなんて!

コイツからは、ミソラちゃんの元マネージャーと同じ匂いがする。つまり……万死に  
値するつてことだ!

「向こうもやる気だ! とつととやつちまおうぜ!」

「ああ、わかつてる!! ウェーブバトル・ライドオン……」

「……………カー………ツツツ!!!」

突然、その巨大な口を開いて大音量のカット宣言をするブラキオ・ウエーブ。考え事をしてるようにも見えるけど……

「……………カット?」

「……………オツケエエエ~~~~イ!!!いいね、いいね!!!いいアイデアが浮かんだぞ! やっぱオレは天才だ!!」

「あ、待て!」

そのいいアイデアとやらの為に、ブラキオ・ウエーブは湖面へと急浮上していく。やはりここで戦う気は無いらしい。逆に、こちらとしても助かるからね。

「シツシツシ! ついてこい、青いヒーロー!! さもないと……津波をもう一発ぶちかますっつーの!! 今度は展望台も沈んじゃうぞ?! シツシツシツシ!!」

「……………やっぱり津波はヤツの仕業だったか! ……あの野郎、何か企んでやがんのか?」

「だとしても、行くしかないよ! ……キザマロ! もう少しだけ、そこで我慢してて!」

『は、はいです……』

「アイツを倒したら、直ぐに戻ってくるから! ……行くよロック!!」

潜水マシーンを浮上モードにして、ボクも湖面へと急浮上していく。水圧その他は、

電波体にとって関係はないらしい。

『し、信じてますよスバルくん……!』

ードンブラー湖面の電波ー

『あつ!!また現れたぞ!!「ドツシー」だ!!』

先に浮上していたブラキオ・ウエーブは、未だにビジブルゾーンと化している展望台の野次馬達に見えるよう、派手な水飛沫を上げて登場する。

「シツシツシ!!見てやがる、見てやがる!!皆して目ん玉丸くしてやがる!!なんて愉快なんだっつーの!!」

「何が愉快だっつーの、だ!アンタが起こした津波で、多くの人が困っているっていうのに!!」

『お、おい!誰かいるぞ!?!』

『本当だ!何故あんな所に!?!』

『……少年だ!青い、変な服を来ているぜ!』

『テレビで見たぞ……あれはニホンで噂の青いヒーローじゃないか!?!』

……野次馬がどうにも騒がしい。ボクは静かな場所で戦いたいつてのに。雑音が多すぎるんだよ！

「わかっちゃねえ！わかっちゃねえよ！演出だよ、演出!!派手じゃなきや、数字なんざ口クに取れやしねえっつーの!!これも見事な演出だと思わねえか!？」

ただでさえ高い首を、さらに反らしてこちらの反応を伺ってくる。何も言い返さないことを確認すると、フンツ、とばかりに息（のようなもの）を吐き、続きを語り出す。

『伝説のドツシー』対『噂の青いヒーロー』!!こんなの思い付くのはオレくらいだっつーの!この位置なら、カメラにもバツチリ映る。ミステリーワールドの視聴率は鰻登り!オレ様の未来はバラ色だっつーの!!シッシッシッシ!!」

「こういうヤツだったら、なんの躊躇もなくブツ飛ばせるな!!よし、手加減なんてすんじゃねえぞ!」

ロックも流石に頭がプツンきたらしい。獰猛な笑みを浮かべているのが、見ていなくてもわかる。

「わかっている!……ボクがヒーローではなく、アンタにとっての死神だということを教えてやるッ!いくぞ!ウエーブバトル・ライドオン!!」

ーードンブラー湖面の電波ー

ここでブラキオ・ウエーブについて少し、考察してみようと思う。電波体にしてはかなり巨大な部類に入ると思われるその体は、水中での活動に特化しているということ、否応にも理解させられる。

……というか、ボク程度の体躯なら簡単に丸飲み出来てしまいうさだ。怖い。先ずはぱつくんちよされない程度に距離を取るべきか。向こうはあまり長く水面下に潜りたくないようなのだから。何せ、カメラ映りが悪くなるからね！

「じゃ、いくぞー……ブクボン！」

「了解、ブク！」

こちらの意図を汲み取った潜水マシンのブクボンが、全速力で動き出す。離れすぎない程度の距離を意識しているらしく、ブラキオ・ウエーブの周りを回転するように距離を取ってくれる。

ただ、今のボクはブクボンの上に支え無しで乗っているようなもので……

「……うわっ、うわわわっ!」

「オ、オイ！……大丈夫かよ!？」

何せ全速力だ。激しく揺れる。湖底ではブクボンの背中に付いている取っ手を掴んでいた。今は不安定でしようがない。クソツ、こんなでまともに戦闘なんか出来るワケが……ツ！

「ツ!？」

……もたついている間に、ブラキオ・ウエーブを見失ってしまった。……どうやら水面下に潜つたらしい。一体何処から……いや、直下に巨影!?……まさか!？」

「……オラアツ!」

デマキューの雄叫びと共に、水面下から巨大な顎を開いたブラキオ・ウエーブが飛び出して来る。ヤバい、避けられるタイミングでも……無い!

……こうなつたら!

「……………ブクボン、ゴメン!……タアツ!」

「……………主人!メンテナンス代は、高くつくブクよ!」

唯一の足場であったブクボンの背から跳躍し、展望台の壁面に着地する。ずり落ちないよう、突起物に手を掛けるのも忘れない。

「な、なんとか助かった……」

「ああ、だがヤツは……」

ブラキオ・ウエーブの噛み付き技『アクアフアング』によって噛み砕かれ、データの塊となってボクのスターキャリアーへと収納される。こうなってしまうては、天地さんにも頼まない限り、再びマテリアライズすることは不可能だろう。

……ホント、ゴメン！

「……………ん？ 歯応えが消えた？……………いや、マテリアルウエーブか。オイオイ……………罪の無いマテリアルウエーブに、この仕打ちはちよつと酷いんじゃないかねーのおツ!?」

コイツ……………ここぞとばかりに煽ってやがるな……………!?

挑発は万死に値すると、ボクはそう決めている！ 覚悟しろよ……………もう、電波変換を強制解除させるくらいじゃ、許さんからなツ！ 絶対にだ！

「水面がダメなら……………水上だ！ マテリアライズ！ スカイボード！」

素早くヘッドパーツからスターキャリアーの画面をエア・ディスプレイで呼び出し（電波体はブラウズと叫ぶ必要がない）、マテリアルウエーブの欄を開く。

スカイボードのマテリアルウエーブ、スタンバイ！

『……………おつと！ 中々珍しいコトもあつたもんだ！ だがオレのノリは、何時でもクライマックスだぜ〜ッ!』

久しぶりにマテリアライズしたスカイボードの『オーリー』は、以前と変わらぬノリを見せてくれた。正直怪物相手もいいところだから、ビビってしまうかとも思ったけれ

ど、このノリの良さはありがたい！

「……よつ、とー」

壁面でマテリアライズしたため、浮遊した状態での登場だ。慎重に展望台の突起物から手を離し、スカイボードの上へと着地する。やはり乗ることを前提に構築されているせいか、抜群の安定感だ。……これなら！

「いくぜスバル！オーリーー！」

「ロックこそ……乗り遅れないでよオツ！」

「おおーッ！いいねえ！この、二人で一人つてノリー！最ッ高に上げまくるぜーッ！」

どうやらアクセル／ブレーキを定める明確な決まりは無いようで、意識すればするほど上昇・加速が可能だが、冷静になり過ぎると出力まで下がってしまうらしい。

……要はノリで動かさせてことだ！今のボクには、おあつらえ向きの仕様なんだよッ！

「上、が……れエエツ！！」

心臓の鼓動ビトに従い、スカイボードは高速で上昇していく。どうやら垂直に上昇するよりも、滑るように少しずつ上昇していく方が得意らしい。

……サーフボードがモーターの、オーリーらしい特徴だと思う。

「ビューッ！！コイツはスゲエツ！」



海上百メートル程まで上昇し、一旦停止する。これ以上離れると、向こうに戦闘を放棄したと判断されそうだ。それに離れすぎると、こちらの攻撃も当たらない。

「ブラキオ・ウエーブの位置は……………ッ！」

索敵をしようとした所に、急浮上してマヒ効果を含む厄介な技、『サンダーブレス』を吐いてきたので高度を調節し、シールドで防ぎきる。電子機器の類いに対して、高压電流のサンダーブレスは致命的過ぎる！

「チツ、流石に当たつちやくれねーか……………だが、そっちの攻撃も当たらないんじや、意味ねえぜッ！」

「確かにこれじゃ、ジリ貧だ……………」

あんまり焦らすと、降りてくることを条件に再び津波を引き起こしかねない。オーパーツのチカラをもつてしても、一人でカバール出来る範囲には限りがある。それに、庇つたら庇つたで、マヒ付与のサンダーブレスによる狙い打ちは免れないだろう。

……………なら、やはり短期決戦しかあり得ない。というか電波体の戦闘って、大体が短期決戦なんだけだね。3で行ったバトルウィザード大会で、アシッドが全バトル5秒以内に終わらせていたけど、ぶつちやけ正面からやったらそんなもんだ。回りくどくやつても、2〜3分が関の山だ。

「……………よし、それじゃあ突貫する！」

「オ、オイ……マジか!？」

マジもマジ、大マジさ! クロスレンジさえ避けられればこんなヤツ、どうつてことないだろう。サンダーブレスと、戦闘用にスケールダウンした『ゲキリユウウエーブ』にだけ気をつけていけばいい。

「うおおおつ!!」

牽制にマッドバルカン2を撒き散らしながら、滑るように降下していく。半身になりながらのバルカン連射なので、中々のバランス感覚を要求される。まあ余裕なのだけだ。

ブラキオ・ウエーブの首辺りの高さまで降下した後、<sup>のち</sup>遠距離系のバトルカードを中心に攻めていく。ベルセルクはまだ、温存するべきだ。あからさまに電気タイプですよ、と言っているようなものだからね。

スパークキングギガボルトを前にしたオレンジ色のラプラスは、マツハで水中に引つ込まざるを得ないのである。ズワザ怖い。

「コイツ……ちよこまかと動くなっつーのッ!」

連続して放たれるサンダーブレスを、スカイボードらしく空中を滑るよう回避する。こりや、ヤバいな。楽しすぎる。一発当たったら、マヒからのコンボ食らってジ・エンドのデスゲームなんだけどね。

「ヒューツ!!コイツはヤベェ!」

オーリーもノリノリでサポートしてくれているのがわかる。微妙な位置操作はオートでやってくれる仕様らしいけど、戦闘機動に対応出来るのはさすがオリとしか言いようが無い。

それにしても……さつきから結構な数の砲撃を叩き込んでいるのだけど、巨体故のタフネスなのか一向に乱れる様子がない。ディレクター稼業で培った、演技力( )なのかもしれないけどね。人はそれを、痩せ我慢とも言う。

「このツ……調子乗んなっつーのオツ!!」

ブラキオ・ウエーブの爬虫類然とした目が見開き、海中から前足と思わしきヒレを引き上げる。どうやら件の戦闘用にチューンされたゲキリユウウエーブらしい。

ヒレの動きに合わせて、電波体にもダメージを与えうる特殊な津波を発生させる。どうやら、津波自体に微弱な電波を纏わせているようだ。

「ツ!オーリイイツ!」

「ラジャアアツ!コイツはオレのマテリアルウエーブ生、最大のビッグウエーブだぜエツ!」

タイミング・位置的に回避は不可能と踏み、迫り来るゲキリユウウエーブの流れに乗るようにスカイボードを滑り込ませる。電波体に干渉しやすい性質を逆手に取り、流れ

に飲み込まれないようオーリーと協力して角度・姿勢を微調整し、ゲキリユウウェーブの範囲外を目指して爆走するッ！

「うおおおつ!!……抜けたアツ！」

「スゲエ！スゲエゼスバル！コイツは南国のおっさんに自慢出来るかもな！」

確かに。南国さんが乗ったという、十年に一度のビッグウェーブとどちらが荒波か、比べてみたいもんだ。まあ、これは星河スバルの戦績ではなく、ロククマンとしての戦績になるのだろうか。

「おっさん……まだお兄さんだよ、多分」

正直南国さんって一体幾つなのだろうか。見た目はそこそ若そうに見えるんだけど……つと、まだ戦闘中だった。気を抜くのは早い。今はサーフィンをしている場合じゃないってのに！

取り敢えず、そろそろ決着を着けないと！なりふり構わなくなった汚い大人程、子供にとつて恐ろしい相手はいないんだよ！

「オラアツ！」

「……ッ！（雷撃の威力が落ちてきている……つまり、弱ってる?）」

「（それはありそうだ。いや、大技を出して疲労が溜まってるって線もあるぜ）」

どつちにしろ、今がチャンスってことに変わりはない。あくまで予測が当たっていい

ば、の話だけど。

「よし、一か八かだ。……ここは一気に仕掛ける！」

「おうー！」

まずは、湖面数十センチまで高度を下げる。決定力のあるベルセルクも、警戒されちゃあ意味がない。出来るだけ悟られないように……

前方のブラキオ・ウエーブがサnderブレスを放った後の隙を晒したことを確認し、爆発タイミングを調節したヒートグレネードをドンブラー湖の澄んだ湖面へと投擲する。当然、ブラキオ・ウエーブとボク達を結んだ直線上への投擲であり、向こうが巻き込まれないギリギリの場所へと着弾したヒートグレネードは、名前負けしない爆発を引き起こしてくれた。

「爆発ッ!? 一体なんだっつーの!?!」

爆発により発生した大量の水飛沫と、グレネードによって散布された爆煙が、一時的に辺りを埋め尽くす。これで視界は潰れたはず。

「(……真・<sup>トライブ</sup>血族内包!……ベルセルク!)」

声でバレても間抜けなので、小声でロック(と、一応オーパーツに)合図しトライブオンを完了させる。

後はこのまま、フルスロットルで突っ込めばOKという寸法だ! 疲労で注意力が散漫

な上に爆煙と水飛沫に紛れて反応が鈍るので、超高速で接近してのKFBには対応出来ないだろう。多分。

「(うおおおつ!!)」

最短距離を、一気に突っ切らせてもらう!

「……ツ！な、なんd……」

向こうが困惑している間に、スカイボードの勢いそのまま長い首へと、すれ違い様に斬撃を叩き込む。痛みで仰け反ったことを確認し、オーリーから飛び降りて悶えるブラキオ・ウエーブの背中へと着地する。フウ……潜水マシーンとは安定性がダンチってヤツだ。

……アンタがぶっ壊したブクボンとはなアツ!

「サンダアボルトツ！ブレイドオツ!!」

「ギヤアアアアアアアツ!!」

痛みに嘆くブラキオ・ウエーブの無駄に長い首に、最大出力で刀身を伸ばしたベルセルクソードを横に往復一回、斬りつける。最後に特大の雷撃を頭部に落とす、超過ダメージによってデマキューの電波変換が解除される前に、急いで待機していたオーリーへと飛び移る。

「……よつと。助かったよ！ありがとね、オーリー！」

「気にすんなよベイバー！こつちこそ、最ツ高のビッグウエーブに乗らせてもらったんだ、お礼を言いたいくらいだぜ！イエーイ！！」

よかった。突然の戦闘利用にも怒ってはいないらしい。よく考えると、マテリアルウエーブつていいヤツばつかりだよな……ヤエバリゾートのテーブルは除くけど。

何だよ、モノを乗せたら呪詛を吐いてくるつて！

「オ、オゲエエエエー……ッ！！」

ブラキオ・ウエーブの体を構成している電波が、蓄積したダメージによって耐えきれなくなり、崩壊していく。電波変換が解除されたことを示す閃光が晴れた先には、広大なドンブラー湖で必死に犬掻きをするデマキユーの姿があった。お、泳げなかったのね……

「うひやあああつ、たたた、助けてくれええつ！！」

『おい、あれ……ミステリーワールドのディレクターだぜ！』

『本当だ！……つてことは、まさか！』

『あの「ドツシー」は、番組のヤラセだったのか！』

『な、なんてヤツだ！！オレ達をバカにしゃがつて！』

……まあ、これを期にフィクション系のプロデューサーとして心機一転、ニホンで活動してみてもどうですか？ニホン語もお上手なようですし。……としか言えないな。あまりにも、自業自得の部分が多すぎる。

「ひ、ひいいいっ!!」

「……よし、キザマロを助けに戻ろう!あ、でも潜水マシーンは……」

どうしよう、湖底へ潜る為の潜水マシーンはあの有り様だし……

「おうおう、別に短時間なら水中でも動けるぜ?イエーイ!!」

そう言つてオーリーは、足を固定するためのアタッチメントをマテリアライズする。どうやら多少の追加装備の操作権が、マテリアルウェーブにはあるらしい。

「……ホント!?いやあ、助かったよ……」

「お、コイツは放つておくんだな?まあ、ブクボンの仇つてヤツだしな。……オレも賛成だぜ!」

「……流石にそれは可哀想だね。よし、その辺の漂流木でも持つてきてあげようつと……」

さつきの津波で流された木材とか、探せばありそうだ。兎に角、デマキューにはもう少し痛い目を見てもらおう。そうじゃなきゃ、ブクボンの魂も浮かばれないよ。別に死んだワケじゃないけどね。

「……そつちの方が鬼畜じゃねえか!」



——数時間後——

展望台の入り口では救助されたデマキューを問い詰めようと、多くの野次馬達が集まっていた。当然、現場に居合わせたカメラマンの姿もある。

カメラが●RECになっているのは、今まで散々やってきたことの因果応報なのかもしれない。

「だ、だから……これはその……オイ、何映してんだ!!カメラを止めろっつー!!」

——その、少し離れた場所……

「ホント、無事で良かったわ……」

潜水艦から無事に救出されたキザマロと再開した委員長はまず、叱らずに心の底からの安堵を漏らした。まあ、これが委員長クオリティだよ。カッコいいです。

「う、う、う……うわああああん!!怖かったですううう!!」

委員長に心配されて気が抜けたのかキザマロは、堪えていたものを全て吐き出すように、大号泣を始めてしまった。

「もう、いい加減に泣き止みなさい!こうして、ちゃんと助かったんだから!」

口調は怒っているようだけど、その顔は穏やかだ。

「う…………ひ、ひつく……………いいんちよう…………ご、ごめんなさい……………です。ボ、ボク…………ボク…………ひつく」

「まったく……………アンタがあんなに頑固者だったとはね！長い付き合いだけど、全然知らなかったわ！」

「えつと…………委員長、そのコトなんだけど、実は…………」

——少年説明中——

「……………え？何か誇れるモノが欲しかった、ですつて…………？」

キザマロの事情を聞いた委員長は、何か不思議なモノでもみるような顔になってしまった。まあ、委員長にとってキザマロは、当たり前前のブラザーなのだから、そんなモノを気にするとは思っていなかったのだろう。

「うん。キザマロの気持ちもわかってあげてほしいんだ」

「……………フン。わからないわよ……………そんな気持ち」

「……………！」

委員長の、字面だけ見れば心無いとも言える発言に、泣いていたキザマロがピタリと動きを止めた。恐らく、デマキューのコトを思い出しているのだろう。また裏切られるかもしれないって、考えるだけでも辛いから。

「何か誇れるモノ？下らないわよ。だって……………ワタシは、今のアンタを大事な友達

だと思ってる。……それだけじゃ、不満？」

途中まで言って恥ずかしくなったのか、最後はそっぽを向いてしまった。横顔しか見えないので、赤く染まった頬がよく見えている。

「……いい、委員長！……ごめんなさいです！……ごめんなさいです！……うわああああん！！」

「ホラ、泣き止みなさいってば！」

面倒臭そうな顔で泣き止むように促すが、その口元は笑みを浮かべている。いや、うん。ボクもさつきからニヤケ顔が止まらないです、ハイ。

「いい、いいんちよう……う、う、う……うわああああん！！」

——30分後——

一頻り泣いたキザマロも、漸く落ち着いて早数分。因みにそのポケットは、委員長が差し出したティッシュのゴミでパンパンだ。

「落ち着いた？」

「は、はい……あの、スバルくん！助けてくれて、ありがとうございました！」

落ち着いたキザマロが最初に告げたのは、今回の事件に対するお礼だった。まあ、こちらでも謝罪よりは気分がいいってモノだ。ボクの都合に付き合わせちゃった感否め

ないけど……

「どうしたのさ、改まっちゃって……」

「ボクは潜水艦で震えているだけでしたからね……でもキミは、危険な敵に、たった一人で立ち向かった。ボクの為に……」

「違うよキザマロ。ボクは一人じゃない。今回のコトは、色んな人やモノの助けが無きや、到底解決出来なかつたんだ。だから、ボクが頑張ったと言ってくれるのは嬉しいんだけど、それは間違っているんだよ」

「……そういうところも、ボクは尊敬しているんですよ。謙虚さは大事だと思いますからね」

まるで風のように穏やかな表情だ。本当に、心からそう思っているのだろう……つて、冷静に分析してみたけど……

「な、何だか照れくさいなあ……」

「それで……あの、ボクとブラザーバンドを結び直してほしいんです……けど……」  
「もちろん喜んで！これからも宜しく、キザマロ！」

そうと決まれば、早速ブラザーバンドの契約だ。結構久しぶりにブラザーバンドを結び直す気がするのは、最近の多忙さ故だろう。ええつと、ここをこうして……こう。よし、完了。

「でへへ……これからも宜しくお願いしますです！」  
「こちらこそ、だよ！」

一通り親交を再確認したボク達を満足そうに見た委員長は、身振り手振りでボク達の視線を集める。どうやら、これからの方針を決めるようだ。と言つても、ニホンに帰るくらいしか無いのだけどね。

「さて、と！ やつとニホンへ帰れるワケね！ 帰ったらじつくり話を聞かせてもらおうよ、キザマロ……！」

「ひ!? スバルくんの言っていたことは、やっぱり本当でした!?! ひええええっ! ゆ、許してくださいああいー！」

「……ジョーダンよ! そ、そんなに怯えなくてもいいじゃないの!」

「あはは……」

「あ、スバルくんは冗談じゃないわよ? キザマロが言つてた『やっぱり』がどういうコトなのか、たつぷり聞かせてもらおうかしらね……!」

唐突な絶望へのカウントダウンに、ボクの思考は一瞬、完全に停止した。だつてこつちに飛び火するとか、普通思わないでしょう!?

「え? ……嘘!?! 疲れてるのに、勘弁してよお……そ、そうだ! ……これは何かの勘違いなんだよ! ね、ねえ、キザマロ!?!」

「さて、どうでしたかね……」

途端に眼鏡の位置を調整し出すキザマロ。コイツ、露骨に惚けてやがるな!? ヤバイよ、委員長顔がどんどん激おこになっっていくんですけどー! これ、絶対ボクが単体で折檻を受けるパターンだよね!?

「ちよつと、ここで裏切るの!?!」

「スバルくん。……ブラザーなら、言ったことには責任を持ちましょうよ。ね?」

優しく諭してくれるけど、それってつまり死刑宣告と同じってコトじゃないか!?

嫌だアツ! まだ死にたく無いツ!!

「ス〜バ〜ル〜くん?」

ああんまありだああああつ!!

## 第五話 『コンドル・アポストル』

## 4 1

——オリヒメ陣営のアジト——

ドンブラー村で起こした事の顛末を、しどろもどろと言った様子のハイドから報告されたオリヒメは、苛立ちを見せるでもなく、寧ろ面白がつているようだった。

当然、御簾によつて姿は隠されているので、その表情を拝むことは叶わないのだが。

『ふむ……此度も、してやられたか。どうやら、手こずっておるようだな……のう？ ハイドよ。フフフ……』

「も、申し訳ありません!!」

オリヒメは愉悦を滲ませた声をかけるが、人間の心理に關しては一家言あると言えるハイドと言えども察しきるコトが出来ない。恐らくだが、こうして焦るハイドを想像することで、退屈凌ぎとしてゐるのだろう。

「オリヒメさま……あのアオイオトコ、オーパーツがカカえるキョウダイなチカラをカ  
ンゼンにギョシキつております。このままホウチしておくのは、あまりにキケンかと  
……」

青い男……ロックマンがベルセルクのチカラを纏い、獅子奮迅の如き活躍を見せた場に同席していたエンプティーは、未だに余裕の姿勢を崩さないオリヒメへと進言をする。オーパーツと自分が、比較的近い存在であるが故の対応だろうか。

「フン……情けないヤツラだ」

ハイドと並び、静観していたソロが吐き捨てるように言う。彼の心情としては、あのような男が強者の扱いを受けることが許せない。 ”血” が騒ぐ、というヤツだ。

「ヤツをカルクミるか、ソロ……ゴカイのないようにアえてハッキリとイッておくが、イマのオオいオトコは、たとえオマエでもウチカてるかどうかミチスウなのだぞ？」

オーパーツのチカラを最大限に警戒しているエンプティーにとつて、電波体としてのスペックが変化していないソロ……ブライでは、確実に打ち倒せるかどうか、信じることが出来ないのだろう。尤も、オリヒメに従う姿勢のエンプティーに、人を信じる気持ちが果たして存在しているのかは不明だが……

「エンプティー……よもや、このオレが下らんキズナなんぞに縛られたアイツのチカラ如きに劣るとでも言うのかッ!？」

「オトるとはイわないが……ワタシのミコみでは、ほぼゴカクとイったトコロだ。オーパーツにヤドったベルセルクのタマシイがもたらすキョウイテキナチカラは、オマエもヨくりカイしているはずだが」



「…………クツ!!」

極めて冷静に互角と言える根拠を説明され、ソロは舌打ちによつて鬱憤を表す。ロツクマン単体ではどうとでもなる……と思われているのが幸いか。

『ソロよ……そなたが確実にヤツを打倒する方法が、一つだけあるぞ。……妾が用意した「孤高の証」を、そなたの体に受け入れることだ』

御簾の向こうから聞こえてくる甘言に多少の揺れる心を自覚しながら、ソロはオリヒメへと背を向ける。その表情は鬱陶しいものを見るような、嫌気の差したそれになつていた。

「…………何度言わせる気だ。オレがオマエ達に助力を乞うことなどあり得ない。……絶対  
にだ!」

『惜しいことよ……方が一でもアレを扱える者がいるとしたら、それはオマエだろうと思つていたのでが……』

「…………下らない」

オリヒメの、本当に惜しそうな声をバツサリ斬つて捨て、ソロはアジトから去ろうとする。これ以上交渉を続ける気は毛頭無いようだ。

「黙つて聞いていれば……ソロ! オリヒメ様への口の利き方には、気をつけたまえ!!」

『フフフ……まあ、よかろう。こちらも強制するつもりは毛頭無い……『孤高の証』は精

神に依存するシロモノ故な。それに、妾はソロのチカラを信頼しておる。では……本題に入るとしようか』

オリヒメの仕切り直し宣言に、ソロも帰路へ向けた足を止め、フン……と鼻を鳴らし言葉を持つ姿勢となる。

『……とある地域に、ムーを信仰している民族がいると聞く。ムーに関する情報の手掛かりがあるやもしれん。早急に現地へと赴き、調べてまいるのだ』

「それならば、このハイドめにお任せを!! 必ずや、オリヒメ様がお喜びになられるような戦果をあげて見せましようぞ!」

待つてましたとばかりに、ハイドが名乗りを上げて進み出る。ドンブラー湖での失態も重なって、ハイドはより一層手柄を立てることに躍起となっていた。

『いや、この件はソロに任せる。オーパーツのことはひとまず中断して、その地域へと向かうのだ』

「……いいだろう」

オリヒメからの指令を受諾したソロは、早速現地へ向かおうとアジトの出口へと進む。『カミカクシ』による転移は、正確な座標の情報が必要とするので、ある程度下調べをしないといけないという、制約があつた。

意思一つで物質を転移させるのだから、当然と言えば当然の制約なのではあるのだ

が。

……とは言え、カミカクシを使用すること自体にデメリットは無く、某絶対時間のよ  
うなことはないのではないのは、大きな魅力とも言える。

『……ソロよ。ムーに縁のある地域だ。そなたの“血”とやらが騒ぐであろう？』  
「……………」

ソロは、オリヒメの言葉に返答することなくアジトから去っていった。他人に“血”  
のコトを指摘されるのは、あまり面白くは無いらしい。

『フフフ…………』

——翌日・星河家——

委員長に折檻されるという不幸はあったものの、何とか無事に密出国することに成功  
し、家に帰ってくるのが出来たボク達。なんやかんやで1日もかからなかったような  
気がする。この調子なら、何か不手際があっても夏休み中になんとか出来そうだ。

しかし束の間の休息とは、斯くも切ないものなのか……

「…………ふう。色々あったけど、無事にキザマロが見つかって良かったよね…………」

「津波やら何やらで、エライ目にあっただけだな。…………ブクボンの犠牲は、当分忘れられそ  
うにねえ」

同じ電波体として、ブクボンの散り様には何か感じ入ったものがあつたらしい。ボクとしても、恨み言の一つは覚悟していたからか、どうにも調子が狂つてしまう。

兎に角、早急に修理するのが先決だろう。

「ロック……大丈夫、今度天地さんに頼んでみるからさ。あの人ならきつと、何とかしてくれるよ」

宇宙ステーションの残骸を、たつた一晩で実用に耐えうるまで修理出来たんだ。きつとなんとかなるだろう。というか、なんとかしてもらわないとブラックボックスの回収が……

「天地ジョバニのヤロウが一晩で仕上げてくれました……つてか？」

「そう、それ！……つて、何でロックがそのネタを知ってるんだよ……」

「例によつて、オマエの寝言なんだぜ。汎用性が高いのが多いから、結構助かつてるな」

どうにもオーパーツの宿る、ベルセルクの意識達にも聞こえていらいんだよね。

VIPPERみたいになつたらどうしよう……

『チョウウウ………ツヨスギワロタウウ………』とか？そんな潜在意識、絶対嫌だなあ……

「そんな実情、聞きたく無かつたよ……」

「まあそんなコトは置いといて、だ。残りのヤツらだが、探し出せる『アテ』はあるのか

「？」

ゴン太はナンスカ、ミソラちゃんは……既にバミューダラビンスの方だろうか。その辺りの内情は、まだよくわかっていないので、言動には気をつけないといけないな。……キザマロはたまたまサイトに載っていたから良かったけど……どうだろう、見当も着かないや」

「そのキザマロはアメロッパにいたんだから、やつぱ外国なんじゃねえのか？」

最近のロックって、なんだかやけに冴えているような気がする。2ヶ月前までは他人のトランサーのデータを躊躇なく破壊してたなんて、到底信じられないと思う。

「まあ、その辺が妥当だよね……」

ーブルブル!!

「電話か………つと、ブラウズ！」

どうにも電波体時のクセが出てしまっている。エア・デイスプレイの直接呼び出しは、人間状態じゃ不可能だったのに。

『も、もしもし！スバルくんですか!?!』

スターキャリアーから出現したデイスプレイには、息を乱し、興奮冷めやらぬと言った様子のキザマロが映し出されていた。火急の要件……あ、ゴン太に関する情報が見つ

かったのか。

「お、ウワサをすれば……だな」

「どうしたの、キザマロ？そんなに慌てて……」

『大ニユースです!!急いでボクの家まで来てください!!』

ーブツツ!

言いたいコトだけをさつさと言って、キザマロは通信を切断してしまった。どうやら、会話する一分一秒すら惜しいと見える。いや、続いて委員長に連絡しようとしたのかもかもしれないな。

「何だ?随分と興奮してやがったな……」

「大ニユース……もしかして、誰か見つかったのかもかもしれないよー!」

訝しむロックをなだめすかし、急いでキザマロの家へと向かう。もしかしなくとも、ナンスカの件だろうし。確か……ミステリーワールドでカメラマンだった人と、仲良くなっただっけ?

ー最小院家ー

久しぶりに訪れた最小院家は、キレイ好きらしいキザマロによって整理整頓された、機能的な美しさを醸し出していた。本棚には紙媒体の書籍が一杯に詰まっている。電

子書籍が主流の電波社会に、中々の拘りっぷりだ。ボクもあんまり人のコトを言えないけれど。

ただ、本棚の上段に背……手が届かないためか、踏み台が隅に置いてある。頑張れキザマロ……

「……遅いですよー!」

「ああ、ごめんよキザマロ」

「いえ、別にいいですけど……ゴホン! 実は先程、テレビ局の人から連絡があつて!」  
「テレビ局の人?」

因みにこの場には委員長もいるのだけど、ボクを待っている間にキザマロから話を聞いていたらしく、静観の構えを見せている。口を挟む気は無い、ということなのだと思う。

それによく見ると、キザマロのキズナリヨクが大幅にアップしているのに加えて、ブラザーとして新しく外人さんが登録されているのがわかる。テレビ局の人って、人脈としては結構なモノだよな。

「そ、そうです! この間のドッシー騒動で知り合いになった人なんですよ。……って、そんなことはどうでもいいんですけど……凄い情報を貰ったんですよ! 『ナンスカ』という場所……何と、空から人が降ってきたらしいんです」

「空から?それって……」

「そう!ボクも同じように空から落下しました。……溺れかけましたけど。つまり、件の空から降ってきた人は行方不明になっている誰かの可能性が高いと、ボクはそう判断しています!」

改めて考えると、委員長が巻き込まれなくて本当に良かったよね。ミソラちゃんは電波体になれるし、ゴン太とキザマロは男だ。華奢な委員長に、高所からの落下はマズイだろう。いや、コダマ人ならなんとかしてしまふのかもしれないけど。

「よし、それじゃあそのナンスカに行ってみようよ!……で、どうやって行けばいいの?」

「……わかりません。『マロ辞典』にも載っていないのです」

え、マジですか?

『マロ辞典』にも載ってないってことは、大雑把な地理情報しか載ってないワールドマップに載っているとも思えないし……」

「そうなのよね……さつきからワタシも調べてはいるのだけど、これといった情報は見つからないわ」

ナンスカって確か、かなりアナログな地域だったはずなんだよね。それでも地上絵とかがあるから、そこそこ有名になっていそうな気もするけれど……



「困りましたね……」

「外国かあ……」

ナスカの地上絵って、どの辺りにあったかな……この世界じゃ全然頼りにならないから、その辺の知識は薄れきっている。だって、普段ナスカの地上絵に関する知識なんて使わないでしょ？

……地縛神？超官しか覚えていないよ。

「(南国のヤロウとか、知ってそうじゃねえか?)」

「(それだ!)」じゃあ、南国<sup>BIGWAVE</sup>さんの所に行ってみようよ。あの人なら何か知っているかもしれないし」

やっぱり今日のロックは冴えている。助かるんだけど、何か嫌なコトでも起こりそうな予感がするのは何故だろう。イメージって大事だよな。

——BIGWAVE——

かくかくしかじかと、手早く要点を纏めて話す。ついだに新しく入荷したHPメモリの在庫を買い漁っていると、ご機嫌な南国さんは快く口を開いてくれた。

「……オケイ!! 『ナスカ』的なモノが何処かって感じの話だね? 『ナスカ』はね、アメリoppのずっと南にある、とっても小さな国さ! 若かりし頃、よく行ったからねえ

……ナンスカ！」

へえ……アメロツパの南にあったのか。サーファーとして乗れるビッグウェーブも無いのに何度も行くなんて、よっぽど気に入っていたらしい。

確か……料理が美味しいんだっけ？ ドンブラー村の屋台料理も好きだったけど、ナンスカの郷土料理にも興味はあるので、機会があつたらいたでいいと思う。

「ほらボクさあ……名字が『南国』的なワケじゃない？ それに因んで、世界中の南国という南国をトラベルして回ったワケ!! 南国の太陽を一杯浴びて……いい感じの日焼けボディもつくれて……まさに『一石二鳥』だったよ」

名字に因んで旅行とは、若い頃の南国さんって、随分な暇人だったのか。そこからカードシヨツプに、どう結び付いたんだろうか。寧ろそちに興味が湧いてきた。

『ナンスカ』は自然が一杯の、超トロピカルなエリアなんだけど、そこで大自然が巻き起こすスリリングな感じのトラブルにもエンカウトしちゃってさあ!! このトラブルって言うのがねえ……」

あ、話が脱線してきた。初めて南国さんの体験を聞けけれど、さつきからちよくちよく出てくるジョニーって一体誰なんだ……？

——三十分後・コダマタウン——

一通り話して満足したのか、『また来てね』なんて言葉と共に話を終わらせた南国さん。取り敢えず外の空気を吸うべきだとして、今はBIGWAVE外の公園に集まっている。

「……………や、やっと終わった……………」

「ですが、とてもスリリングなお話でした！まさか……………まさかジョニーが、あのような壮絶な最後を……………」

興奮した様子のキザマロが、伝説になったジョニーのコトを感慨深く呟く。その瞳は赤く充血し、濡れているようだ。というか、さっきまで泣いていた。ボクも。

「や、止めてよキザマロ……………また涙が……………」

まさかジョニーが最後に、ああなるなんて……………クソツ、どうして銛網の位置を、事前確認していなかったんだ！それさえ気をつけていれば、巻き込まれることも無かつただろうに……………！

「（認めるのはちよつと癪だが……………あいつは……………男の中の男だな）」

ロツクでさえも認めざるを得ない男……………それがジョニーだった。ボク達は忘れない。かつて南国さんの危機を救い、海に散ったジョニーの存在を……………！

「……………もういいかしらっ？」

ボク達だけで盛り上がるジョニー談義に飽きてきたのか、痺れを切らしたような表情の委員長が確認をとる。ちよつとイラついているように見えるので、ここで逆らつてはいけないのだろう。

「とにかく、これで『ナンスカ』の場所を把握することが出来たつてこと！ さあ二人とも、直ぐにナンスカへ出発よ！……つて、スバルくんはパスポートがまだだつたわね。ドンブラー湖みたい、追いかけてこれるでしょ？」

「うん。大丈夫だと思ふよ」

確か……ドンブラー湖のスカイウエーブの先にワープホールがあつたはず。まあ、何とかなるでしょう。

「じゃ、現地で会いましょう！キザマロ！ワタシ達は早速出発するから、まずは荷造りを済ませるわよ！」

「了解です！」

そう言つて委員長とキザマロは、一先ず旅行の荷造りをするために各々の自宅へと歸つていった。

それにしても……当日に出国出来るなんて、随分な世の中になつたもんだ。

「さて……ボク達も準備しよつか。アメロッパの時と、同じやり方で行けるよね？」

「ああ、そのはずだぜ」

「じゃ、今日はもう遅いし、荷造りだけにしようよ。早く着き過ぎてもなんだし……」

いくら技術進歩で早く到着するようになったといつても、今すぐ出発したら間違いない待ちぼうけを食らうことになる。こちらもコンドル・ジオグラフィとの戦闘経験は積んでおきたいので、わざわざ急ぐ必要はない。

「だな。焦るとロクなコトにならねえ。明日の朝にでも出発しようぜ」

「了解！」

あ、そうだ。余りカードのストックも随分と貯まっているし、久しぶりにカードトレーダー回していこうかな……

## 42

——翌日・星河家——

あの後、無事にトレーダーガチャで爆死したボクは、重い足を引き摺って家に帰ることとなった。無念。ボクもリセット能力が欲しいです……某神に対策されそうだけど。ハイパームテキ&セーブ怖い。

その翌日。荷造りも完了したので、日課のストレッチ等で体を解しておく。一応、ナンスカまでの道のりはドンブラー村よりも遠出になると見ているので、体調を整えておくに越したことはない。

「……さあて、準備はいいか？」

「うん、大丈夫。『世界のグルメ百選』も持ったし……マイ箸に水筒、タオルもあるよ」  
背中に背負ったリュックを見せ、準備が終わったことを表現する。よほどの大荷物でなければ、電波変換時に背部のパーツへと収納しておくことが出来るのだ。

「オマエ……観光にでも行くのか？」

ジトつとした目に変わったロックをボクは直視出来ず、部屋の隅へと視線を逸らす。恐らく今、ボクの目は泳ぎまくっていることだろう。

「違うって！ ナンスカって結構暑いらしいし、ニホンとは勝手も違うみたいなんだよ。翻訳機があると云っても、ある程度は自前の物を使った方がいってことさ」

ドンブラー村で苦勞したコトを例に挙げ、なんとか誤魔化す方向で話を進めていく。ロツクがボクを見る目が、より一層うさんくさくなつたような気がするけれど、そんなこと気にしない。

というか、委員長がマテリアルウエーブのテントを持って来ていたはずなので、多少の荷物（リュックに入りきる程度）は問題ないと思われる。

「ふうん……その世界のグルメ何とかつてのを一体何に使うのか、小一時間問い質したいところだが……まあいい。兎に角、ナンスカへ向かおうぜ。アメロツパの時みたい に、パラボラアンテナを使えば行けるはずだ」

「了解！ それじゃあ……出発だ！」

おっと、あかねさんに今日は委員長の家で外泊してくることを伝えておかないと。既に向こうには話がついているので、委員長宅に電話されても問題はない。

ースカイウエーブー

ドンブラー湖へ向かった時のように、委員長の住んでいる高級マンションに取り付けられたパラボラアンテナから自らの体を電波転送したボク達は、再び遙か上空に広がる

電波達の聖域へと、足を踏み入れていた。

自分で言っておいてなんだけど、電波体にしか使用出来ないスカイウエーブが、何だか神聖なモノに感じてしまうのは、ちよつといき過ぎた考えなのだろうか。

「……つと、そうだ。ボク達ってスカイウエーブ内にある、ナンスカ行きのワープホール  
の場所を知らないじゃないか」

ドンブラー湖へ行つた時にも感じたのだけど、随分とスケールの大きいウエーブロードなんだよね、スカイウエーブって。無いとは思うけれど、一応迷子には気をつけないといけない。ミソラちゃんもいないのにバミューダラピリンス辺りにでも迷い込んでしまつたら一貫の終わりだと、ボクは断言出来る。最悪、ウエーブアウトすれば大丈夫だとは思うのだけどね。

「それもそうだな………おっ！アイツ、この前ドンブラー湖方面への道を教えてくれたデンパじゃねえか？取り敢えず、あのデンパに聞いてみようぜ」

ロツクが、以前と変わらぬ場所である案内の業務に勤んでいるデンパくん（スカイウエーブ仕様）を腕指して（？）言う。御丁寧にロツクオンサイトまでバイザーに表示する徹底ぶりだ。いや、物騒なんだつてば。

「だね。よし………ねえ、キミ。ちよつといいかな？」

早速案内役のデンパくんに話かけていく。既に一度話した仲なので、特に驚くことな



く対応してくれた。一応、ボク達って有名人らしいからね。

「ハイ！コンニチは！ナニかゴヨウですか？」

「ちよつと聞きたいんだけど、『ナンスカ』ってどう行けばいいか、わかるかい？」

「あー、ナンスカでしたら、ドンブラームラのサラにムこうにありますネー。ドクトクのブンカで、ハジめていくデンパはミンナ、オドロくんですよネー……」

「そうなんだ……うん、ありがとう！」

実はこのデンパクん、結構なお年なんじゃないだろうか。今の様子からして、明らかに一度はナンスカに訪れたことがある風だったし。まあ、そんなこと考えても仕方がないか。今は、ナンスカへの道を急ぐべきだ。

「オシー！行こうぜ！」

教えてくれたデンパクんに、手を振って別れを告げる。向こうもスカイウエーブ仕様の羽を気持ち強めにパタパタと振り、送り出してくれるようだ。

ー20分後・ドンブラー村のスカイウエーブー

「ええつと、ドンブラー村の……更に先、だったよね」

直ぐ側には、先日使用したばかりのドンブラー村へと繋がるウエーブホールが設置されている。ドッシー騒動が収まったせいかな、デンパ通りは良くなっているようだ。混雑

してないってのは、使う時に気楽でいい。

「あつ、ナンスカへムかうデンパさんですか？サイキンやつと、このサキにツヅくミチのコウジがオワったんですヨー！」

ワープホール側にいる案内役のデンパくんに、ナンスカへの道を聞こうとしていたのだけど、その前に別のデンパくんから声をかけられてしまった。どうやらつい最近までナンスカ行きのスカイウエーブは封鎖されていたらしい。コウジ……工事か。ウエーブロードを工事……？

「へえ……そうなんだ。じゃあ、これがその？」

デンパくんの側にある、セキュリティのかけられた道に指を差して質問する。デンパくんは力強く首肯し、セキュリティを解除する準備を始めるようだ。

「トビラ………ヌオーープルーーン！」

気合いのこもったデンパくんによって、ナンスカ行きのスカイウエーブは目出度く開通された。以前はデンパ通りが多くて、小道のセキュリティに気がつかなかつたけれど、どうやら元々ナンスカへ向かうデンパくんは少なかつたようだ。周囲のデンパくん達が誰も注目していないので、よくわかる。

「おお〜！」

「ここからズンズンすすんでいけば、あつたかホカホカナンスカです！ドクジのフウ

シユウをもらったニンゲンタチがくらすミナミのクニ！ ナンスカ！ イッツナンスカ！  
レッツナンスカッ!!」

イヤにテンションの高いデンパくんだ。作業ばかりで鬱憤でも溜まっていたのかもしれないな。単純作業の連続は、人の思考を鈍らせる。ボクも気をつけないと。

「ほう……中々面白そうだ」

「お、結構興味出てきたカンジ？」

封鎖されていたウエーブロードの直ぐ先、ナンスカのスカイウエーブ行きと思われるワープホールの前に、ボク達はいた。先程の元セキュリティエリアから、徒歩二分くらいの距離だろうか。

「まあ、ドクジのフウシユウってヤツに興味は湧かねえがよ、氣候が違うってことは、それだけ色んなウィルス<sup>ウィルス</sup>があるってことなんだぜ。……腕が鳴るってワケだ！」

実際、電波体だとボクの腕で唸ってるだけの射撃装置兼ロックオンシステムだもんね、ロックって。

それにしても、新しいウィルスか……正直、無敵付与のダンサーっぽいウィルスがウザかった記憶しかないような。……あとモアイ。

「ま、やる気があるのは結構だよ。……それじゃ、行こうか！」

「おうー！」

一応深呼吸して、ボク達はナンスカのスカイウエーブに繋がっているワープホールへと入っていった。

ドンブラー村のスカイウエーブが一気に遠ざかっていく。超高速で移動しているものの引つ張られるような感覚はなく、割と快適な空の旅としゃれこむコトが出来るのも、スカイウエーブを利用する利用の一つかもしれないな。

ーナンスカのスカイウエーブー

「ナンスカ!! ようこそ、ナンスカのスカイウエーブへ!!」

到着したボク達に、ナンスカのスカイウエーブで案内役をしていると思われるデンパくんが歓迎の声をかけてくれる。どうやら無事にナンスカのスカイウエーブへたどり着くことが出来たらしい。

「……つと……ここが、ナンスカのスカイウエーブ……」

何て感慨深いように呟いてはみたものの、下界は雲に覆われており、周囲の景色自体はこれまでに利用してきたスカイウエーブと大した違いはない。精々、案内役のデンパくん達が活発に見えるくらいだろうか。なんだか南国の人って、テンション高い人が多いような気がする。ニホン人が低いだけかもしれないけどね。

「結構入り組んでるな……」

「ナンスカは電波の整備が遅れてるらしいし、しょうがないんじゃない？」

迷路……はちよつと言い過ぎだけど、ドンブラー村のスカイウエーブに比べたら、複雑な地形つてのは間違いないと思う。

因みに周りのデンパくんに話を聞いたところ、長年このスカイウエーブにいても、割としよつちゆう迷うことがあるらしい。迷い込んだ先は、バミューダラピルスだった……なんてデンパ都市伝説とかもありそうだ。

「とは言え、視界を遮る物もねえし……まあ、何とかなるだろ。取り敢えず、現在位置の確認はマメにしておこうぜ。最悪、マツピングでもしながら進めばいい」

「ウエーブロードの地図を、市販で売ってくればいいんだけどねえ……」

ビジライザーとウイザードが普及してない以上は仕方ないと割り切るしかないか。デンパ商人辺りが、非売品として隠し持っていそうな気はするけどね。

「無い物ねだりをしてもしようがねえよ。どうせ土地勘も無いんだし、地道に進んでいこうぜ」

ああ……飛べた頃の懐かしい。

――30分後――

現在、ボク達の目の前には緑色のワープホールがある。因みに、スカイウェーブ間の移動ではオレンジ色、下界に降りるワープホールは緑色……グリーンになっていて、見た目で判別出来るように電波体へと配慮がなされている仕様だ。案内役のデンパくんは見当たらないが、先程近くを浮遊していたデンパくん聞いたところ、ここが件のワープホールで合っているらしい。

「よし……行くよロックー！」

「オレの方も、爪の辺りがウズいてきてるしな！とつとと行こうぜ！」

爪じゃなくて、牙では……？

とにもかくにも、ワープホールに入らないと始まらない。以前のようには垂直落下の恐怖を感じることもないので、比較的にリラックスして下界へと降りることが出来そうだ。

ーナンスカの電波ー

「おお……ここが、ナンスカ！」

「感動してないで、そのウェーブホールからさつさとウェーブアウトしろよ。あのオンナがキレると、結構めんどくさいんだよな。大体、ドンブラー村の時も……」

ドンブラー村で委員長に折檻された時も、ロックはスターキャリアー内でうんざりしながら聞く羽目になったようで、ここぞとばかりに恨み節をぶつけてくる。

さつきまで、今宵の爪は血に飢えている……みたいなコトを言っていたのが嘘のようだ。恐るべしは委員長の影響力か。さすルナ。

ーナンスカー

予想していた通り、南国の名に恥じぬ気候だったナンスカは、太陽が住人達の限界を試すかのように今日もジリジリと照りつけている。

遠目だけど、特徴的な民族衣装を纏ったナンスカ在住の人達は目に着きやすい。衣装の生地は見るからに薄く、風通しが良さそうだと推測出来る。

結論：出身地の人にとっても、凄く暑い。

「うーん、なるべく電波体でいた方が、（精神）衛生上良いような気がしてきた……」

掌で影を顔に影を作り、思わず眩いてしまう。何せこの暑さだ。ボーツとしてるだけでも相当に体力を持つていかれてしまうだろう。こりやあ熱中症にも注意しておかないと、ロクに動き回ることも出来ないぞ。電波体なら無問題なんだけどね。

「正に南国つてヤツだな。見る限り、何にもねえ所だけだよ。ウイルス以外に目ぼしいモノも無さそうだけ」

どうやら周囲を見渡しているらしいロツクは先進的とは言い難いナンスカの様に、早くも嫌気が差し始めているらしい。

因みに現在はナンスカの隅にある、日時計の側で休憩している。

『アラ、早かったじゃない』

お、この声は委員長のものだ。以外にも、向こうから見つけてくれたらしい。側にキザマロを従えて、こちらへと歩き寄ってくる。

聡明な委員長のコトだから、電波を飛ばしていそうな場所を見張っていたのかもしれないが。

「軽く見た感じだと、イマイチパツとしない印象かしら。やっぱりワタシには、ロツポンドーヒルズのような都会が合ってるってコトね。なんだか日差しもギラギラしていて、お肌に悪そうだし……」

旅行計画の時も言っていたけれど、やはり乙女（笑）として紫外線等は気になるらしい。委員長つて割と男勝り（肉体的にも）だから、こういう一面は新鮮な気持ちになるような。面と向かって言ったら、無言の腹パン不可避なんだろうけど。

「電波変換していれば、紫外線をスルー出来なくもないけど……」

「ええっ!?……それはちよつとズルくない? ああ、ワタシも自由に電波変換出来れば……!」 都合よく、アナタみたいにならないものかしらねえ……」

うーん、ハンターV Gの再構築プログラムに期待しろ、としか言えないかなあ……。意識ありのおヒュカスなら、ケフェウスと友好を結んだボクに無下な扱いをすること



はないと思うんだけどね。

「それだと蛇に退化しちゃうんだけど……いいの？」

「乙女には、決して譲れない一線というモノがあるのよ……！」

ボク、男だからイマイチわかんないなあ……

美しさの為なら……ワタシは人間を止めるぞッ！みたいな感じってこと？どこの石仮面だって話だ。

「委員長！ 降り注ぐ紫外線からは、このキザマロがお守りします！」

委員長の側で沈黙を保っていたキザマロが、腕に抱えたビッグサイズの日傘を展開し、邪悪なる日差しから委員長のお肌を守る戦士へと華麗なる転身を遂げる。

この日傘も、委員長がニホンから持ち込んだモノなのだろうか。備えあれば憂いなしとはよく言ったものだと思うけれど、これはちよつと備え過ぎなんじゃない……？

『……………ナンスカ？』

奇妙なイントネーションの言葉と共に、あつという間に辺りがナンスカの住人達で埋め尽くされる。会話を夢中だったとは言え、この隠密能力……実はシノビの末裔だった、とか言われても納得出来そうだ。

「い、いつの間に……」

「ナンスカ？ナンスカ!？」

緑色系の民族衣装に身を包んだおじさんが、恐らく疑問的な意味を含む声色で話しかけて(？)くる。手元のスターキヤリアーによる翻訳でも、ナンスカと出ているので普通にナンスカナンスカ言われているだけなのだろう。

「ナンスカ!?!ナンスカ!?!」

今度は赤色系のポンチョ？を纏った美人さんが話しかけてくるが、やはり翻訳されて表示される画面には、ナンスカナンスカとしか映らない。

黒すぎない程度に日焼けした肌からは、そこはかとない艶かしさを感じる……

「フンツッ!」

「アイタツ!?!」

唐突に足を踏み抜かれたボクは、無様に悲鳴を上げるしか無かったのだ。しかも委員長、割と本気で踏んだでしょう!?! 一体何をしたって言うんだよ……

「……な、なに?これなんなの?」

今更ビビっているような仕草を見せても、真っ赤になった足を抱えているボクには、酷く白けて見える。

コラ、引っ付くな!

『ナンスカ!!』

周囲に集まつてきたナンスカ人（ペルー人？）が、踊るように体を動かし、ナンスカと合唱する。もうこれわけわかんねえな。何？ 新手のサブリミナルコントロール？

——10分後——

「ふう……やつと解放してもらえたね」

辺りは既に、ボク達を除いて人気はなくなっており、怒涛のナンスカコールによる謎の熱気はどこか遠いモノとなっていた。

「（ナンスカつて言葉が、さつきから頭で響きやがる……）」

寧ろゲシュタルト崩壊してしまったよ、ボクは！

アレ、ナンスカつてどんな意味なんだっけ？

ナンスカ？ ナンスカーツ！ ……一旦落ち着こう。

「何だったの、一体……」

「こういう村ですし……外余からのお客所さんが珍しかったですか？」

「まあいいわ……取り敢えず手分けして、空から降ってきた人についての話を聞いて回りますよう」

こういう時にテキパキと決められるのは、結構頼りになったりするものだ。さつきま

で怖がる演技をしていた人と同一人物だなんて、とても思えないね。

……ん？日時計の側に、見慣れたフォルムを発見。アレは……

「あつ、トレーダーガチャだ！」

しかもBIGWAVEのシケたトレーダー3ではなく、グレードアップしたバージョンのトレーダー5だ！まさかこんな所にあつたなんて！元々トレーダーの場所なんて覚えていなかったから、これは大きな収穫だぞ！

「オマエはいい加減に懲りろ！」

残り<sup>残</sup>ライフ<sup>弾</sup>……25。

か、神に不可能は……！

## 43

ーナンスカー

「おっふ……」

まあ、ボクの運なんて元々、たかが知れているワケで。余りカードを全て注ぎ込んで  
はみたものの、大した当たりが出ることは無かったのである。

因みに、余りカードとは四枚目以降のカード達のコトであり、運用が絶望的（某社長  
のように、ピストルの撃鉄へとレアカードを投擲するという使い道が無いわけでもない  
が）なのでトレーダーの弾に回しているというのが実情だ。手持ちの戦力を減らす気は  
無いってことだね。

「（だから言わんこつちやない……そら、早く聞き込みを始めようぜ）」

「うう……ヨビフォルダのカードを流用すれば、あと4回は回せるのに……」

ヨビフォルダはスターキャリアーに固定で搭載されているデータのみのフォルダを  
指しており、空のカードにデータを移すことも出来ない仕様となっている。

「（諦めも肝心ってことだ、相棒よ）」

「コイツもBIGWAVEのトレーダーみたく、ウィルスに侵されているんじゃないか

と思えてきたんだけど……」

「(……不正は無かった)」

それ用途違うからっ！

――十分後――

取り敢えず一通り話しかけて回ったのだけど、じろじろみられたり、チラチラみられたり、じーつと見られたりする羞恥プレイに走っただけの結果となつてしまった。さっきのゲシユタルト崩壊のせいか、どうにもナンスカのことを思い出せない。ナンスカつてなんだっけ？

「あと、話しかけていないのは……」

「(あのデカイ祭壇の前にいる、変な杖を持ったジジイだけだぜ)」

ジジイって……いや、間違いではないんだけどさ。もつとこう、オブラートに包むとかね……

件のジジイ(仮称)は、村人達とは少々異なる意匠の装束を纏っている。ポンチョと言うよりは、ローブに近い見た目かもしれない。下半身には布を巻き、サンダルのような履き物をしているが、この人の特徴的なパーツは首から上に集中していると言えるだろう。

何せフツサフサの白髭に、鳥の意匠を凝らした杖だ。その見た目から、まるで天狗のような印象を受ける。常人に比べて高い鼻も、その印象付けに一役買っているようだ。

「ナンスカ！」

なんて考え事をしていたら、またあのナンスカという言葉だ。……何かの挨拶だっけ？

「……………？」

「………お客人、その様子から察するにナンスカは始めてかね？」

どう対応したのか戸惑っているボクを見かねたのか、落ち着き払った声でジジイ（仮称）さんは問い掛けてくる。どうやら慣れたものらしく、またかよ………みたいな心の声が聞こえてくるようだ。

「はい、そうなんです。あの………ちよつとした質問なんですけど、皆さんが口にはしているナンスカって言葉は、一体どんな意味なんでしょうか？」

漸く思い出してきたのだけど、一応確認を入れておく。推測で行動するのは危ういからね。

「お客人、ここでは人に話しかける時は最初に『ナンスカ』と挨拶するのがしきたりなのです。そのしきたりを守らないと、こここの人間は話も聞いてくれないでしょうな」

「難儀なしきたりですなえ……」

いや、ちよつと閉鎖的過ぎない？ だって今みたいに『ナンスカ』の意味を教えてもらうことも難しいってことなんだよね？

今はナンスカ・オサ・アガメさん（パーソナルビューで確認出来た）が対応してくれたからいいもの……

「その言葉……ナンスカを軽んじたと受け取ってもよろしいのですかな？」

やはり排他的な印象を受けるのだけど、それにしても少し口を滑らせた感はある。ここは素直に謝るべきだろう。誰だって、生まれ故郷を悪く言われていい気はしないものだからね。

「ああ……いえ、そういうつもりではないんですよ。すいません、失礼をお詫びします」  
「………そうですか」

向こうとしても、こちらが子供だということを考慮したようで、大人の対応を見せてくれる。キズナリヨクも高いみたいだし、村の人からの信頼も厚いのだろうか。

「ええつと、空から人が降ってきたと伺ったんですけど………本当の話なんでしょうか？」  
と言うか、ゴンターガ様だ。祭壇の裏手には、ゴンを象つたと思われる巨大な石像まで確認出来る。マテリアルウェーブでもないのに……用意すんのはえーよ。

「確かに、そのお方はこの村にいらつしやいます」

いらつしやる………尊敬語か。語調からしても、大層崇めているというのが伝わってく



る。この段階ではまだ、ゴン太のコトを本当にムー大陸から降ってきた使者だと思つてたんだっけ？

「本当ですか!?!それで、今は一体何処に……」

「申し訳ないが、そのお方はご多忙でして。今、アナタ方に会わせる訳ことは出来ないのです」

丁寧な口調だけど、断固とした拒否の意思が剥き出しの雰囲気だ。これは、何を言つても無駄なんだろうな。

「そうですか……」

「暫くは、この村を見学してお行きなされ」

「……はい、わかりました。お手数かけてすみません」

「いえ、お若いのに感心な態度ですとも。こちらとしても、理屈が通じる相手は楽でいいですからな。それではお気をつけて……」

見学してろつて言われたし、取り敢えずさっきの人達にもう一度話しかけてみよう。委員長達に合流するのは、それからでもいい。

「ナンスカ!」

「ナンスカ!」

一番近くにいたおばさんに話しかけてみる。気分はアローラ地方に迷い込んだ、新人トレーナーそのものだ。キテルグマ怖い……

「アラアラ、観光客かい？ここはいいところだよ。なんもないけど、平和なトコさね。さてと、あのお方の為にご馳走を用意しようさね〜」

なんて忙しそうにして、向こうへ行ってしまった。

あのお方ねえ……後でスターキャリアーのカメラで黒歴史を激写してやろうかしら。特盛牛丼一杯くらいにはなりそうさ。

この調子で、他の人達にも話を聞いてみよう。

『ナンスカ！空から人が降ってきたんだ！すごいよ、すごいよね！カミサマなのかな？でもその人、なんだかふとつちよなんだ！カミサマってふとつちよ？』

『ナンスカ！食事の準備をしてるんだけど……あのお方はよく食べるからね〜料理を山程用意しなきゃいけないから大変さ！』

『………ナンスカ。が、外国から来たのかい？ボク、人見知りか激しいからあんまり喋りかけないでくれよ。……空から降ってきた人？そうだよ、降ってきたんだよ。ビツ

クリだよ。も、もういいかい？」

『ナンスカ！空の方はお肉が大好きみたいなのね。だから、お供えの牛肉は最高級なのよ』

――十分後――

村の中央につくられた祭壇の脇で、得られた情報の共有をしていると思われる委員長達を発見した。いや、元々ここで待ち合わせていたんだけどね。少し遅れてしまったようだ。

「ナンスカ!!」

「ナンスカ!」

委員長に話しかけようとしたら、いきなり大声でナンスカ!!と挨拶してきたので、こちらもニッコニコでナンスカ!と返す。気持ち抑えめの声量だったので、気恥ずかしくなったのか委員長は、顔を真っ赤にして俯いてしまった。やるせない恥ずかしさを発散しているらしく、時々うがー!だのあ”あ”あ”あ”!だの聞こえてくる。

「ハア、ハア、ハア……マズイわね。どうにもクセになりかけているみたい」

「皆ナンスカナンスカ言ってますし、無理もないですよ。情報より挨拶の方が印象的な

までありますからね」

ビッグサイズの日傘を開きながら、キザマロがぼやくように呟く。正に、この場にいる全員の気持ちを代弁したようなものだった。

「まあいいわ……集めてきた情報を纏めるわよ」

漸く落ち着いたらしい委員長が、ゴホンと一つ咳払いをして場の空気を入れ換える。

このままじゃ愚痴

合いになつちやいそうだからね。仕方ないね。

——五分後——

全員で集めた情報を整理した結果、浮かんできた人物の名は……

「……………ゴン太ね」

「ゴン太くんですネ」

「ゴン太しかないよねえ……でもさ、どうして直ぐに会わせてもらえないんだろうね？」

「まったくよ!! ゴン太はワタシ達の仲間なのに!!」

キー——ツ!! つと頭上で輝き続ける太陽を睨むように空を見上げ、ワナワナと震え出す。

「……………暑い!!」

日傘があつても、ジリジリと照りつける太陽の熱からは大して逃げられないらしく、

額に汗を浮かべた委員長は吠えた。しかし、噴き出した汗で透けたシャツを着込んだ委員長は、いつもより色つぼく見える。暑苦しいとも言うんだけれどね。

「まあ、『会わせない』って言うてるわけじゃないしよ。今は待つしかないよ」

「そこでお二人に提案なのですが……『マロ辞典』によるとですね、この近くに『ナンスカの地上絵』があるらしいんですよ。遙か昔に描かれた、巨大な絵だそうで……どうです？ 時間が来るまで、そこを見学と言うのは……」

何故ナンスカの場所は載っていないのに、ナンスカの近くにある地上絵の場所は載っているのだろうか……アツプグレード？

「へえ、面白そう！ いいね、行ってみない？」

「男の子って、そういうの好きよね……まあいいわ。どうせ暇になりそうだし、付き合っ  
てあげるわよ」

「……実は、委員長も気になってるんじゃないの？」

「あのねえ……暑さでそんなこと、気にする余裕なんてあるわけ無いでしょう！ ほら、行くわよ!!」

微妙にカリカリしてるような……まあ、暑いとイライラするつてのはわかるからねえ  
……

「委員長、大丈夫？ 喉乾いてるなら、水筒貸そうか？」

出発前に用意しておいた、スポーツドリンク入りの水筒を委員長に見せる。口をつけるタイプなので、少し飲んでしまった後でよければ貸し出すことも吝かではない。

「うっ……………いい、いえ。け、結構よ……………」

何かの長い葛藤があった後、委員長は歯を食い縛りながら丁重にお断りを入れてきた。どうやら自分でも用意してきたらしい。

さて、この先にあるのが『ナンスカの地上絵』か。どうしても地縛神を思い出してしまおうような。

最高に高めたボクのファイルで、最強のチカラを手に入れてやるぜ！

ーナンスカの地上絵ー

「これが…………『ナンスカの地上絵』！」

ナンスカの村から続く一本道…………少々歩いた先に広がっていたのは、広大な土地をふんだんに使用して描かれた巨大な地上絵だった。入り口付近なので、遠目ながらすべての地上絵が見えるのだけど、この大きさではもっと近くに寄らなくては何の絵かもわからないな。

「大きなモノになると、遙か宇宙からでも見えるらしいですよ」

「へえ…………宇宙からでもかあ…………」

コスモウエーブにアクセスしてみたら一度、『ナンスカの地上絵』を探してみるのも面白いかもしれない。

「折角だから、もつと近くで見てくださいようよ！」

地上絵の近くには、その地上絵に対応した案内板が地面に埋め込まれており、スターキャリアーを翳すことで翻訳された説明文を読ませることが出来る。ガイドのマテリアルウエーブをマテリアライズしてみるつても結構面白いかもしれない。まあ、非対応なんだけどね。

『ムーの戦士……と伝えられている地上絵です。ムーの平和を守る、屈強な戦士だったと言われています』

『この地上絵は、ムー大陸を描いたものです。ムー大陸は、空中に浮かんでいたと伝えられています』

『この地上絵に関しては、何の伝承も残されていません……謎の紋章です』

『ムーの使い……と伝えられている地上絵です。ムーから地上に使わされ、スパイ活動のようなことを行っていたと言われています』

『ムーの軍師……と伝えられている地上絵です。ムーで戦争などが起こった時、作戦などを考えていたそうです』

『ムーの子供……と伝えられている地上絵です』

『ムーの監視者……と伝えられている地上絵です。ムー大陸と共に空を飛び、大陸を見守っていたと言われています』

――十分後――

一通り地上絵を見て回ったボク達は、一度入り口に戻ってきていた。見学してみて思ったのだけど、ナンスカの地上絵以外にも、壁画や化石の類があったのが驚きと言わべきか。特に食べ物の化石と言われて、壁面に残っているどう見てもハンバーガーにしか見えない化石を見た時は、思わず二度見してしまっただけだ。



ナンスカの人は、空中に浮かんでいたと言われるムー大陸を信仰しているらしく、真つ昼間から祈りを捧げる人も多いらしい。……お仕事は？

「じゃあ、そろそろ村へ戻るわよ！」

「だね。ゴン太に会わせてもらわなきゃ……」

さて、ゴン太最大の黒歴史（になると思われる）のゴンターガ様を、とくとこの目に焼き付けさせてもらおうか……！

ー ナンスカー

「あれ……祭壇に人が集まつてるよ」

祭壇とは言うけれど、どちらかと言うと舞台色が強い建築物つて感じだ。ナンスカ村の中央に建造された祭壇へと、原住民（ナンスカ族と呼ぶらしい）の人達が集まつている。ナンスカに来たばかりのボク達を囲んだ時のような騒がしさは無いけれど、何かを心待ちにしているような、そんなそわそわした雰囲気だ。

「何か始まるみたいね」

委員長が訝しみつつも、ここは観察の構えを崩さないようだ。変に邪魔をして、不興を買つても面白くないからね、仕方ない。

『ナンスカ!! さあ、皆の衆! 準備はよいな!』

ナンスカ・オサ・アガメの言葉に、先程までのそわそわしていた雰囲気が一発で霧散し、緊張感がその場を支配する。小声で喋っていた素振りの人達も、今ばかりは口を接ぐんでいるようだ。

『ムー大陸よりいらした使者……ゴンターガ様の、お成りだ!!』

『『ゴンターガ様!! ゴンターガ様!!』』

祭壇の奥に取り付けられていたと思わしき階段を登ってきたのは、奇抜な衣装に身を包み、頭に冠らしき物を被ったゴン太……ゴンターガ様だった。

ナンスカ族の少年曰くふとつちよな体を、足元までゆつたりと包むローブに、なんだろう……紫色のタテガミ? ファア? のようなモノが首周りを覆っている。年末にやる歌合戦で、小林○子さん辺りが着ていそうな衣装だ……

『ワレこそはムー大陸の使者、ゴンターガでおじやる!! 善きに計らえ、でおじやる!!』

『うおおおーっ!! ゴンターガ様!! ゴンターガ様!!』

ゴンターガ様のお言葉を受けたナンスカ族の皆さんは、踊ったり、膝をついて崇拜したり、ワーワー叫んだりと様々な反応を見せる。

『ふおっほっほ〜!!ワレは満足でおじやるぞ〜!!』

観衆の反応を見てご機嫌なゴンターガ様は、何処からか取り出した骨付きカルビを、満足気に食べ始めている。人を騙して食う飯は美味いか?ゴン太よ……

「こ　れ　は　ひ　ど　い」

「ワタシだってばやきたいわよ!　どういうこと!?　なんでゴン太があんなコトになつてるわけ!」

そんなこと言われても……おのれムー!としか。

「完全に神様扱いですね。ゴン太くんも恥ずかしがっているようにも見えませんが……多分なりきってるんですよ。なんか『おじやる〜』とか言っていました!……ブフツ!」  
あ、キザマロが吹き出した。自分で言つててシユールなことに気がついたんだろうなあ……

『『ムー大陸の使者』つて呼ばれてたけど……どういふコトなんだろうね?』

「まあ、何にしても……ゴン太くん本人に聞いてみるのが、一番早いんでしょうね」

「それじゃ、直接話を聞きにいつてみよつか」

「まったく……ワタシのブラザーは世話が焼けるのばかりね!」

いつもは世話を焼き時はなんとも思っていそうな顔なんだけど、今回ばかりは混乱しているみたいで、ヤケクソって表現がしっくりくる荒れようだ。

友達が行方不明になって、手がかりを追って来たら現地で神様扱いを受けていた……って、これやつぱりおかしい所しかないじゃないか！

## 44

ーナンスカー

ゴンターガ様の御成で、大変喧s……賑やかな舞台型の祭壇に近づくと、ナンスカ族の盛り上げ役……と言うか音頭をとっていたナンスカ・オサ・アガメさん（天狗似な人のことだ）がボク達に気づいたようで、杖を軽く振ってくる。多分、こつちに来いという意味なんだろう。

「……オマエ達も、ゴンターガ様に祈りを捧げに来たのか？」

うーん、この雰囲気、アナタ方の神様を浚いに来ました……なんて茶化せるとも思えないし、素直に言った方がいいのかもしれない。

「極めて説明の難しい状況ですよ、これ。……ど、どう説明しましょうか？」

「ほ、ほらスバルくん！ こういうの、得意でしょ!？」

『悲報』突然の裏切りに遭った件について。

……さっきまでの威勢は、一体何処に雲隠れしたって言うんだ！

「ええ……なんで……」

「早くなさい!!」

うんざりしたような顔（になつていふと思う）のボクを、委員長は怒鳴るように急かして直ぐ後ろへと引つ込んでいく。これを激励とは呼びたくないなあ……

「……………その、ゴンターガ様なんですけど……彼の本名は牛島ゴン太と言ひまして、ボク等の友達であり小学生という社会的身分をですな……………」

「はっはっは!! 面白いことを言ひますな!」

若干しどろもどろになつていふボクの説明を鼻で笑いながらナンスカ・オサ・アガメさんは否定してしまふ。

こやつ、ぬかしおるわ……という心の声が聞こえるようだ。……何だか腹が立つな。いや、ボクの勝手な被害妄想なのだけれどね。

「随分笑わせてもらったので教えてさしあげるが……ゴンターガ様は、遙か大空に浮かぶムー大陸からこのナンスカ村に遣わされた、謂わば『使者』なのだぞ! それはあり得ませぬな!」

「だくかくらく!! なにがどうしてそういう話になつてるのよ!」

クラスの委員長としてどうなのそれ……? と先程まで思つていたけれど、初対面の大人にも怒りをぶつけられる程度には、覚悟があるらしい。見直したよ、委員長!

……我ながら、手のひらドリル感は否めないが。

「ゴンターガ様は、空よりこのナンスカ村へと落ちてこられた。人が空から振つてくる

など有り得ぬコトだ」

「つまり、ゴン太くんはムー大陸から落ちてきたとおっしゃってるんですね。もうワケがわからないです」

同感だよ。いや、空中に浮かぶ文明都市の方が有り得ないか……？ 実際には浮かぶのだけど……それでも、ねえ？

「そういうことだ……さあ、用が尽きたなら早くキミ達の国へ戻るといい。ゴンターガ様には、これから我々の支配者としてナンスカを盛り上げていただかなくてはならんからな」

見知らぬ他人を勝手に神認定して崇めるとか、羅列するとかかなりヤバイ民族に見えるような……どこぞの動画投稿サイトのコメント欄のようだ。人は、神にもなり得る……つて、何を突然悟っているのだろうか。いけない、今は目前のコトに対応しなければ。

「支配者だなんて。ゴン太は、ごく普通の小学生五年生だつてのに……」

「さつきからまるでラチがあかないわね……!! もう限界よ! ゴン太! いつまでそんな所でお肉囓ってるの!!……さつきと降りてきなさい!!」

糠に釘な村長に見かねたのか、舞台の上で骨付きカルビをムシャムシャと頬張るゴン太……ゴンターガ様(笑)へと声を張り上げる。どうやら委員長も、暑さで余裕という

ものが、大分無くなってきているらしい。

「……………」

ムシャムシャ、バクバク……と、委員長の御言葉にも全く耳を貸す様子を見せないゴンターガ様は、ただひたすらに両手に保持した肉を貪っている。

……誰も盗らないっつーの！

「ゴン太くん！ まさか委員長の御言葉が聞こえないのですか!? これは折檻確定ですよ!?!」

ダメだ。完全に聞き流してしまっている。記憶喪失ということだから仕方ない部分もあるんだけど、これは解決した後の折檻が恐ろしいコトになりそうだ。ふええ……

「ねえロック。ゴン太のアレって……」

「いや、特に怪しい電波とかは感じねえぜ。別の電波は感じるがな……」

ハイド達による精神干渉の可能性を否定しつつも、ロックの目は生暖かいモノになっている。これは……可哀想なヤツを見るときの目にそっくりだ。

「確かに。今のゴン太は、何か変な電波を発信してるように見えるよね……」

納得の中二度であると言えるかもしれない。いや、高二、中二ときたら……小二病？ 何にせよ黒歴史確定だけは免れないだろうな。同情するよ、可哀想にね。

「(それに食いつぶりだけ見たら、いつもとまるで変わらないじゃねえか。あのオンナの



呼び掛けは現実逃避つてコトで、本人が意図的に無視している線すらあるぜ」

「……………」

「コリアアアツ！ゴン太アアツ!!」

喉を枯らさんばかりに叫び続ける委員長は、完全に年頃な女子の体を為していないと思う。……頼れる委員長であることに、変わりはないのだけどね。

「よくわからないけど、今ゴン太に話しかけても無駄なんじゃない？」

「ハアハア……た、確かにそうみたいね……………ちよつと、二人ともついてきなさい」

深呼吸を繰り返して無事に息を整えた委員長は、目付きだけは鋭いまま、祭壇から離れた場所まで先導していく。ナンスカ・オサ・アガメさんも、祭事中に場を離れるわけにもいかないど、直ぐに注意を逸らしている。これ以上、こちらに邪魔をする気がないことを悟ったのだろうね。

「このまま引き下がるワケにはいかないわ。何処か、人の居ない場所で策を練ってやるわ……………」

手でパタパタと扇ぎつつも、その目に宿る闘志には些かの衰えも見せていない。単に、暑さで余計にカリカリしているだけなのかもしれないけれど。

「じゃあ、さっきの地上絵があった方へ行きましょう」

「賛成！」

キザマロの提案に賛成する形で、ボク達は話を進めていく。委員長としても、祭事のために人気が少なくなっていると考えたようで、異存はないようだった。まだこの辺りの地理に詳しい訳でもないし、妥当な提案だとは思っただけ……

——ナンスカの地上絵——

「……さて、困ったわね。まずはどうにかして、ゴン太と直接話をする機会を設けなければならぬわ。アナタ達、何か提案はあるかしら？」

やはりと言うべきか、祭事中にまで地上絵のあるエリアへと足を運ぶ人はいないようで、先程までの賑やかさから一転、地上絵が不気味に映える秘境と化していた。

「うーん。そうだね、ゴン太なら……」

牛丼しか無いのだけど、ここでボクが思い付かなくとも、キザマロ辺りが……

「……あっ！いい方法がありますよ！ゴン太くんの好物を用意して誘き寄せるっていうのはどうでしょうか？」

ゴン太にしか通用しそうに無い仕掛けだ。匂いで誘き出せるって、それどんな超生物なんだよ……と思ってしまうが、そこはゴン太クオリティ。そんなに不思議ではないよ

うな気がする。だってゴン太だもの。

「それよ！」

「好物は……」

「牛……！」

「……丼！」

「だね！……フフツ……それで、材料はどうするの？」

「こういうノリ、本当に最高だと思う。つい笑ってしまったけど、材料の方は大丈夫なのだろうか。いや、大丈夫だとは思うのだけど、衛生的に問題ないのだろうか……」

「フフフ……こんなコトもあろうかと、ゴン太くんお気に入りの『紅生姜』を持ってきているんです！」

何故故に、紅生姜……？そもそもゴン太お気に入りの紅生姜を、どうしてキザマロが知っているのだろうか。

野暮な突っ込みなんだろうけど、デマキュウのこともあるし、アイちゃんに対して過度に反応している素振りも見せていなかった。

キザマロⅡホモ説が思い浮かんでしまったボクを、どうして責めることが出来ようか。いや、出来はしない。

「流石ね、キザマロ……で、他の材料は？」

「……………さ、探しましょう！きつと、どうにかなりますよ……………」

委員長の指摘に冷や汗を垂らしたキザマロは、あらゆる方向を向いて、取り敢えずの方針を提案する。因みにボクは、牛井の具材に関しては何一つ持つてきていない。だって、理由がないでしょう？ボクはナンスカに、誰が飛ばされているかも判らない状況だったんだから。

「ええつと、牛井の材料は…………『牛肉』『玉葱』『ご飯』つてところかな？細かく言えば、調味料や器も必要になるけど……………」

ゲームじゃ、卵も入っていたような気がするけれど、実際牛井に卵つて要らなくなる……………？生卵とか、調達元の関係で危険過ぎるような。卵とじに使うつもりだったのかもしれないけれど、ぶっちゃけ委員長が材料を知らなかった説が濃厚なんじゃなからうか……………

「……………そうね、そんなところね！それじゃ、手分けして探すわよ！一時間後に、この場所へ集合……………で、いいかしら？」

「ハイです！」

「うん、一時間後ね……………わかったよ」

「決まりね。牛井……………作るわよ!!」

ボク達の返事を満足気に聞き入った委員長は、右腕をギラギラと輝きながら熱を放出

し続ける太陽に向かって突き出し、音頭をとる。どうやら、ボク達を鼓舞しているらしい。

「オーツ!!」

ーナンスカー

未だ祭事中ということもあつてか、熱狂的な賑わいを見せる祭壇周辺だけど、地面と比較して高台になっている舞台の周りにはお供え物の食料が山程置いてある。これを少々、頂戴したいところだ。

「……お、アレ『牛肉』じゃねえのか？骨付きだから手間がかかりそうだが……そこら辺は、料理人次第つてヤツか？」

ロックも言つてて無理っぽいと思つたのか、段々口調が萎んできている。ボクは言わなくても、キザマロに料理が出来るとは思えないし、委員長は………委員長だし。確か、委員長が調理マシーンを持ってきているんだっけ？それに頼るしか無さそうだ。

「(でもちよつと難しいよ。その牛肉、祭壇の前面に置かれているんだもの。正面から取りに行つたら、村の人に捕まっちゃうかも……)」

「(それじゃ、電波変換してから拝借しようぜ。それならバレる心配もない)」

「(……了解。何だか最近、人目を忍ぶスタイルが板に付いてきたようで悲しいよ……)」

「(そんなコト言ってる場合かよ！おら、とつとウエーブホールに入ろうぜ。狙いは中央にある、特大の骨付きカルビだ……！)」

おかしい。何故に電波体のロックが舌を鳴らしているのだろう。ウイザードでもないので、モノを食べることは出来ないはずなのだけど……

『ゴンターガ様！ゴンターガ様！今日の善き日に「ライスシャワー」を蒔きますわい！』  
……なぬ？ライスシャワーとな？

「あの、すいません！そのライスシャワーに使ってるお米なんですけど……」

周囲は大声でワーワー言っている為、こちらもそれなりの音量を出さないと相手に伝わらない。先程ライスシャワー云々を言っていたのは、ナンスカ族の民族衣装に身を包んだ壮年の老婆だった。

「……ん？ちよつと分けてほしいのかい？いいよいいよ！『ライスシャワー』のお裾分けだよ！」

「ありがとうございます！」

イヤにテンションの高いお婆さんから望外のお米を大量に分けてもらい(総量からすれば少々だけど、食用ならお釣りがくる量だ)、意気揚々とウエーブホールを探す。幸先のいいスタートだ。これならすぐに集まるかもしれない。何せ、一番の難所である卵の回収に行かなくていいのだから。時間が余ったら、卵を取りに行くのも悪くないけれ

ど。

ーナンスカの電波ー

お供え物の、特大骨付きカルビだ。こんがり上手に焼けている。某狩人ゲームなら、末尾にGを付けてもいらいの絶妙な焼き加減。

食事を必要としない電波体でも食欲を刺激されるとなれば、その凄まじさが理解出来るはず。端的に言って、とても美味しそうだ。

オレサマオマエ、マルカジリ（したい）。

「……よし、少しだけ拝借しよう。『ソード』で上手く切れるかな……」

「丸ごと持つていっちなまえばいいんじゃないやねえか？ 手間が省けるぜ」

「そんなことしたら、現実世界の方で大パニックになっちゃうよ。あんな目立つ位置の骨付きカルビが消えたりしたら、ね」

「ケツ、それもムー大陸ってヤツのせいにしちまえばいいのによ。アイツら、空から人が降ってきただけで神様扱いだからな。なら、宇宙から降ってきたオレは一体何様扱いなんだっての……」

ぼやくロツクを説き伏せ、左腕に展開したソードで慎重に削っていく。多分今日の晩御飯にもなるだろうから、気持ち多目に持つていこう。調理に失敗する可能性もあるこ

とだし。

「……よし、剥ぎ取り完了。最後は……玉葱だね。ロックは何か心当たりとかある？」

「そうだな……玉葱だろ？」

「そうそう、あの鼻がツーンとするヤツ」

「ツーン？それならさつき、オレがなつたぜ。突然鼻がツーンとしてきてよ、えらく不快だった」

鼻や目がツーンとするのって、玉葱の刺激成分が原因なんじゃなかったっけ？それより、今までスルーしてきたけれど、電波体に嗅覚があるつてのもおかしな話だ。何で感じ取っているんだらう。

「へえ……それ、どの辺でツーンとした？もしかしたら、もしかするかもしれないよー」  
「風に乗ってきたからな……風向きを考えると、あの辺りか？」

そう言って左腕<sup>ロック</sup>が示したのは、ナンスカ村の片隅にある植物群だった。変わった形をしている、実がプックリと膨らんでいる。近くに寄ってみると鼻の奥がツーンとしてきたので、これで間違いないと思われる。一応確認はとるけど。

「……これかな？」

「ああ……涙が出そうになってきたぜ」

それはちよつと大袈裟じゃないかなあ……いや、ロックの感覚が鋭いだけ？



「それじゃあ幾つか摘み取って……つと、これくらいでいいかな」

「時間にはまだ余裕があるな……少し早めに戻るか?」

「そうだね……そうしようか」

地上絵の岩壁には、卵を産んだ鳥類の巣があつたはず。鳥さんには悪いけど、卵を幾つかいただいたいくことになりそうだ。

——ナンスカの地上絵の電波——

一足早く作戦会議をしていた地上絵の隅に戻ってきたけれど、やはりまだ誰も来ていない。

……これなら、牛井用（トツピングに使うと思われる）の卵を確保する時間がありそうだ。

「どうする? アイツら呼んじまうか?」

「それが良さそう……つと、見てよロック。鳥の巣だ。壁画の描かれてる岩肌に……」

「……おつ! しかもご丁寧に卵まであるぜ。でもよ、牛井に卵なんて使うのか……?」

……一応の、理由はある。

「どちらかと言うと、トツピング的な意味合いが強いかな。それにゴン太って、生卵を上からかけるのがお気に入りだったような……」

何度か牛丼を食べに出掛ける機会があったので、お気に入りの食べ方くらいは頭に入っている。流石に紅生姜のブランド？まではわからなかったけどね。

「じゃ、取りに行こうぜ。作戦の成功率を上げておくに越したことはないからな。集合時間にも余裕があるみたいだしよ」

「OK！それじゃ、早速ウエーブロードを伝っていいんか！」

——三十分後——

「ゼエ、ハア……や、やっとたどり着いた……」

わ、忘れていた。ナンスカは電波の整備が遅れているから、ウエーブロードが迷路ように入り組んでいるんだと、スカイウエーブでデンパくんに教えてもらっていたというのに……！……何であんなにグルグルしてるんだよ！

「ま、いい時間潰しだったんじゃないか？ほら、とつとと回収しちまおうぜ。産まれる前だよ。……クククツ」

「それは割と洒落にならないかな……つと、鳥さんゴメンよ……」

素人目でも、目の前の卵が新鮮であることは理解出来る。これなら、食材として利用しても問題ないだろう。巣の中に転がっている卵の幾つかを拝借し、その場を後にする。

スターキャリアーのデジタルウォッチを確認すると、約束の時間まであと五分といたところだ。ウエーブアウトで帰還すれば、丁度いい時間に合流出来るだろう。

「それじゃ、集合場所に戻ろうぜ。この戦果ならきつと、あのオンナも満足するだろう  
ヤ」

「だといいいけど……」

自然由来過ぎて、後からお腹壊したりしないか心配になってきたような。何せ、ボクらの晩御飯でもあるのだから。

## 45

——ナンスカの地上絵——

電波変換を解除し、先程解散した場所に向かうと、既に委員長とキザマロが話し合っているのが見える。遠目ながら顔色を伺うに、あまり芳しい結果は得られなかったようだ。

「……………お待たせー！」

「お疲れ様、スバルくん。それで、どうだった？ やつぱりこんな所で牛丼をつくるなんて、無理があつたわよね……………」

「いやいや、そんなこと無いってば。…………ほら！」

背負っていたリュック（出発前の荷造りで用意したモノ）からタッパーに入れた材料を取り出した。て、これ見よがしに委員長の前へ出す。卵に気を遣わなくていいなんて、最近の技術はホント進んでると思う。

かがくのちからってすげー！

「……………うそ？ ホ、ホントに全部揃ったの!? ……夢か何かじゃなくて?！」

「頬つぺた、引つ張つてあげようか？」

ニツコリ笑いながら、親指と人差し指を委員長の前で立ててみせる。委員長のキメ細やかな肌を指で引つ張るのは微妙に気が引けるが、現実に戻ってきてもらうためだ。致し方ないので、ここは堪えてもらおう。

「……よ、余計なお世話！それに最初から、スバルくんなら何とか出来るんじゃないかって……って、ちよつと！何ニヤついてんのよ！」

委員長の貴重なデレなんだし、ニヤニヤしてしまうのはしょうがないことだと思う。そう、ボクは悪くない！

「いや、ゴメンゴメン。委員長からの信頼が厚くて、ボクとっても嬉しい……ってことだよ」

「……まあいいわ。ワタシ達の方で調味料は確保したから……それじゃあ早速……牛丼、作るわよ！」

オー!!つと意味もなくガツポーズを決めるボク達であるが、委員長の様子がおかしい。どうして冷や汗をかいているんだろうか。多少だけど、料理が出来るようになったはずじゃなかったっけ？

「それじゃあ委員長、調理に移ろうか。……作り方、知ってるの？」

「いや、それは調べればすぐにわかるんだけど……ワタシ、牛丼つくったことが無いのよ

ね」

最新機種であるスターキャリアーは、当然のようにネット環境に対応している。なのでしっかりクツ○パッドも完備しているのだ。完備しているかアクセスするだけなんだけどね。

「……レシピを見ながら作ればいいんじゃないの?」

ボクの（恐らくは至極全うな）意見に、委員長はサツと目を逸らす。何か認めたくない現実から逃れんとするような雰囲気を感じる……

「……………その、初めて挑戦する料理は必ず爆発するというジンクスが……………」

こ れ は ひ ど い。

もしかして、あれじゃない? 残留電波がコンロのシステムに介入して、変に誤差動させてるとかありそうだ。

まあ、ポイズンクッキングでないだけ、マシではあるのだけどね。

「何そのテクニカルに嫌なジンクス……」

「でっ、でも大丈夫!……多分。クッキング用のマテリアルウエーブを持ってきたわ!」  
 こ、これ!と委員長がカードを渡してくる。恐らく、このカードに調理マシンのマテリアルウエーブが入っているのだろう。

ぶつちやけマテリアルウエーブって、スターキャリアー間だとカードを介さずにやり

取り出来るのだけど、設定に少し手間がかかっちゃうんだよね。なので直接会って渡すときはカード、遠方ならメールに添付……という形を採るのだそうなの。

因みに、ブラキオ・ウエーブ野郎に噛み砕かれたブックボンは既に、メールで天地さんへと送っている。天地さん曰く、すぐに直るそう。良かった。

「……………」

「それじゃあ、後はスバルくんお願いね！」

それでいいのか白金ルナ……と思わないでもないが、マテリアルウエーブを使った調理も割と楽しそうなので、ここは気持ち切り替えていく。まあ、どうせあかねさんの料理には遠く及ばないのだろうけど。

「よし、それじゃあ……いくよー！」

調理マシーンのマテリアルウエーブ、スタンバイ！

どうやら名前はお調理丸というらしい。どこか満腹丸に連なるネーミングセンスを感じる……

『大食いマシーンとは永遠のライバルだ、ぞ!!ボクをつくるスピードが速いか……ヤツの食べるスピードが速いか……長年に渡って勝負が着かないんだ、ぞ!!大食いマシーンより役に立つ所を見せるんだ、ぞ!!』

「そりゃ、結構な意気込みで……………つと、マテリアライズ！調理マシーン！」

構えたスターキャリアーの先から飛び出てきたのは、満腹丸とは色違いのコック帽に腕が四本付いている……と言った風貌のマテリアルウエーブだった。これは完全に、製作者が満腹丸を意識しているのが丸分かりだね。

『調理マシンの「お調理丸」！だ、ぞ!! 本日はナンスカの新鮮な食材を使って、美味しい牛丼を作るんだ、ぞ!!』

なんと、お調理丸の方でレシピを確保していたらしく、スターキャリアーの画面にオススメの牛丼レシピがピックアップされている。

取り敢えず、羅列されているもの一番上にチエックを付けて決定ボタンをプッシュすることでレシピを決定。これで調理に移ることが出来るようだ。

「しっかりやりなさいよ、スバルくん!! 完成した牛丼は、ワタシ達の晩御飯にもなるんだから!」  
ワタシがやってもいいんだけど……」

「……なら、その嫌なジंकクスを何とかしてよ! ボクは晩御飯が消し炭なんて、絶対にゴメンだからね!」

「い、言ったわね……! その調理マシンを返しなさい! ワタシの本気を、見せてあげるわ!」

そう言うと、委員長は今まさに調理を開始しようとしていたお調理丸に掴みかかり、ボクの頭上から引き剥がそうとする。ちよ、ちよつと!?



「うわっ！……止めてよ！委員長が調理したら、爆発するかもしれないだから！」  
 「こ、この……！もしも美味しくなかったら……わかつているわね！」

痛いところ（さつき盛大に自爆していたのだけど）を突かれた委員長は、一先ずお調理丸にかけた腕を離したが、ますます強いプレッシャーを放つようになってしまった。理不尽過ぎないか、これ!?

「こっとなつたらヤケクソだ……！」

「(ククツ……これじゃ失敗出来ねえな)」

こんな南国で牛丼製作なんて、この先一生体験出来なさそう……ハッ、これが音に聞く『牛丼クエスト』か！あのソロも嗜んでいたという……ラプラスにセーブデータを消されたらしいけど。

それに、レベルアップしそうな気もする。牛丼ファンタジー、牛丼レガシーか……絶版にされそうだ。

『レッツ！クツキング!!だ、ぞ!!』

うおおおっ！術式調理難易度レベル……2だ！

ーその夜・ナンスカの地上絵ー

その後、ボクは『ぐうの音も出ない程の牛丼』、略して『ぐう丼』を見事完成させ、悔

しがる委員長を放置しつつ完成品をナンスカの広大な大地にセットしていた。後はゴン太が来るのを待つばかりである。

極めてアホらしい作戦ではあるのだけど、これで成功することを知っている為に、ボクから何か言うことは出来ない。

「来ないねえ……」

辺りは既に夜の帳が下りていて、昼間に比べて視界は悪い。ボク達は壁面の側でじつと機を窺っていると言うわけだ。

『きつと大丈夫ですよ。ゴン太くんの食い意地は、動物とタメを張るレベルですからね』  
暇になってきたのか、スターキヤリアー越しにキザマロが他愛ない会話に付き合ってくれる。……張り込みになるのなら、予めアンパンと牛乳を用意していればよかったかもしれない。

「うん知ってた」

『ですよね……』

二人揃って遠い目をしていると、村の方から誰かが近寄ってきたようで足音が聞こえてくる。うん、間違いなくゴン太だ。

「クンクン……この匂いは……クンクン……」

鼻を引くつかせながら、ムー大陸からの使者（偽）改め牛島ゴン太がナンスカの地上絵エリアに姿を現す。様子を見るに、嗅覚だけでここまで追跡してきたようだ。

流石はコダメ人。

「うわっ、ホントに来たよ……」

『今よ！ フォーマーション、トライアングル！』

同時通話モードにしていたスターキャリアーから、委員長の合図が聞こえてくる。因みに作戦の概要は、散らばったボク達が牛井の香りに誘われてきたゴン太を囲むという、とてもシンブルなものだ。

「ゴン太！」

「漸く誘き出せたわ！」

「……何でおじやるか？ お主達は……？ ムー大陸より降臨した使者であるワレに對して、酷く無礼でおじやるぞ〜！」

得意気な委員長のセリフも今のゴン太には煩わしい雑音にしか感じられないようで、好物の牛丼を食べようとしたところに入った邪魔者……という認識のようだ。

「何言ってるのよ！ もしかして、本当にワタシ達のコトがわからないの!? ねえ、ゴン太!!」

「ゴン太? ゴン太………ウウウ……その名前で呼ばれると、頭のタンコブが痛むで

おじやる……」

タンコブ……記憶喪失を起こすほどのタンコブか……

「頭つて……まさかゴン太くん……空から落下した時、変に頭を打って……それで、記憶喪失……!？」

キザマロが、ハツとしたように眩く。その目は見開いており、未だに仮説の域を出ないながらも、どこか確信染みたものがあるようだ。

普通はそんな高さから頭を打ったら死ぬんだよ！これだからコダマ人は！

『おや、ゴンターガ様。どこにいるかと思っていれば、何とこんな場所にいらつしやいましたか……』

夜の地上絵に、カンツ！と杖を突く音が響き渡る。ゴン太が村から抜け出したのを不審に思ったのだらう、追ってきたのは村長のナンスカ・オサ・アガメさんだった。大人の余裕というヤツか、その言葉には微塵の揺らぎも感じることができない。

「貴方は我らにとつてとても大切なお方なのですぞ。勝手に出歩かれては困りますな……さあ、寝台へ戻りましょう」

……それつて、体のいい軟禁じゃね？

アガメさんの言葉を聞いて、牛井に伸ばそうとしていた腕を引つ込めて振り向くゴンターガ様……ゴンターガ。本人はゴンターガ様のつもりなんだっけか。

「ちよつと、待つてくださいい！」

「ナンスカ？ よもや、このお方の邪魔をするというのかね？ ふむ、ならばよかろう

……」

ゴン太とアガメさんの間に体を入れて制止するも、依然としてアガメさんの余裕は崩れない。

……この香りは………!!

「クンクン………、この匂いは………!!」

ゴン太と同じ反応をしてしまった………何だか凹んでしまう。

「そう、ゴンターガ様が好んで食していらつしやつた、ナンスカ風の骨付きカルビです」  
これは………突っ込んだ方がいいのだろうか。それとも、アガメさんがデータストーム（カルビの香り）を操れるイグニスということにしておいた方がいいのだろうか。

「ゴン太!! 頭なんて抱えていないで、ワタシ達と一緒にニホンへ帰るのよ!!」

「ウ………ウ………ウオオオオオオ!!」

委員長の呼び掛けをはね除けるように、腕を振り回すゴン太。どうやら決意は決まったようだ。

「カルビ!! カルビ食べるぞおつ!!」

一際大きな声で決定を下すと、ズンズン歩いてナンスカ村の方へ去って行ってしまった

た。その後を悠然とアガメさんが追っていく。大勢は決したと見たようで、こちらを振り返りもしない。

「確かにあの食い意地は、動物並みと言つて差し支えねえな……」

ゴン太の様子を見ていたロックの囁き声が、人気の少ない夜の地上絵に木霊していた。うう………寒い。

——数十分後——

「マテリアライズ！ テント！」

地上絵が描かれているエリアの隅で、ボク達は夜営の準備を開始していた。

不機嫌な委員長構えたスターキャリアーから特大の電波体が放出される。それは地面に接着すると同時に、縦横へと広がり、あつという間に立派なテントへと様変わりを遂げていた。

それにしても……どうしてテントが顔のデザインで、入り口が口に相当する部位になつていいのか、小一時間問い詰めたところだよ。開発者はきつと変態だったに違いない。

『レディース、アンド、ジェントルメン……』

お？ 勝ち確の煽りかな？ エガアウオ……

オマエ如きが神遊矢に勝てると思うな……!」

『いつでも何処でも何度でも。忘れられない夜と、快適な睡眠を……私、ワタクシテントでござい  
ます』

「さて、今日はここで寝ること。……ゴン太を取り戻すまでは、おめおめとニホンに帰れ  
ないわ!!」

全く諦める様子を見せない委員長が、怒り心頭でテントの中へとズンズン入っ  
ていく。一瞬にして現れた巨大なマテリアルウェーブのテントに面食らっていたボク達も、  
続いて入り”口”からテント内部へと足を踏み入れる。どうやら、中には靴箱的なモノ  
まであるらしい。

「おお……!結構広いし、居心地もいいんだね」

テントにデフォルトで用意されている寝袋を除けば、特にこれと言った内装は見当  
たらないが、それ故にテント自体がとても広々とした空間に感じられる。

このサイズからして……かなりお高かったんじゃないの？

「言っておくけど……寝てる間に変なコトしたら、タダじゃおかないからね!」

まるで親の敵でも見るような目で、委員長はボク達を睨んでいる。キザマロに至つて  
は足がガクガクに震えているので、テントの中にいる限りは平穩でいられないかもしれ  
ないね。それにしても……

「ブフツ……委員長にしては面白い冗談だよ、キザマロ？」

小学生に小学生が何言ってるのさって感じだよ。

あ、同級生なんだっけ。そりゃあ意識も……する、のか？まあ、委員長が暴走してリアル蛇睨みを食らう前に、早いとこ寝た方が精神衛生上良さそう。

「えええ……そういう流し方なんですか？……ボ、ボクはそんな命知らずじゃありませんよ！」

「失礼な想像をされたような気がするけど、今日はもう眠いし、この辺にしておくわ……」

それだけ言って、委員長はさっさと寝袋に入って背を向けてしまった。後に残されたボク達も、どちらからともなく寝袋を広げられるポジションを確保して、各々寝袋に入っていく。サイズはゆったりして、中々寝心地も良さそう。

明日はブライが襲撃してくるハズなので、今日の疲れを残さないためにも、とっとと寝てしまおう。

『グツナイ』



ーヴヴヴヴ……ヴヴヴヴ……

スターキャリアーのバイブレーターが振動している。委員長達を起こしてはいけない  
と思つて、今は設定変更でバイブレーターだけにしているのだけど……

「……………何だよ、こんな時間に……………」

枕元のスターキャリアーに手を伸ばし、朦朧とする意識を保ちながら小声で『ブラウ  
ズ』と唱える。いつものようにエア・ディスプレイがボクの眼前へと飛び出し、こんな

時間に通話しようとした不届き者の姿をボクの瞳に映し出した。  
『……………よお、岩男』

## 46

ー翌日・ナンスカの地上絵ー

突然の不届き者による夜襲ナイトアタックを受けたが、よく考えると週2で電話をかけると言ったのはボクの方であった。よって今回は不問にする……と、不遜な言い方をしてしまったが、どう見ても全面的にボクが悪いので、しっかりと謝罪はしましたとも。

スターキヤリアー越しに、ヒカルの愉悦がありありと感じられたけど。星河スバル、一生の不覚……！

後で確認してみたら、なんと悔しさのあまり唇を切っていたらしい。こんな時こそ、用意してきた『ワクサミンEXターボ』の面目躍如だと言えるだろう……！

骨折でも、瞬く間に直るらしいよ！

『グッモーニン』

テントのマテリアルウェーブが、持ち前のダンディーボイスで起床時間を告げてくれる。委員長とキザマロも目覚めることが出来たようだ。ボクは環境故に眠りが浅かつ

たのか、既にすっかりと目が覚めている。昨日は遅くまで、ツカサくん（序でにヒカル）と話していたので、ナンスカの猛暑に倒れたりしないといいが。

ツカサくん曰く、実は精神修行の一環でこの辺りに訪れているらしい。確かゲームでは、エンディング後にナンスカの遺跡の電波に現れていたような。となると、もしかしたら会えるかもしれない。スカイウエーブで密入国してきたらしいが……なんでも、敢えて生身で過酷な環境に身を晒す修行（苦行？）なんだとか。もしかして人間辞めるつもりじゃないよね……？

取り敢えず、ボクから言えることは一つだけ。

密入国はいけないことだと思います（）

――十分後――

うとうとしていた委員長（不覚にもときめきかけてしまった）とキザマロも、すっかり身支度を整え終わったので、さあ、今日もがんばるわよ！……とやる気を見せていたボク達の耳へと、にわか騒がしい音が入ってくる。これは……ナンスカ村の方からだ。

「……何かしら？ どうも村の方が騒がしいようね……こんな朝っぱらから。情報収集がてら、ちよつと見に行ってみましょうか？」

「これは……ナンスカ民族独特の演奏か何かかもしれないですね。マロ辞典にも載ってい

ませんし、ボクも行ってみるべきだと思います」

「また何か、お祭りでもやってみるのかもね……」

確か、朝っぱらからお祭り騒ぎをやらかして、そこをソロに介入されるとか、そんな流れだったような気がする。ゴン太が酷い目に遭うんだけど、これが切欠で記憶が戻るんだっけ？ いや、委員長の黒歴史お色気ホーミングが云々だったような気がする……

——ナンスカ村——

「……あれ？　なんだか、昨日よりもやけに賑やかだ」

ナンスカ村の中心、例の舞台型祭壇が近くまで寄ると、凄い熱気の村人達が、昨日よりも更に激しく歌い、踊っているのが見てとれる。その中には当然、煽動家としての才能を如何なく発揮させるアガメさんの姿も確認出来た。

「さあ、皆の衆！　歌え！！　踊れ！！　ムー大陸より降臨なされたゴンターガ様が、我らがナンスカの新たな支配者となった記念祭だ！」

『ナンスカー！！ナンスカー！！』

熱狂するナンスカ民族を他所に、支配者として祭り上げられたゴンターガ様……ゴン太は、両手に保持した骨付きカルビを一心不乱に口の中へと運んでいる。

……人前で肉をかじるのって、結構恥ずかしくない？

「これ、明らかにお祭りしてますよね」

「ダメだアイツら、早くなんとかしないと……!」

「そうね。取り敢えず、もつと近付いて……?」

委員長が言葉の途中で口を閉じ、辺りを不思議そうに見渡し始めている。何だろうかと思つた刹那、ボク達にもはつきり知覚出来るレベルで空気が激しく揺れ出した。

これは…… カミカクシの移動エフェクトだろうか。となると、遂にソロのお出ましつてことになる。

「これは……」

「(……このヤバい感じ……前にも一度、あつたような気がするぜ……!)」

ロックの確信の籠つた呟きと共に、プレッシャーに満ちている大気の振動が、より激しさを増していったことがわかる。

ーヴイイーン!

ナンスカ村の上空、恐らくはゴン太の直上に美術館やコダマタウンで発生した、黒い穴……カミカクシによる異次元空間を行き来するためのゲートが現れる。ソロ一人を通すために、随分と巨大なゲートを使つたもんだよ……

「な、何事だ!!」

アガメさんの上げた驚愕の声も、現在の異常事態においてはなんの意味を果たすこともない。先程まで歌い、踊っていたナンスカ族の人達も、何が起こるのかと固唾を飲んで見守っている。場の空気に飲まれた……とも言うのだろうけど。

「(スバル、上だ!!)」

「例の黒い穴……」

『これははつきり言つて、目に余るぞ……ッ!!』

静かだが、確かな怒りを含んだ声がナンスカに木霊した直後。黒い穴から一筋の光線のようなモノが祭壇へと降ってくる。

気がついた時には、既にゴン太の側にはえらく不機嫌そうなソロが立っていた。恐らく、あの光線がクツション兼射出レールのようなはたらきをしているのだろう。

「ムーを崇め奉る民族だとは聞いていたが……よもや真つ赤な偽物を崇めていたとはなアツ!!」

「ヒイヒイイツ!! なな、何者でおじやる〜!？」

怒り心頭、怒髪天も辞さない……と言つた様子だ。

いや、まあ……気持ちにはわかるけどね。

「オマエの愚かな振る舞い……まさにムーを侮辱する行為だツ！ その罪……決して軽くはないと知れツ!!」

憤怒の表情を浮かべたソロが、ゴン太に詰め寄っていく。祭壇型の舞台なので、端まで追い詰められると逃げ場がないのだ（飛び降りれば別だけど、中々に高い）。

「たたた、助けてほしいでおじやる〜!!」

「ゴンターガ様!!」

『ゴンターガ様ーッ!!』

ゴン太の悲鳴を聞き取ったアガメさんはゴン太を心配するようにその名を叫ぶが、頭に血が昇っているらしいソロは一瞥すらしない。

「……………ソロ」

「（あの野郎……こんな辺鄙な場所にまで!）」

「スバルくん！ あれ……このままじゃ……ゴン太が!」

電波人間達のチカラを、身をもって（何度も）体感している委員長は、この後の展開を予測してしまったのか、既に泣きそうな表情になっている。

……さて、真打ち登場と行きますか！この前のようにはいかないってことを教えてやらあ！

「わかってる!ゴン太はボクが何とかするから、一先ず委員長達は安全な場所に避難し



てて欲しい。またソロに見つかったら、今度は何をされるか……だから全部終わるまで、出てきちゃダメだからね！」

「わ、わかった！ ……ほら行くわよ、キザマロ！ ワタシ達がいたら、ロックマン様が満足に動けないわ！」

「ハッ、ハイです！」

委員長はキザマロを伴ってナンスカの地上絵エリアへと走り去っていく………つて、振り返った？

「いい？ くれぐれも気をつけるのよ」

心配そうに俯きながら、ボクへ激励？の言葉をかけてくれる委員長。

ときめいちやいそうなんで、そういうのは無しにしてもらえると嬉しいです……

「……もちろん！」

多少なりとも安心したのか、もどかしいような表情になりながらも委員長は先に地上絵エリアへと駆けたキザマロを追いかけていった。

「……………もしかして、デレてた？」

「(オイ！今はオンナにかまけてる場合じゃねえぜ！……早くソロの野郎をなんとかしねえと！)」

ビジライザーはかけていけないけれど、緊迫した空気に充てられたのかいつもよりロツ

クの気が荒い。いや、いつもこんな感じだったような気もするけど。

「うん……まずは電波変換しなくちゃ！」

微妙に寝不足だけど、まあなんとかなる……よね？

ドーピングもあることだし、障壁無しなら余裕、だといんだけどなあ……

——ナンスカ村の電波——

急いで祭壇の上へと足を運んだのだけど、ソロはゴン太に詰め寄ったままであり、何かを下したりということは無かったようだ。どうにも、小声で何かを確認している……？電波を視認出来るソロが、あれだけ派手な電波変換のエフェクトを見逃すという失態を犯したのは、恐らくこの問答に夢中だったからに違いない。

兎に角、ゴン太に（予期せぬ類いの）危害が加えられることを防げたのは僥幸だと思っ  
ていいはずだ。

「……………ソロ！」

「……………！」

語気荒く詰め寄っていたソロに声をかけると、一瞬の硬直の後にゆつくりとこちらへと振り向き、いつものように睨み付けてくる。その全方位に喧嘩を売っていくスタイルは止めた方がいいと思うんだけどなあ……

「オマエか……何故ここにいる？」

「オマエこそ、毎度心臓に悪い登場してんじやねえよ！……普通にスカイウエーブを使え！」

ロツクがよくわからない罵倒？にフン、と鼻を鳴らして聞き流すソロ。マズイ、左腕が疼いてきた。

……熱くなりすぎなんだってば！

「ゴン太に、何をするつもりだ！」

「オマエには関係のないことだが、都合がいい。オマエが所持しているオーパーツ、ここで渡してもらおうか……！」

「……上等ッ！」

雲一つないナンスカの空に、雷鳴が鳴り響く。轟音と稲光が晴れた時、ボクは既にベルセルクによる強化の恩恵をトライブという形で享受していた。

ヒヤッハーツ！ 斬り刻むぜえッ！

「ソイツは欲張り過ぎてヤツだぜ！」

背中の大剣を右手で保持し、切っ先を電波変換もしていないソロへと向ける。ぶつちやけ戦闘が始まって後に、あのソロがトライブする隙を与えてくれるワケがない、と、というのが本音なのだけ。

「引きずり出せるモンならやってみろ！ボクの友達にこれ以上、被害を被らせるワケにはいかないんだよオツ！」

「友達、だと……？　そうやって、またヘドの出そうな言葉を平気で口にする……オマエは相変わらず、オレの感情を逆撫でさせるのが得意なようだな」

ベルセルクブレードの切っ先を向けられていても、その眼光には微塵の恐れも見えてこない。ボクが生身の間相手にチカラを振るうことはない……とたかを括っているとも思えないので、本当に全く恐怖を感じていないのだろう。それとも、恐れを抱くのを忘れる程の怒り……ということなのかもしれない。

「いいだろう……そちらがその気なら、チカラづくで奪取するまで。電波変換……ソク！　オン・エア！」

そう言うと、ソロは懐から古代のスターキャリアーを取り出し、以前と同じように空中にムーの紋章を描き出す。変身プロセスは固定なようで、正面に描かれた紋章が光輝き、ソロの周囲を覆っていく。物凄くチカチカしているのだけど、電波に過敏なソロの目には悪くないのだろうか。バイオライト？

そして、高速で動く紋章が遂に電波体の動体視力でも捉えきれなくなった瞬間、辺りを電波変換に際して発生する特殊な閃光が埋め尽くす。

「オマエに一つ名乗りを上げておくが……オレが電波変換したこの姿は、『ブライ』と呼

ばれている。何者にも頼らないという意味……そう、『ブライ』とな」

右腕に暗黒の鬨気を纏わせたソロ……いや、ブライが堂々と名乗りをあげる。正直に言うとは、無頼ってあんまり孤高ってイメージがないんだよなあ……多分、頼り無いハンドのせいだと思うけど。

おのれクソ雑魚ブロッコリーめ！

「ブライ……『無頼』、ね」

「そのオレから言わせて見れば……オマエのように絆だの友達だのと唱える人間は、他人にすぎらないと生きていけない、卑しくて浅ましい存在にしか見えななんだよ」

突きつけられた身の丈程の雷剣が、もしかして目に入っていないんじゃないかとこちらが疑ってしまうくらいに、ソロの心身に動揺は見られない。

正直言つて、ブライ相手じゃ剣を突きつけていても大したアドバンテージにはなり得ないか……と自己解釈し、向けていた大剣を下ろしつつブライアーツに対処出来るように距離を取る。

「フン、エンプティーよ……この程度の男が、オレと互角に張り合えるだと？ このブライのチカラ、随分と軽く見られたものだ……！」

大剣を下ろしたことで気圧されたと思ったのだろうか。……正直、あんまりいい気分はしない。何か言い返してやろうかしら。

「……そつちこそ、この前のケガは大丈夫なのかい？随分とフラついていたようだけど、もしかしてアザに………つて、ツ!？」

「……………」

以前ヒートアップで殴り飛ばした箇所を指で示しながら、なるべく煽るように体調を心配してあげると、ソロは無言で鬨気を纏った右腕から発生させた衝撃波『ブライナツクル』をこちらに向けて飛ばしてくる。

……何とかシールドを間に合わせたけど、ちよつと短気過ぎないか？

「疾ッ!」

「ッ!………うわぁッ!？」

「スバルツ!？」

ブライナツクルを防いだために硬直したボクの眼前まで流れるような足さばきで接近した後、ブライは展開したシールドの上から押し出すように強烈なアツパークットを繰り出すことで、シールドごとウェーブロードの下へ吹き飛ばされてしまった。

なるほど、ゴン太に制裁を加える時間が欲しかったのか。イラつくが、ゴン太の記憶を復活させる為だと思えば……

「オーパーツは後で確保する。だが今はそれよりも……」

ある程度の距離まで厄介な邪魔者を吹き飛ばしたブライは、ムーを騙る偽物へと振り向き、このナンスカの地へとわざわざ足を踏み入れた本懐をようやく遂げようとしていた。

あの男もムーの”血”を騒がせるが、今のソロを支配する激情の元凶、ゴントーガとやらを成敗しなければこの”血”は収まるまい。

「ひ、ひい!!」

ブライから発散される強大なプレッシャーに充てられたゴントーガには、もはや先ほどのまでの支配者然としていた調子の良さを全く感じる事が出来ない。ブライにとつては、ただの顔を青くした肥満体で同年代の少年程度の脅威度であった。無論、同年代だからといって手心要編を加える気は毛頭なかったのだが。

「今は、オマエが先だ。偉大なるムーを侮辱した罪……その身であがなわせてやろう!」  
彼が掲げる孤高のチカラを証明するかのようにメラメラと、まるで燃え盛る紅蓮の炎

を彷彿とさせる暗黒の闘気がより一層強まっていく。ブライナツクルのように巨大化はしない。されどもしつかりと握り混んだ拳には、彼がこれまで歩んできた修練の道が凝縮されているかのような力強さを放っていた。

「ほぎやああああああ!!」

人間相手にしては手加減したと思われる右ストレートを左頬に食らったゴンターガは、巨体故に吹き飛ばなかつた体から急激に力を失い、その場に倒れこんでしまう。P  
E R F E C T   K N O C K O U T !

「う〜ん……………」

氣を失ったゴンターガを怒りに染まった瞳で見下ろしながらも、その歩みは再びゴンターガへと向かっていた。一撃入れたばかりだと言うのに、その体から発散されるオーラには微塵の緩みも感じることが出来ない。ゴンターガとナンスカの民が犯した失敗はたった一つ。たった一つである。

……テメーお前はオレソノを怒らせた。ただそれだけである。とんだとばつちりと言えるだろう。彼に、ムー大陸の地上絵側で毎日祈っていたおじさんの姿を見せてやったら、一体どのような反応を見せるのだろうか。しかしそれは、神のみぞ知ることである。

「…………この程度で済まずものか。永遠の恐怖と苦痛をその体に刻み込んでやるッ!!」

再び振り上げた拳を、今度は無防備なアホ面を晒しているゴンターガへと降り下ろそ



うとして……………

「ッ!!」

突如唸りを上げて飛来してきた大剣、『ベルセルクブレード』を右腕の一振りで弾き飛ばし、ウェーブロードの先を睨み付ける。そこには、忌々しいチカラを振るう男、ロツクマンの姿があった。

「……………そこまでだッ!」

「フン、異次元にでも放り込んでおくべきだったか……………」

「これ以上、ゴン太を傷つけさせるわけには!」

あ、危ねえ……………大急ぎ祭壇までかけ上がってきたけれど、割とベストなタイミングだったらしい。

実は暴行を見逃すのって、割と精神にクるんだけどなあ……………だけど、まあいいだろう。これで必要条件は全て揃った!後は<sup>迷惑なほっち</sup>ブライに退場してもらうだけなんだけど……………や

れるか？

「ほう……こいつが、そんなに大事か？」

冷えきった目でゴン太を見下ろした後、顔だけを振り向かせてこちらに問いかけてくる。

キミの出番はもう、終わってるんだよッ！

「ゴン太はボク達のブラザー<sup>友達</sup>だ！これ以上、傷つけさせるもんか！守りきってみせる……絶対だ！」

身に纏うオーラを激しく揺らめかせ、ブライの放つプレッシャーに負けじと凄んで見せる。

まあ、ブライ……と言うかソロを気圧せるとは思わないけどね。

「……なるほど。オーパーツのチカラ……か。かつてベルセルク達は、オーパーツによって滅びた。そのまま使い続ければ、オマエも同じように滅びの運命を辿るだろう」

それでもか？と言わんばかりにオーパーツを手放すことを促してくるソロ。誰がこんな便利アイテムを好き好んで手放すかつての！

絶対ラ・ムーからも回収してやるからな！絶対だ！

「知るかッ！……ボクはそんな安い理由で皆のヒーローやってるワケじゃないんだよ

「！」

「他人の為に、その身を投げ出すと言うのか？」

心底信じられないといった表情で更なる問いを投げ掛けてくるが、そんなの決まってる。

誰かの為なら、人は無限に強くなれる！ボクの為したいコトの為にも！ここで退くワケにはいかないんだよオツ！

「そうだ！でも、ボクが傷ついて悲しむ人もいる。……だからこそ！ボクは勝ち続ける！負担なんて軽く耐えてみせるさ！」

ボクが、ボクである為に誰かが泣くこと知り合いになるなんて、断じて認められるわけがない！

「……それは覆し得ない矛盾だ。オマエがオーパーツを使っている以上、いつか必ず破滅の道を辿ることになる。それは逃れようのない運命『なのかもしれない！』………何？」

「それでも！ボクが諦める理由にはならない！」

……奇跡つてのは！信じ、進み続けた人間の上にだけ降ってくるものなんだよ！覚えとけ！この……人間不信野郎ツ！！

大航海時代のオカマが似たようなコトを言った気がするけど、まったくその通りだ！

理想つてのは、出来ると思ってなきや決して実現することはない!

「ッ!.....オマエのようなヤツを見ているとな、オレの中の”血”が疼き出すんだよ。仲間.....絆.....そんな下らないモノ、オマエの存在ごと消し去ってやる!」

ボクの言葉に一瞬だが確かに気圧されたブライは、気分を落ち着かせるためにだろうか、大きく息を吐いた。溜め息だ。そして、以前とは段違いの闘気をみなぎらせてファイティグポーズをとる。

完全に臨戦体勢だ。.....望むトコロツ!

「今度は、この前とはわけが違うぞ。.....オレの体に流れる”血”にかけて、オマエの全てを否定してやるツ!」

「そっちこそ!ボクがこの前と同じだと思ったら、大間違いだ!ゴン太の為にも、ここで果てるワケにはいかないツ!.....いくよロツク!」

「おうよ!ばっちこいだ!!」

「ウエーブバトル!ライドオンツ!!」

## 47

——ナンスカの電波——

「……………ッ!!」

以前とは違い戦闘面で本気を出したソロは、より一層口数が少なくなるらしい。無言のだけど、音も無く接近してくる漆黒のフォルムに纏う闘気オーラには、微塵の緩みも感じることが出来ない。

詰まる所、手加減無しのがちってことだ。

「おおおっ!!」

流れるように繰り出される殴打の猛襲。

見惚れる程に洗練された格闘技術が紡ぐ破壊の嵐を、オーパーツにより強化された動体視力モノを言わせ、何とか捌き続ける。

近距離戦に重点がおかれた電波体だと思われるブライは、動作の終わりから次の動作までの流れが非常にスムーズだ。なので一度でも体勢を崩してしまうと、直ぐ様後手に回ってしまう可能性がある。

追撃には気を付けておかないと。

超高速にして、妙技を極めた体術の応酬を繰り返すこと数分。体感で数時間はやり合ったと言える程の精神的疲労を抱えながらも、何とかブライアーツによる猛攻を凌ぎきったようだ。

ブライは鮮やかな殴打と蹴撃のコンビネーションを中断し、バックステップで祭壇の奥へと距離をとる。

恐らく、こちらの反応や動体視力が思った以上に強化されていると推察したのだろう。

それ故に、真正面からの単純な攻めでは千日手になると予測したのかもしれない。

しかもこちらには、無尽蔵のエネルギー機関『オーパーツ』がある。遊び抜きの戦闘としては、実に合理的な思考だ。

……こつちが困ってしまいうくらいにね。

「チツ、オーパーツのチカラか……忌々しい……！」

苛立ちを露にしたブライは、中距離に拳型の闘気を飛ばす技『ブライナックル』の要

領で右の拳を巨大化させると、おもむろにナンスカの発展が遅れている故に舗装されていない街道へ向け、発射していく。

「一体、何をしているんだ……………？」

こちらとしても向こうの意図が読めない行動なので、妙に黄色い砂ぼこりが立ち、辺りが少々煙くなってきたとしか……………ッ!?

「……………スバルッ！」

反射的に、ロツクの声で我へ帰る。戦場は既に、舞い上がった砂ぼこりによって視界を酷く劣悪な状態に変えていた。

しかもいつの間にか、正面に構えていたはずのブライが忽然とその姿を消している。

恐らく、ボクが周囲の確認をしている間に、辺りを覆う砂の暗幕に上手く紛れ込んだのだろう。

……………流石としか言い様がないな、こりや。

「……………わかつてる！これは目眩まし……………なら、ブライは『後ろだ』……………ッ!？」

「ハアッ！」

「へぶあっ!？」

静かにボクの背後を取っていたらしいブライが、暗黒の闘気を纏った右腕で、渾身のストレートトをボクの顔面に叩き込む。

へぶあつ!?!……つと無様な悲鳴を上げたボクは、殴られた勢いをそのままに、戦場である祭壇の端まで吹き飛ばされてしまった。

……殴り飛ばされるのは、これで二回目か。格好つかないなあ……なんて考えながらも、何とかその場で受け身をとることに成功し、追撃に備えてこちらを睨み付けるブライを逆に睨み付けてやる。

どうやら先方もお気に召したようで、バイザーの奥に眉間の皺が一つ増えたことを、ベルセルクの恩恵により強化された視力でハッキリと捉えることが出来た。

「……………フンッ！」

纏ったオーラに激情の揺らめきを見せつつも、再び砂ぼこりによる天然の隠れ蓑へと身を預け、ボク達の視界から姿を消してしまった。

「どうする……? どうすれば……!?!」

恐らく、向こうにはこちらの姿が見えているハズだ。何せ雷撃でピカピカ光っているんだもの。

しかし強化解除トライアップしてしまうと、今度は素の殴り合いで勝てる見込みが潰えてしまう。とつくにチャージの完了したサンダースラッシュでマヒを狙おうにも、こちらには当



てる術がない。

取り敢えずなんとか、何とかしなければ……………

悪足掻きとばかりに現在セレクト可能なバトルカード達を、穴が開くと言うほど睨み付ける。

『プラズマガン』、『エレキソード』、『タイフーンダンス』 e t c ……

「……………あつ」

「どうしたスバル!? ……今は呆けてる場合じゃねえぞ!!」

「…………いや、いける。イけるよロック!」

「何…………?」

訝しがるロックをよそに、バトルカードのセレクトを手早く完了させたボクはその場で瞳を閉じ、強化された知覚能力に意識を傾ける。

正確な距離や場所はわからなくとも、ヤツが接近してきたかどうか程度なら、この状況でも察知することが出来るはずだ。

……………来るッ!

「今アツ!!」

ブライらしき電波体が近づいてきたことをベルセルクが有していたと思われる、戦士の危機察知能力で把握し、選んでいたバトルカード、『タイフーンダンス』を発動。その場で流れるように一回転してみせる。

同時に『タイフーンダンス』のエフェクトによって周囲にダメージすら与えうる強烈な風の刃が発生。

視界を遮っていた砂ぼこりによる迷彩を、一時的に吹き飛ばすことに成功する。

さあ……マツクブライよ今すぐクロクロススケ出ておいで! 出ないと目玉をほじくるぞ!

「……ッ!?!」

回転しつつも強化された動体視力によって、風圧に足を踏みしめるブライの位置を完全に捉えることに成功。そして回転の勢いそのままに、背中へマウントしていた大剣を引き抜き、即座に地面へと叩きつける!

「逃が、さないッ!……おオッ!」

まるで地を這う蛇のようにブライへと迫った『サンダースラッシュ』は、その名に恥じぬ性能で更なる硬直時間へ誘うことに成功していた。

「ググッ……!」

電波の体から輝く雷撃の粒子を迸らせ、その場に立ち尽くすブライ。正に絶体絶命の状況だ。にも関わらず、その眼は未だに鷹を彷彿とさせる鋭利さを含んでボクを睨み続けている。

流石の精神力と評すべきか。しかし残念ながら今回は、敗北の苦渋を舐めてもらうぞっ！ブライ！！

「このままっ！決めるっ！！」

背部へとマウントしていた大剣『ベルセルクブレード』を右上段に構える。そのまま、天を斬らんとばかりに過剰なまでのエネルギー供給を行い、非実体の刀身に走るエネルギーの密度を、極限まで高めていく。

射程は変えず、威力と切れ味に全振りだアツ！！

供給の過程で刀身から漏れ出した電撃が、全身を覆うベルセルクの装甲に反応して淡い輝きを放つ。

滅茶苦茶カッコいい状態になっていると思われるが、残念ながら外見による威圧効果以上の変化は無いらしい。迫り来るゴリラのプレッシャーみたいなものだろうか。ベストマッチ！

「おおおおおおおっ！！」

振脚もかくや、と言う脚力で左足を踏み込み構えた両腕を更に引き込むことで、ギリ

ギリと限界まで押し込まれたバネのように体を捻る。丁寧に狙いをつけ、ブライの左肩へと吸い込まれるように剣を振り切った。

「ライトニンググウツ！ フォールツ！！」

圧倒的なエネルギー密度を誇る大剣は、屈指の強靭さを持つ近接型の電波体をもってしても、僅かな抵抗すら担い手に与えることは無かった。

まるで豆腐でも斬っているみたいで、酷く不気味な斬り心地だ。これが人を斬った感覚とは、到底思えないな。

「ぐっ……………！！ぐあああああッ！！」

電波体が崩壊しきる前に電波変換を解除したらしく、見慣れた閃光が晴れた後には、青い顔をしたソロが膝をついていることが確認出来た。

酷く汗をかいている。動悸も激しそうだ。まあ、当然と言えば当然か。普通ならトラウマ級なものね。御愁傷様です。

「はあ、はあ！！バ、バカな……………こんなコトが！！」

動揺の余り目の焦点すらハッキリしていないソロが、現実を認められないとばかりに内心を吐露している。虚勢を張る余裕も無いのか…………。

「スバル！ 早くトドメを刺せ！！」

「……………」

ロツクの言葉を受けて、未だに膝をつくソロの姿をまじまじと見つめる。青い顔に嫌な汗を吹き出しながらも、必死にこちらを睨み付ける姿には、ある種の誇りすら感じさせる。いや、殺らないんだけどもね。

「オマエもわかつてんだろ!? コイツは危険過ぎる!! ここで情けをかけたら、確実に後悔することになるぜ!」

『……………ワルいが、そうはいかない』

聞き慣れたカミカクシの起動音を強化された聴覚が捉え、一瞬で気が引き締まる。この辺の切り替えの早さは、長くウィルスバスティングを続けていたことの恩恵、なのだろうか。

「……………」

異様な雰囲気に支配されたナンスカ村の祭壇、丁度ボクとソロの中間辺りの位置に魔導師然とした服装の男、『エンプティー』がその姿を現す。

同時に、エンプティーに庇われるカタチとなったソロが息を飲む音が聞こえてくる。エンプティーが出張ることは、ソロも想定外だったらしい。

「エンプティー!! キサマ、何をしに来た!」

「オリヒメサマからのゴメイレイだ。オマエをツレモドしにきた」

激昂するソロの怒声すらも柳に風、エンプティーは淡々と自らがこの場にやってきた理由を告げる。こうして間近で声を聞いていると、ホント抑揚の小さい声だと思う。

「ふざけるな……！オ、オレはまだ……やれる……」

やめとけやめとけ。

「……イマのオマエでは、このオトコにカツコトはデキない。もうジユウブンにワかつたはずだ。それに、ココでやられるワケにはいかないのではないか？オマエには、どうしてもやらねばならないコトがあるはず。さあ、モドルぞ」

「チツ………!!」

ソロは露骨に苛立ちを露にしつつも、逆らう気は既に無いようだ。こうして見ていると、家出息子<sup>ソロ</sup>がお母さん<sup>オリヒメ</sup>に言われて追ってきたお父さん<sup>エンプティー</sup>に諭されて連れ戻される光景を幻視してしまう。

何だか微笑ましくなってきたような。実際はもつと殺伐とした関係なんだけどね。

「あつ………待て！」

何て考えている内に、二人はカミカクシを使ってさっさと退散してしまった。いや、別に追うつもりは毛頭無かったのだけだ。

「逃がしちまったな……」

後悔を滲ませたロツクの声が、ナンスカの乾燥した大地に響き渡る。溜め息でも吐きそうな、やってらんねえよ……という思いが凝縮したような眩きだった。

『ゴ、ゴンターガ様ーッ!!御無事ですかーッ!!』

漸くナンスカ族の酷く達も我に帰つたらしく、アガメさんを始めとしたゴン太を心配する声が聞こえてくる。まあ……信仰の対象が、突然現れた闖入者に為す術なくボコボコにされても失望しないつのは、良いところだと思ふよ、うん。

「そう言えば……さつきから全然動いてねえぞ、そいつ」

「あ……………」

戦闘中は暗黙の了解でゴン太の倒れている場所から少し離れていたもので、すっかり忘れてしまっていた。急いで仰向けに気を失っているゴン太の側まで駆け寄って声をかける。大丈夫、意識を失っただけ……のはず。

「ゴン太!ゴン太アーツ!!」

良かった、ちゃんと息はしつかりしている。取り敢えず、今のボクには医療器具の持ち合わせが無いので、ナンスカ族の人に応急の治療を任せるしかない、か。

一先ず、委員長長達のいる地上絵に戻らないと……。

その後、地上絵で待っていた委員長達に事情を話し、直ぐ様ゴン太の様子を見に村の中央へと戻ったが、真剣に治療しているらしく、面会は絶対に出来ないと言われ、ハッキリ言われてしまった。

前述した通り、ボク達は医療器具や薬の類いを殆ど所持していないので、アガメさんの言葉に従う他無かったんだ。頼みの綱のワクサミンEXターボも、流石に記憶喪失に對しては無力だった。

そして、不安な夜がボク達に訪れる……。

——翌日の朝——

各々が黙々と朝の支度を済ませ、テントの前に集合する。皆の顔色は、ハッキリ言っ  
て悪い。当然だ。友達が意識不明の状態から未だに覚めていないのだから。

「ゴン太、まだ意識が戻ってないみたいなんだ……」

先程一人でナンスカ村の中央まで行ってみた所、ゴン太の意識は戻らないが、お見舞いに訪れることは許可する旨の発言をアガメさんから貰っている。

その時に、少しだけ治療が済んだゴン太の姿を目に納めることが出来たが、寝たままの姿は痛々しく、ボクの精神を思いつき抉っていった。辛い。

「もし、このままずっと目を覚まさなかつたらどうしよう……」



最悪の想像が頭に浮かんでしまったらしい委員長が、顔色を更に悪くして俯いてしま  
う。

「委員長、御心配には及びません！何せ、あのゴン太くんですから！」

パラソルを開き、今日もサンサンと照り付ける太陽から委員長の肌を守っているキザ  
マロが、委員長に励ましの言葉を入れる。と思つたら、パラソルに隠れてボクの方に目  
配せをしてきたぞ。

これはつまり、話に乗れということか。

「そうだよーお腹が空いたらきつと、目を覚ますつて！腹減つた〜つてきー」

「グスツ……そ、そうよねーあのゴン太ですもの！ワ、ワタシつたら何本気で心配して  
るのかしらー！バツカみたい！……グスツ」

ボク達による抜群のコンビネーション？によつて多少は持ち直したように見えるが、  
委員長は気持ちを切り替えようとしたようで、ボク達に背を向けてしまった。微妙に鼻  
をすすする音が聞こえてくるのが何とも言えない。

「お腹が空いたら……？そうだ、グッドアイデアが浮かびましたよ！」

昨日改めて製作したボク特製牛丼を見ながら、キザマロは明るい声でボク達に語りか  
ける。

牛丼と委員長のお色気（笑）でゴン太の目を覚まさせる作戦……だっけ？

お色気（笑）なら、アイちゃん辺りに国際電話でお願いしてもらった方が良さげな気もするけど……。

「グッドアイデア？」

背を向け、気持ちを立て直していた委員長が怪訝な顔で振り返り、キザマロにグッドアイデアとやらの続きを促す。これ、委員長はどんな気持ちであるのミッシェンを遂行したのだろうか。

「話は後です！委員長、スバルくん、先ずはゴン太くんの所へ行きましょう！」

キザマロに先を促され、一同は再びナンスカ村の中央へと向かう。どうやら歩きながらグッドアイデアの全容を語るようで、キザマロはいつになく饒舌だ。

話が進むに連れ、委員長の機嫌は急降下していくことになったのだけだね。

ーナンスカ村ー

ナンスカ村の中央、祭壇の側ではベッドや布団に該当する敷物が、地面の上に敷かれている。その上には未だに意識が戻っていないゴンターガ……牛島ゴン太の姿があった。側では村長のナンスカ・オサ・アガメの姿もある。どうやら意識を取り戻すことを願ってムーに祈りを捧げているようだ。

時間が時間故に、アガメを除いて他に祈りを捧げる村人の姿は確認出来ないが、近隣の家屋からは朝の空気の下、体を解していたりとチラホラ村民の姿が見え隠れしている。

「ぬう……日が昇ってからずっと、ひたすら祈祷を続けているというのにお目覚めにならないとは……」

アガメは焦っていた。

元々、あまり先進的とは言えないナンスカの医療品では大した治療が出来ないことも理解している。

このような時に、アガメは深く後悔するのだ。どうしてナンスカはこうなんだ

……と。

「もし、このままお目覚めにならなかつたら……ナンスカ族の夢が……」

このゴンターガ様は、ナンスカ族の発展を見込める唯一の希望なのだ。伝統的な作法・風習・慣習と言った古臭いモノを排除し、ナンスカに更なる発展と豊かさを……

上機嫌なキザマロと不機嫌な委員長、というある種不気味な光景を目の当たりにしながらナンスカ村の祭壇まで歩くこと十数分。無事に村の中央で寝かされているゴン太の巨体を視界に納めることが出来たようだ。その傍らには、一生懸命祈り続けているアガメさんの姿もある。

祈り続けているアガメさんは一先ず置いておき、ボク達はゴン太の側に並び立つ。委員長の両手には、今朝再びボクが作製した特製牛丼が抱えられている。当然、食器のサイズは大盛りだ。

「じゃあ委員長……例の作戦を……」

「ゴン太くんを目覚めさせる為です！」

お願いします!!」

期待に満ちた目を向けられた委員長は、今日も老若男女平等にジリジリと照り付ける太陽を仰ぐ。委員長の目元辺りで何かが煌めいたような気がするが、指摘するのは野暮つてものだろう。

「わ、わかつたわ……」

「あんまり辛いなら、国際電話でアイちゃん辺りにお願いすればいいと思うけど……」

どうせ見て判断するワケじゃないし、耳元にスターキヤリアーを翳して誤魔化す……という方法もある。

「……それはダメよ。だってスバルくんもキザマロも、自分の役割はしっかり果たしてんじゃない。白金ルナとして、それからアナタ達の委員長として、ワタシは指をくわえて見ているワケにはいかないのよ……!」

赤く充血した目を見開いて覚悟の程を語りつつ、両の手に抱えた牛丼を設置する。なるほど、委員長だけがこの作戦に関与しないというのは我慢ならなかったのか。

委員長らしいっちゃあ、委員長らしい。素敵な心掛けだと思う。

「……?」

突然牛丼を持ち出した委員長を、アガメさんは珍妙な者を見るような目付きで眺めている。

止めて! 委員長のライフが削れきつちゃう!

「コ、コホン……」

小さな咳払いを一つ。同時に、唾を飲み込む音が聞こえる。確認してはいないけれど、真横から聞こえてきたので恐らくキザマロなんだろう。

委員長を除き、この場に集う全ての視線が唯一点に向けられていた。辺りには、まるで嵐の前触れと見紛うばかりの緊張感が漂っている。これから起こるコトを考慮すると、酷くシユールな絵面だと思うが。

「……ゴン太、起・き・て……ウフフ！」

委員長は、未だに寝込んだままのゴン太に背を向けると、左手を腰に添え、右手はツインドリルの内側（恐らく、結び目のすぐ下辺りだろうか）に宛てつつ、妖しげな笑みを浮かべた顔だけで振り向く……と言う、言ってしまうば唯のセクシーポーズ（笑）をとっている。心なしか委員長の声が震えているように聞こえるが、それは言わぬが華……というヤツなのだろう。泣けてくる。

「（オイ……ありやあ、一体何のマネだ？）」

幻覚か何かでも見せられていると思ったのか、頭を抱えているらしいロツクが震える声で問いかけてくる。

……頬でも引っ張ってやるべきだろうか。

「（多分、委員長のトラウマ案件になると思うから、聞かないであげて……）」

「ケツ、何か弱みでも握れるかと思つたのによ。つまんねえぜ……つと、そうだ。  
……………クククツ」

最後の意味深な笑いは一体何なのか、ハッキリさせたいところだけど、今は委員長を見守るコトの方が先決だ。ぶつちやけ見ていられないのだけど、何と言うか……ボク達が目逸らしてはいけないような気がする。

「ワタシねえ、腕によりをかけてゴン太の為に牛丼をつくつたのよ……？」  
早く起きないと、スバルちゃんとキザマロに食べられちゃ・う・ぞ？」

委員長が普段とは似ても似つかないような甘つたるい声でゴン太に呼び掛けること数秒。ナンスカ村の中心に、小気味いい音が鳴り響いた。と言うか、ゴン太の腹が空腹を告げる為に奏でたメロディーだ。

「う、ううう……い、委員長の……手作り牛丼……!!」

そして、先ほどまでウンともスンとも言わなかったゴン太の体が震え出し、うわごとのように牛丼牛丼と繰り返す。どれだけ牛丼に執着しているのだろうか。

「食わずに……死ねるかアアアッ!!」

仰向けの状態から、何処にあつたのか疑いたくなるような腹筋運動によつて跳ね上げた姿勢のまま勢いよくゴン太は立ち上がった。漸くゴン太、大地に立つ……と言うワケだ。長かった……いや、まだ終わっていないのだけどね。

「ゴン太が目を覚ました……!」

「委員長のお色気と、大好物の牛丼によるダブルアタック、成功です!」

「に、二度とやらないわよ!!      こんなの!」

興奮したキザマロに引きつつ、羞恥心によつて頬を染めるといふ高等技術をこなしている委員長を見てみると、やはり恥を忍んでアイちゃん辺りに協力を要請すべきではないかと、しようもない考えが浮かんでは消えていく。いや、確実性で言えばこれ以上の策があるわけでもないのです、これで良かったのだからうけど。

「あはは……委員長はやっぱり、凜としてるのが一番それっぽいからねえ……」

『……Recording stop』

委員長を讚える方向へ舵を切ったボクのスターキャリアーから、不意にそんな音が聞こえてくる。レコーディング、ストップ………記録停止? いや、保存されたのはエア・ディスプレイのデータじゃない……録音停止?

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」



辺りを妙な沈黙が支配する。委員長に向けられていた視線の全てが、今度はボクのスターキャリアーに集中し、自然が色濃く残るナンスカ村において、非常に異質な空間が形成されているようにも感じる。

まるで、偶然その場にいる全員の会話が途切れた時のような、早く誰か喋ってよ……という謎の圧力だ。

「なあ、そのレバー……トースト？つてのは何なんだ？食べ物か？」

目覚めたばかりで、状況がイマイチ理解出来ていないゴン太が口を開く。料理系専用の翻訳機にでもなっているのだろうか、ゴン太の脳味噌は。

「恐らく、スターキャリアーの録音機能でしょうね。……多分、今のやり取りを記録していたんじゃないですか？　ねえ、スバルくん？」

ねえ？とキザマロに言われても、ボクには全くもって覚えがない。そもそも録音機能を起こさせるのだってそこそこの手間がかかったハズだし、それこそスターキャリアー内部から操作でもしない限り……

「……………あ、ロックの仕業か」

電波体のロックなら、スターキャリアーの内部から直接操作することも可能だろう。

……………それ、ハッキングじゃない？

「へへッ、礼は要らねえぜ。しつかり役立てな」

ビジュライザーをかけたボクの視界には、親指を立てて良い笑顔を決めているロックの姿が映り込んでいる。

役立てるって、一体何に？

「忘れな……ささいッ！」

いつまにか、視界中央に右腕を大きく振りかぶった委員長の様子が見える。その瞳は潤んでおり、頬は上気しているかのようだ。

あ、この流れ知ってる。これ、ボクが損をするパト

「へぶっ！」

「い、委員長の手作り牛丼！」

メチャクチャ美味かったぜ!!」

「よかったわ。このワタシが腕によりをかけて調理した甲斐があったようね」  
 な、何か……重大な隠蔽行為が行われた気がする……

「……………ハッ！　あれ？ボク、どうして寝かされているんだろう……」

気がついたら、さつきまでゴン太が寝かされていた寝具の上だったでござる。ワケがわからない。確か、視界一杯に悪魔の姿を捉えて、それから意識が……

「あら、おはようスバルくん。昨日はあまり眠れなかったようね。急に倒れるものだから、貧血を疑ってしまったわ。その様子じゃ、もう心配は要らなさそうだけど」

「そうなの？でも、何だか左頬が痛むような……」

誰かに頬でも張られたような、そんなジンジンした痛みだ。痛みで赤くなっているような気もするし。

「それはですね……」

「キザマロ？」

「いついえ！　倒れた時にぶつけたんですよ、きっと!!　ええ、そうに違いありませんとも!!」

「……………」

キザマロが酷く焦ったような声色で説明してくれるが、どうにも府に落ちないな。

いや、キザマロが言ったことなんだ、信じずして真のブラザーは語れまい。

「……………まあ、いいや。それよりゴン太、記憶は戻ったのかい？」

「お、おう!!  
うおお!!」

迷惑かけて悪かったな!

牛島ゴン太、完全復活だぜ!!

雄々しい叫び声をあげ、自らの復活を宣言するゴン太には、もはやゴンターガとしての名残など一欠片も見いだすことは出来なかった。牛井も食べきっているし、どうやらボクが寝ている間に全て終わっていたらしい。

直前の記憶が失われていることに疑問は残るけど……まあ、結果オーライと言うことで。

「そっか、良かったよ……一時は一体、どうなることかと……。何せ、思いつきり支配者やっていたからね」

苦笑いを浮かべていたゴン太だったが、不意にボクの正面を向き、滅多にない真摯な表情を見せる。

中々、男らしい顔つきなんじゃない?

「スバル……どうやらオレのために、必死で頑張ってくれたみたいだな。胸が熱くなるぜ……この恩は忘れねえ!

オマエはオレの、永遠のトモ<sup>ブラザー</sup>だ!

「うん、これからもヨロシク!」

「おう!!」

最早恒例行事の如く、お互いの右手の拳を合わせ、ニカツと笑い合う。裏表の無い友

人つてのは、やっぱり良いものだ。

「(……………オイ、スバル。スターキャリアーのパーソナルページを見てみるよ)」

ロツクに言われるまま、パーソナルページを呼び出すと、キズナリヨクが100上昇していることを確認出来る。キズナが深まった……………ということでもいいのだろう。

「……………あつ、キズナリヨクが上昇してる。何だか照れちやうなあ……………」

どうにも、自分の感情を見透かされているような気がして、照れくさくなってしまふ。

ふと思ったのだけど、スターキャリアーはどうやってキズナリヨクの測定をしているのだろうか。急速なマテリアルウェーブ等の発展然り、電波技術の謎は深まるばかりだ

……

「……………記憶が戻っただと?」

和気藹々とした空気の中に、焦ったようなアガメさんの声が響いた。決して大声量ではないハズなのに、籠められた思いの強さがヒシヒシと伝わってくるのを感じる。アガメさんも、ナンスカの為に必死なんだよな。委員長をp r p rしようとするのは許せないが。

フロントム・ブラツク  
ロリコンダメ、絶対。

「……………そんなコトは関係無い!! 貴方はナンスカの新しい支配者、ゴンターガ様だ

!! そうでなくては……………困るのだ!!」

「いや、あのさ……ウマイもんを一杯食わせてくれたことには感謝してるけど、オレはそんなお偉いさんじゃねえんだ。皆と、二ホンに帰らないと……」

申し訳なさそうにゴン太が拒絶の旨を告げるも、興奮したアガメさんの耳には入らない。興奮して赤くなった顔も相まって、まるで本物の天狗染みた雰囲気醸し出している。

「二ホンへは帰しませぬ！ たとえ、力づくでも！！ 誰か！！ 誰か居らぬか！！」

アガメさんの声に、朝の散歩に出たのであろうナンスカ族の人達が続々と集まってくる。これだけ見ても、求心力の程を窺えるというものだ。よっぽど頼りにされているのだろう。

『ナンスカ!? ナンスカ!?!』

「ゴンターガ様が御乱心だ!! ……捕まえる!!」

集まってきた人達は唐突なアガメさんの命令に異議を唱えることもなく、ボク等の方向目掛けて猛烈なダッシュで捕縛にかかってきた!

半端じゃない走力……コダメ人も張り合えそうだ。

いや、一族の結束……というヤツなのかもしれない。どちらにしろ、脇目も振らずに襲い掛かってくる集団というのは、実に恐ろしい！

三十六計逃げるに如かず、だ

！

「……逃げよう!!」

全員の意思が完全にシンクロし、ボク達は一目散に逃げ出した。

――数分後――

オブリジ的な建造物に隠れたり、委員長のマテリアルウエーブで追っ手を足止めしたりと、中々にエキサイトな逃亡劇を繰り広げること数分。ボク達はスカイウエーブへの入り口にもなっている、日時計の置かれた岩場へとその身を隠していた。

「……何とか撒けたみたい。でも、これじゃ逃げられないよ」

「なんであそこまでオレにこだわってんだ?!」 別に誰でもいいじゃねえか、『支配

者』なんてよ!!」

逃げ続けて息も這う這うな元ゴンターガ様が、吐き捨てるように文句を言う。当然、回りに気づかれないよう小声で愚痴る程度だけだね。

「とにかく、このままじゃどうしようもねえ。指示を出してるのは、あの偉そうな村長

だ。あの村長をどうにかしねえと……)」

「そうだね……頭トッパを失えば、一時的な混乱は引き起こせるはず。よし、ウエーブインしてアガメさんに近づこう。ビジブルゾーンでなければ、人目に付かず移動出来る……皆はここに隠れてて！」

全員の首肯を確認して、岩場に発生しているウエーブホールに入る。左頬が少し痛むが、概ね良好なコンディションだ。筋肉痛の類いも感じられない。

「（……あんまり派手にやり過ぎんなよ？ 騒ぎを大きくし過ぎると、もつと人を呼んじまいそうだからな）」

確かに。今はまだ早朝もいい時間なので、比較的方向が搜索に充てられる人員は少ないけれど、騒ぎを聞いて更に密度が上がったらちよつとマズイ……かもしれないな。

「電波変換。星河スバル、オン・エア」

囁くように口上とも言えない口上を告げ、電波の体を纏う。ここからはボクの手でステージだ……！

ーナンスカの電波ー

「ええい!! 何をしておるか!! ゴンターガ様は、必ず村の何処かに隠れているはず!! 草の根分けてでも探し出せ!!」



ナンスカに隠れられる程の草の根は無いんじゃないかなあ……なんてどうでもいいことを思考しつつ、村の中央にある祭壇の側で直接指示を飛ばしているアガメさんの背後から、そろりそろりと近づいていく。

幸運なことに、アガメさんの側には誰もいない。全員で搜索活動を行っているようだ。

「……………ム？　オ、オマエは……昨日現れた、青い男！　そうか、オマエがゴ

ンターガ様を隠したのだな!?　今すぐゴンターガ様を出せ！」

「彼は唯の小学生で、ボクの友達の牛島ゴン太ですよ。本人もそう言っていました。貴方だって、本当はわかってるんでしょ？」

「それは……いや、だとしてもだ！　私の、いや我々の為に、ゴンターガ様のチカラが必要なのだ！」

「どうして、そこまでして……」

確か……ナンスカを近代国家にしたいんだっけ？

現在は電波技術……特にマテリアルウェーブのような物質的な電波が存在しているから、施設の配備さえすれば比較的簡単にインフラや街並みを整えることは出来る。お金が大量にかかっちゃうけどね。

「我々ナンスカ族の『勢力拡大』の為だ。これよりナンスカ族は、一致団結して人を増や

し、土地を広げ、発展していかねばならん!!」

土地を広げて……それ、侵略行為じゃないよね? 開墾するとか、そっち系の意味だよね?

「ハッ、成る程な……要はあのゴン太を、村の連中を団結させる為の、支配者として利用しようって考えなワケだ。……どう思うよ、スバル?」

「ブラザーをこのナンスカに縛りつけようってのは、ちよつと看過できないね……」

「たどえ偽物でも構わん!!」  
 ゴンターガ様には、『ムー大陸の使者』を演じていただ  
 く!」

「ゴン太が『ムー大陸の使者』を演じた結果、どうなったのか……貴方だって、ハッキリ見ていたでしょうに!」

ブライククラスの外敵から身を守るなら、最低限サテラポリスの精鋭部隊くらいは揃えなきゃ話にもならないぞ! いや、多分それでも役不足なんだろうけど。

「ケツ、まるで体のいい操り人形だぜ。オイ、スバル……説得が通じる相手じゃねえぞ。力づくでやっちまうか?」

「致し方ないか……」

左腕がロツクの顔になっているので、親指で右手側の指の関節をポキポキと鳴らしていく。骨の内部に入った空気が云々で指が太くなるらしいから、出来るだけ控えるべき

なんだけどね。威圧行為には使えるだろう。

「私は……………つて、何だ？ 私目はおかしくなったのか？」

今、オマエの左

腕が勝手に喋り出したような……………？」

「見間違いないかじゃねえよ」

下げていた左腕が、ロツクの意思を反映して胸の辺りまで上昇する。戦闘中は余程のコトがない限り、ボクに操作権があるんだけどね。

「!!! ば、化け物……………」

「……………（オイ、スバル。閃いたぞ）」

ああ、これで脅かすんだっけか。

「……………平和的なの？」

「もちろんだ。兎に角、オレに任せておけ）オイ！その村長さんよオ！ オレは

オマエの言う通り、バケモノだ！ 地獄からやって来た、最凶で最悪のバケモノだ

ぜ！」

「な、何だと……………!?!」

こういうのが効くのも、発展途上国っぽい気がする。まやかしゃ怪物の類いとか、正にその典型例だよな。

多分、誰もが自衛用の戦力ザイを持てる時代になったなら、その辺の意識も変わるのだから

うけど。

「その気になれば、地球を丸ごと飲み込めちゃう。オレの言うことを聞かねえと、オマエも飲み込んでしまうぞ。食べちゃうぞ！」  
グルルル!!」

それ、アンドロメダの設定を流用してない……？

ロツクにとつてのバケモノってそういうヤツなんだろうけど、何だかトラウマを掘り起こしてしまつたみたいで気が引けてしまう。ごめんよロツク。

「そ、そう言えば、ナンスカの言い伝えでこんなものが残っている。そこら中の食べ物貪り、ナンスカの民を飢えさせたという伝説の化け物……『タベルンスカ』！　まさか、それがオマエか!？」

思い込みって怖い。

「……………そ、そうだ……………それだ！」

オレはそれだ！

長い間呼ばれてなかつ

たからな……………忘れちゃつてたぜ。そう、オレの名は『タベルンスカ』だ！」

「バ、バカな……………これは幻だ！」

ロツクの演じるタベルンスカ？を信じられないと言つた面持ちで見ながら、後退りするアガメさん。

これは、ボクも演出に協力した方が良さそうだ。使えそうなバトルカードとか、あつたっけ？

「よし、もう一押しだ！」

もう一押し……ああ、アレがあった。アレなら直接的なダメージも無いのだし、平和的に脅せるだろう。

「任せてよロック！」

……貪るって言うのなら、取って置きがある！」

バトルカード、『ブラックホール』を起動！

この『ブラックホール』は、その名の通り強烈な引力を発生させるバトルカードだ。ウィルスの真下にブラックホールを発生させるのが主な使い方なのだけど、今回はアガメさんをターゲットとして、弱めの出力で使用する。

ロックの口中に発生させているので、アガメさんからしてみれば、まるで飲み込まれそうな錯覚に陥るワケだ。ぶっちゃけ錯覚でも何でもないのだけだね。

「う、うおおおおおっ!？」

人間からしてみれば圧倒的な引力に捕まり、手近なモノに掴まることで何とか踏みとどまろうとしているも、数粒の滴が既にブラックホール内に吸い込まれているのを確認済みだ。

……少々、やり過ぎたかもしれない。

「食べちまうぞッ！」

ガルルルルッ!!!」

恐慌状態のアガメさんを追い込むべく、更に脅しをかけていくロック。直後、すぐ側

に供えられていた骨付きカルビが無情にも吸い込まれていったのを目撃し、顔が更に青くなっていく。……トラウマになったり、しないだろうか。

「や、止めろおおおッ!!」

A. 止めません。

「う、う〜ん……」

仰向けに倒れかけるアガメさんの体を支えて、ゆっくりとその体を地面に横たえる。これでケガをされても詰まらないからね。後々の戦力的には、ケガしてもらった方がいいのだろうけど……

「……気絶しちゃったね」

「流石に鬼畜が過ぎたような気もするぜ。……まあ、同情する気は毛頭ねえが」

「ホントに吸い込まれると思っただらうね」

「ホントに吸い込みかけてたからな」

「……………」

「……………」

もうしないよ。多分。

さて、遠目で村長さんが気を失っているコトを察したナンスカの人達が、茫然自失としているのが見える。

スターキャリアーで情報の伝達は滞りなく行われるのだろうし、今が脱出のチャンスだろう。途中で失敗するんだけどね。

「よ、よし！　動揺してやがるぜ！　チャンスだ!!」

「そ、そうだよ！　早いトコ岩場に戻って委員長と合流しなきゃ！」

結論：バトルカードは人に使っちゃいけないね。

## 49

ーナンスカ村ー

取り急ぎ電波の体を脱ぎ捨て、待機場所の岩場へと帰還する。既に委員長達は退避したようで、岩場には人影一つすら認めることは出来ない。

「……先に行っちゃったか」

「みたいだね。……いや、メールが届いてる。委員長からだ。何々……村中が大混乱に陥ったのを確認したので、先に地上絵のテントまで退避してるわ！　よくやったわねスバルくん！　……だつてさ」

確かに、電波体として正面から包囲網を突破出来るボクを待つのは合理的ではない。通話ではなく、メールで伝えているのも、隠密性を保つためだろう。

「……なら、このまま一気に駆け抜けちまおうぜ！」

アガメさんが倒れている村の祭壇には、慌てたナンスカ族の人達が続々と押し寄せている。村人の注意がアガメさんに一点集中している今、村の隅を全力疾走しても誰の目にも止まることはないだろう。

「オーライ！　いくよロックー！」



「派手に行くぜ！」

だから、見つからないように逃げるんだってば。

——ナンスカの地上絵——

スカイボードで楽をしたい気持ちを抑え、逸る鼓動と相談しながらテントを目指すこと数分。何とか村人達に見つかることなく、合流場所に辿り着くことが出来た。

テントの側には、まるでエジプトか何かの神殿を思わせる遺跡への階段が設けられている。日陰になっていていいと呑気にテントを設置してしまつたが、実はあんまり褒められた行為ではなかつたのかもしれない。

「はあ、はあ……お待たせ！」

「あら、ロックマン様のままで来ると思っていたのに……残念ね。まあいいわ、早く脱出しましょう！」

ウェーブホールが、遠いんだよ！ 誰だって、自分の側でいきなり子供が出現なんてしたら注意を向けてしまうじゃないか！

「マテリアライズ！　　クルマー！」

キザマロのかざしたスターキャリアーから、緑色を貴重とした中型の車？がマテリアライズされる。マテリアルウェーブはお高いんじゃないなかつたっけ……？　　そ

れとも、容量を食うから分割で保持してたとか？ タイヤもついていないし……と言うか、浮いてるじゃないか！

……今考えても詮無きことだよね。

「では早速、このクルマで飛行場まで急行しましょう！ 飛行機に乗って、離陸してしまえば、彼らも手出しが出来ないと悟るハズです！」

「ふう、これでやっとニホンに帰れるのか！ 帰ったらニホン食を食いまくるぜ！！」  
「程ほどにね……」

運転担当のキザマロとナンスカなんて早いとこお去らばしたいゴン太は、我先にと出現させた四人乗りと推測できるクルマのマテリアルウエーブに乗り込み、後に残るはボクと委員長だけとなる。……つと、委員長が心配そうにこちらを伺っている。何か言つてやった方がいいのかな？

「大丈夫、ボクの心配は要らないよ」

「……………その、ええつと……………」

心配性な委員長様だ。パスポートガン無視なボクの心配をするよりも、密入国状態のゴン太を帰国させる方が余程先決だと思っただけだね。

「そんなに頼りなく見えるかな？ 委員長キのブラザーは、さ」

「バ、バカね！ アナタはワタシのスバルスバルくんなのよ？ ……信じてるに決まってるじゃ

ない！」

「GOOD！」

照れくさいのか、少々赤い頬の委員長に向かつて親指を突き立ててやる。それでこそ委員長だ！　しかしボクの意図が伝わることはなかったようで、委員長は気が抜けるようなため息を放った後、呆れたようなジト目で睨んでくる。何故だ！

「どうにも締まらないわね……まあいいわ。それじゃ、ニホンで会いましょう！　必ずよー！」

「もちろん！　……何なら、空港まで迎えに来てあげようか？」

ワープホールで超高速移動可能な電波体になれる以上、同時に出発すればニホンへ先に到着するのがボクであることは明白だ。飛行機の荷物より後に届くメールなんて、存在しないだろうしね。

「フフツ、結構よ。ワタシとしても、アナタにエスコートしてもらえるのは嬉しいけれどね」

そう言つて委員長はクルマ（エアカー？）に乗り込み、起動したクルマはナンスカの大地に砂埃を巻き上げながら、あつという間に走り去ってしまった。流石のナンスカ人でも、走行中のクルマに突つかかかったりはしないだろう。多分。どちらにしろ、後はアガメさんの安全輸送に期待するしかないか。

「やれやれだぜ……とりあえず、これで『一件落着』ってヤツだな。よし、とつとつとウエー  
ブインして、あのオンナにどやされないようズラかるとしようぜ！」

「うん。了解！」

ここからウエーブホールまではちよつと遠いけど、慎重に人目を避ければ問題なくい  
けるはず。

サイレントミッション、スタート！

——十分後・ナンスカ村の電波——

未だに混乱を極めるナンスカ族の視線から逃れ続け、なんとか電波変換までこぎ着け  
てから数分。ボク達は漸く、ナンスカ入国時に使った日時計のある岩場まで戻ってくる  
コトが出来た。後は、ここからスカイウエーブまで上がってコダマタウンへの帰路に着  
きつつ、連絡がくるのを待てばいい。

「電波転送！ スカイウエーブ、オン・エア！」

電波ボク体からの要請を受諾したワープホールが、ロックマンの体を遥か上空へと射出す  
る。

毎度思うのだけど、相変わらず凄まじい加速だ。止まるんじゃねえぞ……！！

「これにてナンスカ逃亡劇も、無事に終幕だぜ！」

どっかのロリコンみたいなこと言わないでよ……って、何かとすれ違った？

……まあ、別に何でもいいか。どうせメール運搬のデンパくんか何かだろう。さて、コンドル・ジオグラフ。どう攻略したものか……

ーナンスカのスカイウエーブー

チユイン！ という小気味良い音とともに、再び広大な空の世界へと足を踏み入れたボク達。

澄み切った空気。彼方まで見渡すことが出来る、地上の美しさ。ここには、人を惹き付けてやまない要素が溢れていると、今ならそう断言出来る。

「……ふう、これで少しは落ち着けるかな」

「ま、空まで追いかけてくれるワケはねえからな。後は気楽に楽しもうぜ、ちよつぴりデンジヤラスな空の旅ってヤツをよ！」

この辺りには中級の雑魚ウイルスしか出現しないので、ロックの発言もあながち間違いいではない。

最近はウイルス程度じゃ満足している様子にも見えないので、コンドル・ジオグラフみたいな大物狩りは、ロックの戦闘狂的な部分を大いに刺激してくれるだろう。ブラキオ・ウエーブはあまりにも遣りづら過ぎて、ストレスしか溜まらなかったようだ

し。

取り敢えず、ゆつくりコダマタウンを目指しますか……。

ーナンスカ村ー

ロツクマンが去った後のナンスカでは村長のアガメが意識を取り戻したこともあり、村人達を襲った混乱は、一応の収束を見せていた。そのアガメ自身は、心配心を寄せる村人達に回復した旨を告げ、今は一人、村の中央にある祭壇から少々離れた場所で心の整理を行っている。

偶然にもその場所は、先ほど件のロツクマンがスカイウエーブへと旅立って行った日時計のある岩場のすぐ近くであったのは、ある意味奇縁と言えるだろう。

「さっきの『タベルンスカ』は一体……？ 私の体は至って健康だが、周囲のお供え物はいくつか消失していた……それより……ゴンターガ様に逃亡を許してしまった。支配者として、あれ程相応しい存在はいなかったというのに……我らナンスカ族が夢見た『勢力拡大』も……ここまでか……」

果たして、神はナンスカを見捨ててはいなかった。

『その夢……諦めるには早いんじゃないのか？ この私が叶えてしんぜよう』

人氣が無いと言つても過言ではない岩場に、怪しげな男の声が鳴り響く。

「!!」

年を経て衰えたとは言え、長年の村長経験で培つた察知能力が、ナンスカ・オサ・アガメの体を衝動的に振り向かせる結果となる。別に襲われるとか、そんな物騒な予感ではなかつたのだが、とにかくコイツに背後を赦してはいけないという、嫌な感覚がアガメの思考を支配していた。

「誰だ!!」

老いた村長が岩場の先、日時計の側に認めたのは金髪で長身瘦躯な怪盜然とした男……つまりハイドであつた。

「どうやら、ソロは失敗したらしい……オリヒメ様も最初から全てこの私に一任してくだされば、手つ取り早く済んでいたモノを」

やれやれ……と、ハイドは肩をすくめてみせるが、その実、彼の内心は苛立ちと嫉妬心に満ちあふれていた。最近、組織内部での扱いが日に日に悪化の一途をたどっている。このままでは、いつか古代のスターキャリアーまでもが……という不安も強かつたが。

「……キサマのコトを尋ねているのだが」

「ああ、これは失礼。私の名はハイド……夢破れ、意気消沈注の貴様に『ムーの遺産』を

授けるため、参上した者だ」

多少の苛立ちを含んだアガメの言葉を受け、欠片も申し訳なさそうではない態度でハイドが口にした内容は、ムーを信仰しているナンスカ族として、到底見過ごせる文言ではなかった。

「……何？ 『ムーの遺産』だと？ キサマ、軽々しくムーの名を……よもや、先程の者達と繋がっているとは言うまいな？」

「おっと、私を疑うと言うのなら、まずはコイツを見ていただくか。……出でよ！ コンドル!!」

アガメから険悪な雰囲気が漂ってくることを察したハイドは、慌てず騒がず……といった余裕とともに、懐から一台の携帯端末を取り出してアガメに見せつける。馴染みのない形状である、『古代のスターキャリアー』を目の当たりにしたアガメは、訝しげな表情を見せるばかりだ。当然、件のスターキャリアーが強烈な閃光を放ち、内部から赤い不死鳥然とした電波体が出現するまでの短い期間であったが。

「な……何!？」

「我はムーの『監視者』。ムー大陸とともに大空を飛び、その存在を見守ってきた」

件のコンドルと名乗る電波体は、黄色い嘴と襟に該当する箇所には装備された黒色プロテクターを除けば、後は燃え上がるような真紅色の電波が体覆っている……という意外



にシンプルな容姿をしている。

「ムーの監視者？ バ、バカな……いや、まてよ……！ ナンスカの地上絵にも鳥の絵が描かれていたな……あの地上絵の鳥は、ムーに住んでいた鳥だと言われている。まさか……」

「フフフ……如何かな？ 本物の『ムーの遺産』である、この『古代のスターキャリアー』があれば、ナンスカの『勢力拡大』など、実に容易い……」

アガメの動揺をはつきり感じ取ったハイドは、ニヤリとした笑みを隠す気もなく交渉を再開する。今回、ハイドの目的はナンスカ族の人間としてはタブーにあたる可能性があるるので、なるべく平常心を奪っておきたかったのである。

そしてハイドの目論見通り、ムーの遺産がブラフやハツタリの類いではないことを察したアガメの心中は激しく揺れていた。

「……これを、私に授けると？」

「タダというワケにはいかない。キサマ<sup>ナンスカ</sup>という立場<sup>村長</sup>の人間が知っている限りの、ムーに関する情報と交換……というのはどうかな？」

「……！」

提案の形を取りながらも、それが曲げようのない条件であることは明白であった。故に、ナンスカ族の規範となるべきな村長という役職のアガメは心穏やかにはいられない。

い。

「そ、その条件をのむことは出来ない……ムーの情報は、我らナンスカ族が秘匿し続けてきたトツプシークレットだからだ」

独自の風習や慣習に従い続けてきた影響かナンスカ族の人間は外に對して否定的であつたが、その代わりに身内や部族への思い入れは非常に強固なモノになつていた。

当然、このナンスカ・オサ・アガメも例外ではない。そのアガメがたとえナンスカの為とはいつても、ナンスカの民を裏切るような真似をすることは、崖つぶちのアガメの心にも強力なストツパーとしてはたらいていた。

『ムーの遺産』が欲しくはないのか？ 今という機を逃せば、キサマの望みは本当に絶たれてしまうのだぞ！ ナンスカを、南の果てのちっぽけな国で終わらせたくはないだろう！? ンフフフ……」

まさに甘言。アガメの心は既に、このチカラコンドルによつて発展したナンスカの姿を思い描いていた。

「……東だ……ナンスカより東の地にムーの大陸はあつたと、我らの伝承には記されていた……」

「ンフフフ……村長、貴重な情報を感謝させてもらうよ。では約束通り、この『ムーの遺産』は貴様のモノだ」

根負けしたアガメの言葉に満足したハイドは、アガメに約束だった古代のスターキャリアーを投げ渡し、成り行きを見守ることにする。

電波変換を見届けるまでは、報酬を払い終えたとは言えないのだから。

「我がチカラを授けよう……」

一瞬でアガメの下に移動したコンドルは、そのまま溶けるように体を変化させアガメを覆うことで、電波変換を開始する。

「こ、これは……!?」 今までに感じたことの無い、未知のチカラが流れ込んでくる!!  
う、うおおおおお!!」

辺りを、閃光と爆風が吹き荒れる。強大な電波体が誕生するその様子を見ているハイドの口は、限界まで弧を描いていた。

「ハア、ハア……こ、これは……!?!」

まるで、鳥と飛行機の融合したような姿。真紅の体色に、純白の羽。それをうつぶせにした状態で、巨鳥の電波体、コンドル・ジオグラフはナンスカの空を悠然と飛行していた。

「その姿こそ、コンドル・ジオグラフ!! ムーを天空より守護せしめてきた、偉大なる戦士の伝説だ!! 最早、ナンスカを導く為に偽物の支配者など必要ない。その大いなるチ

カラを民衆に示すことで、貴様こそが本物の支配者として君臨すればいい!!」

「オオオオオオオ!!」

ハイドの言葉に漸く実感が湧いたのか、雄々しい雄叫びを一つあげ、ナンスカ・オサ・アガメ、いや『コンドル・ジオグラフィ』は更に高度を上げ、ナンスカを侮辱した不屈き者達の後を追って行ってしまった。後に残されたのは、ニヤつく笑みを浮かべたハイドのみ。

「ンフフフ……ンフアーツハツハ!!」

この後の展開を予測したハイドは、とうとう堪えきれずに吹き出してしまった。ナンスカの大地に、ハイドの高らかな笑い声が鳴り響く……

『クエエエエエツ!!』

「……アアン? 何だよ、今のデケエ鳥電波体は?」

「さあ……ただ、あの存在感からして、電波人間なのは濃厚みたい。……どうする?」

「もうかなり離れちまってるが……あの辺には確か、寂れた村とデケエ地上絵があるんだっけな。……クククク、面白くなってきたぜ!」

「今からウエーブロードを伝って行けば、そうだね……一時間弱つてところか。他に行く宛もないし、ボクは賛成だ。それに、もしかしたら……」

「ケツ、あの人工色野郎のコトになると途端にコレだ。……とつとと行くぜ。この辺りはまだ、電波の整備が行き届いてねえからな。動き辛くてしょうがねえ」

「……一人で先を急いでも、スターキャリアーのナビゲーション機能はこ片つち方にしか対応してないんだけど」

「……………チツ!」

「……コダマタウンのスカイウエーブー」

ウイルスバスターング

雄大な景色と、ほんのちよつとのデンジャラスを満喫しながら大空を股に掛けて移動すること数十分。ボク達は、漸くコダマタウン上空のスカイウエーブに足を踏み入れていた。

「……通信？」

コダマタウンードンブラー湖間を繋ぐワープホールから飛び出して直ぐに、スターキヤリアーへの通話要請がきていることを確認する。

つまり、いよいよコンドルハントの始まりつてコトだ。ムー大陸で対峙する個体はエランド入りで単調な思考回路とはいえ、基本の動きを見極めておくことは、結果的に攻略の効率化をもたらすだろう。

「出てみるよ。目立つ位置にウイルス共が居やがる気配もしねえし、ちよつと話すくらいなら問題ねえぜ」

「じゃ、ちよつと警戒よろしくね。……ブラウズ！」

電波体なので別にブラウズと叫ぶ必要は無いのだけど、一応、ロツクに今から通話することを伝えた方が良いと思つたんだよね。親しき仲にも礼儀有り……つてヤツだ。

兎も角、何処と無く不快な羽音に酷似した展開エフェクトを発生させながら現れたエ

ア・ディスプレイには、焦燥感に満たされた面持ちのゴン太が映し出されていた。

「あ、ゴン太。どうしたの？随分余裕の無さそうな顔してるけど……もしかして、出国ゲートで引つ掛かっちゃったとか？つたく、委員長め。あれだけ五陽田さんに話を通しておきなよって言ったのに……」

『ち、ち、ちげえよ！　じ、実は、クルマで飛行場に向かつてたらいきなり、上から変な鳥みたいなヤツに襲われて……ナンスカの村に戻されちまったんだよおおお!!!』

涙目で鼻水が垂れるのも構わずに、状況説明をしてくれる被害者の鑑なゴン太の発言からして、やはりコンドルは連れ拐いに来たようだ。

「そんな!？」

『頼む、ロックマン！　助けてくれ！　このままじゃ、オレ達みんなあの変な鳥に……』  
そこまで言いかけて、ゴン太は不意に画面外へと視線を向ける。直後、恐ろしいモノに見つかってしまったような表情へと変化し、閉口してしまう。

『……そのオマエ、何をしている。勝手な真似を許した覚えは……ないぞ』  
『う、うわあああつ!!』

エア・ディスプレイに流れてきたのは、冷ややかな声。雰囲気はかなり違っているけれど、この声はアガメさん……コンドル・ジオグラフィのモノに違いない。先程ゴン太が見てしまったのも、恐らくはコンドル・ジオグラフィなのだろう。

「ゴン太!? どうしたんだよ、ゴン太! 誰かそこに……」

ボクの言葉を待つことなく、エア・デイスプレイの画面はノイズに満たされた後、スターキャリアー内部へと収納されてしまった。どうやら、コンドル・ジオグラフィに通信を強制的に切断されたらしい。スターキャリアーを破壊されていなければいいんだけど……。

「コイツはただ事じゃねえな」

周囲の警戒を続けながら、真剣な声色でロックが語る。なんやかんや言つて、実は結構委員長達のことを気に入っているんじゃないかと、最近気づいてしまった。

なんだか可愛らしい。言ったらぶっ飛ばされるけど。

「急いでナンスカに戻ろなくちや!」

多分大丈夫だとは思うのだけど、ナンスカ族の人達が暴動を起こさないとも限らないので、早めに戻らないといけない。少なくともナンスカの遺跡で捕まっている間は、コンドル以外の外敵からは守られる形になるのだから。

「オイ、そのアンタ! アンタもスカイウエーブのリヨウシャかい?」

急いでドンブラー湖行きのワープホールに飛び込もうとしたボク達に、トラックを模したと思われる姿のデンパが話しかけてくる。輸送系のデンパだろうか? ただ、雰囲気からしてデンパ『くん』呼びは合わないな。



「……何？ ボク達、今凄く急いるんだけど。用事なら後にしてくれない？」

「まあまあ、ちよつとはオちツけよ。シンコキユウだ、シンコキユウ。……いいな？ オレっちのシゴトは、イワユル『チョウキョリユソウ』つてヤツだ。ナカマうちじゃあ、バクソウドライバーなんてイわれてるんだぜ」

爆走バイク？ クロニクルクッソッの話は止してくれ。ボクはゲームオーバーなんてしたくない。

「……………で？」

「アンタ、キズナリヨクがメチャクチャタケエだろ？ オーラでわかったぜ。……ピビツときたんだよ」

そんな取つて付けたようなデンパくんアピールしなくたって、別に疑いやしないつての。とうかこのデンパ、嫌に回りくどい言い方をする。さつさと用件を言つて欲しいのだけど。

「こつからコダマタウンのホウにいくと、セキュリティのかかったトビラがある。それをコイツでヒラいてみな！」

「はあ……開けばいいの？」

そう言つて、気前の良さそうな長距離輸送担当のデンパは此方にデータの入つていると思わしきカードを投げ渡してくる。ぶつちやけ全く事態が飲み込めないぞ。どうい

うことだつてばよ？

「おう！ そしたらナンスカまであつというマにバクソウだ！ かなりのショートカットができるんだぜ。イソいでるってんならもつてこいだ！」

……ああ、なるほど。さっきの通信を聞いていたのか。これで合点がいった。困っていると思つて親切にしてくれたのだろう。見た目は江戸っ子みたいなノリだが、その実かなりのお人好しだ。

「そつか……ありがとね、爆走ドライバー！」

「いいつてことよ！ ハヤクそのダチのところについてやんな！」  
照れているのか、そつぽを向いて早く向かうよう促してくる。

ありがたい、ありがたいんだけど……。

「オイ、スバル」

「うん、わかっている」

ボク達はナンスカのウエーブホールからスカイウエーブに上がってきている為、ウエーブアウトで簡単にナンスカまで帰還することが出来るんだよね……。

ただ、ナンスカのスカイウエーブまでショートカット出来るということは、非常に魅力的だと言わざるを得ない。ありがとう、爆走ドライバー。

「それじゃあ、ナンスカまで一気に飛ぶよ……！」

そう言えば、ここまで遠距離のウエーブアウトは未体験だったような。町を2つ3つ越えるのはワケが違うので、気を引き締めて取り掛からないと。

「……舌、噛むんじゃないぞ?」

「だから、茶化してる場合じゃないんだってば!」

ロツクを叱咤しながらも、ボクの体は既にナンスカのウエーブホールへ帰還する道筋を超高速で飛翔している。

最後にウエーブインした場所は、ウエーブアウト用の受け皿として電波体の内部へと自動的に記録されているため、このような芸当が可能ではあるのだけど……あまり、心臓に良くは無さそうだ。

ーナンスカ村ー

その頃、村の一角では村長のナンスカ・オサ・アガメによる召集を受けた全村民達が、老若男女に関わらず、一同に会していた。

集結したナンスカ族の視線に晒されているのは、アガメが異形の生物と化して拐ってきた元ゴンターガとその一味である。彼らは皆、後ろ手に縄で縛られることで、ナンスカの砂ぼこり舞う大地の感触を存分に堪能することとなっていた。

「聞け、皆の者!! ゴンターガ様は、ムーとは何ら関係のない偽物であった!! ムーを崇める我らを愚弄したのである!!」

前に出たアガメは、集まった者達を煽るかのように激しい口調で、お縄を頂戴された不届き者達を攻め立てていく。その顔は興奮作用により赤く、諫言を聞き入れる余裕も無さそうだ。

「アンタらの勝手な誤解で、空から落ちてきただけの無関係なゴン太を祭り上げたんでしようが! ゴンターガ様、ゴンターガ様って!!」

「そ、そうですそうです!!」

「そういえば、気絶してからロクに食ってねえなあ……」

当然、捕まった者達もただ言われるがまま、ということとはなかったが、村人達はこれまでにないアガメの激昂ぶりに、中々口を挟めずにいた。

「我らの信ずるムー大陸からの使者を騙ったこの者達の罪の重さは計り知れん!!……ナンスカの慣例に従い……ムーへ捧げる生け贄となることで、その罪を償ってもらうこととする!!」

「い、生け贄ですって!?!」

命までは取らないとたかを括っていた白金ルナは、躊躇なく失われた命の保証に顔色を蒼白へと変化させる。温厚だと思っていたナンスカ族の口から、まさか『生け贄』な

んて言葉が飛び出してくるとは露程も思っていなかったのだ。

「今更怖じ気づいたのか！ いずれにせよ、覚悟してもらおうぞ！ この、偽物め!!」

『ま、待て!!』

タベルンスカ、再び。

「ま、待て!」

ウエーブアウトによる高速移動を駆使することで、無事に再びナンスカの地へと密入国を果たしたのだけど、いざ辿り着いてみたら、さあ大変! 普通にppprコースまっしぐらじゃないか。

慌てて電波変換を完了させてから群衆の間を割って入ることで止められたのだけど、もしかして制止が間に合わなかったら、この場で小学生女子にpppr委員長していただけのか……!?

おまわりさんこっちはです。

「ロ、ロックマン様!」

悪い意味で涙腺崩壊寸前の委員長が、後ろ手に縛られているために拭うことが出来ず、零れ落ちた雫を朝日に光らせながら九死に一生とばかりに喜んでるのが伝わってくる。prprprはマズいよ、prprprは。

「ロツクマン！」

「オレは絶対駆けつけてくれるって信じてたぜ！」

男共は後！

委員長は繊細なんだから！

「漸く現れたか、先の青い男よ……オマエは、いつか必ず我らの道を阻む障害として立ちはだかるところだ……だが、断じて邪魔立てはさせぬ！私の……我らが繁栄の為に！」

あらゆる迷いを振り切って、ナンスカの勢力拡大を成し遂げる為の象徴になることを決意したと思わしきアガメさんは、懐からお馴染みの古びた携帯端末を取り出し、ボク達に見せつける。

コンドルか……スカイボードの機動力で立ち回ればいいのだけど。

『古代のスターキャリアー』……ソロとエンプティ以外にも、このナンスカへ来ていたヤツがいたのか……！

主要な出来事は、大体アイツが悪いような気がする。

これもすべて、ハイドってヤツの仕業なんだ！

「スバル、気を付けろ！」

ロックが注意を促すと同時に、アガメさんの手にある『古代のスターキャリアー』が目映い輝きを放ち始める。各々が顔を逸らしたり、手で両目を覆ったりしている中、バィザーを対閃光防御モードに設定していたボクの目が眩むことはなかった。

「……コイツはまた、妙なのが出てきたぞ！」

閃光が収まった後には、燃え上がるような雄々しい真紅の電波によって体を構成した巨鳥の電波体、コンドルがアガメさんの側に控えていた。ヒュー、カツコいい！

「電波変換！」

古代のスターキャリアーから、コンドルが完全に出てきたコトを確認したアガメさんは、一切の揺らぎをも感じさせない発声で宣言し、『ムーの監視者』コンドルをその身に纏う。紅の閃光が再びナンスカの地を席卷し、辺りは多大な混乱を孕んだ沈黙に包まれる。

「ひええっ!? 村長の姿が……アレは一体!?!」

「ナンスカ!?! どういうことツスカ!?!」

ボクがこの場に現れたことで、アガメさんの所持する古代のスターキャリアー内部に潜んでいたコンドルと反応してしまい、ビジブルゾーンを発生させてしまったのだろう。強力な電波体が相対すると、発生しやすいからしようがないね。

「私の名は、コンドル・ジオグラフ!! 真正銘、ムーのチカラを行使する存在である!! これからは、この私が支配者となってナンスカの『勢力拡大』を成し遂げてみせようぞ!! さあ、皆の者!! 私を崇めよ!! そして私に従うがいい!! これより、停滞を極めたナンスカの、新たな歴史が幕を開ける!! 刮目するがいいぞ!!」

高らかにそう宣言したアガメさん……コンドル・ジオグラフは、自らの体から小型の飛行ユニット『ミサイルバード』を生み出し、委員長達の下へと飛び立たせる。……なるほど。鳥型故に腕が無いコンドル・ジオグラフの運搬は、もっぱら手下の仕事ってワケなのか。

「では手始めに……我らがナンスカ族を謀った者達の末路、この者達に思い知らせてくれよう!!……オマエ達は、その青い男を仕留めるのだ! いいな!」

そう言い残してミサイルバードにより、縛られたままの委員長達を背部に乗せたコンドル・ジオグラフは、そのまま地上絵の方角へと飛び去ってしまった。速ッ!

「ロックマン様……」

高所恐怖症とか、男性恐怖症になつたりしないといいんだけど。ロリコンに紐無し飛



行体験、果ては2メートルクラスの強面黒人にレーザーストームでチリチリだもんな。

不憫過ぎるよ委員長……。

「あの周波数……イエティ・ブリザードやブラキオ・ウエーブと同じ、妙な感じだぜ。と、言うことはつまり……」

「アガメさんに『古代のスターキャリアー』を渡したのは、ハイドか……！」

ここまで顔見せしているオリヒメ陣営の面子は、ソロ、エンプティ、ハイドなので、一応的外れではないはずだ。

ユグドラシル  
ハイド絶対許さねえ！

などと考えていると、先程のコンドル・ジオグラフが発した命令を聞き届けたのか、未だに慌てている群衆の中から二人のナンスカ族がボクの道を塞いでしまっている。

まさか、電波体と一戦交えるつもりか……!?

「チツ……コイツはメンドクセエな」

「今、この人達の相手をしている時間なんて……あれ？」

……と思つたら、今度は二人揃つて道を開け出したぞ。

一体全体、何がどうなっているんだ？

「村長を止めてください!!」

「村長はナンスカの未来を思うあまり、あのようになってしまったと思うんです！」  
「恐らく、村長は地上絵の先にある遺跡へと向かったハズです!!」

……成る程。この人達もアガメさんの異常には気づいていたってことか。つくづく、ナンスカ族ってヤツは人が好い。

それならこつちも、それ相応の結果を見せなくっちゃいけないな。

「ええ、わかりました!」どうか、村長さんのコトはボクに任せてください!……:……:では  
!」

「貴方にかどうか、御武運を!!ナンスカ!」

地上絵の方向へと疾走するボクに向かって、先程道を塞いでいたナンスカ族の人が声をかけてくる。

……やってやるぞ! 打倒、コンドル・ジオグラフィだ!

「ナンスカ!!」

——ナンスカ地上絵の電波——

この三日間で、最早見慣れた光景となつてしまつたムーの地上絵を尻目に、ボク達は一陣の風となつてこのエリアの最奥へと向かつていた。

暫くナンスカの地を駆け抜けていると、ピラミッドの上部を切り取つて足場を作り、そこに無理矢理感あふれる階段が取り付けられたような建造物が目に入ってくる。

取つて付けられたような石造りの階段には、当然の如く現代で言うところの手すりにあたるようなモノは無い。周囲の地上絵もあつて、まるで突然古代の世界に足を踏み入れてしまつたかのような錯覚に陥りそうだ。

ピラミッド擬きの壁面をくりぬいて造形を施されたのだろう、座した人型の守護者?のような石像もこれらの雰囲気作りに一役買つている。

正式名称は確か……ナンスカ遺跡、だつたはず。

「この先に、皆が……」

階段を登りきつた先には、件の遺跡へと続く通路が伸びている。それなりの横幅はあるのだけど、やはり手すりにあたるモノが無いために、どうも気が落ち着かないな。

「鳥野郎なんざ、キグナスで散々相手にしただろ？ 変に気負うコトはないと思うぜ」  
 「……うん、わかっている。ただ、人質を盾に取ってくる可能性も捨てきれないと思ってさ。要は慎重且つ迅速に……ってことだよ」

骨格レベルで鳥の電波体とキグナスを比べるのはどうかと思うなあ……というか、火力面で差がありすぎる。最近の（古代の、とも言うが）電波体は、口からブレスないしビームを吐くのがトレンドなのだろうか。

「そいつはちよつとばかり、難易度上げ過ぎじゃねえか？ ……まあいい。兎に角よ、いざ巨鳥狩りとしやれ込もうぜ！」

モンハンの考えればヤツは鳥竜種……イヤアンガルガみたいなものか。決して慢心出来る相手でもないが、そこまで肩肘を張る必要も無い……と。

「……ああ！ ……それじゃ、乗り込むよロック！ 準備はいいね!」  
 「おうー！」

いざ、ナンスカ遺跡へ！

ーナンスカ遺跡1の電波ー

左右に設置された松明の炎に導かれ、石造りの一本道を警戒しながら進むこと約一分。何やら上空を飛翔している緑色の電波体が目につきだした頃、ボク達は漸く遺跡の

中心と言つて差し支えないであろう、拓けた場所に出ていた。

しかし……何だ。電波体的に表現するなら、とても馴染みのある周波数……とても言おうか。とどのつまり、このナンスカ遺跡の電波には、ボク達の顔なじみな電波体がいる……ような気がする。

「オイ、スバル。わかるか？ この周波数……たぶん、同類FM異人が近くにいるぜ」

やはりロックもこのプレッシャーを感じ取っていたらしい。

それにしても、このピリピリするとか、どこか痺れるような独特の雰囲気……ボクの推測が正しければ恐らく、この遺跡に訪れているロックの同類というのは……。

「わかっている。でも、目的をはき違えちゃ駄目だからね。まずはこの先に進まないと……」

ナンスカ遺跡1の電波は、俯瞰して見れば正方形の形となっており、それぞれ四辺から数本のウェーブロードが伸びている……という構造になっている。

エリア中央を形作っている石造りの部分には、東西南北に相当する位置にそれぞれ地下遺跡行きと思われる階段が建造されている。確かこの地下遺跡を利用して、ツツツキーの襲撃を防ぐのだったか。

「おう。だがよ、エリアの奥にデツケエセキュリティが見えるぜ。今までの経験則から言つて……」

「何かしらの条件を満たさなきゃダメってコトだろうね。誰か、近くに事情を聞けるデ  
ンパは……」

おかしいな。こういう時には、入り口の辺りに事情とセキュリティの解除方法を親切  
にも教えてくれる、親切なデンパクンがいるはずなのに……まさか、ツツツキーに食わ  
れたとか!?!それはマズイぞ……!!

……つて、何だ?

遺跡中央部にある変なオブジェクトに隠れて見えないが、何やら荒っぽい怒声が聞こ  
えてくる……。

『……アア?この先にはセキュリティが掛かっただと!?!……テメエ、ふざけてんじや  
ねえぞ!』

『ヒカル落ち着いて!』

『タスケテ!タスケテ!』

「オイ……アレ……マジか、マジなのか……!?」

「ボクに聞かないでよ……」

ロックが呆然としたような声でボクに問いかけてくるが、こっちだって頭を抱えたいくらいだ。

武装化した右腕、黒を基調として、膝から脇までをグレーで覆ったようなボディカラー。間違いない、ジェミニ・スパーク（ブラック）だ……。

そんな黒いジェミニ・スパーク（以降黒ジェミニ）は、ナンスカ遺跡を拠点にしていると思わしき、赤を基調としたデンパくんの頭部をわしづかみにしつつ、怒気を露にしている。こえーよ。

「ヒカル！もういい加減にしろ！大人しく炎のデンパを探すこと以外に、セキュリティを突破する方法はない！」

そんな黒ジェミニを必死になって止めようとするジェミニ・スパークがもう一人。粗暴で口調も荒い黒ジェミニとは対象的に、その姿は白を基調として、膝から脇までをグレーで覆ったボディカラーだ。カラーリングの違い以外にも、武器化しているのが左腕……という違いもあるが。

そんな白いジェミニ・スパーク（以降白ジェミニ）は、善良な面の発露である双葉『ツ

カサ』の人格を宿した電波体だ。ヒカルの相手をし続けるのは大変なんだろうなあ……お気持ち、お察しします。

「うるせえ！オレはなあ、こんな時に蜘蛛の子を散らすように逃げ出したコイツらを見てるとよ……無性に腹が立つてくるんだ！おつそろしいコンドルとやらが怖くて、『台座』を守るっていう役目すら放棄して逃げただあ!?! テメエらマジでふざけてんのか!?!」  
「タスケテ！タスケテ！」

ますます語気を荒くして、赤いデンパくんに掴みかかる黒ジエミニ。話を聞くに、炎のデンパとやらが役目を果たさずに逃げ出したという部分に、親から捨てられて孤児になったヒカルが反応した……という感じだろうか。

ナンスカ遺跡仕様のデンパくんは、既に涙目で白ジエミニに救助を求めている。見知らぬ電波体に助けを求めたらいきなりキレられたんだ。そりゃあ、混乱もするよ。

そして同情するよ……可哀想に。

「いい加減にしないと、ウェーブアウトを……って、ロックマン!?ということは……スバルくんかい!?!」

あ、気付かれた。

制御不能な黒ジエミニに苛立ち混じりの態度を見せていた白ジエミニ……ツカサ君は、こちらを視認すると、驚愕の表情を浮かべて近寄ってくる。いや、先に絶体絶命の



デンパくんを助けてあげなよ……。

「やあ、ツカサ君。どうしたのさ、こんな所で……」

「ああ、ちよつと武者修行？でこの辺りまで来ていてね……ウエーブイン中に大きな鳥の電波体を見たものだから、面白そうだって、ヒカルが……」

ヒカルの目的は復讐なんじゃなかったっけ？いや、その為の武者修行、ということなんだらうか？

……兎に角、ツカサ君の苦労は未だに健在らしい。

「……OK、大体わかったよ。ボク、実は今ちよつと大変なコトになって……」

現状を簡単にツカサ君へ説明する。ゴンターガのくだりでは爆笑していたけれど、アガメさんのゴン太を利用して勢力拡大云々の辺りでは胸を痛めていたようだった。一応、ツカサ君もゴン太とは割と話すようだったので、心にクモるモノが多少なりともあったのだろう。

「……と、言うわけなんだ。だからボク達は、そのコンドル・ジオグラフを追ってこの遺跡まで来たんだけど……」

「それは大変だ。……ボクも協力してあげたいのは山々んだけど、ヒカルがキミの邪魔をしてしまうかもしれないから。……彼はまだ、キミに倒されたことを根に持っているよ。……なんだ」

通話中は割とウザイだけのヤツだったけど、ベルセルクの剣で思いつきり斬り刻んでしまったからなあ……トラウマになっていないといいのだけど。

「そういうことなら……」

まあ、無条件で協力してもらえつつのはムシのいい話か。今のところはヒカルもこちらを邪魔するつもりは無いようだし、戦闘に移行しなかつただけでも良しとするべきだろう。だってジェミニ、強いんだもの。

「ただ、ここのデンパから幾つかの情報は得られたんだ。それをキミに提供するよ」

「ホント!? ありがとう、ツカサ君! 助かったよ……」

「そ、そうかい? 全然大した情報じゃなくて申し訳ないくらいなだけ……」

多少オーバー気味に感謝の言葉を伝えると、ツカサ君は照れているらしく、頬を赤らめながらはにかんだ笑顔を見せた。まあ、友人に頼られると嬉しくなっちゃうこと、結構あるよね。

「そんなこと無いって! ボク達にも、あんまり油を売っている暇はないんだ。だから情報を集める手間が省けて、感謝してもしきれないくらいさ! ありがとう!」

「……ゴホン、それじゃあまずは、このエリアのコトからだ。このエリアにはセキュリティが掛けられていることはもう流石にわかっているね?」

「うん、入り口から向かいに見えた大きなセキュリティでしょ?」

入り口から真向かいには、このナンスカ遺跡1の電波から先へ向かうための大きめに造られた、これまた石造りの大きな通路がある。セキュリティはその唯一の通路をがちり塞いでしまっている、というワケだ。

「そう。で、そのセキュリティの向こう、このナンスカ遺跡の最奥に、件の電波体『コンドル・ジオグラフィ』は向かって行つたらしいんだ。さっきここのデンパが大慌てで『おつそろしいコンドルが来た!』と言つていたから、多分間違いないと思う」

「なるほど……でも、セキュリティが解除されないんじゃないやあ、陸路からでは先に進めないよ。スターフオーソもアクセス圏外だし……」

ドンブラー湖と違つて、エリアへの入り口全体にセキュリティが掛けられているワケではないので、飛行手段があれば一気に遺跡の奥まで移動することは出来る。

スカイボードを使いたいところだけど、上空には中型の鳥型電波体『ツツツキー』がいるために、非常にリスクだ。コンドル・ジオグラフィ戦前にスカイボードが破壊されてしまつては、目もあてられない。

「空路を移動する手段がないなら、一つだけ方法がある。それは、このセキュリティを解除してしまうことだ。……上空を見てごらん」

「何か、緑っぽい色の鳥?みたいな電波体が飛んでる……アレは?」

より正確に言うくと、ジェット噴射するカラーコーンの上部に鋭い目付きを描いた球体

を突貫通させ、それからカラーコーンに翼つばい湾曲したパーツを取り付けたような外見だ。結構カッコいいのがイラっとくるけれど。

「あれは『ツツツキー』。このナンスカ遺跡のセキュリティを担っている炎のデンパを主食としている電波体……らしい。セキュリティを解除するには、炎のデンパを指定された『台座』に設置しなければならぬけど……どうにも、皆コンドルやツツツキーが恐ろしくなつて逃げ出してしまつたらしい」

「つまり、先へ進むためには全ての隠れたデンパくんを探し出して、指定された『台座』にセットしなくちゃならないのか……」

うーむ。知つているとはいへ、改めて考えるとやはり面倒くさい。ウイルスもそこそこのが湧いてくるみたいだし、油断は出来ないな。後はヒカルが騒ぐことで、ウイルスの注意を引き付けてくれれば言うこと無しだ。

……何？ 外道過ぎるだつて？ ヒカルはそれくらいじゃくたばらないよ。多分。最悪、本体のツカサ君が生きてさえいれば、復活は可能だろうし。

「二度『台座』にセットされたデンパには一定時間の間、保護フィールドが張られるらしいから設置後に食い荒らされる心配はない。ただ、そのデンパを抱えて移動している間にツツツキーが襲いかかってくるらしいから、その時はエリア中央にある地下遺跡への階段に入って、ツツツキーの攻撃をやり過ぎしてくれ……つてというのがあのデンパの

言っていたコトさ」

ふう、と一息ついたツカサ君は、未だにキリキリと頭部を掴まれたままのナンスカ遺跡仕様のデンパくんへと武装化していない右腕の、細くて柔らかそうな指で差し示す。全身に呆れとやるせなさを纏った、そんな仕草だった。

とにもかくにも、やはりあのデンパから聞いた情報だったらしい。保護フィールド以外は概ね既知の内容であることは確認出来たので、早急に所謂『絶』中のデンパ達を探しだすべきだろう。

「そうなんだ……ありがとう、ツカサ君……つと、そろそろボク達も行かなくっちゃ」  
あんまり時間を掛けすぎると、委員長が『見せられないよ！』な状態になっているかもしれないしね。

電波体の p r p r が生身にどこまで有効なのか……それが問題だ。小学生のア○顔は見たくないなあ……。

「うん、頑張れスバルくん。ボクも陰ながら応援してるよ。それじゃ……また、会おう」  
「……もちろん！ そうだ、この件が終わったらさ、またブラザーバンドを結び直そうよ！  
機種変したから、ブラザーバンドもフォーマットされちゃってるでしょ？」

「……わかった。それじゃ、期待して待ってるよ」

「大丈夫だって！ あんな鳥なんて、丸焼きにして食ってやるからさ！ ……それじゃ

！」

ブンブンと風を切るように片腕を振り、ツカサ君に別れを告げる。中々良き出会いであつた……。

「オイ、その岩男！」

「……何？」

漸くデンパくんをヘッドロック？から解放したようで、黒ジエミニ……ヒカルの武装化した右腕は手持ちぶさたになっている。と言うか、ここで邪魔されてもいい迷惑なのだけど。体力の無駄だし。

「喜べよ。今回の件、オレも協力してやるぜ」

「えええ……ヒカルって、そんな人助けに燃える殊勝なヤツじゃないじゃん……」

かなりぶつちやけたけど、ぶつちやけ間違つてはいないはずだ。

ヒカルは特に他者（主に両親）への憎しみが強いから、そんなことをするようなタイプではない（断言）。

「……そういうやつじゃねーよ。ここでトンスラこいても胸糞悪いだけだからな。オレは親の役目から逃げ出したヤツらとは違う。それを証明したいだけだ」

おっと、いつになくマジモードのヒカルだ。なんだろう、もつとこう……本能のままに暴れるようなヤツだと思つていたんだけど。

祭りの場所は、ここか……？みたいな。

「ヒカルが協力するのなら、その、ボクも……」

ついで、とばかりにツカサ君も協力を申し出てくれる。

常識人の比率が増えるのは有難い。ボクだけじゃ御しきれなかつただらうからね。当然、ボクも常識人枠だ。異論は認めない。

「ボクは歓迎なんだけど……どう、ロック？」

先程から気を使っていたのか、沈黙を保ったままのロックへと問い掛ける。残留電波で変身しているのだから、ジエミニによる造反の気は無いと思うけど……？

「……オレも構わねえぜ。テメエらからFM星人の意識は感じられねえし、手が足りないのはわかりきってたからな。協力する理由も明確だから、断る理由もねえ」

「……決まりだな。どうやら炎のデンパとやらは、お互いにある程度存在を察知出来るみてえだ。入り口付近アにいたデンパの話だと、北西の方角に炎のデンパ特有の気配つてヤツを感じるらしい」

ロックの判断に対して反応も見せず、黒ジエミニ……ヒカルは淡々と方針を決めていく。

なるほど、躊躇や迷いが少ない分、話がポンポン進んでいくのはやり易い。この辺の強引さは、委員長やロックに通じるものがあるように思う。

それじゃあ……ナンスカ遺跡、攻略スタートだ！



## 52

ーナンスカ遺跡1の電波ー

珍しく浅倉ア！じゃないヒカルと、心の清涼剂的なツカサ君を一時的なメンバーに加え、広大なエリアを誇るナンスカ遺跡の電波にて炎のデンパくんを捜索すること数分。

ボク達は前情報通り、エリア北西のウェーブロード上で縮こまっている炎のデンパくんを発見することに成功していた。

「ツツツキーコワイ……」

炎のデンパくんは、ツツツキーに恐怖して逃げ出したらしいので、まず間違いなくこのデンパくんだろう。

何処と無くチラチラと燃えるような電波圧プレッシャーが感じられる。腐つてもセキュリティの管理者ということか。

「キミが『台座』のデンパくん？」

「……そうです。ボア」

一応確認の言葉を入れると、炎のデンパくんは酷く怯えた声で認め、首肯する。そんなに怖いなら、皆揃って地下遺跡の中にも隠れていてくれればいいのに。探す手間が

省けるし。

「ボク達がキミの管理する『台座』まで連れて行ってあげる。さあ、キミの『台座』を教えてくれるかな？」

「タスカったボア！ ボクの『台座』は、このイセキのヒガシにそびえる『東の台座』だボアッ！ くれぐれもツツツキーにはキをつけて！ アイツはボクたちの炎がダイコウブツなんだボアッ！」

ブルブル……と、ツツツキーに追い回されたコトを思い出したのか、デンパくんはその場で軽く震え出す。まあ、過剰戦力に近い現状だ。ツツツキーがスカイダイビングをかましてきても、しつかり撃退することが出来るだろう。

「よし、皆聞いたよな？ 次に向かうのは……」

「『東の台座』、だろ？ スバルくん」

この遺跡には、東西南北に石造りと思われる『台座』が設置されており、それぞれに対応したデンパくんを配置することで、セキュリティを解除出来る仕様になっている。

しかし、何を思つて台座だけ現実の物質で建造したのだろう。セキュリティの根幹を担うデンパくん達を、ナンスカの民は目視することが出来なかつたはずなのに。……もしかしたら、地上に降りてきたムーの民を歓迎する施設だったのかもしれない。

「うん。でもエリアの中央を横切るから、ツツツキーの襲撃には注意しないといけない

よ」

「電波体を食べる電波体なんて、アンドロメダを除けば、見たことも聞いたこともないけど……」

そう言えばそうなんだよね。

電波体って、別にカロリーを使って動いているわけではない（と思う）から、食事を摂る必要は無いし、それこそ嗜好品以上の意味は無いと思うのだけど。

「……………チツ」

ヒカルは当たり前のように不機嫌だねえ……。

——数分後——

『ピエエエエツ!!』

炎のデンパくんの存在を目ざとく感じ取ったツツッキーの眼光が鋭く光り、ジェット噴射を最大まで吹かしながらこちらへ襲いかかってくる。それはさながら、真昼に煌めく閃光の様。回避は困難を極めた。

そしてこの数分で何度もツツッキー襲撃を体験して、ハッキリと体感したことが一つある。

ツツツキー、マジヤベエ。

……スターフォースなら余裕とか言って、ホントサーセンした！冷静に考えて、変態天馬の劣化コピー程度で、ジェットスピードに勝てるワケが無かったんだ……。

「逃げてッ！ 超逃げてエッ！」

既にサンダーベルセルクへの強化は済ませている。そうでもしないと、超高速で飛来してくるツツツキーを目で捉えることすら出来ないからだ。

因みに回収したデンパくんは黒ジェミニに任せている。ヒカルにやる気があったのは間違いないのだし、何よりボクがツツツキーの迎撃に回った方が確実だからだ。

「おおおッ!! 間に合え、間に合え……間に合えエーッ!!」

今まで見たこともない必死な形相で、デンパくんの隠れていた北西エリアのほぼ反対側にある『東の台座』に向かって全力疾走するヒカル。

右脇にヘッドロックする形でデンパくんを固定し、強化された腕力にモノを言わせることで何とか保持しつづけており、その後ろにボクとツカサ君が追いつくようなフォーメーションで突貫している。

「……………来るッ！」

ヒカルが『東の台座』の中心へと炎のデンパくんを据えたことを確認し、背部にマウントしている大剣を流れるように抜き放ち、両手で構えつつツツツキーの襲来を待つ。

まったく、こんなに苦戦させられるなんて！

『ピエエエエツ!!』

さながら携帯獣のドリルクチバシのように全身を回転させつつも、真っ直ぐにデンパくんの元へと突っ込んでくるツツツキー。コイツ、段々襲い方がアグレッシブになってきてるぞ?!

「いくよツ!! ツカサ／スバル君!! うおおおツ!!」

ボクは右方からベルセルクブレードを、ツカサ君は左方からエレキソードを、それぞれ正面から突っ込んでくるツツツキーに向かつて振り下ろす。

動体視力の関係上、オーバーツによる感覚拡張が無い為に完全な見切りの出来ないツカサ君がボクのタイミングに合わせた形の連携だ。

『ピガツゲエツ!?!』

某電気ネズミの声を汚くしたような断末魔を上げ、地面に叩きつけられたツツツキー。

先ほどまで、鷹のような鋭さを放っていた眼光からは既に、幾らかの光をも感じとることはできない。完全にデリートされたのか、サラサラと電波体を崩壊させ、チリのようにその忌々しいフォルムを消滅させてしまった。

「……………ふう、何とか倒せたみたいだ」

「ナイスタイミングだったよ、ツカサ君。まさかベルセルクの膂力で振るった大剣に合わせられるなんて……」

ベルセルクによって全身を強化されているボクのパワーは、並の重量級を遥かに上回っている。いくら軽量さが取り柄のエレキソードと言っても、まさかこの速さに並んでくるとは思っていなかった。

まあ、今のボクって『技を越えた力、それがパワーだ!』を地で行く存在に近いんだけどね。

「いいや、ただの偶然さ。それより、『台座』の方は……」

謙遜する姿勢を見せるツカサ君だけど、実はかなりの戦闘センスがあるんじゃないかとボクは睨み始めている。だって動きにそつが無いんだもの。

「タスかったボアッ! ホカにもナカマがカクれているボア。だからタスけてあげてほしいボア!」

「アア!?!」

キレ易すぎだつてば!

「ちよつとヒカルは黙つてて! ……脅かしてゴメンね。それで、その仲間の場所はわかるかい?」

若干ビクビクしながら、台座によって守られたデンパくんは瞳を閉じて集中し、周囲

に同類が居ないかどうか、サーチを開始する。

「……このチカくに、ナカマのケハイがするボア！」

「わかった、探してみるよ！……さあ、探しに行こう！」

さあさあ！と尚も苛立ちを見せる黒ジエミニの背を押し、台座から距離を取る。

台座の設置されている場所は小さめの正方形を象った足場になっているため、端から転落してしまつては大変……という建前だ。

「チツ……だがよ、あの忌々しいクソ鳥野郎はもういないんだぜ？ 誰が邪魔するつて言うんだ？」

「その心配は杞憂だよ、ヒカル」

ヒカルの言葉を聞いたツカサ君が、何とも言えない顔で武装化していない右腕の人差し指を、上空に向ける。

ワケもわからず、ボク達は示されるままに上空を見上げると、先程完膚なきまでにデリートしたハズのツツツキーが、元気にナンスカの空を飛んでいた。

ツツツキー……オマエ、リスボンすんのかよ……

――三十分後――

「これで……東西南北全ての台座に設置完了だ……」

さながらデンジャラスなゾンビのように無限湧きしてくるツツツキーの猛攻を捌き続けること約三十分。

ついに全ての台座に炎のデンパくんを戻し、長らくボクらを苦しめたセキュリテイが今、漸く解除されようとしていた。

「タスカったボアッ！ これでナカマがソロったボア！ ミンナ！ イシキをシユウチユウするボア！」

東西南北に散ったデンパくん達へと通信を飛ばし、セキュリテイを解除するための準備に入るミナミの台座所属のデンパくん。台座からは凄まじい勢いの炎が燃え上がり、セキュリテイ管理者として扱えるチカラの片鱗が窺える。この熱量からして、かなり強固なセキュリテイだったらしい。

「……………うおおおお……………ボア！ ファイアッ！ イセキのオクへとツウじるトビラをヒラいたボアッ！」

「ありがとう！」

この先に広がっているエリア……………ナンスカ遺跡2の電波へと続く通路となつている坂を塞いでいたセキュリテイが解除されていることを確認して、全員で喜びを分かち合う。デフォルトで不機嫌なヒカルも、今回ばかりは達成感の大きさが勝つたようだ。まことに喜ばしい限りである。



「さあ、遺跡の奥に向かうぜ！」

さて、真の絶望はここからだ。

確か、双子や三つ子の台座があつたような……。

——ナンスカ遺跡2の電波——

「……空にはツツツキー。あちこちに点在している台座。奥にはバカデカイセキュリティウオール。どうやらさつきまでの繰り返しみてえだな……はつきり言つて滅茶苦茶ダルいぜ。電液体が暑さへの耐性を持つてなかつたら、とつくにくたばつてたかもな……」

苦勞して突破したセキュリティの先には、先程までのエリアを2つ並べたような地形が広がつていた。

基本的な構造やギミックは変わつていないようなので、最初に探し出さなくちゃいけない炎のデンパくんの情報が無いこと以外は特筆することもないだろう。いや、面積が2倍なのだから、しらみ潰しも一苦勞なのだけだね。

しかし、そつちは何とかかなりそうだ。問題はコンドル・ジオグラフの攻略なのだけ……。

「さて……とにもかくにも、まずは台座を起動させるためのデンパくんを探さないとい

けないよ」

「何か、アテでもあるのかい?」

神妙な表情を浮かべたツカサ君が問いかけてくるけれど、実は結構いけそうな案がある。我ながら、電波人間への適性の高さを感じずにはいられない。順調に人間を辞めていつてる……とも言うけれど。

「炎のデンパくん達の発している周波数? みたいモノは大体掴んでいるから、後は強化された感知能力を頼りに探せば……」

「……勘頼りとか、不安要素しかねえんだけど」

ヘッドセットから溢れた頭髪を左手でガシガシ掻きながらヒカルが愚痴ってくるが、ボクは声高にして言ってやりたい。ほならね? 自分で考えてみなさいよって。

差し迫った状況で文句を言う権利を持つのは、建設的なコトをしている人間だけなのである。異論は認めたくない。

「どうせ最初の一人だけだからね。ダメだったらしらみ潰しの方向で。……どう?」

「チツ……勝手にしやがれ。ダルさのせいとか、どうにもカリカリしてんなあ、オレ……」  
やれやれ……とばかりに肩を竦めているが、ボクはヒカルが上機嫌だったコトなんて、数える程度しか記憶に無いぞ。

……まあ、以前のツカサ君に押し付けられた分の不平不満もあるのだろうけど。

「ヒカルはいつもイライラしてるじゃないか……」

「うっせえぞツカサ。……オレは自分に正直なだけなんだっての」

ううむ、何だか話が脇道に逸れそうな気がする。Pr Prの件もあるし、攻略はなるべく急がなくてはならないと言うのに。

「ハイハイ、そろそろデンパくん探しに戻ろうよ。ボクの感覚的には………ええっと、向こうに炎のデンパくんに似た周波数を感じるような気がする……」

かがり火が燃えるような電波圧プレッシャーは、このエリアの入り口付近に感じるような気がする。

炎のデンパくんは台座とセットで運用することが前提のセキュリティであるために、単体では風前の灯火程度の弱々しさしか感じることは出来ない。それが転じてツツツキーから逃げられる隠れ蓑になっているのだろうけど。

……数分後……

「ツツツキーコワイ、マジで……」

そろそろ電波体でもただじゃ済まない高さになってきたウエーブロードの行き止まりに、プルプルと震えているデンパくんを発見出来た。どうやら大当たりだったらしい。

「……………おおっ!! マジで居やがった!」

半信半疑どころではないレベルで疑っていたであろうヒカルも、これなら多少は信用してくれるだろうか。

「ちよつとは見直した? ……ねえ、キミはどの『台座』のデンパくん?」

「ボクの『台座』は、このイセキのキタにそびえる『北の台座』だボアツ!」

「了解! ボク達が連れていってあげるよ! ……道中の無事は保証出来ないけどね! ……」

先程までのツツッキーと繰り広げた攻防を思い出し、予防線の意味を含めて注意を促す。ぶつちやけ食われてもおおしくないレベルで、向こうの攻めは強力だからね。仕方ないよ。

「よ、よろしくボアツ!」

ちよつと引き気味だけど、こちらの戦力を見て大丈夫だと判断したらしい。大人しくついてくるようだ。まあ、電波人間が3人とか、何処のオリヒメ陣営だよって話だからね。しかも内二人は雷神ジェミニの電波体だ。……残留電波由来の電波人間だけだ。

「よし、それじゃ早く『北の台座』に運んであげようか!」

後は、同類同士のテレパシーに期待しておけば無問題なはず。コンドル・ジオグラフの方は……まあ、何とかなるでしょう。多分。

——三十分後——

途中でツツツキーに啄まれたり、双子や三つ子の台座にヒカルがマジギレしそうになつたりと色々あつたけど、何とか狩人の目を振り切つて全てのデンパくん達を台座にセツトすることが出来た。お、終わった……。

「……ふう。これでお仕舞い……のはずだね」

「タスかつたボアツ！　これでナカマがゼンインソロつたボア！」

キミ達は群れると元気になるねえ……なんてソロみたいなのを考へてみる。いや、下らない愚痴みたいなモノなんだけどね。

「ミンナー！　イシキをシュウチユウするボア！　……うおおお……っ！　ボア！　フレイムツ！！　……これでコンドルのトコロまでイけるボア！　ナカマをタスけてくれてありがとうボア！　ゴブウンをボア！　ボアツ！」

ゴゴゴゴゴ……と遺跡の最奥へと続く通路に掛かっていたセキュリテイが解除される。まだprprprされていないといいのだけど……おまわりさんあつちです。

——数分後——

ボク達は台座から移動し、先程まで強固なセキュリテイが行き先を塞いでいた遺跡最奥への通路、その坂に登らんとしていた。

一応、軽くストレッチや柔軟体操によつて出来る限り高いパフォーマンスを發揮するための努力をしておく。土壇場で足を釣つて敗北とか、悔やんでも悔やみきれないからね。

「オシ！ 村長をぶつ飛ばしにいくぜ！」

「ああー！」

ロツクの気合いも十分だ。相手が大型の飛行タイプだからと言って、まるで怯む様子もない。頼もしい相棒と言えるだろう。強いて言えば、ツカサ君……ジェミニ・スパークはどうするのかつてことだけど……。

「オイ、岩男ツ！」

「ツ!?!」

背後で跳躍した黒ジェミニ……ヒカルがボク達の目的地へと続く通路の前に着地し、道を塞ぐように武装化した右腕のロケットナックルをこちらに向けてくる。

……どういう、こと？

「オイ、ツカサ！ コイツはどういうことだ!?!」

「い、いや、ボクに聞かれても……どうしたつて言うんだよ、ヒカル!?!」

ロツクの困惑した声質で問い質すが、ツカサ君にもヒカルの真意が読めないらしい。

……いや、ボクは知っている。この流れ、まさか……!

「デメエには、いつか絶対にリベンジしてやろうと思っていた……!」

武装化した右腕からバチバチと雷光を迸らせながら、黒いジェミニ・スパークはゆっくりと近づいてくる。

表情を見るに、説得が通じるとも思えない。

「いつかつて、今じやなきやダメなのか!？」

なんと言うか、ここを通りたきや、このオレを倒してからいけよ!……とでも言いそうだ。

「そうだ。……今じやなきや本気で闘えないからなアツ!ここを通りたきや、このオレを倒してからいけよ!岩男ツ!」

マジで言いやがった!?

「……説得が通じる状態じゃ無さそうだ。なら、しょうがねえ!……やっちまうぞ、スバル!」

こうして問答している時間も惜しいと判断したのか、ロツクは即座に臨戦モードへ突入する。バイザーに解析された黒ジェミニのデータが映し出され、後はバトルカードのセレクトを待つばかりと言ったところだ。

「やるしかないのか……」

「今回は二対一でやる気はねえ! ……どうせツカサは協力してくれねえだろうからな

！いくぞロツクマン！」

雷撃を纏わせた右腕を構えながら、黒ジエミニが襲い掛かってくる。どうやら戦闘は避けられないらしい。こりや、こつちも本腰を入れて闘わないと！

「鳥野郎の前座ってヤツだ！ ぶっ飛ばすぜ、スバル！」

「ああ！ ウエーブバトル！ ライドオン！」



## 53

ーナンスカ遺跡の電波ー

戦闘開始から約一分（程度感覚だ）。既に黒ジエミニ……ヒカルは満身創痍の体だ。吐く息（のようなエフェクト）も荒く、体の重心も安定していない。だからと重力に引かれた右腕が何よりもヒカルの劣勢を示していた。

「ハア、ハア……クソッ！」

やっぱ、身体能力の差に開きがあり過ぎる……！」

いくらヒカルが生身の体でケンカ慣れしているとは言っても、今は電波人間同士の戦闘だ。どうしても勝手が違ってくる。

例えば、生身の人間は僅かな踏み込みでレポート染みた挙動は見せられないし、況してや腕からビームシールドなんて発生することなど、出来るはずがない。

つまり、人外の要素が介入しづらい超至近距離の攻防でもない限り、生身で培った技術を発揮することは極めて困難であると言わざるを得ない。

「……もう止めなよ、ヒカル。これ以上続けたら、いくら電波人間でもタダじゃ……！」  
設定されているHPの数値を越えたダメージを受けてしまったら、問答無用で死デッドエンドだ。

さつきまで人間だったものが辺りに……なんてこともなくあっさりと体を崩壊させ、消滅してしまう。それこそが打撃を除いたほぼ全ての攻撃を、HPを減少させるといふプロセスを経由することによって受け流せる電波体が抱えている、唯一のリスクと言えるだろう。

「……へッ！　残念だが……オレには無茶出来る理由つてのがあんだよ！

……なあ！　ツカサ!？」

ヒカルが、邪魔にならないように遺跡の隅で控えているツカサ君に向かって叫び声に近い声量で呼び掛ける。

「どうやらツカサ君も理解しているようで、特にヒカルの発言を訂正する気はないように窺える。」

……ワケがわからないよ。

「理由……?？」

「デメエが気にする必要はねえよッ！」

……いくぜ、コイツで最後だ！」

こちらの質問に答える素振りも見せず、右腕を構え直すヒカル。満身創痍な体の何処に残っていたのか、今までとは段違いの威力を誇っていると思われる雷撃をロケットナックルに纏っている。真正正銘、これが最後の一撃と言うヤツなのだろう。ヒカルの右腕以外からは、既に痺れるようなあの電波圧は消え失せている。

「リミテッド・ジェミニサンダーアツ！」

構えた右腕を左腕で支え、開いた掌の中心から雷神の名に相応しいイカズチの奔流が発射される。某ビームマグナムのようにプラスマ（のようなエフエクト）を纏った破壊の閃光は、たとえ掠めただけでも相当なダメージを受けるに違いない。

「サンダーア！　　ボルトツ！　　ブレイドオツ！」

今回は横振りの斬撃は省略し、大上段に構えたベルセルクブレードをただ全力で振り切るだけの簡単なお仕事だ。

つまり、飛ぶ斬撃を見たことはあるか……？というヤツである。食らえ  
ライザード  
エクスカリバー！

「ゴハアツ!?!」

圧倒的な出力を誇るオーパーツから供給されるエネルギーを解放して発射されたサンダーボルトブレイドは、強化されたと言っても一人分の出力の域を出ない、何たらジェミニサンダーに正面から押し勝って、反動で動けないらしい黒ジェミニの体を無慈悲に蹂躪した。

ヤムチャしやがって……！

「チクシヨウ、やっぱり無理ゲーだったぜ……」

文字通り必殺の一撃を食らい、速やかにHPが0を刻んだ黒ジェミニは、未だ残心を

解いていないボクに一頻り恨み節を語った後、その体を崩壊させてしまった。

GAME OVER!

「え、あ……嘘!? どうしよう……」

何か妙に自信満々な態度だったから、アンダーシャツのアビリティでも装備しているのかと思ったら、特に抵抗らしい抵抗も見せないまま消えてしまった……

あれ、ヒカルは……?

「心配は要らないよ、スバルくん」

文字通り二心同体の相棒が目の前で呆気なく消えてしまったにも関わらず、ツカサ君の顔は凧のように穏やかなままだ。いや、多少の呆れを含んでいる節すら感じられる。

……一体、何がどうなっているんだ!?

「心配は要らない……?」

……その、いいの?」

「ああ。……ジェミニ・スパークは二体一対の電波体だけど、ヒカルはあくまでも双葉ツ

カサという肉体に依存した人格を電波人間として無理矢理仕立てあげているに過ぎない。だから、たとえ消滅したとしてもボク<sup>本</sup>という体<sup>体</sup>さえあれば、また復活出来るのさ。

もちろん、ジェミニ・スパークとして復活出来るのは一度ウエーブアウトしてからになるけど」

ヒカルのヤツ……カラーリングと言ひ、ますます某神に近づいてないか？

時間差コンテンツニューは無しの方向でお願いします。

「ツカサ君が平気だつて言うのなら、まあ……。それで、この先のコトただけ……」  
先程はヒカルによって遮られてしまったが、邪魔者が文字通り消滅した今、最奥に進むボク達を阻む存在はない。ムーの電波体特有の周波数らしき違和感も、セキュリティが解除されたことにより、一層強まっている。

それに、その……現在のツカサ君は一応、休学中なワケで。あんまり気が進まないんじゃないかなー、なんて思ったり。

「行くよ。ボクはまだ、クラスメイトに会わせられるような顔を持ってはいないけれど、今は緊急事態で、ボクは電波人間だ。それに今回は別に、双葉ツカサとして彼らに再会するワケじゃないからね」

どうやら余計なお世話だったらしい。

言いながら真つ直ぐにこちらを見つめる瞳にはさざ波程の揺らぎすら、感じることは出来ない。

「そつか……ありがとう、ツカサ君。おかげでかなり楽に闘えそうだ」

「スバル君……どうか気にしないでほしい。これは、ボクが過去に起こしてしまったコトの贖罪、という意味も含んでいるんだから」

右腕でこちらの札を制止したツカサ君は、申し訳なきそうに俯きながら、今まで吐き出せなかったたのであろう内心に蔓延る良心の叱責を語る。

てつきり、とつくの昔に水に流したコトだと思つていたので拍子抜けだ。まあ、人は消えない過去の精算に、輝かしい未来を費やすモノだとマツキ有能な一期のほうも言つていたし、樂になりたくてもなれなかったのだらう。

「そんなこと……」

「ボクにとつては、とても大切なコトなんだよ。……いつまでもスバル君大事なブラザーに負い目を感じたくはないんだ。……わかつてくれるかい？」

「うん、わかった。なら、そろそろ行こうか。……ヒーローは遅れて現れるモノだけど、あんまり待たせたら捕ヒまロつイてる皆ンだつて興醒めしちゃうからね」

「……フフツ、違うない」

互いに異形と化していない方の拳を合わせ、士気を高め合う。ニヤリと二人して笑った後、ボク達は意気揚々と遺跡の最奥へ繋がっているであろう長い長い坂道を登つていく。

ボク達の闘いは、これからだ！

——ナンスカ遺跡2の電波・最奥——

その頃、遺跡の最奥にして頂上の少々開けたエリアでは、白金ルナ、最小院キザマロ、牛島ゴン太の三人が後ろ手に縛られたままの状態で転がされていた。

「……このツ！ 一体ワタシ達をどうするつもり!?!」

「ボ、ボク達を食べてもお腹壊すだけですよ!?!」

「腹減ったなあ……」

キザマロが泣き叫び、ゴン太も自らの空きっ腹を見下ろしながら溜め息をついている中、白金ルナだけは怒りをたぎらせてコンドル・ジオグラフィを睨み付けていた。

「先程村で告げた通りキサマらは、我らが崇拜するムーへ捧げる生け贄となってもらう」  
怒り心頭のルナを平然と見つめ返し、全身から放出しているジェット電波によつて発生した推力を吹かしその場に滞空しているコンドル・ジオグラフィはそう言い切った。その表情は、人間時よりも心無しか薄れたような印象を受ける。

鳥類は嘴を器官として保持しているために、口元で感情を表すことの難易度が高いのであった。

「じよ、冗談じゃないわ!!」

「生け贄だなんて……! そんな、ボク達に何をしよう……!」

「我らの幸せ……それを象徴する行為は一つ。笑うコトである。ムー大陸が浮かんでいたと伝えられる天空に向かって高らかな笑い声をあげるコトで、ムーへの限りない感謝

を捧げているのだ。他にも、感謝を伝える方法はあるが……」

笑い声をあげるコト以外にも、作法をしつかり押さえればムーへ感謝を捧げたコトにはなるが、それは個人の意思によるものが大きく占めるために、強制力があるとは言いきれなかったのだ。

「……そこで、オマエ達には天高く浮かんでいただろうムー大陸にも届くような笑い声を出し続けてもらう。即ち……永久に擽り続ける刑に処す!!」

一方的な宣告と共に、コンドル・ジオグラフィはその巨大な体躯に見合った大口をパクパクする、と言ったジェスチャーを行う。コンドル・ジオグラフィには擽る為に扱える手足が存在しないので、甘噛みや舌で舐める……といった行為で代替する算段だ。

「な、な……なんということ……!?!」

眼鏡の向こうで驚愕に目を見開いたキザマロが戦慄する。『マロ辞典』に、人は笑うだけで生きていけるとは微塵も載っていないなかった。絶望である。

「甘噛み……舐められ続ける……?」

い、いやあああああッ!!

ロツクマン

様あッ!!」

老人の声を出す巨鳥にペロペロ舐められるという、思い付く限りでも最悪に近く、且つ最も実現しそうな想像におどましい寒気を感じたルナは、気丈な態度を一変させて泣き喚く。はつきり言って、小学生相手には業の深すぎる刑だった。



「笑い続けんのか……腹減るなあ、それ……」

空腹によってイマイチ現状が掴めていないゴン太は、とにもかくにも食事の心配だった。心配せずとも、生きている限りは笑い続けなくてはならないので、死ぬまで食事は抜きである。絶望が彼のゴールであった。南無。

「安心していい。オマエ達の最後はとても穏やかな顔になるだろう！」

……さあ！

少々スパイシーな抱腹絶倒ワールドへご招待だ!!」

「待てツ!!            コンドル・ジオグラフィ!!」

「ツ!!」

「待てツ!!            コンドル・ジオグラフィ!!」

あ、危なかった。既に委員長達のすぐそばまで変態行為をしに近づいていた場面で制止出来たのは、運が良かったんだろう。ホントに。

「ツ!!            ……ほう、ここまで来たか。村の者達に始末するよう伝えていたはずで

あったが……それに、キサマにも協力者がいたとはな……盲点だったぞ」

……コンドル・ジオグラフィの言葉にピクリと反応するもツカサ君は俯いたまま、特に発言するつもりはないようだ。声色から委員長達に判別されるコトを防ぐためだろう。……ならば。

「その村の人達にアナタを止めてくれって送り出されて来たんだよ！アガメさん!!」

「愚かな者共め……ここまでやっても尚、私の偉大さが理解出来ないようだ。まあ、今は捨て置いてやる。キサマを完膚無きまでに叩きのめせば、あの愚かな愚民共も否応なく気づくに違いない。この私が、最大にして最高の支配者足るコトがなアツ!! ゆくぞ！」

ムーのチカラをその身で思い知り、絶望のままに果てるがいい！」

全身から推進力の炎を撒き散らし、こちらを睨み付けるムーの監視者『コンドル・ジオグラフィ』。両肩と思われる位置には二つの砲塔が確認出来る。かなり大きめの口径だ。相当な威力をもっているのだろう。

「くるぞ、スバル！」

「いくよ！ ツカサ……ジエミニ・スパーク！」

ツカサ君と言いかけてしまった。反省反省。

「(……ああ！ 背中は任せて!)」

小声でも返事してくれる辺り、やっぱり人が好い。

「ウエーブバトル！ ライド・オン！」

## 54

ーナンスカ遺跡2の電波・最奥ー

「クエエエエエツッ!!」

「ツ!!」

正面に滞空するコンドル・ジオグラフからは、本人の凄味だろう、ビリビリとしたプレッシャーが伝わってくる。正しく年期の入った威圧、とも言えるだろうか。

そのコンドル・ジオグラフは開始一番、鋭い嘶きを戦場に轟かせると、電波体において尾羽に相当すると思われるパーツから高出力のスラストを吹かし、一気に大空へと飛び立ってしまった。初手レーザーよりはラツキーなのだけだね。

「やはり空中戦か……ジエミニー」

「(わかってる!)」

やはりこの対コンドル・ジオグラフ戦、如何にヤツをこの太陽によってフライパン染みた熱さと化しているナンスカの大地に引き摺り下ろすか、それにかかっているとさえだろう。目下最大の懸念は、こちらの飛行手段がスカイボードだけということなんだ

けどね。

「マテリアアライズ！ ……スカイボード！」

かなり値が張ると聞いていたスカイボードなのだけど、ツカサ君もウィルスバスターングによって稼いだゼニーで1台購入していたのはラッキーだった。

話を聞くに、どうやらヒカルのレストラン解消に役立っていたらしい。世の中、いつ何が役に立つかわからないものだよね。ホント。

『イエエエイ!!』

ベストマッチ！

ボクのスカイボードはオレンジを基調とした穏やかなカラーリングだけど、もっぱらヒカル専用機になっているらしいツカサ君所有のスカイボードは、黒を基調として顔にあたるパーツがイエローと中々パーソナルカラーに近いと言える。

この辺が貰い物と購入品の違いなんだろうか。スーパーハカーの天地さんに頼めばブルーにチェンジすることも可能、なのかもしれないけど。

「よっ、と！ ……よし、追跡するよ！」

「了解ッ！」

威勢よくスカイボードに飛び乗ったボク達は、アクセル全開でギラギラとした太陽が照りつけるナンスカの空へとエアサーフィンを決め込んだ。ブクボンのコトもあるけ

れど、マテリアルウェーブは結構脆いコトが判明しているので、かなり慎重に回避行動を取らなければ。

『ヒュウ！ コイツは中々、趣のあるフィールドだ！ インターフェア連れの邪魔は無しで頼むぜ、相棒ッ！』

隣のスカイボードにチラリと目配せしたスカイボードの『オーリー』が、ニヤリと笑いながら冗談めかす。いつでもハイテンションなのが、彼のマイペースということなのだろうか。

「……任せてッ！」

「馴れ合う暇など……与えんぞッ！」

スカイボードで追い縋るボク等を横目に、緑色と黒色の個体が入り交じったミサイルバードの大群を、自らの体内から生み出したコンドル・ジオグラフィが鋭く吠える。

生み出された大量のミサイルバードは、まるで意思を持っているかのような精密な誘導性でこちらへと迫ってくる。……初っぱなから物量作戦かよ！

「スバル！」

大量の誘導ミサイルにぎよつとしたロックが、泣き言のように叫ぶ。数にして100は下らない数だ。性質を知っていなければ、ボクも絶句していただろう。

「わかってるさ！ ……おおおおおっ!!」

迫り来るカラフルな鳥達をロックのサポートによって片っ端からロックオンしてもらい、チマチマ一体ずつ撃ち落としていく。ロックバスターが着弾した個体は誘爆するために墜とすこと自体はそこまで苦勞するわけではないのだけど、なにせこの数だ。それに、黒色のミサイルバードは誘導性が低い代わりにロックバスターを弾き、シールドをも貫通する性質を持っている。なので、どちらかと言えば百を越える数よりも、この黒色のミサイルバードの方が厄介だ。

何故なら、こちらの飛行手段は酷く脆いものだから。

「黒い鳥型のミサイルは、バスターを弾くのか……気を付けてくれ！ スバル君！」

右腕を顎にあてた白ジェミニが絶賛乱れ撃つぜ中のボク達に注意を促してくる。流石はツカサ君、戦闘にあつても冷静だ。士気を高めてくれるロックとは違い、高揚よりも安心感が先行する印象……と言ったところか。

「了解！ ツカサ君は、ロケットナックルでコンドル<sup>本</sup>・ジオグラフ<sup>体</sup>の牽制を！」

今のところ、ボク達は辛うじて空戦に対応出来てはいるが、飛行型の完全特化型と言えるコンドル・ジオグラフの保有する空中での戦闘能力には足元にも及ばないことは明らかだ。

こちらの遠距離手段は揃っているため、出来るだけ空中での接触を避けることが定石だろう。と言うか、超高速で突撃してくるライティングインパクトなんて微塵も避けられ

る気がしないっつーの！

「ああー！」

ツカサ君が断続的に放ったロケットナックルをアクロバティックな動きで軽々と避けていく目標の大型鳥類。そしてツカサ君の猛攻を凌ぎきり、こちらに旋回してくるコンドル・ジオグラフィの両肩に取り付けられた大型砲塔は、思わず顔を覆ってしまいそうになるほどの目映いエメラルド色に輝いていた。

コンドル・ジオグラフィにはミサイルバード、フライングインパクトに加えてもう一つ、非常に厄介な攻撃がある。と言うか、厄介な攻撃しかない。改めて考えると、電波体に変身者含めて強敵過ぎないだろうか？

「……………捉えたッ!!」

コンドル・ジオグラフィの右肩に取り付けられている砲塔が一瞬だけ赤い閃光を周囲に撒き散らす。ヤツの発言からしても、ボク達のどちらかをロックオンしたと考えるのが妥当だろう。ミサイルバードで牽制出来るボクの優先度は低いはず。

だとしたら、向こうが最優先で撃墜したい相手は……………！

「ツカサ君ッ！」

「もう遅い！脱出不可能だアッ！」

砲塔がより一層の輝きを見せ、ボク達の目を眩ませる。

ボクは知っているぞ。古今東西、ビームとは音速に近い速度で照射される兵器だという。見てから回避余裕でした……は大抵不可能なのだ。クソッ！

「しまっ t……」

コンドル・ジオグラフィの巨体に相応しい口径から照射された膨大な破壊のエネルギーは、発射前のフラッシュから瞳を庇っていたために逃れ遅れたツカサ君の体を躊躇なく飲み込んでいった。しかも、コンドル・ジオグラフィの属性は木。ジェミニ・スパークの雷属性には数値上、ダメージは倍近く跳ね上がっている。

……頼む、耐えてくれ！

「……………ゴフッ！」

その膨大なエネルギー量故に照射時間は短かったが、『ウインググレイザー』を真正面から受けることになったツカサ君は手酷い痛手を負ったようで、血反吐（のようなエフェクト）を吐きながら誘爆したらしきスカイボードと共に戦闘を開始した遺跡最奥へと墜ちていってしまう。

ナンスカの遺跡最奥は、遺跡中最も高い位置に建造されていたので幸運にも落下時のダメージは（電波体にとっては）軽そうだが、飛行手段<sup>スカイボード</sup>を失った以上、戦線復帰は難しそうだ。これは痛い。

「…………クソッ！こうなったら、まとめて相手をするしか……ッ!!」



「クエエエエエツ!!!」

ツカサ君を墜としたことでいい気になったのか、雄叫びをあげるコンドル・ジオグラフ。見れば、既に手下のミサイルバード共の製造も完了しているようだ。子供にかまっ  
ていられるか!

ミサイルバードだけで手一杯だったボクに追い打ちをかけるとするならば、間違いく  
くフライングインパクトを選ばず。こうなれば力比べにするより他に方法がない。  
あとは、タイミング次第か……ツ!

「マテリアルウェーブごとときで我が戦場たる空に上がってくるなど……不遜にも程があ  
る! 支配される人間はただ、大地から私の姿を仰ぎ、崇拜していればいいのだよ!

それでこそ、民衆の意思は統一されるといふものだ!! 故に、その壁となるであろうキ  
サマはここで果てる! さあ忌まわしき青い男よ、ここで消え去るがいい!」

大層な口上を謳いながら、最大出力でスラスタを吹かしたコンドル・ジオグラフは  
こちら目掛けて突っ込んでくる。やはり『フライングインパクト』。身一つで体当たり  
するだけの技とも言えない技とはいえ、あれほど巨体ならその威力も言わずもなだろ  
う。

ボクは、コイツを真つ向から叩き墜とさないとイケない。……出来るのか?

「そんなこと、村の人は誰も望んじゃいませんよ! ボクだって、彼らに託されて今、こ



寸分の狂いなく、肩に取り付けられたウインググレーザー用の砲塔を切断したベルセルクブレードには、やはり全く抵抗を感じることは出来なかった。

「……………クツ、抜かったか!」

「まだだ!!」

「何?……………ウグアアツ!!」

右の翼を失い、些か出力の落ちたような挙動を見せながら離れていくコンドル・ジオグラフィの背後からヘビーキャノンを発砲し、尾羽の辺りから突き出ている推進機関に命中させる。……………うまく当たってくれて良かった。

誘爆によって周囲のミサイルバードを巻き込んだことで期待値以上の損傷を負ったらしい巨鳥は、重力に抗う術を失いその体をゆっくりと沈めていく。

……………いや、待てよ。確か、この真下には委員長達やツカサ君が……………!

「オーリイツ!」

『イエエイ!コイツはまた、最っ高にスリリングなチャレンジになりそうだ!行くつきやねえ!』

「ちよつと無茶をするけど……………頼むよ、オーリー!」

先程のように、オーパーツから流れ出るエネルギーをオーリーへと回しスカイボードの限界出力を一時的にブーストすることで、スピードだけはスラスタ全開のコンド

ル・ジオグラフの足元程度まで強化することが出来る。

強化とは言っても、半ば以上無理なドーピングに近いたため、事後のメンテナンスは必須事項なのが珠にキズ……と言ったところだろうか。オーリーには申し訳ない気持ちで一杯だよ、ホント。

『……ヒユウ！任せなアツ！』

「おおおおおつ！」

推力全開で落下中のコンドル・ジオグラフを追い越し、遺跡最奥のムーに祈りを捧げる為の祭壇？エリアへと危なげなく着地する。ホントは空中で軌道を逸らしたかったのだけど、剣を振るだけなら兎も角、あの巨体を動かすにはスカイボードじゃあ、足場が悪過ぎたんだよ。

「だから、ここで迎え撃つしかない……！」

「スバル、大丈夫か？」

クソツ！こんなコトならキガクラスカードの一枚でも購入しておくんだつたよ！

あんなお手軽高火力ツール、持っておいて損は無かったハズなのに……今は悔やんでも仕方がないか。

「やるしかないっての……うぐつ！」

「……スバル!？」

何だ？ 突然四肢に力が入らなくなったような……。

もしかしくとも、さっきの全力強化と黒ジェミニに使ったSサンダーボルト・ブレイド V Bでかかった負荷が限界に達したのか！

やっぱりヒカルって、邪魔な行動しかしてねえな……！

「クソツッ！強化解除だ……」

ベルセルクによる強化状態を解除して、通常の素ロツクマンへとフォームアウトする。これで多少は動けるようになる……はずだ。

しかしこれじゃ、あのコンドルデ・ジオカグラフィ鳥を墜とす為の火力がまるで足りないぞ。さながら墜落寸前の旅客機のように制御を失っているので、過剰ダメージによる電波変換の強制解除を狙いたいところだが……

「ボクも協力させてくれないか……？」

途方にくれていたボクに弱々しい声をかけたのは、まさに満身創痍という表現がふさわしいであろう状態の白ジェミニ……ツカサ君だった。片膝をつき、武装化した左腕はだらんと脱力しているように見えるが、その瞳に燃える闘志には些かの衰えも見せていない。いや、それどころか戦闘前よりも燃えている……？

ツカサ君まで戦闘狂というオチはやめていただきたい次第なんだけど。

「ツカサ……ジェミニ・スパーク!? キズは大丈夫なの!？」

「ああ……リカバリーで応急処置は既に済ませているよ。ボクのことはいいんだ。……それより、コンドル・ジオグラフをなんとかしなきゃいけない」

アレ、と言いながらツカサ君が指し示したのは、片翼と尻尾付けのスラスタターから火を吹きながら絶賛制御不能&落下中のコンドル・ジオグラフだ。既にオーパーツによる身体能力のブーストは切っているために表情までうかがえるワケではないけれど、恐らくはパニックにでも陥っているんじゃないだろうか。

何にせよ、迷っている暇はない。聞き流してはいるけれど、炎上したコンドル・ジオグラフに委員長長達のパニックった悲鳴も耳に入ってきている。よく考えなくても普通にトラウマ案件だよ、これ。

「うん、了解。現状の最高火力なら……そうだ！　アレがある！　……よし、これなら……！」

選択可能になっている一枚のバトルカードをセレクトし、すぐさま読み込む<sup>ロードする</sup>。せっかくの新しいチカラなんだ、使わなきゃ損じゃないか！

「オイオイ、何をする気だよ……って、うおおお!？」

読み込んだメガクラスカード『ジェミニ・スパーク』のプログラムにより、一時的にロツクマンの電波体をジェミニ・スパークのそれへとコンバートすることが出来る。

今まで使用したことがなかったのが気が付かなかったが、ジェミニ・スパーク使用中

は完全にボクとロックの意識は分離されるらしい。それはボクの眼前で目を見開いた状態の白ジェミニがたたずんでいることから明らかだった。……って、オイ!

「どうしてボクの方が黒なんだよ!」

普通に考えて、ボクの方が白であつて然るべきだろ!?

「アン? 知らねえよ、そんなこと。どうせランダムで割り振られてンだろ。それより……来るぜ!」

「何か納得いかないんだけど……まあいいか。いくよ、ジェミニ・スパーク!」

「え? あ、うん……」

武装化した腕を密着させることで、各々の腕に宿っている雷のエネルギーを共鳴させ、増幅させる。集約しきれずにロケットナックルから漏れ出た雷撃が弾け、穏やかなナンスカ遺跡の最奥部が俄に危険地帯と化するのがわかる。流石にロックの同類を葬った技だ。非常に高い威力を誇っているのだろう。しかも今回は三人分だ。オリジナルを超えている可能性は十分にある。

……オーバーキルにならないければいいけど。

『ジェミニ・サンダアアアッ!!』

密着するように構えられた三本の腕から放出された膨大な威力を誇る強化版ジェミニ・サンダーが巨鳥の身体の正中線をなぞるように貫き、そのまま彼方へと消えていく。

三人で撃ったジェミニ・サンダーなので、言うならば『トリニティ・サンダー』と言ったところだろうか。嘯ませ犬のガンダムマイスターではないけれど。

「グ……グオオオオオオオオオオツツ!!」

破滅を体現した光線に貫かれたコンドル・ジオグラフは、断末魔の叫びを上げながら徐々にその体を崩壊させていく。無論、電波体となったアガメさんにもこのルールは適応されるため、このまま放っておけば滞りなく人体消失マジック（）が目の前で展開されることになるのだろう。させないけど。

「ほい……っつと」

電波体を崩壊しかけているアガメさんに『リカバリー120』を放って応急処置を施し、重力に引かれて落下してくる老体を優しく抱きとめる。

生身で落下してたからね。仕方ないね。……非常に不本意だが。

これにて一件落着だ。いやあ、コンドル・ジオグラフは強敵でしたね。



ーナンンスカ遺跡2の電波・最奥ー

不本意な形だが横抱きに抱えることになったアガメさんの状態を確認すると、攻撃が直撃したショックなのか気を失っていることに気づく。穏やかな顔だ。……信じられるか？ これ、さつきまで死体寸前だったんだぜ。リカバリーで蘇生したけど。

老人を抱えた全身タイツの少年という絵面もどうかと思ったので、ゆつくりと地面の上に寝かせることにした。

それにしても……改めて見るとアガメさん、めちやくちや鼻長いな。一体どんな骨格をしているんだろう。長い白髭や服装も相まって、まさにカラス天狗といった風貌だ。あやややや。

「……ぬ、ぬう……私は……」

なんてとりとめのない思考を繰り返している内に、仰向けに寝かせていたアガメさんが目を覚ます。ジリジリと照りつく太陽によって天然のフライパンとなった地面に転がしていたからだろうか。

電波体故に気づかなかったとはいえ、とんだ畜生野郎だったな、ボク。

「大丈夫ですか？」

「……ああ。どうやらここまでのようだな……」

弱々しく立ち上がったアガメさんに、先ほどまでの支配者然とした雰囲気はない。

既に懐をまさぐって、所持していた古代のスターキヤリアー内部にコンドルが居ないことは確認済みのため、万に一つも演技はあり得ないだろう。

……縛られている委員長達から妙な視線を感じた時は、無性に死にたくなっただけ。辛い。

「私の夢も幻のままに終わった……所詮、その程度の覚悟だったということか」

観念したアガメさんにも委員長達を拘束している縄の解除を手伝ってもらい、漸くホッと一息ついた頃。遠い目になったアガメさんがふと、そんなことを言った。支配者は神じゃないからね。仕方がないね。

「どうしてナンスカの勢力拡大にこだわるんです？ 貴方をそこまで駆り立てるモノとは一体……」

村を良くしたいという気持ちは本当なんだろうけど、民心を少し蔑ろにし過ぎたんだろうな。保守的な思考になりがちな老人には珍しい。こういうのは普通、若者主導で改

革の動きが進んでいくのだと思っていたのだけだ。

「二ホンなどという、多くの面で恵まれた国で生まれ住むおぬし達にはわかるまいよ。我らナンスカは遙か昔、この地に根ざしてから多くの歴史を紡いできた。その歴史より生まれた伝統の生活様式を守る為、文明の発展が遅いのだ……所謂、発展途上国だと思ってくれていい。近隣の村や町は電波技術の恩恵を受け、飛躍的に都市化していくのに、我らはいつまで経つても追いつけない。寧ろ、差は広がるばかりだ。それが、悔しくて悔しくて仕方なかった……」

両の拳をキツく握りしめ、叶わなかった夢に未練を滲ませているのがわかる。まあ、実際ニホンって恵まれてるしね。サテラポリスの本部もあるから、安全度も段違い……のはずなんだけどなあ。

……今気づいたのだけど、周囲を見渡してもツカサ君の姿をどこにも確認することが出来ない。連絡はとれるから特に問題は無いけど……隠れているのだから、無理に探すこともないだろう。確か、委員長達には顔を出し辛いと言っていたし。

……つと、そのツカサ君からメールが送られてきている。後で確認しておこう。

「それで、都合良く現れたゴン太を支配者に祭り上げて……村の拡大を図ったのね。空から降ってきた人間というのは、ムーへの信仰を利用する上でもおあつらえ向きだったワケ、か。貴方が言うところの、恵まれたニホン出身のワタシ達には耳が痛い話だけど

……それがゴン太を好きにする理由にはならないわよね」

腰に手を当て、すっかりいつもの調子を取り戻した委員長がそうぼやく。どことなく責めるような口調なのは、同情だけで語っているわけでは無いからなのだろう。縄を解いた時も手首の辺りを気にしていたようだったし、もしかしたら何かの拍子に痛めてしまったのかもしれない。

「……………」

「あのさ、むずかしいコトはよくわかんねえけど……別に、今のままでもいいんじゃないかねーの？」

気まづくなった場に響いたゴン太の声に、信じられないと言った様相のアガメさんが反応する。

「オレさ、短い間しかナンスカにはいらなかったけど、すごくいいトコロだと思ったぜ！ 空気はおいしいし、みんなやさしくて親切だったし……何より、この料理はめちゃクチャ美味いんだ！」

「ゴンターガ……いや、ゴン太殿……」

「まあ、<sup>ナンスカ</sup>この料理については認めてあげなくもないわ。あのゴン太が、大好物の牛丼を押しつけて食べに戻ったくらいだから、余程美味しいんでしょね、この骨付きカルビは」

ふんっ、と鼻を鳴らした委員長が呟く。確かに、材料は同じ最高級クラスの牛肉だったはずの牛丼よりも骨付きカルビを取ったということは、調理の仕方が上手かったんだろうな。まあ、バラ肉以外にも牛丼に合う部位はあるので、一概に優劣をつけることは出来ないけどね。霜降りロースなら……いかん、涎が。

「そうだ!! ここの骨付きカルビを名物にして売り出せばいいんだよ!! あの美味さ……きつとみんな、一度食べたらヤミツキだ!! 情報を電波に乗せて世界中に発信すれば、今にそこら中のグルメ達がこぞつてやつて来るだろうぜ!! そうすりゃオレみたいに、みんなナンスカが大好きになる!」  
ナンスカ ここの良さはアンタが一番よく知ってるだろ!?

間違いいえよ!!」

「ゴン太くんにしては珍しく、非常に良いアイディアですね」

興奮して一気にまくし立てるゴン太を、ほう……と関心したようにキザマロが賞賛する。よくよく考えると、キザマロが力仕事の時を除いてゴン太に直球の賛辞を送ることは非常に稀だった記憶があるので、今回は本当に関心しただけらしい。キザマロエ……。

「……そうですね。ナンスカには他にない、ナンスカの良さがあると思います。賑やかな村の人たちの笑顔や、活気ある挨拶を聞いていると、小さな悩み事なんて吹き飛ばしちゃって、自然と明日もまた頑張ろう……そう思えるような気がしてくるんです。……

いい村だと思えますよ、ナンスカは」

「そんな言葉をかけてくれたのは、キミ達が初めてだ……ありがとう。私は、随分と長い夢をみていたようだな。これより先は、ナンスカに暮らす皆の幸せを守るために生きていくことを誓おう……」

自らを優しい目で見つめるボク達を静かに見回したアガメさんは、決意を含んだ声で語る。

……違うんだよ。ナンスカの人達は、貴方にそんな苦勞を負わせたくはないんだ。ただ、ちよつとばかり頼れる村長でいて欲しいだけ……なのだと思う。

「そう重く考えることはないと思います。部族全体のコトなんて、とても一人でまかない切れるモノじゃない。きつとみんな、話せば協力してくれますよ。ナンスカの人達は皆、親切で優しい……だったよね、ゴン太？」

「おうー」

「子供にそこまで言われてしまうと……いやはや、まいった。ではそれも、しつかりと肝に銘じておこう。……さあ、早く村に戻らねばなるまいな。皆が待つている」

そう言ったアガメさんの表情は照りつける太陽の如く、これ以上ない程に晴れ渡っていた。

今、理解した。この人がナンスカの民にとっての、もう一つの太陽なのだろう。我ら

の太陽……何つつて。

ーナンスカの地上絵ー

『あ、村長だ!! みんな、村長だぞ!!』

『よかつた!! 無事だったんだ!!』

『村長、怪我はないですか!?!』

遺跡から出てきたボク達を迎えたのは、心配して村から押し寄せてきたらしい、大勢のナンスカ人達だった。

皆、アガメさんのコトを思って集まったのだろう。こういう部分に、ナンスカ特有の温かさを感じられる。

「みんな……私のコトを、そこまで心配して……ううっ、すまなかつた!! 迷惑をかけてしまったが、私はこの通り、無事だ!! 後ろに控えていただいている方々が、救ってくださったのだ!! みんな、ありがとう!! ナンスカ!!」

『ナンスカ!!』

広大なナンスカの大地に、ナンスカ族全員＋αの合唱が響き渡る。つつい反応してしまう辺り、順調にナンスカ族化が進行しているような気がするのは気のせいだろうか。

「これは……さつきとは別の意味で、中々帰してはもらえなさそうだね」

「オイ、スバル。折角なんだ、例の骨付きカルビとやらを食つていこうぜ！ 今ならアイツら、オレ達が頼めば何だつて用意してくれそうだ」

「人の好意につけ込むようなことは出来ないよ……それに、委員長達が乗り込む予定の飛行機が出発する時間だつて近いんだ。あまり長居は出来ないのさ」

それに、一人残つてナンスカの料理を堪能なんてしたら、あとで委員長達に大目玉を食らつてしまう。それはちよつとゴメンだからね。

というか、電波体のロックは食べられないはずだよね……？

——数十分後・ナンスカ遺跡の電波——

ツカサ君から送られてきたメールには、落ち着いたらナンスカ遺跡の電波入り口まで来て欲しいという旨が書かれていたので、お祭り騒ぎのナンスカから無事に委員長達が空港へと向かったことを確認した後、ボク達は再びこの『ナンスカ遺跡』へと足を踏み入れていた。

「ええつと、待ち合わせ場所はこの辺りで合つてるはず……だよな」

「あんまり遅いからつて、痺れを切らして帰っちゃまったかもしれないねえな」



「うっ……ヒカルのコトもあるし、否定できないかも……」

短気なヒカルのコトだから、無理矢理ツカサ君から身体の主導権を奪ってさつきと帰ってしまった……なんてことも考えられなくはない。さつきは思いつきりぶった斬つちやつたからなあ……。謝っておくべきなんだろうか？ いや、あれはヒカルが100%悪いし……ううむ。

『やあ、スバル君。さつきぶり』

「ッ!？」

ハツとして声のした方へ視線を向けると、そこには白色のタイツ型スーツに身を包んだ電波体『ジエミニ・スパーク（ホワイト）』が申し訳なさそうな表情を浮かべて立っていた。傍らにいつもの黒ジエミニ……ヒカルの姿はない。もしかして、あれから電波変換を解かずにずっと待っていたのか？

「お疲れ様。あの後は大変だったよね。いきなり姿を消して悪いとは思っていたんだけど……」

「ううん、構わないよ。委員長達の手前、顔を出しづらかったんでしょ？」

「ああ、彼らはクラスメイトの中でも親しい方だったから、挨拶しておくべきか迷ったんだけど……まずはスバル君。キミと直にゆっくり話しておきたかったんだ。彼らと違って、スバル君のスターキャリアを經由すれば連絡はとれるからね」

昨日、夜中まで話し込んでいたと言うのにまだ話したりないと申すか。……よかろう！ どうせ二ホンへはスカイウエーブを使えば直ぐだし、委員長達が二ホンに到着するまで時間はそれこそ大量にある。

正直疲労で眠気が始めているけど、他ならぬブラザーの頼みだ。断るわけにはいかないな。

「そつか……なんだか照れくさいな。まあ、いいや。ボクも直接話したいことはたくさんあつたからね」

「へえ……それは楽しみだ」

「そうだなあ……じゃ、まずは古びた倉庫に忍び込んだらいきなりやべーやつに襲われウルフ・フォレストた話でも……」

「あははっ！ それは中々愉快な話だね。実に面白そうだ」

「いやいや、ホント死にかけてんだからね？ それでそのオオカミがFM星人の電波体でさ……」

そんな感じで暫くの間ボク達は、旧交を温めるように話し込んでいた……。

——数十分後——

「……つてワケで、後はミソラちゃんの居場所だけなんだけど、これがまた皆目見当もつていない状況で……」

確かゴン太が情報を持つてくる……という展開だったはず。それまでは、ホントに手がかり無しの状態で探し回らなくちゃいけないんだよね。

「それは……なら、ボクも微力ながら手伝わせてもらおうよ。手伝わると言っても、訪れた地域で話を聞いて回るくらいが関の山だろうけど……」

「いや、それだけでも助かるよ。何せ、これまでゴン太・キザマロ共に国外に飛ばされていたんだ。残るミソラちゃんも国外に飛ばされている可能性は高いからね」

今、ミソラちゃんは何をしているんだろう。もう既にバミューダラピリンズでスタンバって居るのだろうか。テロリストの福利厚生に期待するのはおかしいような気がするけど。

「そうかい……さて、結構時間を取らせちゃったね。今日は色々楽しかったよ、ありがとう」

「ボク達だって、ツカサ君達が手伝ってくれたおかげで助かったんだ。礼を言うべきなのは、ボクの方だよ。……あ、そうだ。折角だし、ブラザーバンドを結び直しておかない？」

「もちろん。こんなボクだけ……これからもよろしく、スバル君」



しみに!! では、早速村をご案内させていただきます」

和気藹々といった様子のカップルに、村長のアガメはご満悦の笑みを浮かべる。

「その前に、ちよつといいですか? 村長さん」

「なんででしょう?」

「さつきからずつと気になってるんだけど……あれは一体何です?」

困惑した様子でカップルが指し示した先には……

「ああ、あれですか……あれは、ゴンターガ様の石像です」

等身大サイズのゴンターガを正確に模した石像が、中央の祭壇に設置されていた。マテリアルウエーブで構成されていないにも関わらず、これほどの精緻さを誇っているのは見事と言うしかない。

その石像版ゴンターガの周りには、当然のように牛井どんぶりを井ごと象つて造られた石像が置かれている。

「へえ……ゴンターガ様つて言うのか。石像まで造つてるんだから、よつぽど凄い人なんですわね」

「ええ……我々ナンスカ族の……心優しき英雄です」

そう語るナンスカ・オサ・アガメの顔は、これ以上ない程に晴れやかだった。

# 第六話 『マキシマム・リジエクシヨン／デイスコード・ラ ビリンズ』

56

——異次元空間内部——

『(ゴン太はボク達の友達だ！<sup>ブラザー</sup> これ以上、傷つけさせるもんか！)』

「くだらない……」

ロックマンとの戦いに敗れ、異次元空間で戦闘によつて負つた刀傷<sup>幻痛</sup>を癒すソロの脳裏に星河スバルの言葉がよぎる。鈍い痛みと共に自らの醜態を反芻したソロは、これ以上ない程眉間に皺をよせ、周期的に襲う鈍痛に耐え凌いでいた。

『(それでも！ ボクが諦める理由にはならない！ 奇跡つてのは！ 信じ、進み続けた人間の上だけに降ってくるモノなんだよ！ 覚えとけ！ この……人間不信野郎ツ！！)』

「くだらない!! 仲間……キズナ……そんなくだらない、唾棄すべき存在に……このオレが、遅れを取ったというのか!! 認めるコトなど……出来るはずがないだろう!!」

『さぞクヤしかろう、ソロ……オマエがモットもニクみ、たちきろうとした「キズナ」のチカラにクツしたのだから、ムリもあるまい』

「!!」

不意に、聞き覚えのある声色で紡がれた言葉が辺りに響く。相変わらず抑揚の殆ど感じられない声質だと言うのに、不思議とソロの耳には一字一句はつきりと入ってくるようだ。

ソロは苛立ちを隠そうともせず、その場で振り返り、怪しげな魔導師を睨み付けることにした。動揺を悟られたくないだけの、エンプティからすればひどくわかりやすい虚勢ではあったが。

「フン、わざわざこんな所までご苦労なことだ。……それでエンプティ、一体何の用だ？」

「オリヒメサマからのオコトバを、ツタえにきたのだ……イマこそ、『孤高の証』をウケイれよ……とな」

ソロの嫌味も柳に風と言わんばかりに取り合うことはなく、マスクと一体化した神官帽に設けられた一對の穴から変わらぬ視線をソロへ向け、君主たるオリヒメからの申しつけを果たすエンプティ。

「いい加減、くどいぞ。オレがオマエ達の仲間ではないというコトは、『優秀な人間』を

自称する貴様の主も重々理解しているはずだ。……手出しは無用だと、何度言えばわかる」

「オマエが、ココロのソコからキズナのソンザイをニクんでいるといいきれぬのなら、ナオのこと『孤高の証』をウケイれるべきだとオモウが……」

何かを惜しむような雰囲気を含んだエンプティーの言葉に、要求を突っぱね続けているソロはその体をピクリと振るわせて反応する。

「……それはどういう意味だ」

『孤高の証』をシヨウするには、オモいセイヤクをジュンシュシツツけなければならなくなるのだ。これをウケイれれば、オマエはキョウダイなチカラをフルえる力わりに……このセカイにノコされた、オマエがテにイれうるすべてのキズナをウシナってしまうコトだろう」

「!!」

「あらゆるキズナをたちきることデにしたチカラをフるい、ロツクマンをクダす……それこそが『ブライ《無頼》』をタイゲンするオマエにフサワしい、キズナのムリヨクさをシヨウメイするテダてとなるのではないか?」

「……」

「ムロン、センコクシヨウチのトオリワレらはオマエにキョウセイすることはない。オ



マエにキズナをスてきるケツダンがクダせないというのなら、このテイアンをケつたとしてもイツコウにカマわないぞ」

「チツ……いいだろう。キサマの言う『孤高の証』とやら、受け入れてやる。元より、捨て去るキズナなど何一つない。……その必要もない。何故なら、オレはキズナのチカラなど決して認めることは無いからだ!!」

「ならばウケトるがいい。『孤高の証』を……!」

ソロの激情を聞き入れたエンプテイーは、導師然としたローブの内部より危うげな輝きを放つ八面体の結晶を取り出す。幾ばくかの時間、掌の上で浮遊し続けていた『孤高の証』は、宿主の決定を祝福するように一瞬光量を増加させた後、ソロの体内へと吸い込まれるように溶け込んでいった。

「……………ぐ……………これ、は……………!! ツ!! ぐああああああ!!」

融合に伴って発生した激痛に、体を仰け反らせて悶え苦しむソロ。いきなり体内に『孤高の証』<sup>異物</sup>が混入したのだから、無理もない話ではあったが。

「アカシとのカンゼンなユウゴウには、イマシバラクのトキがヒツヨウか……………:ではな」

苦痛に悶える姿を一瞥したエンプテイーは、オリヒメより仰せつかった用件を果たすことができた満足感に包まれながら、薄暗い異次元空間を後にした。

——星河家——

「……はあ」

「随分と辛気くさい顔してんな……」

「そりや、ため息もつきたくなるでしょうよ。あれから一週間、方々駆け巡ってはみたものの、結局ミソラちゃんの行方はわからずじまいなんだからさ……」

「オイオイ、アイツにはハーブが憑いてるんだぜ？ その上電波変換も出来るときてる。人間基準で言えば、逃げたゴリラを心配するようなモンじゃねえのか？」

「その発想はなかったよ」

「へへっ、だろ？」

「別に褒めてないよ……」

今の会話をハーブ『さん』に告げ口した場合のロツクに残された寿命を懇切丁寧に説明してあげようと思った矢先、通信電波をキャッチしたらしいスターキャリアーが、甲高い着信音を部屋中に響かせる。プルプルプル……うん、やっぱり酷いな。

「ツと、電話だね。……ブラウズ！」

スターキャリアーに取り付けられた小型のアンテナの先端から、エア・ディスプレイ

を構成する少量のマテリアルウェーブが放出され、極薄の画面を作り出す。薄過ぎて、素手による保持にはあまり向いていないようにも感じるけど。

何はともあれ、無事眼前に展開されたエア・ディスプレイの中央には、酷く興奮した様子のゴン太が映し出されていた。

『ようスバル！ 喜べ！ ろうほう？ だぜ!! あまりの喜びに、さつき牛丼を十杯食っちゃまった!! なんて言うか……ああもう、何がなんだかわからねえ!! あはははは!!』  
なんかやべーやつみたいになつてるんだけど……連日の調査で追い込み過ぎて、何か変な物でも食べてしまったのだろうか？……何て冗談を思い浮かべていられるのは、電話をかけてきた理由が何となく察せられるからなんだろうな。

「……どうしたの?」

『ミソラちゃんだよ!! 遂に手がかりを見つけたんだ!!』

若干引き気味に続きを促すと、徹夜明け……いや、さつきまで牛丼十杯食べていたんだっただ。まあ、兎に角テンションの高い声色で僕らが一週間待ちわびていた朗報を告げた。

「……え? ホント!?!」

『詳しいことは後で話すからよ、兎に角ウチに集合だ!! ダッシュユだぞ?!』

そう言うのと、こちらの返答も待たずに通信を切ってしまった。恐らく、二人にも急ぎ

連絡するつもりなんだろう。

……しかし、一週間か。意外に長かったな。

「やつと手掛かりが……よし、ゴン太の家に急ごう」

「おうよ！ とつとあの世話焼かせなオンナを迎えに行つてやるとしようぜ！」

世話を焼かれているのはロツクの方では……？

——牛島家——

息せき切つて向かつた牛島家ゴン太の家の玄関には、自宅が星河家よりも近かつたからなのか既に委員長・キザマロの靴が綺麗に並んでいた。インターフォンを鳴らしたボクを興奮冷めやらぬ表情（当然、気色満面であつたが）で迎えたゴン太は『早く上がつてくれ！』と鼻息荒く促し、二階に設けられた自室へ続く階段を上つていく。はえーよゴン太。

「今一瞬、アイツの背後にオツクスの幻影が見えたような気がするぜ……」

それ洒落にならないんですけど!?

「流石にこの状況で残留電波の暴走は勘弁して欲しいかな……」

狭い部屋で二人を守りながらあの巨体と戦うとか、無理ゲーもいいところだよ……何て考えている内に、そう多くない階段を上りきつたボク達は、心なしかいつもより熱気の増したゴン太の部屋へ足を踏み入れた。

「……よし、みんなそろつたな！」

ふう、と全員揃つたことを確認し、一息ついたゴン太。

「ゴメン、待たせちゃつたね」

軽く息を切らせながら、待たせてしまったことを謝罪する。一応全力ダツシユで来たけれど、まさか間に合わなかつた……何てことはみんなの表情からして、なかつたようだ。

「ボク達も今来たばかりなんですけど……電話で聞きましたよね!？」

情報収集に精を出しすぎたのか、いつもより若干散らかつた部屋の比較的片付いている場所に座り込んでいたキザマロが、ゴン太に負けず劣らずの興奮っぷりで話しかけてくる。ええい、暑苦しい!

「うん! ミソラちゃんの手がかりが見つかつたつて……」

「ええ! 何しろここ一週間、何の収穫も無かつたもの! 流石はワタシのブラザーつてところかしらね!」

部屋の熱気に当てられたのか、いつもより委員長も上気しているように感じる。いや、手掛かりを見つけ出したブラザー<sup>ゴン太</sup>が誇らしい……といったところか。

「新聞の番組表と穴が空くほどにらめっこした『かい』があつたんだぜ!」

そう言つて胸を張る姿は、まさにゴンターガ……後で牛丼でも捧<sup>捧</sup>げるべきだろうか。

「そっか、ありがとうゴンタ! ところで、肝心の手掛かりっていうのは一体……?」  
ボクの発した疑問には、キザマロが説明してくれる。

「昨日、ゴンタ君が録画した海外のニュースに、それと思わしき情報があったんです」  
そこで一度キザマロは閉口し、ゴン太に続きを促すようなそぶりを見せる。確かに、ここからは発見したゴン太に説明してもらうのが良いだろう。

「オレ達二人とも、あの穴で飛ばされた……いや落とされた、か? ……まあ、どつちでもいいや。兎に角、あの穴が繋がっていた先は、いずれも海外だっただろ? だからさ、キザマロと協力して海外の情報を片っ端から集めてたんだ。そしたら、昨日放送されたニュースで見事にビンゴってわけよ!」

「ううう……寝る間も惜しんで頑張った甲斐がありましたよ!」  
「オレも、苦渋の思いで飯をガマンした努力が報われたぜ!!」

今にも抱き合いそうな程、シンクロした感情の発露を見せる二人。いや、ボクも連日電波世界側から情報を探していたんだけどね。いやあ、くう疲でした。

「おお……二人とも凄いよ! そこまでして探してくれてたなんて……!」  
「へへッ! どうってことないぜ、スバル! なにせオレ達は!!」  
「ミソラちゃんの大ファンなのですから!」

……お、おう。二人とも、反応に困るレベルの熱狂っぷりだ。

「あはは……」

「……アンタ達、もしワタシが音信不通の行方不明になったとしても、同じように必死になつて探してくれるんでしょね？」

そのまま胸でドラミングでもしかねない二人を、背後にブリザードの幻影を背負った委員長がジト目で問いかける。半端ないプレッシャーだ。ぜひ踏んでください。……おっと危なかつた。

「そ、そりやもちろんだぜ!!」

「全身全霊、命がけで探し出す所存ですとも!!」

二人とも、ビビり過ぎなんじゃないか？

「へえ……じゃあスバル君、アナタはどうなのかしら？」

あ、これボクも答えなきゃいけないんだ……って言つても、答えなんて決まつてる。

「……そんなこと、もう絶対にさせないよ。少なくともボクの側では……だけど」

まあ、散り散り不可避なんですけどね！ あ、あれは別に行方不明とかじゃないし？

ノーカン！ノーカン！

「……………」

そんなボクの（内心では）適当な発言を聞いた委員長は、熱気に当てられて上気した頬を隠さずに俯いてしまった。ヤバい、キレさせてしまったか……？ 委員長のリアル

ゴルゴンアイ（目潰し）はもう食らいたくないです、はい。

「ゴ、ゴホン！ そ、それじゃ昨日録画したニュースを見てくれよ」

部屋中に漂う不穏な雰囲気を感じ取ったのか、ゴン太が咳払いをして録画した件のニュースを再生するための準備をし始める。心の友よ！ ピツ！という古典的な音が響かせて表示されたテレビ画面には、海上に不時着したと思わしき飛行機の全体図が映っていた。2200年になっても、機体形状は大きく変化しないのか……それだけ航空力学に即した構造だったということ、納得するしかないということなのかねえ……。

『続きまして、最近世間を賑わせている「奇妙な飛行機事故」についてです。それでは早速いきましよう！ ズー〇アップ！』

「……飛行機事故？」

白金ルナ（激状態）から何とか白金ルナ（怒り）にまで抑えたと思わしき委員長が、飛行機事故というニュースに対して特大の疑問符を浮かべているのを横目に、録画された映像はそんなこと知らんとばかりに進んでいく。

『その飛行機事故には不気味なことに、同じ場所、同じ状況で発生しているのです……恐ろしいですね。昨日もあわや墜落という大事故が発生しました。危なかったですね。では、問題の飛行機を操縦していたパイロットに、事故当時の話を伺ってみました。そ



れでは行ってみましょう、ズームアップ!」

飛行機の全体図が写されていた映像が、中年のおじさんを中央に写した構図に切り替わる。件のパイロットらしいおじさんは、当時のコトを思い出したのか所々つつかえながら説明を開始した。

『ええ、昨日も、いつも通り順調な空の旅でした。ところが、ですね……ええ、その場所に入った途端、機械類が完全に狂ってしまつて……ええ、もう滅茶苦茶でした。そのままでは当然、墜落は避けられなかつたと思います。何とか不時着したので、怪我人も無く済みましたが……』

不安を煽るようなBGMが流れ、誰かが唾を飲む音が部屋に響く。……唾を飲んだのはボクだった。

「さあ、ここからなんだぜ! しつかり聞いてろよ!」

ゴン太の言葉に、キザマロもコクコクと強く肯定する。

『ええ、その時……機械が狂い出す直前……見えたんです……ピンク色の服を着た女の子が、空に浮いているのを!! ええ、嘘じゃありませんとも! 間違いなく、この目で見ただ!! 上空に浮かぶ、プリティなピンクガールを!!』

テレビには、ピンク色の女の子を目撃したと熱心に訴えるいい年したおじさんが写っていた。

危ない絵面だな……。

『コイツ……やたら「ええ」が多い喋り方だったな』  
スルー安定で。

「ピンクの服を着た女の子か……」

間違いない、ミソラちゃんだろう。やっぱり、敵対することになるんだろうな。……  
はあ。

「な？ ミソラちゃんだと思っただろ!？」

「まあ、その可能性は高いわね……」

ミソラちゃんの特徴を脳内に羅列したらしい委員長が、納得といった表情で肯定の意見を示す。とは言え、状況が状況だけにパイロットのおじさんが見たモノが幻覚ではないとも言い切れない、といったところかな。

「ピンクであること、そしてプリティであること……どちらもミソラちゃんに一致します!」

間違っではない、間違っではないんだけど……どうにも釈然としない判断方法だ。

「昨日の事故で飛行機が不時着したのはドンブラー湖って話だぜ」

「なるほど……今行けば、そのパイロットさんからもっと詳細な話が聞けるかもしれな

「いつてわけね」

「じゃ、ボクが行ってくるよ。電波体ならひとつ飛びだし、話を聞いただけなら一人でもこ  
と足りるだろうからね」

「ついでに電波人間の一人ぐらいと戦っても、問題ないだろう。何だか楽しみになって  
きたな。」

「そう……わかったわ。でもいくらアナタがロックマン様になれるとしても、一人で行  
くのなら、安全面でどうしても不安が残るのよ。だから、しっかり準備をしてから出発  
なさい。……いいわね?」

「相手との相性的に、炎属性のバトルカードを中心としたフォルダを組んでおくべきか  
な……つて、多分そういうことじゃないんだろうな。」

「了解。……でもちよつと心配性過ぎない?」

「……うるさいわね! ほら、さっさと行きなさいよ!」

激昂した委員長を背に、ボク達はゴン太の家を後にした。

さて、さっさと出発しますか!

ーオリヒメ陣営・アジトー

松明を模した意思を持たないマテリアルウエーブによって照らされたアジトでは、エンプティーが傳きオリヒメへ報告を行っていた。

「ハイドが得た情報によるならば……ムーは、ナンスカより東方に眠っておるらしいのう？」

「そのケンにカンしましては、レイの『新入り』がゲンザイチヨウサチュウです。イマシバラクオマチただければ、セイカクなシヨザイもアキラかとなるでしょう」

「ほう……新入りと言え、確かそなたが連れてきたあの少女のことであつたな。純粋な年頃故、我らに恭順を誓わせるのはほぼ不可能だと思つていたが……大人しくこちらに従つておるとはの。フフフ……どのような手管を用いたのだ？ エンプティーよ」

御簾の裏から、どことなくからかうような口調でオリヒメは問いかける。現在、アジトにエンプティーとオリヒメを除く人影は存在しない。であるからか、オリヒメの雰囲気も、いつもより穏やかに感じられる。

「テクダなどと……そう、タイソウなマネはしておりませぬ。あのシヨウジヨは『純粹』

でとても『友達思い』だったのです。しかし……イマだオサナく、そしてシヤもセマかった。そこにつけこむスキをミイダしたのです。カノジヨは、ジシンにフリかかるとはタえられなくても、ジシンの『世界』をコウセイするモノにキガイをアタえられることはタえられなかった……ゴアンシンください、オリヒメサマ。あのシヨウジヨは、ケツしてワレらをウラギリません。ウラギリというセンタクシなど……ゼツタイにエラベぬのです」

そう言い切ったエンブテイーの導師服からは、轟雷の如き黄金のオーラが溢れ出していた。

ーードンブラー村ー

スカイウエーブを使ってドンブラー村へと降り立ったボク達は、電波変換を解いた直後から、村を包む物々しい雰囲気を感じていた。……当然か。自分達の生活圏に、いきなり飛行機が不時着してきたのだから。気にしない方がおかしい。

「……ゴン太の話では、飛行機が不時着したのはドンブラー湖だったんだよね」

『ああ、早速そのパイロットに聞き込みを始めようぜ。恐らく、まだこの村のどこかにいるはずだ』

確か……展望台方面ではなかったはず。村の中心であるこのあたりで見かけられな

いということは……多分、入り江の方だろう。

「うんー」

ードツシーの入り江ー

幸いにして、件のパイロットと思わしきおじさんは直ぐに発見することが出来た。人の無い入り江に来ているということは、もしかしなくても村の人に信じてもらえなかったのだろう。いや、信じる方が少数派だろうけど。

「あの……すみません」

「ん？　なんででしょう？」

翻訳機によって翻訳された、機械音に近い挨拶は何とか通じたようで、パイロットのおじさん……パーソナルビューより、キリモミー・ツイラークさんは会話に応じてくれる。

ナンスカみたいな特殊な風習がある国の出身でなくて助かった……。しかし、イケツラさん並のインパクトを持った名前だ。前世がジョセフ・ジョースターだったりするんだらうか？

「ええと……不時着した飛行機のパイロットって、おじさんのことであってますか？」

正直、パイロットには聞きづらい質問だ。不時着事故を起こしたのはアナタですか

? って聞いているようなものだからね。

「ええ……そうです。飛行機を不時着させてしまったのはこの私です……全く、ふがいない限りです」

やはり、相当堪えているようだ。

「ピンクのプリティガールを見たって、ニュースで聞いたんですけど……」

「ええ！ そうなんです！ ええ！ 確かに！ ピンクのプリティガールでした！ しかし、不時着時の一部始終を記録したブラックボックスが湖に落ちてしましまして……」

ブラックボックスって聞くと、トランザム！ を思い浮かべてしまうのは何故だろうか。

「では、そのブラックボックスを回収することが出来れば、当時の記録を写すことが出来るんですね？」

「ええ、そんなんですが……これが中々見つからないのです。無人のマテリアルウェーブを使って捜索しているんですが、何分、湖の底にボチャンですので……」

「そうですか……わかりました！ 情報、感謝します！」

「ええ……こんなことで良ければいくらでも喋りますよ。……では！」

そう言って、キリモミーさんは入り江の奥へと歩き去ってしまった。恐らく、潜水艇

でもマテリアライズして搜索を続けるのだろう。

「……よし、それじゃあ湖の底まで行ってみようか!」

ブラックボックスの場所は……確かついぞにブラキオ・ウエーブEXとバトルしていたような気がするので、恐らくエリア2のどこか……だと思う。

『今度は青い服を着た男を見かけた……とか言い出すかもしれないねえな。クククッ!』

ロツクエ……

ーロードンブラー村ー

目的地の展望台は、一度村の中央を通らなければいけない立地になっているため、ボク達は未だ舗装されてもいない通りを急ぎ足で横切っていく。

しかし考えてみると、デマキューのブラキオ・ウエーブは湖上で戦闘することが出来たけど、残留電波にそれを求めても無駄っぽい気がしてきたぞ。これはもしかして、戦闘を避けてブラックボックスの回収だけに目的を絞った方がいいのかもしれない。

思考の海に沈みながら展望台に向かってしていると、不意に聞き慣れた日本語が耳に入り込んでくる。

「ハイサイ!」

「ッ!」



唐突且つ結構な声量だったので、少々面食らってしまった。慌てて声が聞こえた方向へ振り向くと、日焼けで浅黒くなった肌に、快活そうな表情を浮かべた同年代くらいの少年が手をブンブン振っている姿が目に入った。

はいさい……ハイサイか。確か、沖繩辺りの方言だったはず。意味は……『ナンスカ』と殆ど相違ない。普通に挨拶を意味していたはずだ。

「ハ、ハイサイ……？」

多少つつかえつつも返事をする、額に藤紫色のバンダナを巻き、使い込んでいると思わしき浅緑の道着に身を包んだ少年……八木ケン太はニツコリ笑って近寄ってくる。

「ボクは八木ケン太！世界中を回って、修行の旅をしているのサー！キミ、でーじ強力なチカラを感じたのサー！」

「へえ……」

凄く無邪気そうな見た目ののに、凄く中二病だ……何て冗談はさておき、ボクはこの少年を知っている。

八木ケン太。山羊座のFM星人であるゴートと電波変換することで、ゴート・カンフーという近接戦主体の電波人間になることが出来る。出来れば会っておきたいと思っていた人物だ。

「それでキミ、もしかして電波変換ができるサー？」

『「オイ、スバル！ どうやらコイツも電波変換が出来るらしいぞ。かなり希薄だが、確かにコイツからはFM星人の気配を感じる……武闘家ってヤツか？」』

電波体が気配遮断する必要、あるんですかね……？

「（なら、隠し立てする必要はないね）……うん、そうだよ。でもよくわかったね」

「実はボクも、電波変換することで『ゴート・カンフー』になれるサー！ それで見慣れない電波を近くに感じたから、試しに声をかけてみたのサー！」

にっこにこしながら嬉しそうに語る姿を見ると、何だか眩しいものを感じるような気がするの、恐らく気のせいなんだろう。兎に角、この八木ケン太君に害意は感じない。それだけで十分だ。

「そっか……ボクの場合、電波変換することで『ロックマン』になれるんだ。ゴート・カンフーか……聞いたことはないけど、修行って言うからには、悪いことはしてないんでしょ？」

「ボク達は人に迷惑はかけないよ！ ……って、それよりロックマン!? あのアンドロメダを倒した!? あがー!!」

『ククツ、オレ達も有名になったもんだよな』

ビジュライザーをかけていないのはつきりとはわからないが、恐らく得意げに胸を張っているはずだ。

というか、アンドロメダの情報漏れすぎじゃない？

「こういう人に知られるのは大歓迎なんだけどね……」

面倒な人や電波体にばかり知れ渡っているような気がしていたからね。仕方ない。ただ、暴蒼ヒナの方は知られていなかったようなので、そちらは僥倖だった。

「ボクのこととはケン太って呼んでくれサー！ 暫くはドツシーの入り江で修行してるから、よかつたら手合わせをお願いしたいんだ！ 気が向いたら、いつでもめんそーれサー！」

「了解！ それじゃ、ボクことはスバルって呼んでね。後で何うと思うから、その時はよろしくお願いするよ。オツケーかな？」

「あたいめー！ 何か用事があるなら、そっちもちばりよーサー！ んじちゃーびらー！」  
そう言つて、腕をブンブン振りながらケン太君は入り江の方へ走り去つていつてしまった。

何て言うか、色々まつすぐな人だったな……。

「さて、それじゃ改めて展望台に向かおうか」

『おう！ つて、オイ……あそこにいるのは……』

ロツクの声に従い、展望台に繋がる橋をよく見てみると、特徴的な男性がたたずんでいるのがわかる。背中にX字が描かれたコートに妙な形をしたヘッドセット。間違い

ない、五陽田さんだ。

「こんにちは、五陽田さん」

「ん……？ おお、スバル君じゃないか」

考え事の最中だったようで、ボクが挨拶をするまでこちらの存在には気付いていなかったらしい。サテラポリスも大変なんだなあ……。

「ドンブラー村に来てるってことは、やっぱり例の飛行機事故の調査なんですか？」

「ああ、そうなんだ……奇妙な飛行機事故の報告が続いていてね。これらの事故はどういうわけか、いつも同じ場所、同じ状況で発生しているらしい。……ここ最近、UMA騒動や怪奇現象が頻発しているだろう？ この状況は、はつきり言って異常だ。本官はこれらの騒動の裏に……何者かのよからぬ陰謀を感じるのだ」

凄い。五陽田さん、あなた探偵になれますよ。いや、既に警察関係者だったか。

「……………」

「おっと、これはすまない。確証も無しに、物騒なことを口走ってしまったな。本官の思い過ごしであってほしいのだが……」

「いえ、調査頑張ってくださいね。では」

「ああ、誤って展望台から落ちないよう気をつけるんだよ。湖に墜落するのは、飛行機だけで十分だからな」

「フン……とヘッドセットの位置を直しながら、少々照れくさそうに五陽田さんはそう言った。五陽田さんらしくもない。何だか調子が狂ってしまいそうだ。」

「あはは……気をつけます」

つい苦笑を漏らしてしまった口を抑えながら、ボク達は再び展望台へと歩き出した。

ードンブラー湖2ー

スーパーメカニックである天地さんの手によつて完全復活を遂げた潜水マシンの『ブクボン』に掴まり、ボク達はドンブラー湖の湖底を突き進んでいた。

しかし、何というか……

「前に来たときよりも……若干水質が悪い？」

「そりゃ、あんだだけ馬鹿でかい飛行機が不時着したんだ。パーツやら漏れ出したオイルやらで多少汚れるのは仕方の無いことだと思っぜ」

「じゃあ、暫くは湖で捕れた魚介類なんかも食べられなくなっちゃうのかな……」

そうなつたら、結構ここの人達の暮らしに響きそうなものだけ……ううむ、電波人間として出来ることがないってのが逆にもどかしいな。

「とりあえず、今はオレ達の目的を果たすことを優先しようぜ。出来ねえことを嘆いても、仕方が無いからな」

「うん、わかってるよ……あ！ アレじゃない!？」

エリア2の端、なにやら非常に手の込んだ燭台の側にそれらしきものを発見。近づいてみると、やはりブラックボックスだった。水中でも破損しているような部分は見受けられない。最近のブラックボックスは丈夫に出来ているらしいね。良かった。

「……よし、これで回収完了。さあ、キリモミーさんの所に戻ろう」

「大事な手掛かりだから……落とすなよ?」

からかうようなトーンで、ロックが注意する。ボクは子供か! いや、子供だけど。

「わかってるってば!」

信用ないなあ……

ーードツシーの入り江ー

「キリモミーさん! 持ってきましたよ、ブラックボックス!」

軽く一区切りついたのか、幸運にも先程と同じ場所にキリモミーさんの姿はあった。やはり成果はなかったらしく、声かけるまでは酷く落ち着かない様子でスターキャリアーを弄っていた。

「……ああつ!! それはまさしく『ブラックボックス』!」

さつきまでの顔が嘘のように破顔し、諸手を上げて手渡したブラックボックスを受け

取る。

そのままキスでもしそうな勢いだ。それだけ必死だったということか。

「それじゃ、映像の再生をお願いします」

「これがあれば、私の証言が正しいことがわかるはずです。……ああつー」

映写機が無いんですねわかります。

「し、しまった……私、データを再生するための『映写機』をもっていないんです。……

どこかから調達出来ないのですかね？ 映写機……」

『（今度は映写機かよ……まあいい。とつと探すぜ）』

「確か……ニュース放送用の大型者があったよね。なら恐らく、カメラマンの類いもいるはず」

『（よし、ならその辺りから探ってみようぜ！）』

「（了解！）じゃあ、映写機探してきますね！」

「え？ あ、わかりました。では一応、こちらでもあたってみますね」

パイロットの伝手なら何とかかなりそうだけど、それじゃ時間がかかりすぎる。

「そつちも頑張ってくださいね！ ……では！」

件のカメラマンは、確かドンブラー村の入口あたりにいたはずだ。急がないと。

ーードンブラー村ー

この村で最新機材を積んだ放送車となれば、発見するのはそう難しいことではない。ある程度暇そうにしているカメラマンを見つけられたことは、幸運だったと言えるけど。

「あの……すいません、映写機とかもっていたりしませんか？」

「ん？ 映写機？ 持つてるよ。仕事で時々使うことがあるんだ。ボクはテレビ局のスタッフだからね。それに、マテリアルウエーブだから持ち運びにも苦労しないんだ」

ああ、そういえば映写機はマテリアルウエーブなんだっけか。最新技術で出来てるのだから、きつと高いんだろうなあ……。

「言いにくいんですけど……それ、ちよつと貸してもらおうことつて出来ませんか？」

「……うーん、でもまあキミ、キザマロ君のブラザーなんだよね……」

キザマロ？ ああ、そうか。キザマロが言ってた、ナンスカに人が落ちてきたという情報を流してくれた人なんだ。

何やかんやで、この人がいなかったらゴン太が手遅れになっていた可能性もあるんだよね……ありがたやありがたや。

「キザマロ……？ もしかして、キザマロが言っていた、親しくなったスタッフの人って……」



「ああ、ボクのことさ」

「そうだったんですか！ ……そうだ。一週間前にいただいたナンスカの情報、凄く助かりました！」

「いいよいいよ、ボクが好きで教えたんだからさ。……で、そうそう……映写機だったね。……はい、これでキミのスターキャリアーに転送したよ。大事に使ってね」

うーん、湖に沈んだブラックボックスのデータを再生するんだけど、それは大丈夫なのだろうか……？

まあ、ゲームじゃ問題無かったはずだし、心配はいらないよね。フラグでは無い……はず。

「ありがとうございます！ ……では！」

さて、早くキリモミーさんの所に戻らないと。

ードツシーの入り江ー

無事に映写機を確保したボク達が入り江に戻ると、ちようど暗い顔をしたキリモミーさんがスターキャリアーにエア・デイスプレイを収納する所だった。あの表情からしても、どうやら吉報は期待出来なさそうだ。

「……はあ、やはりそう都合良くはいかないか……ああ、キミですか。どうでした？ 私の方はお察しの通りですが……」

まあ、子供に期待する方が普通じゃないよね。

そんなアナタにこの映写機！

「持つてきましたよ、映写機」

ほら……と、所持マテリアルウェーブ一覧に映った映写機を見せる。

「え？ ……あああつ！ それは正しく映写機ですよ！ しかも最新鋭のマテリアルウェーブ製とは……いえ、どうでもいいことでしたね。し、しかし……これでついに私の証言が認められる！ で、では早くマテリアライズしてもらっていいですか!？」

証言を受け入れられなかったことが余程堪えたのか、かなり食い気味にマテリアライ

ズを迫られる。

「ええ、もちろんです。じゃあいきますよ……マテリアライズ！ 映写機！」

スターキヤリアーが発光し、マテリアルウェーブを放射する準備に入る。今回は映写機……それも割と最新機種らしく、その精密さからか、いつもより形成に時間がかかっているようだ。……よし、マテリアライズ完了。

『再生？ 早送り？ それとも巻き戻しちゃう？ いずれもお任せあれ！』

フィルムノーズという名前らしく、その見た目はまさにフィルム上映の映写機と言ったところだ。

『ハイ、どうもく!! ワタシ、映写機なんですけれどもね!! 本日はですね、ここ、ドンブラー湖に不時着した飛行機が異常を起こす直前に記録した、謎の映像を映してみたいと思います!!』

やけにテンション高いなあ……個性差？

「これで漸く私の証言が証明されますね……ええ」

期待に満ちたキリモミーさんが、ゴクリと唾を飲み込む音が聞こえる。

どこまで詳細に写るかはわからないけど、出来れば元気な姿で写っていてほしいところだ。これで顔に限でも出来ていたら、向こうの陣営に乗り込むまであるかもしれない。

『それではVTR……スター……トツ!!』

フィルノーズの口にあたる円筒形の部分から、エア・ディスプレイの画面が映し出される。映写機の名は伊達ではないようで、その画面はスターキャリアーで呼び出したモノより幾分か大きいようだ。

『ザザーツ……』

しかし、長く湖底で水に浸かりすぎたのか、表示された画面には酷いノイズが走り、まともに見れたものではなくなっている。機械音の一つも聞こえやしない。

「……何も映らないですね」

「あのときは殆どの機械がいかれてたからなあ……カメラも例外ではなかったのかも……」

こめかみを押しながら、当時の様子を思い出したのかキリモミーさんは、呻くようにポツリと呟く。声色はお世辞にも良いとは言えない。証拠が絶望的なのだから、それも当然か。

ノイズによって乱れた映像が暫く続き、このまま何の手掛かりも無しか……とキリモミーさんがため息をついた瞬間、映像が一瞬だけクリアに映し出される。

クリアな映像はご丁寧にズームアップされ、ピンク色の服を纏った金髪の女の子……つまりハーブ・ノートの姿がはつきりと映っていた。

『はい、おしまい!!』

『(おいおい、今のは……!-)』

側で動揺して若干の震えを含んだロックの声が聞こえるが、ボクの心はとりあえず落ち着いていた。

映像を見る限り、酷い攻撃を受けた形跡はない。

予想通り、脅迫によって協力させられているようだ。これなら、何とか説得できるだろう。なんとなくだけでも、ゲームのミソラちゃんとは言動の傾向に差があるようだから少し気がかりだったんだ。

「うん……間違いはないよ」

「ん? 何が間違いないんだい?」

「あ、いえ……何でもないんです。(今のはやっぱり……)」

『(ああ、間違いねえ。あれはハープ・ノートに電波変換したミソラだぜ)』

「あくあ……あんな一瞬の映像では証拠にはなりそうもないなあ……残念です、ええ……」

意気消沈した様子のキリモミーさんが、ぼやく。

……つと、聞いておかなきゃならないことがあったんだった。

「あの、すいません。聞きたいことがあるんですけど……」

「ああ、なんだい？」

「今の映像つて、どこで録れたものなんですか？」

「それは……ええと、『バミューダラビリンズ』で録れた映像だね、ええ」

よし、これでバミューダラビリンズに向かう理由が出来た。あそこは普段セキュリティがかかっているから、ちゃんとした理由がないとロックもい顔をしないうらう。

忘れてはいけない。ボク達は、二人揃ってこそ戦うことが出来るのだということ。

「バミューダラビリンズ、か……」

「ナンスカの東の方にある地域だよ。そこを飛行機が通ると、必ず機械が狂い出してしまうんだ、ええ」

なら、どうしてそこを通ったんですかねえ……まあ、なにがしかの事情があったのだと納得しておくことにする。

「(ナンスカの東なら、スカイウエーブで行けるはずだよ。確か、セキュリティがかかっていたと思うんだけど……)」

『(そんなモン、あの女が入り込んでいるなら、とつくの昔に使い物にならなくなつてたろうぜ！)』

ロックにとつてハープ・ノートとは破壊神か何かなのか……？

いや、推測は間違っていないんだけどね。

……では、ミソラちゃんに罵倒されにいくとしますか。

……あつ。

「そういえば、ケン太君に後で入り江に伺うって言ってたんだ……」

色々あつたから、すっかり忘れてたよ……

でもゴート・カンフーとの戦闘経験は、この先のブライ戦でもきつと役に立つはずだ。どちらも型に沿って流れるように動くスタイルのファイターだから、こちらとしても良い勉強になると思うんだよね。

『（仕方のないヤツだな……だが、今から爪が疼いてきたぜ……クククツ！）』

まあ、その爪が役に立つことはないのだけれど。

ただ、ロックオンの精度に関してはロックの調子に左右される傾向があるので、高揚しているに越したことはない、と思う。

「……あつ、その前にカメラマンさんに映写機を返しにいかなきや……」  
借りパク良くない。

ーードツシーの入り江の電波ーー

……というワケで、バミューダラピリンスに向かうより先にゴート・カンフーと戦う

という先約を果たすために入り江奥地まで来たボク達。当然、電波人間の姿だ。

「おお……やってるやってる」

『ハッ！ テアッ！ セイツ！』

奥地に浮かぶ離れ小島まで来ると、先程言っていた通り、修行に汗を流す山羊をモチーフとした電波体の姿を見つけたことが出来た。どうやら先方は余程集中しているらしく、近づいても演舞と見紛うその動きを止める気配はない。声をかけるべきだろう。

「ハイサイ！」

沖縄式（シーサーアイランド式？）の挨拶で呼びかけると、一対のねじれた角を生やし、濃いめの蒼とライムグリーンに彩られた道着を纏う電波体……ゴート・カンフーはその白い体毛に覆われた体をピクリと震わせ、パツとこちらに振り返る。その表情は、無邪気さと強者との戦いを待ち望む求道者のソレだった。

「……ッ!? あ、スバル！ いや、ロックマン?」

申し訳ないが、リアル割れはNGの方向でお願いします。

「あはは……じゃ、ロックマンの方でよろしく」

「しむん、サー！ ではロックマン……いぎ、尋常に手合わせ願う！」

そう宣言すると同時に、ゴート・カンフーは山羊の蹄となった両手を構えて距離を取



る。自分が近接系のインファイターだと自覚しているが故に、公平性を考慮しての行動だろう。

ちなみに、今のボクはドライブ・オンすらしていない素のロックマンだ。ゴート・カンフーは木属性。ベルセルクの雷属性では相性がよろしくない。動きを見切ってもいない内からそんなリスクを負うこともないだろう。

「もちろん！」

「では、いくサー！」

「ウエーブバトル……ライドオン！」

◇◇◇

対面にて構えたゴート・カンフーを観察する。今回は特に地球の命運がかかっていると、勝たなきゃ死ぬ……何てバトルではないので、幾分か心に余裕がある。

……相手の動きに対応出来るように、暫くは様子見で……

「メエツ！」

「ツ!？」

「速えツ！」

何て考えていた時期が、ボクにもありました。視界中央で構えていたはずの山羊人間の姿は一瞬で消え去り、固い蹄が勢いよく大地を蹴る音が左側方で響く。

……そうだ、オーパーツによる動体視力の強化を切っていたんだ。オウ、シット！

流れるような動作で大地を踏みしめたゴート・カンフーが既に打ち出しかけていた掌底（蹄？）に対し、ボクはシールドを展開することで正面から受け止めようと試みる。ガードを貫く威力は無かった……はず。

「……ウグッ！……身軽なのに、攻撃自体はかなりの重さだ！」

何とか間に合ったシールドと、余すことなく重心を乗せた掌底が正面からぶち当たる！火花を散らしながら、不安定な体制で攻撃を受けたボクははじき飛ばされる結果に終わる。

これが威力の乗せ方を知った電波人間の一撃か……思ったより、結構やるぞ。

「メエツ!! まだまだここからサツ！ ロックマン!!」

再び堂に入った構えを見せ、不敵に笑うゴート・カンフー。その顔は、純粹に闘争を楽しんでいるといっていい。

ロックとはまた違った戦闘狂の気質を持っているようだ。

「オイスバル！ コイツ、結構なやり手だぜ！ 氣イ引き締めるよ！」

「わかってる！ でも、どうすれば……」

まず、キャンノン何かの砲撃系は駄目だ。あんなモノ、見てから回避余裕でした、に決まってる。

現状の身体能力では、隙の<sup>大振りの</sup>大きなソード系も当てるのは難しい……と、なれば。

「いや、そんなの決まってる……！」

身体能力<sup>レベル</sup>を<sup>上げて</sup>強化して、<sup>物理で殴る！</sup>対応する！

「トライブ・オンツ！ ……ベルセルクツ!!」

突如として電波製の雷雲が頭上に発声し、稲光が戦場を包み込む。背負った大剣を振り払い、硬直しかけた空気を一刀の下に斬り捨てる。

もう、出し惜しみなんてしている場合じゃない。こつちも腹をくくるべきだ。

「それがそつちの奥の手かツ！ なら……ボクも全力で打ち倒してみせる、サー！」

更に好戦的な笑みを浮かべ、全身から発せられる圧力が一層の強まりを見せる。

……まだ、上があるのか！

「上等ツ!!」

「いくぜスバル！」

「ああッ！ ……おおおッ!!」

先手必勝とばかりに強化された脚力にモノを言わせ、ゴート・カンフーの正面に躍り

出る。今の動体視力と腕力なら、向こうの動きに合わせて叩き斬ることが出来るはずだ。

「せえいッ！」

右手に挿んだ大剣を、そのまま袈裟に斬りかかる。見たところ、大質量の大剣を正面から防げる装備を所持してはいないので、このまま斬り捨て御免になることだろう。少々、あつけなさ過ぎるくらいはあるが。

「ッ!! ……メエエエッ!!」

一瞬で圧倒的暴力の脅威に晒されたゴート・カンフーは、限界までその眼を見開き、超高速で足下に広がる草花から大自然のエネルギーを吸い上げる。

眼前に迫る大剣の煌めきとはまた趣の異なる、圧倒的な生命の息吹を感じ取った山羊座の電波人間は、通常は肉体の一次的巨大化に用いるエネルギーを左腕が吹き飛ばす程の勢いで噴出させ、神速の正拳突きを撃ち放つ。

超人的なまでに強化された動体視力でさえ完全に消失したと錯覚する程のスピードで放たれた突きは、高出力で保たれた刀身の中程に直撃し、ボクの右手からはじき飛ばしてしまった。

「嘘ッ!?! う、るあアッ!!」

「あぎじやびよーッ!! 目がッ！」

弾かれた反動を利用し、左足に『ホタルゲリー』を展開しつつ三連の蹴りを放つ。体制の關係上、体重の乗ったキックとはいかなかったが、追加効果の盲目付与の方はしっかり効果を發揮したらしい。

助走距離を確保すべく、バックステップで距離を取る。山羊頭の電波人間が未だ盲目の呪縛から解き放たれていないことを確認し、両腕に燃えさかる『ヒートアツパー』を展開。両の拳を胸の前で勢いよく弾かせ、限界まで引き引き絞る。これでチエックメイトだ。

「おおおおおおッ!!!」

爆速で踏み込んだ大地が抉れたことを足先から伝わる感触で理解するが、意にも介さず直進を続ける。

周囲の景色は引き延ばされるが、目標到達点たるゴート・カンフーだけははつきりとも目で追うことが出来そうだ。

「メエエエエエッ!!!」

盲目であるハズのゴート・カンフーは、突如として天を突かんばかりの雄叫びを上げ、両の掌底を後方に引き絞りつつ、突進を開始する。奇しくも、鏡合わせの体制となつてしまったようだ。

だけど、当てづっぽうの攻撃が当たるとも思えない。ここは冷静に軌道を見切りつ

つ、掌底の下方からガラ空きになったボディにぶち込めばK・O・だ。

「(……いやッ、これは……見えている!?)」

が、しかし、実際に繰り出された正拳突きは、想定よりもかなり低かった。

いまから側面に回って回避することは確実に不可能。なら……ッ!!

「押し切るッ!」

「メエエエッ!!」

豪炎を纏った鉄拳と黒曜石の如き輝きを放つ蹄が正面から衝突し、ド派手な火花を散らす。

僅かな拮抗の後、両腕を振り切った格好でその場に立ち尽くしていたのは……ボク達だった。

◇◇◇

「あがー……ロックマン、流石にでーじ強いサー!」

草むらに体を任せるように仰向けで寝転んだゴート・カンフーが、爽やかな笑顔と共にそう言い切った。

敗北したと言うのに、それを引きずっている様子は微塵もない。やっぱり、いい人な

んだらう。

「オメーも結構やるじゃねえか！ 中々楽しませてもらったぜ！」

「なら、また修行の手伝い、お願いするサー！」

「おう！」

何故かロツクの方が親し気な件について。おかしいなあ……

「ボクも結構勉強になったよ。こつちからお願いたいくらい」

「そう言ってくれと、ボクもでーじ嬉しいサー！」

にこやかに笑いつつ感謝を述べるゴート・カンファーに別れを告げ、ボク達は漸く空に浮かぶ電波の迷宮、バミューダラピリンスへと歩を進めることとなった。

ーナンスカのスカイウエーブー

以前ナンスカへ来るときにあちこち探しかけたおかげで、バミューダラビリンスに通じるワープホールのおおぎっぱな位置は既に把握している。そのため、件のセキュリティゲートまでたどり着くことはそう難しいことではなかった。

「この先バミューダラビリンス！ 危険なので絶対通れません！ ……だつてさ」

バミューダラビリンスへの道を塞ぐセキュリティゲートを指差して、肩を竦める。ただ、そのセキュリティゲートは素人のボクから見てもボロボロで、お世辞にも通行を制限出来ているとは思えなかった。

「フン、そんなモノ既に無力化されてるみてえだが……」

「……やつたのはミソラちゃんかな？」

「だろうぜ。……つたく、何が乙女だつての！ やり方はオックスと大して変わらねえじゃねえか」

聞かれたら洒落にならないですよ、ロックさん……

「まあまあ……でもさ、取りあえず先に進む為にはセキュリティゲートをどうにかしな



くちやいけないよ」

「ケツ……ああ、わかってる。だが、これなら何とかかなりそうだぜ……オラアツ！ ……よし、一丁上がりだぜ！」

威力を底上げしたチャージロックバスターを直撃させると、崩壊寸前だったゲートは小規模な爆発エフェクトを発生させながら儂くも崩れ去ってしまった。やったぜ。

「よし、それじゃあ奥に進もうか！ ミソラちゃんが待つてるかもしれない……！」  
意を決して、バミューダラピリンスへ転移するためのワープホールに身を投じる。  
怪我とかしてないといいんだけど……。

ーバミューダラピリンスー

バミューダラピリンスは、厚い雲の上に設けられた一度入れれば脱出不可能とまで言わしめる迷宮のスカイウエーブだ。幸いにも、ミソラちゃんがいれば攻略は容易になるのだけど……。

「……あ」

そんなことはどうでもいい。現在のボクは、約2週間ぶりの再開となったハープ・ノート……もといミソラちゃんに釘付けだった。

こちらに背後を晒してはいるが、恐らくボク達がここに来たことは察しているはず

だ。

「ミソラちゃん……」

名前を呼びながら、ゆっくりとハープ・ノートに近づいていく。しかし、その華奢な背中は微動だにしない。

「良かった、ここにいたんだね……探してたんだよ？ さあ、一緒にニホンへ帰ろう！」

「……………」

「どうしたの？ まさか具合が悪いとか？」

「…………いや、そうじゃないな。何か様子がおかしいぜ」

不審に思ったロックが、目を細めて訝しむ。

「……………スバル君……………」

ハープ・ノートの肩が上下する。電波人間には必要ないけれど、あれは多分、深呼吸だ。そして恐らく、ロックは気付いていない。

そんな微かな決意の兆しを見せつつ、何事もないようにハープ・ノートはこちらに振り返る。その宝石のような美しい瞳は、既に覚悟の色へと染まっていた。

「もう、ワタシのコトは放っておいて」

わかっていたとはいえ、こう面と向かって拒否されると中々クるモノがあるなあ…………。

「何言ってるのさ！ 連絡の一つも寄越さないで……みんな心配してるんだ！」

「……それは、悪かったと思ってる。でも……これ以上ワタシを探さないでほしいの。ニホンにも、暫くは帰るつもりないから……」

そう言い捨てたハーブ・ノート表情は、誤魔化しようもなく苦渋に満ちていた。

今とよく似た表情を、ボクは最近目している。忘れようもない。ドツシーの入り江で、キザマロに真意を問いただした時だ。あの時と同じで、何とも言えない気持ちにさせられる。

「ミソラちゃん……」

「ダメ!! 来ないで!」

両手をキツく握り込み、視線は最早ボク達に向けられてはいないけど、確かにミソラちゃんはそう言った。

そしてボク達に背を向ける。

……わずかに肩が、震えていた。

「お願い、帰って……帰ってよ……」

「一体何が……まさか、誰かにそう言えって脅されているの?」

『アンドロメダのカギ』の件もあるため、ここで脅迫について言及するのはおかしくはない、はず。

正直言つて、ディーラーに悪用される可能性のあるラ・ムーは、なるべく早めに消してしまいたい。

それに、ゲームでは目立った被害は無かつたけれど、現実になぞらえた場合、ラ・ムーの生み出した電波体による被害規模は時間に比例して拡大してしまう。なので、ここは本来の流れを変えてでも迅速に排除した方が良い……と、思う。勝手な推測だけど。

「……………ち、違うわ！ そんなこと、スバル君には関係ないでしょ!? ……今すぐ帰つてよ！」

そうやってムキになると、ますます怪しく見えると思う。やっぱりミソラちゃんに悪役は合わないつてことだね。でも、それでいい。

「そうはいかない。みんなニホンでキミを待つてるんだよ。委員長も、ゴン太も、キザマ口も……………皆、心配してるんだ」

……………?

気のせいかもしれないけど、委員長と口に出した瞬間に少しだけ、息を飲むような音が聞こえたような気がした。多分、気のせいだろうけど。

「ワタシは探してなんて、一言も言つてないよ！」

「ならせめて理由を聞かないと……………ボクだって、ここではいさよなら、なんて帰れないよ！ みんな心配してるつて、そう言つたじゃないか！」

強化ブライに初見で勝たなくてはいけないという不安がつきまとうけど、どうせ戦うことになるのだから関係ない。自分を……自分とロックを信じよう。

「なら……力尽くで追い払うから……!」

再びこちらへと振り向き、今度は背中のギターを抱えて構える。

何度も見てきたその構えは、今は強張って隙だらけにも見えた。

「止めてよ! ……こんなこと……ブラザーじゃないか!」

やっぱり、言葉による説得は無駄みたい。

まあ、話し合いで付かない決着には決闘だと、古事記にもそう書いてある。多分。

「ブラザー………ブラザーで無ければ、もうワタシには構わないでくれるの? ……

なら、これでいいよね?」

ハイライトさんが仕事を放棄しかけた瞳で、ミソラちゃんは懐から取り出したスター

キヤリアーを操作し……ブラザーバンドを切断する。

ブツツ! という音が嫌に響き、体に負荷がかかる。そういえば、ボクはまだ一度も

ブラザーバンドを切ったことがなかったんだっけか。わかってたはずだけど、何だか

……空しいな。

「マ、マジに切りやがった……オイ、ハープ! オマエは納得してんのかよ、こんなこと!」

憤ったロックの咆哮にも、ハープ・ノートのギターに宿ること座のFM星人が応える

ことはない。

「……………（ありがとう、ハープ）」

「ポロン……………いいえ。でも、辛い役回りねえ、ホント……………」

スターキヤリアーをしまい、再びギターを構えるハープ・ノート。

「ミソラちゃん……………キミに事情があることはわかったよ。それを話そうとしないことも……………なら、こつちだって力尽くだ！ 全力で抵抗させてもらう！ ボクが勝ったら、洗いざらい話してもらうからね！」

キズナ力を失ったことにより発生した、アビリティの過剰装備が体を蝕む激痛に、歯を食いしばって耐える。

ハープ・ノートの表情は、悲壮感に溢れているようにも見えた。辛いんだ。……………当たり前か。

「……………つー！」

「来るぞー！」

ロツクの声と同時に否か、ハープ・ノートはギターを弾き、シヨツクノートを発射する。

しかし、そこは何度も受けた攻撃。体が勝手にシールドを展開し、ガードの姿勢に入っていた。

「……………くっ！」

高速で飛来する音符を展開したシールドで受けきり、キズナリヨクを超過している分のアビリティを緊急解除。

乱暴に解除したアビリティがウェーブロード上に収まりきらずに地上へ落下していくが、そんなことを気にする余裕もない。少なくとも、ハープ・ノートはボクのバトルを最も間近で見ている電波体だ。

今のミソラちゃんは、ATMのプレイングを側で経験し続けたAIBOだと思ってかららないと。

「ここは引けない……………ウェーブバトル・ライドオンツ!!」

ーオーリヒメ陣営

「エンプティーよ……………ムーが封印されし場所は突き止められたのか?」

「バミューダラビリンスのナイブにカクされていることはマチガイありません。しかし、あのバシヨはラビリンスのヨびナにタガわぬフクザツなチケイをホコるメイキュウ……………フツウのニンゲンがマヨいこんでしまえば、イきてヌけダすこともカナいませぬ。まさに、ヤミのメイキュウなのです」

「ふむ……やはり一筋縄ではいかぬようだな」

「ゴシンパイにはオヨびませぬ、オリヒメ様……あのシヨウジヨのモツノウリヨクがあれば、ハナシはベツです。まもなくムーはミツかるコトでしょう。これで、ノコるジヨウケンはあるとヒトつのみ。それも、あのシヨウジヨがヒキヨせてくれるコトでしょう」  
 「フフフ……流石はエンブテイ。抜かりはないようであるな。そうだ、ソロはどうしておる？」

「……カクセイまでは、もうシヨウシヨウのジカンがヒツヨウとミています」

『では、オーパーツの件は、私めにお任せを！』

恥を知らず……と言うよりは、明らかに虚勢を張っているであろう明朗な声色がアジトに響く。

会話を紡いでいた二人は、空気を読まない闖入者に対し、眉をひそめることでハイドの歓迎つぷりを露にする。

ぶっちゃけお呼びではなかった。

「このハイドが、必ずやロツクマンからオーパーツを取り戻してご覧に入れましょう！  
 ですからオリヒメ様！ 何とぞ、この私にご命令を！」

「ハイド……」

厳かな、という表現がピタリとはまるであろう、オリヒメの声に、ハイドは興奮を抑



えることが出来なかつた。

オリヒメの期待に応え、エンプティーをも凌ぐ真の右腕として重用される未来まで幻視したところで、

「ははっ!!」

「其方には、失望しておる」

溜息すら聞こえてきそうな、そんな心底冷めきつたオリヒメの声が御簾の内側より発せられる。

流石にうら若き? 女性として、そのような辛気臭いことは憚られたが。

「ありがたき幸せに……つて、は? あ、い、いえ……し、失望でございますか!」

「其方の立てる計画は、悉く失敗しておるではないか。他ならぬ、ロツクマン<sup>ヤ</sup>自身によつて、の。……フン、まこと、情けない話よ」

「オ、オリヒメ様……!!」

オリヒメの呆れ果てた叱責を受けたハイドは、尚も情けない声を上げ、数歩後退る。その表情は、今にも泣きそうな程、追いつめられたモノであつた。

「オーパーツの奪還はやはりエンプティー、其方に任せることとする。頼んだぞ」

見ていられない……とばかりにオリヒメは、自身の右腕たるエンプティーにオーパーツの奪還を命じる。

やはり、最重要案件は信頼に足る者に任せるのが筋と言うものだろう。そう、オリヒメは自身の中で再認識することになった。今更の話ではあるが。

「オオセのままに……」

恭しく礼をしたエンプティーは、早速とばかりにその姿を消した。状況の確認に努めるのだろう。

「くっ……い！」

後に残されたハイドが歯噛みする音が御簾の向こうに座すオリヒメにはしつかり聞こえてはいたが、最早一々態度を言及する気も起きない程に、ハイドがオリヒメの心に占める割合は小さくなっていたのであった。

## 60

——異次元空間——

『カミカクシ』によって作られた空間では、『孤高の証』を受け入れたソロが、未だにもがき苦しんでいた。

全身を突き刺すように襲う痛みにも、歯を食いしばって耐えるソロの体は、融合が進行している証なのか、時折光を放っている。

「グウツ……!! グウウアアアアアアアアアアアアアアアアアツツ!!」

輝きが最高潮に達した瞬間、一際大きな叫びを上げ、ソロは新たな心の壁チカラを手に入れることになる。

他人を寄せ付けぬ、拒絶の障壁を。

——バミューダラビリンズ——

「……キヤアツ！」

手加減して放たれたTサンダーホルト・ブレイド V Bは、電波人間としては華奢な部類に入るハープ・ノートを弾き飛ばし、その体をウェーブロードの固い地面へと叩き付ける。

やはり、地方の差は如何ともし難いらしい。だけど流石はミソラちゃんと言うべきか、こちらの動きにしっかりと対応してきたので、思いの外苦戦したようには感じた。

尤も、ボク達にハープ・ノートを本気で害する気が無かったことも苦戦した要因ではあるけれど。

そしてそれは、向こうも同様だったようだ。

尻もちをついた体勢から、緩慢な動作で上体を起こしたミソラちゃんは、軽く溜息をこぼしつつ立ち上がる。

「うん、負けちゃった。……やっぱり強いね、スバル君は。追い払うことも出来なかった」

半ばわかっていたような言い草だ。委員長の名前に反応したことといい、やはり状況に相違点があるのだろうか。

「ケツ、よく言うぜ。思いっきり手加減してたクセによ」

呆れたように、ロツクは悪態をつく。口調は幾分か穏やかなものになっているけれど。冗談混じりと言い換えた方が良いかもしれない。

兎も角、ボク達の間を包んでいた痛々しいまでの緊張感は、とうの昔に消え去っていた。数ヶ月とはいえ、共に鍛錬を行っていた故の共感なのだろうか？

まあ、いい。

「……それで、事情の方は話してくれるんだよね?」

弛緩しかけていた空気が、再び緊張感を帯び始めたことを察知する。

ビクツと体を一瞬震わせたハープ・ノートは、難しい表情をつくり、眉間に皺を寄せ  
る。

「いいよ。……でも、その前に……ハープ!」

ハープ・ノートが構えたギターから、なにやら得体の知れない波動的なサムシングが  
周囲に放射される。

放たれた特殊な音波? は、ボク達を囲んだ小部屋程の大きさまで広がると、バミュー  
ダラピリンスの電波中へと消えていってしまった。……防音措置、ということなのだろ  
うか。

「はいはい、お任せなさい。……ポロロン、もう話して大丈夫よ!」

ハープさんの言を聞くに、やはりそういうことらしい。その辺は音を操る電波体の面  
目躍如、というやつなかもしれないな。

「……誰かに聞かれたらマズいような話なのか?」

ロツクは訝しんだ。

「ポロロン……乙女の告白に聞き耳を立てるような、マナーの悪い魔導師オトコがいるのよ!」

これはエンプティーのことだろう。確かに、余程時間の迫った状況でも無い限りは妥

当な判断だ。

ただ、プライバシーも何もあつたもんじやない。おまわりさんこつちです。

小学生を四六時中監視する大男とか、字面だけで犯罪臭を隠しきれませんねえ……

「なるほど……」

「じゃ、そろそろ本題に入るね。………ワタシ、彼らに……オリヒメ達に協力しているの」

特に気負つた様子も無く、ハーブ・ノートは衝撃発言をかます。まあ、既知だったけど。

「……オイ、どういうことだ？ オリヒメつつたら、あの似非魔導師野郎が度々口走つてたヤツのことらしいが……」

「オリヒメは、ハイドやエンプティイ達を率いる組織のリーダーだね。ソロは協力者つていうスタンスを取つてみたいだけだ」

ソロに関してはギブアンドテイクつて表現が正しいような気もする。

「フン……それでつまり、どうなんだ？ そいつらに協力してることとは、オマエ達を『敵』として見ていいつてことなのか？」

「ポロロン……ま、面従腹背つて感じだけだ。ともかく、今ちよつと面倒なことになつているのよね」

はあ……と大きな溜息がギターからこぼれ落ちる。

「詳しく、聞かせてくれるんだよね？」

「うん、まずは……」

そうしてハープ・ノート、もといミソラちゃんは『カミカクシ』によつて拐われた後に起きた出来事を語り始める。



ハープ・ノートが語った内容を要約すると、『カミカクシ』によつて飛ばされた先でエンプティーに取引という名の脅迫を持ちかけられた。

しかしハープ・ノート単独ではどうしても対処仕切れないため、監視の外で動けるボク達を待っていた……ということらしい。帰つて云々は、エンプティーによる監視の目を誤魔化す方便だったらしいけど……まあ、裏切りを警戒するのは、当然と言えば当然か。

「……それでワタシ達は、このバミューダラビリンズの探索を続けてたんだ。どうやら

彼らは、このバミューダラビリンスの奥にある『何か』を探しているみたいなの。その『何か』までたどり着くためにワタシ達のチカラが必要だ、って。それが何なのかはわからないけど……」

「ふうん………で、ヤツが持ちかけてきた取引の内容ってのは一体なんなんだ？ そもそも、あの魔導師野郎がどんなにやり手だったとして、オマエ達なら逃げ切るくらいのこととは出来るだろ？」

ロツクが疑問に思うのも無理は無い。

そもそも、現時点でゲームのハープ・ノートよりも相当に強いはずなのだから。

「……エンプティーがワタシ達に持ちかけてきた取引の内容は一つ。それはワタシが彼らに協力する代わりに、ワタシの大事な人達に危害を加えないこと……」

「オイオイ、オレ達がヤツらに遅れを取るってのか？」

ロツクの声が、微妙な不機嫌さを孕んだものに変化する。

戦闘狂なロツクは、戦わずして格付けをされるのが癪に障ったらしい。

「それも言われたけど……ふふん、そっちは取引になってないって、アイツに叩きつけてやったよ！」

エンプティーの反応を思い出したのか、ハープ・ノートはフフンツと得意気に胸を反らす。かわいい。



「クッククッククック……そいつは愉快なコトをしたモンだ！」

ギヤハハハ……と、盛大に吹き出したロックが、あらぬ方向へロックバスターを吐き出す。危ないなオイ。

っていうか、取引がボク達関連でないのなら、一体どうして……あつ。

「ならどうして……ハッ、委員長か！」

そうだ、どうして忘れていたんだらう。ミソラちゃんのブラザーはボクだけじゃない。

委員長のことをすっかり失念していた……

「正解。スバル君の安否が取引の材料にならないとわかったエンプティーは、電波変換の出来ないルナちゃんのことを引き合いに出してきたわ……」

おのれエンプティー！

「成る程、それで協力を……」

「それにエンプティー本人がいなくても、電波世界に設置した魔方陣から配下の電波体『エランド』を呼ぶことも出来るみたいで……」

もうお手上げ、とばかりにかぶりを振る。その所作には、隠しきれない疲労感がにじみ出ていた。

苦勞してたんだらうなあ……

「どうしても手が足りない、そして助けを呼ぼうにも監視が厳しいってワケか」  
 神妙な声色のロックが、唸りながらそう零す。

つまり、このままバミューダラピリンスを攻略にかかっても、コダマタウンで待つ委員長達に危害が及ぶ可能性が高いってことだ。流石に、それを良しとするわけにはいかない。

「そうなのよ。あの似非魔導師……乙女のプライバシーを一体何だと思っているのかしら！」

口癖という余裕すら抜け落ちたハープさんの憤慨は至極真つ当であり、オリヒメ達の組織は速やかに壊滅することだろう。ガチ切れハープさんはヤバいのだ。シヨツギヨムツジヨ！

……まあ、現実逃避をしなくとも、一応は何とか出来るあてがある。

相性的に考えて、尾上さんかケン太君……辺りに委員長達の護衛を頼めば何とかなるだろう。どうせ、万が一にも湧いてくるのはエラ魚ンド程度なのだし。

「まあまあ、落ち着いて……それじゃあ、委員長達のこととはボク達に任せてほしい。いつまでもこんなところで、キミに悪事の片棒を担がせるワケにはいかないからね」

「……何か考えでもあんのか？」

「まあ、一応は……」

「本当!？」

瞳を輝かせたハープ・ノートが問いかけてくる。

彼女も、いい加減変わらない現状に嫌気が差していたようだ。

「うん、でもその方法だと準備に少し時間が必要なんだ。一度、コダマタウンに戻らないといけない。だからミソラちゃん、もう少しここでエンプティー達に従っているフリをしてもらわなくちゃならないんだけど……」

準備やら連絡やら説明やらで、やはりどうしても一旦ここを離れなくちゃあいけない。

「……詳しく、聞かせてくれるんだよね?」

「もちろん。まずは……」

先程と立場が反転しているな……なんてどうでもいいことを考えながら、三人へ策とも呼べない策を説明していく……



「……つていう流れになるんだけど、いい?」

「うくん……確かにそれなら上手くいきそう、かな?」

おおよその流れを説明すると、難しい顔をしたミソラちゃんが首を傾げながら賛同の意を示す。

まあ、反対されないだけ良しとしよう。そも、ミソラちゃんの役目は決して多くないのである。ラビリンスの突破とちよつとした演技をするだけでいい。何とかなるだろう。

「オレはあんまり回りくどいのは嫌なんだがな……」

渋々といった様子だけど、ロックも概ね賛成してくれるようだ。

そもそも、これはエンプティを正面戦闘の場に引きずり出すための案なんだけどもね。

ベルセルクブレードの錆にしてくれるわ!

「じゃ、後は手はず通りということ……」

「あつ、ちよつと待って」

「……どうしたの? 何かおかしいところでもあつた?」

「いや、そうじゃなくて……ほら、ワタシ演技とは言え酷いこと言っちゃったりしたでしょ? ブラザーバンドのことも……でも、スバル君はワタシのこと信じてくれたよね?

その……何でかなって……」

ああ、なんだ、そんなことを気にしていたのか。

「簡単だよ。前にロツポンドーヒルズで話してくれたでしょ？ ほら、世界中の親を亡くした人達の悲しみを和らげられる、優しい歌を作りたいつて。……黒い穴で世界中に飛ばされた皆をニホンに連れ帰るために、ボクは間接的とは言え、ハイド達の原因となつて起こしたいくつかの事件に遭つたんだ。その中には、村一つ津波で沈めようとしたモノだつてある。だから、そんなことをするヤツらに本心で協力するなんてあり得ないよ。だつて、それはミソラちゃんのやりたいつて言つていたことを自分で否定する行為なんだから」

親を亡くした人達のために歌うのに、自分で孤児を増やすようなコトに手を貸すワケないだろつてことだ。

ハープ・ノートは最高級ジュエルのような輝きを放つ瞳を見開いたまま、数秒ほどその活動を完全に停止し、そして勢いよく湯気を放出しながら再起動する。……ちよつとクサイ台詞だつたかな？

「……ああ、もう……ハープ！」

「はいはい、人遣いが荒いパートナーねえ……クスクス」

冗談めかしたハープさんが遮音された空間を解除し、その手に慣れ親しんだギターを

構える。

高ぶった感情から放たれるシヨックノートは、威力2割増しといったところだろう。  
……もうちよい加減してくれてもいいのよ？

「ミ、ミソラちゃん!？」

「いい加減諦めて……！ワタシは帰らない！ハアッ！」

迫真の表情を浮かべたハープ・ノートがギターを弾き、特大の音符が生産される。普段の5割増しのパワー・スピードで迫るシヨックノートを正面から受けたボク達は、そのまま背後に設置されたワープホールまで吹き飛ばされてしまう。ちよつと、威力高すぎやしませんか……ミソラさん……！



「ポロロン……にやけてるわよ、ミソラ」

「そんなことないよ……本当だよ!? ねえハープ、どうしてそんな目で見るの!？」  
割と、いつも通りの二人なのであった。

6  
1

ーコダマタウンー

シヨックノートを食らった箇所をpushさえ、足を引きずりながら、ボク達はやっとの思いでコダマタウンへと帰還を果たす。

いつものように展望台の隅でウェーブアウトするが、電波変換を解いても患部の痛みが引くことはない。

おかしいな。フレンドリーファイアが一番キツイダメージになってるんですけど……

「イツツ……まずは、委員長の家に行かなくっちゃ……」

スカイウェーブの道すがら、委員長達には一連の出来事を説明するために集まってもらうよう既に連絡は済ませてある。えらくやつれている人を見るような委員長の目が印象的だったような。多分気のせいだろう。

「オイオイ……ったくよお、別にシールドも張らずに受けることはなかったんじゃねえのか？」

呆れたような声がすぐ側から響いてくる。現在はビジライザーをかけていないので、

声と何となくの電波圧しか感じることは出来ない。ただ、何と言うか……まあ、落ち着くってことだ。

「いいんだ、こつちの方が向こうの目も誤魔化せる」

「へッ、オマエのそういうとこ、割かし嫌いじゃないぜ」

それにしても痛い……やせ我慢は体に毒だと思う今日この頃です。

「そーいやウルフ……尾上のヤツとは、どこで落ち合うんだっけか？」

「……バスで来るって話だから、バス停で待つってことにしたんじゃないか」

何でも、夏休み明けからコダマ小学校で植木職人として雇われることになるそうで、ちよーどその下見をするために一度、このコダマタウンへ足を運ぶつもりだったらしい。これはラツキーだった。

こちらとしても、あまり申し訳なく思わなくて済むからね。

「ああ、そーいやそーうだったな。悪い、忘れてたわ」

「知り合いが来るって言うのに、あんまり意識してる感じじゃないよね？ ロックらしくもない」

ロックのことだから、オレとバトルしろオ！ くらい言いそうだと思っていたのだけど。

「だってよ、どうせ会ってもバトル出来ないんだぜ？ それどころかバトルしてるところ



すら見れねえんだからな。乗り気になれつて方が難しい話だぜ」

「ふうん……まあいいや。兎に角、尾上さんがゴダマタウンに着くまでに、皆にはちゃんと説明しておきたいな」

尾上さんが住んでいる場所からはそこそこの距離があるらしく、幸い時間にして約一時間ほどの余裕がある。

何か、忘れていようような気がしなくてもないけれど。

「おう、あの魔導師野郎のハナをあかしてやろうぜー」

自分で考えておいてなんだけど、そう上手くいくだろうか……？

ー白金家ー

「それで、どうだったの？ 帰ってくるなり呼び出したつてことは、何かしら進展があったつてことよね？」

ミソラちゃんの手掛かりを探すために結構な無茶をしているため、期待に満ちた委員長長の目には薄く隈が出来ることがわかる。化粧で軽く誤魔化してはいるけどね。

「パイロットさんの話は聞けたんですか!？」

「待ちすぎて、腹が減ったコトも忘れちゃってたぜー」

それは重傷だ。って、そうじゃない。

「ちゃんと順を追って話すよ。まずは、ドンブラー村でパイロットさんを見つけることは出来ただけど……」

◇◇◇

計画に關すること以外で粗方の出来事を話し終えると、予想通りというか何というか、皆瞳を驚愕に見開き暫くは二の句が継げないといった様相だった。衝撃展開の連続だったからね、しかたないね。

「それは……随分と大変なことになっているわね……でも、あのコらしいって言えばらしいかしら」

「オレには話がフクザツ過ぎて何がなにやら、ワケがわからないぜ……」

「ボクはアイツらのやり口が許せません！自分たちの都合で勝手にさらっておいて、更に脅迫して自分たちに協力させるなんて！」

三者三様ではあるが、皆共通していることが一つある。それは、ミソラちゃんのことを本気で心配していることだ。まあ、ゴン太とキザマロに關しては、若干不純な感情があるだろうことは否定しないけど。

「ふう……よし、ここからが本番だ。ミソラちゃんがハイド達に協力している条件は一つ。それは向こうに協力する代わりに、ミソラちゃんの大事な人達へ危害を加えないこと……向こうはその対象として、委員長を名指しで指定してきたみたいなんだ。多分、スターキャリアーのパーソナルビューからブラザーバンドの情報を抜き取ったんだと思う」

説明してて改めて思うけど、ほんつとプライバシーもクソもないよな。組織管理としては下も下なのではないだろうか。元々少数構成のブラック企業だから、期待するだけ無駄なんだろうけど。

「えっ……ワ、ワタシ?」

「最初はボクのことを条件として提示されたらしいんだけど、それじゃ取引にならないから蹴ったって言ってたよ」

「ふうん……へえ、そう」

どうしてそこで不機嫌になるんですか……?

「ま、まあそんなわけで……ハイド達が探している何かへ先にたどり着けば、アイツらの企みを阻止できるかも知れない。だから、その間委員長達のことをどうするかってことなんだけ……」

「あのコ一人でそのバミューダラピリンスとやらに向かわせるわけにはいかない、って

「ことよね?でもそうすると、守りの無くなったワタシ達が狙われるかもしれない……と?」

口元に手を当て、考える仕草を取った委員長が推測を語る。

しかし、委員長は何をやっても様になるよね……ちよつと羨ましい。

「流石は委員長。でも、安心して。委員長達を護衛してくれる人には心当たりがあるんだ。………つて、通信がきてる。ああ、噂をすれば、だね。……ブラウズ!」

少し早めにバスがコダマタウンに到着したのか、尾上さんから電話がかかってきている。

『よお、ボウズ。こっちはもう着いちまったぜ』

ブラウズの画面では、ワイルドな眼光を光らせる偉丈夫が笑っている。

一応言っておくと、尾上さんは同性愛者ではない。

「あ、尾上さん。今回はすみません、チカラを借りることになってしまった」

『ああ?いや、構わねえさ。しっかし子供を人質に取るなんざ、そいつらも大概腐つてやるな。ああ、そうだ。オレもそのオリヒメとやらと戦うことに協力してやってもいいぜ?最近は大甲斐のあるヤツもいなくなつてなあ……』

「いえ、気持ちだけで十分です。ホント。元々、戦力よりも人手が足りないだけでしたから。……つと、コダマタウンに到着したんですよね。迎えにいきます」

尾上さんが電波変換した姿、『ウルフ・フォレスト』は団体行動には致命的に向いていないからね。

疑うわけじゃないけれど、同士討ちに発展する可能性はゼロにしておきたい。

『おう、頼むぜ。この辺りは土地勘もねえから困ってたところなんだ』

じゃあな、と尾上さんはさっさと通信を切ってしまった。相変わらず竹を割ったような性格と言うか……どちらにしろ、良い人であることに変わりはない。頼りになる類いの大人だ。

「……と、いうワケで、今話してた人……尾上さんに皆を護衛してもらおうことになる。それから直ぐにまたバミューダラピンスに戻ることになるから、尾上さんの指示にはちゃんと従ってほしい」

「ええ、わかったわ。でも……必ず戻ってきなさいよ。あのコを置いてきたりなんてしたら……承知しないから!」

「……わかった!」

ボクの身の安全のためにも、ね。



尾上さんに委員長たちのことを任せした後、ボク達は再び展望台の片隅で出発の準備をしていた。

単純に考えてもエンプティとブライの連戦だ。アイテムの補充は欠かせない。

それに加え、バミューダラビリンズの電波状況の特殊性もある。先ほどハープ・ノートと戦闘した体感では、動きに微妙な抵抗があるようにも感じた。その辺りの適応が、戦闘の決め手になる可能性もある。とにかく、考え過ぎても無駄になることはないってことだ。

「よし、行こうか！」

「ククク……オレもツメが疼いてきたぜ……！」

いざー！バミューダラビリンズ攻略へ！

ーバミューダラビリンズー

ウィルスを蹴散らしながらワープホールに駆け込むと、まず目に入ったのは先ほどと変わらぬ華奢な後ろ姿だ。

「お待たせー！」

どうせ今から裏切る……もとい取引を反故にするのだから、一々監視対策をする必要はない。

なるべく明るい声色で呼びかけると、ビクツと一瞬震え、そしてこちらへと振り返る。その表情は、暫く見ていかなかったであろう満面の笑みに彩られていた。守りたい、この笑顔。

「……待ってた!」

そのまま脇目も振らずにタツクルを敢行するミソラちゃん。

微妙に柔らかい衝撃を胸板で受け、その場で踏みとどまる。遮音しただけじゃできることに限界があつたので、気の置けない相手とのコミュニケーションに飢えていた部分が発露したのだろう。

「……ちよつとオーバー過ぎない?」

「いいや、全然足りないね!……ワタシが!満足するまで!抱き着くのを!止めない!」  
このアイドル歌手、クツソノリノリである。

いや、歌手にノリは必須要素なのかもしれないけど。案外、スカイボードのオーリーと辺りと気が合うのではなからうか。

さて、寂しがりな姫が満足するまで数分程ふれあつた後、ボク達は漸くバミューダラピリンズの迷宮区画への入り口となる簡易ワープホールの前へと立っていた。

ハープ・ノートが同行している以上、理不尽にさまよい続けるといふ心配は消えたものの、依然として油断のならないエリアであることに変わりはない。気を引き締めすぎ

るといふことはないはずだ。

「よし……準備はいい？ミソラちゃん」

「ばつちこいだよ！……つと、あ、そうだ」

「……どうかしたの？」

「ええつと、その……もし、もし勝手にブラザーバンドを切ったことを、スバルくんが怒っていないなら……」

ああ、そういえばブラザーバンドを切ったままだったんだっけ。

しかし、このままミソラちゃんに言わせるわけにはいかない。そうしたら多分、後で委員長辺りにしばかれるから……

「あ、ストップ」

「ええ!? や、やつぱり怒ってた……?」

「……ミソラちゃん、キミさえよければもう一度、ボクとブラザーバンドを結んでくれないかな?」

「え、でも……勝手に切断したのはワタシの方なんだよ?」

きつと、自分から言うのが筋だと言いたいのだろう。

しかしボクには、委員長から賜ったありがたい言葉があるのだ。ブラザーバンドの申し込みは、男の子から言い出すものだ、という言葉がね。



「委員長が言ってたんだ。こういうのは男の子から言うものだって。だから……って、あれ？」

そういうえば、その前日にブラザーバンドの繋がりをテーマにした連続モノの恋愛系ドラマが放送されてたらしいけど……まあ、きつと無関係だろう。多分。

あの漢気が服着て歩いてるような存在の委員長が、まさかそんな乙女チックな趣向をしているとは到底思えない。何故か握り拳が迫ってくるイメージが浮かんだけど。気のせいだろう。多分。

「ふーん、そうなんだ。……ふーん」

どうしてここで不機嫌になるんですかねミソラさん!?

理不尽な対応にフォローしてもらおうとハープさんの宿るギターに注視するが、ハープさんもどことなく機嫌が悪いように見える。ハープ、お前もk……ハープさん、貴女様もですか……。

取り敢えず、結び直したブラザーバンドで発生したキズナリヨクは以前より上昇しました、まる。

◇◇◇

「これは……ダメだね。方向感覚すら掴めない」

迷宮区画へと足を踏み入れたボク達に待ち受けていたのは、視界を塗りつぶすがごとく広がる暗闇だった。

最新鋭の飛行機に搭載されたシステムをも狂わせる電波状況はやはり、電波生命体の感覚へ少なくない影響を与えるらしい。

なるほど、これは元科学者だったオリヒメでも手こずるわけだ。何しろ、入って来た方角すら瞬時に狂わせるのだから。

「ワタシに任せて！」

電波体特有の淡い光を全身放ちながら近づいて来たのは、自信に満ちた表情のハーブ・ノート。

なんか電飾みたいだなー、何て思っていると、目前にて立ち止まった彼女は両の手を耳に当て、目を伏せる。所謂、聴覚強化モードというやつだろうか。

「ワタシの言葉に答えて……この先へ進むための、正しい道は、どこ？」

ミソラちゃんの声に応えた『何か』が喋っているのか、極小さな音、のようなものか聞こえるような気がする。

小さすぎて、話している内容を理解することは欠片も叶わないが。

「『導いてやるからついてこい』、だって。声が聞こえる方向は……こつち……こつち……ほら、逸

れると危ないから」

当たり前のように手を差し出してくる。

ただ、気持ち早口気味だったような……？

「いや、発光してるからそんなことないと思っ……いえ、なんでもないです」

背負っているギターが一際鋭い輝きを放ち、その文字通りの威光にひれ伏したボクは、おっかなびつくりと差し出された左手を握った。

最近理不尽な扱い多くない……？

◇◇

右も左もわからぬ暗闇に包まれた空間を抜けた先には、十時に分かれた分岐が広がっていた。

……つと、その脇にカンテラを構えた電波が佇んでいる。恐らく、彼がハープ・ノート呼びかけに答えたロリコン疑惑のある電波なのだろう。まあ、ハープ・ノートの容姿は電波世界基準でも優れている（コダマタウン在住のとあるデンパクん談）らしいので、それほど驚くということも無かったが。

この世界、小学生女子を人質に取る（または食い物にする）悪漢の多いこと多いこと



やっぱり電波状態が乱れていると、そこに漂う電波の精神状態も乱れるのかもしれない……

「どうかした？」

正に純粹無垢といった様子でボクに問いかけてくるハープ・ノート。

そうですか、今は聴力強化していませんね……。しかし、この電波に任せて本当に大丈夫なのだろうか？

そんな一抹の不安がよぎりつつも、ここはお茶を濁すしかないだろう。親切な現地人の裏の顔なんて、知ってもなんの得にもなりやしない。主に精神衛生上の。

「ああ、いや……。うん。なんでもないです……」

「……………？ どうしていきなり敬語になったの？」

「ホントに何でも無いから。ホントに……」

ただ、世の中には知らない方が良い真実もあるってだけのことだよ。

それだけだ。『シャベツタラコロス』何て空耳は聞こえない。聞こえないつたら聞こえないんだ……！

## 62

ーバミューダラビリンスー

「ま、待つてよ電波くん……ッ！」

息を切らせた電波界のアイドルを尻目に、口数の少ない親切な（？）先導役の電波はボク達を振り切らんばかりのスピードでラビリンスを疾走する。

ウィルス達と遭遇するリスクを鑑みてのことかも知れないが、どうにもそこはかたない悪意の波動を受けているような予感も捨てきれない。……ううむ。

「あの無口野郎、まさかわざとじゃないだらうな？」

鼻息を荒くしたロックが愚痴をこぼすが、ボクは声を大にしてこう言いたい。

「（左腕にくつついているだけのロックには、あの電波も絶対言われたくない……!）」

そんなことを思いつつ、幾度となく同じような十字路を突き進むと、やがて中規模な広場程の空間へとたどり着く。

辺りには怪しげな霧のようなエフェクトが立ちこめ、まるでこの先へ進まんとする者を阻もうとしているかのようだ。

その中央には、仄かに赤い眼光を光らせる先導役の電波が、どうやら自慢の一品らし

い年代物と思しきカンテラを光らせている。なるほど、この霧の中だ。カンテラの光は恐らく、灯台としての役割をも兼ねているのだろう。これも先人の知恵というヤツか。

「はあつ、はあつ、はあ……もう、ちよつと早すぎるよ……」

涙目で少しばかり頬を膨らませるが、別に本気で怒っているわけではないらしい。

因みに、電波体が息を切らすということは原則として有り得ないが、実体の体の感覚を持つ脳が、勝手にそういう類いのエフェクトを発生させることがある。電波体と現実の体で起きる齟齬を軽減するためだと思われるが、実際にはよくわかっていない。

「でも、道中でウィルスに足を止められることもなかったじゃないか」

「それはそうだけど……むう。つて、また何か喋ってる？」

ちよつと集中するから待つて……と釘を刺し、先程のように集中（集音？）モードで口下手な例の電波とコミュニケーションを取っていく。

どうやら彼は聞き耳を立てられることが好きではないようなので、ここはおとなしくしておくのが吉だ。それに、彼女の集中を乱して嫌な顔をされたくない。

……しかし、どうしてスバル君の周りには怒らせると手が付けられないようなタイプばかり集まるのだろうか。きつとそういう星の下に生まれたのだろうか……合唱。

「ふむふむ……なるほど。スバルくん、何でもこの電波くんが言うには、この先は更に入り組んだ造りになってるみたい。先導はしてくるみたいだから、しつかり見失わない

ようについてこいって」

「どうやら、まだまだ序の口だったらしいね。……霧も深い。これまで以上に周囲には気を配った方が良さそうだ」

ううむ、一段と霧が濃くなってきたな。今はそんなことどうだっという気分になりそう。

ちなみに、ボクが初めてプレイしたスパロボは中古のKだった。買ってから暫くは、アレがスパロボ主人公のデフォードと思っていた記憶がある。

「うう……ワタシ……キライだよ……！ 何だか、肌がベタつくみたい」

苦々しい表情のハーブ・ノートが愚痴る。流石に国民的アイドル歌手はそっち方面に気を配っているらしい。

「Dエネルギー使う？」

「胃もたれしそう……っていうか気遣うところが違うよ……」

若干げんなりした様子の子のミソラちゃんも苦言を呈す。そういえば何か味があるデリシヤスなエネルギーなんだった。なお、経口摂取しなくとも腹が膨れる模様。

可愛らしい顔で、もう面倒だからマシンガンストリングで縛っちゃおうかな？等と呟いているのを見るに、割と堪えているらしい。もっと物騒な提案を実行する前に、最奥までたどり着けるといいんだけど。



「……、……………、……………チツ」

こちらに向いたハーブ・ノートの視線を潜るようにウエーブロード下へと唾棄した電波は、待つていられないとばかりに進行を開始する。そのスピードは、心なしか先程より早足だ。

「……………あつ！ 電波くんが行っちゃう！ ワタシ達も急がなきゃー！」

額から滲み出る汗（のようなモノ）を豪快にぬぐい去ると、全身に活力を漲らせながら先導する電波へと追従していく。

霧に紛れて道を踏み外さないように気をつけないと。つーか直角フェイントは止めるオ！

◇◇◇

性悪電波を追いかけること数分。ボク達は再び、濃霧漂う広場の中心で立ち尽くしていた。

エリアの構造は以前訪れたエリアと全く同じようだが、視界の悪さは抜群に悪化している。何気なく近くの霧を払ってみると、軽く腕にまとわりつくような感覚を覚える。どうやら、僅かに粘着性を持つているらしい。

「もうそろそろ奥地が近づいてきた、かな？」

「……………うん、電波くんもそう言ってるね。……………あ、でもこの先までは先導してくれるワケではないみたい……………」

「ああん？まさか、ここまで来てビビツちまった何て言い出したんじゃねえだろうな？」  
カンテラを光らせ、山高帽の下から覗く赤目をこちらに向ける電波は、このエリアに到達してから移動する気配を見せていない。ロックがしびれを切らすのも無理はないと言ふことだ。

そもそも、見た目が擁護出来ないレベルで怪しいからなあ……………。

「ううん、違うよ。ここから先は、エリアそれぞれに道を示してくれる電波がいるみたいなの。彼らの言葉の真実を見抜くことが出来れば道は開かれる。正しき道は、星が示すだろうって」

そう言いながら上空に人差し指を立てたので、つられてボク達も空を確認する。

そこには、赤・青・黄・緑に輝く美しい星を見てとることが出来た。うへえ、これ絶  
対面倒くさいヤツだわ……………。

◇◇◇

『黄色の電波が四体……ッ！来るぞスバル！』

『霧で星と同じ色の電波くんが見つかからないよ！』

『コイツら嘘つきばつかじゃねーか！』

『もう縛って聞き出した方がいいんじゃないかな？』

『3数える前に正解の道を言いな。オレのヘビーキャノンはせつかちなんだ。3……2

……1……』

『電波くんが死んだ！この人でなし！』

◇◇

欺瞞渦巻く十字路のラッシュを漸く突破したボク達の精神は、既に這う這うの体だった。だけど、ヘビーキャノンの銃口を突きつけられても口を割らなかつた電波達の覚悟には敬意を表したい。

尤も、ヒートアッパーでぶっ飛ばしてやりたい気持ちの方が強いけど。

「……って、まただ」

簡易ワープホールで飛んだ先に待っていたのは、迷宮区に入ってきた時と同じ方向感覚を狂わせる暗闇だった。

これ、もしかしてムー大陸に向かう時もこの暗黒空間を抜けないといけないのだろうか？

「大丈夫。見えないけれど、確かに道はあるよ。……囁き声が聞こえるもの」

「電波状態が酷すぎて誰もいなくなったらどうしようかと思つてたよ」

まあ、こんな場所に留まる電波というだけで、余程の物好きなのだろうけど。ここがしっかりと管理されている、なんて話も聞かないしね。

「フフツ……それじゃあ、さつきみたいに聞いてみるね。……この先へ繋がる道は、どっち？」

口元に弧を描きながら、凧のように穏やかな声で漆黒の闇に潜むカンテラ電波に呼びかけるハーブ・ノート。

とてもさつきまで『縛り上げちゃう？』とか言っていた人と同一人物とは思えないです。ね。

「……うん、ありがと。今度はこっちだつて！ さ、行こ！」

彼女が差した方向を眺めていると、ずっと先に仄かな明かりが見えるような気がする。

しかし、反動が怖いオーパーツによる五感強化に頼らなくていいのは本当にありがたい。やっぱり省エネって大事だ。

省エネと言えば、オーパーツから流れ込んでくるエネルギー量の調節は感覚的なものだけど、しつかりパーセント単位で上昇率を管理することが出来ればもつと効率的にチカラを発揮できるような気もする。今度、天地さん辺りに掛け合つてアビリティプログラムの形で組んでもらうのも良いかも知れない。攻防率流操作とかやってみたいし。

◇◇◇

暗幕に包まれた領域を抜けた先に広がっていたのは、多少入り組んではいるものの、今までとは明らかに異質だとわかる空間だった。濃霧の量もそうだけど、何より肌にはひりつくようなこの電波圧……。恐らく、この先がムー大陸の封印されている座標なんだろう。

そこへオーパーツから湧き出る電波をありつたけぶつ付けてやれば、晴れてムー大陸の復活となる。

「こ、この強力な電波……！オリヒメ達が探しているモノって、一体何なの……？」

ノーヒントとは言え、ボク達はこの先へ繋がるであろう簡易ワープホールを簡単に特定することが出来ていた。とは言え、それはこのワープホールの先になにやら途轍もない電波の片鱗を感じるといふ、確信染みた感覚によるものであったが。

「何があるかは知らねえが……奴らが随分と物騒なコトをしでかそうつてのはオレでもわかるぜ。オレ達の手を負えるモンならいいが……最悪、この辺り諸共ぶつ壊すしかねえだろうな」

「ウエーブロードごと消し飛ばすのはちよつと……」

「フン、どうせ確かめないことにはどうも出来ないぞ。早いとこ魔導師ヤロウが探してるブツつてのを拜んでみようじゃねえか。どっちにしろ、それでヤツらのハナをあかせるんだからよ」

「ああ、うん。わかってる。ドンブラー村で起こったようなコトを、もう繰り返さないために。ボク達はこの先に進まなきゃならないんだ」

「おうー」

この辺の胆力は、流石FM星の戦士だっただけはある。実に頼もしい……けれど、申し訳ない。

ディーラーに悪用されることを防ぐためとは言え、打算で世界を危機に陥れる後ろ暗さを抱えているボクには少し、眩しいような気もする。

◇◇◇

「やはり、ここに何かがあるな。明らかに、ここまでと空気が違う」

ワープホールの導きによってたどり着いたラビリンスの最奥は、大広間へと続く長い階段の体を擁していた。

あれほど鬱陶しかった濃霧は晴れ、澄み切った電波がこのエリアを形成しているようだ。

恐らく、長いこと人も電波も足を踏み入れていなかったことによる現象なのだと思う。そして今気付いたがこのエリアに形成されているウエーブロードはマテリアルウエーブに近い電波で出来ている。この分なら、生身の人間でも十分な活動が出来そう

だ。

きっとここは太古の時代、封印を施した人物が電波のチカラを失っても再び訪れることの出来るように作った……のかもしれない。まあ、歴史考証なんてしても意味はないのだけだ。

「……ふう、結構長い階段だったね。もうクタクタだよ……」

「あはは、お疲れ様。って、何だコレ？……ブライの胸にあつた意匠とよく似てる」

階段を上りきった先に広がっていた大広間は正方形の巨大なウエーブロードになっており、その中心には古代ムー文字で綴られた紋章が浮かび上がっている。絶えず変色しながら発光する様は、まるで生きているようだ。正直言って気味が悪い。

「多分、このずっと下の海の中にオリヒメ達が探しているものがある……んだと思う」

「近づいてみると、奇妙な周波数のチカラをヒシヒシと感じるわね……」

エランドやフロントムの時もそうだったけど、やっぱり地球産の電波はあまりなじまないらしい。

地球でチカラを発揮出来ないことにも関係ありそうだけど……って、この気配は……っ！

「オイ、スバル」

「わかってる。この雰囲気……かなり、近い！」

ハーブ・ノートの方も気付いたようで、背中のギターを構えて即座に臨戦態勢へと突入する。

「どうやら、オレ達はそろいもそろってはめられちまったみたいだな」

その正体からすれば意外だが、クスリと鼻を鳴らす音を響かせた後、雷の魔導師がボク達の正面、ムーの紋章中心に現れる。しかし、全く気がつかなかったぞ。どれだけ広い感知範囲なんだ？それとも、ハーブ・ノートに気付かれないようにマーケティングの類いを仕掛けて追跡してきたとか？

『キツくのがショウウショウオソかったな』

「エ、エンプティー……まさか、つけていたの!？」



動揺したハープ・ノートの詰問も柳に風か、感情の揺らぎを見て取ることは出来ない。「アオイオトコよ、ワタシがヒトリでオマエにソウタイするのはハジめてだった。ではアラタめて、ワタシのナはエンプティイー。ワがアルジ『オリヒメ』サマのチュウジツなるブカだ。……さて、ヨクやったぞハープ・ノート。オマエのノウリヨクをタドることで、ようやくこのバシヨまでトウタツすることができた……」

「やつぱりここがアナタ達の探していた……！じゃあ、ここにあるのは一体……」

「そのシツモンのコタえをミせるためには、まずキサマらがモつオーバーツをワタしてもらわなくてはならないが……」

「それは無理な相談だったなあ、エンプティイー？オマエらが欲しくて欲しくてたまらないコイツは、ちやくんとオレの体の中で飼ってやってるぜ。偶に騒ぐのが玉に瑕ってヤツだけどなあー！」

「……まあ、つまらなくても冗談を吐ける余裕があるのはいいことだ。」

酷い悪役の台詞をノリノリで口走るヒーローもどうかと思うけれど。

「どうして、そこまでしてこのオーバーツを求めらんだ？コレは持ち主を破滅に導くと、さんざん忠告してきたくせに……」

「……まあ、いいだろう。オシえてやる。このモンシヨウのマシタにはあるモノがフウじられている……モノとヨぶには、シヨウシヨウスケールがオオキスぎるかもしれない

が……」

「もつたいぶつてねえでさっさと話しやがれ！」

ロックは元々、あまり遠回しな表現を好まないきらいがあるが、今回もその例外にはあたらなかつたようだ。

しびれを切らしたロックの叱咤を愉快そうに聞き流した後、両の腕を広げ、高らかに言い放った。

「このラビリンスにフウインされし、ワレらのサガしモトめていたモノ……それこそが『ムー大陸』！」

「ムー大陸……そんなモノが、未だ発見もされずに現存してるだつて!？」

「このラビリンスでハツセイするトクシユなデンパジヨウキヨウが、それをカノウにした……と、ワレワレのチョウウサではケツロンがデている」

最新の航空機の電子機器をも狂わせる程の酷さなのだから、それほどおかしな話ではないけれど……この近海で活動するダイバー達の間で伝説程度にはなっているかもしれない。

「そしてそのフウインをトクカギこそ……ロックマン、キサマがモつオーパーツなのだ……」

今明かされる衝撃の真実。……知ってたけど。

仰々しい仕草を潜めたエンプティーは、こちらの様子を探っているように見える。しかし、些か下に見られているような気がするのは、恐らく気のせいではないと思う。

「ムー大陸……現代の文明を遙に上回る電波技術を持つていたと言われるヤツらの暮らしていた大陸、だったか。フン、漸くコイツらの企みてヤツが読めてきた気がするぜ」  
既に滅んではいるものの、現代水準を超越した技術が存在した大陸だ。ディーラーのようにサルベージすることで、少なくとも現代の電波技術に対しては優位性を持つことが出来ると言うわけだ。

まあ、実際はもつと酷いリアル夜神月キタハタのことを企んでいるのだが。

「タシヨウのサイはあったものの、すべてはワタシのケイカドオリ……いや、むしろオマエ達のコウドウはワタシのナカマとしてヒきこんだのは、このバシヨをツきとめるためだけではない。オマエがこちらガワにいれば、ロックマンはカナラずオマエをタスけにアラわれる。……ウツクしいユウジヨウというわけだ」

仮面の裏側で酷薄に嘲笑した表情が目には浮かぶようだ。

ここに至つてなお、エンプティーは自身の圧倒的優位を疑っていない。そして実際、それはあながち的を外しているわけではない。出力の差が戦力の決定的差では無いことを、彼は恐らく知っている。

「アトはここでオマエ達フタリをシマツし、オーパーツのデンプカをカモチいてムー大陸をナガキネムリからヨビサますだけだ！」

体中から目映い閃光を迸らせ、臨戦態勢をとる仮面の魔導師。

同時に辺り一帯のウエーブロードの情報が書き換えられ、赤黒い魔方陣を刻んだ模様が敷き詰められた空間と化していく。残念ながら、パネル干渉系統のバトルカードをフォルダから引つ張り出す時間を与えてはもらえないらしい。

「どうかな？ボク達が退く<sup>負ける</sup>道理はない。そうでしょう、ロツク<sup>相棒</sup>？」

「ククク……違いねエツ！」

「ミソラちゃん……ゴメン。キツイバトルになると思う」

「いい。スバルちゃんと肩を並べて戦うの、キライじゃないから。……むしろ、すつごく燃える！絶対勝つ！」

謎の気炎を発するハープ・ノートを横目に、体内で脈動する古強者の魂を自らに共鳴させる。

僅かに漂う霧電波をも切り裂いて、稲光がボク達の体を包み込む。背部にマウントされた大剣を二度三度振って調子を確かめ、改めて前方の強敵を睨み付けた。

「エンプティ、ボクはオマエを倒す。ミソラちゃんだけじゃない……委員長達まで巻き込んで！ブラザーを、ボク達のキズナを貶めた！もつと色々言いたいことはあるけど

……兎に角今はブツた斬つてやる！」

「よかろう……ゼンリヨクでくるがいい、ロックマン！」

『ウエーブバトル！ライドオンツ!!』

澄み切っていたラビリンスの空気を持ち前の苛烈な電波で塗り替えた張本人は、依然として沈黙を保っている。

……いや、無機質な視線がボク達の一挙手一投足に注がれているので、今は様子見と言ったところか。足下に広がる魔方陣に何かしらの細工をしていないとも限らない。既にこの辺り一帯は簡易的とは言え、エンプティーが支配する空間なのだ。いつまでもにらみ合っているのは、決して得策ではないだろう。

隣でギターに手をかけているハープ・ノートに目配せをする。こちらから仕掛けることを悟った彼女が取った行動は、バックステップによる後方支援の姿勢だった。

「……前以外は任せる！」

「任されたっ！」

威勢の良い返事と共に、いつものアンプがウェーブロード上に設置される。総数20機にも及ぶ巨大アンプを全方位からエンプティーを囲むように配置ことで、得体の知れない魔方陣を踏まずに移動するための足場として活用して欲しいということなのだろ

召還されるのはウイルスのみだったような気もするが、妙な罠が仕掛けられていても面白くはない。渡りに船とばかりに飛び乗ることにした。

「うおおおっ!!」

背後から引き抜いた大剣を突き出す形でウオーロックアタックを敢行。

脇腹を狙った刺突攻撃を、エンプテイーは魔方陣から召喚したエランドを盾にするこ  
とでやり過ぐす。

衝撃、そして急制動。大盾を構えたエランドを正面から貫くことは出来たが、勢いは  
完全に殺された。

基本四属性の雑魚ウイルスなら、貫通しながら余裕で離脱出来ただろうに!

爆散したエランドを尻目に齒噛みする。

「ギセイをハラウカチはあった!」

散りゆくデータの向こう、その導師服には深い斬痕がついている。致命傷は避けられ  
たようだが、あちらもタダでは済まなかつたらしい。それなりの手傷を負う覚悟はある  
ということか。

……上等ツ!

「……至近距離ならツ!」

戯れ言を聞き流し、強化した四肢をフルに使った神速の袈裟切りを食らわせ……ツ!?

「ッ!?!」

不意に、軸足へと強烈な衝撃が走る。

完全な意識の外から放たれた敵の攻撃は、今まさに振り下ろしかけていた体勢をとつさには修正不可能なレベルで崩し、結果として思わず踏鞴を踏む隙を晒してしまうことになった。

よくよく見ると、周囲の空間が微妙に歪んでいる。ステルス戦闘機を模したと思われる角張ったフォルム、周囲に溶け込む光学迷彩……ステルスレーザーのヤツか!

「オーパーツはカイシユウする……キサマのナキガラ、そのカタワらからな」

眼前に突き出されたエンプティーの双掌は、地獄の雷を思わせる光を放っている。

回避は不可能。

シールドッ!間に合えッ!

「スバル君ッ!」

背後からの声が聞こえるや否や、死角からシールドを貫通してボクの体を拘束したマシンガンストリングがエンプティーの放つサンダーバズーカの射程から引つ張り出していた。

「……………ッ!」

目の前を地獄の黒雷が駆け抜けてゆく。そのまま慣性に従って引き寄せられたボク



の体は、危なげなくハープ・ノートによって抱えられる。

九死に一生を得たことを理解すると、まるで体中から冷や汗がドツと噴出したような感覚を覚えた。

た、助かった……………。

「大丈夫だった!？」

「お、おかげさまで……………」

あれは本当にヤバかった。

まともに食らっていたら、軽傷では済まなかったかもしれない。

「……………ならいいけど。でも、やっぱり今のままじゃジリ貧だよ……………」

「だよね。後ろから削り合っても勝てる気はしないし」

無手という関係上、あまり接近戦に強いようにも見えないし、実際のところそれは間違っていないはずだ。

エンプティの強みは電波世界の限定的な上書きとそれによる物量、そしてサンダーバズーカ?による遠距離火力だ。あと演算力。

体感した限りでは、内蔵したバトルカードを元になったウイルスに還元している、といったところだろうか。

……………タチの悪いことをする。

「……だから、もっと近づいて仕掛けないと」

「オツケー、じゃあ湧いてくるウイルスの方は任せて。……もう、不意打ちなんて絶対通さないから！」

援護をすと言った手前、さっきの攻防には思うところがあるらしい。ビリビリとした電波圧を感じる。

「……サクセンカイギはオわったのか？」

「へッ、そう減らず口を叩けるのも今の内だぜ」

「行くよ」

「蹴散らしてやるぜエツ！」

ロックの軽口を聞きながら、足を踏みしめて加速し、エンプティーへと突貫する。

爆発的な突進に反応したエンプティーは、仰々しく腕を広げ、周囲に大量のウイルスを展開する。恐らく、搭載されているバトルカードの一フォルダ分全てのウイルスを還元したのだろう。

「疾ッ！」

眼前に現れたコガラシマルを唐竹割りにしながらウエーブロードの大地を蹴り、更に加速を促していく。

進路上に立ちふさがるウイルスを大剣で切り伏せ、そのままエンプティーへと肉迫し

て攻勢にでる。

「サスガにミせてくれる……しかし、ワタシはここでキサマに力たねばならない。オリヒメ様のために……！」

ウィルスを斬り捨てた隙を狙って、こちらに向けた右の掌底から黄金の雷撃を放つてくる。

威力を押さえてスピード・速射性にエネルギーを振ったのだろうか。

何にせよ、掌の向きで雷撃を見切るのは容易い。

「忠誠心は、悪事を誤魔化す免罪符じゃないだろうッ！」

咆吼をぶつけながら刺突、袈裟斬り、蹴撃を織り交ぜながら、多角的にエンプテイの体に斬りつけていくも、仮面の魔導師は思いの外俊敏な動きで軽やかに死線をくぐり抜けていく。

コイツだけクロックアップでもしているのだろうか？回避に迷いが無い。稚拙とは言え、軽いフェイントもかけているというのに。

「キサマにオリヒメ様のリソウをリカイしてもらおうヒツヨウはない。だが、キサマにはここでキえてもらう。オリヒメ様のシヨウガイをハラうこと、それこそがワタシにあえられたシジヨウのソーンザイリユウだからだ……！」

「勝手な理屈ッ！ばっかりだッ！」

雄叫びを上げ、かつて無い速度の突きをエンプティーの中心部に向けて放つ。

パワーならこっちの圧勝だ……!!

「ハアアッ!」

神速で肉迫する雷の刃に、マスクの奥で目を剥いた（ように見えた）エンプティーは両の手に黒雷を纏わせる。

その掌底で挑むは神域の白刃取り。唸りを上げて向かってく死の予感に、エンプティーもまたかつてない程の稼働率を發揮していた。

そして、遂に破壊の光刃と黒雷の掌底が衝突する。

——果たして、死神はエンプティーに触れること叶わず。その切っ先は、人間で言う心臓部の数ミリ先で停止することとなった。

「マ、マジかよ……!?!」

困惑するロツクをよそに、神業と言つて差し支えない見切りを見せたエンプティーはニヤリとマスクの奥で嘲笑する。何せ、攻撃手段の大剣を封じているのだ。このままベルセルクブレード越しに黒雷を流し込もうとしているのだろう。

絶体絶命か。……………いや。

「まだまだッ!」

とつさに主武装である大剣を手放し、両腕を限界まで引き絞る。

「ッ!？」

想定外の動きに面食らうも、捕らえた大剣を放り出そうとするエンプティーの両腕ががっちり掴み、オーパーツによつて強化した腕力で振り払おうともがくエンプティーを押し込める。

SVBで放出するエネルギー相当の雷を両腕に集約し、辺りに目映いスパークをまき散らす。

「ゼロ距離なら通るだろオッ!」

スタンガンなんか目じやない威力でエンプティーの両腕を伝った電撃は、その体の中枢を情け容赦無く貫いた。

魔導師を象つたローブの内部から、何か焦げたような匂いとプスプスとした黒煙が立ち上る。

よろめいたエンプティーは遂に力なく膝をつき、そのまま俯せに倒れ伏した。先程までマスクの奥で爛々と輝いていた光は、既にかき消えている。

……気絶しただけだと思いたい。

しかし今の威力……やはり不定形のエネルギーである雷の操作には、正確なイメージが不可欠と言うことなのだろう。

「……ッ！」

大剣を通さずに高出力で放電したせいか、右腕に突き刺すような痛みが走る。感覚も麻痺しているらしく、指先にもロクに力が入らない。左腕のロックはなんともないようだけど、これではとても身の丈程の大剣を振り回すには、間違ひなく差し障るだろう。

感覚を取り戻すためにグーパーしながら辺りを見回すと、ちようど最後に残った召喚ウイルスをハープ・ノートが切れ味鋭いストリングでバラバラに切断したところだった。よくよく見ると、散見されるアンブ間には、日の光を反射して煌めくストリングが幾重にも張つてあることが確認出来る。花京院乙。

「あ、スバルくん。こつちはちようど今終わったところだよ」

にこやかに戦果を報告してくれるが、正直ちよつとドン引きです……。

ウイルスが消滅する性質をもっていなかったら、きつと屍の山が築かれていたんだらうなあ……いや、ちゃんと役割を果たしてくれた彼女には、感謝しかないのだけど。

「こつちも終わったよ。でも、助かった。ミソラちゃんがウイルスの大群を引き受けてくれなかったら、もつとエンブティーに苦戦してたかもしれないから……」

「負けてたかも、とは言わないだね」

クスリと笑いを零しながら、問いかけられる。

一息つきながら額を拭う仕草は、やけに目映いような気がする。アイドルの放つオー

ラというやつなのだろうか。

「そりやあ……まあ、こつちはズルしてるようなものだし。……それに」

オーパーツが無ければやられていた……のは今更だ。

「それに？」

「あれだけの啖呵を切ったんだ、負けちゃった場合なんて考えないよ」

都合良く前回セーブしたところから再開、とはいかないのだから、こつちも必死だった。肉体を構成しているプログラムの耐久値がゼロになり、塵一つ残さず消滅すると思うと……ゾツとする。だからこそ、そうならないようにこうして抗っているのだが。

「ふふ……頼もしいね」

「そう言ってもらえると、ブラザー冥利に尽きるかな」

「うん、これからもどうぞよろしく！」

「こちらこそ」

「……さ、そろそろ皆のいるコダマタウンに帰ろうよ！久しぶりに、ルナちゃんと目一杯話したいな！」

「オイオイ、たかだか数週間だぜ？」

もうヘトヘトだよ……とげんなりした表情から一転、弾むような声色を響かせたハーブ・ノートにロックが茶々を入れる。思い出すと、ずいぶん濃いスケジュールだった

なあ……

「女の子の数週間は長いの！一日千秋だよ！」

「……ケツ、やつぱりオンナつてのは良くわかんねえな。どいつもこいつもオツクス位単純な方がやりやすいんだが……」

「ケフェウスが頭を抱える姿が目には浮かぶようだ……」

「クスクス……確かに、ありそうな話よね」

「でしょ？」

全身から煙を上げるエンプティーをよそにボク達は、弛緩した雰囲気で和気藹々と談笑を始める。

ラビリンスに来てからは、常に最低限の緊張を強いられていたからかもしれない。

「……つと、そうだ」

「どうかした？」

「えと……その、エンプティーはどうしようか」

何の反応も返さないのですつかり意識の外に追いやっていたが、この場には気絶したエンプティーが撤退することもなく倒れ伏している。

元の予定を早めたおかげで、強化されたブライとエンカウントしないで済んだのは良い誤算だったが、このまま放置していて、ハイド辺りが嗅ぎ付けないとも限らない。



右腕を負傷している現在、脚本家（笑）とはいえ万全の電波人間一人とやり合うのは得策とは言えないだろう。

つまり、選ぶべき選択肢は………そう、一刻も早く逃げるんだよオ！

「うーん……縛ってお話しても、多分仲良くしてはくれない、よね？」

怖いわ。

お話つてなんだ。仲良くつてなんだ。

「厄介ごとを抱え込むのもアレだし、取りあえず今回は放置する方向でいいような………」  
というか、下手にデリートしたらオリヒメ陣営の暴走が始まるかもしれない。

ボクだって、人の心を持っているかもしれない存在を手にかけてくはない。主に精神的に。

攻めてきたFM星人を軒並みデリートしておいて何を今更、という話ではあるが。綺麗事を並べたい時だってあると、そういうことだ。

「まあ、しようがないか……引きずって帰るのもアレだしね！」

しかし、ボク達の間において、アレの認識に決定的な違いがあるように思えてならない………

「あはは……と、兎に角、これで一段落ということ。戻ろうか、コダマタウンに」

「うん！」

最大の懸念だったブライは、やはり『孤高の証』の適合が間に合わなかったらしい。出来うることなら、再戦はラ・ムー戦以降に持ち越してもらえると都合が良いのだけど……

『ヤツの口車に乗って来てみれば……フン、相変わらず反吐が出るようなコトを平然と口にする』

しかしどうやら、そうは問屋が卸さないみたいだ。

不機嫌という感情をとことん煮詰めたような声が、ラビリンスの澄み切った電波に響く。

……と、同時に、辺りを以前とは比較にならない程の重圧が包み込む。エンプティーのそれとは異なり、それはただ純粹に闖入者の拒絶と嫌悪を如実に表していた。

「今の声、そしてこのプレッシャーは……」

まだ現れてもいないというのに、膝が笑っているような錯覚すら覚える。

先程の戦闘からの二連戦……やれるのか？この、負傷した右腕で。

「ああ……この産毛が逆立つようなイヤな感じ……間違いねえ、アイツだ！」

ロツクに産毛は生えていないという事実はさておき、ガルルと唸る相棒が睨み付けた

その先に、とうとうソロは現れた。

あらゆる電波を見通す赤眼は、『カミカクシ』が生み出したゲートをくぐり抜けた瞬間からピタリとボクに照準を合わせている。視線で人が殺せたなら、ボク達はとつくに天国の扉を小気味よくノックしていたことだろう。

「ソロ……」

呼びかけに答えることも無く、ソロはおもむろに取り出した古代のスターキャリアーで見慣れた紋章を虚空に描き、電波変換を完了させた。その足下からは、膨大な黒色のエネルギーが他者を遮るように立ち上っている。

「……キサマとの、決着を付けに来た」

デーパーパープルのバイザー越しに、ソロ……ブライの激情が伝播しているような感覚を覚える。

対峙して改めて感じる純粋な敵意。竦み上がりそうだ。

「け、決着だと？ オマエ、ナンスカでオレ達に伸されたってことをもう忘れちゃったのか？」

全くお笑いぐさだぜ……と煽ってはいるが、肝心のロツクの声は震えているし、冷や汗も流している。それだけ、眼前に立っているブライが以前とは決定的に違うということを感じ取っているのだろう。

「あの時のオレはもういない。……新たな境地に立ったオレが持つチカラ、誇り、魂………その全身全霊でもってキサマの存在を否定する！」

立ち上るオーラが一層の激化を見せ、プレッシャーはいよいよ物理的な重量感すら錯覚させるように変じる。

「や、やるしか………痛ッ！」

「ス、スバルくん!?手……怪我を……まさか、あの放電の時……!?!」

間の悪いことに、察してしまったハープ・ノートがボクの右腕を凝視する。一見すると何てこともないようだが、負傷した右腕は今なお軽いスパークをまき散らしていた。

「キサマの事情などどうでもいい。……さっさと構えろ」

「オイオイオイ……コ、コイツはマジでヤバイ……!スバル、気をしっかり持てよ!多分、今まででダントツにキツイバトルになるぜ……!!」

「あ、わた、ワタシは……」

「アイツの狙いはボクだ。……ミソラちゃんは下がってて!」

茫然自失の彼女に一応の指示を出し、バイザー越しににらみ返す。今の動揺振りだ。フレンドリーファイアよりはまだマシだろう。

視界の端では、ウェーブロードに発生した黒い穴が倒れ伏したエンプティを飲み込むところだった。

……ハイドか。

「え……い、イヤだよ！……一人で戦わせるなんて！」

「じゃ、余裕があればいい！援護を！」

コイツの注意が向かない程度であることを祈りたい。

「ご託は並べ終わったか……？」

「……辞世の句を述べる気はない！行くぞロック！」

勝利条件は相打ち以上。後ハレフ・ノートろに、攻撃の手を通してはならない。絶対に。

「応ッ!!」

「死力を尽くすッ！……ウエーブバトル！ライドオンッ!!」

せめて相打ちには持つて行きたいという、勇ましい言葉とは裏腹に極めて消極的な戦いが今、始まった——！

ただひたすらに、空気が重い。

対峙するブライが周囲にまき散らす負のオーラは以前より一層の激しさを見せている。しかし、迸るエネルギーの中心にいなながらも、ブライ自体は『静』を保ったままだ。元を正せば、こうしてラビリンスの奥地まで来ているのはブライ（と黙認したボク）のせいなんだよな。アメロッパやナンスカを回った身としては色々と思うところがあるわけだが……

……が、いつまでもお見合いを決め込んでいることも出来ない。

——先手必勝。主導権を握られる前にケリを付ける！

「疾ッ！」

左腕にエレキスラッシュを展開。オーパーツによるエネルギー供給先を脚部に集中させ、跳躍する。

無造作に乱立されたアンプを足場にすることで描かれる軌跡を追うことは、決して容易ではないはずだ。

「……………」

ブライに動きはない。余裕のつもりか、はたまた心眼で探っているのか……いや、考えても仕方のないことか。

闘気を纏っていない左後方から跳躍。ヒットアンドアウェイを意識して斬りかかる。

「！」

雷光を放つ刀身は幾何学的な模様を浮かべた青い障壁に弾かれる。

やはり電波障壁。しかし、思ったより柔そうだ。柔いと言つても、強化を施した全力の斬撃が通るかどうか、という程度であつたが。

それでも、向こうのA・T・フィールドがそこまで分厚くないという要素は戦術的に大助かりだ。何せこちらら、フィールド非搭載なので。せめてN?爆雷ください。

「なツ!?か、硬え……………」

「浅い…………ツ！」

障壁で受け止めたまま素早く体を相対させ、勢いのまま振るつてきた右拳をシールドでジャストガード。

どうやら向こうは、ロックにおとなしく驚愕する暇も与えてくれないらしい。

そのまま近距離戦闘に突入。そして当たり前だけど、攻撃のタイミングで障壁は機能しないようだ。

……広義的に解釈すれば、他者に危害を加えようとすることも拒絶からは外れた行為、なのだろうか？

「オ、オイッ！テメエッ！何だよコイツはッ！」

ジャブとストレートの嵐を凌ぎつつ、コンビネーションの合間にバスターを叩き込む。

まっつったく効いていないが、発生するエフェクトを煩わしそうにはしているので、意味が無いというわけではない。

「電波障壁はあらゆる存在を隔てる心の防壁。キサマらの攻撃は……」

左からの掌底を、回転しながらロックの頭部をカチ当てることで軌道修正。ついでにシールドを張ってバツシュを敢行するが、障壁に阻まれ数メートル下がらせる程度に収まってしまふ。

……敵からすれば、距離を取るには都合の良い能力なのか。何しろ、当たり判定が広がる（ただしノーダメージ）わけだからね！

「……通さねえってか!?クソッ、何てふざけたチカラだ！」

「全身！全霊をかけて！キサマらを打ち倒すと言っただろうッ！」

足払いを跳躍して回避。そのままブライの背後に着地。振り向いた頃合いを見計らってチャージショット。



……障壁に阻まれるが、閃光による一時的な目つぶしは成功。障壁の向こうで振りかぶった右腕を確認。右足に耐電性を付与しつつ、余剰エネルギーを全て投入。脚力は腕力の数倍相当。古事記にもそう書いてある。強化したなら尚更だ。

——勇ましく正面から蹴り破ってやらア！

「ツうおらああああッ！」

「……ッ！」

衝突したインパクトで、辺りに迅雷を思わせる轟音が鳴り響く。

……しかし、それに神経をすり減らす必要はない。大切なのはこちらの攻撃が障壁を明確に蹴り碎いたことと、帯電していたスパークがブライの腕を軽く焼いた、と言うことだ。

来いよソロ！電波障壁なんて捨ててかかってこい！

唇の端をつり上げてみせる。虚勢に過ぎないが、平静に対処されてはこちらの勝ち目がない。

精々苛ついていただこうか。

「……………」

這い上がるような悪寒を感じた。

「ッ！」

全力で警鐘を鳴らす直感に従い、反射的に距離を取る。フワリとした風が胸を撫で、振り切ったブライの左腕には黒色の柄に灰を基調とした片刃の直刀が握られていた。

オヒユカスだったら、きつと胸部装甲は真つ二つでしたね……。

ハーブ・ノートの謙虚さを見習うべきでは？という意見はさておき、これで向こうもより積極的にならざるを得ないだろう。最早、障壁が絶対の防御では無いとこちらに知れてしまったのだから。

「……本来のスタイルは徒手空拳じゃなかったのか」

「だけど、それはボク達にとつても都合だ」

「……どういふことだ？」

「何せ片腕でも、そこまでパフォーマンスは落ちない」

未だ握力の戻らない右腕を軽く振って見せる。

「それは——違いねエな」

ニヤリと笑つたロツクが、エレキスラッシュを展開することによつて格納された。

オーパーツの恩恵を受け、雷剣の性能は二段飛ばしに飛躍する。一切の漏電を許さ

ず、純粹に接触時火力と切れ味に特化した様は、まさしく秘剣と表現して差し支えない。  
「仕切り直しだな。……行くぞ」

「来る……ッ！」

剣戟の応酬が始まった。

「ハアッ！」

袈裟斬り。足払い。上段突き。唐竹割り。右薙ぎ。シールドバツシユ。左切り上げ  
……まで切り結んで理解したことが一つある。

それは……

「巧い……！」

単純に、剣術の技量が高いのだ。

こちらの太刀筋にそつと剣を合わせ、流すように軌道を逸らす。先程までの荒っぽい  
コンビネーションとは雲泥の差だ。

間違い無く、相手は連綿と紡がれた歴史に裏打ちされた技術を持っている。

「隙だらけの動きだな」

銀閃が瞬く。速い……ということを理解する前に左腕が弾かれた。

咄嗟に構えた右腕ごと浅く斬りつけられる。焼けるように痛い……が、痛みに嘆く暇  
も無い！

「足裁きも悪い。……オーパーツのエネルギー供給に無理を言わせた強引な強化の弊害ということか」

距離を取り、斬撃の範囲からやつとの思いで抜け出した。斬られた数は片手で収まらないが、致命傷は無い。

だが、スピードに任せた剣線は既に見切られつつある。これ以上の継戦も難しい。

……然らばっ！

「<sup>ベルセルク</sup>トライブは見せかけだけじゃない……ロック！」

「おうよ！」

右腕に纏うようにロック本来の腕を展開。ボクでは無くロックが独立して動かすために精密な連携は不可能だが、両の手で大剣を握りしめて振り下ろす位なら出来るはずだ。

代償は無理に動かすことよって発生した激痛だが、後遺症になるようなレベルではない……と思う。

「長引けば不利と悟ったな？……いいだろう！正面から切り伏せてくれる！」

「終わりにしよう！……ブライ！」

エレキスラッシュを格納し、ベルセルクブレードを再展開。硬く握りしめ、肩に乗せるように担ぐ。

脚力・腕力・切れ味に全開で強化を施し、いざ突貫。

凄まじい反動が予想されるが、最早なりふり構ってはいられない。

『カミカクシ』で皆が世界中に飛ばされた時に見た、悲壮さと苦悩。

委員長の青ざめた表情、キザマロがはき出したコンプレックス、傷ついたゴン太の魔された顔、そして今まさに後ろで怯えている、ミソラちゃん。

でも、もうイヤだ。あんな顔はさせたくない。

……後悔はした。なら繰り返し返さない。原作など知ったことか。ボクは僕のやりたいようにやる。

これは僕のエゴだ。でも、だから、負けたくない。こんなこと、何でも無いと言い放つてやる！

「おおおおおツ!!」

「その威勢を完膚なきまでに砕く！そして証明してやろう！いかにキズナのチカラが脆いのかを！」

雷刀を振り上げ、叩き斬る。

今まで幾度となく繰り返し返してきた行為だが、断言出来る。

間違い無くこれは、最高の一太刀だ。

「サンダーアボルトツ！ブレイドオツ！！」

「ブライブレイク！ソリチュードオツ！！」

黄金の暴雷と滅紫の豪炎の衝突が、辺りを光嵐の渦に包み込んだ。

◇

目が眩む。ラビリンスの澄み切った空気を、いつそ冒瀆的なまでの混沌さが侵していく。

「ミソラー！」

抱えたギターのマイクから発せられた声にはつとずる。

……いけない。ぶつかり合う火線一つ触れただけで、この体にとっては致命傷なのかもしれないから。

せつかく庇ってくれているのに、最低限の自衛すら出来ないんじゃないやスバルくんに示しがつかないもの。

「ワタシは大丈夫だよ、ハープ。……でも、スバルくんは……？」

そうだ、これだけのチカラの衝突。当事者のスバルくんが無事なワケがない。

一緒に電波人間として活動していた時は、よくリカバリー万能説を提唱していたけれど、こんなピンチにそうそう上手くいくとも樂觀視しきれない。

……っ！

エネルギーの拮抗が収まった。……つと、いうことは……！

「決着が、付いた……？」

戦場を取り巻いていた光の暴風雨が晴れ、視界が拓いていく。

影は二つ。片方は膝をついているが、どちらもデリートには至っていない。その事実  
に少しだけホツとする。

電波世界でデリートされるということは、つまり、その、現実における死を意味する  
わけで……。

「ツ……スバルくんツ!!」

完全に回復したワタシの瞳は、膝について苦悶の表情を浮かべるブライと  
両腕を振り下ろした姿勢のまま、辛うじて立っているであろうスバルくんの姿を捉えて  
いた。

良かった……本当に良かった……ッ！

安心した途端、膝の震えが止まらなくなってしまう。さつきまでは恐怖で笑っていた  
膝を必死に立て直そうとしていたと言うのに。

決着が付いた以上、これ以上オリヒメ達が追いかけてくることもないはず。

エランドの大群を新たに呼び寄せる可能性も捨てきれない今、ワタシ達は一刻も早くこの場を離脱した方がいい。

未だ笑い続ける膝にムチを打って、必死になって戦ってくれたスバルくんの側に駆け寄る。

こういう時は何て声をかけたらいいのかな？アンドロメダの時は側にいられなかったし。

『ありがとう？』『ごめんね？』……それとも『かつこよかったよ』、とか？

むむむ……頬が熱い。いけないな。スツゴく頑張ったスバルくんは邪な感情を向けるわけには……。

「えっと……だ、大丈夫だった……？」

心の中でチキンな選択をしたワタシにヒートアップを叩き込み、スバルくんの肩を軽く叩く。

正面に回り込んでいるわけではないのでその表情を伺うことは出来ないが、きつと疲れ切った顔をしているんだらうな——

「……ゴホッ！」

え？ゴッホ？どうして今？等という疑問が氷解する前に、肩を叩かれたスバルくんは



ベルセルクの強化体を解除しながら倒れ伏してしまう。水を打ったような静けさが場を支配した。

……血の気が引いていく。冷や汗が滝のように背中を駆け巡る。心臓の鼓動数を押しさえられない。

「クツ……ここまで張り合つてくるとはな……流石、一時とはいえ時代を征した種族のチカラ、か」

「そんな……嘘……」

「だがこれでヤツを……キズナのチカラを超越したことは証明された。そして次は……キサマだ」

絶対零度の視線がワタシの体を無慈悲に貫く。まるでゴルゴンの瞳に睨まれたように自由がきかない。

そんな絶望的な状況の中で、ふとした疑問が生まれる。

「ア、アナタはどうしてそんなに……いえ、どうしてそこまで他人を拒絶するの!？」  
「ミソラ!？」

わき上がる疑問が濁流のような勢いとなって発せられる。

「時間稼ぎのつもりか？」

「違う!でも、ええ、認めるわ……アナタは強い。それもただチカラに任せて暴れている

わけじゃない……それを扱うだけの技術を持っている。修めるには相当の修練が必要だったはずよ。だからこそ……それだけのチカラがあつて、どうしてこんなコトを!」

ただ鍛えるだけじゃ、ここまで強くなることは出来ない。絶対にその心を支えた信念……決意の原点がある。

「……キズナについて御高説を垂れるようなヤツらは、所詮一人では何も出来ないクズばかり……」

「何を……?」

「弱い者同士が集まつて、あたかも自分達が強者であると勘違いをする。それがオマエらの言うキズナの正体だ……!」

「……そんなことない! ワタシやスバルくん、ルナちゃんだって、お互いを大切に思つていても、それを笠に着たコトなんて絶対にしないわ!」

ありえない! ワタシ達はいつも、お互いを思い合い、心の中では支え合つてきた!

それは確かなコトで……だからこそ! 絶対に否定されたくない!

「……相変わらず、オマエ達の言葉は反吐が出る。いつまでも綺麗事を口にし、その醜さを全く理解しようとしめない! 仲間だの友情だの……薄っぺらい嘲笑を並べて同調し、その本質は外敵と定めただけの人間を排斥することに何の躊躇いも持たないような存在だ! もう一度言うぞ。……反吐が出る!」

「どうしてそう決めつけるの!? アナタがそこまで人の繋がりを……キズナを憎む理由は何!?!」

「……フン、いいだろう。教えてやる」

倒れ伏すスバルくんを一瞥し、鼻を鳴らしたブライは背を向ける。

あの障壁がある限り、ワタシでは傷一つ付けられないのがわかつているんだ。

——悔しい。

……でも、出来ることはある。

ワタシは震える手で『リカバリー150』を取り出すと、気を失ったスバルくんの体の上に放る。効力を発揮したカードが溶けるように体内に入り込んでいくのを見届けた後、ワタシは彼の言葉に耳を向けた。

まだ、終わってない。諦めるには早すぎるんだ。

「キサマらのような存在を憎む理由、それは……オレが、たった一人だからだ」

「……そんなこと」

そんなこと、ワタシ達だって元はそうだった。

いつも孤独を抱えて日常を送っていた。でもワタシは、ワタシ達は繋がりを……キズナを手に入れた。そして……あのころより、確実に強くなつたハズ。それが確かにキズナによつてもたらされたものなのだ、ワタシは信じている。

「……そんなことで済まされない所以があるということだ。そしてそれは、オレにとつて生まれながらに不変であることを決定づけられたもの。オレは現代にただ一人残された……ムーの生き残りだ！」

「ムーの……?」

「確か、ムーが滅びたのは文献もロクに残っていない程の遙か古代。そんな時代で生きていた人間の血を引いている、ですって!」

冗談じゃない!とハウリングしたハーブの声がマイクから飛び出すも、煩わしそうにするだけなのは、この反応になれているからなのか、それとも……

「……続けるぞ。オレはムー大陸で生きていた人間の血を引く、最後の一人……」

物心ついた時から、オレはムーのチカラによって電波を瞳に映すことが出来た。そしてオレの手には『ムーの遺産』であるスターキヤリアーがあり、電波変換が可能だった……」

『ブライ』はムーの遺産によってもたらされたチカラだったのね。

とは言え、これほどのチカラ……恐らく、彼の血筋は当時の王侯貴族に値する階級のものだったのだろう。

「いつもバケモノ扱いだった。ワケのわからないチカラを持っただけの子供であるオレは、周りの人間にとって『恐怖』でしかなかったというわけだ……」

どれだけのチカラがあったとしても、子供一人であることに違いはない。

周囲の『大人』達はそれを恐れ、悪し様に扱っていた……?」

「そして、いつのまにかオレは攻撃の対象になっていた。……相手はいつも複数だった。必ず大勢で一緒になってオレを襲った……」

怨嗟に満ちた表情。

ワタシには『歌』という『商品』があったから、マネージャーだったあの人は一応の友好を示してくれていた。

最も、歌うことに忌避感を覚えるようになってからは酷いものだったけれど。

……でも、彼には『チカラ』しかなかった。だから大人達は恐れたんだ。

そして、チカラによって酷い扱いを受けた彼にとつてそれを数で覆された挙げ句否定されるのは、ただの屈辱でしかなかった……

「そうやって集団でオレを襲うヤツは決まって、一人では何も出来ない臆病者だった……！」

握りしめた拳から僅かなデータが舞い、ラビリンスの空に消えていく。

……きつと、自傷行為に対しては障壁が発生しないんだ。

「コイツらは弱い……」

だから群れを作る……

一人じゃ面と向かって罵倒することすら出来ないくせに、数が増えたと急に偉そうになる……！」

苛立ちを浮かべた顔を奥底に押し込めるようにして消し、再びむき出しにするのは純粋な敵意。

これは、既に自分の中で答えを出しているように見える。言葉が通じるとも思えない。少なくとも、今のワタシには彼を説き伏せられる絶対的な自信はない。

……それでも。

「……オレは誰も必要としない。それはオレが強いからだ。」

キズナはオレが最も憎むべき敵だ。キズナの醜さを生きながら味わってきたオレからすれば、キズナを否定することこそがオレの強さを、存在を証明することになる！」

「……アナタは、今まで何度もキズナに否定されてきたのかもしれない。でも……」

キズナには人を変えるチカラがある。

たとえばどんなにそのキズナの輪が小さくとも、それが心の支えにさえなれば、誰よりも強くなれる！

「だからこそ、オマエ達のようにキズナが何より大切だとほざくヤツらを見ると苛立たしくなる。……このオレの“血”が、無性に騒ぎ出すんだよ！ヤツらの全てを否定しろ、とな！」

「……確かにワタシは、誰かにすがらなきや生きていくことも出来ない弱い人間かもしれない。でも、だからこそ！こんなワタシを支えてくれるキズナ友達を否定されたくない！ワタシを変えてくれたキズナは、決して脆くなんてない！」

「そこに横たわる男の姿こそ、キサマらのチカラが脆く儂いことの証拠ではないのか？」  
「チカラが及ばなくとも、心は決して折れてなかった。……スバルくんは、自分出来ることを全力でやってくれた。だから今度はワタシの番。ワタシは、ワタシのキズナを守りたい！」

「ポロロン………ミソラ………アナタ、随分強くなったわね……」

「……所詮は虚勢だ。方に一つもキサマに勝ち目など巡ってこないことは理解しているだろうに」

「ええ、だから考えたわ！アナタを退ける方法を……ロックくん！」

この場の誰よりも敏感な聴覚はスバルくんの覚醒を知らせてはくれなかったけど、天は全てを見放したわけじゃない。彼の左腕に息づく相棒の目覚めはバツチリと捉えていた。

「……良くわかったな。だがスバルはまだ……すまねえ」

申し訳なさそうな声色のロックくん。今のロックくんにとつては恐らく、電波変換を維持しているだけで相当な負担になっているはずだ。体を構成するプログラムだけが、戦闘で発生する余波からスバルくんの命を守っている。

「ううん、今度はワタシが全力で応える番ってだけ。それよりロックくん……オーパーツを」

「なツ!?……やめとけ！コイツは暴れ馬なんてモンじゃねえ！下手をすると、心の奥底をズタズタに食い破られちゃうかもしれないぞ!」

「スバルくんは、キズナのチカラでオーパーツを制御してた。なら、ワタシもスバルくんが信じたキズナのチカラを信じたいの。……お願い」

「ああもう、わかった、わかったよ……後悔するなよ!」



「ありがとう、ロックくん」

「……フン、目を覚ましたスバルコイツには、オマエがバカをやったつて言つといてやる」

「あははは、手敵しいなあ……そこは嘘でも最高に可愛くてかつこよくて素敵で可愛かつた、にするべきじゃない？」

「オマエ、たまに凶々しいつて言われぬか？」

「自分を上手く表現しようとするのは歌手のクセみたいなものだよ……なんてね」

「ケツ……オレも、そろそろ限界だ。……後は頼むぜ、ミソラ」

「……うん。ごめんね」

ロックくんからせり出してきたオーパーツを力強く引き抜きながら、精一杯の気持ち  
を口にする。

……凄いちカラの脈動。持つているだけで飲み込まれそう。ロックくんが言つてい  
た暴れ馬という例えすら生温いようにすら感じられる。

「……やっぱりオンナつてやつはわから……ねえ……な……」

「……」

ロックくんの目が閉じた。鋭敏な聴覚は、二つの規則正しい寝息をキャッチしてい  
る。

後は……ワタシだけだ。

「ワタシは逃げない。最後まで諦めない!……一人ぼっちで歌つてた頃の弱いワタシとはお別れをしたからツ!」

お願い。

オーパーツ。アナタがスバルくんの想いに応えてくれたのなら。

今だけでいい。ワタシの何を犠牲にしたつていい。

もう一度、皆で笑い合える日々を取り戻すために。

ワタシの勇気を、彼に対抗できるありつたけのチカラに変えて!

『そのネガイ、カナえよう。ヤドヌシのイノチはワレラにとつてもオしいユエに、な』

——聞こえた。感じた。そしてはつきりわかつた。理解した

……これが、オーパーツ。体が羽のように軽い!チカラが溢れてくる!

「つく、うとう……!」

熱い!

湧き出るエネルギーの勢いが止まらない!

スバルくんはいつも、涼しい顔でこんなものを扱つて……!

「ミソラー！オーパーツを手放しなさい！……ソレは危険よ！」

「このエネルギーを全力で放出し続ければ……いや、それじゃダメ。スバルくんはこのチカラを体中に纏っていた。なら、やらなくちゃいけないのは考え無しの暴発じゃない。もつと抑えて、密度を高めた状態で維持すること……！」

溢れ出る雷エネルギーを、全身をすっぽり覆う程度の球体の中に押し込めるイメージ。

周囲にとどめた雷撃を、体中隈無く浸透させていく。

「……これでー！」

全体からシルバーの鈍い光を放っていたオーパーツが、握りしめた手の中で雷光に包まれた。

今まさに沸騰せんとばかりに煮えたぎっていたチカラが、まるで春の日差しを浴びたような心地よい暖かさに塗り変わっていくのがわかる。

——迷宮の静寂さを切り裂く稲光が一つ、ワタシの体を貫いた。

「……全く、つくづく度し難いことをする」

チカラ強い雷のエネルギーラインを刻む白銀のガントレット。五指を包むのは、穢れ無き純白のグローブだ。

同じく白銀で彩られた脚甲は、ラピリンズに差し込む陽光を反射して煌びやかにその

存在を主張している。ま、眩しい……

どこか高貴さを備えた赤マフラーを後ろに流し、ワタシは取りあえず自身の見た目を品評した。

……後でスバルくんは文句を言つてやろう。どうしてこんなにゴツいんだつて。

でも、そのために取りあえず目の前の彼が邪魔だ！

「これ以上、スバルくんを傷つけさせはしない！」

逆手に構えるのは、戦闘用の形態に変化したダガータイプのオーパーツ。刃渡りはあの程度変更出来るらしい。

どうせ身の丈程の大剣など扱えないのだから、出来れば手数で圧倒したいところ。卓越した技量すら超越した強化が可能なのがオーパーツの触れ込みだと、以前スバルくんから聞いた覚えがある。

……けど、今はそんなこと関係無い。

「……が、キサマを葬ることに変わりはない。………消えろ」

「今のワタシには、守りたいモノも、人も、信念もある！だから絶対……絶対には折れない！折れちゃいけない！」

高速戦闘には使えないギターを仕方なく背負う。煌めくダガーを握り締め、気炎を滾

らせた。

心臓の早鐘が止まらない。闘志が燃え上がる。まるで体がもつと前にと急かすようだ。

ワタシは今きつと——スバルくんと同じ場所に立っている。

「ポロロン……さあ、意地の張り合いを始めましょう！」

付き合ってくれるハープに感謝の念が消えることは無い。

そしてその気持ちに応えるにはただ一つ。

……勝利。勝利だけがあればいい！

「ウエーブバトル……ライドオン！」

じゃあ行こう。……ワタシの、大切な相棒パートナー！

◇◇◇

幾度もの攻防が繰り返される。競り合うことすら出来ないレベルの圧倒的な戦闘力の差は、ロックマンとの激突に伴う消耗によって既に埋められていた。

適度な高揚感の中、ワタシはいつそ冷ややかなまでに現在の状況を正確に悟っていた。心は燃え上がる程熱く滾っているのに、思考だけが氷漬けでもされたように最適解

を導き続けている。

死の煌めきが迫る。冷静に強化された動体視力で見切り、軌跡上にダガーを配置。

……ッ！重い……けど、受けられる！

「……弱いクセに、足掻いても見苦しいだけだ」

鏢迫り合いの火花が散る中、ブライが口を開く。

軽く切らした息と共に、拮抗するパワーへの驚きが含まれているのが感じ取れた。

「まだわからない!? ワタシには、足掻き続けるだけの理由がある！」

「下らないと言ったハズだ! ……キサマらは一体、何度同じ言葉を口にさせれば気が済む!」

「なら!」

「ならどうしたッ!」

「それを勝手に否定して、あまつさえ壊そうとするアナタには絶対に屈しない! ただそれだけだよ!」

エネルギー供給をカットし、ダガーの刃を消失。半身になることで、刀身の軌道上から退避する。

これまでの攻防で、空振りによって崩した体勢を咄嗟に整えられない程度に消耗していることは、既に見抜いていた。

致命的な失策を悟った彼の眉間に刻まれた皺の一本に至るまで、ワタシの超感覚は捉えている。元々、戦闘における情報戦では圧倒していたのだから。ただし、それを生かし切れない程彼に隙がなかったというだけで。

「チイツー！」

エネルギー刃を最高出力・密度で生やし、ダガーを順手に持ち替える。ついでに左手も添え、脚部強化によって生み出された爆発的な加速でもって突貫。

……正面から叩き付ける！

「フラッシュ・ステインク  
雷光一閃！」

……が、やはり障壁に防がれてしまう。どうしても、素の一撃ではこの壁を突破することが出来ない。

あれだけパワーにリソースを振ったスバルくんの斬撃が通じていないことから、それは明らかだ。

だからこそ、この瞬間を待っていたんだ——ッ！

「……そんな刺突程度が、この電波障壁を突破出来ると……？」

膝を付きながらも余裕を取り戻したブライが嘲笑を浮かべて言い放つ。きつと彼の目にはワタシは酷く滑稽に見えているのだろう。いくら慣れないチカラとは言え、今

さつき通用しなかった正面突破を試みているのだから。

……でも、ワタシとスバルくんでは決定的な違いがある。……パートナーだ。

故に、その特性を知らない彼の不意を突くことが出来る。

「貫けないのなら……」

「……何を言っている？」

「……削り斬る！」

このダガーはただの高エネルギー刃じゃない。

刃身のみをハーブの音波振動を操るチカラで高速振動バイブレーションさせることにより、その切断・貫通

力を比類無く高めた必殺の電刃！

……これなら！

「届けエエエツ!!」

ちよつとスバルくんには聞かせられない絶叫と共に押し込んだ刃は瞬く間に障壁の耐久値を削りきり、ステンドガラスが割れた時のような甲高い音を響かせて粉々に四散させた。

「ツ！オオオオオオオツ!!」

咄嗟に両腕をクロスさせて胴体を防御するけれど、もう遅い。

そんなものに止められる程ワタシの刃は、背負った想いは軽くない。



心底驚いたとしても言うべき表情の、そんなアナタが犯したミスは一つ。たった一つだ。

即ち。

「乙女を舐めるなアアッ!!」

爆音唸らせる必殺の電刃が、抵抗虚しくクロスした両腕ごとブライの胸を貫いた。

◇◇◇

「ぐ……バ、バカな……!」

胸を押さえるブライの体にムーの紋章が浮かび上がったかと思うと、次の瞬間には電波変換が解除される。

ソロは膝を付き、生身を晒す格好になっていた。

……これで、ようやく……!

「……ハア、ハア………うっ!」

全身からチカラが抜け、増加装甲が消え失せる。握りしめたオーパーツは、鈍い光を放つばかりだ。

やっぱり、無理な強化が体に与える影響は強い。こんなに危険なチカラだつてことをどうして言わなかったのか、小一時間は問い詰めてあげたいくらい。

……あまり、心配させないでほしいから。

「……大層なことを言っているようでも、結局は大人数でオレを迫害したヤツらと、何一つ変わらない……キサマらの言葉は何一つ、このオレの心には響かない……!」

確かに、彼の言う通りかもしれない。ワタシ達が数のチカラを使ったのは事実だ。

……だけど。

「それでも……それでも今、ワタシがアナタに屈せず立っているのは……皆とのキズナがあるからなんだよ……」

「……そんなもの、だれが認めるもの、か……」

最後までこちらを睨み付けながら、ブライ……ソロは氣を失った。

ホツと息が漏れる。

これでまた、ワタシは戻ることが出来る。スバルくん達がいる日常へ。

……些か、日常と呼ぶには今の状況が危デンジャラス険であることは否定出来ないけれどね。

「スバルくん……や、やっと終わったよ……。帰ろっか、コダマタウンへ……」

痛む体を引きずってスバルくんの元に向かう。人一人背負っていけるかは既に怪しいけれど、フロートシューズ辺りのアビリティを装備させれば重さは消えるはず。何とかなる……いや、何とかしてみせる。

『ソフフ……困るなア、キャストの手前勝手で舞台袖に退かれては……ワタシの脚本はまだ、幕引きに至っていないというのに』

「ッ!？」

背後からかけられた声に、背筋が一瞬で凍り付く。

——背中に衝撃。どうやら斬り付けられたらしい。ぼんやりと薄れゆく意識の中、咄嗟に振り向いて収めた視界の中央には、ニヤついた笑みを隠そうともしないフアントム・ブラックの姿があつた。

「やれやれ……脚家家自ら幕引きに現れるなど、とんでもない展開もあつたモノだ。自画自虐に値する。しかし……いやはや、これも終わりよければ、というヤツなのかね？」  
倒れ伏したワタシの元から、オーパーツの強大な電波が遠ざかつていくのを感じる。  
守れなかつた……ッ!

「ソフソフ……ソファァーハッハ!遂に、遂にオーパーツをワタシが……ッ!エンブ  
ティーも、ソロすらも失敗したオーパーツの奪還を、このワタシが成し遂げた!これぞ  
オリヒメ様の信頼は、一気にこのハイドに傾くであろう!……素晴らしい!最高のクラ  
イマックスだ!ソファァーッハッハ!!」

今は……スバルくんの安全を優先しない、と……

伸ばした掌がスバルくんに触れる前に、ワタシの意識は完全に暗転した。

## 第七話 『ザ・クリエーター／ロスト・ピープル』

66

——アジトにて。

オーパーツ奪還より、既に丸一日以上の時が経っていた。

未だ歓喜の渦に飲まれたままのハイドは、待ちに待った機会に意気揚々とオリヒメの御前で傳えている。

ようやく奪い取ったというのに、正式な報告が遅れていたのは一重にエンプティーの為。

オーパーツの周波数を纏った金雷は、エンプティーの活動能力に甚大な障害をもたらしていた。それをある理由からエンプティーの構造について理解の深いオリヒメが、調整にチカラを注いでいたのである。

「さて、まずは良くやったと褒めてつかわそう、ハイドよ」

普段は凍てつくブリザードのようなオリヒメの美声も、この時ばかりは春の柔らかな日差しのように風いでいた。

「ははっ……しかし、これもオリヒメ様へも忠誠あつてのもの。その御力の一助となれま

したこと、このハイド最大の喜びにございます！」

「ほう、中々頼もしいことを言ってくれてるではないか。しかし、どうにも解せぬことがある」

敬愛する上司からの賛辞に、ますます調子づく似非紳士。

だが、オリヒメには小さな疑問が生まれていた。

「はっ！何なりと！」

「お主がオーパーツを奪い取った際、何故あやつ等を始末しなかったのだ？……いくらでもチャンスはあったのであろう？」

「私もそう思ったのではございますが……」

ハイドが言い淀む。その顔は、まるで世にも恐ろしいものを見たかのように強張っていた。

「どうした？はつきり申してみよ。今の妻は気分が良い。咎め立てする気は無いぞ？」

それは、オリヒメにとつても科学者時代の性分が顔を出したという程度のこと、そこまで気にしているわけではなかった。なににせよ、オーパーツが既に手元にある以上は、些末なことでは無いのだから。

所詮は子供の一人や二人。ムー文明そのもののチカラを前にしては、煩わしいハ工程

度のモノであることは明白であつた。少なくとも、この場にいる二人の心中では。

「し、信じがたいことではあるのですが……私が引導を渡そうとした瞬間、彼らの体内から大量の電波オーラが溢れだしたのでございます。そしてそのオーラは……その、まるで人を象つたような姿をしていまして……」

あの時、バミューダラビリンズの奥地でハイドは確かに二人に引導を渡そうとした。しかし、それを遮るように彼らの内部より多量の電波が吹き荒れたのである。

ハイドとしては、既に目的は達成されているようなもので、不穩分子の排除は単なる点数稼ぎに過ぎなかつた。故に大事をとつて帰還を優先した……と言えば聞こえが良いが、実際にはいかにも亡霊然としたベルセルクの姿に恐れをなしただけである。

「それは恐らく、オーパーツに眠るベルセルク達の残留思念というヤツだろうな。……しかし、不思議だ。それは、オーパーツをあやつから抜き取つた後の話なのであろう?」

「……その通りにございます」

御簾に包まれた人影が、顎に手を当て思考の海に浸かる。

そして幾ばくかの時が過ぎた後、喜色気味に口を開いた。

「ふむ……いや、寧ろこれは妾の計画にとつては良い状況だな。お主が奪取してきたそのオーパーツ、強大なチカラは感じるが、それだけだ。膨大な電波を垂れ流すだけで、作為的な意思の類いはまるで感じない。これはつまり、ベルセルク達の意味がヤツらの体

に乗り移つたというコトであろう。……でかしたな、ハイド。これでオーパーツを制御する手間が相当に省けそうだ」

「は、ははっ！」

思いがけない手柄に、棚ぼた精神でハイドは内心、ガッツポーズを決める。

「エンプティーがまだ全快とはいかぬのは残念だが……まあ良い。これでついに実現するのだ。妾の抱いた、積年の夢がな」

「ムーの復活……で、ございますね」

「そうだ……幾多もの幸運に見舞われはしたが……決して、容易い道ではなかった」  
「ええ……」

これまでをしみじみと振り返るようなオリヒメの声が響き渡る。

ハイドも瞳を閉じ、乗り越えてきた苦難を思い起こしていた。無論、ロックマン関連の出来事乗り越えられなかった苦難は記憶の彼方に吹き飛ばしていたが。

「全てはあの遺跡……ムーの生き残りが、かつて地上に遺した遺跡を見つけたことが始まりであつたな……」

かつて科学者だつたオリヒメは、その興味を古代文明へと向けていた。

一個人が世界を相手取るにはチカラが必要だつたからだ。そう、圧倒的なチカラが。

「そなたらに授けた『古代のスターキャリアー』もそこで発見したモノ……遺跡自体は目

も当てられぬ程風化してはいたが、その端々に見受けられる文明の一端に、妾は確信した……」

遺跡にはムーの手による隠蔽が施されていた。しかし、マテリアルウェーブの分野に明るいオリヒメにとつて、風化しかけていた物質電波程度の隠蔽を見破ることは、そう難しいことではなかったのだ。

「ムーのチカラは現代の文明を遙かに上回っていた、とな」

オリヒメは遺跡で回収した発掘品を解析・修復した。

程なくして、オリヒメは『古代のスターキャリアー』内で眠っていた電波体の存在に気付く。

彼らは粗野で厄介者ではあったが、歴史を知っていた。彼らは現代に生きる者が知り得ることの無い、ムーの歴史における生き証人だったのだ。

「そう、ムーとはただの古代文明などではない。圧倒的な電波のチカラで世界を支配していた存在だったのだ。それを妾の手で蘇らせる……『新・ムー帝国』としてな」

「そして、ムーのチカラを手中に収めたオリヒメ様は、世界の支配者に……と、そういう筋書きですな！」

実にシンプルでいい……と、喝采を上げるも、反応が返ってきたのは自身のスターキャリアー内のフロントムだけであつた。肩を竦めてみせるハイドをよそに、厳かな口



振りでオリヒメは言葉が続ける。

「この地球は、大勢の愚かな人間と、ほんの僅かな天才によつて構成されている。……歴史を紐解けば、誰にでもわかる単純な構図だがな。故に、一握りの天才が大多数の愚民共を支配してやる必要があるのだ。それこそが、愚かな者どもにとっての幸せでもある……」

溜息をつくような、ある種艶めいた悩ましげな美声はハイドの単純な脳みそをこれ以上ない程に刺激し、忠誠心を一層に募らせていく。

「ソッフ……実に、実に素晴らしい！このハイド、脚本家としての自信が崩れ去つてしまふいような程ですぞ！」

「……ハイドよ。そなたにはまだ、妾の姿を見せていなかったな。……これは、大義を果たした褒美である」

御簾が巻き上げられ、遂にベールに隠されたその姿が露になる。

息を飲む、音が響いた。

「お、おお……私如きにお姿を晒していただけるとは、ありがたき幸せ！」

「これよりが計画の肝心要である。よいかハイド。妾が求めるは、優れた人間のみに……決して、失望させるでないぞ」

「ははっ！」

「さあ、参るぞ！新時代の幕開けに相応しい……史上最も偉大なる文明の始まりを、高らかに謳おうではないか！」

◇◇◇

『……！……！……！君！起き……！君！』

心地よいまどろみの中、誰かが僕に呼びかけている。

誰だろう、人が気持ちよく惰眠を貪っているというのに。

安寧の時を乱す何者かはどうやら諦めの悪い性格らしく、体を揺らすという強行手段に出たようだ。

真つ暗な視界が揺れに揺れた。意識が急速に浮上していくことを、否応無しに理解させられる。

だが、そう安々とこの安息を手放す気はない。身をよじつて抵抗を試みる。

とにかく今は眠くてしょうが無いんだ……。

『このツ、起きろつて言つてんでしようが！』

手刀染みた物体が、風を切つて僕の額に吸い込まれるような音がした。

「あばっ!?!」

◇◇◇

痛む額をさすりながら、慣れ親しんだベッドの上で体を起こす。

太陽が眩しい。浄化されてしまいそうだ。

……つて、あれ？

見慣れた間取り。見慣れた天井。見慣れたドリル。

間違うワケがない。ここは僕の部屋だ。

そして察する。そうか、僕は負けたのか。そしてコダマタウンまで帰ってきた記憶も無い……。ので、恐らく僕の体をここまで運んできたのは……

「……ミソラちゃん？」

「一体何の夢を見ていたのか、問い詰めたくなくなるような第一声ね……」

「あ、委員長」

「あら、おはようスバル君。調子はいかが？」

……外傷は無い。恐らく、倒れた僕にハープ・ノートが治療を施してくれたのだろう。

つまり、僕は、負けたのか……ッ！

ちくしょう。あれだけの大口を叩いておいて、何てザマだ。

……いや、今はあまり本心を表面化させるべきではないな。

「ええつと、まあ……大丈夫、かな。ところで、さっきのはモーニングサービスか何か？」  
凝りきった体を解しながら、イヤににこやかな委員長に問いかける。

「気に入って貰えたかしら？」

まあ、覚醒する原因となったことに間違いはない。

……威力はモーニングスターの間違いじゃないかってレベルだったが。

「モラルの是非はどうあれ、メモリアルだったのは確かだね」

「そう。なら良かったわ。何せアナタ、丸一日以上グツスリだったんだから。皆心配してたのよ？」

僕は何と丸一日以上も床に伏せていたらしい。

割と最悪に近い状況に陥っているはずなのに、どうしてこう、普通なのだろうか……？

「委員長の機嫌はさておき、そんなに寝込んでいたのか……って、大事なのはそこじゃない。あの後、どうなった？ ミソラちゃんは？ 尾上さんは？……委員長達は無事だったの？」

「そうね、取りあえずワタシ達は無事だったわね……って、談笑してる場合じゃないわ！ 早く、いえ、今すぐリビングにきなさい！ テレビの放送がジャックされて、凄いことになってるのよ！」

「え？……あ、はい！」

テレビをジャック……宣戦布告的なアレか。

スターキャリアアのデジタルウォッチは、ピッタリ正午の時間を示している。あかね

さんは……パートの時間か。

どうやら、正史よりぐっすり睡魔に囚われていたらしい。筋肉痛の類いもない。快調だ。

◇◇◇

僕達が居間に降りると、そこにはいつもの面々の姿があつた。……これと言つた傷の無いミソラちゃんの姿も。

……ホツとする。どうやら、病院送りは免れたようだ。本当に良かった。

しかし、なにやら異様な雰囲気に含まれていることに気付く。

それが放送されている内容のせいだと思ひ出したのは、一通り驚愕に含まれた皆の表情を覗いた後だった。

『繰り返し……愚かなる人間共よ。妾の名はオリヒメ。今この時より、全人類の支配者となる者である』

画面の七割は埋めているであろうオリヒメの顔は、非常に濃い化粧で塗りたくられていた。しかし、決して醜悪というワケでは無い。寧ろ、生来の美しさを引き立てているように感じるのは、彼女の迫力に多少なりとも圧倒されているからかもしれない。

『だが、突然「支配」する、等と言われて素直に従うハズも無いことは、この妾も重々承知している。そこで、だ……実感の湧かぬお主らにも理解できるよう、妾のチカラを示そうではないか。これより、封じられた伝説の遺産を復活させる。そのチカラを瞳の奥まで焼き付けければ、さしものお主らでも自分達の立場を弁えるであろう。……妾こそ、支配者に相応しいとな!』

最後に勝ち誇った高笑いを見せると、満足したのか彼女は放送のジャックを解除した。

テレビの画面には、困惑した表情を浮かべたレポーターがカメラマンに話しかけている映像が数秒映った後、暫くお待ちくださいというテロップを表示されてしまう。

「コイツ、やっぱリムーを復活させるつもりだな……見たかスバル? もう怖い物無しってツラしてやがったぜ」

どうにも気配を感じないと思ったら、傷心の相棒を放っておいて先にこの宣戦布告? 映像を視聴していたようだ。

裏切り者め。後でラフレシアが発する匂いの電波でもスターキャリアーにつつこんでやろう。

「い、いまいちオレにはよくわからなかったけど……な、何だかスゲーヤバいことになってるんじゃないかねえのか、これ?」

ゴン太が震える声で言の葉を紡ぐ。

隣で声を発することも出来ない程ブルブル震えたキザマ口共々、その顔は蒼白に染まりきっていた。

「このままオリヒメがムーを復活させちゃったら、この星はおしまいになっちゃうよ……いいえ、でもまだワタシ達には……つて、スバルくん!? 体は大丈夫なの!?!」

放送に釘付け状態だったミソラちゃんが我に返り、頭を抱えていた。

そして僕の姿を視界に収めると、瞳を一杯に開いて驚愕を表現したのち、詰め寄ってくる。

「あ、うん。おかげさまで平気だよ。……ミソラちゃんでしょ? 気を失った僕を治療してくれたのは」

「うん、持ってたリカバリーやDエネルギーを片っ端からねじ込んだからね! でも回復系のプログラムは体の傷を癒やすことが出来ても、疲れまでは取ってくれないから……だけど、嬉しいな。やつぱり、当たり前前に話せるつて凄く素敵なコトなんだねつて……」

ふへへ……と、国民的アイドル歌手が非常に締まりの無い顔をしている。

……酷い。これは百年の恋も冷めますわ。

「あはは……あ、そうだ委員長。尾上さんはどうなったの?」

「ああ、尾上さんなら外せない仕事があるつて言つて、スバル君達が戻つてきて直ぐに

行っちゃったわ。確か、シーサーアイランドだとか何とか……」

シーサーアイランドか……今はコスモウエーブの通行許可が無いから、戻ってくるのにも時間がかかってしまう。そして現在は夏休みの旅行シーズン真っ只中。席の予約も難しいだろうな。

……これで、尾上さんを戦力として頼めることは出来なくなったか。まあ、元々頼る気は無かったのだけど。

「そっか。……よし、じゃあ行ってくるね」

放送があつたと言うことは、ムー大陸を起こす準備が出来たつてことだ。

なら、ラビリンスへ先回りすればまだ止められるかもしれない。ついでにムー大陸が眠る場所にアクセスする方法を聞き出しておけば、ディーラーが活動を本格化する前に何とか潰せる可能性はある。

……夏休みの自由研究のタイトルが、『浮遊大陸の壊し方』になつてしまふだろうけど。

「待ちなさい。行ってくるつて、一体どこに行くつもり？それにアナタ、さつきまで寝込んでたじゃない！無理に動き回つたら、また……」

善は急げと、早速出発しようとした僕の袖を掴んだ委員長が制止の言葉をかける。

潤んだ瞳からは、ブラザーである僕を心底心配している気持ちが伝わってくるけれ



ど、今は一分一秒でも時間が惜しい。

掴まれた袖からそつと委員長の指を引き剥がし、両の掌で握りしめる。そして正面から委員長の目を見つめ、僕は口を開いた。

「もちろんラビリンスだよ、委員長。オリヒメ達はきつと、オーパーツを持つてバミューダラビリンスの奥に来る。そこを叩けば、まだムー大陸の復活を止めることが出来るはずなんだ」

「……でも、危ないわ。スバル君、アナタ今の今までどうして寝込むことになったのか、忘れたワケじゃないでしょう?」

「大丈夫。きつとなんとかなる。何とかしてみせるよ」

「イヤよ、そうやって立ち向かっていって!また倒れでもしたら!ワタシ、どんな顔でスバルくんを迎えればいいの……!?!」

きつと委員長はまだ信じ切れてないんだろう。何せ、信じて送り出したブラザーが満身創痍で担がれて戻ってきたのだから。

つまり、今委員長に必要なのは絶対に僕が無事に帰ってくるという安心だ。

そして、それは僕にとつても逆境における支えとなつてくれるはず。

「じゃあ、約束する。僕はもう、誰にも負けない。必ず無事に帰ってくる。だから委員長、キミはいつも通りドシツと構えていて欲しいんだ。それだけで、皆が心を強く保つ

ていられるはずだから」

「ワタシが……?」

繋いだ手を、痛くない程度にギュツと握る。思いの熱が、しつかり伝わってくれますように、と。

「そうさ、僕達はいっだって一人じゃない。ブラザーバンドなんて無くったって、いつでも心は繋がっている!」

一人が皆を想い、皆が一人を想う。そんな奇跡みたいな関係を、僕は壊したくない。だから僕は、大陸や星相手にだって立ち向かい続けることが出来る。これからもだ。

◇◇◇

なんとか委員長を説得した僕は今、電波変換を完了させウエーブホールの上に立っている。

傍らには、結果的にエンプティイをラビリンズの奥地まで案内するカタチになってしまったハーブ・ノート。

どうしてもチカラになりたいと言っついてきてくれたが、正直言っつて疲労の色は濃いうようだ。何故かテンションは高いものの、あまり無理はさせられない。

「いや、さつきはスゴかったね！ワタシ見てただけなのに、まだちよつとドキドキしてるもん」

バキューン☆とピストルを撃つようなアクションでからかつてくるが、誓つてもいい、あの時の僕はいたつて真面目だった。

「……僕さ、悔しかったんだ」

自分が情けなくて、合わせられない目を伏せてしまう。

「どうして？」

「友達の為に戦つたはずなのに、気付いたらベッドの上で。キズナを否定するプライに、キズナに対する意識の強さで負けたような気がしたんだ。……それがたまらなく悔しかった」

「そんなことない！スバルくんはワタシの為に精一杯やってくれた！だからこそ、ワタシはスバルくんが倒れてもプライに立ち向かえたんだよ!？」

だからこそ、僕も逆境に立ち向かい続けるための誓いを立てたんだ。

もう誰にも負けない。誰にも心配させはしない。

「うん、わかっている。だからさつき委員長に言った言葉は、本当は僕に言ったようなものなんだ。たとえどんなに辛い時でも、立ち続けられる理由であるように、つてね」

「ふうん、なんか妬いちやうなあ……」

ジトツとした目を向けてくる……が、こればかりはどうしようもない。全ては過ぎたコトだ。

「ミソラちゃんはどちらかと言うと、隣に並び立つてくれるパートナーって感じだからね……」

一瞬、面食らったような表情になったが、直ぐに微笑んでくれる。

「どうやら機嫌は直ったようだ。」

「……ま、今はそれで許してあげる。さ、それじゃ絶賛宣戦布告中な悪の組織の野望を阻止に行きましょうか！」

両手で頬をはたいて気合いを入れ直したハープ・ノートが、利き腕を天に向かって突きだした。

「OKーいざ、ラビリンスへ！」

ラビリンズ上空。

座標の特定に成功したため、オリヒメ達は移動基地のアジトごとラビリンズ奥地へ足を運んでいた。

目的は当然、海底に眠るムー大陸の起動である。

「ついに、この時が来た。このオーパーツに宿るエネルギーを起動キーとすることで、憎みを貪るムー大陸を叩き起こす……ムー文明の威光が、愚民共ののさばる地球を席卷するのだ！」

「オリヒメ様……恐縮ですが……一体、どのようにして封印を解くお積もりなのですか？」

科学に精通しているワケではないハイドには、オリヒメの実行するムー大陸復活のメカニズムを知らされてはいなかった。

純粹な興味本位ではあったが、今の自分なら無碍には扱わないだろうという確信が彼にはあった。

「ムーは電波をエネルギーとしていた。故に、ムーの復活を為すために必要なのも電波

である。それも、大陸を動かす程の莫大な電波がな……その役割を果たす物こそがオーパーツ、と言うわけだ」

「ほう……しかし、大陸が一つ、丸ごと海底に沈んでいるとありますと、流石に調査の手が及んでいそうなものではありませんが……」

如何に電波が乱れるとはいえ、科学は日々発展し続けている。

大陸一つを、現代に至るまで隠し通せるものなのか。

「フツ……簡単なことだ、ハイド。……マテリアルウェーブだよ」

「……まさか」

思い浮かんだ答えに戦慄を隠せないハイドへ対し、オリヒメはニヤリと笑い導き出された結論を語り始める。

「そう、そのまさかだ。太古のムー人達は、地上に逃れる前に自分達が住んでいた大陸を封印したのだ。万が一にも見つかることのないよう、巨大な電波としてな。恐らく、妾達の直下には当時のムー大陸のデータを内包した電波集積装置のような物が眠っているはず。妾達は、それを起動させれば良いというだけの話……」

「なんと……このハイド、心底より感服いたしました！」

「……さあ、オーパーツよ！今こそムー大陸をいにしえの封印より解き放て！そして妾の野望、その礎となるがいい！」

オリヒメの掲げたオーパーツの中心部が輝きで満たされた。

そして、溢れ出した金色の電波が一条の矢となってラビリンズ最奥の床を貫き、海底に眠る『何か』へと突き刺さる。

——脈動の音が響いた。

それは、電波の体を持っていないはずのオリヒメにも確かに聞こえていた。

まるで、新たな支配者に歓迎の意思を伝えるかのように。

◇◇◇

「これは……鼓動？」

スカイウエーブに上がった僕達は、まるで世界全てが揺れたかのような、そんな奇妙な感覚を捉えていた。

頭部に装着している『フラットライブモニター』で振動の発生源を探っていたハーブ・ノートは、その方角がナンスカを指し示していることに気付き、呆然とする。

封印の解除には間に合わなかったか……しかし、絶望するには早すぎる。

どうかして、新・ムー国民選別までに墜とせればいいのだけど……

「きつと、ムー大陸の復活が近いんだ……急ごう、ミソラちゃん。大丈夫、きつとまだ間

に合うハズ」

「うん……そう、だね」

何となくだけど、ミソラちゃんの抱いている不安が僕にも伝わってくるような気がする。

ムーの戦士である『ブライ』のチカラ。たった一人を相手にするだけで、ここまで苦戦させられたんだ。それが大陸一つ、文明一つともなれば不安になりもするだろう。

道すがら、ミソラちゃんがオーパーツを使用したことは聞いている。(ありがたいお説教付きだったが)

……まさか、同じチカラを使った者同士、共鳴でもしているのだろうか？

考えても仕方がない。今は、バミューダラピルスへ行くことだけを意識するべきだ。

◇◇◇

たどり着いたバミューダラピルスは、異様な雰囲気に含まれていた。

未だ入り口付近だと言うのに、既に漂う空気は以前とは別物と言っている。

「空気が、重い……？」

『ソフフ……来ると思っていたよ、ロックマン』



聞き慣れた、耳障りの悪い声。何だか無性に苛立たしくなってくる。

声が響いた方へ視線を向けると、そこには悪趣味な道化……もといファントム・ブラックが悠然と佇んでいた。

「ファントム・ブラック……！」

「ムーの復活までは、今少しの時間が必要だ。……シヨールの開演前に舞台裏を覗こうとは、些か無粋に過ぎないかね？」

ニヤリと笑って、来た道へ引き返すようにステッキを向けてくる。

まるで『本当は乱暴な手段を採りたくはないのだがねえ……』とでも言うかのような。

「調子の良いことを言って！アナタ達の行動で、どれだけの人に迷惑をかける……！」

「ソフフ……ともかく、我々の脚本に手出しはさせない」

ファントム・ブラックの視線が僕達の足下に移る。ラビリンズに蔓延る異様な空気のせいでイヤでも鋭敏になってしまった感覚が、足裏で歪む空間の流れを察知した。

「スバルっ！」

「大丈夫っ！」

足下に広がった異次元空間へのゲートを危なげなく避ける。

それは、僕よりも感知に優れたハーブ・ノートも同様だった。

「ソフフ、甘い！」

「デメエがなー！」

時間差で出現した黒い穴も軽やかにステップで避け、チャージしていたロックバスターを撃ち込むがはためかせたマントによって防がれてしまう。

「ただ、このまま追撃すれば……！」

「いやあああつー！」

「ツ！……ミソラちゃんー！」

振り返ると、僕達に仕向けられたモノよりも二回りは大きな黒い穴が、ハーブ・ノートを異次元空間の奈落へと引きずり込もうとしていた。

……本命はハーブ・ノートだったのか！

「さて、どうするロックマン？ その先ではきつと、ウイルスの大群が待ち構えているだろう。か弱い少女を放って、今すぐラピリンスの奥まで進もうと言うのなら、この私が相手になるが……？」

歪んだ笑みを浮かべ、大仰に構えるファントム・ブラック。しかし、戦闘に応じようという庄は感じない。

わかつているんだ。僕に選択肢など無いことを。

……だけど、ここはヤツの思惑に乗るしか無い。警戒を怠ったのは紛れもない、僕なのだから。

「スバル！もうヤベエ！……飛び込むぞ！」

「……………了解っ！」

既に全身を飲み込まれてしまったハーブ・ノートの後へ続くように、僕達は『カミカクシ』のゲートへ飛び込んだ。ズブズブと沈みゆく僕達を再度あざ笑うように、ファントム・ブラックは言の葉を紡ぐ。

「では、心ゆくまで楽しんでくるといい。選びに選び抜いた、ウィルスのフルコースを、ね」

絶対許さないからなアツ！

◇◇◇

「……………は……………」

転送された異空間は存外に広く、体育館相当のサイズだった。

「ゴメン、スバルくん。ワタシが油断したばかりに……………」

肩を落として見せた彼女に、苦笑いでフォローする。

僕の油断が原因でもあるのだ。他人のせいにはしたくない。

「いや、元からミソラちゃん狙いだっただけだから、遅かれ早かれこうなっただと思

う。だから気にしないでいいよ。それより今は、この場を乗り切ることだけを考えよう」

「うん、この気配……!」

ざわめく気配が一際大きくなり、僕達の視線の先で色とりどりのウイルス達が群れを為しはじめる。

『カミカクシ』は機械のはずだけど、こんななウイルスを発生させて大丈夫なんだろうか？

……故障して脱出不可能なんて冗談は、御免被るぞ。

「ウイルス、それも大群だ。……気を引き締めていこう」

「了解! さっさと蹴散らしちやお! ……今度はバツチリいいところ見せちゃうもんねっ!」

好戦的な笑みを浮かべながら、彼女は全身で気炎を燃やす。

空間の広さを活かし、ハープ・ノートはヘルメットから無数のアンプを召喚。

迎撃の態勢だ。いや、殲滅の間違いか。

「OK! ウェーブバトル! ライド・オンツ!」

◇◇◇

「そこッ！……ふう、そろそろ一段落着いた……かな？」

アンプの間に張り巡らされたコードを手繰り寄せ、残っていたウイルスをバラバラに刻んだハーブ・ノート。

……無慈悲！

「やってくれるぜ、あの脚本ヤロウ……！オイ、こんなトコで油売ってる暇なんてねえぜ！……とつとと脱出しちまうぞ！」

「出口は……」

何せ体育館相当の空間だ。装飾も無い殺風景な間取りなので、イマイチ探索には向いていない。

しかし出口となるワープホールは目立ちにくく、それがまたこの空間のいやらしさを物語っているとと言えるだろう。

「……探査完了。あつちだよ、スバルくん！」

「ありがと……でも、サーチなんて出来たっけ？」

マツピングとか、サポート利き過ぎじゃないか？

戦闘極振りな仕様はいい加減どうにかならんものかねえ……

「何だかあれ以来、やけに感覚が鋭くなったような気がしちやって……もしかしてオー

パーツのおかげ、だったり？」

拡張された感覚に馴染んだとか、そういうので説明が出来ればいいけれど……特段異常と呼べるものでもない、か？

「僕にはそんな兆候はなかったからなあ……取りあえず、気分が悪くなったら無理せず言つてね」

「……はいー！じゃ、早くここを抜けよつか！」

ワープホールの出口を潜る。まだ、取り返しはつくはずだ。

選択を誤つてはいけない。決して、対岸の火事ではないのだから。

◇◇◇

薄暗かった異次元空間を抜けた先には、近代的なビルの立ち並ぶロッポンドーヒルズの町並みが広がっていた。

降り立った屋上からは、雑踏の様子が手に取るようによく見える。先の放送を受けて、世間には不安の波が広がっているようだ。

「ロッポンドーヒルズか……大分引き離されちゃったな。してやられたぜ……！」

「ポロロン……悪いわね、ロック。……？これは……」

突然、辺りを正体不明の揺れが襲う。

いや、これは自然的なものではない。と、言うことは……！

「何、アレ……!?!」

ハーブ・ノートの呆然とした声が響く。

それもそのはず、突如襲った揺れはタダの自然災害ではなく、ムー大陸復活に伴う地響きだったのだから。

海中より姿を現したらしいムー大陸は悠然と空に浮かび、その異様な姿を衆目の目に晒している。

『ほんの挨拶程度の出力だが……ムーのチカラを拝ませてやろう……見るが良い!』

待機状態のスターキャリアーから先程聞いたばかりの女性の声が鳴り響く。

瞬間の後、ロツポンドーヒルズのメガ・ディスプレイがジャックされた。映ったのは、ムー大陸の下部から莫大なエネルギーを持ったレーザーが海底に向けて発射された映像。

海底に向けて放たれた『それ』は、そのエネルギーの強さを示すかのように海面に巨大な穴を開けていた。

『これこそが伝説のムー大陸である。先に伝えておくが、今の攻撃などは所詮、氷山の一

角に過ぎん。出来ることならば、この場でチカラの全てを披露したいところではあるのだが……誠に残念極まることに、まだ幾ばくかの時が必要なようだ……仕方ない。明日の正午まで待つが良い。その時にはムーのチカラ、その神髄をとくとお見せしよう』  
プツツとスターキヤリアーへの通信が途切れ、同時に空中にて異様な存在感を放っていたムー大陸もその姿を消した。

明日の正午……出待ちか。時間がわかつているのなら、それに合わせればいい。

戦闘を極力避け、ムー大陸の中心を叩く。これでイケるだろう。後はミソラちゃんだけ……

「明日の正午か……どうする?」

「ああ、ムー大陸がその姿を消しちまった以上、取れる方法は一つしかねえ。……明日だ。明日、ムー大陸がもう一度姿を現した時を狙って攻勢に出る。……それしかねえ」

ロックも同意見だ。

実際、ステルス完備の相手に特攻するにはそれしかない。遠距離じゃ火力差が酷すぎるのは明白なのだし。

「……だね。それでいこう。ミソラちゃんは、どうする……?」

ハープ・ノートは、未だメガ・ディスプレイに映し出された映像の余韻が抜けていないようだ。



……わからないでもないが。何せ、スケールが違うのだから。

「スバルくん、今の見てたよね……？」

「うん」

声が震えている。

「海に、あんなおつきな穴が空いちやっただよ？」

「うん」

握りしめた手の指先が震えている。

「しかも、まだほんの一部なんだって。明日になったら、もっとすごいパワーが出せるんだって言ってたね」

「うん」

何より、心が震え上がっている。

……ダメだ。僕は、そんな顔をして欲しくて戦っているわけじゃない。

「……怖くないの？」

「そりゃあ、怖いけど。でもあんな威力の攻撃、そうそう自分の陣地では撃てない。……」

それに」

「……それに？」

僕には相手を罫に嵌めたり、策を練るようなことは出来ない。

だから、いつだってやってきたことは変わらなかった。

「真正面からぶつかれば、きつと何とかなる……と、思うよ」

「でも……何とかならなかったら？」

彼女の不安は拭えていない。

……そりやそうだ。さつきまで寝込んでた元怪我人がどの口でって話なんだから。

「何とかならなかったら……それは、その時考える。でもきつと、ただ黙ってムーの支配を受け入れるよりはいいと思う。だって、僕は他の人よりも出来ることがちよつとだけ多いんだ。……諦めるのは、やれることを全部やった後からでも遅くない」

吐き出す言葉は慎重に。不安を煽ってはいけない。

でも、ミソラちゃんがここで退くというのも、あながち悪くない。

友達を危険にさらさないようにするつても、やれることの一つだと思おうし。

「諦めるのは、やれることを全部やった後からでも遅くない、か……うん。そっか、そうだよね！初めてライブをやった時だって、不安でしようがなかったけど……ステージに立ってお客さんと真正面から向き合ったら、不安なんて全部吹き飛んだもん！……うん、もう大丈夫！そう、スバルくんがいる限り、ワタシはいくらでも立ち上がれるんだっ！」

暫く僕の言葉を反芻した彼女は、突如燃え上がるような覇気を滾らせ、天高く拳を突

き出した。

その瞳はキラキラと光り輝き、いつそ眩しきすら感じる程だ。

は、発破をかけてしまったか……？

「やる気があるのはいいんだけど……取りあえず、今日は帰って明日に備えてゆっくり休むべきじゃない？」

「ええっ!? ワタシ、エネルギーが有り余ってしょうがないよ……そうだ！ 丁度良いし、今からカラオケでも行こうよっ！」

食い気味に誘ってくるミソラちゃんの勢いに水を差すように、スターキャリアーに通信が入る。

表示された名前は……天地さん？

「どうどう……はい、もしもし」

馬扱い!? という嘆きが聞こえたような気がするが、気のせいだ気のせい。

暴れ馬の扱いはペガサスのスターフォースで慣れちゃったから、しゃーなしだ。

『スバル君、大丈夫かい!? さっきの放送……まさか、巻き込まれていないよな?』

そういうえば、天地さんにはナンスカの辺りに行ったことをメールで伝えていたんだつた。

心配して連絡をとってくれたのだらう。流星はキズナリヨク650の男だ……！

「大丈夫です、天地さん。それと、中々そつちに寄れなくてすみません」

『ああ……全然ベルセルクのカードを取りに来ないから、どうしたのかと思つていたところだったんだ』

……すつかり忘れていた。

そういえば、以前ロツポンドーヒルズまで来た時はなんやかんやで会えなかったのだったか。

「すみません、あれから色々あつて……」

『ははは……気にしなくていいよ。都合が合つた時に来てくれれば良いからさ。そうそう、実は新しくスターキヤリアー用の拡張機能を開発したから良ければ……』

もしかして今、ロツポンドーヒルズに来ているのかい？』

周りの音から居場所を察したらしい。スゴい洞察力だ。

「ええと、ちよつと不慮の事故といふかなんというか……」

『それじゃあ、今からボクのところに来ないか？さっき言いかけたけど、実はスターキヤリアー用の新機能を開発してね。きつと、キミのチカラになれると思うんだ……どうかな？』

どうせ、今日はもうすることが無い○のだから、寄るべきじゃないだろうか。

新機能とやらも気になるし。

「……じゃあ、今からそっちにお邪魔にすることにします」

『それじゃショッピングプラザの二階……いつもの場所にいるから、待っているよ』

通信が終了し、エア・デイスプレイがスターキャリアーに収納される。

……見下ろした雑踏は、未だ晴れようのない混乱に包まれていた。

未だ混乱の熱冷めぬロツポンドーヒルズ。

ざわめく人々の間を抜け、僕はショツピングプラザ二階へと足を運んでいた。

なお、混乱を避けるために、ミソラちゃんには電波変換を解かずに僕のスターキヤリアー内部で待機してもらっている。画面には、いつしかと同じようにデフォルメされたハーブ・ノートが表示されているといった具合だ。

しかし、おおっぴらに会話も出来ないからか、あまり機嫌はよろしくない。

……有名人だからね。仕方ないね。

「お久しぶりです、天地さん」

エア・ディスプレイ越しではなく、久しぶりに直接対面した天地さんの顔は、普段からは想像もつかない程険しいものになっていた。

「やあ、スバルくん。大変なことになってしまったね……さて、長話もなんだ、本題に入ろうか」

「あ、はい。ベルセルクのカード……ですよね？」

「ああ、ちよつと待つてくれ……つと、あつたあつた。はい、無事にデータの移植は完了

したよ」

展開したエア・ディスプレイの画面を指先で走らせ、手慣れた様子で操作すると、天地さんの手に持った空のカードに剣の紋章が浮かび上がった。差し出されたカードをスターキャリアーに読み込ませ、フォルダに登録する。

「……よし、端末間のデータ移行も問題無さそうだ。これで一つ目の用件は終わり。後はさっきの通信で伝えた新機能の方なんだけど……」

「それって、具体的にはどういったものなんですか？」

いくら信用しているとはいえ、流石に機能の内容くらいは聞いておきたい。

「そのプログラムを組み込めば、搭載した端末の性能を飛躍的に上昇させることが出来るんだ。恐らく、スターキャリアーと連動しているロックマンも強化されるだろう」

「すごいプログラムじゃないですか！でも、どうしてこんな時期に新しいプログラムの開発を？」

ぶつちやけ、そろそろ本格的に次世代型端末の開発に取りかかっても良い頃だと思うのだが。

スターキャリアーの開発にも携わっている天地さんだ。声がかかっているとも考えにくい。

「フフン、よくぞ聞いてくれたよ！スバル君！実は、コイツはまだ一般に出回っていない

新技術を使ったシロモノでね……!」

キラキラした表情でエア・ディスプレイを開き、プログラムの概要を見せてくれる。……一般用とはいえ、ホイホイ見せていいんですかね？

どうやらマテリアルウエーブのように実体のあるプログラムらしく、使用時は展開して直接スターキャリアーに装着されるらしい。

画面上部には大きく Prototype と表示されている。まさに試作型というわけだ。

「へえ……試験品ってことですか。でも、どことなく素敵な響きがありますよね」

「一応言っておくと、安全性に関しては問題ないよ。次世代端末とリンクしたシステムになる構想で製作されていてね……安全試験は、それこそ飽きるほどやってるんだ。絶対に大丈夫さ。保証する」

先行実装って、何だかワクワクする響きでござる。

「天地さんがそこまで言うなら……インストール、お願いしてもいいですか？」

「ああ、もちろんだ!……ところで、先程電話したときにはキミ一人だったのかい?」  
「どうしてですか?」

「なに、ちよつと聞き覚えのある声が聞こえたと思ってね……気のせいなら、別にいいんだが」



「ええと、ミソラちゃんといましたけど……」

巨悪の手先に一杯食わされて、途方に暮れてました……とは、言いたくないなあ。

「……すまない、もしかしてお邪魔だったかな?」

何かを主張するように発光し続ける端末の画面は無視だ。

「いえ、全然。ただ、別の混乱が起こりそうだったので……電波変換して、僕のスターキャリアー内に隠れてもらっているんです」

そう言つて、どこか申し訳なきような天地さんにスターキャリアーのホーム画面を見せつける。

「ああ……うん、はい。……さて、それじゃ、このままインストールしてしまおうか」

「……ええ、お願いします」

……?

なんとも言えない、微妙な表情で差し出したスターキャリアーを天地さんは受け取つた。

それから自前のスターキャリアーに保管してあるデータを転送するまでの間、時折何か言いたげな表情を浮かべていたが、僕は悪くないと思います。

◇◇◇

「さあ、これでプログラムのインストールは完了だ」

「意外にかかるものなんですな。ベルセルクのカードは一瞬だったのに」

「ああ、スバル君のスターキャリアーに合わせて、軽い調整をしていたんだ。一応、次世代型端末で使用することを前提に作られているからね。……ただ、注意して欲しい。このプログラムはスターキャリアーの性能を飛躍的に向上させるが、その分使用時にはエネルギーを大量に食ってしまうんだ。スターキャリアーのエネルギーをフルチャージした状態で使っても、プログラムの展開から保つて十分が良いとこだろう」

燃費悪つ。

太陽光とかで何とかならないんですかね……

「わかりました。気をつけておきます」

「一応、稼働限界までのタイムリミットを知らせる機能も付けておいたから、上手く役立ててくれると嬉しいかな。……つと、そうだ。忘れるところだった。もう一つ、キミに渡しておきたいモノがあつたんだ」

「……これは、バトルカード？」

そう、天地さんが渡してきたのは赤く染まったバトルカード。

赤いバトルカードは一般にギガクラスカードとされ、滅多に手に入ることには無い、は

ずだが……

「UMA事件の起きた場所を五陽田警部が現場検証したんだけど……その時に手に入れたデータを解析して、僕が作ったモノなんだ。強力なバトルカードだから、きつと何かの役に立ってくれるだろう」

カードの表面には『ナダレダイコ』と銘打たれている。発動すれば、イエティ・ブリザードのナダレダイコが周囲を銀一色に染め上げることだろう。

使いどころは難しそうだけど、使いこなせば一発逆転の切り札にも成り得るはずだ。相変わらず、天地さんは頼りにしかならないな。

マジで頼りにしかならない男……マタオ、はちよつと響きが悪いので却下。だって、恩人だからね。

「ホント、至れり尽くせりですいません。……必ず、ムー大陸を止めてみせます」

「こちらこそ、こんなことしか出来なくてすまない。本来なら、ボク達大人が何とかしなくちゃいけないことのはずなのに、な」

「大丈夫ですよ。なんとたつて、今回は僕達だけじゃないですから」

そう言つて、インストールしてもらつたばかりのスターキャリアーを振つて見せる。中でハープ・ノートが目を回していた。

ホント、申し訳ない……。

「とにかく、くれぐれも無理はしないでくれよ、スバル君。危なくなったら直ぐに引き返すんだ……いいね?」

「はい、わかっています」

「……良い顔だ。さあ、今日はもう帰りなさい。明日のために、ゆつくり休んでチカラをつけるんだ」

「……ハイ!」

天地さんに再三頭を下げ、改めて感謝の意を表す。

天地さんには、いつもお世話になりっぱなしだ。その恩を返すためにも、こんなところじゃ終われない。

……必ず、ダイゴさんは連れて帰らなくては。

そしてふと、スターキャリアーに通信が入っていることに気付く。

……委員長からだ。きつと、心配にかけてくれたのだろう。

「すいません、天地さん。ちよつと……」

「ああ、ボクのことには気にしなくていい。……友達からだろ?」

「それじゃ、失礼して……ブラウズ」

立ち上がったエア・デイスプレイには、心配そうに眉尻を下げる委員長の顔が映っていた。

電波変換を解いた僕に一瞬怪訝な表情を浮かべたが、得心がいったとしても言うように手を打つと、ホツとしたように息を吐いた。

『ちよつと大丈夫なの!?……つて電話してみたんだけど、どうやら無事だったみたいね。ひとまず安心したわ』

「ゴメン！途中でフアントム・ブラックに妨害されちゃつて……ロツポンドーヒルズまで飛ばされてしまったんだ」

『つてことは、明日またムー大陸に行くのよね?』

「うん、そのつもり」

『なら、明日出発する前に一度、ウチに寄つていきなさい。さっきはアナタに言われてばかりだったじゃない。だからゴン太もキザマロも、言っておきたいことがあるつて言ってるの。……どうかしら?』

スターキャリアアの待機画面に表示されているデフォルメされたハープ・ノートが神妙に頷いた。

確かに、先程はいささか自分の言いたいことばかり言っていたような気がする。

「わかった。それじゃ追つて出発時刻は連絡するから……また、明日」

『ええ、また明日』

明日の正午、ついに世界規模の混乱が巻き起こる。どれだけ犠牲を減らせるのか。

この戦いにはきつと、あらゆる人間の運命が掛かつてる。だからこそ、負けられない。その敗北の味を、今さつきこれでもかと言うほどに味わったばかりなのだから。

◇◇◇

翌日。午前十時。

バミューダラビリンスへと向かうはずだった僕達は、白金家に立ち寄っていた。

「……来たわね、スバル君。ミソラちゃんも。さあ、上がってちようだい」

「えつと、お邪魔します」

「そういえば、ルナちゃんのお家にお邪魔するのも久しぶりだなあ……」

しみじみ、といった風に呟いているが……アレ？

ミソラちゃんが委員長の家に行ったことってあったっけ？

……とでも言いたげな僕の表情に気付いたのか、ミソラちゃんが苦笑交じりに説明してくれる。

「たまにだけど、ルナちゃんと二人で話したりするんだ。スバル君の学校での様子とか、ワタシじゃ中々知れないことも話してくれたり……」

「ちよつと、他言は無用だったハズでしょ!?!その言い方じゃ、まるでワタシがへ、変態み

たいじゃない！」

本人のあずかり知らぬところで、僕のプライベート情報が共有されている……!?

僕は自分の肩を搔き抱いて、ドン引きアピールを敢行した。

「うわあ……」

「誤解だわっ！つて言うか、なんでそんなに引いてんのよ！」

「身の危険を感じました」

「ワタシはストーカーじゃないっ！」

「あの一、ゴン太くん達を待たせてるんでしょ？そろそろ……」

「アナタ達わざとでしょうッ!？」

その後、ぶち切れた委員長を平静な状態に戻すのに、五分ほどかかりました、まる。

◇◇◇

「どうして、自分の家でここまで疲れなくちやいけないのかしら……」

「ルナちゃんが自爆したからじゃない？」

「元を正せばっ！アナタのフレンドリーファイアが原因でしょうがっ！」

「ゴメンね☆」

そこで悪びれないミソラさんマジパネエっす。

これが女同士の友情……なんーんか、想像と違くない？

「……コホン。さ、どうぞ」

漸く、委員長の部屋まで案内される。

開かれたドアの先では、ジト目で睨みつけてくる二対の視線が僕を貫いていた。

……痛い！視線が痛い！

「スバルくん……可哀想に。死線を潜り過ぎて、委員長の地雷原で無意識にタツプダンスしてしまったんですね……ボクの『マロ辞典』によると、そういう人は戦場カメラマンに向いているらしいですよ」

「その慰めるような笑顔はなんなの!？」

悟ったような笑みを浮かべているキザマロ。

命知らずって言いたいのか……ッ!？」

「生きろよ、スバル。オレから言えることは、それだけだぜ」

「酷いっ!」

どう考えても、これから決戦に向かう人を送り出す言葉じゃないだろ!

明らかに別の死因を暗示してますよねえ!？」

「……とまあ、実は色々考えてはみたんだけどよ。あんまり小難しく言うよりも、シンプ



ルなほうがいいって気付いたんだ。な、キザマロ？」

「ですね。そもそもゴン太くんが難しいことを言っても、なんだか嘘っぽいですし」  
「嘘っぽいってなんだよ……」

気落ちした様子のゴン太がキザマロに軽くチョップする。

アイター！とそれらしくリアクションをとったキザマロがズレた眼鏡を直し、レンズを輝かせた。

「あはは……ゴン太くんらしいね」

思わずといった風にミソラちゃんは相好を崩す。

見える、見えるぞ。背景に花のエフェクトが見える。

さきほどとは似ても似つかない様子を見るに、どうやら三十秒前までの彼女は別人だったらしい。

「お、おう！オレ、めちやくちや頑張るぜ！」

「何言ってるんですか、ゴン太くん。頑張ってくれるのはスバル君達の方なんですよ？」  
「わ、わかっているって！だ、だからめちやくちや頑張って応援するって言おうとしたんだよー！」

慌てて言い直すことで誤魔化そうとするが、だらしなく伸びた鼻の下は隠せていない。

騙されているぞ、ゴン太。彼女こそ真の戦場タツブダカメラマンだ。

僕に地雷原でケンケンパする趣味は無いからな!

「ほら二人とも、落ち着きなさい!あまり時間を取らせるワケにもいかないでしょう?」

手を打ち鳴らして注目を集めながら、委員長が濁を入れる。

このままでは埒があかないと思つたのだろう。

途端、あれほど騒いでいた二人がピタリと動きを停止させた。

「す、すまねえ委員長……」

「ふざけすぎてしまいました……」

反省した態度を見せた二人を見て鷹揚に頷くと、促すように視線を向けた。

「それじゃ、オレから……スバル!ミソラちゃん!地球のことは任せたぜ!……特にスバル!ミソラちゃんにキズ一つ付けでもしたら、オレたちやゼツテ許さねえからな!きっちり守れよ!約束だからな!」

「もちろん……約束だ!」

拳を合わせ、お互いの瞳の奥に燃える炎をのぞき見る。

轟々と燃え上がる炎が、ゴン太の瞳に灯っていた。まるで、今すぐオレも戦いたい、とでも言うかのように。

「よおし!なら、こっちは任せてくれ!何せ、オレは他人より頑丈だからな!」

そう胸を張るゴン太は、ある種の使命感に溢れているようにも見えた。

そしてそのまま、となりのキザマロへ目配せをする。

「えつと……スバル君、ミソラちゃん。ボクは電波変換したことは無いし、電波世界のことでだつて良くわかりません。……でも！今、みんなの為にムー大陸へ立ち向かおうとしているのがボクの友達なんだつてことはわかつているつもりです！……だから、これからもずっと、ボク達のヒーローでいてください！」

「それじゃ応援になつてないじゃない……」

委員長の言葉にハツとなるキザマロ。

「え？あ、えつと……と、とにかく！絶対無事に帰つてきてくださいね！約束ですよ!？」

「うん、わかつた。絶対に、無事に帰つてくるつて約束するよ」

そして、満足げな二人の視線の先には委員長。

「さて、ワタシから言つておきたいことは一つよ！……絶対、無事に帰つてくること！特にスバル君は、ミソラちゃんに危険が及ばないようしっかり守りなさい！いいわね!?!……つて、これじゃ二人とモロ被りじゃないの……まあいいわ！とにかく、ワタシ達はここでアナタ達の無事を祈つてる。これ以上ブラザーに心配かけさせたくないのなら、チャチャつと終わらせて帰つてきなさい！」

「りょうかい！」

「らじやーだよ、ルナちゃん！」

二人揃って、前後に『サー』付きそうなほどビシツとした敬礼を見せると、一瞬キョトンとした委員長だが、次の瞬間には思いつきり吹き出してしまった。

そしてそのまま、『この様子なら大丈夫ね』と笑顔で送り出された僕達。

……それじゃあ、チャチャつと世界救つてきますかあ！

意気揚々と足を踏み入れたラビリンス。

以前はまるで水中活動しているかのように感じていた抵抗も、今は薄い。

封印が解かれた影響からか、電波状況が改善されているようだ。

「……昨日と雰囲気全然違うね。まるで別の場所みたい……」

「きつと、ムー大陸の封印が解けた影響だと思う。それより……」

「あのいけ好かないヤロウの気配は……ねえな。どこかに潜んでいやがる可能性はある

が……もしかしたら、チャンスなのかもしれねえ。出しゃばってこないウチに先へ進ん

じまおうぜ」

「ポロロン……ワタシは賛成ね。どうやら、案内役を待たせていたみたいだし」

ホラあそこ、というハープの示した先には、以前ラビリンスを攻略する際に道しるべを買って出てくれた電波が佇んでいた。

今はまるで、己の存在を主張するかのようにカンテラを輝かせている。

少しでも情報の欲しい僕達は、取りあえず件の電波から話を聞くことにした。

「やあ、ひさしぶり。この前はありがとう。助かったよ」

「……………」

「……ええつと、その、ムー大陸について知ってることがあれば聞きたいんだけど」

「……………」

返事はない。屍にしてくれようか。

以前も思ったが、もしかしなくても嫌われているのだろう。解せぬ。

「恥ずかしがり屋さんなのかな？」

ミソラさん、そいつただの少女型電波主義者の変態ですよ……

しかし、僕が何をしてもこの変質電波が口を開くことはないだろう。現実とは時に非情なものである。

……………ここは、適材適所で。

「お願い！電波さん、何か知っていることがあれば教えて欲しいの……」  
掌を合わせ、上目遣いで彼女は頼み込む。

例え『豚野郎』と罵ったとしても、彼が喜んで情報を提供してくれるだろうことは予測出来るが。

「……………イニシエのコトバ、だ。『……………、……………、……………、……………、……………』」

……………は???

「え?.....ふむふむ、なるほど.....決まったルートを通らないと、ムー大陸へは行けない仕組みになってるんだね。ありがとう、とつても助かったよ!」

カンテラを握っていない方の手を両の掌で包み込み、ブンブンと上下させて感謝の意を伝えるハープ・ノート。

心なしか、カンテラ電波から蒸気らしきものが漏れているような。

オーバーロードか?むしろオーバーヘッドで叩き込んでやりたいくらいだよ。

「でも、どうして急にワタシだけに聞こえる声で話したの?.....え?情報漏洩の阻止?」  
情報漏洩の阻止.....なるほど合理的だ。

ただの変質電波かと思ったが、中々考えている。

少し、彼の印象を見直すべきだろうか、自分に言い聞かせる。偏見は悪い文明。

件の電波の表情を覗く。彼はいつも仏頂面だ。やはりその顔色からは、内面を察することは難しい.....

「.....フツ」

電波狩りの始まりじゃああああ!

「よおし、それじゃサクツとラビリンスを抜けちゃうよ!」

ドス黒い狂気に身を任せかけていた体が、彼女の一声で我に返る。

元々、ラビリンスのような特殊環境下での攻略は門外漢だ。

気力は十分なようだし、ここは遠慮なく頼らせてもらおう。

「頼りにして、いいかな？」

「フフフ……お任せあれ！」

ドヤる彼女を見てみると、そこはかとな不安に襲われる。

大丈夫、だよね……？

◇◇◇

しかし、僕の期待を裏切るようにムー大陸への道程は極めて安全なものだった。

ウィルスは湧くや否やストリングでバラバラにされてしまうので、ウォーミングアップにもなりやしない。

……そんな道のりも、唐突に終わりを告げる。

何故なら、ワープホールを抜けた先が、まるで天まで届きそうな程壮大な階段だったからだ。

「……スゴい。ラビリンズにこんな場所があつたなんて。まるで、天国まで続いているみたい……」

そう呟くと、ミソラちゃんは言葉を失ったように辺りの景色を見やる。



きつと、亡くなった『ママ』のことを想っているのだろう。

確かに、殺風景だけどこか神聖な風合いを感じる、そんな感じの場所だ。

「えつと、大丈夫……？」

「ゴメン、ちよつと感傷に浸つてみたい。……可笑しいよね。亡くなった人に会えるワケなんて無いのに……でも、もう平気。だつてワタシは、これ以上誰かを失う悲しさを感じる人を増やさないために、ここまで来たんだから」

背を向け、自嘲するように笑うと彼女はこちらへ振り返り、儂げに微笑んだ。

その瞳には、決意の炎が轟々と燃え盛っている。

こんなところで立ち止まっては行られない。目は口ほどにものを言うワケだ。

『ソフフ……コイツは傑作だ！開演前に忍び込もうとしたかと思えば、今度はロマンスでショーそのもののジャンルを変えようという腹づもりかね？……つくづく、キミ達は脚本家泣かせの才能に富んでいる！』

響いた声に反応した僕達は、瞬時に戦闘態勢へと移行。

あの道化師擬きの居場所を探る。どうやら、『カミカクシ』から声だけを飛ばしているらしい。

しかし……改めて考えると、ぶつちやけファントム・ブラックよりもカミカクシの方

が戦略的に優れているのでは……？

『だが、生憎とその先へ進ませるわけにもいかなくてね』

『ふむ……そうだな。では、ムー大陸という舞台の幕が開けるまで、暫し私のショーにでも付き合っていたらどうか』

『もつとも』

閃光。

たなびくマントを後ろに流し、不敵な笑みを浮かべた男が道を塞いでいた。

感じるチカラは……大きい。以前とは比較にならない程だ。

「こうなってしまう以上、キミ達がメインイベントに立ち会うことは叶わないだろうがね」

「ふざけやがって……！」

あくまで余裕の態度を崩さないファントム・ブラックに、痺れを切らしたロックが嘯みついた。

……かえって喜ばせる結果に終わったみたいだが。

「ソフフ……ふざける？ いいや、そんなことはない。せっかちな押し掛け客に、わざわざ対応して差し上げているんだ。当然、それなりのペナルティがあつて然るべきじゃないかね？」

「そのオリヒメサマとやらにどれだけの力をもらったかは知らねえが……そこに突っ立っている以上、オレ達のやることは変わらねえ！」

「ソフフ……はて、一体何が変わらないと言うのだ？」

「デメエを！ぶっ倒して！つまんねえ計画なんざ全部ブチ壊してやるって言っただよ！！」

やはり直情的なロックとは相性が悪い。

下手につけ込まれても不利になるだけだ。

こういう手合いはさっさと始末してしまうに限る。

「威勢は十分……だが、既にキサマ達の戦力はブライとの戦闘で解析済みなのだよ。それをふまえ、オリヒメ様からチカラを頂いた今の私に勝つことは出来ない。絶対にね」  
流石に自称脚本家。

キャストの情報収集に余念がない。

「そんな大昔のデータでいい気になつてもらつちやあ困るぜ！教えてやるよ！オレ達はいつだって成長し続けてるってことをなアツ！」

「そうか……では見るが良い！ワタシの描き出した、キサマ達の敗北劇という名の脚本を！」

宣言と同時にファントム・ブラックから大量の電波が吹き荒れる。

なるほど、ただ闇雲に振るっているわけではないらしい。

それでも負ける気がしないのは、彼が彼足る所以なのだろうか。

「どんなにスゴいチカラでも……！それが、僕達の諦める理由にはならない」

「ええ！立ち向かう理由がある限り、ワタシ達はいつだってネバーギブアップなんだからー！」

「ならばこの私が、キサマ達の絶望すら演出してみせるとしよう！それに、だ。キサマ達を倒せば、オリヒメ様はこのワタシとブラザーバンドを結んでくださるといふ確約を頂いている。これは私にとっても最大のチャンスと言うわけだ。……では、消えてもらおう」

「へッ、なら遠慮なくやっちゃまおうぜ！」

「ああ！決着を着けよう、ファントム・ブラック！」

脚本家が舞台上上がるといふことがどういう意味なのか、教えてやろう！

『ウエーブバトル！ライドオンツ！』

◇◇◇

開幕で不意打ち気味にバスターを叩き込むも、一発残らずステッキソードで打ち落と

される。

なるほど、純粋な身体能力スペックも相当に上がっているのか。

「ソフフ……どうだね？ 素晴らしいレスポンスだろう？ 当然ながら、私の相棒ファントムも強化されてるのだよッ！」

瞬間移動。背後からの奇襲。

……以前よりも、明らかに早い。

だけど、この場にいるのは僕とロックだけじゃない。

「……そッッ！」

振り上げたステッキソードで切り裂こうとしたファントム・ブラックに、強靱なコードが絡みつく。

幾重にも絡まったコードをほどくのは容易ではない。……ミソラちゃんグッド！

「むっ……これは……」

「……一気に、決める！」

訪れた好機は逃さない。

振り向きながらベルセルクの鎧を纏い、顕現させた大剣で袈裟斬りを狙う。

「この、程度ではなアッ！」

しかし、ファントム・ブラックは全身を捻り、解放。

回転に伴い発生させた真空刃でコードを切り裂き、こちらの臂力に拮抗をもたらした。……フアントムスラッシュか。

そのまま大剣を弾き、追撃に乗り出しかけていたハープ・ノートへとステッキを投擲。不意打ちが成立し、彼女は回避行動に専念せざるを得なくなってしまった。

「中々やるじゃあないか。これは、戦力評価に補正をかけて計算するべきだったかな？」  
「減らず口にはチャック、だぜ！」

距離を取るために再び移動した瞬間を狙ってウオーロックアタック。

見切りの着けづらい高速の一突きだ。逃げ道はハープ・ノートによるショックノートの段幕で塞いでいる。

これは躲せないっ！

「このスペックと比較しても速い、だど!？」

「終わり、だアッ！」

胸の中心目掛けて突きだした大剣は、狂い無く目標点を貫いた。

……けど、妙な手応え!？」

「うっ……!？」

ハープ・ノートのうめき声が辺りに響く。

その胸の中心からは、雷を迸らせる大剣の刀身が生えていた。

「どういうことだ!?

「ミソラちゃん!……どうして!?!」

「ソフフ……」

ファントム・ブラックの声でハッと気付き、大剣を引き抜く。

突き刺していた大剣の接地面には、黒いエフェクトがかかっていた。

「これは……『カミカクシ』か!」

「なあと、簡単なことだよ。カミカクシの出入り口を、私の体表から彼女の体内に設定しただけだ」

まるで堪えきれないように、クツクツと押し殺した笑いを漏らす。

「……お前ら人間じゃねえ!」

「……スバルくん、ワタシは……大丈夫だから……」

どう見ても大丈夫じゃない表情で言われても、困る。

「……Dエネルギーを!速く!」

確か、非常用にくっつか持っていたはずだ。

取りあえず、この戦闘での高速機動は絶望的だろう。

どちらにしても、コイツは速くやらないとヤバイ類いの敵だ。

「でも、まずはカミカクシの防壁を突破しないと……」

キズを癒した彼女が『インビジブル』を使用して戦線を一時離脱したことを確認しながら、そう呟く。

電波障壁のような物理的防御でない以上、闇雲に出力を上げれば良いというものではない。

さて、どうしたものか……

「いや、多分そこまで気軽に使えるモンじゃないと思うぜ、スバル」

「ロツク……どうして？」

「恐らく、アレは正確な座標を撃ち込んで使うタイプのアイテムだ。動き回っていりゃあ、そうそうこつちの体内にワープゲートを開かせることもないと思うぜ。……つまりアレは、こつちの動きを完璧に読めて初めて使えるチカラってワケだ。多分」

なるほど……胸の一部にしかゲートを開けなかったのも、体表面をまるごと指定することが出来なかったからなのか。

そう考えれば、まだなんとかなりそうだ。

不意打ちの基本。古事記にもそう書いてある。

「オーケー、理解したよ。それなら、まずは向こうの計算を狂わせることから始めよう」

「……アレか。わかった、思いつきり派手にいこうぜ！」

幸運にも、こちらは向こうも知らない切り札を持っている。



「ここは惜しみなく切らせてもらおう。最高のワイルドカードを。」

「ソフフ……どうしたのかね？まさか仲間を傷つけて、急に恐ろしくなったとでも？」

「ほざいてな、道化ヤロウ！仲間のチカラで泣きを見るのは、テメエのほうだってことだ！」

「……『ナダレダイコ』オッ！」

天地さんより預かった、ギガクラスカードを展開。

以前使用したペガサス・マジックGXのように、全身をイエティ・ブリザードが放つ凍てついたオーラが包み込む。

奇しくも二つのカードは属性・性質まで類似していたために、操作の感覚はなんとなく掴むことが出来ていた。

しかし、どちらも冷気の操作を軸にしているが、ペガサス・マジックGXが一点集中型であるのに対しナダレダイコは範囲攻撃型という明確な違いがある。

「うおおおおおッ!!」

雄叫びとともに、足下のウェーブロードから膨大な量の雪塊がせり出してくる。

僕の周囲を囲むように現れた雪壁を、驚愕の表情を顔に貼り付けたファントム・ブラックを含む全方位へと粉末状に分散して放出。

それはさながら、ヤエバリゾートでゴリが演出してみせた猛吹雪となってヤツを襲

う。フィールド全域を覆う攻撃だ。たとえ転移したとしても、げ場はない。

「これは……タダの目くらましではない!？」

タダの吹雪として使用している以上直接的なダメージは殆ど存在しないが、ナダレダイコには元々ヒットした相手を凍結させる効果がある。分散させたためにその効果も弱まっているだろうが、まとわりつく雪塊は鬱陶しいだろう。

あと、ついでに目くらまし。

「無敵のカミカクシでも、流石に全身は覆えないだろうッ!」

再び大剣を構え、安定した足場を求めて着地したファントム・ブラックへとウォーロックアタック。

明らかに動きが鈍っていることを確信しながら斬りかかる。

しかし、その一撃はステッキソードの受け太刀によって阻まれる。

感じるパワーはまだ、強い。

「今日、この場に限っては……私も退くわけにはいかないのだよ!」

拮抗したつばぜり合い。

正面からのぞき込んだファントム・ブラックの表情は、正に鬼気迫るといった様相だった。

「くそっ……オリヒメと結ぶブラザーバンドが、そこまで大事なのか!？」

ロックが吠える。

フアントム・ブラックはニヤリと笑い、押し込むように圧をかけてくる。

「そうだ！私はオリヒメ様の右腕となり、この世界を共に支配する！」

「でも、人を始末して結ぶブラザーバンドにどれだけの繋がりがあるって言うんだ！」

例えオリヒメに求めるものがチカラであつたとして、それは必ずしもブラザーバンドを介する必要はない。

「ここまでブラザーバンドに固執するハイドの本心。それは一体なんだ？」

「共通の目的や視点、思考を持つているからこそ強くなる結びつきなどさらにある！この世界そのものを支配するのだ……一人や二人、始末出来る程度の信頼はあつてしかるべきだろう！」

「何が信頼だ！その信頼は、アナタを道具として見たものじゃないか！」

「道具で結構！それで支配する側に回れるのであれば、安いものだろう！」

ステッキ越しに語るハイドの目は、控えめに言つて狂人のそれだつた。

狂気すら感じさせる勝ち馬への執着。

つまりブラザーバンドも、電波体としてのチカラも何もかもハイドにとつては手段でしかないということか。

ブラザーバンドに執着するのも、それが最大権力者に最も手軽に近づける手段だから

……。

「長い物に巻かれて、それで満足なのか!？」

「そうだと!だがそれこそが、この私が唯一望んだものだ!今更捨てられるはずもない!」

「だとしても、アナタの考えはたくさんの人を不幸にする!」

「それがどうしたというのだ! 齢を重ねれば、他者を踏み台にする機会などいくらでも巡ってくるぞ!……失うのが未来か! 命か! それだけの違いだろう!」

「選択の機会すら奪っておいて、よく言うよ!」

「蜘蛛の糸がいつまでも、そこかしこに垂れていては、愚かな凡人どもが登ってきてしまうではないか! それは私達としても困るということだ!」

「神様でも気取るつもりかッ!」

「その神すらも、既に私達の手中であるということだ!」

神……ラ・ムーのことか。

フアントム・ブラツクの強化も、恐らくはそれによるもの。

なら、まだ大丈夫。大量生産されたムーの電波体が世界中に解き放たれるまで猶予がある。

……ので、コイツに構っていられる時間はないッ!

「ならとつとアナタを斬り伏せて、その神様にたどり着く！」

「それは出来ない相談だなア！」

剣から伝わる圧力が増大する。

押し切られる前に鏢迫り合いを解き、後方に跳ぶ。

「スバル、転移飛ぼれるされるぞ！」

「わかつてる！」

間髪入れずサンダースラッシュを飛ばし、牽制を試みる。

が、それは一刀の下に斬り捨てられる。

「レスポンスが上昇していると！言ったはずだ！」

「だけど、足は止まったぞ！」

サンダースラッシュを飛ばした時には既に、ウォーロックアタックで追撃を敢行している。

切り払われた雷の剣波の後ろから飛び出し、僕達はファントム・ブラックの頭部へと突き込んだ。

しかし、手応えはない。間に合わなかった——ツ!?

「——ッ！」

殆ど無意識の挙動だった。

本能の赴くまま大剣を逆手に持ち直し、振り返りもせず右脇の下から真後ろへ向かって引くように突き出す。

……確かな手応えを感じ、息つく暇もなく全力放電を流し込んだ。

大剣を握りしめていた右手を離し、左方から回るようにして振り返る。

オーパーツから流れ込むチカラを右腕と両足に集中。

血の気が引く程に掌を握り込み、黒装束の中でも一際目立つ青白い顔面目掛けて振り抜いた——ッ!

「うおおおおおおああああッッ!!」

「ぐっ……あああああッ?」

天空の大階段に二人の電波人間の絶叫が響き渡り、やがて静寂が辺りを支配した。

「……終わった、か」

殴り飛ばしたファントム・ブラックの意識は完全に飛んでいるようで、仰向けのままピクリとも動く気配を見せない。

ベルセルクの鎧を解き、ホツと息をついた。

そこで、新たに階段を登ってくる存在に気付く。

腹部さすつているような所作を取りながら姿を現したのは、ハープ・ノートだった。

「ごめんね、スバルくん。結局、一人で戦わせちゃった……」

「いや、そんなことないよ。最初にミソラちゃんのアシストしてくれなかったら、アイツが瞬間移動で背後に回り込んでくるってわからなかった。きつとアレがなかったら、もつと苦戦してたと思う」

実際、ラストにほぼ無意識でも攻撃できたのは、死角に転移跳してくるって予測出来た部分も大きいだろうし。

そもそも、嵌められたとはいえハープ・ノートにダメージを与えたのは僕達なワケで。責める道理なんて元から無いんですけどね。寧ろこっちから謝りたいくらいだ。

「そうっ……ふふっ、ありがとうー」

まあ、ミソラちゃんハーブ・ノートはそもそも正面切って戦うタイプのスペックじゃない。

スペックに隔絶した差があるウイルス戦ならともかく、接近よりの電波人間相手はキツいだろう。

それでも、電波世界こっじゃ一番信頼出来る戦力なのは変わらないからなあ……。

「さて、それじゃ雑談もほどほどにして……」

スターキャリアアのデジタルウォッチはもうすぐ正午、といった時間を指し示している。

いよいよ、ムー大陸がその姿を現す時間だ。

気を引き締めなければ。

「うーん……でも、この人のこと、どうする？」

少し先に進んでいた彼女が、仰向けに横たわるハイドをギターの先でつつきながら声を響かせる。電波変換は既に解けていた。

猛烈に嫌な顔をしているハーブさんを意図的に視界から外し、考え込む。

「そういえばすっかり忘れてた。どうしようか……」

さて、どうしたものか。

ぶつちやけ捕縛用のアイテムなんて持ってきているワケがないので、この場所に縛り



付けておくこともできないのだ。

ハープ・ノートのストリングにしたって、いつまでも出しておけるワケじゃないしね。「でもこの人、放っておくとロクなことにならないような予感がする……」

ジト目で呟かれた言葉に、内心で賛同の意を示す。

まったくもっておっしやる通りですわ。

しかし、このまま放置すれば洒落にならない障害になることもまた確定事項。

闘いの中で語っていた、ハイドの妄執。ここで目的が潰えても、きつと手を変え品を変え……というヤツだろう。

……だとすれば。

「なら、ハイドの持ってた古代のスターキャリアーだけでも壊していこう。電波変換が出来なくなれば、少なくともこの先の障害にはならないだろうから」

幸いにして、この場所はマテリアルウェーブに近い電波で構成されているので、生身でどうなるということも無い。

ラビリンスに入った時に感じたが、電波障害も改善に向かっていった。

SOSを発していれば、そのうち救助されるだろう。

ただ、一応電腦犯罪者として指名手配されていたはずなので、同時に御用されるだろうが。

つまり、罪は償いましょうということだ。

「貴重品だから、ちよつともつたないような気もするけど……仕方ないね。スバルくん、お願い出来る？」

「うん、任せて。でも、危ないから少し離れててね」

「らじゃー！」

右手にベルセルクの大剣を出現させ、ウェーブロード上に設置したスターキャリアーに勢いよく突き刺す。

そのまま放電。内部に電流を流し込み、ついでにファントムをデリートにかかす。

主同様、気を失っていたらしいファントムは、ギャギャギャアツ！という断末魔を残して、あっさりデリートされた。あつけなさ過ぎるが、電波変換しなければ本来のチカラを発揮出来ないのだからしょうがない。

「ぐっ………わ、私は……ハッ！」

騒がしかったのか、目を覚ましたハイドが頬を押さえて上体を起こし、辺りを見回した。

優秀を自称する彼の状況判断能力は、黒煙を上げるスターキャリアーを見て全て察したようだ。

「な……バ、バカな!?こんなことが、あるはずが！」

血の気の引いた顔で、そう叫ぶハイド。

もはや、ハイドに戦闘力と呼べるものは残されていない。

それをよく理解しているからこそその逃避行動……なのだろう。

だけど、一つ気がかりなことがある。それは、この状況を眺めているだろうハイドのボスの動向だ。ここまでやって、何も無いというのもおかしい気がする。

まさか……既に見捨てられているとか？

「もうアナタに電波変換することは出来ない。諦めて罪を償うべきだ」

「ふっ……ふざけるな！ ようやく……ようやく、私の望みに手が届くところだったというのに……こんな、こんなことが……！」

ウェーブロードに拳を叩き付け、絞り出すように嗚咽を零し始めようとしていたハイド。

しかし、ふと何かに気付くと、すがるような笑みで天を仰いだ。

「おお……オリヒメ様！ 見ていらしたのですね！」

「オリヒメだと!? ……どこだ!? どこにいやがる！」

ロックの叫びに応えるようなタイミングで、どこからともなく声が聞こえてくる。

やはり、覗いていたのか。

『フフ……どうやら勝敗は決したようだな、ハイドよ』

「も、申し訳ありません！このハイド、一生の不覚……！」

『そうだな、そなたの執念は伝わったが……最後など、実に無様な幕引きであつたぞ。これでは、子供だましという言葉すらその演目には過ぎたシロモノになりそうだ』

「ぐっ……面目次第も、ございませぬ。……ですがこのハイド！そこな侵入者の片割れに一矢報いておりますぞ！」

脂汗を流しながら、必死に弁明を試みるハイド。

とはいえ、そこは脚本家を自称するだけあつて表情だけは自信に溢れていた。

さしものオリヒメも、ほう……と思案の様子を見せる。

『……確かに、カミカクシを用いた奇襲には目を見張るものがあつた。あの時点では、妾も手に汗握る思いであつたぞ』

愉悦をにじませた声色で、弾むようにオリヒメは語る。

間違い無い。彼女はこの問答を愉しんでいる……！

「その期待、必ずや応えて見せると誓いましょう！ですので、その……今一度、私めに貴女様のお慈悲を賜りたく……！どうか！後生にございます！」

『ふむ……さて、どうしたものか。そなたは既に十分な功を立てておる。妾としても、部下の忠節には報いたいところだ……』

楽しそうな声色に、ほんの少しだが暖かいものが加わつた。

同時に、ハイドが喜色満面を見せる。

「で、では!?!」

『……ならぬな。そなたの希望を叶えてやるわけにはいかぬ』

空気が固まった。そう実感するほどに衝撃の展開だった。

「は?..」

それはハイドも同様だったようで、彼は暫く自分が何を言われたのか理解出来ていないようだった。

「あ、いえ……な、何故でしょう!?!私は、これまでオリヒメ様の忠実な部下として……」

『示しがつかぬからだ。新・ムー帝国の民達に対してな』

ハイドの言に割り入るように斬って捨てるオリヒメ。

「な……どういうことにございますか!?!」

『そなたらの闘いは、これより始める選民工程にとって、実に良いデモンストレーション』

であったということだ』

「何だつて!？」

ちよつと待て。

どういうことだ?今のは流石に聞き捨てならないぞ。

『フフ……青い男、いや、ロックマンよ。悪いが、この一帯……「天空の大階段」では通信を妨害させてもらっていた。下手な横やりは無粋であるゆえな。そしてそなたの戦い振りは、世界中の電波をジャックし、あらゆる場所で中継されている。当然、現在もな』

空中に巨大なモニターが大量に出現する。

どのモニターも、今の戦闘が様々な国の人間の注目を集めている様を映し出していた。

中には、ファントム・ブラックを下したことで興奮したのか歓声に包まれていると思わしきものもある。音声は拾えていないらしく、想像することしか出来はしなかったが。

「どうして、そんなことを?」

『だから、デモンストレーションだと言っておるであろうが。……エンプティー!』  
オリヒメの声と共に、音も無くエンプティーが現れる。

以前の戦いで負ったキズは完璧に処置されているようだ。むしろ、より力強くなったような印象すら受ける。

「なっ……！エ、エンプティー!？」

「オリヒメ様からのデンゴンだ。『キサマは新・ムー帝国の民として相応しくない』……だ、そうだ」

エンプティーは僅かな憐憫を覗かせるように伝えたと、膝立ちで呆気にとられたハイドの顔をむんずと掴んだ。

掴んだ左腕が、雷光の輝きによって発光している。

恐ろしい光景なのにどこか神秘的な美しさを感じてしまうのは、人であるがゆえの情景なのだろうか。

って、そうじゃない！ハイドは生身なんだぞ!？」

「ダメだ！エンプティー!！」

ソードを展開し、ウォーロックアタックで一足飛びに止めに突っ込む！

「ジャマはさせない……」

エンプティーが右腕を振るうと、足下から雷の束が飛び出した。

思わず、たたらを踏んでしまう。

「あ、ああ……や、止めろエンプティー!止めてくれ!……私は!私は、こんなところ

「でエー！」

「アワレなオトコだ……ならば、キサマにとつてこのケツマツこそヒツジヨウなものであったな」

輝きが最上に至り、目も眩むような一際大きな閃光が辺りを包む。

「ぐああああああああ!!!」

生死も定かでないハイドを無造作にウエーブロードへ放り投げる。

「カゲンはした。……タえきるかは、そのオトコシダイだが」

そして、もう用は無いとばかりにたたずまいを整えて一瞬の内にその姿を眩ませてしまった。

「くそつ、油断した……ッ！」

まさか、ほとんど死に体のハイドにここまでするなんて！

危険視する一方で、どこかそこは踏み越えないと高をくくっていたのかもしれない。

反省しなければ。

『聞こえているな?!地上の者どもよ!これより、ムーの真のチカラを見せようではないか!』

不可視の傘に守られていたムー大陸が、再びそのペールを脱いで異様な姿をさらしていた。



ザワリと、映像の群衆がざわめく。

何が起こるのか、固唾を飲んで見守っているって感じた。

『だがその前に一つ、宣言しておこう。これより、この世界を支配するのは「新・ムー帝国」だ。それは、妾を頂点とする新たな国家である。この先、そなた達地上の人間に自由は無いと思うがいい！』

『だが、それは新・ムー帝国の国民であれば話は別だ。……新・ムー帝国の国民には、このムー大陸に住まう権利と、あらゆる自由を約束しよう！』

騒ぎ立てているらしい群衆も現金なもので、一斉に口を閉ざす。

その様子を眺めていると思われるオリヒメは、満足げにうむ、と応えると話を再開した。

『しかし、誰でもというワケにはいかぬ。また、一人一人来歴を調べるということも出来ぬ。手間がかかり過ぎる故な。よって、妾はここでそなた達に試練を課し、その結果によつて選別しようと思う。新・ムー帝国の国民になりたくば、この試練を突破してみせるがよい！』

映像が切り替わる。

そこには、モニターの画面一杯に大量のムーの電波体達が映し出されていた。

まだ、手出しはしていない。しかし、舌なめずりをするその姿は、紛れもなく狩人の

それだった。

『世界中にムーの電波体を送り込んだ。簡単に言えば、今そなた達に見せたことを、世界規模で行うだけである。言っておくが、電波体の総数がこれだけだと思わないぞ？ 何故なら、ムーの電波体は無限であるからな！』

世界中の人間が放つ怒号と悲嘆を目にしながら、それでもオリヒメは変わらなかつた。

まるでクリスマスにプレゼントボックスを前にした童子のように、高らかに謳う。

『これこそがムーのチカラ！この状況で最後まで立っていた者……具体的に言えば、このロックマンが倒れるか、もしくは妾の座すムー大陸の最深部までたどり着いた時点で屋内に逃げこまなかった者を、新・ムー帝国の国民として認めよう！逃げるもよし、戦うもよし。このハイド男のような末路を見てなお恐れぬ、真に優秀な者のみを妾は欲しておる！』

『さあ、ゆけ！ムーの電波体達よ！』

その言葉と共に、映像の中の電波体達は一斉に散らばっていった。

各々で既にターゲットを決めているのだろう。

『フフ……ではな。妾は逃げも隠れもせぬ。健闘を祈っておるぞ、ロックマン』

明らかに煽る目的でこちらをあざ笑うと、そのまま大量のモニター群と一緒に気配ま

でも消失させてしまった。

状況は予断を許さないが、やっておくべきことはするべきだ。

気を失っているハイドの元へ駆けつける。容態の把握など素人もいいところだが、取りあえず脈を測るのが無難だろう。

「……よかった。脈はある。まだ、生きてるよ」

「でも、処置出来る物も何も無いんだよ!？」

軽く様子を見てみると、外傷は意外にも少ないことに気付く。

エンプティイの言葉は本当だったらしい。かつての同僚ということで、手心を加えていたのだろうか。

「とにかく、SOSを発して救助を待たせてもらおうしかない。僕達も、先へ進まなくちやいけないんだ」

警察も病院も、まともに機能がはたらいっているかはなはだ疑問だが。

こつちも急がなきゃいけない理由がある。あまり構ってはられない。

ハイドの懐に収まっていた現代のスターキャリアーをSOSモードに設定し、側に転がしておく。

「うん……わかった」

「さあスバル!とつとつこの悪趣味極まる大陸を攻略しちまおうぜ!」

湿っぽくなりそうだった空気をロツクの一喝が吹き飛ばす。

くよくよしてたつて、オリヒメが向こうから出向いてくれるわけじゃない。こんなところで、止まってちやいけないんだ。

「よし……行こう、ムー大陸へ！」

今この瞬間にも、生命の危機に瀕しているであろう人達がいる。

背負っているのは命の責任だ。

逸る気持ちを押さええながら、僕はムー大陸への一步を踏み出した。

◇◇◇

二人の電波人間が去つた後。

天が割け、地が震撼する。

そして、新たな闖入者が訪れた。

「一步、出遅れたか……」

暗黒の闘志を纏つた拳闘士ファイターはそう独りごちると、ふと周囲に視線を向ける。

そこには、道化師の仮面を剥がされた男が横たわっていた。

一応、無理の無い体勢で寝転がされている。意識が戻ることは当分ないと言えるだろう。

「以前から気に入らないと思っただけ……哀れな男だ。他人のチカラに頼ることに執心したコイツには、お似合いの最後だがな」

そう言い捨てて、闖入者は空中に浮かぶ大陸を睨み付ける。

「まあ、いい。ヤツらが中枢に居座っていることはわかっている。ならばそこへ向かうだけだ。……オレの故郷で、好き勝手な真似は許さない。新・ムー帝国だと？ふざけるなよ……ッ！」

出し抜かれた屈辱と先程の宣言が想起し、彼は怒りを闘気に変じて体外へ吐き出した。

ムーの民の末裔である少年……ソロにとって、もはやオリヒメは純然たる敵として認識されたのだ。

端的に言つて、ムー大陸は荒廃していた。

高い技術力の産物らしい建築物は所々崩れ落ち、辺りにはもはや物言わぬ石像と化したエランドが乱雑に捨て置かれている。

それらはこの地で激しい抗争が起こったことをはつきりと匂わせていた。……しかし、どこか物悲しい。

そんな文明の末路とでも言うべき場所に僕達は今、乗り込んでいる。

「ここがムー大陸……」

「何だか寂しい場所、だね」

普段から『他人』を感じる機会が多い、彼女だこそその言葉だ。

人が暮らしていた確かな名残を見せながら、亡骸の気配すらないムー大陸の惨状は一際寂しく見えたのだろうか。

「寂しいってより、妙な感じだけ。あちこちポロポロになってやがる……ただ封印中の年月で痛んだにしちやあ、不自然なくらいにな」

「じゃあ、封印こされる前うに何かがあった……って、こと？」

「ああ。十中八九、戦争の類いだろうな。しかもこの荒れ具合……推測だが、使われたのは電波兵器の類いだぜ」

うんざりしたような口調でロツクが語った。

考えてみれば、この地球には今よりずっと前から電波兵器が存在していたということになる。

流石にムー帝国が栄えていた頃からアンドロメダ級の兵器があつたとも思えない。

もし、ムーの文明が現在まで途絶えずに発展し続けていたとすれば……攻め込まれてきたのは、FM星側だったという可能性すらある。それを考慮すれば、ロツクとしても生きた心地がしないのは当然だ。

「ポロロン……真面目にやっついては長くなつてしまいそうだから、歴史の考察はここまでね。とりあえず、今は先に進むことが先決よ。オリヒメが最深部にいるのなら、まずは内部に繋がってるルートを探しましょう?」

「だな。考えたつて、向こうが道案内してくれるわけでもねえ……つとオイ、スバル。通信みたいだぜ」

「ホントだ。しかも音声通信。誰からだろう……はい、もしもし」

まさか、オリヒメからつてことは無いよね……?」

そんなあり得ない想像を浮かべながら、回線を聞く。

しかし、飛び込んできたのは聞き慣れたあの声だった。

『やつと繋がったわ！スb……いえ、ロックマン様！』

「委員長!?……どうして急に?」

なんと、通話の相手は委員長だった。

流れてきた声に、側で聞いていたハープ・ノートも目を丸くした。

「どういふことだ……?」

『ワタシ達もあの放送を聞くために外に出ていたんだけど……ムー帝国の国民を募集するとか言い出した辺りから、おかしなことを言い始める人達が出てきたのよ!自分のことばかりな人もいて……建物に逃げ込もうともしないわ』

そりやそうだ。

誰だって、子供一人があ物の物量に対応出来るなんて思わないだろう。

しかも、海中に大穴を空けるといふ芸当すらやって見せた後だ。

それならいつそ……と、なる人が出るのは予想に難くない。

ただ、あの宣言の内容なら相当数が試練から降りそうなものだけ……。

「そんな!だって外にはまだ電波体が……危険じゃない!」

『その声……アナタも無事だったのね?良かった……』

「つて、人の心配をしてる場合じゃないでしょ!……委員長達の避難は?」



委員長達が外に出ていたなんて、とんだ想定外だ。

声色からして、三人とも直接的な被害はないんだろうけど……。

しかし、返ってきたのは想像以上に悪い報告だった。

『その……実はまだ、出来てないの』

「なっ……何だっってそんなことになっってるんだ!？」

嘘だろ!？」

あの宣言を委員長達が聞いたなら、絶対にまっすぐ屋内へ逃げ込むはずだ。

向こうは、わざわざ建物に被害は出さないと断言してくれているのに。

『実は……』

逸る口調で告げられた委員長達の現状は、考えたくもないようなものだった。

まとめると、コダマタウンのムーの電波体達が現れたのは委員長のマンションのすぐ

そば。そのせいで、委員長の部屋に向かうことが出来なくなった。

仕方が無いのでキザマロかゴン太の家に向かおうとしたら、既にムーの電波体達は建

物周辺に目を光らせていた、と。

今は、同じように逃げそびれた人達と固まって行動しているらしい。

……酷い状況だ。

「でも、固まって動いていたらムーの電波体達のいい的じゃないか!」

『幸い、警察が各地にガードマンのマテリアルウェーブを派遣しているから、今はそれに守ってもらいながら学校を目指してるわ。あそこなら、大人数でも問題無く収容出来るでしょうし。でも、例の試練から降りたくないって人達が抵抗してて……』

「何だよそれ……」

こんなんじや僕達、地球を守りたくなくなっちゃうよ！本当に！

霧は出ていないが、外に残ろうとしている人達はきつと、頭に霧がかかったように混乱しているのだろう。

『だから、そっちの対応にもガードマンの戦力を割いちやつてて……正直、ギリギリの状態ね。この状態もいつまで保つか……』

人が集まっているんじや、嫌でもムーの電波体の注目を集めてしまう。

そもそも、逃げようともしないんじや事態が改善する可能性も何も……

「つーどうすれば……う？ここからじや、助けるも何も……」

こんなことならいつそ、アンドロメダの時みたいに、ハープ・ノートを防衛戦力として地上に残してくるべきだったか？

でも、一人いたところで圧倒的物量はカバー出来ないだろう。最悪、デリートされてしまう可能性すらある。

それはダメだ。認められない。許容なんて出来ない。

だけど、どうする？どうすればいい？どうすればすべてが都合良く進んでくれるって  
いうんだ？

……そんなもの、あるはずがない。

ちくしょう。ああ、自分の無力さが呪わしい。

『むむむ……流石に、この状況でアナタ達に何とかしてもらおうつてのは出来ない相談  
よね。……OK、わかったわ。こっちは自力でなんとかしてみせる。アナタ達は……先  
を急いで！』

「いやいやいや！自力で何とかつて！そんなの出来るわけ……！」

ほとんど暴徒と化しているだろうに、説得なんて聞くわけがない。

最悪、委員長達に危害が及ぶ可能性だつてある。

『何とかしてみせるわよ……取り敢えず、ワタシ達だけでも説得を続けてみるつもり。  
ロククマン様達が必要なんとかするから、皆で協力して乗り切ろう、つてね。だからア  
ナタ達は、早くあのオリヒメとかいう悪の親玉をとつちめてやりなさい！』

止めようにも、既に委員長の声色には強い決意が全面に押し出されていた。こうなつ  
た委員長は、件の暴徒より他人の話を聞き入れやしないだろう。

諦めと僅かな期待がないまぜになって、乾いた笑いが僕の口から溢れ出てきた。

「……あはは、さすがは委員長。こんな時でも委員長してる」

『何？喧嘩なら言い値で買うわよ？』

「申し訳ありませんでした」

『よろしい。じゃあ通信を切るけど……二人とも、頼んだわよ』

「任せて！」「りょーかい！」

◇◇◇

通信を切った後、僕達はひとまずムー大陸内部へと繋がるルートを探すことにした。

大陸と言うだけあって、これまでのどんな電脳よりも広大だ。たとえまっすぐ直進したとしても、中枢にたどり着く前に日が暮れてしまいうだろうこと請け合いである。

……つまり、ワープホールのようなショートカットがないか探していたのだ。

「さて、どうやって内部に忍び込むかだが」

「いや、忍び込むも何もないでしょ……」

どうせ向こうはこっちの動向なんて全部お見通しなのだろうし。

「……だよな。つてことは、正々堂々正面突破しかないワケだ。と、すると……」

「アレしか、ないよね？」

ハープ・ノートが指し示したのは、異様な雰囲気を放っている壁だった。

近寄ってよく見ると、青いバリアを連想させる半透明の壁には何かの文字を書けと言わんばかりのスペースがある。

きつと、この大陸中を走り回ってムー文字を集め、正しい順番で並べると言いたいのだろうか、あいにくとそんなことに費やす時間はもうあまり残されていない。

「コイツを正規の手段で解除するのは骨が折れそうだけ……」

「そんな……ハープ、どうにかならないの？」

「見たところ、対応したパスワードを入力出来るみたいね……ってことくらいかしら。でも、今回のワタシ達はあまり周りの被害を気にする必要がないわ。ポロロン……なら、手荒れだけど確実な方法を探るべきね」

「手荒って……」

軽く調べてみると、この壁自体はただの硬い壁らしいことがわかる。

これがギミックによって対象を転移させるものだったなら、おとなしくこの大陸を駆けずり回る羽目になっていたのだろうか。

「どうだ、いけそうか？」

「……うん。よかった、これなら何とかかなりそう」

ベルセルクのカードを読み込ませ、その鎧を纏う。

多少強化率は落ちているが、概ね問題無く使えそうだ。

……これならッ!

「ちよつと、何してるの!?!」

「……危ないから、下がってて。やるよ、ロック」

「おう! 思いつきりブチ込んでやれ!」

右手に握りしめた大剣を内側に引き、全身に沸き上がるチカラを巡らせる。

——雷光一閃。

鞘がないので居合い斬りとはいかないが。それでも支障なく出せる中では最高のスピードで切り払う。

手応えは……十分だ。

「……うわあ、これはまた見事にスツパリ斬ったねえ……」

ハープ・ノートが半分呆れ気味に言った通り、強固な壁として侵入者を阻んでいたであろう青い障壁には見るも無惨な傷跡が出来ていた。しかし、これでは人が通るにはまだ小さい。

なので、出来た斬痕に大剣を突っ込み、全力の電撃を流し込む。

すると、電撃の負荷に耐えられなかったのか、障壁はバチバチ火花を立てながら解けるように消えてしまった。

「こんなとこで止まってられねえからな。ガンガン進んでいくぞ」

「化けて出てきたり、しないよね？」

こじ開けたセキユリティの先に続いていた通路を進みながら、身を掻き抱いた彼女がそう呟く。

「えつと……今は、生きている人のことだけ考えようよ」

そもそもウィルス自体、化けて出てきたようなものでは……？

数え切れない程の残留電波を狩ってきた身としては、今さらそういうことに頓着しても仕方ないと思う。

今は、どれだけの人を生かすことが出来るかの瀬戸際であるのだし。

「……だよね」

「オイ、奥に何かあるぞー！」

「……ッ!？」

身構えつつも、薄暗い通路を抜けた先には異質な空間が広がっていた。

それなりの面積を誇る中心の広場から、無数の通路が枝を伸ばしている。

また、壁中の至る箇所に収納スペースが設けられており、内部には比較的状态の良いエランドが収められている。

まさに、『兵士の間』と言ったところか。

だが、それら全てを置き去りにするほどの存在感を放つものが僕達の眼前にはあつ

た。

「驚いたな……コイツはハイド達が使っていたシロモノにそっくりだ」

そう、古代のスターキヤリアーである。

僕の予想が正しければ、この中には……

「つて、オイオイオイ……コイツ、なんか急に光り出したぞ?」

「きゃあつ!」

古代のスターキヤリアーが放った閃光が収まると、雪男のモチーフを持った一体の電波体がこちらを睨みつけていた。

体の随所を覆うプロテクターを、不定形な電波の流れが纏ったような姿。イエティだ。

「侵入者を阻むムーの障壁を、力尽くで破ったか……成る程、エランド雑兵では相手になるべくもない。ラ・ムー直々に命を下されるのも、納得といったところだな」

「……オイ、お前。その姿から察するに、ヤエバでゴリと電波変換していたヤツのようだが……」

「それは私とは別の存在だ。何故なら、我々はいくらでも代えがきくからな。別の個体と勘違いされるのが、玉に瑕だが」

「そうだ、オリヒメのヤロウに見せられた映像でも、お前と同じような姿をしたようなヤ



ツが何体もいたな。だが、いくらでも代えがきくつてのはどういうことだ？」

「簡単なことだ。我々は無限に生まれ続ける。ラ・ムーがいる限り、な。それ故に……ふむ、ラ・ムーより取得した貴様達の言葉で言うならば、まさに焼け石に水と言ったところだ」

「ラ・ムーだと？」

「……さて、これ以上語ることを、私は許されていない。故に……エランドよ！」

イエティの言葉に応えるように、一体のエランドが姿を現す。

「何をするつもりだ……？」

「……電波変換！」

出現したエランドに被さるようにイエティの体が溶け合っていく。

完全に一つとなった二体から、やがて強靱な四肢が形作られ、プロテクターで覆われていく。

イエティ・ブリザード。かつてヤエバリゾートで対峙した時よりも、明らかに強いとわかる。

「エランドを媒介に電波変換だ?!？」

「成る程……あの妙な周波数は、ムーの電波体との親和性を高めるためだったのね。ポロロン……ミソラ、気を引き締めていくわよ！」

「りよーかい！」

「スバル！オレ達もやるぞ！仮面ヤロウとやりあつた時のダメージはもう引きずつてねえだろうな！」

「ばつちり平気！」

「ラ・ムーは言われた……侵入者は全て排除せよ、と」

ゴリを素体にしたときよりも一回りは大きな体を揺らしながら、イエティ・ブリザードはそう言い放つ。

よくよく見ると、プロテクターの随所に大小様々なキズが目立つ。

歴戦の勇士、というわけだ。

相手にとって不足はない……が、今は一秒でも早く先へ進むことが先決だ。果たして、正面对決に意味があるのだろうか……？

「ラ・ムーだかラム酒だか知らねえが、立ちふさがるってんならブツ倒す！」

……っ！今は、目の前の障害を取り除かないと！

『ウエーブバトル！ライドオンッ！』